

---

# ある朝、タンスの向こうに

文樹妃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある朝、タンスの向こうに

### 【Nコード】

N7866C

### 【作者名】

文樹妃

### 【あらすじ】

タンスを開けたらそこは異世界だった！

出会ったばかりの王子と突然婚約するはめになった少女、空そらの恋と波乱の物語。

## 1・プロローグ(前書き)

他の小説サイトさんでも連載させてもらっている作品です。

より多くの方々のご批評、ご感想をいただきたいと思い、多少の修正を加え、

こちらでも連載を開始させていただきました。

どうぞよろしくお願いいたします。

## 1. プロローグ

ある朝、すべてが始まった。

世の学生が浮かれる夏休みも、バスケット部員の涼原空すずはらそらにとってはただ授業のない普通の学校生活と同じようなものだった。

毎日体育館で必死に汗を流して、帰宅する。

何の変哲もない日々。

の、はずだった。

今、この瞬間までは。

朝に弱い空を起こそうと懸命に鳴り続けた目覚まし時計をやっとの思いで止めて、大きな伸びを一つ。

ベッドから滑りでて、パジャマ姿でタンスの前に立つ。

まったくここまでいつもの動作。

寝ぼけ眼をこすりながら、タンスの扉に手をかけて、制服を出そうと手を伸ばした時、思いがけずに空振りをした。いつもある服の感触が何もなく、体勢を崩しかけて初めて目を開けた。

そしてソレを見た。

タンスの中で満開に咲く花々を。

「……………へっ?」

信じられないことが起こった時、人間の反応というのはどうにも間抜けなものらしい。目を凝らしてから、何度もまばたきして目をこすり、開く。

それでも目の前から消えない花々。

次にはなぜかふつと笑って、タンスを閉める。

「あ、あたしってば寝ぼけてるのかな。まだ夢の続きだったりして。

は、はは……………」

誰も聞いてないのになんだかその場を取り繕ったりして。

いつもと変わりない部屋の中をもう一度見渡してから、深呼吸を一度して、思い切ってタンスの扉を再び開いた。

こんなに何度も確認しても、まだタンスの中はいつもと違っていた。

「え、ええーっ？ どうなってんの、一体！」

そう、タンスの中、正確にはタンスの輪郭だけ残して、その奥の空間は、満開の花畑になっていた。

しばらく口を開いたままだその光景を呆然と見ていた空は、何かに導かれるように、タンスの中に手を入れた。

ただ確かめたかっただけだった。

その花が手の届くところにあるように見えるので、どうなってるのか、確認しようと手を伸ばした、その瞬間。

まるですぐそばのように見えたその花畑は、思いがけず遠くて、身乗り出した空はバランスを崩して、落ちたのだった。

え、お、落ちたって、タンスの中に？

ってどういうことーっ？

頭の中で自分の叫びがこだまする。それでも体は落ちる、落ちる。タンスの中に入ったとは思えないほど大きな空間、暗いような、狭いような、それでいて広いような不思議な空間を、長いような、一瞬のような、奇妙な感覚に包まれた体は落ちていった。

## 1 プロローグ（後書き）

どんなことでもご感想いただけるとありがたいです。

## 2・遭遇

気がついたら、倒れていた。

目を開けてすぐに飛び込んできたのは青い空。

……外？

また夢でも見てるのかと、まばたきをしてから、体の痛さに気づく。

そつだ、落ちたんだ……タンスの中へ。

その思考がまだ信じられない空だったが、それでもこの痛みは、確かに現実だった。

落ちてきたっていつてもどのぐらいの高さなのか、あのタンスからどこをどうやってここへ落ちたのか、まったくわからないけれど、少し打ち身のように痛む体を除いては、無事のようだった。

「なんか……寒い」

さっきまで汗ばんでいたはずが、まるで秋のような肌寒い風に吹かれ、体が冷えていく。自然と身震いする体を抱きしめて、空は起き上がった。

目を見張るほど一面の花畑、風が優しく満開の花を揺らして、まるで普通の外の世界かと勘違いするほど、平和な空気。

それを否定したのは、その花だった。

今まで見たこともない不思議な色、あえて表現するなら虹色ともいうべきか。色よりも驚くのはその形、まるでダイヤモンドのような角張った形をしていたのだ。

「……宝石みたい」

夢見心地で触れようとした空の手をとどませたのは、一陣の風だった。

強い、一瞬の風の後、動物のひづめのような音がして、空は振り向いた。

「何者だ？」

上から降ってきたその声は、凜として、低く、その場を支配するように響いた。

あわてて見上げた空の目に映ったのは金色の髪。

が、外人？

思わず自分が外国にいるのかと周りを見渡して、考える。

あたし、ダンスの中から外国へ来ちゃったの？

っていうか、今、言葉がわかったよね。

ってことは日本？

でもこんな不思議な花は見たこともなくて、そもそもダンスの中からなんでこんなところへ出ちゃうのかもわからなくて……。

何がどうなってるのかと混乱していた空は、ただその人物を見上げていた。

白い馬に乗って、空を見下ろす男。逆光で顔はよく見えない。

太陽の光に淡い金色の短髪がきらきらと輝いて、ぼんやりと、綺麗だな、なんて思ってしまった。

空の沈黙に痺れを切らしたのか、男はいきなり馬を降り、空に向かって歩いてくる。

まっすぐに歩いてきた男は、値踏みするような目で空を上から下まで眺めている。

なんだか剣呑なその目つきより、瞳の色に驚いた。

男の瞳は深い、深い藍色をしていたのだ。

こ、こんな色、見たことない……。

空がただその瞳に釘付けになっている間に、観察は終わったのか、腕組みをしていた手をほどき、男がつぶやいた。

「……敵ではなさそうだな」



「へ？」

“敵”という日常に聞きなれない単語を耳にして、出た間抜けな声。

かすれるような空の第一声も男には聞こえなかったらしい。

空の反応など気にもかけぬ調子で、男は続ける。

「それにしても不思議な色の髪と瞳だな。クルスの者ともビバスの者とも違うようだし、森の部族たちの中にもこんな色見たことないが……」

すらすらと独り言のように話す男より、その言葉の内容に空は首をかしげる。

髪と瞳って、あたしの？

黒なんて珍しくもなんともないと思うんだけど……。

それより藍色のほうがよっぽど珍しいよね？

やっぱりここは日本じゃないのだろうか、と辺りを見回してみる。

空のそんな行動には目もくれず、男は独り言を続ける。

「それに妙な服を着ている。見たことない生地だな」

男に言われて、まだパジャマのままだったことを思い出した。

パジャマといっても、部屋着で通るグレーの半そで短パンのスウェット上下の自分と、目の前の男をひそかに見比べて、心の中で反論する。

言ってるあなたの方がよっぽど妙だと思うんですけど？

豪華な刺繍がされた、白いマントの下にぴったりとした白いズボン。

そして白い皮のブーツのような靴。

改めて観察してみるとまるで物語に出てくる騎士のようなファッションだ。

馬に乗って、王子様ファッションって……こ、コスプレ？

も、もしかして瞳の色はカラーコンタクトだったりして。

何なの、一体この人……。

実はテレビの企画か何かなんじゃないか、とどこか故障しかけた頭で疑いだした空にはおかまいなしに、男はいきなり空の方へ手を伸ばした。

「この季節にずいぶん薄っぺらい生地のように……」

観察ついでのように、さらっと手を伸ばしてきた男に拍子を抜かれ、避けるのを忘れた空は、一瞬の後、ようやく忘れかけていた声を出した。

大絶叫を。

その悲鳴にきらりと虹色に輝く花々が揺れた。

### 3・事件

ぺらり、と何の前触れもなく捲られたTシャツ。

あらわになつた胸。

目の前で見開かれた男の瞳。

深い藍色の瞳に映る驚きの色。

それらがまるでスローモーションのように見えてから、現状を把握した空は、

ようやく大絶叫を上げて、男をひっぱたいたのだった。

「なっ、なっ、何すんのよ！ このスケベ男っ！」

あまりの動揺に涙目になりながらTシャツをおさえて、叫ぶ空に、今度は男が一瞬かたまる番だった。

「何なのっ、ここは一体どこなのよ！ どうなってるの！ あんたは一体誰なのよ？」

やっとの思いで搾り出した疑問の数々に、数秒かたまっていた男がようやく我を取り戻したようだった。

「……なんなんだ、お前は。男じゃないのか？ どうなってるかとは私の台詞だ」

心から不思議に思っているようなその問いに、空の真っ赤になつた頬が一層染まる。

「なんであたしが男なのよ！ みっ、見たらわか……」

わかるでしょ、と言いかけた自分の言葉でさっきの光景を思い出し、自分で自分を埋めたい、と空は思った。

ああ、人生最大の不覚。一生の恥。

こんな見知らぬ人に見られるなんて。

寝る時には下着は普通つけないものだけど、そんな自分まで腹立たしい。

どうせなら着替えた後でダンスに落ちるんだった。

とわけのわからない後悔をしていた空を見ていた男が、ふ、と笑った。

「そうだな。確かにじっくり見せてもらったから女には間違いない」  
「なっ……！」

なんだとー？

ぬけぬけと開き直ってそういう発言？

この変態コスプレ痴漢野郎、許せない！

ついに食って掛かるつかと上を向いた空の耳に、鳥の鳴き声のよ  
うなものが遠くで聞こえた気がした。

次の瞬間、男の表情が変わる。

「ザギリの化け鳥か。結界を張った王宮近くに現れるとは、思った  
より事態は深刻らしいな」

空には理解できない内容を憎々しげに口にして、男は空に向き直  
る。

「おい、女、離れている。危険だ」

短く告げられて、何、と思う暇もなく、男の見上げた方角を見や  
ると、信じられないものが上空を飛んでいた。

赤い、大きな鳥かと思った。

上空で旋回して、ピューーと嫌な声で一鳴き。

次の瞬間にはまっすぐ降下してきた。

そして視界に見えたのは、人面。

まるでニヤニヤと笑う男の顔のようなものが鳥の頭である部分に  
張り付いていて、

その首から下は赤い羽毛に覆われた鳥のもの。長い尾には毒々し  
い棘がびっしりと生えている。

「ひっ……」

見たこともない恐ろしい鳥の姿に思わず出かかった悲鳴は、苛立  
たしげに振り返った男の声で止められた。

「離れてると言っただろう！」

皮肉なことに、その男の怒声に反応するように化け鳥は二人の近くまで降下してくる。

ただそのぎりぎりのところで引き返し、また降下、を何度も繰り返し、化け鳥はキィーと楽しそうな声を上げる。人面の口はつり上がって、気持ちの悪い笑顔を形作る。

「くそつ、結界が弱まってるのか」

男は舌打ちをしつつ、空を自分の背中に隠すように立って、言った。

「女！ 私から離れるなよ！」

そんなこと言われなくても離れないよ！

目の前の信じられない光景にまるで金縛りのように空の体は硬直していた。

なっ、何、何が一体どうなってるの？

この鳥は何なの？ ここは一体どういう……。

疑問に頭をめぐらす暇もなく、化け鳥の執拗な接近は続き、どんどん近づいてくるのがわかった。長い尾が、もう空たちの頭をかすめそうに見える。

ついに風を感じるほど近くまで化け鳥が飛んできて、男は黙ったまま上を見上げ、何かに集中するように息を詰めていた。

化け鳥は何度か繰り返したその往復をやめ、ニヤニヤした人面の表情が急に無表情になった。

尾を何かの合図のようにくるりと巻き上げた後、化け鳥が今までのスピードが嘘のように加速して、こちらへ降下してきた。

「きゃああああ！」

思わず男の背にすがりついて悲鳴を上げた空を男は一瞬ニヤリと振り返ってから、涼しげな一言。

「この私が化け鳥ふぜいに負けると思ってるのか？」

絶対絶命に思っていたのはどうやら空だけであつたらしい。

冷静に何かを待っていたように、男は化け鳥に向き直ると、両手をかざした。

その両の手から、まぶしいほどの光が放たれた。

白い圧倒的な光と同時に巻き起こるのは激しい風。

ぎゅっと目を閉じた空の耳に、ギヤアアと遠く断末魔の音が届く。

そして一瞬嵐のように吹き狂った風が嘘のように静まり、おそるおそる空が目を開けた時には、化け鳥の姿はどこにもなかった。

#### 4・異世界

花畑の一部にどす黒く残された血らしき跡以外には、化け鳥がいたことすら夢だったのではと思うほどの平和な景色が戻っていた。

ほっとするのもつかの間、男の声が降ってくる。

「いつまでしがみついているつもりだ？」

耳元に降ってきたその声で、自分がその白いマントの背中にしがみついていたことに気づく。

あわてて飛び退って離れる空に、男はにやにや笑いながら腕組みをした。

「見た目よりふくよかな感触だったな。そのままでも私はかまわなかつたんだが」

Tシャツの胸元に向けられる視線に耐えられなくなって、振り上げた空の手は、見透かしたように男の強い手に止められた。

「気の強い女だ。この私に二度も平手をくらわせるつもりか？」

余裕たっぷり嫌な笑い方をする藍色の瞳。

なぜかどきんとして初めて、この男がかなりの美形だということに気づかされる。

一瞬見惚れそうになってから、あわてて答える。

「こっ、この私ってどの私よ！」

出てきたのは情けない反論。

それに対して、男はああ、と思い出したように言ってから、改めて吟味するように空の顔を見る。そして面白がるような口ぶりで答えた。

「そうか、私を知らないのだったな。異国の女」

「女、女って言わないでよ！ あたしにはれっきとした空って名前が……」

言いかけてからふと目に入ったどす黒い色に口をつぐんだ。

そうだ、さっきのあの鳥の……。

思い出すのは気味の悪い異形の姿。

不思議な力でそれを始末した、すぐそばの青年。

辺りに咲き乱れるのは、奇妙な花。

見たことのない、世界。

異国っていうよりもまるで……。

恐ろしい結論に行き着く前に、男は金の髪を輝かせながら、空をまっすぐに見る。

「そうか、ソラ。覚えておくんだな、私の名はエシユタンド。このミデイス王国の王になる者だ」

堂々と告げたエシユタンドの元に、いつの間にか姿が見えなくなっていた先ほどの白い馬が駆け寄ってくる。

それと同時に数頭の馬が後を追ってきたかと思うと、いつの間にか空の周りを囲んでいた。

騎乗の人物たちは、いずれもエシユタンドに負けず劣らずまるでコスプレのような服装で、長い槍のような武器を有無も言わず空に突きつけた。

「王子に何をしていた！ 不審な輩め！」

「異国の者か？」

「武器はもたぬようだが油断するな、王子のお命を狙う間者やもしれぬ！」

仰々しい言葉遣い。中世の騎士たちのようなファッション。

それだけならまだコスプレの集団とも思い込めたかもしれない。ただ最後に現れたモノたちが、空にとどめをさすこととなった。

馬の人物たちの後ろを囲むように浮かんでいるのは、白いモノ。数体のその生き物は、伝説上の龍に似ていた。ただその背にふわふわと天使の羽のようなものがなかったら。

どこか優しい緑色の目の龍たちに見つめられ、厳しい顔で槍をつ



きつける騎士たちに囲まれ、風に乗った、先ほどの化け鳥の血の匂いが鼻をつき、空は今度こそ頭がくらくらとするのを感じた。

ここは、完全に違ってる。

あたしのいた世界と。時代と。

こんな化け物がいる、こんな変な人たちがいる、こんな世界知らない！

あたしはタンスを開けただけだったのに。

タンスの向こうになんでこんな世界があるの？

あたしは一体どうなっちゃうの？

ああ、もうだめ。限、界……。

許容量を遥かに超えた空の意識は、眩暈とともに、遠のいていった。

## 5・王宮

なんだか、まぶしい。

暗い底から浮上してきた空の意識は、やわらかい朝の日差しでゆっくりと覚醒していく。

ここは……。

思い出す前に、低い、ゆったりとした声が響いた。

「目を覚ましたか」

まだぼんやりしていた目で空が声のした方向を向くと、金の髪の毛が立っていた。

それで急激に眠りに落ちる前の出来事が蘇る。

あまりのスピードで昨日の出来事を反芻する頭とついていけない体は、起き上がろうとして、ふらついた。

空の動作で、あわてたように近寄ってきたのは、やはり昨日の男、エシユタンドだった。

「どうした、大丈夫か？」

昨日とは違い、白いブラウスに茶色のズボンだが、これもまた中世風のデザイン。

どうやら部屋着のようなものらしい。

その問いには答えずに辺りを見渡す空を見て、エシユタンドは先回りしたように答えた。

「ここは私の部屋だ。昨日倒れたお前をここへ運ばせた」

豪華な造りではあるが、ただ広いだけ、という印象の部屋の中央に置かれた天蓋付きのベッドに空は寝かせられていたらしい。

倒れた……そうか、あたし、あまりに色々なことが起きすぎて、気を失ったんだ。

ため息をついて自分を見て、あわててエシユタンドを見る。

着ていた部屋着はどこにもなく、代わりに空が着ていたのは薄い水色のシルクのような生地 negligee 一枚。

胸元の開いた、体にぴったりとしたデザインである。

「じつ、これ……」

目を丸くして空がパニックに陥る前に、エシユタンドが笑いながら答える。

「心配するな。お前の服が汚れていたから、侍女に命じて着替えさせてやっただけだ」

「な、なんだ……」

まさか、と両手で体を守るように抱きしめていた手を下ろしてほつとする空を、世にも楽しそうにエシユタンドが見ている。

「な、何よ」

「いや、まるで子供のような反応で面白い。男のなりをしていながら、女で、

威勢がいいかと思えば臆病で、ころころ変わるのだな、お前は」

藍色の瞳を細めて、まるで猫でも見るかのような視線から逃れるように、目をそらして、それから気づいた。

ん？ 今、男のなりって言った、よね？

「あの、あたし、男のなりなんかしてないんだけど」

無然として振り返ったら、エシユタンドは何を言ってる、と笑いを崩さないまま応答する。

「ほう、そんな短い髪をして、まるで奴隷のような服を着て、あれのどこが女の格好なんだ？ 女とは長い髪にドレスを着るもの。それともお前の国では違うのか？」

どっ、奴隷？ 何を言ってるの、こいつ……。

言い返しかけた空の頭に、昨日の出来事が蘇る。

あんなこと、普通ではあり得ない。

今まで生きてきて遭遇したこともないこの現状。そして、この男が語る、知らない常識。

こんなのって、こんなのって……。

映画などでしか見たこともないような不思議な出来事が起こるこの場所。

フィクションの世界にしかあり得ないと思っていた、異なる世界というものなのだろうか。

理由も、確信もない。

わけはわからないままだ。

それでもやっぱりここは空が知っている世界とは違っているのだ。信じたくはないが、空がおかしな世界に来てしまったことは確からしい。

そう、しかもタンスの中を通過して。

自分でもわからないことをどう説明したらいいものか、沈黙したままの空に、目の前の相手は答えを待つようにゆったりと腕組みをして壁にもたれている。

何故なのか、ここは一体どこなのか、どうなってるのか、頭にぐるぐるとまわるたくさんの疑問には答えもでるはずもなく、頭が痛くなるばかりで、考えるのも放棄したくなった空はなげやりに口を開いた。

「……あたしの国では女も短い髪をするし、ドレスなんか着ないの」とりあえず聞かれたことに答えただけの短い言葉に、エシユタンは藍の瞳を面白そうに瞬かせて、近寄ってきた。

「このエストリア大陸にそんな国があるのか？ ほぼ世界の情報は知り尽くしたと思っていたのに、興味深いことだ」

子供みたいなのはそっちじゃない。

余裕たっぷりに見つめていたかと思えば、少年のように嬉しそうに聞いてきたりして。

エシユタンという男は、ただえらそうなだけではないらしい。思わず興味を惹かれてる自分に気づいて、あわてて首を振る。

こ、こんな人に興味持つてる場合じゃないって！

こんなとんでもない世界からとにかく早く帰る方法見つけなきゃ

……！

あせる空にまだ何かエシュタンドがたずねようと口を開いた、その時。

頑丈そうな扉の向こうで、女の人の声がした。

「殿下、朝の謁見のお時間でございます」

エシュタンドは金色の髪をかきあげて、面倒くさそうに返事をした。

「わかった。今、行く」

その姿を黙って見ながら、昨日の言葉が今更ながら本当だったことを実感する。

なんとか王国の王となるもの、とか言ってたっけ。

気軽に言葉を交わしていた目の前の相手が、本当にそんな偉い人だったとは。

そう理解はしても、王国や王子などとは無縁の国で育った空にとっては現実味がないのだが。

不思議な気持ちで白いブラウスの背中を見ていたら、急にエシュタンドが振り向いた。

「ソラ、と言ったな」

いきなり名前を呼ばれて空は驚いた。

一度しか言っていないのに覚えていたらしい。

「侍女に申し付けてある。湯浴みが終わったら、謁見の間に降りて来い。」

特別に許可する」

「は？」

空にちゃんと返事をする間も与えず、エシュタンドはそれだけ言っただけ扉の向こうへ消えてしまった。

ゆ、湯浴み？ 許可？

何のことだか考えている間に先ほどの大きな扉が開いて、ひらひらとした衣装に身を包んだ女たちが現れる。

「失礼いたします。どうぞ、こちらへ」

丁寧に、でも有無を言わせぬ態度で空を囲む女たち。

何、一体どこに連れていかれるの？

助けを求めようにも、あのエシユタンドはもういない。

敵も味方もわからないこの場所で、これから一体どうなってしまうのか。

不安いっぱいの中で、空は侍女たちに優しく連行されていくのだ。  
った。

## 6・名前

「どうぞ、こちらが謁見の間でございます」

案内された先は、大きな広間だった。

大理石に似た床や壁。

彫刻が刻まれた柱。

広々としたその場所には立派な造りの椅子が並ぶ。

それぞれに腰掛ける人々の衣装もまた立派だった。

そして広間の奥、真正面には数段上の場所に置かれた、一番立派な金の椅子に腰掛けた人物。王冠が頭に輝いていることから、どうやら王様らしいとわかる。

顔の皺から、空の父親よりも祖父に近いぐらいの年齢のようだ。

扉を開けて中に連れてこられたはいいものの、この場の空気と静けさに思わず立ちすくんだ。

空の登場に、いぶかしむような目を一斉に向けてくる人々の前で、どうしたらいいものか途方に暮れる。そんな空気を破ったのは、快活に響く、低い声。

「……これは驚いた。いい女に化けたな」

振り返った先には口元に笑みを浮かべた、エシユタンド。

いつの間に来たのか、先ほどの扉のほうから入ってくる。

朝の部屋着からいつの間にか着替えたようで、昨日見た白い服装がもう少し豪華になったようなものを着て、空の隣にやってきた。

またにやにやと視線を向けられるのが、開いた胸元であることがわかって、こんな場所でなかったらひっぱたいてやりたい、と空は手のひらを握り締めた。

そうだ、こいつに聞きたいことは山ほどあった。

薄い藍色の、ドレスと呼べるであろう衣装。

レースと花びらの刺繍をたくさんあしらったやわらかな生地のは、今朝着せられていたものより更に胸元が開いて、腰のラインを強調した大胆なデザインである。

有無を言わず大勢の女たちに風呂に入れられ、洗われるだけでなく、よってたかつて、ドレスを着せられ、顔には化粧されるといふ先ほどまでの屈辱的な扱いを思い出し、途方に暮れていたことなど忘れた空はエシユタンドに詰め寄った。

「エシユタンド！ 一体どうなって……」

言いかけた空に、その場の人々が驚いたように声を上げる。

「まああ、王子の名を呼ぶなんて！」

「無礼な！ 何者だ？」

「取り押さえよ！」

口々に叫ぶ人々に、空が驚くのを見てから、エシユタンドは楽しみに声をかける。

「まあまあ、母上も、兄上、姉上。そんなに激昂されずとも」

「しかし、王族の名を呼ぶのは、重い罪ですよ？」

母上と呼ばれた女性が興奮したように立ち上がる。

え、そ、そうなの？ そんな名前を呼んだくらいで罪になるなんて。

信じられない思いで、それでもこんな信じられない世界で罪を犯してどうなるのか、おそろしくなる。

隣にいたエシユタンドが、そんな空の肩を抱く。

空にだけ聞こえる声で、耳元で楽しげな彼の言葉。

「やっと私の名を呼んだな」

咎められたのかと身を縮める空を笑って見下ろして、肩を抱く腕に力を込めるエシユタンド。そして堂々とした態度で女性を見返す。「特別に私が許可したのです。よろしいでしょう？」

「きよ、許可って……」

言葉を失う女性。



口々に何か言いかける驚いた顔の人々。

許可？ さっき言ってた特別な許可っていつのは名前を呼ぶことだったの？

なんだ、そんなことかと安心しかけた空の耳に、朗々とした声が届く。

「エシュタンド、どういふことだ」

今まで黙っていた王の一言に、その場は静まり返る。

「王族が名を呼ぶ許可を与えるということは、どういふことかわかっているな？」

威厳ある大きな声でまっすぐに問いかける王にも、エシュタンドの態度は崩れなかった。

「はい。父上」

「ではお前はその娘に正式な求愛をしたということか？」

「そうです」

緊迫した広間でのやりとり。

しかし、その内容は空の理解を超えていた。

きゅ、求愛？ 何、何、何のことを言ってるの？

固唾を呑んで見守る空にその場の視線が集中する。

「私はこの娘が気に入った。そばにおくつもりです」

そう言ったエシュタンドは、皆の前で空の方へ向き直り、空の両手首を片手で捕まえる。

「な、何を……」

またも空にだけ聞こえるよう、エシュタンドがつぶやく。

「皆の前でひっぱたかれるのは困るからな」

意味を問い返すよりも先に、エシュタンドは空いたもう一つの腕でぐっと空の腰を引き寄せ、一瞬にして空の唇をふさいだのだった。

「ん……っ」

抵抗するも、思いがけず強い力で両手も、体もしっかりと捕まえ

られていて、動けない。

な、何するのよ、いつ、いきなりどういう……！

言葉を出したくても、エシユタンドの口付けは強く、それでいて優しく空の唇を捕らえ、離してくれない。

声も出せないで、強い腕の中に捕らわれて、強引にキスされて、そんな状況なのになぜか胸の鼓動が激しい。

思いがけず筋肉質な胸板とか、近くで香るエシユタンドの甘い香りとか、覗き込む深い藍色の瞳とか、初めて味わう、キスの感触とか、すべてが空を動けなくさせていく。

ついに力が抜けて、ふらつく空の体をエシユタンドの強い腕が受け止めた。

「ご覧の通り、私は既にこの娘に夢中なのです。

近く、正式な許可をいただきたいと思つてます。父上」

今の今までキスしていたなんて微塵も感じさせない涼しい顔で、王に向かって告げる。

そんなエシユタンドを憎々しげに睨む女性は、王に訴えかける。

「へっ、陛下！　こんなどここの馬の骨ともわからない異国の娘！

言語道断ですわ！」

王がその訴えに口を開く前に、エシユタンドの鋭い声が響く。

「母上！　ソラのことを侮辱するのはお止めいただきたい」

真剣に眉根を寄せた瞳は、怒りの色をたたえている。

今まで呆然としていた空は、凜としたその言葉で、先ほど感じた胸の鼓動が復活するのを感じた。

いきなりキスしたり、自分をかばったり、一体どういっつもりなのかわからない。

混乱状態のまま、整った顔を見やっつて、その唇が自分に触れたことを思うと、頬が熱くなる。

や、やだ……あたしっいたら何をどきどきしてんのよ〜！

自分の心に赤くなったり青くなったり、一人パニックに陥る空を残して、王が口を開いた。

「……わかった。少し、考える時間を」

「はい、父上」

そして深く膝をついて礼をするエシユタンドに抱えられ、同じように礼をする姿となった空は、ちらりと上を見て、先ほどの女性のきつい眼差しを見た。

エシユタンドと空を睨みつけるその瞳には、まるで憎しみとでもいうような炎が燃えているように見えた。

6 名前(後書き)

## 7・休息

そのままエシユタンドに半ば無理やりエスコートされた状態で部屋に戻ってきてから、早速抗議をはじめようといきり立つ空を残して、エシユタンドはまた部屋を出て行ってしまった。

まったく……なんだってこのよ。

出鼻をくじかれ、すっかり興奮がおさまってしまい、変な気分だ。手持ち無沙汰でベッドから立ち上がり、ふと気づいて大きな窓のほうへ歩み寄る。

そういえば、ここって王宮なんだよね。一体どんな場所なのか、外から見たこともないんだ。

昨日落ちたあの場所は見渡す限りの花畑で、周りに建物なんかは見えなかった。

そのまま倒れて気づいた時にはもう王宮の中だったのだから、観察のしようもないわけで。

今更ながら好奇心がわいてきて、窓の向こうを覗いた。

空の目に映ったのは、緑の庭園。

色とりどりの花が咲き乱れ、噴水のようなものも遠くに見える。

綺麗に刈りそろえられた庭木が並ぶ。

「わあ、綺麗！」

庭園の向こう側にはいくつかの建物も見えた。

あの中にさっきの王族みたいな人たちが住んでいるのかな。

行ったことないけど、雰囲気はヨーロッパみたいな感じかも。

昨日から落ち着けなかった心が、なんだか少し癒されていく。

白を基調にした王宮の中、そういえば王族の人たちはみんな白い服を着ていた気がする。なんか決まっているんだろうか。

家来のような人々は皆、薄い地味な色の服を着ていた。

まだ脱いでいない自分の藍色の服を見て、先ほど間近に見た藍色の瞳を思い出す。

途端にまた胸が高鳴りだした。

わ　！　ちよつとやめてよ、どうなってるの、あたしの胸！  
そりゃあいきなりあんなことされたからどきどきするのは仕方ないけど！

……っっていうかあれ、あたしのファーストキスじゃん！

冗談じゃないよー！

頭の中を忙しく駆け巡る色々な叫び。

あまりの疲労に、一旦考えることを放棄して、空がため息をついた、その時、また扉を叩く音がした。

「失礼します。朝食をお持ちしました」

……朝食？

そうだ、あたし昨日から何にも食べてないよ！

次から次に起こる出来事にすっかりと忘れられていた本能が、その単語を聞いて怒りを示すように空腹を訴える。

それだけに頭をとらわれて、扉を開けるまで、声の主が男性だということにも気づかなかつた。

扉を開けた場所にいたのは、優しそうな笑みを浮かべた青年。

エシユタンドより少し年下に見える。

よく似た金髪は、彼のとは違って、やわらかいカールがかかっていて、瞳は薄い水色だった。

「あの……？」

手にはフルーツやパンのようなものが盛られたお盆を持っていたが、

その雰囲気はとても召使のようではない。

目を見張る空を見て、くつと楽しそうに笑う青年。

そしてその衣装は白だった。

「ああ、これは失礼。兄上がついに求愛の儀をなさったという噂を

聞いて、

どうしても噂の姫君の顔が見たくなってしまっただけ。侍女から取り上げて来てしまったんです」

「あ、兄上？」

「そうそう、僕は末の王子のエカルド。東の聖殿へ赴いていたので、朝の謁見に間に合わなくて、貴女を見逃してしまっただけだった。侍女の噂話がなかったらね」

楽しそうな声音でくるくると回る舌。

あのえらそうなエシュタンドの弟、ということだろうか。

全然雰囲気は違うが、王族の気品のようなものは似通っている気がした。

ぼんやりと聞いていた空に、エカルドは微笑んでお盆を目で示す。「ところで、お邪魔してもよろしいですか？」

あ、とようやく促されるままに部屋に通す。

窓のそばのテーブルに置かれた朝食に知らず知らず目を奪われる。そんな空に気づいたように、エカルドは笑った。

「ああ、どうぞ」

「……………どうも、いただきます」

どれも空が知っているのは多少形や色が違うものの、似たようなフルーツとパンの味で、ほっとした空の食はどんどん進んだ。

よかったあ、食べられないようなものじゃなくて。

一安心で、黄色いスープに口をつけた空は、向かいの椅子に腰掛けて、まじまじと自分を見るエカルドの視線にようやく気づいた。

「え、えーと、何か？」

「あ、いえいえ。いい食べっぷりだな、と思ひまして」

「あ……………」

言われてからなんだか恥ずかしくなって手を止めると、あわててエカルドが勧める。

「あ、いや悪い意味じゃないんですよ。遠慮なさらずに、どうぞ」

どうぞって言われても、そんなまじまじと見られちゃ食べに

くいつてば。

まだ手をつけない空に、エカルドは申し訳なさそうに続けた。

「すみません、僕が知っている女性たちは、男性の前でそんなにおいしそうにたくさん食べたりしないもので。思わず見惚れてしまっ  
た」

「えっ、そうなんですか？」

どうやらまたこの世界の常識とやらを覆す行動だったようだ。

なんだか面倒くさい世界に来てしまったものだ、なんてため息を  
もらす空の口元に、エカルドの指が触れた。

「えっ、あの……」

「ほら、パンのくずがついてますよ」

思わず真っ赤になったところに、ついに楽しそうに声を出してエ  
カルドが笑った。

そこに聞こえてきたのは、笑いを含んだ低い声。

「めずらしいな、エカルド。お前がそんなに笑うなんて」

扉に手をつけて、口元に笑みを浮かべるのは、いつの間にか戻っ  
てきたらしい、エシユタンドだった。

「ああ、兄上。いや、さすがに女性を見る目がおありですね。素敵  
な方だ」

笑いを残した目でエシユタンドのほうを振り向くエカルド。

思わず食べていたものを吹き出しそうになるのを寸前で堪えた。

自慢ではないが、男の人にそんなことを言われたことはない。

いい食べっぷりだと褒められただけなのに、何が素敵なのかはわ  
からないが、どこか気恥ずかしい。

空がくすぐったい気分していると、言われたエシユタンドは満足げ  
にうなづいた。

「そうだろう。いくらお前でも横取りは許さんぞ？」

そう冗談めかして言いながら、空の肩を抱く。

ま、また……！



鼓動が激しくなる空の前で、エカルドは、承知していますよ、と微笑んで言う。

「ちょ、ちょっと待ってよ、なんかあたしを取り残して話を進めてないか？」

「先ほどのことといい、どついう話なのか、さっぱり理解がついていないというのに。」

「では兄上、また後ほど」

「ああ、そうだな」

軽く会釈したエカルドが扉の向こうへ消えてから、空はようやく我にかえった。

「エ、エシユタンド！ あたし、聞きたいことがいっぱいあるんだけどー！」

「いよいよ問い詰めようと切り出した空の視線を受け止めて、エシユタンドはわかっていたかのように頷く。

「私もお前と話したい。ゆっくりとな」

「そう意味ありげに答えて、藍色の瞳をきらめかせる。

「そして言うなり、空の手を引いて、いきなり歩き出したのだった。」

## 8・告白

それからしばらくして、空はエシユタンドの背中にしがみついていた。

先ほど有無を言わず渡された乗馬服に着替えた空だが、その乗馬姿は慣れた姿勢のエシユタンドとは天と地ほどの差である。

「ちよ、ちよっと待ってよ！ きゃあつ、痛いってば！」

「なんだお前、馬にも乗ったことないのか」

「ふつ、普通乗ったことないって！」

「お前の国は相当変わったところのようだな……とにかく少し黙ってる、飛ばすぞ」

そう言つて馬に鞭を当て、加速させたエシユタンドの背に、振り落とされまいとしがみつく形になりながら、馬のリズムに合わせられないお尻が不自然に弾み、痛みが増す。

叫びたいのをなんとかこらえている空を知つてでもいるかのよう  
に、エシユタンドはわざわざ石畳からそれて、草道を走っていく。

段差にますます揺れる馬上では、エシユタンドの背だけが頼りで、  
ひたすら無様な格好で抱きついていくしかない。

あとで何と言われることが、考えるだけでも腹立たしいが、何か  
言つてやるうにも、走る馬の上では口を開くことすらできず、ひた  
すら耐えに耐える空だった。

そうこうしている間に大きな白い門が見えてきた。

「開門！」

エシユタンドと空を乗せた白い馬を認めると、門番の兵士たちが  
すばやく門を開く。

あつという間にその門をくぐると、林に出た。

「ここからは王宮の外だ。どうだ、お前の国と似ているか？」

林に入っ て少しスピードを落とした馬の上で、ようやく空は辺りを見渡す余裕が出た。

そして進んだところで、広い丘につきあたる。丘の上からは、眼下に整然と並ぶ石造りの家々が見渡せた。

似ているって……全然違うよ。

遠くてよくは見えないけど、雰囲気はやはりヨーロッパの古い町並みのよう。

あまりに綺麗な町並みは、まるでどこかのテーマパークに似ていた。

やっぱり、ここは日本とはまったく違う。

わかつてはいてもまだ信じられない空の沈黙を何と見たのか、エシユタンドは丘の上で手綱を引いた。

素早い動作で馬を下りたエシユタンドは、苦戦している空を見上げ、ふっと微笑んでから、一気に抱き下ろした。

「きゃ……ど、どうも」

ありがとう、と言おうとして初めて、そういえば昨日助けてもらった時のお礼もまだ言っていないことを思い出した。

そうだ、こつちに来てから、あんまり色々なことが一気に起こって忘れてたけど、エシユタンドは一応、命の恩人なんだよね。

「どうした、急に大人しくなっ て」

「あ、あの、あたし……」

なんだか気恥ずかしくて言い出せないでいる空に、エシユタンドがにやっ と笑う。

「尻が痛くて話す元気もないか？ からかい甲斐がないぞ」

「し……なんてこと言うのよっ、このスケベ！」

「スケベ？ なんだそれは」

「もっつるさいっ！」

あゝまったく、調子がくるっ て言えないじゃない！

「まあ、いいから座れ。話をしに来たんだろ？」

そう言って木陰に腰を下ろすエシユタンド。

そのまま大人しく主人の近くに寄って、草を食べる白い馬を、優しい目で見ている。

木漏れ日がふりそそいで、金色の髪が風になびいた。

その姿は王宮にいた時よりくつろいで見えた。

王子様ともなると、やっぱり色々大変なのかな。

そう思いながら空が隣に座ると、エシユタンドは町並みを見下ろしながら、話し始めた。

「ここ、ミデイス王国はエスタリア大陸の東に位置する国だ。

近隣のクルス、ビバスと共にエスタリアの三大国と呼ばれる大きな国の一つで、

山の国、クルス、海の国、ビバスと並び称される森の国。

森の恩恵を受ける豊かな国だ。そのことは知っているか？」

素直に首を振ると、エシユタンドは更にまるで朗読するかのよう  
にスムーズに話を続ける。

「大陸の山、海、森にはそれぞれ少数の部族が暮らしていて、その  
中には自治権限を与えられた小国もいくつかある。

部族と王国間では暗黙の内にお互いの領域を侵さず、尊重しあうこ  
とで昔から平和を保ってきた。

しかし最近あちこちで小規模な争いが起こりつつある。

それと同時に山や海、森にひっそりと生息していた魔のモノたちが、  
段々と活動の域を広げ、小動物などを食して生きていた彼らが、最  
近では人間を襲い始めた。

お前も昨日見ただろ？ あの化け鳥を」

言われて昨日のことを思い返して、そうだ、と頷く。

あの奇妙な化け物は、空たちを確かに襲っていた。

「まあ、昨日の化け鳥程度では王宮を守る守護兵と守護龍で十分片

付けられる程度だがな。昨日は緊急を要したから、私が直々に手を下した」

「手を下したって……どうやったの？」

あの時、怖くて目をつぶった後、一瞬で事は済んでいた。

おそろおそろたずねた空に、自信たつぷりな言葉が返ってきた。

「それはもちろん、魔の力だ。魔のモノを制するのは魔の力。昔から王族の中には、そうした魔の力をもって生まれる者がいた。

山の国クルスでは大地を、海の国ピバスでは水を、森の国ミデイスでは風を操る魔の力が受け継がれている。私はその風の力を強く持つて生まれてきたからな」

「風の、力……」

エシユタンドが話してくれる内容は、想像の域を超えていた。

改めて本当に不思議な世界なんだということを実感させられる。

圧倒されたように黙っていた空は、隣でじっと見られていることにしばらくしてから気づいた。

「な、何？」

どきっとして見上げると、意外と真剣な瞳と目が合った。

「本当に何も知らないらしいな」

独り言のようにつぶやいて、エシユタンドはにやりと笑う。

「さて、私の話は終わりだ。次はお前の番だな。単刀直入に聞こう。

お前は一体どこから来た？」

「どこって……」

いきなり切り返されて、口ごもる。

自分のことを話さないといけないことなんて、忘れていた。

「お前が昨日いたあの宝玉花原は北の端とはいえ、王宮の土地だ。他国から来た者が簡単に入れる場所ではない。

兵にも守護龍にも気づかれず、お前はあの場所にいた。一体どういうことだ？」

穏やかな口調ながら、問いかける言葉は鋭い。

どう答えたらいいものか迷いながらも、真剣な藍色の瞳からは目

をそらせなかった。

「ああ、すまん。怯えさせるつもりはなかった。

お前からは敵の匂いは感じられん。嘘をついている目ではない。それに……」

そこまで言うてから、空の頬を片手で包む。

ぐっと近くなった距離にまた空の心臓が音をたてる。

「お前を気に入ったのは本当だ。なぜか興味を惹かれた……初めて見た時から」

まるで愛の告白のような言葉に、余計に言葉が出なくなった。

昨日からこの人は、突然現れて、助けに来て、いきなりキスして、からかったかと思ったら優しく……。空の心は戸惑わせられっぱっかりだ。

「だからそばに置きたいと思った。求愛の儀をしたのは、本心だ。

お前のことが知りたい。不思議なお前を……」

優しい、優しい声音。

熱のこもった瞳。

まるで熱に魅入られてしまったみたいに、動けなくなった。

どうして、こんな会ったばかりの人に、こんなにあたしはどきどきしてるんだらう。どうして、この瞳は、こんなにあたしを捕らえて離さないんだらう。

「ソラ……」

耳元で名前を呼ばれて、近づくエシユタンドの唇をまた受け入れそうになった、その時だった。

今までそばで大人しくしていた白い馬が、急に何かに怯えたかのように暴れ始めたのだ。

それと同時に林の中から数頭の馬が走り出てくる。

「で、殿下！伝令でございます！王宮の泉から、魔のモノが現れましてございます！」

先頭の人物の緊迫した声に、平和だった空気は一気に消えていっ

た。

## 9・不安

あわてて馬を走らせたエシユタンドを見送って、空は家来らしき人がよこした馬車の中にいた。

優美な曲線で作られたその馬車は、座席も広く、ふかふかとした布が張られ、快適な乗り心地だった。

エシユタンドのやつ、わざわざ馬に乗せなくても、こんなのがあつたんじゃない！

まだじんじんと痛むお尻に、少しふくれていた空だったが、それどころではないことを思い出した。

そうだ、魔のモノが現れた、とか言ってたよね。一体今度はどんな化け物が出たっていうんだろう。

昨日の化け鳥の人面が頭に蘇り、思わず震えが走る。そんな空に、今まで黙っていた隣の人物が声をかけた。

「大丈夫ですよ、殿下は必ずご無事でお戻りになりますから」  
笑った顔は童顔で親しみやすい印象だった。

エシユタンドの忠実な部下らしく、先ほどから空をとても大事に扱ってくれている。

栗色の優しい髪と瞳をぼんやり見つめながら話を聞いていた空に、安心させるよう話を続ける。

「本来なら守護兵たちで片付けるべきなのですが、王宮の泉で出沒したということで、殿下が念のため、様子を見に行かれただけです」  
「は、はあ……」

「我々は泉を避けて王宮へ戻りましょう。殿下から御身の安全をお守りするよう申し付かっております」

「お、御身？ あたしのこと？」

丁寧すぎる言葉遣いがぴんと来ず、聞き返すと、当然のように頷く部下。



「もちろんでございます。貴女様は殿下の大切な婚約者様ですから」  
「こっ、婚約者？ あたしが？」  
「何を驚いておいでです？ 殿下の許可を受けて、貴女様は殿下の御名を呼ばれ、皆様の前で口付けの儀を済まされた。それで正式な求愛の儀は成立したではありませんか」  
不思議そうに聞き返され、絶句する。

まさかそんなことになっていたなんて空は全く考えてもいなかったのだ。

求愛だなんて、婚約者だなんて、そんなの勝手に決められちゃ困るよ！ あたしは早くこんな世界から帰らなきゃいけないんだから……！

内心あせりまくる空には気づかないようで、につこりと笑った部下に何を言うこともできず、黙っている間に、馬車は王宮の門をくぐっていた。

進むごとに遠かった喧騒が近づいてくる。

かすかな鳴き声のようなものも聞こえてきた。

気になって窓のほうに乗り出そうとした空の体を部下があわてて止めた。

「危険でございます。あちらは泉の方角。我々は迂回いたしますので……」

「で、でも……」

エシユタンドがあそこにいるんだ。

そう考えた途端、胸のどこかをチリチリと焦がすような嫌な感覚。その気持ちは何なのか考えるより前に自分に言い聞かせる。

エシユタンドは強いんだから、無事だよ。きっと難なく化け物を倒しているんだろう。

そう思うものの、心の中に何かが、どんどん侵食してくる。

エシュタンドがもしも傷ついたりしたら。

そんな想像がどこからわいてきて。

それからやっと、自分が不安なのだということに気づいた。

不安って、なんであんな人のこと……。

否定しても、自分の体は正直で、いつの間にか握り締めた両手は、  
ねっとり汗ばんでいた。

……あんな人でも、命の恩人、だもん。

心配なのは当然だよ。

それだけだよ。それだけ……。

勝手に婚約者だなんて、そんなの冗談じゃないよ。

あたしは、早くこんな世界から帰るんだから。

そしたらエシュタンドなんて……関係ないんだから

自分で言い聞かせながらも思い出すのは、先ほどの真剣な瞳。

優しく名を呼ばれた時の胸の高鳴り。

キスされそうになったのに、逃げなかった自分。

や、やだ、何を考えてんの！　こんなの困るって！

パニックになりながら、頭を振る。

その時、泉の方角から、水が立ち上るのが見えた。

ひときわ大きく、高く、気持ちの悪い鳴き声が響く。

水柱に混じるのは、血の色。

喧騒が一層大きくなった。

「行って……」

無意識のうちに声が出ていた。

「はい？」

問い返す部下にいつの間にか叫んでいた。

「泉へ行って！　お願い！」

「姫様？」

「確かめなきゃ……」

「し、しかし……」

「いいから、早く行って！」  
血相を変えた空の頼みに、部下はあわてて馬車の方角を変えさせた。

確かめなければいけない気がした。

なぜこんなに不安なのかわからないけど。

気になるのは……彼の安否。

とにかく確かめたい、それだけだから。

はやる心を抑えて、空は両手を握り締めた。

馬車を降りた空の目に映ったのは、倒れた緑色の化け物の体だった。

広場にある大きな泉の中から下の石畳にはみ出して横たわるのは、大蛇のような長い体。

全身にぬらぬらと光る緑のうろこは尾まで続き、複数のその尾は今も今まで動いていたことを示すかのように、多数の方向に伸びて尽きていた。

見開かれた赤い瞳、大きな口、不気味なその顔は叫びをそのままに、こときれていた。

その周りを囲むのは数人の守護兵と、昨日見た白い龍、守護龍たちだった。

そしてそれを冷静に見つめて、立っているのは……。

「エシユタンド！」

思わず叫んだ空が駆け寄ると、驚いたようにエシユタンドが振り向いた。

空の姿をみとめ、それから後ろに付いてきた部下のほうに咎めるような目を向ける。

「クガル！ なぜ……！」

クガルと呼ばれた部下が途端に頭を下げるのを見て、空はあわてて間に入る。

「この人は悪くないの！ あたしがどうしてもって頼んだの！」

「姫様……いえ、殿下のご命令を守りきれなかった私が悪いのです。どうぞ、この方をお責めになりませぬよう」

空の後ろからあせったような声が飛ぶ。

両方の必死な様子を見て、エシユタンドはあきらめたように手を振った。

「よい、下がれ。この場はおさまったから、私が連れて帰る」  
その言葉に無言で頭をたれて、クガルは馬車のほうへと戻っていた。

「ソラ、なぜ来た？」  
責めるような瞳に、答えに詰まる。

な、なぜって……。

あなたが心配だったから。

なんて恥ずかしくて言えないよ！

空のそんな心配が無用だったということは、この場の状況でわかる。

そうだよ、あたしなにかが心配することなかったんだよね。っていうより、なんでこの人のこと、そんなに気にしなきゃいけないのよ！

無事な姿を見た途端、自分の行動が気恥ずかしくなって、頬が熱くなっていく。

じっと見つめるエシュタンドの目から隠そうと両手を頬に当てるが、その効果はなかったようで、エシュタンドがいつもの笑みで、近づいてきた。

「そうか、そんなに私が心配だったか。わかりやすいやつだ」  
うんうん、と嬉しそうに頷かれて、空はあわてて言い返す。

「そっ、そんなんじゃない……」

「よいよい、照れるな。私なら大丈夫だぞ？ 守護兵と守護龍が魔のモノは倒した。私が手を下すまでもなかったからな」

どこかほこらしげにそう答えられて、あきらめた空は泉のほうを見やる。

泉では、先ほどの大きな緑の体をとリまくように、白い龍たちが浮かんでいた。

一斉に開かれた龍の口から、低い、うなりのようなものが聞こえ

た途端、化け物の体が、徐々に形を薄くし、あっという間に霧散するかのように、消えうせたのだった。

「すごい……」

不思議すぎる光景に立ち尽くす空に、エシユタンドが声をかける。「生気を吸収したんだ。守護龍たちも、あれで一応魔のモノだからな」

「えっ、そうなの？　じゃああれも人を襲ったりするの？」

「いや、龍たちは王と契約を交わした身だからな。人を守るのが役目だ」

「契約？」

疑問ばかりの空がまたたずねようとした時、守護兵の一人がエシユタンドの元へ駆け寄ってきた。

「殿下！　水蛇の処理、終わりました！　でございます！」

「ああ、ご苦労。一応、泉を清めておけ。水蛇の毒が、万が一残っているかもしれないからな」

「はっ、承知いたしました！」

水蛇、っていうんだ。あの化け物。

気持ち悪いところを思い出して、身をすくめる。

「あまり見て気持ちのいいものではないだろう」

空に向き直ったエシユタンドが苦笑して言った。

「ああ……うん」

「あれは凶体の割りに大した力は持たん。水蛇といって、水中を居とし、本来は大人しい性格をしているんだが……ソラ？」

思わず身震いした空の体をエシユタンドの優しい腕が包んだ。

「エ、エシユタンド？」

「……怖がらなくてもいい。私がどんな魔からも守ってやる。だから、安心してそばにいる」

当然のように抱きしめられて、告げられる内容に一瞬ためらいながらも、暖かい腕になぜか空はほっとしていた。

聞きたいことはたくさんあって、言わなきゃいけないこともたくさんあるけど、今はこのまま、暖かい腕に身を預けたかった。

「……ありがとう」

消え入りそうな声は、ずっと言えなかった言葉を紡いだ。

その声が届いたのか、エシュタンドの抱きしめる力が強まる。

こんな信じられない世界で、初めて会った相手。

命を助けてくれた、人。

当たり前のように、空をそばにおいて、当たり前のように、守るからと言ってくれた。

一体どうしてなのか、相手の気持ちもわからないけど、それ以上に自分の気持ちが無意識だった。

さつき無事な姿を確かめたとき、体中の力が抜けるみたいに、ほっとした。

抱きしめられて、落ち着いていく自分がいる。

どうしてこの人のそばでは安心できるんだろう。なんでこの人のそばなら大丈夫だと思えるんだろう。

不安だらけの世界で、エシュタンドだけは無条件に信頼してしまっている。

その理由もわからないまま、見上げた先の藍色の瞳は、信じてもいいと思わせてくれた。

わからないことばかりだけど、今はもう少し、このままで

エシュタンドの優しい抱擁の中で、複雑な気持ちを入り混じらせながら、そっと目を閉じる空だった。





今度はゆっくりと馬車に揺られて王宮へと戻った後、空は再びエシユタンドの部屋にいた。

「……何だと？ もう一度言ってくれ」

眉を寄せて、理解できないという顔をしたエシユタンドが問う。

「だから、落ちてきたって言ったの」

「落ちてきたって、どこからだ」

「だから、空から」

さつきから何度か同じやりとりを繰り返している。

空の話は相当予想外だったらしい。

「さつきも言ったとおり、あたしの部屋のダンス、えーと、衣装棚がどうやらこの世界へつながっていたみたいで、そこから落ちてきたってわけ」

エシユタンドに理解できるよう、言い換えながら、もう一度ゆっくりと説明する。

「あたしはこのエスタリア大陸っていう場所じゃなく、他の世界からやってきたの。この王国とも全然違う国から」

言い終えた空をじっと見ていたエシユタンドが、ようやく口を開いた。

「この、エスタリア大陸以外の世界、だと？」

「そう」

ようやくわかってくれたのかと頷く空を、長い間見つめていたかと思うと、急に思い立ったかのように、エシユタンドは立ち上がった。

「それが本当なら……もしかして……」

「エシユタンド？」

空の問いかけは耳に入らないように部屋の隅へと歩き出す。そしておもむろに天井から垂れ下がっていた飾り紐を引く。

すると壁のタペストリーのようなものが上がり、中から本棚が現れた。

思いがけない場所にあった本棚に感嘆する空を置いて、エシユタンドは中から一番古そうな本を取り出すと、ぱらぱらとめくり、あるページのところを食い入るように読んでいる。

そして一通り読んだのか、一息ついて、ようやく空のほうに向きななつた。

「そうだったのか……」

独り言のようにつぶやいて、空を見つめるエシユタンド。

あまりの真剣さに、ただ見つめ返す空。

その時、扉の向こうで侍女の声が出た。

「殿下、夕食のお時間でございます。陛下がぜひ御前にと」

「……ああ、わかった」

答えたエシユタンドの瞳は、なぜか嬉しそうに輝いている。

「エシユタンド？ あの……」

不安げに近づく空に、エシユタンドは自信たっぷりに笑った。

「王からの呼び出しだ。今朝のことを問いつめる気なんだろう。お前も来い」

「今朝のことって……」

もちろん、あの求愛の儀とかいう話だよな？ ああ、もう、

次から次へと考えることがいっぱいなんだから！

混乱しかけた空の手を引く、エシユタンド。

「案ずるな。お前は私に任せていればいい」

って、ちょっと待ってよ！ あたしはまだ了承したわけでも、なんでもなくて……。

全て事情を説明したのも、この人なら助けてくれるかもって思えたからなのに。

言いたいことは言えないまま、強引な手に引かれ、空はひたすら

ついていくはめになった。

途中、衣裳部屋へと寄り、またも豪華な衣装に着替えさせられた空が廊下へ出ると、いつの間にか着替えたエシュタンドが待っていた。

白の服地には、いつもより豪華な金の糸の刺繍がされていて、マントも裾を引きずるくらい長く、襟元もきっちり詰められ、正装という雰囲気だった。

空の衣装は清楚な印象の裾の広がったドレス。  
色はまたも藍色。

エシュタンドの好みなのだろうか、と少し気恥ずかしいながらも微妙に光沢を放つ綺麗な布に一瞬見惚れる。

刺繍が細かく施され、等間隔に光る宝石が埋め込まれていた。

詳しい知識はないものの、すごく立派なドレスなのはわかる。

これからまた王に会うのだという変な緊張と、どうなるのだろうという不安に空は息を吐いた。

すると隣のエシュタンドが空の手を握り、そのまま自分の口元へ持っていく。

「大丈夫、堂々としている」

そして微笑むと、空の掌に口付ける。

まるで映画のような行動なのに、すごく似合っているのだから困る。

あまりの自信と魅力的な微笑みに、されるがままになっていることは悔しいものの、

とりあえず唯一の協力者であるエシュタンドに手を引かれ、空は一歩ずつ歩みを進めた。

とにかく、王様と話をして、エシュタンドに協力してもらって、

この世界から帰ること。  
それだけを考えなきゃ。

どんどん流されているような、恐ろしい勢いに巻き込まれている  
ような、嫌な予感。

それを振り払うように、頭を振って、立ち止まる。

目の前には今朝より更に立派な、金の飾りがきらびやかな、広間  
への扉があった。

## 12・追及

王族の間、という名のこの部屋は王族の人々が食事や団欒をするための場所であるらしい。

といっても普段の日の食事は各自の宮で個別にとる場合も多いらしいけれど。

何か特別な時などに集まるのだと、先ほどエシユタンドから聞かされていた。

やたらに豪華な金の彫刻が光っている柱や屋根、ずらつと並んだ召使。

代々の王族の人々らしい肖像画が壁に並んでいる。

まさか自分が、異世界とはいえ、どこかの王国の王様や王家の人たちと一緒に食事をするなんて、とどこか人事のように思いながらも、いつの間にか食に夢中になっていた。

先ほど広間に入る前に感じていた緊張は、美味しそうな料理を目にして、どこかへ消えてしまったのだから、我ながら現金な性格だと空は思った。

異世界の料理といっても、王宮の最高級の食事だけあって、味は格別だった。

食材の色や形、微妙な風味なんかは多少違うものの、基本的な味も似ていて、肉、魚、野菜などの素材が同じだから、安心して食べられて、食が進んだのだった。

どうやら食生活に関してはこの世界も似たようなものであるらしい。

もちろん味噌汁とか醤油とかはなさそうだけれど。

何かのハーブティーのようなお茶を飲みながら、一息つく頃には、すっかり開き直って、周りを観察する余裕が出ている空だった。

隣を用意しようというエシユタンドの申し出を断って、広すぎる食卓の一番末席に座ったことは落ち着いて食事をするためには正解だった。

あんなところに座っていたらもつと緊張していただろう、と空は目の前の人々をそれとなく見つめる。

一番奥の席には王、隣に王妃、王の側の列には王子たち、向かい側には王女たちが並んでいる。

三番目の席に座るエシユタンドに視線を向けた時、こちらに気づいた藍色の瞳が素早く微笑んで、持っていたティーカップを軽く持ち上げ、空の方に乾杯のような仕草を試みせた。

あくまで余裕ある態度に、ゆるみかけた空の表情は、再び引き締まることとなった。

「エシユタンド」

奥の台座から、低く、落ち着いた調子で、王が話を切り出したのだ。

「そろそろ本題に入るとしよう」

「はい、父上」

そう言われることを見越していたように、エシユタンドは静かに答える。

空の心臓だけがうるさく音をたてている気がした。

「今朝の求愛の儀については、皆も知っておるな」

いつせいに頷く面々を見渡して、王の威厳あふれる声は続く。

「王族の名前というものは、権威と高貴なる血筋の証明とされている。よって、王家の者が愛を示す相手に名前を呼ぶ権利を与えると  
いうことは、

最高の求愛の行為であり、それを受けた相手が名前を呼ぶことで、愛を誓い合う意思を見せることとなる。

そして両者の愛の確認として、王の前で口付けをすることで、求愛

の儀は成立し、婚約の運びとなるのだ」

「し、しかし陛下！ このように急に、しかもどこの誰かもわからないような相手との婚約など前例がございませんわ！」

あせつたように声を上げた王妃に、王は眼差しだけで話を続けることを告げる。

その態度に王妃も仕方なく黙り込む。

「王妃の言うとおり、いくら両者の愛の証明とはいえ、王家との縁談にふさわしい家柄の娘たちの中から、ある程度の時間をかけて選ぶことが今までの慣わしであった。

しかしエシュタンド、お前は既にその娘を選び、娘のほうもそれに応えた」

そこで空の戸惑う心を見透かしたように、エシュタンドが目だけで黙っているようにと告げてくる。

だ、だつて……。

そんな空の気持ちは知らない王は、そのまま言葉を繰り出す。

「既に成立した求愛の儀をくつがえすことは、好ましくなく、王家に災いをもたらすと言われている」

「陛下……！」

話の流れに顔色を変えるのは空も同じなのだが、王妃はそれ以上に取り乱して見えた。

派手な宝石がたくさんはめられた両手を握り締め、王にとりすぎるような眼差しを向ける。

「まあ、待て。だからといって、このミデイスの行く末を左右するかもしれない、大事な縁談だ。相手となる娘は、このエシュタンドに、そして王家にふさわしい者でなければならぬ。そこで調べさせたのだが、この娘、昨日お前が王宮の外れで拾ってきたそうではないか。兵の言うには、その時の娘の格好は汚らしい奴隷のような、しかも

男のなりであったらしいな。今も見るに、男かと思ふほどの短い髪、そして不思議な黒曜石のような髪と瞳、異国の者にしても怪しく思ふのは自然であろう。

突然現れた娘と求愛の儀を結ぶほどの愛情が芽生えたというのも疑わしい。

もしも皆をたばかるようなことあれば、王国伝統の儀にも、この私の顔にも泥を塗ることとなる。

一体どうということなのか、説明してもらおう、エシユタンド！」

最後の方は厳しく、弾劾するかのように声を大きくし、王はエシユタンドを見、そして空のほうに目をやった。

「そして娘、異国の者が、どこから現れて、このミデイス王国の王子たるものに近づいた？ 事情によってはただでは……」

王の目線に射抜かれたようにすくんでいた空の肩に、いつの間にか席を立ったエシユタンドが手をかけた。

そして見上げた空を安心させるように少し自分の後ろに下がらせて、正面の王を見る。

「父上、説明もなく、求愛の儀を行ったことはお詫び申し上げます。そうご心配されても致し方ないこと。すべて先に申し上げてからにすべきでした」

鮮やかに膝を折って礼をして、自分に向き直るエシユタンドに、王は勢いをそがれたように黙った。

そこに切り込むように、エシユタンドが少し鋭い目を向けた。

「しかし、ソラに関してのお言葉が過ぎるか。事情はさておき、このミデイス王国、第三王子である私と、求愛の儀を結んだ大事な婚約者ですよ。

私はソラに名前を呼ぶ権利を与えた、その気持ちに偽りも謀りもありません」

「そ、それは……」



王さえも恐れぬようなエシユタンドのまつすぐな瞳。

藍色のその輝きに圧倒されたその場の全員をゆっくりと見渡して、堂々と微笑んだエシユタンドは、どの王子より、ひいては王よりも威厳にあふれて見えた。

「とはいえ、父上の疑問も最もなこと。母上のご心配も当然でしょう」

そこで皮肉げに王妃を見てから、エシユタンドは空の方を視線で示した。

「確かにこの娘は、昨日宝玉花原で私が拾った娘です。

見つけた時にはまさか女であるとは思いついたほど、髪はもちろん、衣装も不思議なものでした」

そのくだりで嫌な出来事を思い出し、空が赤くなるのを承知の上のようにエシユタンドは意味ありげに空にだけ笑いかけてから、王に視線を戻す。

その目はもう真剣な色を宿していた。

「しかし、父上、この娘が何者であるのか、聞かれたらもう先ほどのようなご発言はなさらぬはずです」

「どういうことだ」

「この娘は、空から落ちてきたと申しました」

「な、何？ 空からだと？」

騒ぎ出した面々を静かに見つめて、エシユタンドがはっきりと声を上げた。

「この娘は、暁の娘！ 暁の世界からやってきた、いえ、我々のために遣わされた娘なのです！」

暁の娘だと、そんな、まさか、ついに、そんな声が飛ぶ中で、空

だけが呆然としていた。

「暁の世界？ どういうこと？」

「そんな空はさておき、ますます高ぶった声でエシユタンドが告げる。」

「父上もご存知でしょう。このミディスを、更にはエスタリア大陸を救うとも言われる、古代からの伝説の娘です。王を守る剣士であり、愛を与えてくれる姫でもあると言われる伝承の通り、不思議な短髪に、美しい外見、そして暁の世界を表すともいえる闇の色をした髪と瞳、それが事実をあらわしているといえましょう。」

そして何よりも、娘が落ちてきたあの時、宝玉花は満開だった。夜明け前のわずかな時しか咲かないあの花々が満開であったことが、暁の世界と空間を共有していた何よりの証拠ではありませんか。」

疑われるのなら、詮議にかけても、もう一度お調べになっても結構。この世界のどこかに、この娘のような闇の色をした髪や瞳を持つ者がいる国があるのか、また娘が空から落ちてくる以外にどうやってあの王宮の土地へ入り込めたのか、いくらお調べになっても出てこないはずです。」

そこまで一気に言って、エシユタンドは一息つくくと、静まり返ったその場の中で、後ろにいた空の手を優しく取った。

「そして、私はそんな不思議な娘に魅入られたのです。このミディスのどこにもこの私を魅了できる娘はいなかった。」

「相手が暁の娘であれば、相手にとって不足はないはず、それどころか、王家が栄える幸運の娘です。婚約を賛成する理由には十分のはずですね。」

沈黙をただ承認ととったように、空の手を引いて、エシユタンドは丁寧に礼をすると、その場を後にしたのだった。

### 13・涙

ミデイス王国に伝わる古き伝承。

王家の者だけが語り継いできた話を、いつの頃か記録にまとめたらしい。

その中に、こういふくだりがある。

王国に危機迫る時、真なる王者の元へ、暁の娘現れたり。

暁の世界より出でし娘は、時に王を守る剣を手にした勇者であり、時に愛と癒しを与えし美しき姫であり、天の力を授ける幸運の娘である。

真の愛だけが王者と娘を結び、王国の未来を築くであろう

窓際で先ほどの古びた本を手に、すらすらと語るエシユタンドの言葉は、

空の耳にほとんど入ってこなかった。

というよりも、入ってきてても意味をなさないというべきか。

「それはわかったけど、どうしてあたしがその暁の娘なの？

大体暁の世界っていうけど、それがあたしが来たところなのかわかるの？」

基本的な疑問は、エシユタンドに肩をすくめて流された。

「それはわからんな」

「って、さっきあんなに確信たつぷりに王様に話してたじゃない！」  
空の反論に、エシユタンドは笑みで答えた。

「そういう可能性がある、という話をしただけだ」

あれだけ大演説してたくせに、と睨みつけると、エシユタンドは本を閉じて、あっさりと本棚に閉まった。

「私は古き伝承など信じていないし、暁の娘などどうでもいい」

開いた口がふさがらない空の前で、楽しそうにエシユタンドが続ける。

「いや、どうでもよかった、というべきかな。真偽のわからぬ伝承などに興味はなかった。

だが、お前が異世界からやってきたと聞いて、もしかして……そう思っただけだ」

いたずらっぽくそう言った藍色の瞳は子供のようにきらめいた。

「この退屈な世界以外の未知の世界があるのか、そう夢見たことがあった子供の頃を思い出した。

お前を見た瞬間、どこか懐かしい、とても惹かれるような気持ちがしたのはそれでなのかもしれない」

まっすぐに、何かを探すように見つめられて、空はくすぐつたい気持ちになる。

どうしてこの人は、こんなにまっすぐに、戸惑いもせず気持ちをぶつけてくるんだろう。

どんどん、エシユタンドのペースにはまりそうになっている自分に気づいた空は、踏みとどまるためにも話を元に戻した。

「みんな、あたしが暁の娘だって信じたの？」

「否定するだけの材料を探そうとはするだろうな。だが、もしもお前が本当に暁の娘であった場合、今のミディアスの危機を救えることになる。

そうなれば、諸手をあげて歓迎する者がほとんどだろう。

まあ、私を快く思っていない者たちはあくまで邪魔しようとするだろうが、心配するな。私はお前を手放すつもりはない」

話が一番核心に入り込んで、ようやく空の頭が動き出した。

「ちよ、ちよっと待って！ それが一番問題なんだって！」

「問題？ 何がだ」

夢にも疑問に思っていないその態度にあわてて待ったをかける。

「あたしはあなたと婚約するなんて一言も言っていない、んだけど…」

…」

後半少し勢いが緩んだのは、エシユタンドが急に距離をつめたからである。

藍色の瞳に見下ろされて、なぜか視線をそらしつつ、なんとか今の機会にと考えを口にする。

「それに、あたしは元の世界に帰りたいの。

だから、婚約なんて無理だし、暁の娘なんていうのになる気もない。あなたに協力してもらって、なんとか帰る方法を見つけよう…」

なんとか言い切ろうとした空の言葉は、無残にも砕け散ることになった。

まだ言い終わらないうちに、エシユタンドが一瞬で切り捨てたのである。

「だめだ」

「え」

自分の耳を疑った空に、もう一度エシユタンドがはっきりと告げる。

「断る。私はお前をそばにおくことを決めた、と言っただろう。

元の世界になど帰すわけにはいかん。それに」

一度区切ってから、更に付け加えられた一言が最後の一撃となった。

「元の世界に帰る方法など、知らん」

どんなに恐ろしい呪文でも魔術でも、これ以上今の空に衝撃を与えられるものはなかった。

あまりの展開に言葉をなくして、ただ立ち尽くす。

帰る方法を知らない、って？ 知らないってというのはどうい

うこと？ まさか、まさか、帰れない、だなんてそんな恐ろしいことは……。

「絶対、絶対、嫌っ！」

長い沈黙の後に搾り出すように叫んだ空に、エシユタンドは驚いたように目を剥いた。

「ソラ」

「嫌だよ、そんなの！ あたしは帰るんだから、お父さんもお母さんも待つてる。クラスの友達だって、部活のみんなだって……二度と会えないなんて、絶対嫌だ……」

この世界へ来てから、ずっと我慢していた。

いろんなことが起こりすぎて麻痺してたその感覚は、自分の言葉に引きずられてにじみ出て、一筋流れ出た途端、あふれて止まらなくなつた。

あとからあとからこぼれていく涙をぬぐうことも忘れて、エシユタンドの胸に手を当てる。

「お願いだから助けてよ……帰りたいよ！」

「ソラ……」

驚くエシユタンドの胸をこぶしで叩く空。

涙でぐちゃぐちゃの顔をさらしていることも、どうしてこんなことをしてるのかも、よくわからないままに。

力の入らないこぶしは、ゆっくりとエシユタンドの手に止められて、それでも止まらない嗚咽ごと受け止めるように、大きな胸にそっと引き寄せられて、空はいつまでも泣き続けていた。



## 14・夜明け

暗い、暗い中を走っていた。

必死に繰り出す足は、どんどん鉛のように重たくなって、前に進めなくなっていく。

それでも息を切らして、まるで自分の体じゃないような鈍い感触を振り払うように、手足を動かそうと力を入れて、あまりの重さに息苦しくなっていく。

『……待つて』

声にならない声をあげて、前に行く背中を引きとめようとする。

バスケット部のみんな、お母さん、お父さん、親友。

さっきまでそうだったはずが、振り向いた顔は薄暗い闇のようで、誰かもわからなくなっていく。

『待つて、お願い……置いてかないで！』

叫んだ自分の声は、くぐもって、ただ頭の中に響いた。

懸命に伸ばした手を、暖かい感触が包んだ。

途端に、暗い世界から遠ざかっていくのがわかった。

「ソラ」

近くで響いたのは、低く、深みのある優しい声。

冷えた空の手を、誰かの暖かい手が握っている。

目を開けると、まず薄闇の中で、自分がどこにいるのか一瞬思い出せないでいた時、もう一度名前を呼ばれた。

「ソラ」

先ほどより少し大きくなったその声が、心配しているように聞こえて頭をめぐらせると、目の前で自分を見つめる双眸と目が合った。「悪い夢でも見たのか」

そう聞かれるや否や、一気に覚醒していく意識は、自分がエシユ



タンドの部屋の広いベッドに寝ているということ呑み込ませて、それと同時に自分が頭を乗せていたのが彼の腕だとはっきりとわからせてくれた。

目と鼻の先には、エシユタンドの整った顔が空を見つめ返している。

その状況で叫ばずにはいられないと大きく開けた口は、あわてたエシユタンドの手に止められた。

「皆に怪しまれる。寢所に人を呼びたいのか」  
だって、と返したつもり言葉はエシユタンドの掌の下でくぐもって正確な音にはならなかった。

「あれから泣き疲れて眠ったお前の隣で寝ただけだ。心配しなくても何もしていない」

その言葉で自分を見て、昨日着替えたワンピースみたいな部屋着のままであるのがわかった。

それで少し落ち着いた空を見て、掌を離れたエシユタンドがたちまち皮肉げな笑みを浮かべる。

「ご期待とあれば今からでも何かしてやってもいいがな」

腕枕の状態から引き寄せられ、あつという間に腕の中におさめられて、あわてた空は素早くその腕から抜け出すと、ベッドから起き上がって、急いで言葉を返した。

「け、結構です！」

「一応言っておいてやるが、お前が来た最初の夜も一緒に寝たんだぞ」

「な、う、嘘っ！」

真っ赤になる空のほうをにやにやと見て、エシユタンドはゆっくりと身を起こした。

「嘘ではない。内密にお前を王宮へ連れてきたから、他の部屋を用意させるわけにいかなかったからな」

「なんで言ってくれなかったのよ！」

言われても嫌だったとは思うが、知ってしまった今はもっと困る。今更ながら、寝乱れた金の髪とか、けだるげな表情とか、少しはだけた夜着からのぞく素肌とかが目に付いて、変にドキドキしてしまう自分がもつと嫌だった。

あわてて背を向けてベッドから離れて、脈打つ心臓を抑えようとする空に後ろから笑い声が追いかけてきた。

「私の胸に擦り寄って気持ちよさそうに寝ておきながら、今さら照れてるのか」

「や、やめてよ、もうっ！」

知らずにそんな醜態をさらしていたなんて、と耐えられずに耳をふさぐと、空は窓辺に逃げ込んだ。

そして薄闇が広がっていた部屋の中に、少しずつ夜明けの光が差し込んでくるのを見た。

「うわぁ……」

先ほどまでのやりとりも忘れて、無意識に感嘆の声が出る。

黄白色の優しい太陽が雲の隙間から顔を出し、ゆっくりと世界を照らしていく。

静まり返った大地と空気を朝の色に染め替えていく。

薄闇が段々と冴えて、王宮の白い色を一層輝かせて見せていた。

緑の庭とのコントラストが美しく、鮮やかだった。

「白は、朝の色だ。闇ばかりだった夜から、全てを明るく染め上げる。澄んだだけがれない世界を表す。

だから王宮、ひいては王族の血を象徴し、王族のみが白をまとうことを許されている。それは、同時に責任と義務とを示す色だ。この王国を導いていく者としての」

いつのまにか後ろに立っていたエシユタンドが、先ほどの態度が嘘のように真剣な眼差しで朝日を見ていた。

その言葉を受けて、再び朝日に視線を戻して、空は不思議な気持ちになっただけだ。

こんなに違う世界でも、同じように日は昇って、沈むんだ。似たような物を食べて、色々な違いはあっても、人々の暮らしがあつて、真剣に生きている。

この太陽はあつちの世界とつながっているのだろうか。それとも別の太陽なんだろうか。それでも、同じものだと思いたい。だって、こんなに綺麗だから。

同じように心を打つから

複雑な思いで空が朝日を見つめている間に、すっかりと部屋の空気が朝のものに変わっていた。

「エシユタンド……」

思わず呼んでから、後ろを向く。

藍色の綺麗な瞳が空を見返した。

「あたし、決めた」

瞳だけで答えを促した相手に、決意をもって告げる。

「見つけてみる……自分で」

いぶかしげな視線に、微笑んだ。

「元の世界に帰る方法、自分で探してみる！」

「……ソラ？」

泣いてたつてしようがない。落ち込んでも答えは出ない。

でもあきらめるわけにはいかない。

だったら、自分で動くしかないよね。

こつちに来てから、流されてばかりで、戸惑ってばかりで、

エシユタンドを頼りにしてばかりで、何もせずにいた自分。

そんな自分を夜の闇に置いて、朝のこの世界に進んでみよう、そ

う思えた。

「あなたが協力してくれないなら、自分ひとりで行ってみる。どうしたらいいかはわかんないけど……それでも決めたの！」

言い終えてから、自分でも吹っ切れた気がした。

見上げると、エシユタンドがまぶしそうに空の笑顔を見つめていた。

朝食を部屋で済ませた後、出かけていたエシユタンドが戻るなり、勝ち誇ったように報告してくれた。

昨日のエシユタンドの言葉で、王の結論は、とりあえず保留というものだったらしい。

空が暁の娘であるのか確かめようがまだない現在、早急に結論も出せず、求愛の儀を行った二人を認めるか否かもそれによって左右される。

ゆえに何らかの手立てを考えるまで、空の王宮への滞在は許され、エシユタンドの婚約者としての立場も維持される、ということだそうだった。

空としては別に婚約者のくだりはどうでもよかったが、王宮を今追い出されても他に行くあてもないのだから、この扱いは感謝するべきものなのかもしれない。

結局しばらくの滞在が許されている間に、急いで帰る方法を探さなくては、というのが空の結論だった。

そして今空がいるところは。

古めかしい、おびただしい数の本が並ぶ、薄暗い部屋。

かびくさいような、埃っぽい空気に思わず咳き込む空の向かいには、ふてくされたような表情のエシユタンドがいる。

「別についてきてなんて頼んでないけど？」

少し意地悪くそう言ってみた空に、もっと意地悪い答えが返ってきた。

「お前一人で本が読めるのか？　しかもこの部屋は王族以外立ち入り禁止だ。」

そこをわざわざ私が特別に許可させたんだぞ」

「はいはい。そうでした」

空がふざけて舌を出すと、エシュタンドの眉間の皺が増えた。

「それが王子に対する態度か」

「なんだかエシュタンドがすねた子供のようで、思わず笑みがこぼれる。」

「ごめんなさい。だって、嬉しくて……」

素直に謝ってみたら、エシュタンドは照れたようにそっぽを向いた。

朝の会話を思い出してのことらしい。

自分で帰り方を探してみる、そう決意を口にした空をしばらく無言で見つめていたエシュタンドが意外な言葉を返したのだった。

「……わかった。探すだけは探してやるう」

仕方ない、と嫌そうに言った後、早口で付け加えるのも忘れなかったが。

「ただし、探すだけだ。お前を帰す気はないからな」

嫌だ、断る、と冷たくつっぱねた最初の態度がどうしてここまで軟化したのか、不思議に思ったものの、なぜかすごく嬉しかった。

いつも余裕でからかってくるエシュタンドが、こつやつて照れたりすることもあるのだと、急に身近に感じられたからだ。

「これだ、古き伝承の原書は」

並んだ背表紙の複雑な文字を指でたどって、エシュタンドが棚から抜き出したのは、青い表紙の本だった。

「ミデイス伝記・伝承録、そう書かれている。ミデイス王国設立以来の伝承の類がまとめて記録されたものだ。中に、予言の章というものがある。」

暁の娘についてはそこに書いてある。私も原書のほうは昔一度見せてもらったきりだ」

見たこともない不思議な文字が書き連ねられているのを覗き込みながら、空の頭に今更ながら疑問が浮かぶ。

「ねえ、こうして書いてある文字はわからないのに、どうして話してる言葉はわかるんだろう？」

言ってから、その奇妙さを改めて不思議に思った。

こちらに来てから、言葉がわかることに最初違和感があったものの、次から次にいろんなことが起きて、その疑問も忘れてしまっていた。

「そうか、異世界から来たのだから、話す言葉も違うのか」

空に言われてから気づいたように、エシュタンドは顔を上げた。

「まさかこの人たちが日本語で話してるわけもないし、かといって、あたしがこの言葉を話してるのも変だよな。……そうだ、このエストリア大陸では同じ言葉が使われてるの？ それともこのミデイスの言葉があるの？」

「各王国独特の言い回しや単語などの多少の違いはあるが、言葉は一つのものだ。」

お前の世界ではそれぞれに違う言葉を使うのか？ それならばなんと不便なことだ」

驚いたように返してくるエシュタンドの瞳は、それでも興味深そうに光を浮かべていた。

このままでは段々話が脱線しそうだ、空があわてて話を元に戻す。

「こうして文字も違うんだから、もちろん話す言葉もお互い理解できるはずなのにね」

空がつぶやいても、エシュタンドは、無言のまま本に目を落としていた。

答えが返ってこないことに少し不満を感じながら、エシュタンドの作業を見守る。

長く、白い指先がゆっくりとページをめくっていた。

そうして表情もなくならずにいる姿だけ見ると、エシュタンドは本当に綺麗な青年だった。

金の短髪は淡く光を放ち、白い肌は滑らかで、まつげをふせた藍色の瞳は、深い海のような不思議な色彩が美しく、整った美貌に長身の立ち姿。

王子様、か……。

いつのまにか目を奪われながら、考える。

一緒にいるのに慣れてはきたものの、本当ならば出会うはずもなかった相手なのだ。

仮にも一国の王子である彼とこんな風に一緒にいていいのだろうか。

身分の差どころか、住む世界が文字通り違うのだから。

そう思った途端、なぜか暗くなりかけて、空はあわてて頭を振る。

何暗くなってるのよ、あたしは！ 元の世界に帰る方法を探してる最中だっというのに。

自分で自分を落ち着けている空に、エシユタンドが一息ついて言った。

「一応目を通したが、特に変わった記述はなかったな」

「え、うそっ！ 何か手がかりになるようなことは載ってないの？」

「部屋にある抜粋本と同じ内容しか載っていない」

「そんなあ、何かあるはず……っ」

いきなり期待を裏切られて、思わず本を覗き込もうとした空の体は、本棚へ戻そうと後ろへ下がったエシユタンドのほうへ、バランスを崩した。

あわてた空の手が何かをつかむのと、受け止めきれないエシユタンドごと二人で倒れるのが同時だった。

舞い上がった埃の中で咳き込みながら、エシユタンドが身を起こし、驚いたように息を呑む。そしてその手には原書。視線の先の空の手には、数枚の紙の束。

「あーっ！」

血相を変えた空の持つ紙の束を目にして、エシユタンドは眉を寄



せ、空の手から奪う。

「い、ごめんなさい……あの、エシユタンド？」

破ってしまったと身を縮める空に、エシユタンドが素早く一言。

「いや、破れてはいない。表紙の裏に隠されていたようだ」

そう言ってから紙の文字に目を走らせるエシユタンドの表情は、  
ゆっくりと鋭さを増していった。

## 16・伝承

小さな窓から差し込む薄暗い光の中で、一心に読んでいたエシユタンドが目上げたのを見計らって、空は近づいた。

「何、なんて書いてあったの？」

待ちきれない空を制して、エシユタンドは落ち着いた調子で読み上げ始める。

「ここに記すのは、遙か昔、王国が存在する以前から伝わる伝承である。

大陸に国の区別もなかったその頃から、ある時は歌として、ある時は詩として、ある時は御伽噺として語り継がれた物語があった」

「な、何それ？」

「神話を元とした民間の伝承のようだ。誰かがここにはさんだのか、隠したのかわからんが。私も初めて目にする内容だ」

「それで、何て？」

あせる空に頷いて、エシユタンドが続きを読む。

「太古の昔、若く、力にあふれる雄々しき神、エス神によって豊かな大陸が生み出された。

それがエスタリア大陸と呼ばれるこの大地である。

そしてエス神の妹である美しき女神、アメ神はもう一つの世界を作られた。

その世界はアメ神の名をとって、アメリリア大陸と名づけられた。

エス神とアメ神はたいそう仲のよい兄妹で、二つの世界は均衡を保たれ、

平和に人々は暮らしていたが、ある時、エス神の過ぎた愛情は、アメ神を妹以上に欲しはじめた。倫理を説き、拒否するアメ神の抵抗を聞き入れず、無理やりに手に入れようとするエス神に、天の神がお怒りになり、アメ神をアメリリア大陸ごと、夜の世界に隠されて

しまった。それから、エス神は悲しみに明け暮れ、大陸の人々のことも忘れ、泣き暮らしたために、世界が荒れてしまった。

そのことを悲しんだアメ神が、夜明け前の夢の世界だけで兄に自分の夢を見せてやったという。

それから、アメ神の世界は暁の世界と呼ばれるようになった。

永久に結ばれることのない兄の愛情を哀れに思ったアメ神は、エスタリアに危機迫る時、自らの世界から一人の娘を真なる王者のもとへ届けようと約束した。

その娘には不思議な力が宿り、エスタリアを助けることとなるであろうと」

低く、静かな声で全てを読み終えて、エシユタンドがその紙の束ごと本を胸に抱えた。

付け加えるように言い添える。

「王国の設立以来、いつの間にか暁の娘の伝説だけが語り継がれたようだな。

エスタリアを作ったエス神の神話は知っているが、アメ神という女神の話は習いもしなかった。エス神の不名誉になるから隠されたのかもしらん」

「悲しい話……」

ただの神話だとは思っても、実らない兄の愛情が切なくて、空はため息を抑えられなかった。

夢でしか会えないなんて、悲しすぎるよ……。

そんな空の感傷には興味がないとばかりに、エシユタンドは続けた。

「ともかくこれは父上にも報告してみよう。それから、これが事実ならば」

そう言って振り向いて、空の顎に手をかける。

「な、なに……」

あせる空の瞳を覗き込んで、エシユタンドはいつもの笑みを浮か

べた。

「お前には不思議な力が宿っていることになる。言葉を通じ合わせているのも、その力によるといえば、説明がつかない」

近くで鮮やかに微笑まれて、空は思わずエシユタンドの手から逃げるように、顔をそむけた。

「やめてよ、あたしにはそんな力ないよ。あたしは暁の娘なんかじゃ……」

「じゃあ、どう説明する。なぜ言葉が通じるのか、なぜお前が」

そこまで言っただけ強い手が空の顔をもう一度正面に戻した。

間近にせまった深い色の瞳に捕らわれる。

「この世界へやってきたのか」

その強い力よりも、強い眼差しに、言葉が出ない。

そんな空を深く射止めるように見つめながら、エシユタンドは笑った。

「ただの偶然で片付けられるか？ お前は確かに異世界から、このエスタリアへとただ一人やってきた。そして私と出逢った。他のどこでも、誰でもない。

このミディス王国の王宮の、この私の元へとたどりついた。

それこそがお前が暁の娘であり、私が真なる王者であることの説明ではないのか」

あふれる自信に裏づけされたその言葉は、まさに王者であること、いや、王者になるのだというエシユタンドの強い意志をそのまま伝えていた。

そしてその魅力的な微笑みは、まるでその場に釘付けにするように、空を動けなくする。

逃げなければ、そう抗う心とは裏腹に、引き寄せられるような不思議な感覚。

「帰るなどと言うな。このまま、私のそばにいる」

少しの沈黙の後、エシユタンドに告げられて、空の胸が鳴った。

「お前をもつと知りたい、放したくないんだ」  
抱きしめられて、わずかな抵抗も強い腕に封じ込められて立ち尽くす。

「……ソラ」

熱っぽく、耳元で囁かれた声に眩暈がした。

怖い。

そう思った。

早く、早く帰る方法を探さなきゃ。

この人に捕らわれてしまう前に。

この瞳に魅せられてしまう前に

心の奥で鳴り響く警鐘に後を押され、空が必死の思いで腕から抜け出ようとした、その瞬間だった。

「殿下、殿下……！」

外の廊下から必死に呼ぶ声が聞こえてきた。

顔色を変えたエシユタンドが扉を開けると、そこには青い炎があった。

床を、天井を、這うように広がっていく炎は、大きなうねりとなって、まるで生き物のように迫ってくるのだった。

## 17・炎

「ソラ、下がっている！ クガル、ソラを頼む！」

そう叫んだエシユタンドが扉の外へ踏み出すのと入れ替わるように、先ほどの呼び声の主であるクガルがソラを守るように部屋へと入ってきた。

外には王宮の守護兵が何人もかけつけている。

青い炎は、一層まがりくねって、廊下全体に広がっていた。

尋常ではないその火は、何も焼かず、ただその色のみを不気味に光らせている。

「なっ、何なの、これは！」

「何かの術のようです。結界を張りますので、私のそばから離れませんように！」

両手を組み合わせたクガルが何かの呪文のような言葉を口にした途端、クガルと空の周りの空気が動いて、埃が吹き上げられていく。目には何も見えないが、何か風の流れが変わった気がした。

「け、結界？」

おそろおそろ空がたずねると、クガルが前を向いたまま返事をする。

「はい。私が張れるのは簡単な守護の結界のみですが、とりあえずは安全なはずですよ。」

殿下と兵たちが必ずお救いくださいます。ご安心を！」

エシユタンドを無条件に信頼したような言葉に、空も不思議と落ち着いたものの、目の前に広がる炎は勢いを増していく。

焦げる匂いも、煙もなく、燃え盛る炎は正体不明だけに余計恐ろしく、誰もが困惑した顔をしていた。

ただ一人冷静に分析するかのような目を向けていたエシユタンドが、声を上げる。

「皆、動くな！ これは誰かに向けて放たれたもの。目的しか狙わん。行き先を見極めろ」

「はっ」

炎の行く手を阻んでいた兵たちが壁沿いに避けると、まるで待っていたかのように青い光が大きくなり、そして、空たちのいる部屋へと向かってきたのだった。

「ソラ！」

廊下からエシュタンドが飛び込んでくると同時に、青い炎が踊りかかるように部屋へと入り込んできた。

今までの勢いが嘘のように大きくなった炎は部屋全体を包むようにあっという間に空たちの周りを取り囲んで、今にもその触手を空に向かって伸ばそうとしているかのようだった。

「殿下、私の結界ではこれ以上……っ」

クガルの苦しげな声に、エシュタンドが頷いた。

「わかっている。私に任せろ」

素早く空を背中に守るようにかばって、エシュタンドが炎に向き直る。

「大丈夫だ。お前は私が守ってみせる」

「エシュタンド……」

不安げな空の声を打ち消すように、エシュタンドが笑って、次の瞬間、襲ってきた炎は、ぎりぎりのところで止まった。

空気が動き、風が生まれる。

金の髪がなびき、マントがはためく。

まるでエシュタンドの体の周りから発生した風が、炎を圧倒しているかのようだった。

ゆっくりと両手を上げたエシュタンドが、炎を睨み、不敵な笑みをもらした途端、白い圧倒的な光と風が、青い炎を襲う。

舞い狂うような風に押され、炎が姿を乱し、まるで苦しむようにねじれて、拡散していく。

そしてエシユタンドが両手を下ろすのと同時に、最後の抵抗を見せていた切れ切れの炎が風に巻かれるように消えてなくなったのだ。

「殿下、姫君、ご無事で？」

扉の外から兵たちが駆け込んでくる。

エシユタンドとクガルに守られるように中心にいた空は、崩れ落ちるように座り込み、あわてて両側から助け起こされた。

「大丈夫か、ソラ」

「あ、う、うん……ちょっと、驚いて……」

エシユタンドの腕につかまり、なんとか体勢を立て直すと、クガルが優しく気遣うように微笑む。

「そうですね、殿下のお力を初めてご覧になったのですから、驚かれるのも無理ありません」

そうだ、あの時、化け物から命を救ってもらった時も、目をつぶっている間に事は済んでいたから。

まさかこんなにすごいなんて、思ってもみなかった。

得体の知れない炎をも抑え込む、エシユタンドの風の力に空は言葉も出なかった。

「殿下の操られる風の力は、このミディアス随一、現王をも凌ぐほどのものですから」

「そ、そうなんだ……」

自分のことのように誇らしげに語るクガルは、本当にエシユタンドを尊敬してやまないようだった。

否定もせず、当然だという顔をして、エシユタンドは風で乱れた着衣を直している。

そこへ、白い衣装の人影が飛び込んできた。

「兄上！ ご無事ですか？」



金の巻き髪を乱し、急いで駆け込んできた弟に、エシユタンドが微笑む。

「エカルドか、心配はいらん。私もソラも無事だ」

何事もなかったように答える兄に、エカルドはほっとしたように息をつく。

「よかった、突然炎が兄上たちを襲ったと聞いて、心配しました」  
そう言って、空のほうへも視線を送る。

「ご無事で何よりです。兄上の大切な姫君にもしものことがあれば大変ですから」

「あ、ありがとう」

最初に会った時の印象どおり、優しいその言葉に、空も笑みを返す。

薄い水色の瞳で辺りを見回して、エカルドが不思議そうに言った。

「それより、兄上。このようなところで一体何をなされていたのですか」

「ああ、そうだ。ソラ、原書は」

「えっ、あれっ？」

先ほどの騒動で、エシユタンドから手渡されたはずの原書は、空の手にはなかった。

あわてて辺りを見渡しても、紙の一片すら落ちていない。

顔色を変えたエシユタンドが探しても、本棚にも、床にも、どこにも見当たらず、

原書は、忽然と姿を消してしまったのだった。

光沢のある白い布地に、宝石が埋め込まれ、金糸の刺繍が施されたマントに身を包んだ王が、空たちを見下ろしていた。

先ほどの騒動で呼び出された二人は、こうして王の前で膝をついている状態で、王族が集められた広間はざわめいている。

「二人が無事であったことは何よりだが」

王が唐突に口を開き、途端に静まり返る空気。

まだ慣れない王との体面に、空は気持ちを落ち着けるように、ドレスの端を握る。

「あの部屋で何をしておったのか、皆にわかるよう説明してみよ」

その言葉に顔を上げたエシュタンドは、毅然とした態度で王を見上げた。

「はい。暁の娘について詳しく調べるために、古き伝承の原書を見に行きました。

そこで青い正体不明の炎に襲われ、私の力で押さえ込みましたが、その騒動に紛れ、原書を紛失いたしました」

そこでざわめいた一同にも動じず、淡々とした声でエシュタンドは続ける。

「現在、消えた原書の行方については、全力で探させております」

誰よりも先に言葉を発したのは、王妃だった。

「古き伝承の原書といえは、我が国の貴重な宝ですよ？ それをよりにもよって王子が紛失したなんて、前代未聞ですわ！」

興奮した様子で、王に訴えかけるように視線を向ける。

その動きで、首に幾重にもかけられたネックレスが揺れ、光を反射する。

そして冷たい水色の瞳でエシュタンドをねめつける。

「王子としての自覚がおりなのかしら」

あまりの言いように思わず口を開きかける空の腕を引いて、エシユタンドは首を振った。

そして低く、耳元で囁く。

「挑発に乗るな」

黙っている、と目で伝えられ、仕方なく空は口を閉じるが、王妃を睨む目は抑えられなかった。

「まあ、ご婚約者の方には、何という目つきかしら。王妃に対して、品位が問われますよ」

蔑むような目で発した王妃の言葉に、それまで氷のように固い無表情だったエシユタンドが、口を開く。

「母上、全ての責は私にあります。ソラには一切非のないこと。どんな処分も私が甘んじてお受けいたします」

深く頭を下げたエシユタンドに、一瞬歪んだ笑いを浮かべた王妃が何か言おうとするより前に、王族の末席から声が上がる。

「恐れながら母上、兄上と姫君は正体不明の炎に襲われたのですよ。原書の紛失も、兄上の故意によるものではなく、どのような術によるものかもしれません。」

詳細がはつきりしない以上、兄上をお責めになるのは筋違いかと

優しい声に似合わない鋭い言葉は、王妃の口をつぐませた。

まさかエカルドからそのような発言があがるとは思わなかったのは空だけではなかったらしい。

驚いたまま、王妃はあきらめたように視線をそらした。

「エカルドの言うとおりだ。今はとにかく原書の行方を探り、正体不明の炎の調査を急ぐことだな」

王の発言に、エカルドはほっとしたような微笑を空に送った。

よかった、あたしたちの味方になってくれる人がいて。

どうなることかと思った話の流れが好転したことに、空は胸をなでおろす。

「エシユタンド、青い炎は何者かの術によるものか」

質問に、エシユタンドが頷く。

その目には、いつもの表情が浮かんでいた。

「魔のモノの介入は感じられませんでした。人間による術であることは確実です」

その言葉に眉を寄せる王に、エシユタンドは続ける。

「父上もご存知の通り、狙う相手のみを確実にしとめる術は、高位の術者にしか操れません。背後には、それほどの術者を雇える人物がいる可能性があります」。

あの炎は、ソラを狙っていたようでした。そして、もし原書の紛失が何らかの術によるものであれば、同時に原書をも狙う者であるということになり、早急に調査が必要です。

他国にソラが存在が知られているとは考えにくいですが、念のため、密者を忍ばせる必要があるかもしれません。我が国内に原書を狙う者がいるとすれば、それは、売国行為であるのか、あるいは「

流れるように話し続けたエシユタンドが、それまで王に向けていた視線を外して、言葉をのせる。

「ソラを邪魔に思う者、ソラを暁の娘にしたくない、誰かの仕業かもしれません」

藍色の挑戦的な目が一瞬だけ、息を呑む王妃のほうへと向けられて、すぐに王へと戻された。

「どちらにしても、憎むべき相手であることは確かだ。必ず、見つけ出してみせます」

言い切ったエシユタンドの瞳は、美しいほど、自信に満ち溢れていた。

## 19・エシユタンド

先ほどの緊張感が嘘のように静かな場所に、空はいた。優しい午後の風が、隣に座る金の髪をそよがせている。

二人の後ろでは、エシユタンドの白い愛馬が草を食んでいた。

「落ち着いたか」

しばらく経って、向けられた藍の瞳は優しい。

いきりたつ空を連れて、エシユタンドが選んだ場所は、広い、広いあの花畑だった。

空が最初に降り立ったこの宝玉花原。

ただあの時と違うのは、虹色の宝玉花の花びらが、全て静かに眠っているように閉じられていることだった。

「あの……あたし、ごめんなさい」

空の反応が意外だったのか、エシユタンドが片眉を上げる。

「思わず腹が立って、あたしのせいでああなたの立場が悪くなることだったから」

そんなことか、と言わんばかりの余裕の笑みが返ってくる。

「王妃が問い詰めてくることは予想していた。あそこでエカルドが言わなければ、私がうまく話の流れを持っていくつもりだったんだがな」

白いブラウスに乗馬ズボンをはいたエシユタンドは、王宮の中で王子の姿を捨てたように、驚くぐらいやわらかい表情をしていた。思わず見惚れかけた自分をごまかそうと、空は気になっていた疑問を口にする。

「それにしても、あの王妃ってひどいよね。まるで何か恨みでもあるみたい。」

いくらなんでも息子に対してそこまで……」

憤慨する空に、エシユタンドは素直な笑いをもらした。

「な、何？」

「当然だ。私はあの王妃の息子ではないからな」

しれつと言つてのけて、驚く空の顔を面白そうに見るエシュタン下。

「私の母は、私を生んですぐに亡くなつたんだ」

「そ、そうだったの？」

風に揺れる宝玉花を眺めながら、エシュタンドが頷いた。

「お前には知っておいてほしいと思つてな。話をしに連れて来た」  
見つめ返す空に、落ち着いた口調でエシュタンドが語り始めた。

「私には二人の兄と一人の姉がいる。その母だった先代王妃も流行り病で亡くなつた。

そしてその後父に選ばれたのは、聖殿の巫女をしていた私の母だつた。

巫女として既に優れた資質を称えられていた母だったが、稀に見る美しさと思議な藍色の瞳に父が惚れ込み、ぜひにと求婚をし、巫女の座を返上させ、妻にしたという。

しかし母には王妃にふさわしい身分がなかった。そのことで、王妃として正式には認められないまま、私が生まれた。その後すぐに体が弱かつた母は亡くなり、王として次の王妃を選ばずにはいられなかつた父は、今の王妃と結婚した。そしてエカルドが生まれた。

私には王子の身分がなかつたから、最初はエカルドが第三王子として扱われていた。

しかし私に父と母ゆずりの魔力がそなわつているとわかるやいなや、王宮の皆の態度が一変した。私はすぐさま第三王子として迎えられ、エカルドは第四王子とされたというわけだ」

顔色も変えず話すエシュタンドだが、対する空の表情は曇つていた。

いつも王子としての自信と余裕に満ち溢れているエシュタンドに、

そんな複雑な生い立ちがあつたなんて。

空の表情の変化には気づかないように、エシュタンドは静かに話を続ける。

「先代王妃が亡くなっていることから、一番身分の高い現王妃の息子であるエカルドは当初最も有力な王位継承者とされていた。しかし突然魔の力のせいで私が圧倒的に有利な立場に立ったのだから、王妃としては私が邪魔で仕方がないのだろう。憎まれている、といつてもいいだろうな」

そう言つて可笑しそうに笑つたエシュタンドの瞳には、複雑な色が浮かんでいた。

一応母の立場である人に、憎まれているなんて……。平凡な家庭で、普通に育つたと思つていた空だったが、自分がどれほどの幸福な環境にいたかということが改めてわかつた。

当然のように愛情を受けて育つたあたしと、エシュタンドの間にはどれほどの違いがあるんだろうか。

「ソラ？ どうした、そんな顔をして」

「うっん。なんでも……」

どれほどの辛い思いをしたんだろう。

自信家の王子だと思つていたことが、少し恥ずかしくなつて、空は目を伏せる。

そんなに強くいるためには、どれほどの努力をしたのだろうか。見知つたような気持ちになつていたエシュタンドが、突然まぶしく見えた。

心の底からわきあがるのは、不思議な感情。

この人のことを、もっと知りたい。この人の痛みを、強さを、もっと……。

突然と湧き上がる自分の思考に引きずられそうになつて、空は思はず首を振り、頭を冷やそうと、違うことを考える。

「そ、そういえば、さっき言わなかったね。原書の神話のこと」  
突然の話題の変化に、エシュタンドはああ、と思い出したように答えた。

「まだ公にしているものかわからなかったからな。様子を見て、父上には報告しようと思っっているが」

「そっか」

「それに、お前が暁の娘だと認められることを阻止してくるだろうからな。」

「気をつけておいたほうがよさそうだ」

誰が、とは言わなかったけれど、脳裏に浮かぶのは王妃の冷たい顔。

「あ、あの……どうしてあたしが暁の娘だと困るのかな」

王妃が、とは言えなかったのに、またもエシュタンドには通じたようで、

ふん、と笑って、皮肉げな声が返ってきた。

「王位継承権には、正当な婚約者の存在も大事な条件の一つだからだ」

その言葉で、何としてもエシュタンドの王位継承を邪魔しようとする王妃の画策が目には浮かぶような気がした。

それはとても寒気を誘う想像で。

空がいる世界が、ただの幻でも異世界でもなくて、現実の重さをもって押し掛かってきた瞬間だった。

「ソラ、怖いのか」

思わず膝を抱えてうつむいた空にかけられる心配そうな声。

「大丈夫だ。お前は心配する必要はない。この私がついているだろう」

いつも通りのエシュタンドの微笑みが胸に痛かった。

「……どうして？」

聞かずにはいられなかった。



不思議そうな藍色の瞳に、問いかける。

「どうして、あたしなの？」

「ソラ？」

抑えていた思いが、出口を求めて流れ出す。

自分は何を聞きたいのか。

何が言いたいのか。

わからないまま、口にする。

「あなたなら、他にどんな女性でも望めるのに……どうして、あたしなの？」

どうしてあたしなんかを？ 会ったばかりの、異世界から来たわけがわからない娘がいつていつの？ ねえ、どうして？」

なぜか胸が痛い。

この人にどうしてほしいのか。何を求めているのかもわからないのに。

空の怒涛のような質問に面食らったように黙っていたエシュタンドが、ふわりと微笑んで答えた。

「そうだな……なぜだろう」

見上げる空の瞳の中に答えを探すかのように見つめてから、遠くに見える王宮を眺めて、エシュタンドが口を開いた。

「物心ついてから、女性というものへの憧れは特になかった。

母親の顔も覚えていない私が、最初に出会ったのがあの王妃だからな。

王子としての私に近づくのは、常に計算が見え隠れするような女ばかりだった。

女に限らず、王宮というものはそういうところだ。

自分より上の者にはへつらい、下の者は見下す。

どんな言葉にも裏があり、打算のない付き合いはない。

力が全てで、力で上に立つのが王族だからだ」

淡々と話していたエシユタンドの表情が、空に向き直ってから緩む。

「しかし、お前は違った。考えているままを口にし、裏表もなく、素直に怒り、笑い、泣く。まるで無色の宝石みたいだった。透明な心でそのまま私と接してくる。

そんな女は初めてだった。お前につられて、私まで言いたいことを言える。

お前といると、王子であることも忘れ、ただ素のままの自分でいられる気がする。

なぜ、そんなに綺麗なままでいられるのか。

汚れた王宮に浸かりきった私には不思議でたまらない。

それに、異世界から来たお前と、異例の王子である私と、何か似ている気がしたのかもしれない」

エシユタンドの言葉が終わる前に、空はなぜかあふれてくる涙を止めることができなかった。

まっすぐに、向けられた言葉の数々が胸を掴んだからなのか。

エシユタンドの悲愴にも思える独白に胸が痛んだからなのか。

それとも、ただ、嬉しかったからなのか。

空には自分の気持ちかわからなかった。

困ったように笑って、抱き寄せられ、いつの間にかその暖かい感触に慣れていることに気づく。そして思う。

早く、帰らなきや。

帰りたい、から、帰らなきや、そう微妙にずれた思考は、空をあせらせる。

帰らなきや、取り返しのつかないことになる前に。まだ引き返せるうちに。

頭の中でそう繰り返しながらも、藍色の優しい瞳に捕らわれていく。

甘い眼差しにからみとられていく。

そんな自分が怖くてたまらない空だった。

## 20・提案

ミデイス王国には、東西南北四つの聖殿がある。

それぞれに聖殿を預かる巫女があり、この大地を創造したエス神とミデイスの森の神たちに昼夜祈りを捧げている。

そのおかげでミデイスの安寧は保たれてきた、とさえいう者もいるほど、聖殿は重要視され、巫女は神に最も近い者、と敬われている。

巫女の力というものは。

「姫君、姫君」

神経質そうなしゃがれ声に呼ばれて、空は遠くへ飛びかけていた意識を戻された。

「お聞きになっておいでですか？ 先ほどから何度もお呼びしたのですよ」

そう言って眉根を寄せているのは、老齢の男性である。

白く長い髭は顎の下まで届き、ゆったりとした灰色のローブを身にまとい、空の目の前のテーブルに山ほど積みあがった本の一つを手に持っている。

「あ、ごめんなさい。えーと何だっけ？」

「姫君！」

たまらずに叫ぶような声が上がった途端、後ろから笑い声が響いた。

「かなり苦戦しているようだな、リゴト」

腕組みをしながら扉に寄りかかるように立っていたのは、エシユタンド。

「殿下、まったく姫君にも困ったものですよ！ 私が何度も噛み砕いてご説明さしあげているというのにお聞きになってもおらず、拳

句の果てには居眠りを……」

椅子から立ち上がりながら憤慨するリゴトの声に重なったのは、やわらかな声。

「まあまあ、仕方ありませんよ。姫君にとっては全く初めて聞くことばかり、おまけに異世界からやってきたというのだから、急に理解しろというのも無理な話です」

そう言って歩いてくるエカルドの肩から金の巻き髪が幾房揺れて落ちる。

二人の王子にねぎらうように微笑みかけられ、リゴトの赤い顔も少し落ち着いたようだったが、それでもこれだけは、というように空に厳しい目を向けた。

「と、とにかく！ 私が姫君の勉強係を仰せつかったからには、必ず覚えていただきます！」

その勢いに笑いをかみ殺しながら、エシユタンドが空のほうへ歩み寄る。

「頼むぞ、リゴト。まあ、今日のところは我が姫も疲れたようだし、このへんでいいだろう」

「わ、わかりました。それではまた明朝、参ります！ では姫君、殿下方、失礼をば」

エシユタンドに促されて、渋々といった調子でようやくリゴトは退出していった。

それと同時に力が抜けた空はテーブルに突っ伏した。

「だ、大丈夫ですか？ 姫君」

エカルドの驚いたような問いかけに、空の代わりに答えたのは低い声。

「疲れただけだろう。ソラはなかなか勉強は苦手なようだな」

笑いを含んだその言葉に、空は身を起こして、藍の瞳を睨みつける。

「うるさいなあ！ 大体どうしてあたしがこんな勉強なんてしなく

ちやいけないのよ！」

凶星なだけに余計に腹が立つ。

その思いは見透かされていたようで、エシユタンドは余裕で受け流した。

「私の妃となるお前が、この国について学ぶのは当然のことだろう？」

そんなの勝手に決めないで、とか、なんであたしがあなたと結婚しなくちやいけないの、とか、あたしはこんな国に住むつもりはないんだから、とか色々な反論の言葉が瞬時に頭を駆け巡り、今まさに出ようとした言葉は、隣で微笑むエカルドを目にして、無理やり呑み込まれた。

そうだった、一応今の段階ではエシユタンド以外にそういうことを口外するわけにはいかないんだった。

元の世界へ帰る方法を見つかるまでは、たとえ仮でも王子の婚約者、という立場を守り、王宮にいるのが一番安全だ、とエシユタンドに言われていた。

うまく丸め込まれた気がしないでもないけど……。

ここ数日、お妃候補としての勉強だ、とあのリゴトとかいう教師を連れてこられ、ミティス王国の歴史、地理、風土、文化、などなどの講義を朝から受けるはめになっているのだった。

自慢じゃないけどいつも学校のテストでは友達のノートを借りまくってぎりぎり赤点を免れ、テスト期間が終わるやいなや嬉々として部活に精を出していた空にとっては、勉強というのは苦痛でしかなかった。

特にこんな来たくて来たわけでもない国について学ぶなんて。

ああ、みんなどうしてるんだろ。

いつも文句を言いながらノートを貸してくれていた絵里。

同じく勉強嫌いのムツミ。要領のいい香織。

バスケ部のみんな、同じセンターのポジションを競った親友の由

佳。

もうすぐ練習試合だったのに。

今度はレギュラーになれるかもしれないのに。考えれば考えるほど気分は暗く沈んでいく。

あたしはこんな世界で何をやってるんだろう。

黙り込んで本の山を憎らしげに見ていた空に、笑いをおさめたエシュタンドが声をかけてきた。

「そんなに嫌なら、どうしてもというわけではないんだぞ」

もともと無理に始めたのは誰よ、と出かかった空の反論は、意外と心配そうな瞳の前に消えていく。

「べ、別に嫌っていうわけじゃないけど……」

なんだかあまりに勉強嫌いな情けない子みたいで、思わずそんな言葉が口から滑り出る。

ああ、あたしってなんだかすごく流されてる？

自分の嫌な性格がこんな異世界でも発揮されていることがまた更に情けない。

「ただ、ずっと部屋にこもりつきりで勉強っていうのが性に合わないっていうか、話だけ聞いててもピンと来ないっていうか……」

言い訳のようにつぶやいた空の言葉に反応したのはエカルドだった。

「そうだ、だったら外に出てみませんか？」

「外に？」

「外って、どこへだ」

そう眉を寄せて聞いたエシュタンドに、エカルドがテーブルの上の本を手で示して見せる。

「聖殿ですよ」

「聖殿？」

先ほどうつすらと話に出ていたことは覚えているが、それがどん

な内容だったかはつきりしない。巫女がどうとか言っていた気はするが……。

空が戸惑っている間に、エシユタンドはしばらく考え込んで、一人で納得したように話し出す。

「そうか、聖殿ならいいかもしれんな」

「そうですね、兄上。祈りを捧げに行くといえば、誰も反対する者はありません」

「早速手配させよう」

「ただ、あまり大人数で行くのは人目も引きます。精鋭の者だけ連れていかれるのがよいかと」

「心得ているさ」

「あ、あの……ちょっと？」

話が呑み込めないでいる空を置いて、すっかりとまとまってしまった二人は、何やら地図らしきものを出して、話し合いを始めてしまった。

「ねえ、どこ行くっていうの？」

「聖殿だと言ったろう」

うるさそうに答えて、エシユタンドはまた地図へ目を戻す。

冷たい態度に目をつりあげる空を可笑しそうに見て、エカルドが言った。

「心配いりませんよ。祈りを捧げるといっただけの名目ですから、聖殿までの道中を見物されたりして、この国について知られるといい。きつと楽しい旅になると思いますよ」

優しいエカルドの笑顔に、ふくれていた空も気を取り直す。

エカルドの言う通り、それは確かにこの王宮にこもっているよりは楽しそうだった。

そう言われてみれば、まだこの国の王宮しかよく知らないんだもんね。

外へ出て、街とか見たり、色々見物できれば楽しいかも。



聖殿とやらで、もしかしたら元の世界に帰る手がかりが見つけれ  
るかもしれないし。

考えるうちに、どんどん空の気持ちは明るくなっていく。

ようやく笑顔が戻った空を、エカルドの水色の瞳が映していた。

## 21・出発

聖殿への旅は、王の許可を得て現実となった。

暁の娘についてや、求愛の儀、更には消えた原書の件など、考えるべきことは多いものの、聖殿へ祈りを捧げに行くというのは、それらに悪影響のあるものでもなく、あれから何も騒動が起ころなかったことなどを考慮して、許可が出たらしい。

一番懸念のあった王妃についても、別段何の反対もしなかったと聞いて、空はほっとしたような、逆に不安なような複雑な気分だった。

しかし実際に出発の朝を迎えるとすっかり楽しみになっていた。

「ソラ、用意させた衣装は着けなかったのか」

馬車で待っていたエシユタンドが、現れた空を見るなり問う。

「だって、あんまり派手で歩きにくいんだもん。あたし、もともとこういう動きやすいほうが好きなんだよね」

段々侍女たちとも顔見知りになっていた空は、衣装の中から無理に地味なものを選んで着てきたのだった。

「しかしそれではまるで……」

「男みたいだって言いたいんでしょ。でもいいじゃない。別に着飾っていく必要もないし」

いいかげんドレス生活に疲れてきた空の選択は、水色のブラウスに薄茶色の乗馬ズボンだった。

「まあまあ兄上、いいではありませんか。相手方も特に気を使わずにお越しをとのことですし」

「そうですね、殿下。念のために晚餐用の衣装は積んでおきましたので」

とりなすように微笑むエカルドとクガルに苦い目を向けて、エシユタンドはあきらめたように腰を下ろした。

してやったり、と笑いをこらえる空を睨みつけて、エシユタンドは黙り込んでしまった。

四人を乗せた馬車は、そうしてゆっくりと王宮を出発したのだった。

東の聖殿までは馬車で一日も走れば着くという。

途中の街で少し食料や水を補給したり、馬を休憩させたり、空のための見物の時間も入れてくれた時間だということだった。

王宮を出て、林を抜けて、丘を下った馬車は、いまや街道のはずれらしき道を進んでいる。

限りなく装飾を抑えた地味な馬車は、時折通る小さな村の人々の注目を引くこともなかった。

すっかり解放感と安心で空の顔は明るい。

「ご機嫌ですね、姫君」

しばらく皆が外の景色を眺めていたその時、エカルドが口を開いた。

「え、ええ。まあ」

あんまり顔が緩んでいたかとあわてて引き締める空の様子を喜びに見ていたエカルドが続けた。

「聖殿の巫女殿も姫君のお越しを楽しみに待っておられることですよ」

聖殿よりも旅の道中自体が嬉しい空だったが、曖昧に微笑んでいた。

そんな空を見透かしたような視線を送ってくるのは隣の藍色の瞳である。

「まあ、コルトスではさぞかし美味しい地鶏料理が待っているだろうからな」

途中で立ち寄る大きな街のコルトスは、地鶏料理が絶品だと教えてくれた本人からの反撃に、空は唇を尖らせる。

「そんな、それだけが楽しみみたいに言わないでよ」  
「違うのか？」

呟きに冷たい一言で応酬したエシユタンドは、ぐっと黙る空を見て、勝ち誇ったように笑った。

悔しそうな空の向かいで、エカルドが優しく笑う。

「確かにコルトスの地鶏は最高ですからね」

「そうですね、私も大好きです」

善意が見るからに読み取れる二人の微笑みに、空は何とも言えずにエシユタンドをうらめしげに見やる。

「みんなの前で言わなくてもいいじゃない……」

ただの大食らい、と公認になってしまったようで、空は身の置き場がない気分だった。

ふっと笑ったエシユタンドが、あつという間に空の肩を抱く。

「じゃあ、二人きりならいいのか？」

そのまま唇でも寄せてきそうな距離で言われて、たちまち頬に血が上るのが自分でもわかる。

「ちよ、ちよつ、何言って……」

二人が見ている前で何をされるのかと思わず必要以上に遠ざかるうとした空は、エシユタンドの頬にいつもの笑いが浮かんでいるのを見た。

「冗談だ。怒ったり赤くなったり、忙しいやつだな」

またしてもあつさりとエシユタンドにしてやられて、空はもう言葉も出なかった。

こ、こいつ！ほんつとに腹が立つんだから！

真っ赤な顔でふくれる空に、馬車の中は笑いで包まれたのだった。

## 22・密話

体が心地よく揺れている。

それが一定のリズム、そう、車輪が刻むそれだと思いつくまで少し時間がかかった。

まだ気持ちの良いまどろみの中から抜け出せないでいる空の耳に、ぼそぼそと話し声が聞こえてきた。

「それにしてもよくお休みでいらっしやいますね」

「ああ、昨夜は興奮していたようで、遅くまで起きていたからな」

ああ、自分の話だ、と意識が少しずつ向いていく。

そんな空には気づかないように、談笑する三人の声は続く。

「コルトスへ着いたらまたはしゃいでまわるだろう。それまで寝かせておいてやれ」

まるで子供みたいな言い方だと半分眠りの中でも思う空だったが、まだ頭がぼんやりして、目を開けられなかった。

「……兄上は、本当に姫君を大切にされておられるのですね」

静かに、エカルドがそう言うのが聞こえる。

それに対して小さく笑うだけにとどめたエシュタンドに、エカルドが重ねて言う。

「姫君には勉強だなどと仰って自室にこもらせ、できるだけ外の騒ぎを耳に入れず、まるで誰の目にも触れさせないように、ご自分で守られていらっしやるのだから」

その内容に空の眠りは妨げられた。

もう一度意味を反芻しようとする空の意識より先に、エシュタンドの声が皮肉げに響く。

「さあ、どうかな。勉強させようというのも本心だ」

本音を悟らせないような口ぶりに、クガルの苦笑がもれる。

「殿下は素直でいらっしやらないのですよ、本当に」

「まったくだ」

笑いあう二人に咳払いをするエシユタンド。

空までもなんだか気恥ずかしくなって、そろそろ起きようとしたその時、馬車が揺れて、窓枠にもたれていた空の体は、自然と隣のエシユタンドのほうへ傾いた。

すぐさま受け止められて、あつという間に肩を抱かれ、エシユタンドの胸にもたれさせられた形になる。

手馴れた仕草でそうしておいて、平然と話を続けるエシユタンド。「それで、原書の行方はまだわからないのか」

「はい、殿下の仰った通り、高位の術士をそれとなく探らせてはおりませんが……」

「まあ、簡単に尻尾を出す奴もおらんだろうしな」

低く話す声が間近で響いて、密着した体温に空の心臓が騒ぎ始める。

あせる空が起きるきっかけを逃している間に、エシユタンドの低く、落とした声が発せられる。

「それでソラのことは」

「ええ。陛下付きの侍女たちの話では、どうやら儀式の準備をされているらしいと」

急に引き締まった空気に、目を開けることをためらっている空の周りで、話は続く。

「儀式とは、一体どのようなものですか？」

「それが、ハルトの剣を用意させておられると」

「ハルトの剣、というと例の剣舞に使われる？」

「そう、収穫祭の剣舞のものだと思つのですが……」

「それが姫君とどう関係が？」

エカルドのいぶかしげな声に、空は固く目を閉じる。

迷っていたものの、これはまだ眠ったふりを続けていたほうがよさそうだった。

話の流れからして、空をめぐる動きはまだ穏やかでないらしい。

沈黙が少しだけ広がったかと思うと、エシュタンドの音が低く響いた。

「剣舞をさせる気なのかしらん　ソラにハルトの剣で切らせる気なんだ、白水晶の滝を」

「ま、まさか！」

「それは巫女にしか許されていないことはありませんか！」

「そうですね、巫女以外の者が行えば、滝の精の怒りを招くと昔から……」

興奮した二人にエシュタンドが静かにするよう促して、それからつぶやいた。

「それで試す気なんだろう。ソラが暁の娘かどうかを　」

そんな、そう声にならないクガルの呟きが聞こえ、我慢できずに目を開けようとする空の動きの一步前に、馬車は静かに歩みを止めた。

それと同時に自然を装って目を開けた空に、目の前の二人の表情が一瞬固くなる。

胸の嫌な鼓動を抑えて、空はあたりを見回して、伸びをしてみせた。

「寝ちゃってたんだ、あたし。もう着いたの？」

自分でも不思議なほど平靜な声が出て、ほっとしたように寄せられる視線にも空は気づかないふりをした。

「ああ、着いたようだな、コルトスに」

エシュタンドが代表して答える。

つい先ほどまで触れていた温かな胸の感触を振り切るように、空は一瞬目を閉じて、クガルの開けてくれた扉から、コルトスの地に降り立ったのだった。





### 23・コルトス

石造りの四角い家々。その間の狭い道で走り回って遊ぶ子供たち。広い通りを歩く人々。買い物袋を抱えて談笑する女たち。道の端で物を並べて売る商売人に、値切っているようなお客たち。様々な人々が、皆一様に明るい表情をしていた。

目の前に広がるたくさん家々に、店が連なる通り。

それらをどこか圧倒されたように眺めていた空の肩をエシュタン  
ドが叩く。

「どうだ、初めて見る外の街は」

その声に我に返って、空は笑った。

「うん、すごくいい！ なんだか生きてるって感じ」

王宮でのどこか緊張感のある暮らしと、自然に人々が笑い合う場所との差に驚いていた心が、懐かしさでいっぱいになる。

雰囲気は違っても、空がいた世界とはこの方が似通っていた。

空の答えに苦笑して、それでもエシュタンもどこか嬉しそうに  
言った。

「確かに、ここに比べると王宮は死んだようなものだからな」

その言葉で、先ほどの馬車での会話を思い出す。

空を試す、そう言っていた。

王は空のことをただ放っておいたりしていなかったのだ。

巫女以外許されない剣舞とかいうものをやらされるといっ

それは、巫女でも何でもない空が行えば一体どうなってしまっ  
つというのか。

滝の精の怒りとは、どんなものなのか。

段々足元から渦巻いてくるような不安に、空は思わず両腕を抱え  
る。

背筋が寒くなる想像が膨らんでくる。

「どうした、ソラ」

笑顔が消えた空に気づいたように、覗き込んでくる藍色の瞳。いつもこうして気遣って、空を守ってくれるエシユタンド。

それでも、それだけではいけない気がした。

この世界にやってきてからいつも助けてくれる彼の存在に、知らず頼りきっていた空。

しかしそれだけでは自分で何もできないままなんだと、改めて思い知らされたような気がしていた。

「う、ううん。何でもない。馬車でちょっと疲れたみたい」

ソラの答えに黙っていたエシユタンドだったが、いつものように笑みを浮かべた。

「あれだけぐっすり眠っておきながら、よく言うものだ。重い頭でもたれられて、私のほうが疲れたぞ」

そのエシユタンドの皮肉に、空はいつも通りふくれてみせる。

「別に、好きでもたれたんじゃないもん」

空のしかめ面に、エシユタンドは楽しそうに笑った。

ともかく、今はこの街を楽しもう。これから先のことは、それから考えよう。

頭の隅に不安も恐怖心も追いやって、空はエシユタンドに微笑んだ。

「殿下、そろそろコルトス領主の屋敷へ向かいましょうか」

クガルの声が背後から聞こえてきて、エシユタンドが頷く。

「ああ、そうだな」

そしてまた馬車へと逆戻りしようとする三人に空は思わず声をかける。

「えっ、もう行くの？」

通りの食堂や屋台から流れてくる香ばしい匂いを吸い込んでいた空としては、てっきりここで昼食をとるのだとばかり思っていたの

だった。

その顔に吹き出したのはエカルドだった。

「大丈夫、領主が美味しい昼食を用意して待っているはずですよ」「そうですねよ、姫君。屋敷で少し休まれてから、また街の見物に出てもいいですし」

すっかり空の扱いを承知したような二人の言葉に、恥ずかしくなりつつも安心して、空は馬車へと戻ることにした。

しかし、三人の背を追いかけようと踏み出した空の足は、一歩で止まった。

突然衣服を後ろから掴まれて、つんのめりそうになったのだ。

「な、何っ?」

あせって振り返るが、何も異常はなく、首をかしげながら再び歩き出そうとするが、またしても同じことが起こる。

「何なの、一体!」

気持ち悪くなってもう一度振り返った空の目が、ようやく足元の人物をとらえた。

「……え?」

何も言わずに突っ立っているのは、小さな子供だった。

綺麗に二つに結われた薄緑色の巻き髪、同じ色の大きな瞳を嬉しそうに瞬かせたその少女は、年相応には見えない大人びた仕草で、髪の色より濃い緑のふわりとしたスカートを持ち上げておじぎを試みせた。

一体こんな子供が何の用かと不思議に思いつつも、しゃがみこんで少女の目線と合わせるようにする。

同じ高さで目が合った途端、少女は空に鮮やかに微笑んでみせた。「やっと、見つけた」

透明感のある声でそう言って、少女は両手を胸の前で広げてみせる。

その手の上には、緑の葉っぱがのせられている。

風がどこから吹いた、そう思った途端、いつの間にか一枚の葉

っぱが数枚に増え、風にさらわれるように舞い上がっていく。

何かが、おかしい。

空がそう感じたその時、エシユタンドが自分の名を呼ぶ声が遠くに聞こえた気がした。

それに答えようとするも、体が言うことをきかず、ぐらりと傾いでいく。

「大丈夫、心配しないで」

倒れていく先で、不思議なほどしっかりと空の体を受け止めた少女が、耳元でささやく。

うふふ、と甘い蜜のような笑いをもらす少女のまわりを一瞬で覆う葉の数々。

緑の葉は音もなく風に舞い散り、空間ごと消えるように、空と少女を包みこんだ。

「エシユ、タンド……」

むせるような緑の香りの向こうで、走りよって来るエシユタンドの姿が薄らいでいった。

突如目の前で起こった出来事に、藍色の瞳は大きく見開かれていた。

「ソラ！ ソラ ツ！」

叫んでも、残された石畳の道には影も形もない。

ただのつむじ風のように、通りを歩く人々には何も気づかせずに済んだ一部始終。

あとから付いて来ない空を不審に思つてエシュタンドが振り向いた時には、既に緑の葉が舞い上がるのが見えた。

そしてあの奇妙な風の中、空の姿が掻き消えるようになっていったのだ。

かすかに見えたのは、少女の姿。

あれは、魔の力に似ていた。いや、しかし人の姿をとれる魔のモノなんて聞いたことがない。一体、どういうことなんだ！

唇をかみ締めて振り下ろしたエシュタンドの拳は、固い石を打った。

「殿下！ 一体何が……」

馬車で待つていたクガルがあとを追いかけてくる。

「ソラが連れ去られた」

事実だけを振り向かずと言う。

「そ、そんな！ 一体誰に？」

クガルの後ろからついてきたエカルドも驚愕の声を上げる。

しばらくしてから拳を握り締めて立ち上がり、エシュタンドは振り向いた。

「クガル、コルトス領主に軍隊を要請しろ。ただし王宮には伝令を出させるな。コルトス内のみで情報をとどめるんだ、わかったな。」

全力を尽くして捜すんだ！」

素早く頭を垂れたクガルが立ち去るのを見送って、エシユタンドは表情を更に厳しくする。

エカルドが見守る中で、エシユタンドは低く、低くつぶやいた。

「絶対に、捜し出してみせる……ソラ」

まだ数えるほどの日々しか共に過ごしていない娘。

見知らぬ世界からやってきた、不思議な少女。

それがこんなに胸の中を占める存在だったことを、エシユタンドは改めて自覚していた。

最初は好奇心からそばにおいた。

それがどんどん面白くなって、心を奪われていった。

半分王妃へのあてつけで求愛の儀を行ったつもりだった。

そんな自分の心を知ってから知らずか、ただ純粹に、透明に、接してくるその心に、いつの間にか気持ちが悪く傾いていた。

気づくうちに、手放したくなくなつて。

帰りたいと願う娘を無理にでもと抱きしめた。

自分の中にこんな情熱が眠っていたことなど知らなかった。

ただ、力を求めて、絶対的な強さのもとに、全てを屈服させてやろうとそう思っていただけの自分であつたはずなのに。

くるくると変わる表情で自分の言葉に反応する少女につられて、そのやりとりを楽しんでいる自分が意外だった。

女など、履いて捨てるほどいる。

ただの王位への足がかりでしかないと、そう思っていたはずの自分が、一人の少女がいなくなったことでこんなにも心を乱されているとは。

「……殿下……」

耳に届いた声に、エシユタンドは浮かべていた自嘲の笑みを引く  
込めた。

「ああ、領主。騒がせてしまったな、すまなかった」

用意された客室の長椅子で、食後に振舞われた果実酒を飲んでい  
た第三王子に、領主は膝を折った。

「いえ、とんでもございません。殿下の大切な婚約者様がいなく  
なられたとのこと、ご心配、心よりお察しします」

軽く頷いて頭を上げるよう促したエシユタンドに悲痛な目を向け  
たまま、領主は続けた。

「ただいま、コルトス領軍隊で全力を挙げてお捜ししております。

仰られたように、王宮へはまだ伝令は出しておりませぬゆえ、ご心  
配なさらずに」

「そうか、感謝する。何かわかったら報告してくれ」

「はい、もちろんでございます！」

では、と深く頭を下げ退室していく領主の後姿を見送った後、  
そばに控えていたクガルがエシユタンドを見やった。

「あの様子では、領主は姫君の誘拐には関与しておらぬようですね  
そうだな、と低く答えたエシユタンドはグラスに残っていた果実  
酒を喉に流した。

「あれは正直で誠実な男だ。関与しているとは思いたくはないが」  
領主が出て行った扉のほうを眺めながらそう言うと、窓際に立っ  
ていたエカルドがこちらへ歩みよってくる。

「しかし、どういう経過でこうなったかもわからぬ現在、あらゆる  
可能性を考えて対処されるのがよろしいのでは」

「ああ、わかっている。私の私兵にも伝令を出しておいた。万が一  
の場合も考えてな」

「さすが兄上、話がお早い」

どこか嬉しそうなエカルドの微笑みは、エシユタンドの意識を素  
通りしていった。

王宮を離れて、狙われる可能性はないとは思っていなかった。しかし、空のみを、こんなにもあっさりと奪い去られるとは予想外だった。

王宮からの敵だけではなく、外にも正体不明の敵がいるのか。やはりあの書庫での術は彼女を狙ったものだったのか。

何か今回の件と関連があるのか。

つながりがあるのかわからない空をめぐる流れに、エシユタンドのため息は深くなる。

無事でいてくれ。

ただ、それだけでいい。

目を閉じたエシユタンドの頭に浮かぶのは、夜の闇のような短い髪、やわらかな白い肌、そして、彼を見る、大きな瞳、花が咲いたような、あの笑顔。

もう一度、この手に。

あせるばかりの心を静めるように、ゆっくりと長椅子の背にもたれる。

握り締められた手の平だけを、藍色の瞳が睨みすえていた。



頭が痛い。

深い眠りの奥でも感じていた緑の匂い。

それが今では濃く辺りに立ち込めて、空の体を重く沈めているようだった。

かすかに鳥の鳴き声が聴こえてくる。

済んだ空気は少し湿ったような温もりを帯びている。

ここは……。

眉をしかめてうつすらと開けた瞼の間から、見える景色に目をこらす。

たくさんの木々が見えた。

頭痛に耐えながら体を起こすと、自分がたくさん敷き詰められた草の上に寝かされていたのがわかった。

辺りは一面の森で、高い木が連なり、木々の合間から降り注ぐ日差しは、地面にゆらゆらと揺れる影を作っている。

重かった体が、澄んだ空気に癒されていくように軽く感じてくる。

「あたし……？」

口にした声は、かすれて森の空気に溶け込んでいくように思えた。

「あ、起きた」

唐突に空の頭の上から明るい声が降ってきた。

目をむいて振り仰ぐと、緑の巻き髪を二つに結わえた少女が笑っていた。

頭上で、まるであぐらをかくような体勢で浮かんでいるその少女に、空は声もなく後ずさった。

ぼんやりとした頭が一気に冴える。

「なっ、なっ……」

「ああ、そっか」

空の反応に気づいたように、宙に浮かんでいた少女が、くるんと回転して空のもとへ降りてきた。

「気分はどう？ 無理に空間移動したから、負担かけちゃったかなあ」

いたずらっぽく微笑んで、薄い唇を舐める。

妙に大人びた仕草をしておいて、その外見は小学生ぐらいの子供にしか見えない。

「あなた、一体何なの？ あたしをどうしたの？ ここはどこなのよ！」

圧倒されていたのが悔しくて、少女を見下ろすように立ち上がる。

精一杯強い声を出したつもりだったが、全く堪えた様子もなく、少女は困ったように肩をすくめてみせた。

「そんなに一度に聞かれても答えられないじゃない。聞くときには順序つてものがあるでしょう？」

幼子に諭すようなその口ぶりに、ますます怒りを感じた空が口を開こうとする一歩前に、涼しげな声が響いた。

「ルーカ、いけませんよ。きちんと説明してさしあげないと、姫君が混乱なさるでしょう」

突然背後から気配もなく聞こえた声に空があわてて振り向くと、背の高い青年が立っていた。

ルーカと呼ばれた少女と同じ、薄緑色の髪と瞳。

長いまつすぐな髪は背中まで流れ、濃い緑色のゆったりとした衣装をまとっている。

「アルネンス、あたしはただこの子に会話の礼儀つてものを教えてあげようと……」

口をとがらして反論するルーカの頭に手を置いて、アルネンスという名らしき青年は優しく微笑んだ。

「わかっていますよ。説明は私がしましょう。ルーカはお座りなさい」

おだやかながらも有無を言わせないような口調で、アルネンスは

告げる。

あきらめたように木の根の上に腰を下ろしたルーカを見て、青年は空にも微笑を向けた。

「どうぞ、姫君もお座りください。突然連れて来たことへのお詫びと、我々の話を少し、聞いていただきたいのです」

丁寧なその態度と言葉に、空も大きく息を吐いて、先ほどの草の上へ腰掛けた。

「先ほどの姫君のご質問にお答えするところから参りましょうか。まず、我々はミディアスの森に住まう、森の一族、森の精、などと呼ばれる存在です。

といっても昔はそう呼ばれていた、とでも申しましょうか。現在では一部の人々を除いては、忘れ去られ行く一族です」

「も、森の精？」

いきなり予想外の言葉を言われて、驚きを隠せない空を見透かすように、アルネンスは微笑んだ。

「そう、少し人には使えない力を使えて、人より寿命が長いというだけです」

す、少して……。

あきらかに謙遜であろう青年の言葉に、空はとりあえず頷いた。

一体何が目的なのかわからない目の前の二人を刺激することはよくないように思えたのだ。

「その森の力を使って、あなたをちょっとお借りしてきたというわけです」

お借りって、物じゃないんだから！

頭の中だけで突っ込む空だったが、アルネンスの静かな微笑は変わらない。

「それで……ここは一体どこなの？」

意識を失う直前に見えたエシユタンドの姿が頭に浮かんで、空の口をついた言葉。

自分がいなくなつて、心配しているに違いない。  
藍色の瞳を思い浮かべて、少し胸が痛んだ。

「ここはコルトスの外れに位置する森の奥。ただし、人の入れる森とは少し入り口をずらしてあります。我々の住まいを脅かされては困りますので」

「そうそう、昔はこんな風に気を遣わなくてもよかつたんだけどね。人間たちがすっかり図々しくなつちやつて」

「ルーカ」

我慢しきれず口を挟む少女を、アルネンスが優しく制する。

何気ない会話の中に、彼らの不思議な力と世界を感じさせられて、空はただ、黙つて聞いているのが精一杯だった。

今までに思っていたよりも更に、今いる世界の異質さを思い知らされる。

魔の力、魔のモノだなんていうのだけでも驚いていたのに、今度は森の精だなんて。

「そ、それで、その森の精があたしに何の用なの？」

沈黙ばかり続けるわけにはいかないと、なんとか声を出す。

そんな空にアルネンスは薄緑色の瞳を細めて、微笑んだ。

「あなたにどうしても渡したい物があるので、明けの姫君」

涼やかな声がそう言った途端、濃い緑の匂いが風に乗って一段と強く香った。

## 25・森（後書き）

現在、他サイトさままでこの25話まで連載済みなので、ここまでに  
気に更新しました。

ゆっくりとお読みいただけると嬉しいです。

ここからは、普通のペースで更新になります。

## 26・焦燥（前書き）

ひどい風邪を引いてしまい、更新が遅れました。  
まだまだ長い作品になりそうですが、どうぞゆったりと見守ってくださいませ。

日が傾いていく。

領主の軍隊も、王宮の私兵を用いてまでも、消えた娘の手がかりを掴めずにいた。

あせりばかりが大きくなって、エシユタンドはため息を隠せなかった。

「殿下、どうか少しお休みください。姫君はきつとご無事です」

「そうですね、兄上。ご心配はわかりませんが、あまり気を詰められては兄上のお体にさわります」

そばで気遣ってくれる二人の言葉も、エシユタンドの内心を苛立たせる。

無事だなどどうして言えるのか。

ソラの行方が知れぬというのに、この私がゆっくりと休んでいられるか。

そんな言葉が喉まで出かけるが、理性がそれを抑えていた。

それと同時に、今までの自分では考えられないほどの感情の高ぶりに、エシユタンドは驚き、苛立っていた。

「ああ、わかった。悪いが、二人とも外してくれないか」

一人になりたいというよりも、これ以上二人に気遣われるのを避けたいためだった。

多くを言わずとも、短い返事で二人とも退室してくれた。

扉が閉まるのを確認して、大きく息を吐いたエシユタンドは、寝台に腰掛けた。

コルトス領主の心遣いのわかる、最上級の布の感触も、今の彼には心地よく思えなかった。

毎朝起きてから文句を言われることになると、寝入った娘の隣で味わう快適な眠りは、何にも代えがたい癒しとなっていたのだと、

改めて感じる。

日中ずっと捜し回ったというのに、どこかに忽然と隠されてしまったかのように、空の行方はわからなかった。

一人を誰にも目撃されずに連れ去り、どこにも立ち寄りず、このコルトス全域をふさいだにもかかわらず捕まらないというからは、やはり人の力によるものではない。

王子が直接出向くなど、というクガルやエカルドの反対も押し切つて、馬を駆つた自分にすら、力の痕跡さえ感じさせない、謎の存在。

魔の力ではない。魔のモノ、ではなかった。

あれは一体何だったんだ。

空を連れ去つたことからして、目的は彼女の命ではなかったはずだと、エシユタンドは直感していた。

空を消したいのなら、その場で誰にも気づかせずそうできたぐらいの力の持ち主だ。

何か我々の目を欺いて、あの娘を連れ去りたい理由があったはずなんだ。

命は無事なはずだと、そう信じたい気持ちにまかせて、エシユタンドは唇を噛んだ。

人の姿だったが、人ではあり得ない力だった。

私すら知り得ぬ、人外の存在によるものだという可能性は？

人外の。

そこまで考えてから、一瞬何かがエシユタンドの頭を掠める。

何だ？

何かが、思い当たる何かがある気がしたのに。

意識の奥底を探ろうとするエシユタンドの思いは、深く、深く眠りに沈んでいった。



『強くなりたんだ』

目の前にそびえる木々に向かって、彼はそう言っていた。  
傷だらけの腕を伸ばして、痛みが走るのもかまわずに、叫んでいた。

『誰にも負けないくらい、強く――！』

王宮では流したことのない涙が頬をつたう。

『そして見返してやる。母上のことも僕のこと、もう二度と馬鹿になんかさせない。』

皆を僕の前でひざまずかせてやるんだ！』

悲痛、とも言えるほどの怒りが込められた叫びだった。

肩を上下させ、涙を拭う。

いけない、泣いては。泣いたら負けだ。

涙を拭い終えた藍色の瞳は、もう既に、いつもの氷のような表情を取り戻していた。

『見事な光ね』

突如、背後から響いた声に驚いて振り返る。

古い大木に、寄りかかるように女が立っていた。

長く、腰の辺りまでを覆う、薄緑色の巻き髪。同じ色の瞳を細めて、微笑んでいる。

濃い緑色の長い衣装を揺らしながら、こちらへ近づいてきた。

『な、何者！』

精一杯の威厳を込めて発した彼の言葉にも、女は笑みを崩さなかった。

『本当に綺麗な白金の光。想いの強さなのかしら』

自分の体をどこか通り越したところを見つめて、吟味するようにつぶやく女。

気味が悪くなるが、逃げるわけにはいかないと、まっすぐに視線

を返す。

そんな彼を見て、気づいたように女は言った。

『ああ、そうね。泉の瞳を持つてるのね。懐かしい同胞の残したモノ。』

それだけの想いと力があれば、真の王者にもなり得る』

独り言のように紡がれる女の言葉は、ほとんどが理解不能だったが、最後の単語にだけ反応できた。

『王者？ 僕は王になれるのか？』

必死の思いで女の瞳を覗き込むと、女はようやく自分の世界から帰ってきたかのように視線を返した。

『なりたいの？』

『……ああ、なりたい！ いや、なってみせる、必ず！』

女は少なくとも自分を子供扱いしていない。それに、瞳に侮蔑の色はなかった。

真剣に心の奥から発せられた彼の叫びを受け止めて、女は笑った。『なら、なれるわ、きつと』

その女の答えに、珍しく笑顔を作ろうとした頬の動きが、次の一言で止まった。

『でもこのままじゃだめ。貴方の心には、足りないものがあるもの』  
『た、足りないもの？ それは何だ！』

あせりと共に滑り出る言葉。

女は一瞬意味ありげに微笑んでから、胸元から何かを取り出した。それを手渡して、女は告げた。

『これを持っていなさい。そうすれば、いつか』

目を開けると、既に部屋の中は真っ暗闇だった。

飛び起きたエシュタンドは、一目散に扉を開け、廊下に出る。

その足取りはどこか確信を持った、しっかりとしたものだった。

隣室に控えていたクガルに何事かを告げ、領主の屋敷を出る。

外に繋がれていた白い馬にまたがり、あわてて飛び出してくる兵や部下を振り切って、夜の闇の中へ駆け出して行った。

その背を月の光だけが照らしていた。

## 27・想緑珠

アルネンスが空に差し出したものは、深緑を埋め込んだような濃い緑色の石だった。

日の光で様々な光沢を見せるその石は、掌に載せられた途端、温かいような、心地いいような、不思議な感覚をもたらした。

「それは、そうりょくじゆ想緑珠、といます。我々森の精に伝わる宝玉であり」

アルネンスの穏やかなままの声音に聞き入りそうになりながら、一瞬胸に引つ掛かる単語を思い出した。

「ちょ、ちょっと待って！ 今、明けの姫君って……」

こちらの世界へ来てから何度も聞いた言葉とどこか似ている。

それは一体どういうことなのか、と問い詰めようとする空より前に、ルーカが二つに結わえた髪を揺らして、ため息をついた。

「全く、落ち着きのない……アルネンス、本当にこの子がアメの愛し子なの？」

なんだか疑いたくなくなってくるわ、としかめ面で青年のそばを浮遊しだした少女に、アルネンスは苦い顔を向ける。

「ルーカ、言葉が過ぎますよ。人間であり、異世界から来たこの姫君にとつては、とても難しい話なのですから、我々の基準で理解を急がせてはいけません」

諭すように告げられて、ルーカは渋々といった表情で黙り、そばの高い木の枝まで浮かび上がり、腰掛けた。どうやら話に入らないことを承知したらしい。

「あ、あの……明けの姫君とか、アメの愛し子とか、って一体……」  
聞き覚えのある言葉がたくさん出てきて、空は動揺を隠せなかった。

今まで全くわからなかったことが、突然目の前に迫ってきたのである。

ここで聞き流すわけにはいかなかった。

空のそんな表情を読んだように、アルネンスは優しく微笑んだ。

「そうですね、順にご説明いたしましょう」

アルネンスの言葉に思わず空が緊張した瞬間、鳥が羽ばたき、森の葉を揺らした。

「エスタリアに危機迫る時、我が愛し子を差し出そう。暗黒を救う夜明けの姫を送ろう。その娘現れし時、世界は喜びに震えん」

まるで詩を読むかのように優雅な口調で言ってから、アルネンスは謎かけのように笑みを浮かべる。

「それは？」

先をうながす空の言葉にアルネンスが頷く。

「アメ神の言葉です。遙か昔、まだ精霊も神も人々も同じ大地に暮らしていた頃のこと」

「は、遙か昔……？」

想像を超える話の広がり、なんだか眩暈がする。

なんとか聞き漏らすまいとアルネンスを見つめる空に向かって、薄緑の瞳が優しく瞬いた。

「そう、遙か昔、エス神の嘆きの時代に耐えかねたアメ神が、エスタリアの大地にそう約束をしたのです。精霊たちはそれを語り継ぎ、人々は神話を作った。

長い長い年月が過ぎ、人心は神や精霊から離れ、自分たちの文化を築き上げていくことに心を捕らわれ、地位や名声に溺れ始めた。魔のモノは繁殖し、そんな心の退廃の影で徐々に世界の侵食を始めていく。そういう今、ついにアメ神の約束は果たされることとなった」  
そう言っ、どこか遠くを見るようだったアルネンスの憂いを帯びた瞳が、空を捉えた。

「え……」

「そう、暁の世界と我々が呼ぶ異世界からやってきた姫君、あなたです」

穏やかな表情の中で強く光る瞳、それは紛れもない真実を告げようとしている瞳だった。

「あ、あたし……?」

しばらく声も出せずにいた空がようやく言葉を返すと、アルネンスはしつかりと頷いた。

その顔にはもう笑みが戻っている。

「あなたがこの地へと降り立った時、森が震えました。静かに時を刻んでいくばかりだったこの森が、いやミディアスの森全体が微かな希望と喜びの感情を伝えてきたのです。

それでああなたが王宮を離れてこの地へとやってくるのを待っていました。

明けの姫君が来たら、これを渡すようにと託されていたからです」

どこか嬉しそうな表情で言い終えたアルネンは、空がずっと握ったままだった緑の石　想緑珠を指した。

何かを言おうとしても、言葉が思い浮かばない。

あたしが明けの姫君?　アメの愛し子?

自分がこの地へやってきたのは偶然じゃないというのだろうか。

でも、そんな……。

混乱と驚愕と、何もかもが複雑に入り混じった空の表情をじっと見ていたアルネンは、安心させるように微笑む。

「いきなり理解しろというのも無理な話ですね。今すぐあなたに何かしろというわけではありません。あまり思い悩まずに……」

「アルネンス!　甘やかすにも程があるわよ!　ゆっくりしている暇なんてない。この子が暁の娘なのは確かなんだから、はっきりと自覚してもらわないと。そうじゃないと、あたしたちは……ルーラ姉様はどうなるの?」

ついに耐え切れず、といった顔で割り込んできたルーカの勢いに空は圧倒される。

幼い顔を怒りと悲しみの色に染めて、叫ぶように言われたルーカ

の言葉が、空の頭に浸透していく。

あたしが、暁の娘……。

ゆっくりしている暇が、ない？

「ルーラ、姉様？」

最後の言葉だけをようやく繰り返した空に、ルーカが苛ついたように何かを言おうと口を開きかけた、その時だった。

ルーカをそつと手で制したアルネンスが、静かな声で告げる。

「ご到着のようですよ」

その言葉に反応したのはその場にいた者だけではなかった。

木々の緑を染め上げるように深く、濃い緑色の光が、空が手にする想緑珠から突如放たれたのだった。

## 27・想緑珠（後書き）

プロローグから第27話まで、三人称で修正、少し加筆しました。あきらかに一人称と思われる部分はなくしたつもりですが、やはり当初からの書き方でかなり主人公よりの三人称になっているのは自覚しています。（汗）

それから、評価で指摘があった、異世界に来た空の驚きなども少しは書き加えてみたつもりですが、まだまだリアルさが足りないとは思っています…。

これからの更新部分は、三人称で統一して書くつもりです。

修正した部分について、もしまだおかしいところなどがあれば、お気づきの方、どうぞ評価欄、またはメッセージでお知らせいただけるとありがたいです。

よろしくお願いいたします。

（11月13日、修正済み）



## 28・到着（前書き）

久々の更新です。

皆様のご指摘を受け、しばらく自分の作品を見直し、他の方の作品など読ませていただいて色々勉強した後に、今までの部分には修正をいたしました。

これからまた頑張って更新していきたいと思っています。ご感想などいただけると幸いです。

森の匂いが変わった。

そうエシユタンドが感じた途端、辺りのざわめきが消え、今まであったコルトスの森とは異なる風景が広がっていた。

いや、同じ森でありながら、森の空気や木々の色、静けさがまるきり異質なのである。

「どういうことだ、クガル……クガル？」

後をついてきていたはずのクガルがいない。

遙か後方で控えさせていた私兵たちの気配も感じない。

ためらいは一瞬だけで、あとは確信が残っていた。

そうか、ついにお出ましということか。

木々が鬱蒼と茂りだし、枝が突き出るように彼の行く手を邪魔する。

仕方なしに愛馬を降り、手近な木に括り付けようとしてから、止めた。

「この森に囚われてはいけなからな。お前は戻れ。お前なら本能でわかるだろう、森の出口が」

優しく告げてやっても、馬は落ち着いた様子でその場に留まり、草を食み出した。

「まあ、いい。森はお前に悪さはしないだろう」

そして意を決したように進みだしたエシユタンドの胸元で、濃い緑色の、辺りを照らすような光が発せられた。

前方を一直線に指し示すようなその光に、エシユタンドは一瞬目を奪われたものの、すぐにいつもの笑みを取り戻した。

「やはり、そうか」

短くそう呟いて、一步を踏み出す。

その途端、今まで前方を塞ぐばかりだった枝や葉が、道を空けるように左右に引いていく。

そして木々が開けた時、一瞬のまぶしさに片手を上げて光を遮ろうとした、その手の向こうに、見つけたのだった。

探し求める、愛しい娘を。

「ソラ！」

久々に呼ぶ、その名前を噛み締めながらエシュタンドは叫んだ。緑の木々が周りを囲む、少しだけ開けた空間、まるで葉の絨毯のような柔らかな地面を踏みしめて、駆け寄ると同時に、空が立ち上がる。

「エシュタンド……」

少し驚いたようなその顔は、どこにも疲労や怪我などの様子は感じさせない、いつもの空だった。

それを確認した途端、安堵が体中から零れ落ちるような気がした。自分の動きを止めもしない目前の人物たちから半ば奪い取るように、空の体を引き寄せる。

温かい体温と、まぎれもない空の柔らかな体をエシュタンドは思い切り抱きしめた。

「よかった、無事で……」

搾り出すように出てきた彼の声は、切なげな響きを隠せていなかった。

「エ、エシュタンド……」

彼の名前を呼ぶ戸惑いがちなその声にエシュタンドは苦笑する。

いつも通りのうぶな反応。まるで昨日別れた時のままだ。

一昼夜捜し続けたことが嘘のように穏やかなこの空間に騙されなように、エシュタンドは前方の二人を睨みつけた。

「一体、どういつつもりだ。この私からソラをさらって置いて、無事で済むとは思うな」

藍色の瞳が怒りに燃えているのがわかる。

たとえ相手が誰であろうと、譲れない一線はある。

エシユタンドの鋭い声を受けて、動いたのは空だった。

「あ、あの、エシユタンド、あたしなら大丈夫だから……それにこの人たちは」

「お前は黙っている」

彼の腕にしがみついて訴えかける空に、抑えた声でエシユタンドは告げる。

そこに含まれる強い感情に、空は言いかけた言葉を失った。

「ソラが姿を消してから、まる一日経っている。一体その間何をしていた！」

エシユタンドの詰問に、驚いたのは空である。

「い、一日？ う、嘘……」

空の驚きように眉を寄せたエシユタンドが、更に強い目で前方の二人を睨みつけた。

エシユタンドが口を開く前に、背の高い青年が優雅に頭を下げた。その動作に伴って、長い薄緑色の髪がさらりと肩から流れる。

「どうぞお怒りをお静めください。姫君に危害は加えておりませんゆえ」

必要以上にへりくだったような彼の言い方に、そばにいた少女が憤慨したように叫ぶ。

「アルネンス！ あんな人間ふぜいにあなたが膝を折る必要なんか……」

「ルーカ、ルーラの言葉を忘れたのですか」

短く少女を制したアルネンスが顔を上げる。

「この森の中の時は、人間界のそれより、ゆったりと流れているのです。」

そんなに長く引き止めるつもりはありませんでしたが、姫君にはどうしてもお話したいことがあったので……」

そう微笑んで話しながら、アルネンスは深い森に目を向けた。

どこか悲しげな瞳で再びエシユタンドを捉えた彼は、ゆっくりと言った。

「おかえりなさい」

その言葉にいぶかしげな目を返すエシユタンド。

アルネンスは少しだけ瞳を閉じた後、微笑んで見せる。

「森がそう言っていますよ、王子」

さやさやと、優しく揺れる葉の音に耳を傾けている青年には、嘘を言っているような様子もない。

見守る空の不思議そうな視線を感じながら、エシユタンドは何かを言おうとして、結局口をつぐんだ。

ああ、やはり。

そう、目の前の青年は、きっと全てを知っているのだ。

胸の奥の忘れかけていた記憶は、いまやすっかりと表に出てこようとしていた。

そんなエシユタンドの胸のうちを知ってか知らずか、アルネンスの表情は穏やかなままである。

その場に流れるのは、ただ、ゆったりとした時間。

そして、風と森の匂い。

しばらくの沈黙を待った後、アルネンスの静かな声が響いた。

「あなたに見ていただきたいものがあります、王子」

落ちていた声にエシユタンドは顔を向けた。

既に落ちていた光を取り戻した藍色の瞳を見て、アルネンスは微笑んだ。

「そう、その胸の石についてもご説明しましょう。姫君、あなたにも」

もう光は収まっているというのに、衣服の中にしのばせた石の存在を知っているかのような青年の言葉。

人ではあり得ない存在感と不思議な力に引き出されるように、エシユタンドは自分の記憶が完全に蘇るのを感じていた。

黙ったエシユタンドの態度で承諾ととったのか、アルネンスは立ち上がり、歩き出した。

「どつぞ、こちらです」

不安げな空の肩を抱いて、エシユタンドは青年と少女の後に続いた。

緑の色に酔いそうなほど深い森の中、むせかえる木々の匂いのある空間に、それはあった。

いや、存在していた。

太い、古い幹の中にまるで埋め込まれたように、女の体があるのだ。

大木に同化するかのように立った姿勢のまま、瞳は閉じられている。

時折吹く風に、薄緑色の長い髪がわずかな揺れを示すことで、生命の灯火を感じさせるぐらいで、ほとんど生きているとは思えないほどだった。

「じ、これは……」

ためらいがちに出た空の声に、アルネンスは微笑んだ。

その微笑みは今までの穏やかなものから、少し切なげなものに変わったように見えた。

そして胸の前で交差した、その女の手に優しく触れた後、アルネンスが空のほうへ向き直った。

「これはルーラ、ここにいるルーカの姉であり、我々と同じ森の精です」

「眠って、いるの……?」

静か過ぎるこの場所と、どこか悲しげなルーラの体を見ていることに耐えられず、発せられた空の疑問は、思いがけずルーカにまた怒りの火を灯したようだった。

「そうよ！ 眠っているのよ。あんたたち人間のせいだね！」

憎々しげに吐き出された言葉にどうすればいいかわからないでいた空の背中に、アルネンスが優しく触れた。

「姫君のせいではありません。これも時代の流れの生み出す悲しい

結果だといえましょう。ルーラだけではない、私にも、ルーカにも遠い未来ではないのですから」

その言葉に、今まで呆然とルーラの方を見つめていたエシュタンが振り向いた。

「一体、どうということだ……森に何か起こっているとしても言うのか」  
エシュタンドの問いに、アルネンスはしばらく沈黙し、悲しげな笑みを浮かべる。

遠くを眺める視線は、それでもとても穏やかなものだった。

「森は、滅び行きつつあるのです」

ようやく紡ぎだされたその言葉に、空は一瞬、戸惑ってから、口を開いた。

「滅び行く、って……こんなに木々が茂ってるのに？」

自分の言葉を裏付けるような豊かな森の木々たちを指し示す。

枯れかけているような様子もなく、木々の緑は目にも眩しいほどだ。

空の疑問に苛立ったように、ルーカが大きく息を吐いた。

「これだから、人間は……目に見えるものが全てではないのよ！  
器がただそこにあるというだけで、真実の姿に目を凝らすとうともしない。そんなだから姉様は……」

ルーカの言葉は、最後は呟きと化していた。

怒りと、悲しみと、悔しさと、複雑な色を宿した薄緑色の瞳は、空たちから逸らされ、そこにある木々のどこか奥を見つめているように見えた。

何も言えないでいる空に詫びたのは、またアルネンスだった。

「ルーカの言葉を、どうかお許しください。精霊とはいえ、やはり姉と呼ぶべき存在には、特別の想いがある。その想いを絶たれそう  
な今、ルーカの心は乱されずにはおれないのです」

「……どうということ？ 森が滅んでいくのは、人間のせいなの？」  
森が滅ぶと言われて、空の頭に浮かぶのは、森林伐採や自然破壊



といった人工的な要因であり、それと反するような森の様子に納得が行かなかったのだが、ルーカの口ぶりでは、それ以外の要因を人間が持つているとでもいうことのようにだった。

静かな静かな森の中、アルネンスは空に向き直った。

その薄緑の双眸は、ただあきらめのような光を宿している。

「世界ができた時、神は自然と人とを同じだけ愛おしみ、創造しました。

そこには無垢な想いしか存在せず、純粋な共存関係を育んだ両者の間には、慈しみと愛があり、その想いは、精霊を宿す力となりました。

しかし、その関係は徐々に崩れていきました。人が我欲に走り、この世界は自らが築いたものでもあるかのように、王国を発展させ、そして強いては全てを支配しようとして、それぞれの国が各地で争いを始めた。人の純粋な想いというものと結びついていた自然世界は、少しずつ、少しずつ綻び始め、人間たちの負の感情に侵食されていったのです。

物質的なところに被害はなかるうと、この森、いや、ミディアスの森全てにいまや影響を及ぼしています。木々に宿る心とでも呼ぶべき内面は、少しずつ抉られ、削られ、傷つけられている。そしてそれは彼らを愛する我々精霊の心にもつながっている。

精神的な存在である精霊には、心の穢れが存在自体の命を脅かすのです。

ただ、生まれ、ただここに在るだけの私たちには、その世界の流れを憂い、悲しむことしかできない。ただ、変化を受け入れ、それが世界の意思であれば、従うほかない。

必要とあれば、消えていくしかないというわけです」

長い長い悲しみを、ゆっくりと空気ににじませるように、アルネンスは語る。

そこまで聞いて、耐えられず空は彼の言葉を遮った。

「そ、そんな……消えるって死ぬってこと？」

空の言葉に少し笑ったアルネンスが、静かに答える。

「精霊は精神的存在ですから、死ぬという表現が正しいかはわかりませんが、存在がなくなることを死と表現するなら、そうですね」

「でも、あなたたちはすごい力を持つてるんでしょ？ どうしてその力で人間を止めようと思わないの？」

少し興奮しかけた空の声に、ルーカが嘲るように笑った。

「そんな考えだから人間は我欲に走るのよ。力を揮おうと、力で得られるものは結局それだけのものでしかない。そんなかりそめの平和を手に入れようと、負の影響は止められない。だってそれは真実の状態ではないんですもの。真実の想いでなければ、森との関係は取り戻せないのよ」

ルーカの語る内容は、少女のような外見からは想像もできない、深いものだった。

「あたしたち精霊は、自分たちのために何かを曲げようとなんてしない。

例えばそれが、間違った世界の流れだとしても。それが世界の行く先なら、受け止めるだけ。

ただどいくら精霊にだって、悲しみ、嘆く心はある。大事な存在だつてある。

それが不公平なところよね」

そう言いつつも、ルーカの表情は、複雑にひしめいた感情を示して、とても人間に近く見えた。ただその憂いの深さみたいなものが、この少女のような精霊の生きてきた長さを感じさせる気がした。

「滅び行く森を見るのはしのびないと、お姉様は眠ることを選んだ。それが彼女の選択。

でもあたしにはできない。例えば滅びを受け入れるにしても、いくら精霊であっても、何もせずに嘆いているだけなんて、いくらなんでも悲しすぎる。あたしは森を愛する者として、行く先を見届けるこ

とを選んだ。でも、それは悲嘆にくれるためだけじゃない」

空をきつい眼差して見上げたルーカは、アルネンスにもその瞳を向けた。

「アルネンス、あなたがいくら甘やかそうと、あたしは言うわ。たとえわずかでも、森を救える可能性があるのなら。そしてルーラ姉様に再び目覚めてもらうために」

アルネンスは、ルーカの真剣な瞳を受け止めて、ただ静かな微笑みを浮かべた。

そして今度は、止めはしなかった。

アルネンスの無言の了承を得て、ルーカは振り返り、空の瞳をまっすぐに見る。

「あたしたちがあなたを呼んだのは、森を救ってもらうため。ミディアスの危機に遣された、暁の娘、あなたにね」

空がその言葉に息を呑むのと同時に、今まで沈黙を守っていたエシユタンドが空を見る。

藍色の瞳を驚愕に見開いて、彼が口を開く前に、ルーカが次の言葉を発した。

「そしてあなたもよ。ミディアスの第三王子、いえ、次期国王となる者」

ルーカの幼い容貌は、いまや完全に威厳ある精霊の気を宿して、先ほどまでの軽口を叩いていた少女には見えなかった。エシユタンドの瞳にそのまま問いかけるように、ルーカは言った。

「もう思い出したのでしょうか？ ルーラ姉様と出会ったこと、そして託されたものごとを」

あたしが、森を……救う？ それに、エシユタンドが、次期国王？

頭に入り乱れる様々な言葉を、必死で整理しようとしていた空の傍らで、エシユタンドはしばらく黙っていたかと思うと、低く、呟

いた。

「……なるほど」

どこか楽しげなその声に目を上げた空は、ゆっくりと笑みを浮かべるエシユタンドの顔を見た。その微笑は、いつもよりも静かで、様々な感情を内に秘めたようなものだった。

「……エシユタンド？」

何を考えているのかがわからなくて、思わず不安げな声で彼を呼ぶ。

そんな空に気づいたように、エシユタンドは表情をゆるめた。

心配するな、とでもいうように空に微笑んでから、今度はアルネンスのほうに目を向けた。

「言いたいことはわかった。それで、森を救うのと、この石と、どういう関係があるんだ」

そう言っただけで衣服の胸元からエシユタンドが取り出したのは、先ほど空が手渡された想緑珠と同じ石だった。空の瞳がその石に釘付けになると、エシユタンドが意味ありげに空に微笑むのが同時だった。

その瞬間、空の掌にずっと握られていた緑の石が、少し熱を帯びたような気がした。

先ほどのように光ることはないものの、まるで脈打つかのように空の手に熱を伝えてくる。

「う、これは……」

どうなってるの、と続けようとした空の言葉は、突然の風に掻き消された。

あまりに強く、一瞬吹いた風が森の木々全体を揺らしたように感じる。

そして、ふらつく空の肩を、エシユタンドがしっかりと受け止めた。

風がおさまった後、アルネンスが静かな声を上げた。

「残念ですが、もう限界のようです」

そう言って、少しだけ厳しい瞳で辺りを見渡して、アルネンスは言った。

「森の結界が脅かされています。あなたたちをこれ以上引き止めておけないようだ」

「どういうことだ」

眉を寄せて問い返すエシユタンドに、ルーカが先に答える。

「魔の気配が迫ってる。この森に人間を内包していることを嗅ぎつけたのかもしれないわ。」

とにかく今はあなたたちを吐き出さないと、森が危ない。精霊と相反する魔の気配は、森を傷つけるの」

「魔の気配って、魔のモノがいるってどういうの？」

またあんな化け物に遭遇することになるのかと、空が顔色を変えたその時、アルネンスが安心させるように微笑んだ。

「大丈夫、安全なところに出られるようにしておきます」

その言葉が終わるやいなや、エシユタンドと空の体が何か違う空気に包まれていく。

いつの間にか出現した緑の葉たちが、二人の体を取り巻きだした。「おい、待て！ まだ話は……」

エシユタンドの声は、最後まで紡がれることはなかった。

一気に力を増した、まるでつむじ風のような空気が、二人の体を押し包み、持ち上げていく。

もはや周囲を見ることがかなわないほどの葉が舞い上がり、緑の濃い匂いが鼻をついた。

そして二人の意識が途切れる寸前に、頭の中に響くように、アルネンスの優しい声が聞こえていた。

### 30・クガル

「まだ、殿下は見つからないのか！」

クガルの叱責が辺りに響いた。馬上から栗色の厳しい瞳で見下ろされ、兵たちはただうなだれるのみである。

突如消えた王子の搜索は、夕日が森を染める頃になっても一向に進まなかった。

兵たちに慕われる優しい私兵隊長も、さすがに苛立ちを抑えきれなくなつた結果の叱責である。しかし、頭では誰に非もないことを承知していた。

叫んでしまつてから、色濃い疲労が見える兵たちの表情に胸が痛む。

「声を荒げてすまない。暗くなると探すのは不可能に近い。日が沈むまで、もう一度範囲を広げて搜索にあたってくれ」

すぐにいつもの穏やかな口調を取り戻し、告げるクガルに、ミデアス王国第三王子付き私兵隊は、すみやかに搜索に戻つていった。

既にコルトス領軍隊で、森全域をあたつた後である。これ以上どう捜そうと見つかるはずもないのだが、一縷の望みをかけて、私兵隊に搜索を命じているのだった。

今頃コルトス領軍隊が、コルトスの領地をくまなく捜してくれている頃であろう。

しかし、クガルには、どうしてもこの森の付近に王子がいるような気がしてならなかった。

やはり、魔の力なのだろうか。

ため息をついたクガルが思い出すのは、今朝の光景。

突然夜中に王宮へと馬を走らせた主あかしについて、彼の私室へと入っ

た時。

藍色の瞳を強い色に染めて、彼が差し出したのは、濃い緑色の寶石のようなものだった。

姫君が姿を消してから、苛立ちと不安、焦燥とが影を落としていたエシユタンドの表情には、光が戻ろうとしていた。

『ソラを捜す手がかりになるかもしれん』

それは何かと問うたクガルに対しての、彼の答え。

ほぼ何かの確信を得たように、エシユタンドは再びコルトスへと舞い戻り、朝日が昇るなり、森の搜索を始めたのだ。

私兵隊長として付き従うクガルも、ようやくの吉報に嬉しさを抑えられないでいた。

彼女が現れてからというものの、今までにないほどの感情を見せるエシユタンドに、驚きつつも喜んでいたので。

彼の笑顔を見られることが、純粹に嬉しくて、そして何より、クガル自身も、空の無垢な魅力に好感を持たずにはいられなかったのだから。

張り詰めた王宮の空気をやわらかく照らすような、素直な微笑み、明るさ、屈託のなさ、全てが新鮮で、そんな彼女がエシユタンドの心の奥の氷を溶かしてくれることを期待してやまなかったのは、クガルだけではない。エシユタンドを慕い、敬愛する私兵隊全員の願いだっただ。

そんな矢先に消えてしまった彼の光ともいえる少女。彼女を見つげ出せるかもしれない、そんな期待はクガルに疲労も感じさせぬほどだった。

しかし、森深く立ち入った頃、突如としてエシユタンドは消えた。彼の乗る白い愛馬とともに。

彼らを照らしていた太陽の薄い光が一瞬遮られ、暗い影に包まれた、そう感じた一瞬の出来事だった。

木々の枝に邪魔をされたように、前に行くエシユタンドの姿が見えなくなっただかと思うと、かき消されたように、その場から忽然と

姿を消してしまっただった。

あの不可思議な現象は、魔の力の介入を思わせる。

しかし、それにしても何が違う、とクガルの勘は訴えるものの、何がと問われると説明できない。

魔に対する攻撃や保護の術なら使えるクガルであったが、魔の力に関する感知力は王子の比にも及ばないのだ。

それでも自分の能力は、私兵隊の中では最上級のものだ。他の兵たちにはこの現象についての見解は望めずに、クガルは頭を抱えていた。

やはり、王宮に緊急を知らせるべきでは。

いやむしろ、この状態で王宮に隠し通すことは無理に近い。

一国の王子が、しかもこの国を将来背負って立ち得る王位継承者が姿を消したのだから。

先に消息を絶った彼の婚約者もまだ見つかっていないうちに。

昨夜王宮へ戻った際には、おそらく王や王妃の耳にまでは入っていなかったはずだが、聖殿へもまだ辿り着いておらず、いつ不審の目が向けられるかは時間の問題だった。

それに何よりもまず、二人が無事であるのか。

もしも魔のモノが関わっているとするならなおさらだが、それ以外であつても心配は尽きない。

王子の魔の力の強さは誰にも劣らぬとはいえ、どんな事態が起こりうるともかぎらない。

王宮に知らせ、王宮軍と守護龍の出動を要請するのが二人の安全のためには一番の手立てなのだが、そうすることによって、エッシュタンドの立場が悪くなる。

……一体、どうすればいいのだろう。

クガルが眉間に皺を刻み、深くため息をついた、その時だった。



「隊長！ あれを」

考えに没頭していたクガルがあわてて振り返ったその先には、木陰からいつの間にか姿を見せた、上等な毛並みの、白い馬　そう、彼の敬愛してやまない主の愛馬がいた。

「あれは殿下の」

クガルが思わず目を輝かせた瞬間、不意に空が暗くなった。

曇ったのかと見上げたクガルの栗色の瞳が驚愕に見張られた。

遠い頭上に、目が覚めるような青色の、大きな翼が見えた。

体のバランスから見ると異常に長く、幅の広い翼で空をかき、浮かんでいるのは、半身が人の姿、半身が獣の奇妙な生き物であったのだ。

### 31・擬態

美しい夕焼け空に似つかわしくないその生き物は、青い翼で風に乗り、悠々と浮かんでいる。

木々に邪魔されるのか、ある程度の距離を保って、まるでクガルたちを観察するかのごとく、上空で留まっていた。

「あ、あれは一体……」

「隊長！」

兵たちのざわめきに我に返ったクガルは、瞬時に馬を飛び降りる。男性にしては小柄なクガルの身のこなしは、素早く、無駄がない。視線だけで兵たちはクガルの意向を読み取り、中央を大きく開けた円状になり、それぞれ戦闘体勢をとった。背中から弓をとり、いつでも放てるように矢をつがえる。

魔のモノと対峙するために特別に強化されたものだが、果たしてそれが有効なのか、クガルは不安を覚える。

エシユタンドの私兵隊は、全員が一定基準以上の対魔術や剣術を身につけた選りすぐりのものばかりである。しかしその彼らもあきらかに動揺を隠せていない。

頭上に浮遊する敵は、それほど異形なものだった。

青い翼はまるで鋼のように夕日を受けて硬い光を放ち、下半身には茶色の毛に覆われた獣の体。しかし、その二本の足は猛禽類を思わせる鋭い爪を持っている。

一番奇妙なのは上半身　まさに人間の女そのもの、であった。

赤茶色の髪は長く、裸の胸の位置まで伸び、滑らかな肌は気味が悪いほどに美しい。

そしてその女の顔は、世にも魅惑的な微笑みを浮かべているのだった。

そんな、ここまで人に擬態できる魔のモノなど、聞いたことがない！

クガルの内なる叫びがまるで届いたかのように、髪と同じ赤茶色の、女の瞳がこちらを向いた。少し肩を揺らして、笑っているようにさえ見える。

これほど人間に近い魔のモノを見たのは、初めてだった。

『魔のモノの外見は、その力に比例する　特に力の強いものほど、人に擬態しようとするものだ』

彼の主が以前教えてくれた言葉が、クガルの頭をよぎる。

しかし今までに見たことのあるのは、せいぜい人間の腕を持つ大きな蛇であったり、人面を持つ鳥であったりで、ここまでのものなど有り得ないはずなのだ。

魔のモノがそこまで強力な力を得た、ということなのか。一抹の恐怖を感じつつも、先ほど張った結界をもう一度強固にすべく、両手を複雑に組み直した。

クガルの額に汗が流れる。

その瞬間、だった。

「なんか、ちがう」

甘ったるい声でした。

見開かれたクガルの栗色の瞳に、首を傾げた女の顔が映った。

「さつき、においがしたのと、ちがう」

その舌つたらずな声は、確かに上空の女の口から発されていた。

な、何……まさか、そんな……！

クガルの動揺は大きく、思わずそう叫びそうになった。

すんでのところだと思いとどまったのは、兵たちの驚愕と不安に満ちた視線が一気にクガルに集まったからだだった。

ここで兵の指揮を乱すわけにはいかないと、必死で平静な顔を装い、クガルは静かな声を発する。

「動揺を見せるな。各自、持ち場を守るんだ」

クガルの命を受けた兵たちはなんとか円陣は崩さず、その場に留まったが、それでも全員緊張感にぬぐえなかった。

そんな空気など気にもせぬような女の声が続いた。

「さつきはもっと、おいしそうな、おいだったのに……」

大人の女のような外見とは裏腹に、子供のような口調で、女は不満な表情を作る。

風がこちらに届くほどの勢いで、青い翼を揺らしながら、少し辺りを見回すような仕草。

視界のきかぬ森の木々の多さにあきらめたのか、女は再びクガルたちに目を向けた。

「まあ、いいかあ。こいつら、いっばいだし、おなかいっぱいになりそう」

自分で勝手に満足したかのようにそう呟いて、魔の女は赤く、長い舌を出し、唇の回りを舐めた。

そして一瞬の間をおいて、鋭い爪をむき出しに、一気に下降してくる。

バサリ、と風を起こして、迫ってこようとした女は、すんでのとこで止まった。

赤茶色の瞳に悔しそうな光が宿る。

「なに、これ。ちかづけない……」

どうやらクガルの結界に気づいたらしい。目には何も見えないが、先ほど強化された結界は、幾重にも張りめぐらされている。

そう、簡単に近づけさせるわけにはいかないのだ。

この、クガルの名にかけて、イーシャの誇りをかけてな！

優しい風貌で王宮の侍女たちにも人気が高い私兵隊長も、今この時ばかりは不敵な笑みを浮かべていた。

そして先祖直伝の複雑な結界術が解けぬよう、汗で滑る両手を必死に合わせ続ける。

厳しく眉をよせて見上げる先では、女が苛立ちをあらわに舌打ち

をした。

そんなところまで人間そのものである。

クガルの強固な結界の存在が、兵たちを幾分安心させたらしい。再び各自弓をかまえて、女を睨みつけた。

兵たちの表情には、それでもいつもの余裕は見られなかった。各王子付き私兵隊の中でも随一と謳われるエシユタンドの私兵隊が動揺を示した、先ほどの衝撃をクガルはもう一度思い返す。

そう、言葉話す魔のモノなど、まったくもって、初めての存在であったのだから

しばらく睨みあいを続けた後、飽きたように女が大きく息を吐き出した。

「もう、つかれちゃった。めんどくさいの、きらい」

集中力も短いのか、遊びつかれた子供のような顔で、女が言う。

「でも、おなか、すいたのになあ」

あきらめきれないような口ぶりで、女は甘い声を紡ぐ。

子供のような話し方、しかしその焦れたような表情は妙に色気があった。

それでも話している内容は物騒なものだ　何しろ、人間を完全に餌のように言い放っているのだ。

最近続く、魔のモノによる人間の襲撃は、日に日にひどくなっているとは聞いていたものの、まだ人間が食べられたとは聞いていない。

しかし、まさかこんなにも事態が恐ろしいことになっていたとは……。　

集中を切らさぬよう、今はそれ以上考えないようにした。

クガルの結界で守っている間がいいが、こんな恐ろしいモノを野放しにするわけにはいかない。この場は守っても、他の人間が危なくなる。

もう、限界か。

そう判断して、思わず唇を悔しげに噛んでから、クガルは一番近くにいた副隊長を見た。

「ちよつとがんばれば、ほどけるかも。やっぱり、おいしそうだし」  
女のあきらめきれないような声が降ってくる。

見上げると、鋭い爪をとがらせたまま、大きな翼を一瞬止めて、唇に指を添えた女は、まさに留まることを決意したかのようにだった。

やはり、応援を要請すべきか。

「ルスト、王宮へ伝令を」

副隊長に向け、ささやくように速やかに告げられようとした内容は、思いがけない相手によって、止められることとなった。

ふいに肩にかけられた手に後ろを振り向いたクガルは、驚きに口をつぐむ。

肩にかかる金のゆるやかな巻き髪をほらい、優雅な微笑でクガルの隣に立ったのは、エカルド王子殿下だったのだ。

### 32・エカルド

誰もが緊迫したその状況下で、エカルドの笑顔は優美すぎるほどのものだった。

その隣には、いつの間にかエシユタンドの白い愛馬を従えている。皆の驚愕の視線を受けて、エカルドは少しだけ馬の首を撫でたあと、そばで待つ馬車のほうへ、馬を促した。

静まった森の中に、馬蹄の音だけが響く。

無事にエカルドの御者へと受け渡されて、エシユタンドの愛馬が一鳴きしたのを合図に、クガルはようやく口を開いた。

「で、殿下　領主の屋敷でお待ち頂いていたはずでは……」

エシユタンドと空の搜索の間、エカルドには領主の屋敷で待機してもらっていたはずだった。

もう一人の王子までもが消息を絶つ、などという万一の事態を危惧してのことである。

王宮へ送り届けることも考えたクガルだったが、道中何が起ころとも限らないと、迷った末、そう決断を下した。

そのことはエカルドも了承してくれたはずであった。

それがなぜ　。

そんな戸惑いをそのまま声に出したクガルの問いに、エカルドは優しく頷いた。

「ああ、そのつもりだったんだが……ただ待っているのに耐えられなくなっただんでね」

エシユタンドや空に対するものとは違う、エカルドの口調。

クガルや目下のものに使つ、くだけた言葉遣い　耳にするのは初めてではない。

それが、なぜかこの場ではいつもと異なる雰囲気醸し出している。

それはこの状況での、不自然ともいえる微笑みのせいであろうか。黙ったまま、見つめるクガルの前で、エカルドは着ていた白の暖かそうな上着を脱いだ。

そして、そのまま上空に浮かぶ女を見上げながら、ゆっくりと兵たちの前方へと歩んでいく。

「殿下！ 危険でございます！ どうぞ、後方へお戻りを」  
クガルのあせった声を耳にしても、エカルドは優雅な歩みを止めなかった。

頭上の女もそれに気づいたように、視線を向ける。  
何か好奇な光が閃いた赤茶色の瞳に、クガルの背筋が寒くなる。

兵たちの数人があわてて王子を守るうと飛び出してくるのを、エカルドが片手を出して遮った。

「よい、下がっておれ」  
その威厳に満ちた声は、いつもの穏やかな第四王子のものではなかった。

鋭く発せられた命令に、兵たちも庄せられたように従う。

悠々と女を見上げたエカルドの水色の瞳は、どこか妖しく、自信に満ち溢れて見えた。

「これだけの擬態をしてくるとは……確かにミディアスの危機というのも頷ける」

独り言のようにそう言って、エカルドは艶あでやかな笑顔をそのまま女に向けた。

しばらく黙って見守っていた女は、少し小首を傾げてから、負けないくらい甘い微笑を浮かべ、エカルドを見下ろした。

「さつきとはちがうけど……なんかおいしそう」  
結局のところ、女は食欲しか頭にないらしい。

クガルの結界に手間取らされていたことはもう忘れたのか、赤茶色の瞳は、エカルドのみを映している。

青い翼が、女の興奮を表すかのように強張って、巻き上げられて



ゆく。

女の物騒な言葉と態度にも、エカルドは微動だにしない。

「で、殿下」

クガルの呼びかけは、女と対峙しているエカルドには届かなかつたようだった。

女の様子をただ眺めていたように見えたエカルドが、ふと表情をゆるめ、短く嘆息したのだ。

「美女の贅辞なら嫌いではないが」

皮肉げに笑ってから、エカルドは肩をすくめてみせる。

「醜い化け物の餌になる趣味はないんだ」

余裕たつぷりに、冷たく放たれた返答。

侮辱されたことを理解したのか、女の表情がみるみるうちにゆがんでいく。

一瞬の隙を逃さぬかのように、エカルドは目線は動かさず、クガルにのみ告げた。

「結界を解いてくれ」

そんな、この状況で結界を解けばどうなるか……！

クガルの困惑とあせりを微笑みで受け流し、エカルドは言葉を紡ぐ。

「大丈夫だから、早く」

エカルドの水色の瞳から、強い自信が伝わってくる。

一体、何をしようというのか。

いつも控えめで、穏やかだった末の王子が、まるで知らない人物に見える。

クガルの戸惑いと迷いは、上空からふいに巻き起こった風によって消されることとなった。

そう、女の青い翼が、高く舞い上がり、また振り下ろされたのだ。それは、明確な、攻撃の合図。

結界の存在など頭から消し飛んだのか、勢いをつけて、一気に下

めがけて突っ込んでこようとしていた。  
黒く、鋭い両の爪をとがらせて

クガルが汗のにじんだ両手をついに離し、結界を解いた、その瞬間。

「よくも……」

女の震える声が風に乗って届いた。

「あなたたちなんか、ただのえさのくせに……」

子供のような口ぶりと、対照的な艶なまめかしい肌が怒りのせい、薄赤く染まっている。

自分の言葉で更に興奮したかのように、女はエカルドを刺すように睨み付ける。

「あたしは、みにくくなんか……ない　　！」

憤怒に満ちた女が上空から叫ぶ。それを機に、美しかった女の口が一気に裂け、獣の咆哮のような音が森の中に響き渡った。

木々の合間を縫うように、女が勢いを増し、飛んでくる。

青い翼にいまや沈みかけようという夕日が反射し、不気味な光を放つ。

やはり、エカルドを守るべきかと私兵隊全員が動こうとした、その時だった。

エカルドが右腕を持ち上げる。

次の瞬間、持ち上げた腕の、白いブラウスの袖口から、青白い光が現れた。

光は、焰ほのへと姿を変え、渦を巻きながら、腕全体を包んでいく。

怒りに支配された女は、それに気づく様子もなく、そのまま、エカルドめがけて突進していく。

大きく開かれた女の口から、生々しい涎が垂れるのが見える。

目前に迫った魔の女に、思わず兵も、クガルも攻撃体勢をとった。いざという時には殿下を守らなくてはならないと、クガルも先ほ

どとは違った形に両手を結び、自らの気を集中する。

しかし、その力が放たれるよりも前に、予想以上の速さで、女の爪はまさにエカルドを捕らえかけた。

息を呑んだクガルの目の前で、エカルドは笑っていた。

その水色の双眸に、冷たい光を宿しながら。

青く、不気味にエカルドの右腕を彩っていた焰の渦は、まるで意思を持つかのように、魔の女めがけてその触手を伸ばした。

いまさら気づいた危機に顔色を変えた女は、自分を包む青い焰に、苦しみながら、空中で暴れ狂った。

わめき狂う獣の聲が、その苦しみを物語るようだった。

半身人の姿でありながら、既に人とは見紛うこともないほどに、魔の本性をさらけ出し、女は猛り、身悶え続けた。

しかし、青い鞭のような焰が、締め上げ、巻きつき、女の動きを奪っていく。

焼き尽くすほどの熱はないのか、とところどころを焦がすのみにとどめて、焰は燃え続ける。

容赦のない青い呪縛に、女の動きは徐々に奪われていく。ついにつめき声を絶え絶えにもらすのみになった女は、意識を失ったのか、ぐったりと動かなくなった。

空中に倒れこんだ女の体は、青く包みこむ焰の檻ごと、ゆっくりと地面に落ちていき、緑の草の上に、その姿を横たえる。

一部始終を静かに見守っていたエカルドは、全てが済んだと判断したように、一息ついて、少し乱れた金の巻き髪をかきあげる

そして、白く、細い指を、まるで合図であるかのように鳴らすと、青い焰は急速にその勢いを弱めて、渦を巻きながら、エカルドのほっすりとした腕に戻っていった。

焰の全てを腕に受け止めて、エカルドがゆっくりと微笑んだ時には、もう既に青い焰はどこにもなく、まるで何事もなかったかのよう森の中に佇むエカルドの姿があるばかりだった。

クガルは声も出すことができなかった。

冷たい汗が背中に流れて、初めて、自分が固まっていたことに気づく。

その全てを見届けたというのに、今起こった出来事が信じられず、夢か幻に支配でもされていたかのような、奇妙な感覚に包まれていた。

あれは一体、誰なんだ。

ようやく、頭に浮かぶのは、そんな疑問。

冷たく、恐ろしいくらい自信に満ちた態度で、見たことのない焰を操る、それは、エカルドであり、エカルドでない別の人物のようだったのだ。

強張っていた肩に、優しくかけられた手に、クガルは弾かれたように面を上げた。

「大丈夫か？ 顔色がよくない」

そう気遣うエカルドの口調も、表情も、既にいつもの穏やかさを取り戻している。

しかし、その袖口から先ほどの青い焰の切っ先が見えるようで、思わず目をしばたいた。

そんなクガルに、エカルドの静かな声がかかる。

「やはり、兄上ほどはいかないな。捕縛までしかできなかった」

エカルドの自嘲気味な口調よりも、その内容で、クガルはようやくその場の状況を思い出した。

「し……私兵隊全員！ 速やかに魔のモノを縛し、捕らえおけ！ それから、ルスト！」

指示を出しかけたクガルの言葉が一瞬止まる。

呼ばれた副隊長も真剣な瞳でクガルの様子を伺う。

思わず仰いだ先のエカルドは、水色の瞳を細め、ただ微笑んだ。

クガルは、唇を噛んで、すぐに何かを振り払うかのように告げた。

「王宮へ戻り、王宮軍と守護龍の出勤を要請するんだ。一刻も早く、魔のモノの処分と、事態への対処を。」

複雑な色を栗色の瞳に秘めて、クガルが指示を出す。

その言葉を最後まで聞くより前に、突如、予想だにしない声が響いた。

「その必要はありませんよ」

日も暮れかけた森に響いた、強く、澄んだ声。

それは。

倒れた魔の女を、対魔用の縄で縛り上げていた兵たちも、クガルの指示に動こうとしていた副隊長も、そして眉を寄せて最後の指示を与えようとしていたクガルも、全員が目を見開いて振り返った。

「お……王妃、殿下！」

そう、そこに佇むのは、薄暗い森に光る、きらびやかな衣装を身につけた、王宮からそのまま抜け出てきたような、王妃の姿であったのだ。

信じられない相手の登場に、思わず立ち尽くしていたクガルは、あわてて地面に膝をつけ、正式な礼の姿勢をとった。

そのクガルに続き、次々と兵たちがひれ伏すのを、興味もなさげに見て、王妃はエカルドに視線を向けた。

「母上」

「おお、エカルド……あなたが無事で何よりです」

無事な姿を確かめるように、歩み寄ってきたエカルドの体に触れてから、王妃は表情を和らげた。

「どうしたのです、直々にこのようなところまで」

息子の疑問に、王妃は声高に告げる。

「それはもちろん、あなたの無事を確かめるために決まっていますでしょう！」

東の聖殿から使いの者が来て、あなたたちがまだ辿り着いていないと聞いて、いてもたってもいられずに、こうして……」

「使いの者、ですって?」

「ええ、そうよ。今朝、王宮へ着いて、陛下もご心配なさって、もうすぐ王宮軍と守護龍がこちらへ到着する頃です」

そこまで言って、ちらりとクガルを見る。

「だから、もう使いの必要はないの」

手にした扇が揺れて、こちらに見えた王妃の顔からは、もう息子を心配する母親の表情は消えていた。

まるで目の前の餌に口を開ける、蛇のように、冷酷な笑みが浮かぶ。

「ところで……他の二人の姿が見えないようだけれど」

冷たい色の水色の瞳を向けて、王妃はひれ伏すクガルに言葉を放った。

「一体、どこへ行ったのかしら」

突き立てられた剣のような問いに、クガルはただ、栗色の瞳を地面に向け、唇を噛み締める。

凍りついた空気を後押しするように、森は既に夜の闇に包まれようとしていた。

### 33・聖殿（前書き）

久々の更新になってしまいました。  
お待ちいただいていた方々（がいるのか不安）、申し訳ありません。

### 33・聖殿

どこかで梟はくうの鳴くような声が聞こえる。

頭は割れるように痛み、体が動かない。

何がどうなったのかを思い出せなかったのは一瞬で、意識を取り戻した頭は、急速に先ほどまでの出来事を頭の中に蘇らせていく。

森の精、想緑珠、眠る女……鮮やかに反芻される映像は、空の胸深くまで重石を載せられたように沈み込んでいった。

そうだ、あたし、あの森から……。

森の精である青年にどこかへ飛ばされたのだ、ということを出してから、空は重い瞼を無理やりこじあげた。

まず見えたのは、夜の闇。そして、半分雲に隠れた白い月。

どこへ飛ばされたのか、どれくらいの時間が経ったのか。

とにかく確かめなくてはと、あわてて起き上がろうとした空は、自分の体に巻きつく腕に気づいた。

しっかりと空を抱いて、隣に横たわっていたのはエシユタンドだった。

彼の白い上質な衣装は、ところどころ擦り切れ、体のあちこちは土で汚れ、草がついている。

自分の無傷な衣服を目にして、空は手や足を動かしてみたが、どこにも痛むところはなかった。

そういえば、意識がなくなる寸前に、温かい腕に包まれたような記憶がある。

まだしっかりと目を閉じたままのエシユタンドの顔が青白く見えて、怖くなった。

「エシユタンド」

名を呼んでも、固く閉じられた瞼は動かない。

自分を抱く腕を緩めて起き上がり、体をそつとゆすってみる。



「エシュタンド、しっかりして」  
それでも何の反応も返ってこないことに、不安になった。  
どこにも外傷はないようだが、強く落ちて頭でも打ったのかもしれない。

嫌な胸の鼓動を打ち消すように、空はエシュタンドの胸に耳を当てた。

少しして、聞こえてくる心臓の音。

規則正しく脈打っていることに安心しながら、異世界でもやはり同じ人間なんだ、などと妙に冷静な考えも浮かんでしまう。

それと同時にいつそう心配になった。

「どうしよう……ねえ、エシュタンド、起きてよ」

呟きも呼びかけも彼の耳には届かないようだった。

こうして目を閉じていると、月の光で浮かび上がる淡い金髪と、白い綺麗な肌は人形のように見える。

端正な顔なのに、冷たく見えて、いつもの藍色の皮肉げな瞳が見られないことに、自分でも戸惑うほどの痛みを感じた。

「エシュタンド、しっかりして！ 起きて、あたしを見てよ……」

そう言った瞬間、また遠く響いてきた鳥の鳴き声に、空は身を震わせる。

ぼんやりと月が照らし出すのは、暗い森。

どこの森なのかもわからないが、どうやら先ほどとは違う森の外れに出たようだった。

森を抜けた草原のようなところに空たちは倒れていたようだが、暗くてよくは見えなかった。

夜露に濡れた草の上に座り込んでいた空は、急に吹いてきた風に身を縮めた。

横たわるエシュタンドに目を移して、気づいた。

先ほどまでは、彼がしっかりと守ってくれていたから寒く感じなかったのだと。

考えてみると、王宮の外で夜を過ごすのも初めてだった。

見知らぬ世界で、見知らぬ国で、それでも恐ろしいとは思わなかったのは、彼がいてくれたおかげだということに、今更ながら気づくと同時に困惑する。

どうして、自分はここまで彼を頼りきっているんだろう。

安心しきって、彼の腕の中にいられるんだろう。

そして、なぜ、こんなに彼を心配しているんだろう。

まだ意識を取り戻しそうにもないエシュタンドを見ながら、彼の服を握り締める。

一国の王子だというのに、こんなただの、出会って間もない娘のために、心配して、一昼夜捜し回って、助けに来て、そして見つけてくれた。

こんな状態になってまで、自分を守ってくれた。

森で再び会えた時の、彼の切なげな囁きが耳の奥で蘇る。

無事でよかったと、言葉だけでなく全身で告げながら、空を抱きしめたエシュタンド。

藍色の瞳で自分を見つめ、名前を呼んだ時の彼の姿が、目を閉じると鮮やかに浮かんでくる。

自分の存在を確かめるように、きつく抱いたエシュタンドの体温までも思い出し、胸の奥が熱くなる。

あの射止めるような藍色の眼差しは、今は見えない。

どうしよう、このまま目を覚まさなかったら。

ふと浮かんだ考えに急に体が絞られるような恐怖を覚えた。

「エシュタンド、いやだよ……お願いだから、気がついて」

夜の冷気にこぼれていく空の呟きは、取り残された子供のようにおぼつかないものだった。

ここはどこなのか、一体どうなってしまっのか、夜の森で怖いのはそんなことよりも、エシュタンドの安否であるなんて。

自分の心を占める彼の存在がここまで大きくなっていったことに、否応なしに気づかされる。

それでも、その理由なんて今は考えられなかった。

エシユタンドの力を失った手を握って、彼の名を呼ぶ。

「エシユタンド、しっかりして。ねえ……」

答えの返ってこない静けさに、耐えられずに涙が落ちた。

重く押し掛かるような闇に、突如動物の遠吠えが響く。

そういえば、さつき魔のモノがいるとか、森の精が言っていた。

こんな状態で襲われてはひとたまりもない。どうしたらいいのかわからなくなつて、空はエシユタンドの胸にしがみついた。

「お願い、起きて……いやだよ、エシユタンド！」

ついに破裂しそうになつた不安と恐怖の入り混じつた空の叫びは、暗い草原に吸い込まれて消えていくようだった。

空の顔が涙に歪んだ、その瞬間だった。

「大丈夫、彼は目を覚ましますよ」

済んだ、やわらかな声が、後ろからかけられたのだ。

振り返つた空の前に佇んでいたのは、月の光がそのまま形を成したように美しい女性だった。

限りなく白に近い銀系のような髪は、足元まで、まっすぐに流れていて、彼女の細身の体を包んでいる。

その体に纏うのは、胸の下を紐で結んだ、銀の長い衣装。

驚く空を安心させるように、薄い紫の瞳に笑みをたたえて、彼女は続けた。

「気を失っているだけです。しばらくしたら気がつくから、安心なさい」

そして、体重を感じさせない、軽い足取りで、ゆっくりとエシユタンドに歩み寄る。

かがんでエシユタンドの体にそつと触れた後、彼女は呟いた。

「やはり、彼らの力によるものね。何かを感じたから来てみたけれど ついに接触したというわけね」

空に向けてというよりも、独り言のように確認した後、立ち上が

った美しい姿をぼんやりと見ていた空は、我に返ったように口を開く。

「あ、あの……」

空の声に、彼女は自分の考えに入っていたような顔を上げた。

「本当に、大丈夫なんですか？ あの、どうして、そんなことが……」

一目見ただけでわかるのか、と問いかけようとした空の瞳を読み取ったように、微笑む。

「彼の生命の光は、まだ消えていないからよ。それどころか、しっかりと燃えているのが見えるわ」

「生命の、光……？」

言われたことがとっさに理解できず、空はただ問い返した。

そんな空に、彼女はああ、と思いついたように言った。

「ごめんなさいね。まだ自己紹介してなかったわね」

美しい紫色の瞳を、少女のように細めて、彼女は優雅なお辞儀をしてみせた。

「私はディーラ。このセルスの森にある、東の聖殿の巫女です」

嫣然とした微笑とその言葉に、空はただ開いた口もそのままに見つめ返すことしかできなかった。

ここがまさに、自分たちが目指していた聖殿の土地だったなんて、予想もしていなかったのだ。

そして、この美しい女性が聖殿の巫女であろうとは。

ミディアスで一番初めにできた、由緒正しい聖殿だと聞いていて、てっきり巫女もある程度年をとった、威厳ある女性なのだろうと空は想像していた。

それがこんなに若くて綺麗な女性だったことに、純粹に驚くばかりだった。

巫女というよりも、まるで月の女神が降り立ったかのようだ、改めて月光が溶け出したような銀の髪を見つめていた空に、ディー

ラは苦笑する。

「そんなに驚かせてしまったかしら」

その言葉にあわてて開いたままだった口を閉じた。

自分が間抜けな表情をしていたことが恥ずかしくなり、空は小さく首を振って下を向いた。

「私からしたら、あなたのほうがよっぽど不思議よ。異世界からやってきたお姫さま」

冗談めかしてそう言うディーラに、一瞬驚きかけた空の表情がゆるむ。

ああ、そうだ。もう私たちが訪れることは聞いていたんだ。きつと王宮からの知らせで自分のことも知っていたのだろう。

そうは思うものの、自分のほうが異世界からやってきたことが、不思議な気がする。

あくまで空は普通で、空以外の全ての人が、世界が、不思議であるのに、こちらでは自分が異邦人なのだ。

空の少しの混乱は、更け行く夜の闇に妨げられた。

段々と冷え込んでいく空気に、体を震わせた空がエシュタンドを氣遣うのと、ディーラが言葉を発するのが同時だった。

「森の夜は冷えるわ。さあ、続きは聖殿で話しましょう」

言って、横たわったままのエシュタンドに紫の瞳を向ける。

「彼もこのままにしておくわけにはいかないしね」

「あの、でも、どうやって……」

女性二人で彼を担ぎ上げるのも大変だろうと、問いかけようとした空の背に優しく手を置いて、ディーラは微笑んだ。

何の心配もいらないと、安心させるようなその笑顔に空が口をつぐんだ、その時。

背後の闇に目をやったディーラが、銀の髪を静かにかきあげて、言った。

「そろそろ顔を見せても大丈夫よ、エーネ」

彼女が見つめる暗い空間に、ふわりと淡い銀色の光が浮かんだ。

何かと思う暇もなく、突如目の前に現れたのは、彼女の背丈ほどもある、白銀の獣だった。

それを目にした空の瞳は大きく見開かれる。

馬？　じゃ、ない……これは、映画なんかで見る、あの……。

そう、優しい銀の光をまとったその生き物は、物語などに出てくる一角獣によく似ていた。

銀の絹糸のような毛並みから、優しい月光に似た光を放ち、額の中央からは角が突き出ている。

ただよく目にするようなねじれた角ではなく、まるで、三日月のような湾曲した形の、青白く、細いものだった。

息を呑んだ空を見返してくる獣の瞳は、穏やかで、ディーラと同じ薄い紫色をしていた。

少し鼻を鳴らしながら、まるで甘えるようにディーラの体に身を寄せる。

そんな獣を愛しそうに撫でてから、ディーラは笑った。

「また驚かせてしまったようね。この子はエーネ、聖殿を守る聖獣よ」

巫女に、聖獣と、次々に現れる驚くべき存在に、空はそれ以上どうすることもできず、ただ頷いた。

十分すぎるほどの不思議な出来事に遭遇して、空はもう頭で考えることは放棄せざるを得なかったのだ。

見守る空の前で、エーネと呼ばれた聖獣は、そつとディーラに促され、横たわるエシユタンドに鼻先を近づける。

そしていつの間にかエシユタンドをその背に乗せてしまった。触れもせず、首を傾けただけで、自然とエシユタンドの体を操ったかのように見えたが、一瞬だったので、空にもよくわからなかった。

「エーネも一人しか運べないから、私たちは歩いて聖殿へ行きましょう。大丈夫、すぐに着くわ」

ディーラに優しく背を押され、空も歩き出す。

数歩先をゆつくりと進むイーネの背には、銀のたてがみに顔を埋めたエシユタンドが乗せられている。

歩みに合わせてぐったりとした体が上下するのを見つめながら、空は眉を寄せて、唇を結んだ。

エシユタンド、すぐに目を覚ますよね。きっとこの人たちが助けてくれるよね。

お願いだから、早く目を開けて。

空の願いは、天上の青白い月に向けられる。

あの深い藍色の瞳で、いつもものように彼が笑ってくれたなら。

この足元からゆつくりと襲ってくるような不安は、きつとどこかへ消し飛んでしまふに違いないのに。

色々なことが起こりすぎて麻痺してしまいそうな頭も、倒れそうなこの体も、受け止めてくれるだろうに。

いつの間にかそれを期待している自分の身を両手で支えながら、空はただ前へと足を踏み出す。

脳裏を、遠く深い森の香りがかすめたような気がした。

### 33・聖殿（後書き）

少しずつストーリーに動きが出てきたかと思うのですが、いかがでしょうか。

またどんなご感想、ご批評でも結構ですので、お寄せいただくと嬉しいです。



### 34・序奏

豪華で美しい建物、そんな空のイメージを裏切るように、静かに聖殿は立っていた。

あくまで装飾はおさえられたような、簡素な造り。

アーチ型で繋がれた丸い柱が並び、長方形の石を並べ、築かれた四角い建物。

何の模様も刻まれておらず、彫刻などもない。

唯一目立つのは、中央の柱のアーチ部分に刻まれた、印のようなもの。

そう、それはエーネの持つ、三日月のような角を模って彫りこまれたように見える。

聖獣の角は、何か聖なるものの象徴なのだろうか。

それが聖殿の印にでもなったのだろうか。

聖殿を形作る滑らかな灰色の石は、月に照らされて、ほのかな光沢を放っていた。

その静かな印象が、逆に目の前の建物にどこか神々しい印象を与えているようだった。

デイーラと空たちが聖殿前の石畳に立った瞬間、中から女性が数人迎えに現れた。

「デイーラ様、おかえりなさいませ」

並んだ女性たちは、デイーラと同じような衣装を着ていたが、その生地は灰色で、髪もそれぞれ異なった色だった。

デイーラと比べると格段に地味ではあるが、それでもどこか彼女に似た雰囲気を感じられる。

やはり彼女たちも巫女なのだろうか。

そばに佇む空の存在に驚きもせず、女性たちはその場で静かに頭を垂れた。

彼女たちに軽く頷いて、歩み寄ったディーラが何事かを指示すると、すぐさま数人が動き、エシユタンドを載せたエーネを、聖殿の中へ連れて行った。

その行き先を心配そうに見つめる空に、ディーラが微笑んだ。

「大丈夫よ、先に休める部屋を手配させただけです。あなたはこちらに」

ディーラと空は、並んだ女性たちの間を通り、聖殿の中央にある大きな扉をくぐった。

聖殿の明るい空間へと足を進めながら、空は入る前に感じた違和感のようなものが解けるのを感じていた。

そうだ、静か過ぎるような気がしたのは、王宮と違っていたからだ。

どこを通る時も存在した守護兵が、ここには一人もないことだった。

巫女たちの他には、誰もいないように見える。

それだけこの地が安全だということなのか。それとも聖殿は何かの力で守られているのだろうか。

見上げた先の三日月形の印に、先ほどまで共にいた聖獣のことを思い出す。

あの穏やかそうな美しい生き物が、この地を守っているのだろうか。

そんなことを考えていた空の後ろで扉は閉まり、広い回廊を案内されていく。

辿り着いた先は、ひときわ大きな扉だった。

中は広い空間で、目の前に大きな台座が一つ。壁にはたくさんの蠟燭が並び、幻想的な光を灰色の壁に反射させている。

揺れる蠟燭の灯りが照らすのは、台座に面して位置する椅子の列だった。その様子からして、空も見たことのある教会の中を思わせる。

ただ違うのは、その台座の向こう側の壁にも、どこにも、何か宗教的シンボルや神の像のようなものが見当たらないことだった。

簡素な台座にわずかに彩りを添えるのは、花瓶に飾られた色とりどりの花々や季節の果実らしきものが載った籠ぐらいのものである。それを見渡して不思議そうな顔をしている空に、ディーラは椅子の一つを勧めた。

ディーラと空を残して、巫女たちは下がってしまい、扉の閉められた空間は一段と静かに感じた。

「さて、何か色々聞きたそうな顔をしているわね」

空の表情を見て、可笑しそうにディーラが言った。

恥ずかしそうにディーラに視線を戻した空は、あることに気づいた。

先ほど外では銀色に見えたディーラの髪が、聖殿の中ではほとんど白に見えたのだ。

あれ？ 確かにさつきは銀色だったのに……。

そんな空の考えは、表情に出ていたのか、視線を読み取ったのか、ディーラが自分の髪を手を取った。

「ああ、これね。普段はこんな色なのだけれど、月光の下に行くと銀色に近く見えるのよ。おかげでというべきか、私の別名は月の巫女、だそうよ」

まあそんなこと巫女の役目とは何の関係もないんだけどね、と付け加えて笑うディーラにつられて、空も少しだけ表情を和ませた。

「そうね、まず何も知らないあなたのために、この聖殿について説明でもしましょうか」

優しく微笑む薄紫の瞳に、空も頷く。蠟燭の淡い明るさも手伝ってか、部屋の空気も穏やかで落ち着いていた。

「ここ東の聖殿だけでなく、聖殿というものは、ミディアスの神々を敬い、祈りを捧げ、このミディアスの大地の安寧を保つために建てられました。

現在では、エスタリア大陸を作ったといわれるエス神信仰が主だけれど、聖殿では古き時代からの教えを守り、エス神だけではなく、ミディアスの地に宿る幾多の神々　言い換えると、精霊たちにも祈りを捧げているの。そのための特別な力を持った女性たちがミディアス全土から集められ、教育を受け、そして巫女として選ばれた女性たちのみがこの聖殿で暮らしています。その巫女たちを統括しているのが、一応この私で、巫女の長という役割を与えられているわ。長は、聖殿自体を守り、導いていく役目も果たしています」

そこまですらすらと喋って、ディーラが空に質問を許すように一息おいてくれた。

そういえば、あのリゴトという老教師も似たようなことを言っていた気がするが、やはり現実目にして本人から聞くのでは頭への入り方が違った。

言われたことを整理しつつも、空が口を開く。

「あの……ここには神の像みたいなものはないんですか？」

質素すぎる台座を目で示して問う空に、ディーラが不思議そうに目を瞬いた。

「神の像？　そんなものをどうやって作るの？　誰もエス神の姿など目にしたこともないし、第一、神や精霊とは本来精神的存在でしょう。」

それを像にすることなど不可能だし、そんな必要はあるのかしら「そう言われてみると、確かにそうだなと空は思った。

けれど自分のいた世界では宗教だとキリスト教にしる、仏教にしる、何かしら神の像などがあつたし、それを奉って祈るのが当然のような気がしていたのだった。

あ、でも神社とかには神の像なんかなかった気がする。

他にも、偶像崇拜禁止とか、何とか宗教の授業で聞いた言葉も思い浮かぶが、熱心に聞いてもいかなかった空にはそれ以上の知識はなかった。

思い悩んでいる空を見つめていたディーラが、少し微笑む。

「私たちが祈りを捧げるのは、このミディアスの地に存在する全ての神々なの。だから、ミディアスの森や、川や、大地、花々、全てのものが神からの恵みなのよ。」

その恵みに感謝しながら、祈るだけ。それに何かの像などは必要ない、それだけよ」

まあ、自然や生き物、食べ物、全てに感謝するってそういうことと思えばいいのか。

そう思ってしまうえば、簡単であり、その考え方のほうが好きだと空は納得する。

それで、台座の上に花々や果物が捧げられてあるのだろうか。

空が少し納得したことを理解したのか、ディーラは立ち上がって、飾られた色とりどりの花の匂いを嗅ぎながら、言った。

「こういう基本的な感謝や信仰を忘れつつある人々も多いのだけれどね。それで、精霊たちは憂いているのね」

少し哀しげな色を浮かべた紫色の瞳で見つめられ、空は思わず立ち上がる。

「あ、あなたもご存知なのですか？ 森が滅びつつあるって……！」  
胸に突き刺さったままの緑の記憶に押されるように、手を握り締める。

そんな空に、ディーラは視線をわずかに遠くへやりながら、答えた。

「もう随分前から、綻びはじめていたわ。それが色濃くなってきたのは最近のこと。この聖殿から出ることのない私の耳にまで、精霊の嘆きが聞こえるようになってきたの。」

それまでも、エーネの心を通して伝わってきていたけれど」

言われた内容を頭で噛み砕こうとしていた空に微笑んで、ディーラが済んだ声を紡ぐ。

「エーネのような聖獣の心には、このミディアスの地に住まう精霊たちの声が届くらしいの。あの子と契約を交わした私の耳にも、それ

は少し聞こえてくるわ。

森の精霊と接触したなら、聞いたでしょう、彼らの口から。あなたたちの体に残った彼らの香りから、大体の記憶は伝わってくるけれど」

「巫女や聖獣の不思議な力の片鱗が、彼女の語る言葉から伝わってくる。」

「先ほどエシユタンドの無事を体に触れただけで読み取ってしまったディーラ。」

とにかく空の想像を超えた力を色々と持っているのだろう。

そうは思いつつも、自然と口が開くのを止められなかった。

「あなたたちも、やはり受け入れるしかないと……そう思ってたんですか？ 森が滅んでいくのを、人が曲がっていくのを知っていて、止めようとは思わなかったんですか？」

空の疑問に、ディーラは伏せていた瞳を上げた。

「だって、そんなの寂しすぎる。そんなの、悲しすぎるじゃないですか！」

脳裏によぎったのは、眠る緑の髪の女性。

あの悲しげな、それでいて透明な彼女の表情は、空の胸にまるで小さな針を刺されたかのように残り、少しずつ痛みを伝えてくるようだった。

滅んでいくとわかっていながら、あきらめている青年。それでもあきらめきれずに嘆く、少女。受け入れたまま、秘めたまま、眠りについた女性。

彼らの思いがあまりにも重く空に迫っているような気がしたから、口にせずにはいられなかったのだ。

しばらくの沈黙を破って、響いたのはディーラの少し明るい声だった。

「そんなあなたになら、救えるのかもしれないわね」

「……え？」

銀の衣装を揺らしながら、空に近づいてくるディーラの表情は優しかった。

「私たち巫女も、精霊と同じで、与えられたものを受け入れて生きていくだけ。それしか許されてはいないし、事実抗うことを許されたとしても、人々の心を動かすことは難しいの。」

第一、そんなことを信じてくれる人たちは、今のミディアスには少ないから」

そんな、という顔をした空の頬に静かに片手を添えて、ディーラは笑う。

「けれど、そうやって純粹に怒ってくれるあなたになら、何かができるかもしれない。心を痛めてくれるあなたになら、この流れを止めることができるのかも。彼らも、そう思ったから、あなたたちに託したのね」

そのディーラの言葉に空が反応するより先に、扉がそつと開き、巫女の一人が入ってきた。

ディーラのほうへ、古びた木箱を差し出して、巫女は何事かを告げた後、すぐに下がっていく。

木箱の蓋を開け、中身を確認したディーラが、空のほうへ向き直った。

「彼の衣装の胸元から見つかったと聞いて、用意させたものよ」

ご覧なさい、そう穏やかに空の手にディーラが差し出したもの、それはあの想緑珠だった。

そうだ、あの森から飛ばされてから、いつの間にか手放してしまっただ。

それがどうしてエシユタンドの衣装に二つともあったのかわからないが、ともかく無事に、二対の宝玉が木箱の中に並んで収められていた。

「あの、これは？」

木箱の中にあつたのは、想緑珠だけではなかつた。  
金と銀の、二つの腕輪らしきものが、緑の石に並んで置かれてい  
る。

どちらにも刻まれている模様は、何か植物の蔓や葉、花などをレ  
リーフにしたようなものだった。

そして二つとも、真ん中にくぼんだ穴のような部分がある。まる  
でそこにはめるべきものがあるかのように。

蠟燭の淡い光に照らされて引き立つ緑の石と、金属の腕輪を交互  
に見比べていた空がしばらくして顔を上げると、ディーラが確信の  
こもった笑顔で頷いてみせる。

「その腕輪はね、代々ここ東の聖殿で守ってきたものなの。宝玉を  
受け止めるための器として、あるいは媒介として、作られたものだ  
と伝え聞いているわ。」

金のほうが王の腕輪、銀のほうが妃の腕輪と呼ばれていて、宝玉  
のみならず、腕輪にも不思議な力が宿っているそうよ。

それを手にしたものは、いまだかつていない。だからそれがどん  
な力なのかは、私にもわからないわ」

その言葉に、木箱を持つ空の手が、思わず震えた。

足元から、底知れぬ冷たさとも寒さともいえぬ感覚が立ち上って  
くる。

「その石の持ち主となるべき二人によってでない、石は腕輪に宿  
らない。つまり、その石をはめることができるかどうかで、あなた  
たち二人の真価が問われるということ」

「真、価？」

ようやく口にした問いに、ディーラはあくまで静かな微笑を浮か  
べる。

「そう、あなたが本当にこの世界を救うべく遣わされた、暁の娘な  
のかどうかもね」

穏やかな口調でありながらも、その凜とした響きは、紛れもない



眞実のみを伝えていた。

驚愕とも、不安とも、何ともいえない表情が、空の顔を覆う。開きかけた口は、どんな言葉も選ぶことができずに、再び閉じられた。

頭の中を、あの舞い上がる木の葉の香りと、鮮やかな木々の緑が埋め尽くしていく気がする。

思わずくらりとした空の体を、ディーラの細い腕がしっかりと支えた。

「一度に多くのことを伝えすぎたわね　ごめんなさい、あなたには休養が必要だわ」

優しいディーラの声に、なんとか倒れそうな意識と体をつなぎとめて、空は頷いた。

今日はゆっくりと休みなさい、全てはそれから　そう、ディーラが告げた途端、空の体に眠気が襲ってきた。

やわらかな何かにいざなわれるように、空の意識は遠のいていく。ふわりと受け止められた先に、あの優しい、聖獣の瞳が見えた気がした。

「抗おうとする心が、私の中にもあるのかもしれないわね。だからこそ、あなたに救いの光を求めるのだわ　『希望』という名の娘、ソラ……」

ディーラがどこか自嘲気味に呟くのを聞いたような、幻に似た銀の光を見たような、不思議な残像は、空の中で曖昧にぼやけていくのだった。

思い出すのは、いつも唇を噛み締めていた自分だった。愛された記憶など、どこにもない。

形だけは丁寧に扱われても、何かの折に感じる視線や態度の隙間に見え隠れするのは、明らかかな侮蔑だった。

なぜそんな態度を取られるのか、なぜ見下されなければならないのか。

唯一彼にできるのは、そんな憤りや悲しみを、誰にも見せないようにすることのみだった。

心を閉ざして、何者にも踏み込ませず、強く引き結んだ唇からは言葉を発さず、瞳に何も映らぬよう、全てを拒絶する。

それが幼い彼が身につけた自分を守る方法だった。

だが、そんな彼の態度は、周りの者を更に遠ざけることとなった。可愛げがない、何を考えているのかわからない、そんな陰口を耳にしたこともあった。

不気味だと、恐れられる自分の瞳が、彼は嫌いだった。

父でさえ、まっすぐに見ようとしない自分の藍色の瞳は、それほど忌み嫌われるべきものなのだろうと、そんな風に思っていた。

あの肖像画を見つけるまでは。

脳裏に浮かんだ懐かしい残像を追いかけようと開かれた瞳は、一瞬探すべきものを失ったかのように、瞬かれた。

辺りに広がるのは闇。窓から差し込む青白い月の光だけが、ぼんやりと部屋の中を照らしていた。

ここは……。

重い頭に片手をやって、エシユタンドは起き上がった。

そして、きしむ寝台の、自分の隣に見つけたものに、藍色の瞳は一瞬見開かれ、そして穏やかな光を浮かべた。

「ソラ」

呟いた自分の声が、夜の空気に溶けていく。

名を呼ばれても、ぴくりとも動かず寝入っている少女。

顔にかかる黒髪の毛先を、優しく梳いて、エシユタンドは薄く微笑んだ。

まるでこの穏やかな闇のような色だと、彼は思う。初めて目にした時には驚いたが、今では彼のお気に入りの色となっていた。

同じ色の瞳は、今はしっかりと閉じられ、少し疲労を宿した顔で、規則正しい寝息を立てている。

ゆっくりと触れている自分の手の感触にも、彼女の眠りは妨げられていないようだった。

本当に帰ってきたのだ、そう思った途端、胸の奥があたたまるのを感じた。

再び自分の手に取り戻すと誓った時のあの焦りと怒り。

あんな思いは初めてだった。

この少女に出会ってから、自分の中の感情に戸惑うことばかりだ。いつの間にか変わっていく、自分自身が一番不思議だった。

思考に埋もれかけていたエシユタンドの耳に、空の小さな吐息が聞こえた。

そつと触れていたつもりが、いつの間にか力が入ってしまったらしい。

白い滑らかな頬を撫でていた指を、あわてて引っ込めたが、もう遅かった。

「……ん」

軽く身じろぎをした空の臉が開いて、寝台に腰掛けていた彼のほうをぼんやりと見上げた。

月明かりに目が慣れたのか、そのまま自分の名を紡ぐ。

「エシユタンド、起きたんだ」

そう呟きながら目をこすり、空は思い出したように表情を引き締めた。

「もう大丈夫なの？ どこか、痛むとことか」

心配そうに早口で訊ねる空に、エシユタンドは微笑んだ。

「大丈夫だ。私は、気を失っていたのか？」

本当は少し頭が鈍く痛んでいたけれど、それを隠して立ち上がる。段々とはつきりしていく意識は、自分の中の感覚も呼びおこしていった。

「ここは……聖殿か」

冷静に現状を言い当ててみせたエシユタンドの言葉に、空は驚いたように身を起こす。

「そう、どうしてわかったの？」

大きな瞳で自分を見つめる少女に、彼はこともなさに笑ってみせた。

「これほど澄んだ気配と空気は他にない。どうやらあの精霊は約束は守ったらしいな」

安全なところに出られるようにしておく、あの男は言った。

あるいは我々の目的地など、お見通しだったのだろうか。

とにかく思いのほか早くこの地へ辿り着けたことは幸運だったのかもしれないと、エシユタンドは無意識に一息ついた。

しばらく聖殿の清浄な気を胸に吸い込んでいるうちに、頭痛もましになっていくようだった。

思考に入り込んでいたエシユタンドのそばに、いつの間にか空が腰掛けていた。

振り向いた彼の隣で、少しうつむいたまま、寝台の掛け布をいじっている。

「みんなに、心配かけちゃったね」

言って、小さくため息をつく空の表情には、複雑な感情が秘められているように見えた。

素直で無垢だった彼女の瞳に影を落としているものの存在を、エシユタンドも思い起こす。

あの深緑の濃い森で出会ったものは、彼の心の奥に沈んでいた記憶をも引きずり出していた。

鮮やかに蘇ってくる懐かしさと痛みに少し眉を寄せた後、エシユタンドは空の肩を引き寄せた。

「お前のせいではない。何も気に病むな」

触れ合う肩が少し緊張したのがわかって、更にきつく抱き寄せる。藍色の瞳に、何か楽しい光がきらめく。

「エ、エシユタンド」

たちまちこぼれる戸惑いの声に、笑いをこらえつつも、エシユタンドはささやいた。

「自ら私の隣にやってきたのだから、これぐらい承知の上かと思っただが」

二つ並べられた寝台を見て何となく想像はついたが、思わずいじめたくなるほど、少女の反応は幼かった。

真っ赤な頬で抵抗しながら、抗議の目を向けてくる。

「ちっ、ちが……あたしはただ、心配でっ」

「心配？」

間近にせまった純真な瞳を覗き込みながら、問い返す。

彼の視線から逃げるように下を向いた空は、少し迷った後、消え入りそうな声で呟いた。

「あなたがこのまま目を覚まさなかったら、どうしようって……不安で、ただ隣で確かめていたかったの。ちゃんと息してるか、あなたの体温を感じてたかった」

その言葉にエシユタンドの笑顔が消えた。

それに気づかぬように空は戸惑いがちな独白を続ける。

「そうやって待ってるうちに、いつの間にか寝ちゃった、みたい。だから決して、変な気持ちとかじゃ」

彼の問いに対する律儀な言い訳のつもりなのか、あせった様子で顔を上げた空を、エシユタンドは黙って抱きしめた。

小さな悲鳴に似た声がもれるのも気にせず、やわらかな体を抱く腕に力を込める。

なぜそうしたのか、彼にもわからなかった。

ただ目の前の少女が急に愛しくてたまらなくなつて、抱き寄せずにはいられなかったのだ。

自分のうちからわきあがってくる衝動に身を任せて、赤い頬に手を当てる。

「不安なら、私も感じていた」

唐突にそう言った自分に、自分で驚く。問うように見上げてくる空の瞳に、思わず言ってしまったのだ。

「お前がいなくなつて、捜し回りながら　不安と焦燥でどうしようもないほどだった。お前の瞳を、純粋な微笑みを、自分でも驚くほどに欲していた」

湧き上がってくるようなエシユタンドの言葉に、空は耳を奪われたように動かなかつた。

その頬を、髪を、そつと撫でる彼の仕草に、何かを思い出したように瞳を逸らす。

「ソラ」

引きとめようと呼んだ名前に、彼女はどこか苦しげな表情を浮かべた。

その苦しみが何なのか、あえて考えずにもう一度愛しい名を呼ぶ。「これほどまでに誰かに心を奪われたことは、今までなかった。自分の心に、こんな熱があったことに、私自身、驚いている。

初めてお前に口付けた時、頭にあつたのは別の思いだった。お前に説明した王宮の者と私も所詮は同じ、計算とただの私益で動いていた。

女など、私にとって大した価値はなく、どこにでもありふれた、

くだらないものだと思っていた」

エシユタンドの低い声に、空が驚いたような顔を向けた。

その瞳に浮かぶものを見るのが嫌で、顔をそむける。

自分の膿を吐き出すように、それでも言わずにいられなかった。

「……どうせそのうち自分の意思に関係なく押し付けられるものなら、自ら選んでやろうと思っただけだった。

それも、一番意外で、王宮の利益などに関わりのない、汚れていない女を。

そうすることで、証明できると思ったんだ。王座を手に入れるのに、余計なものなど必要ないと　この私の力だけで、成し遂げるのだと。

そして何もかもをこの手に収めた時、私を　母上をないがしろにしたやつらを屈服させてやるんだとな」

瞳の奥がつんとする。苦い何かを噛み締めたかのように、心が疼いた。

この気持ちは何なのか、エシユタンドは空の表情を目にしてから思い知らされる気がしていた。

悲しい、静かな瞳で自分を見上げている。

その痛そうな、少し潤んだ黒い双眸に、エシユタンドは乾いた笑いをもらった。

「私を、軽蔑したか？　利用されたと怒るか？」

自分はこの少女に何を求めているのだろう。

わからぬままにあふれてくる気持ちを、エシユタンドはもてあましながらも、言葉を吐いた。

「お前に言ったことは嘘ではない。だが、適当に惹かれるままに、軽い気持ちでお前を手に入れようとした。

そんな私を、信じろというのは難しいだろう。それでも……」

そこまでを、つきあげてくる心の闇に押されるように言葉にしてから、エシユタンドは苦しげな息を吐いた。

そのまま青白く、静かに光る月を見上げる。

遠く、浮かんだ月は、二人を包むでもなく、突き放すでもなく、ただ傍観しているような気がした。

空の息遣いが聞こえる。

それほど近くにお互いの体を感じながら、相手の心が何を感じているのかがわからないことが怖かった。

けれど、伝えないわけにはいかない。

彼女を失ったかと恐れた時、自分の中に芽生えている気持ちに気づいてしまったのだから。

それは自分の、本心。

ずっと封印してきた、生身の感情。

そのあまりの熱に、今まで作り上げてきた自分の中の壁を溶かされていく。

エシユタンドは何かを覚悟するかのように瞳を閉じて、そして空の頭を胸に引き寄せた。

「私は、お前に惹かれている。後戻りできないほどに　これが、今の私の正直な気持ちだ」

一つ一つ、噛み砕くように、想いを口にのせた。

空の肩が、びくりと震えたのがわかった。

離れようとする体を、逃がさぬように強く抱いた。

「もう一度言う。私の、そばにいてくれないか、このまま、ずっと」

射抜くように覗き込んだ先の瞳は、怯えたような色を浮かべていた。

その複雑な色をも溶かすほどに、エシユタンドは強く見つめた。

「あの時……お前が帰りたいと泣いた、あの時、なぜ心が痛んだお前が泣くのは見たくなかった。それで元の世界への帰り方を探すと言ったお前の強い笑顔に、協力を約束した。

だが　私にはお前を帰すことなどできそうもない。初めて心惹かれた娘を、みすみすと失うことなど許せるはずもない！」

体の内から崩れそうなほどに、自分の欲望に支配されていく。



いつもの冷静さなど、どこかへ流されていくほどの熱だった。

「ソラ……」

想いを載せた囁きを耳元に送りながら、エシユタンドは目の前の頬を両手で包み込んだ。

藍色の瞳を少し伏せて、もう少しで薄く開いた唇に自分のそれが重なる、その瞬間だった。

「……だめっ」

自分の腕にゆだねかけた体を、空がいきなり引き剥がしたのだ。両手をつっぱねて、エシユタンドの胸を押す。

突然の、それでも明確な拒絶の意思に、熱く高まっていた感情の波が瞬時に凍った気がした。

「ソラ　？」

うつむいた顔は、苦しそうに歪められていた。

行き場を失ったエシユタンドの両腕は、少しためらった後、ゆっくりと下ろされていく。

「だ、だめだよ　あたし、あたしは……」

少し震えた声が滑らかな石の床に零れ落ちていくようだった。

何を言おうとこのか、自分でもわからないのか、空の顔に混乱と苦痛が入り混じったような表情が浮かんでいる。

差し伸べようとしたエシユタンドの手は、体を縮めた空によって振り払われた。

顔を上げた空が、自分の行動に驚いたような顔をする。

エシユタンドの口は、何か言いかけて、固まった。

「あ、あたし……ごめんなさい！」

「ソラ！」

身を翻した少女は、名を呼ばれても振り返らず、そのまま扉を開けて、部屋を飛び出していった。

硬い床を走っていく空の足音だけがこだまする。

後に残されたエシユタンドは、彼女が消えた扉に手を付き、深く

ため息をついた。

高ぶっていた心は冷えていき、襲ってくる自責の念に、唇を噛む。  
一人佇む静かな部屋からは、少しずつ薄闇が消えていき、今まで横たわっていた夜は、訪れた朝日によって跡形もなく追いやられていくのだった。

### 36・ラウレカ

無我夢中で走って、走って、気がついた時には一つの扉の前にいた。

夜明けの光が差し込める回廊の突き当たりにある、古びた扉。

頭の中はまだ混乱が満ちていて、逃げ場を求めるように、空はその扉に吸い寄せられていった。

何の飾りもない木製の扉は、近づいた空をまるで誘うように、わずかに開いていた。

何も考えぬままに触れた扉は、ゆっくりと開いていき、その中に広がる空間を見せた。

扉の向こうには、地下へと続く階段があり、その暗い空間に、ほんのりとした灯りがもれてきている。

一歩足を進めると、灯りと共に何かの香が焚かれるような匂いが立ち上っていることに気がついた。

荒い呼吸を落ち着かせてくれるような、どこことなく懐かしさを感じさせてくれるような、やわらかい香り。

段々と濃くなるその香りにいざなわれながら、空は階段を下りていった。

狭く、小さな階段を下りた先は、蝋燭のあたたかな光に照らされた空間があった。

両側の壁には、乾燥させた花々や、干した果物がつるされ、何かの薬草らしき束が壁に沿って置かれている。

奥の壁に並んだ燭台に立てられた、青い蝋燭から、その優しい香のような匂いは漂ってきているようだった。

そして見上げた先の壁に見つけたものに、空の瞳は瞬かれた。

「美しいでしょう？」

突然響いた聞き覚えのある声に、空は弾かれたように振り返った。艶やかに微笑を返したのは、今は銀に見えぬ白い髪を一つにまとめた、デイーラだった。

「あ、あの……」

咄嗟に何を言ったらいいのかわからず、空が口ごもる。

その表情だけで全てをお見通しのように、彼女は笑みを深くした。「いいのよ、謝らなくても。なんとなくあなたが来るような気がしていたの」

巫女というのは、何でもわかってしまうのだろうか。空が戸惑いと不思議な安堵のような感覚に包まれている間に、デイーラは手にしていた花の束を手際よく壁に吊るしていく。摘みたての、朝露のついた黄色の小花が、壁の花々の横に並ぶのを、空はぼんやりと眺めながら、気づいた。端から少しずつ、その乾燥の度合いが違ってくることに。

空の視線に、気づいたようにデイーラが振り返った。

「気が向いた時に、摘んでくるの。あの子のことを想いたくなった時にね」

手に残った朝露を拭き取りながら、デイーラが仰いだのは、空が先ほど目を奪われたもの。大切そうに飾られた、肖像画だった。

「この人は」

言いながらも、その肖像画の人物が誰なのか、空の胸に浮かぶ答えがあった。

「だって、この瞳は……」。

空の答えを見透かしたように、デイーラは頷いた。

「そう、藍の王子、エシュタンドの母親よ」

デイーラがいうとおり、肖像画の中に描かれた瞳は、印象深い、あの藍色の輝きをしていた。

白く滑らかな肌、繊細な顔立ち、冷たいほどの美貌、その全てがエシュタンドと同じものだった。

ただ違うのは、その淡い金色の髪が、まっすぐに背中の中ほどま

で流れていること。

そして、身にまとうのが、胸の下を紐で結んだ、あの巫女の衣装。  
「彼女はね、この東の聖殿で巫女をしていたの。あれは、私が巫女に選ばれて、この聖殿へ配属されたばかりの頃よ。」

孤児として当時の巫女長に拾われてきた少女がいたの。それが彼女、ラウレカよ。親に捨てられ、あちこちの家を転々として過ごした彼女が、偶然長に出会った。

その時、長にはわかったのね、彼女が聖なる力にあふれていたことを。その時から、ラウレカは私と一緒に毎日を祈りと修練に捧げて過ごしていたわ。ともすれば、私などよりも巫女長にふさわしいほどの力を持った人だった。その彼女の運命を変えたのが、エシユタンドの父親。現、エスクラルド王よ」

懐かしそうな、遠い目で、デイーラは肖像画の中の美しい女性を見つめる。

儂げな笑顔が、エシユタンドとは違う印象を与えるが、藍色の双眸は、深い海の底を描いたように、鮮やかで、そして見るものの心を捉えずにはおけないほどの、圧倒的な光を宿していた。

その彼女に惹かれたというのは、王ならずともわかる気がした。空の沈黙の前で、デイーラは肖像画を名残惜しげに見つめていた瞳を逸らし、独り言のような説明に戻る。

「彼に見初められて、彼女は　ラウレカは、巫女の座を捨てることとなった。そして王宮へ入り、エシユタンドを生んだ後、すぐ亡くなったわ。」

私たちはもちろん悲しみ、泣いたけれど……彼女の寿命ははじめからそう長くはなかったのかもしれない。その身に宿る力は大きすぎて、どこか命を燃やすような危ういものだったから」

悲しげに語られる内容に、空は胸を突かれた。エシユタンドから少しは聞いていたものの、実際に彼女の肖像画を前に話を聞くと、現実味を帯びて迫ってくるような気がした。

空の沈んだ表情に気がついたように、ディーラは口元に笑みを浮かべた。

「それでも私にはわかるの、ラウレカは幸せだったと。命の輝きを燃やし尽くして、愛を得て、そして自らの命を受け継ぐ、素晴らしき宝をこの世に残して逝ったんだもの」

ラウレカの笑顔に、エシュタンドを重ねて、空は思わず胸に手を当てて、服を握り締める。この切ないほどに美しい女性が生んだ、藍色の王子。

その彼の存在は、空の胸を大きく支配していた。

「……どうかした？」

たちまち歪んだ空の顔に、ディーラが静かに問いかける。

その言葉が終わるよりも前に、空の瞳に涙があふれた。

「あたし……」

涙と共にあふれ出すのは、先ほどまでの記憶と想い。言葉にすることもできずに、空は震える唇を抑えた。

突然に迷い込んだ知らない世界、王宮、はびこる魔の存在、そして滅び行く森の精霊たち、全てが空を押しつぶそうとしているように重かった。

暁の娘、想力珠、王妃の腕輪　そんなもの、あたしに押し付けないで……あたしが求めたものじゃない、あたしが望んだのは、こんな恐ろしい運命じゃない！

空が望んだのは、普通に学校へ行つて、バスケの練習をして、友達と文句を言いながらテスト勉強をして、平凡な幸せに包まれた家庭で過ごす、普通の毎日だった。望んでいるとも知らないほどの、それが当然の毎日だった。そしてそれがこの上ない幸せだったなんて、こんな恐ろしい世界に放り込まれて初めてわかったのだ。

険に浮かぶのは、台所で夕食を用意する母親の後姿。部活で疲れて帰ってきた空に、優しく微笑んだ母の顔。仕事で毎日遅い父が、たまの休日にソファでだらけている姿。文句を言いながら掃除機を

かける母と、苦笑いする自分。

あの朝、タンスを開けるまでは、そんな日々がずっと続いていく  
と思っていたのに。

前日の夜、おやすみも言わずに部屋に入った。疲れて面倒だと母  
親の会話を遮った自分。父親の背中をそのまま通り過ぎた自分。

そんなものが浮かんで仕方なくて、空の涙はたえまなく零れ落ち  
ていった。

会いたい、会いたい、お母さんに会いたい。お父さんに会  
いたい。友達に、皆に会いたい。

今頃自分がいなくなっただうなっているのか、自分はどうなっ  
てしまうのか。

何もかもがわからなくて、恐ろしい。裸で放り出された赤ん坊の  
ように、世界の真ん中に一人ぼっちのような、そんな気分だった。

それなのに、こんな状態なのに胸に浮かぶのは、あの、藍色の瞳  
やるせない声で空を呼んで、切なげに囁いて、抱きしめた、彼の  
体温。

彼の本心を聞いて、湧き上がってきた、喜び。

語られた愛の言葉に、胸が締め付けられるほど嬉しかった、自分。  
そんな自分が何よりも恐ろしかった。恐ろしくてたまらなくて、  
体が二つに裂けそうなほど、苦しくなって、それで飛び出してきて  
しまったのだ。

走りながら、気づいていたのは、その中に隠された、自分の心。

エシユタンドに惹かれて、止めようもないほどに傾いていく、気  
持ち。

どうすればいいというのか。

爆発しそうな不安と混乱を、空は嗚咽に絞り出していた。

そんな空を静かに抱いて、優しく背中を撫でていたディーラが、  
空の嗚咽が止まるのを待って、ぽつりと呟いた。

「全てはね、あなたが選ぶことよ」

その声にそつと顔を上げた空を見ていたのは、ディーラの穏やかな紫の瞳だった。

「森も、この世界も、私たちも、自然の流れの中に生きている。それは私たちの運命であり、あなたにはあなたの運命がある。」

それは私たちが勝手に決めていいことではないし、あなたの自由を奪う権利など誰にもないの。

あなたをこの世界に呼び寄せた、アメ神にさえもね。どのような力が働いたのか、この先どうなっていくのか、私にもわからないけれど、私はあなたに無理強いもしない代わりに、哀れみもしない。

それは、あなたが選ぶべきことだから――

はつきりとした口調で、言い聞かせるように空に伝えようとしているのは、ディーラの中の真実であるようだった。

巫女の長としてではなく、個人として心から言い切ってくれているのがわかる。

見つめ返した黒い瞳に、ディーラは笑った。

「そしてもしあなたが決断を下したなら、きっと道は開けることでしょう。あなたが帰りたいと願うなら、アメ神もその願いに応えるかもしれない。」

その時は私も全力で協力するわ。そしてもし、あなたが戦いたいと願うなら――

区切られた言葉の隙間に、ディーラは深い思いを込めているようだった。

目を上げた時には、いつもの美しい微笑が浮かんでいた。

「その時には、私もできる限りのことはするわ。運命を受け入れるしかない巫女であっても、やはり希望は捨てきれないから……」

その言葉は、空の中に静かに染み込んでいく。揺れるばかりの心は変わりないものの、涙はいつしか止まっていた。

ディーラはその紫の瞳に全ての感情をしまいこんだように目を閉じて、そして空の肩を支えた。



「涙に暮れていては、前に進むことはできないわよ。」希望”という名のお姫さま」

いたずらっぽく告げられた言葉に首を傾げると、デイーラは空の頭を優しく撫でて、微笑む。

「ミデイスに伝わる、古き言葉　もう私たち巫女ぐらいしか知りたくない言葉では、あなたの名はそういう意味なのよ。」

これも何かの理由がある気がしない？」

瞬きをして、その言葉の意味を噛み締める空の隣で、デイーラはもう一度ラウレカの肖像画に向き直った。

「そして、ラウレカ　これはね、きちんとした名も持たなかったあの子のために、長が名づけた名前。古き言葉で“藍色の泉”という意味よ。」

このことは、王子にも話したことはなかったかもしれないわ。ここを出たら、朝食にしましょう。そろそろあなたたちにお迎えも来る頃だし、その前に空腹を満たさなくてはね。さあ、行って、そして話しておあげなさい、あなたが思うことを正直に。その扉の向こうで心配している彼にね」

片方の瞳をつぶって、巫女らしくない笑顔を浮かべたデイーラの言葉に、空が思わず振り返ると、そこに立っていたのは、エシユタンドだった。

デイーラに見透かされて出てきたのか、扉の前で決まりが悪そうに佇んでいる。

「エシユタンド……」

名を呼ばれて、彼は曖昧に微笑んで見せた。

デイーラが何もかも承知のように、紫の瞳を細めて、出て行った後、二人は残され、そしておそろおそろ見合わせた顔には、空が思うような怒りは見えなかった。

「お前を捜していたら、ここに辿りついてな。別に立ち聞きするつもりではなかったんだが」

言い訳のように横を向いて口にするエシユタンドに、思わず表情

をゆるめた空は、深く、息を吸い込んで、そして笑った。

「ううん、いいの。それより、お腹ぺこぺこ！ 食事にしよう！」  
おどけたように言ってから、本当に久しぶりの食事だということに気がついた。

空腹を感じることも忘れていたのだと、空は緊張が解けなかった体をほぐすように、エシユタンドに向かって歩み寄っていった。

「そうだな」

そして、話は後に。口に出さなくてもお互いの気持ちは一致している。

まだどこかに残る不安の波を避けるように、それでもしつかりと歩き出した空の後に、エシユタンドも続くのだった。

いつの間にか蝋燭が消えた部屋は、静かな薄闇に沈んで、優しい残り香に包まれた中で、ラウレカ的笑顔だけが変わらずに咲いていた。

### 36・ラウレカ(後書き)

最近、頑張って連続更新しています。

皆様の感想、評価などが励みになります。

どんなことでもコメントくださると嬉しいです。

また次の執筆、頑張ります。

### 37・セルス

「わあ、綺麗……！」

ゆるやかな草の道を登り終えて、一息ついた空は、思わず感嘆の声を上げた。

隣では、エシユタンドが涼しい顔で腕を組み、空と同じ方角を眺めている。

部屋に運ばれた食事を取り終えた二人がやってきたのは、聖殿の立つセルスの地が見渡せる丘の上だった。

眼下に広がるのは、目にも眩しいほどの緑一色で、朝の清涼な太陽の光に照らされて、明るい輝きを放っていた。

「ここ、セルスの地はミデイスで一番森の深い場所にあるからな。

聖殿以外には、小さな村がいくつかあるだけで、あとは全て森に囲まれた土地だ。それだけに他の三つの聖殿よりも更に澄んだ、美しい空気を誇る聖域だ」

藍色の瞳を木々の緑に向けながら、エシユタンドは話す。

当然のごとく披露される知識よりも、それを語る落ち着いた表情に、空は思わず瞳を奪われ、あわてて首を振った。

そんな空に気づかぬまま、エシユタンドは豊かな森を越えた、遠くを見つめている。

沈黙に落ち着かなくなった空は、澄んだ草の匂いを嗅ぎながら、そのまま地面に腰を下ろした。

「……こんな、豊かな森も、病んでいるっていうのかな……」

心に浮かんだ精霊の影を消すこともできずに、空は小さく呟いた。エシユタンドも同じことを考えていたのか、冷静な顔を崩さぬまま、振り向いた。

そして自然な動作で空の隣に腰掛ける。

見上げた空を少し悲しげな瞳で見つめてから、エシユタンドは眉を寄せて、息をついた。

「すまなかった」

突然の謝罪の言葉に、目を大きく見開いた空の反応に苦笑して、エシユタンドは前を向いた。

優しい風が、彼の短い金髪をそよがせていく。

「お前の心など考えもせず、自分の気持ちを押し付けた。この世界がお前にとって未知で恐ろしいものであることも、突然に巻き込まれた全てのこと、お前がどれほど傷つき、怯え、混乱しているのかも、何も本当にはわかっていなかった。

自分の中に生まれた強い感情に支配され、引きずられ、ただ求めるばかりで、まるで子供も同然だ。私は……自分が思っていたよりも情けない男なのかもしれない」

低く、自嘲に満ちた言葉を、思わず遮ろうとした空の動きは、藍色の瞳に止められた。

穏やかな中に浮かぶ、強い光が、そのまま聞くようにと告げているようだった。

黙った空に、エシユタンドが優しい笑みを浮かべる。

その奥に見える、痛みのようなものに、空は釘付けになった。

きらめく陽光の中で、エシユタンドは金色の髪をかきあげ、何かを思い出すように瞳を閉じた。

そして再び開かれた藍色に、空はまだ新しい記憶の中で微笑む女性を想う。

それをまるで共有するかのよう、エシユタンドが語りだした。

「あの肖像画を初めて見たのは、十にも満たない少年の頃だった。それまでの私は、自分の藍色の瞳を憎んでいた。

何もわからぬ子供だったその時は、この不気味な瞳の色こそが、周りの人々を遠ざけ、恐れ、嫌われる原因なのではないかと思っていたからだ。

母の出自のことも、大人の世界のことも、おぼろげな知識しかなく、理解もできなかった私にとって、父にさえも愛され、優しくされる

ことがないのは、きっとこの瞳のせいなのだと、そう思わずにはいられなかった。

顔も知らぬ母のことなど、恨みこそすれ、想うこともできなかつた。また、それさえも許されないほど、母の記憶は無にも等しく、何の知識も与えられなかつたからだ」

冷たいまでの無表情であるのに、エシュタンドの瞳には重く、深い悲しみが見えた。

空は胸が締め付けられる思いで、ただ耳を傾ける。

口をはさむことなど、できるわけもなかった。

「それが変わったのは、ミディアスの歴史を学ぶためという名目で、一人訪れることとなったこの聖殿で、偶然あの地下室を見つけた時だった。

一目見た瞬間、母だとわかった。なぜか、確信した。そして感情が浮かぶより前に、私は泣いていた。

不気味であるはずもない、稀有な宝石のようなあの母の瞳を見て、悲しみと、怒りと、悔しさと、様々な気持ちが入り乱れて、ひとしきり泣いた。

それまで乾いていた心に、母の存在が染みとおっていく気がしたのだ。それが今まで見聞きした、冷酷な陰口と繋がったと同時に、許せなかった。

私を嘲った者も、そして母をないがしろにした全ての者も、そう思った時には飛び出していった。

夢中で走り、どこをどう行つたのか、目の前には茨の茂みがあつて、気づいた時には滅茶苦茶にそこを通り抜けていた。

そして辿り着いたのは深い森で、傷だらけの腕も気にせず、私は叫んでいたんだ。強くなりたいたと、誰よりも強くなって、そして見返してやるのだと

「こみ上げてくる感情を抑えているような静かな口調で、一気にそこまでを語り終えて、エシュタンドは空を見た。

空を見ているようで、その瞳はどこか遠くを見ているようでもあ

り、彼の痛みと苦しみが、空の心に流れ込んでくるようだった。

「その時だったと思う、あの精霊と出会ったのは……」  
視線をはずして、エシユタンドは蘇る記憶を探っているかのよう  
に、一呼吸置く。

「精霊つて、もしかして……」

空のためらいがちな問いかけに、エシユタンドはようやく微笑ん  
だ。唇の端にだけでも浮かんだその微笑に、空はどこかほっとする  
自分の心を感じていた。

「そう、あのルーラという、眠る精霊だ。もっともあの頃は、眠っ  
てなどいなかっただが」

エシユタンドの口調は、少しずつ記憶の幻から抜け出しているよ  
うに、いつもの皮肉げなものに戻りつつあった。

遠くをさまよっていたような瞳も、今は空をまつすぐにとらえて  
いる。

「強くなりたいたと叫んだ私に、お前は真の王者になり得る者だと、  
そう言った。私を見て、確か『見事な光』を放っているとか……」

「『光』を？」

訊ね返した空の怪訝そうな顔に、エシユタンドは頷いてみせる。

「ああ。それから泉の瞳を持っている、とも言っていたな……私の  
この瞳の色には何かの意味があるのかもしれん」

考え込みながらそう答えるエシユタンドを見ながら、空は記憶の  
琴線に何かがひっかかるのを感じた。

「そういえば、巫女のディーラさんも、何か似たようなこと言っ  
たかも……ああ、そう！ 生命の光が燃えているのが見える、とか  
なんか」

巫女も精霊も、似たような力を持つものだとしたら、ルーラが言  
ったのは、エシユタンドの生命の光だったのだろうか。

空が導き出した答えと同感なのか、エシユタンドも藍色の瞳を伏  
せて、何かを考え込んでいる。

「エシユタンド……？」

心配そうにかけられた空の音が、再び彼を現実に引き戻したようだった。

「いや、とにかく　そう、そこで彼女に渡されたんだ。あの緑の寶石を」

「想緑珠を？」

「結局、想緑珠とは一体どういうものなのか、我々にどう使えというのか、何も聞けなかったな。全く勝手に人を呼びつけておいて、肝心なことを教えんとは、失礼な精霊だ」

その冗談めかした口調に、空は少し笑った。

「そうだね、まあ、魔が現れたとかで仕方がなかったんだらうけど……」

確かに中途半端に残された謎には、空も消化不良な気分だった。

「それにしても、あの光は何だったんだらう　あの時、あなたが助けに来てくれた時、確かに光ったよね？」

唇に指をあてて、思い起こす空に、エシユタンドは頷いた。

「それに熱を帯びていたようだったが……」

「そうそう、まるで石が生きてるみたいに熱くて、脈打ってでもいるみたいだった」

あの不思議な感覚は、自分だけが感じたものではなかったんだと、空の声は大きくなった。

「二つの石が近くに集まったから？　なんだかまるで　」

「……二つの石が、惹かれあってもいるかのように」

考えていたことを言い当てられて、空の言葉は止まる。そしてその内容に思わず重ねてしまうのは　。

空の瞳に浮かぶ動揺を、藍色の静かな瞳が見ている。そのまま二人の間に沈黙が横たわった。

急に落ち着かなくなつて、空は足元に視線を移した。

緑濃い森から吹き渡る風が、二人の頬を撫でていく。

空は優しすぎる静けさに、自分の心を見透かされてしまいそうで、



思いついた疑問を口に出した。

「そういえば、あのアルネンスとかいう精霊が言ってたけど、『おかえりなさい』っていうのはどういうこと？ あのホルトスの森にも行ったことがあったの？」

「いや 私も考えたんだが、幼い頃にどういわけか迷い込んだあの森が、彼らの住まう特別な森だったんだろうな。」

このセルス付近の森と、ホルトスの彼らの森を、何かの力が一時的につなげていたか、もしくは……常に空間を一部共有してでもいるのか」

エシユタンドの冷静な分析を聞きながら、空は豊かな森を見下ろしていた。

精霊の不思議な世界に思いをはせるほどに、空の表情は険しくなっていく。

彼らに託された宝玉の謎までも知りたいと思うことは、同時に彼らの望みを叶えるという責任を負うことにつながるのだ。

ただの高校生である自分が、一体どうしてそんな重大な役目を与えられるのか。

何も特別なこともできない、そんな力も度胸もない、ましてや彼らの運命まで背負うほど強くもない、そんな自分がどうして選ばれてしまったのか。

そもそもそんなことが本当なのか、それすらも疑ってしまう。

できることなら逃げ出したい。このまま、眠って目が覚めたら、全てが夢だったならいいのに。そんなことまで願ってしまう。

自分はこんな、弱い人間でしかないのに。

そこまで考えてから、空を叱咤するかのようなルーカの瞳が浮かんだ。

空を睥の娘だと、そう言い切った彼女の言葉。当然のごとく義務を果たすべきだと、空に突きつけた、あの少女。

彼女が言った言葉の続きを思い起こして、空は膝に埋めていた顔

を上げる。

『次期国王となる者よ』 エシユタンドにそう言ったのけた彼女は、少女ではなく、長い年月を生きてきた精霊の顔をしていた。

エシユタンドは、一体どうするつもりなんだろう。

自分のことだけに気をとられていて、そこまで及ばなかった思考は、たちまち不安を呼び寄せる。

重い責任を負うのは、むしろ彼のほうなのかもしれない。

森を、しいては国を救うだなんて、とてつもない役割を負わされて、エシユタンドだって平気ではいられないはずなのに。

彼のそばにいて、少しでも助けになれたなら 考えかけて、それがどれだけ恐ろしい選択なのかに思い至る。

それは自分の故郷を、平和な生活を、家族を、友人を、皆を捨てることなのだ。

たちまち震えだす体を、空は両手でできつく抱いた。そうしないと、恐ろしくてたまらなかったから。

自分を見失いそうな心に怯える空を止めたのは、エシユタンドの温かな手だった。

震える手を、大きな手のひらで包まれて、空はただ彼を見上げる。藍色の瞳に込められた感情が何なのか、全く読めなかった。それでも強く、静かに自分を見つめるエシユタンドに、なぜだか苦しくなる。

握り締められる手の強さと温もりに、反射的に鼓動が速まる。こんな状況だというのに、その瞳に目を奪われていく。

そんな内心が恥ずかしくなるほど、エシユタンドは真剣な表情で空を見つめていた。

何かの思いと戦うかのように、眉を寄せて、一度俯いてから、エシユタンドは空に向き直った。

「森のことは、このミディス王国の問題だ。国が抱える運命を背負うのはお前ではない。王子である私の役目だ。だから」

一つ一つはつきりと、意思をのせて伝えられるエシユタンドの言葉が、空の胸を打つ。

深い感情を抑えきったような、冷たいほど美しい藍色の瞳に、吸い込まれそうだった。

「お前は、お前の心のままに、進めばいい。今度こそ約束しよう、お前が戻りたいと願うなら……私もそのために全力を尽くそう」

告げられた瞬間、心を鋭い刃で突き刺されるような、そんな感覚が空の言葉を奪った。

何も言えないでただ見つめ返す大きな瞳を、エシユタンドは一瞬だけ見つめて、何かを振り切るように握っていた手を外した。

途端に遠ざかっていく彼の体温が、まるで彼の心そのものを感じられる。

今までのように抱きしめることもせず、甘い言葉をささやくでもなく、余裕たつぷりの瞳でからかわれるでもなく、ただ淡々と語られているだけだというのに。

それなのに伝わってくる彼の想いは、とても優しく、切ないくらいに深く響いた。

喜べばいいはずなのに。重荷をおろしてしまえばいいのに。なぜ、悲しいのだろう。

その手が離れてしまうことが、どうしてこんなに苦しいのだろう。泣きたいほど、自分が欲しているものは、一体何なのか。

わからないままに、空は唇を噛み締める。

立ち尽くしていた二人の沈黙を奪ったのは、遠く聞こえる馬のいななきだった。

その声に引き寄せられるように振り返った空の瞳に、数台の馬車と、それを守るような騎馬兵たちの姿が、聖殿前に続々と集まっている光景が映る。

「お迎えのようだな」

エシユタンドが、静かに呟いた。

そうだ。王宮に二人のことを知らせておいたと、巫女たちが教えてくれていた。

白に立派な金の縁取りがされた、王宮の馬車と、嚴重な武装をした兵の数が、事の重大さを示しているようだった。

仮にも一国の王子が姿を消していたのだから、これぐらいの扱いは当然なのだろう。

それでも空に、頭の端に追いやっていた様々な火種を思い出させるには十分すぎるほどの光景だった。

そして同時に、これからの自分の進むべき道を思うと、空の心は今にも壊れそうに、きしみをあげていた。

まるで全身を、見えない糸で絡み取られたような、触れることのできない不安に蝕まれるような、そんな体を必死に奮い立たせて、空は草の道を踏みしめる。

背後で見つめる藍色の瞳が、苦しげに揺れていたことを、空は知る由もなかった。

### 38・再会（前書き）

新年最初の「ある朝」の更新です。  
お待たせしました。

今年もこの連載をどうぞ見守ってやってくださいませ。

聖殿前で待ち受ける馬車に、思わず身構えた空は、見知った顔を見つけて、ほっとしたように駆け寄った。

「クガルさん！」

「姫君！ よくぞご無事で」

たちまち顔を輝かせて振り向いたのは、エシュタンド付き私兵隊長、クガルだった。

栗色の優しい瞳で空を見つめる童顔の彼が、そんな立場にある人物だったことは、つい先ほどエシュタンドに聞くまで思いもよらなかったことだった。

それでもどこか一緒にいてほっとする彼がこの場に来てくれたことで、空の顔は明るくなっていた。

「ごめんなさい、心配させてしまって」

「いえ、そんな 姫君がご無事で何よりでした、本当に……」

心からそう言うてくれているのがわかる。きっと彼にも搜索の苦勞をかけさせてしまったんだろうと、申し訳なく思いつつも、何を言えばいいのかわからなかった。黙った空の背後から現れた人物に、クガルの顔が輝いた。

「殿下……!!」

その一言だけでどれほど彼を心配していたかが伝わってくる。その呼びかけに頷いたエシュタンドは、ねぎらうようにクガルの背に手をやった。

「すまなかつたな、心配をかけた」

簡単な謝罪の言葉の中にも、エシュタンドなりの心がこもっているのが、空にもわかった。

そしてそれだけで事足りるほど、信頼している間柄なのだ。

クガルは少し潤んだ瞳を隠すように俯いて、首を振った。

「とんでもございません、殿下。殿下がご無事であれば、それだけ

で

あわてたように答えてから、クガルは表情を硬くした。それに気づいたエシユタンドが、自然な形で空を聖殿へ向かわせる。

どうやら持つてこられたらしい着替えを持った巫女が、空を迎えてくれた。

そういえば、ずっと着替える暇もなかったブラウスと乗馬ズボン  
は、すっかりとくたびれている。

いくら動きやすい格好が好きだと言っても、あまりにみすぼらしい服とつりあわない王宮の派手な馬車を見比べて、空はなぜかみじめな気持ちになった。

かといって、渡された美しいドレスを着る資格が果たして自分にあるのかもわからない。

奇妙な疲れを感じながら、空は何かを語り合うクガルとエシユタンドを背に、聖殿へと入っていった。

着替えに用意されたのは、入り口近くの小さな部屋だった。

水桶で濡らした布で顔や体を拭き、髪をとかして、鏡に向かう。

いつの間にか、ひどくやつれたような顔をしている自分に驚いた。  
薄い緑色のドレス　　なんでこんな時によりにもよってこの色な

のか、誰の選択なのかを恨みたくなりつつも、空はわざと乱暴に袖を通す。

そうしながらも、感じるのは、恐怖にも近い、不安だった。

どうしたらいいのか、自分はどうしたいのか、それすらもわからなくなっている。

王宮で待ち構えているであろう王や王妃、それに様々な問題。今までのようにただエシユタンドに頼って、守ってもらうわけにはいかない。

彼の言葉を思い出して、まだどこか痛みを覚えることに苦笑した。  
自由にしていいと、すまなかったとまで言ってくれたことに喜ぶよりも、傷ついているかのような、卑しい心。

突き放されたような気がしたのか、今までのように強引にでも、どこかへ導いてほしかったのだろうか、自分は。押し付けられて恐ろしかったはずの運命が、自分で決めるのはもつと恐ろしいことだと気づいてしまったから？

なんてずるいんだろう……あたしは。

鏡の中で睨む黒い瞳を、空はただ凝視していた。

「あら、よく似合っているわね」

明るい声が、突然その場に乱入した。後ろを振り返ると、いつの間にか開いた扉の向こうから、既に親しげな微笑を浮かべる、薄紫の瞳が覗いていた。

「ディーラ……さん、あ、じゃなくて、ディーラ様」

なんとなく巫女たちがするように倣ったほうがいい気がして、あわてて言い換える空に、ディーラはふふ、と楽しげに笑った。

「いいのよ、別に、好きなように呼んでちょうだい」

そう言って、ディーラが空のドレスの紐を少し結びなおしてくれた。どうも背中にあるから、結びにくかったものだ。

「さっきまで着ていたような服装も似合うけど、こういうドレスも似合うのね。中性的に見えたと思ったけど、ドレスを着ると途端に女性らしくて可愛いわ」

率直に褒められて、空は頬を染めた。まさか自分が、ディーラのような美しい女性に褒められるなんて思ってもいなかったのだ。

「あなたのそんな不思議な魅力に惹かれたのかしらね、王子は」

自然に顔を綻ばせながら言う相手に、空は少しためらって、首を振った。

「そんな……あたしは……魅力なんてないんです。本当に、ただのどこにでもいる女の子で」

自分の外見は別に褒められるほどのものではない。そんなことは鏡を見ればわかることだし、現に今まで恋人と呼べるような男性もできなかつたし、むしろ奥手なほうなのかもしれない。化粧や服装



にこだわる友人に、珍しいと言われるような、十六にもなつて着飾ることに興味がなかったような、部活にのめりこんだ平凡な女子高生でしかないんだから。

そんな空の正直な答えに、デューラは面白そうに目を見張った。

「まあ、何を言うの。あなたは十分に魅力的だと思つたよ」

否定しようとした空は、デューラの瞳に全くのお世辞や嘘がないことに気づいた。心からそう言ってくれているように見える。

黙ってしまった空に、デューラは白い髪をかきあげて笑った。

「もちろん、あなたの外見や笑顔も素敵だけど　何よりも、美しさというのは、内面からにじみ出るものなのよ。」

どれほど着飾ったり、取り繕つても、態度や言葉の端々に、その人の本当の姿が見える。心まで飾ることはできないから」

「心、まで　？」

そういうものだろうか、とデューラを見つめ返しながらも、空はまだ納得が行かない気持ちでいた。

眉をひそめている空を見てわかるのか、デューラが言葉が続けた。「聖殿という場所にいるとね、逆に人々の穢れがよく見えるの。どんなに綺麗にきらびやかに飾り立てようと、その人の心が醜ければ、私には決して美しくは見えないわ。それにあなたは　」

そこで少し考えてから、デューラは微笑む。

「今のあなたに言つていいのかわからないけれど、とても綺麗な光をまとっているのよ。聖獣と契約を交わした巫女には、彼らのような聖なる存在が目にすることができるものが見えるの。エシユタンドもかなり強くて美しい白金の光をまとっているけど、あなたのは……」

その言葉に息を呑む空の少し後ろを眺めながら、デューラは薄紫の瞳を細めて、迷つてから口を開いた。

「どう表現したらいいのかしらね、暖かな闇のような、優しい夜明けのような、不思議な色をしてる。それもあつて、私はあなたを暁の娘だと確信したのよ。」

暁の世界というのは、夜明け前の世界といわれているから。私には、あなたが癒しと安らぎを王子に与えているのがわかる。彼がどれほどあなたに惚れ込んでいるのかもね」

頭が麻痺するかのようだ　　デイーラの語る内容は不思議すぎて、空は聞いているのが精一杯だった。

あたしが、エシユタンドに癒しと安らぎを与えている？　そんな、まさか……。

信じられない思いで、空は光沢のあるドレスの布地を握り締める。そこでようやくデイーラがいたずらっぽい微笑を浮かべていることに気づいた。

「昔の彼から考えると、あまりに『生きた』表情をしていて驚いたわ。初めて出会った子供の頃は、まるで死んだように、冷たい、悲しい瞳をしていたもの。」

あのラウレカの愛息子が、これほどまでに辛い思いをしてきたのかと、私までもが胸を痛めたものよ。

もちろん大人になるに連れて、彼は仮面を被るようになっていったけれど　　快活で、自信家の若き跡継ぎ、そんな仮面をね。

時々会うことしかない私にも目に見えて変わっていったものよ。けれどかえってその中に秘めた氷は、冷えていく一方だったのがわかったわ。

でもそれを変えたのが……あなただったみたいね」

そう言うのと、デイーラは鏡の中の空に微笑んでみせた。対する空の表情は複雑だった。

空とエシユタンドの関係を全て知った上で言っているのか、デイーラの本心はわからなかったが、嬉しそうな言葉には、まるで家族の変化を喜ぶような暖かさがあった。

「あらあら、また私、あなたを混乱させてしまったようね。いいの、ごめんなさい。ラウレカのこととは好きだったから、彼女の忘れ形見である彼は、私にとっても大切だね。思わずしゃしゃり出てしま

「ったわ。余計な老婆心ね」

ディーラの言葉に、空は何と答えていいかわからないままに、首を振った。その動作と共に、空のドレスが揺れる。

小さな窓から差し込む陽光に、淡くきらめく薄緑色のドレスは、今は素直に美しいと思えた。

幾重にも連なる裾の飾りまでも整えてくれたディーラは、そうだと子供のように手を叩いた。

「何か？」

「ちよつとついていらっしやい。あなたにいいものをあげる。大丈夫、今度は重荷になるようなものじゃないから……」

白く美しく流れる髪を無造作にはらって、ディーラはためらう空の手を引いた。

ディーラや巫女に挨拶を終えて出てきた空の前で、エシユタンドとクガルはまだ何事かを話し合っているようだった。

深刻そうな顔つきに声をかけるのをためらったその時、気がついたクガルが顔を上げた。

「姫君……これはまた、大変よくお似合いで」

ドレス姿の空に、クガルは純粋な感嘆の瞳を向けた。隣のエシユタンドがどんな目で自分を見ているのか、なぜか怖くて、見られない。

「ありがとう」

クガルにだけそう言うと、空が持っている布包みを目にして、クガルが不思議そうな顔をした。

「それは？」

「あ、ううん。何でもないの。ディーラさんに持たされた着替えよ」  
空がそう言うと、クガルが納得が行ったのかよくわからない顔をして、そして微笑んだ。

「姫君にかかると、あの月の巫女殿も、ただの親しい友人に見えて

くるのですから、不思議ですね」

「え、あ、ごめんなさい。ついそんな呼び方をしてしまっ……」  
またしても敬称をつけずに呼んでしまったことを恥じるような空の言葉に、クガルはあわてて手を振った。

「いえ、そういう意味では……巫女殿も姫君と親しくなれたとしたら、喜んでおられると思いますよ」

「そ、そうかな？」

意外そうに訊ねた空に、クガルは深く頷く。

「我々も含め、なかなかあの巫女殿と普通の会話ができるような者はおりませんから」

クガルの言葉に、今度は空が驚く番だった。

「え、でもとつても気さくな人だったけど……」

初対面こそ少し威厳に押されるような気がしたものの、彼女は空やエシユタンドだけでなく、巫女たち一人一人にも特に変わった態度は取っていないかった。

それほど、遠い人物にも思えなかったのに、と空が言いたかった言葉を汲んだように、クガルは笑った。

「ええ、それはもちろんそうなのですが　何せ、現在のミディアスにおいて最高位の巫女殿ですし……」

何と説明したものかと困ったようなクガルに口添えしたのは、今まで黙っていたエシユタンドだった。

「彼女はあ見えて、我々よりずっと年上だぞ。私の母が生きていたなら、同じくらいの年頃のはずだ」

冷静な低い声に、空は驚くというだけではすまないほどの間抜けな顔を向けてしまった。

「え、ええっ？　でも、……だって、せいぜいエシユタンドより少し年上くらいにしか見えないのに」

頭に浮かぶ綺麗な顔はどう多めに見てもそれくらいだと、空はやつこのことでそう答える。

「聖殿の巫女は、長となり、聖獣と契約を交わすと、彼らの力を少

し譲り受けると共に、寿命が延びるのですよ」

クガルの優しい説明が徐々に空の頭に浸透していく。

「そうか、そうなんだ……そういわれてみたら、エシユタンドのお母さんを知ってたんだし、そんなに若いはずはないんだ。

あまりに色々なことが起こって、頭が正常に働ききれていなかったようだ。

そう言われてみると、ようやく彼女のエシユタンドに対する態度も、空を包み込むような温かさも、納得がいくような気がした。

考え込んでいた空の前で、エシユタンドが口を開いた。

「さあ、あまりゆっくりしている時間はないぞ」

先ほどの会話で少しだけ和んだように思えたその場の空気が、一気に引き締まる。

そう、もはや迎いの馬車は準備を終えている。気がつけば馬の世話や、水や食料の補給を終えた護衛兵たちも、出発を待つように並んでいた。

空が自然と自分を見上げたことに気づいたエシユタンドが、辺りを見回して、御者たちに指で合図をした。

「とにかく、出発といこう。クガル、ソラのこと 頼んだぞ」

クガルの肩に手を置いて、そのまま歩き出そうとするエシユタンドに、空は驚く。

「あ、あの」

思わず呼びかけた空に振り返ると、エシユタンドは感情の見えない瞳で空を見た。

「私は別の馬車で帰る。お前はクガルと共に来い。王宮へ着いたら……」

言葉を区切って、エシユタンドは低く続けた。

「もう一度話をしよう。その時まで……考えておいてくれないか」  
その言葉に、クガルが少し気になったような顔をしたが、そのまま立ち去っていくエシユタンドを見送り、立ち尽くしていた空のた

めに、馬車の扉を開けた。

「さあ、姫君」

差し出された手をとって、馬車の中へ乗り込む。自分の動作がまるで自分のものじゃないような、そんな錯覚に空は陥っていた。

空の沈んだ顔を少し心配そうに見つめていたクガルも、準備ができた馬車を走らせるように、御者へと合図した。

片方だけ開かれた窓から、聖殿の前で見送ってくれているディーラの姿が見える。

手にした包みを握りなおして、空はなんとか笑顔を向けた。

それでも心の中では笑うなどはほど遠い、暗く立ち込める暗雲が、段々と重く押し掛かってくるのだった。

### 38・再会（後書き）

短い感想でも、辛口評価でも、何でもお待ちしております。  
執筆の励みになりますので、よろしくお願いいたします。

しばらく走っても、まだ無言のままの空に、ためらいがちなクガルの声がかけられた。

「あの……姫君」

延々と続く森を見ていた空は、瞳を大きく見開いて、クガルのほうを振り返った。思考に入り込んでいて、すっかりと彼のことを意識するのを忘れていたのだ。

「あ、ごめんなさい。どうかした？」

自分はどんな顔をしていたんだろう。あわてて取り繕う空を見るクガルの瞳には気遣うような色が見えた。

「いえ、あの　こんなことをお聞きしては大変失礼かとは思いますが……」

彼らしく、とても丁寧な扱いに、かえって空は落ち着かずに笑ってみせた。

「そんなに気を遣わないで。あたしはもともとそんなに偉い人でもなんでもないんだから」

その言葉でクガルが瞳を優しくするのに気づかないまま、空は続ける。

「それで、えーと、何か聞きたいことでもあったの？」

「あ、ええ……あの、失礼ながら、殿下と何かあったのでしょうか。それでも遠慮がちに、声を落としてそう訊ねられて、空の瞳はたちまち曇る。

「え、いや……どうして？」

逆に問われて、クガルは落ち着かないような顔で手を組んだ。ためらいながら、口を開く。

「　殿下の様子が少し、いつもと違っていましたので……」

そう言われてから、空は先ほど二人が長い間話し合っていたことを思い出した。



自然と頭に浮かんだ疑問を口にする。

「あの、エシユタンドから、何も聞いてないの？ 何があったとか、姿を消してた理由とか」

不思議そうな空の問いに、クガルは静かに微笑んだ。

「いいえ、そうだったことは何も。話していたのは、もっぱらこちら側の報告のみです」

当然のことのように答えられて、空は目を見張った。

「え、でも……心配してたでしょ？ 何も聞かなくて平気なの？」

クガルが主を思う心は、出会って日が浅い空にも伝わってくる。

空は落ち着いているクガルの心がわからずに、思わず声を大きくしていた。

「殿下がお話にならないことは、聞かぬようにしております。必要だと判断された時点で、必ずお話いただけるものだと　そう信じしておりますので」

平然とそう笑ってみせるクガルは、とても優しく、穏やかないつもの彼だった。

それほどまでに信頼できる主なのだ、彼にとってのエシユタンドは。

彼の面影を浮かべた胸が、また鈍い痛みを訴えてくる。

その微妙な表情の変化に気づいたように、クガルが栗色の瞳をまっすぐに向けてきた。開いた窓から時折吹き込んでくる風に、同じ色の髪が揺れている。

視線を受け止めた空に、一呼吸置いて、クガルは話し出した。

「私は、あの方がいずれこの国を背負って立たれる方だと、出会った瞬間に思いました。私が仕えるべきはあの方なのだ　そう確信しました。」

その時から今日までを、殿下のおそばで過ごしていることは、私の最大の幸運だと、そう思っております」

静かな口調が、いつそう彼の真意を伝えていた。空はただその心

の中に引き込まれるように、耳を傾ける。

「私が殿下にお会いしたのは、年端も行かぬ少年の頃　同じ年頃であった殿下だったにもかかわらず、彼は出会った瞬間から圧倒的な主でした」

そう語りはじめながら、クガルは想いをはせるように、瞳を伏せた。

「私の生まれは、ミデイスの王宮から少し離れた森、イーシャという名の少数部族の出身なのです。ただ、それも今は滅びた部族ですが……」

その言葉に空は眉をひそめる。それを見て悲しげに微笑んでから、クガルは心を落ち着かせるように息を吐いて、話し出した。

「昔は名の知れた術士を数々生み出した、優れた部族だったイーシヤも、流れる年月のうちに、段々とその力を残せる後継者が現れなくなっておりまして。」

そしてゆつくりとその人口は減っていき、最後は私の代で、途切れてしまいました。流行り病で他の全員が命を落とすという形で

「辛いことを思い出しているのか、クガルの声は少しだけ震えて、それから気を取り直したように咳払いをする。」

「ただ一人生き残った私は、王宮へと連れていかれたのです。術士の部族の生き残りとして、ただその価値を図る名目で。」

しかし得体の知れぬ病から生き残った私を見る、王宮の人々の目は冷たいものでした。まだこの対魔の術も少ししか使うことができなかつた当時の私は、あまり利用価値もないということ、捨て置かれるところでした。その私を救ってくださったのが、当時第三王子として認められたばかりの、殿下だったのです」

当時を思い出したのか、クガルの表情が明るさを取り戻していく。クガルの辛い過去に胸が痛んでいた空は、少しだけ表情をゆるめた。

「この者は私が預かる　皆の前でそう言うてくださいました。今日から私の宮で護衛として仕えよ、と。何を奇特なことを　言葉

にはせずとも、その場の誰もがそんな目を向けていても、殿下は気にされることもなく、堂々とそれだけを告げて、私を連れ帰ってくださいました」

誇らしげに語るクガルの様子で、その時のエシユタンドを想像できるような気がした。今より幼い、それでも冷たい威厳を放つ彼を。「殿下にとつては気まぐれだったのかもかもしれません。ですが、確かに殿下のその一言が私を救ったのです。その時に決めました。一生をあの方に捧げてお仕えしようと。」

どんなことをしても、あの方のお側で、あの方が王座につかれるためのお役に立とうと」

静かに、穏やかに語られる彼の決意は、まっすぐに空の心へ届いていた。栗色の瞳に浮かぶ真剣な、強い光を見つめる空にようやく気づいたように、クガルは照れ笑いを浮かべる。

「余計なことをお話してしまいましたね。このようなこと、姫君には関わりのないことだというのに……」

途端にいつもの優しい笑顔で言うクガルに、空は首を振る。

「そんな……」

それだけ言ってから、一瞬ためらう。幼い日からの、そこまで深い二人の絆。それほどまでに強い、クガルの覚悟。そこへ立ち入る資格もない、こんな不安だらけのみつともない自分だけれど。どうしてもただ黙っていることもできずに、空はクガルを見つめた。

「それで、私兵隊に入ったの？ エシユタンドを、守るために？」

空の小さな問いかけに、クガルは優しく頷く。

「ええ。イーシャの先祖から学んだ対魔の術を磨き、殿下を守ること、殿下のために戦うこと、それぐらいしか私にできることがありますませんでしたので」

当然のことのように全てを捧げて、他人のために尽くすこと

空が今まで考えたことも、出会ったこともなかった、深く、重い、忠誠心。

クガルの言葉や、瞳から、痛いほどにそれが伝わってきて、空は口をつぐむしかなかった。

これが、クガルの心であり、信条であり、彼の選んだ人生なのだ。そしてそんな生き方は、彼らが生きるこの国、この世界での一人の人間として、自然なものなのだ。

こんな異世界　と、まるで夢か幻でもあるかのような、空にとつての不思議で重苦しいこの世界は、彼らにとつての日常で、そこに住んでいる人々は、それぞれの事情で、精一杯に生きている。いや、ここで生きていくしかないのだから。

そんな物思いに沈んでいた空は、またクガルが気遣わしげに自分を見ていることに気づき、顔を上げる。

何を言うべきかと、一瞬迷った空に、クガルは静かに微笑んでくれた。そして、優しい声で空に呼びかける。

「姫君、私は　本当に嬉しく思っております」

「え……？」

突然、何を言うのかという空の顔に苦笑しつつも、クガルは続ける。

「姫君が、このミディアス王国へとやってこられたこと、殿下と出逢われたこと、それがとても嬉しいのです。殿下は姫君と共におられるようになってから、随分と楽しいげな笑顔を見せてくださるようになりました。今までの殿下からすれば、信じられないほどの、自然な、優しい笑顔を」

思いがけない内容に、空は複雑な表情を浮かべる。そんな空の心の中には気づかないように、クガルはそのまま嬉しそうに続けた。

「殿下のそのような笑顔を見られることは、私にとつても最大の喜びであり、希望です。私はそんな喜びを与えてくださった姫君に感謝しなくてはと……」

クガルの語る彼の過去と共に浮かび上がってくるのは、そんな彼の敬愛する、主。ディーラも、クガルも、彼の変化を喜んでいる。

冷たい、氷を秘めたという、エシユタンドの笑顔。彼を支える皆の想いと比例するかのように、その辿ってきた過去の重さ、苦しみ、全てが入り混じって空に押し寄せてくる気がした。

「クガル、さん……」

ためらったような空の声をどう受け取ったのか、クガルは少しだけ頬を染めた。そして照れ隠しのように頭をかく。

「すみません、また私、おかしなことを申し上げて　いや、あの私だけではなく、私兵隊の全員も喜んでいるのですよ。殿下はもちろんのこと、姫君がおられると、なぜか王宮が明るく思える、とまで……きつと、彼らも姫君の無事の帰還を喜びますよ」

純粋な優しさで、そう言ってくれているのは伝わってくる、痛いほどに。

かえってその優しさが空を俯かせた。

そんな風に思ってもらうような、優しく迎えられるような、いい『姫君』でも何でもないので。ましてや、婚約者だと皆を騙しているというのに。

クガルの笑顔に、罪悪感がいつそう膨らんでいく。

黙りこんでしまった空に気づいて、言葉を止めてから、心配そうにクガルが覗き込んだ。

「姫君？　どうされました、ご気分でも……？」

その優しい声音に、空はあわてて首を振って、笑顔を作る。

「う、ううん、何でも」

答えながら、辺りを見回した空は、窓の外に広がる風景が変わっていることに気づいた。

時に陰鬱にも思えた、一面の森が、いつの間になくなり、見渡すばかりの田園風景が優しく広がっている。

遠く、何かを収穫しているような、村人たちが見える。

空の目に映る光景を一緒に眺めて、クガルは微笑んだ。

「もう、収穫の季節がやってきたのですね　このあたりは、肥沃

な土で、農作物がよく育つことで有名なのですよ。今頃は収穫祭の準備で、各地の村も大忙しで……」

少し弾んだ口調でそこまで言ってから、クガルは一瞬言いよどむが、すぐさま、それとわからぬように、笑顔でまたそれぞれの村でも収穫祭が行われていることや、各地で少しずつ異なる祭りの様子などを空に話してくれた。

空も表面上は笑顔で聞いていながら、心の中には、また不安が忍び寄ってくるのを感じていた。

収穫祭。確かにそう言っていた。コルトスへ向かう馬車の中で、眠る空の前に、皆が話していたことを思い出したのだ。

何かの剣で、滝を切らせる。巫女にしか許されていないことを、空にやらせると言っていた。

その王と、そしてあの王妃と、これから対面することになるのだ。自分の中では何一つ答えも何も出ていないというのに。

森の精霊も、ディーラも、クガルも、そしてエシユタンドも、自分の役割をわかっていて、運命を受け止めているように思える。

空以外の全てが、あらゆる流れに向かって、動き出しているように感じる。

空だけが、『エシユタンドの婚約者』にも、『暁の娘』にもなりきれず、かといって、『普通の高校生』に戻ることにためらいながら、宙に浮いている気分だった。

帰りたい それはもちろん、けれど、純粹にそれを願うには、空はもうこの世界に関わり過ぎたような気がしていた。

後ろ髪を引かれるような、思いは、どこからなのか。

助けたい？ そんなことを思うほどに、強くも優しくもない。でも……。

瞳を閉じても消えないのは、あの鮮やかな、深い藍色。あの手を離しても、既に苦しいほどに心に刻まれてしまった。

どうしたらいいのだろう。

どう、すべきなだろう。  
自分は どうしたい？

黒い瞳が、様々な思いに、揺れる。ミディアスの風が、短い髪をなびかせる。

空は、静かに、ゆっくりと進む馬車の中で、膝に乗せた、ディーラからの贈り物を握り締めていく。

その包みからかすかに漏れる優しい香りが、ただそっと、空に寄り添ってきているようだった。

久しぶりのエシユタンドの私室に足を踏み入れて、空はなぜか安堵の気持ちが生まれるのを感じていた。

王宮へ戻った時には、緊張のピークで、クガルに心配されるほどに顔色が悪かったらしく、まずはここでしばしの休息を　と案内されたのだ。

もう既に夜の帳がおりていて、相変わらずの広い部屋には、やわらかな灯りがともされている。

本当なら食事や湯浴みをして、ゆっくりと休むような時刻だったが、やはり今日中の王への謁見は避けられないとのことだった。

それでもこうして少しでも一息つける時間があるだけで、空はほっとしていた。

自分で思った以上に疲れていたらしい体を、先ほど侍女が持ってきてくれた温かい香草茶が少しずつほぐしてくれるようだった。

いくら豪華な馬車でも、ずっと座ったままでの移動は、やはりきつかったらしく、足腰が痛い。ドレス姿を崩さないように座っていたせいで、余計に疲れた。やっぱり自分にはこんなもの不向きなんだから、と空はやわらかな薄緑色のドレスを覗んだ。これから謁見があるから脱げないが、せめて今だけ、と窮屈な靴を脱いだ。ソファでもたれたら、気を抜くと眠ってしまいそうなほど、重い疲れと眠気が襲ってくる。

それでも一日ほぼ休憩もとらず走った馬や、御者の方がもっと疲れているんだから、と空はだるさを訴える体を叱咤するように立ち上がった。

そのまま大きな窓へ歩み寄る。もう暗く静かな闇が阻んで、王宮の庭もよく見えない。

こんな闇の中で、安心して休める場所があることは貴重なことなのだ、空はあのセルスの森に放り出された時のことを思い返して



いた。

その時、静かな音がして、扉が開く。声もかけずにこの部屋へ入ってくる、空以外の人物は一人しかいない。

思わず大きな動作で振り返った空は、藍色の瞳と目が合った瞬間、思った以上に心臓がはねるのを感じた。

「エシュタンド……」

呼ばれて、少しだけ微笑んだ彼は、ゆっくりとこちらへ歩いてくる。

靴の音が静かな部屋に響き、裾の長いマントが優雅に揺れる。

襟元をつまんだ、目の覚めるような白の、金の刺繍が美しい正装以前にも一度見たことのあるものだ。そう、以前これを着てエシュタンドは、王に向かって、空が暁の娘だと告げた、その時のものだった。

それを思い出しながら、空はまさか現実になるなんて、と心の中で苦笑する。

空のいる窓辺までやってきたエシュタンドは、そっと隣に並んで空と向かい合う。

正装のエシュタンドの美しさはあの時と同じであるのに、違ってしまったのは、自分なのだろうか。苦しいほどに、その姿に目を奪われて改めて、自分に問う。

空を見つめる、彼の姿は、言葉にできないぐらいに美しく、立派で　そう、ミディアス王国第三王子としての、エシュタンドの姿だった。

言葉もなしに見つめる空に、エシュタンドは笑った。

「どうにも堅苦しくて、嫌いなんだが……仕方がない。久しぶりの謁見だからな」

この場に張り詰める緊張の前触れをやわらげようとでもいうような、明るい声に、つられたように、空も笑う。

「あたしも……ドレスって、窮屈で苦手。本当なら楽な部屋着で謁

見したいぐらい」

空の発言に、エシユタンドは硬かった笑顔を優しくした。

「本当にそうすれば、父上も皆も、腰を抜かすかもしれんな。そんな姿を見たい誘惑にもかられるが」

「そうだね」

こうして笑いあうことが、久しぶりな気がした。王子だとか、暁の娘だとか、そんなことを何も気にせずいられたらいいのに。

このまま、彼と並んで、ただ時を過ごせたら 無意識に頭に浮かびかけた願いを、かなわぬものだ空は自分で打ち消した。

だってエシユタンドはこの国の王子で、自分は、迷い込んだ異国の、異世界の娘で……それが現実だ。

白い布地に細やかに施された金糸の模様を眺めて、空は笑顔を翳らせた。

「ソラ」

低く、滑らかな声で呼ばれて、空は顔を上げる。

エシユタンドが窓辺に置かれたソファに座るよう、促した。

言われたとおり、空が隣へ腰掛けても、少しの沈黙が続いた。優しい灯りに照らされて、二人の影が揺らめいている。

ドレスの裾を直す空の隣で、エシユタンドは何かを考えていたように動かなかつたが、軽く息を吐き出すと同時に、空のほうへ向き直った。

「あれから、色々考えたんだが これから父上には精霊のことも含めて、森の危機についても話さないわけにはいかないと思う。

この国を脅かす重大な問題である限り、国を導く者としての判断は、やはり父上に出していただかなくてはならないからな」

エシユタンドの真剣な眼差しに、空もただ黙って頷く。もちろん、最もなことだからだ。

空の反応を見て、エシユタンドはそのまま話に戻る。

「問題は、彼らの宝玉や、聖殿の腕輪のことをどうするか そし

て何より、お前のことだ」

自分でもわかっていたことだったが、改めて話題を振られると緊張が走った。空は自然と膝に置いていた両手を固く握り締めた。

「精霊に連れ去られた訳を説明するには、お前が暁の娘であると話すことは避けられない。だが、それを話すことで、お前に今までは比べ物にならない重圧がかかることになる。そのほとんどは、皆から寄せられる期待であろうが、あるいは、好奇や疑惑の目を向けてくる者もいないとは言い切れん。

それどころか　私欲から、お前の排斥を願う者もいるだろう」  
それが誰であるのか、話さずとも空にもわかった。あの冷酷な、憎しみに満ちた王妃　エシユタンドの、義理の母親。

そう、空が暁の娘であれば、一番困るのは彼女だろう。もしも空がエシユタンドの正式な婚約者にふさわしいと認められれば、エシユタンドは王位へと更に近づくこととなる。彼女の望む、エカルドの即位はより遠いものとなるのだから。

背筋が寒くなるのを感じながら、空は唇を噛んだ。

エシユタンドはため息と共に、首を振る。

「お前にとって一番いいのは……今すぐ元の世界へ帰ることだろうが、まだ方法もわからぬ今の状況では、お前を暁の娘として、大切に守れる立場に置いた方がいいのかとも思うが　　宝玉や腕輪の存在を話せば、すぐさま試してみよと命じられるだろう。もしも何の力も発揮できなかった場合、どうしたものか。

いや、それよりも、何らかの力が生まれたとしたら、それはお前をこの世界に大きく巻き込むことになる……」

段々と苦悩のにじみ出る彼の表情から、空をととも察じてくれているのが伝わってくる。

空はただ眉を寄せて、藍色の瞳を見つめた。

「だから、宝玉と腕輪のことは、まだ黙っていようかと……そう、思うのだが」

しばらく悩みながら話していたエシユタンドが、言葉を止める。

何かを話そうと開かれた唇は、ためらったあと、言葉を失ったように閉じられた。

天井に向けられた瞳を閉じて、エシユタンドは再び大きく息を吐いた。

「エシユタンド……？」

そっとかけられた、空の気遣うような声に、エシユタンドは思いがけない笑みを漏らした。藍色の瞳に浮かぶのは、自嘲の色のものであった。

もう一度名を呼ぼうかと、開きかけた空の口は、エシユタンドが乱雑に金の髪をかきあげるのを見て、そのまま止まった。

「話をしようと、言っておきながら……これでは卑怯だな。本当に話さなくてはいけないのは、こんなことではないというのに」

独り言のように低く呟いて、エシユタンドは空を見た。その瞳に浮かぶ、やるせない影に、空は目を奪われる。

「お前の口から、聞くのが怖かったんだ、本当は　別れを告げられる瞬間を、引き伸ばしていたかった」

先ほどまでの冷静さが徐々に揺らいでいくように見える。エシユタンドは正装の襟元を少し緩めて、悲しげな笑みを浮かべた。

「覚悟はした、つもりだったのにな」

その少しかすれた呟きが、空の胸を突く。

別れを、告げる？

言葉の意味はわかるのに、それを想像すると胸の中が痛みでいっぱいになってゆく。

でもそれが、一番現実的で、まともで、楽になれる、選択だと彼もわかっているのだ。

言葉を止めた空を見て、何かを誤解したように、エシユタンドは瞳を伏せて、唇を結んだ。

「……大丈夫だ。暁の娘であろうと、何であろうと、お前が帰るための方法を探して、それが見つかるまで、どこか安全な場所を守ら

せてもいい。

「どんなことをしても、お前に危険は及ばせない。そうだ、聖殿へやってもいい。聖獣の力で守護させて、そして」

硬い声で、早口で話を進めようとする、エシユタンドがなぜか痛々しくて、見ていられない。そう、思った。

「思っただけだと思ったのに　気づけば、空はエシユタンドに抱きついていた。」

「ソ、ラ　？」

戸惑いが、呼ばれた名に込められている。空はそれがわかって、抱きつく腕を強めていた。

「いけない、そう思う意思とは裏腹に、唇が言葉を紡ごうとする。」

「あたし、あたしは……」

自然と滑り出そうとする言葉は何なのか。わからないまま、空はエシユタンドを見上げる。

間近で見つめあう、藍と黒の瞳は、あふれ出す何かに、引き寄せられていく。

放心したように固まっていたエシユタンドの両腕が、力を取り戻したかのように、空の体をきつく抱いた。

「触れ合う体の熱に、何かがまさに融け落ちようとした、その瞬間だった。」

扉を叩く音と共に、侍女の静かな声が響いたのだ。

「殿下　陛下が、王族の間でお待ちでございます」

二人の間の空気を、瞬時に冷ますような、その言葉　その現実　に、抱き合っていた体が、離れた。

「……わかった。今、行く」

エシユタンドが、空を見つめたままそう答える。扉の前で、侍女の気配が消えていくのがわかった。

瞳に揺らめいた、熱い感情を抑えるかのように、エシユタンドが衣装の襟を正した。

空も、まだ少し震える両手を下ろした。

一瞬だけ、名残惜しげに残された彼の視線は、空が立ち上がるのと同時に、そらされる。

「とにかく、どんな事態になっても、私はお前を守る。それだけは約束する　だから、心配するな」

マントをはらって立ち上がったエシユタンドは、背中を向けたままそう言った。

「王族の間の前で待っている。支度ができたら、出てきてくれ」

低い声でそう告げて、エシユタンドは扉を押す。

空が見守る前で、迷ったように立ち止まり　そして、振り向いた。

まっすぐな、藍色の瞳が空を映した。

「一つだけ、言うのを忘れていた」

その言葉に、空が何事かと思ったその時、エシユタンドは切なげな笑顔を浮かべた。

「そのドレス、お前によく似合っている。聖殿前で見た時から、綺麗だと……それだけ言いたかった」

揺れる瞳で空を見つめる、彼の眼差しは、空の胸を強く射抜いた。それだけ言うと、素早く扉の向こうに消えていく長身の後姿。

足音すら消えても、空の心ごと包むような、エシユタンドの想いが残されているようだった。

一瞬だけ触れ合ったお互いの熱さが、心の端からじりじりと焦がしていく。

空は泣きそうに顔をゆがめて、そしてすぐに振り切るように頭を振った。

先ほど脱ぎ捨てた靴を履く。

深く、長い息を吐いて、空は立ち上がって、扉を押した。

## 41・対面

「以上が、今回の件の顛末てんまつです」

エシユタンドが静かに語り終えたところで、空は伏せていた顔を少しだけ上げた。

まさに水を打ったような沈黙がその場に広がっている。

夜も更けた王族の間には、事情を考慮してか、少数の守護兵のみを残して、王族の者だけが集められていた。

豪華な広い空間では、その静けさが余計に際立っているように感じられ、空は緊張で冷たい手を握り締める。

皆の反応を待つ空の隣で、同じように膝をついて、エシユタンドが判断を仰ぐかのように、王を見上げた。

数段高くなった台上の金の椅子で、王は身じろぎもせず座っていた。

ただその灰褐色の瞳は、隠しようもない驚愕と困惑を垣間見せている。

濃い金色の王冠からこぼれた王の髪は、少し色あせたような金色をしていた。

エシユタンドとの色の違いを無意識に見比べていた空は、いつの間にか王の瞳に自分が映されていることに気づき、あわてて瞳を伏せた。

「その者が、暁の娘、だと　　？　森の精霊に呼ばれた、そう言うのだな？」

細い糸が張られたような静かな緊張を破ったのは、そう問いかける王の声だった。

エシユタンドは、深く頷いて、肯定の意を示す。

「はい。ソラを捜して、私も彼らと対面いたしました」

もう一度確認するかのように、エシユタンドが答えた。

王は少し震える口元をごまかすかのように、引き結んでから、も

う一度藍色の瞳を見据える。

「そして、このミディイスの森が、滅びかけている、彼らがそう言ったと」

「そうです、父上。彼らは森を救ってほしいと、我らがミディイスの偉大なる王に森の行く末を託したいと……そう話しておりました。賢王と名高い父上ならば、必ずや良い方向へ導いてくれるだろうと、そう信じて私に言伝を頼んだのです」

エシユタンドの語る内容は、真実とは微妙に違っているが、それを知る由もない王は、髭を撫でながら、考え込むように深く息を吐いた。

王は一体どう思っただろうか。

気になるのは空だけではないようで、王の表情を見守るエシユタンドの顔も、硬く引き締められていた。

空を守る　そう言ってくれた彼は、言葉通り、精霊に託された想縁珠のことも、聖殿の腕輪のことも、全く口にせず、ただ精霊が王に訴えたものとして、説明してくれた。それでも、空を暁の娘だと明かすことだけは避けられず、語られることとなったのだが。王はしばらく黙り込んでエシユタンドと空を交互に見つめていた。その瞳の厳しさに、まだ誰も言葉を発することはなかったが、王の隣で王妃がどんな顔をしているのか、恐ろしくて空は見ることもできなかつた。

「エシユタンド、お前の話が真実であるなら　精霊に認められた暁の娘を、王として歓迎しないわけにはいかないことになるな」

沈黙を破って発された王の第一声に、わずかなざわめきが広がった。

壁際に並べられた王族の椅子で見守っていたエシユタンドの兄、姉たちの戸惑いや驚きの声である。

無表情を守って広間の扉付近に佇んでいる守護兵たちも、背筋を伸ばして、空たちの方を見ている。



「父上」

エシユタンドが何か言おうとした、その時、耐え切れなくなったように、高い声がざわめきの中に上がる。

「お待ちください、陛下」

「どうした、王妃よ」

やきもきしていたのであるう、王妃は問いかけられると同時に隣に並んだ王を責めるような瞳で見た。

「王子の語る話が、真実であるという証拠はどこにあるというのです！ 精霊などと、そのようなもの、いまや御伽噺の中にしか存在しない、夢物語ですわ。」

そんなものが突然このような娘を呼び、はたまた王子に言伝を頼んだ、ですって？ そんな言葉を信じろというほうが無理な話です。大体、王陛下に話したいことがあるというのなら、それも、森が滅ぶなどと、大それた話なのならば、王宮へやってきて、自分の口から陛下に訴えればいいではありませんか！ 姿も見せずに陛下に訴えようなどと、虫の良い、そんな勝手な話がありますの？」「興奮と憤りを示すように、王妃の頬はひきつり、水色の瞳はきつく、ゆがんだ光を浮かべていた。

王が何か口を挟もうとするのを待たずに、王妃は白い手袋の両手を大げさに広げて、王を見た。

「そもそも、森が滅ぶだなんて、そんなことをどうやって信じられますか！ これだけ豊かで恵み深い森のどこに、そんな危機がひそんでいると言うのです？」

精霊に会った、だなんて、それすら本当なのか疑わしいところで「すわ」

息を荒げて、そこまで言い切った王妃の瞳が、エシユタンドを射抜くように見下ろした。

反論があるのなら言ってみろ、とでもいうような挑戦的な表情だった。

王妃の言う何もかもが、やはり、と思う反応で、空は心臓が嫌な

鼓動を始めるのを感じた。

彼女のいうことは正論でもある。空だって、精霊など目にしなければ、現実に信じることなど難しかったかもしれないのだから。

突然ふってわいたような自分の存在も許せない王妃からすれば、全てを疑いたくなるのが当然の反応だと理解できた。

エシユタンドは、どうするんだろう　空が不安な胸を押さえながら仰ぎ見ると、予想はしていたのか、エシユタンドは一切の動揺も見せずに視線を上げた。そのまま感情の浮かばぬ瞳で王妃を捉える。

それを待つていたかのように王妃は続けた。

「それとも、何か証拠でもおありなのかしら。私たちに精霊の存在を示すことのできるような、決定的な証拠でも……？」

研いだ刃物のような嫌な光をたたえた水色の瞳が、ゆっくりと細められる。

王妃の剣幕に少し口をつぐんでいた王も、その場の空気を落ち着かせるように、咳払いをする。

「リダネア、お前の言わんとすることはわかる」

灰褐色の瞳が、静かに王妃のほうを向いた。リダネア、そう呼ばれて王妃は少し勢いをそがれたようだった。

初めて知った彼女の名前に、あたりまえなのに彼女も一人の女性なのだ、と空は奇妙な感覚にとらわれていた。

王の静かな威厳にいさめられたように、王妃は浮かせかけていた腰を下ろした。

それを見届けてから、王が正面に向き直り、口を開いた。

「先ほど私が言ったのは、エシユタンドの言うことが真実であれば、という前提での話だ。もしも真実その娘が暁の娘であったならば、これほど喜ばしいことはない。

正式にエシユタンドとの婚約を進めなくてはなるまい。そして森の話についても、早急に調査し、対策を練らねばならんだろう。しかし、王妃も言ったように、簡単にうのみにするには突然で、突

拍子がなさすぎる話だ」

あくまで冷静に告げて、王は皆をゆっくりと見回した。王の言葉を受けて、どこか騒然としていた広間の雰囲気も、静かになった。

「エシユタンド、王としては、いくらお前の言うことであっても、国をゆるがす問題である限り、証拠もなしに信じるわけにはいかぬ」  
しっかりと言い切って、王がエシユタンドを見つめた。

「エシユタンド、どうなのだ　証拠とでも呼べるものは、何かあるのか？」

瞳を伏せたままのエシユタンドに、王が問いかける。

不安げに見守る空の前で、エシユタンドはしばらく目を閉じてから、唇を噛み締める。

「エシユタンド……」

小さく、呼びかけた空の声に、エシユタンドは迷いを吹っ切ったように、顔を上げて、王を見た。

「証拠は、ありません」

その言葉に息を呑んだのは、空だけではなかった。

嬉しそうに、まさに打って変わって喜びにあふれた声で、王妃が叫んだのだ。

「ほら、ご覧なさい！　証拠がなくては、話にならないわ。陛下、どうなさるおつもりです。万が一精霊に呼ばれたなどという話がでっちあげであったなら、王子が裏で何をしているのかなどと、わかったものではないのですわ。我々をも謀ろうとする心があるのやもしれません。自分の立場を考えもせず姿を消したりなどと、第三王子としての責任問題に問うべきです！」

激しい王妃の声は、王族の間に響き渡った。その場にいる全員に訴えかけるように。

「こんなことから、卑しい血の生まれでは、王位継承者などとは言えないのですわ」

氷のような無表情で王妃を見上げるエシユタンドに、吐き捨てる

よつに言われた言葉。

口を開こうとした王よりも先に立ち上がったのは、空だった。

「やめて！」

たまらずに叫んだ空の声に、王妃は驚いたように目を見開いた。

「やめて……ください、これ以上、エシユタンドを侮辱しないで！」

最後は搾り出すように発された空の叫びは、王さえも圧倒したかのように、強く響いた。

両手を握り締めて、王妃を睨む。

空の視線に、ようやく我に返ったように王妃が瞬きをした。あまりの驚きに固まっていた王妃の顔が、たちまち怒りの色に染まっていく。

それを目にしながらも、空はもう言葉を抑えられなかった。

「エシユタンドは……ラウレカさんは、卑しくなんかない！ 聖なる力にあふれた、素晴らしい人だったんだから！」

聖殿で目にしたあの肖像画を思い出しながら、ディーラが語ったエシユタンドの母を想いながら、空は叫んだ。

「何、ですって……？」

王妃が震える声で呟く。その瞳は、空一人に向かって燃えている。恐ろしいくらいに青ざめた王妃の顔に、空は徐々に忘れかけていた恐怖が蘇るのを感じつつも、後にはひけずに睨み返す。

王妃の言葉に対する怒りが、恐怖より大きかったのだ。

「彼女は、命をかけてエシユタンドを生んだ……大切な、愛しい王子を。その王子を侮辱することは、彼女の愛も、命も、侮辱することです！」

王族の間が静まり返る。空の言葉の余韻だけが、その場に漂っていた。

「ソラ……」

小さく、かすれたような声が耳に届いて振り向くと、エシユタンドが膝を突いたまま、空を見つめていた。

その藍色の瞳は、湖のように澄んで、彼の心にひしめく様々な想

いを映し出しているようだった。

空はたちまち自分の行動が恥ずかしくなった。せつかく我慢してくれていたエシユタンドの好意を無駄にってしまったのだから。

これで、見事に王妃から敵対心を持たれただろう。瞳を伏せても、射すような彼女の視線を感じた。

それでも、口に出した言葉に、後悔はなかった。

王妃の視線によりも、エシユタンドの深い瞳から逃れるように、空は再びひざまずいた。

「……娘よ」

黙っていた王に突然呼ばれて、空は弾かれたように面を上げる。

空の黒い瞳を、くいいるように王は見つめた。

「お前は、エシユタンドの話が確かだと言っただな？」

静かな問いかけに、空は恐れをはらった瞳で、しっかりと頷いた。

「はい。このミデイスの神に誓って……お疑いであれば、東の聖殿のディーラ、様にお確かめください。彼女は私たちを通して精霊の力を感じたと言っていました。」

私たちが信じられなくても、このミデイス最高位の巫女の方が言われる言葉なら、信じられるのではないですか？」

自分でも不思議なほど、空は落ち着いていた。それは冷静な心からではなく、王妃に対する怒りからくる湧き上がるような沈着さだった。

エシユタンドの痛みが、そのまま空の心に根付いていて、王妃に踏みつけられたその根が悲鳴をあげてくるようだった。

「なるほど、そう言われては、一方的に疑うわけにもいかぬな」  
王の声は、予想に反して、少し嬉しそうに聞こえた。

思わず訝しげに見上げた空に、王は微笑んだ。口角をほんの少し上げただけの、それでも確かな笑顔だった。

「陛下……！」

悲痛なまでにうるたえたような王妃の声が上がる。王は、今まで

浮かんでいた笑みをたちまち消して、王妃に視線を向けた。

「リダネア、そなたの言うことを無視するのではない。ただ、信じられるか、機会を与えてみようではないか」

一瞬だけ見せた夫としての顔で、王妃を説得する王は、どこか楽しげだった。

そんな王に何も言えなくなったように、王妃は口をつくむ。だが、その両手は震えていた。

次の瞬間、空を見た灰褐色の瞳は、既に威厳ある王のものだった。「もうすぐ来る収穫祭で、巫女に代わって、お前に白水晶の滝を切ってもらおう。ハルトの聖剣で、儀式を行ってみよ。」

本当の暁の娘であれば、聖なる巫女と同等の存在であるはず。滝の精の怒りを買わずに無事成し遂げることができたなら、お前が真に暁の娘であると認めよう」

当然のように、空にそう告げて、王は続けた。

「そしてその時は、エシュタンドの言葉が真実であることも認めようではないか。精霊の存在も、森の危機も、王として対処することを誓おう」

文句はないだろう、といわんばかりの王の表情に、空は今更ながらに固まっていた。

自分が放った言葉が、そういう意味になるのだと エシュタンドを信じてほしいと訴えることは、自分が暁の娘であることも認めさせることで……結果としては、このままこの世界に残ることを意味するのだと、ようやく思い知って、空の頭から怒りが抜け落ちていく。代わりに生まれる不安と恐怖が、冷たい汗として背中に流れた。

「どうだ、娘よ」

王が静かに問いかける。

「ソラ　！」

小声で、引き止めるように呼ぶ、エシュタンドの声が、逆に背中を押すようだった。

「……はい」

空の返事に、エシュタンドが息を呑むのがわかった。

震える手を、ドレスを握ることでごまかして、空は顔を上げた。

「本当に、約束してくださいませね　？　その時は、エシュタンドの言葉を信じてくださると……森を救うために、力を尽くしてくださると？」

おそろおそろ訊ねた空に、口元の皺を深くして、王が頷いた。

空の瞳は、そのまま蒼白な顔をしている隣の王妃へと向けられた。

「私が、無事に儀式を成し遂げたら……約束してください」

この上何を　水色の瞳にくすぶっていた怒りが新たに燃え上がるのがわかる。それでも、言わずにはいられなかった。

「エシュタンドを　彼の母親を、もう二度と侮辱したりしないと」その言葉に王妃の眉が釣りあがる。ぶるぶると震える両手は、ドレスの布に隠された。

答えを促すような、王の瞳は、意外なほどに強く王妃を見据えていた。短いような、長いような瞬間の後　王妃は、無理やりに頭を動かしたように、ぎこちなく、頷いてみせた。

そしてそれが精一杯であったかのように、席を立ち、退出してしまっただった。

苦笑した王が、衣装の裾をはらいのけて、立ち上がる。

「もう夜も遅い。今日は皆、休むがよい。また明日　話すべき問題がまだ残っているからな」

少し疲れたようにそう言って、王はエシュタンドを呼んだ。空の視線の中、エシュタンドは我に返ったように台座の王の元へ向かった。

彼にだけ囁かれた何かに、エシュタンドが、硬い顔で頷いて、一礼する。

そして、空の全身を緊張させていた王との謁見は、終了したのだった。

## 42・奔流

部屋に戻るなり、エシユタンドが沈黙を破った。

「なぜだ、ソラ どうして、あんなことを言った！」

空の両肩を掴む力は、痛いほど強く、藍色の瞳は、今までの氷が融けたように激しい色をしていた。

「エ、エシユタンド……」

王族の間での冷たい仮面を脱ぎ捨てたような彼の剣幕に驚いて、空はただ名を呼ぶ。

「一体、何をしたかわかっているのか？ 王と約束を交わしたりして このままではお前は……」

激しかった彼の声が、徐々に力を失っていく。

空の胸まで射抜くような眼差しは、苦しそうに揺れて、言葉を発さなくとも、彼の心を物語るようだった。

沈黙が空の心にも浸透していく。

先ほどの自分の言動を思い出しながら、空はエシユタンドの瞳を受け止めていた。

「そうだ、あたしは……皆の前で公言してしまったんだ。」

自分が、暁の娘であることを認めると、結果的には王にそう約束させた。それはエシユタンドの婚約者として、この世界に残ることを当然のように意味しているというのに。

今更ながらに重く押し掛かってくる約束が、空の体を震えさせる。

それを見て、エシユタンドが大きく息を吐いた。

「考えていなかったはずはないだろう。お前の言葉がどれほどの意味を持つか……」

低く、苛立ったように呟いて、エシユタンドは空の肩を放した。

「後になって、やっぱり考えが変わったとも言つつもりか？ それで皆が納得するとも思うのか！」

今まで聞いたこともないような、エシユタンドの乱暴な口調。た



じろぐ空から視線を外して、エシュタンドは自分を落ち着かせるように、深く息を吸う。

遠く、耳鳴りがする。空は、今言われたばかりのエシュタンドの言葉が、頭の中で反響していく気がしていた。

無言のままの空に、エシュタンドは耐えられないように、口を開いた。

「なぜ？ それなのに、なぜ私をかばったりしたんだ！」

藍色の強い瞳が、空の体を縛った。身動きも、呼吸すらもできないような、錯覚がする。

眩暈がしそうなほどの重圧に、空は固く目を閉じて思わず叫んでいた。

「嫌だったの……！」

空の悲痛な声が、二人の間に響いた。

一言、口にしてしまえば、糸がほぐれていくように、心に閉じ込めた想いがあふれていく。

凍りついたように空を見返すエシュタンドに、空は揺れる瞳を向けた。

「あなたが侮辱されるのが、許せなくて、どうしようもなく、嫌で我慢できなかったの。」

王妃にだつて、誰にだつて……あなたを悪く言われることなんて、耐えられなかったんだもん！」

叫んだ瞬間、涙が零れ落ちた。

必死に留めていた言葉が、心が、流れ出てしまふ。

「……なぜ」

エシュタンドの乾いた声が、再びそう言った。

一筋だけ残っていた空の最後の抵抗が、涙と共にあふれて、夜の闇に溶けていく。

「なぜ？ そう、聞くって言うの？ なぜ、だなんて、そんなの……決まってるじゃない！」

あふれ出した感情は、空自身をも飲み込んで、エシュタンドへと

流れていく。

藍色の瞳が大きく見開かれている。その瞳を半ば睨むように、空は見つめた。

「あなたのことが好きだから……どうしようもないくらい、好きになっちゃったから、何も考えられなかったの！ あなたを守りたかった、あなたを救いたかった。

だから、だから」

嗚咽に消えそうになった空の言葉は、エシユタンドの強い手で遮られた。

「ソラ、もういい！」

震える口元を押さえようとした、空の手首を捕まえて、エシユタンドが言った。

見上げた空を切なげに見つめて、首を振る。

「もう、いい……何も言うな」

低く、優しい彼の声で、空の涙は堰を切ったようにあふれた。しゃくりあげはじめた空の背を、ゆっくりと大きな腕が包む。

もう、だめだ。もう、動き出してしまった。

自分では止めようもない大きな感情の流れが、空を引きずりこんだ。この、とてつもない世界に。

帰りたくない、わけじゃない。ここにいたい、わけでもない。

それでも選んでしまったのは、この……腕の中にあること。

この、苦しいほどに恋しい、藍色の王子のそばにいたいこと。

涙でぼやけた視界の中で、空はひたすらエシユタンドを見つめる。返されるのは、同じ想い。

触れ合う体中から、強い腕の力から、深い吐息から、彼の想いが伝わる。

伝わってくる、その熱が、空の心を大きく包み込んでいく。

まるでしがみつくとように、抱きついた空を、エシユタンドは更につきつく抱いた。

白い月が厚い雲に隠されて、いつの間にか灯りの消えた部屋の中を、暗闇が覆う。

先の見えない恐ろしい流れの中に放り込まれてしまったような、恐ろしさと、既にあふれてしまった自分の気持ちとが、空の心で入り乱れていく。

何も、わからない。何も、考えられない。

ただ、わかるのは……。

とんでもない人を、好きになってしまったことだけ。なぜ、と自分に問いかけても、罵っても、もう遅い。

もう、全ては、始まってしまったのだ。

いや、始まって、いたのかもしれない。

この世界へやってきた時から。

彼と、出逢ってしまった、あの時から。

恐怖も、不安も、全てを忘れさせるほどの、エシユタンドの抱擁に、空はすがりついていた。

息苦しいほどの腕の中は、温かくて、どうしようもないくらいに心地よくて 解放された自分の想いが、彼の想いと溶け合っていてくようだった。

瞳を閉じた空の頬を、エシユタンドが愛しげに撫でた。

\*

「ほ、ほ、虫来い。

あっちの水は苦いぞ。

こっちの水は甘いぞ。

ほ、ほ、蛍来い』

『ねえ、おばあちゃん、どうしてホタルは光るの？』

『さあねえ、ああやってオスとメスが呼び合っているんじゃないかねえ』

『呼び合っている、ってどういう意味？』

『好きな人を捜して、こっちじゃよーって呼んどるっちゆうことじやよ』

『ふうん』

『空も、おつきいになったら、そんな人ができるとええねえ』

『うーん……よくわかんない』

『ふふふ』

『ねえ、おばあちゃん、あのお歌うたってよ！』

『あのお歌かい？ 空はあのお歌が好きじゃねえ』

『うん！ ねえ、はやく、はやく！』

青い空、赤い空

遙かな空よ

あの人を連れてきて

愛しい、愛しい、あの人を

短い夢、儂い夢

優しい夢よ

あの人を見せておくれ

恋しい、恋しい、あの人を

空より高い、夢より近い  
遙かな世界へ

いつかは共にと願うだけ  
願いを空に  
希望の空に  
我らが愛しい、空の子に

ほ、ほ、蛍来い。  
ほ、ほ、蛍来い……。

\*

目を開けたら、藍色の優しい瞳が見ていた。  
いつの間にか、辺りは明るく、朝の光が満ちていて、鳥のさえずりが届いている。

「おはよう ソラ」

愛しそくに、耳元でそう囁かれて、吐息が触れて、空はあわてて飛び起きた。

「エツ、エシユタンド　！　あれ、あたし、あたし……？」  
急いで見回して、自分が昨日のドレスのまま、寝台に寝ていたことがわかる。

髪やらドレスやらをあせって確認していた空を見て、エシユタンドが吹き出した。

よく見ると、彼は寝台に腰掛けていて、もう身支度も整えたらしく、落ち着いた顔をしていた。

び、びっくりした……まさか、また一緒に寝てたのかと思っ  
ちやった。

そんな空の心の声が聞こえたように、エシユタンドがにやりと笑った。

「隣で寝ていなくて、淋しかったか？」

意地の悪い目で覗き込まれて、空は真っ赤になる。

「なっ、何言つて……」

たちまち言い返そうとした空に、エシユタンドが立ち上がりながら続ける。

「侍女を呼ぶには遅い時間だったから、私が夜着に着替えさせてやってもよかつたんだが　よく寝ていたから、やめておいた」

そう言う彼はもう白い上着を着て、襟元の金の紐を結んでいる。

言葉の内容を寝ぼけた頭で繰り返して、空はまた抗議の声を上げようと口を開きかけたが、寝台の空の隣は、布が乱れてもいないままなことに気づいた。

一体、エシユタンドはどこで寝たんだろ。そう思っただけに見回した視線の先に、クッションの位置が変わったソファが目に入った。

もしかして、あそこで……？

空のそんな目線には気づかぬように、エシユタンドが背中越しに笑い声をもらす。

「それにしても、立ったままよく眠れるものだな」

「えっ？」

立ったままって、もしかして、えーと……。

昨夜の記憶を呼び起こしながら、思い浮かぶのは、エシユタンドの強い腕の力と、暖かな胸の感触。

もしかして、あのまま、眠ってしまったのだろうか。

同時に蘇ってきた自分の言葉に、空はたちまち顔を赤くさせた。

すごく混乱していたことはわかる。それは覚えている。だからといって、結局自分は、立派に告白めたことをしてしまった、のでは……？

それがわかった途端、空は卒倒しそうな気がした。

うわーっ、うわーっ、どうしよう！ あたしってば、一体何を口走って……っていうか、どうしたらいいのってそれだけじゃないし！

思い出すのは、王や王妃の顔。皆の前で交わした約束。その重さが今度は空を打ちのめす。

どうしよう……あたし、これからどうしたらいいの？

両頬に手を当てて、混乱の極致にある空の肩に、そつとエシユタンドの手が置かれた。

振り返った空の顔を見て、藍色の瞳が可笑しそうに瞬いた。

「随分と表情豊かだな。何をそんなに考えているんだ」

肩が開いたドレスのデザインから、自然と素肌に彼の手が触れた。それだけだというのに、瞬間に頬に血が上る。

手が触れただけ、それだけじゃない。昨日なんかあれだけ抱き合ってたんだから、とわけのわからないフォローを自分で入れて、余計に空の心拍数は上がる。

抱き合ってたんだ。っていうか、今まで何度も肩を抱かれたり、抱きしめられたり、拳句の果てに既に一度キスだっしてしている。

思い出す全てが空の呼吸まで追い詰める。それと同時にこんなことを考えている場合じゃないと自分で自分を叱咤する。

まさに爆発しそうな心臓を抱えて、目を白黒させている空を前に、耐え切れないようなエシユタンドの笑いが響いた。

「エ、エシユタンド……？」

あんまりおかしそくに笑う彼の姿に、空は戸惑いがちに彼を呼ぶ。そして気づくのは、彼のこんな明るい笑顔は久しぶりだという事実。いつの間にか混乱も恥ずかしさも忘れてそんな彼を見つめる。

自然と笑顔になる空の顔を、いつしか笑いをおさめたエシユタンドが見ていた。

目が合った途端、意外なほど優しい瞳が笑った。

「笑っている」

「……え？」

見上げたまま、問い返す空の頬に、包み込むようにエシユタンドの片手が触れた。

性懲りもなく音を立てる心臓を気にしながら、見つめ返す黒い瞳に、エシユタンドの深い眼差しが注がれる。

「お前は、笑っているほうがいい。そんな風に、素直に笑うお前のことを、私は好きになったのだから」

優しい、優しい言葉。空の心の奥深くまで届いてくる、藍色の光。言葉が出ないままの空に、エシユタンドは少し苦笑した。

「お前をこの国のいざこざに巻き込みたくはないが……私も今は素直に、お前がいることを喜ぼうと思う。」

とにかく収穫祭で、儀式を成し遂げること、そして森の危機への手立てを考えると、今やるべきことに、私も全力を尽くす。

お前は私を守りたいと言ってくれた。そんなお前を、私も全てをかけて守る。もしもいずれ……」

その後の言葉は、薄く微笑んだエシユタンドの胸にだけ止められたようで、空には伝えられなかったが、一瞬間いた切なげな光が、空の胸にも届いていた。

いずれ……。

彼の言葉を胸の中で繰り返しながら、空はそこから先の思考を止めた。

今はまだ、考えないでおこう。まずは目の前の問題をこなすこと。それを考える。



言葉にしないまま、視線だけを交わした。

空の思いも伝わったのか、エシュタンドが微笑んだ。

「さあ、忙しくなるぞ。まずは……」

そう、エシュタンドが指を上げて数え上げようとした時、申し訳なさげに、小さな音がなる。

その出所を目で追って、空は恥ずかしそうにお腹を押さえた。

「腹ごしらえ、だな。とにかく先に、湯浴みでもしてこい。侍女に用意させてある。準備ができれば、下りてきてくれ」

笑いをこらえて空にそう言うと、エシュタンドは部屋を出て行くとして、そしてまた空のもとへ戻ってきた。

何事かと見つめる空の耳元に素早く顔を近づけて、エシュタンドが口を開く。

そして囁かれた一言に、空は目をぱちくりさせて、そしてゆっくりと笑顔を浮かべた。

それを確認して、エシュタンドは今度こそ部屋を出て行ったのだ。った。

『ありがとう』

彼のその一言に、色々な想いが込められていたから。受け止めた空の心も、少し明るくなっていく。

とにかく、今は、この世界でやるべきことをやろう。

こうして自分がここへやってきたことも、きっと何かの意味があると信じたい。

そして、少しでも 彼の役に立つことができれば。

あの笑顔を見ることができれば。

自分にも何かできそうな気がするから。

微笑んで、エシュタンドの出て行った扉を見ていた空は、背筋を伸ばして、歩き出した。



### 43・笑顔（前書き）

更新を長らくお待たせして、申し訳ありません。

自宅PCの調子が悪かったり、私生活が忙しかったりで、投稿ができませんでした。

また、これから徐々に更新していきますので、よろしく願います。

### 43・笑顔

「ああ、兄上！ 姫君も……無事のお帰りで、何よりです」  
寝台の上で半身を起こしたエカルドが、空たちを迎えた。

「心配をかけてすまなかったな。お前のほうは大丈夫なのか？」

笑い返してから、エシユタンドが寝台に歩み寄る。そばにある椅子に腰掛けた彼に呼ばれるままに、空も隣の椅子に座った。

「ええ、ただ少し疲れが出ただけで……昨日は一緒に謁見できずに、申し訳ありません。母上が大事をとれとどうしても」

心配したほど顔色も悪くなく、笑顔も元氣そうなエカルドを見て、空も安心した。

昨夜の謁見を、エカルドが体調不良を理由に欠席していたことを聞き、湯浴みと朝食を済ませた後にすぐここへ来たのだ。

並んだ王族の席に、彼がいなかったことにすら気づかなかった自分分は、よっぽど緊張していたらしい。

久々に会うエカルドは、相変わらず優しい笑顔を浮かべて、空を見てくれた。

「話は父上から聞きました。大変なことになっているようですね」

「心配そうに言うエカルドに、エシユタンドも頷く。

「まさか、精霊が姫君を連れ去っていたなんて……それに、暁の娘の伝説が本当だったなんて……驚きましたよ」

空に向けられた水色の瞳には、純粹な驚きと、気遣うような色があつた。

「まだ、本物だって認められたわけじゃないですけど」

空がそう言うと、エカルドは少し困ったような顔をして、瞳を伏せた。

しばらくためらったように窓の外を見やっしてから、口を開く。

「ごめんなさい、姫君も、兄上にも……」  
突然の謝罪の言葉に、エシュタンドも驚いたようにエカルドを見る。

エシュタンドの視線を受け止めて、エカルドが悲しそうな微笑を浮かべた。

「母上のこと……いつも兄上にはきつくあたられて……僕のせいです  
すね」

「エカルド」  
眉を寄せるエシュタンドに、エカルドは首を振って見せる。

「いいんです。本当のことですから。決して心底から悪い人ではない  
いんですが……僕を溺愛するあまり、行き過ぎてしまつところがあ  
つて」

王妃のことと、エカルドのことは、なぜだか親子だというのに別の  
目で見えていた空は、エカルドの言葉で、改めて驚きを感じていた。  
そうだ、あの王妃は、エカルドの母親で エシュタンドにはま  
るで敵かたきのように冷酷な態度をとつていても、エカルドにとっては、  
あくまで母親なのだ。彼女があそこまで激昂するのも、全ては息子  
を愛するがあまり。

そう思うと、なんだか悲しくさえなってくる。  
黙っていた空に気づいたように、エカルドが笑う。

「大丈夫ですよ、姫君。僕からも母に話しておきます。姫君はとて  
も素敵な、兄上にふさわしい魅力的な方だとね」

いつもの穏やかな笑顔に、空はあわてて手を振った。

「そ、そんなこと……あたしはそんな……」  
空の反応にエカルドが可笑しそうに、続ける。

「本当に、姫君は こんなに純粋で可愛い方は初めてですよ  
心底から楽しそうなエカルドの笑い顔を見て、エシュタンドも少  
し頬をゆるめる。そして皮肉げな笑みを浮かべた。

「まだ子供なだけだ。免疫がないのだから、エカルド、お前もあま  
りからかうなよ」

「承知しました」

くすくすと、笑いながら答えたエカルドが、瞳を空に向ける。その水色が一瞬王妃のものと重なってドキリとした時、エカルドが笑いをおさめた。

「……それにしても、惜しいことをした　僕が先に姫君と出会っていたのなら、絶対に求婚したのに。悔やまれてなりませんよ」

冗談、のはずなのに、一瞬瞳に真剣な光が宿ったような気がして、空は身を硬くする。

「エカルド、冗談が過ぎるぞ。こいつはすぐ本気にするんだから、その辺でやめておけ」

エシユタンドの笑いを含んだ声に、エカルドは大げさに肩をすくめて見せた。

「残念。もつとからかってみたかったのに……兄上の幸せそうな顔を見ていたら、ついついやっかんできましたようです。」

早く僕もいい人を見つけなくては……」

何事もなかったように話すエカルドを見て、空も無意識に肩の力を抜いた。

そうだよ。まさか本気なわけないよね。びっくりした、だつて……。

一瞬だけ見せたエカルドの真剣な表情が、いつもとあまりに違っていて、まるで違う人物のように見えたのだ。

まだどこか緊張していた手をゆるめて、空は二人の会話を見守る。

窓の外から吹き込んでくる風が、少し冷たい。

話題はいつの間にか収穫祭のものになっている。

しばらく日程のことなどを話し合っていた二人を横目に、空はなんとなく視線をさまよわせた。

エカルドの部屋は、大きさこそエシユタンドの部屋と同じくらいだったが、それ以外では全くといっていいほど異なっていた。

広いだけで何も無い、寝台やソファなどの、数えるぐらいの物し

か置かれていない彼の部屋とは違って、エカルドの部屋にはいかにも王族らしく、豪華な彫刻や絵画などが飾られ、天井にも複雑にひしめくレリーフ、床には動物の毛皮、そして寝台の他にも紅茶を楽しむようなテーブルのセット、机、などの美しい家具が並んでいるのだ。

そういえば、エカルドの衣装も、エシユタンドよりもどこか華やかさを感じさせるものだった。

今着ている部屋着であるブラウスにしても、エシユタンドの白いシンプルなブラウスとは違い、レースや刺繍が細かにあしらわれた繊細なデザインで、それがよくエカルドに似合っている。

王妃ゆずりであるう美貌に、華やかな雰囲気、そして穏やかで優しい性格。

これならきつともてないはずはないだろうに……まさか、自分に興味なんて抱くはずもないだろう。

改めてそう結論付けて、空は先ほど感じた得体の知れない不安のようなものを打ち消そうとしていた。

そんな空の目に、部屋の端の本棚が映った。

本がたくさん……読書が趣味なのかな。

「ああ、もし興味があまりなら、持って帰ってくださってかまいませんよ」

いつの間に話が終わったのか、エカルドに急に声をかけられて、空は思わず飛び上がりそうになった。

すっかり自分の考えに夢中で、突然話しかけられるとは思わなかったのだ。

「い、いえ……まだあたし、文字は読めないんで……」

精一杯の笑いに驚きを隠して、空は答える。

やはりわざとらしくかったのか、エシユタンドは黙って意地の悪い微笑みを向けてくる。

「そうだな、お前もいつまでも読めないままでは困るだろう。何か借りて帰って、勉強してはどうだ」

エカルドはエシユタンドの含みには気づかないのか、単純に優しい笑顔で空を見た。

「ええ、どうぞ。気に入ったものがあれば、何冊でも結構ですよ」「どうせ読めはしないだろう、とでも言わんばかりの、憎たらしいほどの笑顔を向けてくるエシユタンドに腹が立ち、空は立ち上がった。

「そうですね　じゃあ、遠慮なく!」

憤慨したように本棚に向かう空の背後で、エシユタンドが笑いをこらえる気配がする。

「ちようどいい。午後にもリゴトを呼ぼうと思っていたところだ。お前も収穫祭についての勉強が必要だからな。」

せつかくだから、何か関係のある本を持っていくといい」

聞き覚えのある老教師の名前にひるみそうになるが、今にも吹き出しそうな声で勧めるエシユタンドの手前、後に引けずに、空は本棚の前に立った。

「言われなくてもそうしますー!　で、どれが収穫祭の本ですか?」  
口をとがらせて振り向いた空に、エカルドも半分笑いながら指差した。

「その赤い表紙のものですよ。ミディアスの伝統行事、季節の風習などが書かれたものです」

言われるままに、赤い分厚い本を手にとって、空はエシユタンドを睨んだ。

「どんなことが書いてあるのか楽しみ!　持って帰って先に勉強しようかなー?」

わざとらしく憎まれごとを言う空に、エシユタンドはどうぞ、と言わんばかりに微笑んだ。

「予習しておこうとは、優秀な生徒だ。さぞやリゴトも感心するだろうな」

少しは引き止めてくれるかと思えば　エシユタンドは楽しそうに腕組みして、空の答えを待つばかりだ。



その余裕の態度が、無性に苛立たしくなつて、空は本を両手で抱えた。

「それじゃあ優秀な生徒は先に戻ってます！ 後で帰ってきても、相手してあげないから」

舌を出して回れ右をする空に、エシユタンドは苦笑だけを返して、見送る。

「じゃあ、王子。お大事に」

精一杯の嫌味を込めて、エカルドに満面の笑顔でそう言うと、空は扉を乱暴に開けて、部屋を出て行ったのだった。

「はあ……」

勢いにまかせて持って帰ってきたものの、当然読めるわけもなく、空はため息をついてテーブルにつつぶしていた。

「まあ、姫君。読書ですか？」

頭上から降ってきた可愛らしい声に、空は飛び起きた。

気づかない間にやってきたらしい侍女が、湯気の上るティーカップを載せたお盆を手に、空に微笑んでいた。

「なんだ、エマナ。驚かさないでよ」

ほっとした顔で名を呼ばれて、肩をすくめるのは、空の世話をしてくれる侍女の中で一番話しやすい、小柄な少女だった。

昨夜も帰ってきた空に一番に喜んで、香草茶をいれてくれたのは彼女だった。

どこか雰囲気も幼くて、親しみがわくエマナは、空がこの国で初めて話した同年代の女の子で、自然と空の態度も気安くなっていった。「ちゃんとお声はおかけしたんですよ。それでも読書に夢中でお気づきにならなかつたので」

あまり気にしないように答えるエマナも、そんな空に好意を持つてくれているようで、他の侍女よりも近く接してくれるようだった。

エマナが置いてくれた香草茶は、昨夜とは違って、目が覚めるよ  
うな、わずかなスパイスが効いたものだ。

眠気にとられそうだった体を、ちゃんとさせてくれる。

「で、何を熱心に読んでおられたんです？」

好奇心いっぱいに亜麻色の瞳を瞬かせて、エマナが本を覗き込んでくる。

空は本から手を離して、ため息をついた。

「これ。収穫祭についての本らしいけど……あたしはまだ文字が読  
めないから、勉強しろってエシユタンドが」

空の嫌そうな答えに、エマナが優しく微笑んだ。

「まあ、殿下が？ あいかわらず、仲がおよろしくて……羨ましい  
ですわ」

立ち上がって体を伸ばしていた空は、エマナの言葉に吹きそうに  
なる。

「なっ、仲がいいって……あたしとエシユタンドが？ とんでもな  
い！ いつも意地悪ばかり言うんだから」

さっきまでの嫌味ったらしい笑顔を思い浮かべて、自然と空の声  
は大きくなる。

それと比例するように、エマナの笑顔は楽しげになった。

「な、なんで？ あたし何かおかしいこと言った？」

笑うとくしゃつとなるエマナの顔は、とても女の子らしくて可愛  
い。空はいつしか友達に話している気分で、素直に問いかけていた。

「いいえ。すみません。なんだか、嬉しくて……」

あわてて真顔に戻して、それでも笑いが残った顔でエマナは言っ  
た。

首を傾げる空を、優しい亜麻色の瞳で見ている。

「王宮にお仕えするようになってから、まだそんなに長くはないで  
すが、それでもこんなに不思議な方は初めてですわ。」

王族だけではなくても、姫君方というのは、とても、その 高  
貴な方ですから、姫君のように、自然にお話して、自然にお笑いに

なる方は、初めてで。

私たち侍女に対しても、全然気どったところもございませんし…

…」

言いながら、アマナは、しまった、というように口元を押さえる。「私としたことが…：申し訳ございません。第三王子の婚約者ともあるうお方に、こんなに気安くお話してしまつて」

いつもより長く話をして、ついもらしてしまつた本心だつたのか、アマナは恥じ入るように後ろへ下がろうとした。

空はあわてて両手を振る。

「そんな、全然気にしないでいいよ！ あたしはそんな偉い人じゃないし、そもそも姫だなんて呼ばれるような人間じゃないんだし…：もつと色々話してよ。」

あたしは、そのほうが嬉しいな」

空の言葉に、エマナは大きな目を見開いて、じつと見つめている。空は、自分より頭半分くらいは低い彼女の瞳に、笑いかける。

「できたら友達みたいに、話したいんだ…：あたし、この国に友達もいないから」

そう言つてから少し恥ずかしくなつて、エマナの反応を見ると、大きな亜麻色の瞳は、うつすらと潤んでいた。

「エツ、エマナ？ あたし、またなんかおかしいなと言つた？」

うるたえる空の手を、小さなエマナの手が包んだ。

「 姫君。私、本当に感激いたしました。こんなに近く接していただけるなんて…：」

うるうる揺れる瞳に間近で見上げられ、空も少し照れ笑いを浮かべる。

「そんな、感激されるほどのことじゃ…：」

頭をかく空に、エマナは両手を胸の前で握り締めて、感極まつたように口を開いた。

「わかりました！ 私なんかでよろしければ、恐れ多くも姫君のご友人のつもりで 私にできることなら何でもいたしますわ！

ええ、姫君！ 何でも仰ってくださいな！」

どうも盛り上がりやすい性格のようだ。エマナは紅潮した頬で、もうすっかりやる気満々というように、頷いてみせた。

彼女の勢いに少し押されかけた空だったが、心から嬉しさがこみあげてくる。

「……ありがとう。でも、そんなに気負わないで。ただ自然に話してくれれば、それでいいから」

目の前の少女が、遠くにいる友達の面影を思い出させてくれた気がして。

空は重かった頭が、晴れていくような心地よさを感じていた。

「はい！」

エマナの元気な返事が、部屋の中にこだました。

#### 44・ラキス(前書き)

続けて更新します。

あと一話くらいは、また連続投稿できそうです。

#### 44・ラキス

腕まくりをしたエマナがまず始めたのは、収穫祭の本を読む手助けだった。

どちらかという休憩に入りたかった空も、熱心なエマナに申し訳なくて頑張つて聞いていた。

「とうわけで、収穫祭というのは、大切な行事なのでございますわ。おわかりですか、姫君？」

既に先生のような口調で説明する姿が微笑ましくて、空が思わず笑いそうになったのを、エマナは見逃さなかった。

「何がおかしくていらっしゃるんです？」

きらりと光ったエマナの瞳に、空はあわてて笑いを引っ込める。

「ううん、何でもない、何でもない。えーと、だから、あれだよ。農作物の収穫を神に感謝して、始まったお祭りってことだよ。」

基本の基本を繰り返した空に、エマナが大きく頷いて微笑んだ。

「そうでございます。ですから、先ほども申し上げたように、農耕技術や天候に左右されて、昔は一定の量を収穫することも難しかったです。その時代に比べると、今ではかなり技術も進み、収穫も安定してきましたのですが、その頃の名残もあり、収穫祭は伝統として引き継がれているのでございますわ」

「ふうん……」

スーパーなんかであふれた食料品を目にしている空からすると、まだまだこの世界の技術というのは進んでいなさそうだったが、そのへんのことは口にしないでおくことにした。

聖殿からの帰り道に目にした、農夫たちの収穫作業を思い出したからだ。

大体、移動手段が馬車であったりすることからして、空の世界とは違いすぎるのだけれど。

空がぼんやりしはじめたのを目ざとく見つけて、エマナが声を少し大きくする。

「まあ現在では、収穫への感謝というよりも、お祭り騒ぎといった感じが強いですけど。」

各地の村なんかでは、夜通し踊ったり、飲んで騒いだりして、普段の憂さ晴らしをして、楽しむのが、収穫祭と皆が思っているくらいですわ」

「そうなんだ」

「ええ。ですが、王宮ではやはり伝統行事として、定められた儀式を行っております。その後は晩餐会などもございますが……」

エマナの言葉に、空はわずかに表情を曇らせる。儀式、そう言われるものの中には、空が行うことになっている、剣舞とやらもあるのだろうか。

そのことについて聞いてみようかと一瞬思ったものの、今はもう少しエマナとの会話を楽しんでいたかった。

視線を本に戻して、挿絵などを目で追っていた時、気になるものを見つけた空は、顔を上げた。

「ねえ、これは何？」

空が指差したのは、何かの虫らしい挿絵である。儀式の様子や、踊り、収穫した農作物などの挿絵から少し場違いなように見えて、目が止まったものだ。

「ああ、ラキスでございますね」

「ラキス？」

不思議そうに問い返した空に、エマナがああ、とでもいうように微笑んだ。

「姫君はご存知ないのですね。ちょうど収穫祭を過ぎた頃に現れる虫ですわ。綺麗な泉を好んで集まるといわれております。」

こう、お尻のところが光るんです。淡くて、優しい青白い光で、とっても美しいんですよ」

エマナの言葉に、空が思わず腰を浮かせる。

「それって……ホタルだ！」

空の大声に驚いたエマナは、目をぱちくりさせている。

「あ、ごめん。まさかこっちの世界にもいるなんて思わなくて、嬉しくなっちゃって」

照れたように空が再び腰を下ろすと、向かいの椅子で、エマナが興味をわいたように空の方へ体を寄せてきた。

「まあ、姫君のいらした世界にもラキスがいるんですか？」

「うん！ ああ、名前はホタルっていうんだけどね。でも日本じゃあ、ホタルは夏に出てくるはずだけど……綺麗な川にしかないから、田舎のほうじゃないと最近……」

言いかけてから、空は何かが頭の端にかすめた気がした。

そう、田舎の夏。ホタルをいつも見に連れて行ってくれて 浴衣を着せてくれて、手を引いてくれた、優しい皺くちやの笑顔の！。

「……おばあちゃん……」

小さく呟いた空の声に、エマナが不思議そうな顔をした。

「姫君？ どうかありませんか？」

じっとしたまま動かない空に、心配そうに問いかけてくる。

エマナの顔が間近に覗き込んできて、はっとしたように空は顔を上げた。

「姫君？ 何を考えていらっしやっただんです？」

問いかけられて、空は思い出したように手を叩いた。

「そう、夢だ！ 昨日、夢を見たの！」

「夢、でございますか？」

いぶかしげなエマナに、空はすっかりしたように笑った。

「そう！ おばあちゃんの夢。最近すっかり見なかったのに……久しぶりに夢に出てきたんだ」

ようやくほっとしたように、エマナも微笑んだ。



「まあ、おばあさまの夢を？」

「うん。小さい頃、夏になると田舎のおばあちゃん家に行つてね、おばあちゃん家の近くには、水がとっても綺麗な川があつて……いっつもそこへ連れて行ってもらつたんだ」

懐かしい、昔の記憶が思い出されて、空の顔も優しくなる。エマナもどこか嬉しそうに見ている。

「それでね、その川にはホタルが　こっちでいう、ラキスと似た虫がいっぱいいて、とっても綺麗だったの」

「まあ、ラキスがたくさん？　それは素敵でございますね。私も今まで何度か目にしたことはありますが、数はそんなに多くはなくて……」

残念そうにそう言うてから、エマナは思いついたように両手を合わせた。

「そうですね、姫君！　ラキスにまつわる言い伝えをご存知ですか？」

きらきらした亜麻色の瞳で見つめられ、空はためらつたように首を傾げる。

「言い伝え？　ううん、知らないけど……」

ラキスばかりでなく、ホタルにも言い伝えなんてものは、少なくとも空は聞いたことがなかった。

エマナは嬉しそうにまた乗り出してきた。

「ラキスはですね、恋人たちの想いを伝える虫だと言われているんですよ」

「恋人たちの……？」

ロマンチックな響きに、空も無意識に身を乗り出していた。

空の反応を満足そうに見て、エマナはとっておきの秘密を教えるかのような笑顔で頷く。

「あの光が、恋人たちの想いを運ぶと言い伝えられているんです。その年最初のラキスを一緒に見た相手とは、永遠に結ばれる、いつからかそういう風に言われていて

ですから、若者たちの間では、この収穫の季節は、恋の季節とも呼ばれているんですよ」

「へえ、そうなんだ……」

「素敵な言い伝えでございましたか？」

空の純粋な感嘆の顔を共感ととったように、エマナはうつとりと遠くを見ている。

その様子に、空が何かを思いついたように、にやりと笑った。

「エマナは？」

「はい？」

きよとんとしたような彼女の顔を、空はいたずらっぽく見つめる。

「エマナは誰かと見たことあるの？ その年最初のラキス」

途端にエマナはその白い頬を染めた。

「わっ、私でございますか？ 滅相もない、そんな相手はまだ」

可愛いくらいのうるたえぶりに、空は笑った。

「まだ？ ってことは、誰かいるの？ ラキスを一緒に見たいような、素敵な人」

空の好奇心いっぱい質問に、エマナは不自然なぐらいに視線を泳がせて、どんどん真っ赤になっていく。

「そっ、そんなことは……私は……」

どうやらエマナは嘘が全くつけない子らしい。空はまさに林檎のような頬で困っているエマナの肩を、笑いをこらえながら叩いた。

「いいよ、いいよ。ごめん。そんなに困るなら聞かないで、お空から空の言葉に、ようやくエマナはおそろおそろ視線を上げる。目を合わせて、思わず笑いあってから、空は嬉しくなった。

こんな風に好きな人の話をしたり、笑いあったり、こういう時間は、本当に久しぶりで、目が潤みそうになるのを、危うくこらえた。

そんな空を、いつのまに気を取り直したのか、エマナが間近で覗き込んでいた。

「なつ、何？」

亜麻色の瞳に宿る、いたずらっぽい光に、今度は空がためらう番だった。

「姫君はよろしいですわよね……もう決まったお方がいらっしやるんですもの」

どことなく恨みがましいような目で見上げられ、空の顔にたちまち動揺が浮かぶ。

「え？ あ、あたし？」

言われた途端に頭に浮かんだ面影に、思わずどきっとする。

空のためらいを何ととつたのか、エマナはにやつと笑った。

「殿下が姫君に大変ご執心であられるのは、見ていてもよくわかりますわ」

「そ、そんな……」

いきなり矛先が向いてきて、空はあわてて何か言おうとするも、言葉が浮かばなかった。

その間にも、エマナの攻撃はやまない。

「本当にうらやましいぐらい仲がおよろしくて……なんといいても、あの氷の殿下が、数多くの姫君を退けて選ばれたほどの方ですもの。それだけご執心なもの、当然ですわよね」

自分たちのどこがそんなに仲がよく見えるのか、空には思い当たるところもなかったが、それよりも聞き捨てならない単語が耳につく。

「あのう……エマナ？」

元来おしゃべりな気質らしく、放っておけばまだまだ語りそうなエマナを、遠慮がちな空の声が遮った。

「あ、すみません。氷の殿下っていうのは、私たち侍女の間での通称で………ついつい口に出てしまいましたわ」

あわてて口を押さえるエマナに、空はああ、と返事をしながら視線をさまよわせる。

氷の殿下　　今までに聞いたエシユタンドの過去の話から、大体

理由は想像できる。

そんな呼び方をされるほどの、今までの彼の姿を、もっと知りたい気持ちはある。

けれど、それよりも今聞きたいのは……。空が戸惑いに口をつぐんでいる間に、エマナは窓の外に目をやって、あわてて立ち上がった。

「まあ、もう日があんなに高く……。申し訳ありません、姫君。ゆっくりしすぎてしまいました。すぐにお食事をお運びしますわね」

「えっ、う、うん……」

そういわれてみれば、もうそんな時間かと一緒に立ち上がるが、まだすつきりしない何かが残る。

空の様子に気づかないように、エマナはいそいそとテーブルの上を片付け、扉のほうへ小走りにかけていく。

呼び止めたいのをなんとか飲み込んで、見送ろうとした空に、エマナが一度振り返った。

「な、何？」

もしかして自分のおかしな心に気づかれたかと、空が身構えた時、エマナが満面の笑顔を浮かべた。

「お食事の後は、リゴト様との勉強会だそうですので、どこへも行かないよう、お願いいたしますね」

くしゃっと笑った、花のような可愛いエマナが、悪魔のように告げた一言に、空はその場に崩れ落ちそうになったのだった。

## 45・エーデレード

「はあ〜気持ちいい……」

こないない天気の日、部屋にこもっているっていうほうが無理だよ。

勝手な言い訳を誰に対してもなく、心の中でしながら、空は草の上に寝転んでいた。

今日のドレスは裾が長くて、そんなに膨らんだデザインでもなく、寝転んでみても支障はない。ただ、やわらかい布に草が付くのが、多少申し訳なくは感じるが。

そんな罪悪感を吹き飛ばしてくれるような青空が、空を優しく見下ろしている。

食事を急いでとった後、エマナに言われた言葉で逆に部屋から逃げてきてしまった空は、エシユタンドの宮の裏、誰もいない草原を見つけて、こうして贅沢な休憩を満喫しているのだった。

思わず想像してしまった老教師の怒った顔を、頭を振って追いやると、空は一息ついた。

ぼんやりと雲が流れるのを見つめながら、また思い出してしまうのは、先ほどのエマナの言葉。

『数多くの姫君を退けて』、確かにそう言った。

エシユタンドが以前、女なんてありふれた、くだらないものだと思ってた、とか言っていたことも思い出す。

「それって、やっぱり、たくさんの女の人の人を知ってるってこと、だよね……」

自分で呟いてしまっただけから、空は余計に嫌な気分になった。

あれだけの美貌、整った立ち姿、振る舞い、そして力にあふれた、王子であること、どれをとっても、女性を引きつけるのは当然で、さして苦勞などせずとも、女性のほうから集まってきたのだろう。

何よりも、自分に対する言動や扱い方を見ていたって、わかるではないか。

いつだって、からかわれてばかりで、甘い言葉なんて簡単に言えてしまうような、そんな人だ。

そんな彼に、女性との過去がないわけがない。

何を、今さら……そうだよ、当然のことじゃない。当然、なのに……。

考え始めれば、もやもやと胸に渦巻いてくる、奇妙な感情。

「なんか……いやな、感じ」

頭上に広がる空は、気持ちがいくらに澄んでいるのに、頭の中は、なんだか灰色の雲に覆われてでもいるみたいだ。

過去のエシユタンドが、一体どんな風に女性と過ごしていたのか、一体どれほど多くの女性を見てきたのか。

今まで考えなかったことが、一度思いつくと、不思議なくらいに気になってきて。

そんなことを考えている自分も、なんだか自分じゃないみたいで、気持ちが悪くて。

心がぐちゃぐちゃになって、空は頭をぶんぶんと振った。

「やーめた、やめた！ こんなこと、考えてたって、しょうがないって！」

誰もいない草原に、空の音が響く。空は大きいため息をついて、両腕をまっすぐ伸ばした。

本当に、やめやめ！ こんなに気持ちのいい天気なのに、暗くなったら、もったいないよ！

そう決めた空の心をまるで知っているかのように、吹いてきた優しい風。

「あゝあ……バスケ、したいな……」

気持ちのいい風に吹かれて、ふとよぎった考えに、空は伸ばした両手を真上に掲げ、ボールを持つように三角の形を作る。

瞳を閉じると、浮かんでくるのは体育館。

バッシュがきゅつきゅつと音を立てる、磨かれた床。汗の匂い。皆のかけ声。

厳しい練習の合間に急いで飲む、麦茶の味。ゴールが決まった時の、なんともいえない爽快感。練習後の、仲間とのお喋り。

全てが懐かしく思えて、なんだか胸が痛くなった。ぎゅつと瞳を閉じて、すぐに空は起き上がった。

落ち込みはじめたらキリがない。色々思い悩むのは、やめたんだから。

「大体、らしくないんだよね」

そう、ウジウジ悩むのは性に合わない。こんな窮屈な生活も。

空は一気に立ち上がると、ドレスの裾を持ち上げ、太もものあたりで結んだ。そのまま、上品な靴を勢いよく脱ぎ捨てる。

それだけで体が軽くなった気がする。空は満足そうに笑って、誰もいない草原に向かって、裸足で走り出した。

「パス、パス、もっと速く！」

ボールも、バッシュも、何もないけれど。いつもの練習を思い出して、空は走る。

パスを出して、受け取って、ひたすら前を目指して。目には見えないゴールに向かって、思いっきり駆けていく。

ちょうどいいところへパスをもらって、ドリブル、ドリブル、フエイントでディフェンスをかわして、右、左、踏み込んで……ジャンプシュート！

「ナイツシューー！」

着地した素足で草を踏みしめて、空は叫んだ。

心地いい解放感に、全身を伸ばして青空を眺めた、その瞬間。

突然、背後から拍手の音が聞こえた。

あわてて振り返った空の目に映るのは、背の高い、細身の男性。

誰もいないと思っていた空間に、いきなり現れた男性は、拍手を

終えて、につこりと微笑んだ。

「素晴らしい！ 何の踊りか、武術の形か、わかりませんが、素敵でしたよ」

優しい笑顔でそう言われて、空は顔を赤くした。

しまったあ……変なところ見られちゃった。

何にもないのに、さながらパントマイムみたいなことをしていた自分が、急に恥ずかしくなる。

解放感、あつという間に羞恥に変わり、空は思わず視線をそらした。

「すみません、別に勝手に見るつもりではなかったんですが」

たちまちあわてたような声で謝罪する、その仕草で彼の長い髪が揺れた。

背中の中ほどで結ばれた髪は、金のあせたような色。その細身の体を包むのは、白い衣装。

気づいた空が何か言おうとする前に、優しい灰褐色の瞳が微笑みに細められた。

「どうも 直接お話するのは初めてですね、暁の姫君」

胸に片手を当てて、一礼した彼は、確かに何度か遠目に見たことがある、エシユタンドの兄だった。

「あ、いえ、こちらこそ、初めまして えーと……殿下」

呼び方に困ったあげく、空はとりあえずそう呼んでみた。

今まで王や王妃との対面でいつも緊張していて、他の王子のことまでじっくり見る余裕もなかったが、こうして近くで見ると、やはりエシユタンドやエカルドに劣らないぐらい、綺麗な顔だった。

空のためらったような顔に気づいたように、彼は笑った。

「エーデレードですよ。一応、第一王子と呼ばれています……そんなにかしこまらなくて大丈夫。第一王子だなんて、名ばかりなんですから」

そう言う彼の表情には、嫌味も、卑下したような様子もない。ただ、気どらない笑みを浮かべているだけだった。



「は、はあ……」

何と答えていいかわからなくて、空はただ彼を見つめる。

「さっきのあれは何ですか？」

緊張を和らげてくれるような、優しい笑顔でエーデレードは訊ねた。

「え、あ、あれですか？ あの、バスケットボールっていう、スポーツで……」

また醜態を思い出し、頬を染めて答える空に、エーデレードは意味がわからないように見つめ返してきた。

「あ、そうか、スポーツっていつてもわからないんだ……えーと、えーと……運動？ そう、運動の一種です！」

困ったあげくの空の答えは、納得が行くものだったのかどうなのか、エーデレードは少しきょとんとしてから、優しく笑った。

「そうですか……とにかく、面白い物を見せてもらいましたよ。女性があんな動きをするなんて、驚きました」

「え、そ、そうですか？」

驚いて問い返すと、エーデレードは頷く。

「ええ。女性というと、静かに刺繍をしたり、ドレスや宝石を選んだり、お喋りに興じたりしている印象しかないもので。まあ、王宮以外の女性はどうか知りませんが」

エーデレードはどうでもよさそうにそう言って、また空に微笑みかけた。

「あなたの国では違うのですか？ 姫君」

「え、ええ、まあ……女性だからって体を動かすことも許されないとしたら、世界中の女性が怒るかも。あ、でも女性がお喋りが好きなのは、どこでも一緒ですよ」

何と答えたらいいのかわからずに、空はただそう言って笑った。

エーデレードは少し目を見張ってから、同じように笑ってくれた。

また沈黙が訪れて、空が話題を探し始めた時、エーデレードが一筋垂れた長い髪をさらりと流して、青空を見上げた。

「それでは……あなたがこの国で生きるのは、難しいかもしれないな」

ぼつりと呟いたエーデレードの声は小さく、一瞬聞き間違いかと疑うほどだった。

彼を見上げた空と目を合わせて、エーデレードは何事もなかったように微笑んだ。

その澄んだ瞳の色が、一瞬王に重なって、ぎくりとする。

そうだ、エーデレードの髪や瞳は、まさに王とそっくりだった。その身にまとう雰囲気の穏やかさに、気づかないでいたけれど。

「あの……王子？」

おそろおそろ話しかけた空を、エーデレードは優しく見つめた。

エカルドのどこか艶あでやかな微笑みとも、クガルのほっとするような微笑みとも違う、静かな、微笑み。

彼の優しい笑顔は、全てを内に秘めたような、静寂の色をしている。不安そうに見上げた空に気づいたのか、エーデレードは笑みを深くした。

そして、楽しそうに、口を開く。

「あなたとこのままお話していたいとは思っていますが、あまり大事な姫君を独占していたら、エシユタンドに怒られそうなので」

彼の言葉の意味を量りかねて、瞬きをした空の黒い瞳に、エーデレードはいたずらっぽく微笑んだ。

そしてそのまま空の足元を手で指し示す。

「ご婦人がなさるには、少し刺激的な格好かと思えますよ」

「え……あっ！」

言われるままに足元を見て、空はあわててドレスの裾を下げた。さつきバスケの真似事をする時、めくりあげていたことも、靴を脱いでいたことも、話をするうちにすっかり忘れていたのだった。

短パンを履いている時のことなどを思えば、全然照れることもないはずなのに、エーデレードに言われると、なんだかとてもない

ことをしていたように思えた。

「大丈夫、エシユタンドには内緒に」

笑いながら、エーデレードは言いかけて、ふと振り返り、言葉を止めた。

急いで靴を履いていた空が、つられて彼の目線を追うと、そこには、宮の裏扉にもたれて腕組みをしている、エシユタンドの姿があった。

「誰に、内緒ですか？ 兄上」

渋い顔でそう訊ねてくる彼に、エーデレードは可笑しそうに肩をすくめる。

「なんだ、もう見てしまったのか、エシユタンド。せっかく私しか見ていないと思ったのに 残念だったな」

「兄上」

咎めるように見すくめられて、エーデレードは声を上げて笑った。

「冗談だ、エシユタンド。怖い顔をするな」

肩を叩かれて、面白くないような顔をするエシユタンドが、弟らしく見えて、空が思わず口元をゆるめた時、藍色の瞳が鋭く向けられた。

あわてて表情を引き締めた空を少しだけ睨むと、エシユタンドは短く息を吐いて、歩み寄ってくる。

「帰るぞ、ソラ リゴトがお待ちかねだ」

その言葉に二重で顔をしかめた空を、半ば連行するように、エシユタンドが背中を押す。

「では、兄上。また後ほど」

一礼して、短くそう告げるエシユタンドの隣で、空もあわてて頭を下げる。

「あの、すみません。じゃあ、また……」

挨拶もそこそこに、エシユタンドに手を引かれていく空に、エーデレードは笑って手を振る。

その灰褐色の瞳はただ、静かに、澄んだ光を浮かべていた。



有無を言わず放り込まれたエシユタンドの部屋には、リゴトはおろか、誰の姿もなかった。

「あ、あれ？ 誰もいないの？」

どれだけ怒られるのかと怯えていた空は、拍子抜けしたような気分です。部屋を見渡す。

「……リゴトなら、帰らせた」

背後からかけられたエシユタンドの声は、無愛想極まりないものだった。

それだけ言うと、エシユタンドは黙ったまま腕組みをして、扉にもたれている。

「あ、あのー……エシユタンド？」

エーデレードと別れてから無言で歩いてきた時点で、どこか険悪な雰囲気を感じていたものの、いまや藍色の瞳には、確実に怒りの色が見える。

「もしかして……なんか、怒ってる？」

おそろおそろ顔を覗き込んだら、不機嫌そうに目をそらされた。

「えーと……やっぱり、さぼったこと怒ってるんだ？ リゴトに文句言われたとか？ それならあたしから謝っておくから」

機嫌を伺うように明るい声色で空がそう言っても、エシユタンドは冷たくそっぽを向いたままだ。

あれ？ なんだかすごく怒ってる？

ここまであからさまに不機嫌なエシユタンドは初めてで、空はどうしたらいいかわからなくなった。

「ねえ、そんなにひどいこと言われたの？ あ、もしかして、またあたしのせいで、あなたの印象まで悪くしちゃったとか？」

厳しくても忠実そうなりゴトが、エシユタンドを悪く言う様子は想像もできなかったが、ここまで怒っているからには、そういう理

由ぐらいしか考えられない。そう結論付けた空の言葉に、エシユタンドは眉をしかめて、何を言ってるんだ、といわんばかりの表情を向けてくる。

「えーと……違うの？ うーん、じゃあ、なんでそんなに怒ってるのか、わかんないんだけど……」

それも違うなら皆目検討もつかない。空は困り果てて首を傾げる。藍色の瞳が厳しくなるのに気づいて、空はあわてて頭をふりしぼって考えた。

「あ、そうか！ あたしだけ遊んでたから、腹立ててるんだ！ エシユタンドも息抜きしたかったんでしょ！」

やっとわかった、と手を叩いた空に、エシユタンドは大げさなくらいにため息をついた。

「え、これも違うんだ……じゃあ、一体何をそんなに怒って……」

これも違うというなら、一体何が理由だというのか。考えるうちに、そもそも腹を立てていたのは自分だということも思い出した。

そうだよ、そもそも、あたしをほったらかして、勉強だけを押し付けたのはそっちじゃない！

空が逆に抗議しようとして口を開きかけた時、エシユタンドの冷たい視線が飛んできた。

「本当に、わからないのか？」

低く、ようやく言葉を発して、空を見据える。

その藍色の瞳を欠々に見た気がして、思わず空はどきりとした。

「私がどうして腹を立てているか、本当に、わからないって言うんだな？」

わざとらしく言葉を区切って、ゆっくりと訊ねてくるエシユタンド。

その意図もわからないのも勿論のこと、突然鼓動を速めた自分の心臓にあせって、空は首を横に振る。

空のその答えに瞳を細めて、エシユタンドは腕組みを外し、また

れていた体を起こして、こちらへ歩み寄ってくる。

無意識に後ずさる空に、無言の圧迫感を与える、エシユタンドの眼差し。

な、何っ？　なんで、怒ってんの？　こ、怖い……。

わけがわからなくなりながら、それでも条件反射のように、近くなる距離にどきどきしてしまふ。

空の緊張に気づいたのか、エシユタンドはふっと笑って、打って変わって意地悪な目つきをした。

「エ、エシユタンド？」

名前を呼ぶことで、この雰囲気が変わらないかという空の期待は、淡く崩れる。

エシユタンドが距離をつめ、空がいた壁に、両手を付いたのだ。

自然と、背後の壁と、エシユタンドに挟まれる形になった空は、どきまぎしながらエシユタンドを見上げた。

藍色の瞳が目の前にあって、彼の息遣いが感じられて、途端に心臓が音を立てる。

黙って見下ろしてくる彼の表情からは、何を考えているのかも読み取れず、余計に怖くなった。

抜け出そうにも、それを許さないような雰囲気で、言葉も出せないでいる空の頬に、エシユタンドが片手でそっと触れる。

「知らなかった」

独り言のように呟いて、そのまま指先を、空の首筋に這わせていく。

思わず身をよじった空の背中を、もう片方の手で引き寄せて、エシユタンドは空を見つめた。

二つの唇は、触れそうなほど近くにある。

息が止まりそうな空の心を知ってか知らずか、エシユタンドは首元に這わせていた指を、空の唇まで持ち上げ、そっとその形を確かめるように辿った。

心臓があまりに騒いでいて、頬に血が上って、息が苦しくて、何

も考えられない。

怖くてたまらないような、もっと触れていてほしいような、よくわからない気分で。

空は思わずぎゅっと瞳を閉じた。

それが合図でもあったかのように、エシユタンドが突然、唇から指を離れた。

キスされるのかと身構えた空は、全く違う感触に、驚いて目を開ける。

「お仕置きだ」

今までの態度が嘘のように、エシユタンドは皮肉げな笑みを浮かべ、空の鼻をつまんでいたのだった。

「ふっ……な、何するのよ！」

彼にされたことよりも、自分の恥ずかしい期待に腹を立てて、空は叫んだ。

お見通しであるかのように、エシユタンドは楽しそうに笑う。

「どうやって苛めてやろうかと思ったが、まあこれぐらいで勘弁してやろう。私は寛大だからな」

「勘弁って……だから、何のお仕置きなのよ！」

意地の悪い笑顔につめよると、エシユタンドは再び瞳を鋭くする。

「まだわからないのか？ まったくお前を一人にしておいたら、心臓がいくつあっても足りない気分だ」

「え？」

大仰に両手を広げてため息をつく彼に、空は不思議そうな顔をする。

空の反応に、今度は本気で肩を落として、エシユタンドは息をついた。

「本当に……見られたのがエーデレード兄上であったから、まだよかったものの、他の人物だったらどうするつもりだ。

王や王妃であったなら？ どんなことを言われて、責められてい



たか、わかったものじゃないんだぞ？」

その言葉によやく空の顔色が変わっていく。

「お前の国では、女が男の前で足を見せるのは、普通のことなのか？ 少なくとも、ミデイス いや、このエスタリア大陸では、普通とは見なされないし、場所が王宮でなかったら、どんな目にあっていたかもわからぬぐらいの」

段々と厳しくなるエシユタンドの口調に、空はすっかり俯いていた。それを見て、エシユタンドはまだまだ続けようとしていた言葉を、仕方なさそうに飲み込んだ。

「とにかく、今後はああいう真似は慎むことだ。わかったな」

咳払いをして、そう告げたエシユタンドに、空もしおらしく頷いた。

「……ごめん、なさい」

自分が軽く考えたことが、またしても、とんでもないことだったとは。空はさすがに返す言葉も見つからなかった。

「珍しく殊勝だな。結構なことだ」

肩を叩いて笑われて、空は顔を上げる。

「だって、あたしのせいで、またあなたの立場まで悪くするところだったし……」

自分だけが悪く言われるならまだしも、軽はずみな行動でエシユタンドにまで非難が及ぶのは困る。もう、彼が侮辱されたりするところは見たくないのだ。

空の言葉に、エシユタンドは軽く微笑んでから、ソファに座った。そのまま手招きして、空を呼ぶ。

大人しく従った空の肩を抱いたエシユタンドは、またどこか底が見えないような、ときどきする目を向けてくる。

「本当に説教したいのは、そういうことじゃないんだがな」

瞳だけでその意味を問う空に、エシユタンドは苦笑した。

「どうしても、私の口から言わせたいのか？」

「……どういっ……」

怪訝そうに見上げた空に、エシユタンドは何度目かのため息をついて、藍色の瞳を伏せた。

肩を抱いていた手で、一気に空の体を引き寄せる。

小さく声を上げた空を、先ほどよりきつく腕の中に閉じ込めて、エシユタンドは空の頬に唇を寄せた。

「他の男に、肌を見せるなど言ってるんだ」

軽く触れるだけのキスと共に、低く囁かれたその言葉は、空を真っ赤にさせるのに十分な力を持っていた。

「まったく……兄上も兄上だ。しっかり見ておきながら、知らぬふりをしているんだからな」

そう言われて、驚いた顔をする空に、エシユタンドはあきれたように続けた。

「気づかなかったのか？ 大体、すぐに教えてやればいいものを、立ち話までして……兄上らしいというか、なんとというか」

言われてみたら、確かにその通りで、気づかなかった自分だけを恥ずかしく思っていた空は、すっかり騙されたような気分陥る。

エーデレード王子という人は、一体どんな人なのか。それでも不思議と憎めないような、あの微笑を思い出して、空は少し笑った。

「しかし、反省すべきは、お前だ。いいな、二度は許さんぞ」

笑顔を消して、念を押すエシユタンドに、空もあわてて表情を引き締める。

「ただし」

そこまで言って、エシユタンドは一瞬言葉を止める。一体何を言われるのかと、不安げに見つめる空に、藍色の瞳がにやりと笑った。

「……私の前だけなら、話は別だ」

「えっ？」

空の驚きの声に、エシユタンドはいつもの微笑みを浮かべて、足を組んだ。

「なんなら、今でもかまわんが」

空のドレスの裾をまじまじと眺めて、発せられた一言に、空は思わず立ち上がる。

「じよっ、冗談！ 変なこと言わないで！」

たちまち頬を染めて、空はあわてて距離をとった。

「なんだ、兄上の前ではできて、私の前ではできないのか」

どこまでが冗談なのか、エシユタンドがまた不機嫌そうな顔をする。

「やっ、だって、わざとじゃないもん！ 人がいたなんて知らなかったから……」

「大丈夫、今なら私しか見ていないぞ」

「そっ、そういう問題じゃなくて……」

そこまで言ってから、エシユタンドが笑いをこらえているのに気づいて、空は今度は別の意味で真っ赤になった。

「もうっ！ からかうのもいいかげんにして！」

空の怒りの叫びは、エシユタンドの笑い声にかき消される。

それにますます腹が立って、空は拳を握り締めた。

「いっつも意地悪ばかり……どうせあたしは子供ですよーだ！

免疫もない、恋愛経験もない、お子様だって、馬鹿にしてるんですよ！

どうせあなたは……女の人にもたくさん言い寄られて、大人で、

余裕たっぷりで、あたしなんか、鼻で笑っちゃうんでしょーよ！」

苛立ちまかせにぶちまけて、空はそっぽを向く。悔しくて、情けなくて、涙が出そうで、そんな自分が余計に嫌だった。

「……本当に、そう思うか？」

少しして返ってきた低い声は、先ほどまでと全く違う、真剣なものだった。

意外な気がして振り返ったら、エシユタンドがまっすぐに見つめていた。

「お前がただの子供なら、よかったんだがな」

深い藍色の瞳で空を捉えながら、エシュタンドが呟く。

途端に、怒りも苛立ちも忘れて、音を立てる心臓に戸惑って、空は瞳を逸らした。

「また、意味がわかんないこと言ってる……」

じつと見つめてくる視線から逃げるようにそう漏らすと、エシュタンドが立ち上がった。

「わからないなら、教えてやろうか」

そう答えるエシュタンドが、まるで知らない人のように見える。感情の見えない、瞳。その藍色が、空の心に切り込んでくる。

「ま、また……他の女にもそんなこと言っただんじやないの？」

自分でもおかしなことを口走ったと、空が思った瞬間、エシュタンドの顔に剣呑な色が宿った。

「知りたいか？」

恐ろしいくらいに低い声で、問い返す彼の表情は硬く、端整すぎて冷たく見えた。

「エ……」

名を呼ぼうとした空を引き寄せ、エシュタンドが間近で見つめて

二人の距離がほとんどなくなりかけた、その時だった。

大きな足音が部屋の外で響いてきて、扉が叩かれたのだ。

「申し上げます 殿下！ 魔の女が、突然目を覚まして暴れだしました！ 現在、王宮軍が応戦しております。至急、殿下のご指示を！」

緊迫した声は、夕日が照らし始めた部屋の中に、切り裂くように響いた。

#### 46・嫉妬（後書き）

連続投稿しました。

これからの展開も、楽しみに待ってくださると嬉しいです。  
感想などいただけたら、大喜びします！

## 47・ルスト（前書き）

更新再開後、アクセス数が飛躍的に伸びて、とても感激しております。ありがとうございます！

これからも、更新をできるだけお待たせしないよう、頑張りたいと思いますので、応援よろしくお願いします。

## 47・ルスト

「いけません、姫君！ 危険です、ここから先へは……」

「お願い、行かせて！ 一体何が起こってるのか、私もちゃんと知りたいの！」

「だめです、絶対に来させないようにと、殿下から固く申し付けております！」

「でも……！」

「なりません、姫君をお守りするの、我々私兵隊の、大事な役目でもあります！」

エシユタンドが飛び出していったから、ずっとこんな調子の押し問答が繰り返されていた。

場所をエシユタンドの部屋の前から、なんとかこの離宮前まで移させた空の頑固さには、彼も辟易としてきたようにも見える。

しかし、エシユタンド付き私兵隊、副隊長だと名乗った、このルストという青年も、職務の忠実さでは負けていなかった。

何も教えてもらえず、エシユタンドのところへも行かせてもらえず、一体何が起こっているのか、空は心配でたまらなかった。

魔のモノが捕えられていたことなんて、知りもしなかった自分。

そんなことはおくびにも出さずにいたエシユタンドは、空が付いてくるのを断固として拒んだ。

危険だから、そう言われた言葉そのものが、空がいてもたってもいられない理由だった。

危険な目に、合わせたくない、だなんて……そんなの、あたしだって一緒だよ！

しっかり自覚した自分の心は、いまや彼の存在で大きく占められているのに。

そんな彼が、今まさに危険な場所にいるのだ。

それなのに、自分だけがのうのと安全な場所において、何の力にもなれない。

打ちのめされるような思いで、空は離宮の扉を見つめた。

固く閉ざされた扉の前には、何人もの守護兵が立ちほだかり、入らせてももらえない。

この地下に、本当に魔のモノがいるなんて、信じられないくらいの静けさが、夕闇に横たわっていた。

あきらめきれずに、扉を見つめ続ける空に、ルストが遠慮がちに歩み寄る。

「姫君、殿下を信じて、どうぞお待ちになってください。姫君の無事こそが、殿下のお望みであられるのですよ」

その言葉が、空から、無言の抵抗を奪っていく。

『大丈夫、私を信じる』

そう言い切った藍色の瞳を思い出し、空はルストの必死な視線を受け止めた。

唇を噛み締めて、黙り込んだ空に、ルストは幾分安心したかのよう息をついた。

「やっと、わかっていただけたか、姫君。そうです、絶対に殿下はご無事でお戻りになられます。」

さあ、夜は冷えます。私と、宮へ戻りましょう」

そう促そうとしたルストに、空は黙って頭を振った。

たとえ何もできなくても、せめて、近くで待っていたい。

それだけは　そんな空の懇願は、言葉に出さなくとも伝わったらしい。

ルストは、仕方がない、というように微笑んで、自分のマントを脱いで、空の肩にかけてくれた。

「あ、ありがとう……」

さすがに申し訳なくなってお礼を言った空に、ルストは優しい笑みを見せる。



「いいえ。大事な姫君が、お風邪でもお召しになれば、殿下に叱られてしまいますから」

「でも、あなたは……」

「私は大丈夫です。こう見えても、鍛えておりますので」

そう言う彼の体は、確かに頑丈そうで、夜風などものともしないように見えた。

少し安心して、ようやく笑った空に、ルストも嬉しそうな顔をした、その時。

今まで固く閉じられていた離宮の扉が、急に内側から開かれ、息を切らした兵が顔を見せた。

そのただごとではない様子に、守護兵たちが駆け寄っていく。

「どうした、何か」

彼らが言い終える前に、兵が必死な様子で口を開いた。

「殿下が……殿下が、魔のモノによって、傷を　すぐに医師を……！」

彼の言葉が終わる前に、空は駆け出していた。

「あっ、いけません、姫君　！」

ルストがあわてて止めるも、空の動きのほうが一步速かった。

ざわめく守護兵たちを押しつけて、空は離宮の中へと、まっすぐに飛び込んで行った。

「エシユタンド！」

多くの兵たちに止められながらも、無理やりに辿り着いた地下牢の前で、空は叫んだ。

同時に開いた重い扉の向こうにまず見つけたのは、驚きに見開かれたクガルの瞳だった。

「姫君！　なぜ、ここへ」

戦いの様子を表すかのように、栗色の髪は少し乱れて、額には汗が浮いている。

急いで駆け寄ってきた彼の腕を、空は必死で掴んだ。

「クガルさん、エシユタンドは……エシユタンドはどこ？ 怪我って一体……！」

震える手で、クガルの腕を揺らす空に、クガルが口を開こうとした、その瞬間。

暗い通路の角から、硬い靴音が聞こえた。

「ソラ……！ ここへは来るなど……！」

その声に、振り向いた空の瞳に映るのは、あわてたような藍色の瞳。

「エシユタンド……！」

無我夢中で駆け寄って、飛びついた空を、戸惑いながらも受け止めるのは、まぎれもないエシユタンドの腕。

「ソラ……なぜ来た？ あれほど危険だと言っておいただろう！」

耳元で響く、低い声に、安堵を覚えながらも、空は確かめるようにエシユタンドの体に目を向けた。

「傷を負ったって聞いて 一体、どこに……？」

空の今にも泣き出しそうな声に、エシユタンドが厳しい顔を緩めた。

「ああ、それは、私ではなく……」

言いかけたエシユタンドの後ろから、しっかりとした靴音が響いた。

「僕ですよ、姫君」

声と同時に現れたのは、数人の兵に付き添われた、エカルドの姿だった。

しかし、白いブラウスの腕に、切り裂かれたような痕はあるものの、その下に除く肌には、傷は見えなかった。

「おっ、王子が？ 大丈夫なんですか？」

空のあせった声に、エカルドはしっかりと微笑んで見せた。

「ええ。危うく腕を傷つけられるところでしたが、兄上に救われました」

「エシユタンドに？」

「はい。やはり、兄上にはかありませんね。僕の力など、まだまだで……」

自嘲のような言い方に、エシユタンドが微笑む。

「そんなことはないぞ。お前がまさか、対魔の術をあれほど身につけていたなんて、驚いた。鍛錬次第では、私の上に行くかもしれない」

そう言ったエシユタンドに肩を叩かれて、エカルドは嬉しそうに笑った。

「いつか、お役に立てるか……こつそり、習っていたのですよ」

「全く、誰にも秘密であそこまでとは 水くさい奴だ」

笑いあう二人に、空はおそろるおそろる視線を送った。

「どうした、ソラ？」

エシユタンドに聞かれて、空は遠慮がちに口を開く。

「あの……全然、話が見えないんだけど……何が、一体どうなってるの？」

飛び込んできた時の空のあせりが、まるで必要のなかったほどの、穏やかな二人のやりとり。

兵たちもなぜだか落ち着いていて、この狭い通路では、さながら井戸端会議のようになっていないか。

「魔のモノは？ もう大丈夫なの？ みんな、無事なの？」

眉を寄せて、あたりを見渡す空に答えたのは、控えていたクガルだった。

「ええ、姫君。幸い、誰にも怪我もなく、無事でございます。ご心配をおかけしてしまって、申し訳ありません」

「そ、それなら、いいけど……それで、魔のモノはどこに？  
そう空が訊ねようとしたり、その時。

通路の向こうが騒がしくなり、数人の兵たちが何かを引きずるようになり、歩いてきた。

「殿下、このモノの処理はどういたしましょう」

縄に縛られていたのは、大きな鳥だった。

巨大な鷲のようだったが、その羽根は青く、体の毛は赤茶色で、大きな瞳を見開いて、嘴を開いて、鋭い爪を振りかざしたままの姿で、固まっている。

「こ、これ……死んでるの？」

不気味な姿から、空はあわてて目をそらして、エシュタンドに訊ねる。

「ああ。生かしておこうと思ったが、力の加減も難しくてな、死なせてしまった」

その言い方に首を傾げる空に、エシュタンドは不敵な笑みを見せた。

「まあ、いい。また嫌でも目にすることになるだろうからな」

独り言のように言ったエシュタンドの言葉に、エカルドも神妙に頷く。

「後の処理は、王宮軍の指示に従え。守護竜にでも、処理させるんだな」

兵たちにそう言うと、エシュタンドは衣装の襟を正し、空を見た。

「このまま、父上にご報告に向かう。お前は宮に戻っている」

「でっ、でも……」

「大丈夫、大したことはない。すぐに戻る」

「エシュタンド！」

追いかけてようとした空に立ちふさがったのは、いつの間に追いついてきたのか、ルストだった。息を切らして、多少恨めしそうな顔で空を見下ろしている。

そしてエシュタンドに指示されたのか、クガルもその隣に並ぶ。

「後は頼んだぞ、クガル、ルスト」

言葉だけを投げて、エシュタンドはエカルドと共に、地下牢の階段を上って行ってしまった。

「もうっ、一体どうなってるのよ！ あたしばかり、蚊帳の外で、肝心なことは何にも教えてくれないんだからっ！」

鼻息荒く、テーブルの上に両手を付いた空に苦笑するのは、クガルである。

「殿下は姫君をお守りするために、あえて何も仰らないのですよ」

「だって！ それにしたって、何もわからないなんて、あたしだって事実を知りたいもの！」

優しいクガルの言葉に反発する空をなだめるのは、副隊長のルストだ。

「隊長の仰るとおりですよ。いくら暁の姫君とはいえ、女性には危険な場所を避け、安全なところで守らせておこうとお考えになるのは、殿下でなくとも、男性ならば当然の……」

「それはわかるけど……でも、それだったら、あんな化け鳥ぐらいで、大きさにしないでほしいよ。死ぬほど心配したんだから！」

そう、魔のモノが暴れたしたなんて言うから、どれほどの恐ろしいモノかと思えば、出てきたのは、ただ鷲が大きくなっただけのような生き物で。

エシユタンドまで駆り出して、兵たちがあれほど騒然とするほどのことだったのか、空は納得が行かなかった。

その空の言葉に、微妙に表情を歪めるクガルとルストには気づかず、空は大きくため息をついた。

「まあ……みんな、無事だったんだから、よかつたけど……」

とにかくそれは本当によかつたんだし、と空は無理やりにも、むしろしくしゃする気持ちを抑えることにした。

「あゝあ、美味しいお茶でも飲んで、気分を変えようかな。ねえ、エマナ？」

いまやすっかり空の部屋ともなった、エシユタンドの部屋に、もう一人いるはずの人物は、存在感がまるでないほど、静かに壁際に控えていた。

振り返って、呼びかけた空にも気づかぬように、ただお盆を握り締めて、俯いている。

「エマナ、エマナってば！」

どうしたのかと声を大きくした空に、ようやく気づいたように、エマナははつと顔を上げた。

「は、はい。姫君、何でございましょう！」

不自然なほどの大声で答えたエマナを、空はたじろぎながらも見上げた。

「あ、うん。だからね、エマナの美味しいお茶でも飲んで、落ち着こうかなって……」

「はつ、あ、お茶でございますね。はい、今すぐ！」

あきらかに挙動不審に、かちこちと部屋を出て行くエマナに、声をかけたのはクガルだった。

「すみませんね、私たちがいて気を遣わせてしまつて」

優しい微笑みに、エマナは真つ赤になって首をぶんぶんと振つた。「とつ、とんでもございません。そのようなことは……でつ、では私、行つてまいります！」

「あ、私も手伝いましょうか。お一人では大変でしょう」

空たちのいたテーブルから席を立ち、クガルが近づいていくと、エマナはますます頬を染めていく。

「そつ、そんな……大丈夫です！」

「遠慮なさらずに。さあ」

クガルはそんなエマナを優しく促すように、扉を開けた。

「は、はい……」

消え入りそうな声で答えたエマナが、クガルの後を続いて部屋を出て行く。

その様子を黙って見ていた空は、なんとなくさまよわせた視線の先で、ルストの可笑しそうな瞳を見つけた。

空のいかにも物言いたげな視線に、ルストはあわてて表情を引き締めるが、もう遅い、と言わんばかりに空は笑った。

「ねえねえ、エマナと、クガルさんって知り合いなの？」

怒られるとも思っていたのか、ルストは空の問いに意外そうな顔をした。

「は、はあ。そりゃあ、お互い、同じ殿下付きの身ですから……顔もよく合わせませすし」

答えた赤褐色の瞳を、空はにやにやと覗き込む。

「へえ〜そっかあ……今のあなたの顔からすると、あなたも気づいてるんでしょ」

「はっ、な、何をでございますか」

あせったような顔で問い返すルストに、空は顔を近づける。

「またまたあ、そんなごまかさなくてもいいって！ エマナの様子あれ、絶対そうだよね」

微妙に距離を開けるルストは、どうしたらいいか一瞬迷ったような顔をしていたが、空の様子から話してもいいと判断したのか、少しだけ笑った。

笑うと、空とそれほど年も変わらぬように見える。屈強な肉体と、赤褐色の硬そうな長髪とが、彼を年上に見せていたようだった。

「はあ まあ、あのとおり、誰が見ても、すぐにわかるぐらいですからね」

あえてぼやかした言い方をするルストだが、それで空は確信を得たようににんまりした。ルストと、年の頃が変わらないようだとかかったことで、余計に空は安心していた。

「そうかあ〜エマナがあの人をね〜」

「ええ。そのようです」

ルストも元々はそう堅い性格ではないらしい。空の気安さにつられたのか、この場にいない相手だからなのか、どことなく楽しそうに答えてくれた。

「で、彼のほうはどうなの？ 脈ありって感じ？」

「いや〜それが……そういったことにはうとい方でして、彼女の気持ちにも気づいておられるのか、どうなのか……」

「え、気づいてなくてあれだったら、結構罪作りだよな」

「そうなんですよ、私兵隊の間でもそれは話題になってまして……」  
すっかり肩をよせあって、ぼそぼそと話し合う二人は、そっと扉を開けて入ってきた人物に気づいていなかった。

「何がそんなに話題なんだ？」

「いや、それが……って、エシユタンド！ うわあ、びっくりした  
……おどかさないでよ、もう！」

背後で響いた低い声に、まさに飛び上がるほど驚いた空は、胸を  
なで下ろしながら言った。

空の驚きどころではなかったルストのほうは、椅子から飛びのい  
て、まさに床にひれふすほどに、礼の姿勢を瞬時にして取っていた。  
そのルストを、ちらりと見て、エシユタンドがいつもの笑みを浮  
かべる。

「ご苦労だったな、ルスト。時間外の勤務に、ソラにつきっきりで、  
特別な警護までしてもらったようで、本当に感謝する」

なんだか全然感謝しているようには聞こえない口調で、丁寧な言  
葉をかけられ、ルストは青い顔で頭を下げた。

「とつ、とんでもございません、殿下 殿下の大切な姫君に、万  
が一のことでもあれば大変ですので」

ルストの大変なあせりように、きょとんとしている空の肩を抱い  
て、エシユタンドは微笑んだ。

「それにしても、お前がそんなに話し好きだったとは、知らなかつ  
た。これからも、ぜひ、我が姫の話し相手になってやってほしいも  
のだ」

ゆっくりと言って、ルストを見つめる藍色の瞳に宿る、恐ろしげ  
な光には気づかず、空は手を打って喜んだ。

「そうだね！ ぜひそうしてよ、ルストさん。また色々教えてね！  
極めつけのようににっこりと笑った空の顔と、優雅な微笑を浮か  
べたエシユタンドを交互に見つめて、ルストは目を白黒させて、床  
に頭をつけるほどの勢いで、礼をした。



「はっ、わ、私でよければ……で、では殿下、これで失礼をいたします。どうぞ、ごゆっくりとお休みくださいませ！」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

「おやすみなさ〜い」

ものすごいスピードで部屋を出て行くルストを見送って、エシユタンドは片手を上げ、空は気楽に手を振った。

このやりとりを聞いていたエマナとクガルが、扉の前であわてて引き返していたことは、空は知らない。

扉が閉まってから、エシユタンドの笑顔が消えた。

何事か訊ねる間も与えずに、エシユタンドが空の手を引く。

「ちよつ、どうしたの、突然……エシユタンド？」

問いかけても、目の前の背中中は、答えることさえ拒否するように、振り向きもしない。

そのまま、乱暴に連れて行かれた先は、寝台だった。

強い力で押し倒されて、さすがに空は顔色を変えた。

「なつ、何するの！」

あわてて起き上がるうとする空の腕を押さえつけて、エシユタンドが無言のまま、覆いかぶさってくる。

「やっ、やだ やめてよっ」

突然のことに混乱しながらも、空は身をよじって抵抗する。

痛いほどの力で空の手首をつかんで、エシユタンドは無表情に見下ろしていた。

「エシユタンドってば……どうしちゃったの？ ねえっ」

ゆっくりと下りてくる彼の瞳は、金の髪に隠れて、見えなくなっ  
た。

それだけで、急に怖くなった。

「エシユタンド」

呼びかけた空の言葉を無視したまま、エシユタンドは捲れた空の  
ドレスに目をやる。

あわてて直そうとしても、両手を捕えられて、どうすることもで  
きない。

暴れると、逆にどんどん捲れて、太ももまであらわになっていた。  
空の素足の間を膝で割って、エシユタンドが馬乗りになる。

思わず見上げた空は、怖いくらいに真剣な藍色の瞳に息を呑んだ。

「やっ、いやだ エシユタンド……！」

両目を固く閉じて、空が必死で叫んだその瞬間、今にも触れそうだったエシユタンドの唇が、止まった。

強く掴まれていた手が、嘘のように離される。

にじみ出た涙でぼやけた視界に、厳しい表情を浮かべたエシユタンドの顔が映った。

自由になつた両手で、震える口元を押さえる空に、彼の短いため息が届く。

「……お前は、あんまり無防備すぎる。相手が男であろうが、何であろうが、簡単に気を許し、打ち解ける。それが、どれほど危ないことか、わかっているのか」

突然の言葉に、空は意味も飲み込めずに、ただ彼を見つめ返した。「男のそばににいるということは、こういうことだ」

冷たく、言い放たれたその言葉は、彼の先ほどの行動の意味を指している。それはわかってても、突然すぎて、空は言葉も出せずにはいた。

「いつ、こういうことをされても、不思議はないんだ。それがわかったら、もう少し、緊張感というものを持つんだな」

きつい藍色の目で睨まれて、空は、固まっていた体に、ようやく体温が戻ってきたような気がした。

その途端、涙がこぼれる。

安心するのと同時に、体が震えて、空は子供のように泣き始めた。

「ソラ」

あわてて触れようとする手を払いのけて、空は涙に濡れた瞳で睨みつける。

「ひっ、ひどいよ……本当に、びっくりしたんだから」

動けないでいる空の体を、エシユタンドがゆっくりと起こした。

「す、すっごく……怖かったんだからっ」

嗚咽の合間に訴えると、今度こそ、エシユタンドの瞳から、剣呑な光が消えた。

空の抵抗がなくなるのを待つて、エシユタンドがそつと空を胸に引き寄せる。

「悪かった。やり過ぎたな」

優しく頭を撫でられて、ゆっくりと、空の嗚咽がおさまっていく。揺れる蝋燭の炎を眺めながら、空の髪を撫でていたエシユタンドが、ため息をついた。

やっと落ち着いてきた空が見上げると、藍色の瞳が、どこか悲しげな色を浮かべていた。

「エシユタンド……？」

「お前は、自分を子供だと言ったな」

唐突に言われて、空はただ瞬きをして、エシユタンドを見つめた。「そして、私を大人だとも言った」

その言葉で、ようやく先ほどのエーデレードの件での会話を思い出した空に、エシユタンドは笑った。

「お前は、わかってない　まるで自覚がなしに、人を魅了して、心を掴んで、いてもたってもいられないほど、かき乱しておいて……それに気づいていないなんて、罪作りなのは誰のほうだ」

低く、甘いほどの声音で囁かれる言葉は、まったく意味がわからないものだった。

空の怪訝そうな目つきに、エシユタンドはまたため息をもらす。

「ほら、これだけ言ってもわかっていないだろう。お前は、自分のことも　私のことも、何一つ、わかっていない」

そこまで言われて、空は眉を吊り上げる。

「わかってない、わかってないって……だから、一体何の話　」  
言いかけた空の手を、エシユタンドが掴んで、素早く引き寄せた。たちまち勢いが弱まった空の耳元に、エシユタンドが口付ける。

「私が、どれほど自分を抑えているか　どれほど、お前に心奪われているか……全く、わかっていないと言っているんだ」

その言葉と優しい唇の感触に、空は心臓が貫かれたような気がし

た。一気に熱くなった頬に、彼の手が触れて、空の鼓動をますます速める。

「大人で、余裕たっぷりだと？　そうであれば、どれほどいいかお前の肌も、笑顔すらも、他の男になど見せたくない。」

お前に触れるものは、例えマントであっても、他の男のものなど許せない。お前の心も、体も、全て　私一人のものにしたい。

そんな欲望を、衝動を、必死で抑えつけている、まるで子供のよくな独占欲と、嫉妬のかたまり……それが、今の私だ」

視線をそらして、吐き出すように、一気に言い切ったエシユタン  
ドは、息を吐いて、空を見た。

藍色の熱い眼差しが、空の体を呪縛する。

「どうだ、がっかりしたか？」

乾いた笑いと共に、自嘲気味に訊ねる彼に、空は戸惑いがちに見つめ返すことしかできなかった。

その態度を肯定と取ったのか、エシユタンは頬に触れていた手を下ろした。

「一国の王子であっても、普通の男にしかすぎんというわけだ。まさか自分が、こんな風になるなんて、思ってもみなかったがな。」

本気でのめりこむということは、こういうことだと、初めてわかった」

肩をすくめてそう言って、エシユタンは寝台から離れ、窓際へ歩み寄っていく。

ためらいがちにその姿を目で追っていた空は、おずおずと、口を開いた。

「……本当、に？」

空の言葉に、振り向いたエシユタンは、苛立たしげに眉を寄せていた。

「これだけ言ってもわからないのか、一体どれだけ私に言わせれば……！」

……！」

怒りといつてもいいぐらいの、彼の反応に、空はあわてて首を振る。

「そっ、そうじゃなくて、あの」

「……何だ」

窓枠にもたれて、慥然と問い返すエシユタンドに、空はゆっくりと近づいていく。

一歩を残すところまで来て、空は立ち止まり、おそろおそろ彼の瞳を見上げた。

訝しげな表情に、空は一度俯いてから、決意したように顔を上げる。

「ほ、本当に……あたしが、初めてなの？」

何を言うんだ、といわんばかりの整った顔。やわらかそうな、金の髪、長い睫、引き結んだ唇、そして、強い色をした、藍色の、瞳。全てを必死で見つめて、空は口を開いた。

「本気で、好きになったの　本当に、あたしが初めて？」

少し頬を染めて、訊ねた空に、エシユタンドは瞬きをした。

「あっ、あなたが今までに、たくさんの女性と付き合ってきたんだろってことぐらい　あたしにだって、想像できる。」

それは、正直気になるけど……それでも、初めてちゃんと好きになったのが、あたしだって、そう言ってくれるなら　」

言いながらどんどん恥ずかしくなってきた、空は後悔に言葉を濁した。

まっすぐに見られなくて、今エシユタンドがどんな顔で聞いているのかもわからない。

あたしってば、何を言ってるんだろう。い、今更なかったことになんて……。

できないよね、と見上げた先で、エシユタンドは、いつもの笑みを取り戻していた。

いや、いつも以上に磨きがかかった、余裕たっぷり、大人な、

甘い微笑み。

「そう、言ってくれるなら、何だ？」

反則だ、そう言いたくなるくらいに、ときどきする瞳を向けられて、空は言葉が出せなくなった。

悔しいような、腹立たしいような、変な気持ちで、答えを探そうとした空の背中を、簡単に引き寄せて、エシユタンドが抱きしめた。「本当だ」

吐息にも似た囁きで、そう答えて、エシユタンドは腕の力を強める。

「神にでも、精霊にでも、何にだって誓ったっていい。女を恋しいと、愛しいと思ったのは お前が、初めてだ」

まさに至近距離で、凶器とも言えるほどの熱い瞳に捕えられ、空は目眩がしそうになった。

「求めすぎて、気が狂いそうになるくらいだ。もう少し触れ合えば、自分を抑えられなくなる。それがわかっていても、誘惑に逆らえないほど お前が欲しい」

まさに溶かされそうな、そんな言葉と抱擁に、空は力が抜けていくのを止められなかった。

あと一歩で、本当に何も考えられなくなる、その瞬間に、ごとりと何かが音を立てた。

ソファの隅に置いてあった、赤い表紙の本が、床に落ちたのだ。

それを見て、ぎりぎりまで高まっていた二人の熱が、急激に冷やされたような、そんな気がした。

収穫祭まで、あともう数日を残すのみ、そう言われたことを思い出したのだ。

ハルトの剣、白水晶の滝、儀式、そんな単語の数々が、頭によぎる。

そう、収穫祭、今のあたしたちがなすべきこと　そして、それが終わったら……。

急に冷たくなったような自分の手を握りしめる空の隣で、エシユ

タンドが深いため息をついた。

「もう、夜も遅い。先に寝ている」

どこか突き放すような言葉をかけられて、空は思わず、通り過ぎようとしたエシユタンドの服を掴んだ。

「エ、エシユタンドは……？」

「私のことは、気にしないでいい。まだやることがあるんだ。収穫祭まで、色々と忙しくてな」

振り向きもしないエシユタンドは、先ほどまでの熱っぽい態度が嘘のように、遠く見えた。

「で、でも……」

何を言えばいいかもわからないまま、言いつのる空に、白い衣装の背中が振り向いた。

「明日から収穫祭まで、お前には剣舞や儀式の準備がある。忙しくなるから、今日のうちに、ゆっくり休んでおくんだ。

しばらく私は 宮にも戻らんかもしらんが、心配することはない。お前には、信頼できる人物を残しておくから」

「そつ、そんな、突然……」

思わず抗議しかけた言葉は、藍色の瞳に遮られた。

熱のかけらも見せないで、氷のように硬い、エシユタンドの眼差し。

空を見ているはずなのに、遠くを見ているような、何も見ていないような、不安をかきたてられる瞳だった。

「 すまん。私も、できる限りのことはするから……」

一度だけ、肩に触れられた手のぬくもりだけが、いつものエシユタンドのものだった。

「エシユタンド」

呼んだ空の声に、エシユタンドは一瞬だけ空を見つめて、そして、背中を向け、部屋を出て行ってしまった。

彼が消えた部屋の中は、急に広く、淋しく感じて。



空は天井を振り仰ぎ、長いため息を吐き出した。

好き、ただそれだけのことが、こんなにも重くて、熱くて、苦しいことだなんて。

何もかも忘れてしまいそうなくらい、心の底まで支配されたかと思うと、突然、声も届かないような、遠い存在になってしまう。

これが、自分たちの置かれた立場で、先が見えない、細い糸の上に乗っているような、危うい繋がりでしかない。

わかっているはずなのに、思い知らされた気がして、空はその場にしゃがみこんでいた。

収穫祭で、儀式を成し遂げること、それが空にとっての今の目標であり、この世界に残る目的だ。

だって、それができたら、エシユタンドを助けることができるから。

ほんの少しでも、彼の、そして彼の生きる世界の、力になれる。そのためだけに、王と約束したのだから。

決して、自分がこの世界に残るためじゃない。

この世界で、彼と共に生きるためじゃない。

そんなことは、わかっているはずなのに……それでもなお、心の底で望んでいるのは。

恐ろしい答えを、空は心に封印する。

気づいてしまわないように、考えてしまわないように、思考を止める。

今はまだ、その時じゃない。

決断は、まだ先でいい。

やるべきことが、今はあるのだから。

そのために、頑張ること。ただ、それだけを考えなければ。

わかっているのに、なぜ、こんなに苦しんだらう。

なぜ、こんなに、切ないんだらう。

涙が出そうになるのは、どうしてなんだらう。

一人の部屋は、あまりに淋しくて、空っぽで、彼がいなくて、空気が冷えていく気がする。

「エシユタンド……」

呼んでも届かないことはわかってる。

それでも、なお、呼ばずにはいられなかった。

「エシユタンド」

胸に残る、彼の熱い吐息と、狂おしげな瞳の色を想いながら、空は繰り返していた。

泣きたいぐらいに、空の心を捕えている、王子の名を。

## 48・本心（後書き）

今日も、二話連続で更新しました。  
続きもお楽しみに！

それから、この前急いで更新したためか、レイアウトがおかしいところがあったので、また修正しておきました。  
すみませんでした。

どこかおかしいところがあれば、いつでも教えてくださると助かります。

## 49・準備（前書き）

更新、少しお待たせしてしまいました。

あともう一話更新しますので、ぜひ続けてお読みください。

もう、幾度目かの朝が来た。

収穫祭まで、あと三日を残すところまで来て、不思議と実感がわかないまま、空はぼんやりと窓の外を見上げていた。

朝晩の冷え込みが、段々と季節の移り変わりを空にも感じさせてくれている。

このミデイス王国では、日本と似た四季はあるものの、日本の気候とはだいぶ違うらしいと、昨日のリゴトの講義で改めて知った。

季節は、花の季節と呼ばれる春のような過ごしやすい時期と、雨の季節と呼ばれる短い夏、そして、収穫の季節である秋が終われば、雪の季節である、冬がすぐにやってくるらしい。

空がこの世界にやってきたのは、ちょうど雨の季節が終わった頃、涼しい気候のちょうどいい時期だったそうだ。

そう言われてみれば、夏のじりじり暑い中から、この世界へ来た時、涼しくは感じていたものの、色々なことが起きて、そんなことを考える暇もなかったのだ。

驚いていた空に、リゴトは以前にも同じ話をしたのに、と、憤慨していたけれど。

「おはようございます、姫君」

すっかり朝日が染み渡った部屋に、扉を開けて入ってきたのは、ふくよかな侍女だった。

「あ、おはよう。えっと、マルカ」

少し考えてから、彼女の名前を呼んだ空に、マルカは嬉しそうに微笑んだ。

「まあ、もう名前を覚えてくださったんですか」

手にしていた衣装を広げ、手際よく用意をしながら問うマルカに、空も笑う。

「うん。さすがに、こつちへ来てから、結構日がたつからね。一応、いつもお世話してくれる皆の顔と名前は、一致してきたよ」

少し自慢げに胸を張ると、マルカはまあ、と驚いたように満面の笑みを浮かべた。

その丸い顔の、優しい印象で、マルカは侍女たちの中でも、エマナの次に親しみやすい女性だった。

「ねえ、今日はエマナはどうしたの？」

そういえば、ここ最近顔を見ていない。気になっていた空の質問に、マルカは、ああ、と衣装を整えていた手を止めた。

「エマナは、収穫祭の準備にかりだされておりましたね。食材の買出しやら、衣装の発注やらで、飛び回っているんですよ。」

あの子は結構、しっかりしてて、役に立つので……」

「そうなんだ……じゃあ、収穫祭まで、ずっと忙しいの？」

「そうですねえ、姫君のお世話は、当分の間、私たちで交代でさせていただくように、聞いておりますね」

「そっか……」

少し表情を翳らせた空に、マルカが優しい笑顔を浮かべた。

「エマナがおりませんで、お淋しいでしょう」

「そっ、そんなことないよ、あたしは」

他の侍女たちに申し訳なくて、あわてて否定しようとした空に、マルカは訳知り顔で微笑んでみせる。

「いいんですよ、やっぱり、お年の近いエマナのほうが、姫君も落ち着かれるでしょうし、エマナも喜んで、姫君にお仕えしておりますからね」

少し目元に皺のあるマルカが、そう言って笑ってくれど、どこかほっとする。

それも確かだが、やはりマルカの言うとおり、すっかり友達のように付き合えるようになったエマナとのほうが、楽しいのは事実だった。

何と答えていいかわからずにいる空の髪を、優しく櫛で梳きなが

ら、マル力は続けた。

「それに、殿下も最近大変お忙しいようですし、姫君が余計お淋しいのは、仕方がありませんよ」

その言葉に、空の眉が曇る。

少し俯き加減になった空に気づいているのか、どうなのか、マル力はそのまま丁寧に、空の髪を梳いてくれている。

エシユタンド、か……。

あれから言葉通り、宮に戻りもせず、ここ数日、満足に顔も見られていない相手を思い浮かべて、空は自然とため息をもらしていた。どうやら、収穫祭前に、魔のモノの探索だか、追跡だかで、クガルを始め、私兵隊を引き連れて、あちこちに出かけているらしいのだが。

空のほうはといえば、リゴトと連日、ほぼ一日中みっちり、収穫祭だけでなく、ミディスの歴史やら、文化やらの勉強をさせられて、形だけは大人しく聞いている空も、さすがに嫌気がさしていた。大嫌いな勉強も、大事な儀式をこなすため、そう思って耐えているというのに、その空に応援の言葉の一つもなしで、いくらなんでも、薄情というものではないのかと、浮かんだ藍色の瞳を、頭の中で睨みつける。

あんなに、熱い瞳で見つめてきたくせに。

体中を奪い去られるほどの、彼の熱っぽい言葉も抱擁も、まだ目を閉じれば思い出せるくらいなのに。

そう思ってから、途端に湧き上がってくるおかしな感情を追い払おうと、空はあわてて首を振った。

「姫君？　どうかなされましたか？」

髪を梳いていた手を止めて、訊ねたマル力に、空はごまかすように笑った。

「あ、ううん。何でもないの。ちょっと、風が冷たくて、寒気がし

ただけで」

もちろん、そんなことはなかったが、マルカは心配そうに急いで窓を閉めに行ってくれた。

「まあ、お風邪でもお召しになったら大変ですわ。今日のお約束は取り消しておきましょうか？ あ、でも 今日確か、西の聖殿の……」

困ったように言いかけるマルカに、空はあわてて口を開く。

「大丈夫、大丈夫！ 今日大事な儀式の練習があるんだもん、休んだりできないよ。あたしのことなら、心配しないで。しっかり、こなしてみせるから」

「でも 本当に、大丈夫でございますか？」

「うん！ 体は丈夫なほうなんだ、あたし」

安心させるように笑った空に、マルカも胸をなでおろす。

そのまま、マルカに衣装を着るのを手伝ってもらいながら、空は改めて、自分を元氣付けるように、顔を上げて、窓の外を眺めた。

朝日に、白い王宮の色が反射して、清浄な光を放っていた。

収穫祭の儀式は、毎年、東西南北、四つの聖殿の巫女が、交代で執り行うものだという。

儀式が執り行われるのは、王宮近くのハルトという小さな村。

村の守り神とも言われてきた、白水晶の滝 その美しさは、ミデイスでも一、二を争うほどのもので、大昔に滝つぼから発見されたという、ハルトの聖なる剣で、滝の流れを切る儀式を行うことで、滝の精を鎮め、その力でいつまでも村を守護してくれるようにと、祈りを捧げる、そんな伝統が、いつの間にもやら王宮に引き継がれて、収穫祭の伝統行事として、行われるようになった。



「この行事が無事に済んでこそ、ミディアスの民は安心して、冬を迎えられると言われている。どう？　結構、ちゃんと覚えたでしょうっ。」

空の得意そうな声に、マルカは笑顔で頷いた。

「それだけではありませんよ、姫君。なぜ、滝の流れを切る、という儀式が、滝の精を鎮めることになるか、そのくだりが、抜けておるではないですか！

それに、なぜハルトの村から、王宮へ受け継がれることになったかというところも　」

たちまち厳しい顔で、長い髭に唾を飛ばしながら、口を開いたりゴトに、空は苦い顔をする。

「まあまあ、そのへんのことには、省略ってことで　」

「しよっ、省略ですと？　そんな、適当なことではよしいと思っておられるのですか！」

ますます皺を増やして叫ぶリゴトに、空はごまかすような笑いを浮かべた。

「ちゃんと、後でもう一度復習しとくから、ねっ？」

その言葉に、眉間に青筋を走らせて、卒倒しそうな顔になったリゴトを眺めていたマルカが、可笑しそうに笑う。

「まあまあ、姫君にかかつては、さすがのリゴト様も形無しでございますね　」

「なっ、なんですと　」

「あ、リゴト様、もうお着きになったようですよ　」

リゴトより一枚上手なマルカが、窓の外を眺めて素早くそう言うのと、空も、リゴトも、瞬時に緊張した顔になった。

「よいですね、姫君。西の聖殿の、巫女殿は　あの月の巫女長様のような、お優しい方ではないのですから、とにかく言動には十分にお気をつけに　」

連日、口をすっぱくして同じことを言っているリゴトに、空も硬

い笑みを返した。

「わかつてますって！ 失礼のないように、淑女らしく、姫君らしく、でしょ？」

「くれぐれも、礼儀作法には、お気をつけくださらんと……」

「はいはい。わかりました！ じゃあ、もう行って行って！ そんな顔でそばにいられたら、余計に緊張しちゃうよ」

追い払うような空の仕草に、また目を剥いたリゴトを連れて、笑顔のマルカが扉を閉めて出て行ってから、空は真顔になる。

リゴトに言われずとも、もう十分緊張しているのだ。

いくら、こういふことの苦手な空にしても、失敗はしたくない。

この行事がどれほど重要なものはわかつているし、自分の言動が儀式の進行を妨げないように、とはよくよく、肝に銘じているつもりなのだ。

それにしても、今年の儀式の担当が、東の聖殿であったなら、どれほどよかったことが。いくら恨めしく思ってみても、もう決まっていることは仕方がない。

去年既に、東の聖殿によって執り行われた儀式は、今年は順番で西の聖殿の担当になっているのだそうだ。

それが、四つの聖殿の中でも、一番厳格で有名だという、西の巫女たちによって取り仕切られることが、空にとって、吉と出るか、凶と出るか。

客人を迎えるための部屋であるという、この宮の一室で、一人になつて、空は姿勢を正していた。

「姫君、西の聖殿の巫女殿が、到着されました」

使者の声と共に、扉が開いて、空はソファから立ち上がる。

それと同時に部屋へ入ってきたのは、セルスの地で見た、巫女の衣装とほぼ同じものを身につけた、数人の女性たちだった。

巫女たちの中央に立つのが、どうやら一番偉い女性であるらしい。

他の巫女たちとは格段に違う威厳を放ちながら、空に視線をやったのは、灰色の髪をきつちりと後ろにまとめあげた巫女だった。

よく見ると、並んだ巫女たち全て、髪の毛一筋も残さず、しつかりと後ろにまとめた髪型をしている。

ディーラをはじめとする、東の聖殿の巫女たちが、皆、自然と流したままの長髪だったことを思うと、まず髪型からして敵しそうに見えた。

「ミディアス王国、第三王子のご婚約者であらせられます、姫君お目にかかりまして、大変光栄にございます」

深々と頭を下げられて、空はあわてて同じように頭を下げた。

「西の聖殿にて、巫女長の補佐を務めております、メセルと申します。」

今年の収穫祭は、私どもが担当となっておりましてので、国王陛下からのお達しにより、姫君に儀式の決まりごとをお教えするために、参りました」

そうだ、巫女長は、直々にはこうした場には出ないものだったっけ。

てつきり一番偉い巫女が来るものと勘違いしていた空が、一瞬遅れたその瞬間に、メセルは頭を上げて、薄い緑の瞳で、空を鋭く見つめた。

「あ、こちらこそ、よろしくお願ひします。突然のことです、申し訳ありません。王宮までのご足労、お疲れになったことでしょう」

予想以上に厳しい緑の瞳に、リゴトから教わっていた挨拶の言葉は、一気に頭から抜けてしまったものの、何とか取り繕って、空は微笑みを浮かべる。

空の言葉に、少しだけ眉を上げたメセルは、微笑みもせず、再び頭を下げた。

「とんでもございません。儀式を任された巫女として、当然の義務でございますわ。それに、誉れ高い第三王子が、ついにお選びになった姫君にお目にかかれて、心より嬉しく思います」

つて、全然、嬉しそうに見えないんだけど？

メセルのぴくりとも動かない表情に、空は早くもたじろぎつつも、負けじと更になっこりと笑ってみせた。

「私のほうこそ、由緒正しい、西の聖殿の巫女様方にお会いできて、大変光栄でございますわ」

リゴトから言われた通りの挨拶を、思い出したままに口にして、空はドレスの端を持ち上げて、優雅なお辞儀を返す。

エシユタンドが見ていたら、吹き出しそうな、『姫君』の仕草、何度も練習したそれは、メセルに通じたのかどうなのか。

あいもかわらず、彫像のような無表情を守った巫女たちを見上げて、空は心の中で気合を入れ直すのだった。

森を吹き抜ける風が、少し開いた襟元を撫でていき、エシユタン  
ドは小さく身震いをした。

その一瞬の動作にすぐに気づいたように、隣のクガルが近づいて  
くる。

「殿下、お寒いですか」

気遣うような栗色の瞳に、エシユタンは森に向けていた視線を  
戻す。

「いや、大丈夫だ。そろそろ日が暮れるな、王宮に戻ろう」

白い愛馬の背を撫でて、彼が言うと、クガルは無言で同意を示し、  
散らばっていた私兵隊に号令をかけた。

「結局、大したモノは見当たりませんでしたね」

兵を集め終えたクガルに言われ、エシユタンも頷く。

「そうだな。まるでどこかに集まって、隠れてでもいるかのようだ。  
不気味といってもいいほどの、静けさだな」

列を成して、馬を走らせながら、エシユタンは背後に広がる、  
コルトスの森を見やった。

「何か、お感じになられますか」

クガルの問いかけに、藍色の瞳を細めて、エシユタンは軽く息  
を吐いた。

「いや、大きな魔の気配は感じない。これだけの探索を行っても、  
姿を見せんとは、敵にも何か、考えがあるのかもしらんな。

とにかく、油断だけは禁物だ。帰って、父上とも相談してみよう  
「そうですね」

クガルの返事を最後に、二人とも馬の距離を離し、速度を上げる。  
既に日が低くなったコルトスの街を背に、私兵隊全員も帰途につ  
いた。

収穫祭までに何らかの動きがないかと、魔のモノの探索に出てから、未だに何の成果も得られないでいることに、エシユタンドはわずかな苛立ちを感じていた。

あれほどの擬態を身につけた彼らが、このまま黙って引き下がるとも思えない。

しかし、あの時の様子を思うと、擬態力がまだそこまで続かないのか。

エシユタンドの思考を読んだかのように、そばを走っていたクガルが、馬を少し寄せてきた。

「殿下、それにしてもあの魔の女　一体何だったのでしょうか」

クガルもずっと同じことを考えていたのだろうか。眉を寄せて、思案しているような様子を見せている。

「ああ、あれほどの力を見せておきながら、突然、力尽きたのには、私も驚いた」

「ええ。しかも、急激にただの化け鳥の姿になって　あれが、あの女の実体だったのでしょうか」

クガルの言葉に、エシユタンドもあの奇妙な姿を思い出していた。まるで、何かの術が解けてでもいくかのように、体が縮み、苦悶の顔を見せながら、人の半身だったものが、あっという間に鳥の姿に変わっていったのだ。

どこか拍子抜けした気分で、それでも兵たち全員が、ほっとしたような顔で、あっけない幕切れを喜んでいた。

「そうだな　何かの幻術の類でもなさそうだったし、確かに擬態はしていたようだが、我々との戦闘で力を使い果たしたか、それとも、何かの力を借りて擬態していただけだったのか……」

エシユタンドの答えに、クガルも頷く。

「とにかく、引き続き、調査は続ける必要がありますね」

そのまま、森の小道を抜け、王宮までの道のりが見えてきたところで、自然と話は途切れた。

魔のモノの実体は、いまだに謎に包まれている。

今までにその謎の解明に乗り出さなかったのは、ひとえに彼らの力がさほどの脅威を与えなかったからだ。

小動物などを食し、時々人の前に姿を現す程度であり、間違つて傷を負うぐらいのことはあつても、彼らに襲われて、命まで失つたという前例は、今までなかった。

だからこそ、魔のモノを退治するためにも発達した、対魔の力や、魔の力で事足りていたのだ。

それが、あの女はあきらかに、人を餌として認識し、そのために力を揮っていた。それも、ほぼ人に似た姿までに近づき、言葉までも会得していた。

長い王国の歴史においても、初めての事態である。

まだ、エシユタンドが全力を揮わなくてはいけないほどの脅威は感じなかったものの、対魔の術においては、王宮軍の精鋭よりも優れているという噂の、エシユタンドの私兵隊が、圧されるほどの、恐ろしい力だった。

あの女一人だけとは思えない。既に水面下で、魔のモノたちが何らかの力を得て、あのような擬態をとげているはずなのだ。それなのに。

エシユタンドが知らず、唇を噛んだ、その瞬間、門から出てきた人物にぶつかりそうになった。

「はっ、で、殿下　大変、失礼なことを　も、申し訳ありません！」

大きな亜麻色の瞳を驚愕に見開いて、体が折れ曲がるほどにひれ伏したのは、エシユタンドもよく知っている、侍女である。

「お前は　確か、エマナ、だったか」

少し考えてから口にした名前に、彼女は驚いて顔を上げた。

「覚えておいでなのですか、私の名前……」

そう言いかけて、体を起こしたエマナの手になっていた籠から、色

とりどりの野菜がいくつか転がり出る。

「あ、これは、あの　新鮮でよいものがたくさん手に入ったので、私兵隊の方々にお裾分けに……」

聞かれてもいないのに、あわてて言い訳のように口にしながら、エマナは野菜を拾い集めた。

足元に転がってきた、その中の一つを、エシユタンドが手渡してやると、エマナは恐縮しながら、急いで籠に収めた。

「お前は、ソラ付きのはずだろう。なぜ」

全てを言わずとも、彼が聞いたかったことを把握したのか、エマナはあせったように、籠を抱えなおした。

「あ、あの……収穫祭の準備に借り出されておりました　姫君のお世話は、現在別の者が……」

その言葉に、少しだけ眉を寄せたエシユタンドを、エマナの大きな瞳が見上げる。

「何だ」

頭に浮かんだ考えを、微塵も読ませないような彼の無表情に、エマナはためらったような顔をした。

「い、いえ。何でもございません……」

小さく答えたエマナに、エシユタンドが何か言いかけた、その時、門の向こうから、歩み出てくる人影があった。

「殿下　まだ、こちらにいらしたんですか」

先ほど厩舎に馬を戻しに行ったクガルは、またエシユタンドを捜しに出てきたらしく、ほっとしたような顔をしていた。

「直接、宮へお入りになられても、結構ですのに……」

「いや、そのつもりだったんだが、ちょっと考え事をしていてな」  
私兵隊宿舎につながる門の前で、見渡せば既に松明の火が灯されていて、改めて考え事に耽っていた時間に気づく。

エシユタンドの近くに佇む小さな人影に、クガルはようやく気づいたように視線を下げた。

「これは、エマナ。こんな時間まで仕事ですか、収穫祭が近いから、



侍女の方も大変ですね」

そのにこやかな顔に、エマナは少し頬を染めて、俯いた。

「い、いえ。とんでもございません」

その手に抱えた籠を見て、クガルは笑った。

「それは？」

訊ねたクガルに、あわててエマナは顔を上げて、改めて自分の持っていた野菜を思い出したかのように、クガルのほうへ差し出した。

「あ、あの……これ、私兵隊の方々にお裾分けですの。どっ、どうぞ」

その重さのためか、震える両手で差し出された籠を、一瞬驚いたように見つめてから、クガルは受け取った。

「こんなにたくさん、よいのですか。あなた方の分も……」

言いかけたクガルに、エマナはぶんぶんと首を横に振る。その動作で、彼女の後ろに束ねた亜麻色の髪が揺れた。

「まだ、たくさんありますから！ あの、ぜひ皆さんでと、その、侍女長が申しております！」

どもりながら、半ば叫ぶように告げるエマナと、微笑みながらお礼を言うクガルを、エシユタンドは黙って眺めている。

その視線を意識したのか、エマナは余計に真っ赤になって、深々とお辞儀をして、あわてて立ち去っていった。

「で、それ、どうするつもりだ？」

腕組みをして門にもたれていたエシユタンドの問いに、クガルはやわらかい笑みを崩さずに答えた。

「もちろん 有難くいただきますよ」

近くを通りかかった兵の一人に、籠を渡して、クガルは遠くに見える宿舎を指差して、何事か指示した。

兵が籠を手に、宿舎へ向かうのを見送って、クガルは早足で戻ってくる。

「料理番に、渡すように言っておきました。明日の朝には、美味し

い野菜のスープが食べられそうですね」

クガルの表情は、笑顔に守られたように、その中のものは見えな  
い。

エシユタンドは少し口元を上げて、笑ってから、そのまま歩き出  
した。

松明の灯りが照らす小道を、連れ立って歩きながら、エシユタン  
ドはクガルを見やった。

「何か？」

すまして訊ねるクガルに、エシユタンドは苦笑する。

「いや。お前も、読めない奴だな、と思つてな」

「何が、でございますか」

いつもと同じ笑顔を向けられて、エシユタンドは藍色の瞳に、か  
らかうような光を宿す。

「気づいているんだろう、あの娘の気持ちに」

あえて、名前を口に出さずに、エシユタンドは訊ねた。

ただ一瞬のやりとりを見ただけで、自分にもわかることだ。この  
飄々とした栗色の瞳に、それが見えないわけではないだろう。

決めつけたような視線に、クガルはかなりしてから、あきらめた  
ように笑顔を収めた。

「……まあ、私も、もう子供ではありませんので」

そう言つて息を吐くその顔は、いつも皆に見せる、優しいだけの  
顔ではない。こんな顔を見る人物が、他にそうはいないことも、エ  
シユタンドは知っていた。

「それなら、何とかしてやるべきじゃないのか。優しくしてやれば  
やるほど、女というのは、期待も深まるものだ。

まあ、そんなことは 私に言われずとも、わかっているだろう  
がな」

いつになく気遣うような主の言葉に、クガルは栗色の瞳を伏せて、  
視線をそらした。

「そうなんですが……女性には優しく、と死んだ両親に厳しく教え

られてきたもので　なかなか、習慣というものは変えられないものですね」

「ごまかしたような彼の答えに、エシユタンドは軽く笑って、肩をすくめた。

「まあ、お前の好きなようにすればいいさ。ただ、その気がないのに、期待を持たせると、後々面倒なことになるというのが、私からの助言だ」

「冗談めかした言葉を、クガルは笑って受け止めた。

「はい。お言葉、胸に刻んでおきます」

今頃、勤務後の酒か、食事に勤んでいるのか、宿舎前の道には、誰も姿を見せず、ただ、建物から漏れる明かりと賑やかな物音だけが、夜を彩っていた。

その中で楽しんでいるだろう兵たちも、まさか自分たちの主が通っているだろうとは、夢にも思っていないに違いない。

わざと人のいない時間を選んで、こうしてクガルの宮を訪れている足取りも、ここ数日ですっかり慣れたものとなっていた。

代々の私兵隊、隊長に許された個人の宮　そこならば、それほど気遣うこともなく、夜を過ごさせるだろうと思ったからだだった。

「おかえりなさいませ、殿下、隊長様」

クガルに付くだけあって、口の堅い侍女が開けた扉の向こうへ足を踏み入れながら、エシユタンドは自然とため息をもらしていた。

「殿下、お疲れでございますか」

客室で、エシユタンドのマントを受け取ったクガルに聞かれ、無言で長椅子に腰を下ろした。そのままたれて、額に手をやる。

「少しな　さすがに連日、あちこち駆け回ったからな」

「では……口当たりのいい、果実酒でも、用意させましょう」

そう言って退室しようとする後姿を、エシユタンドは一瞬迷って、呼び止めた。

「どうかなさいましたか、殿下」

心配そうな顔で戻ってきたクガルに、エシユタンドは笑った。

「たまには、酒の相手をしてくれないか」

驚いた顔で瞬きをしたクガルが、ゆつくりと笑顔を浮かべる。

「もちろん 急いでご用意を」

どうするつもりか、だなどと、訊ねられるべきなのは、自分だというのに。

わきあがってくる自嘲の思いを、甘酸っぱい果実酒で押し流しながら、エシユタンドはため息をついた。

窓の外に浮かぶ青白い月を眺めながら、杯を空けていくエシユタンドの向かいに、クガルは黙って座っている。

「何も聞かれないというのも、落ち着かないものだな」

苦笑まじりに呟いた彼に、クガルは瞳をあげて、微笑んで見せた。

「お望みであれば、色々とお訊ねいたしますよ」

「お前のそういうところが、気に障るんだ」

明らかに本心ではない言葉にも、クガルは顔色一つ変えない。食事もなくに取らずに流し込んだ酒が、エシユタンドのいつもの表情を崩していた。

「姫君でしたら 儀式のために、頑張っておられるようですよ。」

リゴト様の厳しい講義にも耐えられ、今日などは、西の聖殿の巫女殿ともご対面されたとか

すらすらと、何事もないかのように話すクガルに、エシユタンドはにこりとませずに、酒杯をテーブルに置いた。

「知っている」

「何だ。もう、ご自分でお調べになっておいでですか」

「違う。侍女たちが話しているのを、たまたま聞いただけだ」

惘然とした答えに、クガルは苦笑して、エシユタンドの空いた酒杯に果実酒を注ぎ足した。

「では、こちらも侍女から聞かれたでしょうか。厳しいことで有名なメル殿とも、結構対等にやり合っておられるという噂ですよ」  
いつの間にか、情報を仕入れておきながら、表面上何の変化も見せない童顔をねめつけて、エシユタンドは黙ったまま、赤い液体を飲み干した。

「姫君も、意外としつかりされておいでですし、まあ心配はいらないと思いますが……なにせ、突然にあれこれ詰め込まれているわけですから、お疲れで倒れられたりしないように、侍女たちにも十分気をつけてもらおうよう、伝えておきましたよ」

それでも何も言わないエシユタンドに、クガルは自分の杯もゆつくりと飲み干して、笑った。

「あ、そうそう、ルストにも、よい話し相手になってさしあげるよう、私からも申し付けておきました」

その言葉に、さすがにエシユタンドは顔色を変えた。

「立ち聞きとは、趣味が悪いぞ」

恨みがましい視線を受け流して、クガルは肩をすくめた。

「決してそんなつもりでは　　たまたま部屋の前を通りがかったら、聞こえてしまいましたので」

こんな時のクガルは、いつもの忠実な彼とは違って、少し楽しんでいるように見える。

エシユタンドは大きく息をついて、栗色の優しい瞳を睨んだ。

「お前、性格が悪くなっただんじやないのか」

「殿下がお変わりになられたので、つられてしまいました……」

クガルは両手を上げて、悪ふざけを詫びるように笑顔になる。エシユタンドはあきらめたように、酒杯を戻した。

「お前の言いたいことぐらいわかるさ。私だって　　これではいけないことくらい、わかっているんだ……」

金の髪をかきあげて、天井を見上げたエシユタンドに、クガルは瞳を少しだけ、真剣なものにする。

「殿下が何をお悩みなのかは存じませんが……私から、言わせてい

ただけることは、ただ一つでございます」

その目に浮かぶ真摯な光に、エシュタンドは無言のまま答えを促す。

「大事な相手が、今、生きてそばにおられることは　素晴らしいことです。いくら想っていても　伝える相手を失っては、何にもならない」

背負ってきた過去からにじみ出た彼の言葉に、エシュタンドは言葉を失った。

「悔いを残すことは……辛いものです」

悲しい、微笑みを通して、彼の秘めているものが見えるような気がして、エシュタンドは眉を寄せた。

クガルは、無意識のように、衣装の首元に触れていた手を下ろして、立ち上がった。

「殿下の、お思いのままに　私は、殿下の幸せだけを望んでおりますよ」

明るく笑って、空になった酒瓶を持ち、クガルはそっと扉を開けて出て行った。

一人残された部屋で、エシュタンドは藍色の瞳を閉じて、長椅子にもたれる。

決して、望んではいけないと、あきらめたはずの娘　。

自分の心を凍らせて、断ち切ろうとしたはずの彼の想いに応えて、彼の手をとった、愛しい少女。

失いかけたと思った体を、両腕に収めた時、自分はまた、夢見てしまったのだ。

このまま、ずっと、共に過ごしていければ　そんな、儂い、苦しい夢を。

刹那だけでもいいと、心に決めたはずなのに　。

愛しい彼女の笑顔を、もう少しだけ、長く見られるなら、それでいいと、そう思ったはずなのに。

否、思おうとしたのだ。

必死の理性で壁を作り上げて、この時だけを共に過ごすとう思うっていた自分の心は、内側から爆発しそうな熱によって、崩されかけている。

止めようもないほどに、もっと、もっとと、求め続ける自分の声に耐え切れず、逃げてきたのは、自分自身だ。

冷静な仮面を被り続けることに疲れて、苦しくなって、離れてしまった。

そんな自分を、彼女はどう思っているのだろうか。

自然ともれる、深いため息は、彼自身を追い詰める。

もうすぐ、なのだ。もうすぐ、決断の時が来る。

逃げ続けていても、手を離さないといけない、瞬間はやってくるのだろう。

それなのに、あがいている、みっともない自分。情けなすぎて、笑えてくる。

エシユタンドは、空の酒杯を見下ろしたまま、乾いた笑いをもらっていた。

「収穫祭まで、あと二日、か」

一人呟きながら、窓の外の闇に、藍色の瞳をさまよわせ、エシユタンドは唇を結んだ。

クガルの言葉が、頭の中で、回っていた。

## 50・迷い（後書き）

そろそろ、ストックが少なくなってきました。

執筆のほうも、頑張ります！

感想等、いつでもお待ちしてます。

ブログへのコメントも大歓迎です。

（ブログのURLは、私の作者紹介ページに載っています）

### 3月16日追記

誤字をお知らせいただいたので、修正いたしました。

見直しているつもりでも、こういうミスがあり、お恥ずかしいです。教えてくださった方、ありがとうございます。



身支度も終えぬうちに、扉を叩かれて、エシユタンドは不機嫌な顔を隠さずに出迎えた。

「何だ、朝っぱらから騒々しいな」

昨夜の酒で、少し痛む頭をおさえて、問いかけると、あわてて頭を下げたのは、クガルとルストだった。

「それが、殿下　先ほど、ルストが侍女たちから聞いたらしいのですが……」

言いかけたクガルの隣で、待ちきれぬようにルストが顔を上げる。「王妃様が……突然、舞踏会を開かれると……収穫祭の前夜、身分の高い女たちを、王宮に集められるというのです！」

眉を上げたエシユタンドに、ルストは戸惑ったように一瞬言葉を止めて、口を開いた。

「侍女たちの噂では　姫君を、試されてるのではないかと……」

ルストが言葉を終える前に、エシユタンドは苛立ったように金の髪をかきあげ、白いマントを手早く身につけた。

「殿下、宮へお戻りですか」

クガルの問いに、エシユタンドは視線も向けずに口を開く。

「いや、父上に　謁見の間へ、行ってくる」

「ではすぐに馬を　」

急いでルストが飛び出していつてから、エシユタンドは控えているクガルに目を向けて、そのまま無言で歩き出した。

あくまで素知らぬ顔で、微笑んでみせる王妃に、エシユタンドは冷たい眼差しを向ける。

「このような時に、なぜ舞踏会を開かれるのです、母上　」  
苛立ちを抑えたエシユタンドの声に、扇を静かに動かしながら、

王妃は首を傾げてみせた。

「まあ、なぜ、だなどと……疑問に思うほうが可笑しいのでは？  
エシユタンド。収穫祭の前夜を祝うために、舞踏会が開かれるのは、  
恒例のはずでしょう」

「しかし、それは　まだ、正当な婚約者がいなかった頃の話で……」

珍しく声を荒げたエシユタンドに、王妃は勝ち誇ったような笑みを向けた。

「あら、あの娘は、まだ正当な婚約者だと、認められたわけではないと思っただけ……違っただかしら？」

大きな宝石の光る手で、金色の巻き髪をもてあそびつつ、王妃はエシユタンドに問いかける。

内心の怒りを抑えながら、エシユタンドは唇を噛んだ。

静かに二人を眺めていた王が、金の椅子にもたれていた体を、ゆつくりと起こした。

「王妃の言うとおりだ。舞踏会を開くべきかは、判断に迷うところだったが……祝い事だ。開いて悪いこともあるまい」

そう告げた父の瞳に浮かぶのは、ただ穏やかな光のみだった。

エシユタンドは、固く手を握り締めて、その灰褐色の色を見上げる。

「それでは……ソラはどうなるのです」

低く、抑え付けたような声で問われた王は、片眉を上げて、何事も無いように口を開く。

「あの娘を、お前が選んだことには変わりはない。今回の舞踏会は、婚約者選びのためではないとは、他の姫たちにも伝えてある。

ただの、前夜祭だと思えばよい。そんなに構えずに、楽しむことだな、エシユタンドよ」

王の言葉に同意するように、隣で微笑みながらも、王妃の水色の瞳は、冷たく研ぎ澄まされている。

エシユタンドはきつく燃える藍色の瞳を、丁寧な礼をすることで

隠した。

苛立ちをあらわに、大きく息を吐いた主のマントを、廊下で控えていたクガルが受け取る。

「まったく……面倒なことを企んでくれるものだ」

小さく、吐き捨てるように呟いたエシユタンドに、クガルは無言で気遣わしげな視線を返した。

「聞こえていただろう。ただの祝い事だなどと言って……狙いは目に見えたものだ」

早足で歩く、エシユタンドの後を、クガルがそつとついてくる。

「しかし、心配なのは、姫君ですね。ただでさえ、大変な時だといふのに」

クガルの言葉に、エシユタンドは表情をより険しくした。

収穫祭を明後日に控えたこんな時に、大変どころではないだろう。よりにもよって、舞踏会だなどと、そんな場に、もちろん慣れているはずもない、あんな少女を。

考えただけで、また湧き上がってくる怒りを胸に、エシユタンドは歩みを速める。

その向かう先を知っているかのように、立ち止まり、クガルは優しい瞳で、主の背中を見つめていた。

久しぶりの自室の前、扉をそつと開けたエシユタンドの目は、大きく見開かれていた。

名を呼ぼうとした口は閉じられ、藍色の瞳は固まっていく。

「右、左、右……そうです、なかなか飲み込みが早いではありませんか」

「え、そうですか？ きつと、王子の教え方がいいから……」

「いや、そんなことはありませんよ。姫君に、素質がおりなんです」

「えゝそんな……まあ、体を動かすほうが、勉強より性に合ってるってのはあるかも」

手に手を取って、笑いあう二人を前に、エシユタンドは動けないでいた。

艶やかな笑みを浮かべて、黒髪の少女を支え、軽やかに踊る、目の前の男。

それが、見知った弟だというのに、どこか知らない相手にさえ見える。

金の巻き髪を揺らして、右に、左にと優しく導くその仕草に、どうしようもないほどの腹立ちを感じた。

「これは 兄上、お戻りでしたか。どうしたのです、お入りにならずに」

扉の隙間で目が合って、エカルドが驚いたように動きを止めた。

「エ、エシユタンド……」

大きな黒い瞳が、彼を映し、戸惑ったように立ちつくした空の手を、エカルドが気づいたようにそっと離れた。

「舞踏会の練習をしていたのですよ。姫君が、ご存知ないということだったので」

そう言って笑うエカルドの瞳には、微塵のやましさもない。続けてようやく笑顔を浮かべた空も、エカルドの言葉に頷いてみせた。

「そっ、そうなの。今朝、突然マルカが教えてくれて……舞踏会だなんて、まるつきり初めてで、どうしようって騒いでたら、たまたま王子が通りかかって、教えてくれたの」

「兄上にご挨拶でも、と思ってやってきたのですが 僕でお役に立てるのなら、と思って志願したのですよ。ミディアスの姫君たちなら、大体教わってきたことですが、姫君の世界には、あまりこういった習慣はないそうですね。しかし、初めてと仰るわりには、上達も早い。この分なら、心配なさそうですよ」

にっこりとそう告げるエカルドに、エシユタンドはようやくやく我に返ったように、固まった頬を上げて、笑ってみせた。

「そうか、それは……頼もしいな」

いつもの声を出せていたのか、自分にもわからないぐらいの動揺を隠すのが、精一杯だった。

空の視線を感じながらも、そちらを見ることもできずに、エシユタンドはエカルドに向き直る。

「私は、まだ時間が取れそうにないんだが　お前が、明日までに、なんとか形にしてやってくれないか」

エシユタンドに快く微笑み、エカルドは頷いた。

「僕でよければ、もちろん　他の姫君たちを驚かせるぐらいに、頑張つてやってみますよ」

開いた窓から、吹き込んできた風が、三人の間を縫っていく。

なびいた黒髪に、一瞬だけ目をやったエシユタンドを、空は悲しげな瞳で見つめていた。

すぐに目を逸らして、なんとか浮かべた笑顔で、エシユタンドは口を開く。

「悪いな　舞踏会までには、戻ってくるから」

エカルドに見送られて、逃げるように部屋を出る。

そんな自分に一番苛立ちながら、エシユタンドは歩き出した。どこへ向かうのか、自分でもわからないままに　。

逃げたはずの、胸の中には、悲しげに揺れる、黒い瞳。

あの一瞬で、また刻み付けられてしまった。

こんな、卑怯な自分を、いつそ嫌ってくれればいい。そんな、正反対なことまで望んでしまう。

嫌いだと　こんな自分のそばにはいたくないのだと、そうはねつけてくれれば、あきらめられるのだろうか。

まぎれもない、自分の弟だというのに　他の男の腕の中で、微笑んでいた少女が、憎いとまで思ってしまった。

すぐに引き離して、奪い返して、エカルドまでも、殴りつけたくなるぐらいの　そんな、恐ろしい衝動。

自分の中に、こんなに醜い独占欲が埋もれていたなんて。

認めたくはなかったのに。  
儀式を終えたとしても、自分は、彼女を手放せるのだろうか。  
既に、自信は揺らいでいる。  
木漏れ日が差し込む、廊下を進みながら、エシユタンドは苦々しい思いを、必死で胸に沈めていた。

\*

「姫君、どうかされましたか」

既に誰もいない扉の向こうを、凝視したまま動けないでいた空に、エカルドが声をかけた。

その声に、ようやく我に返ったように、空が振り返った。

「ご、ごめんなさい。何でもないの　さ、早く続きを……」

言いながら、一筋、流れ落ちた涙に、空の言葉が止まる。作りかけた笑顔は固まり、みるみるうちにゆがんでいく顔を、両手で覆った空に、エカルドがあわてたように、歩み寄ってきた。

「姫君　急に、どうしたのです。どこか、具合でも……？」

戸惑いながらも、そっと気遣うように覗き込まれて、空は黙って首を振った。

「じゃあ、なぜ……まさか、兄上のごことで、何か……？」

答えるどころか、余計にあふれてゆく空の涙を見て、エカルドはそっと、空の肩を支えた。その温もりに、思わず涙に濡れた瞳で、空はエカルドを見上げる。

「あ、あたし 嫌われちゃったの、かな……？」

空の言葉に、目の前の水色の瞳が、驚いたように見開かれた。

「なんか、避けられちゃってる、みたいで あたし、なんか、気に障ることもしたのになって……もう、わかんなくなってる……」

嗚咽の合間に、苦しげにもれていく言葉は、ここ数日、ずっと一人で抱え込んできたものだった。

誰にも言うつもりはなかったのに、笑顔で乗り切るつもりだったのに そんな空の鎧は、優しいエカルドの視線に、崩れ落ちていく。

「こつちに来てから、ずっと……必死で頑張ってきたけど、ほつ、ほんとは 怖くて、恐ろしくて……儀式なんて、ちゃんとこなせるのか、自信だって全然ないのに……」

それでも、頑張らなきゃって、あつ、あたし……」

秘めていたものが、壊れたようにあふれ出て、もう止められなかった。しゃくりあげる空の肩に置かれていたエカルドの手に、少し力が込められる。

優しく支えるだけだった手で、空の肩を引き寄せたエカルドが、自分の胸に空を包み込んだのだ。

驚いて見上げた空を、優しい水色の瞳が見つめる。

「大丈夫。何の心配も、いりませんよ」

その声は、不思議なほど穏やかで、瞳は、波紋一つない、水面のような、静かな色をしていた。

「王、子？」

問いかけた空の背を、まるで子供をあやすように、そっと撫でる。「姫君なら、きっとできる。そう、僕も信じていますよ。そして、

兄上は あまりに純粹で、美しいあなたを、愛しすぎているだけ……」

そんなことは、見ている僕にだって、よくわかるというのに……不安になる必要など、ありませんよ」

そう言って、エカルドはいつもの優しく、華やかな笑みを浮かべ

た。

「もつと、ご自分に、自信をお持ちなさい。あなたは……自分が思っているよりも、はるかに魅力的で、素晴らしい女性ですよ」

そつと空を離して、エカルドは微笑む。エシユタンドよりは、背も低く、体格も細身でありながら、そつする姿はなぜかいつもより、大人びて見えた。

「そ、そう、かな……」

気恥ずかしくなつて、俯いた空に、エカルドは優雅な仕草で、手を差し伸べてみせた。

「ええ、この僕が保証しましょう。こつ見えても、僕だつて、兄上の次くらいには　女性にも人気があるんですよ。その僕が言うことが、信じられませんか」

おどけたように答えるエカルドに、空の顔にも笑みが浮かんだ。それを見て、エカルドが瞳を細める。

「そう、そつやつて、笑つていなくては　幸運だつて、逃げてしまえますよ。舞踏会や、収穫祭に備えて、捕まえられるだけの幸運は、全部捕まえて、離さないようにしなくては」

同意を求めるように、両肩を優しく叩かれて、空はようやく顔を上げた。その頬に残る、涙の跡を力強く拭う。

「ありがとつ、王子……ごめんなさい。あたしつたら、急に弱気になつちやつて、泣いたりして　みつともないとこ、見せちゃつた」  
言つて、まっすぐに笑いかけた空を見て、エカルドは優しく笑つてみせる。

「いいえ、みつともないだなんて、とんでもない。可愛い泣き顔でしたよ」

その言葉に、空の顔が赤くなる。

「ま、また　そんな、照れるようなこと、言わないで下さい」  
真つ赤になつた空に、エカルドの笑みが深まる。

「本当ですよ。いや、これは、兄上には秘密にしておかないと、殺されかねないな……大事な姫君を、腕に抱いてしまつたのだから。



いやあ、それにしても、役得でした。あのまま抱きしめていたら、理性を手放していたかもしれない」

楽しそうに並べ立てるエカルドを、空は耐え切れずに、にらみつけた。

「もつつ、冗談はいい加減にしてください！ からかわれるのは、エシュタンドにだけで、十分なんだから……」

途端に弾けるのは、エカルドの笑い声。そんなに可笑しかったのか、先ほどまでの大人びた姿が嘘のように、少し幼い笑顔だった。

「本当に、素直な方だ。兄上が、夢中になるのも、頷ける」

ひとしきり笑い終えてから、独り言のように、呟くエカルドに、空は眉を寄せた。

「もう、王子まで、そんなことばかり言って……」

この兄弟は、人をからかうのが、そんなに楽しいのだろうか、空はふくれる。その姿に、笑いの残る瞳で、エカルドがあわてたように手を振った。

「いやいや、怒らせるつもりではなかったんですよ。本当に、本心です」

「もういいです！ さあ、練習の続きでもしましょ！」

ふくれたまま、先ほどのダンスのポーズをとる空を見て、エカルドは楽しそうに笑いをおさめて、大仰に頷いてみせた。

「そうですね。兄上からの、直々のお願いだ。僕なりに、精一杯お教えしましょう」

言って、空の差し出した手を取り、もう片方の手で、空の背中を支える。

広く、何も無いエシュタンドの部屋の中、また優雅なレッスンが始まるのだった。

## 51・企み（後書き）

読者の方から、催促していただくという嬉しい経験をしまして、頑張って更新してます！

執筆も頑張って、できるだけ更新を早くできるように努力しますね。

## 52・想い

収穫祭の、前日がやってきた。

侍女が扉を叩く前から、目覚めていた空は、あちこち痛む体に、驚いていた。

「ダンスって、思ったより、筋肉使った……」

一人呟きながら、思い出すのは、昨日ずっと親身になって教えてくれた、エカルドとの練習だった。

舞踏会だと聞いて、テレビで見たような、すごい動きの社交ダンスとかを想像していた空にとって、思ったよりも覚えやすく、簡単なものだった。

ゆったりとした動きで、女性と男性が向かい合って、お辞儀をすることから始まり、差し出された手を、女性がとって、男性は女性を支えること。

その後は、ずっと似たようなステップと、ゆるやかな回転が続く、それが基本のダンスらしい。

確かに、王宮の舞踏会なんだから、あんまり激しい動きがあるわけないか。

男性はともかく、女性はいつも、細めの靴に、ドレスを着ているわけだから、そんなに速い動きができるはずもなく、高度な振りがあられるわけではないのだ。

だからといって、楽なわけでもない。大事なものは、一番に優雅さと気品だそうで、特に女性はいかに美しく、慎ましく、男性にリードされるか、そして、始終微笑んでいること、それがポイントだろうだ。

そのためにも、微笑みっぱなしで、更には、背筋を伸ばして、決められた姿勢をとっていないといけないので、ゆっくりとしたダンスであっても、意外と疲れるものだった。

「あーあ、まったく性に合わないったら……」

体を動かすのが好きだといつても、こういう優雅な、いかにもお姫様、といった動きには慣れていないし、どうにも気疲れしてしまう空だった。

ちよつと寝台をおりて、思いつきり伸びをしていた、その時。扉を叩く音に、空は振り返りながら返事をした。

途端に勢いよく入ってきた人物に、空の顔は輝いた。

「エマナ！ わぁ、戻ってこれたんだ！」

「姫君！ しばらくお世話ができずに、申し訳ありませんでした！」

ほぼ同時にそう言いあつて、二人は微笑み合う。

収穫祭が終わるまで会えないものだときらめていた空は、嬉しい驚きを隠せなかった。

「準備のほうは、もういいの？」

久しぶりの、エマナの亜麻色の瞳を見て、空はいそいそと問いかけた。

「ええ。もう後は、他の者たちで、間に合うそうで……このような大変な時に、おそばにいられなくて、本当にすみませんでした」

頬を紅潮させて、それでも申し訳なさそうに謝るエマナに、空は首を振った。

「ううん。いいの、いいの！ マルカや他の侍女の皆がよくしてくれたし……」

そこまで言つてから、空は少しだけ恥ずかしそうに笑った。

「でも、やっぱりエマナが一番だね！ よかったあ、やっぱりちよつと緊張してたから、エマナの顔が見られて、少しほつとしたよ」

空の言葉に、エマナも嬉しそうな笑顔になる。そして、手に持っていた衣装を思い出したように、あわてて寝台の上に広げていった。「こちらが、今日のお衣装、そしてこつちのほうは、舞踏会で着ていただく衣装になります」

エマナが並べたのは、淡いピンクの日常使いのドレスと、あきら

かに豪華な、舞踏会用のドレスだった。

「うわあ〜すごい！ でも、この刺繍に、宝石……かなり手間がかかってるんじゃない？」

驚いた空に、満足げにエマナが笑ってみせた。

「ええ、勿論！ 第三殿下の、ご婚約者である姫君の、初めてのお披露目ともいえる舞踏会ですもの！ 衣装係りにも、特別に豪華なものを用意するようにと、念を押して、作らせたものですわ」

自慢げにエマナが手で示すドレスは、華やかな黄色の、ふわふわした生地で、何重にも重ねられた裾が膨らんだ、可愛いデザインだった。

明るい色に似合うような、輝く宝石がちりばめられ、レースの中にも、丁寧に刺繍が施されている。

「あ、ありがとう……」

もちろん綺麗なのだが、あまりの豪華さに、空は思わずたじろいでいた。

エマナや、この衣装を用意してくれた人たちの、舞踏会にかける意気込みが、なんだかずっしりと迫ってきた気がしたのだ。

そんな空の表情には気づかないように、エマナはにこにこしている。

「聞きましたよ、末の殿下に、舞踏会の練習相手を務めていただいたんですって？」

「あ、う、うん……」

迫ってきたエマナに、少しだけあとさっしてしまう空だったが、エマナは顔をくしゃっとゆがめて、笑った。

「末の殿下は、ダンスがお得意なんですよ。その殿下に、お墨付きをいただいたのなら、心配もいりませんね！」

どうやら、エマナは、空が意外と早くダンスを覚えたことが、嬉しくて仕方がないらしい。自分が褒められたかのように、喜んでくれているようだった。

「他の姫なんか、蹴散らして、見せ付けてやってくださいいな！ 殿

下には、姫君が一番お似合いだつて、わからせてやりましょう！」「やはり、王妃の企みは誰の目にも明らかなようで、他の空付きの侍女も、空を応援してくれていると、昨日マル力が言ってくれていた。

みんなの気持ちは、嬉しい。応援してくれる人たちがいることは、何よりも心強いことだった。

それなのに、何かがかけている。そのかけているものが、今の空にとつて、一番求めているものだった。

さすがに、笑顔を続けられなくなった空に、エマナが表情を変えて、近づいてきた。

「どうかなされました？ 姫君……？」

途端に心配そうに覗き込まれて、空は力なく笑った。

「あたし、本当にそんな場に出て、いいのかな……」

ぼつりと呟かれた言葉に、エマナが不思議そうな顔をする。

「どういう……意味ですか？」

優しい亜麻色の瞳に、空は支えを求めるように、顔を上げた。

「そんな場所で、みんなの前で、あたしがエシュタンドの婚約者だつて、自信持つて言えそうにないよ……」だつて、きつと他の姫たちは、あたしなんかより、もっと綺麗で、ダンスも上手で、優雅な姫君としての教育も受けてて、そんな中で、あたしなんか浮いちゃうよ」

何を言うのかと、口を開きそうなエマナを見つめて、空は一瞬迷った後、本音を口にする。

「それに……何よりも、エシュタンドが本当に、あたしを選んでくれるのか、自信ないの。きつと、何かの気の迷いだつたつて気づいて、あたしなんかより、他の姫を選んじゃうんじゃないかって、そんなことまで考えちゃって……」

弱々しい、空の独白に、エマナはついに耐え切れなくなったように、空の腕を掴んだ。

「姫君！ そんなことはございません！」

眉間に皺を寄せて、エマナは真剣な目で見上げている。

「エ、エマナ……？」

あまりの剣幕に、空は言葉を止めた。エマナは、空の腕をしつかりと掴んだまま、口を開いた。

「殿下は 本当に、姫君を愛しておられます！ それは絶対に、気の迷いなどでは、ありません！」

瞳だけで、どういふことかと問う空に、エマナは少しだけ表情を緩めた。

「実は私、聞いたんです……クガル様から」

「クガルさんから……？」

一体何を、と空が聞く前に、エマナが微笑んでみせた。

「殿下が、ずっと宮を空けておられた、理由ですわ」

「宮を空けてつて……魔のモノの探索、とかが理由でしょ？」

訝しげに訊ねると、エマナは頷く。

「ええ、確かにそれはそうなんですけど……殿下が、何か悩んでおられると その原因はわからないけれど、姫君を想うからこそ、悩んでおられるようだと。」

決して、遠ざけたくて、そうされていたわけではないと……そう、クガル様が、私に教えてくださったのです」

その言葉に、空は、引き寄せられるように黙った。

「昨夜、わざわざやってこられて、どうか姫君に伝えてほしいと……私なら、姫君と親しくさせていただいているから、と。」

クガル様が、殿下に内緒でそこまでされるなんて、よっぽどのことですね。あの方が、殿下を思われるお気持ちは、本当に深いのです。

だからこそ、主の恋を、応援されたいと思われたんですわ。今までクガル様が、そんなことをされたことはありませんもの。

それは、殿下が、姫君をとてても大事に想っているのがわかったから、そうではありませんか？」

懸命に、まるでクガルが伝えてきた様子が想像できるほどの、熱心さで、エマナに言われて、空は言葉が出せないでいた。

本当に？ 嫌われたわけじゃなかった……？

突然の態度の変化に、恐れていたことを、はっきりと否定してくれたクガルとエマナの優しさに、空の中に巢食っていた不安が、少しずつ消えていく。

「ですから、どうか元気を出して、いつもの笑顔で頑張ってくださいな」

そう優しく言って、両手を握られて、空はようやく心の中が晴れていく気がしていた。

「だって、私……姫君の笑顔が、大好きなんですもの！」

エマナの言葉で、空は恥ずかしそうに笑った。遠慮がちな、それでも久しぶりに心から出た、笑顔だった。そして、エマナの小さい両手をしっかりと握り返す。

「ありがとう、エマナ！ あたし、頑張れそうな気がしてきた。よし、じゃあ、早速着替えないとね！」

嬉しそうに頷いたエマナに、着替えを手伝ってもらいながら、空は、ようやく暗闇から浮上していく心を感じていた。

「では、姫君、念入りに櫛を入れさせていただきますね。今日もまた、西の聖殿の巫女殿との練習がおありだそうですので」

腕まくりをして、櫛を取り出すエマナに、空も表情を引き締める。「うん、今日が最後の練習なんだ。明日は本番だし、気合入れていかないとね！ それと午後は、ダンスの最終練習。」

王子が、また付き合ってくれって「笑顔で相槌を打つエマナをまっすぐに見て、空は今度こそ、晴々しい顔で笑った。

「それが終わったら あたし、エシユタンドに会ってくる。やっぱり、ちゃんと顔見て話したいし」

力強い空の言葉に、エマナは瞳を優しくして、極上の笑みで応えてくれた。



\*

手にしていた紙の束を、テーブルに叩き付けたエシユタンドに、クガルは目を向けた。

「王妃様からの、使者でしたか」

静かに訊ねるクガルをちらりと見て、苛立たしげに息を吐くと、エシユタンドは乱暴に金髪をかきあげた。

「ああ。今夜の舞踏会に招待した姫君の名を、全て記してあるそう  
だ。家柄に、趣味まで書き添えてある。ごく丁寧なことだ」

眉をひそめて、紙の束を睨みつける彼を、クガルは気の毒そうに見つめた。

「この家柄全て、王妃の息がかかった者たちだ。私と結婚したとしても、裏から操ろうという魂胆なんだろう。そのうち婚約者を決めなくてはいけないのは、避けられんからな。」

あわよくば、ソラをなんとか婚約者の座から引きずりおろして、自分に都合の良い娘を代わりに、という見え透いた作戦だな。

万が一にも、ソラが本当の暁の娘だった場合を恐れているんだらうよ」

吐き捨てるように口にする、エシユタンドは長椅子に腰を下ろした。額に手を当てて、ため息をつく彼に、クガルが戸惑いがちに声をかける。

「それにしても……どうにも妙ですね。舞踏会を開くことには、何も知らない姫君に恥をかかせる、という単純な目的のためだけとは、どうにも思えないのですが」

納得が行かないような栗色の瞳に、エシユタンドも頷いてみせる。  
「ああ 私の懸念もそこだ。一体、何を企んでいるのか……とにかく、ソラの警護だけは怠るな」

「はい。それは勿論 侍女の一人から、毒見役にいたるまで、姫君の周囲には、我々の手の者を手配してあります」

クガルの答えに、藍色の瞳がわずかに和らいだ。

「まあ、お前のことだ。心配はいらんだろうがな」

その言葉に、クガルは笑みを浮かべて、頭を垂れる。

「お任せ下さい。殿下も、十分お気をつけになりますよう」

そのまま退出したクガルを見送ると、エシユタンドは一人、窓際へ歩み寄った。

広く、静かな自分の部屋 この場所に、今ではなくてはならないものとなつた、少女の笑顔を思い浮かべて、エシユタンドは瞳を閉じた。

既に夕闇が迫り始めている。もうすぐ始まる舞踏会のために、大広間へ行かなくてはいけない。

それでもこの場所から動けないでいるのは、何か確信めいた思いだった。

きつと、会える。きつと、待っていてくれる。

そう思うからこそ、エシユタンドはわずかな時間の合間を縫って、自分の宮へと戻ってきたのだった。

逃げていた、避け続けていた自分を、見捨ててはいないだろうか。こんな情けない自分に、愛想をつかしてしまわなかっただろうか。まるで少年のように、怯える心に、エシユタンドは思わず自嘲めいた笑みを浮かべる。

地平線に沈みゆくこうとする、鈍い太陽の色を、藍色の強い瞳が受け止める。

それでも、伝えなくてはいけないことがある。

大切な、大切なただ一人の少女に。

小さな、遠慮がちな音で、扉が叩かれた。

侍女が呼びに来たのかと、振り返ったエシユタンドの目が見開かれる。

そこにいたのは、待ち焦がれていた、黒髪の少女だったのだ。

「ソラ」

心の高鳴りをおさえて、ゆっくりと名を呼んだ彼に、一步、一步、確かな足取りで近づいてくる。

まだ舞踏会用の衣装も着ていない、化粧もしていない、そんな彼女が、例えようもなく美しく見えた。

「本当は、もう着替えに行かなきゃいけないんだけど……こっさり、抜け出してきちゃった」

舌を出して、そう呟く空に、エシユタンドは微笑んだ。

「私もだ。今頃、衣装係が捜している頃だろう」

久しぶりに、きちんと言葉を交わしている。そんな事実にも、どこか緊張しながらも、胸が少しずつ温かくなっていく。

どんな想いでいるのか、目の前の黒い瞳は、静かに、優しく瞬いていた。

「ソラ……ずっと、一人にして」

すまなかった、そう続けようとしたエシユタンドの口を、手袋をした空の手が、そっとふさぐ。

言葉を止めた彼を、微笑んだまま、見つめる。

「いいの。もう、今はそんな言葉、言わなくていいから」

そう言うと、言葉の意味を問い返そうとしたエシユタンドの胸に、空は自分から飛び込んだ。

思いがけない空の行動に、藍色の瞳が大きくなる。

彼の戸惑いも、驚きも、どこかへ追いやってしまったおつとでもするように、空は強くしがみついた。

その背中に、ゆっくりと回った腕は、段々と強く、空を抱き返した。

「エシユタンド……会いたかった」

彼の胸に顔を埋めたまま、告げられた言葉に、エシユタンドは心臓を掴まれたような気がしていた。

「あたし、あなたのために、頑張ったの。儀式の勉強も、準備も、舞踏会の練習も、全部　あなたに喜んでほしくて……」

あなたに、よくやったって、こうやって、抱きしめてほしくて

「

胸の鼓動が、力を得たように激しくなる。ぎゅっと抱きついてくる少女が、どうしようもないほどに愛しくて、たまらなくなった。そんな自分に戸惑うエシユタンドに、顔を上げた空が笑った。

「これで、元気百倍！　舞踏会も、明日の儀式も、頑張れるよ」

黒い瞳に、先ほど揺れて見えた悲しさも、痛みも、全て拭い去った笑顔が光る。

「だから、ちゃんと見ててね！　あたし、精一杯やってみせるから

「

それだけ言うと、腕の中から抜け出して、手を振って、扉の方へ駆けていく。

止める間もないほどに、素早く廊下を走っていく、軽やかな足音に、エシユタンドは思わず口を開けて、しばらく佇んでいた。

すっかりと音が聞こえなくなってから、浮かんでくるのは、いつもの微笑み。

「本当に　あいつは……」

大きく息を吐いてから、可笑しくてたまらないような顔になる。

自分の泥々した葛藤も、情けない躊躇いも、何もかも洗い流すような彼女の行動に、エシユタンドは思わず負けを認めていた。

「これだから、欲しくてたまらなくなるんだ」

わかっているのか、ともういない面影に問いかけて、エシユタンドは笑った。

伝えようとした言葉も、想いも、何もかも先回りして止められて、ただ純粹な微笑みを返されて、かえって、彼の背中を押したことに

彼女は一生気づくまいと。

まっすぐに上げた藍色の瞳には、揺ぎ無い想いが宿っていた。

そして、エシユタンドは歩き出す。大切な彼女に、大切な言葉を、伝えるために。

## 52・想い（後書き）

いよいよ、この次から舞踏会シーンへ突入です！  
できるだけ早く更新しますので、どうぞお楽しみに！

### 53・舞踏会

大広間に続々と集まる、きらびやかな人々の群れに、空は圧倒されていった。

控えの間から、カーテンに隠れて覗き込みながら、黒い瞳を右往左往させている。

「姫君、何をなさっておいでです。もうすぐ姫君の番ですよ」

肩を叩かれて、思わずすくみ上がった空は、亜麻色の瞳を見つけて、ほっとしたように胸をなでおろした。

「なんだ、エマナかあ。びっくりしちゃった」

「そんな情けないお声を出さないでくださいな、第三王子のご婚約者様ともあろうお方が」

その言葉に、周りに残っていた姫たちの視線が鋭くなる。先ほどからあからさまに冷たい目と、明らかな悪口であるう内緒話に囲まれているのだ。

居心地が悪いことこの上ないというのに、空のそんな抗議の目に、エマナは肩をすくめる。

「だって、本当のことではありませんか。

あの、見目麗しく、力にあふれた、次期王位継承者である殿下に、唯一愛されているお方なのですから、自信を持って」

「エッ、エマナったら！ もういいよ。わかったから、そんな大声で言わないで！ ねっ？」

気恥ずかしい上に、周囲の針のような視線に耐えられず、空は声を落として、エマナに懇願した。

「姫君」

エマナの不満そうな声に重ね合わせるように、後ろから響いたのは、嘲笑だった。

「まあ、侍女のほうが偉そうだななんて、第三殿下のご婚約者様が、聞いてあきれますわね」

ついに言葉を発したのは、ずっと睨んでいた、金髪の姫だった。その隣にいた茶髪の姫も、力を得たように扇を振りながら、頷く。「本当に。どちらが侍女だか、見分けが付きませんでしたわ」

そう言っ、顔を見合わせて高い笑い声を上げる。「まあ、何てことを」

頬を赤らめて、すぐさま抗議しようといきり立つエマナに向かって、空は静かに首を横に振った。

「姫君……」

勢いの弱まったエマナに、優しく微笑んで、空は囁く。

「相手にしたら、負けだよ。あたしなら大丈夫だから」

空の力強い瞳に、エマナも落ち着いたように頷いた。

「そうでございますね。申し訳ありません、私ったら……」

「いいの、いいの！ あたしのこと思ってくれてのことだもん。嬉しいよ」

そう言っ、空とエマナは微笑みあった。

無視されたことで余計に腹が立ったのか、二人の姫は眉をつりあげて、顔を見合わせている。

「もうすぐ、ご入場でございますよ」

エマナは言いながら、最後の確認とばかりに、空の衣装を整えている。

何度目かわからないほど、ドレスのリボンを結びなおして、エマナはよし、とばかりに微笑んだ。

「姫君、本当にお美しいですわ。これなら、殿下も喜んでくださいますわね」

エマナの言葉に、背後の姫たちが、ここぞとばかりに、嘲笑の声を上げる。

「どうかしら、いくら着飾ったところで、庶民くさは抜けないと思いますわよ」

「本当に。何でしょう、あの男性のような髪型。しかも、見たことのない色ですこと。なんだか、気味が悪いわ」



聞こえよがしにそう吐き捨てて、二人の姫は、呼ばれるままに、控えの間から出て行った。

明るく華やかな大広間へと入場するなり、先ほどまで浮かべていたゆがんだ表情はどこへやら、おしとやかな姫君の顔をして、優雅な動きで進んでいく。

扉のところに立っている、帽子を被った男性が、何か紙の束を持って、入場する姫たちの名と、家柄を読み上げているようだった。

「まったく……あれが、身分の高い姫だなんて、聞いてあきれますわ！ 姫君、気になさることはございませんわよ！」

必死でこらえていたのだろう、エマナが、彼女たちが去った途端に、ぶるぶると震えるこぶしを握り締めて、空を見上げた。

しばらく姫たちの背中を見つめていた空は、自分の髪にそっと触れながら、笑った。

予想外の反応だったのか、空の笑顔に驚いたエマナに、黒い瞳がにっと笑う。

「全然、気にしてないよ、エマナ」

「は、あ……そうでございますか？」

問いかけたエマナに、空は可笑しそうに口を開いた。

「どこにでもああいう子たちって、いるんだよ。なんだか、びくびくしてたのが馬鹿らしくなってきた。ただの女の子の集まりだもんね」

空の頭に浮かぶのが、どんな子たちなのかわからないのだろう。

エマナは不思議そうな顔をしている。

そうだ、姫君だろうが、何だろうが、どんなドレスを着ているようが、宝石を身につけてようが、ただの同じ年頃の女の子たちなんだ。

緊張していた背中を伸ばして、空はまっすぐ大広間を見つめた。

そして、最後に残った空の名を呼ぶ声が、響いてきた。

大広間に一歩足を進めた途端、ざわついていた空気が、いきなり静まり返ったのがわかった。

色とりどりのドレスに身を包んだ姫たちが、空のほうに視線を向けている。決められた通りに列を成して、静かに佇んでいながらも、その瞳は皆、一様に好意的とはいえないものだった。

気にしない、気にしない、と頭でとなえながら、空は歩き出した。堂々と、背筋を伸ばして、だったよね。

リゴトに散々教わった姫君としての歩き方、それを思い起こしながら、空はゆっくりと歩いていく。ドレスの裾を持つ手が、少し震えるのを、空はなんとかこらえた。

それでいて、優雅に、女性らしく。

ともすれば固まってしまいそうな頬を無理やり上げて、控えめな微笑みを載せる。そして立ち止まった空は、居並ぶ王子たち、そして正面の玉座に向かって、できるだけ優雅にお辞儀をしてみせた。

なんだか、あれこれと塗りたくられた頬も唇も、気持ちが悪い。香水も、豪華な宝石がついたネックレスも、初めてで、落ち着かない。

それでも、そんなことをおくびにも出さすわけにはいかない。

エシユタンドに、恥をかかせるわけにはいかないんだから。

心の中で決意を繰り返して、空は顔を上げた。

エシユタンドがこちらを見ているのがわかる。でも、今彼の瞳を見たら、くじけてしまいそうな気がして、空はあえて見ないまま、姫たちの並ぶ最後尾へと戻っていった。

それが、今日の舞踏会で定められた、空の場所だった。エシユタンドが抗議してくれたらしいが、やはり身分の高い姫から先に並ぶものだという王宮の規則をたてに、王妃に断られたのだと、エマナが侍女の噂話で教えてくれていた。

大丈夫。かえって、このほうが緊張しないで済むもん。

エシユタンドから遙か遠くに離れているのは、少し淋しいけれど、空はなんとか無事入場できたことで、ほっと息をついていた。

「ミディアスの、美しき姫君方。今宵はようこそ、お越しくくださった。この、ミディアス国王、エスカルルドの名を持って、歓迎しよう」  
朗々と歌い上げるような、王の声が響く。そこで立ち上がった王は、両手を広げて、全員を見下ろした。

「収穫祭の前夜を祝うにふさわしい、盛大な舞踏会とならんことを」  
王の言葉を持って、並んでいた姫たちは一斉に深々とお辞儀をした。空も遅れぬように、それに倣う。

そして、あとを受けるように、開幕を告げるための、ラッパのよな音が鳴り、壁際に並んでいた楽団が、演奏を始めた。

それを機に、それぞれに美しい正装をまとった王子たちが、立ち上がり、広間の中央へと進んでいく。

居並ぶ姫たちと向かい合う形となって、双方がゆっくりとお辞儀をする。

そう、これが、最初のダンスだったよね。

エカルドに教わったとおりの流れにほっとしながら、空はその場に控えていた。

十数人はいようという、姫たちの一番最後なのだ。王子たちが順番に踊っていても、なかなか空の番はまわってこないというわけだった。

最初のダンスが始まって、空はようやく落ち着きながらも、ふと見上げた先の光景に、思わず目を奪われていた。

王子たちに手をとられ、ダンスを始める姫たち。その中に、見えた、藍色の瞳。

そうだ、名目上、ただの舞踏会だと言っても、実際はエシユタンドのためのもの。

エシユタンドが他の女性と踊ること、そんなことはわかっていたはずなのに。

滑るような動きで、美しく女性をリードする、エシユタンドの姿。その手が、他の人に触れ、その瞳が、他の人を映すのだということ、なぜだか考えないでいた。

自分の練習で精一杯で、そんな当たり前のことを忘れていたのだ。今更ながら、胸が疼いて、空は直視できずに目をそらした。

エシユタンドから逸らした瞳に、エカルドや、他の王子が映る。

そして、気づいたのは、その中にエーデレードの姿がないことだった。

あ、あれ……？

不思議に思っただけ見渡した空は、先ほど王子たちが腰掛けていた椅子のところ、一人留まっているエーデレードを見つけた。

どうして、あの人だけ、踊らないんだろう。

そんな空の疑問が聞こえたかのように、無表情で舞踏会を見つめていたエーデレードが、空のほうへと目を向けた。

目が合った途端、手にしていた杯を持ち上げ、空に片目をつぶって、一瞬だけ微笑んでみせる。

思わず笑ってしまった空を、隣にいた姫が驚いたように見やった。「まあ、はしたないっいたら……他の殿下にまで、色目なんか使ったりして」

そんな囁きが聞こえて、空は思わず喉まで出かけた反論を飲み込んだ。

だめだめ、こんなことで怒ったりしちゃ。

せっかくの努力が水の泡だと、空は無視を決め込んで、前を向いた。

そして見つけたのは、エカルドの姿。優しい笑みをたやさず、女性たちと踊っていく。

そうか、この順番だと、あたしは先にエカルド王子と踊ることになるんだ。

横数列に並んだ姫たちは、それぞれ進み出た先で待つ王子たちと、順番に踊っていくことになっていた。

一曲を途中で交代したとしても、端にいる空は、同じく端の女性と踊っていくエカルドに当たることになる。

中央にいるエシユタンドとは、踊ることもできなさそうだった。

まさか、これも王妃の作戦だったこと？

ため息をつきながらも、空は仕方なく、華やかな音楽を聴きながら、立ち尽くしていた。

「さあ、姫君。どうぞお手を」

少しおどけたように言ってみせたエカルドの手を、空はゆっくりと取った。

もう既に何曲目かの演奏で、ついに空の順番が来たのだった。

そろそろ舞踏会の風景にも慣れてきていた空は、思ったよりも緊張せずに、最初のステップを踏み出した。

「そうそう、お上手ですよ」

エカルドのいつもの笑顔で、練習を思い出して、空も微笑み返した。

磨き上げられた床を、くるくると回り、同じ動きを繰り返し、段々と体の硬さもほぐれていく。

「その調子です。ほら、他の姫君たちも、驚いていますよ」

そう囁かれて、瞳をやった先では、列を成している姫たちが、すごい形相で空たちを見ていた。

「うわ……すっごく睨まれてるんだけど」

思わず呟いた空に、エカルドが可笑しそうに笑った。

「思ったよりも姫君のダンスがお上手で、悔しがっておられるんですよ、きつと」

「そ、そう……かな？」

エカルドの手を握りながら、不安げに問いかけると、水色の瞳が、優しく空を映した。

「ええ。兄上も、驚いておられるかもしれせんよ」

その言葉に、思わず少し離れたところで踊る、エシュタンドへと視線を向けてしまう。

ちょうど回転した動きに沿って、藍色の瞳と目が合った。

その瞳に何の感情も浮かばずに、すぐに逸らされてしまったことで、空は無意識にその姿を目で追ってしまっ

で、エシュタンドは、あいかわらず、流れるような動きで踊り続けていた。

「姫君、姫君」

小声で呼ばれて、あわてて視線を戻した空に、エカルドが笑みを浮かべたまま、口を開いた。

「踊る相手とは、できるだけ目を合わせているのが、決まりとなっています。お気をつけて」

周囲にはわからないように、そう教えられて、空はエカルドのほうだけを見ながら、改めて背筋を伸ばした。

「大丈夫、あとで列に戻ってから、兄上が他の姫君と踊るのを見て御覧なさい。そうすれば、兄上の心がわかります」

不安が漂い始めた空の心をお見通しであるかのように、エカルドはそつと囁いた。

その声に、空が不思議そうな顔をした、その時、曲が終わり、ついに長く続いた最初のダンスが終了したのだった。

飲み物やフルーツが載ったお盆を持った、給仕係たちが行きかい、楽団たちも小休止をとっている。

途端に、それぞれに手にした扇を振りながら、数人ごとにお喋りを始める姫たちに囲まれ、空は一人取り残されていた。

とりあえず無事に最初のダンスを終えて、ほっとしながらも、やはりどこかに感じる刺々しい視線から逃れるように、空は賑やかな

大広間を抜け出した。

そのままつながっているバルコニーへと足を踏み入れると、喧騒から解放されて、静かで涼しい夜の空気が空を包んだ。

「はあ……」

思わずもれたため息と共に、空は白い手すりに両腕をのせて、外に目をやった。まぶしいほどに灯りがともされた広間とは裏腹に、薄く広がる闇に身を任せると、少し気持ちが悪く落ちていく。

「こんばんは、姫君」

突如かけられた、少しかすれた声に、空ははっとして振り返る。

一瞬逆光で瞬きをした空の前に立っていたのは、白い正装の男性だった。

「あ、あなたは」

驚いた空に、笑顔を向けてくるのは、黄色がかった、くせのある金髪に、長い前髪が特徴的な、第二王子だったのだ。

なんとか外見は覚えてきたものの、名前も勿論知らず、話したことも、こんなに近くで見たことすらなかった空は、驚きを隠せなかった。

「まさか、話しかけられるなんて思わなかった。そんな顔だな。別にいいだろ？ 俺だって、あんたにゃ、興味はあるんだ」

思ったよりも軽い口調で、気さくに近づいてこられて、空はなんと答えていいのかわからずに、立ち尽くす。

すると、浮かべていた笑顔を、微妙に面白がるようなものに変えて、彼は歩み寄ってきた。

「俺は、エルファンド。知っての通り、第二王子さ。まあ、俺にとつて王子の位なんざ、大して大事なもんでもないけどな」

近づいてきたエルファンドの息が、少し酒臭いのに気づいて、空は思わず後ずさる。

それに気づかないように、エルファンドは、明るい茶色の瞳を細めて、にやにやと笑った。その視線の先が、自分の胸元に向けられているような気がして、空はあわてて体勢を変え、胸に片手を当て

て一礼した。

「お話できて、光栄でした、第二殿下　私は、少し衣装を直しに参りますので、これで失礼を……」

「おっと、そんなに急いで行かなくてもいいじゃないか。二人きりで話せる機会なんて、滅多にない。どうだ、この際、俺ともっと親交を深めてみるってのは」

戻ろうとする空の前に立ちふさがって、エルファンドは長い前髪をかきあげて、空をまじまじと覗き込む。

「それにしても、どんどん、色っぽくなっていくな　最初はただのお子様かと思ったのに、こりゃあ、エシユタンドなんかには勿体無い……」

先ほどダンスをしていた時、遠目で見た姿とは別人のように、ゆるんだ笑みを浮かべて、ぎゅっと手を握られて、酒臭い息が近づいてきて、空は思わず声をあげそうになった。

その瞬間、バルコニーに乱入してきた人影が、空とエルファンドの間に分け入った。

顔をしかめたエルファンドが、何かを言おうと口を開きかけて、その人物の顔を見た途端、しまった、という顔になる。

「お話中のところ、大変失礼をいたします、殿下。次なるダンスが始まりますので、どうぞ、広間へお戻りを」

深々と頭を下げ、丁寧になんか言いながらも、口調はどこか、有無を言わせぬものだった。

「レ、レアーデ……わかった、わかったから、下がれ！　戻ればいいんだろう」

かなり嫌そうに、エルファンドに追い払うような仕草をされても、レアーデと呼ばれた白髪まじりの女性は、お辞儀をしたまま動かなかった。

「もうよい！　お前が下がらんなら、私が戻る！」

憤慨したように、さっさとバルコニーを出て行ったエルファンドを、あっけにとられたまま見送っていた空は、自分を見上げる視線



に気づいた。

レアーデが、いつの間にか頭を上げ、空を静かに見ていたのだ。

「あ、あの　　ありがとう……」

思わずお礼を言いかけた空に、レアーデが有無を言わせぬ顔で首を振る。

「姫君が、私などにそんなお言葉をお使いになるものではありません」

女性にしては低めの声で、厳しくそう言われて、空はあわてて口をつぐんだ。

「申し遅れました。私、王宮の侍女長を務めております、レアーデと申します。姫君には、お初にお目にかかります」

きつくお団子に結ばれた髪型に、厳しい灰色の瞳。よく見れば、エマナたちが着ているのと、似たような服を着ていた。

侍女長と聞いて、思わず納得するほどの、威厳と冷静さに、空は少し圧倒されていた。

皺の刻まれた顔に、特に目立つのは、眉間のくつきりとした縦じわだった。それが、いっそう彼女の顔に迫力を加えている。

「あ、はあ……どうも」

なんとも頼りない空の返事に、レアーデは無表情のまま、再度お辞儀をした。

「では、私はこれで　　姫君も、どうぞ広間へお戻りくださいませよう」

言われて、すぐに踏み出そうとした空の足は、ふと振り返ったレアーデの瞳に、すくんだように止まった。

「私めがこんなことを申し上げるのは、どうかとは思いますが第二殿下には、お気をつけくださいませ。あのお方は、多少……素行に問題がおりなので」

声をひそめて、忠告をするレアーデに、空も先ほどのいやらしい目つきを思い出して、頷いた。

短い間での言動で、すっかりと思い知らされた空の気持ちを讀み

取ったように、レアーデは満足げに薄い笑みを浮かべて、立ち去っていった。

それと同時に、舞踏会の再開を告げるように、ゆっくりとした音楽が鳴り始める。

「さて、次も頑張りますか！」

レアーデにおびえたようなエルファンドの瞳を思い出して、少し笑いながら、空は一人、ガッツポーズをするのだった。

### 53・舞踏会（後書き）

いよいよ、開幕しました舞踏会！

これからしばし、舞踏会編、お楽しみくださいませ。

続きもできるだけ早く、更新しますね？。

急いで大広間へと戻った空は、華麗な光景に目を見開いた。

縦に並んだ、色とりどりの衣装も鮮やかな姫たちに加え、その隣にずらりと並ぶのは、揃って正装を身につけた、男性たちだったのだ。

あわてて女性の列の最後尾へと並んでから、目をやった先に見つけたのは、見知った顔。

特徴的な赤褐色の、硬そうな髪が、今日は後ろに束ねられている。

「ルストさん……！」

思わず呟いてしまった空は、前に並ぶ姫に睨まれて、あわてて口を押さえた。

そうか、私兵隊のメンバーも借り出されるって、このことだったんだ……！

胸あてなどのついた、いつもの武装とは違って、今日は淡いグレーの、きちんとした正装を身にまとっているルストだけではなく、その前には、同じ衣装のクガルも並んでいる。

エカルドから、ダンスの形や舞踏会の流れはざっと聞いていたものの、詳しくは知らなかった空は、あまりの雰囲気の違いに、驚いていた。

どうやら、王子たちそれぞれの、私兵隊の隊長、副隊長たちが、舞踏会に参加させられているようだった。

私兵隊って、ダンスまでできなきゃいけないんだ。

驚きつつも、自然とこの場に似合う上品な顔になっているルストに、笑いがこみあげてくる。

いけない、いけない。集中しなきゃ！

空が咳払いをして、前を向いたその時、再び高くラッパの音が響いて、ダンスの始まりを告げた。

それと同時に、鳴り始めた優美な弦楽器の音を筆頭に、最初の華

やかな音楽とは少し趣の違う、静かで、優しい曲が始まった。

一斉に前方を向いていた全員が、男女双方向き合う形となり、ゆつくりとお辞儀をした。

空も遅れずに続いてから、目の前の男性が差し出した手を取った。

今度のダンスは、回転も多く、ステップも多少複雑だった最初のものとは違い、ゆつくりとした動きが多い。

一応エカルドに教えてもらった通りで、空もなんとか付いていていたが、いかんせん、密着度も上がっているため、どうにも照れが隠せなかった。

空の相手をする男性は、どうやら私兵隊の隊員であるようだが、隊長や副隊長ではないようで、遠慮がちに空をリードしてくれていた。

背中に添えられた手も、どこか困ったように、できるだけ触れないようにしているようだった。

エカルド王子と踊った時は、そんなに気にならなかったのに、練習の時は必死だったし、ずっと一緒に踊っていたので、慣れていたのもあったのかもしれないと、空は思いつつも、どうも動きが合わずに、段々音楽からずれていくような気がしていた。

このダンスは、曲のフレーズごとに、順番に踊る相手がずれていくというものだったが、それでも、エシユタンドは遙か遠くにいて、また踊れそうにもない。

空が思わずため息をつきそうになった時、急に体がかくつと傾いて、倒れそうになった。

「きゃ……」

小さな悲鳴と共に傾く空の体を、あわてて前の男性が受け止めてくれる。

「ごっつ、ごめんさい」

何が起こったのかわからないままに、謝った空を、周囲の姫たち

が、にやにやと笑いながら見ていた。

ふと見やったドレスの裾に、薄くついた汚れが見えて、空は隣の姫を見やる。

「なあに？ 私の顔に何かついてますの？」

しれっとそう言ってきた姫に、空は怒りを飲み込んで、ドレスの汚れをはらった。

気の毒そうに見ている男性に、微笑んで見せてから、空はなんとかダンスを再開した。

靴で踏まれるなんて。わかりやすい嫌がらせしてくるんだ。

広がった裾は、自分でも扱いにくいものだから、わざとではない可能性はないわけではないが、あの嬉しそうな姫の瞳には、隠しもしない悪意があった。

こんなことで、負けないんだから。

ひそかに闘志を燃やしながら、空は戸惑いを隠せないような男性に、思いつきり優雅な笑顔を浮かべてやった。

なんとかダンスを続けて、パートナーを交代しながら、エカルドの近くまでやってきた。

水色の瞳を見るなり、空は、先ほどエカルドが言った言葉を思い出す。

『兄上が他の姫君と踊るのを見て御覧なさい』

優しく微笑んでくれたエカルドの意図がわからず、空は踊りながらそつとエシユタンドを見やった。

相変わらず流麗な動きで、次々と踊るエシユタンドの姿。

その、どこをどう見れば、彼の心がわかるというのか。

表情すら見えないほど、遠くにいては、エシユタンドが何を思っているのかもわからない。

空は迫ってくる不安を追いやりながら、次の男性の手を取った。

最初のゆるやかな回転を終えようという時、またしても空はバランスを崩した。

「きゃあつ」

悲鳴と共に、ちょうど変な格好で止まった足が、こらえきれずに、空は床に倒れこんでしまった。

さすがに周囲はざわめき、音楽も中断され、ずらりと並んだ大広間の人々全員が、空を見ていた。

思わず視線をやった先では、空の右隣の姫が、冷たい目で、空をせせら笑っていた。

さつきは左隣、今度は右隣ってわけ？

淡い金髪を高く結び上げた右隣の姫は、素知らぬ顔で空へと手を差し伸べた。

「まあ、大丈夫ですか？ さあ、お手を」

思わぬ行動にためらっていた空に、にっこりと微笑んで、彼女はしゃがみこんで空を起こそうとする。

「あら、私もお手をお貸しいたしますわ」

今度は最初にドレスを踏んだ左隣の姫が、さも気の毒そうな顔をして、反対側から空を支えた。

あ、あれ？ もしかして、二人とも、いい人だったり……。

空がそう思い直しながら、二人の手を取って、立ち上がるうとした瞬間、ビリビリと、派手な音がして、空のドレスの布が、裂けていく。

顔色を変えた空の前で、裾を踏んでいた足をさつとどけた姫たちが、大げさな声をあげながら、口元を覆った。

「まああ、大変！」

「お衣装が、なんてこと！」

騒ぎ立てる彼女たちの顔は、どこかに面白がるような色が残っていて、空はあまりのことに、声も出せないでいた。

まさか、身分の高い姫たちが、ここまでくだらない嫌がらせをしようとは、さすがに思わなかったのだ。

騒然とした空気が流れ始める大広間の中で、我も我もと、他の姫たちも寄ってくる。

「大丈夫でございますか？」

「どうぞ、私のお手をお取りになって」

「お顔の色が、真っ青でございますわよ」

心配しているふりをしながらも、彼女たちは嬉しそうな瞳で空を覗き込んでいる。

そして、数人の姫に囲まれたその時、空の首元で、ぷちっと小さな音が鳴った。

はっとした空が、首に手をやった、その瞬間、ばらばらと音を立てて、弾け散ったのは、空の身につけていた、ネックレスの宝石だった。

どういいうわけか、糸が切れたようで、光り輝いていた石たちは、見るも無残に、床に零れ落ちていった。

ざわめきは、一瞬にして、静けさへと変わる。

その場にいた誰もが、空の反応を見る中で、誰かが、囁くのが聞こえる。

「身分もない者が、無理をして着飾ったりするからよ」

「いい気味なこと」

「おおかた、慣れないダンスで足がもつれて、こけたんじゃないかしら」

空が見上げた途端、たちまち目をそらした姫たちの誰が言ったのかは、わからなかったが、空は唇を噛んで、立ち上がった。

首元に残っていた最後の宝石が、静まり返った大広間に、音を立って落ちていく。

空は、無残に裂けたドレスの裾を握り締め、震える手を押さえて、前を向いた。

「……着替えてまいります。失礼を……」

やっとのことで、そう残して、空は足早に大広間を駆けていく。

全員がその背中を見守る中で、段上の王妃は、涼しい顔で、テーブルに盛られた赤い果実を口にし、ゆっくりと微笑むのだった。



後ろも見ずに駆けてきた空は、控えの間に戻らずに、階段を下りて、いつの間にか王宮の庭へと出ていた。

空の勢いに、大広間の入り口を守っていた兵たちも、そのまま通してくれたのだ。

庭を囲むように、点々と置かれた松明の灯りだけが、夜の庭を照らしていた。

芝生の中央にある噴水の前に腰を下ろして、空はため息をついた。遠くに流れ始めた音楽で、舞踏会が再開されたことがわかる。一瞬振り返ってから、空は未練を振り切るように首を振った。

追いかけてきてくれる、わけないよね。

王子としての立場上、来たくても来られないはず。それはわかっているのに、エシユタンドが追いかけてきてくれることを、期待してしまう自分が嫌だった。

負けない、そう決めたはずなのに、先ほど弾け散ったネックレスと同様に、張り詰めていた緊張の糸が解けていくのを止められなかった。

いくら頑張つて、ドレスを着ても、宝石を身につけても、姫君としてのダンスや振る舞いを覚えても、自分は本当の『姫』でも何でもないのだ。

わかっていたことを思い知らされて、空は泣くにも泣けずに、乾いた瞳をゆらゆらと揺れる水面に向けていた。

「なんか、馬鹿みたい……」

知らず、呟きながら、水に映った自分の姿を、空は睨んだ。

慣れない化粧、慣れないドレス、慣れない、笑顔。

本当の自分なんかではない、偽者の『姫君』。

こうして無残に破かれてしまったドレスが、そんなものが虚像であることを、見せ付けているようだった。

「どうかされましたか、姫君」

ふとかけられた声に、空は弾かれたように顔を上げた。  
思わずまたエルフランドかと緊張した顔は、今度は困惑した表情を浮かべる。

目の前に立っていたのは、濃い色のフードをすっぽりと被った、大柄の男性だったのだ。

「あ、あの……」

守護兵でもない、王宮で働く人間ではなさそうな外見に、空は警戒を隠さずに立ち上がり、距離を取る。

「ああ、すみません。怪しまれても無理はないですね。私は、この舞踏会に呼ばれて参りまして、怪しい者ではありません。どうかご安心を」

低いながらも、澄んだ声で、男性はそう告げて、フードの中で、にっこりと微笑んでみせた。

「舞踏会に、呼ばれて？」

舞踏会に客が来るなんて、そんなこと聞いていない。

まだ納得が行かない空の表情に、男性は戸惑ったように、両手を広げてみせる。

「ほら、この通り、何の武器も持っていませんよ。姫君に危害など、加えるつもりはありません。第三殿下の、大切なご婚約者様ですからね」

その言葉に、空は瞳を見開いた。

「なぜ、あなたがそのことを……?」

外部には公にもしていない情報を、いきなり現れたこの人物がどうして知っているのか、ますます疑いが深くなる。

ますます後ずさる空に、困ったように笑って、男性は肩をすくめた。

「知っていたわけではありませんよ。私は、ただ、この中の誰かが、第三殿下の大切な想い人だと、そう聞いただけで……」

その言葉に、空が少し頬を染めたことに気づいたのか、気づいていないのか、笑顔を消さずに、彼は続ける。

「それが、あなたであることは、王子の目を見ていたら、すぐわかりましたよ」

いたずらっぽくそう言われて、空はますます戸惑った。

「どっ、どうしてそんなこと……」

「気づいておられないんですか？ 殿下の、あなたを見る目は、他の女性を見る時とは、全く違う。」

踊る相手にさえ、微塵の興味もないどころか、彼は他の女性を本当に『見て』もいない。ただ、瞳に映しているだけで、心の中には絶対に入れてもいない。

それが、さつき少しの間ダンスを見せてもらっただけで、わかりましたよ」

相変わらず、にこにこしながらも、彼が真実を語っているのだということは、真剣な瞳でわかった。

角度が変わって、松明の灯りに照らされた彼の肌が浅黒く、瞳は不思議な赤銅色をしているのが見えて、空は一瞬だけ目を奪われた。それに気づいたように微笑んでから、男性は優雅なお辞儀をする。

「お目にかかれて、光栄です。ご婚約者様」

その礼のあまりの上品さに、空は余計に驚いた。

「あなたは、一体」

問いかけた空に、人差し指で、静かに、と告げておいて、彼は囁く。

「ご挨拶は、後ほど　こんなところで、勝手に姫君と話していたことが知られたら、大変なことになるのですよ。」

ただ、私はこれを……あなたに差し上げたかっただけです」  
地面に置いていたらしい袋から、差し出されたものに、空は思わず目を丸くした。

「どっして……これは？」

空の言葉に、赤銅色の瞳が微笑む。

「第三殿下の、ご婚約者様への献上品です。お気に召していただけ  
たなら、幸いです」

そう言っつて、また深々と礼をして、立ち去ろうとする長身の背中に、空はあわてて口を開いた。

「待って！ あの、あなたのお名前は……」

振り向いた彼は、フードを少しだけ上げて、にっこりと微笑んでみせた。

「フェル、とだけ、覚えておいていただければ光栄ですよ」

赤銅色をまっすぐに空に向けて、彼はフードをすっぽりと被りなおし、片手を上げて、立ち去っていくのだった。

## 54・思惑（後書き）

続きが気になる、というコメントをいただいでるので、張り切って連続更新しました！

皆様、舞踏会編、お楽しみいただけれますか？  
続きも、できるだけ早く更新しますね！

二度目の休憩に入って、エシユタンドはカーテンの裏で、大きく息を吐き出していた。

先ほど給仕係から受け取った果実酒を、一気に飲み干して、いましましげに藍色の瞳を大広間に向ける。

「苛々していらっしやいますね、兄上」

ふとかけられた声に、振り向きもせず、エシユタンドは笑う。

「お見通しだな、エカルド」

名を呼ばれて、隣に並んだ弟は、踊り続けた疲れも見せずに、いつもの笑顔を浮かべている。

「苛々するなというほうが、無理だろう。空には言葉すらかけてやれず、くだらない女どもの相手をしなければいけないのだからな。

まったく……王子である立場が、今日ほどいまいまいしく思えたことはない」

眉を寄せて、吐き出される本音は、まるで色とりどりの魚のように、大広間にあふれかえっている女性たちが聞けば、卒倒しそうなものだった。

エカルドは、眉一つ動かさずに、頷いてみせた。

「そうですね……僕も、近くにいなながら、何もしてあげられないことが、不甲斐なくて」

その言葉に、エシユタンドは乾いた笑いを浮かべて、口を開く。

「お前のほうが、よっぽど空を助けていたさ。舞踏会の練習も、ずっと付き合ってたのはお前だ。

改めて、礼を言うよ。お前のおかげで、すっかり舞踏会に恥じないダンスをしていた」

言葉の裏にある、自責の念に、エカルドは気づいているのか、曖昧な微笑みで返すだけだった。

「あいつは……大丈夫だろうか」

先ほど走り出ていった空の背中を、どれほどに追いかけたかったことか。

あと一歩で踏み出そうとする足を、なんとか抑えたのは、王妃の不気味なほどの笑顔だった。

あれが、彼女の企みだったというのか。

くだらない嫌がらせで、空を追い出すこと。

そんなこと、そう思いながらも、いくら低俗な嫌がらせや陰口であろうと、空がどれほどに傷ついたかを考えると、許せなかった。

瞳を伏せて、空になった杯を下ろすエシュタンドの肩を、エカルドが軽く叩く。

「大丈夫ですよ。姫君は、あれで結構強い方です」

励ますようなエカルドの言葉に、エシュタンドは唇の端だけで笑った。

強い、か……確かに、意外なほど弱いかと思えば、驚くほどに強い。そんな娘だからな。

王妃の企みをも、はねかえすような強さが、空にはきつとあると信じている。

そんな自分がいることにも、エシュタンドは気づいていた。

大広間に入場してきた時の、彼女の輝き。あれに驚いたのは、自分だけではあるまい。

周りで皆が息を呑むのが聞こえていた。

その場にいた、姫たちの誰よりも、美しく、清らかな光を放っていた。

あの清らかさは、一体どこから来るものなのだろう。

いつも見ているはずの少女が、光り輝いて見えた瞬間だった。

休憩も終わり、そろそろ宴も終わりを告げる時刻となった。

戻ってこない空を心配しつつも、エシュタンドは王子たちのための席へと一旦戻る。

姫たちもまた列を成して、静かに佇み、誰もが正面の王を見据え

ていた。

そして、王が何事かを告げようと、口を開きかけた、その瞬間、大広間の扉が開き、そこに佇む人影に、皆の瞳が釘付けになった。その姿をみとめて、藍色の瞳が大きく見開かれる。

「申し上げます。姫君の、お召しかえが済みましてございます」

侍女長のレアーデが、そう深々と礼をする。その隣に立っているのは、大きな黒い瞳でしっかりと前を見据え、少し頬を紅潮させた、空だった。

身につけているドレスは、ほとんど黒に近い、濃い藍色で、体をぴったりと包み、裾のふくらみを少し抑えた、落ち着いた印象のものだった。

先ほどとは違い、豪華な刺繍やレースもついていないが、その不思議な色合いと、裾に散りばめられた、小さな白い宝石が、まるで夜空に浮かぶ星のようで、見る者の瞳を奪わずにはいられない。

輝く宝石も身につけていないというのに、濃いドレスの藍色と対比するように、白い、空の素肌が際立って見えて、エシユタンドはどきりとせずにはいらなかった。

濡れたように光る、黒い瞳、そして夜風に静かになびく、黒い髪が、艶やかで、先ほどの化粧を全て落とした、素顔であるにもかかわらず、とても美しかった。

息を呑んで、全員が見守る中、空はゆっくりと大広間の中央へ、歩み出してくる。

彼女たちが並ぶ横を通り過ぎ、居並ぶ王子たちと、正面の王に静かにお辞儀をした。

「遅れまして、申し訳ございません」

凜とした顔で、そう告げた空に、王妃の瞳がたちまちつりあがる。「あいにくだけれど、もう舞踏会は」

王妃がそう言いかけた、その時、王がそつと、彼女を制するよう  
に、手を出した。

「陛下………」



何か反論しかけた王妃に、王が灰褐色の瞳を向ける。

「まだ、宴の最後を飾るものを、用意してあるではないか」

静かな王の言葉に、王妃の表情は落ち着いていき、微笑みすら浮かべて、頷いた。

「そうでしたわね、お集まりの姫君方へのおもてなしが、まだ残っておりますましたわ」

気を取り直したように呟くと、王妃が、控えていた家来に、何事かを指示する。

そして頷いた彼が片手を上げるのを合図に、壁際の楽団が、高らかに笛を吹き、それと同時に、大広間の扉が開いた。

「私が招いた、お客人ですの。今宵の宴を締めくくるにふさわしい、素晴らしい歌を聞かせてくださるそうよ」

空とエシユタンドを交互に見て、水色の瞳がにやりと細められた。思わず空と瞳を合わせてから、エシユタンドは扉のほうへ目をやる。

皆の視線が移動した先に、立っていた人物　それは、赤銅色の髪と瞳を持った、浅黒い肌の青年だった。

その独特の色に、皆が声なき声で、驚きの吐息をつく。

長く、うねるように流れる、その髪は、無造作に束ねられ、瞳は、まっすぐに広間を見渡していた。

「吟遊詩人の、フェルでございます。今宵はお招きいただきまして、大変な喜びでございます。」

舞踏会にお越しの姫君方、そして王族の皆様を祝福する歌を、うたわせていただきましたたく存じます　「

澄んだ、低い声が、耳に心地よく響く。

フェル、と名乗った青年は、視線を集めたまま、楽団のもとへと歩み寄り、自らも弦楽器を取り出して、座り込んだ。

そして、唐突に歌い始めたのは、王を称え、国を称える語り歌。

合わせることも忘れた、楽団の全員が、揃いも揃って口を開けて、見つめている。

その表情は、ゆっくりと穏やかで、幸せそうな笑顔に変わっていた。

大広間の皆が静まり返って耳をすませるほど、その声は、とても美しく、魅力的だった。

続いて、気を取り直した楽団の演奏と合わせながら、フェルは自然の美しさを歌い、大空を舞う鳥や、大海原を泳ぐ魚、そして美しく微笑む乙女を歌にした。

この世の全てが、彼の歌を通して語られたような、そんな不思議な感動を覚える頃、フェルは静かに歌い終えた。

赤銅色の瞳をゆっくりと開き、彼は正面の王妃を見つめた。

それに応えるように、王妃が拍手をし、そして大広間に、大きな拍手が響き渡る。

上品に礼をしてみせた彼に、王妃が満足げに口を開いた。

「大変、素晴らしかったわ。ところで、フェルとやら、貴方は聞くところによると、占術にも長けているとか……」

首を傾けながら、思いついたように言ってみせる王妃に、エシュタンドは眉をひそめる。

何も気づいていないような、皆の前で、フェルは何事もないように、頷いてみせた。

「ええ、おっしゃるとおりでございます」

その答えに、王妃の顔が不自然なほど、明るくなる。

「そうだわ、では……何か、占ってごらんなさい。そうね、今日の舞踏会の主役である、エシュタンド。」

あなたのことを占ってもらうのはどうかしら」「素知らぬ顔で、エシュタンドを見る王妃に、藍色の瞳が厳しくなる。

「かまいませんが……一体、どのようなことを？」

フェルが問い返す声が聞こえる。エシュタンドが何かを言う前に、王妃が口を開いた。

「そうね、彼の恋、なんてどうかしら。どうも、最近、よからぬ相

手に、心を奪われているようなのよ。不吉でならないような、気がしてなりません。

彼の恋が、祝福されるべきものなのか、占ってもらえば、安心なのだけれど」

その言葉に、思わず視線をやった先で、空の曇った表情が見えた。

「母上、それは……！」

「結構ですよ」

エシユタンドが言いかけるより先に、堂々と承知したフェルに、皆の視線が集中する。

そして懐から取り出した、丸い水晶を手に、瞑想するようにフェルが目を閉じる。

それを見つめる王妃の水色の瞳には、勝ち誇ったような輝きがあった。

これが、狙いか！

唇を噛んだエシユタンドが、思わず立ち上がりかけた、その時、閉じられていた赤銅色の瞳が、大きく開いた。

「さあ、どうなの。皆の前で、言ってお覧なさい」

高らかに、誘うようにそつ促す王妃に頷くと、フェルはゆっくりと顔を上げて、微笑んだ。

「殿下の恋でございますが　大変、吉兆を示しております」

「な、なんですって　？」

あせつたように声を上げた王妃に、フェルはにっこりと笑って、首をかしげる。

「何か、驚かれる理由でも？」

その言葉に、浮かびかけた怒りの顔を、何とか飲み込んで、王妃はゆがんだ笑みを浮かべた。

「いいえ、べ、別に……」

王妃の答えを受けて、フェルは、水晶を撫でながら、皆を見つめた。

「私が占ったところ、殿下は、まさしく運命の恋をされているご様

子。この恋は、殿下だけではなく、王宮をも塗り替えるほどの、素晴らしい恋でございます。

殿下が、大切に想われているお相手は、真の美しさを持った、尊い姫君　お二人の前途に、幸あらんことを！」

光りを反射する水晶を高く掲げて、そう告げたフェルの声は、大広間に波のように広がっていく。

エシュタンドが、驚きを抑えて、空を見る。なんとも言えない気持ちを支えながら、二人は微笑み合う。

それを許せないかのように、王妃は、立ち上がった。

「もう結構！　ご苦労でしたわ、さあ、どうぞお帰りを　」

姫たちの囁きあう声がもれはじめると、王妃が赤い顔で大広間の出口を指差した、その時。

「まあまあ、母上。せっかく遠いところをお越しいただいたお客様です。もうしばらく、今宵の宴を盛り上げていただこうではないですか」

今までただ沈黙を守っていたエーデレードが、静かな笑顔で王妃の言葉を止めたのだ。

「エ、エーデレード……一体、どういう……」

意外な相手に邪魔されたことで、王妃は狼狽している。

その隣で王が、金の椅子から、少し体を起こした。

「どういうことだ、エーデレード。説明してみよ」

同じ色の瞳で、王を見上げて、エーデレードは笑った。

「どうということかと、問われるほどのことでもありませんが……ただ、今宵の主役を、私なりに祝福したくなっただけですよ」

まだわからないように、瞳を細める王に微笑んでから、エーデレードは立ち上がった。

「カル、私のターレを」

壁際に並んでいた自分の私兵隊長である青年に声をかけ、エーデレードはゆっくりと歩き始めた。

左足を、少し引きずっていることに気づいた空が、エシユタンドのほうを見る。

ゆっくりと、広間の中央へ歩み出る兄に視線が集中している間に、エシユタンドは立ち上がって、空のそばへ行った。

「兄上は、足が不自由なんだ。日常生活には支障はないが、昔、落馬したことが原因らしい」

そつと耳元で教えてやると、空はようやく納得したような顔になり、心配そうにエーデレードへ視線を戻した。

カル、と呼ばれた青年が、すぐさま小さな豎琴を持って、戻ってくる。

手渡された楽器　　ターレを手に、エーデレードは、佇んでいた吟遊詩人のほうを見た。

「趣味で奏でる程度ですが……あなたの歌と共に、演奏させていだいても、よろしいですか？」

一瞬だけ驚いたように瞳を瞬かせてから、フェルは、優しく微笑んだ。

「もちろん　　光栄でございます」

答えたフェルに満足げな顔をして、エーデレードは王のほうへ振り返った。

「というわけなんです……いかがでしょう、父上？」

しばらく黙って彼を見つめていた王は、いいだろう、というように頷いてみせた。

たちまち、大広間にざわめきの声が広がる。

その騒然とした空気をものともせぬように、エーデレードはフェルと共に、楽団の並ぶ位置へとついた。

「それで……どのような歌をご所望でしょうか」

気品すら感じさせる仕草で、フェルが訊ねると、エーデレードは一瞬だけいたずらっぽい笑みを浮かべて、何ごとかを彼に囁いてみせた。

彼女たちを通り越して、灰褐色の瞳が、空とエシユタンドを捉える。

「さあ、今宵の主役のお二人に捧げる演奏です。どうぞ、中央へ」  
おどけた調子でそう促したエーデレードに、エシユタンドも少しだけ笑って、頷いた。

戸惑う空の手を引いて、中央の、誰もいない空間へと導いていく。そして、流れ出したのは、どこか、懐かしいような、優しい旋律  
切なげにすら響く、ターレの音にのせて、フェルが歌い始めた。  
皆が見守る中、エシユタンドは、空に向かって、優しく手を差し出した。

きよとんとした様子で、見上げてくる黒い瞳に、エシユタンドは愛しげに微笑んだ。

「私達のためのダンスだ。さあ、お手をどうぞ　我が愛しの姫君」  
想いを込めてそう囁いた彼に、空は頬を染めて、信じられないように、その手を取った。

フェルの流れるような歌声と、優しく溶け合うような演奏が、二人の息を合わせていく。

そして、足を踏み出した途端、空が何か驚いたような顔をする。  
握った手に、少しだけ力を込めて、エシユタンドは笑ってみせた。  
「本当のダンスとは、どんなものが教えてやる。力を抜いて、私に全て任せる　そう、いい子だ」

硬かった空の体が、エシユタンドの腕の中で、自然と落ちついていく。

先ほどの形だけのダンスとは、全く違うエシユタンドの瞳と、その仕草に、突き刺すような視線が向けられているのがわかる。

全く無視したエシユタンドは、他の姫を気にしているような、空の顔を自分に向けさせた。

「私から、目を離すな。私のことだけ、考えるんだ」  
ほとんど唇がかすめるくらいに、近くで囁いた彼の行動に、軽い悲鳴が上がる。

悔しがるのは、まだ早いぞ？　お嬢さん方。

瞳の端にかすめた光景を、どことなく嬉しそうに見てから、エシ

ユタンドは、空の体を、より近くに引き寄せた。  
途端に赤くなる空に微笑んで、エシユタンドはゆっくりとステッ  
プを踏み続ける。

「これは、ミディスに伝わる、恋の歌だ。恋人たちのための曲にふ  
さわしい、ダンスを見せてやらなくてはな」

エーデレードが奏でる、優しい音色は、フェルの歌声と重なって、  
大広間を二人だけの甘美な空間へと変えていくようだった。

先ほど堂々と歌い上げた時とは別人のように、甘く、切ない歌を  
うたいあげるフェルに、いきり立っていた姫たちの顔も、次第に陶  
酔するようなものになっていった。

何度も続く、切なげな旋律に合わせて、エシユタンドは空の体を  
優しく右へ、左へと導く。

ゆるやかな回転を繰り返して、そして高まる音楽と共に、ほぼ抱き  
合うほどに、空の体を腕におさめた。

真っ赤になった空の顔が、目と鼻の先にある。

「あ、あの……」

近づいた距離に戸惑ったような空の声に、エシユタンドはそつと  
囁いた。

「照れるな、思いきり、見せつけてやればいい。二度と馬鹿な考え  
を起こさせないようにな」

王妃をちらりと見て、藍色の瞳が空を映した。

それでも恥ずかしそうに体を硬くする、空の抵抗を、エシユタン  
ドは楽しげな笑みで崩していく。

「それから、万が一にも、私の婚約者に手を出そうというような輩  
がいては、困るからな。」

お前は、私だけのものだ、はっきりとわからせてやらなければ

—

あいかわらず、何のことだかわからないような顔をする、鈍感で、  
愛しい姫君を、エシユタンドは力強く、抱きしめた。

彼のその動作を待っていたかのように、フェルの歌は、鮮やかに終わりを告げたのだった。

誰も、何も言えないような、そんな大広間の静寂を打ち破ったのは、拍手の音だった。

振り仰いだ全員に、優しく微笑んだのは、エカルドの水色の瞳。

「とても素晴らしいダンスでした。そう思いませんか、母上」

自らの息子に言葉を振られて、王妃は、目を剥いたまま、固まった顔に、なんとか笑みを浮かべる。

それでも、まるで屈辱に耐えるように、唇だけは硬く結ばれていた。

エカルドの笑顔を受けて、エシュタンドは空の手を握ったまま、王のほうへ向き直る。

「今宵の宴、存分に楽しませていただきました。どうも、ありがとうございます、父上」

その言葉に片眉を上げた王に、エシュタンドは藍色の瞳をきらめかせて、微笑んだ。

「改めて、我が婚約者の魅力がわかりました。この場にいる誰もが持ち合わせていない、ソラだけの魅力が……」

姫たちの視線を背中に感じながらも、エシュタンドは握った手に力を込めた。

そつと彼を見上げた黒い瞳にだけ、微笑んでみせて、再び玉座を見上げる。

「その娘だけの、魅力だと？」

興味深そうに見つめてくる灰褐色の瞳に、エシュタンドは自信に満ちた頷きを返した。

「そう、着飾っただけでは、手に入れられない、本当の美しさこの、清らかな心です」

はつきりと言い切ったエシュタンドは、背後の女性たちに挑戦するかのようになり、藍色の鋭い瞳を向けた。

「どんな宝石も、豪華なドレスも、ソラには必要ない。私が心惹か



れたのは 彼女自身なのだから」

強く、大広間に響き渡った彼の声に、誰もが何も言えずに立ち尽くす。

それを見届けてから、エシユタンドは握っていた空の手を、ゆっくりと口元へ持っていき、大切そうに、そっと口付けた。

その仕草を見る、空の大きな瞳に、大粒の涙が盛り上がる。

透明で、きらりと輝くその涙すら美しいと、エシユタンドは思うのだった。

## 55・心（後書き）

続きを楽しみにしてくださっていた方々、お待たせいたしました！  
舞踏会編、いかがでしたか？  
今度は、収穫祭へと移ります。  
お楽しみに。

56・恋歌（前書き）

待っていてくださった方、お待たせしました。  
ちょっと風邪を引いて、遅くなってしまいました。



シユタンド。

華やかな正装を脱いで、夜着に着替えた彼は、大広間での王子の仮面を取ったように、くつろいだ顔をしている。

エシユタンドが当然のように寝台に腰掛けるのを見て、空はあわてて起き上がり、夜着であるワンピースの裾を直した。

「な……なに？」

面白そうにその仕草を見ているエシユタンドに、思わず空が訊ねると、ただ藍色の瞳が楽しげに細められただけだった。

夜も暮れて、蝋燭の光だけが照らし出す空間は、沈黙を続けるには、少し雰囲気がありすぎる。

さすがに寝台の上で二人きり、という状況で、落ち着いていられるほど、空も鈍感なわけではないのだ。

というか、この前のエシユタンドの行動で、否応なしに自覚させられた、というべきか。

再び蘇ってきたあの時の光景に、どきまぎする心を、なんとか抑えている空に、お見通しのようにエシユタンドが笑った。

「心配するな、もういきなり押し倒したりはしないさ」

その言葉に、余計真っ赤になる空を、いつもの皮肉げな瞳で見つめてから、彼は寝台から立ち上がった。

蝋燭の置かれた窓辺へと歩み寄ってから、空にも手招きする。

誘われるままに彼の隣に並ぶと、エシユタンドは先ほどまでの豪華な舞踏会の名残も見えない、王宮の庭を眺めて、一息ついた。

こうして今は、二人きりで静かに並んでいることが、なんだかとても贅沢なことに思えて、空は一人微笑んでから、ひどく優しい眼差しが注がれていることに気づいた。

「エシユタンド……？」

ただ黙って見つめてくる彼の名を、自然と呼んだら、エシユタンドはふっと笑って、空の頬を片手で包んだ。

「よく、頑張ったな」

そう言って、いたわるように、そっと抱きしめられて、空は言葉

を失った。

何も言えないまま、見上げる黒い瞳に、藍色の瞳が優しくなる。

「言っただろう。私にそう言ってもらうために、頑張るんだとそんなことでいいのなら、何千回でも、何万回でも言ってる。お前が満足するまで、こうして抱いていてやる。」

エシユタンドの胸の中に包まれて、耳元で囁かれて、空はためらいながらも、彼の胸に、頭を預けた。

その頭を優しく撫でながら、エシユタンドは想いを込めたような息を吐いて、抱きしめる腕に力を込めた。

「本当に、よくやった……ソラ」

低い声が耳元で響いて、優しく髪を梳かれて、空の鼓動が速まっ  
ていく。

赤くなつた顔を隠すように下を向いたら、エシユタンドの手が強引に顎を掴んで、視線を戻させた。

ときどきしながら見上げた先で、藍色の瞳がにやっと笑った。

「ところで、聞きたいことがあるんだが」

甘い雰囲気から、さらりと表情を変えた彼に、空は戸惑いながらも、質問の続きを待った。

「あのドレス、誰に貰った？」

急に言われて、空は瞳をぱちくりさせる。そんな空にふっと笑って、エシユタンドはもう一度口を開いた。

「着替えた後の、あの濃い藍色のドレスのことだ。あれは、王宮で用意されたものではないだろう」

「ああ……あのドレスね。えっと、あれはフェルさんから……」

簡単な質問だと、答えようとした空は、少し鋭くなった藍色の瞳に言葉を止めた。

「ほう さつき見たばかりの吟遊詩人を名前で呼ぶほど、お前、いつの間にそんなに親しくなった？」

腕を組んで、瞳を細める彼に、空は、まずい、と瞳を逸らす。

「舞踏会の前にでも会ったのか？ それとも途中でか？ 私の知らないところで、どんなやりとりをしたと言うんだ」

次々と尋問のように聞かれて、空はあわてて両手を振った。

「べっ、別に何も無いよ。ただ、庭で会って、ちよっと話して……ドレスを貰っただけで」

空の答えに、逆効果のように、エシユタンドは眉を上げる。

「ちよっと話して、なんでいきなりドレスを貰うんだ」

「そっ、そんなのわかんないよ。あたしのドレスが破れてたからかな……第三殿下の婚約者への献上品だって、そう言っつて、渡してくれたんだもん」

あせつたように、必死で答える空を、エシユタンドの疑い深い視線が追い詰める。

「献上品だと？ それで、なぜお前が婚約者だとわかったんだ」

「そっ、それは」

フェルの言葉を思い出した途端、空の頬が赤くなる。それを見て、エシユタンドはますます表情を険しくした。

「怪しいな。お前、あいつに何かされたんじゃないだろうな」

「なっ、何言っつてんの！ されたわけないじゃん！ そんな人じゃ……ないよ」

厳しい視線に、思わず語尾が小さくなりながらも、空は潔白を証明しようと、まっすぐに視線を返した。

しばらくじっと見つめていたエシユタンドは、突然表情を緩めた。「まあいい。信じてやるう。とにかく お前は油断ならんからな。変な男に気を許すなよ」

どこまでが本気なのか、エシユタンドに厳しく念を押されて、空は懨然としながらも頷いた。

途端に満足げに窓の外に視線を向けたエシユタンドを、今度は空が見つめた。

「どうしてあのドレスにこだわるの？ あっ、もしかして、勝手にもらったりしちゃいけなかった？」

空の質問に、エシユタンドは少し笑って、肩をすくめた。

「いいや、お前への献上品だと言うんだ。お前が貰って何が悪い」  
「だって」

それにしても、妙な態度だと、眉をひそめて、抗議しかけた空に、エシユタンドが微笑んだ。

「お前、あのドレスの価値を知ってるか？」

突然の言葉に、勢いをそがれて黙った空を、面白そうに瞬いた藍色の瞳が見つめてくる。

「あの濃い藍色の布は 南方でしか手に入らない、貴重な染料で染めたものだ。そして、散りばめられていた、小さな白い寶石。

あれも、南方の海で育つ貝からしか取れない、白い涙と呼ばれる珍しい石だ。

見たこともないような奴らは知らんだろうが、あの場にいた女たちのドレスや宝石を全部合わせても、手に入れられんほどの、高価なドレス、というわけだ」

思ってもみなかったエシユタンドの話に、空は思わず息を呑んでいた。

確かに綺麗な色だとは思ったけれど、シンプルで、これぐらいのほうが、落ち着いて着れるな、なんて気軽に身につけた自分を、今更ながらに恥ずかしく思っていたのだ。

「まあ、もちろん、そんなことはお前は知るはずもないし、知ろうが知るまいが、十分に着こなしていたのだから、それでいいさ。

それにしても、あのフェルという男 ただの吟遊詩人、というわけではなさそうだな」

いつの間にか自分の思考へと入り込んでいくエシユタンドの腕を、空はあわてて掴んだ。

「それって、どういうこと？ あの人に何かあるって言うの？」

考えを邪魔されて、少しうるさそうな顔をしながら、エシユタンドは瞳を上げた。

「あの男の肌を見ただろう、あの浅黒い肌は、南方の生まれだ。南



方の島かあるいは……海の国、ビバスの者か。

とにかく、一介の吟遊詩人が、あんな高価なドレスを手に入れられるとは思えん。何者かが差し向けたのか、それとも」

今度こそ、眉を寄せて、何かを考え込むエシユタンドを、しばらく迷ったように見つめていた空は、遠慮気味に口を開いた。

「で、でも……あの人、悪い人じゃなかった。あたしを励ましてくれたし、それに」

「それに？」

いぶかしむように問い返すエシユタンドに、空は少しためらった後、続ける。

「あつ、あんな綺麗な声で歌える人に、悪い人なんているわけないよ！」

本当に言いたかったことは、少しずれていたのだが、エシユタンドは一瞬面食らったような顔をして、可笑しそうに吹きだした。

「そ、そんなに笑わなくてもいいじゃない……」

あんまり笑われて、空は恥ずかしそうに反論する。確かにちよつと子供じみた意見だっただろうか、と思いつつも、あの時の会話からしても、自分の直感には自信があったのだ。

「そうか。まあ、そういうことにしておこう。あの歌は、私も楽しませてもらったからな」

ようやく笑いをおさめて、皮肉げに言う彼を見ながら、空は突然、手を叩いた。

「 そうだ、思い出した！」

「なんだ、突然」

少し驚いたように聞かれて、空は思わず笑顔になる。

「さっきのあの歌だよ！ あたし、さっきからずーっと気になって、どこかで聞いたことあるな」って思ってたんだけど……」

「あの歌？」

「そう、あのフェルさんが歌った、さっきの歌。あれ、どういう歌

なの？」

嬉しそうに聞いた空に、エシユタンドは更に驚いた顔をした。

「どういう歌って……お前、歌詞がわからなかったのか？」

不思議そうに聞かれて、空は当然、というように頷いた。

「そりゃあ、そうだよ。だって、ミディアスの言葉じゃ……」

言いかけて、言葉を止めた空を、同じような色を浮かべた藍色の瞳が見つめる。

「もしかして、歌も、文字と同じで、お前にはわからない　　そう  
いうことか？」

その言葉に、空も力強く頷く。

「そう、きつとそうだ　　大して疑問に思わなかったけど、歌の歌詞は、すごく不思議な感じで、あたしにはわからなかった。

でも、なんだか懐かしい気がして……」

何か不思議な力で、自分たちの言葉が、翻訳でもされているらしいと、それは頭のどこかでわかっていたけれど、実際に違う言葉なんだと改めて思う。

「ねえ、あれはどういう歌なの？」

訊ねた空に、エシユタンドは気を取り直したように視線を戻した。

「あれは……さっきも言った通り、ミディアスに伝わる、恋の歌だ。

古くから、民衆歌として、歌い継がれてきたものだそうだが　　切ない恋を歌っている」

「切ない、恋　　」

思わず繰り返しながら、空はようやく、あの甘く切ない歌声の意味を理解できた気がしていた。

あの二人きりのダンスを、あんなに甘く酔いしれるような時間にしてくれたのは、その恋の歌のおかげだったのだと、空は納得しながら、浮かんできた疑問に気づく。

「……お前、あの歌を聞いたことがあったのか？」

エシユタンドに先に聞かれて、空はようやく顔を上げる。

「うん……ここでじゃなくて、あたしがいた世界で……小さい頃、

田舎のおばあちゃんが、よくうたってくれた歌とすごく似てるの。  
あんまり昔の記憶だから、歌詞とか曖昧なんだけど……大広間で  
聞いた時から、ずっと気になってて、さっきようやく思い出したん  
だ」

自信がなさそうな空の言葉に、エシユタンドの顔色が変わる。

「お前がいた、世界でだと？」

予想以上に真剣な反応に、空は戸惑いつつも、しっかりと頷いた。  
「そう。っていつても、懐かしくて、童謡かと思ってただけど  
そういえば、昔、クラスの子に聞いたら、知らないって言われた  
んだよね。」

あれって、おばあちゃん家の地方にだけ伝わるものなのかと思っ  
てただけど……」

独り言めいた空の答えを聞きながら、エシユタンドは藍色の瞳を  
細めていく。

「たぶん、よく似た歌ってただけだと思うけどね」

照れたようにまとめた空の前で、突然エシユタンドが歌いだした。  
驚いて見つめる空を、まっすぐに瞳に映したまま、低く、歌われ  
るその響きは、先ほどの大波のようなフェルの声とは違うものの、  
まるで吹き渡る藍色の風のように、空の胸を掴んでいく。

初めて聞いた彼の歌声　話し声とは違う、少し甘い響きで、空  
にだけ歌われる恋の歌に、胸が高鳴るのを止められなかった。

どきどきしながら見守っていた空をちらりと見て、歌い終えた彼  
は、何でもないかのように、口を開いた。

「どうだ、同じ歌かどうかわかるか？」

すっかり聞き入ってしまったことに気づかれないように、あ  
わてて歌を思い返しながら、空は考える。

「うん……メロディーは、同じみただけど……歌詞はやっぱりわ  
からないみたい」

そう言うと、エシユタンドは少し微笑んだ。

「　青い空、赤い空、遥かな空よ。あの人を連れてきて。愛しい、

愛しい、あの人を。

短い夢、儂い夢、優しい夢よ。あの人を見せておくれ。恋しい、恋しい、あの人を。

空より高い、夢より近い、遙かな世界へ。いつかは共にと願うだけ。願いを空に、希望の空に、我らが愛しい、空の子に　これが歌詞の内容だ」

まるで詩でも朗読するかのような、美しい響きでそのまま語られた内容に、空の顔色が変わる。

「その歌詞……どうして？」

両手で口元を押さえた空を見て、エシュタンドは何かを確信したような笑みを浮かべた。

「同じ歌、なんだな？」

驚きを隠せないまま、空が首を縦に振った途端、エシュタンドは空の手を取った。

「きっとこれは、偶然の一致などではない！ お前だけが知る、故郷の歌が、このミデイスに伝わる古い恋歌であるなんて　初めてお前とミデイスが繋がったんだ。

お前が、暁の娘である、その理由にもなり得るかもしれない。なぜお前なのか　それがわかる歌かもしれないんだ！」

珍しく興奮した調子で、空の両手を握るエシュタンドに、空は瞳を見開いて、見つめ返すことしかできなかった。

「もつと他に、思い出すことはないのか？　お前の故郷と、ミデイスに何か共通点はないか？」

藍色の瞳を輝かせて訊ねる彼を、空は戸惑いがちに見つめてから、視線を遠くへやる。

何か……？　おばあちゃんと、夏の川、浴衣、花火……。

思い浮かんでくる懐かしい情景を、一つ一つ吟味していた空は、思わず、あつと声を上げた。

「ホタル！　ホタルだよ。ミデイスにもいるってエマナに聞いて……」

……

「ホタル？」

眉を寄せたエシユタンドに、空はあわてて記憶の中を探る。

「えーっと、あ、そう、ラクス！ ラクスっていうんだよね、こっちは」

思い出した、と顔を明るくした空に、エシユタンドは考え込む素振りを見せる。

「ラクスが、お前の世界に？」

「うん。それでびっくりしてたんだ。だからって、どういふことは、わからないけど……」

この恋の歌と、ホタル、その二つがどういう意味を指すのか、空には全くわからなかった。

エシユタンドも、降参したかのように頭を振る。

「とにかく、また思い出したことがあれば、言ってくれ」

「そうだね、もしかしたら、何かの手がかりになるかもしれないし」

「勇んでそう答えてから、空は思わず口元を押さえた。

手がかり、だなんて、何の？」

自分で思いついてしまう、その答えに、空は知らず顔を曇らせていく。

そんな空の頭に、エシユタンドの優しい手が置かれた。

仰ぎ見た空に、エシユタンドはいつもの笑顔を向けていた。

「そうだな。さあ、もう遅い。お前は、先に休んでいる」

そう言って、すっかり残り少なくなつた蠟燭を見たエシユタンドは、窓枠にもたれていた体を起こした。

「先につて……エシユタンドはどうするの？」

不安をそのまま声に出した空の頭を、くしゃりとかき混ぜてから、エシユタンドは笑った。

「心配するな、一人にするわけじゃない。まだ寝付けそうにないから、散歩でもしてから、戻ってくる。」

先に寝ている、という意味だ」

何事もなかったかのように、そう微笑む彼を、遠慮がちに見上げて、空はそつと頷いた。

「明日は、大事な日だもんね。あたし、ちゃんとやり遂げてみせるから！」

エシユタンドの瞳に、少しだけ見えた影を消したくて、空は明るく笑いかけてみせた。

「ああ……信じている。もしも何かあったら、私が必ず助けに行くから、無理はするな」

真剣な顔で、空の頬を撫でたエシユタンドは、しばらく見つめてから、息を吐いた。

「エシユタンド　？」

問いかけた空に、微笑んでみせてから、エシユタンドは決意したように空を見た。

「明日の儀式が終わったら　お前に、話したいことがある」

「話したいこと……？」

怪訝そうな空の瞳に、優しい藍色の眼差しが返ってくる。

「ああ。大事な話だ。それから、明日、これを持っている。念のためだ」

寝台の側に置かれていた木箱を開けて、彼が渡したものを、空は神妙に受け取った。

「私も身につけておく。どんな効果があるかはわからんが、お守り代わりににはなるだろう」

手の平に置かれた途端、少し熱を帯びたその石を、空は大切に握り締めて頷いた。

「明日……頑張るね」

自分にも言い聞かせるかのように、静かに言った空に、エシユタンドも優しく頷く。

「お休み　ソラ」

そつと口付けられたのが、唇でなく、額だったことに、空は複雑な気持ちを感じながら、それでも笑顔を返すのだった。



## 56・恋歌（後書き）

今回は舞踏会後の一幕となりました。

次からは、いよいよ収穫祭編へと移ります。

ちよつと更新のペースは遅くなるかもしれませんが、頑張りますので、どうぞお楽しみに！



## 57・収穫祭（前書き）

お待たせいたしました！

いよいよ、収穫祭の幕開けです。

これから、しばらく収穫祭編となります。  
どうぞお付き合いくださいませ。

## 57・収穫祭

収穫祭などの特別な行事の時にのみ、使われる祈りの間　王宮内にこんな静かな場所があったのかと、驚くほどに神聖な雰囲気。この部屋には、王族と、儀式のための少数の侍女のみが出入りを許されているらしい。

特別に参加を許された形となった空は、エシユタンドの隣で、行われる儀式を見つめていた。

祭壇の前に、並べられた数多くの果物や、野菜、そして花々は瑞々しく、豊かな恵みを示すかのように様々な色彩を放っている。

その収穫物を前に、まず王が、そして王妃が決められた礼をして、収穫への感謝の祈りを捧げることで、収穫祭の幕開けとなるのだ。

それぞれの王子や王女たち、そしてその夫たちも順に祭壇へと進み出て、祈りを捧げた後、王自らの手で振舞われた、今年一番の出来である果実酒で乾杯をする。

リゴトと何度も復習した、儀式の内容と同じであることに、空は改めてほっとしながら、エシユタンドのほうをちらりと見上げた。知らず冷たくなっていた手を、エシユタンドがそっと握ってくれて初めて、自分が思ったよりも緊張していたことに気づく、空だった。

「今年も豊かな収穫に感謝して　乾杯！」

王がそう言っつて、酒杯を高く掲げたのを機に、全員が同じように酒杯を上げた。

なみなみと注がれた果実酒の赤い色を、少し戸惑ったように見つめていた空の耳元に、エシユタンドが誰にも気づかれないように囁く。

「王国の繁栄と、王族の健康を祈るための杯だ。少しでいいから、口をつけておけ」

エシユタンドがそう言っつても、杯を手にしたままためらっている

空に、王妃のきつい瞳が向けられる。彼女に何か言われる前にと、空は急いで赤い液体を少し口にした。

初めて飲んだ果実酒は、甘く、すんなりと喉を湿らせてくれた。意外に美味であることにほっとして、空は皆と同じように、注がれた分を飲み干した。

隣で心配そうに見守るエシユタンドに微笑んだ時、王がもう一度祈りを捧げ、無事朝の儀式は終了したのだった。

「この後は、いよいよハルトへ移動だ。大丈夫か？ ソラ」

祈りの間から出て、用意された馬車のもとへ向かいながら、エシユタンドが訊ねる。

空は晴れ渡った上空の青い色を見つめて、まぶしそうに目を細めながら、笑った。

「うん、大丈夫！ さっきの儀式の前に、リゴトともう一度復習したもん。すっかり剣舞は覚えたから安心して！」

気持ちのいい朝の光に背中を押されるように、空はなぜか自信がわいてくるのを感じていた。

この儀式さえ終われば、もう一安心だもんね。

自分にも言い聞かせながら、笑顔を見せた空に、エシユタンドもほっとしたように微笑んでくれた。

「儀式の決まり上、ここからはお前は巫女として扱われる。同じ馬車では行けないが、私の心は、いつもお前の側にあると思え。いいな？」

優しく空の肩に手を置いて、そう告げる彼に、空はしっかりと頷いて、衣服の胸元に手をやった。

忍ばせた緑の石が、エシユタンドの想いを伝えてくれるような気がしたのだ。

空の仕草に応えるように、皮袋の中で、想緑珠も、まるで呼吸でもするかのようになり、温かくなったように思えた。

瞳だけ交わして、エシユタンドと別の馬車に乗り込んだ空は、息を吸い込んで、心を落ち着けるように、馬車の揺れに身をまかせていくのだった。

ハルト村　王宮近くの、普段はひっそりとしたこの村が、今日だけはミディス中で、一番注目される村となる。

王宮さえも目にするのがかなわないような、農夫たちや、女子供、そして近隣の村中から集まった人たちが、唯一王族の儀式を見ることが許される日なのだ。

儀式の妨げにならないよう、大きな街からの出入りは禁じられるものの、ハルトと、その周囲の村人たちだけは、暗黙の了解として許可されていた。

村につながる森の小道には、王宮軍の兵達が数名ずつ配置され、通る馬車の確認をしていた。

空の乗った馬車も、形式上の確認を受けたあと、ようやくハルト村の中へと入ることを許された。

「もうすぐでございますよ、姫君」

馬車が静かな森を抜けて、並んだ兵たちの間を通っている間に、空に話しかけたのは、西の聖殿の巫女　メセルだった。

「儀式の流れは、覚えていらっしゃいますね？　よいですか、くれぐれも剣舞の順番を間違えないよう」

鋭い薄緑の瞳を向けながら、空に確かめるように続けた彼女は、儼然としたように、言葉を止めた。

「何です、私がおかおかしなことでも申し上げましたか？」

知らずゆるんでいたらしい口元を、空はあわてて引き締めながら、首を振った。

「いいえ、全く。どうぞ、お続けになってください」

考えていたことを隠して、そう微笑んだ空に、メセルは咳払いを

した。

「もう、結構です。よっぽど、自信があまりのようですし、私はもう何も申し上げませんので、どうぞ儀式にお向かいくださいませ。

ただし、このメセルの名を落とすような振る舞いだけは、許しませんよ?」

厳しい口調は、聞く人によつては、嫌味にしかとれないようなものだったが、空は気にもしないように頷いた。

「それはもう、十分に肝に銘じておりますよ、メセル様」

空のおどけたような答えで、馬車の中に、ひそかな笑いがこぼれる。

隣で口元を押さえた巫女たちは、メセルに睨まれて、あわてて綻んだ口元を引き締めた。

厳格で気難しいと評判のメセルに、最初はびくびくしていた空も、何度も剣舞の手ほどきなどを受ける間に、意外と面倒見がよく、見た目より怖くない人だとわかったのだった。

本来なら儀式まで付いてこなくてもよい彼女が、ここまで同行してくれたのは、自分を心配してのことだと気づいて、空は嬉しかった。

「いよいよ、ご到着でございますよ、姫君」

和らいだ雰囲気を引き締めるように、メセルが言った後、すぐに馬車が止められ、巫女たちが順番に降りて行く。

最後に馬車を降りた空の目に映ったのは、鬱蒼と茂った木々だった。

「ここからは、馬車を降りて、歩いて頂きます。もう既に、王族の方々は到着されたとのことですよ」

道案内のためか、警護のためか、数人の兵たちに付き添われ、空たちは薄暗い森の中を、ゆっくりと進んだ。

慣れた足つきで歩く、メセルの背中を追って歩きながら、静けさと共に、緊張感が膨らんでいく。

「あっ」

木の根につまづきかけた空の腕を支えたのは、メセルだった。

「お気をつけください。少し、道が厳しくなっておりますゆえ」

兵にも気遣われながら、体勢を起こした空は、言われるとおり、段々と幅も狭く、上りになっていく道を見上げた。

「こんなところを、王族の方たちもお歩きになつたんですか？」

思わず訊ねた空を、思い切り眉間に皺を寄せたメセルが振り返る。「何を仰つておいでです、皆様方は、下で儀式をご覧になるのですよ。姫君、貴女様は今から、儀式のため、滝の一番近くまで行かなくてはならない。」

そんなこともお忘れですか？」

冷たく、非難の目を向けられても、空はいたずらっぽく舌を出して、笑った。

「ごめんなさい、そうでしたね。儀式の場所が違うこと、すっかり忘れておりました」

「わ、忘れていたですって？」

途端にいつもの落ち着きが嘘のように赤い顔で、怒り出そうとしたメセルを、両脇から、巫女たちが止めた。

「まあまあ、メセル様。皆様がお待ちです、先を急がなくては」

巫女たちの表情も、この数日で、すっかりと二人のやりとりになれたのか、のどかなものだった。

兵までも頬を緩めかけて、あわてて咳払いをしている。

漂っていた緊張感を忘れるようなやりとりに、空も少し落ち着いた気持ちになりながら、ひたすら木の根を分けて、上っていった。

「うわあ……すごい！」

突然木々が開けて、明るくなった目の前にあったのは、水飛沫を上げて、流れ落ちる大きな滝だった。

せり出した岩が滝ぎりぎりまで伸びて、まさに触れることができそうなほど、近くにあった。

丸く、大きな岩の上は、ちょうど数人が立つことのできる広さに

なっていて、下には、滝つぼが遙か遠くに見える。

そして、その滝つぼを囲むように、下の地面には、王族のための席があり、兵たちが周りを守っている。

後方に広がる森の中には、兵たちに阻まれながらも、ずらりと並んだ、村人たちの姿もあった。

無意識のうちに視線をさまよわせている空に、巫女の一人が近寄ってきた。

「さあ、そろそろお召しかえを」

エシュタンドらしき人影を見つけて、知らず胸元の石に、服の上からそつと触れた空は、その声に表情を引き締めて、頷いた。

用意された簡易の天幕に向かおうとした空に向かって、もう一人の巫女がかけよってくる。

その蒼白な顔と、ただごとではない様子に、メセルが近づく。

「どうしたのです、何か……」

言い終わる前に、巫女は手にしていた布包みを、メセルに掲げてみせた。

「大変でございます、お衣装が、お衣装が　！」

そう叫んだ彼女の手には、儀式用の空の衣装　びりびりに引き裂かれた、巫女の衣装があったのだった。

\*

段々とざわめきだした周囲の空気に、エシュタンドも、頭上の大

岩を見上げていた。

先ほど見えていた空の姿がなく、巫女たちが何事かを話し合いながら、行ったり来たりしているのが見えた。

「一体、いつまで待たせるつもりかしら。もう、儀式の準備は整ったのではないのでしょうか」

小さな村に似つかわしくない、いつも通りの豪華なドレスを着た王妃が、隣の王に向かって問いかけている。

そのどこか嬉しそうな彼女の表情を横目で見ながら、エシユタンドは眉を寄せて、前方の滝を見据えた。

「殿下、何かあったのでしょうか」

控えていたクガルが、心配そうにそつと声をかけてくる。

「そつだな 既に儀式が始まってもいい頃だ。何かが起こったのは、間違いないだろうな」

藍色の瞳が王妃に一瞬だけ鋭く向けられたのに気づいたのか、クガルは表情を引き締めて、エシユタンドに近づいた。

「私が、様子を見に参りましょうか」

そつと言われた提案に、エシユタンドが何事か答えようとした、

その時、ふいに後方から、拍手がわきあがったのだ。

「ついにおいでなさつたぞ！」

「あれ、巫女様って、いつもあんな格好だったっけ？」

「まあ、そんなことはどうでもええ。やあ、めでたい！ ついに今年行事も幕開けだな」

わいわいと、賑わっている村人たちの声で、エシユタンドも頭上を見上げる。

そして、息を呑んだのは、彼だけではなかったのだ。

岩の上に現れたのは、巫女の衣装に身を包んだ、空だった。

しつかりと大振りの剣を両手に握り締めて、背後の巫女たちに見守られ、一歩ずつ、足を進める。

その姿はいつも儀式を行う巫女たちと同じであるはずなのに、た



だ一つ決定的に違うもの。それは、その衣装の色だった。

用意されていた衣装は、西の聖殿の巫女たちと同じ、灰色のものであったはずが、空が着ているのは、薄い藍色の衣装だったのだ。現れた空を、見開いた目で凝視していたのは、王妃だった。

何かに驚いている、その彼女の隣で、立ち上がったのは、王であった。

「ラウ、レカ　そんな……まさか」

いつも穏やかな静寂を守っている、その灰褐色の瞳は、信じられない、というように、大きく見開かれ、その頬は引きつっている。

全員が見守る中、岩の上を、滝に手が届くほど近くまで歩み寄り、空は立ち止まった。

薄い藍色のベールを頭から被っているとはいえ、その下に見えるのは、いつもの黒髪である。

それが目にも入らぬように、王の瞳は潤んですら見えた。

「陛下、一体どうなされたのです！　陛下！」

何度も王妃に腕をゆさぶられ、ようやく正気に戻ったような王の様子に、並んでいた王子たちも、皆驚いた顔をしていた。

「な、なぜだ。儀式には、別の衣装が用意してあったはずであろう。一体、どういうことなのだ！」

あわてて動揺を隠した王に詰め寄られ、兵たちがざわめく中、ゆっくりと近づいてきた人物がいた。

「国王陛下、儀式を始めたく存じますが」

いつもの気難しそうな顔で、恭しくお辞儀をしたのは、西の聖殿の巫女、メセルだった。

「しっ、しかし、あの衣装は……」

「お衣装の管理が行き届かなかったこと、全て私どもの落ち度でございます。大変申し訳ございません」

落ち着いた様子で、そう答えたメセルに、王は眉をひそめる。

「何？　一体どういうことだ」

「西の聖殿から、持って参りました衣装ですが　どうやら、どこ

かでネズミでもまぎれこんだようなのです」

薄い緑の瞳を細めて、囁くようにそう告げたメセルは、理解できないような顔をした王に、微笑んで見せた。

「最近のネズミは、大変恐ろしい歯でも持つているようでして……お衣装が、びりびりに食い破られておりましたわ」

珍しい彼女の微笑みに、王も勢いをそがれたように、瞬きをした。「ネズミ、だと……？」

静かに問いかけた王の声に、メセルは自信たっぷりな顔で頷いてみせる。

「ええ、確かに。王宮でも一度　ネズミの駆除でもされたほうがよろしいかもしれませぬわね」

巫女長にも迫るほどの威厳を垣間見せながら、そう答えたメセルに、エシユタンドは苦笑を隠せなかった。

なんとも複雑な顔をした王妃に睨まれて、エシユタンドは込み上げた笑いをなんとか飲み込んだ。

そんなエシユタンドと一瞬だけ、視線を交わしたメセルが、いつもの厳しい顔で、王に向き直った。

「とにかく、あれもれっきとした、巫女の衣装ですわ。儀式を始めて、構いませんね　？」

訊ねたメセルに、王はしばらく頭上の巫女姿の空を見つめてから、自分を落ち着かせるように、一息ついた。

「いいだろう。始めてくれ　」

王の答えに頷いて、メセルが岩の上の巫女たちに、片手を上げようとした時、王が思いついたように、メセルを見た。

「待て、一つだけ　あれは、あの衣装は……どうやって手に入れた？」

薄い藍色の衣装をくいているように見上げた王に訊ねられ、メセルは空の姿を目で追いながら、微笑んだ。

「さあ、私どもには全く……ただ、ご友人から託された、大事なものである、としか存じ上げません」

「友人 か……」

答えたメセルを、ゆっくりと見つめ返した王の瞳は、もう一度だけ懐かしげに瞬いてから、静かに伏せられた。

「わかった。では、儀式を」

微笑みとも取れる、彼の表情は、一瞬だけで、すぐにいつもの厳格なものに変わっていた。

王に頷いて、メセルが岩の上の巫女たちに合図をする。

それを持って、儀式はついに始められるのだった。

## 58・剣舞（前書き）

お待たせしました。  
剣舞の始まりです！

全身に降りかかってくる水飛沫、足元の岩を濡らすのも、ただの透明な水であるというのに、目の前の大きな滝の流れは、まるで光を集めた宝石のような、不思議な色合いをしている。

『白水晶の滝と呼ばれる、所以でございますよ』

そんなリゴトの声が聞こえてきそうな、美しい水晶の束にも似た、目の前の滝を見つめながら、空はゆっくりと深呼吸をした。

ハルトの剣　そう呼ばれる聖剣は、両手にずっしりと重い。かなり古く、錆びついて、鞘から抜けないというこの剣は、空が見ても、ただの骨董品にしか見えない。それでも、その内から、何か不思議な力のようなものが、伝わってくる気がした。

儀式の練習に使った仮の剣とは、全く違う感覚に、空はためらいながらも、そんな素振りも見せぬよう、表情を引き締めた。

頭の中で数日に渡る特訓を思い返しながら、空はその剣を胸に抱きしめ、観衆に向かって、一礼をした。

水の匂いを含んだ、涼しい風が、薄い藍色の衣装を揺らしていく。

まさか、こんな風に使う時が来るなんてね。

あの東の聖殿で、ディーラにもらった、ラウレカの形見である衣装。

力にあふれた巫女であったという、彼女に見守っていてほしい、そんな気持ちで持ってきただけだったこの衣装に、助けられた形になって、空は改めて不思議な気持ちでいた。

誰があんな嫌がらせをしたのかなんて、目に見えている。どんなことをしても、自分の儀式の失敗を願っているのだろう。

けれど、こんなことで、あきらめるわけにはいかない。自分にだって、この儀式を成功させたい、理由があるのだから。

そうだよな？ エシュタンドのお母さん。

記憶の中に鮮やかに残る、肖像画の彼女、その微笑を思いながら、

空は頭を上げた。

鞘がついたままの剣を、滝に向かって、両手で高く捧げ持つ  
これが、剣舞の始まりを告げる合図。

清冽な水の流れを見上げて、瞳を閉じる。

滝の精さん、本当にいるのなら、どうかこの儀式が成功する  
ように、見守っていてください。

そんなことを思いつつも、一応、剣舞の理由である、ミディス王  
国の繁栄と、豊かな収穫への感謝、そして人々の幸せを祈って、空  
は目を開けた。

そのまま、重い剣をなんとか縦に持ち直して、滝に向かって、一  
礼する。

大きな滝の音で、惑わされないよう、自分の中でリズムを刻んで、  
足を動かす。

教わったとおりの剣舞、独特の動きを一つ一つ、こなしながら、  
空は心臓が高鳴り出すのを感じた。

なんだろう、今頃緊張してきたのかな。

衣装を破られたりしたせいで、負けるものかと、かえってやる気  
が出て、落ち着いたと思っていたのに。

足元の水に、滑らないように細心の注意を払いながら、空は剣を  
振りあげ、また下ろし、決められたポーズを取っていく。

気持ちと裏腹に、どんどん速くなる心臓の鼓動と、熱くなる頬に、  
少しふらつきそうになるのを、必死で堪えた。

あともう少しで、この剣舞も終わる。

そう思いながら動かしている自分の体が、まるで別人の物のよう  
に、重く感じる。

おかしいな。なんか、熱でもあるみたい……。

疲れが出たのか、風邪でも引いたのだろうか、そんなことを考え  
ながらも、空は最後の回転を終えて、動きを止めた。

また体が傾ぎそうになる。今度こそ、大きく揺らいだ体をなんと

か止めるも、背後で巫女たちがざわめいているのが聞こえた。

滝の音で聞こえないが、下でももしかしたら心配しているかもしれない。

頭に浮かんだ藍色の瞳に、大丈夫だと伝えるつもりで、空は段々言うことを聞かなくなってきた体をなんとか立て直す。

そして、最後の力を振り絞って、剣を構えなおした。

ぼやけてきた視界に、滝が迫ってくるような気がする。

先ほどまでとは違う、威厳のようなものに圧される体を、無理やり動かして、空は一気に滝の流れを真横に切った。

一瞬だけ、遮られた流れを、取り戻すかのように水が落ちて、何事もなかったかのように、滝の姿を取り戻す。

終わった……！

思わず手から離れそうになった重い剣を、空がなんとか握りなおした、その時。

いきなり目の前の滝から、何かが突き出て、空の体を捉えた。

声も出せないまま、必死で自分の体を見て、その何かが、水そのものであることがわかった。

今まで流れ落ちていた滝が、まるで意志でも持ったかのように、水の腕で、空を鷲づかみにして、引き入れていくようだった。

たちまち騒ぎ出す巫女たちの前で、空の体はやすやすと持ち上げられ、滝の中へ引き込まれていく。

「エシユタンド！」

怒涛のような流れに飲み込まれそうになりながら、なんとか呼んだ名前は、届いたのかどうか。

滝つぼを見下ろすことも叶わないまま、空は次の瞬間、まるで滝に吸い込まれるように、姿を消したのだった。

はらり、と風に乗って落ちてきた空のベールを手にとって、エシユタンドは目の前の滝を信じられない思いで見上げていた。

「ソラッ！ ソラッ！」

何度も名を呼びながら、滝つぼに足を踏み入れようとするエシユタンドの背中を、クガルとルストが押さえつけた。

「殿下、殿下！ どうか、落ち着いてください。どんな魔の手によるものかもしれません！」

殿下までも、危険な目に合わせるわけにはまいりません　　！」

必死で止めるクガルの声に、振り返った藍色の瞳は、どこにも向けられない怒りに燃えていた。

「何を悠長なことを言っている！ 現にソラが危険な目に合っているんだ、あいつに何かあったら　　！」

いつもの冷静さがかけらも見えぬほどの勢いで、そう叫んだ彼の肩に手を置いたのは、王その人だった。

「すぐに王宮軍に調査させよう。とにかく、少し落ち着きなさい」「父、上　　」

灰褐色の静かな瞳に見つめられ、いきりたっていたエシユタンドの体から、力が抜けていく。両側から必死に押さえつけていたクガルとルストも、少しほっとしたような表情を浮かべた。

「あなたがそんなに取り乱すなんて、珍しいこともあるものね、エシユタンド」

周囲のざわめきなど気にもせぬように、立ち上がった王妃は、嫌味なほど優雅に扇を振っていた。

「母上」

途端に鋭くなった藍色の瞳をかわすように、微笑みまで浮かべて、王妃は滝を見上げた。

「それにしても、こんな恐ろしいことが起こるなんて……やはり、



巫女でもない娘に剣舞をさせたりしたから、滝の精の怒りを買ったのでは……」

眉をひそめて、扇の影で呟いた王妃を、エシュタンドが堪えきれないように睨み付けた。

「何を仰るのです！ ソラは、きちんと与えられた役目をこなした。儀式をやり遂げたではありませんか！」

「おお、怖い。そんなに噛みつかずともよろしいではありませんか。私はただ、可能性を述べているだけ。

現に、あの娘は滝に飲み込まれた。あれが、儀式の成功に見えて？ それに、あのようにふらついて、剣舞とも言えぬ様な見苦しいものを……」

藍色の瞳を見開いたエシュタンドが、言い返そうとする前に、またも肩に手をかけ、止められた。

またクガル達かと苛立たしげに振り返った彼を見つめるのは、王であつたのだ。

「リダネア、そのぐらいにしておきなさい。あの娘が、決められた儀式をやり遂げたのは、確かなことだ。

成功と見なすかは、彼女が無事に、帰ってきてから決めること。それまでは、このことで言い争うべきではない」

珍しく王に咎められて、王妃は、驚きを隠せないままに、視線を逸らした。

「それに、エシュタンド お前が、どれほどあの娘を大切に想っているかはわかった。我々にとつても、大事な娘になるやもしれん。

必ずや、王宮に取り戻そうぞ。全軍、滝へ！ 入り口を探すのだ！一刻も早く、あの娘を助け出せ！」

王の命を受けて、兵たちが集まり、滝つぼへ足を踏み入れていく。その様子を見てから、エシュタンドは父の姿をしばし驚いた顔で眺めていたが、すぐに気を取り直したように、クガルのほうへ振り返った。

「私兵隊全員で、滝の回りも搜索してくれ。どこでソラが見つかる

やもしれん。草の根を掻き分けるつもりで、頼んだぞ」

「はっ！」

膝を折り、すぐに兵に指示をするクガルを横目に、エシユタンドは自分の白いマントを脱ぎ捨てた。

「殿下、どうなさるおつもりで？」

あわてて訊ねるルストに、エシユタンドは落ち着きを取り戻した顔で、振り返る。

「勿論、私も捜索に参加する。私なりのやり方だな」

「殿下」

心配そうに追いかけてよとすルストを、藍色の瞳がすぐさま止めた。

「ソラは私の大事な婚約者だ。私が、必ず救い出す。滝の精などに渡すわけにはいかんからな」

その瞳に浮かぶいつもの光を、ルストは一瞬嬉しそうに見つめてから、無言で頷き、私兵隊に合流していった。

滝つぼにあふれかえった兵たちが、いくら探しても滝の中につながら入り口どころか、空間のようなものさえ、見つけられずにいた。流れ落ちる滝の中には、すぐに硬い岩が突き出しているばかりで、水によって磨かれた岩の表面を登ることも困難を極めていた。

「殿下、滝の周囲は捜索いたしました。どこにも姫君の姿はありません」

戻ってきたルストの報告を受けて、エシユタンドも表情を厳しくする。先ほど、自ら探索した周囲のどこにも、魔の気配すら感じなかったのだ。

「兄上……」

隣で心配そうな目を向ける弟の肩に手を置いて、エシユタンドは軽く微笑んだ。

「心配するな。必ず見つける」

そうは言いながらも、自分の手に嫌な汗がにじみでるのを止められない。エシユタンドは、唇を噛んで、目の前にそびえる滝を睨みつけた。

「陛下、岩の上からも調査いたしました。何の手がかりも見つかりません！」

先ほど空たちが立っていたあの大岩から降りて来た兵の一人が、王に報告する。

渋い表情をした王が、何事かを思案する様子を見せる。それをも待ちきれぬように、エシユタンドが前に進み出た。

「エシユタンド、何をするつもりだ」

追ってきた王の声に振り向いたエシユタンドが、苛立たしげに滝を見上げる。

「このままでは、うちが明きません。私の、魔の力で……」

言うなり、彼を包む空気が別の流れを生み始める。それを見て、王はあせったようにエシユタンドの腕を取った。

「しかし、ここは仮にも聖域だぞ！ 魔の力で汚すような真似は……」

「おや、父上がそこまで信心深いお方だったとは、存じませんでしたね」

沈黙を守っていたエーデレードの言葉が響いて、王は鋭い目を向けた。

「どういう意味だ、エーデレード」

静かに、低い声で問い返した王に、エーデレードは優しく微笑みを返した。

「言葉どおりの意味ですよ。今、大切なのは、何よりも姫君の命の命。そうではないのですか？」

冷静に、滝を指し示して逆に問い返す、その同じ色の瞳に、王は唇を引き結んだ。

「あゝあ！ もういい加減、疲れてきたな。私には関係のないことです、先に帰らせてもらいますよ、父上」

「エルファンド！」

その場の緊迫感をものともせず、伸びをしながら立ち上がった第二王子は、手にしていた酒杯を置いて、にやりと笑った。

「何としても助け出すか、それともこのまま見捨てるのか、好きになさるといい。どっちみち、誰のせいでもないことだ。」

そうではありませんか」

お気楽な調子で肩をすくめて、歩き出すエルファンドを、苦い表情で見送った王の隣で、王妃も続くように立ち上がった。

「私も帰らせていただきますわ。この場には、どんな危険が降りかかるかわかりませんもの。さあ、エカルド、あなたも帰るのですよ」

無理やり王妃に引つ張られて、エカルドはきつい瞳でその手を振り払った。

「いやです！ 僕も残って、姫君を」

言い返しかけたエカルドに、王妃は目を剥いて立ち止まった。

「何を言っているの！ あなたに何ができると言うのです！ おかしなことをして、あなたにまで何かあったらどうするの！」

真剣な顔で、叱り付けるその顔は、息子を心配するもの以外の何物でもなかった。

その様子を黙って見ていたエーデレードが、咳払いをして立ち上がる。

「エカルド、私と一緒に王宮に戻ってしよう。無事を祈って待つていることも、大事な役目だぞ？」

まるで小さな子供に言い聞かせるようなその言葉に、エカルドはただ悔しそうに視線を下ろした。

「陛下、あとは王宮軍に任せて、一緒に王宮へ戻りましょう。陛下の御身に何かあったら、国民はどうするのです」

横に並んだ王妃を見下ろして、王は戸惑ったように滝に視線を戻した。

「父上、母上の仰る通りです。あとは私が……」

エシユタンドも言葉を重ねようとした、その時、王が強い瞳で彼の手に行っていたボールを見つめた。

「いや、私ももう少し、ここに残ってみよう」

「陛下……！」

抗議の声を上げる王妃に瞳を向けて、王が静かに微笑んだ。

「晩餐会までには、戻ることにしよう」

「父上……」

驚きの目で見えるエシユタンドと王妃を交互に見て、王はいつもの表情を取り戻した。

「少し、気になることがあるんでな。ただ、それだけの理由だ」

悔しそうに震える両手を握り締めていた王妃は、水色の瞳を怒りに燃やしながら、王を見上げた。

「私は、認めませんわよ……あんな娘、晩餐会までに戻らなければ、絶対に何も認めませんから！」

エシユタンドにも視線を移してから、王妃は耐え切れぬようにその場を後にする。

相変わらずの飄々とした笑みを浮かべたエーデレードが、優しくエカルドも連れて歩き出す。

礼をして見送ったエシユタンドが、隣に並んだ父の顔を見上げたその時、背後から近づいてきた人物に、二人とも驚いたように振り返った。

「メセル殿……お帰りになったはずでは」

確かに先ほど、危険だからと兵に送らせたはずの彼女が、こうして戻ってくるとは思いもしなかった。

表情にそんな考えをそのまま見せたエシユタンドに訊ねられ、メセルは両脇に並んだ巫女たちと共に、微笑んでみせた。

「殿下の大事な姫君の危機、見過ごせるはずがございません。私どもにも、いえ、私どもにこそ何かお役に立てることがあるかと存じますが」

薄い緑色の瞳に、わずかに自信の色が垣間見える。

そこから何かを読み取ったように、エシユタンドは笑みを浮かべて頷いた。

「そうか、ここは聖域　魔よりも、聖なる力の分野だというわけか」

二人のやりとり、王もようやく納得したように言葉をかける。その声に頷いて、メセルは滝に向かって歩み寄った。

「長にまではかありませんが……私も巫女としての鍛錬を積んできた身。この滝を支配する、聖なる力を感じます。」

とてつもなく、大きい力　今までの白水晶の滝とは比べ物にもならないほどの、恐ろしいほどの清らかな空気が、滝の周囲を守っている。

これは、まさか、本当に　

滝を見上げながら、両腕を高く差し伸べるようにして、瞳を閉じていたメセルは、そこまで言うのと、信じられないように言葉を止めた。

エシユタンドのほうを振り返った彼女が、何かを言おうとするのと、ふいに強い風が吹いたのが同時だった。

吹きつけてくる風に全員が瞳を閉じた、その瞬間、突如大きな音が響いて、滝の流れが止まったのだ。

今まで勢いよく流れていた水が、まるで突然凍ってしまったかのように、その動きを止め、周囲にいた兵たちも驚きに飛びのいた。

皆を強い光で照らし返すような、水の塊となったそれは　まるで、巨大な白水晶のように見えた。

## 58・剣舞（後書き）

続きは少しお待たせするかもしれませんが、ゆっくり待ってくださいと嬉しいです。

規則正しく響いてくる、静かな音　それが、水が滴り落ちる音だと気づいた空は、咄嗟に起き上がっていた。

「わっ、何、ここ　と、あたたた……」

身を起こした途端、割れるような頭痛に襲われて、顔をしかめる。頭を押さえながら、なんとか開けた空の瞳に映ったのは、薄暗い空間だった。

足元に見えたのは、すべすべした岩肌。そう、まるで先ほどまでいた、滝の前の　。

そこまで考えた空は、ようやく蘇ってきた記憶に、思わず両手で頭を抱えた。

「ちよつと待って、あたしってば……嘘、だよな？　滝に飲み込まれるなんて　」

不安を落ち着けるかのように、必死で言葉にしながら、瞳を細めて、空は周囲を見渡した。

同じような岩肌が、四方を囲んでいるのが、ぼんやりと見える。

「ここ……洞、窟？　それとも、まさか滝の中だなんてことは　」

「『名答！』」

突然明るく響いた声に、空は弾かれたように振り返った。

「やっと目が覚めたんだ。いい夢は見れたかい？」

「やあ、と言わんばかりに片手を上げて挨拶してきた目の前の人物に、空は思いつき後ずさった。

悲鳴も喉に張り付いて、声が出ない。

空の驚愕の表情に、心外だともいうような仕草で肩をすくめたのは、少年だった。

「そんなに驚くほど、怖い顔はしてないと思うけど……あ、言っとくけど、頭痛は僕のせいじゃないよ。

なんか変な薬の匂いがしたから、清めといてやったんだから。逆



に感謝してほしいよね」

よく回る舌で、透明な響きの声を紡ぐ少年の顔は、彼の言うとお  
り、怖い顔ではない。

それよりも、美しいのだ　信じられないぐらいに。

長い、薄い水色の髪は、綺麗に一つに編みこまれていて、彼の膝  
ぐらゐまで垂れている。不思議にも、その髪のところどころは、彼  
の滑らかな肌や、ギリシャ神話から抜け出てきたような衣服を透け  
て見せている。そう、まるで　流れ落ちる、水のように。

ただ、何も言えずに震える手で、そばにあった岩にしがみついて、  
おそるおそる見つめ返す空に、彼は小首を傾げて微笑んだ。

「まだ、ぼーっとしてるみたいだね。さっきの薬が、抜けてないの  
かな？」

「く、薬……？」

愛らしい微笑みを向けられて、空は無意識に口を開いていた。答  
えが返ってきたことが嬉しかったのか、少年はますます笑顔を深め  
て、頷く。

「そう。おそらく、痺れ薬の一種かな。まあ、毒性は強くはないけ  
どね、飲み物にでも混ぜれば、効果はゆっくりと現れ、そして長い  
間持続する。

そういう意味で言えば、恐ろしい薬とも言えるな。君、誰かに恨  
みでも買ってるらしいね。まあ、よくある人間同士の争いってここ  
だろっけど」

僕には関係ないけどね　軽くそう言い捨てて、楽しそうに空を  
見つめた少年。

その口ぶりに、空は嫌な予感を抑えられずにいた。

「も、もしかしてあなた」

目の前でにこにこしている少年は、そう、確かに先ほど辺りを見  
渡した時にはいなかった。いや、自分の目には、見えなかっただけ  
なのか。

疑いを深めた空の視線に、少年は悪びれることもなく、両手を優

雅に広げて、お辞儀をしてみせた。

「ご挨拶が遅れましたね、姫君。僕はセリルアージユ。面倒くさいから、ただのセリルでいいよ。一応、この滝の精ってことになっている。

っていつても、そんなに敬わなくていいよ。別に偉いわけでも何でもないからさ」

髪と同じように、不思議なゆらめきを見せる水色の瞳で見つめられ、空はただ、息を呑んだ。

セリルと呼べ、と言った少年は、身軽な動きで近寄ってくると、空の目の前に腰掛ける。興味深そうに眺められ、空は微妙に距離を取りながら、姿勢を正した。

「そ、それで……あたしを一体どうするつもり？」

「そんなに身構えなくて、危険なんか加えるつもりはないから安心してよ。僕ってそんなに怖そうに見える？ そんなことないと思うんだけどなあ」

自分の頬を撫でながら、おかしいなあ、と独り言を言うセリルに、空は少しだけ表情をゆるめた。

「怖そうとか、そういうんじゃないの？……だって、あたしのこと怒ってるんじゃないの？」

精霊だと言われても、何の緊張感も感じられないような、目の前の少年に、空の警戒心も少し解けて行く。

空の問いに、綺麗な水色の瞳をぱちくりさせて、セリルは首を傾げた。その仕草で、長い三つ編みの髪が揺れる。

「怒ってる？ なんて、僕が初対面の君に怒らなきゃいけないの？ なんか怒るようなことしたっけ、君」

「え、だって……巫女でもないあたしが、儀式をやったから、滝の精であるあなたの、怒りを買ったのかな？……それで、滝の中に引き込んだりしたんじゃないの？」

子供のようなセリルの口調につられて、空までも軽い調子で答え

てしまう。それでもセリルは気にした様子もなく、ぽりぽりと頭を掻いた。

「あゝ巫女って、あのいつも、滝の前でなんかやってる女の人たちのこと？　儀式だかなんだか知らないけど、別にそんなのどうでもいいよ。」

君が巫女だろうが、何だろうが、別に何の儀式でも、好きにやればいいと思うけど？　どうせ僕には興味もない話だし」

聖なる儀式、厳かに営まれてきた長年の伝統を、セリルは全くどうでもいいもののように、笑いながら流した。

そのことに開いた口がふさがらない空を、面白そうに眺めて、セリルは笑ったのだ。

「まあ、君が『巫女』だなんて、退屈なものじゃないことは知っている。だから、ちょっと呼び寄せちゃったんだけどね」

強引だったかな、なんて呟きながらも、悪びれる様子もなく、セリルは空の黒い瞳をまじまじと覗き込んだ。

「なっ、何……」

近くなつた距離にためらって、空がまた離れようとした、その時、セリルは自分の髪をもてあそびながら、軽く肩をすくめた。

「そんなに怖がらなくてもいいよ。君とは仲良くしたいな」と思ってるんだから……暁の娘さん？」

その言葉で、空がセリルの瞳を凝視したその時、一際大きな水の粒が、天井から滴り落ちた。

それと同時に、何か細い光のようなものが、岩にふさがれた向こう側から差し込んだように思えて、空が振り返る。

どこかに出口でもあるのかと、閃いた希望も、光が消えるのと同じ時に、ふさがれたような気がした。

「結構しつこいな……せつかく二人きりでゆっくりお喋りしたいと思ってるのに、あんまり邪魔されるなら、滝ごと移動しちゃおうかな。でも力使うのも、面倒くさいし……」

いたずらを邪魔された子供のような顔で、ぶつぶつと文句を言う

彼の様子に、空は眉をひそめた。

「邪魔つて……一体、どういう……」

言いながら思い浮かんだ藍色の瞳に、空は思わず立ち上がる。

「あ、ちよつと、どこ行くの？」

背後から追いかけてきた声にかまわず、空はさつきわずかに光が差し込んだ方角へ歩み寄る。

「きつと、すごく心配してる。無事だったことだけでも、知らせない……」

既に何の気配さえ残ってもいない、岩の壁に手をついて、空はあせつたように辺りを見回した。

「無駄だよ。ここから出ることもなんて不可能だ。僕が出してあげない限りはね」

澄んだ声で、恐ろしいことを言われて、空はおそろおそろセルルを見た。振り返った先で、セルルは先ほどと何も変わらない、愛らしいまでの微笑を浮かべていた。

「だから、そんなに怖がることないって。別になんかしようってわけじゃないんだから。ただ、君と話がしたいだけ。お客さんなんて本当に久しぶりなんだもん。」

それとも、森の奴らとは話せて、僕とは話したくないって言うのかい？」

すねたような表情で、そう言われて、空は思わず瞳を見開いた。

「森、つて……あの精霊と会ったこと、どうして知ってるの？」

空の驚きを、何ともないことのように、セルルは両手を広げてみせた。

「言つとくけど、僕、精霊だよ？ そんなことぐらい、寝てたつて耳に入ってくるんだから。どうやって知ってるのかって聞かれても困るけど、とにかく僕らには色々聞こえてくるもんなの」

ちつとも精霊らしく見えない相手に、空はためらつたように口をつぐんだ。

「つて、あんな森の堅苦しい奴らのことなんか、話そうと思つたん

じゃないんだよ。さ、僕とお話しようよ。ねっ？ あ、お茶でも入れてあげよつか？」

おどけたように提案したセリルに、空はゆっくりと首を横に振る。「え〜なんでさ？ そりゃあ僕ら精霊には、お茶なんてもの、必要ないけど、君には入れてあげることくらい簡単なんだよ。遠慮しなくていいよ」

今にも何か力を揮おうとするセリルを、必死で見つめて、空は更に首を振った。

「なんで……？ 僕と話すの、そんなに嫌なの？」

悲しげに言われて、空はあわてて首を振る。

「じゃあ、何なの。なんで、そんなに悲しそうな顔するのさ？」

唇をとがらせて、そう聞かれて、空はようやく口を開いた。

「待ってる人が……いるから。少しくらい、あなたと話をするのは構わないけど、その前に、無事を知らせてあげたいの。きつと今頃……すごく、心配してる」

ためらいながらも、強い調子で答えた空を、セリルは無表情で見つめ返した。

「待ってる奴って、あの藍色の瞳をした男のこと？」

「ど、どうしてわかるの？」

大きく目を見開いて訊ねた空に、セリルは面白くないような顔で肩をすくめた。

「だってさつきから、一番必死にここを探してるからさ。普通の人間になら、気配すら感じ取れないはずなのに、なぜか段々近づいてくる。」

魔力の力だか何だか知らないけど、気に食わないな。特に、あの目の色がやだね。昔の馬鹿を思い出してさ」

「目の色って……」

問い返そうとした空は、セリルの顔に浮かんだ冷たい表情に驚いて、そのまま口をつぐんだ。

空の様子に気づいたのか、美しい顔を笑顔に戻して、セリルは岩

肌のほうを見つめた。

「あゝあ、頑張ってるね……無駄なあがきだつて、早く気づけばいいのに」

笑顔と明るい口調には似合わないような言葉を吐いたセリルを見つめて、空も岩の壁に視線をやった。まるで、その向こう側でも見えているかのようなセリルの口調に、空も必死で見つめてみるが、冷たい岩がふさいでいるだけで、何も見えない。

「エシユタンドは、その向こう側にいるの？」

思い切つて訊ねた空に振り返つて、セリルは笑った。

「エシユタンドつて、あいつの名前？ 恋人なの？ そんなに気になる？」

はぐらかすようなセリルの言葉に、空は思わず詰め寄つた。

「お願いだから、ちゃんと教えて！ 無事だつて知らせたいの！

あたしを捜して……彼が危険な目にも合つたら、あたし、あなたを絶対許さない！」

見えないからこそ不安が大きくなって、空はいてもたつてもいられない気持ち、必死な目にこめてセリルを見つめた。

「ふうん……ぼんやりしてると思つてたら、君も結構、気が強いんだね。精霊を敵に回しても、怖くないわけ？」

相変わらずの優しい顔は、何を考えているのか全く読ませてくれない。

物騒な台詞を耳にして、空は内心の不安を抑えながら、睨み返した。

「こつ、怖くないわよ！ 精霊だろうが、何だろうが、大切な人を守るためだつたら、誰を敵に回したつて、怖くない！」

それに、精霊つて、そんなに攻撃的な存在じゃないはずでしょう？

精霊は我欲のためだけには、力を揮つたりしないつて、そう聞いたもの！」

震える両手を握り締めて、言い切つた空をまじまじと見つめて、セリルは可笑しそうに声を上げて笑った。

「なっ、何が可笑しいのよ！」

予想外に笑われて、空は少し顔を赤くしながら、セリルを睨んだ。「いやいや、別に。可笑しくないよ。そうだね、その通り！ 君、やっぱり面白いや。気に入った！」

笑いをおさめて、嬉しそうに答えたセリルに、空はどうしていいかわからずに口をつぐんだ。

「人間って本当不思議だよ。弱いはずなのに、大切なものを守ろうとすると、突然強くなったりするんだもん。そういや、昔そんな目をした子がいたなあ……。」

なんか君の衣装、あの時の子のに似てるね。なんか懐かしいような匂いがしたと思ったら、そういう訳か」

一人で納得したかのように、頷きながら呟くセリルの言葉で、空ははっとしたように、自分の衣装を見下ろした。

「衣装って……あなた、もしかして、エシユタンドのお母さんをラウレカさんを知ってるの？」

もし本当なら、目の前の少年が、やはりまぎれもない精霊であることを証明することにもなる。そんな昔の話を、ついこないだの話のようにしている彼を、空は真剣な目で見つめた。

しばらく黙ってその視線を受け止めていたセリルは、長い髪の束を自分の指に巻きつけながら、ゆっくりと微笑んだ。

「さあね。知ってるともいえるし、知らないともいえる」

饒舌な少年の、あえてはぐらかすような言い方に、空はむっとしたように詰め寄った。

「はぐらかさないで、ちゃんと教えて！ あなたは一体何を知ってるの？ あたしに何を話したいって言うの？ 話がしたいって言うんなら、全部隠さないで話してよ！」

岩に囲まれた空間で、空の必死な声が響き渡る。セリルはその空間を静かに見渡した後、空に向かって、にっこりと微笑んでみせた。「あせらなくても、ちゃんと話してあげるよ。そのつもりで呼んだんだから。そうだね、まずは順番。最初に、取引をしようじゃ

ないか」

「取、引……？」

思ってもみなかった言葉に、空が戸惑いながら訊ね返すと、セリルは嬉しそうに笑った。

「そう。君が、僕の出した条件を見事打開してみせたなら、君にとっておきのご褒美をあげる」

「ご褒美って」

問い返そうとした空を見越したように、セリルは片手を上げて、指を鳴らした。

その手の上に、突如姿を現したもの それは、まぎれもない、ハルトの聖剣だった。

まるで、重力など存在しないかのように、セリルの手から少し離れて、ふわりと浮かんでいるその剣は、ほのかに発光さえしているように見えた。

「この剣はね、僕ら滝の精が、代々受け継いできたもの。人間の手に渡してあげたのは、どうせふさわしい者以外が持つても、がらくたでしかないから。」

でも、この剣に選ばれた者が手にすれば 素晴らしい力を発揮する、聖なる剣ってわけ」

世間話でもするかのような気軽な口調で、セリルは古びた剣を瞳で指し示した。

「滝の精が、受け継いできた剣……この、ハルトの聖剣が？」

なんとか答えた空に、セリルは人差し指を振って、肩をすくめた。「それは、人間たちが勝手につけた名前さ。この剣の本当の名前はね、白水晶の剣。この滝そのものを現してるんだ」

「滝、そのもの？」

繰り返しながら、あの堂々とした大きな滝の流れを思い出す。確かに、白水晶の束のような、美しい滝だけれど、そのものを現す剣って。



空が思案する間にも、セリルは話を進めるべく、にっこりと笑った。

「そう、今は凍らせてあるけどね」

「えっ？」

造作もないことのように言われた言葉が、一瞬理解できずに問い返した空の前で、セリルは空中に浮かべていた大きな剣を、簡単に片手で持った。

空が手にした時は両手でもずっしりと重く感じた剣が、セリルの手の中では、まるで重さなどないかのように見える。

「見せてあげるよ、君の愛しい恋人の姿をね」

片目をつぶってみせてから、セリルはもう片方の手で、何も無い空間をすつと撫でた。

それと同時に出現した映像に、空は言葉も出せずに目を見開いていく。

まるで、枠のない鏡でもあるかのように、その場に突然映し出されたもの。それは、傷だらけのエシユタンドの姿だったのだ。

「エ、エシユタンド　！」

映像の中の彼に近寄って、空が叫ぶのを、セリルはただ静かに眺めていた。

「いつ、一体どういうこと？　あなたがやったの？　彼に何が起こったって言うの　？」

混乱の中、睨みつけた空に、セリルはとんでもない、とでもいうように笑った。

「そいつが自分でやったんだよ。馬鹿な奴、僕の聖域で魔の力なんか爆発させたら、自分に返ってくるに決まってるっていうのにさ。

まったく、力で戦うことしか能がないから、こついうことになるんだよ」

せせら笑うかのようなセリルの言葉に、空は瞳を怒りに燃やして振り返った。

「彼を馬鹿にするのはやめて！ これ以上、彼を傷つけたら、あなたを絶対許さない！」

空の叫びも、セリルの余裕の表情を崩すことはできなかった。大きな剣を、まるでおもちゃのようにもてあそびながら、セリルは正面を顎で指し示したのだ。

「僕に怒ったつて、どうしようもできないよ。言っただろ？ 僕が直接やったんじゃない、滝そのものが、彼を拒否しているからさ。いいの？ このままじゃ、彼、死んじゃうかもよ」

その言葉で、再び目にした鏡には、ふらつき、その場に膝をつく、エシユタンドの姿があった。

風の力を使ったのか、金の髪は乱れ、白い衣装は泥で汚れて、その体には、まるで切り刻まれたようにいくつもの傷跡がある。

額に垂れる血を乱暴に拭いて、エシユタンドは目の前の氷の塊を睨みつけていた。

まだ、強い意思が見える藍色の瞳に、少しほっとしながらも、空はたまらずに、映像の中の彼に触れようとしたが、目の前にはあるはずなのに、何もない空間が阻んで、手も届かなかった。

「それで……あたしにどうしろって言うの？」

低い声で、震える手を握り締めて顔を上げた空に、セリルは肩をすくめて、映像のほうを指し示した。

「やっと話が通じたみたいだね。簡単なことさ、君が自分でこの中から出るか、もしくは彼のほうを呼び寄せるか、二つに一つ。

自分たちの力だけで、それをやり遂げてごらん。そしたら、君にこの剣をあげる。それから、知りたいことも教えてあげるよ。

どう？ かなり優しい提案だと思うけど、ただし、僕は一切手助けしないから、そのつもりで。途中で彼が死んだとしても、ね」

天使のように綺麗な顔で、にやりと笑ったセリルは、まるで、この世のものではないほどの、恐ろしい存在に見えた。

無言で、セリルを見つめ返す空の額には、冷たい汗が流れていた。



59・滝（後書き）

滝の精に、恐ろしい条件をつきつけられた空。  
さて、どうなるのか、続きをお楽しみに！

鏡のように、自分たちの姿を照らし返す、目の前の滝　いや、すでに氷の塊となったものを、クガルは見上げていた。

「隊長、一体何が起こったのでしょうか」

先ほどまで、確かに共にいたはずの、主の姿が、突然見えなくなったかと思えば、またしても最初にいた滝の前に戻ってきているのだ。

兵たちが混乱するのも、無理はなかった。

クガル自身にも、飲み込めないこの状況に、知らず汗が流れる。

「おそらく　殿下も、滝の中へ捕らわれてしまったのではないかと……」

付き添ってきた西の聖殿の巫女たちも、驚きを隠せない中、メセルがゆっくりと口にした。

その言葉に、全員が顔色を変えた。

「そんな……殿下までも、そのような目に？」

「隊長、どうしましょう！」

「隊長！」

口々に問いかけてくる兵たちに、クガルは厳しい目を向けた。

「騒ぐな！　全員、落ち着くんだ！　我々に来ることをするより、他はない。殿下と姫君を、手分けして捜すのだ　！」

クガルの命を受けて、兵たちがまた滝に向かって駆け出していく。その様子を見ながらも、クガルは唇を噛み締めていた。

恐らくは、このような手で捜しても、二人が見つかることはない。それでも、今自分たちができることはそれしかない。

無力さに苛立ちながらも、クガルも兵たちに続こうとした。

「クガル隊長殿、しばしお待ちを」

引き止めた声は、またしてもメセルのものだった。瞳だけで用件

を問い返したクガルに、メセルは真剣な瞳を向けた。

「先ほど、私が申し上げたこと、覚えておいでですね？」

滝の前で、瞑想するかのようには目を閉じたメセルが、皆に告げたこと、それはこの滝そのものの、聖なる力の存在だった。

その言葉を思い出しながら、頷いたクガルを前に、メセルは再び滝を見上げる。

「この白水晶の滝自身が、我々を拒んでいる。自らを凍らせたことでも、それは明らかでございます。」

しかし、その中に、姫君と、殿下のお二人は捕らわれておしまいになった。それは、一見危険なことのようにですが、裏を返せば、招き入れたということ」

メセルの一言に、表情を変えたクガルに頷いて、彼女は続けた。

「私には、どうしても何か大いなる意思が働いているように思えてならないのです。姫君と、殿下を呼び寄せて、何かをしようという存在が感じられる。」

それが、悪意である可能性も捨て切れませんが、この清らかな滝を目にすると、そのようには思えなくて」

その灰色の瞳に、まるでクガルたちには見ることでできない影でも見えているかのようには、メセルは瞳を細めた。

彼女の言葉を心の中で繰り返しながら、クガルは口をつぐんだ。

「それは、聖なる存在によって、二人が招きいれられたと、そういうことか？」

突然背後からかけられた声に、二人は驚いて振り返る。

「陛下　天幕におられたのでは……」

すぐさま膝を折ろうとするクガルを、手で制して、王は微笑んだ。「私だけ、いつまでもものうのうと見物しているわけにも行かない。

ましてや、エシユタンドまでが姿を消したとなっては……もはや黙っているわけにはいかぬ」

灰褐色の瞳を厳しくして、王は滝を見上げる。

「この上は……守護竜を呼び寄せるべきかと、思索しておったが

メセル、そなたが言うとおり、もしも聖なる存在が相手であると  
なると、そんなわけにいかなくなるな」

「守護竜　でございますか」

クガルに問われ、王は顎を撫でながら、頷いた。

「最後の手段としてな。しかし、あれも何かと契約に縛られた身だ。  
王族を救うためとはいえ、王宮から離れた土地　しかも、聖域で  
力を揮わせるには、かなりの骨が折れるのも事実だ。いや、それよ  
りも、彼らは魔に対してのみ、力を揮うもの。聖なる力に対抗する  
手段にはなり得ぬからな……」

眉をひそめて、困ったように息を吐いた王は、やにわに騒がしく  
なった背後の森を見やった。

続いて視線を向けたクガルにも、王宮軍の兵たちが、いつの間  
に集まり始めた村人たちを抑えているのが見えた。

「どうした、何事だ」

近くの兵にかけられた王の声は、威厳ある響きで森にまで届いた。  
「はっ、先ほどから村人たちが騒ぎ出しまして……すぐに、静かに  
させます！」

儀式の後、村に返されたはずの村人たちが、騒ぎのためか戻って  
きたようだったが、それにしては、皆が口々に何かを伝えようとし  
ているようだった。

王もそれに気づいたかのように、クガルと目を合わせてから、再  
び兵に片手を上げた。

「何か、言いたいことがあるようだ。誰でもよい、この王に向かっ  
て、伝えたいことがあるのなら　直答を許す、申してみよ！」

堂々と、森を揺るがすほどの大声で告げられた王の言葉に、誰も  
が静まり返って、立ち尽くした。

「ごそごそと、お互いを押し合う村人たちの中で、一歩進み出たの  
は、小さな子供だった。」

「王様！　巫女様がお隠れになったって本当なの？」

恐れを知らない彼女の言葉に、そばにいた母親らしき女性が、あ

わててその身を抱きとめた。

「国王陛下に向かつて、何という無礼な振る舞いを　！」

横にいた兵が槍でその二人を押しとめようとするのを、王は無言で手を上げて、やめさせた。

「ああ、そうだ。それで、君は何か知っているのかね？」

優しい口調で、子供に向かつて訊ねた王に、皆が意外そうな目を向ける。

おそろおそろ、子供を抱いていた母親は、王に目をやった。

「あ、あの　実は、村人だけが知る、洞窟があるのです……滝の精の遊び場だという、大昔の言い伝えがある、小さな洞窟なんです……」

震えを押さえきれないまま、なんとか答えた母親に、王は目を見張った。

「滝の精の、遊び場だと？　もしかして、そこに隠されたのかも知らぬと、そういうことか？」

緊張した顔で、何度も頷いた母親を横目に、兵たちがざわめきだす。

「しかし、そのような洞窟になど……」

「滝の周りはおるか、先ほど裏側からも回ったというのに、見つからなかったのだぞ」

「そんな場所に、どうやって……」

がやがやと言い合う兵は、咳払いをした王を見て、たちまち姿勢を正した。

「クガル、先ほどエシユタンドが消えたのは、どのあたりだ」

静かに訊ねた王に、クガルはすぐさま、滝の裏側を指し示した。

「あちらの方角でございます　私兵隊と、巫女殿と、裏側にも回りまして、そちらにも、氷の壁を発見しました。巫女殿の力を持ってしても、びくともしない壁に、殿下が風の力を起こそうとされたその瞬間に、殿下は消え、我々はまた、滝の正面に戻っていたという状況で……」



「そうか。して、村人だけが知る、洞窟というのはどちらにあるのだ」

再び先ほどの母親に向かって、王が訊ねる。その言葉に、母親はまた背筋を伸ばして、ゆっくりと手で指し示した。

「は、はい……あの滝の裏側から流れる、小川を辿っていった先でございます」

小さな声で、それでもしっかりと告げられた彼女の言葉に、兵たちも顔を見合わせ、王は表情を引き締めて頷いた。

「よし、どのような手がかりも無駄にはできません！ ただちに、搜索を開始せよ！ 今度こそ、二人を見つけるのだ　！」

手を上げて、全軍に出された王の命を持って、全員が動きはじめた。

「メセル、そなたの力を、また借りるぞ」

肩に手を置いて、そっとかけられた王の声に、メセルはしっかりと頷いた。

そして、集まってきた私兵隊全員を見渡したクガルの瞳にも、強い意志が閃いていた。

「私兵隊全員　殿下と姫君を、必ず救い出すのだ！　続け！」

栗色の馬にまたがったクガルの後に、私兵隊全員が、次々と続き、各自の馬を急かし、駆けていく。

その場に静かにそびえる氷の壁は、全てを映したまま、微動だにせず、日の光を受けて、冷たく輝いていた。

「そ、そんな　ここから出るなんて、不可能だって、さつきあな  
たが自分で言ったんじゃない！」

急に押し付けられた提案に、空はあせりを隠せず言い返した。  
不安げな声をわかった上で、セリルは微笑を返す。

「言ったよ。確かに、滝の精である僕が閉じ込めたこの場所を、自  
分で脱出するなんてことは、不可能だ。ただし、それが普通の人間  
ならってことだけだね　」

「ふ、普通の人間？」

「そう。だけど、君は仮にも暁の娘だろ？　不可能を可能にするぐ  
らいじゃないと、このミディスを救うなんてこと、できるはずもな  
いじゃないか。」

君からしたら、突然押し付けられた役目かもしれない。だけど、  
ずっと前から決まっていたことなんだよ。アメの愛し子である君は、  
そのために、連れてこられたんだからね」

手にした白水晶の剣を愛しげに撫でて、セリルは揺らめく水色の  
瞳を向けた。その不思議な色合いが、底の見えない水にさえ見えた。  
「そつ、そんなこと言われたって、一体どうしたらいいのか、あた  
しには……」

ためらいながら、呟いた空を、セリルは可笑しそうに見つめた。

「あれ？　随分と弱気なんだあ。さつきは、えらく大きなこと言っ  
てたのにね。まあ、僕はいいんだよ。別に、彼を見捨てたって。」

君と二人で、ずっとこのまま過ごしたって、楽しそうだしね」  
どうでもいいことのように笑う彼を、空は唇を嚙んで、睨み返し  
た。

「うっ、嘘つき！　危害を加えるつもりなんてない、なんて言っ  
ておいて　ただ、話をするだけだって言ったくせに、こんなひどい  
こと……！」

映像の中で歩き続けるエシュタンドを瞳で追いながら、空は悔し

さを抑えきれないように、震える声を出した。

「人聞きの悪いこと言わないでよ、僕は嘘なんかついてない。君に、危害なんか一切加えてないだろ？ あんな男のことは知らないよ。それに、さっきから何度も言ってるとおり、あれは僕がやったんじゃない……」

懲りずに言い続けるセリルを、きつと睨みつけて、空は届かないエシユタンドに向かって、そっと手を伸ばした。

「まあ、君が選んだ男なら、真の王者であるはずだしさ。これくらいのこと、死ぬことはないって。

仮にも聖域なんだし、別に僕だって、血を流したいわけじゃないんだから」

慰めるかのように肩に伸ばされたセリルの手を、空は強く振り払った。

「触らないで！ あなたの話なんて、もう信じない！」

吐き捨てるように叫んで、背を向けた空に、セリルは振り払われた手を、自分で撫でて笑った。

「ふうん、それでどうするつもりなの？」

背中にかけられた楽しいげな声を無視して、空は四方の岩肌を、じっくりと見て回っていた。

「出口でも探そうってわけ？ そんな方法じゃ、日が暮れちゃうよ」  
ただ、岩の隙間がないか、丁寧に調べていく空に、セリルのあきれたような声がかけられる。

それでも、空は、四方を囲む岩を全部調べつくし、足元の岩までも、しゃがみこんで覗いた。

「まあ、いいや。頑張つて、僕はちょっと寝てるからさ」  
言うなりセリルの姿が掻き消えるようになってしまったことで、さすがに空も動揺して、辺りを見渡した。

散々自分勝手に喋り続けたセリルでさえも、いなくなってしまうと、心細さに襲われる。

岩の壁に囲まれて、まるで押しつぶされてしまいそうなほどの、

圧迫感。

本当に一生このまま出られないのではないかと思えてさえる、静けさが迫ってきて、空は思わず震える体を両手で抱きしめた。

「エシユタンド……！ 一体、どうしたらいいの？」

その場に膝をついた空は、ふと声にならない声を聞いたような気がして顔を上げた。

不思議な力で映し出され続ける、エシユタンドの姿。その顔が、必死に辺りを見渡し、その口が、何かを叫んでいるのが見える。

近づいて見つめた空は、確かに彼の口が、どう動いているかを読み取った。

『ソラ』と、そう、確かに自分の名を呼んでいる。

何度も、何度も繰り返し返して、叫んでいるのが見えて、空の顔がちまちゆがんだ。

儀式の前にかけられた、彼の言葉が蘇る。そう、確かに言うてくれた。

そばにはいられなくても、彼の心が、いつもそばにあると思え、と。

そう思い出した途端、冷たかった両手に、体温が戻ってくるような気がした。

傷ついた彼の姿を目にして、どうしようもなく膨れ上がっていた不安も、しっかりと歩みを進めて、自分を呼んでくれているエシユタンドを見て、少しずつ、落ち着いていく。

そうだ、弱音なんか、吐いてる場合じゃない。エシユタンドを、これ以上危険な目になんて、合わせるわけにはいかない。

自分で、何とかするんだと、立ち上がった空は、足元に転がっていた小さな岩を持ち上げた。

こんな方法でも、とにかく試してみるしかない。やれることは、全部やらなくては！

そびえたつ岩の壁に向かって、何度も何度も、投げつける。

それでもびくともしない岩肌を睨みつけながら、空は同じことを

何度も繰り返した。

「絶対、外に出てみせるんだから……！」

ふらつきながらも、岩肌の少しでも弱そうな場所を狙って、空は幾度も岩を振り上げた。

「あつ」

打ち付け損ねて、岩肌に強く当たった片手を、反射的に押さえる。すりむいた箇所から、うつすらと血が流れた。

「まだまだ」

エシユタンドの傷に比べたら、こんなもの、と四方の壁に向かって、空は何度も岩を打ちつけた。

「きゃあつ！」

ふらついてきた足を岩の隙間に取られて、こけてしまった体を、空は唇を引き結んで、見渡した。

すりむいて、膝からも血が出ている。変なところを打ち付けた体が、あちこち痛んだ。

どれほどの時間がたったのかすら、薄暗い空間ではわからない。

自分がとてつもなく無駄なことをしているように思えて、空はあせる気持ちを抑えきれなかった。

『そんなやみくもにやっても、だめだよ』

何もない空間から、どこかにそんなセリルのあざ笑う声さえ、聞こえるような気がする。

落ち込んでる場合じゃない、考えるんだ。何でもいい、何か手がかりは……？

痛む体を無理やり起こして、空は再び岩肌を見渡した。

さっき、セリルが言っていた言葉を思い起こす。

そうだ、確か、エシユタンドが、どんどん近づいてくるって言うってたよね。

振り返ってもう一度見つめた映像でも、エシユタンドはやはりどこかに向けて歩いているように見える。薄暗くて、彼がどこにいるのかはわからないが、この滝の中につながる、どこかの空間を進ん

できているのではないだろうか。

目に見えるものに囚われてはいけないんだ。彼らは精霊なんだから、空間なんて、どこにだって繋がったり、隠したりできるに違いないのだから。

この岩肌を崩すことだけが、外に出る方法だっていうわけじゃないのかも。そこまで思いついてから、空はすりむいた手を握り締め、頭を上げた。

それから、先ほどからずっと滴り落ちている水の音に気づいた。

あまりにも当然のように響いている規則正しい音に、すっかり耳が慣れて考えずにいたけれど、水といえば、滝とつながる一番の手がかりじゃないだろうか。

思ってから、すぐに空はその音のする方角を探した。

大きな粒の音がして、すぐにそれが正面の壁のほうから聞こえる音だとわかる。

近づいていくと、確かに足元に、わずかながら落ちた水が集まって、流れていくのが見えた。

「この水が、滝に流れているのかな……」

独り言を言いながら、すぐに思い出したのはセリルの言葉。

今は凍らせてある、そう言っていたではないか。それなら、この水も、凍ってしまっていていいはずでは。

何かに近づけたような気がしたのに、また手がかりを失ったような気がして、空は小さく息を吐き出した。

「待って、でも……どうして、凍らせる必要があるの？ 精霊の力があれば、別に水が凍ってなくても、人を通さないようにすることなんて、簡単なはずじゃ……」

再び自らに問いかけながら、空は頭を抱えた。

映像に見えるエシユタンドのほうを、助けを求めるように見やる。

「あくだめだ……あたし、考えるの苦手なんだから。エシユタンド

一体どうということなの？」

思わず問いかけながら、ふと映像の中に違和感を感じた。

あれ？ 何だろう、さっきと何かが違う気が……。

よく覗き込んでみて、気づいたことに、空ははっと目を見開いた。「そうだ、氷だ！ さっき、最初に見た時は、確かに氷の壁の前にいたよね？」

手を叩いて叫んで、空は再びエシユタンドの姿を覗き込んだ。

確かに、最初は氷の壁が見えていたのに、今彼が歩いている場所には、氷らしきものが見えない。

歩いてきていることもふまえると、さっきより、更に滝の内部に空がいる場所に、近づいているのかもしれない。

「エシユタンド……お願い、無事でいてね」

届かない鏡に向かって手を伸ばして、空は願いを届けるように、エシユタンドを見つめた。

その瞬間、見えるはずもない、ただの祈りのつもりで、言った空の言葉が、まるで届いたかのように、エシユタンドが顔を上げたのだ。

藍色の瞳が、強く空のほうを見据えたように思えて、思わずどきりとする。

そして、それと同時に、懐で熱を持ったものに、空は目をやった。「あ……」

すっかりと忘れていた、その石を、空は驚きと共に見つめていた。ゆっくりと、鼓動でも始めるかのように、熱を持ち、息づきだしたようなその緑の宝玉を、空はしっかりと握り締めた。

再び目をやった先では、既にエシユタンドは視線を前に戻して、また歩き始めていた。

気のせいだったのだろうか、それとも。否定しながらも、確かに先ほど何か伝わったような、そんな確信があった。

目の前に掲げると、想緑珠は、その濃い緑の輝きを一層増したかのように、薄闇を照らし出す。

そしてその光で照らされた方角は、先ほど水滴が落ちていた、正

面の岩肌。

そうだ、確か、最初にかすかな光を感じたのも、この方角だった！

何かの意思に導かれるかのように、そっと足を踏み出す。

段々と、強くなる緑の光に照らされて、足元を流れる水がしつかりと見えた。

その水は、細くゆつくりと、それでいて、確かな流れで、正面の岩壁の、ちょうど中央の窪みに流れ落ちていた。

凍った滝、流れ落ちる水、ふさがれた岩の壁　全てをゆつくりと思い返しながら、ふと目をやった先に見つけたもの　それは、いつの間に、残っていたのか。

セリルが手にしていた、あの、白水晶の剣だった。

「滝、そのものを現す剣……」

無意識に呟きながら、手に取った剣は、少し重く、それでも、なぜか手になじんでいくような気がする。

内側からほんのりと発光する剣と、もう片方の手に持った、想緑珠の輝きを交互に見つめて、空は何かには操られるように、その剣を振り上げた。

何をするつもりなのか、わからない。何がどうなってるのかも、飲み込めない。

それなのに、ゆつくりと動いていく自分の手　不思議な気持ちのまま、それでも何かの確信を胸に、空は一気にその剣を振り下ろした。



## 60・氷壁（後書き）

どンドン、一話が長くなってますね、すいません。

落ち着いたら、もう少し考えたいと思います。

滝での騒動、いましばらくお付き合いくださいませ。

## 61・白水晶(前書き)

お待たせしました。

いよいよ、滝での騒動、最終編です。

流れ落ちるのが、汗なのか、血なのか、既にわからなくなっていた。

歩いても、歩いても先の見えないままの、薄暗い道の中、エシユタンドは視界がぼやけてくるのを感じていた。

岩につまずいて、足がふらつくのを、なんとか壁に手をつけて、その場に留まる。

「ソラ……」

先ほどから、もう何度目かもわからないほどに呼び続けた名前を、無意識のように口にする。

ただそれだけで、少し力がわいてくるような気がするのだった。

意識が遠のきかけたあの瞬間、胸元に潜ませた想緑珠が熱を帯びた。

確かにあの時、空の音が聞こえたような気がしたのだ。

この先で、きっと彼女は待っている。そんな根拠のない思いが、エシユタンドの足を進ませていた。

どうしようもない氷の壁に苛立って、何かのきっかけにでもなればと、覚悟の上で、力を揮った。

その瞬間、いきなり薄暗いこの空間へと、自分一人だけが引き込まれたことを思っても、これは絶対に空につながる道だと思えるのだった。

自らの放った力が、まるで凍りついた滝に撥ね返されてもしたかのように、阻まれ、返ってきたことはわかった。

滝の意思なのか、それすらもはつきりしないものの、何かの力が、自分を阻止しようとしたことだけは確かなのだ。

空から遠ざけるのなら、滝の外に撥ね返してしまえばいいところを、こうして洞窟のような内部へ引き入れたということは、完全に

阻まれたわけではない。

二つの相反する力が、自分を拒み、また、引き寄せてもいるそんな不思議な感覚に導かれているように思えた。

「それにしても 時間の問題だな」

我ながら苦しげに響いた声は、一人きりの暗闇に飲み込まれていく。

痛みは感じないものの、体のあちこちから流れる血が、ゆっくりとエシユタンドの体力を奪っていた。

自分の力で、傷つけられるとは なんと皮肉な状況だと、エシユタンドは眉をひそめて、知らず笑みさえ浮かべていた。

呼吸の乱れすら、はつきりと聞こえるほどの静かな空気。

確実なのは、魔の力ではあり得ないほどの清浄な場所だということ。それを思っても、この状況を招いた相手が、一体どういう存在なのか、確信できるような気がした。

「滝の精であろうと、何であろうと ソラを傷つけでもしたら、絶対に許しはしない」

低く、呟かれたその言葉で、なぜだか一瞬空気が震えるような、奇妙な感覚が彼を包む。

まるで誰かが、取り返してみろ、と笑ってでもいるような、そんな空耳にすら襲われて、エシユタンドは頭を振った。

そして上げた藍色の瞳は、傷ついた体とは反するように、ますます、強く、深い想いに燃えていた。

彼の想いに応えるように、胸元の宝玉が、呼吸でもするかのようにな、ひときわ大きく脈打った。

熱い、強い、緑の輝きが、膨らんでいく。

「自分を使え、と……そう言ってるのか？」

思わず、問いかけた彼の前で、想緑珠は、ますます輝きを強めていく。

以前、空を捜して入り込んだあの森で、強い光が、二つの石を呼び寄せるように放たれたことを思い出す。

あの時も、彼女の無事を願って、ただひたすらに、捜していた。それを助けるかのように、輝いたあの石。それは決して、偶然ではなかったのだ。

頭の中で符号が合っていく。何も確実なことなどない。

それでも、エシユタンドは、既に何か確信に似た思いを抱いていた。

「石よ。私を、ソラの元に導いてくれ……！」

流れてきた血を乱暴に払って、エシユタンドは叫んでいた。

その声に応えるかのように、緑の光が、岩に囲まれた道をまっすぐに照らし出した。

手のひらの中で、脈打つ石の熱が、彼の中にも伝わってくる。

不思議な温かさに包まれながら、必死で願ったエシユタンドは、大きく揺れた地面に、倒れそうになるのをなんとか堪えた。

まるで、爆音にも似た音が、彼のいる空間を轟かせる。反響する音の方向を探した、エシユタンドの目に、濃い緑色の光が映る。

その光が指し示す方角を振り返ったエシユタンドは、強く巻き起こった風に思わず腕を上げ、瞳を閉じた。

小石のようなものが、風と共に吹きつけた後、ゆっくりと開けられた彼の瞳は、大きく見開かれる。

「……ソラ……！」

彼の叫びに、同じように瞳を大きく見開いて、空は、自らの目にしているものを確かめるように、何度も瞬きをした。

手にしていた、大ぶりの剣を下ろして、目の前に開けた空間を、もう一度信じられないように見つめてから、空はゆっくりと口を開く。

「エシユタンド……！」

泣きそうにゆがんだ顔で、こちらへ駆けてくる黒髪の少女を、エシユタンドは心から湧き上がる安堵と共に、見つめ返した。

周りに飛び散った石を避けながら、走り寄ってくる空の体を、受け止めようと伸ばした手は、ずきりと疼いて、思わずその場に膝を

つく。

「エツ、エシユタンド！ 大丈夫？」

途端に心配そうに、そつと彼の体を支えた空に、エシユタンドは精一杯の微笑みを向けた。

「大丈夫だ。まったく……これくらいの傷で、情けないな」

作つたつもり笑顔は、今更感じ始めた痛みで、ゆがんでしまつたようだった。

それでも、無事な彼女を抱きしめようと、起こしかけた体は、またしても傾いだ。

「エシユタンド、しつかりして……！」

力を失つた彼の体を、空が抱きとめたその瞬間、突然どこからか、軽やかな音が響いた。

「いやあ、お見事！ ご苦労さま。君ならできるつて、信じてたよ」

拍手しながら、笑顔を浮かべた少年の姿に、エシユタンドは遠のきかけた意識を必死でつなぎとめた。

「貴様、か……ソラをこんな目に合わせたのは ただで済まされると思つ……」

言いかけた言葉は、またしても疼いた体中の傷によって阻まれる。それでも彼の意図を飲み込んだように、少年は高らかに笑つた。

「まだそんな口が聞けるんだ。もうふらふらのくせに、強気だね」  
「彼を笑うのはやめて！ もういいでしょう？ あなたが言つた通り、彼と出会えた。この岩の壁も、砕いた。」

これで、満足でしょ？ 早く、あたしたちを外に出して！」

怒りを込めた空の叫びに、少年の笑顔がゆつくりと消える。

「あれ？ この剣はいいの？ ご褒美にあげるつて言つたじゃない  
滑らかな白い手で、優雅に指し示された、その剣は、先ほど空が手にしていたもの 目を凝らしたエシユタンドは、ようやくそれが、ハルトの聖剣であることに気づいた。

「そんな、剣なんかいらんない！ 力なんて、いらんない……あたしが

望むのは、ただエシユタンドの無事だけ。

早く彼の手当てが必要なの！ だから、お願い 外に出してよ  
！」

傷だらけのエシユタンドの体を悲しげに見て、空は搾り出すように、少年に向かって叫び返した。

その声を、ただ黙って聞いていた少年は、ゆっくりと、美しい笑みを浮かべた。

「いいだろう……合格だよ。まあ、無意識の結果みただけど、剣は君を拒まなかったし。選ばれたかどうかは、試してみればわかることだ。

二人の想いの強さは、いやってほど、見せてもらったしね。まったく、そんな男より、僕のほうがよっぽどいい男なのになあ……」  
軽い調子で、呟かれた言葉に、空はただ眉をひそめた。

エシユタンドが目つきを鋭くしたことに、すぐに気づいたように、少年はいたずらっぽく舌を出した。

「冗談だよ、そんな怖い顔しないでよね。大体、僕は精霊なんだから、そんなに恐ろしい真似、するわけないだろ？」

もう少し、信じてくれたっていいのにさ 僕が本当に、永遠にでも閉じ込めるとか、思った？」

拗ねたように問われた質問で、空は何とも言えないような顔で、ただ少年を見返していた。

空が口を開くより前に、少年は両手を合わせて、明るい瞳で二人を映した。

「確かめたかったただだよ、君たち二人が本当に、力を手にすべき存在なのかをね」

「力、だと？」

飲み込めない話を、なんとか頭に理解させようと、エシユタンドが問い返す。同じ疑問を持ったように、空も少年を見やった。

「そうさ。石にも選ばれ、剣も認めたとしても、万が一、道を踏み外すような者だったら、困るからね。

その力を得るにふさわしい二人なのか、ただこの目で見たかっただけ」

「あたしたちを、試したってこと　？」

複雑な瞳で、問い返した空をちらりと見て、少年は笑顔で肩をすくめてみせた。

「ま、そういうこと。僕って、本当は親切なんだよ？　だって、口数の少ない、森の奴らに代わって、身をもって、その石の使い方も教えてあげたんだからね」

今は先ほどまでの輝きも熱も失った、ただの石を、空もエシユタンドも握り締める。

その様子を笑って眺めて、少年は大きく伸びをした。

「もうわかったと思うけど、その石は、二つの石を手にする者、想い合う二人を、つなぐ石。その想いが強ければ、強いほど、その力も強くなる。」

どんな風に働くかは、さっき見た通り、二人を引き寄せることもするし、他にも、色々と役に立つ。

まあ、堅苦しい森の奴らの宝玉にしたら、良く出来てると思うよ。大事にするんだね」

「じゃ、じゃあ……あたしたちは、この石のおかげで、引き寄せられたってこと？」

おそろおそろそう訊ねた空に、少年は頷いてみせる。

「それだけじゃなく、君は白水晶の剣も使っただろ？　滝そのもの意思を司る、この剣に、君は命を下した　道を開け、と。」

無意識にしる、何にしる、その強い想いに、剣は応えた。その意味は、君は、この剣に見事選ばれたってこと」

「剣に、選ばれた……？」

まるで予想もしなかったような言葉に、ひたすら驚いているように、空は呟いた。

黙って見ているエシユタンドの服を、そっと握ってくる。その手を取ろうとしたエシユタンドは、思ったよりも言うことを聞かない



体に、小さなうめきを上げた。

「エシユタンド！ 大丈夫？」

たちまち覗き込んでくる空に、唇だけで微笑んだものの、既に声も出せないほどの痛みを、隠すことで精一杯だった。

「セリル、さん　お願い、彼を助けられないの？　このままじゃ、エシユタンドが……」

セリル、と呼ばれた少年は、嬉しそうに空を見た。

「やっと、僕の名前呼んでくれたね。さん、はなくてもいいのに」

「そつ、そんなこと言ってる場合じゃ……」

苛立ったような空の声に、セリルはまあまあ、というように片手を上げてみせた。

「大丈夫。そんなこと、君が手にした剣の力を持つてすれば、わけではないよ。あとで、彼の体にのせて、願ってごらん。」

癒しと浄化の力を持った、白水晶の剣なら、そんな傷ぐらい、たちどころに治してくれるさ。

ただし、その想いが、純粹で、強いものでなければ、ただけだね」

「癒しと、浄化の力　？」

不思議そうに問い返した空に向かって、セリルは剣を差し出した。「もう、抜けるよ。君は、この剣の、持ち主だからね」

ハルトの聖剣と呼ばれたものと、全く別の物のように、古びていた剣の鞘も、柄も、全てが輝きを取り戻していた。

錆びていた色が、鮮やかな水色に変わっていく。その表面に刻まれたのは、白い模様　まるで、流れ落ちる水の姿を現したような

その剣をためらったように見つめていた空が、おそろおそろ受け取った瞬間、内側から、まばゆいほどの光が放たれた。

「その剣は、必ずこれから君たちの役に立つ。力の発動には、想緑珠と同じように、二人の想いが必要だ。」

魔をはらい、清める剣　正しい想いで、使うように」

そう言い放ったセリルは、先ほどまでの気楽な少年の姿には見え

なかった。

外見はそのままでも、あふれるほどの力と、威厳に、神々しいほども美しい、まぎれもない精霊の姿だった。

「さあ、そろそろ、滝たちも退屈してくる頃だ。いつまでも凍らせてるわけにはいかないからね。」

行きなさい。君たちを、心配してる者のところへ」

優しい瞳で二人を見つめたセリルは、そっと手を広げた。

その動作と共に、大きな音が響き出す。

滝が流れ出したのだと、見えぬままにも感じながら、立ち上がるうとしたエシユタンドを支えて、空はセリルを見やった。

「待って！ あの、ラウレカさんのこと、知ってるって本当なの？」

突然出てきた母の名前に、エシユタンドも視線を上げた、その時、セリルは水色の不思議な瞳を揺らめかせて、微笑んだ。

「ああ、知ってるよ。清らかな力にあふれた、可哀相な、巫女彼女も、君の大切な恋人も、泉の力を受け継いだ者。」

彼女の場合は、聖なる力に、彼の場合は、魔の力として現れた……でも、どちらにしろ、大きすぎる力は、人間には凶器になる。

君も、気をつけたほうがいいよ。でない、と、さつきみたいに、自分の力に傷つけられるだけでは済まなくなるかも」

エシユタンドの藍色の瞳に向けて、静かに呟かれたその声は、今までのような、ふざけた調子のものではなかった。

それだけに、空が隣で息を呑むのが聞こえた。

「どっ、どっということ？」

心配そうに問いかけた空に微笑んで、セリルは静かな瞳で周囲を見渡した。

「ああ、血の匂いに、そろそろ滝が嫌がり始めてる……もう、限界かな。」

とにかく、お互いを助け合うことさ。二人の想いが、一番大切なんだから。そのためには、ソラ」

思いがけなく名を呼ばれたことに動揺したのか、口をつぐんだ空

の隣に、いつの間にか近寄ったセリルは、何事かをそつと囁いた。  
大きな滝の音にも阻まれ、エシユタンドには聞こえなかったその  
言葉で、空の顔色がわずかに変わる。

そんな空の頬を優しく撫でて、セリルは愛らしいまでの微笑を浮かべた。

「さあ、お行き。またいつでも、遊びにおいで、歓迎するよ」  
少年の姿には似つかわしくないほどの、優しい声音で、そう言っ  
て、セリルは素早く空の頬に口付けた。

一瞬何が起こったのかわからないような空を、楽しそうに見つめ  
た後、セリルは何もない空間に、溶けるように姿を消してしまった。  
胸に湧いてくる複雑な思いを、とりあえず隠して、エシユタンド  
はしっかりと空の手を握った。

振り返った黒い瞳が、エシユタンドの姿を映したのが見えた、そ  
の瞬間、突如まぶしい光が二人を襲い、怒涛のような音と水飛沫に  
囲まれていく。

「たっ、滝？」

辺りを見渡した空と、エシユタンドがあわてて抱き合った次の瞬  
間、周りを占めていた岩肌がなくなり、突然水の中へと、放り出さ  
れていた。

激流ともいえるぐらいの、水の中、飲み込まれた体を、必死で空  
と抱き合いながら、エシユタンドは意識が遠のくを感じていた。

頭の中に、自分を呼ぶ空の声だけが、こだましていくようだった。

\*

村人たちに案内された先の、小さな洞窟の入り口には、またしても氷の壁が立ちはだかっていた。

王によって下された命で、王宮軍が氷の壁を砕こうとした、その瞬間、突如洞窟をも揺るがすような音が響き、一瞬にして、融けた氷の激流が兵たちを襲った。

近づこうとしていたクガルたち私兵隊は、あわてて飛びのき、水の渦を避けた。

「皆の者、無事か！」

叫んだ王の声に、洞窟から続く、小川の中ほどまで流された兵たちは、なんとか立ち上がり、無事を示す。

その様子にクガルもほっとした、その瞬間、少し離れて見ていた村人たちが、にわかには歓声を上げるのが聞こえた。

「巫女様だ！ 巫女様が現れたぞ！」

「王子様も一緒にじゃないか！」

口々に喜びの言葉を叫ぶ、村人たちの声で、すぐさま振り返ったクガルの瞳に映ったのは、水が滴り落ちる洞窟の中、座り込んだまま、まぶしそくに瞳を細めた、空の姿であったのだ。

顔を輝かせたクガルは、空の膝に抱えられた、傷だらけのエシユタンドを目にして、顔色を変えた。

「殿下！ 殿下、一体どうされて」

小川の浅瀬を走りぬけ、駆け寄ってきたクガルの姿を見て、空はほっとしたように息を付いた。

「クガルさん よかったあ……ちゃんと外へ出られたんだ」

辺りを見渡して、心から安心したようにそう呟いた空に、クガルも力強く頷く。

「はい！ 姫君、よくぞご無事で……しかし、殿下は、一体どういうことなのですか？」

瞳を閉じたまま、ぐったりと力を失っている主の様子に、クガル

は心配の色を隠せずに訊ねた。

クガルの問いに、空も疲労の色濃い顔を引き締めて、エシユタンドの体と、自らの膝の間に挟まっていた大ぶりの剣を見やった。

「姫君、その剣は　？」

訊ねかけたクガルの周りに、兵たちも集まり、そして、王までも空とエシユタンドを見下ろすように、洞窟の入り口へと降り立った。「ソラとやら、よく無事であった！　エシユタンドはどうしたのだ、傷ついているようだが……」

直接訊ねられ、空はゆっくりとエシユタンドの体を膝から下ろし、岩の上に寝かせた。

「あ、あの　説明は、あとでゆっくりしますから……今は、とにかくエシユタンドの傷を治さないと」

「傷を、治すだと？」

訝しげに問い返す王に、空は頷いた後、先ほどの剣を手を取った。

「何をする気だ、その剣は　？」

「滝の精霊が言うには、癒しと浄化の力を持つ剣だそうです。これなら、エシユタンドの傷が治せるって……」

質問に答えるのももどかしそうに、空は剣を片手にかまえ、ゆっくりとその鞘に触れた。

「滝の、精霊……」

口々に信じられないような呟きをもらす兵たちをもものともせず、空は一呼吸すると、鮮やかな水色をしたその鞘から、静かに剣を抜き放った。

そして、現れたものに、その場の全員が息を呑んだ。

抜かれた剣の刀身は、光り輝く、白水晶そのもの　剣の形に磨き上げられた、白水晶の結晶だったのだ。

皆が声を出せずに見守る中、空は一瞬だけ洞窟の奥を見やると、心を静めるように、瞳を閉じ、そしてエシユタンドの胸の上に、そつと水晶の剣をのせる。

「剣よ　どうか、エシユタンドの傷を治して……！」

固く目を閉じて、祈りを込めて呟かれた空の声　その言葉が届いたかのように、白水晶の剣が、ほのかな光を宿し、一瞬にして、それは辺りの空気をも染めるほどの、強い光に変わった。

空自身も、そして、周りの誰もが眩しさに瞳を閉じ、そして再び開く時には、既にその光はおさまり、何事もなかったかのように、剣は静かにそこにあるのみだった。

全ての視線を集めていたエシユタンドの瞳が、そっと瞬き、しっかりと開かれる。藍色の強い輝きが、彼の意識が戻っていくことを示していた。

「エシユタンド　！」

空の呼び声に答えるかのように、エシユタンドはゆっくりと上半身を起こし、そして信じられないようにその体を見つめた。

そう、彼の体のあちこちにあった、切り裂かれたような傷跡は、全て綺麗になくなっていたのである。

「ソラ……」

ほっとしたように瞳を合わせたエシユタンドに、空はすぐに抱きついた。

二人の抱擁を見つめていたその場の兵たち、そして村人たちからも、ゆっくりと歓声がわきあがる。今、起こった出来事が、信じられないままに、クガルもようやくその表情に安堵の色を浮かべた。

「エシユタンド……一体、どうなっているのだ」

ただ、呆然と、事態を見守っていた王が、ようやく言葉を発した頃には、エシユタンドはいつもの表情を取り戻し、笑顔すら浮かべて、王を見上げた。

「道すがら　ゆっくりとご説明いたしますよ、父上。その前に……」

藍色の瞳を腕の中の少女に向けて、エシユタンドは微笑んだ。

「ソラの、着替えと、休息が必要なようです。メセル殿　お願いしても、よろしいでしょうか？」

エシユタンドの胸に、力尽きたように体を預けて、子供のような

顔で眠る空の姿に気づいたメルは、優しい笑顔で頷いてみせた。

馬車に運ばれる空を見送って、エシユタンドもクガルに渡された着替えに袖を通す。

そして、王宮のある方向を強い瞳で見つめた彼の背中を、既に暮れはじめた夕日が照らすのだった。

## 61・白水晶（後書き）

今回、かなり長くなりました。

いつもながら、すみません。

もう少し気をつけたいとは思っているのですが、区切りがいいところだと、短い、長いかになってしまっ……。

これからの展開も、どうぞお楽しみに！



## 62・晩餐会（前書き）

お待たせしてしまいました。

続きが気になっていた読者様、申し訳ありません。

いよいよ、収穫祭を締めくくるとる晩餐会の始まりです。

## 62・晩餐会

久しぶりに、ゆったりとした気分が目覚めて、まどろみの中から抜け出せずにいる空の頬に、優しい手が触れた。

ゆっくりと瞳を開けて、思い通りの人物がそこにいることに、空は満足げな笑みを浮かべた。

「ソラ　気分はどうだ？　どこか、痛むところはないか？」

そつと髪を撫でながら、訊ねられ、空はようやく夢から覚めたように、もう一度瞳を瞬かせて、急いで体を起こした。

「エシユタンド……怪我は？　どこも痛くない？」

彼の体に向けられた心配そうな視線に、エシユタンドは笑った。

「聞いているのは、私なんだが……大丈夫、お前のおかげで、傷一つないさ」

証拠のように、腕をまくりあげ、見せられた彼の肌には、傷跡すら残っていないかった。

ようやくほっとしたように息を付いた空の頭に、エシユタンドの手がのせられる。

「その様子なら、お前も大丈夫なようだな」

優しく覗き込まれて、空はくすぐったそうに笑った。

「あたしは、もうすっかり元気！　って、どれぐらい寝てたの？　もしかして、もう収穫祭は終わってたり……」

あわてて部屋を見渡して、すっかりと夜の帳がおりていることに気づいた空は、あせったように寝台から下りようとした。

「そんなにあせらなくてもいい。まだ収穫祭の夜だ。これから、晩餐会が始まるどころだがな」

よく見ると、エシユタンドは白い、気品あふれる正装に身を包んでいる。ふと見た自分は、先ほどまで身につけていた薄い藍色の巫女の衣装ではなく、朝着ていたドレス姿だった。

空の目線に気づいたように、エシユタンドが微笑む。

「ああ、あの衣装なら、濡れていたから、着替えを頼んだんだ。寝ているお前に、馬車でもずっと付き添って王宮まで来てくれたんだぞ」

「来てくれた、って……？」

誰が、と訊ねようとした空の前で、エシユタンドが扉のほうに目をやった。

「先ほどから、ずっとお前が目覚めるのを待っていていたんだ。帰る前に、一言話したいと言われてな」

まるでタイミングを見計らったかのように、叩かれた扉に、エシユタンドが返事をする。そして、侍女によって、開けられた扉の前に佇んでいたのは、西の聖殿の巫女　メセルであったのだ。

「メセル、様　！」

驚きの声を上げた空のもとに、いつもの穏やかな表情で歩み寄ってくる彼女のそばには、笑顔の巫女たちもいた。

「皆さんまで……お帰りにならなくて、よかったですか？」

急いで寝台から下りた空に、メセルは優しく頷いた。

「本当は、儀式が終わって、無事姫君もお戻りになったのですから、帰らないといけないんですが……どうしても、発つ前に貴女に一言申し上げておきたくて」

「私に……？」

不思議そうに問い返した空の手を、メセルの痩せた手が握った。その薄い緑の瞳を、まっすぐに向けて、メセルは優しい顔で空を見る。

「姫君　よくぞ、ご無事でお戻りになられました。そして、立派に儀式を務め上げられ、更には、滝の精霊から聖なる剣を譲り受けるとは　このメセル、貴女様を大変な誇りに感じております」

「メセル様……」

儀式に臨む前の厳しさが、嘘のような彼女の暖かい言葉に、空は驚いたように呟いた。

「私が申し上げたかったことは、西の聖殿の巫女全てが、今後貴女

様の味方であるということですよ。ええ、長様に報告しても、必ず同じように思われることでしょう。

姫君がお困りになった時には、必ずお力になることを誓いますわ。どうぞ、殿下とお力を合わせて このミデイスをお救いくださいまし、暁の姫君」

その言葉に、思わずエシユタンドのほうを見た空に、藍色の瞳は、少しいたずらっぽく微笑んでみせる。

ためらう空に気づかぬように、メセルは再びしっかりと空の手を握ると、深々とお辞儀をした。

「メツ、メセル様 もういいですから、ねっ？　どうか、お顔を上げてください。なんか、落ち着かないですし……私なんて、そんな立派な人じゃ……」

困ったように、メセルの腕を掴んだ空の周りで、巫女たちのひそやかな笑い声がもれる。それを耳にしたメセルは、顔を上げるなり、今までの態度が嘘のように、眉間に皺を寄せた。

「まあ、貴女方、巫女たちが、そんなにはしたくないことだと思っっているの？　それに、姫君！　第三殿下の婚約者ともあるうお方が、そのように情けないことでしょうか？　無事に済んだから

大体、儀式の時のあのふらつき方は何ですか？　無事に済んだからよかったものの、間違えれば、足を滑らせることもあったのですよ？」

いつもの調子を取り戻して、両手を腰に当てて、くどくどと始めたメセルに、空は思わず吹き出していた。

それを見ていたエシユタンドも、微笑ましげに瞳を細めている。皆の視線に、メセルは咳払いをして、気を取り直したように空を見た。

「とにかく、ですね　姫君、貴女様はこれから、この国にとって

も、そして勿論殿下にとっても、大切な存在におなりです。どうか、気を引き締めて、そして　十分にお気をつけになりますよ」

最後の言葉は、真剣な表情そのもので、何に、とは言われなかったものの、空の顔も自然と引き締まっていた。

「では、姫君、そして殿下　これで、失礼をいたします。聖殿にて……お二人の未永き幸せを、心よりお祈りしております」

揃って頭を下げたメセルと巫女たちは、静かに退出していった。その背中を見つめる空の瞳は、複雑な色を宿しているのだった。

舞踏会で使用した大広間が、今度は晩餐会の会場となっていた。

エマナに付き添われた空は、控えの間に備え付けられた鏡の前で、ためらいを隠せずに自分の姿を見つめていた。

「ねっ、ねえ……本当にいいの？　この衣装　」

先ほどから何度も訊ねたことを再び持ち出されて、エマナは腰に手を当てて、空を見上げた。その唇はすっかりと尖っている。

「ですから、これは殿下も許可されたお衣装なのだと、何度申し上げればおわかりになるのですか？

代々、正式な婚約者となられた姫君が着られることになっているのです。

今日この場で間違いなく、国王陛下もお認めになるのはわかっているのですから、そんなに心配される必要はございません！」

堂々と言い切ってみせるエマナに、空はまだ不安を隠しきれない表情で自分を見た。

紺色の生地に、大きく白地のラインが入ったその衣装　施された刺繍は、豪華な金系によるものだ。

白という、王族にだけ許された色が大胆に使われたそのデザインに、空は戸惑いを消しきれなかった。

「姫君　？　どうかなされましたか？」

少し表情が翳っていたことに気づかれたかと、あわてて顔を上げ

ると、エマナが心配そうに覗き込んでいた。

「う、ううん。なんでもない……わかったよ。じゃあ、気にしないことにするね」

笑顔を作って、そう言った空に、エマナが何か言いかけた時、大広間から、迎えの使者が来た。連れられるままに、大広間の扉へ向かう空を、力強く見つめたエマナは、頑張って、とでもいうように両のこぶしを握って、笑顔を送ってくれたのだった。

大きな扉の前で、一呼吸整えた空は、もう一度だけ衣装の白い色を見つめて、何かを思い切るかのように、顔を上げる。

「第三殿下のご婚約者様、ご入場でございます」

使者によって、はつきりと告げられたその言葉で、大広間の扉が開く。途端に、居並んだ王族の視線が注がれるのがわかった。自分を見つめる藍色の瞳にわずかに微笑んで、空はなんとか連れられた席へと向かった。そう、今度こそ、第三王子エシユタンドの、隣にあつらえられたその席に。

席につく前に、見上げた正面の王は、ただ静かな瞳で、空を見返していた。深々とお辞儀をした空を、エシユタンドが優しく席へとエスコートしてくれた。

「その衣装、よく似合っているぞ」

耳元で囁かれた言葉に、見上げた藍色の瞳は、いつもと同じように、余裕そのものだ。不安ばかりだった空の心も、少しだけ落ち着いていた気がした。

「では 全員揃ったところで、収穫祭の最後の夜を飾る、晩餐会を始めるとしよう。今宵は無礼講 存分に楽しんでくれ」

金の酒杯を高く掲げた王の声で、同じく王族の全員が掲げた酒杯を飲み干す。そしてそれを合図に、壁際に並んだ楽団の演奏が始まった。

舞踏会の時とは異なり、大きなハープのような楽器や、優しい音色の笛などを基調にした、穏やかな音楽だった。

掲げていた酒杯を、口にだけ当てて、飲まずにテーブルに置いた

空を見て、エシユタンドがそつと顔を近づける。

「どうかしたのか、ソラ」

心に浮かんだことをそのまま口にしていいものか、迷った空は、ふと玉座のほうを見て、その隣に王妃がないことに気づいた。その目線で、察したかのように、エシユタンドも同じ方向を見た。

「王妃なら　ご欠席だ。体調不良が理由だとのことだ」

その皮肉めいた言い方に、空は信じられないように空席を見つめる。

「体調、不良　？」

「この晩餐会を欠席するということは、この場でどんなことが起つても、我関せず、ということだ。現段階で、これが彼女の精一杯の抵抗なんだろうよ」

藍色の瞳で、静かに答えたエシユタンドに、空は視線を戻した。

複雑な表情を浮かべた空の頭に軽く触れて、エシユタンドは優しく微笑んだ。

「気にするな。とにかくお前はやるべきことをやり遂げたんだ。今日のところは、何も考えずに、美味しい食事でも楽しんでおけ」

片目を閉じて、冗談めかして言われたことで、空はようやく目の前に並んだ豪華な食事に瞳を向けた。

さすがに晩餐会と言われるだけあって、普段にも増して、色とりどりの、趣向を凝らした料理が並べられている。あまり素直に楽しむ気にはなれないものの、それでも口をつけたスープの美味しさに、空腹だったことを思い出した。少しずつ口に運び始めた空は、ふと自分たちのテーブルから、少し離れたほうに目をやった。

「ねえ、そういえば、あっちに並べられた料理は何なの？」

エシユタンドに訊ねた空の言葉に、微笑んだのは隣の席のエカルドだった。

「あれは、王族以外の人々に振舞われる食事ですよ。今宵の晩餐会では、私兵隊や王宮軍の精鋭、更には侍女にまでも、この場で晩餐を楽しむことが許されるのです。収穫祭ならではの、無礼講ですよ」

「彼らは、立食だがな」

エカルドの言葉を受けて、続けたエシユタンドも、少し晴れやかな顔で、そちらを見ている。その言葉通り、控えていた私兵隊や侍女たちも、テーブルに並べられた料理や、果物、酒を手に、笑顔を交わしていた。

「へえ　そうなんだ」

珍しく明るい大広間の光景に、空も笑顔になる。それを見つめるエシユタンドの瞳が、優しく細められることには気づかずに、空は目を凝らして、見知った顔を発見した。

「あ、エマナだ　ねえ、見てみて、ルストさんもいる！　あ、クガルさん……エマナったら、また赤くなっちゃって」

同じテーブルを囲んでの、いつものメンバーの光景に、空は思わず笑っていた。そしてふと目が合ったクガルに手を振る。遠慮がちにお辞儀を返してきたクガルの隣で、空に見られて余計に赤くなっているエマナが見えた。

「舞踏会にも侍女が出られたらよかったのに　そうしたら、クガルさんと一緒に踊れてたかもしれないのね。ねえ、エシユタンド……」

思いついた自分の考えで、楽しげに笑っていた空は、見上げたエシユタンドが、自分を見つめていたことに気づいて、思わず頬を染めた。それを見ていたエカルドが、小さく笑う。

「姫君は……その衣装を着られても、まったく普段通りなのですわ。そういう飾らないところが、姫君の美点なのだけれど　ねえ、兄上？」

意味ありげに向けられたエカルドの言葉に、エシユタンドは曖昧に微笑んだ。二人を見ながら、空は無意識に衣装の膝元を握る。その白い色が、やけに目に付いて　王と、その隣の空席を知らず見やっていた。

「ソラ　何を着ても、どんな席に座っても、お前は、お前だ。何も恐れることはない。いつも　隣には、私がいる」



固く握り締められていた空の手をとって、深い藍色の瞳で見つめたまま、エシュタンドが優しく告げた言葉。

嬉しいはずのその言葉が、なぜか胸の中に残って、空の不安を呼び起こしていく。それを表に出さないように、空はエシュタンドの手を、そつと握り返すのだった。

食事が済んで、食後の香草茶が振舞われた後　私兵隊や侍女の面々は下げられ、王族だけが残された。

食卓は片付けられ、それぞれ王族が、正面の王と対峙する形で列を成す。膝をつき、礼をしながら王の言葉を待つだけとなった。

そして、王が金の椅子から立ち上がるのと同時に、顔を上げた空は、穏やかな灰褐色の瞳が自分をしっかりと映しているのに気づいた。

「ソラ、と申したな」

呼ばれた名前に、思わず背筋が伸びる。緊張が走るのを、なんとか抑えて、空は頷いた。

「はい　国王陛下」

いよいよ、この瞬間がやってきたのだと、自然と声も引き締まる。空の返答を受けて、王は少し表情を和らげた。

「このたびの儀式　よくぞやり遂げた。滝では思わぬ事態も起こったが、無事の帰還、喜ばしく思うぞ」

思いがけずに優しく言われて、空は驚きつつも、深く頭を下げた。「勿体無いお言葉、ありがとうございます」

「まあ、よい。頭を上げなさい。そなたはもう、このエシュタンドの正式な婚約者だ。そのようにかしこまらずとも、王族に迎え入れられる身なのだぞ」

王の言葉に、空は思わず隣のエシュタンドを見やる。エシュタン

ドは、優しい瞳で、ただ頷いてみせた。

「お、王族……?」

空の小さな呟きに、王は口元に笑みさえ浮かべて、空を見た。

「そうだ。どうした、何をそのように驚くことがある? 儀式を無事にやり遂げたら、正式に婚約者として迎え入れること、この王の言葉を持って、約束したのである。」

王に言われて、空は言葉を出せずに、唇を結んだ。

そう、確かに、あの時、自分がそう求めた エシユタンドを助きたい、その一心で。それでも、実際にこの瞬間がやってきて、空はなぜか実感が持てずにいた。

「儀式をやり遂げただけではない、そなたは滝の精にも聖なる剣を与えられたという。その力は、私自身、しっかりとこの目で確かめた。」

それは既に、暁の娘であることの立派な証明である エシユタンドの婚約者としてだけではなく、このミデイスを救うべく遣わされた奇跡の娘として、この王が歓迎せずにおれようか!

その力で このミデイス王国を共に繁栄させていこうではないか。頼んだぞ、ソラよ!」

高々と、国王の威厳を持って叫ばれたその声で、空は耐え切れないうちに、俯いた。かろうじて、礼をしたかのように見えたようで、王族の面々が、拍手をするのが聞こえる。

その音も、歓声も、全てが遠く、空の耳から離れていくような気がした。

この場の華やかさも、自分の衣装も、何もかもが、不自然なほど輝いて、頭が痛い。

思わず感じた目眩は 隣で体を支えたエシユタンドの手で、なんとかおさまった。

「エシユタンド」

救いを求めるように見つめた空の肩を抱いて、エシユタンドは笑った。

「ご苦労だったな。これで、全ての行事は終わりだ。公式の、行事はな」

間近で見つめられて、空はどういう意味かと瞳を瞬かせる。その笑顔の鮮やかさに、不安を上回るほどの、胸の鼓動を感じた。

どういふことが空が訊ねようとする前に、いつの間にか再び静けさを取り戻した大広間で、皆が王の言葉を待っていた。

「収穫祭は、今宵を持って、無事終了となった。各自、ゆっくりと休むように。

話すべき問題は、多いが 全ては明日からということになる。

よいな、エシユタンド。そして」

名こそ呼ばれなかったものの、最後に向けられた王の瞳は、しっかりと空を映していた。

かろうじて頷いた空をもう一度見つめてから、王は宴の終焉を告げたのだった。

緊張のままに、大広間を退場した空は、エシユタンドに強引なほどに手を引かれていく。

「あ、あの どこ行くの？ 行事は全部終わったんじゃ……」

その向かう先が、エシユタンドの私室とは違うことに気づいた空の質問にも、エシユタンドはいつもの笑顔を見せただけだった。

そして今まで入ったこともないような、小さな部屋に連れて行かれる。

「私は先に馬車で待っている。用意ができれば、彼女と一緒に来るんだ」

「ちょよ、ちょっとエシユタンドってば……一体どういふ」

訊ねかけた空の口を、エシユタンドが軽くふさぐ。指で、静かにと示してからエシユタンドは笑った。

「声が大きい。皆に見つかったら大変なんだ いいから、言うこ

とを聞け」

「だ、だって」

「大丈夫、私を信じろ」

「ちよっと、エシユタンド！」

わけのわからない説明で、無理やり部屋に放り込まれて、空は混乱状態で閉じられた扉に手をやった。既にエシユタンドの足音は遠ざかろうとしている。

追いかけてようとした空は、誰かに突然衣装を引っ張られて、思わず悲鳴をあげかける。

そして目に入った、亜麻色の髪と瞳に、空は息を呑んだ。

「エ、エマナ？」

何がどうなっているのかわからない、という空の顔に、エマナはいたずらっぽく微笑んだ。

そして、その手に持っていたものを、空に見せるように差し伸べた。

「まずはこれを　今からが、本当の収穫祭の始まりですよ」

明るく告げられたエマナの言葉に、空は大きく瞳を見開くのだった。

## 62・晩餐会（後書き）

さて、連れて行かれた空は、これから一体どうなるのか。続きも、  
どうぞお楽しみに！

### 63・祝祭（前書き）

大変長らくお待たせしました！  
いよいよ、本当の収穫祭が何なのか、明らかになります。

「ああ、やっと来たか。思った通り　そんな服も、よく似合うな」  
馬車に乗り込んだ空を見るなり、エシユタンドは爽やかに笑った。  
「エ、エシユタンド……何、その格好……それに、クガルさんまで」  
エマナに差し出された、黄色のワンピースのような地味な衣服を  
言われるがままに着た空は、エシユタンドまでがいつもの立派な衣  
装とは程遠い格好をしているのに気づいて、驚きを隠せなかった。  
もちろん、白ではない、薄い茶色のシャツとズボン　それは、ま  
るで農夫のような。

その服装に似合わない笑顔で、ふざけたように頭の帽子を深く被  
りなおしてみせる。金の美しい髪が、完全に隠れるほどの帽子だっ  
た。

「村に出るわけですから　それなりの格好をしませんと、目立ち  
ますからね」

同じように、薄水色の上下を着たクガルも、笑顔だけはいつもの  
優しいものである。それでも、私兵隊の衣服を身につけていないク  
ガルに、どうも違和感がぬぐえなかった。

「む、村に……？」

驚いたのは空だけで、付いてきたエマナもただ微笑んでいる。正  
面に座るクガルのために、赤く染まった頬をして、ベージュの上着  
とスカートを着込んだエマナは、この中で、一番普通の村娘に見え  
た。

「で、でも村なんて、い、いいの　？　ばれたら、大変なことに  
なるんじゃない……」

ひっそりと木陰に止められた馬車は、王宮の前ではなく、裏口の  
ようなところにあつたが、空は声をひそめて、呟いた。

「ばれれば、な。だから、こんな地味な馬車にしたんだ。大丈夫、  
今夜だけは、兵たちにも、村へ出る許可が出されている。」

その中に紛れて行けば、見つからんさ」

彼が身につけると、どんな地味な服でも、どこか洒落て見えるのはどうしてなのか　意外と着こなしているエシユタンドに微笑まされて、空は一瞬言葉を失った。

それを待っていたかのように、馬車は静かに、すっかりと更けた夜の闇に、溶け込むかのように出発するのだった。

王宮近くの小さな村々を通り抜けて、辿り着いたのは、大きな森に囲まれた村だった。

近隣の村人たちが集まって、その場所で収穫祭を行っているのだという、クガルの言葉通り、馬車の窓からも、道に沿って焚かれた松明の灯りが見えた。

夜通し、酒と料理と、踊りを楽しむのだという、村人たちの収穫祭　王宮での儀式や宴とはほど遠い、生きた彼らの祭りの場に来て、知らず、空の心も明るくなっていった。

「ああ、もう踊りが始まっているようですね」  
クガルが指し示した方角で、賑やかな音楽や笑い声が聞こえてくる。その音楽も、王宮で耳にすることがないような、騒がしいほどの活気に満ちたものだった。

「お前に、見せてやりたかったんだ」  
村人たちの笑顔と、楽しげな輪を輝いた表情で見つめる空に、そつとかけられた声。

振り返った先にあつた、優しい藍色の瞳に、空はどきりとした。まるで、しずんでいた自分に気づいていたかのような瞳だったから。

「さあ、姫君。参りましょう」  
腕を取って、誘うエマナに頷いた空を、エシユタンドの手が引き止める。



「その前に、これを　お前の髪も、結構目立つからな」  
渡された帽子を深く被った空を、満足げに見つめた後、エシユタンドも自分の帽子を更に目深に被った。

帽子の陰になって、藍色の瞳の色が、よくわからない。そういうことかと、ようやく納得した空の手を引いて、エシユタンドは馬車を降りた。

エマナがクガルの手を取って、馬車を降りているのを横目に、空は嬉しそうに微笑んだ。

この場に二人を連れてきてくれたのが、ただの護衛とか、そういう目的だけではないことがわかって、なんともいえずに温かい気持ちだった。

エシユタンドも、結構粹なことするじゃない。

見直した、とばかりに見上げた空に笑って、エシユタンドは祭りの輪へと歩き出す。

「今度こそ、誰の目も気にせずに、踊るとしよう、我が姫君」  
冗談めかした彼の手をとって、空も笑った。

そして踊る村人たちの中へ、入っていく。すっかり赤い顔をした村人たちは、何も気にせずに空たちを迎え入れてくれた。

楽しいな踊りは、振りも、音楽も、何も気にしない、ただのお祭り騒ぎと化している。

それぞれに、普段は収穫にいそんでいるのだろう、村の男と、女たちが、今日だけは何もかも忘れて、朝まで踊り、飲み明かす。

肩がぶつかりあい、腰があたっても、お互いに笑いあい、村の地酒まで振舞ってくれる。焼いた鶏肉や、豚肉、そして野菜の漬物など、王宮の料理とは比べられないような、シンプルな料理　そんな素朴な味も、何よりも美味しく感じられた。　遠慮がちに踊る、クガルとエマナの姿も見える。

「そこのお二人さん、どうだい？　恋の花飾りだよ。収穫祭の恋人たちのために作った、特別な花飾りだ！　恋が実ると大評判だよ。さあ、どうだい！」

踊りの合間、歌うように売り歩く男にかけられた声で、空とエシユタンドは振り返った。

首から下げられた木箱には、色とりどりの花を小さくまとめて、作られた飾りが詰められていた。見回すと、あちこちで、その飾りを帽子や、胸につけている女性たち。

「確かに、大評判のようだな」

笑いを含んだエシユタンドの答えに、花売りは上機嫌に頷いてみせた。

「こちらなんか、そのお嬢さんにぴったりで可愛いよ。さあ、旦那、買ってあげておくれよ！」

花売りに差し出された黄色い花飾りを、エシユタンドは笑顔で受け取った。言われた分の硬貨を渡した彼に、花売りは帽子を取って、笑顔を返す。

「恋人たちに、素敵な夜になりますように！」

挨拶のようにそう言って、去っていった花売りを見送って、エシユタンドは花飾りを空の胸につけてくれた。

「今夜の記念だ。受け取ってくれるかい？ お嬢さん」

いたずらっぽく笑って、そう言うエシユタンドに、空は頬を染めて、微笑んだ。

まるで、村の恋人たちになったようで、なんだか心地よかった。

花飾りを胸につけた他の娘たちのように、空もまた踊りの輪に戻る。

祝祭の中、空はいつしか、笑いながらエシユタンドと纏もっれるように、踊っているのだった。

まだ音楽が続く中、息が上がって、休憩に出たエシユタンドと空は、賑やかな村の広場から外れた、小高い丘に座っていた。

勢いで口にした地酒のせいで、ほろ酔い気分の空は、上機嫌で夜空を眺めていた。

「大丈夫か？ 酒には慣れていないんだろう。飲みすぎたんじゃないのか」

気遣うエシュタンドのほうはといえば、あれだけ踊っても、呼吸の乱れもなく、平気そうな顔をしている。

熱くなつた頬を手で仰ぎながら、空は笑った。

「大丈夫、大丈夫！ あゝ楽しかった！ あんなに笑ったり、何も気にせず騒いだりするの、本当に久しぶり……」

見上げた空に光る星の数に、空は目を見張る。

「うわ……やっぱり、空気が綺麗だからかな。星があんなにたくさん！」

信じられないように見つめる空の隣で、エシュタンドはただ優しい顔をしていた。

「あれ？ クガルさんとエマナは？」

そういえば、二人はまだ踊っているのだろうかと口にした問いに、エシュタンドは少しだけ苦笑してみせた。

「あいつは、仕事熱心な奴だからな。たぶん、私たちの近くで見張つてもいいるんだろう」

王子の警護のためといえば当然な行動だけれど、エマナの気持ち思い出して、空は困つたように俯いた。

「とにかく、いくらクガルでも 私たちの邪魔はしないさ」

言われた言葉への反応が遅れた空を、エシュタンドが間近で見つめた。

酒でぼんやりしていた気分も醒めるような、深い眼差しに、空の鼓動は高鳴る。

そつと頬に触れたエシュタンドの手に、思わず緊張した空は、その藍色の瞳が、どこか切なげな光を帯びていることに気づいた。

「エシュタンド……？」

不安そうに見上げられて、笑顔に変わったエシュタンドの表情も、少し影があるように見える。

「どうかしたの？」

訊ねた空の頬を、優しく撫でてから、エシユタンドはその手を引いた。そして空へと戻された視線には、何か決意のようなものが閃いていた。

「収穫祭の儀式が終わったら 話があると言っていたらどうか」

その言葉に、慌しさのあまり忘れていたことを思い出した。舞踏会が終わった夜に、確かにエシユタンドがそう言っていた。

「ああ……そういうえば、大事な話があるって 何の話だったの？」  
訊ね返した空に、エシユタンドは真剣な瞳を向けた。

「お前もわかっていると思うが……儀式が終わって、いまやお前は私の婚約者だと、王にも認められることとなった。

お前がそのことに、どれほどの重圧と戸惑い、不安を感じているかは、私もわかっているつもりだ」

低く、はっきりと告げられた言葉に、空は思わず瞳を見開いていた。

「エシユタンド」

自分の心など、お見通しだったのだと、驚きと共に見上げた空に、エシユタンドは軽く息を吐いて、言葉を止めた。何を言うべきか

ではなく、言うべきか、言わざるべきか、迷っているようだった。

「ソラ」

一瞬のためらいの後、名を呼んだエシユタンドは、今度こそ決意を固めたようだった。藍色の瞳に、強い色を浮かべて、空をまっすぐに見つめている。

「お前のためにと、私は自分の心を語らなかった。お前に選択を迫ることが どれほど、酷なことか、わかっていたからだ。

育ってきた世界と、私への想いを天秤にかけさせたくはなかった。それでも……」

話しながら、固くこぶしを握り締めたエシユタンドは、瞳を閉じて、迷いを捨てるように、息を吐いた。

「自分をごまかし、この想いを告げずにいることのほうが、卑怯なことではないのかと、そう思った。

だから お前に話すことにしたんだ」

「エ……」

呼びかけた名前は、あまりに真っ直ぐな瞳に、そのまま口に出さず消えていった。空の瞳を、ゆるぎない想いを込めて見つめたエシユタンドは、ゆっくりと口を開いた。

「私は お前に、この世界に残って欲しいと願っている。既に、この想いは抑えきれぬほどに育ってしまった。

私と、共に生きてはくれないか？」

大きく瞳を見開いた空を見つめるエシユタンドは、あふれだす感情を必死で抑えつけているように見えた。切ないほどに優しい瞳で、空を覗き込む。

「これが、私の正式な求愛だ 愛している、ソラ……」

はつきりと言い切って、再び空の頬に触れたエシユタンドの手は、少し震えてさえた。

ゆっくりと、おりてきた彼の唇が、万感の想いを込めたように、そっと空の唇を捉えた。

触れた途端、空の中に駆け巡っていた迷いも、不安も、忘れるほどの熱が、込み上げてくる。

初めて口付けた時とは、全く変わってしまった状況と、お互いの想いが、避けることのできない高波のように、押し寄せてくるような気がして。

目眩がする 世界中が回るかのような、そんな目眩の中にながらも、空はその唇を、拒むことができなかった。

ずっと抑えていた心が、解き放たれていくかのように、存在自体が溶け合うかのようで 触れ合う唇も、心も、体中、熱くて、信じられないほどに幸せだと感じる。それでも込み上げてくる涙が、同時に切なくてたまらなかった。

幸せなはずなのに 辛いなんて。

あふれる空の涙をその指で拭いながらも、エシユタンドは口付けをやめなかった。

甘く、切ない　　悲しい、二度目の口付けを。

星が、流れるのが見えた。

いつの間にか、エシユタンドに肩を抱かれながら、黙って夜空を見ている空は、遠い星を眺めていた。

その視線を追いかけたエシユタンドは、長い沈黙を破るように、そつと息を吐いたのだ。

「唇は　正式な求愛の時に、と決めていた」

驚いたように見上げた空に、優しく微笑んで、エシユタンドは続けた。

「最初に、お前の思いを無視して、無理に奪ったからな。二度目は、正式な求愛の時でないし、しないように、気をつけていた」

そういえば、あれ以来、唇には触れられなかったと、空が思い返している間に、エシユタンドはわずかに笑ってみせた。

「三度目は　お前が望んだ時、かな。そうでなければ、無闇にはしないから安心しろ」

その笑顔が、どこか悲しげで、空は返事ができずにいた。その沈黙に気づいているかのように、エシユタンドは静かに遠くの空を見やった。

「お前には、選択の自由がある。私の想いを正直に告げただけだから　その答えは、強要しない。」

帰ることを選んだとしても、まだ方法がわからぬ今は……私の婚約者として暮らすのが一番安全だ。だから、皆には話すつもりもないし、その後のことは、私が責任を持つ。お前は　お前の心の通りに、道を選んで欲しい。ただ、私の本心を、知っていてほしかった。それだけだ」

言って微笑んだエシユタンドは、強い瞳をしながらも、とても悲

しげに見えた。自分の想いを、断ち切る覚悟をした、そんな瞳を  
していた。

その藍色の切なさに、胸を打たれて、空は何も言えなかった。

それすらもわかっているかのように、微笑んで、エシユタンドは  
立ち上がる。差し伸べられた手を取って、起き上がった空は、ふと  
閃いた静かな光に、視線をやった。

「あ、あれは」

思わず呟いた空の前を横切っていくもの、それは、青白く、淡い  
光。ふわりと現れては消え、また光る。優しい光の正体に、空は  
余計に言葉を失った。

「ラキス、だな　おそらく、今年最初の」

同じように、淡い光の群れを見つめていたエシユタンドは、想い  
を胸に秘めたような、静かな顔で、そう答える。

今年最初のラキス　青白く、優しい光の群舞に、空は目を奪わ  
れていく。

『その年最初のラキスを、一緒に見た相手とは、永遠に結ばれると  
言われていて』

無邪気なエマナの声が、頭の中に蘇る。その言い伝えを、知らな  
いようには見えない、エシユタンドの表情をそつと見て、空はすぐ  
に目をそらした。

普通なら、喜ぶべきことなのに　純粹に、喜ぶだけではいられ  
ない、自分たちの関係を思うと、空は知らず、表情を翳らせていた。  
立ち尽くした二人の周りを、ラキスは、いつまでも優しく飛び続  
けているのだった。

### 63・祝祭（後書き）

ついに、正式な求愛をしたエシユタンド。  
そしてその想いに空はどうするのか。  
これからの二人にも注目です！



## 64・急転(前書き)

大変長らくお待たせしました！

いつも楽しみにしてくださっている読者様、本当にありがとうございます。

目が覚めて、最初に思い出したのは、昨夜のこと。

楽しい村人たちの祝祭と、悲しいまでに美しかった、ラキスの光。そして、切なくてたまらなかった、二度目のキス。

「エシユタンド……」

昨日、お休みを言った時には、確かに部屋にいたけれど、朝の爽やかな空気が立ち込める今、空は一人で寝台にいた。

近づいたのに、遠ざかっていく。そんな自分たちの関係に、空がため息をついた、その時。

扉が静かに叩かれて、顔を出したのは、エマナだった。

「あ、おはよう、エマナ。昨日は……」

言いかけた空は、お辞儀をしたエマナの目が、赤く腫れていることに気づいた。

「どっ、どうしたの、それ。何か……あ、もしかして、昨日クガルさんと何かあったの？」

あわてて訊ねて、そういえば、帰りの馬車では誰も口を聞かなかったことを思い出した。

もう夜も遅かったし、疲れたのだろうと思って、大して気にも留めていなかったのだ。何より自分たちが、話をするような心境じゃなかったから。

「いえ……何も。ただちよつと寝不足で」

ごまかすようなエマナの笑顔は、明らかにいつもと違っていて。空は近寄って、その手を握った。

「ただの寝不足なんて顔じゃないよ！お願い、何があったのか教えて？　こんなエマナ、心配で見られないよ」

言い募る空に、エマナは戸惑ったように瞳をそらした。

「で、でも……姫君にそのようなことを申し上げては」  
迷うようなエマナの視線を、空は必死で捉える。

「エマナ……クガルさんのこと、好きなんだよね？」

今まで、エマナ本人の口からは聞いたことがなかったけれど、彼女がこれだけ心を痛めるような出来事なんて、他には想像がつかなくて。

空は思わず訊ねていた。

途端に、エマナが瞳を大きく見開いて、戸惑ったような顔をした。答えは、聞かずともわかっている。

それぐらい、誰の目にも、エマナがどれだけ彼を想っているかはあきららかだったから。

すぐに瞳をそらしたエマナに近づいて、空は口を開く。

「もしも辛いなら……話したくないなら、聞かないけど　あたしに話すことで少しでも楽になれるなら、言っただけいいんだ。

ねえ、あたしのこと、姫だなんて思わないで。あたしは、エマナのこと、友達だっと思ってる！

この世界に来て、初めてできた、大切な友達……だから、できることなら、何でも話してほしいの！」

見つめた先で、亜麻色の瞳は、うるうる揺らめいて、堪えていたのである。涙を落とした。

「姫君　私、私……！」

飛びついてきたエマナの肩を、空は優しく受け止めた。

落ち着いてきたエマナが話し始めたのは、昨夜の出来事だった。

「そう、それで殿下と姫君が、踊りをおやめになって、丘へ行かれた後すぐに　クガル様も踊りの輪から外れようと言われて……」

私も勿論従いました。そして、殿下と姫君のお邪魔にならないぎりぎりの距離で、私たちはお待ちしていたのです。

クガル様は、それまで村人の中で踊っておられていた時とは違って、静かに立っておられました。それは、あの方が、殿下をすぐに

お守りできるように、注意をはらっておられたからで

私は不服などなかったんです。でも……夢のような時間を過ごして、きつと、浮かれてしまったんですわ」

そこまで話して、エマナはまた顔をゆがめる。心配そうに見つめる空の前で、なんとか気持ちを落ち着けたのか、エマナは再び口を開いた。

「あの時　　姫君もご覧になったでしょう？　今年、最初のラキスを」

悲しそうな笑顔で、訊ねられて、空も複雑な気分で頷く。

空の気持ちを知らぬエマナも、瞳をかげらせて、自分の両手を握った。

「森の中を舞うラキスの光が……本当に綺麗で、私、夢を見てしまったんです。クガル様に、自分の気持ちが届くのではないかという、そんな馬鹿な夢を」

「じゃ、じゃあ、もしかしてエマナ　　瞳を見開いた空に、エマナは悲しげに頷いた。

「私、クガル様に伝えてしまったんです。もう、ずっと……お慕いしていたこと。私の心には、クガル様しか、おられないということ」

そこまで言ったエマナの瞳からは、静かに涙が零れ落ちた。きつと、夜通しこうやって、泣いていたんだろうと思うと、空は何とも言えない気持ちになった。

「それで、クガルさんは何て……？」

気遣いながらの空の質問に、エマナはそつと笑って、首を振る。

「私の気持ちに、応えることはできないと　　あの方は、誰ともお付き合いするつもりはないと、きっぱり拒否なさいました」

「そんな　　！」

信じられないような空に、亜麻色の瞳が切なげに揺らいだ。そして、エマナは遠くをぼんやりと見やったのだ。

「本当は、私知っていたんです。クガル様には　　もう、他に誰か、

心に決めたお方がおられることを。ずっと以前、見てしまったんです。肌身離さず身につけておられる首飾りを、大切そうに握っておられたところを……きっとあれは、どなたか大切な女性からの贈り物なのですね。そのお方を、クガル様はずっと想っておられる。私、知っていたのに……どうして、あんなに愚かなことを……」  
耐え切れないように両手で顔を覆って泣き出したエマナを、そつと抱きしめて、空は信じられない気持ちでいた。

エマナがなんとか落ち着いた後、部屋を出て行ってからも、空は複雑な気分から抜け出せなかった。

あのクガルさんに、本当にそんな女性がいるのだろうか。だから、エマナの告白を断つたっていうの……？

いつも優しく、笑顔をやささない彼の態度からすれば、エマナのこと好意的に見てくれているとばかり考えていたのに。

忘れられない女性、そんな人がいるのならば、もともと優しくなんてしなければいいのに。

腹立たしく、そんなことまで考えてしまう自分に気づいて、空はため息をついた。

そんなこと言える資格、あたしにはないよね……。

だって、クガルさんと同じくらい、いや、彼よりもひどいことを自分はしているのかもしれない。

エシユタンドのことが好き。その気持ちは変わらない。

だけど、彼の求愛に、答えることができるのか　そう聞かれたら、素直に頷けないのだ。

何も考えずに頷けるほど、軽い選択ではない。

彼の求愛を受け入れるということは、このままこの世界で暮らすということ　それはそのまま、自分が育ってきた世界を、家族を、友人を、全て……捨てることにも等しいのだから。

そんな覚悟なんて、自分にはない。本当なら、今すぐに帰りたいくらい、みんなに会いたくて仕方ない。自分の世界が懐かしくて、恋しくてたまらない。

それを思いとどまっているのは、ただ、エシユタンドが好きだから。それだけの理由しかないのだ。

どれぐらい好きかなんて、わからない。もう、わからないほどに自分の心には彼がいる。まるで、当たり前のように、一緒にいるのが自然なほどに、心地よくて……。

でも。  
知らず眉間に寄っていた皺を手で押さえて、空は瞳を伏せた。

そうだ、一番ずるいのはあたし。

エシユタンドは、こんなに幼くて、自分自身のことすら決められないでいる自分なんかよりも、遥かに大人だ。

こんな自分をそこまで好きだと言ってくれることが、申し訳なくなるほどに。

もしも自分が婚約者である立場も何もかも捨てて、帰りたいと言ったとしても、その後のことは自分に任せるだなんて。

切なくて、切なくて、空は思わず口元を押さえていた。

零れ落ちる涙は止められないけれど、それでもせめて、嗚咽だけはもらしたくなかった。

きつと辛いのは彼のほうなのに、自分がこんな風に泣くなんて。誰にも知られてはいけないのだから……。

必死で堪えて、静かに肩を震わせ始めた、空の耳に、突然廊下を駆けてくる足音が届いた。

あわてて涙を拭いて、座り込んでいた寝台から、身を起こした、その時。

「大変でございます！ 姫君　どうか、今すぐ謁見の間へお越しを！ 原書が……紛失していた原書が見つかったとのことでございますー！」

大きく響いたのは、エシユタンド付き私兵隊、副隊長であるルス

トの声だった。急いで開けた扉の前で、ルストは膝をついていた。「ほっ、本当　？　どこから……どこで見つけたの？」  
喜びの色を浮かべた空の顔を、青ざめた顔で見上げたルストは、あせったように立ち上がった。

「それが……隊長の　クガル隊長の宮からだ　！」

「何、ですって　？」

張り詰めた空の声は、静かな廊下に響き渡った。

\*

辿り着いた謁見の間に、あわてて飛び込んだ空を迎えたのは、エシユタンドだった。

正装ではない、白い平服である彼の姿で、どれほど急なことだったのかがわかる。

「エシユタンド！　一体、どういうことなの？」

息を切らしながら訊ねる空の肩を、落ち着かせるようにエシユタンドが支えた。

「私も今聞いたばかりで、詳細はまだだ。これから、父上のお言葉がある」

話しながら、並ぶ王族の位置へと連れられて、空は動揺したまま、前を向いた。

同時に、正面の段上に据えられた金の椅子に、王と、続いて王妃が現れた。ざわめいていた広間の空気が、一気に静まる。

注目を集めたまま、王はマントをはらって、椅子に腰掛けた。

「皆に集まってもらったことは、他でもない　　今までどうしてもわからなかった、古き伝承の原書の所在がわかった為である」

王の言葉に、空は息を呑んで、いつもと変わらぬ穏やかな灰褐色の瞳を見つめた。

「あれからずっと王宮内に留まらず、このミデイス中、果ては他国にまで搜索の手を広げていたのだが　　収穫祭を終えたこの時期に、意外なことに、この王宮の……しかも、中枢にも近い場所で、原書が発見される運びとなった」

そこでゆつくりと立ち上がった王が、一瞬だけエシュタンドを見やり、側に控えていた家来に片手で指示をした。

「今朝方、見つかったばかりの原書があったのは　　驚くべきことに、第三王子付き私兵隊の、隊長に許された宮の一室であったそう  
だ。」

ゆえに、ただちに宮の主人であるクガルを捕え、ここにいる全員の前で、喚問に処することとした！

広間中に響き渡るほどの鋭い声で、王が言い放った瞬間、大扉が開き、数人の兵に引き立てられたクガルが入ってきた。

栗色のやわらかな髪は少し乱れ、優しい瞳は、いつもとは違う、苦痛の色を見せていた。

彼の両手が後ろ手に縛られているのを見て、空は思わず両手を口に当てていた。

「クガルさん！　そんな　　」

叫んだ空の肩を、エシュタンドが抱く。

見上げた藍色の瞳は、冷静な色をしている。それでも、きつく引き結ばれた唇が白くなっていて、空はそのまま口をつぐんだ。

皆の前に連れられ、膝をつかされたクガルは、エシュタンドのほうを見つめている。

まるで、その瞳が、自分の不覚を詫びてでもいるかのようで、空は胸が痛むのを感じた。



もちろん、彼が犯人だなんて、信じていない。こんなこと、きつと何かの間違いなんだから　そう、自分を落ち着かせようとして、空はふと目を上げる。

晩餐会に顔を出さなかった王妃が、余裕の顔で座っている。彼女がこの場にいることが、何か嫌な予感を生む気がした。

「クガルよ、この王の名において、もう一度訊ねる。原書を盗み出したのは、お前か」

緊迫した広間の中に響くのは、王の声。

そして、それに答えるのは、静かなクガルの声のみだった。

「恐れながら、国王陛下　先ほども申し上げた通り、私ではありません。原書がなぜ、私の宮にあったのかも、何一つ身に覚えはなく、知る由もなかったことで……」

同じ内容を、落ち着いて繰り返す彼に、苛立ったように、王が眉を寄せた。

「しかし、それではなぜお前の宮で発見されるのだ！　一切関わらないというのは、あまりに不自然な言い分ではないのか」

縛られたままでも、クガルはいつもの穏やかな表情は崩していない。

嘘を言っていないからこそなのだろう、と空は思っても、逆にそれが国王には飄々とした態度に見えてしまうのかもしれない。

「以前、私兵隊宿舎も含め、各隊長の宮全てを搜索した時には何も見つからなかった。それが、なぜ今見つかるのだ　お前がどこかに隠していたのではないかと考えても、仕方がなからう」

「いいえ、私はそのようなことは……」

延々と続くかと思われた二人のやりとりに、割って入ったのは、高い声だった。

「その時は、エシュタンド王子の手による者たちで、搜索をしたそうでしたわね、国王陛下？」

王妃の参入に、王も片眉を上げて、見返した。

「それは、そうだったが」

「それが、今回は、別の者たちで、搜索をし直した。そして、めでたく原書を発見した。それは、今だからこそ、できたことかもしれないませんわ」

手にした扇で、口元を覆いながらも、王妃の声音には、笑みが感じられる。

彼女は決して、自分たちのことを認めたくわけでも、あきらめたわけでもないのだということが、空にも一瞬でわかるほどの、冷たい声だった。

「どういう意味だ、王妃よ」

瞳を鋭くして、王が訊ねる。それでも余裕を失わずに、王妃は瞳を細めた。

「いいえ。ただ、可能性を述べているだけでございますわ。もちろん、恐ろしい、考えたくもないような、可能性ですけれど……」

持って回ったような言い方に、空はずっと感じていた嫌な予感が、大きく膨らんでいくのがわかった。

「それは、私を疑っている、ということですか 母上」

硬い、感情のこもらない声を発したのは、沈黙を守っていたエシユタンドだったのだ。

## 64・急転（後書き）

さて、切ない二度目のキスから、事態は急転。  
クガルの危機！　そしてエシユタンドまでが……！  
続きがどうなるのか、ぜひお楽しみに。

## 65・対立(前書き)

大変お待たせいたしました。

王妃とエシュタンド、いよいよ正面切って対立です！

## 65・対立

エシユタンドの問いに、似つかわしくないほどの甲高い笑い声で、王妃は答えた。

その場の誰もが、二人に目線を向けている。

空は両手を握り締めて、嫌な緊張に全身が包まれていくのを感じていた。

「まあ、自分ではつきりとそう言ってもらえたら　私も答えやすいわね」

「リダネア！」

止める王の声にも耳を貸さずに、王妃は微笑んだ。

「そうです。結論をはつきりと言わせていただくわ。このような長期間に渡って、原書を盗み出すという大罪を隠し通すためには、誰かの協力が不可欠。

そして、彼が誰の私兵隊長であったかを考えると、その人物は明白でしょう　エシユタンド、もとより、あなたのいた場面で原書は無くなった。

それが何よりの証拠ではありませんか？　いいえ、その騒動こそが、原書を盗み出すための虚言であったかもしれないわ。

あの場にいたのは、全員があなたに関連する者ばかり。捏造することなんて、簡単ではなくて？」

「母上　！」

叫ばれた声は、エカルドのものだった。声も出さずに唇を噛み締めて、王妃を見上げていたエシユタンドも、驚いたようにエカルドを見やった。

「あんまりです、母上！　そのような……あの時、僕からも申し上げたではありませんか！　兄上は、原因不明の炎に襲われたのだと。そして、それは、何者かの術によるもので　」

エカルドの言葉にも、まるで予想でもしていたかのように、王妃

は表情を動かさなかった。

「その炎が彼自身の手によるものではない、という証拠もまだないのですよ？　実際、国王陛下がいくら搜索を命じられても、そのような高位の術者で、怪しい者を見つけることもできなかった。だからこそ、その場にいた人物を疑うのも、自然な流れではないこと？」

「母上……！」

あまりの冷静な態度に、エカルドは青ざめて、言葉を失ったようだった。その様子を確認してから、王妃はまたエシユタンドに視線を戻した。

「とにかく、真犯人でも見つけ出せるというのなら話は別だけれど、そうでない限り、原書が見つかったのはまぎれもないあなたの私兵隊、隊長の宮。」

一番疑われるべきが自分であるのは……あなたも認めるわね？

エシユタンド。それとも　自分には何も関わりのないことだと、彼を切り捨てる？」

本当に、本気でエシユタンドに刃を向けたのだ　王妃の鋭い言葉で、空は背筋が冷たくなるような気がした。

婚約者として認められた自分を狙うのでもなく、まっすぐに剥きだしにされた彼への敵意に、彼女が徹底的にエシユタンドを王座につかすまいとしていることがわかったのだ。

「エシユタンド……！」

思わず名を呼んだ不安げな空の声に、エシユタンドは凍り付いていたような顔をわずかに向けて、口元だけ微笑んだ。

「大丈夫だ」

短く伝えられた言葉にも、安心できるわけはなかった。

エシユタンドは空の見つめる前で、王妃をきつく見上げた。

「母上の仰りたいことはわかりました　ただ、私も黙って疑われているわけにはいきません。もちろん、クガルとて同じこと。それに……今回再調査をした者たちの中に、怪しい手のかかった者がいないとも限らない。正式な婚約者を得た私を陥れるために、誰かが

仕組んだ罫であるという可能性だつて、当然ありますしね。母上

「はつきりとそう言つて、微笑んですらみせたエシユタンドに、王妃は水色の瞳を見てわかるほどに燃やした。」

「まあ待て、二人とも。そのような言い争いは、埒が明かぬものだ。大体、王子であるエシユタンドが自ら原書を盗み出して、何の得となるというのだ。」

王位継承者である王子が、何のために自国の宝を危険にさらすことがある。

そのような物騒な可能性は、みだりに口にするものではない、リダネアよ

「咳払いをして、止めた王に、王妃はたちまち頬を紅潮させた。」

「しかし、だからこそ私はこの国を思つて 陛下！」

興奮した王妃を、王は抑えるように視線をやった。

「お前の心は、有難く思っている。とにかく、クガルは捕らえおき、喚問を続けることとし、真実が明らかになるまではこの騒ぎは保留とする。現在対処すべき問題は、他にも山積みなのだからな。よいな、二人とも。まずさしあたっては、エシユタンドの正式な婚約式についてだが……」

話しながら、クガルを押さえていた兵たちに手で合図をした王は、切り替えるようにエシユタンドを見下ろした。

クガルが扉から連れ出されていくのを見ながらも、空はいきなりの言葉に、思わず瞳を瞬かせていた。

「こ、婚約式？」

思いのほか大きくなった空の声を聞きとめたのか、王が頷いた。その顔は、わずかに笑みを浮かべているようにも見える。

「そうだ。本格的な雪の季節が来る前に、お前たちの婚約式を済ませなくてはならん。王位継承者である王子の、正式な婚約者が決まったのだ。ミデイスの国中をあげて祝い、更には他国にもふれを出すのが決まりだ。招待客を集めて、盛大に自慢の婚約者を披露しな

くてはな」

予想外の話に、固まっていた空よりも先に、言葉を発したのは王妃だった。

耐えられない、というように立ち上がった彼女は、今度こそ真っ赤な顔をしていた。

「私は認めませんわ！　このような騒ぎが持ち上がっている今、正式な婚約式だなどと　しかも、王子の疑いすら晴れないうちに、その婚約者を他国に披露するなんて、危険極まりない行為です！」

「リダネア」

今度こそ困ったように、息を吐いて呼びかけた王に続いたのは、意外なことにエシュタンドだった。

「私も、婚約式は少し待っていただきたいのですが」

その声に驚いたのは、王だけではなかった。王妃も、まさか、というように、水色の瞳を大きく見開いている。

空も、エシュタンドの意図がわからずに、不安げに見上げた。

「原書の問題もありますし　それに何より、現在最優先させるべきは、森の危機、そうではありませんか？　父上」

「し、しかし」

戸惑ったような王に、エシュタンドは藍色の瞳をまっすぐに向けた。既に落ち着いた色を取り戻した、強い瞳を。

「森が、ひいては国が傾いては、祝い事どころではないでしょう。婚約式はいつでもできる。」

雪の季節が来る前に、森の危機に全力で対処するのが、我ら王族に託された義務だと思いますが」

エシュタンドのしつかりと響いた声に、王も、王妃も言葉を失ったように、口をつぐんだのだった。



部屋に戻った空は、大きなため息を吐き出して、寝台に腰掛けた。考えることが次から次に出てきて、知らず額を押さえってしまう。

クガルさんが捕まったことだけでも、大変なことなのに……。それだけでは済まず、その真犯人がエシュタンドであるという疑いまでかけられた上に、婚約式なんてものまで出てくるとは。もう、頭がパンクしそうだよ……」

天上を仰ぎながら呟いた空は、自然と壁にかけられたタペストリーに目をやった。

その奥にある本棚 原書の抜粋本とやらが保管されている場所であり、今は更に、他にも大事な物が置かれている。まだ、エシュタンドと空しか知らないもの、それは……。

寝台から立ち上がり、タペストリーの前まで歩み寄った空は、天上から下がっていた飾り紐を引いた。

静かに現れた本棚の、本の奥に隠してある木箱を取り出して、そっと開けてみる。

あの東の聖殿で見た時と少しも変わらぬ、厳粛なまでの輝きを放つのは二つの腕輪だった。

金と銀の異なる光に、それぞれの役割が重なる気がして、空は思わず眉を寄せた。

自分の心が、何一つ決められないでいる間にも、事態はどんどん進んでいってしまう……。

あせりと困惑、それが今の空の正直な気持ちだった。

エシュタンドの説得もあって、婚約式そのものは延期されるようだったが、それでも周囲は既に空を婚約者として認めている。

このままこの世界にいれば、いずれは婚約式も済ませ、婚姻の儀がやってくるのだ。

エシユタンドの妻となり、この国の王妃になる日が来るかもしれないなんて 考えただけでも恐ろしくなる気がした。

彼が好きだという気持ちには、むしろ強まるばかりだけれど……それでも、決断を下す勇氣も覚悟も、どうしたって今の自分にはない。それなのに 対処すべき問題は山積みで、何より重要なのは森の危機だということも、忘れるわけにはいなくて。

震え出しそうな手で握った木箱の中、横たわる二対の腕輪が、自分を試しているような感覚にすら陥りそうになる。

「……どうしたら、いいって言うの？」

開けられた窓からふと吹き込んだ風に、深緑の香りが混ざったように思えて、思わず空は固く瞳を閉じた。

「どうしましたか 姫君」

耳元でかけられた声に、空は弾かれたように振り返った。その勢いで落とした木箱から、高い金属音を立てて、腕輪が床に転がる。

まるでスローモーションのように見えた動きは、白くしなやかな手で止められたのだった。

「どうぞ」

細い手に握った腕輪を、微笑みながら空に差し出したのは、エカルド王子だったのだ。

「ど、どうも」

動揺を隠せないまま腕輪を受け取った空は、あわてて木箱に収めた。

「驚かせてしまったようですね、一応、何度もお声はおかけしたんですが……」

エカルドが言う間にも、空は木箱を本棚に戻して、タペストリー

を下ろした。

あきらかに不自然だったであろう仕草にも、エカルドは触れはしなかった。

「ど、どうしたんですか？ 何か」

沈黙がなぜか不安で、空は無理に作った笑顔を向ける。

エカルドは口元だけで微笑んだものの、すぐに瞳をかげらせた。

「ごめんなさい……本当に」

暗い声音で告げられて、空の顔から笑みが消える。彼が謝っているのが、先ほどのエシユタンドへの嫌疑のことだとわかって、空はあわててエカルドに近寄った。

「そんな 王子が謝ることじゃ……」

言いかけて、これでは誰が悪いと言っているようなものだと気づく。

自分の母親と兄が、目に見えて対立してしまったのだから、間に入ったエカルドとしては、いたたまれないのだろう。それがわかって、空は何も言えなくなった。

俯いてしまった空に、エカルドは申し訳なさそうに視線をやった。「わかって、いるんです 母は、どうしても僕に王位をと……強く望みすぎるあまりに、兄上から、王位継承権を取り上げるつもりでいる……」。

でも、僕は 僕にはそんなつもりは毛頭ない。むしろ、尊敬し、敬愛する兄上こそが、王位につくべきだと……僕はそう望んでいるんです。

だって僕には、王になんてなる器はないんだ。兄上のように……なれっこないんです！ わかって くれますか、ねえ、姫君……！

語りながら、水色の瞳に強い色を浮かべて、熱を帯びたように声を荒げたエカルドを、空は瞳を見開いたまま、見つめていた。

必死な様子で、空の手を握るエカルドは、今まで見たことがないほど、深刻な顔をしていた。

「……ええ、わかります。だから、そんなに悲しまないで　王子」  
目の前の少年が、まるで救いを求めているようにさえ見えて、空は思わずエカルドの手を強く握り返した。空の言葉に、潤んだ瞳を上げたエカルドは、いつもの悠然とした態度が嘘のように思えるほど、幼く、頼りない　末の弟の顔をしていた。

「姫君……！」

感極まったように抱きついてきたエカルドを、空は少しためらいながらも受け止めた。

「ありがとう　僕のこと、わかってくれて……」

空の髪に顔を埋めるようにして、囁いたエカルドに、そのまま頬に口付けされて、空は今度こそ固まった。

無意識に赤くなつた空の顔を、明るい瞳で見つめたエカルドは、嬉しそうに笑う。

「僕は、お二人のこと応援してますから……できる限りの協力をお約束します！　だから、姫君も　どうかお気を落とさずに」

金のゆるやかな巻き髪が、風に舞い上がって揺れるさまさえも、空のぼんやりした目には映っていない。それに気づいているのかどうなのか、エカルドはいつもの艶やかな笑みを残して、部屋を出て行くのだった。

## 65・対立（後書き）

思いがけない場面に現れたエカルド、彼の本意は一体何なのでしょうか。

これからの展開も、どうぞお楽しみに。

## 66・苦痛（前書き）

なんと、ほぼ二ヶ月ぶりの更新になってしまいました。

大変長らく続きを待っていたいただいた読者様には、本当に申し訳ありませんでした。

エカルドが出て行ってからすぐに扉が開けられて、振り返った空は、複雑な色を浮かべた藍色の瞳を見つけた。

「エシユタンド……」

空が何か言うより先に、エシユタンドは曖昧に微笑んだ。

「聞こえてた、よね？」

それとも、見ていたのか、と聞くべきなのか。思い出すだけで赤らんでくる頬を押さえた空の頭に、エシユタンドは優しく触れた。

「あいつのことを 思った以上に苦しませていたんだな……私は兄だというのに、情けないことだ」

自嘲めいた微笑みに、空は眉を寄せる。

「そんな……だって、誰のせいでもないよ。色々な思いがあつて、立場があつて、それぞれに悩んだりするんだもん。仕方、ないんだよ。ねえ、エシユタンド」

自分の言葉では、救いになんてならないのはわかっている。それでも言わずにいらなくて、空は必死に見上げた。

「だから、だから……!!」

いつの間にか着替えられていたエシユタンドの正装を掴んで、空は藍色の瞳を見つめた。ふと和らいだその色に、少しほっとする。

「ありがとう。お前は 優しいな」

二度目の感謝の言葉 エカルドにも言われたその言葉を、空は何とも言えない気持ちで聞いていた。

そんなことない。優しくなんて、ないよ……。

喉まで出かけたそんな答えを、空は飲み込んだ。

エシユタンドが、気持ちを切り替えたように笑ったからだった。

「父上に クガルへの面会を申し出たが、断られた。しばらく彼との接触は控えるべきだと……事が明らかになるまでは、会わせないつもりらしい」

冷静な声とは裏腹に、エシユタンドの表情は固くなる。

「父上は、私への嫌疑を気にかけてのことかもしれないが、これでは状況は悪くなる一方だな」

金の髪を乱暴にかきあげる仕草は、苛立っている時の彼のくせだ。辛い彼の心が手に取るようにわかって、空は唇を噛み締めた。

「それでも……大丈夫だよな？　クガルさん、このまま犯人にされたままなんてことは」

渦巻いてくる不安を打ち消したくて、声に出してしまっただけから、空はあわてて言葉を止めた。

今、一番彼を心配しているのはエシユタンドだろうに。片腕ともいえるほどの、大切な存在なのだから。

「心配するな。そんなことは絶対に阻止してみせる」  
空の髪をくしゃりとかきまぜて、エシユタンドは微笑む。

その笑顔を複雑な瞳で見つめ返した空に、エシユタンドが何かを思い出したような顔をした。

「そつだ、ソラ。これを」  
上着の中からエシユタンドが取り出したのは、金色のチョーカーだった。

何事かと瞳を瞬かせた空は、中央に施された丸い金属部分が、何かをはめ込むような形になっていることに気づいた。本来なら、そこにあるはずの宝石がないというべきか。

「これは……？」

空の視線に、エシユタンドは笑う。そして自分の衣装の胸元から皮袋を取り出し、その中から緑の石を取り出したのだ。空が見つめる前で、エシユタンドが丸い部分にはめこんだもの。それは、言わずとした想緑珠だった。

「作らせていたものが、やっと出来上がったんだ。これなら、皮袋に入れるよりも安心だろう」

そう言った彼は、空の首にチョーカーをはめてくれる。そして同じ形のチョーカーをもう一つ取り出して、空に片手を差し伸べた。



「お前が持っている石を出してくれるか？」

素直に空が渡した石をはめこんだチョーカーを、エシユタンドは自分で首元に付けて笑った。

「さあ、これでいつでも身につけていられるだろう」

どちらの石にも何か違いがあるわけではないけれど、なぜだかお互いの石を交換したような、不思議な照れくささを感じる。

そんな空の心を見透かしたかのように、エシユタンドはいたずらっぽく瞳を向けてきた。

「それに お前に何も贈ったことがないからな。想緑珠ならば、最高の守護石にもなるだろう。婚約式は延期だが、私の気持ちの証だと思つて受け取ってくれ」

いつもの魅力的な藍色の瞳で見つめられ、空は思わず赤くなる。その頬に素早く口付けたエシユタンドは、一瞬だけ空を深く見つめてから、何事もなかったように微笑んだ。

「石のことは、まだ誰にも言わなくていい。もちろん腕輪のこともだ。話せば、お前に危険が及ぶ可能性もあるからな。ただの宝石だと、誰かに聞かれたらそう答えておけ」

相変わらず全てを先回りしたような彼の言葉。空のことを何よりも考えてくれる彼の心に、空は何も言えなくなる。そしてまた部屋を出て行ったエシユタンドの背中を、空は複雑な瞳で見つめているのだった。

どうしようもない思いをもてあまして、部屋を出た空がやってきたのは、エシユタンドの宮の裏庭だった。

以前エーデレードと初めて会話を交わすことになった、あの場所。あの時にエーデレードがちらりともらした言葉を、今になって空は思い出していた。

この国で生きていくのは、難しいかもしれない。

彼がそう言ったのは、まぎれもない空を指してのことだったのだ。あの時の口調では、彼自身も今までに色々と思うことがあったのだろう。今なら、なぜ自分がそう言われたのか、理解できるような気がする。

自分を取り巻く状況が、どんどん変わって行って、迫られた選択の重さと、この国で生きる人々の想いが、空にため息をつかせるのだった。

胸元のチョーカーの、今は何の変哲もないただの石である想緑珠に、空はそつと触れる。

何も言わなくていい、だなんて……。

本当にエシユタンドは、空を巻き込むのを最小限に抑えようとしているようだった。

このチョーカーも、全ては空を守るため　石の力を考えてのことだ。

あんな風に言っただけでも、婚約式のこと、決して空に無理強いはさせないようにしてくれている。

彼の想いの深さに、胸が締め付けられるような気がした。

本当に、このままでいいのだろうか。

額を押さえて、息をついた空は、ふと吹いてきた風に視線を上げた。

誰もいない裏庭　そこに見つけた、見慣れた人影に空は立ち上がっていた。

「エマナ……？」

小さな彼女がより一層背を丸めて、何かを探しているように見える。

籠を片手に足元の草を掻き分け、額に落ちる一筋の亜麻色の髪を邪魔そうにはらいのけていた。

ゆっくりと近づいて、空が後ろから声をかけようとした、その瞬間だった。

思う物が見つからないのか、エマナが苛立ったように両手を土に打ちつけたのだ。

「クガル様……！」

背中を震わせて、耐え切れないうちに小さく呟いた彼女の声が、どうしようもない苦しみと悲しみに満ちているように聞こえて。一瞬、空は歩みを止める。

エマナもクガルのことを知ってしまったのだと、唇を噛んで思い出すのは、泣きじゃくっていた彼女。

そうだ　どれほどに心配なことだろう。誰よりも大切な人が、窮地に立たされているのだ。

何もできない歯がゆさと、いてもたってもいられないその気持ちは、空にも理解できた。

声をかけられずに立ち止まった空の気配を感じたのか、エマナがそつと振り返る。

戸惑ったような空の瞳に、エマナは少ししてぎこちない笑みを浮かべた。

「あの　薬草を、探しておりましたの。以前、クガル様に教えていただいたものなんですけど、とても滋養のある、珍しい薬草で……。どうしても、クガル様に差し入れしたくて探していたんですが、うまく見つけることができなくて」

空が訊ねるよりも先に、言い訳のように口にしたエマナは、土のついた自分の衣装をはらった。

「だめですわね、私……こんな時にも、何のお役にも立てないんですもの」

自嘲めいた笑みをもらして、エマナは立ち上がる。何も言えないでいる空の隣で、エマナは気を取り直したように落ちていた籠を拾った。

「やつぱり、あきらめますわ。私などが差し入れなど　許してもらえないかもしれませんし。それに……かえって、クガル様にもご迷惑に　」

言いかけたエマナの悲しそうな顔を見ていられなくて、空はエマナの小さな手に触れた。

「そんなことない……」

「え？」

小さく呟いた空の声に、エマナが怪訝そうな顔をする。亜麻色の大きな瞳をしつかり見据えて、空はもう一度口を開いた。

「そんなことないよ！ エマナが　これだけ想って、してくれることだもん。それが迷惑だなんてこと、絶対はない！」

クガルの心の内はわからない。それでも、空は叫んでいたのだ。

「自分を想ってくれる人を……迷惑に思う人なんていないよ！」

「……姫君」

たちまち崩れるエマナの表情。あふれ出す涙を、空は優しく拭いて頷いた。

「あたしも一緒に探すよ、その薬草　だから、あきらめないで！　ねっ？」

笑いかけた空に、エマナは感極まったように俯いた。

「……はい！」

顔を上げた時には、潤んだ瞳のまま、エマナは明るい笑顔を見せたのだった。

「どうして　？　差し入れも許されないうって、どういふことなの？」

空の憤慨したような問いに、守護兵は困ったような顔で頭を掻いた。

「申し訳ございません、姫君。面会も、そういった物のやりとりも、固く禁じられておりますので」

「そんな……だって、ただの薬草だよ？　ずっと牢にいる彼を心配

して、ただ元気になってもらおうと」

更に言い募る空に、兵は困ったように仲間と顔を合わせる。

「しかし、陛下の命令でして 我々にはどうしようも……」

「でも……！」

声を荒げそうになる空の腕を引いたのは、他でもないエマナだった。

二人で探し続けて、やっと見つけた薬草が入った籠を手にした彼女が、空にそつと首を振る。

「姫君、もういいんです。無理なことはわかっていましたから」

遠慮がちに笑うエマナ、その瞳が本当には笑っていないのは誰の目にもあきらかだ。

空は余計に胸が痛んで、兵たちを厳しく見上げた。

「本当に、申し訳ございません……」

すまなさそうに頭を下げられて、空はあきらめきれないまま、深いため息をついた。

牢のある離宮、以前には魔のモノすら捕らえられていた場所である。そんなところに閉じ込められているクガルのも、精一杯の気持ちを込めた差し入れさえも許されないエマナのこと、不憫でならなくて、それでも自分にはどうすることもできないことが一番辛かった。

「 わかった。じゃあ、エマナ……行こう」

ようやく言った空の隣でエマナは頷いて、ふと後ろ髪を引かれるように立ち止まる。

兵を見上げたエマナの瞳には、空よりも深い苦渋がにじんで見えた。

「あの……クガル様は、きちんとお食事はなされているのでしょうか。ご無事で いらつしやるのですよね？」

エマナの震えるような声に、兵は戸惑いながらも頷いた。

「はい。まだ罪人だと決まったわけでもありませんし……最低限の食事やお体のことは、陛下からも申し付かっております。あの、で

すからどうぞ　そんなに心配なさらずに」

か細い彼女のすがるような表情に同情したのか、兵はついにそう言ってくれた。無骨ながらも本心からそう告げているのがわかったのか、エマナも少しだけ安心したように頷いたのだった。

「あの　じゃあ、せめて伝言だけでも許されない？」

兵とエマナのやりとりを見守っていた空は、ふと思いついたように訊ねる。

「は、伝言、でございますか？」

思いがけない言葉だったのか、兵は驚いたように空を見る。その目線に、空は明るく笑ってみせた。

「そう。面会も物の差し入れも許されないなら、せめて言葉だけでも伝えてほしいの。それぐらいなら、許してくれるでしょう？」

「は、はあ　」

戸惑った様子の兵が答えると同時に、周りの仲間たちが彼の腕を引く。

おい、とあせったように止める仲間には彼が振り向く前に、空はしっかりと兵の手を握った。

「ありがとう！　じゃあ、こう伝えて　私もエシユタンドも、それからあなたを心から想っている女性ひとも、無実を信じていますって。だから、心を強く持って、絶対にくじけないでいて下さいって

お願いしたからね！」

まっすぐに兵の薄茶の瞳を覗きこんで笑った空。兵はその強い気持ちに引きずられるように、ただ首を縦に振った。

「姫君……」

何ともいえないような、やわらかな目で微笑んだエマナの肩に優しく触れて、空はその場を去っていく。

そして離宮から遠ざかった林の入り口で、空は思わず足を止めた。大きな木にその背を預けて、こちらを見ている長身の人物　その優しい藍色の瞳に、空は大きく瞳を見開いた。

「エシユタンド……どうしてここに」

問いかけようとした空に、エシユタンドはいたはずらっぽく笑った。  
「それは私の台詞だな。やはりお前には驚かされる」

そのまま空の黒髪をまぶしそうに見つめて撫でた彼は、あわてて頭をたれるエマナにも目をやった。

「薬草、か 残念だったな」

直接声をかけられて、エマナは恐縮したように更に頭を下げた。

「と、とんでもございません……あの、私ごときのお願いに、姫君まで付いて来ていただいたいてしまつて……かえつてご迷惑を……」

両腕で籠を抱きしめながら、申し訳なさそうに小さな声で詫びるエマナに、可笑しそうにエシユタンドは首を振った。

「いや、ソラがやりたくてしたことだ。別に詫びの必要もないさ。それに」

そこまで言つてから空を見て、藍色の瞳を細める。その眼差しに、空は思わずどきりとした。

「私が見ただけやきもきして動けぬ間に、どうやらすっかり先を越されてしまつたようだ」

言葉の意味が飲み込めない空の様子がわかつたのか、意味深な笑顔だけ残して、エシユタンドはさつさと歩き出す。既に低くなり始めた太陽が照らす白い衣装の背中を、空はあわてて追いかける。

「ちよつと待つてよ、エシユタンド！ 先を越されたつてどういふ……」

隣に並んだ空に、エシユタンドはただ微笑む。

「深い意味はない。気にするな」

「気にするなつて、またそんなこと言つて……」

「だから、お前には負ける、と言つてるんだ」

「その意味がわからないんだつてば！」

ついには声を出して笑うエシユタンドを、口を尖らせた空が追う。お揃いのチョーカーが、きらりと輝いた。

そんな二人を一瞬あつけにとられたように見送つていたエマナは、やがて胸に抱いた籠を抱えなおして、笑顔になつていく。

「ありがとうございます 姫君」

どうしようもない苦しみが浮かんでいた彼女の顔は、少し明るい光を取り戻したかのように和らいだのだった。



## 66・苦痛（後書き）

辛い状況の中、それでも希望を胸に打開しようとする空とエシユタ  
ンド。

これからの展開も、どうぞお楽しみに！  
続きはできるだけお待たせしないよう、頑張ります。

## 67・異変（前書き）

またまた長い間お待たせしてしまいました。

これからどんどん新展開がありますので、どうぞお楽しみに。

クガルが捕らえられてから何の進展もないまま、三日が過ぎた。

やつきになつて繰り返し返される尋問にも屈さず、彼は無実を訴えつづけているらしい。朝食の後にそう教えてくれたエシユタンドは、どこか得意そうな顔で空を部屋から連れ出した。

「あの……どこに行くの？」

「いいから黙ってついてこい。やっと父上の許可が出たんだ」

にやり、と笑った藍色の瞳に、思わず空は歩みを止める。

「許可つて……何か変なことじゃないでしょうね？」

過去にそんなことを言われて、いきなり婚約やらの運びになったことを思い出したのだ。似たような単語に対する空の無意識の抵抗は、どうやらの外れだったようだ。エシユタンドは一瞬きよとんとした後、可笑しそうに笑った。

「生憎だが、今はそういう楽しい話をしている暇はないさ。前からの私の訴えを、ようやく父上が認めてくださった。見つかった原書を直接見せてもらえることになった、お前も一緒にな」

意外な、それも喜ばしい報告に、空も表情を緩ませた。そのまま、エシユタンドが説明してくれたのは、王自らによって原書の確認が済んだこと。何度調べても特に前と変わった様子はないこと。そしてそのことで、更に原書紛失騒ぎの謎が深まったという経緯だった。王様も、少しはクガルさんの無実をわかってくれたんだろうか。

空の期待も深まる中、二人は王族の間へと到着した。

謁見などを済ませた王が現れたのは、それからしばらく後のことだった。

人払いのされた広い部屋の中、空とエシユタンドは共に膝を折る。

「父上、原書の検分をお許しいただいたこと、大変嬉しく思います」  
エシュタンドの声も少し明るい。王はびくりとも表情を動かさずに、ただ頷いた。

仰々しい手つきで王本人からエシュタンドへと、原書が手渡される。あの書を手にしたのが、もう随分前に感じられて、空は不思議な感慨を覚えていた。

「他にもないお前に原書を確認させるのは、クガルへの嫌疑が晴れたからではない。我々の調べではわからないことが、お前にならわかるかもしれぬと思ったからだ。まずそこところを、心に留めておくように」

釘を刺すような王の言葉にも、エシュタンドは平然と頭を下げた。どうやら予想はしていた言葉だったらしい。

残念な気持ちを抑えられずにいる空の隣で、エシュタンドは大事そうに手にした原書をゆっくりと確認しはじめた。

「どうだ、何か感じることはあるか」  
王の問いは、言うまでもなくエシュタンドの特別な力を意識したものだ、空にもわかる。

真剣にページを捲り、そして原書を持ったまま瞳を閉じていたエシュタンドが深い息を吐いた。

「微かに……本当に微かですが、残り香のようなものを感じます。まぎれもなく、あの時の術によるもの。既に発した人物を辿るには薄すぎますが、それでも原書自体を明確に包んでいるのがわかる

やはり、あの炎は我々に対する目くらましであったのかもしれない。狙われたのは、原書であったといえるのでは……」

エシュタンドの淡々とした指摘に、王は眉間の皺を深めた。  
「そうか　それで、お前は どう思う」

曖昧な訊ね方のように聞こえた言葉、それでも王の意図はエシュタンドに伝わったようだった。

少し考えるようにしてから、藍色の瞳をまっすぐに上げる。

「これから申し上げることは　父上のお耳にだけ入れておいてい

ただきたいのですが……」

声を落としたエシユタンドを、灰褐色の瞳が食い入るように見つけた。

「無論だ。どのようなことでも構わぬ、お前の見解を聞きたい」

真摯な王の視線に満足したように、エシユタンドは口を開いた。

「私は 術を発したのは、このミデイス王国の術者である可能性が高いと思います」

はつきりと伝えられた一言で、王はわずかに瞳を見開いた。

「それは……何故だ」

「はい。あくまで可能性の話ではありますが、原書を狙うのが他国だとは考えにくいからです。まず第一に、王宮の中までも手を伸ばせるような術者が狙ったものが、古き伝承の原書だけであるのはおかしい。父上もご存知の通り、その原書自体には何ら他国の得につながるような情報はない。文化的価値は高くても、この国を狙うには、的外れであるとは思いませんか」

鋭く光る藍色の眼差しを受け止めて、王は思案することごとく、顎に手をやった。

「もしも他国が狙うとするなら、我々王族の命や、財産、または領土につながる直接的なものであったほうが自然です。それに、万が一そのような考えを持つ国があったならば 既に何らかの形で争いは始まっていてもよさそうなものではないかと」

「それは勿論そうだが……しかしそれでは、このミデイス内ならば術者が何か得をするとも ?」

王の洪面に、似つかわしくもないような笑みを浮かべたエシユタンドは、堂々と頷く。

「実際に原書がなくなっただけで得をしたのは、一体誰だと思いですか」  
エシユタンドの言葉に、王はただ言葉をつまらせた。それを見て、空は一気に緊張する。

もしかして、エシユタンド……！

空の予想が的中したかのように、不敵な笑みを口に乘せ、エシユ

タンドは王を見上げたのだ。

「父上もご存知の通り、現在嫌疑をかけられているのは、他ならぬ私です。そして私の大事な片腕……。このミデイス王国内で、私を邪魔に思う者、その手のかかった術者の謀った騒ぎであった可能性は十分にあると　そう思いませんか、父上」

言葉の出ない王から視線を外さずに、そのままたみかけるようにエシユタンドは口を開く。

「そのためならば、狙う物など何でもよかったのかもしれませんが。今更原書を戻してみせたのも、ずっと時機をうかがっていただけのこと、私をより確実に陥れることのできる機会だと判断したのかも　原書自体に何の被害もなかったことも、王国の人物である証明だとも言えませんか。大体、このような出来事が、今に始まったわけではないのです。度を越しはじめたのは、いよいよ私が王位継承権を確実に手にすると恐れたからでは　」

「もう、よい！」

大きく響いた王の声に、空は思わずエシユタンドの腕に触れた。

口調だけは冷静なまま、その瞳に強い感情を燃やしながら話していたエシユタンドは、軽く息を吐いて、黙った。

「お前の言いたいことはわかった。いや、わかっている……これ以上を言わずとも、な」

対する王の瞳は、複雑な色で曇っていく。ついに、この王宮で起こっている水面下の争いを王が認めたのだと、空も胸を押さえた。

「とにかく　クガルの処分は保留とする」

ようやく静かに告げた王に、エシユタンドは抗議しかけるように口を開けたが、王の強い瞳がそれを拒んだ。

「まだ現段階では、一番犯人に近いところにいることは変わらない。真犯人でも見つからぬ限りはな」

「父上、しかしそれでは……！」

あえて最後の部分を強調するように言った王は、苦い顔で立ち上がった。

「私は、この王国を　王宮を預かる身だ。無用な争いが起こることとは、断じて避けたい。王族の絆は、これからも守っていかねばならんのだ。お前にも……それがわからぬはずはないであろう、エシユタンドよ」

遠回しな牽制であるのか、願いであるのか、はっきりとは口にしていない王は、複雑な心を隠すかのように瞳をそらした。

唇が白くなるほどに噛み締めたエシユタンドの顔を、空は痛々しい気持ちで見つめる。どうすることもできなくて、彼の腕をそっと引いた。それに気づいたように、エシユタンドは空を見やって、あきらめたように頭を下げた。

黙って身を翻した王の瞳に浮かんだ辛そうな光が、空の心になぜか突き刺さるようだった。

部屋に戻ってから、沈黙を守ったままだったエシユタンドを氣遣うように、空は少し笑ってみせた。

「きつと……何か方法があるよ、エシユタンド。だから、そのあまり落ち込まないで、ね？」

寝台に腰掛けていたエシユタンドは、自分の思考からやっと戻ってきたかのように、空を見る。

「どうしたらいいかはわからないけど、それでも考えてみようよ。あたしも一緒に考えるから……っていつでも、あんまり助けにはならないかもしれないけど……えっと、でもクガルさんのためにも、頑張るから」

困ったように覗き込む空の瞳を、エシユタンドは優しく受け止めてから、唇のはしを上げた。

「　ありがとう。大丈夫、心配しなくてもいい」

やっと微笑んでくれたことで、少しほっとする。それでも彼の辛

い心を助けることができない自分が、不甲斐なかった。

「それにしても……本当に、どうして原書を狙ったりしたんだろうね」

先ほどエシユタンドが言ったことは空にも納得できたのだが、それでもなぜ、という疑問は残った。

そんな空の心を読んだかのように、エシユタンドは今度こそいつもの笑顔を見せた。

「父上には言わなかったが 私もそれが気になっているんだ」  
「え、でもさつきは」

驚く空に、エシユタンドがいたずらっぽく肩をすくめる。

「論点をずらしてみたんだ。父上がはつきりと答えられない問題を挙げてな」

「エシユタンド……」

子供のように笑うエシユタンドをしばらく見つめた後、空も笑った。黒い髪に手を埋めて、そつと撫でたエシユタンドは、表情を引き締めた。

「お前も知っているだろう、あの隠された紙のことを」

「ああ……あの時見つけた、アメ神の話だね？」

今まで伝えられていなかったという、神々の悲しい言い伝え。そういうえばと思いついた空に、エシユタンドは考え込みながら続けた。

「あの紙は、やはりなくなつたままだった」

「えっ、本当？」

「結局父上にも詳しくは話せていないからな。ご存知ないんだ」

「どうして言わなかったの？」

空の問いに、藍色の瞳は一層何かの思いに沈んでいく。

「私にもまだわからんが もしかしたら、術者の目的はそれであつたのかもしれない。あの言い伝え、もしくはそれを記した紙自体に何かの秘密が隠されているのではないか そんな気がしてならないんだが……あえて父上には言わずにおいた」

それ以上、なぜだと聞けず空は黙った。エシユタンドの表情が



どこか暗いようだったからだ。

「それでもまだ手が無いわけじゃない。絶対に疑いは晴らしてみせるぞ」

空の頭に軽く手を置いて立ち上がったエシユタンドは、心の奥へと何かをしまいこんだように笑った。

その笑顔に空も応えようとしたり、その時だった。

エシユタンドが突然窓の外を鋭い目で見やったかと思うと、顔色を変えたのだ。

「これは」

硬くなつた彼の声に呼応するかのようになり、窓の外に広がる空に点々と見えたもの。太陽を背にしたその影は、青い空に落ちた何かの染みのようで、空は一瞬目をこする。

再び目を開けた時、先ほどよりも大きくなったその影が、上空で羽ばたくように動いているのがわかった。

「鳥………?」

空の呟きに、エシユタンドが自身も無意識のようになり首を振る。

「いや、違う。あれは」

目をこらした彼の表情で、空にも否応なく異変が伝わる。点々と連なつて羽ばたいてくるものに、嫌な予感が一気に広がった。

太陽が雲に隠れて、少しだけ見えたその姿は、鳥にしては異様なほど大きい。

その顔の部分に奇妙な肌色が見えた。

「きや………」

悲鳴は半分声にならなかつた。息を呑んだ喉に引つ掛かつて、止まってしまった。

綺麗な青い空に浮いた、たくさんの顔、顔、顔。

揃つて完璧な人間の顔をしたそれは、巨大な鳥の群れだったのだ。「下がっている！ ソラ！」

瞬時に顔色を変えて空を部屋の奥へ押しやり、そのまま扉へ駆け出すエシユタンド。

空がその名を呼ぶ前に現れたのは、ルストだった。息を切らして駆け込んできた彼は、エシユタンドの前に転がり出るように駆け寄って、緊迫した瞳を上げた。

「殿下！ 魔のモノが集まっているのは、エカルド殿下の宮の上空だそうですね！ どうか、お早く」

ルストが最後まで言い終える前にエシユタンドは頷き、一瞬だけ空を見やるとルストの肩に手を置いた。

「わかった、お前はここに。ソラを頼むぞ！」

言うなり飛び出していったエシユタンドを追おうとした空を、ルストの力強い腕が止める。

「いけません、姫君！ 今度こそ 絶対に殿下を追われることはありません！」

これ以上はないほどに真剣な瞳と、遠慮のない腕の力。

それこそが、ルストが本気であることの証明だった。

何も言えなくなった空が、それでも必死で見上げた先 窓の外で、聞こえるはずのない鳥の羽ばたきが耳に届くような気がした。

「エシユタンド」

悲痛な空の声だけが、主のいなくなった部屋に響いた。

## 67・異変（後書き）

なかなか執筆ペースを上げられないでおりますが、頑張っていきたいと思いますので、どうぞゆっくりと見守ってやってくださいませ。

## 68・襲撃（前書き）

集中して続きを書いています。

あまりお待たせしないで頑張ります！

辿り着いたエカルドの宮の前、あまりの異様な光景にエシュタンドは息を呑んだ。

宮の上空すぐ近くで浮上している魔の鳥たちは、先ほどよりも数を増やし、更にその頭に張り付いているのは、今まで目にしたことがないほどに人の顔そのものだったのだ。

「殿下！ こちらへ！」

一瞬動きを止めていたエシュタンドをひそめた声で呼んだのは、王宮軍の兵だった。

すぐさま我に返り、いざなわれるままに馬を木蔭にいた兵に手渡し、身を隠す彼を囲んだのは私兵隊の全員。

それぞれに戦闘体勢を取ってはいたが、ほっとしたように皆がエシュタンドの周りに集まったのを見ても、隊長、副隊長の不在は大きく響いているようだった。

「各自、臨戦態勢を崩すな。クガルヤルストがおらずとも、お前たちが王宮髓一の対魔術を誇る隊であるのは変わりないだろう！」

低く叱責した主に、はっとしたような表情を浮かべた兵たちはあわてて上空に浮かぶ鳥たちに視線を向け、矢を準備する。

王宮軍、更にエシュタンドとエカルドの私兵隊がそれぞれ駆けつけた宮の周りには、騒然とした空気が満ちていた。

しかしそれだけの人数が揃おうとも、無表情に浮かんでいる鳥たちは何らひるむ様子も見せてはいない。地上の動揺とあまりにそぐわぬ彼らの落ち着きように、エシュタンドも唇を噛んだ。

「ベニエ、エカルドは無事に避難したんだろうな？」

確認したエシュタンドに、エカルドの私兵隊長もすっかりと頷く。「はい。鳥が向かってくるのがわかってからすぐ、裏から馬車へお乗りになりました。今頃は王陛下のもとへ」

ベニエの低い声が途中で途切れる。安心しかけたエシュタンドが

顔を上げる前に、ベニエが驚愕の声を上げた。

「なっ、何だあれは……！」

彼の目線を追ったエシユタンドが振り向く。それに被さるように響いたのは、兵たちの悲鳴だった。

「うっ、うわああああ！ ばっ、化け物　！」

それぞれに訓練を積んだはずの兵たちが思わず表情を変え、叫ぶほどのモノがそこにいた。

暗い海の底のような、鈍い紺色。

最初に見えた色彩はその獣が持つ毛並みの色。

外見で言えば、狼に似た姿形をしている。だが、その大きさが並外れていた。

熊よりも更にひとまわりほどはあるような図体に似つかわしくない俊敏な動きで、それは跳躍する。

どこから現れたのか、突如として飛び出した巨大な獣　その鋭い歯が何かを捕えていた。揺れる薄い金色と、見えたのは　赤。

「エ、エカルド　！」

エシユタンドの叫びに、獣が一瞬足を止める。ちらりと揺らいだ影の向こうに、赤く染まった小道と馬車の残骸が姿を現す。数人の兵らしき人影が力なく倒れているのを踏み越えて、獣は飛び出してきたようだった。

紺色の長い毛並みの中から、妙に澄んだ琥珀色の瞳がエシユタンドを射抜く。無造作に頭を振った獣は、それでも噛んだ口は開かなかった。

しっかりと突きたてられた鋭い歯の下にあるのが、白いブラウスの背中であるのがわかって、エシユタンドは蒼白になった。

完全に統制を失った包囲軍を抜けて、獣は高く飛ぶ。

運ばれるエカルドの体はびくりとも動かない。鮮やかな赤色の血が、獣の飛んだ跡に落ちるのを見て、ようやくエシユタンドは頭を強く振った。

「かつ、各軍、すぐに攻撃態勢を　！　その獣！　すぐにエカル

ドを放すんだ！」

無駄であろうとわかっていながら口をついた言葉　勿論、巨大な獣は気にもせぬようにそのまま宮の窓枠や柱を器用につたい、屋根へと上っていく。

藍色の瞳に、強い怒りが集中する。

エシユタンドの体の周りに風が渦巻き始める。両手を広げた彼が、あと少しで力を発揮しようかという、その時だった。

「ちよつと待ちなよ」

奇妙なほど冷めた響きの声が割り込んだ。

どこから聞こえたのか、一瞬視線をさまよわせるエシユタンドや兵たちをあざ笑うかのように再び声がする。

「そのあんた、変な力で邪魔するなら、この男今すぐ噛み殺させるけど、それでもいいの？」

馬鹿にしたかのような冷静な声は、上空から聞こえた。

咄嗟に力を止めて振り仰いだエシユタンドの瞳に映ったのは、鳥の群れの中でもひととき大きな一羽の姿。

細かい羽根が連なっているのか、やわらかそうな翼は大きく、獣と同じ紺色をしていた。

鳥そのものである翼をはためかせていながらも、その姿はほぼ人間だった。紺色の髪はふざけたように後ろ髪だけ長く、余裕たっぷり表情をしてこちらを見ている。腕組みをして、空中で胡坐をかいた魔のモノは、鳥の翼と胸元や体を覆う羽毛さえなかったら、年若い少年にすら見える。

獣と同じ琥珀色の瞳を細めて、エシユタンドに向かってにやりと笑ってすら見せた。

「そうそう、お利口さん。逆らわないなら、あんたには手出ししないからさ」

満足げに言った少年が片手を軽く振るのを見て、巨大な獣は大人しくそのままエカルドを啜るだけに止めたようだった。

「何だ、お前は」

額から一筋の汗を流して、ゆっくりと問うエシユタンドに片眉を上げて、魔の少年は可笑しそうに小首を傾げる。

「仲間うちじゃ、呼ばれてる名前もあるけどな。勿体無いから教えてやんない」

あくまでふざけた返答に、エシユタンドは藍色の瞳を燃やす。

「目的は？ エカルドをどうするつもりだ。その口調では 命は無事なんだろうな」

強い口調に隠された不安をお見通しであるかのように、少年は微笑みながら肩をすくめた。

「そんなに一度に聞かれてもね まあ、今のところ死んじゃあいないけどな」

真実を言っているのかという疑いは残りつつも、とりあえず兵もエシユタンドも安堵の息を吐く。それを知るかのように少年は笑った。

「そうは言っても、これからどうするかはわかんないけど。なんていったって、この男のせいでアイラは捕まった拳銃、死んじやったわけだから……そう簡単には許してやんないって、皆言ってるからさ」

一瞬、瞳が険しくなった少年の表情でなのか、獣が啜える力を強めたように見えた。ぐったりとぶら下がっているエカルドの体が揺れ、再び赤が滴り落ちる。

「やめる！ エカルドに何かしたら……私が許さん！」

今度こそ止められずに叫んだエシユタンドを、少年はいまいましそうに見下ろした。

「あー……とりあえず今は何もしないから。このまま噛み切ってやりたいとこだけど、生きて連れて来いってご命令だしね」

言うなり、少年の指図で複数の鳥たちが宮の屋根へと舞い降りていく。エカルドを啜えたままの状態で、紺の獣は従順に鳥たちに体をまかせた。



とてつもない重量があるはずの巨大な獣の体を、複数の鳥のかぎ爪がとらえ、持ち上げる。

ふわりと浮き上がった獣の隣に寄り添いながら、少年は楽しげに笑った。

「じゃあ、そういうことだから。またね」

手を振り、羽ばたいていく魔の少年　ぎりぎりと唇を噛み締めていたエシュタンドは、ようやく我に返ったように矢をつがえ、または攻撃の術を使おうと手を組みかける兵たちに気づき、急いで止めた。

その動きさえ予想済みであったかのように少年は余裕を失わないまま振り返り、そして遠ざかっていく。一瞬の動作で見えたエカルドの金髪　ゆるやかに波打つ金が血に汚れているのが、異常なほど鮮やかに目に残る。

「殿下　！」

兵たちの悲痛な声上がる中、エシュタンドは堪えきれぬように宮の白壁を拳で打った。

「エカルド……！！」

鳥たちが消え去った方角を、食い入るように見つめる。

震える拳を握り締めながら、焼き付けるようにただ同じ方角を見続ける藍色の瞳は、瞬き一つしなかった。

「姫君、少し椅子にお座りになられては」  
「気遣うようにかけられるルストの声は、もう何度目かというものだったが、空は返事もできずにそわそわと部屋中を歩き回っていた。窓の外をいくら眺めようと、エカルドの宮がある方角は真裏で、何一つ見えはしない。あの鳥たちは、あつという間にエシユタンドの宮の上空を通り越していったのだらう。影すら残ってはいない。平和そのものだと錯覚さえ起こしそうなほどの青空が、ただただ空を見下ろしているばかり。」

「そうですね、姫君。あの、香草茶でもお飲みになられてはいかがですか」

優しいエマナの言葉にすら、空は苛立っていた。

「どうやって落ち着いていられるっていうの？」

そんな言葉を投げつけてしまいそうになるのを、爪を噛んで堪える。

二人の表情を見たら、いや見なくともわかるのだ。エシユタンドやエカルドを心配しているのは、何も自分一人ではない。

エマナだって、こんな時にまだクガルは捕えられたままで、いてもたってもいられない心境のはずだ。

それに、今一番エシユタンドのもとへ駆けつけたいのは、ルストであるはず。。。

クガル不在の今、副隊長である彼が私兵隊をまとめなくてはいけないというのに、そこまでの任にあるルストを自分のもとへ残してくれたエシユタンドの気持ちがかかるだけに、空は何も言えずにこらえて耐えていることしかできない。

でも。。。

こらえている間にも、自分のいないところで何かとんでもないこ

とが起きているのではないだろうか。

まさか、エシユタンドやエカルドの身に危険が及んでいたら……。抑えきれない不安が空を襲い、余計に言葉も出せない。

ついに寝台に腰を下ろしはしても、空は目に映る部屋の何も見てはいなかった。

あの人面の鳥、以前見たものよりも大きかった。

それに何より、もっともっと、人間らしくなっていた気がしたのだ。

頭の奥に閃いたのは、離宮に捕えられていたという魔のモノのこと。確かあの時、出てきた死体はただの大きな鳥のように見えた。

でも本当は あんな風に恐ろしい変化を遂げたモノであったのだろうか。

自分には知らせずにいたエシユタンドやクガルたちの配慮を思うと、ただ情けないような、不甲斐ないような、いたたまれない気分になる空だった。

ああ、本当に二人は無事なんだろうか。

何もできないなんて、これ以上の無力感といたららない。

そこまで考えてから、空はやつと首元のチョーカーを思い出した。手で真ん中の想緑珠に触れた途端、温かい感覚が伝わってくる。

まるで、自分を使え、とでも言っているかのように。

「そつだ……」

呟いた空の声は、窓際で何やら話しこんでいるルストとエマナには届かなかつたようだった。

二人に余計な気遣いはさせまいと、空はあわてて想緑珠を両手で覆ってから、頭の中で念じる。

お願い、エシユタンドの姿を見せて……！ 皆が無事なのか、どうなってるのか、教えてほしいの！

必死で祈るような思いで石に触れたその瞬間、頭の中に映像が広がった。

この部屋ではない、外の光景。緑の木々に囲まれた白い宮、エシ

ユタンドの宮とは違う華やかなレリーフが彫りこまれた柱と優美な窓枠。

以前訪れたエカルドの宮のものだ、とわかってから、上げかけた声を抑えルストたちを見やるが、二人には何も見えていないようだった。

空は不思議な思いに包まれながらも、目を閉じ、浮かんでくる映像に集中する。

たくさん兵たち　その中には見たことのある顔ぶれもある。どうやらエシユタンドとエカルドの私兵隊らしい。

声は聞こえないけれど、兵たちが顔色を変え、何かを指差しているのが見えた。

恐ろしく巨大な生き物が木陰から飛び出していき、小道を進んでいた馬車に襲い掛かっていく。その化け物の異様な姿に息を呑むよりも先に、襲われた人物を見て空は叫びそうになった。

優しい面立ちが苦痛にゆがみ、抵抗する暇もなく化け物の牙を背に突き立てられ、啜えられたその人は、エカルド王子だったのだ。

兵たちが攻撃するも、鋭い爪の前に切り裂かれ、倒され、踏みつけられていく。化け物は静かに跳躍し、兵たちの前に走り出る。

そして皆が驚愕に目を見開く中、青ざめた顔で振り返ったのはエシユタンド。

藍色の瞳が凍りつき、化け物が彼のほうへ飛んだ。

思わず空が悲鳴を上げそうになった時、映像は途切れ、まるで全てが夢だったかのように頭から掻き消えていったのだった。

あまりの衝撃に声も出ない。喉がからからで、寝台に座っているにもかかわらず足元が傾ぐ気さえた。

エカルド王子……エシユタンド！

先ほど見えた映像が現在起こっていることだというのか。

自分のものではないくらいに冷えた手を握り締め、空はついに立ち上がった。

「姫君……？　どうかなさいましたか？」

心配そうに声をかけてきたエマナに、空は振り向かずには答える。

「ちよつとだけ、外の空気吸ってくる」

「では、私どももお供を……」

立ち上がるルストの気配を感じ、空はあわてて手を振った。一瞬だけ振り返って、必死で取り繕った笑顔を向ける。

「ううん、大丈夫！ 廊下を歩いてくるだけだから。二人はここにいて？ お願い、少し一人になりたいの……」

うまく笑えたのかわからない。それでも何とか普段の声を出したつもりだった。

信じてくれたのか、しばらく顔を見合わせた後、困ったようなルストにエマナが頷いた。

「では、絶対に宮の外には出ないで下さいませ。私どもはここでお待ちしておりますから」

優しく笑ってくれたエマナを、それ以上見ている自信もなく、空は頷いてすぐ部屋の扉を押した。

信じてくれた二人に申し訳なくなりつつも、耐えることなどできそうになかったのだ。

様子を見に行くだけ、それだけ。危ないことはしないで、必ず戻ってくるから。

自分に言い聞かせるように頭の中で繰り返しながら、空は廊下に足を踏み出す。

ゆっくりと、次第に駆け足になっていく空の足音が、静かな宮にこだましていた。

## 68・襲撃（後書き）

衝撃のエカルド誘拐！

そして言いつけを守らずついに飛び出してしまっ空、これからどうなるのかお楽しみに。

王族の間は、驚愕と混乱に満ちていた。

一番青ざめた顔色をしているのは、王妃。派手な化粧が施された顔には、いつものような余裕がまるでなかった。

「何、ですって……エカルドが？」

震える声をもらし、立ち上がりかけた王妃の体が傾いた。倒れそうになった彼女を支えたのは、王だった。

「エシユタンド、襲われ、連れ去られたのはエカルドだというのは、間違いないのだな？」

訊ねる王の灰褐色の瞳にも、隠しきれない動揺が揺らいでいる。

エシユタンドも、緊迫した表情のままに頷いた。

「はい。申し訳ありません、私がおりながら、魔のモノたちの襲撃を防ぐこともできませんでした」

きつく唇を噛んで、頭を下げる。静まり返った広間に、王妃の声が上がった。

「そつ、そつですわ！ エシユタンド、あなたがついていながら何という……エカルドの身に何かあったら、一体どうしてくれるのです！ ああ、エカルド……私のエカルドが……！」

エシユタンドを睨む水色の瞳には涙がにじみ、普段のような強さはなかった。途中からすすり泣きのように弱まった彼女の言葉に、エシユタンドも何も返せずに俯く。

「全ては私の責任……返す言葉もありません。本当に 情けないと思っています」

硬い声で呟くエシユタンドの背後で、堪えきれぬように頭を上げたのは、エカルドの私兵隊長ベニエだった。

「陛下 おそれながら、責任であれば私にあります！ 殿下をお守りする役目を負っていながら、みすみす魔のモノに失態を許した、その全責任は隊長である自分にあります！ どうぞ第三殿下をお責

めになりませぬよう　！」

薄い栗色をしたベニエの瞳が、しっかりと王と王妃に向けられる。顔を失っていながらも、彼は強い意思をそのままに見せていた。彼の瞳は、その色だけでなく込められた思いまでも、自分の大切な片腕を思い出させる。

エシユタンドは頭を振って、王を見上げた。

「父上、この責任は後ほどいくらでも取ります。今は、とにかくエカルドを無事に救い出さなければ……どうか私に搜索の許可を！」  
取り乱した王妃を支えていた王は、エシユタンドとベニエを順に見やった。

それを一番に望んでいるのは、王とて同じことだと、表情にも如実に表れている。

「父上、それに際してお願いがございます」

決意と共に口にしたエシユタンドに、王妃も涙ぐんだ瞳を上げた。  
「どうか、私の私兵隊長、クガルの釈放を　仮の処分でも結構です。対魔の術に関しては、彼以上に頼りになるものはいない。そのことは父上とておわかりでしょう。エカルドの救出には、なくてはならない存在です。彼を搜索隊に加える許可をいただけませんか、父上　」

戸惑いが灰褐色の瞳に浮かぶ。眉間に刻まれた皺が、王の苦悩を示している。

「父上　クガルの全行動には、私が責任を持ちます。万が一何か不穏な動きがあれば、まずこの私が許してはおかない。そう　誓ってみせます」

言葉の裏に秘められた信頼と決意は、その場にいる全員に伝わるぐらいに強いものだった。

信じるということは、それが崩れた時の責任も伴う。そこまでの存在である片腕を自分の手で処分することすらも決意のうちにあるのだと言外に示したエシユタンドに、王の瞳も揺らいだ。

「それでも父上が信じてくださらぬというなら　この手で我が弟



すら救えぬというのなら、私など生きている価値もありません。父上ご自身の手で、私の命など切り捨てておしまいになればいい！」

いつもの冷静さから考えられぬほどの、エシユタンドの大声と藍色の燃える瞳に、王も心を打たれたかのように瞳を見開き、その口を開こうとする。王が声を発するよりも先に動いたのは、隣でエシユタンドの言葉を聞いていた王妃だった。

「私からも お願いでございますわ、陛下。エシユタンドがそこまで言うというのなら任せましょう。今はエカルドの無事が何より……どうか、クガルの釈放を！」

水色の瞳に込められたのは、ただ息子を思う心のようにだった。必死に王を見つめて、彼女は祈るように両手を合わせた。

その仕草に心を決めたように王は顔を上げ、エシユタンドをまっすぐに見下ろした。

「王の名において、命ずる ただちに第三王子付き私兵隊長クガルを釈放し、エシユタンド、エカルド両王子付き私兵隊全員と王宮軍の精鋭を捜索隊として、エカルドの救出に向かえ！ 全力をかけて、エカルドを取り戻すのだ ！」

王の言葉に、その場に控えていた兵全員、そしてエシユタンドも頭を下げる。

既に広間に差し込む日は、傾こうとしていた。

エシユタンドが自分の宮へ戻ると、侍女や守護兵たちが慌しく行きかっていた。

宮の前にちよつと出てきたルストと鉢合わせしたエシユタンドが、不審な目で訊ねる。

「どうした、何かあったのか？」

主の声に、ルストは蒼白になって頭を深々と下げた。

「申し訳ございません、殿下！ 私がついていながら 姫君の行方が先ほどから知れないのです……現在、手の空いている者全員で捜しているところなのですが」

「何だと ソラが？」

目を剥いたエシユタンドに、おずおずとルストは顔を上げる。

「てつきり殿下のもとへ向かわれたのかと今、使者を向けたところだったのですが……姫君とはお会いになられておりませんよね」

「いや……こちらには来ていない。じゃあ、どこへ行ったというんだ」

たちまち瞳を曇らせ、辺りを見回すエシユタンドに、伝達兵が駆け寄ってくる。

「殿下、ただ今、クガル隊長の準備が整いました！ 王陛下が、いますぐにでもご出発をとのことです」

「わかった。すぐに行く」

短く答えたエシユタンドに、ルストが声をかける。

「殿下、では……」

大体の事情は兵から聞いたのか、驚いた顔はしていないルストに、エシユタンドも頷いた。

「ああ、クガルが釈放された。お前も含め、全員でエカルドの救出に向かうことになっている。だが」

言葉には出さずとも、心配なのはただ一人のことだろう。信頼できる者を残したとしても気がかりなのは抑えられぬというのに、その相手が行方知れずとなっては。

ルストもそれがわかるだけに、一瞬ためらった後、エシユタンドの前に膝をついた。

「殿下、姫君は私が責任を持ってお捜しします。魔が遠ざかった現在、王宮には危険は少ないはずですが。心配なされずとも、この近くにおられることは間違いないのですから、お捜しでき次第、信頼できる者に任せて、私もすぐに捜索隊を追います。それで、いかがで

しょうか」

ルストが告げた途端、また別の兵がやってくる。エシユタンドの前で、急いで出発の荷を馬車に積み込み始めた。

彼らの動作を厳しい瞳で見つめていたエシユタンドは、思いを振り切るように首を振って、ルストを見下ろした。

「わかった。ソラのことはお前に任せる　必ず無事を確認してくれ。頼んだぞ」

握り締めた手だけが不安な心を物語っていたが、先にやるべきことには替えられない。エシユタンドは瞳を閉じ、背を向けた。ルストもしっかりと頷く。

「出発する！」

エシユタンドの声で、兵たち全員が姿勢を正した。

一瞬だけ振り返った藍色の瞳は、自分の宮を映し、その中に愛しい面影を探すかのように揺れたが、すぐに視線を逸らし、毅然と前に向けられる。

首にはめた金のチョーカーがきらりと夕日を反射し、輝くのを目にしたものは誰もいなかった。

\*

一体どこまで行くというのだろう。

前に行く背中は何も語らず、淡々と足を進めている。

振り返っても、ぐるぐると木立の間を回ってきたせいで、来た道

すらわからなくなっていた。

「あの……本当に王子の宮はこっちなのか？ 近道だって言っただけだ、さつきからずつと歩いてるし……なんだか道が違うような気がするんだけど」

後ろにも控えてついてくる兵に、空はついにためらいがちに問いかける。

一瞬視線を合わせた兵は、びくりと目をそらして、それでも頷いた。

「ええ。こちらでございますよ。姫君は王宮内に不慣れでいらっしやるから、そんな気がなされるだけでございますよ」

まるで機嫌をとるかのような奇妙な愛想笑いを浮かべた彼に、空は納得が行かないような顔をしつつも、口を閉じる。

いてもたってもいられずに飛び出してきたエシユタンドの宮

裏庭に通じる出口からそつと出たところを、兵と出くわした時にはもうだめかと思ったのだが、意外なことに兵は戻るよう説得するとはなかったのだ。

『殿下のことが気になるのでございましょう？ それなら私がご案内いたします』

にこやかに提案すらしてきた彼に一瞬芽生えた不信感は、頭に残る恐ろしい残像を思い出したことですぐに消えてしまった。

周りの守護兵たちの目を盗んで、近道を行くと言ったこの兵たちに付いて来て、かなりの時間が経ったような気がする。しかしそれすらも気のせいだというのだろうか。

動揺と恐怖で鈍っていた空の感覚は、今更ながら徐々に戻ってきたようだった。

辺りは静かな森。王宮の中だとは言っても、知らない場所に足を踏み入れた不安が空の警戒心を呼び戻す。

本当に、付いて来てよかったの？

空が足を止めかけた、その時だった。

兵たちが立ち止まったかと思うと、急に視界が開け、白い大きな

宮が姿を現したのだ。

ほっとするのもつかの間、その装飾や造りがエカルドの宮のものとは違っていることに気づく。

「ここは……？」

眉を寄せ、不安な声を出した空は、兵たちが何も言わずに叩頭したことで驚き、彼らの跪く方角に人影が現れたのを見た。

白い衣装の色にはっとした空に向けられた笑顔　それは、あの舞踏会の夜に目にした第二王子、エルファンドのものだったのだ。

「ようこそ、姫君。歓迎するぜ」

言われた言葉の意味が飲み込めず、ただ目を見開いた空に近づいて、エルファンドはおどけたように礼をしてみせる。

身にまとった白いブラウスが胸元まではだけ、息は酒臭い。

黄色がかつたくせのある金髪をかきあげ、空を見た彼の瞳はどこか不吉な色を秘めていた。

本能的に空は身を縮める。その細い腕をやすやすと掴んで、エルファンドは笑った。

「エシユタンドが心配なんだろう？　奴なら今、ここ　俺の宮にいる」

予想外の言葉に空は驚いて目を上げる。

「エシユタンドが……本当に？」

「ああ。襲ってきた魔物に傷を負わされてね、俺の宮が近いってんで、運ばれて手当てを受けてるところさ。大丈夫、大した怪我じゃないと思うだ」

聞かされた事実に関胸が痛むものの、エシユタンドの無事がわかって空は崩れ落ちそうに安堵が広がっていくのを感じていた。

「そう　ですか。よかった……！　あの、エカルド王子は？　彼は無事なんでしょうか」

先ほど見た映像では、エカルドのほうぐが深手を負っていたようだった。あれから一体どうなったんだろう。

心配する空に、またもエルファンドは笑みを返した。

「エカルドも無事さ。今、一緒に手当てを受けてる。会っていくだろう?」

にこやかに宮を手で示されて、空はすぐさま頷く。  
もちろん、二人の無事をこの目で確かめたかったのだ。

ここにいるというのなら、今すぐにも会いたい。

空の思いを見てとったようにエルファンドは微笑み、空の背に手を回した。

「さあ、入ってくれ。二人とも君に会いたがつてる」

近い距離で覗き込み、笑われても、空は嬉しさで気にもしなかった。

兵たちがいつの間にか姿を消していることも、エルファンドの宮が静か過ぎることに気づかず、誘われるままに白い扉を潜り抜ける。

にやりと笑ったエルファンドは、空の後姿を食い入るように見つめる。

少し開いた空のドレスの背中を辿っていた明るい茶色の瞳は楽しみに逸らされて、傾いていく太陽を意味ありげに映すのだった。

遅い……。

二人の無事をこの目で確かめられると浮き立っていた空の心は、すっかりとしぼんでしまっていた。

連れて来るから待っていてくれと通されたのは、エルファンドの私室であるようで、趣味の悪いごてごてした飾りがついた大きな寝台が部屋の中央を占め、あとには最小限の家具が配置されているだけ。ただ目につくのは、壁に置かれた大きな棚　　たくさんの酒瓶が並べられているさまが、いかにも彼らしいと感じられて、空は不安げに視線をさまよわせた。

一瞬疑ってしまったことを悪かったと反省していた空の気持ちは、

また落ち着かなくなっていく。

分厚いカーテンに遮られ、部屋の中には夕焼けすら入ってこない。侍女が蝋燭に光を灯す時、ちらつと気の毒そうな視線を送っていたような、そんな気がして、空は余計に疑いたくなかった。

本当に、ここにエシユタンドたちがいるというのだろうか。

それならどうしてすぐに会えないんだろう。早く無事を確かめたくて、はやる心を抑えるので精一杯だった先ほどまでと違い、空は新たにわいてきた不安に胸を支配されていた。

やはり、外へ出て待たせてもらおう。

そう決意して、うろつろと歩き回っていた足を部屋の扉へと向けた、その瞬間。

扉が静かに開いて、エルファン드가姿を見せた。

「あの」

エシユタンドは、と言いかけた空の口が驚愕で固まる。

部屋の入り口からここまで届いてきたのは、濃厚な香水。いや、入浴に使われる香油のものだろうか。

先ほどとは違う、まさしく夜着と呼べるようなゆったりとした白い衣服を身に着けたエルファン드는、片手に酒杯を持って、空に笑顔を送ってきたのだ。

「念入りに風呂に入ってたらさ、待たせちゃったみたいだな。でもいいだろう？ どうせ夜は長い　あせる必要もないからな」

余裕たっぷりに微笑んでみせたエルファンどの言葉に空は一瞬きよんととして、すぐさま顔色を変えた。

あまりの事態に、唇が震える。

「な……何を　まさか」

そんな呟きしか出てこなかった。まさか、と思う自分の心すらおかしいと打ち消していたというのに。

後ずさりかけた空の足は、何かに邪魔されて止まった。

振り返った空の瞳に映るのは、蝋燭に照らされた大きな寝台。

あわてて視線を戻した空の目の前に、エルファンどがいつの間

か立っていた。

「本当に 信じたみたいだなあ。ま、そういう純粹そうなところも気になってただけだよ。あいつだけに味わわせておくのは、勿体ないってもんだろ。さあ 心配しなくても、人払いは済ませた。大声を上げて誰も来やしなから、安心して楽しもうぜ？ 異世界からやってきた、姫君さんよ」

黄色がかった彼の髪から、強い香りが漂う。香油のものでもないような、くせのある香り。

悲鳴を上げたいのに、なぜか急に体から力が抜けていくような感覚に襲われた。

声も出せずに、それでも揺らぐ体を必死で踏みとどめている空に、エルファンドが瞳を細めた。

「ああ、こいつか。いつも女と楽しむ時には焚くようにしてるんだ。ってまあほとんど四六時中だから、俺の体にしみついてる匂いといつてもいいけどな。珍しい香で、女をいい気持ちにさせてくれるって代物でな、体の感覚がおかしくなるらしいぜ。俺は慣れてて平気だから、心配しなくても十分楽しませてやれる」

好き放題に言って、楽しげに笑う。

エルファンドの得意げな高笑いが、静かな部屋に響き渡る。

「い……や、エシユ」

呼ぼうとした名前さえ、喉の奥でふわりと溶けてしまうようだった。目に映る何もかもがぼんやりしていく。何かを必死で掴もうと伸ばされた空の手は、力なく落ちる。

傾いでいく空の体は、エルファンドが片手でしっかりと抱きとめた。寝台にゆっくりと横たえられた空は、それでも遠のいていく意識の中で、エシユタンドを呼んでいた。

唇の動きで、それがわかったようで、エルファンドはにやりと唇の端を吊り上げる。手にしていた酒杯の赤い酒を飲み干して、彼は笑みを収めた。

「いい気味だぜ、エシユタンド」



空の白い滑らかな首筋をそつと指でなぞるエルファンドの瞳は、  
ひどく真剣な色を帯びる。

蝋燭の光だけがじりじりと時を進めていく部屋で、エルファンド  
は無造作に空に覆いかぶさっていった。

## 69・危機（後書き）

ついに決まったクガルの釈放！  
しかしその頃、空に迫る危機……どうか続きもお楽しみに！

王宮を出発して間もなく追いついてきた人影に、エシユタンドは微笑みを送った。

少しやつれた感はあるものの、しっかりと馬を駆って隣に並んだその姿は、既に私兵隊長としての落ち着きを取り戻しているようだった。

「隊長……！」

「隊長、よくご無事でお戻りに……！」

感極まったような兵たちの声に頷き、クガルはエシユタンドに瞳をやった。

「殿下」

どれほどの思いを言葉にしたいのか、口にせずとも深い眼差しだけでエシユタンドにはわかった。

栗色の瞳に浮かぶ幾多の感情を読み取ったかのように、エシユタンドは頷く。

「よく、戻ってきてくれたな。今はそれだけでいい　とにかく目の前の目的に集中してくれ」

最小限の言葉だけをかける。クガルもまた、主の思いを受け止めたように、しばらく彼を見つめた後、頭を下げた。

「はい。殿下　全力で、任務に尽くします」

馬上での会話は難しい。

それ以上を語らずに、二人はただ並んで馬を走らせた。

馬車の搜索隊よりも先に、まずは日没までに近くの街へ辿りつかなくてはならなかった。

魔が消えた方角は西　そちらにある深い森は、王宮から五日はかかる、テローザの森だけだった。

おそらく彼らの根城はそこだととりあえずの目星をつけて、エシユタンドたちの一行はテローザを目指すことになっていた。

もちろん、他の大きな森にもそれぞれ搜索隊を分散させて向かわせていたが、その中のどこにも魔が潜んでいる可能性は否めず、不安は残る。

しかし今はとにかく思いつく限りの方法で、エカルドを捜すしか手はないのだった。

首元の金のチョーカーに無意識に触れるエシユタンドの仕草を、クガルはそつと横目で見る。

空が行方知れずとなった件は、既に兵たちにも知れ渡っていた。

大切な弟と婚約者と、二人の間で苦悩する彼の心を思っただけか、誰も口には出さなかったのだが。

気遣わしげなクガルの目線にも気づいていたが、エシユタンドも何も言わなかった。いや、言えなかったのだ。

口に出してしまえば、不安が止められなくなる。今すぐにも引き返し、無事を確かめたいのだ。

それをしてはいけないと思うのは、ひとえに弟の安否が気にかかるからでしかなかった。

魔のモノのこと、王子としての役目のことも、全てを放り出してもかまわないと思うほど、強い感情。その想いに引きずられそうになるのを、エシユタンドは必死でこらえていた。

ソラ、頼むから……無事でいてくれ。

握った想緑珠は、何も伝えてはこない。冷たく、彼の手の中で息を潜めているだけのようには思えた。

祈りだけを空に向けて、エシユタンドはひたすら馬を駆った。

何度も何度も頭に蘇る、血に汚れたエカルドのぐったりとした姿だけが彼に手綱を握らせているのだった。

テローザへ向かう道のりで最初に行き着く小さな宿場町　サ  
ーバに辿りついたのは、ぎりぎり夜が深くなる前だった。

手配された宿で馬を預けて、部屋でとりあえずの休息をとるエシユタンドのそばには、クガルが控えていた。

警護のためでもあるが、一人で休むよりは気がまぎれていいというのもエシユタンドの本音だった。

「殿下、どうぞ お体が温まりますよ」

持参したらしい香草茶を入れてくれたクガルに、エシユタンドは伏せていた瞳を上げた。

それで初めて自分が長椅子に腰掛けたまま、ずっと床に目を落とすことに気づく。

クガルはただ優しい瞳で微笑んで、カップを手渡してくれた。立ち上る湯気からの独特な香りを吸い込んで、エシユタンドは少しだけ落ち着いたような気がした。

「しかし いつの間にあれほどの力を身に付けたのだろうか、奴らは」

頭に回っていた疑問を口にしたエシユタンドに、クガルも眉を寄せ、頷いた。

「ええ 兵から聞きましたが、擬態というより、人間そのものに近づいたとか。人語もかなり解していたそうですね」

すぐさま返ってきた的確な返答に心地よさを感じつつも、エシユタンドは続ける。

「魔のモノ全てが身に付けたのではないかもしれないが それでも腑に落ちん。今までから考えて信じられないほどの変化だ。それに……一番納得が行かないのは、なぜエカルドのみを狙ったのかということだな」

そう あの魔の少年は、あきらかに復讐めいた言葉を吐いていた。離宮に捕らえられていた化け鳥 人間の女の上半身を持っていた、あの魔の死を悼んでいるようだった。

それならば実際に手を下したのは、最終的には自分だ。エカルドだけを憎み、連れ去るというのもおかしい。

そこまでの思考能力がないのかもしれないが、組織だった動きを

していたところを見ても、かなり高い頭脳を持ち出したと言えるのだ。

それに　あの少年の言葉では、命令を下す者が他にいたようだったのではないか。

眉間に手をやりながら、考え込んでいたエシュタンドの隣で、クガルが香草茶をゆつくりと飲み干した。

「とにかく、連れ去ったというところを見ても、彼らの目的は末の殿下の命を奪うことではない。とりあえず、今すぐには　そういうことですな」

自分と同じ結論に至っていたらしいクガルの言葉で、エシュタンドも少しだけ表情を緩めた。

やはり、こういうところが彼を信頼する所以なのだ。戻ってきてくれたことで、自分が思ったよりも心強く感じていることが改めてわかる。

「そうだな。私もそう願っている。それに　どうやらまだ魔のモノに関連した騒ぎは、他には起きていないようだし、何かの企みが奴らにあることは確からしいな。それが何であれ　全力で対応するのみだ」

「ええ。そうですね」

頷くクガルが、既に各領主や警備隊に速やかに伝令を飛ばしてくれたことをエシュタンドは知っていた。すぐに対応策が取られるかという不安はあるものの、魔の目的が無差別に人を襲うことではなくなってきたようだという事実で、エシュタンドはなんとか自分を落ち着けようとしているのだった。

クガルが言った通り、エカルドの命も無事であると信じることにできないのだ。では魔の目的が何なのか、という懸念は残るのだが。

とにかくここで座って考えすぎてもどうにもならない。ただできることを　自分が果たすべき役割をなすだけだ。

金の髪をくしゃりとかきあげて、エシュタンドは息を吐いた。

窓枠に置かれた蝋燭の火が揺れるのを、ぼんやりと眺める。思い浮かぶのは、黒髪の愛しい少女。本当に無事であるのか、また胸に舞い戻ってくる不安を無理やりにしまいこもうとして、ふと思いついたことがあった。

唐突に立ち上がったエシユタンドに、クガルが不思議そうに顔を上げる。栗色の瞳にいたずらっぽい笑みを返して、エシユタンドは壁にかけられていた白い上着の胸元を探った。

「そうだ　考えることが山積みで、すっかり忘れていた。すまんな」

軽い調子でそう言って、エシユタンドが差し出した物を、クガルは怪訝そうに受け取った。小さな布包みを開いた彼が、中身をまじまじと見つめるのを、藍色の瞳が楽しげに見守る。

「これは……」

そう問う彼の瞳が複雑そうな光を帯びたこともわかっていながら、エシユタンドは微笑んだ。

「その小さな袋　ソラが言うには、お守り、というんだそうだ。持つものの守護を願って、中に何か大事な物が入っているらしい。

お前が牢にいる間に、一生懸命縫って作ったそうだぞ？　その刺繍は、お前の釈放と無事を願って一針一針丁寧に」

わざとなのか、ゆっくりと説明するエシユタンドに、クガルは一層困ったような顔になっていく。

「……彼女、ですね？」

確認するかのようにクガルが小さく問う。彼女とは誰のことか、と聞いてやるうかと思いつつ、これ以上苛めるのも酷かとエシユタンドは肩をすくめてやった。

「牢で　兵から言伝を聞きました。本当なら許されていないけれど、姫君からのたつての願いだということ……」

クガルの言葉で、空と兵たちのやりとりを思い出し、エシユタンドは笑みを優しくした。彼女でなかったなら、きっとクガルがあの言葉を聞くこともなかっただろうから。

優しい麻の布地で作られたその袋　表面に施された刺繍は、クガルの好きな花をかたどったものだった。

薄い水色の小さな花が寄り添うように連なつた、静かな森の奥にのみ咲く花。エシユタンドにも、誰にも話したことはないことを知っている。

いつも自分を見つめていた亜麻色の瞳を思い出して、クガルは瞳を伏せていた。

その表情には、いつもの穏やかな笑みはない。少し苦しげに顔を上げたクガルを、エシユタンドはただ見やった。

「私など　そんなに想われる価値のない人間なのです。彼女の想いもはね付けた。それなのに……」

独白に似たクガルの呟きを、エシユタンドは黙って聞いている。初めて見る苦しそうなクガルの顔に、少なからず驚いていた。

「牢に囚われた時、決意を新たにしました。私は　生涯を殿下に捧げるつもりです。この命は、殿下のためであればすぐにでも投げ出す覚悟ができています。ですから　こんな自分を想うことは、彼女にとって辛いだけでしょう。あきらめてもらうことが、彼女のためだというのに……」

栗色の瞳に苦悩をにじませ、話すクガルに、エシユタンドはゆっくりと口を開いた。

「本当の恋というものは　容易にあきらめることなど、できないものだ。そうではないか？　クガル」

呟いた彼の声は、優しい響きのものだった。はっとしたように、クガルは彼を見上げる。

「想いを断ち切らなければいけないとわかっていても、できない。その人のことが頭から離れず　何を捨てても、その人を求める。一緒にはいられない運命なのだとかわかっていながら……一瞬のはかない時間であってもそばにいたいと　そんな風に自分を抑えられないのが恋なのだ、私も最近知ったばかりなのだが」

話すエシユタンドのほうが苦しげに揺れる瞳をしていることに、



クガルも胸を打たれたように黙り込んだ。

「それでも……そんな恋を知らなければよかったとは思わないな。巡り会えたことを後悔したりもしない。お前は どうなんだ？」

言葉を投げかけられて、クガルはただその視線を受け止めて、苦しげに逸らした。

膝の上で組んでいた両手を解き、そつと片手で首元に触れる。無意識のような彼の仕草にエシユタンドが目をやったその時、クガルが悲しげな笑みを浮かべた。

「私は 後悔しました。自分のことよりも、相手がそうであったのでは、と今でも……」

エマナのことを話しているのかと思ったエシユタンドは、クガルの瞳が遠くを見つめているようだと感じて、開きかけた口を閉じる。

クガルはそつと微笑んで、静かに衣装の首元に手を入れた。

彼が引き出したのは、皮ひもに結ばれた紫水晶 古びた皮ひもの様子で、彼がずっと身につけているものだと思われる。

その遠慮がちな紫の輝きをしばらく見つめた後、クガルは辛そうな顔で窓の外に視線を向けた。

「私には、初恋の少女がおりました。この首飾りは、彼女からの贈り物です。ただし私の手に渡ったのは 彼女が亡くなってからでしたが……」

言われて、クガルの部族が彼を残して全員流行り病で亡くなったことを思い出したエシユタンドに、クガルも頷いた。

「彼女とは幼いころから共に育ち、まるで妹のような可愛い存在でした。その想いが恋であることに気づいた頃には、彼女には許婚が決められていた。自分の想いを口にすることもできず、私は彼女からの告白も退けました。決められた相手と一緒にするのが、彼女の幸せだと思ったからです。それなのに 彼女は自分の意思を貫いた。想いにそぐわぬ結婚はできないと、最後まで抵抗し そして

結局、流行り病で亡くなってしまった。彼女の死の後に、部屋から見つかったというこの首飾りを、私がどんな想いで手にしたか彼女の姉が、教えてくれました。代々家に伝わるこの石を真実想う相手に贈り、相手が肌身離さず身につけてくれれば、二人は幸せな夫婦になれるのだと……。彼女は、これを私に渡したいと、ずっと言っていたそうです。そんな彼女が死に　私だけが生き残ってしまった。こんな私などを想い続けたまま、彼女は……」

熱に浮かされたように話し続けていたクガルは、ようやく我に返ったように言葉を止めて、過去の傷をふさぐように大きく息を吐いた。

「王宮で殿下にお会いした時、私は決めたのです。殿下のために全てを尽くし、生きること。それだけがただ一人残された私にできる唯一の罪滅ぼしなのです　皆の命を背負っているこの私が、一人だけ好き勝手に生きることなどできない。それに　もう、彼女のよな想いを誰かにさせたくはないのです。私などを想って苦しむことは、もつてのほかだ。だから……一生涯と付き合うつもりも妻を娶るつもりもないと　」

首飾りを衣装の中に閉まって、言い終えようとするクガルの隣に、エシユタンドは腕組みをしながら、腰掛けた。

「私は　お前にそんな風に生きてほしくはないな」

エシユタンドの言葉に、クガルは弾かれたように顔を上げる。どういう意味なのかと、瞳を見開いた彼に、エシユタンドはいつもの笑顔を見せた。

「彼女のこと、部族のことも、私には口の出せないことだ。しかし　彼女がそれで不幸だったと決め付ける必要はないだろう。最期まで想い続けた、それほどに大事な相手であったお前が苦しんでいることをこそ、望んでないんじゃないのか？」

問いかけられて、クガルは彼女の面影を浮かべているかのように、戸惑ったような顔をした。

「私なら　恋した相手の幸せを望むだろうな。それに……私への

忠義は嬉しいが、男にそこまで惚れ込まれるのも複雑なものだ。忠義は忠義として、お前には幸せになってもらいたい。恋を知るのも、悪くはないと私は思うぞ？ 職務を放棄せん程度にな」

冗談めかしたように笑ったエシユタンドは、クガルの肩を元気付けるように叩く。夜はすっかり更けていて、蠟燭も残り少ない。

窓の外を伸びびをして眺めながら、エシユタンドは言った。

「さて、明日も早い。そろそろ休もう」

主のさりげない態度で、クガルはゆっくりといつもの笑みを浮かべた。

「はい　そうですね」

穏やかな返事に安堵して、エシユタンドは闇に沈んだサーバの街を見下ろす。

胸中に秘めた様々な想いは、口に出されることはなかった。互いに黙り込んだ二人は、それぞれに寢床につく。隣の寝台で背を向けたクガルを一瞬見やった藍色の瞳も、ゆっくりと閉じられた。

無事を願うただ一人の少女が、今まさに傷つけられようとしていることも、エシユタンドには知る由もなかった。

## 70・釈放（後書き）

エシユタンドとクガルの絆、そしてクガルの過去の傷、今回はちょっと切ない感じですよ。

空の危機がどうなったのかは、次話であきらかになりますので、お楽しみに！

71・救世主（前書き）

大変お待たせしました！  
空がどうなったのか、いよいよわかります。

空の意識が遠ざかる最後の瞬間、寢室の扉が開けられた。

部屋のこもった空気が動いて、エルファンドは疎ましげに顔を上げる。

「誰だ？ 誰も入るなとあれほど」

不機嫌な声で振り返ったエルファンドの瞳は、驚愕に見開かれた。部屋の扉に寄りかかり、静かに彼らを眺めていたのは侍女でも兵でもなかったのだ。

「残念だったな、エルファンド。生憎、私には入るなと言われた覚えがないんだが」

飄々とした顔で言っただけで、彼を見据えた人物。白い衣装を身にまとい、片足を少し引きずりながら部屋の中に堂々と入ってきた青年を見て、エルファンドはただ息を呑み、信じられないように呟いた。

「エーデレード……兄上」

かすれた声に呼ばれて、エーデレードは微笑すら浮かべてみせる。しかし、灰褐色の瞳が決して笑ってはいないことを、エルファンドは知っていた。

「さて、それでどうするつもりだ？」

既に瞳を閉じて、完全に意識がない状態の空を顎で示して、エーデレードは問う。そのあまりに冷静な響きの声で、余計に動揺したかのように、エルファンドはあわてて空から離れた。

「まっ、まだ何もしてないよ、兄上。本当だ。疑うんなら、その目で確かめて……」

乱れてはいない空の髪やドレスを見せ付けるように、エルファンドは声を荒げる。彼の表情を静かに見つめたエーデレードは、ゆっくりと寝台に歩み寄り、空に自分の上着を被せた。

「当たり前だ。何かしていたら、この私がただでは済まさん。知っ

ているだろう、お前がやろうとしていた行為は重罪に値する。まあ、罪で裁かれるよりも先に、エシユタンドに殺されるだろうがな」

淡々と言って、笑ってみせたエーデレードの言葉で、エルファン  
ドは改めて酔いからさめたかのように顔色を変えた。

悔しげに唇を噛んだエルファンドは、鼻息を荒く吐き出す。

「別にいいじゃないか。エシユタンドの野郎だって、昔は散々楽しんできただろう。今更純真なふりでもするっていうのか。どうせこの女とだっていつまで続くか」

言っていることが負け惜しみであるのは、十分にエルファンドも承知しながら、それでも吐き捨てるように呟く。さつさと寝台から離れて、酒瓶が並んだ棚へと苛立ちまぎれに歩み寄る彼を静かに眺めながら、エーデレードは横たわったままの空を見下ろした。

「お前には、そう見えるのか？」

あせた金色の長髪をさらりと流して笑ったエーデレードに、エルファンドは取り出しかけた瓶を戻す。

「どういう意味だよ」

ふくれたままのエルファンドを、エーデレードは優しいとすら言える目つきで見つめていた。

「エシユタンドは本気だ。あいつがもう昔のままの奴ではないこと、お前も気づいているんだろう？ 現にエシユタンドは彼女とまだ夜を過ごしてはいない」

「なっ……まさか、二人が会ってから、もうどれくらい日が経つてると……」

冗談だろう、とでも言いたげに答えたエルファンドは、エーデレードの瞳が笑っていないことを見て、驚いたように言葉を止めた。

「大切にしているのか、はたまた手を出せない理由でもあるのかそれはわからないが、それだけを見ても、エシユタンドがどれほどの姫君に入れ込んでいるのかわかる。そうではないか？」

身じろぎをした空の肩からずり落ちた上着をそっと直してやりながら、エーデレードは微笑む。

見開いたままだったエルファンドの瞳は、なんとか体裁を取り戻そうとしたのか、部屋の中をさまよって、揺れる蠟燭の炎に移された。

「はっ、そりゃあまた結構なことだ　それにしても……兄上がどうしてそんなことを知ってるんだよ」

先ほどよりは勢いを失ったエルファンドの声に、エーデレードはいつもの微笑を浮かべた。

「知っているわけではない。ただの勘さ」  
「な　なんだよそれ……」

あきれたように言い返しかけて、エルファンドは口をつぐむ。この変わった兄の勘は妙に鋭く、自分の行動ですらいつも見通しているようであることを思い出したのだった。

再び沈黙が訪れた部屋で、エーデレードが棚に置かれていた酒杯を取り、エルファンドの酒棚から取り出した酒を注いだ。

強い酒であるというのに、簡単に飲み干して彼はエルファンドに笑ってみせた。

「とにかく　私は今夜のことを見なかったことにする。姫君がどうするのかまでは責任がもてないが、少なくともそれまでは口をつぐんでおく。ただし……」

ほっとしかけたエルファンドをまっすぐに見据えて、エーデレードは笑みを消した。

「二度は許さん。わかったな」

静か過ぎる確かな脅迫に、余計に迫力を感じたのか、じり、とエルファンドは後ずさった。

「わかったよ、手を出さなきゃいいんだろ。出さないから、さっさと連れて行くなり何なり、好きにしてくれ！」

背中に流れた冷たい汗を、エルファンドはエーデレードと同じ酒を注いで飲み干すことごまかした。荒々しく手を振って、追い出すような仕草をしたエルファンドに、エーデレードは先ほどまでの恐ろしい瞳が嘘のような微笑を浮かべて、空の体を抱き上げた。



「では、お言葉に甘えてそうさせてもらおう。お前も……たまには一人で静かに夜を過ごしてみるんだな。今夜は月が綺麗だぞ？」

相変わらず何を考えているのかわからない兄の言葉に、エルファンドは無言で背を向ける。その背をしばらく見ていたエーデレードは、扉を押しかけて、ふと思いついたように口を開いた。

「今頃 エシユタンドはサーバに着いた頃だろうか。エカルドが無事であればいいのだが……お前もそう思うだろうか？ エルファンド」

答えが返ってくることをすら期待していないようなエーデレードの問いは、にこった部屋の空気に溶け込む。

エルファンドが振り返る前に、エーデレードは扉の向こうへ姿を消していた。

誰もいなくなった部屋の中で、エルファンドは分厚いカーテンをそつと開けた。

わずかな隙間からは、エーデレードが言ったとおり大きな月が姿を現す。その輝きは清々しいまでに清浄で、エルファンドは眩しげに瞳を細め、さつさとカーテンを引いた。

再び部屋は暗闇に包まれる。

「ふん、あんな奴ら……くたばっちまえばいいんだよ」

言葉の内容に比べて弱く響いた彼の呟き それすらも消してしまいたいかのように、エルファンドは手にした酒杯で揺れる液体をぐつと飲み干すのだった。

頭がわれるように痛い。

それが浮上しかけた空の意識が最初に認識した感覚だった。

体は動かせないくらいに重く、だるい。頭ががんと痛み、吐

き気すら感じた。

「ここは……？」

ようやく開けた瞳に映るのが、いつもの天井ではないことに気づいて、空はあわてて起き上がろうとした。

「ああ、まだ無理をしないほうがいい。慣れていないと、ああいう類の香は結構きついものだからね」

優しく空の肩に触れ、そっと寝台に戻した人物に、空は驚いたように瞳を向けた。

「あなたは……」

口を開きかけて、またこみ上げてきた吐き気に空は顔をしかめる。動くことも、話すこともまだままならないようだと思いい知らされながらも、空は瞳だけで辺りを見回した。

その視線だけで理解したかのように、灰褐色の瞳が優しく笑った。ちらちらと揺れる蝋燭の光に照らされた薄暗い部屋で、彼の金髪が綺麗に浮かび上がっているように見えた。

「心配なさる必要はありませんよ。ここは私の宮の一室。もう、危険なことはない」

その言葉で思い浮かんだ面影　いやらしいエルファンドの笑みが蘇ってきて、空は信じられないように瞬きをした。

「あなたが、助けてくれたのですか……？」

なんとか問いかけた空に、エーデレードはそっと肩をすくめる。

「まあ、形はそうなりますかね。実際に教えてくれたのは　実はレアーデなんです」

名を聞いて思い出すのは、厳しい灰色の瞳と威厳すら感じられる堂々とした態度の、あの侍女長。

そういえば、あの時も助けてくれたっけ。

舞踏会でエルファンドに迫られかけたあの時、颯爽と間に入ってくれたのもレアーデだった。

妙にあせっていたエルファンドを思い起こして、空は一瞬笑いそうになる。まだ感覚がおかしくて、口元がわずかにゆがんだだけだ

ったが。

「エシユタンドの宮から抜け出すあなたを、偶然見たのだそうです。すぐに姿を見失ってしまったけれど、どうやら手引きした兵がいたようだとかわかって、彼らを締め上げたらあっさり白状したらしい。エルフアンドに金を渡され、あなたを連れてくるよう命令されたからね。彼らも厳罰に処してはいますが、なにぶん問題が問題だ。抵抗できない女性を我が物にしようとするのは、ただでさえ重い罪なんですけどね。王族間で女性をめぐって起こった場合、特に厳しい処罰が与えられることになっているので……レアーデも表立っては対応しにくいと、私にまず相談を持ちかけたというわけです。ちなみにレアーデは今も隣の部屋で控えていますよ、万が一私までがあなたに変な振る舞いをしないように、とね。だから、心配なさらずに」

説明する口調は軽いものであるのに、内容は笑えないものだった。「厳しい処罰って、どういう？」

やっと少し自由が戻ってきた口で、空は訊ねる。エーデレードは何でもないかのように空を見た。

「死罪、ですよ」

驚き、目を剥く空の様子を、エーデレードは静かに見ている。

「どうします、エルフアンドの罪をあきらかにしますか？ あなたがそれを望むなら 私が証人になりましょう」

あっさりと言われて、空はあわてて首を振った。

「いつ、いいです。別に……そりゃあ嫌だったけど……一応、何もされずに済んだわけだし」

確かに許せない企みであったとはいえ、エルフアンドをそこまで憎んでいるわけではない。第一、自分のために誰かを死刑にするなんて、とんでもないと空は身震いすらしした。

空の言葉で、エーデレードは静かな微笑を浮かべる。

「よかった。あなたなら、そう言ってくれるのではないかと思えました。あれはどうしようもない愚弟ですが、私にとっては唯一

血を分けた肉親ですからね。いくら重罪であっても、未遂だったのだから、死なせるにはしのびないと思っていたのですよ」

本当に思っていたのかというぐらい淡々と言ってみせたエーデレードから、空はわずかに瞳を逸らした。

「それに……半分は私のせいですから。出ちゃいけないってわかってたのに、どうしてもエシュタンドたちが心配で飛び出してしまったんだもの。軽はずみなことをして、自業自得なんです」

あのままエルファンドの手にかかっていなくて、本当によかった。正直に安堵に包まれながらも、代わりに押し寄せてくるのは自嘲の思い。

こんな時に エシュタンドに対しても、エカルドに対しても申し訳がない。

寝台の掛け布を握り締めて、俯いた空をしばらく眺めていたエーデレードは、優しく肩を叩いた。

「では、エシュタンドにも秘密にしておくことにしましょう。私は何も見なかった。あなたもエルファンドと会わなかった。そういうことでいかがですか？」

いたずらっぽく提案されて、空は力なく笑った。氣遣ってくれたのだとわかって、改めて助けてくれたのがエーデレードでよかったと思えたのだ。

「あの エシュタンドたちは、今どこに……？ あれから、魔のモノとはどうなったんでしょうか。無事にいるのか、すごく心配で」

「そもそも宮を飛び出した原因となった恐ろしい映像 想緑珠が見せてくれたあの光景を思い出し、空はあせったように訊ねた。

揺れる黒い瞳を受け止めて、エーデレードは真剣な顔をした。

「彼なら、西の森へ向かう途中のサーバという街に到着した頃でしょうね。エカルドを連れ去った魔のモノたちを追い、彼を救出するために先刻出発したのです」

「エカルド、王子が連れ去られた ? そんな……それで彼は無

事なんですか？ エシユタンドは？」

やはり、と不安が的中したことを知って、空が混乱したように問う。起き上がるうとする空の肩を、エーデレードが落ち着かせるように優しく支えた。

「とりあえず、エカルドは怪我を負ってはいるようですが、命は無事なようです。今のところ、と言っしかない状況ではありますが……。エシユタンドは大丈夫。魔が狙ったのはエカルドだけだったようですからね。緊急に捜索隊として出発した、というわけです」

「そう、なんですか」

ほっとしていいものなのかどうかわからないまま、空は寝台の掛け布を握っていた手の力をゆるめた。とりあえず、いてもたってもいられなかった不安は解消されたのだ。決していいとはいえない状況だけれど。

そのまま瞳を伏せてしまった空のそばで、エーデレードがああ、と思い出したように声を上げた。

「そうそう、その捜索隊にどうしても必要だからと、エシユタンドの私兵隊長が釈放されたそうですよ。仮の処分ではあるようですが」

「本当ですか？ よかった……！」

顔を上げ、思わず両手を合わせた空を見て、エーデレードが微笑む。

「少しは元気が出たようですね、やはりあなたには笑顔のほうが似合う」

何でもないようにそう言われて、空は気恥ずかしくなつて視線をそらした。どう答えたらいいかわからなかったのだ。とにかくケガルの釈放は願ってもないことで、それを知ってどんなにか喜んでいられるだろうエマナの反応を思うと、嬉しくなる。それでも同時に新たな心配が胸の中に膨らんでいくのを感じていた。

エカルドを連れ去ったという魔のモノを追って、エシユタンドは行ってしまった。

自分だけが何もできないでいるうちに、事態はどんどん深刻にな

っていくかのようにだった。

考え込む空の隣で、しばらく黙っていたエーデレードは、静かに立ち上がり、蝋燭の炎が揺れる窓際へと歩み寄る。

窓枠にそつと肩を預けた彼が、闇に目をやったまま、ぽつりと呟いた。

「こんな夜は　ずっと前に忘れてしまった心を思い出させる」

まるで何かの詩でも読むかのような呟き方に、空はただ瞳を瞬かせた。自分の想いにふけっていたのは、空だけではなかったらしい。きよとんとした空に気づいたのか、エーデレードはいつもの微笑を取り戻して、彼女を見た。

「もう、捨てたつもりでいたはずの思い出の話ですよ　そうやって、エシユタンドを想うあなたを見ていると、特にね　」

彼が開けた窓の隙間から、夜風が優しく吹き込んでくる。風は思った以上に冷たくて、収穫の季節が通り過ぎていこうとしているのがわかる。

何のことだろうと見上げた空の前で、エーデレードは金の髪を風に流したまま笑ってみせた。

71・救世主（後書き）

長くなったので、変なところで次話へ続く、となっちゃいました。  
またあまりお待たせしないように更新頑張りますので、どうぞお楽  
しみに！

「不思議ですね　誰かに話したいと思ったことなど、今までなかったというのに。あなたになら、なぜか話してもいいような気がして……」

静かな静かなエーデレードの微笑　いつもどこかに抑えたような色があった彼の笑顔は、今はとても自然に見えた。

動かせるようになった体で、なんとなく空はエーデレードの隣に並んだ。

「ご存知の通り、私の母はもうずっと前に亡くなりました。私ですらおぼろげな記憶しかなくくらいだから、エルフランドなどは、母の顔すら覚えていない頃です。そういう事情ですから　私たち兄弟には、物心ついた頃から王位継承者としての資格はなく、ただ王子としての身分があっただけだった。そのことを不満に思ったこともないとは言えない。母を恨んだことも、いや、それよりも先に父を恨めしく思っていた時期もありました。なぜ、王位継承者ではないというだけで、こんなに蔑まれなければいけないのか　なぜ、父は私たちを顧みないのか　とね」

初めて聞かされたエーデレードの心に、空は言葉を失った。いつも穏やかで、静かにただ全てを受け止めているかのようなだった彼にも、やはり痛みや苦しみがあつたのだと改めて気づかされたような気持ちだった。

そうだ、辛い思いをしたのは、エシユタンドだけではない。いや、エーデレードやエルフランドのほうが、むしろもっと……。何も言えないでいる空に、エーデレードは笑う。

「ああ、いいですよ。別にあなたに同情されるためにこんな話をしたのではない。もう全ては過ぎた感情です、幼かった頃の　王と同じ灰褐色の瞳は、言葉通りに穏やかだった。その瞳も、髪の色も、おそらくは若かりし頃の王にそっくりであるはずで　そ



れなのに父親とは全く違う人生を歩まなくてはならなかった彼がどんな思いで生きてきたのか、空には考えさせられずにはいられなかった。

「今となつては、自分が王位継承権を持っていなくてよかつたときえ思っているんですよ。王宮を取りまとめ、ひいては国を動かしていくということは、あまりにも重い役目だ。自分がそれほど器にはないことが、今ではよくわかります。こうして自分の宮で静かに時を過ごしていくことが、自分には似合いの人生だとね」

おどけたように言うエーデレードを、空はためらいがちに見上げる。本当なのか、どうなのか、それでもエーデレードの静かな微笑は、既に今のあり方を肯定しているように見えた。

「ただ……私にも全てを捨ててもいいと思つた時があつた。まだ少年の頃の、懸命な恋でした」

そこで初めてエーデレードはわずかに表情をゆがめた。過去の痛みを思い出しているような、微妙な笑顔。

「彼女は、王宮で働く既番の娘で……馬が好きだつた私は、父親の手伝いでやってきていた彼女とよく顔をあわせていて、明るい笑顔と優しさにすぐ惹かれていった。将来の約束を交わすぐらいに、幼いながらも真剣な恋だつたのです。けれど、そのことが父上の知ることとなり、当然のごとく父は反対した。断固として二人のことは許さず、彼女の父親もろとも王宮から追放を命じました。抗議した私に、父は言いました。王子としての身分をわきまえよ、と」

「思わず想像して顔をゆがめる空の隣で、エーデレードは拳を握りしめ、それに気づいたかのようにふと表情をゆるめて、風で垂れた金の髪をそつとかきあげた。

「私には、納得が行かなかつた。王位継承権もない、何の価値もない王子としての身分。そんなくだらないもののために、彼女と引き離されなくてはならないのか、そう思うと耐えられなかつた。そして私は王宮を飛び出した。彼女を迎えに行つたのです。身分も、何もかも捨てるつもりだつた。けれど追っ手は差し向けられ、馬で

逃げようとした私たちを取り囲んだ。威嚇で射られた矢に驚いた馬が暴れて、彼女もろとも私は落馬した。必死でかばったつもりでしたが、彼女は打ち所が悪く……亡くなりました」

「そんな！」

声を上げた空に、エーデレードは逸らしていた顔を静かに向ける。悲しい笑みを宿して。

「たった一度の恋は、私から全ての衝動と、片足の自由を奪いました。悔やんでも悔やみきれない過去に私は苦しみ、何年も無気力な日々を過ごした。いつしか全てをあきらめることを知ってから、楽になりましたが、エシユタンドも昔は同じような目をしていましたが、あなたに出会って変わった。それで、私はあなたに興味を持ちました。どんな少女が彼の氷を溶かしたのか、とね。あなたたち二人を見ていると、昔の私を少しだけ思い出すのです。あの時、私が彼女を守っていたら……もつと強くなれていたら、今頃どうだったんだろう。そんな風にさえ思わせる。だから、あなたたちには幸せになってほしい。王宮のくだらないしがらみに惑わされずに、二人の想いを貫き通してほしい、などとね。全て私の勝手な感傷なのかもしれませんが」

言つて、優しく微笑んだエーデレードを、空はまっすぐ見ていることができなかった。

だって、あまりにも悲しい……。

静かに語られるからこそ、余計に彼の痛みや苦しみが伝わってくるようだった。悲しすぎる過去を、全てをあきらめることで乗り越えた、だなんてそんなの。

潤みかけた瞳をごまかすかのように、月を見上げた空を見て、エーデレードは笑った。

「まあ、エルファンドのほうも色々悔しい思いをしてきたといえるでしょうね。そこで酒と女性に走ったところが、私と彼の違いですが。エルファンドの犯した罪を許しはしませんが、やはり同じ立場であるだけにわかるような気もしてしまうのですよ。自分にはど

うにもできないことで、勝負すらできない　そう思う悔しさもね。エルファンドからすれば、母を亡くし、同じ立場であったはずのエシユタンドが魔の力だけで成り上がった　そう思うと許せないのでしょう。完璧な彼に、いつも女性の人気も集中していましたからね。そんなところもエルファンドからしたら、面白くない部分だろうから。とにかく、不憫な弟ですよ」

そんな風にエルファンドのことを語るエーデレードは、まぎれもない兄の顔をしていた。同じ母と父のもとに生まれたことで、やはり情もあるのだろう。

空は複雑な思いを整理できないまま、静かに息を吐いた。

エシユタンドだって、辛い思いをいっぱいしてきている。けれど、今王位継承権を持つ彼は、エルファンドにとって許せない対象なのかもしれない。

そういう風に見れば、エカルドだって正当な王位継承者であったはずが、エシユタンドにそれを奪われた形になる。エカルドにだって、悔しい思いがあるのかもしれないのだ。

少なくとも空の知るエカルドは、恨みつらみを言いそうには見えないけれど。

兄弟の間で渦巻いてきたであろう様々な感情を思うと、なんだか息がつまりそうな気すらした。

王宮という場所と環境ならではの難しさ　今まで空が生きてきた中で、想像すらしたことがないものだ。

もちろん、王位をめぐる王妃との争いだって。

そこまで考えてから、はっとしたようにエーデレードを見上げた空に、なぜか予想していたかのような静かな視線が返ってきた。

「そう、私は以前あなたに言いましたね　王宮という場所で、あなたが生きていくのは難しいかもしれない、と」

「……ええ」

そう、確かにあの時、エーデレードが言った。その言葉の意味があの時はわからなかった。

けれど。

今の自分にとって、重苦しいほどに押し掛かってくる言葉。

エシユタンドと共に生きるということは、そんな場所で息を吸いながら過ごしていくということなのだ。

「もう一度、私はあなたに問いたいと思っています。暁の姫君。今度は、質問をはつきりとさせてね。あなたは　この世界でエシユタンドと生きる覚悟がありますか？」

微笑みをおさめて、静かに問うエーデレード。灰褐色の瞳がしっかりと自分を捉えている。

空は彼の瞳に、その言葉に射抜かれたようにただ目を見開いていた。

夜の闇は色を変え、静かな部屋をゆっくりと照らし始めていた。

\*

夜明けを待ちきれぬように、捜索隊は出発した。

闇さえ明ければ、魔の襲撃にも備えられる。少しでも早いエカルドの救出が一番であるからには、ゆっくりと休んでいる暇などなかった。

サーバの街を抜け、街道にまた差し掛かった頃には、辺りは白々と明るんでいた。

「殿下、まだ魔の気配はございませんね」

隣で馬を走らせるクガルの声に、エシユタンドは頷いた。彼ほどではないにしろ、クガルも魔の気配を感じることができるのだ。

「しかし、これから街道沿いに林が続く。木々で視界が悪くなるから、万が一の襲撃に備えなくてはならんな」

しつかりと隊列を組んで駆ける騎馬隊　背後についてくる馬車隊のことも思つて、エシユタンドは苦い顔をする。

「はい。先ほどベニエとも連絡を取つて、万全を期してはおりますが　なにぶん、急激な成長を遂げている相手ですから、油断は禁物でございますね」

クガルの言葉に、エシユタンドは短く返事をして前を見据えた。

段々と木々が密集しはじめている街道　突然の襲撃があれば完璧に防ぎきるのは難しい。しかしそれを恐れて一番の近道であるこの街道からそれるのも賢明ではない。何しろ、事態は一刻を争うのだ。

エカルドの怪我の具合を思えば、ゆっくり回り道などではいられないのが本音だ。今命が危うくないとしても、あまり出血が過ぎると助かる命も助からなくなる。

なぜ直接手を下した自分を狙わず、弟を連れ去つたのかと改めて舌打ちしたくなる思いを抑えながら、エシユタンドは馬を急がせた。首につけたチョーカーにも無意識に手をやっってしまう。空の安否がまだ知らされないことが、思った以上の不安となつて、エシユタンドの心を占めていた。

「殿下　あれを」

声をかけられて、魔のモノかと一瞬緊張が走りかけるが、クガルが指差しているのは、道沿いにぽつりと姿を現した小さな村のようだった。

何事だ、と口を開きかけたエシユタンドの瞳に、幾人かの村人が座り込んでいるのが見えた。

やせ細つた小さな子供たちがぼんやりと口を開け、座り込んでいる。その隣では親らしき男女が目を閉じたまま、眠っていた。

その異様な様子に眉を寄せたエシユタンドは、辺りを見渡して、村の家々が壊れかけたまま放置されていたり、崩れた石が街道にま

で転がっているところがあることに気づいた。

「これは どういうことだ」

以前この街道を通った時には、小さいながらももう少し活気のある村だったような。

エシユタンドが記憶を探る間にも、馬は走り続ける。

木々も増え、視界を阻まれながらも、時折見える畑にも収穫したあともなく、枯れているようである。ついには街道沿いに並ぶ木々の中にすら、葉は落ち、すっかりと朽ちかけたものまであるのが目立ち始めた。

「クガル、この辺りの村に、何か飢饉などでもあった報告は」

ついに訊ねたエシユタンドに、クガルも首を傾げながら視線をさまよわせる。

「いいえ、特には 殿下もご存知の通り、特に長雨などの不天候があつたわけでもありません」

疑問に思いつつも、今は調査している余裕はないと、エシユタンドは眉をひそめながらも馬の足を止めずにいた。

しかし、長い街道を進みながら、現れる村のどれもが同じような様子で、その中には村人の姿さえ見当たらぬものもあり、明らかに荒廃していると言えない状況だと認めざるを得ないのだった。

とにかく救出が無事に済んだら、早急な調査が必要なようだと言げようと、エシユタンドが背後にやっていた目を前方に戻した、その時だった。

「殿下！」

クガルの声が上がると同時に、ひゅっと目の前に飛んできたものに、エシユタンドは咄嗟に手綱を引いた。いなく馬から数歩も離れぬところに落ちていたのは、火が灯された矢であったのだ。

「何者だ！」

エシユタンドを守るように立ちはだかつて、馬上でクガルの厳しい声上がる。

皆が馬を落ち着かせて、視線をさまよわせたその瞬間、がさがたと音がして、枯れた木の葉が頭上から落ちてきた。

「何者って、お前からこそ何者だってえ話だ。なあ、みんな？」

木の上から軽い身のこなしで降り立ったのは、筋肉の盛り上がった肩をした、いかつい男。

ひげ面をにやりとゆがめながら、次々と木陰から現れる仲間らしき男たちに問いかけている。

「そうともよ　どうせ、大層な格好してるからには、どっかの偉いさんの軍隊だか、なんだか知らないけどさ。こっから先はただで通らせるわけにはいかねえ」

手に手に武器らしき石の斧や短剣、弓などを振り上げて、威嚇してくる男たちに、クガルもあつけにとられたような顔をしていた。

確かに目立つのを避けるため、エシユタンドは王族とわかるような服装はしておらず、各兵たちも武装をしているだけである。

だからといって、あきらかに村人が相手して勝ち目のあるような集団には見えないはずだ。それを堂々とこうして足止めしてくる男たちのほうが、疑問に思えたのだった。

私兵隊の面々も、どうするべきかといったような顔でクガルとエシユタンドを見やった。

「おいおい、おっかなくて声も出せねえんじゃねえの」

「悪いこと言わねえからよ、さっさと金目のもん置いて、引き返しな。大人しく言うこと聞きさえすりゃあ、悪さはしねえよ」

にやにやと笑いながら、平気でエシユタンドに向かって言葉を吐く男たち　それはあきらかにただの野盗にしか見えなかった。

しかしそれなりに慣れた様子であるところからして、このような行為が一度や二度ではないらしいことがわかる。

あまりの口の聞きように眉をしかめて、ついにクガルが口を開きかけた時、エシユタンドが押しとどめるように片手で遮った。

「殿下　」

クガルが小声で止めようとするのを抑えて、エシユタンドは男た

ちの前まで馬で歩み寄った。

「お前たち 誰かの命でこんなことをしているのか？」

冷静な声が振ってきて、今度は男たちが一瞬啞然としてから、あわてたようにエシユタンドに武器を見せ付けるようにする。

「おい、誰が近づいてきていいって言った！ あと一歩でも近づいてみる こいつで……」

男の一人が矢を射掛けようとするのも気にせず、エシユタンドは更に近づく。平然とした藍色の瞳が、男たちをまっすぐに見下ろした。

「質問に答えよ。誰かの命でやっていることか、と聞いている」

はつきりと威厳にあふれた彼の声に、男たちはついに狼狽したかのように顔を見合わせた。どうやら只者ではないらしい、とようやく勘付いたようだった。

皆が見守る中、最初にエシユタンドたちを襲ったらしい、矢を手にした一番体格のいいひげ面の男が口を開いた。

「だっ、誰かの命なんてねえ！ 俺たちは俺たち自身の意味でやっているんだ。わかったらさっさと」

「そうか、それならもう一つ聞こう。お前たちのような者が他にもいるのか？」

口にしたかけた威嚇を無視されて、憤慨したような男の顔を涼しげに見下ろして、エシユタンドは再度訊ねる。

「こっ、この」

赤い顔で何か言いつのろうとした男は、藍色の瞳が剣呑な色を帯びて閃いたことに気づいたのが、ついに迫力に屈したように矢を下ろした。

「そっ、そりゃあごろごろいるさ そんなこと聞くなんて、あんたらこの辺のこと知らねんだな。ここを過ぎれば、もっと山賊や盗賊どもが増えてるって話だぜ。なんせ、森が荒れて、作物も獲れない。生活していくには、こんなことでもするしか」

男はついつつかり、とでも言った様子で口にしてから、あわてて



顔を引き締めた。一瞬見えた彼の正直な顔は、ただの農夫のようだった。

エシユタンドは思わずクガルと顔を見合わせる。彼の瞳も、先ほどまで見てきた荒廃した村の様子を思い出していることがあきらかだった。

「とつ、とにかく　先を行くんなら、せいぜい気をつけるんだな。俺たちなんかより厄介な奴らに出くわすだろうし。どっかの偉いさんなら、せいぜい王宮にでも話を通してくれよ。農民は貧窮にあえてますってな。王宮でふんぞり返った王様なんかは、俺たち農民が困ってようと、どうせ気にもしねえかもしんねえけどよ」

根はすっかり普通の農民であるらしい男に、あきらめ半分のように笑われて、エシユタンドはわずかに瞳を曇らせる。そのことには気づかぬように、男たちはかなわぬ相手と悟ったのか、すごすごと林の奥へ退散していった。

「約束しよう　必ず」

彼らの後姿を見送ってから、小さく呟いたエシユタンドの声は、そばに控えたクガルにだけ聞こえていた。

## 72・問い（後書き）

空に向けられたエーデレードの問い、今までの迷いの全てが凝縮されたその言葉に、空はどう反応するのか。

また、エシユタンドたちの一行が目にした森や人々の荒廃は何を意味するのか。

これからの展開もお楽しみに！

### 73・覚悟（前書き）

かなり多忙で、更新をまたお待たせしてしまいました。  
続きが気になっていた方、すみませんでした。

### 73・覚悟

明るみ始めたエーデレードの宮の一室で、空はただ灰褐色の静かな瞳を見つめ返していた。

何と答えればいいのかわからずに、それでも瞳を逸らすことができなくて。

言葉の出ない空をしばらく見ていたエーデレードはふっと表情を和らげた。

「そんなに困らせるつもりではなかったんですがね　やはり、あなたが一番悩んでるのはそこですか」

闇が明け、エシユタンドの宮とは雰囲気の違いが木立が見える窓のそばで、エーデレードは微笑む。

「それは……」

思わず視線を外した空の内心をお見通しであるかのように、灰褐色の瞳は優しい。

「いいんですよ、別に私の前で無理をする必要もない。それに王宮や王族というものに不慣れなあなたが戸惑うのは当然のことです。

それだけではなく、なにせあなたは別の世界からやってきたというこの世界で生きる覚悟を決めるのが相当な決断であるだろう」と

とは、私にも想像がつきます」

「殿下……」

「あくまで、想像しかできませんがね」

見上げた空の黒い瞳にいたずらっぽく笑って、エーデレードは窓の外に目を向ける。既に宮の外には薄もやが立ち上り、朝の訪れを告げていた。

「エシユタンドが無理強いできない訳は、そういうことが」

独り言のような呟きに、空が怪訝な目を返すが、エーデレードは何でもない、という風に肩をすくめてみせる。

「とにかく、しっかり熟考なさるといい。あなた自身の人生ですか

らね。ただ、時間の猶予はあまりなくなってきた。それはわかりですね？」

エーデレードの冷静な瞳に空は眉を寄せ、首を縦に振る。

それはわかつている　もう、十分に。

エシユタンドの正式な婚約者として認められた今、このままこの国で生きていくことは、そのまま婚約式、そして結婚式までも迎えるということだ。

自分の迷いが原因で、エシユタンドに辛い思いをさせていることも、空の勝手な事情で国全てを巻き込んでしまう恐ろしさも、十分にわかつている。

頭では理解できているのに、決断を下せないのは　自分の弱さ、ただそれだけ。

自分が選ばれてしまった以上、決めなければいけない。なぜ自分が、とか、そんな抵抗はもう通用しないところまで来ているのだから。

苦渋を表情ににじませる空に気づいているのか、いないのか、それでもエーデレードは微笑んだ。

「朝がやってきた　もう、お喋りの時間は終わりのようです」「にこり、と笑いかけてきたエーデレードの本意がわからず、空はただ彼を戸惑いがちに見上げた。

金の髪を風に吹かせるままにしながら、エーデレードは空を静かに見下ろす。

「私がこんな話をしたのは、あなたの心が知りたかったからです。とりあえず、今、あなたがすべきことは何なのか　今回の事態の打開には、あなたの役割もきつとあるはずだ。選ばれた者としての、ね。もちろん、中途半端な思いではかえって危険を招きかねない。だからこそ、あなたにその覚悟があるのか聞きたかったのです。今すぐに全てを決めるとは言いません。ただ、もしもあなたが望むなら　私は協力を惜しまない。できうる限りの方法で、未来の義妹を助ける気持ちは私にはあるのだと　知っておいていただきたか

ったのですよ」

「協、力……？」

思わず問い返した空に、エーデレードはいたずらっぽい笑顔を見せた。

「そう、例えば具体的な方法で、ね」

灰褐色の瞳がきらりと閃く。

その光を、空はきよとんとして見つめるのだった。

朝日が完全に王宮を染め上げる頃、空は衣装を改め、跪いていた。彼女を見下ろしているのは、灰褐色の瞳。

しかし、先ほどまでの静かなエーデレードのものではなく、彼の過ごした年月の深みを感じさせる、厳しい王の瞳だった。

王座に落ち着いた王と、隣に並んだ王妃の目線を感じながら、空は決意を込めた瞳をまっすぐに上げた。

その身にまとった、いつもとは違う衣装の感覚を噛み締めながら。「私に話があるそうだな、暁の娘よ。しかし、その格好は一体」  
「わずかに不思議そうな色を覗かせる王の瞳に、空は再び緊張が込み上げるのを感じつつも、目線は逸らさずに頷いた。

「はい。それこそが、お話ししたい件でございます」

すらりとした空の体を包むのは、いつも着せられているドレスではなく、まるで私兵隊の一員であるかのような武装だった。銀色の胸当てや肩当てが光を放っている。

初めて身につけるはずの男物の武装であるはずが、なぜかすんなりと体になじんでいる。

空の不思議な感覚は、皆の目に浮かぶ感嘆の色からも、その場にいる全員に共通の印象のようだった。

黒い短髪をわずかに開いた窓から吹き込んだ風にそよがせながら、

空は真剣な表情で王を見上げる。

「この度の事態、遅ればせながら聞き至りました。末の殿下救出のため、この私に何ができるのか 及ばずながらも考えました結果、暁の娘として 私にしかできないことがあると、そう思い、このような衣装で参上した次第でございます」

「エカルドの、救出のためだと ?」

「どういうことか、と怪訝な顔をする王に、空は頷く。

「はい。女物のドレスでは、戦いに不向きですので  
戦い、ですって?」

何を言っているのだ、といわんばかりの声は、王妃のものだった。エカルドが連れ去られてからの心痛でなのか、顔色は悪く、ごまかすように塗られた白粉がいつもと違う彼女の状態を余計に表しているようだった。

「ええ。もちろん、私は訓練された兵でも男性でもない。戦力になるとは思っていません。この武装も、万が一の時、邪魔にならないようにするためのもの ですが、私にしか使えない、剣がありますから」

しっかりと答えた空の言葉で、王は思わず腰掛けた椅子から背を浮かせた。

「白水晶の 剣のことか!」

滝の精霊から託された聖なる剣 その存在を今改めて思い出したように、王は叫ぶ。そしてそれを見つめる王妃の瞳にも、わずかな光が浮かんだように見えた。

「そう あの剣を託されたのは、まぎれもない私です。癒しと浄化の力を持つあの剣は、きつと魔との戦いに役に立つはず。実際に使ったことはまだ一度しかありませんが、それでも私にしかできない役目である以上、王宮でただ救出の結果を待っているだけの姫君ではいられない。そう思ったのです。どうか私に 殿下救出の命を、捜索隊としてエシュタンドの後を追うことをお許しいただけませんか、陛下  
「!」

堂々と言葉を終え、輝いた黒い瞳。見開いた目でそれを受け止めていた王は、瞬きを数度した後、いつもの静かな表情を取り戻し、口を開いた。

「して 兵はどうするつもりなのだ。私に、王宮軍を更に動かせと？」

まるで彼女の反応を確かめるかのように、細めた瞳で射抜くように空を見つめる。

王の威厳に負けぬように、空は微笑んですらみせた。その笑みに内心の不安も全て押し隠して。

「いいえ。兵なら 既に揃っております。第一殿下直々の申し出を受け、殿下付き私兵隊をお借りし、出発の用意も全て整えました」  
王族の席に腰掛け、静かに見守っていたエーデレードと視線を合わせ、空は言った。すぐさまその言葉を裏付けるように、空の背後にエーデレード付き私兵隊の全員が並んだ。

意外な答えに驚きを隠せぬように、王は二人を交互に見やる。

エーデレードの微笑は、何事にも動じないように穏やかだった。

「本当、なのだな エーデレードよ」

落ち着きを取り戻そうとしたのか、咳払いをした王が問う。同じ色をした瞳がぶつかり、エーデレードは笑った。

「ええ、父上」

「しかし お前の警護には」

訊ねかけた王に、エーデレードはいたずらっぽく隣の席の弟に視線を送った。

「ご心配は無用ですよ、父上。私の警護は、エルファンド付き私兵隊の兵たちが兼務してくれることになっております。エルファンドのせひに、という優しい心遣いのおかげでね。まあ、魔が私たちまで狙うという可能性は低いでしょうから なんとかありますよ」

にこやかに話すエーデレードに、エルファンドはなんともいえない表情でただ目を背けている。兄弟の様子を驚いた顔で見つめたまま、王は椅子に座りなおした。



「エルファンド、確かなのだな？」

問われたエルファンドは、長い前髪をいやそうにはらいのけて、肩をすくめる。

「はい、父上」

渋々といった彼の瞳は、跪いたままの空に一瞬向けられ、すぐに逸らされた。

空へと舞い戻ってきた王の視線　複雑なものがひしめいていたようだった灰褐色の瞳は、ゆっくりといつもの光を取り戻す。

静まり返った王族の間で、王はマントをはらって立ち上がった。

思わず頭を下げた空を見つめて、王は今度こそ威厳に満ちた表情で口を開いた。

「では、ミデイス王国、国王の名を持つて命ずる　暁の娘、ソラよ。聖なる白水晶の剣を手にし、エカルドの救出のため、エシユタンドを追って捜索隊に加わることを許す。その癒しと浄化の力を持つて、魔との戦いに備えよ！」

「はっ！」

響いた空の返答　深く頭を下げ、膝をついた彼女の姿は、既にただの『姫君』ではなくなっていた。

再び上げた顔に宿る決意と想いを読み取ったのか、王妃すら言葉も出せずに見つめる。

皆の前で、用意された白水晶の剣を受け取った空は、天に捧げ持つようにして、瞳を閉じた。

夜の間、エーデレードと話したこと、今までの葛藤、様々な想いが頭をめぐる。

けれど、今すべきことは、ただ一つ。

エカルドを、救いたい。そしてエシユタンドの　役に立ちたい。ただ、それだけ。

全ての迷いに蓋をして、空は進むべき道に乗り出したのだ。いずれ下さなければならぬ決断を前に、一歩を進むこと。

それが今の空にできる、精一杯の役目だから。

心を決めた空の背に、王が声をかける。

「無事に戻りなさい ソラ。第一王子付き私兵隊よ、彼女を守り、全力を尽くして従え。よいか！」

一斉に叩頭した兵たちの間を黒髪の少女が歩んでいく。

その光景は、どこか不思議な迫力を醸し出してさえいるのだった。

\*

王宮を出発してから三日が経った。

通り過ぎてきた街道沿いの村は既に五つ。そのどれもが隠しようのない荒廃を見せ付けていた。

それが西へと進むに連れてひどくなっていくことに、エシュタンドは懸念を抑えきれずにいた。

「殿下、もうすぐケリエの街に到着いたします」

クガルの声に、エシュタンドは考え込んでいた瞳を上げる。

サーバに並ぶ宿場街、ケリエ ここを過ぎれば、いよいよテーローザの森まであと二日だ。最速と言える騎馬隊での道のりだから、後続く馬車隊にはもう少しかかる計算だった。

「ケリエには日暮れまでに入れそうですね。十分な休息を取ってから、テーローザへ発つことができそうです」

後半は独り言のように話しかけてきたクガルに頷き、エシュタンドは木々もまばらになり始めた街道の先を見やった。木々といっても、葉が落ちたものがほとんどだったのだが。

森の荒廃が、人々の荒廃を生んでいるのだろうか。

それとも、逆であるのか。

頭に回っていた疑問に答えは出ることはなく、エシュタンドは瞳を伏せる。あの時出会った野盗めいたことをしていた農夫たちの話が忘れられなかった。

森の恵みがなくなってきたと、と言う。その結果、貧窮にあえぎ、生活に苦しんでいると。

王宮にはそんな報告は全くなかった。王国各地で行われた収穫祭も無事に済み、例年のように作物は豊かに獲れていたと聞かされていた。

自分が全く知らないところで、いつの間にか進んでいた荒廃。そのことで苦しんでいた国民。何も知らなかったでは済まされないのだ。王族、いや王位継承者としての立場にありながら。

比較的王宮に近い村や街ではひどい荒廃はなかったことは確かだ。サーバの街でもその証拠に目立つ変化は感じられなかった。

しかし、現実には森は傾いていたのだ。あの精霊たちが訴えたとおりに。

彼らの嘆きは、目に見えない部分。人心の乱れが森の木々へ影響を与えている、といった話ではなかったか。

それが今では目に見えるようになってきている、ということなのか。

王宮の行事や他のことで手一杯で、対応が遅れたことから来る結果だとしたら、民を苦しめたのは自分たちの不覚でしかない。

そこまで考えて、ぎり、と唇を噛んだエシュタンドは、ようやく隣で栗色の瞳が自分を気遣わしげに見ていることに気づいた。

「殿下

何と言えはいいか迷っているようなクガルの顔に、エシュタンドは気持ちを切り替えたように微笑んでみせる。

「何でもないんだ。そうだな、ケリエでまず馬も兵も休ませてやらねばな

「……ええ、そうですね。それに、殿下が一番お疲れの顔でいらっ  
しゃいます」

控えめに微笑むクガルの瞳は、彼の苦悩などお見通しであるよう  
に優しかった。

苦い笑みだけ返して、エシユタンドは遠く見えてきた石造りの門  
ケリエの街への入り口を見つめた。

そうだ、今考えるべきなのは、まずエカルドの救出。森の危  
機も、民のことも、現時点で全て同時に対処するのは不可能なの  
から。

そして……。

頭に浮かぶ黒髪の少女の面影を無理にも胸の奥へ追いやって、エ  
シユタンドは馬を走らせる。

愛馬の白い毛並みをいたわるようにそつと撫でて、速度をゆるめ  
かけた、その時だった。

「待ちな！」

鋭い声が響いたかと思うと、エシユタンドたち騎馬隊の進路を邪  
魔するかのようになり、石畳の上に松明が投げられたのだ。

途端にいななく馬たちを抑える兵たちの中、即座に反応したのは  
クガルだった。

エシユタンドを守るように街道脇へ押しやり、背に結わえていた  
矢筒から取った矢をつがえて声のした方向を探す。

「何者だ！ 姿を見せろ！」

やはりあの農夫たちが言った通り、また野盗の類なのかとエシユ  
タンドもすぐさま体勢を整え、落ちた松明を睨み付けた。

ここまで出会わなかったのが幸運であっただけだったのか。油断  
はならないのだと改めて彼が姿勢を正すのと同時に、背後から声  
上がる。

「隊長！ 後ろです！」

隊列の最後尾にいた兵の言葉で全員が振り返る。

背後の荒れた森から姿を現したのは、それぞれ濃い色の衣装に身

を包み、顔を覆面のような布で覆った集団だった。

複数の野盗らしき男たちは体格も細身で、筋肉質に見える。以前出会った農夫たちとは雰囲気も異なることがすぐにわかった。年齢も若そうな男たちは、布の間から見える目だけでエシユタンドたちの一行を睨み付けている。

「何だ、お前たちは」

彼らの腰に差された剣や背中にある矢筒を目にし、クガルが緊張を宿した顔で問いかけた。

「野盗か？ 目的は一体……」

眉を寄せ、言いかけた彼は目線だけをエシユタンドに送ってくる。彼の表情からも、同じく魔の気配はないことを確信しているようだった。

しかし、どこかにただの野盗ではないような、不思議な気迫が感じられる集団に、エシユタンドも兵たちも表情を硬くしていた。

「野盗だなんて、ご挨拶じゃねえか」

不敵に響いたのは、最初に聞こえた声と同じものだった。

まだ若そうな声は、集団とは逆の方向から聞こえてきた。

視線をあわてて戻したエシユタンドは、石畳に落ちていた松明をゆっくりと拾う人物の姿に瞳を見開いた。

「親切に警告してやったのにさ 俺たちをただの野盗なんてクズどもと一緒にするなんざ、失礼極まりないってもんだぜ？」

地面にこすりつけて火を消した松明を軽く叩きながら、藍色の瞳をまっすぐに見上げたのは、まぎれもない少年であったのだ。

### 73・覚悟（後書き）

いよいよ覚悟のもとに一步進んだ空の行動、そしてその頃エシユタ  
ンドが遭遇していたのは……というところでまた次話でございます。  
どうぞお楽しみに！

「本当によくお似合いでいらっしやいますね、姫君」

赤褐色の硬そうな髪を後ろに束ねたルストの顔は明るい。

同乗した護衛兵たちの表情にもどこか希望の色のようなものが見え、空を乗せた馬車は軽やかに進んでいた。

「そ、そうかな？ まあ確かに、いつものドレスよりこっちのほうが性に合ってる気はするけどね」

頭をかきながらも、動きやすい衣装　立派に武装と呼べるものだが　を見やる空を兵たちも微笑ましげに囲む。

「女性がお召しになるにはかなり変わったお衣装ではありませんがね　その髪型にはよくお似合いと言っているのではありません」

唯一とげのある低い声にルストが顔をしかめた。

「カルファーズ隊長殿、そのような言い方はあまりに……」

「いいの、ルストさん。だって本当のことだもん。だから気にしないで、ねっ？」

遠慮がちな空の仲裁で、ルストは困ったように口をつぐむ。

「それよりカルファーズ隊長、この度は第一王子付き私兵隊をお借りできたこと、本当に有難く思っております。本来の任務から外れているにもかかわらず、快く承知いただいて」

空の笑顔にも表情を変えず、カルファーズは涼しげな青灰色の瞳を伏せ、一筋落ちてきた蜜色の長髪をかきあげた。

「そのようなお言葉は必要ございません。我々はただ第一殿下の命に従ったまで　あのお方のなさることには、全て正当な理由がありますから。それに末の殿下の救出は、王宮に務める者全員の願いでございます」

空のためにしていることではないのだと暗に告げている彼の言葉に、ルストが再び眉を寄せるが、空は目線だけでそれを止めた。

だって、カルファーズの言うことは事実であるのだから。

「え、えーと……もう王宮からは結構走ったよね？ テーローザマではあとどれ位かかるの？」

開け放たれた馬車の窓から見える森を横目に訪ねる空に、気を取り直したようにルストが微笑む。

「先を行く騎馬隊ですと五日ほどですが、我々馬車隊では七日はかかる道のりでございますね。途中、殿下方が通られた宿場街に立ち寄って行くことになります」

「そうなんだ」

「それから、出発が決まっただけで殿下にも早馬をやってあります。姫君が無事で、ご自分の後を追ってこられていと知られたら、きつと殿下もお喜びになりますよ」

「エシユタンドのことだから、まずは叱られそうだけだね」

笑いあうルストと空の向かいで、カルファーズが小さく息を吐く。束ねた蜜色の髪が風にそよぐのを鬱陶しそうに流しながら。

「まるで物見遊山の旅ですね 本来の目的をお忘れにならないとよいのですが」

「カルファーズ隊長！」

さすがに腰を浮かせかけるルストの腕を、空があわてて引く。

「姫君」

何か言いたげにするルストに、空は無言で首を振ってみせた。ルストの気持ちは有難いが、ことを荒立てたくなかったのだ。

平然と自分を見るカルファーズを、空は表情を引き締めて見つめ返す。

「カルファーズ隊長が仰りたいことはわかります。女の私が本当に役に立つのか、ただエシユタンドを追っていきただけではないのか そういう風に思われても仕方がないとは思いますが。でも私は私なりに自分ができること、今、この状況で自分しかできないことがあると思うのです。それならば精一杯その役目をこなしたい。例え分不相応でも、私は」

黒い瞳がきらりと輝く その中にしっかりと燃える強い意志に



圧されたように、カルファーズは一瞬瞳を瞬かせる。懸命に言い募るうとする空は、静まり返った馬車の中でもれた笑い声で言葉を止めた。カルファーズの隣で今まで沈黙を守っていた青年が、肩までの綺麗な銀髪を揺らしながら、こらえきれぬように口元に手を当てていたのだ。

「セイシエル副隊長……？」

不思議そうに名を呼んだ空を見て、セイシエルはあわてたように顔を引き締める。

「ああ、これは失礼。姫君を笑ったわけではないのですよ、決して薄水色の瞳を細めて空を優しく見やったセイシエルに、カルファーズが不快そうな顔をした。

「どういう意味だ、シエル」

「言わずともわかるだろう、カル。我らが隊長殿は、第一殿下を崇拜しておられるからな。それこそ神をあがめるかのごとくね」

両手を軽く広げたセイシエルは、きよんとした空にいたずらっぽく笑ってみせる。

「単純に殿下のおそばを離れての任務が不服なだけなんですよ

要するに子供がただをこねてるようなものだと思っただけだから……」

人差し指を立てて説明しようとするセイシエルを、カルファーズが今までの静かな表情が嘘のようなあわてた顔で睨み付けた。

「シエル！ 私は決してそのような」

小声で否定しかけたカルファーズの頬が少し赤いことで、空は思わず笑いかけ、両手で口元を押さえる。

空の努力も空しく、隣で堂々と笑ったルストが、得意げにカルファーズを見た。

「何だ 要するにうちのクガル隊長といい勝負だつてことですね。あのお方も心底第三殿下を敬愛していらっしゃるから……まあ、クガル隊長なら例え殿下と離れての任務であっても、殿下が命じられたことなら喜んで従われるでしょうが」

「そういうことですね。その辺りが真面目で勤務熱心なクガル殿との差でしょうな」

楽しげに相槌を打つセイシエルとルストの目線に耐えかねたようにカルファーズが真っ赤になる。

「しっ、失敬な……君たちは神聖な任務を一体何だと」

青灰色の瞳を剥いたカルファーズが声を上げて、ついに馬車の中が笑いに包まれた。

どこかに残っていた緊張の糸も少しほぐれたような気がして、空はほっとしていた。

雰囲気は違っても、エシユタンド付きの私兵隊の温かさに通じるものが彼らにもある。当たり前のことだけれど、今まで知らなかった王宮で働く人々の想い。冷たさや悲しみだけではないものが、ちゃんと存在しているのだ。

しっかりと握り締めていた白水晶の剣の入った布包みに瞳を落とす、もう一度深呼吸をする。

皆に気づかれないようにしたつもりは動作だったが、空が顔を上げた時、いくつもの瞳が優しく見つめていた。

「大丈夫 姫君のお心は、我々もちゃんと理解しているつもりですよ。いいえ、それどころか 有難くさえ思っているのです。我々に与えられた、貴女という存在を。我々第一殿下付き私兵隊は、しっかりと貴女をお守りし、付いて行く所存でございますよ。暁の姫君 なあ、カル？」

隊長に対するものとは思えないような気軽さで笑いかけたセイシエルに、カルファーズがわずかな動揺を見せつつも、咳払いをして空を見た。

「無論。それこそが第一殿下のご希望でもありますからね」

まだ照れたように瞳を逸らしつつ、それでも頷いてくれたカルファーズに、今度こそ空は明るい笑顔を見せた。

「有難うございます カルファーズ隊長、セイシエル副隊長」

彼らならば、安心して任せられることができる。そう確信できた空の

心も晴れていく。

不安な気持ちは勿論ある。でも、もう迷うのはやめたのだ。暁の娘　そう呼ばれることに怖気づくのも。

理由もわからなくても、選ばれた者として、そしてエシユタンドの婚約者として　自分にしかできないことがあるならば、しっかりと前を見つめて進むしかない。

エーデレードに背中を押された時よりも更に、空の想いは強まっていた。

首元の金のチョーカーに片手をやりながら、馬車の外を眺める。

エシユタンド　あなたは私の決断をどう思っただろう。

待っていて、今行くから。

それから、必ず助けに行きます　エカルド王子。

自分の想いは、遠く離れた彼らに届いているのだろうか。

想緑珠よ、もしも二人に新たな危機があつた時は、どうか教えて

……！

空の願いを聞き入れたのかどうか、そっと触れた想緑珠は、確かに熱を伝えてきたような気がした。

\*

日が落ちようとしている。

ケリエの外門脇　街を目の前にして入るのを待つようにと言っ

た彼らは、エシュタンドたちの一行を森の奥へと案内していた。

一番先を颯爽と進む少年の背中にもう見えず、自分たちの様子を見守りながら周りを固める数人のみが木々を分けて、黙々と歩みを進めている。

朽ちた木々に目をやりながら、クガルがそつと肩を寄せてきた。

「殿下、本当に付いていつて大丈夫でしょうか」

ひそめられた声に、エシュタンドは厳しい表情のまま振り返る。

「確かに無謀かもしれんが　どうも気になるんだ。この森の危機と、魔のモノにつながる何かがあるような　そんな予感がある。念のために街道にベニエたちの隊を残してあるし、とにかく彼らの正体と言いつ分を確かめてみないとどうにも前に進めん。悪いが、ここは黙つて私の我俣に付き合ってくれ」

小声で答えたエシュタンドに、クガルは心配そうな顔をしつつも、しつかり頷いた。

エシュタンドの言う予感と似たものを、彼も感じているのかもしれなかった。

それきり会話もやめた二人をちらりと見やっていた覆面の男たちも、また無言で先を進み始めるのだった。

既に街道の風景も見えなくなった森の奥まで来た頃、急に木々が開けて、集落のようなものが見えた。

集落　そう、確かにそう表現すべきもの。しかし、そこにある光景は温かさのかけらもないものだった。

壊れ、崩れた材木がそのまま放置された小屋や、隙間の目立つ石造りの家がいくつか。広場と呼ぶには小さすぎるほどの砂地の上には燃え尽きた松明がいくつも捨てられている。

苔の目立つ井戸の隣には、小さな厩。干草もひからびたようなその厩に自分たちの馬をつないで、井戸から汲んだ水を与えている男たちは、寒々しい集落の様子など意に介さぬように次々と荷物を降ろしていた。決して大きいとは言えない彼らの布包みの中から出てきたのは、一握りほどの野菜。しなびた緑の草や芋のかけらを馬の

飲み残した水に入れて、広場で煮炊きを始めた男たちを唾然としたように見つめていたエシユタンドが、ついに口を開いた。

「ここは」

言葉の続きを待たずに彼の肩を叩いたのは、先ほどの少年だった。「悪いね、あんたたちみたいないな立派な軍隊をもてなすような場所じやなくてさ。自分たちの食料は持つてんだろ？ 煮炊きがしたけりや火ぐらいはあるけど」

気安すぎるほどの言葉を吐いても嫌味のない笑顔に、クガルもあつけにとられたように視線をやった。

小柄な体を包んでいたマント　といってもエシユタンドの身につけているような豪華な布ではない、粗末なものだ　を脱いだ少年は、ふと気づいたように頭を覆っていた布を取った。

短い髪が肌寒い風に揺れる。その髪型よりも、色にエシユタンドは目を見張った。鮮やかな金色が夕日を受けて輝いていたのだ。

金の髪は王宮ではよく目にするものの、一般の民にはそうはいない。高貴な血を示すものだった。

そんなエシユタンドの視線をどう取ったのか、少年は無造作に頭をかいて、こげ茶色の瞳を細めた。

「ああ、自己紹介がまだだったか。俺はケイマ。一応、こいつらには長つて言われてる。そんな大したもんでもないんだけどさ」

「長……？」

こんな年端も行かないような少年が、と目を見開いたエシユタンドの心を見通したように、ケイマはいたはずらっぽく笑った。

「他に上に立ちたがる奴がいなかったってだけなんだ。まつりあげられて仕方なくってね」

年相応に浮いたそばかすが、笑うと一層少年の顔を幼く見せる。

しかし彼を見守る覆面の男たちの目には、どこかに尊敬の色が込められているのが感じられた。

「それで、長とは何の……」

訊ねかけたクガルに肩をすくめて、ケイマは何でもないかのように

に集落を見渡した。

「そうだな　自警団、とでもいうしかないのかな。俺たちは、ただサーダルって自分たちのことを呼んでるけど」

「サーダル……」

眉を寄せたエシユタンドに振り返り、ケイマは腕を組んだ。

「そう、その様子だと聞き覚えでもある？　古き言葉で『森の民』って意味さ。といっても、森がこんなじゃ名がすたるってもんだけど」

あくまで軽い調子で話を続けながらも、ケイマの瞳にはただの少年というには大人びた光が閃く。

「今じゃあちこちの森がこうなってる。ケリエだけじゃないさ。気づかなかったのは、王宮でのんびり胡坐をかいていた王族くらいのもんかもね」

確かに不敵に光ったケイマの目は、しっかりとエシユタンドの金髪を捉えている。

まっすぐに藍色の瞳を射抜くように見つめられ、エシユタンドは息を呑んだ。隣で距離をつめたクガルが、警戒する空気が伝わってくる。

それをも読み取ったかのように、ケイマは煮炊きの煙に視線を移して、突然気が抜けたように座り込んで見せた。

「あゝあ、腹減った！　晩飯まだ？」

具とも言えぬものを木の杓子でかきまぜていた男が、覆面をはいで微笑んだ。見るといつの間にか覆面をそれぞれに取った男たちがくつろいでいる。

「もうすぐですよ、長」

「できるだけ早くね。俺もう腹が減って倒れそうなんだ。なんせ三日もろくなもん食ってないからさ」

「そうですね。それも長が女子供に先に与えて、ご自分が食べられないからですけど」

「そんなかつこいい話、堂々とするもんじゃないよ？　ロタ」

おどけたように指を振るケイマを囲んで、笑う男たち。先ほどの殺気のようなものは、今は微塵も感じられなかった。

一体どういう集団なのか、と目を見張りつつも、自分たちを害するつもりがないらしいことはわかって、エシユタンドは動けずいた。

「とにかく もう夜だ。このままケリエには入らないほうがいい。何も無い場所だけど、よかったら街道で待ってる残りの隊も連れてきてやったほうがいいよ。命が惜しけりゃ、夜には出歩くべきじゃない。テローザまではね」

スープの味見をしながら、あつさりと言つてのけたケイマに、エシユタンドとクガルが瞳を合わせる。

その怪訝そうな表情をもともせぬようなこげ茶色の瞳は、あどけない少年のもの。しかしその中に宿るわずかな光が、彼が言うことが真実であることを告げていた。

「一体……何が起こっているというんだ……」  
エシユタンドの呟きに、ケイマはにっこりと微笑んだ。

「じゃあまずは腹ごしらえといこうよ。話はその後でゆっくりとね？」

わずかにしがみついたような葉が木々の上からざわめきの音を伝えてくる。

すっかりと落ち行こうとする森の陽が、不安な色に見えるようだった。

#### 74・ケイマ（後書き）

いよいよ動き出した空と彼女を守る私兵隊の面々。  
そしてエシユタンドが遭遇した森の危機と人々。  
これからの展開もお楽しみに！



## 75・サーダル

森には闇が降りていた。

どこかで鳴く梟の声や、時折吹いてくる夜風に揺れる朽ちた木々を見る限りでは、暗く沈んだ光景に見える。集落の中心で賑わう人々の様子を除いては。

ぱちぱちと焚き火の炎が踊り、談笑する男女の笑顔を照らしている。

最初に姿を見せた男たちだけの時とは違い、女性や子供、老人の姿が加わると、そこは確かに一つの村だった。

木々の向こうには畑らしきものもあり、家々が隠れるようにひっそりと建っていたのだ。ただ、収穫された跡はなかったが。

「それにしても男前だねえ、こちらのお兄さんはどっかの高貴なお方なんだろう？ こんな貧しい村なんかにお泊りいただいているのかい」

眠りに落ちた赤ん坊を優しく寝床に下ろした中年の女性に覗き込まれて、エシユタンドは何とも言えずに曖昧な笑みを浮かべる。

困ったような彼の様子に気づいたように、ケイマが彼らの間に割って入った。

「特別な事情があるんだよ。ほらほら、女子供は家に入った、入った！ 今から男衆の大事な話があるんだから」

両手を打ち鳴らしながら、ケイマが興味津々といった様子で集まっていた女たちの背中を押ししていく。

それでもまだエシユタンドたちの一行を覗き見しようとしている数人を、ケイマが大げさに追い立てた。

「全く 若くていい男が物珍しいのはわかるけど、あんまりじろじろ見てちゃあ、亭主どもが怒るぜ？」

冗談めかしてため息をつくケイマに、若い男たちが頷いてみせる。「そうだ、そうだ！ 俺たちだって十分若くていい男だぞ？ そり

「やあ見目麗しさにかけちゃあちよこつと劣るがなあ」

日焼けした肩のたくましい男の一言で、どつと笑い声が上がる。

ようやくあきらめたように家の中へとそれぞれ消えていく女たちを見送ると、ケイマが肩をすくめてエシユタンドを見やった。

「悪かったね、騒がしいとこ見せちゃってさ」

あつさりと謝ってくる少年の金髪は、焚き火の明かりを受けて一層濃く輝いて見える。

エシユタンドは構わない、というかのように軽く微笑んで、促されるままに火を囲んで置かれた岩の上に腰を下ろした。

隣に控えるクガルも言葉こそ発さないものの、常に警戒を怠っていないのがわかった。

先ほど街道で待たせていたベニエの隊も合わさったエシユタンドたちの隊員は背後に静かに並び、黙って見守る村の男たちと表面上は向かい合っているだけだったが、お互いにいつでも戦闘態勢に入れるように気を引き締めているのが感じられた。

そんな緊迫感を気にもせぬかのように伸びをして、ケイマはエシユタンドたちに笑いかける。

「さて、えーと何から話せばいいのかな？」

拍子抜けしそうなほどに気楽な表情を見つめながら、エシユタンドは集落全体を見渡していた目を少年に戻した。

「そうだな　まずは……サーダルという名の君たちは一体どういう集団なのか、とでも聞こうか」

予想していた質問だったのであろうエシユタンドの問いに、ケイマは何でもなさげに頷いた。

「さっき言ったように、自警団、とでもいうしかない集団だね。あるいは森の民という名の通り　森と共に生き、森を愛する、しがない村人の集まりってとこかな」

答えになっていないケイマの言葉にクガルが眉を寄せるのを、エシユタンドは瞳だけで抑えた。

「それでは自警団、というからには何かから身を守ることが生業と

「いうわけだろうが　何から身を守っているのか聞いてもいいかな」  
余裕を失わず、膝に置いた手を組みなおして訊ねるエシユタンドに、ケイマはいたずらっ子のように浮かべていた笑顔を消した。

「　森そのものから、とでもいうべきかな」

静かに閃いたこげ茶色の瞳を受け止めて、エシユタンドは眉を寄せる。

「森、そのものだって　？」

ここからが本題だとしてもいうように、しっかりと頷いたケイマは大人びた顔で遠く連なる木々の群れを見つめた。

「表面上、身の危険はこの辺り一帯の盗賊や野盗の奴らからのものだけだね。奴らがはびこるよりも前から、森はどこかおかしかった。もう何年も前から、何かが狂い始めてたんだ」

木々の奥深く、目に見えないところまで見通すかのようなケイマの視線を追っていたエシユタンドは、頭に蘇ってくる森の濃厚な香り　眠る緑の女や嘆く同胞の姿を再び見ているような気分に襲われていた。

ぼんやりと記憶を追いそうになった自分を戒めるかのように頭を振って、エシユタンドが口を開く。

「どうということなのか、詳しく聞かせてくれないか　？」

エシユタンドの問いに、ケイマは静かに振り向いた。

「俺にだってよくはわからないさ。もともと別に特別な力やなんかを持つてるわけでもないし、森を愛するといっても、暮らしかかかっているんだ。森の恵みにただ感謝し、森を大切にす、それぐらいの静かな生活をしてきた村人っただけだね。ただ森の匂いというか空気というか　うまくは言えないけど、そういうもんが段々衰えてるような気がしてた。それが著しくなってきたのはここ数年のとき。それと前後するくらいかで、やたらと人々の争いごとや揉め事が増えてきた。俺たちの村はまだそうでもなかったけど、収穫の奪い合いや、ひいては村の女たちの取り合いまで　いがみ合うことが増えてんなってそれぐらいの次元だったのが、村同士の争いに

つながって……そのうち働かずに他人のもんをかすめとろうって輩が出てきてさ。あれよあれよという間に、今みたいに野盗やらがうようよしだしたってわけ」

クガルと目線を合わせていたエシユタンドをじっと見ていたケイマは、背後の森　ケリエの街の方角に目を向けて、ため息をついた。

「ケリエだって、昔は活気のある街道の街だったんだ。森で採れた木の実や茸だとか、畑で収穫した野菜なんかを定期的に売りに行ったりして、俺たちだって随分と行き来してた。俺たちが細々と作った木の編みかごやら、木彫りの人形やらと交換したりして、街でしか買えない食材なんかも手に入ってたしね。それが今じゃあ盗賊の巣窟みたいになっちまって　情けねえもんさ。夜にあの辺をうろつくなんざ、どうぞ襲って下さいって裸で飛び込んでくようなもんだからね。それでおせっかいついでに引き止めてみたってわけ。あんたら、絶対にそういう事情を知ってそうには見えなかったし。まあいくら立派な軍隊さんでも、無事で済むかはわからないからさ」  
勢いの弱まってきた焚き火に新しい枝を放り込んで、エシユタンドを見上げたケイマの顔は、嘘を言っているようにも騙そうとしているようにも見えない。

軽い態度には見せているものの、心は意外と優しい普通の少年なのかもしれない　そう思いつつも、エシユタンドは続けて問いかけた。

「そんなにひどいのか　ケリエの街は」

「ああ。一体どうしてそこまでなっちまったのかわからないけど、普通の村人たちはもう逃げ出したよ。野盗どものやりたい放題さ。だから俺たちだってよっぼどのことがない限りは入らないようにしてる」

「テローザまで　そう言っていたが、じゃあテローザはもつとひどいということか？」

さりげなく口をはさんできたクガルにも、ケイマは素直に頷いて

みせた。エシユタンドたちの目的地がテローザであるとは気づいていないように見えた。

「そうらしい。俺もさすがにテローザの森には入ってないんだけど、知り合いの親戚なんかがどんどん逃げてきてさ、危ないから住んでられないってさ。手前ぐらいまでは様子を見に行ってきたんだけど、あそこは人だけじゃない、魔も随分出没してるって話だから。本物の身の危険さ」

皮肉めいた笑いをもらしつつも、ケイマの瞳は笑っていない。彼の沈んだ表情を見ていたクガルが、静かに口を開いた。

「じゃあ、各地の森の部族も、森に住める状況ではなくなってきた、ということなのか」

訊ねたクガルも、自身の過去を思いながらなのか、複雑な瞳をしている。それに気づいたのかどうなのか、ケイマはゆがんだ笑顔を返した。

「そういうこと。だから最初に言ったのさ。森の民である俺たちが、結局は森から逃げざるを得ない。俺たちはこうして留まってはいるものの、それももう限界が近い。長く森から与えられてきた恵みを忘れた人間たちに対する、森からのしっぺ返しなのかもしれない

なんて思っただね。皮肉じゃないか、森の民が森を追われてるんだ。まるで森自体から報復を受けてるような　そんな気になる時さえある。うまく説明できないけど、森をおろそかにした人間に対する復讐、とでもいうべきなのかも　」

終いには独り言のようになったケイマの言葉に瞳を見開いていたエシユタンドの態度で勘違いしたのか、一番近くにいた若者が雰囲気を変えようと笑ってみせた。

「ほらほら、また長の妄想が始まった。考えすぎですよ。悪さをしてるのは人間で、別に森がなんかしてるってわけじゃないんだから

」

「じゃあ、人間が荒れだしたのと森の荒廃が無関係だって言うのか？　天気も何も問題がないのに、まるで自分から枯れていく木はど

う説明するんだ？ 何をしても収穫すらできなくなってきた畑は、土は？」

むっとしたように言い返すケイマの顔は、ようやく年相応の少年に戻ったようだった。少し頬を赤くして咳払いをした彼は、エシユタンドたちのほうを気を取り直したように見上げる。

「とにかくそういうわけだから まあ、今夜一晩はここで過ごすといいさ。この先どこへ向かってんのか知らないけど、引き返すのか先へ進むのか あんたらが決めるのは自由だ」

エシユタンドの肩を叩いて立ち上がったケイマは、あくびをしながら伸びをする。

夜も深まってきたからと解散を促して、粗末な家の一つに姿を消したケイマの背中を見送っていたエシユタンドは、私兵隊に提供された家々で休むよう指示を出した。

もちろん警戒は怠らぬようにとの命は忘れなかったのだが。クガルと二人、何も無い寝台に腰掛けてからも、エシユタンドは考え込まずにはいられなかった。

天気も何も問題がないのに、自ら枯れていく木。収穫のできなくなつた畑や土……。

森からの報復、そう言ったケイマの声が耳から離れない。

まさかそんなはずは、そう思う頭のどこかで、ルーカと呼ばれた精霊の少女の怒りが思い出された。

精霊たちは決して報復などという行動には出ないと聞いた。けれど、まるで無関係には思えない森の荒廃と人心の乱れ。

考えても答えの出ない疑問に、思わず痛んだ頭を押さえたエシユタンドは、そっと肩にかけられた手に顔を上げた。

「殿下 あまり何もかも、ご自分だけで背負われぬようお願いしますよ。殿下が倒れられでもしたら、我々私兵隊全員が路頭に迷うことになりますから」

クガルにしては珍しい冗談に、エシユタンドは厳しかった表情を和らげた。栗色の瞳が、気遣うように見つめていることに気づいた

からだった。

「そうだな　とにかく今夜のところは休むとしよう。迂回すべきか、このまま進むべきかは、明日決める。明るくならなくては、調査の兵も送れないからな」

「ええ。同感です」

窓際に灯した蠟燭を吹き消して、それぞれ寢台に入った二人を、屋根に空いた隙間から青白い月が見下ろしている。

その美しくも冷たい月光が、不吉に見えたような　そんな予感を打ち消して、エシユタンドは瞼を閉じるのだった。

翌朝、夜が明けるなり調査に送り出していた兵が持ち帰ってきたのは、思いもかけぬ吉報だった。

できるだけ簡素に、ケイマたちの食事に合わせた最低限の材料だけで煮炊きを済ませたエシユタンドのもとへ、息を切らせた兵が駆け寄る。

「何、本当か？」

思わず腰を浮かせたエシユタンドに、兵もしっかりと頷き、再び礼の姿勢を取った。

「我々の馬車隊に、ルスト副隊長からの早馬が合流したとの知らせで　確かな伝令でございました！」

街道に戻ったところを、馬車隊からの伝令に遭遇したという。兵からの報告に、エシユタンドは喜びを抑えきれずにいた。

それと同時に、また無謀なことを　そう言いたい気持ちと交差する。それでも一番胸を占めていた不安が解消されたことで、笑みが浮かぶのを止められなかった。

「姫君が　我らが暁の姫が、ご無事でこちらへ向かわれているぞ！」

兵の一人が興奮したように叫び、全員が歓声を上げる。それほどに皆も彼女を心配し、慕っているのかと驚きと共に嬉しく思いながらも、エシユタンドは兵たちを静めるべく片手を上げる。

クガルも同時に兵たちに目配せを送った、その時　眠そうな顔で家の中から出てきた少年が笑った。

「何だ、朝から賑やかだな　何かいい知らせでもあったのかい？」  
気の抜けたような態度で訊ねる少年に、エシユタンドはただ笑みを返した。

「いいや、こちらのことさ　それより、一晩の宿を感謝する。夜を無事に過ごせたのも、君たちのおかげだ」

一瞬だけこげ茶色の瞳に閃いたように見えた何かの光は、すぐさま消されたようで、ケイマは純真そうな笑顔を見せた。

「それは何より　それで、これからどうするつもり？　その様子だと、もう出発するみたいだけど」

装備を始めている兵たちを見て、ケイマが訊ねる。エシユタンドは一瞬迷った後、肩をすくめてみせた。

「そうだな　やっぱり迂回することにするよ。無駄に命を落とすのは趣味じゃないんでね」

彼に合わせたようにおどけて返したエシユタンドを、ケイマはしばらく見つめてから、微笑んだ。

「そうか　それはよかった。忠告した甲斐もあるってもんだ。とにかく道中、気をつけて　全く、王宮の連中も早くこういう事態に気づいてほしいもんだよね」

振り返ったエシユタンドに手を振って、ケイマが背中を向けたまま呟く。

「どいつもこいつも自分たちの利益にしか目がない連中ばかりだからな　領主だなんだ、そんなのも一掃しなきゃいけないと思うよ」  
鮮やかな金の髪を無造作に掻きながら、思いがけないほど強い調



子で吐き出された言葉に、エシユタンドは藍色の瞳を厳しくした。

「ああ　私もそう願うことにするよ」

冗談めかした彼の声に、ケイマはどんな顔をしたのか　背中越しではわからなかったが、再び振り返った時の彼の瞳は、先ほどまでと同じ、いたずらっぽい笑顔に細められていた。

かちあつた藍色の瞳と、こげ茶色の瞳　二人の双眸に秘められたものが何であるのか、お互いに口に出されることはないのだった。

## 75・サーダル(後書き)

森の民と呼ばれる彼らは一体何者なのか、ケイマの目的は  
引き  
続き、次話もお楽しみに！

## 76・ケリエ

ケイマたちに森の出口まで送られた後、エシユタンドの一行は街道を引き返していた。

迂回するかのようには彼らに見せるためでもあったが、街への別の入り口を見つけてあったからでもあった。

正面から入るのは避けても、やはりケリエを通るのが一番の近道だと判断してのことだった。

念のためにとベニエたちの隊を馬車隊と合流させて、そちらには迂回を命じてあった。

隊を分けるのは危険だとは承知の上で、それでもエカルドの救出が先だというエシユタンドの決断に、クガルたち私兵隊も不服をもちはずすもなかった。

まだ肌寒い朝の空気を吸い込みながら、エシユタンドは辺りを見回した。

さすがにかなり戻ったからなのか、もともと監視するつもりまではなかったのか、ケイマたちの姿は見当たらない。それを確認してから、エシユタンドは背後についていたクガルに目を向けた。

「そろそろ例の道へ向かうか。確か、西側の森を進んだところだったな」

早朝戻ってきた偵察兵の見つけた入り口は森の中から入っていく小道だということだった。

頷いたクガルが、後に続く兵たちに命ずるのを見ながら、エシユタンドはあせる思いを静めようと深呼吸をしていた。

ケリエを抜けさえすれば、テローザまではあと二日。騎馬隊で走り抜ければ、もう少し早く着けるかもしれないのだ。

弟の無事を願いながらも、まだ手がかりすら見つかっていないことが気にかかっていた。

テローザへ連れて行かれたかすらわからない。けれど、魔が

出没しているというのは、昨夜のケイマの話からも確からしく、それだけでも行ってみる価値はあるように思えた。

それに。

思い浮かべた黒髪の少女の面影に、エシユタンドは片手を首元のチョーカーへと無意識にやっていた。

無事であったことは嬉しい。心底ほつとしている。けれど、彼女が自分を追ってくるという。その吉報には喜びと同時に不安も押し寄せてくる。

荒廃した街、そして魔の巣窟となっているかもしれないテローザへ連れて行くのは、本当なら避けたい。

しかし、自分一人の想いでは止められない、彼女の背負わされた役目には、既に気づいていた。

彼女が言い出したことか、あるいは父王の命なのか、それはわからないもの。もはや自分の力で王宮に留めておくことはできないであろうことは、わかっていたのだ。

「殿下、この小道だそうです」

唇を噛んでいたエシユタンドは、クガルの声で我に返った。

ケイマたちが居を構えていた東側とは反対の森。街道からかなり遠回りをした形で向かった小道が途切れ、街の風景がエシユタンドたちの前に広がっていた。

偵察兵の話では、早朝であるからなのか人の姿もなく、思ったほど荒れ果てた様子もなかったとのことだった。

報告通り、一見して野盗の類が荒らしたようなあとも見えず、ただ閑散とした無人の店や家々が並んでいるだけだ。

「よし、入るぞ」

襲ってくる輩がいるようなら、戦闘も辞さない。そんなエシユタンドの気構えは、静かなケリエの街並みに吸い込まれるようだった。

ケイマの話では、魔がこの辺りに出ているわけではないようだが、油断は禁物だとエシユタンドは表情を引き締めていた。

言わずとも彼の思いがわかつているようで、クガルも隊の全員も、警戒を崩さぬままケリエの街の石畳へと馬を進めていく。

何も起こらぬうちにと、走る速度を速めた彼らを止めるものはないように思えた。

耳元で何かがしなるような音がして、エシユタンドが一瞬気のせいかと辺りを見回した、その瞬間だった。

突然、飛んできたもの。それが何かもわからぬうちにエシユタンドは咄嗟に軽い風を起こして避ける。

ばらばらと彼の周りに落ちたものは、石つぶてのようだった。

「殿下　！」

途端に馬を寄せて彼を守るようにしながら、クガルが叫んだ。

目をやった方角に、人が見えた。

無表情に家屋の影にひそんでいたらしい人々が、あちこちから姿を現し始める。あつという間に増え始めた人影は数を増やし、ぼろのような布で顔を隠した集団となっていた。

囲まれる形となって、エシユタンドは舌打ちをもらす。

やはり足止めを食らうのか。そんな彼の苛立ちとは正反対なほどに静かな、いや感情すらわからない人々の群れは、それぞれに手にした武器で攻撃を始める。

石つぶて、矢、短剣、様々なものが飛んでくるのを防いだのは、クガルの結界だった。

「まさか、人に対して使うことになるとは思いませんでしたね。」「小声で告げるクガルに、エシユタンドも皮肉げな笑みをのせる。

「確かに。しかし、今は一刻を争う。邪魔されるわけにはいかなからな」

呟きを返したエシユタンドは、堂々と集団のほうへ藍色の瞳を光らせた。

「一体何が目的で、我々を襲う！ 悪いが、容赦はしない。勝ち目はないぞ！ 道を空けるなら今のところは見逃そう。」「

大きく響いた彼の声に反応する者はいなかった。

いや、それよりも集団の中に必ずいるであろう首謀者が見当たらない。

攻撃をしかける彼らの動作もどこか緩慢で、何かに操られているかのようにさえ見えた。

ただ黙々と意味のない攻撃をしかけてくる集団を不可解に思いつつも、エシユタンドはもう一度息を吸った。

「返答がないなら仕方がない　強引にでも通らせてもらおう！」  
言ったエシユタンドが手綱を引くのを合図に、兵たちが威嚇の矢を放った。

目の前に落ちた矢にも特別驚いた様子もなく、攻撃を再開しようとする集団　彼らが体勢を整える前に、エシユタンドたちは馬を走らせた。

彼の起こした風で、あっけなく倒れる人々を背後に残して、攻撃をあっさりと逃れていく。

手ごたえのない戦闘を幾度も繰り返しながら、エシユタンドの隊はケリエの街を横切っていった。

一様に無反応な人々　野盗であるのかすら判別できぬような集団を後ろにするたび、兵たちの顔にも困惑が満ちていく。

先を急ぐのでなければ街の調査をすべきところだが、今はその時間はないと、エシユタンドも後ろ髪を引かれつつも馬を急がせていった。

「この分では、昼までには街を抜けて、このままテローザへ向かえそうですね。何だかあの少年の話よりは、拍子抜けするような結果になりそうだ」

何度目かの襲撃をかわしてから、クガルが声をかけてきた。

手加減は忘れていないものの、さすがに魔の力すら使うことをためらいはじめていたエシユタンドは、首をかしげつつも頷く。

「そうだな　まあ、我々にとっては都合がいいわけだが」

閑散とした街の大通りを通りながら、エシユタンドが答える。  
クガルがまた何か言いかけた、その時。

大通りを駆け抜けてくるものに、彼らは振り向いた。

砂埃が舞うほどに勢いよくこちらへ向かってくるのは、馬を駆つた兵。確かに見覚えのある武装で、クガルはエシユタンドを怪訝そうに見た。

「あれは、ベニエの隊の」

確かに迂回を命じたはずのベニエ率いるエカルド付き私兵隊の隊員が、必死な形相で駆けてくるのを確認して、エシユタンドはあわてて馬を降りた。

「どうした、何事だ！」

続いて駆け寄つたクガルの声に、馬から転がり落ちるように降りた兵は、息を切らしながらクガルを見上げた。

「大変でございます　！　ベニエ隊長と馬車隊が、魔のモノに襲われました！　迂回した先で　化け鳥の集団が……！」

蒼白な顔で叫んだ兵の体にも、よく見ると爪で裂かれたような痕がいくつも見えていた。

「何　それで、隊長たちは？」

眉を寄せて問うクガルに、兵が首を振る。

「わ、わかりません　あまりの数に、お互いの無事もわからず　伝令を命じられ、私はなんとかここまで……」

顔を見合わせるエシユタンドとクガルの前で、それが精一杯だったかのように倒れこんだ兵の背中には、無残なほどはつきりと鳥の爪で切り裂かれた赤い血の痕があった。

「しっかりしろ！　おい！」

あわてて叫ぶクガルの声も、既に意識を失つた兵には届かぬようだった。

その体を支えたクガルが、緊迫した瞳でエシユタンドを見上げる。

「　ただちに迂回先へ向かう！　全員、馬を」

言いかけたエシユタンドは、視線の先に信じられぬものを見つけ、思わず言葉を止める。

その目線を追つたクガルも、栗色の瞳を驚愕に見開いた。

「やっぱりこつちへ来たんだね　　隊を分けてでも先を急ぎたいわけだ。まあ、予想はしてたけど」  
「  
明るく言って笑う、まだ幼い少年の顔　　木立の合間から現れたのはまぎれもない、ケイマだったのだ。

「お前は　　さては、謀ったか！」

クガルの責めるような声に、ケイマは心外そうに首を傾げる。

「謀っただなんて、そんな滅相もない。ただ試しただけさ。君たちみたいな王宮の軍隊と、奴らとどっちが強いのかなってね」

「奴ら、だと　　？」

藍色の瞳に睨み付けられ、ケイマはふざけたような笑顔をおさめた。

「そう、魔の奴らだよ　　だけどやっぱりただの人なんだね。あっけなく化け鳥に裂かれていった」

「貴様　　！」

いきり立つ兵たちを冷たく見やったケイマは、金の髪を風にそよがせながらエシユタンドを見た。

「俺に怒ってる時間があれば、まだ生き残りがいるか確かめに行つた方がいいんじゃない？　　なんて、簡単には行かせるわけにはいかないんだけどさ」

舌を出して笑ったケイマが、こげ茶色の瞳を上空に向ける。

いつの間にか曇り始めた空に、点々と見えたもの　　それは、不気味に翼をはためかせる、化け鳥の群れだった。



食事と物資の補給を済ませて、早々と出発した空たちの馬車は、サーバを抜けた街道へと進んでいた。

エシユタンドたちの隊を追っての道のり　はやる気持ちを抑え、空は膝の上に置いた白水晶の剣を無意識に握り締めていた。

「姫君、昨夜はよくお休みなれましたか？」

気遣うようなルストの声に、空はあわてて笑顔をのせる。

「あ、うん……おかげさまで。皆さんはゆっくり眠れたのかな、急いで出発になっちゃったけど」

本当はエシユタンドたちが心配でほとんど眠れなかったのだが、心配させるまいと笑ってみせる。黒い髪が爽やかな朝の風に揺れるのを黙って見ていたカルファーズが、静かに口を開いた。

「先を急ぐ旅である以上、当然の決断ですよ。それにこれぐらいでへこたれるようでは、第一殿下付き私兵隊の名が泣きます」

無愛想に言い切られたカルファーズの言葉　そんな言い方が彼なりの優しさであるのだとわかってきた空は、向かいのセイシエルと目を合わせて微笑んだ。

「今日は街道をひたすら進んで、途中で野営か、もしくはどこかの村で宿を借りることになるかもしれません。ケリ工まで辿りつければいいのですが　それにはやはり騎馬でなければ……」

遠慮がちに思案するセイシエルの声で、空は申し訳なさそうに肩を縮めた。

「ごめんなさい　私が馬に乗れればいいんですけど」

「いいえ、そんな　姫君が謝られるようなことはありません。我々の騎馬隊も先行している。あせる必要はございませんよ」

「そうですね、姫君。それにそろそろ早馬が殿下のもとへ到着している頃かもしれません。殿下も姫君の道中の無事を願われるはずですよ」

笑顔で言い添えるルストに、空は顔を上げた。

まだまだ遠いエシユタンドだが、自分が行くという知らせだけでも届いていれば、それだけでも落ち着く気がした。

「それにしても、思ったよりも静かなんだね、街道って。旅人が行きかうなら、もっとお店とか賑わってるのかと思っただけだ」  
気持ちは切り替えたように窓の外を見やった空が言くと、ルストもわずかに首を傾げた。

「そうでございますね、以前通った時はもう少し賑わいがあったように思うのですが……もう少し先に行けば活気が出てくるかもしれませんね」

規則正しく馬車は揺れ、再び沈黙の訪れた車内で、空は物思いに沈んでいた。

まだ木々しか見えない街道の風景は単純で、どうしても思考にふけてしまうのだ。

エシユタンドもエカルドも無事であるのだろうか、願いを込めて触れた想緑珠は、何も伝えては来ない。

ならばきつと大丈夫なはず、そう思いたいけれど、やはり不安を拭い去ることはできなかった。

自分が本当に役に立つのか、この剣で彼らを助けることができるのか。考え出せばきりがない。大体、あの滝で一度だけしか使ったことのない剣なのだ。王の前では大見得を切ったものの、自信なんてまるでなかった。あどけない少年のようだった滝の精霊を思い起こしながら、空は瞳を閉じる。

セリルさん、どうか力を貸して……！　こんな自分でいいのか、どうすればいいのかわからないけれど、あなたが剣を与えたのは、確かにあたしなんだよね？

願いを込めた空の意識は、いつの間にか眠りの中に引き込まれていった。

## 76・ケリエ（後書き）

謎の少年、ケイマの正体は一体何者なのか。

エシユタンドに襲いかかる化け鳥たちとの攻防はいかに？

その頃、空の身に起きていたのは……次話を引き続きお楽しみに！

暗い、暗い闇の中に空はいた。

規則正しい水の音　ああ、前に聞いたこれは　白水晶の滝の音。

疑問も違和感も持たずに、なぜか空は確信していた。

開いた瞳に映るのは、予想通り岩に囲まれた空間で、自分があの時と同じように白水晶の滝の中にいることがわかる。

『セリル、さん　？』

不安げに呼んだ空の声は、誰もいない洞窟に溶けていく。

辺りを見回しても、セリルのいる気配すらない。それとも姿を隠しているだけなのだろうか。

立ち上がって、数歩歩いてみて気づいた。

自分が私兵隊の武装ではなく、素足でいることを。

そして身にまとっているのは、やわらかな布地で作られた薄い藍色の衣装。

『これは……』

見下ろして、それが胸の下を紐で結んだ巫女の衣装であることがわかった。

王宮に置いてきたはずの、エシユタンドの母の形見ともいえるその衣装をなぜ再び身につけているのか　不思議に思いつつ、頭に手をやって、空は目を見張る。

手に触れたのはいつもの黒い短髪ではなく、まっすぐな長髪で、しかも見事な金色をしているのだ。

『何、どうなって』

驚きにもれた空の声は、唯一変わらず身につけていた首元の金のチョーカーを見て、止まる。

中央に埋め込まれた想緑珠が、きらきらと発光していたのだ。

その緑の光がいつの間にか辺りを照らし始め、眩しさに目を閉じ

た空は、頭が痛む気がして顔をしかめた。

再び瞳を開いた時、目の前に出現していたのは緑色をした不思議な鏡だった。

空の全身をも映せるようなその鏡に見えたものは、金の髪に藍色の瞳をした、美しい巫女だったのだ。

『ラウ、レカさん　？』

空は呟くが、鏡の中の少女は微動だにしない。じつとこちらを見つめる彼女は、確かに以前肖像画で見たエシユタンドの母親であるように見えた。

信じられない思いで見つめる空の前で、鏡の中に映るラウレカは、いつの間にか暗い洞窟ではない、明るい場所にいた。

白く、長い糸の集まりであるかのような美しい水の流れ　それが白水晶の滝であることに空が気づいた頃、ラウレカは滝つぼに足をひたして、笑顔を浮かべていた。

『またあなたなの、セリル』

初めて聞いた軽やかな声が、そう呼ぶ。振り向かずに金の髪を手ぐしで梳いていたラウレカの隣に、唐突に姿を現したのは、少年の姿の滝の精霊　そう、セリルアージュだった。

ラウレカが生きていた頃の幻であったとしても、セリルの姿は空が出会った時と全く変わらず、不思議な気持ちで空は映像に見入っていた。

『そりゃあ、この滝の精霊なんだから、いて当たり前だろ？　人間きが悪いんだから　』

ふざけたように空中に胡坐をかいて浮かんだセリルを、ラウレカは冷たい瞳で見上げる。

『そういうことじゃなくて、姿を消してこっそり見るくらいなら、堂々と見たらいいって話してるのよ。他の巫女と来てる時には見にも来ないくせに、私が一人だと決まって出てくるんだから』

美しい藍色の瞳でねめつけて、ラウレカが立ち上がる。面白そうにその様子を見下ろしながら、セリルは頭の後ろに両手を回した。

『だって他の巫女ってなんか生真面目そうで、肩がこるんだもん。どうせ君にしか僕が見えないんだし、君ってなんだか面白いからさ』  
悪びれもせずに笑ったセリルに、ラウレカは軽いため息をついて、滝つぼの周りに咲いている花を摘み始めた。

『ねえ 今日あの男に会うの？』

会話の続きのように問いかけたセリルに振り向いて、ラウレカは微笑んだ。

『ええ、そうね きっと訪ねて来られるでしょうね』

その微笑みがまるで花が咲いたかのようにやわらかいことに本人は気づいているのか、どうなのか 見つめるセリルが顔をくもらせる。

『ふっん……あの男はさ、やめといたほうがいいかもよ』

『冗談半分なようにでいて、セリルの声にはどこか真剣な響きがあった。ラウレカは一瞬瞳を瞬かせて、今度は優しい微笑を浮かべる。』

『あら、どうして？』

『だって 国王だなんて、きっと君、苦労することになる。いや、なんだかよくない予感がするんだ。前から言ってるだろう？』

君の力は不安定すぎる 強すぎる聖なる力と、あの男が持つ魔力が合わされば、どうなるか 』

眉をしかめて、人間のような表情を見せるセリルを、ラウレカはしばらく静かに見つめ返していたかと思うと、まるで子供を諭すような笑顔で彼を見た。

『心配してくれるのね 有難う、セリル。でも大丈夫 私、あ

の方の心がわかるの。彼は本当に私を愛してくれている。それはそれこそが、私がずっと望んでいたものなのよ。もうずっと前から 求めてやまなかったものなの。だからね、セリル……』

まだ続きのあるラウレカの言葉をさえぎるように、セリルは地上に降り立った。花を手にしたラウレカの腕を、真剣な瞳で握る。

『それなら、あの剣を持って行ってよ 僕ら滝の精が受け継いできた聖剣だ。きっと君を守ってくれる 』

自分の提案にほっとしたかのような顔をするセリルの手を、ラウレカがそつと握り返した。静かに振られた首に、セリルの瞳が見開かれる。

『どうして！ 君ならあの剣にきつとふさわしいのに！』

必死で言い募るセリルに、ラウレカは静か過ぎるほどの優しい笑みを返した。

『だめよ、セリル 私にはわかるわ。あの剣は、持ち主を自分で選ぶの。私は剣に選ばれてはいない。きつと私よりも剣を必要とする人 あるいは剣に必要とされる人が、この先現れるはず。だからそれまで……あなたは剣をきちんと守っていかなければ』

『ラウレカ ！』

握っていた手をそつと離し、微笑みを浮かべたまま、それでもしつかりと決別の表情を見せたラウレカは、肖像画ではわからない強い瞳をしていた。

背を向けた彼女の、薄い藍色の衣装をいつまでも見つめていたセリルの姿が、いつしか揺らいでいく。

まるで目の前で繰り広げられた光景が、鏡の見せた幻であったことを思い知らされながら、空は声も出せずにいた。

わずかに震えていた手に、いつの間にか出現したのは白水晶の剣。鮮やかな水色の鞘が、まるで存在を主張しているかのように光ってさえ見える。

剣を必要とする人、あるいは……。

ラウレカの言葉が耳にこだまする。

それきり掻き消えた緑の鏡さえ幻であったかのような静けさが、洞窟の中に広がっていく。

身につけていたはずの巫女の衣装が消えていく。代わりにもとの武装が見え、確かに自分の姿に戻っていくのが空にはわかった。

しつかりと開かれた黒い瞳に、もはや洞窟の風景は見えなくなっていた。

体が大きく揺れて、空は目を覚ました。

自分がテローザへ向かう馬車の中にいることを瞬時に思い出す。そんな空の不思議な感覚には気づかぬように、ルストが振り向いた。

「ああ、目を覚ましてしまわれたんですね　もう少し眠られてもよかったです。どうも先ほどから道が悪くて……」

馬車の揺れのせいで空が目を覚ましたのだと思ったのか、ルストは気遣わしげな瞳を向けてくれる。

「あ、ううん。大丈夫　」

そうではないのだ、と説明しかけて空は曖昧に微笑んだ。手にした剣を見つめて、表情を引き締める。

あれは、想緑珠が見せてくれた夢だったのか、それとも剣が　？  
自分にすらわからないものを説明しても、きつとルストたちにはわからないだろう。

そう思った空が、先ほどまでの不思議な映像をそつと自分の胸だけに閉まった、その時だった。

チョーカーの想緑珠が、はっきりとわかるほどに熱を持ったかと思うと、空の頭に突然なだれ込むように映像が浮かんだのだ。

王宮で見たものと同じ化け鳥が、恐ろしいほどに数を増やして羽ばたき、降下していく。

彼らの狙うものは、見覚えのある武装をまとった兵たち　。抵抗しようとして武器を手にするも空しく、無残に切り刻まれていく恐怖の顔。

その中に見えた大柄な人影が、確かに以前舞踏会で見たエカルドの私兵隊長であることに空が気づいた途端、場面は切り替わり、どこかの寂れた街の通りが映る。

「エシユタンド　！」

思わず叫んだ空は、周りのルストやカルファーズが驚いた顔をするのにも気にとめず、頭の映像を追った。

確かに見間違えようのない懐かしい面影、愛しい人の藍色の瞳が驚愕に見開かれている。



見知らぬ少年が笑い、空に浮かんでいた化け鳥たちが今度はエシユタンドたちのほうへ降りていく。空が息を呑んだ瞬間、馬車が大きく揺れ、映像は掻き消えた。

体勢を崩してしがみついた空を、ルストがかばうように支える。

「大丈夫ですか、姫君」

「大変、大変なの　ルストさん！　今、エシユタンドたちが襲われて」

空があわてて彼の腕を掴み、口にしかけた途端、動きを止めた馬車の垂れ幕がいきなり開けられ、一斉に目をやった空たちは、不敵な笑みを浮かべた男たちを見たのだ。

「大変なのは、ご自分のほうでは　？　この馬車、俺たちが頂いたぜ！　さあ、さっさと降りるんだ。言うとおりにしないと御者みたいに命がなくなるぜ？」

大声で得意げに馬車の外をあごでしゃくった男が示すのは、空たちが乗っていた馬車を走らせていた御者の無残な姿。

顔色を変えた空を、カルファーズたちが守るように囲んだ。

\*

鳥、鳥、鳥、上空を埋め尽くすような忌まわしい化け鳥たちの姿にエシユタンドは息を呑んでいた。

言葉を発することもかなわぬうちに、カメラが片手を大きく上げた。

それが合図だったのか、一斉に飛び掛ってきた鳥の群れに、私兵

隊の隊員たちが悲鳴を上げる。

訓練された彼らにすらどうしようもないほどの数が、瞬時には攻撃も防御の体勢も不可能にしていた。

「殿下！」

叫ばれた声にエシユタンドは無言のまま視線をやる。

クガルと瞳だけを交わし、エシユタンドは一気に力をふるった。

風を　そう念じられるだけの風を集めて、鳥たちに放つ。

ギヤアアア、とあちこちで上がる断末魔の叫びが渦になり、風と共に一瞬で消えた。

あつという間に晴れた視界に、私兵隊がほつとしたかのように顔を上げ、それからあわてて各自攻撃と防御の姿勢に戻っていく。

クガルが両手を組んで、結界を張り終わったその瞬間、場の空気に似合わぬような口笛の音が響いた。

「お見事だね。これが本物の魔の力ってヤツか。さすがに王子とやらは違うらしい」

両手を頭の後ろで組んで、それでも笑って呟いたケイマに、全員が表情を険しくする。

「貴様　どこまで知っている？　まさか、お前がああ魔を」

結界の集中は崩さぬまま、クガルが厳しく問いを發した。金の髪を残った風にはためかせながら、ケイマは肩をすくめる。

「さあて、どうでしょう？　質問に答えてあげる義理もないと思うけどね。それにまだまだ遊んでいる暇はないんだ」

余裕を失わぬ彼の表情が示したものは、次の瞬間にあきらかになつた。

高く吹かれたケイマの口笛に反応したかのように、また一羽、一羽と、何羽もの化け鳥が集まり始めたのだ。

その途方もない数にエシユタンドが目を見開くのを嬉しそうに眺めて、ケイマが口を開いた。

「数だけはまだまだ　掃いて捨てるほどにいるんだ。自由に使っていていって言われてるからさ。殺しても殺しても、まだまだ出して

あげるよ。その分奴らの憎しみは大きくなるけど、別に俺には関係ないし」

翼をはためかせ、待機しているかのような化け鳥たちをちらりと興味なさげに見上げて、ケイマがまた手を振り上げる。

「せいぜい頑張って」

ケイマの楽しげな一言が終わらぬ前に、鳥たちが降下を始める。舌打ちをしたエシュタンドが風の力を放つても、またどこからかすぐに鳥たちは集まってきた。

「くそ、きりがない」

額に一筋流れた汗をぬぐったエシュタンドを気遣わしげに見たクガルが、結界を緩めぬまま私兵隊を振り返った。

「皆、殿下ばかりにご負担をおかけするな！ 攻撃態勢を取れ！ アシエリ、ピア、攻撃術を」

すぐさま頷いた攻撃隊が、攻撃の術を繰り返す。

ある者は煙で、ある者は火炎で、各自の得意とする術で鳥を狙うも、上空を自由に飛びまわる彼らをなかなか捕らえきれず、一部を落とす程度にしか成果が上がらない。

次々と放たれる対魔の薬が塗られた矢も、膨れ上がるばかりの鳥の数を減らすことができていいのかすら疑問だった。

無表情な人面が張り付いた鳥たちが隙あらば襲いかかってこようとするのを防いでいるのはクガルの結界。

しかし時間ばかりが経つ中、クガルも苦しげな表情を抑えきれなくなっている。

エシュタンドはぎり、と唇を噛んで、藍色の瞳でケイマを睨み付ける。

やはり、これだけの数の魔を相手にするのは無理だ。手っ取り早いのは、自分が動くことではない。

消耗が見えてくる私兵隊の面々を見やった後、エシュタンドはまた風を念じ始める。

いまや羽ばたきの音が間近に聞こえてきそうなほどに、鳥たちは

数を尋常ではないくらいに増やし、結界ぎりぎりのところを取り囲んでいる。

一步離れたところで見物を決め込んだらしい少年は、平気でエシユタンドの視線を受け止め、片手をひらひらと振って見せた。

彼が何者なのか、一体どういうことなのか、そんなことは今考えるべきことではない。

とにかく目の前の敵を倒すこと、それだけに集中せねば。

そう決意したエシユタンドが力を込めて、集められるだけの風を集めて、鳥たちに向かって放とうとした、その瞬間だった。

首もとの金のチョーカーが突然熱くなった。いや、正確に言えば、その中央の想緑珠が。

途端に頭の中にこの場のものではない映像が浮かび上がる。

初めての事態に一瞬動揺するも、その中央に見えた少女の姿に、エシユタンドはすぐに意識を移した。

いつものドレスではない武装を身につけた、しかし間違いない黒髪、黒い瞳の愛しい少女。

その顔に浮かぶのは待ち望んでいた笑顔ではなく、驚きと恐怖であるらしいのが、見開かれた目と青ざめた顔色でわかる。

彼女の華奢な体を大柄な男の腕が捕らえ、首元に鋭く光る剣の切っ先が押し付けられている。必死に抵抗を試みた空が一瞬苦しげな表情を浮かべ、赤い血が一筋、やけに鮮やかに流れた。その苦悶の表情にエシユタンドが声にならない声を上げる。

複数の男たちと応戦していた見知った私兵隊の男たちが、悔しげに動きを止める様子が遠く映った。

場所も、何者相手なのかもわからぬままに、映像は一瞬で消え去り、エシユタンドはその不思議な幻影が事実起こっている状況なのだとなぜか直感する。

怒りなのか、何なのかもわからぬ感情が駆け抜け、気づいた時にはエシユタンドは止めかけていた魔の力を思い切り解き放っていた。クガルの結界すら破ってしまうほどの力と風がすさまじいほどの

勢いで放たれて、私兵隊員すらその場に倒れこむ。

さすがに顔色を変えたケイマが建物の影に隠れるのと、今まで空の色さえ見えないほどに蠢いていた鳥たちが、形もなくなるように掻き消えるのがほぼ同時だった。

倒れかけたクガルが体勢を整え、あわててエシユタンドに駆け寄ってくる。

その様子がぼんやりと見えて、エシユタンドは熱くなった頭をなんとか冷やそうと、首もとの想緑珠を力いっぱい握り締めた。

だめだ、自分を見失うな。今は、堪えて 事態の打開を。

必死で念じるように自分に言い聞かせて、高まっていた心臓の鼓動を静めようとする。

今、この瞬間におそらく起こったのであろう、愛しい少女の危機。その映像が、自分の中に高めていた魔の力を呼んでいる。そんな奇妙な感覚にとらわれながらも、エシユタンドは何度も深呼吸を繰り返した。

自分の身に何が起こったのかはわからない。けれど、普段の力とは比べ物にならないほどの大きな感覚に流されそうになったような、自分の体が自分のものでないような、嫌な感覚だった。

「殿下、殿下！ お気を確かに どうなされたのです！」

クガルが体を支えている。何度も必死に呼びかけられ、ようやく自分が地面に膝をついていることに気づいた。

まだ体の奥から集まるうとしていいる魔の力をなんとか抑えて、大きく息を吐き出す。

藍色の瞳が苦しげに開かれたのを見て、クガルがほっとしたように息をついた。

「私兵隊全員 何ともないか？ 各自、臨戦態勢を忘れるな！」

クガルの言葉で、ふらつきながらも起き上がる兵たち。その誰にも怪我らしきものはないことに、エシユタンドは安心しながら辺りを見回した。

先ほどまであれほど空を支配していた化け鳥の姿が一羽もない。

自分が力を放った場所にあつた木々が無残に折れ、建物が崩れているのを目にして、エシユタンドは眉を寄せた。

幸い人の姿はなかったが、先ほど放ったような力を受けていれば、人間ならどれほどの命を奪っていたのか　そんな恐ろしい仮定が頭に浮かぶ。

冷たい汗が流れた額にエシユタンドが手をやった、その瞬間、ケイマが建物の影から姿を現した。

「いやあ、すさまじい力じゃない。あんまり鳥の数減らしても大変そうだし、今日のところはこのへんにしといたほうがいいかもね。目的は十分果たしたしさ。まあせいぜい、他の生き残りでも探してやんなよ。じゃあ、またね」

好き勝手に言ったケイマがどこからか出てきた馬に跨って、去っていく。

「おい、待て　！」

言いかけたエシユタンドは、ふいにぐらついた視界にまた膝をついた。

「殿下！」

あわててクガルが手を差し伸べる。その手を支えに、必死で立ち上がるエシユタンドを、クガルが引き止めた。

「殿下　兵に後を追わせませす！　どうか、ご無理は　」

その言葉を待たずに崩れ落ちたエシユタンドの体を、クガルが抱える。

顔色を失ったエシユタンドの瞳は既に閉じられ、クガルが表情を変えた。

「殿下、しっかりしてください！　殿下　！」

悲痛な彼の声だけが、既に何事もなかったかのように静まり返ったケリエの大通りに響き渡るのだった。



77・夢（後書き）

不思議な夢を見た空、そして彼女に危機が訪れたその時、鳥の群れに襲われたエシユタンドの身には、奇妙な変化が起きていた。次回がどうなるのかも、またお楽しみに！



武器を手に脅す男たちを相手に大人しく従うふりをして、空たちは馬車を降りた。

さりげなく空を囲んだ私兵隊の面々が、隙をついてあつという間に男たちを攻撃、状況を好転させたところまではよかったのだ。

それが今、自分の体は大柄な男に捕らえられている。手によつとした白水晶の剣すら男たちの一味にすぐさま奪われ、空は悔しさと情けなさで自分の失敗を責めていた。

「せつかく逆転したかと思つたら　残念だったなあ。この女を傷つけられなくなつたら、大人しく武器を捨てな！」

これみよがしに空の首に刃先を突きつけながら、にやにやと笑う男。

悔しげに男をにらみつけたルストやセイシエルたちが、素直に剣を下ろしたのが見えた。

地面に倒れこんでいた男たちが服をはらい、私兵隊の剣を奪って起き上がる様子を空は苦い思いで見つめる。

皆が男たちを抑えている間にせめて自分も何かの役に立とうと、馬車の座席に置き忘れた剣を取ろうとした　その判断を悔やみつつ、抵抗を試みるも、やたらと太い男の腕は、空の必死な力ですらびくともしなかった。

「大人しくしろ！　お前の首ぐらいいつでも切り裂けるんだぞ？」力を強めた男に怒鳴られ、空はびくりと体を縮める。声を上げそうになるルストの腕をセイシエルが引いているのが見えた。

空の立場が明らかになつてしまつては、余計に危険を呼ぶ。単なる野盗の類なら、やり過ぎしてしまうのが一番だと考えているのだらう。

抵抗をやめた空と私兵隊の顔を満足げに眺めた男たちは、平気で馬車の検分を始めた。

空から奪った白水晶の剣を乱雑に振り上げた男が、不思議そうに声を上げる。

「なんだ、これは　えらく立派な剣かと思つたら……抜けもしねえじゃねえか」

「どうせ女が持つてた剣だ。ただの飾りもんなんじゃないか？」

「まあどつちにしてもいい細工だ。売れば金になるかもな」

「下品な笑い声を上げる男たちの会話で、空は唇を噛み締める。

「さつさと金目のもんを見繕つてずらかろうぜ。この剣も持つてくか」

ぴたぴたと手のひらに剣を打ちつけながら、ふざけたように笑う男　同意するようににやついた男たちが、無抵抗のルストたちを剣で威嚇しながら、嘲るように見下ろした。

「ふん、女一人人質に取られたくらいで情けない野郎どもだぜ」

「ざまあねえな　もともと大した力もねえ奴らなんだろうよ。女のお飾りの護衛隊つてとこななさ。軟弱そうな顔してるじゃねえか」先ほどあっさりと武器を奪われた相手であることも忘れたかのように、得意げに笑い声を上げる男たち。

いやらしい彼らの嘲笑に、空は必死で抑え付けていた体の震えが蘇ってくるのを感じていた。今度は恐怖でも驚愕でもなく、強い怒りによる震えだった。

自分の油断がなければ、こんな男たちなんて足元にすら及ばない相手であるはずなのに　ぞんざいに扱われるルストやカルファーズの姿を目にして、空は悔しくてしかたがなかった。

そんな空の思いなど気づきもしない男たちの一人が、ふと空の首元に目をやる。

「お、これもなかなか高そうな宝石じゃねえか　頂いてくか」

何の気なしに空のチョーカーに触れようとした男に、ついに空は堪えきれずに口を開いていた。

「やめて！　触らないで！」

ふいに暴れた空の動きにあわてたように、体を捕らえていた男が

剣を持ち直す。

「おい、大人しく」

「これだけは絶対に渡さないんだから」

男の威嚇も耳に入らず、必死で腕から逃れようと空が暴れた、その瞬間だった。

男の剣の切っ先が首元に食い込み、空の白い素肌を切り裂いたのだ。

赤く流れた自分の血が滴り落ちるのが、やけにゆっくりとした動きで見えた、気がした。

「姫君！」

今度こそ堪えきれぬように叫んだルストの声が、耳に遠く聞こえる。

ふらりと傾いだ体は、あせつたような男の腕から落ちた。

地面にそのまま倒れこんだ空は、男たちがあわてふためいたように逃げるのをぼんやりと見ていた。

「姫君、姫君！」

途端に駆けてきたルストに支えられ、空はなんとか顔を上げる。

「ごめんね、ルストさん　あたしのせいで、あんな……」

「いいえ、そのような……何も仰らないで下さい！　傷口が」

蒼白なルストの顔に空は平気だと笑いかけようとして、唇が動かないことに気づいた。流れる血の感触が思ったよりも多いようだった。

「それより、他の人たちは……？　ああ、剣　取られちゃ、いけないのに」

「セイシエルたちが追っております。姫君は何もご心配なさいませな」

冷静な声が聞こえて、目で追った先にカルファーズがいた。静かに彼が空の首元に視線を落とす。

「傷は深くはありませんが、厄介なところを切られたようだ。出血が多い……」

懐から取り出した布できつく押さえながら、カルファーズが舌打ちをした。

「シエル！ 剣は？」

戻ってきたらしいセイシエルに問いかけるカルファーズ。セイシエルの悔しげな声が答える。

「すまない、遅れを取った！ 他の奴らは始末したが、一人だけが剣を持って逃げた。今、他の者が追って……」

「剣とは、このことでしょうか？」

ふいに聞こえた深い響きの声に、全員が振り返る。

その場にいたのは、フードを深く被った大柄な人影。差し出されたものが、鮮やかな水色の鞘におさまった大ぶりの剣であることに、空も瞳だけを向けた。

「これは、これは。どなたかと思えば、いつぞやのお美しい姫君ではありませんか。大変、奇遇でございますね」

歌うように告げて、フードを取ったその下には、浅黒い素肌と長く波打つ赤銅色の髪。

にっこりと微笑んだその顔は、確かに見覚えのある吟遊詩人のものだったのだ。

「フェル、さん……？」

呟いた空の声はか細く、それが限界であったかのように、黒い瞳は閉じられた。

鳥の声が優しく聞こえる。

ゆっくりと瞳を開いた空は、見知らぬ天井をぼんやりと眺めていた。

ここは……あたし、馬車にいたはずじゃ……？

咄嗟に全てが夢だったのではないかと思いついたほどに、穏やか

な朝の空気。

少し開けられた窓からは優しい風が吹き込み、レースのカーテンが揺れている。

質素ながらも落ち着いた色合いの部屋は、王宮に戻ったのかと思うほどどこか洗練された屋敷の中のようなだった。

「 そうだ、剣……！」

あわてて起き上がるうとして、首元に引き攀れたような痛みが走る。

包帯らしきものが巻かれていることに気づいて、ようやく馬車を襲われたことを思い出した。

「 ああ、姫君！ いけません、まだ起き上がられては 」

視野に入った赤褐色の髪と瞳 心配そうな顔を見て、空はほっとしたように息をついた。

「 ルストさん……よかった、無事で 皆は？ ここは、どこなの？」

手にしていた水差しなどの載った盆を置いて、空に答えようとしたルストより先に、聞こえたのは低音の声。

「 ここは、私が借りている屋敷の一つでございます。街道から近かったので、ご案内したのですよ。姫君のお怪我が心配だったもので、

優しく言って微笑むのは、やはりあの舞踏会で会った吟遊詩人、フェルだった。

赤銅色の不思議な瞳に見つめられ、空は驚きながらも自分の首元を見やった。どうやら出血は止まっているらしい。痛みはあるものの、ひどいものではなかった。

「 こちらのフェル様が、偶然通りかかれて助けて下さったのですよ。フェル様の護衛が、剣を奪った男を捕らえてくれたらしいのです 」

そつと小声で説明をするルストに、フェルは困ったように微笑む。「 様、は必要ないと何度も申し上げておりますのに 私など、単なる旅の吟遊詩人に過ぎないのですから 」

「いいえ、とんでもございません。フェル様は姫君の命の恩人でおられるのです。敬意を示して当然です」

真剣に答えたルストを見て、フェルは笑顔を崩さぬまま、空に視線を移した。

「とにかく、大事にならなくてよかった　姫君に何かあれば、王宮の皆様申し訳がたためところでした」

「あの……あなたが手当てを？」

ルストのかしこまった態度を見て、訊ねた空にフェルが頷く。赤銅色の髪が朝の光を受けて鮮やかに輝いている。

「ええ。昔薬師の真似事をしていたこともありまして　止血の薬草と塗り薬が効いたようで、ほっとしました」

「フェル様の迅速な手当てがなければと思うとぞっとします。本当に我らの姫君をお救いいただいたこと、感謝いたします」

頭を深く下げるルストとそれを見守る空とを、どうしたらいいのかというように交互に見やるフェル。

その途方にくれたようなフェルの表情に、空は思わず笑い声をもらした。

「姫君　？」

「あ、ううん。何でもないの。本当に有難うございました、フェルさん。怪我の手当ても、屋敷をお借りしたことも、感謝します」

首の傷にさわらぬように、それでも頭を下げた空を優しく見つめて、フェルは笑った。

「何か口にされることができそうなら、スープか果物でも用意させましょう。いかがでしょうか？」

「はい、ではお言葉に甘えて」  
笑い返した空を、ルストもほっとしたようにそばで見ている。

頷いて、そつと部屋を出て行ったフェルと交代するかのように入ってきたのは、カルファーズだった。

「姫君、傷の具合はいかがでしょうか」

気遣うように訊ねた青灰色の瞳に、空は安心させるように笑って

みせる。

「まだちよつと痛むけど、大丈夫みたいです。フェルさんのおかげですね。皆にも心配をかけてしまって、本当に」

謝ろうとした空に首を振って、カルファーズは扉のほうを見やっ  
てから、そつと身を寄せてきた。

「それよりも、もしお体に差しさわりがなければ、できるだけ早く  
出発なされたほうがよろしいかと」

「カルファーズ隊長！ 何を仰っているんです。姫君にはいましば  
らくの安静が必要で……」

空よりも先に目を剥いたルストに、カルファーズは眉をひそめた。  
「ルスト殿、姫君の御身を案じられるのは結構だが、それならばも  
う少し警戒心を持ったほうがよいのではないのか？」

「どういう」

声を荒げかけたルストの腕を素早く引いたカルファーズは、空に  
も厳しい瞳を向けてみせる。

「あのフェルとかいう吟遊詩人、彼を無条件に信用するのはいかが  
なものかと言っているのです」

「しかし、あの方が通りかかられなかつたら我々は今頃」

落とした声で抗議するルストを冷たくねめつけて、カルファーズ  
は鼻を鳴らした。

「それが怪しいと言っているのだ。我々の危機に、偶然出くわした  
相手がよもや舞踏会に来ていた吟遊詩人であつたなど 怪しいに  
もほどがある。それに、剣を奪つた男を倒した護衛の腕前……あれ  
は相当な腕前であつたと見える。首元を一太刀で切り裂いていたん  
だぞ。ただの吟遊詩人がそれほどの護衛を雇っているというのもお  
かしくはないか」

静かに並べ立てるカルファーズに、ルストも言葉を一瞬なくした  
ように黙り込む。

「とにかく できるだけ早く出発し、別の道で先を急ぐべきでは  
ないでしょうか。今、セイシエルに新たな馬車を手配させておりま

す

「厳しい表情で告げたカルファーズに、空も考え込みながら頷いてみせた。」

あの優しげなフェルが何かを企んでいるとは考えたくないが、やはり先を急ぐ旅である以上、仕方がない決断かと思えたのだ。

無意識に首もとのチョーカーに手を触れてから、空ははつとしたように体を起こした。当然のように疼いた傷口に、小さくうめく。

「どうなさいました、姫君！」

あわてて体を支えるルストの腕を、空はそのまま掴んだ。

「そうだ、エシユタンド！ あの時見たの　彼が化け鳥に襲われている映像を！　今頃無事でいるのか　早く確かめなくちゃ！」

顔色を変えて言い募る空に、ルストとカルファーズが目を合わせる。

「映像を　？　それは、一体……」

訊ねるカルファーズに、空は苛立ったようにチョーカーを指し示す。中央の緑の石を押さえながら、空は必死で続けた。

「そう　この石が見せてくれるの。森の精霊にもらったこの石が……　それで、エシユタンドが危ないってわかって　」

まだ飲み込めないような顔をした二人に説明をしようと、空が声を大きくしたその時、扉が開いて、屋敷の侍女らしき女性がスープと果物を運んでくるのが見えた。

咄嗟に口をつぐんだ空に頷き、ルストが女性から食事を受け取る。女性がまた去っていくのを待つてから、カルファーズが口を開いた。

「姫君の仰ることはわかりました。にわかには信じがたいが、精霊の石であるならあり得るでしょう。とにかく、現在我々の所在も含め、殿下に伝令を送っております。追って、殿下の安否も調べがつきましよう。今はそれを待ちながら、旅を続けるしか我々には方法がありません。馬車の手配ができるまで、とりあえずはお体をお休めくださいますように　よろしいですね？」

冷静な彼の言葉に、いてもたってもいられなかった空の気持ち



少しずつ落ち着いていく。

確かに今の段階では、カルファーズの言うとおりにするしかないのはわかっていた。

「それで、剣は今どこにあるの？」

自分を静めるかのように問いかけた空に、ルストが寝台の脇を示して見せた。

「大丈夫、おそばに置かれるのが一番かここに保管しておくことにいたしました。多少、落ち着かれぬかもしれませんが、私が護衛として部屋で見張らせていただくことをお許しください。できるだけ邪魔になりませんよう、部屋の隅にありますから。」

気遣うように笑うルストに、空もやっとなほつとしたように笑い返す。とりあえず剣を奪われずに済んで、本当によかったと心から安堵していたのだ。

「ありがとう　剣も、傷の手当てに使わずに済みそうだし……本当によかった。カルファーズ隊長の言うとおり、ここで剣の力を他の人にまで見せることになるのは、ちょっと遠慮したほうがよさそうだもんね」

自嘲を込めて呟いた空に、ルストの困ったような瞳が返ってくる。誰も自分を責めないけれど、私兵隊の皆を　それに自分自身も危機に追い込んだのは、自分の軽率な行動のせいなのだ。きちんと傷を治して、早く出発しなければ　あせる思いを静めながら、空はカルファーズに微笑みかけた。

「皆、無事で本当によかった　皆さんにも、できるだけ休んで出発を待つようにつて伝えてもらえますか。カルファーズ隊長、あなたも」

落ち着かない気持ちを抑えるように首元に手を当てて、笑ってみせた空に、カルファーズもそつと頷く。

ルストの気配を温かく感じながら、空はまた眠りに落ちていくのだった。

目の前を水が流れ落ちていく。

白く、清浄な水の束　　呆然とそれを見つめていた空は、その水の中に光るものがあることに気づいた。

淡く、それでいて強い光がまるで空を呼ぶように段々とまぶしさを増している。

誘われるように水に手を入れた空は、ひどく冷たいような、熱いような奇妙な感覚に襲われながらも、その光る物体に触れた。

そしてそれは　　水色の鞘におさまった、白水晶の剣だったのだ。抜かなければいけない　　そんな気がして、空は自然な動きで剣を抜き放った。

そこから現れた白水晶の結晶が、まばゆいばかりの光を放つ。目がくらむような明るさに目を閉じて、空が瞳を開いたその瞬間、足元から立ち上るような光が空を覆い、そして気づいた時には目の前に見知らぬ光景が広がっていたのだ。

「来たんだね、ついに」

ふと耳元で聞こえた声に、弾かれたように振り返る。

目の前に立っていたのは、あの滝の精霊　　セリルアージュだった。

透明な水のように美しく流れる髪を手で梳きながら、彼は微笑む。ひどく純粋なようで、大人びた微笑。

「来たって、一体どこに……？」

そのまま問い返した空に、セリルが目線だけで空の背後を示した。「これは」

思わず上げた空の声は、まるで夢のような幻想的な光景に吸い込まれていった。

## 78・偶然（後書き）

馬車を襲われ、怪我を負った空を救ったのは吟遊詩人フェルだった。果たして彼との再会は本当に偶然なのか、そして、またも夢に入り込んでいく空は……というところで次話へ続きます。どうぞお楽しみに！

## 79・泉（前書き）

かなり更新をお待たせしてしまつて、申し訳ありません。  
今年も連載頑張りますので、どうぞご愛読くださいませ！

深い青色がそこに横たわっていた。

あまりに静かで、鏡のように滑らかな輝きを放つ青　美しすぎて、近づいてみるまでそれが泉であることにも気づかなかつた。

覗きこんでみて初めて、その色合いが青を通り越した、藍色と呼ぶべきものだとわかる。

自分の瞳と同じ、藍色の泉。

不思議な思いでその色を見つめていたエシユタンドは、耳元をくすぐる風に誘われたようにふと振り返った。

「ソラ　？」

自然に呼んだ自分の声に驚く。そう、泉の周囲を囲む草原にそつと佇んでいたのは、無事を願い、焦がれ続けた少女だったのだ。

「ソラ！」

もう一度想いをこめてその名を呼ぶ。そして初めて少女は振り向いた。

黒い髪を風に舞わせ、足元の草さえ邪魔であるかのように走ってくる空。自分のもとへたどり着いた華奢な体を、エシユタンドはしっかりと抱きしめた。

「エシユタンド　！」

信じられないように瞳を瞬かせ、喜びに顔を輝かせた空を見つめ、エシユタンドはその頬にそつと触れる。

「どうしたんだ、ここは一体……」

先ほどまで魔との戦いの中にいたはずだと辺りを見回す彼の前で、空も同じように混乱した顔をしつつも、思い出したように瞳を上げた。

「そう、あの滝の精霊　セリルさんが連れてきたのかも……さつき、確かに彼が　」

言って振り返った空は、背後にも誰もいないことを確認して、た

めらいを隠せないようにエシユタンドを見つめた。

「おかしいな……さっきまで確かに一緒にいたと思ったのに」

「滝の精霊　あの白水晶の滝で会った、セリルアージユとかいう男か？」

「うん。ついに来たんだね、ってそう言った、んだけど　って、そんなことより、エシユタンド　大丈夫なの？　魔の鳥に襲われてたんじゃないの？」

表情を変えて訊ねる空に、エシユタンドは驚きつつも答える。

「私は大丈夫だ。それよりも、どうしてお前がそのことを知っている？　お前のほうこそ、変な男たちに襲われていたのでは……」

二人同時にお互いに怪我のないことを確認し、ほっとしたような顔をしてから、エシユタンドが納得が行ったかのように笑った。

「そうか　想緑珠が二人に教えてくれていたんだな」

「みたいだね　とにかく怪我がないみたいで本当によかった」

「お前こそ　無事で安心したぞ」

「あたしは……かすり傷だったから」

照れたように笑った空の体を、エシユタンドがもう一度力を込めて抱きしめる。確かに空の体温を感じつつも、まだ目の前の光景に不思議な違和感をぬぐえないでいたエシユタンドに、空が言った。

「ねえ、これは　ここはどこなのかな？　前に一度想緑珠か、白

水晶の剣の力かわからないけど、夢を見たことがあったの。その夢にもセリルさんが出てきたんだけど　ってことは、これも夢なの？」

「その可能性は十分あるな　現実ならばどれほどいいかとは思っ  
が」

エシユタンドが空の言葉に頷いた、その時だった。

強く、それでいて暖かい風が吹いて、二人の足元に咲き誇っていた花々が揺れる。

風ではためいた髪を押さえた空が、小さく声をもらした。

「エシユタンド……見て、あそこ！」

空が指差した方角に目をやったエシユタンドは、今まで確かに誰の姿もなかった泉のほとりに、一人の少女が姿を現したのを見た。

美しい金色の髪はさらさらと背中まで流れ落ち、優しい青い瞳は微笑の形に細められている。泉の周りに咲く花をそつと撫で、腰を下ろした少女は、年の頃では空と同じくらいに見えた。

森の民であるかのような簡素な服を着ていても、少女は人目を引かずにはおられぬような美しい顔立ちをしていた。

二人がすぐ近くで見ていることに、不思議なことに少女は全く気づいていないようで、まるで目に見えない壁でもあるかのような空気の違いが、二人と少女の間にあるような気がエシユタンドにはしていた。空も同じような感覚にとらわれていたのか、エシユタンドに困惑した目を向けてくる。

エシユタンドが何か言おうとする前に、少女の隣に一羽の鳥が舞い降りた。

どこにでもいるかのような森の小鳥かとエシユタンドが思ったその時、少女が笑顔で小鳥の頭を撫でた。

『まあ、また来たのね　エルバート。どんな姿をしても、私にはわかるわよ?』

気持ちよさげに少女の手に頭をこすりつけた小鳥は、少女がいたずらっぽく笑った瞬間、その姿を突然一人の青年のものへと変えてしまった。

『ハーミア、君にはかなわないな。他の人間には全く気づかれたことなどないと言っのに』

笑って呟く青年の肩までの巻き毛も、楽しみに細められた瞳も、見事な藍色をしていることに、空もエシユタンドも息を呑む。

青年の着ている衣装はセリルアージュが身につけていたものと同く似通っていたが、裾が長く、薄い藍色の布は、ところどころ不思議な泉の色を反射してきらきらと輝いていた。

そつと呟いた空の言葉に、エシユタンドも同じ思いで頷く。

「そう。あの藍色の泉の精霊さ。今はなき　美しかった泉のね」  
背後から聞こえた声に、驚いて振り向いたエシユタンドに笑って  
みせたのは、透明な水のごとき髪を結わえた少年だった。

「セリルさん　！　やっぱりいたんだ」

空の驚きの声に、セリルは頭を掻いて空中で胡坐をかく。

「本当は出てこないつもりだったんだけど……やっぱり痛々しくて  
見てらんなくてさ」

独り言のようなその呟きは、エシユタンドと空にではなく、少女  
と泉の精霊に向けられているようだった。

彼らを眺めるセリルの瞳は、どこか悲しげにさえ見える。

「今はなき　そう言ったが、どういう意味だ？　泉がなくなつた  
と、そういうことなのか？」

問いかけたエシユタンドをちらりと見て、セリルは苦々しげに頷  
く。

「そう。全く　馬鹿なことをしたもんだよ、あいつもね。私欲の  
ために力を揮ってしまったんだから　精霊にとっては最大の禁忌  
さ」

「私欲……？」

空の言葉に、セリルは顎だけで泉のほうを指し示した。

「そうさ。全てはあの少女のために。彼女を愛し、守るためにした  
ことが、皮肉にも彼女を不幸にする結果になってしまった」

「どういうことだ　？」

訊ねたエシユタンドと空に、セリルは硬い表情のまま、そつと手  
を広げてみせる。

「見ててごらん、彼ら二人の悲しい結末を　」

そう言ったセリルの声がその場にこだましていく。幻想的で優し  
かった泉の光景が、二人の目の前でゆらいでいった。



『どうして……一体どうしてこんなことを？ 私はあなたに、こんなことを望んだ覚えはないわ！』

美しい顔をゆがめて叫んだのは、先ほどハーミアと呼ばれた少女だった。

取り乱した彼女を見つめる泉の精霊は、ひどく苦しげな表情を浮かべている。

『君が老い、死んでいくのを目にするなんて僕には耐えられない。愛しているんだ。だからこそ、共に生きよう……』

藍色の瞳で真摯に見つめたエルバートの腕を拒否したハーミアは、自分自身の体を震える手で抱きしめて、首を振った。

『私は人間よ！ 精霊の力なんて 命なんて、欲しくない！ 半永久的に生きるだなんて 家族も友人も死んでいくのをこの目で見ていなければいけないなんて……そんなの嫌よ！』

涙を流して叫んだハーミアは、言葉すら出せないでいたエルバートの腕を掴んで詰め寄った。

『元に戻して、今すぐに！』

『だめだ、ハーミア……一度揮った力を取り消すことは僕にもできない。それに、君を失うなんて嫌だ……』

濃い苦渋をにじませたエルバートの答えを、ハーミアは見開いたままの瞳で見つめていた。そして唇を噛み締めて泉を見下ろす。

『精霊が その命を閉じるには、生まれ出たところに還り、母なる神に願ひ出るのだったわね』

『ハーミア！ よせ …！』

表情を変えて叫んだエルバートの目の前で、ハーミアは藍色の泉に飛び込んだ。

止めようとしたエルバートを阻むように、泉が渦を巻き、水柱を作る。

『母なる泉の神よ 私の命をお返しします。けれど、どうかこの子だけは お救いください』

既に姿も見えなくなったハーミアの声が、確かに泉の中から響い

た。

そして絶望に顔をゆがめ、地面に突っ伏したエルバートが、悲痛な叫びを上げる。 エシュタンドと空が目にしたのは、そこまでだった。

「そして 彼女を失ったエルバートも絶望に自らの死を望み、母なる泉も禁忌をおかした自らの子供 精霊を嘆いて、その姿を消したという。これが、人間を愛した精霊のおろかな結末さ」

気づいた時には何もなくなった草原の中、佇んでいた二人の後ろで、セリルが言った。 苦い表情をした彼の想いが何であるのか、セリルは自らの髪をもてあそびながら、続ける。

「ただ、二人の血を引く子供だけは、泉の慈悲でこの世に残された。それが泉の力を引く子供……」

揺れる水のような水色の瞳が、エシュタンドを 彼の藍色の瞳をまっすぐに見つめる。

「その子孫が 私であると……？」

信じられない思いで問い返したエシュタンドに、セリルは無表情のまま頷いた。

「そう その藍色の瞳が証拠。以前にも言ったとおり、君の母、ラウレカには聖なる力として、君には魔の力として泉の力が現れた。 だけど、元々は人間には強すぎる力だ。この力を手にする者は、強い精神と自己抑制の力が必要になる。力を行使するには、当然心身共に相当な消耗が付いてくるから 十分注意することだ。自分の心に負ければ、この力は災いともなることを忘れぬように……」

しっかりとエシュタンドに告げたセリルは、空に向かって微笑んでみせた。

「君は白水晶の剣に選ばれた者 すなわち、魔を制する剣を手にした者だ。彼の力となり、彼を助けられるのは君しかない。いいね？」

戸惑った顔のまま、それでも頷いた空を見て、セリルは大人びた微笑を浮かべる。

「藍色の泉が　君たち二人を呼んだのかもしれない。自らの血を引く者と、その愛する者への忠告として　」

呟いたセリルの少し悲しげなその瞳がそつと伏せられた瞬間、彼は滑り込むように空中に姿を消したのだった。

「ソラ　」

不思議な思いで呼んだエシュタンドの声に、空が振り返る。

そして彼女の手を掴もうと、エシュタンドは手を伸ばす。けれど、その手は段々と遠くなり、空の姿がゆらぎ、草原も何もかもが幻であつたかのように消え去っていく。

「ソラ……待ってくれ！　ソラ　！」

叫んだ自分の声すらくぐもって遠くなり、エシュタンドは真っ暗な闇に吸い込まれていくような感覚に包まれていった。

「殿下　お目覚めですか？」

瞬きをしたエシュタンドは、心配そうに覗き込んでいる栗色の瞳をぼんやりと見つめた。

「殿下、しっかりなさってください。どこか痛むところはございますか？　私が誰だかわかりでいらつしやいますか？　殿下　！」  
必死で訊ねてくる声が意識を覚醒させ、エシュタンドはわずかに笑ってみせる。

「安心しろ。そこまですべてはいいないさ、クガル」

「殿下……!!」

心からほつとしたように表情をゆるめたクガルの手を借りて、エシユタンドはゆっくりと起き上がった。

体のあちこちが鈍く痛んだが、どこにも怪我はなく、ただ深い眠りから覚めたかのような気がするだけだった。

「私は、どれくらい寝ていたんだ？」

確かケリエの大通りで倒れたのだと蘇ってくる記憶を探りながら訊ねると、クガルがようやく微笑んだ。

「ご安心ください。まださほど時間は経っておりません」

彼の言葉通り、日はまだ高く頭上にある。辺りを見回したエシユタンドは、質素な小屋の中に自分がいることに気づいた。

よく見ると寝ていたのは粗末な寝台で、壊れた窓枠の隙間から寂しげな森の風景が見える。

「ここは？」

訊ねかけたエシユタンドの前に、湯気の立つコップが置かれる。顔を上げた彼の前にいたのは、あどけない顔で笑った子供だった。

「よかった、綺麗なお兄ちゃん、目が覚めたんだね。みんなで心配してたんだよ」

藍色の瞳を瞬いた彼を取り囲んだ、やせた子供たちが次々に笑顔を見せる。

「ほんとだあ、よかったね！ 見つけた時は顔色も悪くてぐったりしてたから、どうしたのかと思ったよ」

「何もないけど、お茶だよ。飲んで、体があつたまるから！」

粗末な服を着た彼らを確かに見たことがあると気づいたエシユタンドの目線に、クガルが複雑な顔のまま頷いた。

勧められるままに木のコップを手に取ったエシユタンドのもとへ、わいわいと騒いでいた子供たちを追い払うように中年の女が近づいてくる。

「さあさ、あんたたちはもうあっちへお行き！ お兄ちゃんが休めないだろ？」

それぞれに返事をした子供たちを追いやって微笑んだのは、昨夜赤ん坊を抱いていた女に間違いがなかった。

「ごめんなさいね、騒がしくて　それにしてもびっくりしたよ、うちの人たちがあんたがたを見つけたって聞いた時は、無事出発したと思っただのに、まさか魔に襲われるとは、えらい災難だったねえ。何も無いけど、休んで行っておくれ」

心底親切心から言っているらしい彼女の笑顔に、エシユタンドは戸惑ったまま微笑を返した。

「ありがとう　ご親切に」

なんとかそう言ったエシユタンドを嬉しそうに眺めて、彼女はついでのように振り返った。

「ああ、長はあいにく今朝から留守にしてるんだけど　気にすることないからね。旅人に親切にしろってのは、いつも長が率先して皆に言ってることだから。貧乏な村だけど、そこんこだけは自慢なんだよ。じゃあね、ごゆっくり」

手を振って小屋から出て行った女の後姿を見送って、クガルがエシユタンドに視線を向ける。

「申し訳ございません、殿下。あの少年の正体もわからぬというのに、またこの村に戻ってしまうことになって　今はとにかく殿下のご休息が一番かと、ここへ……」

「いや、謝ることはない。しかし、彼らは　あのケイマとかいう少年の行動と、どうも無関係のように見えるな」

まだ温かいコップを手に持ったまま、エシユタンドは呟いた。わずかな茶葉の浮いたお茶　おそらくこれを用意することも難しいのであろう彼らが、エシユタンドに見せた優しさは純粹なもののように思えたのだ。クガルも同じ考えなのか、思案するように瞳を伏せた。

「ええ　殿下がお倒れになった後、休む場所を探していた時にこの村の男たちと出くわして　疑いつつも、心配して案内してくれ彼らの態度がまるで嘘のようには、私にも思えませんでしたので

……」  
「とにかく、油断は禁物だな。少し休んだら、すぐに出発しよう。先を急ぐ旅であるのは変わりないからな」

悩んだ末に口にせぬまま置いたコップを見つめながら、クガルに告げる。エカルドのことを思うと、ゆっくりしている時間などないのだ。

「それより、ケイマの行き先は……何かわかったか？ ベニエたちの隊は？」

気が急ぐのを静めようとしながらも、自然あせった口調になったエシユタンドに、クガルも表情を引き締めた。

「それが ケイマを追った兵も、残念ながら途中で見失ったと……残りの隊をベニエたちの迂回先へ偵察に出しましたが、無残な状態であったということでした。鳥の爪に引き裂かれており、顔もわからず、人数まできつちりと調べられなかつたので、もしかしたら誰かが助かっているかもしれませんが、今の時点では確かめるすべは」

辛そうな栗色の瞳を受け止めて、エシユタンドも顔をゆがめる。迂回を命じた自分の判断が、結果的に犠牲を出してしまったのだ。悔やんでも失われてしまった命は取り戻すことはできない。

両手を強く組んで、視線を落としていたエシユタンドの肩に、クガルがそつと手をかけた。言葉にせずとも、彼の優しさに少しは救われる気がして、エシユタンドは顔を上げた。

「王宮に 父上に伝令を……魔の数が予想よりも多い。応援を要請するんだ。状況によっては、守護竜を動かさなくてはならないと」

「はい、直ちに手配いたします」

「それから」  
すぐさま腰を上げたクガルが、怪訝そうに戻ってくる。少し考えた後、エシユタンドは笑って首を振った。

「いや、いい。おそらく 彼女は無事だろう」

「……姫君のことですか？」

不思議そうに訊ねるクガルに、エシユタンドは頷く。

「ああ。夢を見たんだ。不思議な夢をな」

独り言のように答えた彼の表情は、優しいものから少し厳しいものへと変わっていく。

夢の中で見た悲しき精霊の結末を思い出したからなのか、滝の精霊の忠告が頭に浮かんだからなのか、それきり黙ってしまったエシユタンドの藍色の瞳を気遣わしげに見つめていたクガルは、そつと小屋から出て行くのだった。

79・泉（後書き）

のんびりペースでの更新になると思いますが、続きはゆっくりお待ちいただけると嬉しいです。  
次話もお楽しみに！



## 80・誘拐（前書き）

最近執筆時間が少しずつとれるようになったので、続きを更新です！  
楽しみにしてください。読者のために頑張ります！

自分を呼ぶ愛しい青年に伸ばそうとした手は、何も無い空間をさまよい、寝台に落ちた。

「エシユタンド　！」

叫んだ自らの声で瞳を開いた空は、はっとしたように辺りを見回し、我に返る。

開いた窓から優しく吹き込む風にカーテンが揺れている。落ち着いた調度品の並ぶ部屋の中をしばらく見つめていた空は、汗の浮かんだ額を押さえた。

「夢……だったんだ」

独り言は、誰もいない部屋に小さく響いた。窓際に置かれた椅子にも、ルストの姿がないことに気づいて、空はゆっくりと寝台から出る。

その寝台のそばに白水晶の剣が置かれたままであることにほっとして息をついた空は、扉が叩かれる音に振り返った。

「お目覚めでいらっしやいますか？　姫君」

開いた扉の向こうで微笑んだのは、屋敷の主人、フェルだった。

手には水差しの載ったお盆を持っている。

「あ、はい　私、そんなに長く寝ていたんでしょうか？」

「いいえ、ほんの半時ほどですかね　少しでも疲れはとれましたか？　傷の具合は　？」

「ありがとうございます、おかげさまで……あまり痛みませんし」  
首元に巻かれた包帯にそっと手をやってから笑った空に、フェルもほっとしたように瞳を細めた。赤銅色の不思議な色合いに目を奪われながら、対照的に静か過ぎるほど深い色合いの藍色の瞳を

泉の精霊の悲しき幻を思い出す。エシユタンドが、彼らの子孫であるだなんて　やっと再会できたと思ったのもつかの間、やはり夢であったのだと顔を曇らせかけて、空はフェルが気遣わしげに自分

を見ていることに気づいた。

「あ、あの……ルストさんたちは今どこに？ 何かあったわけじゃないですよね？」

取り繕うように訊ねた空に、フェルが水差しの載った盆を置き、笑ってみせる。

「ああ、そうでした。彼らなら、代わりの馬車の手配が済んだとかで……今、出発の準備をしていますよ。姫君の様子を見てきてほしいと私に」

「そうなんですか。それなら、今準備します。着替えさえ済んだら、すぐにでも出発できますから」

「それはよかった。では、私は外でお待ちしておりますよ」

言って、そつと扉を閉めてフェルが部屋を出た後、空は急いで壁にかけていた自分の武装を手にした。

借りていたらしい部屋着から着替え、白水晶の剣を手に扉を押し、た空をフェルが案内して、階下に下りる。

屋敷の外には彼が言った通り、新しい馬車が待っていた。最初に私兵隊で用意した質素なものよりは少し豪華な、それでも落ち着いた色合いの大きな馬車だった。

駆け寄っていこうとして、周囲に誰の姿も見当たらないことに気づいて、空は一瞬立ち止まる。

「あれ、皆は まだ準備ができてないのかな」

独り言のような空の呟きに、フェルが静かに微笑む。

「もう皆様、ご乗車されておりますよ。姫君がすぐにも出発できるということだったので 残りの兵の方たちは、あともう一台の馬車のほうに」

「そうですか じゃあ、急がなきゃ」

にこやかに頷いたフェルに背を押され、空は馬車に乗り込む。車内に見慣れた私兵隊の武装を着込んだ人影を目にして安心した空がお礼を言おうと振り返る。しかし、意外なことにフェルは見送るわけでもなく、そのまま馬車に乗り込んできたのだ。

「フェル、さん？」

黒い瞳を驚きに瞬かせた空の前で、フェルが被っていたフードを取った。見事な赤銅色の髪をかきあげて、彼は笑う。

「本当に　　姫君は私が思ったとおりのお方だ。純粹で、お優しく、綺麗な心の……しかし、時には人を疑うということも、覚えられたほうがよろしいですよ」

優しい微笑の中に閃いた皮肉げな色とその言葉に、空が息を呑む。あわてて目をやった先の私兵隊　　いや、確かにルストたちだと思つた人影が、頭に被っていた布を取り、全く違う顔を見せたことに、空は言葉すら失つた。

咄嗟に浮かせかけた体は、隣に座つたフェルが意外なほどに強い力でしっかりと押さえた。

「出発しろ」

低い声ですばやく告げたフェルの言葉で、馬車は動き始める。

「そんな……待って、一体どこへ！」

顔色を変えて、逃れようとする空の腕をフェルが難なく掴んだ。

彼の赤銅色の瞳は、先ほどもまでの優しさが嘘のように、冷たく光る。「黙って　　あまり暴れられるなら、もう一度……今度はこれで眠つていただくことになりましたが、そのほうがよろしいですか？」

何かの薬のような小瓶を懐から取り出し、浅黒い手で空に見せ付ける。

信じられない思いに言葉を止めた空を見て、フェルは静かに続けた。

「それから　　変な抵抗をされたら、屋敷に捕らえたあなたの兵たちの無事は保証できなくなることもお忘れなく。どうすればいいかわかりですね？」

話す間にも、馬車は屋敷の門をくぐり、速度を速めていく。空は馬車の窓から屋敷が遠ざかつていく光景を呆然と眺めながら、ただ目を見開いて、フェルを見上げた。

「大人しく、我々に付いて来ること　　それが賢明なご判断かと思

いますよ」

言い渡された言葉は、拒否することを許さぬ力に満ちていた。何も言えぬまま、抵抗することもできなくなった空をちらりと見下ろして、フェルはまっすぐに座りなおした。

空の無言の態度を了解と取ったのか、これ以上言わずとも大丈夫だと判断したのか、空の腕を放す。

「ご心配なされずとも、あなたに危害を加えるつもりはありません。行き先はそれほど遠くはない、すぐに着きますよ」

あくまで丁寧な口調で言ったフェルは、余裕にあふれた微笑すら見せる。

空にできる最後の抵抗は、ただその瞳を睨み付けることだった。唇を噛み締めて、震える両手で白水晶の剣を握り締める。そんな空を見ていたフェルは、意味ありげに微笑んでから、視線をそらした。

悔しい思いも、情けない気持ちも何もかも飲み込んで、黙り込んだ空を乗せて、馬車は走る。

知らぬ男たちに周りを囲まれ、信用した吟遊詩人に騙されて、彼女の旅は始まってしまったのだ。

思いもよらぬ、別の行き先へと。

小さな窓だけが外からの光を取り入れている、地下室の中にルストはいた。

縛り上げられた体を恨めしげに見て舌打ちをもらす彼に、隣にいたカルファーズが冷たい視線を投げる。

「だから、あの男を信用すると言ったんだ　全く、つくづく君

は甘い」

忌々しげに呟かれたカルファーズの言葉に、ルストが目を開いた。「まさか水に睡眠薬が入れられているなんて思わなかったんだ。そう言う隊長、あなただって飲んだんじゃないですか！ 自分だって縛り上げられているくせに」

「馬鹿を言うな。私は水を飲んだんじゃない。自慢じゃないがこの屋敷で出されたものは何一つ口にできなかった。意識を失ったのは、部屋に焚かれた香のせいだ」

言い返すカルファーズの背後で、静かな笑いがもれる。すぐにおさまったそれは、彼自身の自嘲も込められているようだった。

「どちらにしろ、気づかなかったんだ。同じ過ちをおかした者同士での言い争いは、無様なだけだよ、カル。そう言う私もしてやられた口だが、全く、こんなことならもう少し遅く戻ってくるんだっ  
た」

馬車を手配した後、すぐに戻ったセイシエルも、部屋に焚かれた香にやられたのだ。

倒れこんだ彼らが目を覚ました時には、既にこうして地下室らしき部屋に縛り上げられて転がされていた。

他の兵たちも別室に捕らえてある、と無愛想に言い置かれてから、彼らは 主にルストとカルファーズが こうして不毛な言い争いを続けていたのだった。

「そつだ、こんなことを言ってる場合じゃない。一体どうすればいいんだ…… 姫君はご無事なんだろうか」

両手が自由になるのなら頭を抱えそうな勢いで、たちまち沈んだ顔になるルストをちらりと見て、カルファーズが鼻で笑った。

「さつきから結局はそれだな 随分とあの姫に心酔してるらしい」「あなたは心配じゃないんですか？ 姫君に何かあったらどうするのです！ 殿下にも申し訳がたためばかりでなく、私自身もいってもたつてもいらぬ思いであるというのに、あなたは  
！」

顔色を変えて抗議するルストに、カルファーズが静かな青灰色の

瞳を向けた。

その思いのほか冷静な色に、ルストが更に言いかけた言葉を飲み込む。

「まあ待て。今、策を考えているところだ。私とて、姫君のご無事を願わぬわけではないのだから」

言つて、しばらく何か思案していたカルファーズが、視線をセイシエルに移す。その瞳に浮かんだ色の意味がわかっているかのよう  
に、セイシエルはため息をついた。

「またあれか、できるだけ使いたくないんだが……仕方ないか、姫君の危機だからな」

「私にできるものなら私がやっている。お前にしかできない役目だ。誇りを持って遂行しろ」

「絶対楽しんでるだろう、お前」

「いいや、決してそんなことはない」

嫌そうに睨み付けるセイシエルに、カルファーズは涼しい顔で言つてのけている。

彼らのやりとりを啞然と見ていたルストは、ためらいつつも口を開いた。

「何か、有効な策でも？」

ルストの遠慮がちな質問に、カルファーズが珍しくも微笑んでみせる。

「この状況においてはな」

「まあ、こんなこともあるかと　いつも仕込んであるんですよ」

ため息まじりに言ったセイシエルの正面に、カルファーズが身を寄せる。全身を縛り上げられている以上、近づけられるのは口しかないのだが　なんとか体勢を工夫して、彼が歯でくわえた物、それはセイシエルの銀の耳飾りだった。苦勞してカルファーズが手の中に落とした三角形のそれは一部が刃になっているらしく、器用にセイシエルは手首の縄を切ってみせた。

驚きに目を見張るルストの前で、セイシエルがあつという間に自

分の縄全てを切り落とした。

「すごいじゃないですか！ 早く、我々の縄も……」

勇んで自分の体も寄せようとするルストに、カルファーズが首を振る。

「我々全員が一気に抜け出しては目立つだろう。まずはシエルだけを偵察に向かわせるんだ」

「それはそうですが……セイシエル副隊長だけ、どうやって？」

きよとんとして訊ねたルストにカルファーズがにやりと笑った。

彼の手首の縄に切り目だけを入れていたセイシエルを顎で示して見せる。

「まあ黙って見ているんだな」

不思議そうな顔で見守るルストの前で、覚悟を決めたようなため息をついたセイシエルは、肩までの銀の髪をかきあげて、瞳を閉じた。

彼が次に薄水色の瞳を開いた瞬間、ルストはあまりの驚きに大口を開けたまま固まった。

男性にしては細身で線が細く見えたセイシエルだが、確かにしっかりと筋肉のついた体つきをしていたというのに、それが今では

女性のように華奢な体格になってしまったのだ。

いや、肩までの美しい銀髪はそのままに、ルストに向かって微笑んでみせたのは、女性そのものにはしか見えないセイシエルだった。

「セツ　セイシエル副隊長！？」

はずれそうだった顎に力を入れて、ようやく声を出したルストに、セイシエルであったはずの女性はやくそくのように片目を閉じてさえ見せる。

「いかがでしょう、私の幻術の腕前は」

服装すらいつのまにか街中でよく女性が身につけている裾の長いドレスに変わっていて、ルストは自分の目が信じられないようにひたすら瞬きをしていた。

「げ、幻術ですか　これはすごい……」



「効果はそう長くはないんだ。あまり役には立ちそうもない特技だと今まで思っていたが　大事な局面で使えてよかったな、シエル」  
平然と代わりに言うカルファーズに、セイシエルは銀の髪を大げさにはらいのけて扉へ向かった。彼が取り出したのは、もう片方の耳に残っていた銀の耳飾り　先ほどと違い、細く尖った形をしたその耳飾りをセイシエルが無造作に動かす、とさして時間もかからずに確かに鍵がかけられていたはずの扉が、かちゃりと音を立てて開いたのだ。

「見張りは廊下の先に一人だ。健闘を祈るぞ、シエル」

「先にくたばるなよ、カル」

気安い挨拶を交わして、女性の姿のセイシエルは扉の向こうへさつさと出て行った。

すぐに聞こえた短いうめき声と廊下の向こうにどすんと響いた音で、どうやら彼が見張りを倒したらしいことがわかる。

あんぐりと口を開けていたルストに、カルファーズは口の端だけを上げて笑った。

「とにかく我々はここで対策を練るんだ。いいな　と、いつまで驚いている？　君の隊には幻術くらい使う奴がいなかったのか」

あきれたように訊ねられ、ルストは扉のほうを見つめていた目を、カルファーズに向けた。

「いや、我々の隊にはそのような者は　それにしても女性に化けるとは、珍しい幻術ですね。それに鍵を開ける腕前と言い……」

「シエルは王宮に来る前は、あれで泥棒の真似事をやっていたからな。無駄な技だけ持っているんだ。全く　第一殿下が王宮に召し上げてくださらなかつたら、あいつはとっくに縛り首にでもなっていただろうな。本当に、我らが第一殿下はお心が広く、素晴らしいお方であり……」

まだまだ続けそうだったカルファーズの言葉を、ルストはあせつたように咳払いすることで止めた。

不機嫌そうに視線を向けたカルファーズに、信じられないように

声をかける。

「ちよつと待つてください、泥棒、ですって　？」

「ああ、そうだが」

あつさりと肯定してみせると、カルファーズは何かを思い出すように瞳を閉じた。

「あれは、私がまだ平隊員であつた頃のことだつた　あのけしからん男は商人の隊に女に化けて紛れ込み、まんまと王宮へ入り込んだんだ。そして恐れ多くも第一殿下の宮へ忍び込もうとした。そこを私に捕らえられたというわけさ。普通ならさつさとその場で切り捨てるところだが、第一殿下が待つようにと言い渡されたのだ。面白い、とな　」

「面白い……」

驚きにオウム返しになつたルストの声に、カルファーズは楽しげに頷く。

「そう。自分の下で働いてみないか、とシエルをまずは護衛兵としてお雇いになつたんだが、何の因果か今では殿下付き私兵隊の副隊長にまでなりやがつた。変に器用な奴なんだよ、あいつは」

口調だけは嫌そうに、それでも話すカルファーズの瞳は優しくかつた。カルファーズとセイシエルの気軽な接し方を不思議に思つていたらルストも、ようやく納得できたような気がした。

おそらく、それから色々あつたのだろう。元泥棒だとは驚いたが、能力がなくては副隊長まで務め上げることなど到底無理だということとは、ルストが一番知つていたのだ。

「第一殿下も、相当にお心の深いお方ですね　」

複雑な思いを込めてやつとそれだけを返したルストに、やつとわかつたか、と言わんばかりにカルファーズは満面の笑みを浮かべた。また殿下の自慢話を始めそうな彼を遮るかのように、ルストは表情を引き締める。

「とにかく、偵察は副隊長にお任せするとして、我々はこれからどうしましょうか。一刻も早く姫君を救出せねば……」

真剣なルストの声に、カルファーズも咳払いをして真面目な顔になった。

「そこなんだが、どうも私にはあのフェルとかいう男が、姫君に危害を加えるようには思えんだ。そのつもりなら、この屋敷へ連れてくるまでもなく、いくらでも姫君のお命は狙うことができたはず。ということは彼の目的は」

「姫君の誘拐、そういうことですか？」

「ああ。何らかの目的で姫君を連れ去った。問題はその理由と場所、そして誰の指示かということ」

「誰の、って 隊長は背後に誰かがいると？」

「それはそうだろう。一介の吟遊詩人などと嘘くさいにもほどがある。奴の正体は何なのかはまだ不明だが、背後にとんでもないものが動いているのかもしれない」

「とんでもないもの……」

言葉を出さずに、険しい顔で頷いてみせたカルファーズは、それきり黙りこむ。

ルストの赤褐色の瞳も、まさか、というように深刻な色を帯びていく。

地下室の埃くさい空気さえ、じんわりと体にまとわりついてくるような、そんな気さえルストにはするのだった。

## 80・誘拐（後書き）

信じていたフェルに騙され、連れ去られてしまった空。

彼女を守る役目を負うカルファーズたちは、すぐさま救い出そうと  
手立てを練るのだが。

というところで次話へ続きます。

どうぞお楽しみに！

## 81・フエイラ(前書き)

お待たせいたしました！  
ついに空の誘拐の謎がとけます。

もう何度目かもわからない後悔に空が陥り始めた頃、馬車は止まった。日は既に低く、落ちようとしている。

どこかの林らしき道を抜けて、ぐるぐると回ってきたようだったが、もともとのこの国の地理を知らない空にはここがどこであるのか全く検討もつかない。

ただ暗い顔で言われるままに馬車を降りた空の目の前に立っていたのは、大きな屋敷だった。

二列に連なる木々の間にまっすぐ伸びた石畳の小道があり、その先には立派なアーチ型の門がある。

門の向こうに見える屋敷は、派手ではないものの装飾が美しく、街道沿いにあつたような村の家々とは明らかに異なっていた。

「ここは……？」

思わず訊ねかけた空は、ためらったように言葉を止める。

空の背後に降り立っていたフェルが、その様子を見て微笑んだ。

「すっかり嫌われてしまいましたね。まあ無理もないですが……とにかく日が暮れば冷えてきます。さあ、中へどうぞ」

脅しめいた言葉を冷たく言い放っていたことが嘘のように優しく促され、空は複雑な思いのまま彼に従う。

小道にずらりと並んでいた警備兵たちが、フェルに頭を下げるのを見ながら、空はフェルについて屋敷の門をくぐった。

てっきり牢屋のようなところへでも連れてこられるのかと思っていたのに、たどり着いたところがこんなお屋敷だなんて……。

白鳥の模様が彫られた美しい石造りの噴水のそばを通りながら、空は内心首を傾げる。

かまわず屋敷の主人であるかのような顔で中へ入っていくフェルの背を、空はあわてて追いかけた。

「おかえりなさいませ、フェル様」

数人控えていた侍女たちが一斉に頭を下げ、その間をフェルはすたすたと歩いていく。

着ていたフード付きの長衣を侍女の一人に預けた彼は、揺れる長髪を後ろで束ねながら、ついでのように口を開いた。

「姉上は？」

問われた侍女が無言で正面の階段を指し示す。頷いたフェルは、慣れた様子で階段を見上げ、エスコートするかのように空に手を差し出した。

戸惑いつつも、あまりに優雅な仕草に逆らえず、空は彼の手を取った。

階段を上り、廊下の奥に見えた扉の前で、フェルが立ち止まり、扉を叩く。

「どうぞ」

一言返ってきた女性の声で、フェルがそつと扉を開いた。空に入るように促して、微笑みかける。

ためらいながらも部屋に入った空は、正面に置かれた椅子に腰掛けていた人物を目にして、驚きを隠せなかった。

「え、フェルさ……そんな」

大きく瞳を見開いて、息を呑んでから背後のフェルと彼女とを見比べる。

それ以上言葉が出ない空を見ていたフェルと正面の女性は、同時に笑った。

「そんなに似ているかな。ここまで驚かれるとは思わなかったが」

空を見つめて、楽しげに呟いたその女性は、まさにフェルと瓜二つ。赤銅色の瞳と同色の長い髪を持ち、浅黒い肌をした人物だったのだ。

ただその髪がフェルと違ってまっすぐに伸びていることと、フェルよりは体格が細身であること、それぐらいしか異なる点がなかった。

「初めまして、私はフェルの双子の姉　フェイラと申します。このような場所までお連れしたことに、本当に申し訳ない。しかし、どうしても姫君とお話したいことがあり、多少強引な手段を取らせてもらった次第です」

椅子から立ち上がり、歩み寄ってきたフェイラは、空に向かって堂々と挨拶したかと思うと、片手を差し出した。

フェルより少し背が低いものの、女性にしては大柄で声も低く、肩には筋肉がついた、しっかりとした体格をしている。彼女が身につけた男物の衣装を戸惑ったように見つめていた空に、フェイラは気づいたように笑った。

「ああ　私も武人のはしくれでしてね。ドレスはどうも昔から苦手で……このような格好で失礼をいたします」

「いつ、いいえ　それは……私も同じですから」

恐縮するような言葉に思わず答えた空の武装を眺めて、フェイラは声を上げて笑う。あまりに清々しい彼女の笑顔に、空は不思議と警戒心が解けていくのを感じていた。

「お茶でも用意させましょうか」

扉のそばに控えていたフェルがそつと言った言葉に、フェイラは頷く。

お辞儀をして退出する彼を見送ってから、フェイラは空を窓際に置かれたテーブルのほうに案内した。

「どうぞ、お座りください。話は、少し長くなりそうなので」

「は、はい」

なぜあんな風に無理やり連れてきたのか、勝手に連れられてきてもっと文句を言いたいはずなのに、素直に従ってしまう。

抗議するには彼女の仕草は優雅すぎるし、空に対する態度も丁寧すぎて、空は戸惑いながらただ椅子に腰掛けた。

そんな彼女の気持ちを読み取ったかのように、フェイラはまた恐縮したように微笑んだ。

「改めて、お詫び申し上げます　強引に誘拐するかにように貴女を



お連れしたことで、本当に申し訳なく思っています。しかし、正式に面会を申し込むには、貴女の立場と我々の目的は厄介であったもので

「私の立場と、あなたたちの目的……？」

繰り返した空を見て、フェイラは優しく瞳を細めた。表情すらもフェルに似ている。女性である分、フェイラのほうがわずかにやわらかい雰囲気を持っていた。

「そう、ミデイス王国第三王子の正式な婚約者殿　そして、それだけではない、大切な役目を担ったお方　いまや、ミデイス王国にはなくてはならない姫君でしょう」

「そんな」

はつきりと告げられて、空は思わず視線を伏せる。けれど、彼女の言葉はいまやまぎれもない真実であるのかもしれない。空が望むと、望まざるとにかかわらず。

フェイラは空の沈黙を何と取ったのか、テーブルの上に組んだ両手をそつと置いて、微笑んだ。

「そのようなお方に我々が公式な面会をお願いするには、色々と面倒な手続きが必要だ。そして、それには王宮を必ず通す必要があるけれど、我々は貴女と秘密裏にお話が出た。それで、どのように脅しめいたことまでして、ご同行願ったわけです」

「脅しめいた、って……じゃあ、もしかして本気ではなかったってことですか？」

空の問いに、フェイラは安心させるように頷いてみせる。

「ということ　兵の皆は無事……？」

「ええ。どうかご安心を　彼らにも本当のことを言わなかったのは、王宮に伝わることを防ぐためだった。お話が済んだら、すぐに解放するよう手配いたします」

「なんだ……よかったあ」

思わず安堵の息をもらして、咳いてしまったから、空はあわてたように口を押さえる。

自分の行動一つで彼らにまた危険が及ぶようなことになってはいけないと、相当地に緊張していたらしく、体からも力が抜けたような気がしたのだ。

「え、えーと、それで……お話というのは……？」

かりにもミデイス王国の姫君と呼ばれるからには、それなりの態度を取らないといけないのかもしれないと、空は少し姿勢を改める。フェイラは特に気にしていないのか、自然な微笑を返した。

ちょうどその時扉が開いて、お茶を手にした侍女とフェルが入ってきて、侍女がテーブルにお茶を置き、退出していった。

フェイラがお茶を空に勧めるが、フェルのほうは同じテーブルに付くことをせずに、部屋の端に置かれていたソファのほうへ静かに腰を下ろした。自然な彼の仕草を、フェイラは疑問に思う様子もなく、カップに口をつけている。

どこか、彼女の立場が上のように思えるのは……お姉さんだからなのかな？ それとも。

まるで主人に付き従う者のように、無言で二人を見守るフェルの態度に首を傾げていた空を話に戻したのは、フェイラだった。

勧められたお茶をフェイラが美味しそうに飲んでいるのを見ながら、空が遅れて口にしたところで、彼女が話を切り出したのだ。

「回りくどいのは苦手な性分ですね　単刀直入にお聞きしましょう。貴女は、これをご存知ですね？」

さらりと言葉を繰り出して、フェイラがテーブルの上に載せたもの　それは、まぎれもなく空が見たことのある紙の束　あの、古き伝承の原書に挟まれていた、数枚の紙であったのだ。

アメ神の言い伝えが書かれていた、なくなったままであったはずの紙をフェイラが掲げてみせる。文字は読めないものの、独特の手書きの雰囲気、空はしっかりと覚えていた。

「じつ、これは　！　どうしてあなたたちがこれを……一体どういうことなんですか！」

テーブルに両手をつけて、勢いあまって立ち上がる空の肩に、フ

エイラが静かに手を置く。落ち着くように、と言われたかのような仕草で、空はなんとか気持ち静めて腰を下ろした。

「ここから先は、決して誰にも口外しないでいただきたいのですが、そう、貴女以外にこの話を聞くべき人は、おそらく第三王子その人のみであるかと　お約束、いただけますか？」

真剣なフェイラの瞳に見つめられ、空は固く唇を引き結んだまま、頷いた。

原書の紛失騒ぎの理由がついにはわかるかもしれないのだ。簡単に他の人に話せるような内容ではないことは推察できた。

空の決意が伝わったのか、フェイラはゆつくりと口を開いた。

「私の弟、フェルが王宮の舞踏会に呼ばれたことをご存知ですね」

「ええ、もちろん」

確かめるように問われて、空は答える。彼の歌は素晴らしく、とても印象的だったのだ。忘れるわけもなかった。

「吟遊詩人として歌を披露し、そして占術を見せた。そうでしたかね？」

「そう、ですけど……？」

何が言いたいのか、と見上げた空に返ってきたのは、深い赤銅色のフェイラの瞳。フェルは静かにソファに腰をかけたままだった。

「実は　あれの本業は、ただの吟遊詩人ではない。各国を周遊し、必要な人間に雇われれば力を行使する、術者であるのです」

「術、者……」

口にしてから、空の顔色が変わっていく。

「そんな、まさか……」

無意味な言葉だけが頭の中に浮かんでは消える。空の動揺を全て理解したように、フェイラはしばらく黙っていてから、テーブルの上のカップを手に取った。

「そう　あの時、舞踏会に弟が行ったのは、歌を披露するためだけではない。王宮の下見と、とある術をかけるべき人物の観察を兼ねていた。そしてそれを命じたのは　貴女もよくご存知の、王宮

の中心人物……」

「中心人物ってもしかして……！」

両手で口を押さえて、息を呑んだ空にフェイラはゆっくりと頷く。「同じ人物によって、弟は先にミデイス王国の古き伝承をまとめた原書を盗むことを命じられた。正確に言えば、その中に挟まれた手書きの文書を。書かれた内容は重要ではなく、その文書自体が必要だった。そしてその理由は……」

驚愕に瞳を見開いたままの空とは対照的に落ち着いた様子のフェイラ。彼の平然とした表情を信じられないように見つめながら、空はフェイラの言葉を待った。

フェイラはまるで、どういつ風に話をするべきか迷っているかのように黙っていてから、ゆっくりと口を開く。

「姫君は術者というものがどんな術を使うか、具体的にご存知ですか？」

「え……と、あの書庫では確か、不思議な炎みたいなものに襲われてでも、はっきりとはわかりません……」

では、あの炎はこのフェルが繰り出したものだったというのか。何とも言えない複雑な思いでフェイラに答える。彼女はただ優しく頷いて微笑んだ。

「術者は、基本的に各自得意とするもの。水や炎、風、といったものを操ることができる。そういう意味では、魔の力や聖なる力と似ているわけです。けれど根本的に違うのは、その術が自然に発生するものではないということ。もちろん本人の適性などにもよって、どれくらいの術を身につけられるかは異なりますが、ある程度の修行を積み、術を使うことは可能。だから広範囲で考えれば、守護や攻撃の術を身につけている兵たちも術者だと言えることができる」

「はあ……」

いきなり始まった説明に空は困ったように相槌を打つ。それよりも原書の話が聞きたいというのに。あせる空を落ち着かせるよう

にお茶を飲みながら、フェイラは続けた。

「そういうわけで、術者というものは簡単な術から複雑な術まで、色々な術を使う人物がいるわけです。炎だけで言っても、指先に炎を灯せるだけ、といった簡単なことから、生み出した炎で誰かを焼き殺すこともできる、といった複雑なことまで……」

「焼き殺す、ですって？」

顔色の変わった空を見て、フェイラは肩をすくめてみせた。まっすぐに流れる赤銅色の髪がさらりと落ちる。

「もちろん、そこまでできる術者は多くはありませんがね。もともと、術というものはかなりの修練と適応力を要するものですから。そう言つて、ソファに腰を下ろしたままのフェルに視線を移すフェイラを見て、空は息を呑んだ。

「もしかして……彼には、それができると？」

口にした問いは震えて、小さな呟きのようだったが、フェイラはしっかりと頷いたのだ。空に向き直り、フェイラは静かな瞳をまっすぐに向けてくる。

「本来、術で誰かを殺すことは禁じられている。けれど、まだ秘密裏に行われている行為でもある。そういった術は、術者たちの間で、禁術、秘術、あるいは呪術、などと呼ばれている」

「呪、術」

かすれた声で繰り返しながら、胸の奥から広がってくる嫌な予感に空は全身が冷たくなるのを感じていた。白くなる両手を握り締め、フェイラの瞳を見つめる。

「その術の効果を高めるには、本人、または血縁者の髪の毛や爪などを手にいれ、力を借りることが一番。しかし、それができなかつた場合は、同じように本人、または血縁者の書いた手書きの文書などを利用することもある」

聞きながらますます顔色を失っていく空に、フェイラは決然と瞳を上げ、テーブルに置いていた紙の束を持ち上げて見せた。

「これを書いたのは、第三王子の母君　ラウレカ殿。そして、そ

れを手に入れ、王子の暗殺を謀るものがミディス王宮にいる。その人物は、あなたも見当がつくはずだ　　暁の姫君」

「まさか　王妃……!?!」

ついに腰を上げて、半ば叫ぶように口にした空に、フェイラはしっかりと頷いてみせたのだった。

## 81・フェイラ（後書き）

明らかになった恐ろしい計画に、空はどつするの  
か。続きもご期待ください。

## 82・条件（前書き）

お待ちせしました！  
続きをぜひご覧ください。



## 82・条件

「カルファーズ隊長、これで全員です」

ルストの言った言葉で、カルファーズは満足げに頷いた。

別の地下室に縛り上げられていた者たちも含め、私兵隊員全てを助け出すまでにはそれほど時間はかからなかった。

もともと王宮で鍛えた隊員たちと、屋敷の護衛程度の兵たちとは実力が違うのだ。先ほどまで閉じ込められていた地下室へ兵たちを押し込め、侍女から料理人に至るまで一部屋に拘束したところで、ルストが屋敷の外の偵察から戻ってきた。

「外にはもう見張りもいないようです。轍わだちの方角から見て、姫君を乗せた馬車は西へ向かったようですが　セイシエル副隊長からの知らせはまだありませんね」

すぐにでも姫を追いたそうに落ち着かないルストの様子をちらりと見ながら、カルファーズが顎に手をやる。

「ふむ。奴から知らせがないということは、もう潜入したのか……」  
独り言のように呟く声でルストは目を上げる。

「潜入って、奴らの行き先に辿りついたということですか？　それなら早く我々も　！」

腰元の剣に手をやって、いきり立つルストに、カルファーズは眉をひそめて鼻を鳴らした。

「まあ落ち着きたまえ。全く君は浅慮な　副隊長がそれでよく務まるものだな」

「何ですって　そういうあなたは姫君が心配ではないのですか！　よくもそんなにのんびりと構えていられますね！」

睨みあう二人の間を他の隊員たちが取り成す。セイシエル不在である現在、この空気を和ませることのできる人物はおらず、皆困った顔で黙り込んでいた。

「それで　何を一体考えておられるんです？」

ようやく堪えたルストの問いに、カルファーズは青灰色の瞳を細めて振り向いた。

「もしもシエルが奴らを見失ったのなら、既に帰ってきて我々と対策を練っているはずだ。だがまだ知らせはない。ということはもう潜入済みで、姫君の様子を見ていてもいつたところだろう。そこへ我々が闇雲に追いかけて踏み込んでいくほうが、姫君を危険にさらす可能性がある。何よりも彼らには姫君を傷つけるつもりはないのだ。無駄にあせる必要はない」

「そんなこと……どうして確信できるんですか？ それにもう潜入したかどうかなんてわからないんですよ。まだ追っている途中なのかも……」

不安げに思案するルストを見て、カルファーズは短く息を吐く。馬鹿にしたような顔を隠そうともせず、腕組みをしてルストを見下ろした。

「いいかい、ルスト君。目撃した兵からの報告を聞いただろう。姫君を乗せた馬車には大した荷は積まれていなかった。行き先はそう遠くはないということだ。万が一遠かったとしても、途中で必ず荷を補給するためどこかに立ち寄る。大体もうすぐ日暮れだからな。まさか一国の王子の婚約者ともあるう姫君を野宿させるような危険はおかさないだろう。となると、彼らの進める先は自然と狭められるはずだ」

「西の方角というと、ケリエで宿を？ しかしまだ遠すぎるし他に荷を補給できるような街といえば、まさか我々が抜けてきたサバへ？」

いつの間にか腹立ちを収めたルストが訊ねると、カルファーズは口の端を上げて笑った。

「いや、私が思うに、奴らはできるだけ人目につくのは避けたいはずだ。人の多い街よりも、こういった森の中に隠れた屋敷のような場所を好むはず。つまり、西へ向かったように見せかけておいで……」

「実はまだこの街道近くの森のどこかに潜んでいる……そういつことですか!？」

ルストの出した結論に頷いて、カルファーズは真剣な表情に戻った。

「既に偵察兵は出させた。街道沿いなら、それほど距離はない。馬車で進めるような森は限られる。姫君の行き先を追うのは、それほど難しいことではあるまい。問題はそこから先の話だが……」

最後は小さくもらしたカルファーズだったが、ルストにはもはや聞こえていないようだった。表情に明るさが戻った彼にそれ以上を言うことはせず、カルファーズは隊員たちに向き合った。

「もうすぐ偵察兵が戻ってくるだろう。それまでに出発の準備を整えておくんだ。この屋敷の馬と馬車は押さえてある。各自分かれて荷を準備しておけ」

すぐに兵たちが散らばっていく中で、カルファーズだけは部屋に残っていた。

握り締めていた手を開き、彼が見つめた物は白い小さな石。夕日を反射してきらきらと光るそれを眺めながら、カルファーズは兵の報告を思い出していた。

「フェルの衣装棚から出てきた、だと？　こんな物を一介の吟遊詩人ごときが持っているわけではない。もしかして　奴の背後には、私の想像以上のものが控えているのでは……全てを仕組んでおいて、一体何が目的なんだ」

険しい顔で一人呟く彼の言葉は、誰もいない部屋の中に吸い込まれていく。

やけにあっさりと捕まった屋敷の兵も、侍女ですらも、おそらく彼らの仕える主の正体など知らないのであろう。

唯一すごい腕を持っていた護衛兵は、フェルに付いていったのだろうと思うと、更にカルファーズの表情はゆがむ。

「こんな時、シエルがいたら気づくのだろうがな」

直情型のルストでは期待できない推察を見せてくれたであろう副

隊長はまだ戻らない。

ため息を一つ吐いたカルファーズは、切り替えたように素早い動きで部屋を出て行くのだった。

\*

震えた空の手にあたり、ティーカップが音を立てて、テーブルの上に転がった。

中味は既に飲み干してあったことが救いだだったが、あわてて元に戻そうと手にとっても、なかなかうまくできない。

見かねたようにそつとフェイラが手伝ってくれる様子を呆然と眺めながら、空は更に震える両手を握り締めた。

「驚かれるのも無理はない　まあ王位争いはよくあることとはいえ、あなたには馴染みがないことでしょうからね」

フェイラが優しく言う言葉が、耳に遠く聞こえた。

よくあること……？　義理とはいっても、自分の息子を呪い殺そうとすることが　よくあることだって言うの？

口には出せなかった空の問いがまるで聞こえたかのように、フェイラは申し訳なさそうに微笑んですらみせた。赤銅色の髪が綺麗に揺れる。

「異世界からやってこられたというあなたには理解ができないかも

しれないが、王座というものは特別魅力のあるものなんですよ。人の心を狂わせるほどのね」

真剣な光を瞳に宿して、まっすぐに見つめられてやっと、空は声を上げる。

「そ、それで……あなたたちは、王妃の依頼を受けたと言うんですか？ エシユタンドを呪い殺すつもりだと？ だとしたらあたしは絶対にそんなことを許さない！」

テーブルを叩いた空の勢いに瞳を見開いて、フェイラは笑った。笑い声は女性らしく軽やかなものだった。

「なっ、何がおかしいんですか！ そりゃあ、あたしは術とか使えないけど、だけど王子のことは命を懸けても守ってみせるんだから！」

興奮した空の肩に手を置いたのは、いつの間にかそばに佇んでいたフェルだった。

彼も同じく可笑しそうな顔で空を見下ろしている。

「あっ、あなたまで……馬鹿にしてるつもり？ 人を騙して、術者だなんてひどいじゃない！」

ついに叫んだ空にフェルは微笑んだ。

「本当に、貴女は可愛らしい方だ。まっすぐで、私が人すら殺せる術者だと知っても恐れることもせず……貴女の命を奪うことなんて、簡単なことなのですよ？」

表情とは裏腹に恐ろしい言葉の内容は、空の顔を凍らせる。しかし不思議と怖い気持ちよりも、怒りの方が勝っていた。

更に言い募ろうとした空を止めるように、間に入ったフェイラがフェルを軽く睨みつける。

「そのへんにしておけ、フェル。いくらこの方が可愛いからといっても、冗談にもほどがあるぞ」

「申し訳ありません、姉上」

フェイラの言葉で素直に引いたフェルは、冗談めかしたように胸に手を当ててお辞儀をしてみせた。

「冗、談……？」

哑然として二人のやりとりを見ていた空に、フェイラが微笑んだ。「もちろん、貴女のお命を奪うだなんて、とんでもない話です。むしろ逆と言ってもいい。貴女はかけがえのない存在ですからね。」

ミデイス王国にとつてだけではなく、我々にも」  
笑顔の中で、彼女の瞳は笑ってはいなかった。赤銅色が真剣な光を帯びて、夕日のように美しくさえ見える。

「どういう」

訊ねようとする空にフェイラは頷き、空の手を取った。優雅に手の甲に口付けされ、空は思わず頬を染めた。女性でありながら、まるで一国の王子かのような洗練された動きだったのだ。

手を離れたフェイラは、日の暮れた窓の外を見つめながら口を開いた。

「術者の鉄則をご存知ですか、姫君。当然ながら、依頼主の依頼を速やかに実行すること、そして失敗は許されない。それはすなわち術者の信頼の失墜につながりますからね。契約は必ず遂行される……ある特別な場合を除いては」

「特別な、場合？」

眉を寄せ、ただ繰り返した空に歩み寄ったフェイラは、テーブルの上に置かれたままだった紙の束を手にする。

「そう、契約の不履行がより有益である場合においてのみ、術者は依頼を破棄する場合があります。つまり我々には王妃の依頼を実行するつもりはない。そういうことです」

きつぱりと言いきったフェイラをしばらく見つめていた空は、まだ硬い表情のまま、震える唇を開いた。

「じゃあ、エシユタンドを殺すつもりはないって。そう思っていないんですね？」

微笑み、頷いたフェイラが手にしていた紙の束を空のほうに差し出す。受け取るうとした空の手は、寸前でフェイラが手を引いたことで止まった。

ようやく明るさを取り戻しかけた表情を再び凍らせ、不安げな瞳で見上げた空に、フェイラはあくまで人の良さそうな笑顔を浮かべてみせたのだ。

「この紙をお返しするには、条件が一つあります。暁の姫君」

言ったフェイラの隣に、フェルが並ぶ。同じ赤銅色の瞳で続きを受けたのは、彼だった。

「条件とは、貴女。そして貴女の持つ宝剣。我々にぜひ、その力をお貸しいただきたいのですよ、心優しい姫君、ソラ様」

大きく瞳を見開いた空を、美しい双子が見つめる。

「あなたたちは、一体」

後ずさりかけた空は、いつの間にか後ろに出現していたものに声なき悲鳴を上げた。

青く、静かに燃え盛る炎が、いくつも空の周りを取り囲み、ふわふわと浮かんでいたのだ。

「それは追々お話しすることにいたしましょう。道のりは長い海の国、ビバスマではね」

自らの手の上で同じ炎を愛でるように操りながら、フェルは微笑む。

震え、ついには力の抜けかけた空の体を支えたのは、フェイラだった。優しい、優しい瞳に、空は捕らえられたように動けなくなる気がした。

## 82・条件（後書き）

空を追い、救出しようとする私兵隊員たちの奮闘のさなか、空は予想だにしない条件をつきつけられていた。海の国ビバスへ空は連れて行かれてしまうのか、エシユタンドは、ルストたちは　　ということ  
ことで次回をお楽しみに！



### 83・追跡(前書き)

お待たせしました！

空の追跡、一体どうなるのかお読みください。

すっかり日の落ちた室内で、蝋燭の灯りだけを空はぼんやりと見つめていた。

今夜はもう遅いからと、屋敷で夜を過ごすことを言い渡されたのだ。

今夜一晩ゆっくり考えて結論を出してくれ、だなんて……。一体どうしたらいいって言うのよ……！

広い部屋の寝台の上で、空は膝を抱えてため息ばかりついていた。「エシユタンド……」

一番大切なのは、彼の命だ。何よりもまず、彼を救いたい。それならば、フエイラたちに付いて行くしかない。

けれど、海の国、だなんて知らない国にまで行って、何をしろと言うのだろう。

詳しいことは教えてくれない彼らを信用していいのか。付いて行ったところで、約束なんか守ってくれるのかもわからない。

でも拒否すれば、王妃の依頼を受けると言うのだ。自分には選択の余地などないではないか。

考えは堂々巡りばかりで、空は自然と首もとのチョーカーに手をやっていた。

「エシユタンド、会いたいよ……」

誰に聞かれる恐れもない場所で、それが空の本音だった。

もちろんエカルド王子を救いたい、エシユタンドの役に立ちたい、それがこの旅の理由であることには変わりない。

でも　ただ恋しい人に会いたい、そばにいたい、そんな想いが空の背中を押したのかもしれない。

もうこれ以上、離れていたくない。エシユタンドが魔の危険にさらされているならなおのこと、心配で仕方ないのだ。

今頃、何をしているの……？　せめて彼の姿だけでも見るこ

とができたらしいのに。

目を閉じて、耐えられないように願った時、握り締めた想緑珠が、空の思いに反応したように熱くなった。

瞬時に、頭の中で別の風景が広がっていく。まず見えたのは、夜の街道を走る馬の群れ。私兵隊員の中で、美しい金髪の後姿は、まぎれもない愛しい人のものだった。

松明を片手に馬を駆っている。懐かしい藍色の瞳は冴えて、まっすぐに前を見つめていた。魔の気配がないか、危険がないか、神経を研ぎ澄ましているかのように凜とした顔をしていた。

こんな夜遅くまで走り続けていたんだらうか。

弟を救うために、少しでも距離をかせごうとしているエシユタンドの思いがわかる気がした。

背後についてくるクガルに何事かを指示し、皆が馬を止める。

街道沿いの森に入っていくと、兵たちが馬をつなぎ、木々を集めて火を起こす。野営の準備をしているようだった。

疲れた表情で木の根元に腰掛けたエシユタンドは、クガルと共に地図を広げ、話し込んでいる。

時折息をついて、眉間にしわを寄せたその顔は深刻で、決して空には見せないはりつめた顔だった。

胸が締め付けられる思いでチョーカーに触れた途端、ふっと頭から映像が消える。想緑珠も、そう長い間は映像を送れないようだった。

熱を失った石を指で撫でながら、空は深くため息をついた。

会いたい、だなんて、わがまま言ってる場合じゃないよね…

…。

今エシユタンドは、弟を救うために必死で頑張っているのだ。こんな時に空の状況を知れば、どれだけ負担になってしまいかわわかりきっている。

彼に付いて行くことができなくても、彼に迫る危険を取り除いてあげることができる。

例え信じられる相手かわからなくても、今は従うしかないのだ。

彼らの目的を果たしてあげれば、王妃の依頼した呪術は止められる。それがエシユタンドを守ることにつながる。

揺れていた心を叱咤して、空が白水晶の剣を握りしめたその時、突然窓の外からコツコツと何かで叩くような音がした。

バルコニーに人影が見えて、一瞬悲鳴を上げそうになった空は、垣間見えた色彩に寸でのところで口を押さえた。

淡く月光を反射する銀色　それが確かに見慣れた人物の髪だとわかったからだだった。

「セイシエル……さん？」

肩までで切りそろえられた銀髪を揺らして、静かに窓を開けたのは、まぎれもなく第一王子付き私兵隊の副隊長　セイシエルだった。

人差し指を口元に立てて、微笑んだ彼は、辺りを見回しながらそつと部屋に入ってくる。

「どうしてこんなところに　まさか、私を追ってきてくれたんですか？」

嬉しさを隠し切れずに駆け寄った空の手を、セイシエルが優しく握った。

「勿論です、姫君　ご無事で本当によかった。お守りできず、こんな目に合わせてしまつて面目ございません。奴らに何もされませんでしたか？」

「ええ　あの、この屋敷の主人を見ました？」

「いいえ、私が見たのはフェルとかいうあの男が馬車を下り立つところだけで　姿を隠して屋敷に入り込むので精一杯でしたから」

「姿を隠してつて……一体どうやって？　屋敷の周りは護衛の兵たちが囲んでいて、入り込むの大変だったんじゃない……」

「まあ、色々と方法があるんですよ」

心配する空に、曖昧に微笑んだセイシエルは懐から縄を取り出す。バルコニーの手すりにしつかりと縛り付けて、空に片手を差し出し

た。

「さあ行きましょう。兵に見つかる前にお急ぎを」  
縄を腰元に結び付けようとしているセイシエルを空はじっと立っ  
たまま見つめている。

「……姫君？　どうかなされましたか？」

ついて来ようとしない空に気づいたセイシエルが、不思議そうに  
訊ねた。

彼に付いて、隊の皆のところへ戻りたい。そしてすぐにでも  
エシユタンドに追いつきたい。でも……！

瞳を閉じ、空は唇を噛み締める。波打つように色々な想いが駆け  
巡る。長く感じた数秒の後、再び瞳を開いた空は、首を横に振った。

「ごめんなさい、セイシエル副隊長。私、行けません」

「そんな、姫君！　なぜ……！」

驚いて空の元へセイシエルが歩み寄ろうとした、その時だった。  
扉を叩く音がして、二人とも振り向いた。

「姫様、お夜食をお持ちいたしました。先ほど夕食をあまり召し上  
がらなかったからと、フェイラ様に申し付けられました」

遠慮がちな侍女の声がそう言った。空はあわててセイシエルをバ  
ルコニーへ促し、部屋へ戻る。

「姫様、お休みでいらつしやいますか？　姫様？」

「あつ、ありがとうございます。今、開けます！」

空の返事に、セイシエルが瞳を見開く。彼の眼差しを受け止めた  
空の顔は、悲痛な決意に満ちていた。

「見つからないように、どうか逃げて　それからお願い。エシユ  
タンドを追って、彼の助けになってあげて。私のことは心配しない  
で　皆にも、そう伝えて」

「しつ、しかし！　姫君！」

戸惑いを隠しきれずにその場から動こうとしないセイシエルを半  
ば無理やり押し出すと、空は微笑む。雲間に月が隠れ、潤んだ瞳を  
見られなかったことが救いだと思った。

「早く行つて 何も聞かないで、お願い！」

言葉だけを残して、空は窓を閉めた。セイシエルの呆然とした視線から目をそらして、顔を上げて扉へと向かう。

「ご苦労様、さあどうぞ」

侍女に告げる空の声を聞いたセイシエルがようやく体を動かし、バルコニーから姿を消すのを見届けてから、空はカーテンを閉め、部屋の扉を開けたのだった。

偵察兵からの報告を聞き、怪しげな村や森の中を手分けして探した結果、最後に辿りついたのが大きな屋敷だった。

警備兵たちが周囲を取り囲んでいることで、どうやって入り込むかを待機しながら隊員たちが相談していた、ちょうどその折だった

副隊長であるセイシエルが姿を現したのは。

「セイシエル副隊長！ やはりこちらに ご無事でよかったです！」

姫君は？ 一体中はどうなっているのです？」

どこからどうやって戻ってきたのか、離れた茂みの中から出てきたセイシエルに、ルストが駆け寄っていく。

やっと姫を見つけたかと輝きかけたルストの顔は、こわばったセイシエルの表情を見たことで固まった。

「副隊長？ どうなさったんです、姫君は ？ 姫君はどこにおられるんですか！」

セイシエルの腕を掴んで揺するルストの肩に、カルファーズが手をかける。

「どうしたシエル、姫君は？ 何があつたんだ？」

冷静な彼の声でやっと我に返つたように、セイシエルは顔を上げる。呆然とカルファーズを見とめたセイシエルは、ようやく口を開

いた。

「わからない　　どういうことなのか、私にもわからないんだ！  
あんなに近くで　　姫君のお手さえ握ったというのに、みすみす奴  
らの手に渡してしまうようなことを……やはり強引にでもお連れす  
るべきだったのだ。カル、私は一体何という失態を……殿下にどう  
お詫びすればいいのだ」

自らの両手を見つめていたセイシエルは、独り言のように呟いて、  
頭を抱えた。

いつも落ち着いている彼の取り乱しように、ルストも隊員たちも  
顔を見合わせる。ただ一人冷静なのは、カルファーズだった。毅然  
とした態度でセイシエルの両肩を掴む。

「落ち着け、馬鹿者。まずは状況を説明しろ。お前は何を見た、姫  
君はどうしているんだ」

いつもと何ら変わらない彼の口調で、なんとか冷静さを取り戻し  
たのか、セイシエルが顔を上げた。

「姫君は　　屋敷の最上階、南の部屋におられた。救い出そうとし  
た私に、姫君は……一緒には行けないと」

「なっ、何ですって！？　　では姫君はご自分で屋敷に留まられたと  
言うのですか！　　どうして……何があつたと言つんです！」

耐え切れないように声を上げたルストを制止したカルファーズが、  
瞳だけで先を促す。セイシエルは険しい表情を浮かべて俯いた。

「それが　　私にもわからないのです。侍女が部屋にやってきて、  
話を聞く暇もなかったのです……ただ、我々には第三殿下を追って、  
お力になるようにとだけ言われて　　」

「奴らに何か脅されたに違いありませんよ！　　そうでなければ姫君  
がそのような……」

ルストの言葉に兵たちも頷く。どれほどの決意で彼女がエシユタ  
ンドを追ったのか、隊員たちにもわかっていたのだ。

「他には？　　何か奴らの手がかりは掴めなかったのか？」

顎に手をやり、考え込んでいたカルファーズに訊ねられ、セイシ

エルも再び屋敷の方角を見やる。細めていた薄水色の瞳に、閃いたような光が浮かんだ。

「フェイラ……そうだ、確かに侍女がそう言っていた。フェイラ様に申し付けられ、夜食を持ってきたと。姫君は私に屋敷の主人を見たかと聞いたんだ。フェイラというのが、あの屋敷の主人の名かも」

「フェイラ　ということは誘拐を指示したのは女だということですか？」

「そういう可能性もありますね」

話し合うセイシエルとルストの脇で、カルファーズだけが眉間にしわを寄せ、考えに入り込んでいく。

「フェイラ……フェル……どこかで」

懐から取り出した白い石を食い入るように見つめながら、呟くカルファーズを怪訝そうに皆が見つめる。

「カルファーズ隊長、何かお心当たりでも？」

おそろおそろルストが聞いた時、ちょうど何かに思い当たったかのようにカルファーズは瞳を見開いた。

「……カル？」

呼んだセイシエルに、カルファーズは振り向き、隊員皆に向き直った。

「……マデオス、お前に第一殿下付き私兵隊の指揮権を預ける。夜が明け次第、テローザに向かって出発しろ。第三殿下を追い、お助けするのだ」

隊員にわずかな動揺が走る中、名を呼ばれた青年があわてて膝をつき、頭を下げた。その様子を驚いて見ていたセイシエルに視線を移し、カルファーズが続ける。

「シエル、そしてルストは私と共に来てくれ」

「行くつて、一体どこへ」

戸惑うルストに、カルファーズは蜜色の長髪を邪魔そうにはらい、口元だけで笑った。



「当然、姫君を追うに決まっている。この私の目をごまかし、姫君を脅して何をさせようというのか。舐めた真似をしてくれたものだ。黙って見過ごすわけにはいかんからな。それに」

「みすみす姫君をどこの誰とも知れない輩の手に渡す、などという失態を第三殿下が納得してくださるわけもない。そうですね、カルファーズ隊長」

後を受けたルストも、自嘲を込めた笑みを浮かべる。

「下手をすれば、全隊員の首が飛ぶどころか、命でお詫びせざるをえないかもしれない。ということだな、カル」

「やっといつもの調子を取り戻したセイシエルも、そう言って頷いた。

「そういうことだ。とにかく奴らの目的を見定め、姫君をお救いする！ そのためには……」

「このまま奴らの動きを見張り、後を追うんですね。姫君をどこへ連れて行くつもりなのか、絶対に見失わないようにしなければ」  
「決意を込めたように、拳を握り締めるルストをちらりと見て、カルファーズはますます不敵な笑みを浮かべる。

「いや、おそらく奴らは森を抜け、レーテ川を下るはずだ。先回りして、船の手配をするんだ」

「レーテ川って……まさか、国境を越えるというのか！」

セイシエルの言葉に、カルファーズは笑みを収めて頷いた。

「そう、奴らの向かう先は 海の国、ビバスだ」

「自信たっぷり言い切ったカルファーズの声は森の間に響き、隊員たちは一気に顔を見合わせ、ざわめくのがあった。」

### 83・追跡（後書き）

ついにエシュタンドを守るため、海の国ビバスへ行くことを決意する空。

そして空を救おうとする私兵隊のメンバー。

ビバスへの旅はどうなっていくのか、というところで次回へ続きます。

お楽しみに！

#### 84・暴走（前書き）

またまたお待たせいたしました！  
その頃、エシユタンドは とうとうところから始まります。

サーダルの村から出発したエシユタンドたちの一行は、夜の闇が訪れても松明を手に馬を駆っていた。

危険の多いケリエの街は避け、ベニエたちの通った方角とは反対の迂回路から、騎馬隊で全力で先を目指すことにしたのだ。

整備された街道とは違い、森を進む形となるこの道は馬も走りづらく、魔の襲撃の恐れもある。それでも進むことにしたエシユタンドの決断は、やはりエカルドの救出を第一と考えたからだった。

全身を緊張させて進む彼らの行く手を阻むものは、幸いまだ現れてはいなかった。

「殿下、ご覧を　また街道に戻れたようです」

クガルの声で前方を見ると、森を抜けた先に確かに広い石畳が姿を現していた。

「どうやらケリエを迂回することに成功したようだな。そろそろ皆疲れてきている。今日のところはここまでにしよう」

幾分ほっとしたエシユタンドが手綱を引きながら告げると、クガルはすぐさま背後の隊員たちに指示を出す。

隊列は止まり、兵たちが野営の準備に取り掛かり始めた。

深く息を吐いて、木の根元に腰を下ろしたエシユタンドの元へ、クガルが地図を片手にやってくる。

テローザまでの道のりを確認しながら、夜明けと共に出発をと決めた二人に兵たちが熱いスूपを持ってきた。

「明後日の朝までにはテローザの森へたどり着けるだろう。問題はそこから先だが」

思案するように顎に手をやって呟くエシユタンドに、クガルも表情を引き締めて頷く。

「そうですね　まずはどうやって末の殿下をお捜しするか……」  
魔の向かった西の方角で心当たりを付けて、なんとか向かってき

たものの、本当にエカルドがテローザの森に連れて行かれたとは限らない。

しかしケイマのことといい、魔の襲撃といい、やはり何らかの関連性があるだろうことは間違いなく、現時点で一番可能性の高い場所に行くしかないのだからとエシュタンドは焦る気持ちを抑えていた。

「闇雲に森を捜し回るのも危険だが、まずはこの人数でできることにも限りがある……」

「本来なら近隣の領主軍の協力を要請したいところですが、テローザはどこの領地にも属さない深い森ですからね。寄せ集めの軍隊では統制も取れず、魔の襲撃にあっては、かえって犠牲を出すだけということにもなりかない」

クガルの挙げる懸念材料にエシュタンドもため息で同意を示した。金の髪をかきあげ、眉をしかめる。

「そうなんだ。やはり我々だけで搜索を始めるしかないと思う。馬車隊が追いつくまでに、森を調べてみよう。応援の要請が届けば、父上も何らかの手立ては打ってくださるだろうからな。それまでにできることをするしかない」

「ええ、そうですね。それに」

眼差しだけ返したエシュタンドに、クガルはそれ以上を言わずに微笑んだ。

「殿下もかなりお疲れのご様子です。夜明けまで、どうぞお休みください」

「……ああ。お前もな」

クガルの気遣いを有難く思いながら、エシュタンドは薄く笑った。スープの最後の一口を飲み干して、頭上に浮かぶ月を見上げた藍色の瞳に複雑な光が宿る。

あえて言わなかったのであろうクガルの言葉　それはきくと、彼を追ってきている少女のことだ。

どれほどに彼女のことが胸を占めているか、クガルにはお見通し

であるはずだから。

早く会いたいという気持ちと、来ないほうがいいのだという心配と、全てがエシユタンドの胸でせめぎあっていた。

白々と夜も明けようという時刻、響いた兵たちの悲鳴にエシユタンドは急いで天幕を飛び出した。

ちよつど顔をあわせたクガルに問いかけるより先に、兵の一人が叫ぶ。

「殿下、化け鳥でございます！ 街道に、数え切れぬほどの鳥が！」

その声に重なるように、不気味な鳴き声が響き渡る。

明らかに鳥のものとは異なる低い響きに、クガルの静止をはらい、街道へ走ったエシユタンドの顔色が変わった。

「あれは……！」

追ってきたクガルも瞳を見開き、前方を見つめる。

無数に蠢く人面の鳥たちではなく、彼が捉えたのは鈍い紺色の毛並み。人よりも一回りも二回りも大きいであろう、巨体。

狼に似たその獣は、確かにあの時と同じ姿をしていた。

「そうだ、末の殿下をさらった獣じゃないか！」

背後で上がる兵たちのざわめきを耳に、エシユタンドも驚愕から憎しみへと藍色の瞳を厳しくした。

「やあ、追跡ご苦労さん。あんまり遅いからさ、退屈で様子見に来ちゃったよ」

軽い調子で、笑みを見せた少年 羽毛に包まれた腕を上げて挨拶さえしてくるその顔も、記憶に鮮やかなものだった。

「よくもふざけたことを 殿下をどこへやった！ 無事でおられるのだからな!？」

皆の思いを代表するかのように強く問いかけたクガルの声にも、彼は全く動じず、肩をすくめてみせる。

「さあね、そんなこと教えてやったらつまないだろ？ それよりもっと面白いことしようよ。せっかくこうして出会えたことだしね」

「何だと？」

唇をなめ、にやりと笑った少年をクガルが睨みつける。あまりに人間そのものの表情で、少年はふわりと翼をはためかせ、上空へ舞い上がった。

「ムルグ、標的はこの王子　そう、藍色の目をしたやつだ。しばらく遊んでやりな」

ムルグ、と呼ばれた獣が言葉を解したように唸り、姿勢を低くする。

その琥珀色の両目がエシユタンドを捉えるのを見て、クガルが瞬時に前に飛び出した。

「殿下、私の結界にお留まりください　皆は攻撃を！」

両手を組んですぐさま結界を張ったクガルを見下ろし、少年が不快そうに舌を鳴らした。

「邪魔だなあ……雑魚は引っ込んでよ。お前らの相手はこっちだつて」

紺の後れ毛を流し、少年は不敵に笑いながら、周りに浮かんでいた鳥たちに短く口笛を吹く。

それが合図だったかのように人面の鳥たちがいつせいに下降してくる。嫌な風が吹き、枯葉が渦を巻いた。

エシユタンドを囲むように円を組んでいた兵たちに向かって、鳥たちが舞い降り、ギィギィときしむような声で鳴いた。

ただちに攻撃術を繰り出す兵の動きよりも、鳥たちのほうが素早かった。

棘のついた尾を振り回しながら、鋭い爪とくちばしで襲ってくる。兵が放った火炎や煙を器用に避け、矢で狙うのも困難なほどに飛び交っていた。

「やはり数が多すぎる！ クガル、ここは私が」  
「いけません、殿下！ まだお疲れが残っておられるのにご無理はなさらないでください！」

止めるクガルの顔にもうつすらと汗がにじんでいる。ひっきりなしに降下し、攻撃をしかけてくる鳥たちから全員を守るために、結界を張り続けることでの彼の負担は目に見えていた。

唇を噛み締め、辺りを見回すエシユタンドの周りで、兵たちも必死に攻撃術で鳥を狙う。

落としても落としても数の減らない鳥たちの気味の悪い人面に、エシユタンドは嫌な寒気すら感じた。

「あーあ、弱い奴らが頑張っちゃって。見苦しいのもいいところだよ？ さっさとそんな王子なんか捨てて、逃げ出しちゃえばいいのに。そしたら見逃してやってもいいのにさ」

いたずらを楽しむような表情で告げてくる少年の声で、クガルの栗色の瞳が怒りに燃えた。

「軽口はそのへんにしておくんだな これ以上うるさく囁ささやくようなら、この私がただではすません！」

エシユタンドですら初めて聞くほどの強い言葉は、少年の顔から笑顔を奪った。

ふわふわと漂うように浮かんでいた彼が静止し、クガルのほうをまっすぐに見下ろしたのだ。

「随分偉そうなこと言うじゃない。ただ結界が張れるだけで、そんな強気に出ちゃっていいのかな？」

「結界だけかどうか、試してみるんだな。ただ代償は高くつくと思っうが」

クガルが睨み返し、口元に不敵な笑みを浮かべる。少年は眉をしかめ、露骨に嫌そうな顔をした。

「殿下 連中の注意が私に向いている間に、どうかお逃げください」

振り向かずに小声で言ったクガルに、エシユタンドが目を剥いた。



「クガル、何を言っ……」

「このようなところで殿下が負傷でもされれば、末の殿下をお救いする手立てがなくなります。ここはこらえて、どうか」

急いで囁いたクガルは、再び瞳を上げて、少年を射抜くように見つめた。

「仲間の復讐だかんだか知らないが、お前らのような魔のモノにそんな感傷があったとは驚きだな。魔なら魔にふさわしく、人の真似などせず、せいぜい吼えて向かってくるがいい！」

堂々と叫んだクガルの声で、凍りついたように固まっていた少年が下を向き、低く笑った。ゆつくりと、そして高くなっていく笑い声が不気味に街道を支配した。

ひとしきり笑い終えた彼が紺色の獣の背に舞い降り、にやりと唇を上げた。

「面白いじゃないか。雑魚なんて相手にしても仕方ないと思ってたけど、そこまで言うなら先にお前と遊んでやるよ。ムルグ、標的の変更だ。先にそいつを引き裂いてやりな」

魔の本性を現したかのような残酷な命令を発し、空中へと舞い戻った少年を残し、獣が大きく吼え、地面を蹴った。

「クガル！」

エシユタンドの叫びに覆いかぶさるように獣が吼える。その紺色の巨大な体に向かって、クガルが手を組み替え、両手を向けた。

空気が動き、まっすぐな風となって獣を襲った。張られた結界はそのままに、クガルが攻撃術を放ったのだとエシユタンドが気づいたその瞬間、獣は大きく吹き飛ばされていた。

街道のかなり先まで転がり、打ち付けた体を苦しそうにくねらせている。

驚いたエシユタンドは、更にもう一つ上がった呻き声に目を見開いた。

平気な顔で今まで浮かんでいた少年が、まるで獣と同じ目に合ったかのように痛そうに身をよじらせ、呻いていたのだ。

思わず目を合わせたクガルとエシユタンドの前で、悔しそうに少年が琥珀色の瞳を燃やした。口元に流れた一筋の血を乱暴にぬぐい、翼を動かす。

「よくもやってくれたな……お前、殺してやる！」

空気をえ切り裂きそうな勢いで吐かれた憎しみの声は、一心にクガルへと向けられていた。

「いかん、クガル！」

「殿下、申し訳ございませんがあまり長くは持ちません。どうかお早く――！」

同時に二つの術を使うことの困難さとそれに伴う肉体への負担言葉にせずとも伝わってくるクガルの疲労。限界に近いことはエシユタンドにもすぐわかった。

止まらずに襲ってくる鳥たちとの戦いに苦戦している兵たちとしてそれは同じこと。

エシユタンドが決意を固めるのと、ついに少年が翼をはためかせ、降下してくるのが全く同時だった。

「死ぬ――！」

叫び、こちらへと矢のように飛んでくる少年。殺意のみに支配された琥珀色の瞳を見て、瞬時にエシユタンドは両手を広げた。

ありつたけの風を集め、少年とクガル間に突き刺すように放つ。エシユタンドの力をまともを受けた少年はただではすまないだろうと、その場の全員が思った。その時だった。

風の刃が彼をまさに捕らえようとするその一瞬よりも前に、少年の姿が掻き消えるようになっていったのだ。

先ほどまで呻いていた獣がいつの間にか起き上がり、咄嗟に彼をくわえ、飛んだのだった。

助けられたことに我を取り戻したのか、少年が悔しそうな顔で、それでも笑ってみせる。

「そうか、忘れてたよ。本来の目的を　そうだろう？　ケイマ」  
言った彼が琥珀色の瞳を向けた先には、確かにサーダルの長、ケ

イマが立っていた。

エシユタンドの力の名残で吹きすさぶ風にマントを揺らし、金色の髪をおさえたケイマが少年の問いに頷き、笑い返す。

「理性を失っちゃだめだよ。楽しむのはいいけど、その過程に溺れちゃ、大事な目的を果たせなくなるからな　ムルグ」

少年が獣を呼んだのと同じ名で、ケイマは確かに彼を呼んだ。その名に当然のように頷いてから、笑う少年。

「あいつ　やっぱり魔のモノの手先だったのですね」

二人のやりとりを呆然と見ていたエシユタンドに、クガルが囁く。サーダルの村人たちにはどうしても問いつめられる気になれずに出発したものの、ずっと頭にあつた疑念がついに結びついたのだ。

「ケイマ、人間のお前がどうして奴らに加担するんだ？　なぜ我々を狙う！　答えてみる　！」

優しくあつた村の子供たちの顔と、彼らの前で穏やかに笑っていたケイマが忘れられず、エシユタンドは叫んだ。

森の変化に心を痛めていた彼は、確かに人間でしかなかったのだ。「うるさいな……人間には一種類しかないのかよ。違うだろう？

貧しい村人とは天と地ほども違う暮らしをして、贅沢三昧の王宮しか知らない奴になんて、とやかく言われる筋合いはない！　お前ら王族なんて、みんな滅びちまえばいいんだよ。そうすりゃちつとはまともな国になるさ。そうだろう、天下の第三王子様？」

「ケイマ　！」

濃い金色の髪を乱暴にかきあげたケイマの瞳は、抑えきれない憎しみに燃えていた。素直な顔で笑っていた村での姿とは別人のように、憎悪すら垣間見せるその表情を楽しそうに見ていたムルグが、ケイマの腕を取り、空中に飛び上がる。

「さあ、ゆつくり見物させてもらおうじゃないか。お前の嫌いな王子のお手並みを　」

笑ったムルグが鋭く口笛を吹く。それに応えるように獣が姿勢を低くし、鳥たちは一斉に人面を向けた。

「行け」

無造作なムルグの声で、獣は地を蹴り、鳥たちは降下する。苦しそうなクガルの表情を見るまでもなく、結界がもはや持ちこたえられないのが兵たちにもわかった。

鳥が、獣がゆらいだ結界を越え、まさに彼らを餌食にしようとした、その瞬間。

風がすさまじい勢いで渦を巻き、鳥たちを襲った。

一羽一羽をまるで喰らうように、風はどんどん勢いを増し、鳥たちを掻き消していく。

空を埋め尽くすほどに蠢いていた鳥たちを全て飲み込んでもまだ足りぬように、風が大きく唸り、獣に向かう。

さすがに顔色を変えたムルグのほうへ、獣は逃げるように走った。速度を上げた風が獣の後ろ足を捕らえ、引き裂き、獣が声をあげる。まるで風の爪に裂かれたように血があふれ出て、獣は苦しそうに転がった。

「まだまだだ……」

呟かれた声に訝しげに振り向いたクガルが、駆け寄り、エシユタンドを支えた。

「殿下！ もう十分でございます。お顔の色が それに奴らを今殺してしまつては、末の殿下の救出が困難になります！」

クガルの必死な声も聞こえぬように、エシユタンドは藍色の瞳をムルグたちのほうへ向ける。風は更に集まり、傷ついた獣を狙う。

「殿下 どうなされたのです！？ もうおやめください！ 殿下！」

クガルがエシユタンドの腕を引く。振り向いたエシユタンドは、我に返つたように栗色の瞳を見つめ、広げていた両手を下ろそうとした。

その手が震え、エシユタンドの額に汗がにじむ。静まりかけた風がまた吹き始め、まるで彼の手を離れていくかのように暴走を始めたようだった。

「何だ、これは」

蒼白な顔で、エシユタンドが自分の両手を見つめる。

「くそ、静まれ　静まるんだ！」

自らの力を制御しようと叫び、念じるも、風はおさまらない。どこかでもう一人の自分が自分を操ってでもいるかのように、体が動こうとし、心は魔を殺すことを喜んですらいるようだった。

「殿下　！？」

内側から爆発しようとする力を抑えることで精一杯で、エシユタンドは思わず叫んでいた。

「離れる、クガル！　離れてくれ……！」

理解できない、というように瞳を見開いた彼に風が襲い掛かっていく。エシユタンドは必死で新たな風を念じ、その方向を捻じ曲げた。

風と風がぶつかり、音にならない悲鳴をあげたように方々に吹き荒れていった。

その暴風に兵たちもクガルも飛ばされ、エシユタンド自身も倒れていく。

風がおさまり、辺りが静まるのを待つて、ムルグが倒れていた獣に近づいた。

無事な様子を確認してほっとしたのか、それともエシユタンドの力に驚いたのか、彼はただ笑みを浮かべる。

「思ったよりすごい力じゃないか……これなら、報告するよりも先に、今のうちに片付けておいたほうがいいかもしれないな。放っておけば、必ず厄介な存在になる」

独り言のように呟いて、唇をなめたムルグは倒れたエシユタンドの上に舞い降りて、その手で意識を失った彼の首に触れようとした。しかし突然の爆発音が響き、ムルグは手を止める。

街道に敷かれた石畳が先ほどの暴風で吹き飛ばされ、粉々になっている。音は、その石の粒が突如浮き上がり、弾けていくことで起こっているようだった。

小さくぶつかり合い、砕けていく石が、徐々に数を増やし、ムルグの周りを包むように破裂していく。

ムルグは舌打ちをし、エシュタンドから離れるように飛び上がった。

「何の邪魔だか知らないが 仕方ない。今日のところは退却とい  
くか」

追いかけるように飛んでくる石たちを片手ではらい、どこからわいた力でか獣の巨体を軽く持ち上げて、ムルグは羽を動かした。

ばさり、と大きく羽ばたいたムルグを見上げたケイマも、顔をしかめながらも、馬にまたがり、森へと消えていく。

倒れた私兵隊員と、エシュタンドのほうへ歩み寄る人影があったことは、誰も目にすることはなかった。

#### 84・暴走（後書き）

ついに暴走を始めてしまった魔の力。

倒れたエシユタンドに迫るのは誰なのか。

その謎はもう少し先で、次話はまた空の追跡からです。  
引き続きお楽しみに！

## 85・出航(前書き)

更新が滞っていていますみませんでした。

またこれからのんびりと頑張りますので、よろしくお願いします。



## 85・出航

レーテ川 ミディス王国の南端から、国境を越えて海の国ビバスを横断するように流れる、エスタリア大陸でも五本の指に入る大河。

国境手前に作られた河港は両国を行き来する船舶で賑わいを見せて、船員たちや店を出す商人たちであふれかえっていた。

そんな中、真っ黒に日焼けした船員に何事かを交渉している、白い肌に肩までのまつすぐな銀の髪が美しい貴婦人がいた。

「ええ。そうですね。 ビバスまで乗せていただけませんか？ お礼なら弾みますわ」

手袋をした細い手で口元を隠して囁きながら、ちらりと背後に佇むまだ若い青年を見やる。

船員は貴婦人の意味ありげな微笑と、赤褐色の髪に負けないくらい真っ赤な青年の顔を交互に見やっつてから、得心が行ったように笑った。

「なるほど、そういうわけかい。 まあいいぜ。俺たちや金さえもらえればいいんだ。 お忍びの理由を聞くななんて野暮なことあしねえよ」  
そう言つて豪快に笑う船員に、貴婦人は少し恥ずかしそうに頬を染め、青年に視線を移す。 目を白黒させていた彼の代わりとでもいうように、少し離れた場所に控えていた長身の男が頭を下げた。

「さすがに海の男と言われるあなたは男気がおありになる ご理解いただき、感謝いたしますよ」

蜜色の髪をかきあげて微笑む男の肩を叩き、船員は頷く。

「いいつてことよ。 海の国ビバスは自由な国だからな。 日暮れまでには出航だ。 それまでに頼むぜ」

「了解いたしました」

彼の懐を示して言った船員に、男は再び頭を下げる。 その様子を

まだ赤い顔で見つめていた青年の手を引き、貴婦人は立ち並ぶ露店のほうへ歩き出した。

食料を仕入れ、人々の行きかう大通りから外れるように路地へそして誰もいない建物の影まで来てから、こられきれないように声を上げたのは赤褐色の髪をした青年だった。

「なっ、なんでよりによつて私なんですか？ カルフアーズ隊長がやればいいじゃないですか！ どっ、どうして私がそっ、そんな…」

声にするのも恥ずかしいのか、そこで唇を震わせ、わなわなと両手を握り締めていた彼の肩に手を置いたのは、銀の髪 of 青年である。「まあまあ。やるからには真実味がないと信じてもらえないでしょう。それに私としてもこんな男が相手というのはごめんこうむりたいもので」

「セツ、セイシエル副隊長！ そういう話じゃなくてですね」「そうだぞ、ルスト君。女装させられたシエルが怒るのならまだしも、なぜ君が怒るんだ？ 貴婦人の愛人といえやはり若い小姓だろう。私より君が適任だと考えたのは正解だった。船員もすぐに信じてくれただろう？ 大体、王宮の私兵隊員だとそのまま堂々と船を借りるわけにはいかんだろう。まだ姫君のことは極秘なわけだからな あれぐらいの運搬船なら目立たぬし、追跡にも都合がよいというものだ」

まとめた蜜色の長髪を鬱陶しそうに流しながら、カルファーズは堂々と言った。ルストは言葉も出ないように拳を震わせたが、着せられたブラウスのびらびらした趣味の悪い飾りに目を落とし、気を取り直したようにまた顔を上げる。

「そっ、それはそうかもしれませんが　ってそうじゃなくてっ」  
更に憤慨するルストの横で、セイシエルが肩をすくめた。先ほどのまでのドレス姿は嘘のようになくなり、彼だけは私兵隊の武装のままである　どうせ幻術を使うのだから、変装の必要もない、というのが彼の言い分だった。何食わぬ顔で薄い上着を着込んだカルフ

アーズを横目に、セイシエルが呟く。

「女装じゃなくて、幻術だけだね。それにしてもこんな無粋な男が護衛役つてことを疑わない船員も人がいいと思いませんか？ ルスト君」

「無粋とはどういうことだ いや、まあいい。今回は本当にお手柄だ。お前のくだらない目くらましがここまで役に立とうとは」

「くだらないは余計。ついでにいうと、この作戦考えたのも私だから。この貸しは高くつくからな。カル」

「わかったわかった。君の働きは十分に第一殿下にもお話することにしよう まあ、ルスト君？」

「だつ、だから そんな話じゃなくてですね！」

口を挟む隙もない二人の会話によく割り込んだルストの前で、二人は揃って振り返る。まだ温かいパンとスープを口に含んだまま、不思議そうな顔をしてみせた。

「まだ何か？」

言葉まで揃った二人をまじまじと見つめていたルストは、しばらくしてあきらめたようにがっくりと肩を落とすのだった。

「もう、いいです……ところで、本当に姫君はやって来られるのでしょうか？」

渡されたスープを飲みながらルストが訊ねると、得意げな表情でカルファーズは笑みを見せる。

「無論だ。いいか、よく考えてみたまえ。陸路であれば人目にもつきやすく、また日数も倍ほどはかかるのだぞ？ 姫君を連れ、できるだけ急ぎたいであろう奴らがとるのは、どう考えても船旅だ」

「しかし 今日の出航で大丈夫なのですか？ 奴らがいつこの河港に着くのかもわからないというのに、万が一すれ違い、姫君を見失うようなことになれば……」

心配そうな顔で石段に座り込むルストを見下ろすカルファーズの瞳は、全く余裕を失わなかった。

川から吹き込んできた風に少し身をすくめ、腕を組んでルストの

隣に腰掛ける。

「ルスト君。我々がこの河港に着いてから三日。なぜこれだけの時間を待ったと思う？」

あくまでも冷静に問いかけてくるカルファーズを見上げて、ルストは首を傾げた。

「それは……ちょうどよい運搬船を見つげるためと、姫君が到着するのを待つため……ですよね？」

硬い赤褐色の髪をぼりぼりと搔いて答えたルストの向かいで、セイシエルが笑う。

「不正解。第一あの程度の運搬船ならいつでも見つけられますよ。

正確には 今日でなくてはならなかった。そうだろう？ カル」

「やはり話は早いな。だてに副隊長を務めているわけではないようだ」

褒めているのか、けなしているのかわからない口調で呟くカルファーズと飄々とした顔のセイシエルを交互に見つめて、ルストはふてくされたように両手を上げた。

「すみません さっぱりわからないんで、説明していただけませんか」

「全くしょうがないな。君も第三殿下付き私兵隊の副隊長なら、それぐらいの考察はできてしかるべきだがね」

鼻を鳴らすカルファーズを心の中で罵りつつも、ルストは黙って続きを待つ。姫の救出のためには協力が不可欠だとわかっていただ。

「海の女神ネイアを知っているかい？」

「ネイア ああ、確かビバスの民があがめる守り神、でしたっけ？」

ようやく始まったカルファーズの解説に、ルストは思いだしたように答える。頷いたカルファーズは、何かの講義のように立ち上がって語りだした。

「そうだ。ビバスの国を作ったと言われるネイア神 彼女を称え

るビバスの祝祭、ネイアーレは今日から始まる。祭りの最後を飾る祈りの日は五日後だが、今日からビバスの国は一年で最も賑わいを見せるというわけだ。そもそも祈りの日というのは、海の底に眠ると信じられているネイア神に捧げ物をし、海の巫女が国民を代表して祈りを捧げるという行事であり」

「ああ、そうか。その祭りの賑わいに紛れて姫君を入国させようというのですね？」

半ば強引に割り込んだルストの問いに、カルファーズは一瞬眉を寄せつつも、素直に頷く。

「この祭りのためにビバスの港は大忙しだからな。いつもよりも入国手続きは雑になるだろう。おそらく商人が祭りのための旅芸人の船を装い、奴らは侵入を考えるはずだ。それに、奴らの目的が何かは知らないが、この時期を狙ったということならば、祭りと全く無関係とも思えん。レーテ川からの船旅で、ビバスの王都にたどり着くには五日はかかるからな。今日を逃しては間に合わなくなるよって奴らは必ず今日出発するはずだ、という結論になるわけだな」

自分の考察に満足したかのようなカルファーズの顔を見上げながら、ルストはまだ心配そうな表情を緩めてはいなかった。

黙っていたセイシエルが懐から取り出し、そつと差し出したものを見て、ルストはようやく瞳を上げた。

「これは　ビバスの地図じゃありませんか！　それにこれは……」

「王都までの最短経路、そして警備の様子などを記したものです」  
大したことではないように微笑むセイシエルの肩を、ルストが興奮したように掴む。

「すごいじゃないですか　これがあれば、姫君をお救いするのに役立ちますね！」

「まあまだ王都に連れて行かれると決まったわけでもないですけどね　ほぼ間違いないとは見てもいいんだろう？　カル」

「おそらくはな。王都には知り合いがいる。たどり着きさえすれば、きつと救出には協力してくれるはずだ」

言い添えたカルファーズを見て、ルストが完全に復活したように表情を明るくした。

「本当ですか？ 実は、我々三人だけで大丈夫なのかと心配していたんです。知り合いって一体どんな あ、それに、セイシエル副隊長もどうやってそんな地図手に入れられたんですか？」

無邪気に訊ねるルストの瞳に曖昧に微笑んで、セイシエルは銀の髪をはらった。すっかり元の姿になっているにもかかわらず、その微笑みはどこか艶やかなものだった。

「まあ、色々と方法があるんですよ」

「えーと……あの、それでカルファーズ隊長の知り合いというのは……？」

それ以上聞いてはいけない気がして、質問を変えたルストの声は既に耳に入っていないように、カルファーズは遠く立ち並ぶ船を見やっっている。

「フェル、フェイラ おそらくは、奴らの行き先は王都。一体何を企んでいるんだ……」

一人呟いたカルファーズの言葉は、風に紛れ、他の二人の耳には届かなかったようだった。

青灰色の彼の瞳は、レーテ川に低く影を映す太陽を静かに捉えていた。

眼下に広がる大河の流れに、馬車から降りた空は思わず目を見張っていた。

水辺から吹いてくる風に無意識に体を縮めると、隣に立ったフェイラがすぐに気づいて上着を貸してくれる。

「あ、ありがとうございます」

「ただ、とどこか不自然に思いつつも、空は反射的にお礼を言ってしまった。」

「まだ信じられないうちに始まってしまった旅の道中、フェイラは空に不自由がないようにと常に優しく気遣ってくれていた。」

「半ば無理やり連れてくる形となったことを悪いと思っているのかもしれないが、それが逆に空を居心地の悪い気分させているのだ。」

「これがレーテ川ですよ。あそこに見える河港から国境を越えればもうビバスです。王都までは船と陸路で五日ほどかかりますが、これまでの狭い馬車での旅よりは快適に過ごしていただけるかと思えますよ。どうかご心配なさいませんように。」

「フェイラの背後に付いていたフェルも、そう言って空に微笑んでみせる。」

「こんな風に優しくされればされるほど、なぜか怖くなる。だって、彼こそが王妃の依頼を受けた術者で、エシユタンドを呪い殺せるほどの實力を持った恐ろしい人なのだ。」

「けれど笑顔で空を囲む双子の穏やかな態度の前では、それすらも信じられない気持ちかわいてくる。」

「恐怖と不思議な静けさの間で、空はなんとか平静さを保っている状態だった。」

「さあ、姫君。我々の船はあちらです。」

「落ち着かない空の心に気づいているのかいないのか、美しい赤銅色の瞳を細めてフェイラが微笑む。彼女の視線の先にあったものは、中型の客船だった。」

「乗船を待つ人々の賑わいに目をやった空が、思わず不思議そうな顔で振り返った。フェイラはその反応を予想していたかのように頷いてみせる。」

「そう、姫君にも彼らの中に入らせていただきます。ああ、勿論そのままの格好ではなく、ね。」

「楽しげに笑ったフェイラに促されたフェルが、とめてあつた馬車」

の荷から大きな袋を取り出してくる。彼が差し出した袋の中を覗いた空は、声にならない悲鳴を上げた。

「なっ、なんですか！　これは　」

「何ってもちろん、姫君にお召しになっていただく衣装でございますよ」

涼しげに答えるフェルと、彼が持つ衣装とを見比べて、空は口をぱくぱくさせるばかりである。

黙って見ていたフェイラが、おかしそうに声を立てて笑った。

「ミデイス王国ではあまりこのような衣装は見かけませんか？　しかしビバスの祭りではそれほど珍しいものではない　あくまで、旅芸人のものとしては、ですがね」

そう言って微笑むフェイラが衣装を持って、空に合わせるように掲げてみせる。

確かにミデイス王国では見かけないものだった。それには間違いはない。けれどその衣装は空にとっては十分見覚えがあるものだった。元いた世界で、の話だが。

青地に白の水玉模様に、たくさんびらびらしたレースがついた大きな襟とゆったりした袖。丸いボタンがついたその衣服はミデイスでいつも着せられていたドレスとは到底似ても似つかないもの。そう、空の意識にある、ピエロの衣装そのものだったのだ。

「た、旅芸人……？」

「ご丁寧と同じ模様の帽子まで手渡され、すっかり困惑顔の空に、二つの同じ顔が笑った。

「そうです。ご存知ありませんか？　国から国へと旅しながら、芸を見せる人々のことです。各地に伝わる珍しい踊りや歌、劇などその内容は様々で、こういった国をあげての祭りには欠かせない存在ですよ。あちらに見える集団は皆そうで、旅芸人専用の船になっています」

フェルが示して見せるのは、これから乗る予定の船。そこには確かに色とりどりの奇抜な格好をした人々が群れ集っていた。



同じようにピエロのような服を着た姿もちらほら見え、目で追っていた空にフェルが続ける。

「彼らは道化師と呼ばれる人々です。姫君に着ていただく衣装と同じでしょう」

「道化師」

呟いた空にフェルが楽しげに頷く。こういう時の顔は、吟遊詩人だと信じていた頃の彼にしか見えなかった。

「主に劇などで滑稽な役をやってみせる者のことですよ。声を出さずに愉快的踊りをしてみせたりね」

「フェ、フェイラさん？」

横で解説するフェイラは、いつの間にか空の衣装と色違いの赤い道化師の服を着込んでいた。赤銅色の髪をまとめ、帽子の中に入れ込んだ彼女は、ついでとばかりに顔を真っ白に塗りたくり、目だけを覆う仮面までつけている。既に全くいつもの面影はなかった。

「祭りへ参加する旅芸人たちには身分証の確認も厳しくは行わない。それがビバスの決まりです。それでこそ自由の祝祭、ネイアーレ。ビバスが一番賑わう時なのですよ」

後を受けるように言ったフェルは、フード付きの濃い衣服を着込み、豎琴のような楽器を手にする。

また元の吟遊詩人の姿に戻ったかのような彼を見つめ、空は一人納得していた。

そうか、彼らにまぎれて入国すれば目立たない。そういうことなんだ。

やはり立場上他国の王子の婚約者である空を堂々と連れて歩くわけにはいかないのだろう。

しかし、空だけではなく彼ら二人も身を隠さなければいけないよ。うな人たちなんだろうか。

王都へ向かうということは、もしかしてそんな身分の？

まさか、と背中に走る悪寒を飲み込んで、空は促されるままに道化師の衣装を着込んだ。

こうなれば言う通りにして、なるべく早く帰してもらおうかないんだもんね。

そう思いながらもどうしても拭い去れない嫌な予感に、空はそつと首もとのチョーカーに手をやる。

夕日はレーテ川へと沈もうとしている。

エシユタンド、ごめんね……。きつと無事にいるよね？ あ

なたを守るために、あたしはあなたから離れようとしている

待っていてね　そう、口には出さずに空は祈る。

これから待ち受けているものが何であっても、エシユタンドの命を救うためになら恐れはしない。

必ずやり遂げて、帰ってみせる。

愛しい、藍色の王子のもとへ。。。

深く決意した空と謎の双子を乗せて、船は動き出す。

彼らの客船を追うようにそつと出航した運搬船があったことを、

空は知らない。。。

## 85・出航（後書き）

ついにビバスへと旅立つ空。そして彼女を追う三人組はビバスの王都を目指す。

次話はある「暴走」の後、エシユタンドの話からまた始まります。お楽しみに！

## 86・イラル（前書き）

なんとほぼ3ヶ月ぶりの更新となってしまいました。

大変長らくお待たせしてしまい、申し訳ありません（><）

続きを待つてくださっていた読者様、ありがとうございます。

これからまたゆっくりと更新していきますので、よろしくお願いいたします。

## 86・イラル

額に冷たい布をあてられた感触で、エシユタンドは瞼を開けた。開いた視界に映ったもの。それは澄んだ緑色。

眉を寄せ、焦点を絞った先で笑ったのは、精悍な印象の青年だった。

「お、気がついたみたいだな。派手に力使ってぶっ倒れるたあ、修行が足りねえつてもんだぜ？」

薄茶色の短髪の頭をぱりぱりとかいて、エシユタンドを見下ろしている。

言葉を返したくとも、体全体が重苦しく、指先を動かすだけで一苦労だった。

「ああ、いい、いい。まだ話するのはきついだろ。お仲間さんもあつちで寝てる。とりあえず皆無事だから心配しなくていい」  
明るい口調で言うてくる男の言葉で、エシユタンドの脳裏に先ほど自分が起こした力の暴発が蘇る。

そうだ。自分で魔の力が制御できなくなって……危つく隊員皆まで犠牲にするところだった。

思い出してから改めて背筋が冷たくなった。

自分自身で仲間を傷つけるところだったのだ。どうして、と思うよりもまず恐ろしかった。

「そんなに蒼白な顔すんなって！ まあよくあることさ。……っつてそんなによくつてこともねえけど、とりあえず俺でも前に二度ほどやったことがあるからな」

一人で話しながら、自分で言いなおす男の顔をなんとか見上げると、ああ、と気づいたように緑色の瞳が笑った。

「すまんすまん、自己紹介を忘れてた。俺はイラル。これでも一応魔の力使いだ。大地を操る力を持つてる」

何でもないことのようにそう告げた男。イラルの一言で、エシ

ユタンドはまだぼんやりしていた瞳を見開いた。

「大地のつて　じゃあまさか……」

驚いたように訊ねるエシユタンドに、イラルは何でもないような顔で頷いてみせた。

「ああ、山の国、クルスから来たんだ。来たというか、帰るところだったというか」

どっちでもいいか、と一人呟くイラル。そのむきだしの肩には筋肉が盛り上がり、鍛えた体つきからもただの商人や村人には見えな

い。  
それに何よりも、魔の力使いだということは……。

エシユタンドの藍色の瞳を逆に観察していたのか、考え込む彼にイラルが声をかける。

「あんた、綺麗な目をしてるんだな。クルスじゃそんなの見たことねえや。髪の色といい、服装といい、その様子じゃあ王族ってところか。そりゃあそうだな、あんだけの家来引き連れてんだし、第一魔の力持ってたもんな」

ぺらぺらと喋るイラルは、一人納得したように私兵隊員のほうを見やって、気づいたようにクガルのほうへ歩み寄った。

「まだ意識がねえか。他は大した外傷はないようだが、こっちの人だけちよつとひでえみたいだな。倒れた時にぶつけたのか、頭から血が出てた。ああ、あんたの一番近くに倒れてたから、咄嗟に守ろうとして吹っ飛ばされたってところか」

イラルの言葉でクガルを見たエシユタンドは、悲痛な面持ちで黙り込む。

額の上あたりに布が巻かれていて、まだ真新しい血がにじみ出ているのが見え、衣服も擦り切れ、痛々しい姿で気を失っているようだった。

「そうか　君が手当てをしてくれたんだな。礼を言う。それにもしかして　奴らを追い払ってくれたのか？」

先に意識を失った自分たちを魔のモノたちが見過ごすとは思えな

い。魔の力を持つという彼が助けてくれたのだろうか　そう思いついたエシュタンドの問い。

イラルは照れたように片手を振って、笑った。

「いや別に、ちよつと脅かしてやっただけさ。大したことはしてねえから、そんな礼にはおよばねえよ。おつと、まだ無理はしねえほうが、つて……もう起きて大丈夫か？」

重い体に鞭打って、顔をしかめつつも起き上がったエシュタンドの背を支えて、イラルが訊ねる。

まだ動かすたびに全身に鈍痛が走るようだったが、エシュタンドは表情には出さずに笑みを浮かべた。

「ああ……助かったよ。ところで君は　」

「イラルでいいさ。かたつくるしいのは苦手なんだ」

「……じゃあ、こちらも単刀直入に聞こう。イラルはクルスの王族じゃないのか？　魔の力を持つてること自体その証だろう。こんなところで一人、何をしている？」

クルスとは国交はあるものの、王族同士顔を合わせたことは、エシュタンドの知る限りなかった。

確か今の王子は第一王子ただ一人きりのはず。側室を許していないのはミデイスと同じ法だったが、ミデイスのそれよりも厳格で徹底していると聞いていた。

この男が第一王子であるならば、供も付けずに一人で他国にいるなどということとは考え難い。それに確か王子の名はイラルではなかったはず。

はつきりしてきた意識の中でそう考えるエシュタンドに、イラルはあっけらかんと首を横に振って見せたのだ。

「いや、俺は王族じゃない。クルスは厳しい国だからね、俺みたいなものの存在は認めないのさ。今の王子は第一王子ただ一人。俺はさしずめ、生まれてないはずの子つてとこかな」

「どういう　」

訊ねかけたエシュタンドの袖をイラルが引く。彼が指差した先で、

クガルが苦しそうに身じろぎ、瞳をうつすらと開いたところだった。  
「クガル　！　大丈夫か、しつかりしろ。私がわかるか？」

駆け寄ったエシユタンドを見とめ、クガルがかすかに微笑む。

「ああ　殿下。ご無事だったのですね……よかった」

「私のことは気にするな。どこにも怪我はない。それよりもお前のほうかひどい具合だぞ？」

冗談めかしたように笑ってやると、クガルはほっとしたように瞳をゆるめ、自分の体を見やった。

「そうですね……面目、ございません……」

かすれた声で答えるクガルの肩に優しく手を置くと、エシユタンドは他の隊員たちにも声をかけてまわった。

その様子を横で見っていたイラルは、そばの木にくくりつけてあった自分の馬につけた荷から水筒を持ってきて、隊員たちにも分けてくれる。

心底から手伝ってくれているらしい彼の態度に、エシユタンドはまだ少し残る警戒心を心におさめて、再び礼を言った。

「私はエシユタンド。ミデイス王国第三王子を名乗っている。彼らは私の私兵隊員たちだ。助けてくれて感謝する」

今更隠しても仕方がないと、身元を明かしたエシユタンドに、イラルが口笛を吹いた。

「第三王子といやあ、ミデイスの次期王位継承者で有名な王子じゃねえか。それぐらいは俺でも知ってるぜ」

それにしても別に臆することもなくただけたままの口調の彼に、エシユタンドは思わず笑った。

「いいや、これぐらいの力の暴発で倒れているような不甲斐ない男さ。そんなに持ち上げてくれなくてもいいよ」

「そりゃあそうか　って、あんたも結構気取ってなくていい奴じゃねえか。気に入った！」

鍛えた腕で豪快に背中を叩かれて、エシユタンドがわずかにうめく。あわてたようにイラルは頭をかき、クガルが目線で抗議する。



「すまんすまん。うっかりあんたが怪我人だつての忘れてた。ところであんたたち、一体どこへ行くつもりなんだい？ 一国の王子ともあるうもんが、この辺りは最近物騒だつて話だろう」

深い意図もなさげに訊ねたイラルの言葉で、エシユタンドは何と答えたらいいのか一瞬迷った。

もちろん、正直に全てを話すわけにはいかず、かといってごまかすには身分も状況も知られすぎている。

何より、魔のモノたちを追い払い、こうして助けてくれているのだ。邪険にするわけにはいかなかった。

「……テローザの森を目指しているんだ」

低く答えたエシユタンドを見て、クガルが驚きを隠せない表情を浮かべる。彼の心配そうな瞳に大丈夫だと目配せして、エシユタンドはイラルを見やった。

「先ほどの状況を見てもわかるとは思うが、最近ミデイスでは魔のモノたちが度を越して増殖し、凶暴化していてね。王宮にまで姿を見せるようになった。その理由の調査を命じられているというわけさ」

全くの嘘でもなく、かといって真実からは微妙に離れた彼の答え。けれどこれといって疑問を持った様子もなく、イラルは頷いた。

「そりゃあ大変なことだ。それでテローザへ向かっているわけか。あそこは魔の巣窟だつて村人たちのもっぱらの噂らしいからな」  
同情か労いか、気の毒そうな顔をしてみせたあと、イラルは起き上がりはじめた私兵隊員たちの様子を瞳に映している。

「君はそれをどうやって知った？ いや、そもそもなぜクルスの国民である君がミデイスにいるんだ？」

ここへ来るまで自分が知りもしなかったことをあっさりと言つてのけたイラルに、なんともいえない複雑な気持ちがある。

森や民の苦しみと荒廃。そして耳に残るケイマの叫び。あの瞳はあきらかに憎しみに燃えていた。

なぜ……ケイマは確かに誰かを。いや、王族を、ひいては自

分を憎んでいるようにすら見えた。

痛む胸に無意識に手を当てながら訊ね返すと、イラルはこれまた何の躊躇もない笑顔を見せたのだ。

「あんたたちと同じさ、エシユタンド王子。さすがにクルスにやあれほどの魔の大群は現れてはいないが、最近あちこちの村や山里で悪さをする魔のモノたちが増えていてな。その調査のために国境沿いまでやってきて、ミデイスのほうはもっとひどいって噂を聞いて来てみたってわけだ」

「調査……一人でか？」

藍色の瞳を細めるエシユタンドに、イラルはぼりぼりと額をかきながら頷く。

「ああ、一応な。俺以外にもほうぼうで散ってる奴らが何をしてくのかはわかんねえけど 同行者はいない」

彼の言葉通り、周囲に誰か隠れているような気配もない。それには気づいていたが、エシユタンドはまだ納得のいかない顔で壊れた街道の石畳に視線をやりながら口を開いた。

「それでイラル 聞いてもいいかな」

「何だい、エシユタンド王子」

人のよさそうな、緑色の瞳 何かを企んでいるようには到底見えないものの、ケイマのこともあるから警戒を完全に解くことはできなかつた。

同じ思いであるのだろう、複雑な色を浮かべたクガルの瞳を視界の端に捉えながら、エシユタンドは顔を上げた。

「君は一体何者なんだ？」

迷った末に、核心にそのまま触れた質問。

藍色の瞳に射抜くように見つめられても、イラルはわずかの動揺も見せず、ああ、と気づいたように頭をかく。

「すまんすまん、ちゃんと話してなかつたな。珍しいもんばかり目にするもんだから、ついつい興奮しちまって 別に隠すつもりはなかつたんだが」

魔のモノと、おそらくはエシユタンドたちのことも含まれているのだろう、そのあまりな言い草にクガルが眉をつり上げるのが見えるが、負傷した状態だからか、助けてもらったためなのか、口を開くことはなかった。

そんな目線に気づいているのかどうなのか、イラルは拍子抜けするほど邪気のない笑顔を向けてくる。

「ただ、俺の身元を明かす前に、ちょっと頼みたいことがあるんだ」「頼みたいこと？」

問いかけたエシユタンドに、イラルは緑の瞳を更に細めて笑う。

「ああ。いや別に難しいことじゃあない。頼みを聞いてくれるってんなら、あんたらが気になることにも全部答えよう」

「君は我々の恩人だ。今、聞けることなら何なりと」

あくまで軽い調子のイラルにつられたように、エシユタンドは肩をすくめて笑ってみせた。

「よかった。なら遠慮なく頼むとしよう。テーローザの森へ、俺も一緒に行ってもいいかな」

途端に見開かれた藍色の瞳を、イラルは飄々とした笑みを崩さず見つめ返す。

風が向き合った二人を包み、街道を吹き抜けていく。

揺れるイラルの短髪が、まるで乾いた大地のような色だとエシユタンドは思った。

## 86・イラル（後書き）

突如現れ、エシユタンドたちの恩人となったイラル　山の国クル  
スの魔の力使いである彼が、テローザへ同行したい理由、そして  
彼の正体とは。

というところで次話へ続きます。

今後の展開もお楽しみに！

## 87・協力（前書き）

またお待たせしてしまいまして、申し訳ありません。  
引き続き頑張つて執筆中です。  
これからもよろしくお願いいたします。

「それは一体 何の目的で、でしょうか。イラル殿」

まず反応したのはクガルだった。今まで沈黙を守っていた彼だったが、さすがに黙ってはいられないと感じたのか、エシユタンドをかばうように隣に立ち、イラルに静かな瞳を向ける。

「クガル、いいんだ。お前は下がっている」

「殿下、しかし」

エシユタンドの声にもまだ下がろうとしないクガルを見て、イラルは気分を害するどころか、笑って手を叩いた。

「例え命の恩人であろうが、自分の主に万に一つでも危険分子になりかねない相手には立ちほだかる いい心がけだ。やっぱ隊長を務めるぐらいの男は、これぐらいじゃないとねえ」

その明るい言い草に驚いたのは当のクガルのようだったが、何も言わずただ緑の瞳を見つめ返している。彼が私兵隊の隊長であることを即座に指摘してみせたイラルの観察眼に、エシユタンドは少なからず感心しながらも、口を開いた。

「すまない、イラル。こうなればこちらも正直になろう。君もおそらく察している通り、我々はただの調査のためにここまで赴いたわけではない。ミデイスの王族として、国家の重要な目的をおいそれと漏らすわけにもいかぬことはわかってもらえるだろう。だから、君を連れて行くわけには」

きっぱりと断ろうとするエシユタンドに、イラルは人差し指を振りながら笑った。

「まあ、まともに考えりゃそうだよな。だが、あんたらは必ず俺を連れて行くことになる。どうしてか それは、エシユタンド！ もうわかるだろう！」

イラルが堂々と叫んだ、その瞬間、エシユタンドも彼が目で追う方角に弾かれたように振り向いた。

青く晴れ渡った上空に転々と姿を現し始めた影たち　それはま  
ぎれもない魔の襲来。

背中全体に走る嫌なその感覚に、エシユタンドは思わず額を押さ  
えた。

まさか、また戻ってくるとは　！

今の自分には魔と対決するほどの余力がない。それは、負傷した  
クガルや、隊員たちとて同じ。そして、この最悪の状況で頼るべき  
は　。

「そう、俺しかいないってわけだ！」

目線でエシユタンドの考えを読んだかのように、にやりと笑った  
イラルは、鍛えた腕を振り上げ、地を蹴った。

一体どれほどの数がいるのか、あれほど数を減らされてもまた飛  
んできた化け鳥たちに、エシユタンドは舌打ちする。それと同時に  
知らぬところで着々と進んでいたミデイスの荒廃に、眩暈がするよ  
うな気さえした。

「雑魚ばかりだが　敵は数でまず圧倒させようって魂胆なのかね  
え」

空を埋め尽くすほどの化け鳥たちにも一つの動揺も見せず、むし  
る嬉しそうな表情すら浮かべたイラルが、粉々に崩れた街道の上を  
走り出した。

「イラル　！」

呼び止めようとしたエシユタンドに振り向き、余裕で片目を瞑る。  
「あんたらはそこで見てな！　これぐらい、すぐに片付けてやるさ」  
魔と対したことが一度や二度ではなさそうな彼の口調。その真偽  
はすぐに示されることとなった。

四方八方からイラルへと襲い掛かろうとする化け鳥たちを、緑の  
瞳で軽く見回したかと思うと、イラルは両手を広げ、何かを念じる  
ように瞳を閉じる。

「殿下、ご覧ください。石が　！」

クガルの声に目をやると、一つ、また一つと周囲の石が浮き上が

つていくのが見えた。

先ほど自分の力で粉々になった街道の石畳　その瓦礫が、いや細かな石の粒全てがゆっくり、ゆっくりとまるで生命を持ったかのように浮かび上がり、イラルを取り囲んでいくのだ。

「あいよ、愛しい大地ちゃん。あのふざけた鳥どもを追い払ってやんな」

あくまでも軽い調子で言ったイラルが、石たちに命じるように手ではらう仕草をする。

すると周囲に浮遊していた石たちが爆発するかのような速さで鳥へと向かっていく。

避ける暇もなく石に当たった鳥たちは落下していき、その他のものは本能的にかギヤアギヤアとわめきながら、飛び立った。

「おっと、思ったよりも手ごたえねえなあ」

つまらなさそうに呟いたイラルに、エシユタンドが鋭い藍色の瞳を向ける。

乾いた茶色の髪に手をやり、イラルは笑った。

「冗談、冗談。そんなに厳しい顔しなくても」

途中で言葉を止めたイラルと、エシユタンドが見た方角は同じだった。

「　ケイマ！」

街道沿いの森の上空、何羽もの化け鳥につかまって飛んでいくのはケイマ　サーダルの長である少年に間違いなかった。

「木陰で偵察でもしてたつてところか。ご丁寧に、よっぽどあなたらを招待したいみたいだぜ」

濃い金の髪が風になびき、一瞬だけこちらを見た少年は、すぐに他の鳥たちとまぎれて、姿が見えなくなっていく。

ケイマ。そんなに王族が　私が憎いのか……？

心の中で問いかけたエシユタンドは、唇を噛んで鳥たちが逃げる方角を見据えた。

それはまさにテローザの森がある西の方角。



もはやそこにエカルドが捕らわれていることに間違いないだろう。その目的は復讐なのか、それとも。 。 厳しい色を瞳に残したまま、エシユタンドはクガルを見やる。言葉はなくとも決意が伝わったかのごとく、クガルは沈痛な面持ちで頷いた。

そしてイラルがこちらへと歩み寄ってくる。

元通り何もなくなった青い空と森の広がる空間　壊れた街道と飛散した石の惨状だけが先ほどの力の片鱗を残していた。

「さあ、エシユタンド王子。俺を連れて行く気になったかい？」

明るく笑って緑の瞳を向けてくるイラルに、エシユタンドは首を縦に振ってみせる。

王宮からの援軍はまだ望めず、後を追ってきている馬車隊の到着を待つ時間も惜しいほどに、事態はもはや一刻を争う。

かといって、負傷した私兵隊と自分だけでは、これからの旅を乗り切れるはずもなかった。

ともかく、エカルドの救出と広がる魔の攻撃を抑えること

それが、今の自分たちに課された使命だ。

「いいだろう、イラル　それではミデイス王国第三王子付き私兵隊に同行を許可する。テローザの森では、我々の目的に共に手を貸してもらうことになるが、いいか」

姿勢を正し、威厳にあふれた王子としての言葉を述べたエシユタンドに、イラルは頷く。

「もちろん」

一つも臆することもなく、笑ったイラルは、代わりに、とでも言うようにお辞儀をしてみせた。

「では、このイラル」ザリオ　クルス王国特別山岳部隊、第三隊長の名にかけて誓おう。君たちの不利になることは一切しない。目的が何であれ、全力をもって協力する。その目的が無事達成されるまで　と、こんなところでいいかな？　エシユタンド王子」

緑の瞳をいたずらっぽく細めてイラルが言う。

その声音に嘘がないことを確かめて、エシユタンドは口元に笑みを載せた。

「よし、私兵隊全員、出発だ！ テーローザの森へ、全力で向かうぞ！」

全員から賛同の声が上がり、各自馬と荷を用意する。その時間すら惜しむかのように、エシユタンドは自ら動き、馬に跨った。

日はまだ天上に高く居座り、これから始まる旅の行く末を見守っている。

\*

「蒸し暑い」

ふと漏らした空の呟きに耳を止めたのは、隣に佇むフェルだった。フードをすっぽりとかぶり、赤銅色の長髪を下ろしたままであるのに彼は、全く汗すら浮かべてもいなかった。

「ああ、姫君はミデイスの気候に慣れておいでだから、そう感じられるんですね。ミデイスには花、雨、収穫、雪と四つの季節がありますが、ビバスには多少の気温の変化はあれ、四季というものがないのです。海に面し、開けた平坦な国土であるからか、雨は瞬間的に降ることも多いですが、このように暑く、常に太陽が顔を出している日がほとんどなのですよ」

「へえ、そうなんですか」

思わず瞳を見開いて、空は川からの風になびく髪を押さえた。

距離的にはさほど遠くはないのに、そんなに気候の違いがあるなんて。

やはり空がいた世界とは違うこの世界の仕組みに、空は改めて驚いていた。

ミデイスでは収穫の季節が終わり、そろそろ雪の季節が近づこうとしている頃だ。リゴトの講義をもっと真面目に聞いていたらもっと詳しく知っていただろうけれど、それがはつきりいつなのかはわからなかった。ただ、急に風が冷たくなり、最初の雪が降れば、すぐにそれはやってくる。そう言ってエシユタンドが笑ったことを思い出す。

離れて何ヶ月も経ったわけでもないのに、もう既に懐かしく感じる。あの王宮の部屋で、二人で過ごしたことも、収穫祭を終えた時のことも、あの、二度目のキスでさえ。

ズキンと痛む胸にそつと触れ、弱気になりそうな自分をチョーカ一の想緑珠を握ることで元氣付けた。

今、彼はどうしているのか。そして、エカルド王子は無事なのだろうか。心配であれから想緑珠に時々願ってみたものの、距離が遠すぎるのか、それともただ伝えてくるほどの出来事は起こっていないのか、あれから想緑珠は光ることもなかった。

「姫君、お待たせいたしました。ああ、申し訳ないのですが、もうすぐ甲板に食事を終えた者たちが戻ってきます。帽子を」

船内から食事を持ってきた道化師姿のフェイラに言われ、空はあわてて手に持っていた同種の三角帽を深く被った。黒髪はビバスでも目立つから、ずっと被っていると言われていたものだ。

「あ、ごめんなさい。ちよつと蒸れて暑かったから……」

ちよつと食事時で甲板に誰もいなかったからいいと思い、少し風に当たっていたのだ。

「いいのですよ。我々が無理なお願いをしているのに、姫君は嫌とも仰らずに聞き入れてくださって、本当に有難いと思っております。さあ、温かいうちにお召し上がりを」

そもそも脅しとしか取れないような言い方で連れられていることには変わりはないはずなのに、なぜかこの優しさと笑顔には逆らえず、不思議なほど穏やかな船旅となっていた。

今もこうして、たまには自分たちの船室ではなく、外で食事がしたいと言いついた空の願いを聞いてくれたのだった。

このレーテ川を下る船旅も三日が過ぎ、既に見慣れたものとなったパンと豆のスープに空は目を移した。パンがミデイスのものよりちょっと固く、豆のスープは塩味が聞きすぎていて正直あまり美味しくない。ただ海の国ビバスへ向かっているからなのか、そこから獲れたものなのか、魚の燻製だけは空の口にあった。

「あと一日で船から下りられます。ビバスへ入ってしまえば、もっと新鮮で美味しい魚料理がお召し上がりになれますよ。それまで、申し訳ありませんが、あともう少しだけご辛抱くださいね、姫君」  
そつと向かいから声をかけられて、空はあわてて笑った。

「あ、ごめんなさい。やつぱり顔に出てました？」  
「ええ。姫君は本当に正直でいらっしゃる。そこがとても魅力的なところですね」

楽しそうに笑い返すフェイラ。その表情からも、口ぶりからも、空が料理を嫌そうにつついていたのはお見通しだったに違いない。  
思わず赤くなる顔を片手で扇ぎながら、空はパンをかじった。

「魚料理か、楽しみだなあ。王都へ着いたら、うんと食べちゃおうつと」

明るい口調で言った空を、フェイラがしばし手を止め、見つめる。その顔が沈んだ表情を浮かべているのに気づいて、空は笑顔を見せた。

「きつと……大事な人なんですよね」

突然ぼそつと呟いた声に、フェイラだけでなくフェルも顔を上げる。何を言っているのかという二人の瞳。同じ赤銅色に、空は真剣な視線を向けた。

「ずつと考えてたんです。この白水晶の剣を使って、私に手伝っ

てほしいことが何なのかって」

口にした瞬間、一瞬だけ剣呑な光を帯びたフェルの瞳に、フェイラが目配せをする。

沈黙を守るフェルの代わりに答えたのは、フェイラだった。

「それで、何かお察しになったことでも？」

いつもの優しさが削り取られたような赤銅色の眼差しに、空はただ首を横に振った。

「いいえ、全然。だって異世界から来た私にとっては、ミディスだけでもわからないことだらけなのに、ビバスの事情なんてわかりっこないでしょう？」

頭をかいて笑ってみせる空の言葉に、どこか気が抜けたような顔をするフェイラ。その見慣れた微笑を、空はまっすぐ見つめた。

「でも、これだけはわかります。きつと、あなたたち二人にとって、すぐく大事な人を救いたいんじゃないかって……そのためなら何をしてもこの剣と私の力が必要。違いますか？」

「姫君」

見開いたフェイラの瞳は、切なげに、けれど力強い色に瞬いた空の瞳とかち合う。

しばらくの沈黙の後、見守っていたフェルがふつと笑った。

「本当に　姫君は純粋なお方だ。お人好しだと言い換えてもいい。そのままでは、損をしますよ？　無理やり連れて来られて、そんな風に我々をよく言うてくださるなんて　どんな悪事に使われるかもわからないというのに」

「フェル」

呆れたように口にする弟を、フェイラが止める。それでも肩をすくめて空は続けた。

「そうかもしれないですね。でも……どうしてもあなたたちがただの悪者だとは、私には思えない。だって」

「……だって？」

問うフェイラの表情を、空はいたずらっぽく指差し、笑う。

「だって、私も同じなんだもの。とつても大事で　他の何にも変えられないくらい大事で、大切な人を救いたい。その気持ちは、どんなに取り繕っても、きつと嘘をつけないんじゃないかって思うから」

河港でも、船旅が始まってからも、いつでもどこかに感じられたフェイラやフェルの不安。あせりにも似た感情は時に笑顔で、時に無表情で包まれてはいたけれど、自分が持つ祈りに近い気持ち、ふとした表情や仕草から伝わってきた気がしたのだ。

空の言葉に驚いたのは、フェイラだけではないようだった。

今まで斜に構えた態度を取っていたフェルからも、瞳に残っていた棘がいつの間にか消えていくように見えた。

「やはり、あなたは呆れるほど純真で、まっすぐなお方だ……本当に、よく似ていらっしゃる」

「フェル」

呼んだフェイラでさえも、同じ想いを秘めているのか、どこか優しく、静かな目で空を見やる。

「似ている、つて　誰に、ですか？」

空の問いかけにそつと頷いたフェイラは、息を深く吸って、川面を見下ろしながら口を開いた。

「あなたには、最初からお話しておけばよかったのかもしれない。我々の目的、いいえ、そもそも、我々の正体を……」

フェイラが意を決したように話し出した、その瞬間だった。

強い風が吹き、川面が一瞬ゆらりと揺らいだかと思うと、船が傾き始めたのだ。

甲板に続々と戻ってきていた旅芸人たちがざわめき、倒れ、一斉に何事かと手すりから下を覗き込む。一人が鋭い悲鳴をあげ、逃げようとして滑り、震えながらこちらへはってくる。姿勢を崩した空を支えたフェイラと目を合わせ、フェルが川面を鋭い目で見やる。

「川蛇だ、かつ、川蛇が出たぞおーっ！」

誰かが叫び、重なるように悲鳴が次々と響いた。

フェイラの腕を掴んで、揺れる甲板でなんとか立ち上がった空が目にしたものは、その丈が船の帆柱ほどもある、巨大な蛇のような化け物。

ぬらぬらと光る緑色の鱗の合間から、ぎろりと赤い瞳が覗いた。

## 87・協力（後書き）

突然現れた謎の男イラルは、エシユタンドたちに同行を申し出、協力を約束した。果たして彼の目的とは何なのか。様々な想いを載せ、いよいよエシユタンドたちはテローローザを目指す。

一方、ビバスへの旅が始まり、空は……というところで今回のお話は終わりです。

次回もお楽しみに！



88・川蛇（前書き）

お待ちせいたしました！  
魔に遭遇した空がどうなるのか、ぜひお読みください。

川蛇だ、と呼ばれたその巨大な化け物は、ちろちろと赤い舌を出しながらゆつくりとこちらへ近づいてくる。ミディスですら見たことのない恐ろしい生き物に、空は声も出せずにフェイラにしがみついた。

「大丈夫、あれは図体のわりには大人しい。ちょっと脅してやれば逃げていきますから さあ、姫君はこちらへ」

「で、でも……フェルさんは？」

肩を抱き、船室へと誘導してくれるフェイラに、空が訊ねる。安心させるように口元だけで笑ってみせたフェルと視線を合わせて、フェイラも笑った。

「ご心配なさらずに。川蛇ほどの魔なら、あいつにとっては赤子の手をひねるも同然。ただちょっと暴られると厄介なので行きましよう。あなたに万が一のことでもあれば、我々だけでなくミディアの王子に申し訳がたちません」

さあ、と連れて行かれるままに空は船室の入り口に小走りで向かう。

冗談めかして片手を振った後、フェルはぐらぐらと揺れる甲板で川蛇に向き直った。

「おっ、おい。あいつ どうするつもりなんだ？ 早く逃げないとやられるんじゃない」

「そうだ、あんた。さっさと連れて来いよ」

ぎゅうぎゅうに込み合った船室の入り口で、まだ中へ入らずにいた旅芸人の二人がフェイラに不安げに声をかける。けれどフェイラは笑みを残したまま、彼らの背を押した。

「こちらの心配より、ご自分の心配をなさい。さあ、早く逃げないと川蛇が向かってきても知りませんよ」

大柄なフェイラが女性であるとはおそらく気づいていないである

う二人は、そう脅かされて見るからに顔色を変えて慌てて船室へと続く階段を下りていった。

誰もいなくなつて、ふうと一息ついたフェイラが空に片目を瞑つてみせる。

「ああ言いましたが、ここまで被害が及ぶことはまずありません。姫君も、ここからご見物なさいますか？ 我が弟 ビバス随一の対魔術士の腕前を」

鮮やかにすら見える微笑を浮かべ、どこか誇らしげにそう言ったフェイラ。その言葉が終わらぬうちに、佇んでいたフェルはフードを取り、赤銅色の長髪を風にはためかせながら化け物を見据えた。

低く唸るような声を発しながら、川面を進んできた川蛇は、船の手すりに触れそうなほどぎりぎりで止まった。ひっきりなしに出入りしている赤い舌と妙に小さな瞳が余計に不気味で、空は知らずフェイラの腕を掴む。

しかし空のような緊張はひとかけらもしていないらしいフェルは、余裕を全く失わぬまま、無表情で片手を胸元まで上げたかと思うと、軽く指を鳴らした。

瞬間、ぽつと青い炎が発生する。空中の、川蛇のちょうど目の前に一つ。次に指を鳴らすと、また一つ。そしてまた一つと、続々と炎が浮かび上がる。

円を描くようにいつの間にか青い炎の中に取り囲まれた川蛇は、一瞬動きを止め、赤い舌を引っ込めた。それを見て取ったのか、フェルが同時に両手を打つ。すると等間隔で並んでいた炎が、段々とその距離を縮め、川蛇をじりじりと追い詰めだしたのだ。

その鱗状の皮膚をこがすわけではないようだったが、熱さを感じるのか、嫌そうに身をよじり、グウウと鳴いた。細かな表情があるわけではなかったが、あきらかに苦しむようなその様子に、空は思わずフェイラを見やる。すぐに気づいたフェイラが、安心させるように微笑んだ。

「大丈夫、殺しはしません。こちらに害をなすわけではない小物だ。

脅しているだけですよ」

「そ、そうなんですか……でもなんだか」

怖くて、と言いかけた言葉は途中で飲み込まれる。なぜか言えなかったその言葉は、川蛇に対して思ったものなのか、それとも。まだ少し震える手をぎゅっと握って見守る空の前で、フェルの炎がどンドン川蛇に迫っていく。いまやその喉もとを締め付けるような勢いで燃え盛る青い炎の円。苦悶の声で何度も鳴き、暴れる川蛇をただ見つめるのは、表情一つ変えもしないフェル。

その光景を眺めながら、空の脳裏に蘇ってくる記憶があった。

確かに同じ炎を見たのだ、あの日、ミデイスの王宮の書庫で。

不気味に思われた正体不明の炎、奪われた原書、そのせいでどれほどエシユタンドや自分が思い悩んだか。そればかりではない、犯人とされたクガルも、彼を想うエマナも、全員が被害者だった。あの術を命じたのは、王妃であるとはいえ、実際に行つたのは目の前にいるフェルなのだ。あまり考えたくなかった現実を改めて突きつけられ、空は複雑な思いが渦巻く胸を押さえた。

唇を噛み、違う震えが走り出すのをなんとか抑えながら、空はフェルを見つめた。

暴れ続ける川蛇の動きで、甲板はぐらぐら揺れ、そばの柱に捕まりながらも、まっすぐ立つのも危うくなってくる。さすがに魔とはいえ苦しみ続ける光景を見ているのも嫌で、空が目をそらした、その時。

突然川蛇が大きくもんどりうつて、青い炎から逃れるように船へと突進してきた。

勢いに自然、よろめいたフェルに向かって、川蛇が鎌首をもたげた。赤い舌を長く伸ばして、襲い掛かる。咄嗟に逃げようとするフェルだったが、割れた船板に足がひっかかり、動けない。そこを目掛けて踊りかかっていく川蛇を前に、空はたまらずに衣装の中に手をいれ、腰もとをさぐり、触れたものをそのまま引き出していた。「やっ、やめて！　お願いだから、これ以上暴れないで！」

夢中で叫んで駆けていく　引き止めるフェイラの声は遠く掻き消え、空はフェルの前に立ちはだかる。手にした大ぶりの長剣　白水晶の剣を川蛇に突き出しながら。

「姫君　」

驚いたように呼ぶフェルの声にも振り向かず、空はただ川蛇の赤い瞳を睨みつけていた。

殺したいんじゃない。害を与えるつもりはない。ただ、これ以上争いは見たくない。

それだけだから　そう、必死に見つめた空に川蛇が動きを止めた。

フェルの青い炎は風に乱されて消え、代わりのように空の手の中の剣が、鮮やかな青色の鞘ごしにまで、光を放ちだしたのが見えたのだ。

「魔よ、心を静めて、あなたの居場所へ帰りなさい　！」

無我夢中で祈りを口に出していた。敵だから、味方だから、そんなことはどうでもいい。

ただ目の前で人が傷つくのは見たくない。命が失われるのは見たくないの　！

空の声と同時にまばゆいほどの光が刀身から放たれる。それはまさに、白水晶の結晶から生み出される、純粋な光の塊だった。フェルも、空も目を閉じてしまうほどのまぶしさ。

舞い上がった帽子から、空の黒髪が現れ、風に揺れる。そんなことにかまう間もなく、必死で握り締めていた剣を持ち直し、目を開ける。そして目にしたものは　嘘のように静かになった川面。信じられない思いで傍らのフェルを見やると、引っかかっていた足を無事抜いたらしく、ゆっくりと立ち上がり、そのまま手すりのほうへ歩み寄っていった。

「姫君、あれを　」

言って、フェルが指差した方角には、川の中で最後に揺れた、川蛇の尾だった。

深い水底に潜っていったのか、泡が立ち上り、消えていく。

揺れていた船も静かになり、まるで嵐が去った後のように、ただ先ほどまでの青空とどこまでも続く大河が見えるばかりだった。

「よ、よかつたあ……」

思わずへたりと座り込んだ空に、フェイラが慌てたように駆け寄ってくる。

「姫君、どこにもお怪我はありませんか？ ご無事で」

近寄って覗き込むフェイラを見上げ、空はほっとしたように口許を緩める。自分でやっておきながらも、どこか夢か幻のようで、今起きたことが信じられなかった。

「あ、うん。あたしは」

無意識に口調も砕けたまま答えかけた空は、急に船内からどやどやと現れたたくさんの旅芸人たちに囲まれ、わっと上がる歓声に飲み込まれ、びっくりしたまま固まる。

「おい、あんたすげーじゃねえか！ 一体今のどうやったんだ？」

「なんか術でも使ったのか？ この剣か？」

「あっちの兄さんもすごかったけど、お嬢ちゃんが出てきてあつという間にピカーッと光って、化け物がいなくなったからびっくりしちゃったよ！」

揃いも揃って衣装だけではなく、声まで賑やかな男たちに次々と肩を叩かれる。

鞘から抜いてもいなかったけれど、剣を慌てて胸に抱きしめた空を守るかのように、フェイラがつい、と歩み出た。

「ああ、彼らは私の連れで、旅の吟遊詩人と道化師なんですがね」

「ちよつと対魔の術をかじったことがあるんですよ」

フェイラの後を受け、何事もなかったかのような平然とした顔で言っただけなのは、フェルだった。

「ちよ、ちよつとって あんな馬鹿でかい奴を倒したのに、かい？」

「そうだよ、さぞかし高名な対魔術師なのかとてつきり……」

納得の行かないような皆を代弁した男たちにも動じず、彼は笑う。  
「高名だなどとんでもない。ビバスの方ではないならご存知ない  
かもしれないが、川蛇は図体だけは巨大だが、本当は攻撃性も低  
く、危険ではない生き物なのですよ。さっきは少しあばれたので驚  
きました、なんとか彼女の術でやり過ごせました」

空の肩に手を置いてフェルが言うと、皆の目線が空へ移動してく  
る。

「へえ、若いのに大したもんだ。そんなら対魔術師としてやってつ  
たほうがいいんじゃないのか？ それにしても、あんた珍しい髪と  
瞳だな」

同じ道化師の格好をした男が空をじろじろと眺めながら呟くと、  
フェイラがごまかすように隣へ立ち、それとなく帽子をかぶせた。

「いいえ、まだまだなんです。それにビバスじゃあ、対魔術師よ  
りも、旅芸人のほうが儲かりますからね」

笑ってみせるフェイラの言葉に、旅芸人たちは「そりゃそうだ」  
などと言い、笑いあう。

緊張していた空も、甲板の空気が和んだことにほっとして、ひそ  
かに息をついた。

今の自分の立場で、注目されては困ることぐらいわかっていた。  
何も考えずに剣を使ってしまったものの、この剣がただの剣でない  
ことに気づかれてはそれこそ剣もろともどうなってしまうかわから  
ないのだから。

「なんだ　もしかして新たな巫女の候補者でも乗り合わせてたの  
かと思つてびびっちゃったぜ」

ばらばらと自分の船室へ戻っていく旅芸人の一人が呟くのが聞こ  
え、空がなんとなく振り向いたその時、先ほど空の黒髪を見ていた  
男と目が合う。

思わず瞳をそらした空をしばらく見ていた彼は、仲間の道化師に  
声をかけられ、甲板を離れていった。

大柄な背格好に似合わぬような派手な黄色の道化師衣装が目についたが、それ以外は特に特徴のないような男だった。

「危ない危ない　こんなところで怪しまれては、あなたに危険が及ぶところでしたね。申し訳ありませんでした、姫君」

そつと囁いてきたフェルに、空は首を振る。

「いいえ、私こそ……夢中で剣を使ってしまったって、かえって目だつてしまいましたね。でも、フェルさんが無事でよかったです」

笑った空は、一瞬瞳をそらしたフェルには気づかず、付いてきたフェイラに連れられて、船室へと歩き出した。

振り向いたフェイラの咎めるような視線を受け止めたフェルは、口元だけに笑みを載せ、そのまま甲板にとどまり、川面を見下ろす。

既に泡すらも残っていない先ほどの戦場　その名残に揺れる水を見つめる赤銅色の瞳は、どのような感情も示すことはなかった。



## 88・川蛇（後書き）

川蛇との対決で、改めて見せつけられた対魔術士としてのフェルの能力　怯えながらも、戦いを望まぬ空はついに白水晶の剣を使う！  
なんとかやり過ごした空は、フェルの本心を怪しむこともなく……  
というところで次話へと続きます。

空のビバスへの旅路はどうなっただけなのか、そしてその頃のエシユ  
タンドは、私兵隊は　！？

これからの展開もぜひお楽しみに！

## 89・情報（前書き）

お待たせいたしました！

今回のお話は、空を救出すべく後を追う私兵隊三人組がまた登場します。

衣料品から果物、酒にいたるまで、ありとあらゆる積荷がごちゃごちゃに並べられた船内の地下室で、ルストは一人ため息をついていた。

その浮かない表情に気づかぬはずはないであろうに、向かいに腰掛けたセイシエルとカルファーズは先ほどからずっと呑気に食事を摂っているのだ。

ああ、姫君は無事だろうか。第三殿下は、末の殿下は……一体どうなされているのだろうか。

心配でたまらないのは自分だけなのかとすら思ってしまうほど、目の前の二人の食欲は衰えない。

カルファーズはともかく、どちらかといえば線の細いセイシエルまであきれほどによく食べることに、ルストは少なからず驚きを隠せなかったのだ。

「はあ……」

ついにこれみよがしに大きく息をついたルストをちらりと見たセイシエルが、食後の果物を差し出してくる。

「おいしいですよ。どうですか？ 一口」

平然とした顔でそう笑われて、ルストは拒否する力もなく、たわわに実った葡萄の房を受け取った。

口にするでもなく、ただぼんやりとその薄緑の実を見つめているルストの前で、カルファーズが立ち上がる。

そのまま、小さな天窓から外を眺めて、「いい天気だな」とまで呟いている冷静な彼に、ルストがもはや堪えきれずに言葉をかけようとした、その瞬間。

「あせりは何も生み出さず、ルスト君」

振り返り、青灰色の瞳を細めたカルファーズが、ルストに微笑んだ。

「そうですね、どんな時でも食事は摂らないと。力がなければ、肝心な時に姫君を助け出すことすらできない」

いつの間にか隣に立って、こちらも優しく笑ってみせるセイシエル。

何も気づいていないのかと思った二人が、実は自分の胸の内などお見通しだったのかと思うと、恥ずかしいような、悔しいような、微妙な気分になる。

「わっ、わかっていますよ　でも、どうしても心配で、何もできない自分がはがゆくて、悔しくて……食事をする気になれないだけです」

たちまち言い返しつつも視線をそらしたルストの肩に手を置いて、カルファーズは咳払いをした。

「まあ、君の気持ちもわかる。勿論、我々として心配や無力感がないわけではないのだから　ただ、そこで自己嫌悪に陥り、うじうじと思いつむのは愚か者のすることだ。どんな状況下においても、今できる最大限の努力をすることが大事なのだよ、ルスト君」

嫌味な言葉に言い返しかけ、見上げた先の青灰色の瞳が、思ったよりも真面目な色を帯びていることに気づき、ルストは意外な気持ちで黙った。

明り取り用の天窓　こもった地下室の換気のためでもあるそれが、少し開けられている隙間から川風が吹き込んでくる。

蒸し暑い船内の空気が少しだけ涼しくなるような気がして近づいたルストの耳に、何やら甲板から話し声が聞こえてきたのだ。

「……ってというのが、もっぱらの噂らしいぜ。これじゃあ自由の国ビバスが聞いて呆れるよなあ」

大きな声で話し合うのは、船員同士らしい。水音に混じって、掃除用具がぶつかりあうような音が聞こえ、どうやら甲板の掃除でもしながら雑談中のようなだった。

「この調子で年々通行税が上がったんじゃあ、商売上がったりだ。ナイアーレだかなんだか知らないが、祭りを盛り上げようってんな

ら、もつと税を安くしてくれねえと」

「そうだそうだ。毎年この時期の賑わいで、俺たちや商売してるつてのに。全く　魚が採れにくくなってるとっただけでも随分堪えてるんだから、これ以上儲けが少なくなったら、生活できねえぜ」

「本当だよなあ……それも、あれじゃねえの。巫女が年老いてるせいなんじゃねえのか」

「しつ、滅多なこと言うもんじゃねえよ。ビバスじゃあ、それは禁句だろ」

あせつたように小声になった男の言葉で、振り向いたルストに、カルファーズは頷く。すぐそばを通っていく男たちの足音をやり過ぎしてから、ルストはカルファーズに詰め寄った。

「情報収集　今できる最大限の努力つて、そういうことですか？　カルファーズ隊長」

すぐさま訊ねたルストに、カルファーズは得意げな笑みを見せる。今度は本物の明るい微笑。

「決して王宮にいるだけでは耳に入らぬ本物の情報　それこそ、生きた情報というものだ。どんな小さな話であろうと、それが後々何の役に立つことになるかわからん。だからこそ、反省や心配をしている暇があれば、耳だけでも動かしておくべきだ、というわけなのだよ」

相変わらずの偉そうな話し方には正直ささくれ立つものがあるながらも、やはり隊長を務める人物は違うと、ルストは素直に認めていた。

「なるほど……姫君救出のためにも、どんな些細な情報が役立つかわかりませんね」

「そう　海の巫女とやらの世代交代の時期が来てるらしいって、昨日も他の船員が話してたよ、カル」

頷き、呟いたルストは、すぐ背後から聞こえた声にまた振り向き、目を剥いた。

「セツ、セイシエル副隊長　い、いつの間に……」

つい先ほどまで確かに男の姿でいたはずのセイシエルが、いつの間にかまた女性　しかも鮮やかな化粧の施された優雅な貴婦人姿　になっっていることに、ルストはつい口をぱくぱくとさせながら、訊ねる。

「いいかげん慣れたまえ。シエルは船の中ではもう何度も幻術を使っているだろう。いちいち驚いていては、身が持たんぞ、ルスト君」  
呆れた様子で言うカルファーズに、ルストは顔を赤くしながらうなだれた。わかってはいるものの、まだあまりの変貌についていけないのだ。

「ちよつと甲板に行ってくる。気になる話をさつき耳にしたもんでね」

「ああ、気をつけるよ、シエル」

「せいぜい頑張ってくるさ、カル」

気安い挨拶を交わした二人はルストの取り乱しようとは打って変わった落ち着きようだ。

年齢の差だけではないようなその態度は、もはや性格の差としか言えないものかもしれない。なかつた。

小さな扉をそつと押して消えていったセイシエルのドレス姿を見送って、ルストは知らずため息をつく。

思わず積み重ねられた荷の間に腰を下ろした彼を黙ったまま見下ろしていたカルファーズが、しばらくして向かいに腰掛けた。

「年々上がる税金　採れにくくなる魚　それに、海の巫女の世代交代……どうだ、何かが見えてくるようではないか？」

ぼつりぼつりと、まるで何かの謎かけのように訊ねたカルファーズを見て、ルストは困ったような顔をした。

「ええと……」

赤褐色の髪をぼりぼりと搔いて、首を傾げたルストに、今度はカルファーズがため息をつく。

「まったく　副隊長の名が聞いて呆れるな。もう少し頭を働かせてみたらどうだ」

「すつ、すみませんね！ 頭を使うのはクガル隊長の専門分野なんですよ。自分は それ以外担当で」

言い訳だとわかっていながらもぼやくルストに仕方なさげに笑いをもたらして、カルファーズが腕組みをした。

「そうだな、ではもう少し私から情報を提供してやろう。第一、ピバスは自由の国というだけあって、世襲制で王を決めない。王位継承にふさわしい者の中から適切な者を選出する仕組みだ。どうだ、これくらいなら君も知っているだろう」

「は、はあ、まあ……」

何を今更、といった顔でルストが頷くと、安心したようにカルファーズは続けた。

「ふむ、それならこれはどうか。第二、王位継承に必要な条件とは、貴族以上の家柄出身者であること、そして、決められた基準以上の武術、学問などを身につけていること。これだけであり、その該当者ならば、性別も問わない、という非常に簡単なものだ」

「それぐらい、僕だって知ってますよ 現に、その通りピバスでは三代女王が続いている。ついでに言うと、その選出方法というのは集められた者、また希望者を一斉に国民の前へ出し、演説をさせるという変わったものだそうじゃないですか。国民の代表者と王宮の王族、貴族、元老院全員が投票をして、決まるとか ミンディスやクルスのような世襲制からしたら、考えられないほど奇抜な方法ですよ」

だてに王宮の私兵隊で副隊長まで務めているわけではないのだ。その程度の知識を知らぬようでは話にならない。

馬鹿にされているのだろうか、と多少腹立たしい思いで答えたルストに、カルファーズは表情を変えもせず頷いた。

「その通り。では王が実際にどのように政治を行うかは知っているか？」

「え……どのように、って」

突然切り替えられた質問に、ルストは戸惑ったように言葉を止め

る。しばらく考えるも、カルファーズが何を問おうとしているのがわからなかった。

「ミデイスでは国王が全ての権限を持っている。しかし、ビバスでは王だけが政治を行うのではないのだよ」

意味ありげに微笑んで、謎かけのような話を続けるカルファーズに、首を傾げながらルストは口を開く。

「えっと 元老院の助言が大きな役割を果たしている、とか？」

「確かに。それもそうだが、もう一つビバスでは重要な役目を果たしているものがある。それは」

「それは……？」

眉を寄せ、問いかけたルストにカルファーズが答えようとした、その瞬間。

扉が開き、既に武装姿に戻ったセイシエルが入ってきた。先ほどまで幻術で貴婦人になりすまして情報収集していたとは思えないほどの真剣な顔を向ける。

「カル、いい知らせだ。さっき寄せてきた小船の行商人に聞いたんだが、前を進む中型船で、川蛇とかいう魔が出たんだそうだ。それをあつという間に退治してみせた対魔術師がいたらしいんだが、その一人は異国の娘で、不思議な剣を持っていたとか……」

息を切らして話すセイシエルの言葉を待ちきれず、ルストが勇んで駆け寄る。

「姫君ですね！ それに、白水晶の剣 よかった、ご無事でいらつしやるんだ」

数日振りに見せた明るい彼の表情とは裏腹に、カルファーズはこりともせず顎に手をやり、何事かを考えるそぶりを見せている。「まあ、誘拐された時点で奴らが姫君に害をなすつもりはないだろうとは考えていましたが、それでも姫君のご無事な様子がわかると、安心ですよ」

優しくそう言い添えると、セイシエルは考え込むカルファーズに歩み寄った。



「その力の素晴らしさに、乗り合わせた旅芸人の中には、新たな巫女の候補者かと考えた者もいたとか　ついでに言うと、もう一度この船員にもそれとなく聞いてみたんだが、ピバスには海の聖殿と呼ばれる聖域が一つあり、そこには海の巫女がいて、ネイア神からの言葉を聞くと言われているそうだ。国中の乙女たちの中から選ばれた巫女たちの中でも最高位に当たる海の巫女　これがこのネイアーレを取り仕切るんだとさ」

肩に触れる銀色の髪をはらいながら、セイシエルが言い終える。その中の聞き覚えのある単語に気づいたルストが声をあげた。

「そういえば、さつき船員が巫女の世代交代がどうとかがって言っていましたね！」

二人の視線を受けて、カルファーズは青灰色の瞳をあげ、頷く。

「よくできた、と褒めてあげたいところだが、事態は思ったよりも厄介かもしれない　奴らの目的は、十中八九その海の巫女に関わっているに違いない。年老いた巫女のためか、それとも新しい巫女のためか　それだけならいいのだが」

半ば独り言のような彼の呟きに、ルストが訝しげな表情を浮かべたことに気づいたセイシエルが、代わりのように続きを受けた。

「奴らは姫君と剣の力を利用して、巫女のために役立てようとしている、ということですよ。ピバスでは海の巫女が国王の次に大事な存在ですからね　なにせ、国政にも大きな権限を持っているわけですから」

さらりと説明されたのが、先ほどのカルファーズの質問への解答だったとルストにも理解できたその時には、カルファーズは立ち上がっていた。

「船を下りるぞ！　今ならまだ行商人の小船に乗れる。奴らの行き先はわかった。先回りして、王都へ向かうんだ！」

「先回りって　王都にはこのまま船に乗っていたほうが早く着くのでは……」

言いかけたルストの言葉を待つ間すらも惜しいように、カルファ

―ズが瞳を鋭くする。

「奴らの向かう先は王都ではない。海の巫女のいる　ネイア聖殿だ！　我々は王都へ立ち寄ってから、急いで後を追う。姫君救出には、それ相応の人員が必要だからな」

予想外の出発に驚きながらも、急いで支度をするルストとセイシエルに、カルファーズは笑う。

「言つただろう、王都には知り合いがいると　奴らの思い通りにはさせん。このミデイス王国第一王子付き私兵隊長カルファーズの目をごまかせるとは思ふなよ、ビバスの赤い双子め！」

大きな声で言つてのけ、扉を開け、甲板へ飛び出したカルファーズを追つて、ルストとセイシエルも駆け出した。

彼らの追跡は、更に続く　。

## 89・情報（後書き）

ついに明らかになるうとしている空誘拐の謎。

海の巫女とは、そして赤い双子と呼ばれる二人の本当の正体とは何なのか。

引き続きご愛読ください！

## 90・信頼（前書き）

お待たせいたしました。

いよいよテローローザの森へたどり着こうとしているエシユタンドー  
行の話から今回は始まります。

馬上での時もどれほど過ぎたか、どこまでも続く街道をひたすら走り続けていた一行は、見えてきた小川の流れに手綱を引いた。

各自水筒に水を補給し、汚れた顔や手足を洗う。

兵たちのしばしの休息も兼ねて小川のほとりに簡易の天幕を張り、腰を下ろしたエシユタンドのもとへ、イラルがやってきた。

「どうだい、体の具合は。少しはよくなったかい？」

小川の水で髪まで濡らしてきたらしいイラルが、明るい声で訊ねる。

相変わらず全く悪意のなさそうな顔つき　それでいて、何を考えているのかわからない飄々とした笑顔を見上げて、エシユタンドも微笑んだ。

「ああ、もう平気だ。正直疲れはあるが、それは兵の皆も同じだろう。イラル、君のほうは大丈夫か？」

吹いてきた風は涼しく、濡れた髪で冷えたのか、イラルがくしゃみをした。その威勢のいくしゃみに、今度はエシユタンドが本物の笑顔を浮かべた時、イラルは鼻をこすりながら言った。

「ちよつとミデイスにいる間に体が鈍つちまつたかな、クルスじゃ今頃もつと寒くなってるはずだが。こんなんじゃ帰ったら風邪引いちまうな。もつと鍛えなおさねえと」

冗談めかして膝を曲げ伸ばしするイラルに、エシユタンドは軽く笑い声を上げる。しかし藍色の瞳はすぐに鋭い色を取り戻し、イラルを見つめた。

「クルス王国、特別山岳部隊　だと言ったな。具体的には、一体どんな部隊なんだ？」

突然のまっすぐな問いかけに、イラルも眉を上げ、口元を引き締める。

「おっと、いきなり本題か。まあいいや、答えるのは当然の義務だ

な。特別山岳部隊　だなんてご大層な名前がついてるから一体どんなことしてんのかと思うだろうけど、実際なんてことはねえ。ただの国境警備隊の一部さ」

「一部というと　？」

肩をすくめ、答えたイラルにエシユタンドが問いかける。持っていた布で頭を拭いたイラルは、平坦な口調で続けた。

「言葉のままさ。国境警備隊ってのは、あんたも察しがつくだろうが、王宮直属の部隊だ。大半は王都から派遣　もしくは地方警備隊から選抜された奴らが任務にあたって。だが俺たち特別山岳部隊は、その中に所属はしても、王宮とは関わりのない部隊なんだ。

つまりは、俺のように王都に置いとくわけにはいかねえようなはみ出しもんの集まりってわけさ。国境警備だけじゃなく、街中での暴動の鎮圧、山での遭難者の救出、なんてのにまで借り出される。要するにいいのいい何でも屋だと思ってもらえばいいかな。さつきも言ったとおり、今はミデイスとの国境沿いの調査　まあ、ほとんど遊び程度の観察をやってたらあんたらに出くわしたって次第だな」

「王子、と　殿下のことはせめて、そう呼んでいただきたいのですが、イラル殿」

あくまでも軽く、笑いながら話すイラルとエシユタンドの間に割って入ったのはクガルだった。香草茶らしい湯気の立ち上るコップを、エシユタンドとイラルに差し出して、栗色の鋭い瞳をイラルに向けている。その硬い口調と顔つきに気づいたのか、イラルはあわてたように頭を掻いた。

「いやあ、悪い悪い。ついついただの連れと話してるような気になつてさ。どうも丁寧な言葉遣いってのは苦手だ」

「ここがミデイスの王宮ならば、あなたの態度は王族侮辱の罪に問われてもおかしくはないですよ」

控えめな話し方で、それでも結構な釘の刺し方をするクガルを瞳で制して、エシユタンドは香草茶を口にする。ゆっくりと味わうように喉を潤わせ手から、エシユタンドはイラルを見た。

「さつき方々に散ってる仲間がいるようなことを言っていたが、それは君と同じ特別山岳部隊に所属している隊員だということか？」

藍色の瞳に見つめられ、イラルは軽く口笛を吹く。

「やっぱよく聞いてるもんだな。そうさ、俺たちの隊は、そもそも団体行動つてのが苦手だね。大抵特別な任務がない時は、皆好き勝手なことをやってる。まあもともと期待もされてない部隊だ。王宮からもお咎めはないし、気楽なもんさ」

「そうか……魔との戦闘にも慣れてるふうだったが、力を持ってからは長いのかい？」

「そうだなあ。物心ついた時にはもう持ってたからな」

「なるほど。じゃあ力については私より先輩だというわけか。頼りにさせてもらおう」

冗談めかして答えたエシユタンドに、イラルも笑う。

一瞬黙り込んだ二人を、肌寒い風が撫でていく。側に控えるクガルの物言いたげな視線を感じつつも、エシユタンドはどこまでを訊ねるべきか思案していたのだ。先ほどのイラルの話ぶりから、いくつか引つかかっている疑問。それはそのまま訊ねるにはためらうような内容で、いくら王子といえども気軽に立ち入っていいような問題ではないからだった。

エシユタンドの迷いに気づいているのかいないのか、イラルは明るい表情を崩さぬまま立ち上がり、まだ続く街道の先を眺めている。「聞かなくていいのかい？」

静かに振り向いた緑の瞳には、ふざけた色はもうなかった。

「俺が本当は何者で、あんたらになぜ同行しようとするのか。それが知りたいんじゃないのか。聞くなら今だろう」

「イラル殿　！」

ついに堪えきれぬように言葉を発しかけたクガルの腕を引き、エシユタンドは首を振った。

「いいんだ、クガル。このまま話をさせてくれ」

真剣な藍色にじっと見つめられ、クガルは唇を噛んで下がった。

主を思うあまりの行動なのはよくわかっている。

だからこそエシユタンドはクガルを側に置いたまま、話を続けたのだ。

「君の態度はあきらかに不遜で、ぞんざい極まりないと言えるだろうな。我々の命の恩人でなければ、とつくにクルスに送り返しているところだ。だがそうしないのは、テーローザへの旅に君の協力が不可欠だから　というだけではない」

途中まで眉を寄せて聞き入っていたイラルの顔が、最後の一言で驚いたように表情を変えた。

いたずらっぽい笑みを浮かべたエシユタンドは、同じように街道の先に目をやった。

「お互い腹に何かあるのは承知の上だ。それが吉と出るか、凶と出るかは正直わからない。だが、私は君の言葉に嘘はないと感じた

だから、同行を許可したんだ」

「あんた……おっと、王子。そんなに馬鹿正直でいいのかい？　もしかしたら俺が裏切るようなことがあるかもしれないのに？」

あっけにとられたような顔でそう聞いたイラルは、クガルの厳しい表情にあわてたように曖昧な笑みを浮かべる。

二人の様子を笑いながら見ていたエシユタンドは、どこかすつきりした気分で肩をすくめてみせた。

「その時は　そうだな、クルスとの戦争でも始めてみるか」

「おいおい、物騒なこと言わねえでくれよ。まいったな、あんたにやかなわねえぜ」

声を上げて笑いあうイラルとエシユタンドに、クガルは少し唾然とした表情をしている。

遠くで休憩をとる兵たちも何事かと見つめている。

再び静かになった小川のほとりで、エシユタンドは決意したように視線を上げた。

「弟が　捕らわれているんだ」

「殿下　！」



突然口にしたエシユタンドを、クガルが咄嗟に引き止める。イラルでさえも驚いたように振り返った。

しかし深い感情を湛えた藍色の瞳に、クガルはそれ以上何も言えなくなつたように黙つた。

「君も見たかもしれないが、人語を操る魔のモノたちが出沒していてね。そいつらに怪我を負わされ、さらわれた。一刻も早く救いたい。だから……」

言いかけたエシユタンドのそばへ歩み寄り、イラルは大きく頷く。「わかつた。あんたの信頼には必ず応える。男と男の約束つてやつだ。一緒に 魔の奴らをぶつつぶしてやるうぜ」

大地の色をした短い髪を風に揺らして、肩を叩くイラルに、エシユタンドも微笑んだ。

「ああ そうだな」

承知したと目線を交わした後、イラルと別れたエシユタンドが天幕へと戻る。

すぐに付いてきたクガルが、小川のほとりで他の隊員たちと談笑するイラルを見ながら囁いた。

「本当によろしいのですか、末の殿下のことまでお話になって、頭に巻いた包帯がまだ痛々しいものの、体はほぼ回復したようで、クガルは鋭い瞳と同じくらい、警戒を崩さぬ体勢で言った。

「……そうだな、よくはないかもしれん。しかしこれから実際にテローザへ向かえばすぐにわかる事実だ。知つておいてもらわねば、協力も望めんだろう」

「それは確かにそうでございますが……」  
眉を寄せたクガルの肩にねぎらうように手を置くと、エシユタンドは微笑を浮かべる。

「お前の懸念はわかつている。本来ならば同行させるべきではないこともな。だが今はどんな力でも欲しい。エカルドを無事な姿で取り戻す。それが我々の最重要課題だ。そのためならば、多少の危険は覚悟の上。わかってくれるだろう、クガル。それに……時間が

ないんだ」

「殿下」

最後は呟くように言って、膝の上に両手を組んだエシユタンドのはりつめた顔に気づいたのか、クガルはただ静かに言葉を止めた。そつと天幕を出て行く彼の気遣いに感謝しながら、エシユタンドは瞳を伏せ、首につけたチョーカーを握り締める。

「ソラ……」

誰もいない天幕に、静かにこぼれた彼の呟き。

けれど想緑珠には何の変化も見えない。

今やるべきことは痛いほどわかっている。

弟の安否も心配で仕方がない。それに、魔のモノだけではない、国を侵食している問題。

全てはわかっているはずなのに、こうして息をついた瞬間に頭に浮かぶのは、ただ一人の少女のことだ。

自分を追ってやってくるはずの、愛しい少女。

再会を願う心の一方で、もう一人の自分が『来るな』と叫んでいる。

危険な目にあわせたくない。

誰よりも大切に、気が狂いそうなほどに会いたくてたまらなくて、心は両極端に裂かれていく。

だから、早く　そう願うのだ。

早く弟を救い出し、彼女がやってくる前に魔との決着を付けたいと。

何もかもが終わった後なら、何も心配せずに彼女を抱きしめることができるから。

こんなことを考えてしまう自分は、兄としても、王子としても失格なのかもしれない。

けれどこの想いはもはや誰にも止められないのだ。

自分にさえも。

焦がれるばかりの自分の心を必死で抑えつけながら、エシユタン

ドは両手を握り締めていた。

待っていてくれ、ソラ。

複雑な想いで揺れる藍色の瞳は、愛する少女の無事だけを祈る。

皮肉な運命に引き裂かれているとは知らぬままに、エシユタンドは出発を申し渡すべく立ち上がるのだった。

\*

ミデイス王国、王宮　今は不在の第三王子の宮に、エマナはい  
た。

第三王子エシユタンドの婚約者である空に仕える侍女である彼女も、現在当の姫君までもいないとなっては、ただ留守を預かるだけというどうにも落ち着かない職務に、ため息をつく日々が続いていた。

もちろん侍女の仕事は数限りなく、忙しさではいつもとそう変わらない。

だが、いくら衣装を用意しても、部屋の掃除をしても、笑顔を見せてくれる姫君がいないことがこんなにも張り合いのないことだとは思わなかったのだ。

「こんな風に誰もいらっしやらないお部屋を掃除することなんて、以前はよくあったことなのに……」

どうしてこんなに悲しく感じるのかしら、と彼女は一人ごちる。

そう、姫君がやってくる前は殿下付きであったのだから、殿下がご不在な時なんて何度もあったのだから。

あの時と同じだと思えばいいのだ。

身の入らない自分に湯を入れるように箒を持ち直す。

けれどいくらも持たずに、またため息がこぼれ出た。

同じ、なんて無理。だって、もう姫君がいらっしやるのが当たり前の日々になっていたのだから。

亜麻色のまとめた髪にそっと手をやり、エマナは窓際に歩み寄った。

「ご無事でいらっしやるかしら」

思い浮かぶのは明るい姫君の笑顔。第三殿下の静かな表情。

そして、あの方の穏やかな栗色の瞳。

さすがに敬愛する方々と、想い人までもがいないとなつては、エマナに元気を出せと言っほうが無理なのだった。

せめてお心だけでも側に、と精一杯無事を願って刺繍をしたお守りを、あの方は持つていてくださるのだろうか。

道中、大変なことが起こつてはいないだろうか。

お怪我など、されていないだろうか。

姫君は、殿下方は。

心配なことが山積みで、いてもたつてもいられない。

そんな気持ちをごまかすように、仕事に打ち込むエマナに気遣つてか、侍女仲間ですらも何も話題には出さないようにしてくれていた。

けれど王宮にいれば、自然と情報が伝わってくる。細かい状況まではわからないけれど、やはり皆も無事を祈る心は同じなのだ。

先日は殿下からの伝令で、援軍を要請なされたとか……知らせが届いてすぐ、国王陛下が先の倍の数の兵を送られたと聞いた。

そんなに待ち受ける魔は恐ろしいものなのだろうか。

どうか、皆様がご無事でいらっしやいますように。

どうか、末の殿下も共に戻つてこられますように。

いつの間にか両手を組んで祈っていたエマナは、ふと窓の外を横切ったものに目を止めた。

「あら？」

真下に見えるのは芝生と低木。

綺麗に刈り込まれた緑の葉にまぎれて、きらりと銀色の何かが動いたように見えたのだ。

カーテンの脇からそっと身を乗り出すと、確かにそこに、誰かが座り込んでいる。いや、隠れているようにも見える。

「……何かしら」

不思議に思つて覗き込んだエマナは、銀色に光るものがよく目にしていた武装であることに気づいた。

そう、あれはクガル様と同じ、私兵隊の。そこまで考えた時、ひっそりと茂みの影から確かに人が立ち上がるのが見えた。

銀色の肩当てや胸当てのついた武装、いまや確実にそれが王宮の私兵隊のものであることがわかる。

がっしりとした体格、そしてその腕には金のラインが入っている。

「あれは ベニ工隊長？」

短く刈り上げたこげ茶色の髪と、見覚えのある顔。

ああ、そうだ。あれは末の殿下付き私兵隊の隊長 ベニ工様。

一体どうなされたのだろう、そう思った次の瞬間、ベニ工は人目を気にするように木陰に姿を消したのだった。

ベニ工様も末の殿下救出のために旅立たれたはず。

それなのになぜお一人で王宮へ戻られたのだろう。

しかも隠れるようにされて、第三殿下の宮の前に？

疑問に思いながらも、きつと何か事情があるのだろうとエマナは首を傾げただけで、すぐに掃除を再開した。

箒で床を掃いた後は、しっかりと雑巾で水拭きをする。窓枠を拭きながら、ふと目についたのは天井から下がっている飾り紐。

横にかかっているタペストリーが少しずれているような気がしたのだ。

本当にわずかではあるが、微妙にゆがんでいたタペストリーを直す、エマナは首を傾げる。

「おかしいわね……昨日掃除に来た時は、ずれていなかったと思うけど」

その後に入った他の侍女が触ってしまったのだろうか　お衣装の手入れに確か、数回出入りはしていたようだったけれど。

「誰かわからないけど、むやみにお部屋の物に触れてはいけないと注意しておかなければ」

自分で頷きながら呟いて、ふうと一息つく。

この後は大広間とお庭の掃除、それが終わればやっと昼食だ。そして午後には来るべき雪の季節に備えて、王子たちの防寒着の用意も待っている。

まだまだ仕事はたっぷりあるのだ。

「さあ、仕事仕事！」

きつちりと編みこんだ亜麻色の髪をもう一度撫で付けながら、エマナは忙しそうに小走りで駆けていった。

少し換気のために開けておいた窓から肌寒い風が吹き込んで、タペストリーが揺れている。

誰もいない部屋は、ただひっそりと主人の帰りを待ちわびるのかのごとく、静まり返っているのだった。

## 90・信頼（後書き）

ついにエカルド救出に向けて最後の休息をとるエシユタンド一行。まだ謎の多いイラルと手を組み、出発するエシユタンドだったが、彼の心に宿るのは愛しい少女の面影だった。

そしてその頃王宮でエマナが目にしたのはなんと死んだと思われていたベニエだった。ずれたタペストリーの意味は、そして彼の目的は？

というところで次話へと続きます。

次回はいよいよテローローザの森へ到着！ 魔との決戦が始まります。どうぞお楽しみに！

## 91・テローザ（前書き）

大変ご無沙汰しております。

長らく更新なしですみませんでした！

今まで書きためていたので、連続四話投稿します。



## 91・テローザ

テローザの森　鬱蒼とした木々が立ち並び、視界すら危うい未踏の地が臨める丘に、エシユタンド率いる私兵隊は立っていた。

先ほど出発してからまた数刻が過ぎ、兵も馬も疲労が色濃い。日暮れを前にして、通常の道程ならばまず休息をとってから戦闘に備えるところだが、その時間すら惜しむほど事態は緊迫していることは、誰が口にせずともわかっていた。

「さて、どうする　エシユタンド王子。このまま休息をとるか、それとも」

言いかけたイラルを見て、エシユタンドは当然だとばかりに微笑んだ。鮮やかな藍色の瞳が不敵に光る。

「無論、早速搜索を開始する。だがあくまでも森の周囲からだ。日が落ちれば、森へ入るわけにはいかんからな」

エシユタンドの言葉を受けて、クガルが隊員たちに号令をかける。「では殿下はこちらでしばしご休息をお取りください。搜索は我々が……」

振り向いてそう言ったクガルに、エシユタンドは首を振った。

「いや、私も行こう。イラル、共に来てくれるか」

「ああ、もちろん!」

頼もしい返事に頷き、エシユタンドは馬の腹を蹴る。

指示がなくとも隊の皆を引き連れて左へ回ったクガルを横目で見ながら、エシユタンドはイラルを先導して、森の右側へ走り始めた。既にあたりは薄暗く、日の光が届きにくくなっている。

その上、夕暮れまでもうすぐだという悪条件。

それでもついにたどり着いたテローザの森　ここにエカルドが捕らわれているのだと思うと、心の底から改めて怒りが湧き上がる。

感情的になりそうな気持ちを静めるように数回ゆっくりと呼吸を

すると、すぐ側にそびえる高い木々を見上げた。

今まで通ってきた荒廃の目立つ森とは違い、緑の葉が茂り、一見普通の森にさえ見える。

しかし先ほど丘から見下ろした時には感じなかった奇妙な感覚強いて言うなら悪寒とでも呼ぶべき何か　　が背中から全身へと伝わるような気がした。

「何か感じるか、イラル」

振り返って訊ねると、イラルも顔をしかめてあたりを見回していた。

「やっぱりあんたもか。俺もさつきから体中に寒気が走るような、変な感じがしてる。森のどの辺りからかまでは特定できないが……」  
「そうだな、森が広すぎて難しい。でもここが魔の巣窟だというのは間違っていないようだ」

まだ何も現れてはいないというのに、感じるのは何十、いや、下手をすれば何百という魔の気配。

多くは小物のようだが、決してそれだけではないというのが本能的にわかる。

まるで何かが舌なめずりしながら待ち受けているかのようなそんな恐ろしい感覚。

バサバサ、という大きな鳥の羽音に弾かれたように空を見上げる二人。

しかし飛び立ったのは、普通のフクロウのようだった。

魔とはいえ、化け鳥たちも夜目が利かないということなのか湧き上がった疑問を口に出そうか、エシユランドが一瞬考えたその時だった。

「おい、王子。あれを見る」

そう言ったイラルの視線の先には、森に少し入ったところにぽっかりと口を広げた小さな洞窟があった。

木々の葉が入り口をもほとんど隠し、かろうじて人が入れるほど

の空間だけが姿を見せている。

「もしも誰かを隠すとしたら 薄暗く、人気のない場所を選ぶ。そうだよな？」

彼の示すその穴は、いかにも光の届かなさそうに深く、一見しただけでも怪しかった。

あんなところにエカルドが捕らわれているとは考えたくもないが……。

「確かに、搜索してみる価値はありそうだ」

呼吸を整え、イラルと目を合わせたエシュタンドは馬を下りた。

「待て、俺が先に行こう」

そばの木に自分の馬もくくりつけたイラルが追いついてくる。

松明になりそうな木を拾い、慣れた仕草で火をつけるイラルをエシュタンドは呼び止めた。

「いや、いきなり進入するのはまずい。これを使おう 魔が好まない香木だそうだ。この煙を嫌がって、外に出てくるらしい」

クガルから渡されていた香木を洞窟の入り口に置き、火をつける。パチパチと燃え上がり、辺りに独特の匂いが広がっていく。

しかししばらく待っても洞窟からは何も出てくる気配すらなかった。

「何もいねえのかな……でもなーんか嫌な感じがするんだよなあ」

魔の存在は感じないものの、エシュタンドもイラルと同じく、洞窟の中に何か待ち受けているような奇妙な予感にとらわれていた。

「よし、俺が偵察してくる。あんたはここで待っていてくれ」

「しかし」

追おうとしたエシュタンドに、イラルが片手を振って笑った。

「あんたは風を、俺は大地を操るんだ。どっちが洞窟向きか考えてみな？」

言って、的を突かれたエシュタンドが黙ったのを見届け、イラルがあくまでも気楽な調子で洞窟に足を踏み入れていく。

彼の背中が完全に暗闇に紛れて見えなくなっても、何も変化は起

きない。

何もいなかったのだろうか、とエシユタンドが安心しかけたその時だった。

「うわあああつ」

突然の叫び声に、エシユタンドは弾かれたように洞窟へ入った。岩の壁に手をつきながら進み、松明の光を声のする方向に向けようとした途端、バサバサと何かの羽音に巻かれ、動けなくなる。

キイキイと鳴き声がさかんに彼を攻撃し、エシユタンドは思わず松明を取り落とした。

「コウモリ　！？」

洞窟の天井や壁にびっちりとはりついた、何百ともわからぬコウモリの群れ。それが一斉に侵入者に向けて攻撃をしかけるかのごとく飛び回っていたのだ。

力を使う隙もないほどにあちこちから飛んでくるコウモリたちに、さすがのイラルも腕を振り回し、声を上げている。

かろうじて薄く届いてきた風を利用し、ようやくエシユタンドは結界のように自分たちを覆う風の膜を作った。コウモリたちは目に見えぬ壁に弾かれ、逃げ惑うようにあちこちへ飛んだ。

「た、助かったぜ。ああ、びっくりした」

「魔ではないようだが、それにしてもすごい数だな」

松明を拾い上げ、まだ周囲を飛び回るコウモリを照らす。それと同時に外からは狭そうに見えたこの洞窟が、意外と広い空間であることにエシユタンドは目を見張っていた。

白水晶の滝があった洞窟とは異なり、水音一つしない、乾燥した空虚な洞窟。

ただ岩がむき出しになった壁を見渡し、エシユタンドは眉を寄せた。

「こんなところにいるのか？ エカルド……！」

意識を集中し、気配を探ってみるが、コウモリたちの羽音に邪魔

され、何も感じることもすらできない。

なんとか風でコウモリを寄せ付けぬようにしながら、二人で少しずつ洞窟を探る。

あまり奥深くまでは松明の光も届かず、空気も淀んで風を使い続けるのにも限界があった。

「どんどん狭くなつてくな。もう進むのは無理じゃねえか？」

腕で口を覆いながら、イラルが問いかけてくる。奥へ進むに連れてこもるような異臭がするのだ。

コウモリたちの糞らしき匂いに、エシユタンドも咳き込みながら頷いた。

「いくら魔とはいえ、ここに隠れるのは厳しいだろうな。外へ出るか」

そう呟いた瞬間、足元の岩がごろりと動いて、エシユタンドは体を勢を崩しかけて両手をつく。その瞬間、思わぬところに口を開けた縦穴があることに気づいたのだ。

「イラル、ここを見てくれ」

背後に進んできていたイラルを呼び、松明をかざして覗き込む。

ひゆう、と冷たい風が少し流れ込んで火が揺らぐのを見て、二人は顔を見合わせた。

「おい、下に空洞がある！ 結構広そうだぜ」

ぎりぎりまで体を伸ばして覗きこんだイラルが確信に満ちた声を上げた。

「待て、イラル！ 慎重に」

止めようとするエシユタンドに大丈夫だと手を振り、イラルは縦穴に入り込み、両手を離れた。

「来てみる、王子。こっちのほう广阔で快適、コウモリもいねえぞ」

下から響いてくるイラルの言葉に、エシユタンドも縦穴からゆっくりと下に着地する。

うるさいほどに羽ばたいていたコウモリたちは一羽もおらず、中

にはただしいんとした空洞が広がっていた。

異臭も届かず、静かなばかりの岩肌が続いていて、どこからか微かな風と光も差し込んできているのが感じられる。

「なんだ、これは……」

光に照らされ、足元にちかちかと何か赤いものが見えた。しゃがみこむと、岩の間にところどころ鮮やかな色をしたものがあるのわかる。

「赤　？」

まるで血のような鈍い赤。

指先ほどの大きさをした赤い石が、点々と姿を見せているのだ。

エシュタンドがそっと触れるのを見て、イラルも何事かとしゃがみこみ、石をじっと見下ろした。

「見たことのねえ石だな。結構価値のあるもんだったりして」「冗談めかして笑いながら、イラルも赤い石に触れ、手に取るようにする。

しかし石は岩肌に固定されたかのようにびくとも動かなかった。

二人が視線を合わせた、その時だった。

「　それに触れたな」

乾いた笑いと共に、冷たい声がそう言った。

「……ケイマ！」

いつの間に姿を現したのか、空洞の光の先に、金髪をかきあげたケイマが立っていたのだ。わずかな風に、彼のマントが浮き上がる。同時に立ち上がるようにしたイラルとエシュタンドは、突然苦しげな声を上げ、倒れこんだ。

「あつ、足が動かねえ……どうということだこの野郎！」

顔をゆがめて、イラルが叫ぶ。

指先が、足の裏が　体の端から中心まで何かに突き刺されるような傷みが襲う。

呻き声をあげぬよう唇を引き結び、エシュタンドはケイマを睨み

つけた。

「お前がやっているのか　何をした、ケイマ！」  
いまや体中が痛むのを抑えながら、エシユタンドが強い声を放った。

けれどケイマは無表情のまま、冷たく二人を見下ろしている。

その視線の先をたどって、エシユタンドはぎり、と唇を噛んだ。

「この石か……？」

呟いたエシユタンドの声に被せるように、イラルが怒鳴る。

「一体何の石だ、お前、王子の弟をどこへやった！　くそ、人間のくせに魔に肩入れしやがって、この裏切り者が！」

身をよじり、吐き捨てるように言ったイラルの言葉に、それまで氷のように硬い色をしていたケイマの瞳が動いた。

「裏切り者だと……？　ふざけるな！　自分たちの富と欲だけに執着し、国が滅びようと、人が死に絶えようと興味もないような屑どもなど、さつさと消えてしまえばいいんだ！」

以前聞いた時よりも更に強い、搾り出すようなケイマの叫び  
純真な少年のものだった瞳は、既に人が変わったように暗い影に満ちていた。

「ケイマ　」

呼ぼうとしたエシユタンドの声を掻き消すように、ケイマが足元に広がる岩石の一つを拾い上げ、思い切り地面に叩きつける。

「魔ですら、自分の子は見捨てない……人間のほうが、よっぽど腐ってるんだ！」

割れた岩石を蹴散らして、憎しみのままに叫んだケイマに、イラルも驚いたように言葉を失っていた。

しかし次の瞬間、表情を変えたイラルが、不自然な動きで体を起こした。

「な、なんだ？」

震えだす自らの手を、もう片方の手で止めようとするイラル。

あせる彼の瞳が、エシユタンドに向けられる。そして同じ変化に

目を見開いていたエシュタンドは、震える手を握り締めた。

何かがおかしい。まるで自分の意思に反して、体の奥深くから何かが湧き上がってくるかのような……。

そうだ、これは覚えのある感覚。

気づいた瞬間、エシュタンドは息を吸い込み、自分の体を制御しようとして抱え込む。

しかし暴れだしたものは、抑制を押しつけて外へと飛び出していく。

ビュウ、と荒れ狂う一陣の風が吹き抜けた。

自然のものではない、あきらかな風の暴走。

変異を感じたイラルが、まさか、という瞳でエシュタンドを見上げる。

「だめだ、避けてくれ、イラル　！」

自らの命を聞かぬ風が勝手に集まり、空洞の中を暴れまわる。エシュタンドの金の髪は揺れ、マントははためき、風は蠢く。

止めようと握り締めるエシュタンドの拳からも逃れて、風はどんどん勢いを増していき、ついにその切っ先をイラルへと向けていく。

「王子、やめる……！」

緑の瞳が驚愕に見開かれる。

四方八方から吹き付け、その体を切り裂こうとする風に、イラルは両腕を広げた。

浮き上がるのは割れた岩石のかけら、そして散らばる石の一粒一粒まで。

ついにぶつかりあったのは、強さを増した風と、大地を司る力だった。

力と力の衝突に、空洞が唸るような音を上げる。

弾けた岩が砕け、まるで命を持ったかのように主を守り、敵に向かう。放たれた大地の力が、今度はエシュタンドの顔も、腕も切り裂いていく。

藍色と緑の瞳が向き合い、信じられぬように互いを見つめる。



ついに、二人の意思に反したままの戦いが始まったのだ。

「魔の力には魔の力……人間には人間。仲間同士が牙をむき、傷つけあい、そして憎しみあう。これほど面白い見世物はないだろう？ 存分に楽しませてもらうんじゃないか、なあ、ケイマ？」

翼をたたみ、どこからかそっと降り立ったのは紺の毛並みを持つ少年。

その手に握られた赤い石の塊に目をやって、ケイマも微笑む。

「ああ、まだまだお楽しみは始まったばかりだからな、ムルグ」

魔の少年に語りかけ、嬉しそうに腕組みをするケイマ。

既にその瞳にサーダルの長だった頃の面影はなく、ただどす黒い何かに支配されたかのように、不適な光りを放つばかり。

「全て、滅びてしまえ……」

戦う二人を一心に見つめ、呟くケイマの傍らで、ムルグは笑う。

空洞にこだましていく笑い声を喜ぶかのごとく、赤い石は怪しげにきらめくのだった。

## 91・テローザ（後書き）

始まりました。テローザの森編です。  
続きもすぐにお楽しみください。

日が暮れ行こうとしている。

フクロウが鳴き、森の木々が揺れている。ただそれだけのことなのに、ここ、テローザの森ではどこか恐ろしげに感じられた。

「隊長、馬ではここまでが限界です。どうされますか、徒歩で進まれますか？」

隊員の一人に訊ねられ、クガルは思案する。

確かにこれ以上先は木々の枝も突き出て、獣道をかき分けていくかのような状態だ。

馬を置いて先へ進むべきか、それとも一旦後退すべきなのか、その答えは周囲の暗闇を見れば一目瞭然だった。

「……仕方ない。一度先ほどの丘へ戻り、策を練ろう。じきに夜が来る。殿下方もお戻りになられるだろう」

あせりは禁物だと、隊を促し、馬の手綱を握る。クガルの判断に異議を唱える者はいるはずもなく、隊全員で丘へ向かった。

段々冷たくなる風にマントの襟を立て、クガルは厳しい瞳でそばに並んだ木々を見上げる。

どこまで行っても森が続くばかりで、辺りには誰かを隠せるような小屋も、洞窟なども何もなかった。

まさか、末の殿下が何も無い森の中に放り出されたまま、などということはないか……。

思考は嫌な可能性ばかりを連ね、クガルは背中に走った悪寒を振り払うように、馬を急がせた。

しかし、しばらく走ったところで、順調な馬の歩みは止まった。

いや、クガルが手綱を引いたのだ。

「隊長？」

訝しげな声が口々に彼を呼ぶが、その視線の先にあるものを皆見つけたのか、それぞれに顔を見合わせ始めた。

「こんなところに分かれ道など、なかったはずだが」  
クガルの呟きに、皆が同意を示す。

確かに森に沿った一本道を走ってきたはずだった。

それなのに今、目の前には枝分かれした細い道が見えているのだ。

「まさか、幻覚などということは……」

「いや、しかし皆に同じものが見えているんだぞ」

背後でざわめきだす隊員たちを制し、クガルが馬を下りる。

何か、得体の知れない感覚が全身を包んでいくのが彼にはわかってきた。

この先に、何かが待ち受けている……そんな気がする。

眉をしかめ、見つめるクガルの瞳に映るのは、森に沿った大きな道からひっそりと伸びている道。

まるで誰かに手招きでもされているかのように、嫌な予感が彼の背中を押す。

いつしか辺りには奇妙な霧が立ちこめ、暗くなり始めた森は一層不気味に見えた。

「おい、ピア！ 待て！」

ふらり、とその道のほうへ足を踏み出す兵の名を仲間が呼ぶ。

しかしすぐその後には彼もまた、どこか頼りない足つきで後に続き始めるではないか。

「ピア、アシエリ！ 待つんだ！ 一旦丘へ戻るんだ！ これは何かの」

攻撃術に長けた二人の兵を呼び止める。

振り向きもせずにはふらふらと歩き出す兵たちにあせるクガルの脇から、また他の兵がそちらへ向かう。

「待て、待つんだ、全員 止まらないか！」

いつしか隊の皆が列をなし、霧の中に伸びる細い道へと進んでいった。

呼び止めるクガルの声など聞こえぬように、彼らの表情は一樣に静かで、夢の中にいるかのようにぼんやりとした目をしている。

「待てと、言っているんだ……！」

必死で全員を包むように、結界を広げる。

しかし何かに阻まれたかのように、クガルの結界は崩れ、兵たちはすり抜けるように奥へ進んだ。

「いけない」

どんどん深くなる霧と闇の中、クガルは一瞬立ち尽くす。

迷うように丘のほうを見上げるも、離れていく隊員たちに視線を戻す。

ぎり、と唇を噛み、クガルは怪しく待ち受ける道の奥へと足を踏み入れた。

「殿下、どうかご無事で……すぐに全員を連れて、戻ります！」

決意は誰の耳にも止まることなく、霧に巻かれていく。

隊長としての役目が、クガルを危険へと誘う<sup>いざな</sup>。

主と時を同じくして、ぽっかりと口を開けたテローザの罠に捕らわれはじめていることは、まだ彼の知る由もないことだった。

\*

既にどちらの力がどちらを攻撃しているのかすらも、エシユタンドにはわからなかった。

風はとどまることなく吹き荒れ、いまや空洞全体が悲鳴をあげて

いるようだった。

唸り、舞う風に浮き上がるのは粉碎した無数の岩、小石、砂の吹雪。

大地の怒りを示すかのごとく、風に乗って、それらがエシユタンに襲い掛かってくるのだ。

なぜ、止められないんだ。

先ほどから何度も繰り返した問いが頭の中を回っている。

対峙しているイラルですら同じことを考えているのか、表情は苦しげだった。

「これで、楽しいのか…… ケイマ！」

自由にならない体に舌打ちしながら、なんとかもらした言葉。

風にかき消されそうなその声も、ケイマには聞こえたようだった。一際大きな岩の上に腰かけ、見物を決め込んだ彼の周囲にはなぜか二人の力は届かぬようで、髪にも衣装にも乱れはない。

平然とした笑顔で、彼は手を振った。

「ああ、とつても。さあ、もっともつと争うんだ。今まで仲間を名乗ってた奴に打ちのめされるほどの屈辱はないだろう？ 風と大地と どっちが強いのか見せてもらいたいね」

暗くゆがんだケイマの表情を、エシユタンは声もなく見上げる。

なぜ、そんなにも憎しみに囚われているんだ。

答えのない問いばかりが渦巻き、焦燥感がエシユタンを苛んでいく。

力を振るいながらも、こんなにも辛く苦しいのは初めてだった。

弟をどこへやったのだと、目的は何なのだ、そう叫びたい心よりもまず、なぜ と目の前の少年に問いただしたい思いでいつばいだったのだ。

どれくらいの時が経ったのか、段々薄暗くなる洞窟の中に、不思議なことに完全な闇が訪れることはなかった。

岩肌に顔を覗かせる赤い石の光なのか、ぼんやりと薄明るい中で、奇妙な戦いは続いた。

互いの体に傷は増え、血が流れる。しかし皮肉なことに放った力同士がぶつかり合う形となり、致命傷はどちらにもない。

それが余計に争いを長引かせているのだった。

「いいかげん飽きてきたな。そろそろとどめ、さしちやえばいいのに」

洞窟の天井付近を飛んでいたムルグが、面倒くさそうにそう呟く。彼の周囲にもなぜか力は及ばず、傷一つついていない顔をぼりぼりと搔いていた。

「だめだよ。そんなすぐに殺すなってご命令だ」

その返答に不服そうな顔をしたムルグは、手に持っていた赤い石の塊をケイマに放り投げる。

「こいつらばかり見ててもつまんないし、あっちの連中見てくる。あとは頼んだぜ」

言つて、緊張感のない伸びをしてみせた少年は、翼をはためかせて空洞の奥へと飛んでいく。

二人の会話と、ムルグの飛んだ先をかるうじて目にしたエシユタンドが、額に流れた血を拭い、拳を握り締めた。

このまま操られ、戦って倒れてたまるものか。

爪が食い込むほどに力をいれ、エシユタンドは必死で正気を保とうとする。

なんとか力を制御しようとして集中する、その瞬間。

『もつと、もつと争え』

声なき声が聞こえたような気がして、エシユタンドは周囲を見渡す。確かに三人以外には誰もいない。それなのに誰かの声が背後でそう言っているようだった。

空耳なのか、それとも……。

『憎しみ、殺しあえ、そして 全て滅びてしまえ』

ケイマの唇も動いていない。けれど確かに恐ろしいほど冷たい響きの声が、そう囁いてくるような気がするのだ。

声の主を探すべく、瞳を細めたエシユタンドは、ケイマが手にし

た赤い石の塊に目を止めた。  
まるで、自分たちの血でも吸ったかのように毒々しく光っている石、  
そして足元の同じ石も。

あれほど周囲の岩肌は破壊されているにも関わらず、赤い石には  
傷一つついていない。

それどころか、先ほどよりも鮮やかに輝きを増しているかのよう  
にすら見えた。

「イラル！」

制御の利かない力をなんとか指先に集中させ、エシユタンドは一  
気にイラルに向けて放った。

正確には、イラルの足元に光る赤い石めがけて。

風の刃が唸り、切りつけていく。

かろうじて避けてくれたイラルの代わりに、赤い石の覗いていた  
岩肌が崩れた。

それと同時に、イラルが瞳を見開き、エシユタンドを見上げた。  
表情に一瞬ひらめいたものを信じて、エシユタンドは更に強い風  
を願った。

「砕け散れ！」

叫びと共に放たれた風が、全ての岩肌をさらうように、吹き荒れ  
ていく。

念じ、祈った瞬間、なぜか首元が熱くなるような、温かい感覚に  
包まれる。

触れずともわかった。想緑珠が いや、心の奥に思い描いた面  
影が、力を与えてくれたような気がした。

瞬時に風と大地の力がぶつかり合い、これまでにないほどのきし  
みを上げた。

「何……っ!？」

異変に気づいたケイマが叫び、岩から咄嗟に飛び降りたのが見え  
た。

それと同時に、すさまじい爆風が巻き起こる。赤い石もろとも、



大半の岩を根こそぎ吹き飛ばすほどの　強い風が。  
ぐらぐらと揺れる地面に膝をつきながら、エシユタンドはイラルと顔を見合わせた。

その表情には今までとは打って変わって、生気が戻っている。自由の利がなかった体が、力が、急に収まっていくのがわかる。

驚愕に目を睨り、立ち尽くしていたケイマは、すぐさま赤い石の塊を握り締め、背を向けた。

「待て、この野郎　！」

追いかけてよとしたイラルの肩をエシユタンドが引く。

揺れる洞窟の天井からも、崩れた岩の屑が落ちてきていたのだ。

「崩れるぞ、早く　！」

風が流れる方向　ムルグとケイマの去った方角を目指し、走り出す。

ごろごろと転がる岩に足元を救われながらもなんとか出口を見つけ、狭い穴から二人が抜け出た、その瞬間。

洞窟は崩れ落ち、今まで口を開けていた穴は大きな岩でふさがっていった。

### 93・ムルゲ

地響きのような音がおさまっていく。

倒れていた体を動かすと、ぱらぱらと小石が足元に落ちていった。

「王子、無事か？」

イラルの声が、背後から届く。

振り向くと、なんとか危険を回避したらしいイラルが、同じように体を起こしたところだった。

「ああ、なんとか……お前は？」

「大丈夫だ。しかしあつちは全滅、といったところだな」

体中に被った砂埃を落としながら、立ち上がったイラルが前方を見上げる。

木々の間に散らばった岩の破片。崩れ落ちた洞窟の入り口は無数の岩で完全にふさがってしまっていたのだ。

「もう月があんなに　どれぐらいの時間、ここで戦わされていたんだ」

頭上に上った白い月をくもった顔で見つめ、エシユタンドが呟く。あちこち衣装は擦り切れ、体中に細かな傷が走っている。

ただどこにも深い傷はないのが救いと言えたが、既に体を動かすにも全身がひどく重く、疲れ果てているのがわかった。

「イラル……」

同じ状態であるはずの彼に、なんといいのかわからぬまま声をかける。

しかしイラルは顔だけは明るく笑って、エシユタンドに振り返った。

「おっと、お互い謝罪の言葉はなしにしようぜ。どちらも操られた結果だ。不可抗力つて奴さ。それよりも、あいつら　逃がしちまっただかな」

その言葉に思い起こすのは、洞窟が崩れる前に逃げ去った魔の少

年とケイマ。

そして、あの赤い石。

「あれは何だったんだろう……見たことのない石だった」

顎に手を当てて考え込むエシユタンドに、イラルも頷く。

「そうだな　どうもあいつら石を使って俺たちを操ってるみたいだった。人の心を操る石、なんてものがあるのか……聞いたことねえけど」

イラルの不思議そうな言葉に、無意識にエシユタンドは首もとの想緑珠に触れていた。

精霊の石が人を助けるなら……あるいは、逆に人を苦しめる石も存在するのかもしれない。

そんな考えと共に蘇るのは、先ほど洞窟で聞いた暗い声だった。

「さつき……変な声を聞かなかったか？」

ちようど思いついたように言ったイラルに、エシユタンドは思わず歩み寄った。

「お前も聞いたか、やはり」

全て滅びてしまえ　そう恨むように繰り返す、冷たい声を聞いたのは自分だけではなかったのだ。

「赤い石と無関係なようには思えないな。ひでえ目にあつたけど、一応の収穫はあつたつてわけだ。怪しげな石の存在と　王子の弟は、ここにはいねえつてことがな」

ふざけたように片目を閉じてみせるイラル　その明るさに救われながらも、エシユタンドは表情を固くしていた。

「ああ　しかし、一体ここはどこなんだろう。どうやら森の奥深くに入ってしまったようだな」

無我夢中で飛び出した出口は、先ほど入ってきた場所とは全く異なる場所のようだった。

辺りにはより一層高い木々がそびえ、月明かりがなければ互いの顔すら見えないほどの、鬱蒼とした森だった。

ついにテローザの森の掌中に捕らえられたような感覚に襲われ

ながらも、エシユタンドはイラルと共に周囲の探索を開始した。

どこかに森の出口はないか、休めるような場所はないか　しかし歩き出して半時も持たず、どちらからともなく歩みは止まる。

もう体は疲れきっていて、これ以上の行動は無駄に体力を奪うだけだとわかったのだった。

ついに高い木の幹にもたれるように座り込んだイラルの向かいに、エシユタンドも腰を下ろす。

自分たちにまず必要なのは、休息であることだけは確かだった。

「クガルたちは無事だろうか　魔の奴らに襲われていなければいいが」

「そうでないことを祈るがな……だが、さっきの魔が向かっている確立は高い。少し休んだら、なんとか策を練ってみようぜ。それまで、悪いな　俺は、一眠りさせてもらうぜ」

言った直後に崩れるように眠りに落ちるイラル。

平気な風を装っても、あの戦いの後では無理もないと、エシユタンドも自らの体を幹にもたせかけながら、ため息をついた。

瞳を閉じた途端、エシユタンドも眠りへの誘いには逆らえず、深い、深い闇の世界へ沈んでいく。

ホウ、と鳴いたフクロウが、眠り込む彼らの頭上を飛び去って行った。

自らの意思とは無関係に進んでいく兵たちを止めようと、追いかけてきたクガルは深まる霧に巻かれ、どうすることもできずに立ち尽くしていた。

「アシエリ、ピア　！　皆、どこだ！」

叫ぶ自分の声すら、くぐもって霧散していくような気がする。

立ち込める白い霧で、足元すら見えない。

段々と冷たい風が体温を奪い、いつしかクガルは震える体を必死に抱きしめていた。

「殿下　イラル殿！」

無駄だとわかつてはいても、叫ばずにはいられない。

奪われそうな意識をつなぎとめるために、クガルは腰の短刀を抜き、自分で自分の腕を切りつけていた。

「くっ……」

思わずもれるうめきをかみ殺し、クガルは前を見据える。

自分を包む白い霧。日が暮れているのか、月が昇っているのか、それすらもわからぬほど、自分たちを取り巻く、白い闇。

「こんな　こんなものに負けると思っっているのか！　低能な魔ども……そこにいるなら、さっさと姿を現すがいい！」

あきらかな挑発の言葉を放ちながら、クガルはなぜか確信していた。

そこに確かにいる、自分たちの行方を阻み、不思議な空間へ誘った者が待ち構えている、と。

「前言、撤回させてもらおうかな　」

突如、前方から響いた声に、クガルは弾かれたように顔を上げる。姿は見えずとも、聞き覚えのある声はくつくつと低く笑った。

「雑魚は面白くないって思ってたけどさ……ただおんなじ戦い繰り返すだけの奴らより、お前のほうがよっぽど遊び甲斐があるかもしれないってことに、今気づいたよ。あっちはケイマに任せたら

お前はここで遊んでごうぜ」

「ムルグ」

ふわり、と白い霧をまとって姿を現したのは、魔の少年だった。やわらかそうな紺色の翼を閉じ、同じ色の髪をぐしゃり、とかき乱しながら、楽しくてたまらないように歩み寄ってくる。その姿確かに何度も見たはずなのに、目の前にしてみると、なぜか今までよりも一層残酷な、魔の本質をあらわにしたような雰囲気クガルを黙らせていた。

「弱だけの奴が、あれこれ戯言を抜かすのは大嫌いだっただけど、さつきわかった。弱いからこそ暴れる。弱いからこそ逃げようとする。そうだろ？」

下手に強い奴は、面白くない。さあ、見せてくれよ。無様に逃げ惑う姿をさ」

そう笑うのと同時に、ムルグが口笛を吹く。背後に感じた気配に振り向くと、そこにいたのだ。少年と同じ色の毛並みをした、巨大な獣が。

「今は邪魔も入らない。さあ、やっちまえ。ムルグ。お前のおもちやだ」

自分と同じ名を呼んで、少年が飛びあがる。ばさり、と風を切る翼の音をひどく近くに感じながら、クガルは顔色を変えていた。

地を蹴り、突進してくる異常な大きさの獣。少年の言葉を確かに理解しているように、その琥珀色の瞳はクガルだけを真正面に捉えている。

咄嗟に両手を組み、結界を念じる。

しかしその呼び声に応える力は生まれず、獣はまっすぐに突進してくる。

「無駄だよ。お前ら程度の術なんて、ここじゃあ通じない。テークザの力に阻まれ、逆に俺たちの力になる」

楽しそうに言い放つ少年。ぐんぐんと速さを増し、駆けてくる獣。喰われる。本能的にすくむ体を叱咤して、クガルはすんでのところまで飛び退り、攻撃を避けた。

グワウ、と大きく吼えた獣は、すぐに体勢を立て直してまた向かってくる。

「術もないお前など、ただの獲物に過ぎないよ。さあ、どこまで逃げられるか見せてもらおうか」

「誰が 逃げるものか！」

叫び返すなり、背中の矢筒から矢をつがえ、獣めがけて放つ。

対魔の薬が塗られた特別な矢 果たして巨大な体にどれほどの効果があるかはわからなかったが、命中すれば少なくとも一瞬動きは止められる。

その間に距離を稼げれば、というクガルの計算は、皮肉にも瞬時にして外れた。

小岩ほどもある前足で矢を叩き落とし、獣が更に大きく咆哮したのだ。

「ほらほら、早く走らないと食われちまうぜ？ さっさと逃げなよ、隊長さん」

さもおかしそうに手を叩きながら、ムルグが頭上で笑った。

睨み付ける暇もなく、獣が走ってくる。

「くっ……！」

さすがに剣で戦うわけにはいかない相手に、仕方なくクガルは走り始める。

前も後ろもわからぬ白い霧の中を、とにかく獣から逃げ回るしかなかった。

「無様だねえ いい気味だ。さっきまでの威勢はどうしたのかなあ？」

大きく翼をはためかしながら、ますます嬉しそうに見下ろしてくる魔の少年 その声に舌打ちしながら、クガルは辺りを見回す。

何か……何か突破口はないのか。どこかにきつと、奴らの隙があるはず。

その隙をつき、反撃に出るしか方法はない。

けれど術も使えず、この霧の中では視界さえきかない。

一体どうすればいいのか、とクガルは唇を噛む。

迫り来る獣の攻撃を寸前でかわしながら、クガルはひたすらに走った。

息は乱れ、足はもつれる　どうやって巨大な獣と戦えばいいのか、と絶望的な感情すらわいてくる。

弱気になりかける自分を叱咤して、目線を上げたその瞬間。

一つの可能性が頭にひらめいた。

「どうした、逃げるのはやめたのかい？　じゃあ遠慮なく　ムルグ、もう遊びは終わりにしよう」

行け、というように片手を振った少年の合図で、獣がクガルめがけて飛び掛ろうとする。

それにも動じずに、立ちはだかったクガルは、背中の矢筒から新たな矢を取り、一氣に的にむかって放ったのだ。

呻き声は、上空から聞こえた。

予想外の攻撃を避けることすらできず、少年は左肩に矢を受け、苦しげに身をよじりながら、地面に落ちていく。

ほぼ同時に動きを止めた獣も、同じ箇所から血を流し、苦しみ始めるではないか。

「お、お前……っ！」

呻きながら、憎しみに燃えた瞳を向けるムルグに、クガルは肩で息をしながら、にやりと笑った。

「やはり　お前たちは双体そつたいか。昔、部族の長に聞いたことがある魔の中には、互いの力を増長しあうものがあると。一頭が傷を受ければ、もう一頭にも同じ傷ができる。つまりは力同様に、その体に宿る命すら共用しているということだ。二頭分の力を持つことによって強くもなるが、その一方で弱点も二倍になる。それを忘れていたようだな」

少年と獣、二体の魔が苦しむのと時を同じくして、辺りに立ち込めていた白い霧が晴れていく。

まるで幻であったかのように消えていく霧と反対に、姿を現し始



める森の風景。

そこは分かれ道でもなんでもなく、最初に通ったままの一本道だったのだ。

周囲にちらほらと兵たちが倒れているのが見えて、クガルは急いで彼らに駆け寄った。

「大丈夫か　！　しっかりしろ！」

肩をゆすると、意識を取り戻す兵たち　幸いにも、ただ眠っていただけのようだった。

「この機を逃すな　捕らえるんだ！」

まだぼんやりとしている兵たちを追いたて、クガルが命じる。

しかし振り向いた先でムルグは傷口を押さえ、顔をゆがめながらも飛び立とうとしていた。

「させるか　！」

叫び、両手を組んだクガルが、攻撃術を発しようとしたその時、起き上がった獣が兵に向かっていくのが見えた。

「だめだっ……！」

咄嗟に結界を張った瞬間を狙ったかのように、ムルグは上空に飛び退った。

「いい気になるなよ　お前らはもう、このテローザの森から逃れられない。ゆっくりアイラの敵をとってやるからな　！」

琥珀色の瞳を燃えたぎらせながら、少年は翼を動かし、森の木々よりも高く、姿を消していく。

結界に阻まれることはわかっていたのか、獣も寸前で引き返し、少年を追うかのように森の奥へ駆け出した。

後を追おうと、身を翻したクガルだったが、腕を押さえて膝をついてしまう。

先ほど自ら切りつけた腕の傷から、赤い鮮やかな血が幾筋も滴り落ちていたのだ。

「隊長　しっかりしてください！　隊長　！」

意識を取り戻した兵たちに囲まれ、クガルは呻く。

不気味なほど生暖かい風が木々を揺らし、森全体がざわめいてい  
るように聞こえた。

まるで、流れる血を誰かが喜んでいるかのように　。

遠い遠い道の先から、少女が駆けてくる。

黒髪を風になびかせ、足取りも軽く、自分を目指して駆けてくる。

その笑顔が愛しい少女のものであることに気づいて、エシユタンドは手を伸ばしていた。

「ソラ　　！」

叫び、受け止めるべく広げた両腕の中に、少女は飛び込んできた。「エシユタンド……！」

抱きついてきた空を腕におさめて、エシユタンドは更にきつく抱きしめる。

「無事だったんだな、ソラ……！」

やっと会えたのだと、再会の喜びを噛み締めながら囁くと、空も何度も頷く。

「会いたかった　　会いたかったよ、エシユタンド！」

胸に頬を寄せ、しがみついてくる空。

どれほどにこの声が聞きたかったか、どれほどにこの笑顔が見たかったか　　言葉にもできない気持ちがあふれる。

黒髪をなで、焦がれていた感触を味わうように抱擁するエシユタンドを見上げ、空が笑った。

「　　エシユタンド」

「……ん？」

優しく答えたエシユタンドに、空は小さく何事か呟いた。

聞き取れず耳を寄せたら、笑顔を消した空がもう一度口を開いた。

「ごめんね、エシユタンド。あたし　　自分の世界に帰るんだ」  
信じられぬ言葉に藍色の瞳が見開かれる。

「なん、だって　　？」

かすれた、自分のものとも思えぬような声が問い返した。

衝撃は空の笑顔で更に大きくなる。

何でもないことのように、空は笑って頷いたのだ。

「もう、飽きちゃった。異世界なんて疲れるだけだし……もともとこの世界のことなんて、どうでもいいんだもん」

「ソラ……？」

抱きしめていた自分の腕から離れて、空は無邪気な仕草で伸びをする。

「恋愛ごっこも十分楽しんだし、もう帰るね。家族や友達も寂しがつてる。あなたの勝手で、あたしをこの世界に縛り付けないでくれる？」

今まで見たことがない、空の冷たい表情。

吐き捨てるようにそう言っ、自分をまるで迷惑でしかない存在のように睨みつける、黒い瞳。

「嘘だ」

無意識に首を振り、呟く。

その声にさえ空は眉を寄せ、首につけていたチャーカーを外した。

「嘘じゃないわ。これも、もういらない。じゃあね、エシユタンド」

おそろいの石が光るチャーカーを投げ捨て、背を向ける空。

その背中はどうん遠くなり、消え行こうとしている。

「待て 待ってくれ、ソラ！ 行くな 行かないでくれ！」

去っていく背を追い、手を伸ばし、無理やりに引き止める。

嫌がる空を強引に抱き寄せ、エシユタンドは叫んでいた。

「だめだ……行かせはしない！ 愛しているんだ 私は、お前がいなければもう！」

頭の片隅に残っていたひとかけらの理性さえ、吹き飛んでいくのがわかった。

逃れられないよう、力づくで愛しい少女を抱きしめる。

何も考えられぬまま、黒い髪に顔を埋めたその時。

空が顔を上げ、艶やかな微笑みを見せたのだ。

「エシユタンド キスして」

吸い込まれそうな漆黒の瞳　その美しいきらめきに魅せられるようにエシユタンドは顔を近づける。

「キスしてくれたら……ずっと、そばにいてあげる」  
囁きは甘く、逆らえぬ誘惑に満ちていた。

やわらかい頬を引き寄せ、濡れた唇にあと少しで触れようという瞬間だった。

首が、熱い……？

自分の首もとを押さえ、そこにあるチョーカーを思い出す。

無意識に見下ろした、目の前の少女　その細い首には、先ほど投げ捨てたはずの、おそろいのチョーカー。

眉を寄せたのは、そこにはめこまれた石が緑ではなく、真っ赤に光っていたからだった。

「つつ」

頭が割れるように痛み、エシユタンドは空に触れていた手を下ろした。

「どうしたの？ さあ、早く」

優しい、優しい笑顔で手を伸ばしてくる少女の首もとで、赤い石が光っている。

「……違う、お前は　ソラではない！」

ついにエシユタンドは、差し伸べられた手を振り払った。

途端、何もかもが幻であったかのように空の姿ごと掻き消え、その代わりのように白い霧が立ちこめはじめたのだ。

「ソラ　！」

叫び、手を伸ばすエシユタンド。

その体全体を緑色の澄んだ光が包み、霧を消していく。

頭が、痛い……！

想緑珠を握り締めたエシユタンドは、襲ってくる痛みに崩れ落ちる。

固く閉じた瞳を再び開いた時、目の前に広がっていたのは、深い森だった。

ホウ、ホウ、と鳴くフクロウ。辺りを覆う、静かな闇。大木の根元でいつしか寝入っていたらしく、体を動かせばまだあちこちに痛みが走った。

自分の意思とは無関係に強いられた戦いの名残だと思い出し、エシユタンドは頭を振った。

「なんて夢だ……」

重い体をようやく起こして、頭を抱える。

はつきりと覚えている悪夢に、身震いさえする。

空を抱きしめた時の感触さえ思い出せるほどに、鮮やかな夢だった。

感触だけではない。あの時の喪失感も何もかも、まるで現実のようだった。

夢の中の頭痛は、今は胸の痛みに取って代わっていた。

すっかり冷え切っていた体の中で、唯一首もだけは温かく感じる。

ぼんやりと発光している石に気づき、エシユタンドは眉をひそめた。

「あれは ただの夢ではなかったのか……？」

確かに先ほど自分を救ってくれた想緑珠。あの力は現実のものだったというのだろうか。

夜風に枯葉が舞い上がり、エシユタンドは周囲を見渡す。

ちょうど幹の裏側に寝ているイラルを見つけ、近寄ろうとした。

「やめ、てくれ……」

寝ているイラルが、苦しそうに身をよじった。

「イラル？」

歩み寄り、肩に手をかけても、眠りの底にいるのか目覚めはせず、ただうめくばかり。

「まさか」

自分と同じように、悪夢に襲われているのだろうか。

閃いた考えは、間違つてはいないようだった。

「俺を見て……俺は、確かにここにいるんだ。ちゃんと存在してるんだ　父さん、父さん……！」

叫び、苦しむイラルの固く閉じた瞳から涙が零れ落ちる。

息を呑み、エシユタンドはイラルの肩を大きく揺さぶった。

「起きろ、イラル！　それは夢だ　夢なんだ！　起きてくれ、イラル　！」

ふと触れたイラルの指先が、異常なほどに冷たいことに気づく。

それと同時に吹き付けてきた夜風。

二人の体温を奪おうとするかのように何度もからまり、頬を撫でる風は、いつしか白い霧に変わっていくのだ。

「この霧は……」

そう、夢の中に立ち込めていた白い霧。

それと同じものが今、イラルを包み込もうとしているではないか。

だめだ、夢に飲まれてしまう　！

本能的にそう思った。

苦しんでいたイラルが、何かを求めるように宙に手を伸ばしている。

その手が届けば、夢から戻って来れないのではないか　そんな考えが浮かんだ途端、エシユタンドは首もとのチョーカーを外していた。

まだ温かさの残る想緑珠。

ぼんやりと明るい緑にエシユタンドは必死で念じ、イラルの体にかざす。

「想緑珠よ　どうか、この霧を晴らしてくれ。悪夢からイラルを救ってくれ　！」

どうか……ソラ！

浮かんだ面影に力を分けてもらったような気がした。

ふわり、と優しい光がエシユタンドを包んだ。

そして、その足元で眠るイラルを　。

苦しみ、呻く彼を包み込むように、どんどん緑の光が広がっていく。

澄んだ色の光に、白い霧が追いやられていく。逃げるように分散した霧は、地に吸い込まれていくかのように、消えていった。

あとに残ったのは、まるで何事もなかったかのような闇と、静かな森。

「イラル、しつかりしろ　イラル！」

揺さぶり、声をかけたエシュタンドをぼんやりとイラルが見上げる。

何度か瞬きした後、ようやく意識がはっきりしたらしく、イラルは辺りを見回し、顔をしかめた。

「いつてえ　何だ、ここ……さっきのは夢だったのか？」

頭が痛むのか、片手で額を押さえながら訊ねてくる。

いつもの表情を取り戻したことに内心ほっとして、エシュタンドは頷いた。

「ああ　私も、どうやら悪夢に取り込まれていたらしい。もう少しで、危ないところだった……」

息を吐き、微笑んでみせたエシュタンドの顔色に気づいたのか、それとも自分の悪夢を思い出していたのか、イラルも浮かない顔のまま起き上がった。

「さすがはテローザの森、魔の巣窟ってわけだ。ゆっくりと眠らせてもくれねえらしいな」

冗談めかして振り向いたイラルの笑みに、エシュタンドはようやく笑い返した。

「そうだな　夜明けまで休むわけにもいかなさそうだ。とにかく、どこか森の出口はないか探してみるか」

同意して、歩き始めたエシュタンドの靴が、ぱきりと乾いた枝を踏む。



松明にできそうな枝を探そうと身をかがめたエシユタンドの頭上を、フクロウが飛んでいく。

またフクロウか　　そう何の気なしに見上げた、その瞬間だった。  
「危ねえ　　王子！」

突如方向を変えたフクロウが、まるで彼を襲うように飛び掛ってきたのだ。

咄嗟にイラルが操った石が命中し、フクロウを叩き落した。

「何だ、驚いたな　　」

落ちたフクロウを木の枝で裏返し、ゆっくりと覗き込む。

しかしその瞳がぼんやりと赤く光っているのを見て、エシユタンドは顔色を変えた。

「イラル、これは……」

思い浮かんだ可能性を口にする前に、今度はイラルが声をあげた。  
「うわっ、なんだこいつ　　」

イラルの足首に、一匹の蛇が巻きついていていた。  
しゅうしゅうと舌を出し、はいあがるうとする蛇をイラルが木の枝ではらう。

ところが今度は左足、そしてまた右足に　　と、気づけば何匹もの蛇が足元に群がっていたのだ。

エシユタンドのほうへも襲い掛かってくる蛇たちに、イラルが叫んだ。

「おい、こいつら毒蛇だ　　気をつける、王子！」

鱗にある気味の悪い縞模様よりも、エシユタンドが目を睜ったのはその瞳だった。

小さい瞳の奥にある、赤い光　　そこにいる蛇全部が、フクロウと同じく赤い瞳をしているのだ。

「これは　　何かに操られている！」

叫んだエシユタンドの言葉を理解したかのように、蛇が一斉に向かってくる。

気づけば木の根がはみ出した地面を埋め尽くすように、蛇があふ

れかえっていた。

足元に這い上がってこようとする蛇の集団に、背筋が寒くなる。

「こりゃあ、あんたがやったほうがよさそうだ　任せるぜ！」

蛇から逃れるように木によじのぼりながら、イラルが言っただけです。

頷いたエシユタンドが風を集め、不気味な蛇たちを一気に吹き飛ばした。

口笛を吹いたイラルが木の枝から手を離し、着地する。

そのまま転がったフクロウの死体を覗き込み、イラルは首を傾げた。

「ただのフクロウみたいだがな。こいつからは魔の匂いは感じねえけど」

「ああ。さっきの蛇も、ただの毒蛇のようだ」

吹き飛ばされたまま、地面に落ちていた一匹を検分しながら、エシユタンドも答える。

「だが確実に赤い瞳は怪しいな。ってことは、さっきの俺たちみたいに石に操られたってのか？　それとも」

「魔そのものに、操られたのかも……」

呟きに同意するかのように、イラルが顔を上げた。

脳裏にあの洞窟の中で聞いた声が蘇る。

『全て　滅びてしまえ』

あの時と同じ声が響いたのが、自分の頭の中だけではないことが、イラルの表情でわかった。

イラルもエシユタンドと目線を合わせて、確信を得たように叫んだ。

「まただ　確かに、さっき聞いた声だ！」

声と同時に夜風が吹き乱れ、森の木々がざわめきだす。

『滅ぼせ、滅ぼせ、滅ぼせ　！』

低いのか高いのかわからない声が周囲に響き渡る。

その言葉に導かれたように聞こえたのは、何かの唸り声。

背後を見やっただイラルが、瞳を見開いた。

「王子 避ける！」

ほぼ同時に横へ飛びのいたエシユタンドのぎりぎり近くを飛び越えたもの。それは一頭の狼だった。

低く唸りながら、体勢を変え、また飛び掛ってくる狼。

エシユタンドをしつかりと正面から映すその瞳は、赤く燃えていた。

「イラル！ 後ろだ！」

エシユタンドを救おうと駆け寄ってくるイラルの背後からも、また一頭。

そして横から、向かいから あっという間に十数頭の群れに囲まれてしまう。

「やはり操られているのか くそつ、次から次へとキリがねえ！」  
岩や砂を操りながら、狼を後退させるイラル。

風で吹き飛ばすエシユタンド。

しかしいつの間にか数は増え、狼たちから逃れられぬまま、力だけを消耗していく。

「王子 ここに留まってちゃだめだ！ とにかく抜け出す道を探すぜ！」

叫んだイラルと瞳を合わせて、地と風の力で爆風を起こす。

木々の葉さえ吹き飛ばすほどの風で狼たちを抑え、その間に二人は走った。

既に体はぼろぼろで、力を使うのも限界に近づいていることは、口に出さずともわかっている。

走り、走り、どこへ逃げればいいのかわからぬまま走りぬけついに森の木々が途絶えたところまでやってきた瞬間。

「うわっ！」

足がもつれ、転んだイラルを助け起こそうとエシユタンドも駆け寄る。

そこを目掛けて飛び掛ってきたのは、追いついてきた狼だった。赤く光る瞳の中に、暗い影が見えたような気がして、力を振るう間もなく攻撃を覚悟する。

しかし、苦痛の声を上げたのは狼のほうだったのだ。

風を切る感覚がして、振り仰ぐと、狼の腹には矢が突き刺さっていた。

そしてその矢から香るのは、対魔の薬。

飛んできた方角には、煌々と光る松明をかざした人影があった。

「殿下、ご無事でいらっしやいますか!？」

「殿下　お早くこちらへ!」

数人の兵が、エシュタンドとイラルを助け起こし、森の外へと連れて行く。

その間にも追いつがる数頭の狼を攻撃術で吹き飛ばす兵たち。

先ほどの爆風でほとんど残っていなかった狼たちは、彼らの術ですぐにはたばたと倒れていった。

所詮はただの、狼だったということか……。

息も絶え絶えに見上げたエシュタンドの目に映るのは、私兵隊専用の馬車。

「遅ればせながら、馬車隊全員　ただいま到着いたしました!」

確かに自分の私兵隊が着用する武装の紋様に、心から安堵の息を吐く。

追いついてきた馬車隊の側に控えるのは、同じく銀の武装の私兵隊。

しかしその胸当てに施された異なる紋様を見止め、瞳を見開いたエシュタンドに、駆け寄ってきた兵が跪いた。

「第一殿下付き私兵隊　隊長の任を預かるマデオスでございます

!　我々もたつた今合流いたしました!」

「任を、預かる　?」

やっと和らいだ顔が、固まっていく。

藍色の瞳が探す面影が誰なのかは、そこにいる兵全員にもわかつ

ているようだった。

隊長、副隊長だけでなく、彼女を守れと命じたはずのルストさえも見えない。

「ソラは、どうした……？」

マデオスなる若い兵は、訊ねられて見る間に顔を曇らせていく。瞳を泳がせ、申し訳なさそうに頭を下げた後、マデオスは口を開いた。

「申し訳ございません　！　姫君は……フェルなる謎の人物に連れ去られ、現在行方が知れず　隊長方三名が追跡中でございます　！　我々には、殿下をお助けするようにと　」

地面すれすれに頭をこすりつけ、詫びた兵の様子は既に、エシユタンドの目には映っていないかった。

「何、だって　？」

小さく呟いたまま、エシユタンドの体は傾いだ。

倒れていくエシユタンドを兵が支える。

「殿下、殿下　！」

「王子、しっかりしろ　！」

両側から叫び、覗き込む者の声も全て聞こえず、エシユタンドの意識は闇に飲み込まれていく。

テローザの森を押し包む夜は、まだ明けることはない　。

#### 94・幻影（後書き）

今までお待たせしていた分、四話連続での更新となりました。これで今年最後の「タンス」更新です。

なんと2007年から2年越しに続けさせていただいている、超のんびりペースの長編ですが、今年もお付き合いいただいた読者様、本当にありがとうございます！

来年には必ず完結をすることを約束いたしますので、よろしければ新年からも「タンス」のご愛読をお願いいたします。

新年は95話から、また一話ずつの更新となります。

一方でピバスに着いた空は　　というところから始まります。

この後のエシユタンドたちがどうなるのかも、ぜひお楽しみに！

では、皆様良いお年をお迎えください^^

## 95・ピバス(前書き)

皆様、新年明けましておめでとございませう！  
本年もどうぞよろしくお願いいたします。^^

## 95・ピバス

さんさんと照りつける日差しの下、空は棧橋を渡り、ついに陸地へと降り立っていた。

「うわあ、すごい！」

所狭しと軒を連ねる露店、行きかう様々な服装をした人々、はしやぎまわる子供たち　港町の活気に自然と空の表情も明るくなる。  
「船旅、お疲れ様でした、姫君　そして、ようこそ、我がピバスへ」

「冗談めかしてお辞儀してみせるフェイラの隣で、フェルも静かに微笑んだ。

ついにたどり着いたのだ　いいや、来てしまった、この異国へ。怖くないといえば嘘になる。でも、もう決めたからにはやるしかない。

エシユタンドを救うために　。  
もう一度背筋を正して、覚悟を新たにする空の鼻に香ばしい肉の焼ける匂いが漂ってくる。

空の目線に気づいたフェイラが、小さく笑った。

「ああ、そういえば昼食がまだでしたね。あれはピバスの名物、海鳥の串焼きです。なかなかの美味ですよ。今買ってきますから、姫君はフェルと一緒にお先に馬車へどうぞ。あ、ただ　くれぐれも帽子はお取りになりませんように」

船でもずつと被らされていた道化師の帽子　空の黒髪を隠すための道具　を、空はあわてて深く被りなおす。

正直暑くてたまらなかつたが、この人ごみで騒ぎを起こせば面倒なことになるのは、船での出来事でわかっていたからだった。

「さあ、姫君」

フェルに促され、用意されていた馬車に乗り込む。  
目立たぬよう地味なものを選ぶのかと思いきや、装飾は色鮮やか



で、見事に派手と言っているいい部類に入るものだった。

「あのう、フェルさん」

こんな目立っていいのか、と訊ねようとした空の口は、小窓から見えた光景にあんぐりと開けられたまま固まる。

通りを行きかう馬車は全て、同じように派手派手しいものばかりだったのだ。

赤に青に黄色に緑、目に飛び込んでくる色合いは原色ばかりで、まさに海から照りつける太陽によく映えている。

「ナイアーレの間は、馬車も露店も、通りの木々さえ様々な飾りをつけて派手にするのが慣わしなのですよ。そのほうが華やかで、人の気持ちも盛り上がる。ビバスの陽気な人たちが、更に陽気になる五日間といえるでしょうね」

「そ、そうなんですか……」

納得が言ってから見てみれば、フェルの言うとおり、通りの木々にも花や果実を模った飾りがつけられ、見た目にも楽しい風景だった。

「お待たせしました、さあどうぞ。串焼きですよ」

乗り込んできたフェイラに渡された、まだ湯気の立ち上る串焼きに空はすぐさま嬉しそうな顔になる。

見つめる二人が微笑ましげに瞳を細めていることには気づかずに、頬張る空。

「あれ？ お二人は食べないんですか？」

「ええ。我々は食べなれていますし、まだお腹もすいていませんから。気になさらずに、どうぞお召し上がりください。今しばらく馬車に乗っていただきますから」

微笑み、促したフェイラに頷いて、少しフェルの様子も気にしながら、空は串焼きを食べる。

ほかほかと温かく、塩だけの味付けがされた肉は、とても美味だったのだ。

「さあ寄ってらっしゃい、見てらっしゃい！ どうだい、新鮮な魚

だよー！」

「いやいや、魚なんかより、こっちの装飾品はいかが？ 年に一度のネイアーレ、恋人たちもご家族連れも、うんとめかしこんで楽しんでいってよー！」

「装飾品もいいけど、まずは腹ごしらえだろう！ 焼きたてパンに、魚介類のスープもあるよ。さあ、食べてつとくれー！」

馬車の中にも聞こえてくる威勢のいい呼び込みの数々に、空もいつしか笑顔になる。

もともと賑やかなお祭りは嫌いじゃない。

学校の文化祭や、近所の夏祭りなんかでは、俄然張り切るほうだった。

それに なんだかあの祝祭の日を思い出す。

ミデイスの収穫祭を終えた夜、エシユタンドが連れて行ってくれた村祭り。

今も鮮やかに蘇るあの夜の光景と共に、浮かんでくるのは切なすぎた二度目の口付け。

エシユタンドの体温と、熱い求愛の言葉ごと思い出して、空は無意識に俯いていた。

あの時は近すぎて辛かった。だけど今は。

随分遠く感じる、懐かしい思い出を、そつと胸の奥にしまいこむくじけてしまわないように、決心がゆらがないように 　　まだ、

考えちゃいけない。

フエイラたちにわからないよう、そつと息を吐き、串焼きを食べ終えたその時だった。

「うわあっ」

御者の叫び声と、馬のいななく声。

急に手綱を引いたのか、馬が暴れ、他の馬車とぶつかりそうになる。

更にそれを避けようとしたのか、不自然な動きをした馬車は、叫ぶ暇もなく傾いでいった。

「姫君　！」

伸ばしかけたフェイラの手は届かず、空の体は浮き上がり、横転する馬車の中に叩きつけられそうになる。

しかしいつまで待っても衝撃は来ず、そっと瞳を開いた空は、自分を固く守る両腕に気づいた。

「姫君、ご無事で……？」

すぐ近くで訊ねたのはフェルだった。

横倒しになった馬車で、重なり合うように倒れたらしく、側で起き上がったフェイラも心配そうに空を支えた。

「お怪我はございませんか？」

「あ、はい　大丈夫……」

答えかけた空は、ちょうど目の前にある小窓から人だけかりができているのを目にする。

「こらあつ、このガキ！　何してやがる！　いきなり飛び出してきたら危ねえじゃねえかつ！」

叫んだのは御者のようだった。

野太い声に続いて聞こえたのは、小さな男の子の声だった。

「ごつ、ごめんなさい　店の野菜を運んでたら、前がよく見えなくて、それで……」

「よく見えなくて、だとお？　そんなことで許されるわけねえだろう！　見てみる、馬車が台無しじゃねえか！　お前に全額弁償してもらおうからな！」

乗り込む前に見せた愛想のいい笑顔からは信じられないくらいの恐ろしい怒鳴り声に、空は思わずフェルの服にしがみつく。

「お静かに……とにかく、一旦外に出しましょう」

横になったままの扉をそっと開けて、先に外に出たフェイラが空に手を差し伸べる。

冷静に帽子を手渡すことも忘れないフェルに、空は少したじろぎながらもゆっくりと外へ出た。

「ああ、お客さん方。どうも申し訳ありませんでしたねえ　お怪

我はございませんか？」

途端、にこにこしながら訊ねてくる御者にフェルが静かに頷く。事を荒立てないつもりなのかもしれないが、空は戸惑った表情を隠せなかった。

「ご心配なさらずとも、すぐに代わりの馬車を用意しますんで。仲間が今来ますから、ちよつとだけ待っててくださいねえ」

もみ手をしながら空たちにお辞儀をして、御者は怯えたままの子供に向き直る。

その側に転がった野菜は馬車に踏み潰され、無残な姿となっていた。

しかしそれには全く構う様子もなく、御者はつかつかと子供に近寄り、その襟首を掴んだのだ。

「いいか、馬車の修理代、千八百ギールだ。全額すぐにだぞ！ せっかくネイアーレの間稼ぎ時だつてのに、こんなにされちゃあ商売上がったりなんだからな！」

「そ、そんな……僕、そんな大金持ってません」

「じゃあ、お前んとこの店の親父にでも頼むんだな！ とにかく払わなきゃただじゃおかねえからそのつもりでいろよ！」

あまりの横暴ぶりに、空はフェイラを見やる。

赤銅色の瞳は静かなまま、彼女もそつと首を振って見せたのだ。

「どうして　こんなほつとけない。ひどすぎるじゃないですか！」

声を落として訴える空に、フェルがフードを深く被ったまま振り向く。

「かわいそうですが、我々には時間がない。こんなことにかまっている暇はないですよ。それに、時間がないのは　姫君、あなたにとつても同じではないのですか？」

「フェル！」

囁くフェルの言葉と、それをたしなめるフェイラの声。

空は二人の顔を見つめて、厳しい表情になる。

「それは、そうだけど」

確かに、早くフェイラたちの頼みごとを聞いて、エシユタンドのもとへ駆けつけたい。

そのためには、関わってる暇はないかもしれない。でも。俯いた空の耳に、ざわめく群集の声が届いた。

「あーあ、あいつ、あこぎな商売で有名なダンじゃないの。あいつに捕まるなんて、あの子も災難だねえ」

「あんな小さな子に弁償を迫るなんてさ、ビバスの商売人の風上にも置けないよ」

「やめとけやめとけ、関わればろくな目にあわねえぞ。かわいそうだが、放っておくんだな」

そんな囁きが飛び交い、御者は勝ち誇り、子供は震えだす。

「かつ、勘弁してください　そんな大金払えなんて言ったら、親方に首にされちゃう。そしたら母ちゃんも薬代が払えなくなっちゃうんです。だから、どうかお願いします」

小さな両手を合わせて、懇願する子供の前で仁王立ちになった御者が、鼻で笑うのが見えた。

「そんなこと知ったことか！　お前ら家族がどうなるかと俺には関係ねえ。馬車代は全額耳をそろえて払ってもらうからな！」

そこまで聞くのが限界だった。

「姫君　！」

止めるフェイラの腕を振り解き、空はつかつかと彼らのほうへ歩み寄っていった。

何事かと目を瞠る御者を通り過ぎ、空が膝をついたのは、泣き出した子供の前だった。

「大丈夫？　立てる　？」

優しく覗き込んで、手を差し伸べた空を、子供も驚いたように見上げる。

「う、うん……」

まだ十にも満たないような子供の手は、かさかさとして細いもの

だった。

こんな小さな子が、家族のために働いているなんて。

痛ましい思いを胸に秘め、空は御者に向き直った。

「お、お客さん？」

まさか客に間に入られるとは思わなかったのだろう、御者はあせったような顔で空を見つめている。

それにはかまわず、空は倒れたままの馬車を指差して、口を開いた。

「見たところ、そんなに壊れてないみたいんだけど、これって、弁償しなければいけないほどの状態なのかな？」

道化師の衣装を着た若い娘　所詮はただの旅芸人だと考えていたはずの少女が、堂々とそう訊ねたことに御者は驚いたようだった。確かに馬車は横転しているものの、車輪もしっかりし、車体にも大した傷はない。

強いて言えば飾り立てていた布が数箇所破れているくらいのもんだ。

「そつ、そりゃあもう……」

言いかけた御者の近くに歩みより、空は静かに彼を見据える。

「確か、馬車の修理代、千八百ギールって言ったよね。さつき王都までの料金が百ギールだっていうことも聞いた。千八百ギールもあれば、どこまで行けるくらいの料金？　馬車一台余裕で買えるぐらいの値段じゃないかな？　だとすれば、あなたの言ってる金額はかなりの法外な値だつてことになると思うんだけど」

すらすらと並べ立てる空に、周囲に集まった群衆からも小さく同意の聲が上がり始める。

最初は囁き声だったものが、お互いに勇気付けられたのか、皆が口々に言い出したのだ。

「そうだ、そうだ　！　千八百だなんて、馬車一台どころかうまくすりゃあ二台は買える金額だぞ」

「いくらなんでもあんな小さい子供にそんな金額ぶっかけるなんて、

同じ商売人として許せないよ！」

「誰か役人を呼んで来い！ 法外な料金を取り立てる御者がいるってな！」

興奮しはじめた人々の声に、さすがの御者も顔色を変える。

「そつ、そんな 役人は勘弁してくれよ。それに、確かに馬車は壊れてるんだ。少しは弁償してもらわねえと、こつちだつて商売が

—

抗議するように声を上げた御者の肩に手を置いたのは、空だった。

「誰も払わないとは言つてないよ。あなたの言い分だつてわかる

だから教えて？ 馬車の飾りを直すのに、どれくらいのお金が必要？」

「そつ、それは……どう安く見積もっても、三十ギールぐらいは…

…」

どれだけぼつたくろうとしていたのかと笑えるくらいに、小さくなった御者が小声で答える。

その言葉に笑つて、空は子供の背を優しく叩いたのだ。

「大丈夫、あたしが何とかするから。心配しないで？」

「姫君 金額のことなら、我々が」

こらえきれないように人だから出てきたのはフェイラだった。財布を取り出そうとするフェイラを制して、空は微笑む。

「あたしが言い出したことだから 黙って見てて」

うまくいくかはわからないけど、とそつと心の中で付け加えて、空は群集に向き直った。

「さあ、寄つてらっしゃい、見てらっしゃい！ 旅の道化師の、世にも珍しい芸だよ！ うまくできたら拍手喝采 お代もいただければ更にお見せするよ！」

手を叩き、大きな声でそう言った空に、フェルさえもぎよつとした顔をする。

しかし次の瞬間、面白そうだとも言うように、赤銅色の瞳が細められた。

「おつ、道化師の姉ちゃん。なんかやってくれんのか」

「面白そうだな、やれやれー！」

「楽しませてくれたら馬車代のたしにいくら出してやるよー！」

そんな声と拍手に励まされ、空はにっつと笑う。

この異世界にもあるのかわからないけど、文化祭でやったことあるんだ。

懐かしい学校の風景を思い起こしながら、空はまず足元に落ちていた芋を手取る。

最初は二個、そして三個とお手玉の要領で投げてみせたら、思ったよりも大きな歓声がわきあがった。

「すげえ、なんだこれー！ 姉ちゃん、うまいもんだな！」

褒め称える人々に混じって、あっけにとられて見上げる御者にも微笑みかけて、空は動きを止める。

今度はパントマイムの要領で、重い箱を持ち上げるふり、持ち上げられなくてぜいぜいと肩で息をしてみたり、あきらめて寝るふりをしてみたり。

空からすれば大したことのない芸当に、面白いほどに人だかりは増え、拍手は大きくなった。

最後に、と冗談めかしてやってみたロボットダンスで人々は見たことのないものを見る目つきで、じいっと見入り、更には口笛に、誰かが奏でる楽器の音まで響いてきて、通りは小さなお祭り騒ぎと化してしまったのだった。

「ありがとう、ありがとう」

両腕を広げて、お辞儀をする空に、泣いていた子供もすっかり笑顔で拍手をしていた。

次々に皆が投げてくれたお金を集めたフェイラが、驚いたように顔を上げる。

「姫君、五十ギールもありますよ」

「じゃあ、約束の三十ギールはあなたに。そして、残りの二十ははい、あなたに」



御者の後に空が渡した相手は、手を叩いていた子供だった。

「え、でも」

「いいの。あの野菜の分、これで足りるよね？」

にっこりと笑って、つぶれてしまった野菜を指し示した空に、子供は感激したように飛びついた。

「ありがとう、お姉ちゃん！」

元気になった子供に手を振って、新しく用意されていた馬車に乗り込もうとする。

その一瞬だった。

海からの風が吹き、空が被っていた帽子が飛ばされてしまったのだ。

深く被っていて見えなかった黒髪と、黒い瞳があらわになる。

集まっていた人々が驚き、指を差した。

「珍しい髪と瞳だなあ」

「本当だ、ここらじゃ見かけない色だねえ」

口々に言い合う声が聞こえて、フェイラがあわてたように空の肩を抱いた。

「行きましよう、姫君」

耳元で囁かれ、空も頷く。

しかし突然目の前を横切った人影を避けきれず、思いつきりぶつかってしまった。

「あいたたた……」

地面に尻餅をついた空を助け起こそうとしたフェイラよりも先に、大きな手のひらが差し出された。

「これはすまねえ。大丈夫かい？」

「あ、はい。平気……」

答えかけた空の言葉が一瞬止まる。

ぶつかった大柄な男が身にまとう道化師の衣装　その鮮やかな黄色をどこかで見たような気がしたのだ。

「おっと、やっぱりあんたか！　道理でどこかで見たことあると思

つたんだ。その髪と瞳、珍しかったからな。やっぱり対魔術じゃなく、道化師として身を立ててるってのは確かだったようだなあ」

大きな声で話す男に、周囲の人々が何事かと注目する。

まだまだ話を続けそうなの道化師が、確かに先ほど船に乗り合わせていた人物だと思い出した空は、曖昧に笑った。

「いやいや、大したことは」

「いやあ、そんなことないぜ？ 見たことのない芸ばかりで面白かった。それに何より 近くで見たら、結構可愛い顔してるしなあ。こりゃ、王宮でお見せすりゃあ国王陛下も気に入ってくださるんじゃないかい？」

冗談なのか本気なのか、空をまじまじと覗き込んで言ってくる男。ごまかそうとする空を囲んで、人だかりは更に大きくなっていった。「そうだよ！ ネイアーレの期間中は、人気の旅芸人は王宮へ呼ばれるって言うし、行ってみたら褒美もはずんでくださるかもしれないよ」

露店の主人たちまで頷きあい、困ってしまった空を救い出したのは、フェイラだった。

「そうしたいのはやまやまですが まず是我々を呼んでくださった屋敷へ行かねばなりませんのでね。先を急ぐので、失礼しますよ」  
愛想笑いを浮かべながらも、彼女が苛立っているのが空にはわかった。

「なんだ、もつたいないな。それなら同じ道化師同士 旅の幸運を祈るよ。楽しいネイアーレになるように！」

残念そうに笑って、道化師の男がもう一度片手を差し出してくる。最後にと握り返した空の手を引いて、男は親しみを込めてか空に挨拶の抱擁さえしてみせたのだ。

驚き、身を引きかける空の耳元で、男が何事か素早く囁く。

そのまま手を上げて、男は去っていった。

「大丈夫ですか、姫君」

小声で問うフェイラの言葉に、すぐさま笑顔になって頷く空。

まだざわめきの残る通りで、空たちを載せた馬車はまた出発した。  
黙って乗り込むフェルも、空を気遣うフェイラも気づいてはいな  
い 空の手に握られた、小さな瓶の存在を。

派手な黄色の衣装は既に、どこにも見えなくなっていた。

## 95・ピバス（後書き）

新年最初の更新は、ピバスにたどり着いた空のお話からスタートでした。

次話は、空のこの後と、気になるエシユタンドの安否からです。続きもお楽しみに！

「なんかまた騒ぎになっちゃったみたいで、その……ごめんなさい」  
しばらく走り続ける馬車の中は無言で、どことなく気まずい空気を吹き飛ばそうと、空は謝った。

途端、あわてたようにフェイラが微笑を浮かべ、両手を振る。

「いや、そんな　姫君が謝罪なさる必要はありませんよ。御者のことといい、我々がもう少し気をつけるべきでした」

「だって、乗り込む前にどんな人かなんてわかるはずないんだし……フェイラさんたちのせいじゃないですよ」

困った顔で笑う空に、まだ黙っていたフェルが小さく吹き出した。そのまま笑い声を上げる彼を、フェイラが驚いた様子で見つめる。

「　姫君、貴女は本当に面白いお方だ。まさか道端で大道芸まで始めてしまうとは。本物顔負けの愛嬌と度胸までお持ちなのだから、まったく驚かされますよ」

「フェル」

たしなめる姉の声にもフェルは笑いを収めず、これほどまでに楽しそうな彼の顔は空にとつて初めて見るものだった。

それはフェイラにさえも珍しいことだったらしく、最後には一緒に笑って笑い出してしまったのだ。

「フェイラさん！　フェルさんも……もう、ちょっと笑いすぎですよ！」

冷静になると自分でも恥ずかしくなってきた、空はついに真っ赤になつて二人を止める。

「先ほどの様子をもしミディアスの第三王子をご覧になっていたら、どうしたでしょうね。とにかく　更に貴女の魅力の虜になつていただろうことだけは、私にも想像がつかますよ」

フェルの一言に、空は赤い頬に手を当て、複雑な表情で黙り込む。視線まで下に落とした空を見て、フェイラが咳払いをした。

「いくらなんでも悪ふざけが過ぎるぞ、フェル。あの方のお名前は我々が出してはならぬものだろう」

低く叱責されて、フェルは笑いを収め、頭を下げる。

「……すみません、姫君」

肩をすくめて謝罪するフェルに、空は気を取り直したように笑った。

「い、いいんです。だって本当のことだもの　それよりも、そろそろ王都に着く頃じゃないんですか？　あの遠くに見える綺麗な建物、あれが王宮なのかなって……」

話を逸らす目的で出した言葉だったが、実際窓から見える白壁の建造物は遠目からもすぐにわかるほどの豪華さと美しさで際立っていた。

照りつける太陽に映える白い色は、暑い風の中涼しげに見える。

「ええ、あれはこのビバスで最も美しい王宮に間違いないですね。」

しかし我々の目的地はあそこではないのですよ、姫君」

ちょうどそうフェイラが答えたその時、馬車は右に逸れ、王宮を横目に、海側の道を進み始めた。

「王宮、じゃなかったんですか？　じゃあ一体どこに」

既に二人の持つどこか高貴な雰囲気といい、国の一大事を匂わせる様子といい、てつきりそれで間違いないだろうと確信すらしていた空は、予想が外れて戸惑いを隠せなかった。

ちょうど空の問いに被さるように、道の両端から聞こえてきたのは賑やかな音楽。

太鼓や笛の音と共に、楽しげな笑い声と歌らしきものが響いてくる。

ミディスでの時と同様、歌の内容までは空にはわからないが、明るい響きであることは感じた。

「あの歌は、ネイアーレの時によく好んで歌われる、ビバスの語り歌です。太古の昔、海に生まれた女神ネイアが、自らの尾から鱗を一枚切り取って、海に浮かべ息を吹きかけた。するとそこには豊か

な大地が生まれ、ビバスの国となった　我々ビバスの民が語り継いできた神話ですよ」

「は、はあ……」

自分の質問とは全く異なる話が返ってきて、思わず眉を寄せる。

それが今、何の関係があるのだろう　空の疑問は顔に出ているようで、ふつと笑ってフェイラが続ける。

「歌はこう続いている……ネイアは生まれ出た人々の中から、最もふさわしい者を初代の王に選んだ。そして王の隣に、導きの巫女を置いた。海の国ビバスは、海を制する王と、海を愛する巫女によって治められていくべきだと」

「海を制する王と、海を愛する巫女　」

印象的な言葉をつい繰り返してしまふ。

真剣な空の瞳に微笑んだフェイラが頷いた。

「そうです。ネイアの教えは、現代でもビバスの国政の礎となっている。つまり、この国では王と共に巫女が国を治めるほどの大任にある、ということなのですが……」

ミディスで空の知った『巫女』とは大きく異なるらしいビバスの『巫女』、それは一体どんな人なんだろう。

そこまで考えて、ようやく空は気づいたのだ。

フェイラが話しているのは、先ほどの空の質問に対する回答なのだ　。

「もしかして、私に救ってほしいっていうのは　？」

「ええ、海の巫女、ナランティ様。ビバスを治める現女王の片腕とも称されるお方でございます」

驚愕に目を見開く空。真剣な赤銅色の瞳で見つめ返すフェイラとフェル。

ひた走りに海沿いを進む馬車の車輪の音だけが、やけに大きく聞こえる。

まさか、巫女を救ってほしんだなんて……！

想像もしなかった答えに動揺したまま、空は両手を握り締め、二

人を見上げた。

「じゃあ今向かっているのは聖殿、なのですね……？」

問い返した空に頷いたのはフェルだった。

窓から吹き付ける海風にそよぐ髪を押さえ、落ちついた微笑を見せている。

「ビバスには、二つの秘宝と呼ばれる美しい建造物が存在します。

一つは先ほど貴女もご覧になった王宮、そしてもう一つが 我々が現在目指している、ビバスに唯一ある聖域、海の聖殿。姫君にはそこで、年老いた巫女様をお救い願いたい。それが貴女をここまでお連れした、我々の目的です」

「海の、聖殿……年老いた巫女様って、巫女は普通年をとらないんじゃない」

ミディアスの聖殿で出会ったディーラ、あの神秘的な美しい女性を思い出しながら空は声を上げる。

どう見てもエシユタンドより少し上くらいにしか見えなかった彼女は、確かに言っていたのだ。

巫女は長となり、契約を交わした聖獣の力を譲り受けた時から寿命が延びるのだと。それがビバスでは違うのだろうか。

「仰るとおり、海の聖殿の最高位である巫女となった彼女は、その日から老いなくなつた。そのまま次の巫女が選ばれるまで若いままであるはずだった。それが、数年前から突如、年をとり始めてしまわれたのです」

膝の上に置いた両手を無意識にか握り締め、フェイラが話を受け継いだ。

暗く影の差した表情で、彼女にとってその巫女が大切な存在であることが伝わってくる。

「考えられる限りの手を尽くしましたが、我々にお救いする手立てはなく、なにしろ最高位の巫女様自身に起きた問題ですから、他の誰にも解決しようがない話なのですが、老いていくご様子をいたましく見守るしかすべはなかった。そんな折、出向いたミディアス



で我々は知ったのです。姫君、貴女と、不思議な精霊の剣の存在を……」  
衣装の中に持っていた白水晶の剣に触れる空に頷いて、フェイラは覚悟を決めたように続けた。

「洞窟で傷ついた王子を、見事に無傷の姿に戻してみせたという噂話を聞いたのが発端でした。ミデイスの王妃から秘密裏に依頼を受け、動いていた弟からあなたのことを教えられ、話を聞くたびに確信していったのです。我々の巫女様をお救いいただけるのは、貴女しかないとい！ どうか、お願いでございます、姫君　巫女様を…… ナランティ様を、死の床からお救いくださいませ！」

赤銅色の瞳に必死な色をにじませて、フェイラは空の両手を握り締める。

今までの穏やかな彼女からは考えられないほどの、なりふりかまわぬ様子だった。

\*

夜が明けようとしていた。

テーローザの森を包んでいた最後の薄闇が朝日に照らされ、白いもやへと変わっていく。

「殿下　お目覚めになりましたか？」

遠慮がちな声がエシュタンドを眠りの淵から引き戻した。

瞬きを数度、すぐに閃いて見えた銀色の武装に現実を思い出す。

「ああ……私は、あのまま眠ってしまったのか」

体の細かな傷には全て手当てが施され、破れたマントも新しい物と交換されている。疲れが限界に達していたのだろう。夢も見ずに眠り込んだ後だからなのか、どこにも痛むところはなかった。

「俺もぐっすり寝てたらしいぜ。体も軽いし、またいつでも戦えるぐらい元気たつぷりだ！ って、今すぐはまだきついかもしれねえけどな」

同じく傷に布を巻かれたイラルが、向かいの天幕から顔を出した。既に事情は兵から聞き及んだらしく、マデオスらが先頭になって、イラルの朝食を用意していた。

「殿下もお召し上がりになられますか？ 温かいスープができております」

大人しそうな、優しい声でマデオスに訊ねられ、エシユタンドは頷く。

皮肉にも彼の顔を見たこととすぐに、昨夜の驚愕が夢でなかったことを確認することとなったのだが。

「それで……ソラは 彼女の安否はまだわからないのか」

スープを一口飲んでから、覚悟を決めたように問いかけるエシユタンド。

曇る藍色の瞳に秘められた複雑な感情を読み取ったであろうマデオスは、申し訳なさそうに顔をゆがめ、足元にひれ伏した。

「それが、まだ 　しかし、海の国ビバスへ向かわれたであろうことは、我々第一殿下付き私兵隊長カルファーズが申しております！ 隊長はその類稀なる頭脳と冷静な判断力で幾度も危機を回避してこられたお方です！ ですので、今度も必ず……必ずや、姫君を無事にお救いなさると我々は信じております！ どうぞ 殿下もお心をあまり砕かれませぬよう」

薄茶色の肩までの髪が地面につくほどに頭を下げ、必死な声でそう告げるマデオスに、エシユタンドは少し表情を緩め、口元に笑みを載せた。

「わかつている 私もカルファーズの有能さは兄上から聞いて  
いるからな。ソラのことは彼らに任せ、私は私の役目を果たす。だか  
ら皆も自分の職務に集中してくれ」

そう告げ、立ち上がるエシユタンドの表情は平静そのものに見え  
たのか、兵たちは安心したように頷き、それぞれの作業へ戻ってい  
った。

空を、そして自分を心配してくれているであろう彼らに自分がで  
きることといえば、これくらいしかないのだ。

平気なふりをして、冷静に指示をすること。エカルド救出の  
任を率先して果たすこと。それが今の最優先事項なのだから。

ひそかに拳を握りしめて、自分にも言い聞かせるように思うエシ  
ユタンド。

藍色の瞳が苦しげに揺れるのを黙って見ていたイラルが、何か声  
をかけようとしたり、その瞬間だった。

「殿下！ クガル隊長が 隊長方が戻られました！」

兵の報告にすぐさま振り返ったエシユタンドは、森を見渡せる場  
所に張った簡易天幕へと運び込まれてくるクガルの姿に眉を寄せる。  
気を失っているのかまぶたを閉じ、腕に包帯を巻かれた状態で馬  
から下ろされ、支えていた兵たちが急いで布の上に横たえていたの  
だ。

「どうした……！ もしや魔にやられたのか!？」

二手に分かれてから、消息不明だったクガル率いる兵の半数が帰  
ってきたことに喜びかけた顔が曇る。

「いえ、魔に襲われはしたようですが、直接腕を傷つけたのは隊長  
ご自身であるようです。この短刀に血の跡が」

「ようだ、とは お前たちは見ていなかったのか？」

訊ねると、答えた兵は膝をつき、地面すれすれに頭を下げた。

「申し訳ございません！ 我々、クガル隊長を除く全員がおそらく  
魔による幻術にはまり、隊長をお守りすることができませんでした  
……！ どうぞ、この処分はいかほどにも」

「処分だ何だと言っている場合か！ とにかくお前たちは無事なのだからそれでいい。それよりも状況の説明を　　魔による幻術とは、一体どういうものなのだ」

一喝してから、落ち着かせるように兵の肩を両手で支える。エシユタンドの冷静な問いに我に返ったように、兵はお互いの顔を見合わせてから、口を開いた。

「森の偵察を終え、これ以上は馬では進めぬとご判断された隊長に従い、一旦戻ろうと来た道を引き返していた時のことです。確かに一本道であったはずの道が分かれていて、我々はその道のほうへなぜか引き寄せられるように歩き出し　それからは記憶は曖昧で…：どうやら眠り込んでしまったようなのですが、全員が再び正気を取り戻した時には道は元に戻り、あの、少年のような魔と、巨大な体をした獣が目の前に…：獣に襲われそうになった我々を、隊長が結界を張り守ってくくださったのですが　力尽きたように倒れてしまわれたのです。無理に動かしてはよくないと判断し、近くで夜を明かし、戻ってまいりました」

兵の説明する間にも、他の兵が心配そうにクガルに付き添い、腕の包帯を巻き変えている。

しかし何度巻いても血はすぐにあふれ出し、真っ赤に包帯を染めてしまうようだった。

「これほどの時間が経つというのに、まだ血が止まらないのか？

止血の薬は？」

「何度も塗っておるのですが、それが一向に効かず　殿下、このまま血を流し続けては、隊長のお体が持ちません。一体どうすれば

…！！」

兵の必死な声でエシユタンドもクガルの傷を覗き、側に膝をつく。

おそらく幻術で眠り込むのを避けるため、自分で傷つけたのだらう。

見当をつけながらも、それほど深い傷には見えないというのに止まらない血に、エシユタンドは厳しい表情を浮かべた。

クガルの顔色は既に青白く、唇からも血色が消えている。手足もひどく冷たくなってしまっていた。

「このまま血が止まらなければ、最悪命が危ねえ。王子、こいつはやっぱり……魔の仕業なんじゃねえのか？」

エシユタンドの頭に浮かんだものと同じ可能性を指摘され、そばに佇むイラルの瞳を見上げる。

「傷口に何かの力が働いているのだろうか。それとも、クガル自身に……？」

ところどころ擦り切れ、破れた衣装の様子からも、クガルがたった一人で魔の少年たちと戦ったのだらうということが見てとれ、エシユタンドはぎり、と唇を噛んだ。

「私が、そばについていれば……」

思わず呟くエシユタンドの肩に、イラルが軽く手を置く。

「兵を分けたことを後悔してんなら、それは仕方ねえと思うぜ？」

どちらにしろ俺たちと一緒に襲われたかもしれないし、その時守れたかどうかだって怪しいもんだ。とにかく何としても止血だ。頼りになる隊長さんが不在じゃあ、隊がまとまらねえからな！」

明るく背中を叩かれて、エシユタンドは一瞬あつけにとられ、すぐに気を取り直したように微笑んだ。

そうだ、自分が気を落としたところで、何も解決などしない。心に突き刺さる愛しい少女のことも、目の前の大切な片腕のことも、そして取り戻すべき弟のことも。

「そうだな、とにかくできることをしなければ……」

傷口を拭き、薬を塗り続ける兵たち。流れ続ける赤い色を見つめながら、やはり心に浮かんでくるのは、先ほどの怪しい石のことだった。

まるで人の心を狂わせ、血を流し合わせることを喜んでいたかのような、魔に似た力が感じられたのだ。

テローザの森に潜む何者か。魔の少年や獣、ひいては森の動物までを自由に操り、差し向けてきた謎の存在。それは全てを滅

ぼせと囁いた、あの恐ろしい声の主なのだろうか。

エシユタンドが考え込んでいる間にも、辺りはすっかり明るくなり、鳥の鳴き声までも響き始めた。

緑の森は平和そのものに見えぬ風景だというのに、そこに潜むのは何か禍々しい、巨大な存在のような気がするばかり。

「殿下、我々で森の搜索を再開いたしましょうか」

マデオス率いる第一私兵隊の面々と、馬車隊の兵たちに提案され、エシユタンドは頷く。

とにかく弟を一刻も早く救うためにはそれしかないのだ。

「では複数で必ず行動すること、危険だと感じれば深追いはせず、私に知らせること、それだけは徹底してくれ。私は今しばらくここで、クガルの容態を見ることにする」

「はっ！」

出発する兵たちを見送って、天幕に戻る。

眠るクガルのもとへ歩み寄った途端、異変は起こった。

「隊長、隊長！　しっかりなさってください！」

顔色を変え、必死でクガルを呼ぶ兵たち。その中央に横たわるクガルの体が大きく震え始めたのだ。

96・二人(後書き)

今回はタイトル通り、その後の空とエシユタンドの様子でした。  
最後、ちよつとおかしなところで終わってますが、文字数的に区切  
らせていただきました。

次の更新も来週を予定しておりますので、ぜひお楽しみに！  
引き続き執筆も頑張ります^^

97・白金と赤（前書き）

お待たせいたしました。

引き続き毎週更新ペーjスを保っています。

どうぞお楽しみください^^



突如全身を大きく揺らしながら苦しみ出したクガルに、天幕にいた全員が駆け寄った。

「どうした！　しつかりしろ、クガル！」

叫び、その体に触れたエシュタンドの瞳が大きく見開かれる。

「冷たい」

尋常ではないほどの冷たさに、思わず手を離してしまう。

まるで氷、いや、それ以上だ。

血を失いすぎたことだけが原因ではないであろう苦しみ方に、エシュタンドはクガルの手をしつかり取った。

「クガル！　だめだ、魔に屈するな　！」

思わず叫んでしまった言葉は紛れもない真実であったことがわかったのは、次の瞬間だった。

とめどなくあふれ出ていた血がいつしか止まっていたかと思うと、すぐにびたりと体の揺れがおさまり、クガルが瞳を開いたのだ。

そして、その瞳は　。

「おい、王子！　これは　」

狼狽したイラルの声。ざわめく兵たち。

それすらも全てが遠くなるほどにエシュタンドはクガルの赤い瞳をただ凝視していた。

これは……まるで森で操られていた動物と同じではないか！

「殿下！　隊長が　隊長は一体どうされたのです！？」

動揺をあらわにしながら必死で訊ねる兵に、エシュタンドは内心の驚愕を抑え、振り返る。

「血だ……あの傷口から流れる血に、魔の邪な力が入り込んだのだ！　誰か、クガルを押さえ　」

言い終える前の、一瞬。

誰もが動けずにいる間を狙ったかのように、閃いた人影。

いや、それは既にその場にあつたもの。

「動くな」

低く、冷たい声、そして喉元に突きつけられた短剣にエシユタン  
ドは息を呑んだ。

目の前にあるのは、赤い瞳。

常に自分を守り、支え、共に戦ってきたはずの片腕。

確かに同じ姿、同じ顔つきであるのに、その瞳だけがいつもと異  
なっていた。

鈍い、まるで血のような赤　　ゆがんだ色合いに見えるのは暗い  
空虚な感情。

「クガル……何を」

問いかけようとしたエシユタンドの言葉は、クガルが更に短剣を  
押し進めたことで止まった。

「王子！」

「手を出すな！」

駆け寄ろうとしたイラルを制し、兵たちにも届くように叫ぶ。

「そ、そんな……隊長が操られて　！？」

驚愕と戸惑いに沸く兵の声も、食い入るように見つめるエシユタ  
ンドの視線も、何もかもがクガルには感じられていないようだった。  
「そう……動くな。動かないでいれば、すぐに済む。苦しまずに殺  
してやるうというんだ。有難く思うんだな」

正気であればあり得ないはずの言葉。

しかしその恐ろしい内容とは裏腹に、赤く光る瞳は虚ろで、焦点  
すら定まっていないように見えた。

「なぜ　私を殺す？」

喉に冷たい切っ先を感じながら、それでも不思議と恐ろしくはな  
かった。

冷静に訊ねたエシユタンドをクガルはぼんやりと見上げる。

「なぜ……？　そんなこと決まっている。憎いからだ　もうずつ  
と前から、本当は憎くてたまらなかった。いつも偉そうな顔をして、

私を利用して　下賤な森の民の生き残りだと、所詮は馬鹿にしていたのだろう」

話しながら、なぜかクガルの瞳はエシユタンドを見ていない。どこか遠くから聞こえてくる声に耳を貸しているかのように、ただそう並べ立てた。

「た、隊長！」

思わず呼んだのである。兵の存在すら見えていないようだった。

一瞬眉を苦しげに寄せたクガルの表情に一点の救いを見出し、エシユタンドは口を開いた。

「本当に、お前はそう思っているのか？」

平静そのものの問い。主の声にクガルはますます顔をゆがめたが、震える手は短剣を握ったまま。

「そうだ　ずっとそう思っていた。私はお前が憎かった。何もかもを手にしているくせに、その幸福に気づかず、甘え、冷たい氷で心を閉ざした。側で仕える者の声では溶かせなかった氷を、たった一人の異界から来た娘などに溶かすことを許し　今ではその娘なしには生きられぬほどに墮落しきった。一國を手にしよつという王者がその様子では、民は　仕えてきた者はどうなる。無駄に使われ、捨てられるのか　！」

話しながらも何度も首を振り、しかし沸きあがってくる何かに突き動かされるように言葉を繰り返す。

クガルの様子は見ているエシユタンドが辛くなるほどだった。

周囲に佇む兵たちも、イラルでさえも何も言えずに立ち尽くしている。

「違う、私は　何を言っ……いや、そうだ。憎んでいる。憎んでいるから殺すのだ　そして、解放されるのだ、私は　！」

震える手で短剣を握りなおし、エシユタンドの皮膚をつきやぶるぎりぎりまで押し付けながらクガルは叫んだ。

しかしいくら待っても切っ先がそれ以上進むことはなかった。

「クガル　お前は」

魔と必死で戦っているのだということは、見ている誰の目にもわかった。

赤い瞳は変わらず虚ろであるのに、どこか苦しげに瞬きを繰り返している。

「確かに、お前の言うとおりかもしれないな」

優しく呟いたエシユタンドの声に、クガルが弾かれたように顔を上げる。

「王子……？」

イラルも、皆も自分を見ている。わかっていてもなお、エシユタンドはなぜか微笑んでさえいたのだ。

「お前の言うとおり、私はあの娘に心を奪われている。何もかも投げ出してもいいとさえ考えてしまうほどに　だ。ずっと仕えてきてくれたお前も、周りの人間も、自分の弟ですら見えなくなってしまう時もある。恋とは　人間の心とは、これほどまでに自分勝手に、これほどまでに未熟なものなのかと私も最近気づかされたところだ」

自虐の言葉をはきながらも、心は不思議と落ち着いていた。

そうだ、人とは身勝手なもの　しかし、だからこそ。

決意は胸の中だけではなく、藍色の瞳にも表れる。

「だが、未熟だからこそ学ぶ。未熟な己を正し、支え、助けてくれる者が必要なんだ　クガル、お前のような者が」

言って、短剣を握る手に触れた。冷たく、体温も感じさせないクガルの手はますます震え、今ではまっすぐに視線を保てないほどに苦悶の表情を浮かべていた。

「お前の本心がどうあってもそれでいい。私にはお前が必要だ。そして、私を助けてくれる全ての者たちが……このミディアスを背負って立ち、真の王者となるために」

「や、やめろ……やめて、くれ」

短剣を取り落とし、子供のように両耳を塞いで首を振るクガル。その手を取り、しっかりと握る。

「クガル、魔に屈するな。戻って来い。私の元に！」

今、この瞬間にも愛しい娘へと飛んでいこうとする私の心を引き戻し、ミディアスの民に、そしてお前たちの元へ繋ぎ止めてくれ。大切な弟を救うために、そしてミディアスの危機をおさめるために「未熟な私を戒めることができるのは、クガル……お前だけだ！」

「すまない、クガル。すまない、皆。すまない……エカルド。弱い人間でしかない自分を許してくれ。」

弱いからこそ、心を強くするから。

声に出さない決意は、温かい力となってクガルへと流れていく。

震え、全身で拒否しようとするクガルの抵抗さえ押し流していく。

「は、白金の……光!?」

イラルの驚愕の声が聞こえる。

瞳を開いたエシユタンドは、自分の手から いや、全身から明るい白金の光が発されているのを目にしたのだ。

兵たちも皆、目の前の光景を信じられぬように見つめている。

光はまぶしくクガルをも包み込み、最後の抵抗を飲み込み、クガルは苦しげに崩れ落ちていく。

「隊長！」

「隊長！」

動かずにいた兵たちが、光が消えたことで我に返ったのか、クガルに駆け寄った。

「しっかりしてください、隊長！」

「隊長、どうか！」

必死な声に、クガルのまぶたが開く。

ゆっくりと、重そうに持ち上がったまぶたの下に見えたのは、いつもの栗色の瞳だった。

「クガル！」

呼んだエシユタンドの声に、幾度か瞬きをしたクガルが体を持ち上げる。

「殿下……」

再び開いた口からは、常と変わらぬ優しい呼び名。

「クガル　よかった……」

心からの安堵でもらした呟きに、クガルは額に手をやって俯く。

「殿下　私は、何ということをして……！」

魔の支配から解かれたらしく、先ほどの言葉も行動も思い出したのか、頭を抱える。

側に歩み寄り、傷口からも血は止まり、他に異常はないことを見とめたエシュタンドは、軽く微笑んで手を差し出した。

その手に載せられたのは、側に転がっていたクガル自身の短剣。

「ほら、しっかり持っている」

「し、しかし殿下……私は」

ためらうクガルの肩に手を置き、エシュタンドは藍色の瞳をまっすぐに向ける。

「先ほど言っただろう。私にはお前が必要だ。その絆は　魔などによって覆されるものではないと、私は信じているのだがな」

いたずらっぽく言った後、しっかりと背を正し立ち上がる。

マントを直したエシュタンドをクガルはまぶしげに見上げ、それから深く叩頭した。

「はい　殿下！」

様々な想いを込めたのであろう一言は、エシュタンドにだけではなく、その場にいた者全員にその重さを感じさせる。

朝もやが晴れた天幕の中から一歩足を踏み出して、エシュタンドはテローザの森を見渡した。

「よし　全員でエカルド搜索へ出発する！　今日こそは無事に救い出すのだ！」

兵もクガルも皆が一斉に同意し、立ち上がる中、その背中を傍観していたイラルだけが、一人口笛を吹いていた。

「白金の光　真の王者つてやつか。まさか、本当にいるとはねえ……魔の支配を自力で解くとは、やるじゃねえか」

呟きは誰の耳にも届かず、静かな森に消えていく。

搜索隊は万全を期し、再びテローザの掌中へと足を踏み入れるのだった。

\*

先に森へ入ったマデオスら一行は、ゆっくりと緑の草をかきわけて進んでいた。

昨夜とは異なり、暗いとはいえ昼間の太陽の下では、恐ろしく見えたテローザもただの森でしかないように見える。

常に数人一組となり、搜索を続けていた彼らが一度報告のために集まった時にも、それぞれの表情は少し明るかった。

「ラミアン、何か異常は見受けられたか？」

マデオスにそう訊ねられ、ラミアンと呼ばれた同じ第一王子付き私兵隊の兵は首を振る。

「いや、特に怪しいところは　森が深くなればなるほど、どうも木々が開けてきているような気がするぐらいだ」

同感だと頷いたマデオスはこれ以上の搜索を続けるべきか、それとも一旦第三王子のもとへ戻るべきか思案する。

その一瞬のことだった。

「マデオス、あれを　」

ラミアンが声を上げ、視線をやった先にあったもの　それは清涼な流れの小川だった。

さらさらと透明な水が集まり流れ行く風景は、とても平穏なものだった。そう、この緊迫した空気におよそ似つかわしくないほど平穏な　。

しかしそれには気づかなかつたのか、マデオスは残りの兵たちを呼び寄せ、小川のほとりで休息をとることにしたのだ。

流れる水を見た途端、なぜか急速に喉の渴きを覚えたからでもあるが、それと同時にひどく全身が重く、疲れを感じたからだだった。

「マデオス、飲んでみる。この水、すぐくうまいぞ」

同期で入隊して以来共に信頼を置きあうラミアン。その彼が先に飲んだことで、マデオスは警戒心すら感じずに小川の水を口にしていた。次々と喉を潤し、中には顔や手足も洗う兵たち。

平和そのものにはしか見えない光景を見ていたマデオスは、急に覚えた吐き気に口元を押さえる。

「な、なんだ……喉が熱い……っ！」

緑の草に膝を付き、胸を押さえる。

喉に感じた熱は既に胸へと移行し、瞬く間に全身へと広がっていった。

「熱い、くっ、苦しい！」

続々と倒れ、苦しみ始める一行。

ついにはマデオスら第一王子付き私兵隊、そして馬車隊の兵全てがその場に倒れていた。

後に残されたのは静かな小川の流れだけ。 。  
きらきらと日差しを反射して光る小川の水面下で、ところどころ赤い石が沈んでいることに気づいた者は誰一人いなかった。

バサバサと大きな鳥の羽音がして、鳥にしては大きすぎる影が舞い降りる。

「ふん、たやすいな。簡単すぎて面白くもない。やっぱりあの男を取り逃がしたのは惜しいよ、ムルグ」

側に控える獣に独りごちて、紺色の髪をぐしゃぐしゃかき乱す少年。

その左肩に残るひきつれた傷跡を見ながら相槌を打ったのは、向かい側に立ったもう一人の少年だった。

「油断したな、ムルグ。まさか双体だと見破ってくるとは思わなか



つたんじやないか？ 傷つけられてもなお、玩具は欲しい。そんなところかい？」

金の髪を風になびかせながら問いかけた少年に、ムルグと呼ばれた彼は忌々しげに翼を閉じる。

「こんな傷、すぐに治るさ。人々の血を 苦しみを、心を吸い取り、より力を増すこの血晶石けっしゅうせきの力さえあればね。あの男を支配下に置けなかったのは惜しいが、またいたぶり甲斐があるってもんだよ」  
グウウ、と喉を鳴らす獣の頭を撫でながら、ムルグは答える。

しかしその琥珀色の瞳に浮かぶのは紛れもない苛立ちの色だ。

「でもあの王子、変な光で石の支配を破りやがった。あれは一体何なんだよ」

先ほど手元の赤い石の塊が見せてくれた映像で知ったことだ確かにあの王子が放った白金の光で、石の呪縛は解かれていた。

「さあな、そんな難しいこと俺は知らない。ただ仲間の 愛しいアイラの敵を討つ。俺の目的はそれだけさ。アイラと俺は、あの男に人語を与えられる前からずっと一緒だった。生まれた時から、ずっと アイラの姿がどれだけ人間に擬態しようと、そんなことどうでもよかった。俺にはどんな姿でもアイラはアイラだったからな。アイラに喜んでもらうために、俺は更なる擬態を繰り返した。あいつは美しいものが好きだったから……なのにそれを奪ったのはあいつらだ。あの藍色の王子をおびき寄せ、弟と共に殺す。それさえ叶えばあとは知らん。ケイマ お前に任せるよ」  
軽く肩を叩いて、言ったムルグがにやりと笑う。

「それにしても 人間つてのは魔よりもおかしな奴らだよ。同属同士で憎みあい、殺しあう。自分たちのほうがよっぽど残酷な生き物だと俺は思うけどね」  
小ばかにしたように呟いて、伸びをしたムルグは一瞬肩の痛みに動きを止め、またゆっくりと翼を広げた。

飛び立っていく魔の少年を見上げていたケイマの唇がそっと動いたことは、上空からは見えていないだろう。

「何が仲間の敵討ちだ、下等な魔ふぜいが　お前らのように単純にはできてないんだよ、人間は……」

足元の草の間から覗く赤い石。点々と光る嫌な色を踏みながら、ケイマは倒れた兵たちに歩み寄る。

「信じたって、いくら尽くしたっていくらだって裏切る。裏切られた時、見捨てられた時、お前たちはどうする　？」

無駄なものは信じないことだ、と心の中で続けて、ケイマは赤い石の塊をそつと彼らに近づけた。

97・白金と赤（後書き）

魔に操られたクガルを、白金の光で救ったエシユタンド。

本物の王者たる力を秘めた彼は、テローザの森に巢食う魔に勝つことができるのか。続きはまたビバスの空のお話からです。どうぞお楽しみに！

光輝く海　見渡すばかり一面の青い色に、空は思わず目を瞞っていた。

馬車の小窓から目にしていた時とは雲泥の差とも言えるくらいの、ただ美しいきらめきが空の言葉を奪う。

「ここが、ビバスにただ一つ存在する聖域　海の聖殿でございませ、姫君」

背後からフェイラに声をかけられてもなお、空は目前の光景から目を離すことができなかった。

青く、鮮やかな海に向かって伸びる一本の石橋。

大人二人がなんとか横に並べるほどの幅しかない橋の向こう

つまり、海上にそびえたっている、白亜の建物。どのように建設したのだろうと、正直空は驚きに目を見張っていた。

海をイメージさせる波の渦巻きや、貝の模様などが彫られた太い円柱、白壁に刻まれた何かの文字、全ては美しく、荘厳な存在感を放つ。中でも空が注目したのは、遠めにもはつきりとわかる屋根の彫刻だった。

「人魚……？」

思わずもれてしまった空の呟きを聞き取ったのであろうフェルが、そつと隣に並んだ。

「ネイアですよ。ビバスの国を生み出したとされている女神　上半身は人間の女性、下半身は魚の姿をしていると信じられているのです」

まさしく空の知る人魚と瓜二つの美しい姿に感嘆すると共に、ミデイスの聖殿とは異なる派手さにも驚く。

それに、確かディーラさんはエス神の姿なんてわからない、って言ってたのに。

国が違えば聖殿の様式も随分と違うものだと言えながら気づか

され、戸惑っていた空に両端から双子が微笑みかけた。

「長旅お疲れ様でございました、姫君。ようこそ、聖殿へ」  
言葉までも揃った二人の声。そして深く頭まで下げられてすっかり顔を赤くした空が両手を振った。

「ちよつ、ちよつとフェルさん、フェイラさん！ そんな改めてかしまられたらあたし、どうしたらいいの……」

半ば強引に連れてこられた形とはいえ、丁重に扱われたことには変わりなく、旅の間にすっかり知らぬ仲とは思えなくなっていた二人に、空は頭を掻く。

そんな空のいつもと同じ反応に微笑んだフェイラが何か言おうとした、次の瞬間だった。

石橋の向こうに見える立派な扉が開き、中から巫女たちが姿を現したのである。

青い海と同じ色をした布で作られた裾の長い衣装を着た、若く清楚な女性がずらりと並び、空たちに向かって丁寧にお辞儀をしてみた。

中央から、彼女たちより格が高そうな巫女が歩み出て、石橋を渡り、空の目の前で止まる。

「ようこそおいでくださいました、ミディアスの姫君。どうぞ中へ  
我らが長、ナランティ様がお待ちでございます」

フェイラたちが知らせていたのだろうか、と見上げた先で、赤銅色の瞳が僅かに見開かれていることに気づく。

「さすがはナランティ様。極秘裏に進めたつもりでも、お見通しであられるというわけか」

呟いたフェイラの顔はどことなく嬉しそうでもあり、また悲しきうでもある。

「して、スニア。ナランティ様のご病状は？」

慣れた様子でフェイラが巫女に訊ねる。スニアと呼ばれた巫女もやはり見知った顔であるのか、動じたふうもなく首を横に振った。

「お二人がご不在の間に、実は更にひどくなられ　今では寝台か

ら動けぬほどまでになられてしまいました」

無表情に見えたスニアの顔にも、さすがに陰りが差す。

ナランティという長への信頼と人望が伝わってくるような気がした。

「姫君、着いたばかりでお疲れのところ申し訳ありませんが……」

すまなそうに振り返ったフェイラに、空はしっかりと胸元に抱えた布包みを示しながら頷く。

「ええ。大丈夫ですから、すぐに行きましょう」

自分で役に立てるのはわからないけれど、ここまで来た以上できる限りのことをしたいと素直に思っていたのだ。

何より、それが白水晶の剣を持つ者の役目だと思ったから。

石橋を渡り、大きな扉をくぐりぬけた空は、スニアに案内されて一番奥の一室へと進んだ。

途中通った広間では、懸命に祈りを捧げる他の巫女たちがいた。

彼女たちの願いは、何なんだろう。ビバスの平和？ それとも巫女長の快復？ そのどちらも？

中には真摯な瞳で空を見つめ、頭を下げる巫女もいて、どこか居心地の悪い気持ちにもなった。

この剣でも救えなかったら、その時はどうしたらいいんだろう。

思わず頭に浮かびかける嫌な可能性に空は頭を振り、胸に持った白水晶の剣を抱きしめる。

うつん、あたしは……自分にできることをするだけだ。

もう一度確かめるように心で呟いて、空はたどり着いた扉の前で顔を上げた。

「どうぞ」

小さな声が部屋の中から聞こえた。

世話係らしい幼い巫女が扉を開け、スニアと共に空は入室を許される。

海が一面に見渡せる開放的な広い部屋　その窓際に寝台はあつ

た。

質素な白い布をかけられた寝台に横たわるのは、細い体の儂げな女性だった。

老いて、病に伏せていると聞いていた空が想像していたよりもはるかに若く、美しい外見。

いや、そうだったのだろうとわかる顔立ちは保たれていた、と言った方がいいかもしれない。

華奢な白い手や、長い金色の波打つ髪からわかるのは、もどがどれほどの美貌だったかという名残。

それがそのままに皮膚には皺が刻まれ、髪の毛にもところどころ白いものが混ざっているのだ。

どこか不自然な老い方だというのは、空にもわかった。

「ナランティ様　ミディス王国からお越しになられた、ソラ姫様でございます」

閉じられていた瞳が、巫女の言葉で開かれる。

この人に会うために　自分はこの国までやってきたのだと思うと、なぜか緊張し、空の足は震えた。

こちらにやってくる前に用意されたドレスに着替えてあったから、足の震えには気づかれないはず。

そんな空の思いは、ナランティの深い青色の瞳に見つめられたことで揺らいだ。

なぜだか全てが見透かされているような　何もかもわかっていくかのような、穏やかで優しい瞳だった。

「ソラ姫ね　こんな遠いところまで、私などのために来てくださって、本当にありがとう」

労われて、空はあわてて頭を下げる。

「いつ、いえ、とんでもない　それに、姫だなんて……あの、呼び捨てで結構です！」

ディーラやメセルの前に立った時とは違う緊張感、しかし同じ空気と呼べるような優しい雰囲気にとどきどきして、空は言った。

「まあ、ではソラさん。ふふ……想像通り、あなたは素敵な方ね。あの子たちが惚れ込んだのがわかるわ。ごめんなさいね、連れて来させてしまつて。私のために余計なことはするなと、あの子たちには言つておいたつもりだったのだけれど」

「あの子たち……？」

その口ぶりから、おそらくフェルとフェイラのことなのだろうと察しは着いたものの、まるで子供に対するような言い方にきよとんとする空。

「ねえ、フェイラザーン。聞こえていたはずよね？」

穏やかな声が扉に向けられた。スニアが気づいて開けようとするよりも前に、外から扉を開けたのはフェイラだった。

着替え、身を清めてから同席すると言っていた通り、武装姿だった彼女が正装を身にまとい、長い赤銅色の髪も頭上高くで一つに結んでいる。身につけた正装も男物であるのが、フェイラらしかったのだが。ナランティの呼んだ名前のほうに空は首を傾げた。

「フェイラ、ザーン？」

繰り返した空の呟きと同時に、ナランティがゆっくりと上半身だけ起こしながらフェイラの背後を見やる。

すぐさま世話係の巫女が枕をナランティの背中に当て、少し楽になるようにすると、ナランティが微笑んだ。

「あなたもよ、フェルザンド。私のために奔走してくれたのは有難いけれど、他国の王子の大切な宝物を盗んでくるようなやり方はいけないわ。ねえ？ ソラさん」

宝物というのが自分のことを指したのか、それとも剣のことを指したのかわからないまま、空の頬は赤く染まる。

それよりも気になったのは、フェイラ同様、異なる名で呼ばれたフェルのことだった。

「姫君、今まで我々の身分を明かさず、申し訳ありませんでした。こうして無事ナランティ様のもとへたどり着いた今、余計な心配をせずに明かすことができます。私はフェイラザーン。ビバス王国王



室付き、第一近衛隊隊長の任にある者でございます。」「  
フェイラは流れるような仕草で空の前に片膝をつき、深々と頭を  
下げる。

そのまま隣にやってきたフェルを指し示し、フェイラは続けた。

「この者はご存知の通り、我が双子の弟。そして、正式な職はピバ  
ス王宮付き術士、名をフェルザンドと申します。姫君には度重なる  
ご無礼と非礼を心より詫びいたします。！」

フェルと二人して跪かれ、空はただ黒い瞳を見開いて、ぽかんと  
繰り返すばかり。

「第一近衛隊、隊長……？」

そんな高位の人物だったなんて。

どことなく気品を感じさせる言動といい、雰囲気といい、おそろ  
く王宮には関わりのある人たちだとは思っていた。

けれどそこまで身分が高いとは正直考えていなかったのだ。

「まあ、あなたたちきちんと自己紹介もしていなかったのね。ソラ  
さん、驚かせてしまったようでごめんなさい。私からもお詫びする  
わ。」

ナランティの笑みを含んだ言葉に、空はあわてて我に返り、首を  
横に振る。

「いつ、いいえ、とんでもない。いいんです、フェイラさんたち  
の身分がどうであれ、私がここに来たのは。」

「ナランティ様をお救いするために、滝の精霊から譲り受けた白水晶  
の剣を使ってもよいと。姫君はそう仰ってくださいました。よろ  
しいですね、ナランティ様……？」

言いかけた空の後を受け、問いかけたフェイラの表情には隠しよ  
うもない切羽詰った色があった。

時折咳き込んだりして、弱りきった様子のナランティを見たこと  
で更にいてもたってもいられないのだろうと空にもわかる。

海の色を映したような美しい瞳。それだけは老いる前の彼女の  
美しさと気品を残しているようだった。

ナランティは無言でフェイラと空を見つめた後、どこか悲しげな、なんとも言えない表情を浮かべる。

しばらく視線を交わしたフェイラとナランティだったが、必死な赤銅色に負けたようにナランティが薄く微笑んだ。

「いいでしょう　あなたたちの心遣いを無駄にはできませんものね。試してみると、リールも言っている……けれどね、フェイラザーン。そして皆も心に留めておきなさい。この姫が持つ剣でも私の老いが止まらぬ場合は　もうあきらめること。いいわね？　それを約束できないならば、私にこの剣を触れさせることはできません」  
不思議な言い方だ、と空は思った。

だって、まるでこの剣では救えないと知っているかのような口ぶりで……いや、むしろそれを望んでいるようにさえ見える。

同じように感じたのだろうか、フェイラも一瞬強張った顔をしたが、すぐに気を取り直したのか深く頷いた。

「わかりました、ナランティ様。その時はこのフェイラザーン、武人のはしくれとして潔く事態を受け入れ、ナランティ様のご指示に従うことを誓いましょう。お前もよいな、フェルザンド」

フェイラに確認され、背後に控えていたフェルも無言で頭を下げ。見守っていた空もなぜか緊張して、剣を握る手が震えた。

「では、ナランティ様……儀式はこちらで行いましょうか」  
表情を表に出さないスニアに訊ねられ、ナランティは静かに首を振る。

「いいえ、やはり正式な儀式は正式な場所で行わなくてはならないでしょう。我々にとって最上の聖域　『海の寢床』で」

覚悟を決めたかのように厳肅な顔でナランティは言った。

「ナランティ様、私が　」  
体を起こしたナランティをフェイラが支える。もはや自力で歩くことはおろか、起き上がることもできない彼女の様子に空はひそかに目をそらした。

痛々しくて見ていられなかったのだ。

そのまま抱き上げられ、フェイラに運ばれていくナランティの体は、見た目にも痩せ細り、軽そうだったから。

「フェルさん、『海の寝床』って……？」

訊ねかけた空は、出て行くナランティの姿を凝視しているフェルの瞳に気づいた。

空と同じく痛ましさから来るものなのだろうと思うものの、感情の见えない赤銅色は、まるで静かに何かを堪えているようでもあった。

今にも燃え上がりそうな憎しみを抑えているかのような。

自分で考えてしまつてから、空はあわてて頭を振る。

そんなはずはない、そんなことがあるわけがない。

そう思うのに、なぜか身震いする空。

何もかもを飲み込んで、儀式は始まるうとしていた。

98・ナランティ（後書き）

ついに長旅を終え、海の巫女ナランティを救うべく儀式に臨む空。  
はたして彼女を救うことはできるのか 次話をどうぞお楽しみに！  
更新はまた来週の予定です。

## 99・フェルザンド

海の寢床　この聖殿において最も清浄な場所とされる、巫女たちの祈りの場。

それは光り輝く海を一面に見渡すことのできる一室のことだった。ちょうど大きく突き出たバルコニーの下に位置する小さな部屋は、一見何もない狭い空間に見える。

しかしちょうど太陽が雲に陰り、微妙な光加減に照らされた時、その呼び名の由来がわかった。

まるで部屋の中に海があるかのように、ゆらゆらと揺れる水面の影が映りこみ、そして水色に塗られた壁が青く染まったのだ。

「本当に海みたい……綺麗」

思わず呟いてしまった空に微笑んだのはナランティだった。

椅子の代わりに用意された寝台に身を横たえ、唇を開く。

「そう、母なる海に抱かれて眠っているようでしょう？　だからこの場所が、私たちにとって一番落ち着き、穏やかに精神を統一し、祈ることができる聖域なのです。この現象だけではなく、本当にネイアの愛が力となって伝わってくる　本来は巫女以外立ち入ることのできない部屋なのだけれど、特別な儀式の場合においてのみ開放されるのですよ」

海の色 of 衣装に身を包み、そつと瞳を閉じたナランティ。

その言葉通り、先ほどよりも少し顔色がよくなったように見えた。

これなら、もしかして助けられるかもしれない。

期待を込めて視線をやった白水晶の剣は、巫女たちの手によって更に清められ、空に渡された。

沐浴を済ませ、巫女たちと同じ青い衣装に着替えた空を、壁際に立ったフェルとフェイラも見つめている。

準備を終えた巫女も、全員が中央に置かれたナランティの寝台を取り囲むように膝をつき、両手を組んで祈り始めた。

「さあ、姫君　！」  
フェイラの声に促され、空は胸に剣を抱き、巫女たちの間を歩んでいく。

寝台の周りにいくつか置かれた水皿には、彼らにとって聖水である海の水が湛えられ、大きく開けられた窓から吹き込む風と共に、空に海の匂いを届けた。

「ごくり、と息を呑み、空も覚悟を決める。

静かな巫女たちの祈りの声に後押しされながら、ゆっくりと白水晶の剣を鞘から抜き放つ。

「純粋な水晶の結晶である剣は、光を反射して青く光った。

「剣よ、どうかナランティ様を助けて　！」

彼女の老いを止めて、願わくば……元通りの美しい姿に！

祈りを込めて、剣をナランティの胸元にあてる。

剣も空の声に應えるように、力を発揮する　かと思いきや、いつまで待っても光ることはおろか、何の反応も示さなかったのだ。

「そんな……！」

青ざめて、座り込んでしまう空。

祈りを止め、ただ俯く巫女たち。

驚愕に瞳を見開くフェイラとフェル　『海の寝床』にいる者全員が非情なる剣の判断に静まり返るしかできなかった。

ただ一人、ナランティ本人以外は。

「やはり……そうでしたか。いいえ、こうなることはわかっていました。これは精霊の剣。ネイアの言葉と等しいもの　すなわちネイア自身によるご判断なのです。最大の禁を破り、自らの力を揮った私への　」

青い青い海と同じ色の瞳で悲しげにそう言った、ナランティの言葉に皆が眉をひそめた。

禁を、破った？

「どういうことかと立ち上がった空を見つめながら、ナランティは微笑んだ。

「そうね。もうこれ以上隠し通せないわね……ごめんなさい、フェイラザーン、そしてフェルザンド。あなたたちの努力を無に帰すような結果になってしまって。けれどね、私は知っていたの。もう私がおもてなさないことを。だってそれこそが私自身の望みだったので」

「ナランティ様、それは一体どういう……！」

信じられぬといった顔で近寄ろうとするフェイラを、フェルが後ろから止める。

「私は　もう何年も前から気づいていたの。このビバスを……いえ、エスタリア大陸全体に襲い掛かろうとしている脅威に。それは収穫の不作であったり、人心の乱れであったり、様々な場所で少しずつ姿を現し始めていた。けれど止めることはできない。許されていないかったのよ。私たちのように聖なる力を与えられた巫女たちが、神のご意思に逆らって何かを行うことは……」

両手を組み、ゆっくりと語り始めるナランティ。

時折声につまるところからしても、話をするこすら体に障るらしいのがわかる。

「ナランティ様　」

呼びかける巫女たちを眼差しだけで制して、ナランティは続ける。それほどに今、彼女にとって語らなければいけないことなのだと言にも伝わり、だからこそ誰も止めることができなかった。

それは空も同じ、いや、ある意味彼女たちとは違う衝撃に襲われていた。

そんな、ビバスにも同じことが起こっていたなんて。

かつてミディアスの森で精霊たちが訴えかけたように、全く同じことにナランティも気づいていたというのだ。

「でもね、私には耐えられなかったの。何もできずにただこの世界が『魔』に侵食されていくことが。皆が愛する世界が壊されようとしていることが　それで、私は自分自身の力を揮った。このビバスを……愛する人々を救うために。自分の聖なる力を削り、ビバス

を脅かそうとする『魔』の力を出来得る限り食い止めてきたわ。けれどももうこれが限界、皆も知っている通り、最近ビバスでも徐々に魚は獲れにくくなり、あちこちで争いが起こり、魔も出没しはじめている。そして、限界に近い力を使った私への報いはこうして

『老い』という形で私自身に現れたの。だからね、優しいミディアスのお姫様　私を救えなくても、決して自分を責めないで……」

「ナランティ様、ナランティ様っ！」

力を使い切ったように咳き込み、苦しみ出すナランティに巫女たちが駆け寄る。

フェイラはあまりの衝撃のためか、壁際に突っ立ったまま、真っ白な顔でその様子を見下ろしていた。

「スニア様！　ナランティ様が　どういたしましたしょう!？」

年若い巫女たちに怯えたようにしがみつかれ、スニアが立ち上がる。

「しっかりなさい！　早く薬湯を　お前たちが動揺してどうなるのです！　ナランティ様の背をおさすりして！　落ち着かれるように、祈りを捧げるのです！」

手早く指図して、スニア自身がナランティの両手を取り、必死な様子で祈る。

巫女たちの聖なる力でか、ナランティの乱れていた息は静まり、そっと穏やかな寝息を立て始めた。

しかしその寝顔はもう力を使い果たしたことが誰の目にもわかるほど、青白く、弱々しいものだった。

「そ、んな……そんなことがあっていいのか！　ビバスを守るために尽力した巫女が　ナランティ様が、このように老いて死んでいくというのか！」

搾り出されたフェイラの声に、絶望が色濃く現れていた。

おそらく空の持つ剣に全ての望みを託し、願いを込めて快復を待っていたのだろう。

そんなに大切な相手がもう助からないと思いきらされ、どれほど



に彼女の心が嘆いているか、空にもわかる気がした。

「落ち着かれませ、フェイラザーン様。あなたさまはお小さき頃からナランティ様に我が子のように可愛がられたお方。母とも同じナランティ様のお心がわかりませぬか!? そのように嘆かれることなど、ナランティ様はお望みではない! ナランティ様のご意思に従い、すみやかに次の巫女を選び、その役目を受け継ぐことこそが我々の使命でございます!」

薄い水色のスニアの瞳　フェイラを一喝し、巫女たちを指導する彼女の顔には涙こそ流れていなかったものの、もし許されるなら泣きたいのではないか。

そう思えるほどに悲しい色が宿った瞳だった。

「スニア……しかし……しかし!」  
床を拳で打つフェイラを見ていられなくて、空はそつと瞳をそらす。

青く揺れる『海の寢床』で、静かに眠るナランティ　金の美しい長髪には、更に白いものが混じったようにも見える。

世界が、壊れようとしている……?!

だとしたらそれは魔の力によるものなのか、それとも  
空が考えられたのはそこまでだった。

今まで黙っていたフェルが、背後から空の肩を抱いたかと思うと、突然はがいじめにしたのだ。

「フェ、フェルさん　?」

「フェル、何を……!」

驚愕に満ちた部屋の中で、フェルが小さく笑った。

「何がナランティ様のご意思だ　何が使命だ。そんな馬鹿馬鹿しいことがあるか?　今まで散々巫女長だと偉そつに命令を下しておきながら　その人生全てまで決められた者の心はどうなる?　痛みは　?　自分だけが安らかに眠ろうなどと、そんな勝手な言い分、許されてたまるものか!」

激しく言い捨てたフェルの声に、その場の全員が固まる。

続いてフェルが指先に灯した青い炎で、巫女たちから悲鳴が上がった。

「なっ、何をしている、フェル！ 姫君から手を離せ！」

フェイラに命じられても、フェルは空の体を離しはしなかった。むしろ一層力を込めて空の抵抗を奪い、青い炎を目前に近づけてくる。

「一緒に来ていただきます、姫君」

耳元に囁きかけられ、空は今起こっているのが現実の出来事なのだと思いがさされる思いだった。

そんな……優しくかつた彼が、なぜ……？

頭の中に巡る疑問に答えは出ず、空はそのままフェルの大きな肩に抱え上げられる。

「はっ、離してください フェルさんっ！」

必死で叫んだ空を助けようと、フェイラが追いかけてくる。しかし青い炎に足止めされ、巫女ともども近づいてくることができなかつた。

「フェル！ 貴様 聖域で何たることを…… 姫君に何をするつもりだ！」

悔しげに叫んだ姉に、フェルの足は止まり、ゆっくりと振り返る。

「フェルザンド それが私の唯一の名ですよ、姉上」

答えた彼の顔には艶やかといえるほどの微笑が浮かんでいたが、空の目には見えず、ぞっとするような冷たい声だけが耳に残った。

「だ……誰か、助けてっ！ エシユタンド ！」

空の悲痛な叫びは、眠るナランティには聞こえていたのかどうか残された『海の寢床』は静かに青くきらめくのだった。

## 99・フェルザンド（後書き）

期待も空しく、ナランティを救うことのできなかつた空。  
失望の中、フェルに連れ去られた空の運命は・・・！？  
というところで次回へ続きます。

次話でフェルの過去が明らかに……どうぞお楽しみに！  
更新は来週か、再来週の予定です。

100・海(前書き)

続きを楽しみにしてくださっていた読者様、お待たせいたしました！  
今週分の更新です。

連れて行かれた先は、聖殿の裏だった。

泊めてあった船で待っていた男に何事かを指示して、フェルは空を抱えたまま乗り込んでいく。

この人、確かあの時屋敷で……！

黙って船室へと姿を消した男の顔は、間違いなく空が街道沿いの屋敷から連れ出された時、一緒に馬車に乗り込んでいたうちの一人だった。

フェイラとピバスへ向かってからは見なかったから、てっきりフェル個人の護衛か何かだったのだろうと気にも留めていなかったというのに。

これは最初から仕組まれたことだったのだ。

気づいた時には既に両手首を束縛され、空は甲板に下ろされていた。

すぐに動き出した船の音で、空の顔色が変わる。

「ど、どこへ行くつもり？」

訊ねた空のすぐそばに膝をつき、フェルは優しい微笑さえ見せる。「王宮ですよ、海路ならすぐに着きます。巫女たちは皆、炎で足止めしてある。邪魔が入る心配ありませんよ」

その口調も、笑顔も、何もかも今までと変わらぬように見えるのに。フェルの瞳に宿る狂気の色だけがはつきりと異なっていた。

「どうして王宮へ？ ミディスに帰してくれるって。約束したじゃない！」

ついに声を荒げた空を見ても、フェルは顔色一つ変えなかった。

平然と空の頬に手のひらをあてると、赤銅色の美しい瞳で覗き込む。

「ええ、約束しましたよ。確かに。姉上がね」

笑いながら言うのけるフェルを、空は信じられない思いでにら

みつけた。

「そんな そんなのつてない！ 信じてたのに……あなたたちの大切な人を救いたい気持ちがあったから、だからここまで着いてきたのに　！　嘘つき！ 卑怯者！」

悔しさに涙さえにじんでくる。顔を赤くしてなじる空にもフェルは全く堪えた様子もなかった。

「どう言っていたいただいても結構ですよ。それにこれは　あなたのためでもある」

「何、ですって……？」

問いかけると、フェルは手に浮かべた青い炎を愛でるように操りながら、笑った。

「このままミディスになど帰ったところで、あの王妃に命を狙われ、無事に王子と結婚できるかどうかなど危ういものです。その点、ピバスに残り、私の言うとおりにしてくださいれば、あなたには生涯の安定と権力が約束されるのだから」

「あなたの言うとおりにして、一体何を　」

眉を寄せ、訊ねた空の黒髪を軽く撫でて、フェルは続ける。

「次の巫女となって、この国を治める女王の隣に立つことですよ」  
まるで幼子に諭すかのような言い方で、あっさりと言ってみせるフェルに、空は瞳を見開いた。

あたしが、ピバスの次の巫女に？　何を言ってるの……！？  
言葉も出ない空の表情を見透かしたらしいフェルは、おかしそうに瞳を細める。

「そんなに驚かれずとも、大丈夫ですよ。あなたには人を魅了する力がある。女王にも、きつとすぐに気に入られます」

「そつ、そういうことを言ってるんじゃないかって……そもそも巫女つて聖なる力を持つてる特別な人のことでしょうか？　どうしてあたしなの？」

納得が行かずに食い下がる空にも、フェルは片眉を少し上げただけで微笑む。

「聖なる力なら、貴女も持つていらっしやるではないですか。暁の娘としての、不思議な力をね」

「それは」

自分でも存在しているのかすらはつきりとわからない力を持ち出され、口ごもる。

「このビバスも、危機に面しているという点ではミディスと同じだ。では我々が暁の娘を得る権利だつてある。そう思いませんか？」

一瞬の隙を逃さず、余裕の笑みで詰め寄られて、空は答えることができなかった。

というよりも、答える意味などないことがわかったのだ。

フェルの瞳には、何を言っても変わらない狂気の意味が赤々と燃えていたから。

「あの……フェル　フェルザンドさんは、ナランティ様を憎んでいるんですか」

突然の質問に、フェルの余裕が崩れる。わずかに不快そうな顔をして、空を見下ろした。

「憎む　そうですね。もうずっと、あの方が憎くてたまらなかったのかもしれない。母とも慕う、その心の裏側で。生まれてすぐに生きる道を決められた私が、決めた相手を慕うなどと、自分でもおかしいとわかつていた。けれど確かに慕っていた。あの方が醜く老い始める前までは……」

フェルの呟きは、独り言のように海に向けて発される。彼の浅黒い肌は、太陽に照らされても汗ひとつかいていない。

思わず立ち上がるうとした空を、無言の炎で制してフェルは振り返った。

「動かないでくださいね。あなたを自由にしては、何をされるかわからないからな」

通りでの一件を思い出したのか、一瞬和らいだ顔に希望を見出すが、それとは裏腹に、空を取り巻いた青い炎の勢いは緩められてはいない。

「その代わり、と言ってはなんですが、お答えしましょう。あなたの頭に先ほどから浮かんでいるであろう、ご質問にね」

熱くはないものの、すぐそばで燃え盛る炎に身を縮めて、空はフェルを見上げた。黙ってそうするのが一番いいだろうと判断したのだ。

「代々近衛兵として王家にお仕えしてきた家に生まれた私が、なぜ怪しげな術士をしているのか。そして、更には諸国を回る吟遊詩人として生きているのか、という質問ですよ。それが先ほどの、ナランティ様への感情につながる唯一の答えでもある。つまり、私ははめられたのですよ、王家と、そしてそれを支える巫女　ナランティ様にね」

その名を出すたびに、フェルの瞳には暗い影が立ちこめる。その影の意味を、ずっと彼女を想うあまり、心配でたまらないのだろうと解釈していた空は、眉を寄せる。

「ビバスには、双子にまつわる言い伝えがあるのです。双子、特に男女のそれは、不吉であるとされ、生まれてすぐに引き離すのがよいと言われている。それに従って姉と引き離そうとしたものの、家を継ぐ男子である私を手元に置くのか、それとも母が待ち望んでいた娘である姉を残すのか、最後まで両親には答えが出せなかった。家系に双子などいかなかった我が家では、そんな覚悟などできていなかったのですよ。そこで担ぎ出されたのがナランティ様　その時既に長を継ぐことが決定していた若き巫女でした。彼女の答えはこうだ。『引き離す必要などない。彼ら二人は共に置き、先に才覚に秀でたものを表とし、そうでなかったほうを裏とすればよい。表は裏の影となり、生涯支えていくことを役目とする。そうすれば災いが起こることはない』と。結局どちらに決めかねた両親はその言葉に従った。その結果がこれです」

姉は近衛隊長となり、弟は術士となった。今の二人が生まれた経緯を知らされ、空は複雑な思いで目をそらした。



ただ双子だったからといって、人生まで決められるなんて…。

現代の日本では考えられないことだ。けれど当然のように語られる迷信があり、当然のように対処を余儀なくされる人々に空は胸の痛む思いだった。

「姉は幼い頃から身体能力にも長け、社交性も持っていた。自分の世界に閉じこもりがちで、歌と詩が好きだった私と比べれば、姉が表として選ばれるのは当然だ。私とて、それを不服なく受け止めていた。いや、姉を支える陰という役割に誇りさえ感じていたといっても過言ではなかった。十二になった日、王宮で侍女たちの噂話を聞くまではね」

ただ裏となつてしまったことを恨んでいるのかと思つた空は、意外なことに顔を上げる。

目が合つたフェルが、暗い微笑を浮かべた。

「お気の毒なフェルザンド様、何もご存知なく、陥れられてとね」

「陥れられた…？」

「そう、我がレンデス家は代々近衛隊に選ばれてきた一族。前王決定時にも候補者に父上や叔父の名が上がったほどの、有力な家系です。自分の家系から次の王位継承者を出したかった女王が、巫女に指図をし、偽りの占いをさせたのではないか、というのがもっぱらの噂だったそうです。滅多に王宮にも出入りしなかつた私だったが、たまたま姉の用事で付いていった時に聞いてしまった。父上に問い詰めたら、驚くことなく苦い顔をされた。それはつまり、父上もその事実を知らなかつたわけではないということだ。あの頃体も弱く既に死期が近かつた母に心痛を与えなくなつたこと、そして何より二人の子を手放したくなかつたのだと、父に泣いて謝られた私はそれ以上を訊ねせず、今までのように生きていくことにした。どのみち、表舞台に立ちたいなどという欲求は私にはありませんでしたからね」

でも、とフェルは唇を噛んだ。すらすらと語っていた彼が、眉を寄せて苦しげな表情を見せる。

「あの方のことだけは許せなかった。母が亡くなった後、自然と母の役割を求め、すぎた我々二人を抱きしめたあの優しさ。あの笑顔は所詮偽りのものでしかなかったのかと。思い知らされたのですよ、所詮は世の中こんなものなのだとね。老いていくあの方の姿を見て、その思いは一層強まった。聖職者でありながら世に染まり、王のいいなりになったあの方はもう、私の中にいた『清き母』ではなかった。だから覚悟を決めたのです、あなたの剣でも治せなかった時には切り捨てる、と」

どこか影があり、冷めていた彼の態度はここから来るものだったのか。納得しながらも、どうしてもわりきれない部分がある。

それは空自身が、というよりも、フェルの心にある微妙なずれが感じられるからかもしれない。

「幸い現女王は先代とは違い、血縁者でありながらもとても優れた政治をされる潔癖な方だ。彼女を支える役目には、本当に純粋な貴女のような人こそがふさわしい。私は貴女を支える影となりましょう。姉上の影はもうごめんだ。もともと偽りであった占いに人生を捧げる必要はありませんからね。そう思いませんか、姫君」

一見、今まで目にしてきたものとまったく同じ穏やかな微笑を見せながら、空に手を差し伸べてくるフェル。

しかしその下に揺れる不安定な心が、空にはなぜか泣いているように見えたのだ。

「そう……ですね。あたしもそう思います」

答えは、自然と口から滑り出た。

「では」と嬉しそうに輝きかけたフェルの瞳をまっすぐ見上げて、空は続ける。

「占いで人生を決められるなんてごめんです。それに、誰かの影として生きていくことも。だから、あたしは影なんていらぬ。誰かを自分の影にして生きていくことなんてしたくない。自分の人生

は、自分が輝くためのものでしょう?」

フェルがはっとした顔をするのと、空を取り巻いていた青い炎が一瞬ゆらめいたのが同時だった。

瞬間を逃さず、空は立ち上がる。両手首を束縛されながらも、空は足元にあつた白水晶の剣を取り、フェルに駆け寄った。

しまった、とでも言いたげな赤銅色の瞳。その色は怒りというよりも、寂しさに揺れている。

自分を残して、先立ってしまうナランティへの。

「あなたがナランティ様を憎んでいるなんて嘘です。ううん、憎しみ半分、なのかもしれない。そんなに相手を憎むことこそ、それだけ愛しているっていう証拠です。そうだと思いますか?」

純粋な水晶の切っ先を首元に突きつけながら、空は問う。力で勝てるとは思っていない。だから正直、無謀な行動だ。

それでもフェルは炎で攻撃することはせず、呆然と唇を動かした。  
「愛?」

わからない、と端正な顔がゆがむ。しかし瞳の動揺こそが、真実を述べていた。

「あなたは彼女を愛しているんです。それが母と慕う心なのか、それとも別のものなのかはあたしにはわかりません。けれど、あなたの心が嘆いているのはわかります。なぜ。と運命を呪う気持ちも。

その穴はあたしには埋められない。だって、あたしはこの国の巫女になるつもりも、ここで『暁の娘』をやるつもりもないから。この国の危機を救うのは、あたしじゃない。それはあなたにだってわかってるはずじゃありませんか?」

まっすぐに問いかけた空に、フェルはただ首を横に振る。その仕事は取り残された子供のような、頼りなげなものだった。

しかし空は躊躇しなかった。先ほどから感じていたのは確かに気のせいじゃない。首もとの想緑珠が熱い。熱くてたまらない。

「あたしがそばにいたいと思うのは、エシユタンドだけ。彼の役に立ちたいから、今あたしはここにいます。だから、あたしはミ

デイスに帰る　　！

「ごめんなさい、と心の中で謝って、空は剣を突き出した。怪我をさせるつもりなどなく、ただここから逃げるために。」

「束縛を解いて　今すぐあたしを自由にしてください。やってくれないきゃ、何をするかわかりませんよ。そうでしょう？」

最後はいたずらっぽく口角を上げて言う。背中には汗が流れていたが、フェルは瞳を睨り、空の脅しを信じてくれたようだった。

ため息をつき、両手首の縄をほどく。ほっとした空が剣を下ろし、お礼を言おうと前を向く　その瞬間を逃さなかったのはフェルだった。

「これで何度目の忠告でしょうね。言ったはずでしょう？　人を簡単に信じてはいけないと」

耳元で囁いた彼が、空を抱き上げる。瞳の奥で光る狂気は、空の言葉程度では動かせないところまで来ていたのだ。

顔色の引いた空が抵抗し、暴れる。力の差は歴然としていて、もう逃げられないのかと空が絶望的な思いに囚われた、その時。

カタンと小さな音がして、空の衣服から何かが落ちる。

気づかず足で踏んだフェルが、顔をしかめる。数秒もせずに湧き出した白い煙と、甘ったるい匂い。

鼻の奥をつくようなそれを発している煙は、割れた小瓶らしきものから発されている。

瓶の残骸を見て、やっと空は思い出していた。

ビバスの通りで、旅芸人にもらった小瓶の存在を　『危なくなったら、これを使いな』　そう囁いた男のことを。

ただ念のためにと衣装の胸元に忍ばせておいたものが、偶然役立ったのだ。

何の薬かはわからなかったが、術士のフェルも油断には勝てなかったらしく、ふらついて、空を抱く腕の力が緩む。

空にはなぜか薬が効かなかったようで、幸いフェルの腕から逃れることができた。

逃げようと思いついてから、既に陸地は遠くかすんでいることに気づく。

悩む間もなく、フェルが倒れた音を聞いたのか、船室から男たちが数人飛び出してくる。

「女を取り押さえろ　早く！」

口々に叫びあい、向かってくる男たちを目にし、空は息を呑んで背後を見やった。

広がるのは、青い青い海　逃げる場所など、どこにもない。

一瞬浮かび上がった絶望的な思いは、首もとの石と手にした剣の熱さに後押しされ、消える。

あたしがそばにいたいのは、ただ一人だけ……！

瞳を閉じて、心に浮かぶ藍色の面影に励まされた空は、咄嗟に剣を腰紐に差して、くるりと海に向き直り、手すりを乗り越え、そのまま飛び込んだのだ。

ナイアーレに湧き上がる街の音楽が、遠く聞こえたような気がした。

100・海（後書き）

フェルの悲しい狂気から逃れるため、海に飛び込んだ空。

続きが気になるところですが、次話はまたテローザの森に舞い戻ります。

空とエシュタンド、二人がこのままどうなっていくのか、どうぞお見逃しなく！

次話は来週更新できるよう、頑張ります！

マデオスら搜索隊の全員は昼を過ぎても戻ってこなかった。

クガルの回復を待って、ついにエシユタンドは残りの兵たちと森へ入る決断を下した。

いくら待っても戻ってこない彼らは、どう考えても魔によって何らかの形で足止めされているとしか思えなかったからだ。

「最悪の形でなければいいが……」

つい思いを口に出していたことに気づき、エシユタンドは眉を寄せる。

そばについてきていたクガルには聞こえただろうが、黙って馬を降り、木に縛り付けている様子からすると、聞こえないふりをしてくれたらしい。

「殿下、気になることが一つあるのですが」

クガルがそう話しかけてきたのは、エシユタンドも馬を括り付け、この先進む森を視界に入れていた時のことだった。

残りの兵とイラルは簡易食料や水、武具などの荷を下ろし、各自分配を始めている。

「意識を失っていた間に、何か怪しげな声を耳にしたような気がするのです。低い男の声で、『すべて、滅びてしまえ』というような」

「その声なら、私とイラルも聞いた。人間の声ではなく、魔が発しているのか何かはわからなかったが……」

後を受けたエシユタンドに、クガルは何事か思案するそぶりを見せる。

「どうした、何かほかにも目にしたものでや気づいたことがあれば言ってくれ。何でもいい」

手がかりになるものなら　そう促すと、クガルは無意識にか、首元に触れながら口を開く。その手はおそらく、衣装の下にある昔

の想い人にもらった宝石に触れているのだろう。

「関係があるかはわかりませんが、昔、部族の長に聞いたことがあるのです。破滅の声を……」

「破滅の声？」

「ええ。魔にかかわる場所で、時折誰かが聞いたことがあるという、不思議な声のことです。破滅を願うその声を聞くと、なぜか心が乱され、正気を保てずに、時には死んでしまうこともあったとか。森の深い場所で起きたことで、森の部族ぐらいしか知らない言い伝えだと、小さな頃に聞いたことがあります」

クガルの言葉を頭の中で反芻しながら、エシユタンドは腕組みをして考え込む。

「ほかには、何か知らないか」

「長は　確か、血に気をつける、と言っていました。邪なものが血を流させ、そこから入り込み、心を操るのだと」

「血……それが何か形ある石とは結びついていなかったか？　赤い石だ」

「さあ　そこまでは」

申し訳なさに答えたクガルに、エシユタンドはしばらく考えた末、石のことを話してきかせた。

先ほどクガルを操った不可思議な力　それはおそらくあの洞窟でエシユタンドとイラルが目にした怪しい石のものであるに間違いない。

石がどうやってできたものなのかわからないが、魔と関わりがあるのは確かだろう。

そう結論付けての問いだったが、クガルはただ首を振っただけだった。

「そうか　ならいい。とにかくお前はまだ無理をするな。私の後ろについてきてくれ、いいな」

「あの、殿下……」

念を押して先へ進もうとしたエシユタンドに、クガルがためらい



がちに声をかける。

「大した話ではないかもしれませんが　意識を失っている間に、昔の夢を」

「昔の夢？」

「はい。流行り病で部族の皆が死に絶えようとしていた、あの時の……。何もできないまま、目の前で皆が倒れていく　想いを寄せていた少女が瞳を開いたまま足元に倒れている　そんな苦い夢です。実は時々見ている夢なのですが、先ほどのものは更にひどかった　少女が自分を責めるのです。なぜだ、なぜお前だけは生きている、と。血に染まった赤い手で私を呼んでいる。血の涙を流す彼女に、私は手を差し伸べざるを得ませんでした」

思い出しただけでもつらくなるのか、わずかに震えた手を握り締め、クガルは前方を見つめた。

しかし再びエシユタンドに向き直った時、栗色の瞳に浮かんでいた暗い陰りは薄まっているように見えた。

「その時、夢の中で首もとの石が　彼女にもらった紫水晶が熱を帯びるのを感じました。見下ろすと明るい色に光っていた　それと同時に倒れていたはずの彼女の体は掻き消え、頭の中に声が響いてきたのです。『違う』と」

黙ったまま見つめるエシユタンドの前で、クガルは衣装の中に入っていた首飾りを引き出し、石を手の中に握った。

もちろん光などは発されていないが、どこか清浄な色にきらめいて見えた気がしてくる。

「『違う、それは私の声じゃない』と、声は確かに言っていました。それは今まで忘れたことなどなかった、彼女の声に間違いありませんでした。途端、目の前に広がっていた凄惨な光景は消えうせ、ぼんやりとした彼女の幻影が見えたのです。驚いて見つめた私に、彼女は優しく微笑みました。彼女はそれ以上を語りはしなかったけれど、私には聞こえた気がしたのです。『もう、苦しまないで』という彼女の言葉が　」

「クガル……」

今までずっと胸に抱いてきたのであろう後悔の念が垣間見えるよ  
うな、クガルの苦しげな顔つき。

紫水晶を握り締めながら、彼女の言葉をかみ締めているのだろう  
か。クガルはしばらく瞳を閉じていたかと思うと、ようやくエシユ  
タンドに笑った。

「あれは私の願望だったのかもしれない。贖罪を願う、私の思いが  
見せた幻影でしかなかったのかも　しかしあの時の笑顔は、確か  
に昔と同じ彼女自身のものだった」

肯定の思いを瞳だけで返したエシユタンドを見て、照れたように  
首飾りをしまい、クガルはいつもの微笑に戻った。

「彼女の夢のあとに起こった出来事は、殿下もご存知の通りです。  
あとはただ暗黒の世界でもがいていた私を、殿下のお言葉と白金の  
光が救い上げてくださった。私は生涯で二度も、殿下に救われてい  
ますね」

自嘲の色が濃くなった栗色の瞳を見つめ、エシユタンドは優しく  
笑い返した。

「私だけじゃない。お前はたくさんの人に想われ、慕われ、救われ  
てきたはずだ。それは昔亡くした家族であったり、部族の人々であ  
ったり、隊の仲間であったりする。そして　お前を想う少女でも  
あるはずだ」

「殿下」

黙って紫水晶の感触を確かめたクガルの肩を、エシユタンドが奮  
起させるように叩く。

「想い出の彼女だけじゃない。今、生きている人物だっているだろ  
う」

先ほど手当てをした時に衣装から見つけた刺繍入りの袋は、今も  
おそらくクガルの胸元に大事に入れられている。

それをエシユタンドが知っていることに気づいているのか、いな  
いのか、クガルは不意をつかれたように一瞬瞳を泳がせ、頬を染め

た。

そうだ。過去を忘れるとは言わない。でも、大事な今は今だ。生きている者同士が幸せになることだ。

口にはせずとも、エシユタンドが何を言いたかったのかは伝わららしい。

クガルは首元から胸に手を移し、一瞬固く瞳を閉じたかと思うと、気分を切り替えたのか、背後の兵たちを見やった。

「では、殿下　　搜索を始めましょうか」

今度こそ隊長としての表情を取り戻したクガルが、前方に立ち並ぶ木々を指し示した。

午後、日差しが低くなってきても、搜索は遅々として進まなかった。

不思議なことにテローザの森は、奥へ進めば進むほどに木々はまばらになり、開けていく。

にもかかわらず、広い草原となった搜索範囲に苦しめられるだけだった。

前日と違い、魔も動物たちも静まり返って、何の攻撃も示してはこない。

しかしその静けさこそが、嵐を前にした束の間の沈黙であるかのような、不気味な予感を生み出していく。

ついにこの日も何の手がかりも発見できぬまま、搜索をあきらめなくてはならないのか　　誰もがそう覚悟しかけた、夕刻のことだった。

「殿下　　あちらを」

クガルに言われて見やった前方には、一見何も変わった様子はない。しかし目を凝らすと、ぼんやりとした薄明かりを放ちながら飛

んでいる虫がいたのだ。

「あれは……ラキスじゃないか」

言ってから、この季節に見るはずのない虫であることに、エシユタンドは眉を寄せる。

隣に立ったクガルも、同じように不思議だと顔に表している。

「イラルは　まだ追いついてこないのか？」

先ほど分かれ道を分担して進んだイラルと残りの兵たち　遠目に見ても同じ草原につながっているのがわかったから、短い時間だけ隊を分けたつもりだった。

イラルたちが選んだほうが、木々の多い獣道であったとはいえ、もう姿を現している頃である。

そう思った途端嫌な予感に包まれ、エシユタンドとクガルは同時に目線を合わせた。

「ピア、偵察だ！　イラル殿と兵の皆を　」

クガルがそう指示を出そうとした、その時だった。

呼んだはずのピアがいないことに気づく。あたりを見回すと、そこにいたはずの他の兵たちさえ忽然と姿を消していたのだ。

「殿下！　全員おりません！」

息を呑んだクガルが、すぐに木々の並ぶ方角へ駆け出す。

ちようど二人のいる草原を取り囲むように四方には高い木々がそびえ、二人を無言で見下ろしている。

「待て、クガル！　これはきつと　」

言い掛けたエシユタンドの言葉は途中で止まった。

それ以上を言う必要がなかったのだ。

「ピア！　アシェリも　お前たち、どこへ行っていた！」

急に背後の木々をかき分けて現れた二人に、クガルが声を上げる。

「マデオス　！」

すぐ反対側から顔を見せた第一私兵隊の兵たちを発見し、エシユタンドも叫んだ。

姿を消していた兵全員が、ばらばらと木々の後ろから現れ、ぼん

やりとした顔つきでこちらへ歩いてくるのだ。

「マデオス殿！」

動こうとしたクガルの腕を、エシユタンドが引く。

「クガル 近づくな。彼らは、操られている！」

言ったと同時に攻撃は仕掛けられた。風を切る感覚がしたかと思うと、すぐ近くの足元にぴんと伸びた矢が刺さっていたのだ。

顔色を変えたクガルがすぐに結界を張る。危ういところで次に放たれた矢が空中に弾き返された。

「……彼らが、攻撃してくるなんて」

呆然と呟いたクガルの言葉に、エシユタンドも舌打ちする。

眠らせるだけではなく、操り、自分たちに攻撃を仕掛けさせる

あきらかに魔の喜びそうな手口にまんまと引っかけた自分が口惜しかったのだ。

言葉を失った二人に、ゆっくりと兵たちが近づいてくる。緩慢な動作、それはまるで夢の中を漂うような頼りないもの。

しかしだからこそ何をも恐れることはなく、結界にすら何度弾かれても入ってこようと試みる。

攻撃術を得意とする兵たちは、結界に跳ね返され、自分たちが傷つくのもかまわずに何度も術を繰り返してくる。

「やめろ、やめてくれ 皆、止まるんだ！」

無駄だとはわかっていても声を張り上げずにはいられない。クガルの心情は、結界を張っている両の手が震えていることで痛々しいほど伝わってきた。

たった今まで共に行動していた仲間たちが、自分の意思を奪われ、自身の体がぼろぼろに傷ついていくことも知らず、ただ向かってくるのだ。

その手に、二人を傷つけるための武器を持って。  
一瞬拳を握り締めるも、自分に彼らを攻撃するための風が起こせるわけはなかった。

絶望的な状況を、エシユタンドはただ見ていることしかできない

「どうだい、仲間に裏切られた気分は」

空中から突然降ってきた声に、頭上を仰ぐ。

いつから見ていたのか、そこには余裕たっぷりに紺の翼をはためかせている少年がいた。

「お前、生きていたのか」

悔しそうに呟くクガルに、少年はこれみよがしに肩の傷を見せつけ、笑ってみせる。

「ふん、この程度で殺せると思ったのか？ 甘いね。まあ、俺に傷をつけたのは褒めてやるけど 単なる雑魚だと思った割にはいい働きをする。だから今度はもっといい方法を思いついたんだ。大事な鳥たちの数を減らさずに済む、一石二鳥の名案さ。思いついたのは、俺じゃないけどね」

言つて、楽しげに少年が顎で示した二人の背後には、いつしか巨大な獣にまたがったケイマの姿があった。

金の髪を風にはためかせ、冷めた表情でこちらを見ている 森の民の長だった少年が。

「人間は、同属同士で恨みあい、殺しあうおかしな生き物なんだとさ そこにいる、ムルグの意見ではね。俺も同感だ。だから思いついた。お前たちを最大に苦しめ、いたぶる方法を」

まさに憎しみに満ちた瞳。何がそこまで彼を駆り立てたのか、エシユタンドには理解ができないものの、本能的に背筋に感じた寒気は、自分への恨みであるようにも思えた。

「それが彼らを操り、我々を攻撃させることだというのか。くだらぬことを そんなに私が憎ければ、直接かかってくればいいだろう！ 罪のない者たちを使うのはやめてくれ！」

常に自分を守り、忠誠を尽くしてくれる兵たちにさせている残酷な仕打ち。こんなことが許されていいはずはない。

怒りを込めて叫んだエシユタンドに向けられたのは、更なる強い憎しみの目だった。

「うるさい　！　思い上がるな！　これがお前一人に向けた怒りだと思うのか！？　そんなことならさっさと殺してしまえばいいことだ。それでは解決しない　この国に巢食う問題はな。貴族も王族も、裕福な商人たちでさえ、貧しい村人たちには目も向けない。周囲で起こっている貧困など知りもせず、のうのうと宴を開き、豪華な服を着て、腹いっぱい食事を楽しむ。そんな者に何がわかる？　貧しいというだけで、生まれたばかりの赤子であろうが、老人であろうが、区別なく死んでいく　日々の食べ物さえままならぬ状態に、若者さえ空腹に倒れる。そんな村に生まれた者はどうすればいい？　同じ人間なんだ。同じように腹も減れば、同じように喉も渴く。いいや、汗水たらして働きもしないお前なんかよりも、もつとな　！　近くの領主に救いの手を願っても、門前払いにしかならない。所詮はその程度の存在なんだよ、人間なんてな　！　」

それは心の底からの叫びだった。  
瞳をそらしてはいけない、耳を塞いではならない　そう思い知らされる、痛々しい真実。

今まで思い描いたことなどなかった、自分の生きる国の民。  
荒廃に苦しみ、貧困に苦しみ、ただあえぐしかなかった彼らの声に、エシュタンドは震えていた。

ただ生まれた場所が違っただけだ。自分が王家にいるということ  
は、ただそれだけのことなのだ。

気づかされた紛れもない事実、エシュタンドは唇をかみ締める。  
誰よりも強くなりたい。

幼い日にそれだけの思いで目指した国の頂点にあるものとは、綺麗な景色だけではなかったのだ。

いや、これこそが真実の国の姿なのだから　。  
ふつふつと胸を沸き立たせる思いに、エシュタンドは両手を握った。

爪が食い込みそうなほどに、強く、強く。

その間にも、守るべき兵たちは傷ついていく。クガルの境界

それよりも彼の心のほうが限界に揺れていた。

主を守るために、仲間を傷つけなくてはいけないのだ。

倒れても倒れても向かってこようとする彼らに、自分はどうすることもできないでいる。

これほどに無力を感じたことはなかった。

無言でいるエシユタンドに、ついに勝ち誇ったようにケイマが笑った。

「これでわかっただろう　力も忠誠も、何の意味もないものだと  
いうことが。圧倒的な支配の前で、人間はひれ伏すしかないんだ。  
そして全部倒れたら　きっと少しはましな国になるさ」

狂ったように笑い始めるケイマの瞳には、いつしか赤い影がちら  
ついていた。

空中で浮かんだままのムルグも、獣の瞳にも、その暗い色はゆら  
めいていく。

木々が、森全体が揺れ始めた気がした。

テローザの森に潜む、魔が笑っているかのように。

「……それが、どうした」

唇からもれたのは、自分自身の声であるはずなのに、まるで他人  
のもののような、低い声だった。

「人間は弱い。人間は弱い。しかし　だからこそお互いを支え、  
助け合おうとするんじゃないのか。捨てる手があれば、拾う手もあ  
るんじゃないのか。裏切られても、憎まれても、自分自身がしっか  
りと上を向いて立っていればいい。つまり、倒れば、また立ち  
上がればいい。そして、力の限りに進む　それが生きていくとい  
うことじゃないのか！」

声と同時に渦巻き始めたのは、風。

そよぐこともなかった風が、どこからか集まり、流れを変え、木  
々を、草を　そこに立つ全ての人間を包み込んでいく。

「そんな、何を　そんなことをすれば、お前の仲間も、お前たち  
自身だって無事では済まないだろう！」



まさか、と驚きをあらわにするケイマ。

表情を変え、翼をたたむムルグ。

挑戦的な藍色の瞳が、二人を捉える。

「力の全てを使い果たそうが、彼らを傷つけはしない！」

金色の髪をためかせ、叫ぶ。

なぜか全身が熱く、力に漲っていた。

そうだ、ケイマがいかにも嘆こうとも、貧困に苦しめられていようとも、罪なき者の命を玩具にしていいはずがない。

精一杯に日々を生きるサーダルの民を、あの子供たちの優しさを踏みにじるようなことをするケイマを許すわけにはいかない。

魔に屈服するわけにはいかないのだ。

やれる、と内なる自分が言っていた。

本能的な勘を信じて、エシユタンドは両腕を大きく広げた。

風は渦巻き、流れ、まるで刃のように一直線に進んでいく。見事に兵たちを避けたその切っ先は二手に分かれ、ムルグとケイマの両方に襲い掛かったのだ。

精一杯のエシユタンドの力、それは彼自身が生み出す白金の光と共に、鋭く二人を包み込んでいく。

風に卷かれ、苦悶の叫びを上げるムルグの手から、赤い石の塊が落ちる。

その方角を一瞬追ったエシユタンドの隙をついたように、ケイマが飛んだ。

彼に向けた風にわずかな躊躇があったことを、エシユタンドは知っていた。

しかし瞬間を見落とさなかったのはクガルも同じだった。

赤い石が落ちたと同時に動きがやんだ兵たちを見極め、ケイマに向けて矢を放ったのだ。

エシユタンドの風で苦しむムルグと同時に暴れ始めた獣。その背から転がり落ちたケイマの足に、クガルの矢は突き刺さった。

「ああああっ」

「

苦痛に身を折り曲げ、叫ぶケイマと、見つめるクガル。赤い石の塊はそのまま遠くへ落ち、彼らの視界からも消える。

「くそっ……このままで 済ませるかっ！」

叫んだムルグの声は、風に巻かれ、掻き消える。

命まで奪ってしまっっては、エカルドの居場所がつきとめられない。そう判断したエシユタンドが力を緩めようとした、その瞬間だった。

風から逃れた獣が、クガルの背中に飛び掛かったのだ。

咄嗟に防ごうと放った風の刃が、容赦なく獣を突き刺した。

狼とも熊ともつかぬ、獣の鳴き声がやけに甲高く響いたのと同時に、ムルグの胸にも血があふれ出す。

「アイラ」と叫ぶ声なき少年の言葉が、聞こえたような気がした。

101・決戦（後書き）

今週も読んでくださり、ありがとうございました！  
続きはまた来週の予定です。

テローザの森編もいよいよ終盤に向かおうとしています。  
どうぞこれからもお見逃しなく！

「殿下　森から……火が！」

クガルの鋭い声で、エシユタンドは我に返る。

背後を見やると、いつの間に発火したのか、周囲の木々が燃え始めていた。

「た、隊長……殿下、これは　！？」

倒れこんでいた兵たちが、正気を取り戻し、驚愕と共に起き上がる。

皆、あちこちに傷を負っていたが、幸い動けないほどの者はいないようだった。

「森から出るんだ、早く　！」

倒れた魔の少年と獣に一瞬目をやったが、彼らの傷はあきらかに致命傷に違いなく、エシユタンドはすぐに兵たちに指示を与えた。

一瞬の躊躇はすぐに消え去り、傷ついたケイマを運ぶことも忘れなかった。

意識を失ったケイマは、ただの年相応の少年にしか見えなかったからだ。

「殿下、お急ぎください。ものすごい勢いで燃えています！」

兵に促され、エシユタンドも駆け出す。

しかし火の勢いは異常なほどに強く、あっという間に周囲を塞がれる。

傷を負い、疲労も限界に達した兵たち　真っ赤な壁を突破する

余力はその場の誰にも残っていない。

エシユタンドの頭に、犠牲になったエカルドの私兵隊員たちの顔が浮かぶ。

「もうこれ以上　誰も死なせるものか！」

叫んだ途端、頭も体もかっと熱くなる。

無意識に制御していた自分の中の力が、一瞬で燃え上がる。

集められるだけの風を集め、エシユタンドは周囲の炎をねじ伏せた。

木々をねこそぎ倒すほどの、爆発的な風　まさに意思の力だった。

くすぶることもなく瞬時に消えた炎の後には、焦げた草原だけが残る。

兵の無事を確認して、力を抑えようとしたエシユタンドの瞳が見開かれた。

力が……止められない！

前にも感じたことのある衝撃、それは自分自身の手から離れて荒れ狂い始める力の暴走。

限界を超えて使い続けた力は、エシユタンドの意思を超えて、草原を駆け巡る。

悲鳴を上げる兵たちが見えているのに、彼らの皮膚をも切り裂こうとする風を、止めることができないのだ。

先ほど確かに手の内にあった風が、エシユタンドの命を聞かずに吹き乱れる。

誰も傷つけぬために起こしたはずの力が、皮肉にも彼らを襲うことになるうとは　。

今度こそ絶望に目の前が真っ暗になる。

意識が遠くなりかけたエシユタンドの脳裏にひらめくのは、青い青い色だった。

海………？

目の前をゆらめく蜃気楼のような青は、遠く差し込んでくる日の光にきらめいている。

テローザの森にいたはずの自分が、なぜ　そう思いながらも、エシユタンドはここが海であるとなぜか確信していた。

海草がなびき、鮮やかな色をした魚たちが群れ泳ぐ。

その合間に見つけたものに、エシユタンドの顔色が変わる。

海と同じ色をした、不思議な衣装　それはどこか彼の母が着て

いた巫女の衣装と似ていた。

胸元で交差された紐には、水色の鞘に入った大振りの剣が差し込まれている。

そして何よりも目を引いたのは、常にまぶたの裏に焼きついてい  
る、あの懐かしい黒髪。

「ソラ……！」

エシユタンドは異様な状況にも関わらず、叫んでいた。

苦しげに顔をゆがめ、深い海に身を沈めていく少女を救おうと、  
必死で腕を伸ばす。

しかしどれほど伸ばしても、まるで見えない壁に阻まれているか  
のように、空に触れることもかなわなかった。

食い入るように見つめるエシユタンドの前で、空は溺れ、耐え切  
れないように口の端から泡を上らせている。

どうしてこんなことに　そう思う心の中で、エシユタンドには  
これがただの幻覚ではないことがわかる。

触れずとも熱さが伝わってくる首元で、想緑珠が光っているのを  
感じて、エシユタンドは声を張り上げた。

「ソラ　どうか、彼女を救ってくれ……！」

心底からの祈りが伝わったのかどうかを知るすべはなかった。

一瞬で空のいた海の光景は消え去り、見慣れた森の中に立ち尽く  
していたのだ。

必死で結界を張り、荒れ狂う風から兵を守るクガルの姿が見え、  
エシユタンドは思いついた。

暴走する力を食い止めるための、唯一の方法を。

魔相手ではお飾りにしかならなかった、腰の長剣　眠っていた  
刀身を抜き放ち、エシユタンドは突き刺したのだ。

自分の腿に向かって、深く　。  
痛みに気は遠くなり、それと同時に吹き荒れていた風はぴたりと  
止まった。

いくら暴走しようにも、力の持ち主が倒れてしまえば　風は、

自然に還るのだ。

ふらり、とエシュタンドの体が傾ぐ。

「殿下　！」

クガルの悲痛な声が、静けさを取り戻した草原に響き渡った。

\*

身をよじり、苦しみながら空はなんとか海面に浮き上がろうとしていた。

飛び込んだのはもちろん、勝算があったからだ。

運動神経には自信があり、クラスの水泳大会でもリレーのアンカーに選ばれたりしていた。

だから岸まで泳ぎ着けると咄嗟に判断したのだ。

まさか、こんな時に足がつるなんて。

顔をゆがめた空の口から、泡がこぼれる。

必死に保っていた酸素が、海の水に溶けていく。

先ほど着替えさせられた海の巫女の衣装が、重くまとわりつき、空の動きを緩慢にしていた。

誰か……助けて、エシュタンド！

そつ心の中で叫んだ、瞬間のことだった。

首元の想緑珠が熱くなる。瞳を開くと、ぼんやりとした青の中に、緑色の光が発せられているのがわかった。

途端、目の前に新緑の木々が映し出される。

吹き荒れる風に、必死で倒れまいとしている人々　銀の見覚えある武装に空は苦しさも忘れ、目を見開いていた。

フェルに連れ去られる前、共に行動していた第一私兵隊の兵たち、そして懐かしいクガル　彼らから離れて立ち尽くしているのは。

「エシユタンド　！」

叫びは声になっていったのか、泡になったのか。

会いたくて、会いたくてたまらないはずの藍色の王子が、今まさに自分の足に剣を突き立てたところだった。

同時に荒れ狂っていた風はおさまり、ほっとしたような顔でエシユタンドが崩れ落ちる。

そんな……！

自分の力を止めるためにした行動のように見えた。

何が起きているのか、全くわからないままに理解した　それが

苦闘の末の決断だったのだと。

意識を失った彼には命の危険はないように見えたけれど、空は必死の思いで祈っていた。

どうか、お願い。エシユタンドを守って　！

誰に向けての祈りなのかもわからぬまま、空は祈った。

再び瞳を開いた時、祈りが通じたのかわかるすべはなかった。

また無言の海が空を飲み込もうと待ち構えていたのだ。

口からもれる泡の数が増える。ばたばたと動かしていた足が止まる。

全身が重くて、頭がぼんやりとして、苦しくてたまらなくて

空は意識を手放した。

「ほ、ほ、蛭来い。」

あっちの水は苦いぞ。

こっちの水は甘いぞ。



『ほ、ほ、蛍来い』

『空や、どうして蛍が光るかって、前にも聞いたったねえ』

『うん。おばあちゃん、好きな人を捜して呼んでるって言うってた』

『空の好きなあのお歌も、そんな歌なんじゃよ』

『そうなの？ おばあちゃんは誰からあのお歌を教えてもらったの？』

『そうじゃねえ、この涼原すずはらの地にずっと前から伝わるものじゃよ』

『伝わるってなーに？』

『伝わるっていつのはねえ、ずっと昔から歌われてきたっていうことじゃよ』

『ふうん』

『おばあちゃんも昔、おばあちゃんのお母さんから教わって、おばあちゃんのお母さんも、そのまたお母さんから教わって　　そうやって歌ってきたんじゃ』

『どうして？』

『そうじゃねえ、ずうつと昔に、おばあちゃんたちの祖先が、恋しい人に会えんようになって、悲しくて作って歌なんじゃと。こん歌を歌うことで、その悲しさが少しでも紛れるように、おばあちゃんたちが歌ってあげるんじゃよ。そうやって歌ってあげとったら、違う娘たちも皆歌い始めて、この地に伝わるようになったそうじゃ』

『ふうん……空、よくわかんないや。でもあのお歌は好きだよ。なんか聞いてたら気持ちよくなるんだ』

『じゃあ、また歌ってあげようねえ。空もおおきいになったら、いつか恋しい人のために歌ってあげるんじゃよ』

『うんっ！』

青い空、赤い空

遙かな空よ

あの人を連れてきて  
愛しい、愛しい、あの人を

短い夢、儚い夢  
優しい夢よ

あの人を見せておくれ  
恋しい、恋しい、あの人を

空より高い、夢より近い  
遙かな世界へ

いつかは共にと願うだけ  
願いを空に  
希望の空に

我らが愛しい、空の子に

ほ、ほ、蛍来い。  
ほ、ほ、蛍来い……。

意識を取り戻した空は、まだ自分が海の中にいることに気づいた。

あれ？ 苦しくない。

不思議なことにあれほど息ができなかったはずの口が、自然に呼吸している。

何度見ても周囲の青は変わらず、波にそよがされる髪も衣装も、水の中でまわりついてくるのは変わらないのだ。

それなのにまるで地上にいるかのように、苦しさがとれていった。

急速に海面へと押し上げられていく力　目覚めかけた時確かに感じた、誰かの腕に引つ張られているような感触は気のせいではなかった。

はつきりと覚醒した空は、溺れていたのが嘘のようにぐんぐん海面へ浮き上がっていく。

あたりを見回しても誰もいない。ただ空を取り囲むのは海ばかり。『自分の力を信じなさい　暁の娘よ』

ふと耳元で誰かが囁いたような気がした空は、海の中に声の主を捜した。

やはり誰の姿もない　それなのに、声は続いた。

『そなたには与えられた役割がある。それを果たせば、元いた世界に帰ることができるのじゃ。静観しようを試みたが　あまりに強い呼び声に出てきてしもうたわ。人間に関与しすぎることは禁じられておるが、我はただ、この母なる海で遊んでおっただけ。腕に触れたものをおいはらっただけじゃ。よいな』

言い置いて、空を海面に引き上げた目に見えない声の主は、気配を消そうとする。

何もわからないまま、彼女がこの世ならぬ存在であることだけはわかった。

「待ってください　あの、私は本当に……？」

質問の意図は曖昧に響いたが、空の戸惑いに苛ついたように、気配は戻った。

『そなた、まだそんなことを申しておるのか。先ほども言ってやったであろう。自分の力を信じなさいと　そなたの中に眠る力は、真なる暁の力。それは異界にて代々受け継がれてきたものであったはずじゃ。本人たちが気づいていようといなかるうとな。大事なの

は、そなたの心ただ一つ。それを忘れぬことじゃ 』

「あ、まっ、待って ！」

消えいこうとする気配に呼びかけると、ふわりと泡に囲まれる。

まるで優しい誰かに抱擁されたかのような感触　そして声は耳元で囁いたのだ。

『我が名はマーメル。そなたが異界の娘でなかったら　次なる巫女にしてやってもいいものを。全く惜しいことよのう』

笑い声は艶やかな女の声にも、恐ろしい老婆の声にも変化して、消えていった。

102・記憶（後書き）

力の暴走を止めるために自らを傷つけたエシユタンド、そして溺れたところを不思議な存在に救われた空。

離れた場所にながら、二人は想緑珠の力で通じ合っていた。

そんな中、空に蘇ってきた記憶の意味とは。

気になる二人の展開、次回もまたお楽しみに！

103・救出(前書き)

先週は更新できず、すみませんでした。  
どうぞ続きをご覧ください。

その日、ルストは朝から緊迫した面持ちでひたすら海を眺めていた。

背後には蜜色の長髪を海風にそよがせたカルファーズの姿がある。彼の指示に従ってついに国境を越え、隣国ビバスへと入り込んだ。レーテ川を中型の運搬船で下り、途中で行商人の小船に乗り換え、王都へも立ち寄った。

その道中のほうがはるかに日数を要したはずなのに、実際長く感じたのは、王都からの船旅だった。

「何か見えるかね、ルスト君」

いきなり背中にかけられた声に、ルストはびくりとする。

赤褐色の瞳に宿るのがあきらかなおびえであることに気づいているのかいないのか、声の主は近寄ってきた。

「うむ、まだ動きはないようだな。おそらく今は　海の巫女とご対面中といったところか。しかし私の読みでは今日中に動きがあるはずだ。安心したまえ、ルスト君」

はっはっは、と野太い声で笑われて、ルストは頬を引きつらせながら精一杯の愛想笑いを浮かべた。

「ええ、そ、そうですね　ドルファン隊長殿。さすがはカルファーズ隊長の従兄弟であられるだけはある　頭脳明晰なところもそっくりでいらつしやいますね」

そうおだてるルストの尻を、ドルファンがそ知らぬふりで撫でてくる。ごつごつした浅黒い手から逃れるべく、ルストは横にずれる。二人の攻防が繰り返されること、数回。

助けを求めて見回した甲板には、いつの間にかカルファーズはおるか、誰の姿もなかった。

ルストの動揺など気にもせず、さりげない笑顔で距離をつめたドルファンが、今度は肩に手を回してルストの小柄な体　あくまで

もドルファンに比べて、だが　　を引き寄せた。

「ひっ」

思わずもれた悲鳴に気づかぬはずはないであろうに、鈍感を装ってドルファンは笑った。

「ああ、今日も天気がいいなあ。まさにネイアーレの最後を飾る祈りの日にふさわしい日差した。海は青く、太陽は明るい　　まさに最高だね、ルスト君。どうだい、無事に姫君を救出した暁には、私と祭り見物に繰り出すっていうのは　　」

「やっ、やっ、やっ……」

やめてください、の一言が口から出せない。それは全て、青灰色をした瞳と、それに似合わぬ浅黒い肌が間近に　　まさにあと一步距離をつめれば接吻ができそうなほどに間近に迫っているからにほかならない。あまりの恐怖に声が出ない、というのは本当のことだったのかとルストが思った。まさにその瞬間。

「こらこら、いいかげんに純粋な我が部下をもてあそぶのはやめてくれないか、ドルファン。悪いが自由の国ビバスとは違って、我がミデイスではそういった類の親愛は主だったものではないんでね」といつもの冷静な声が止めに入った。

「カルファーズ隊長！　どっ、どこへ行つてらっしゃったんですかー！！」

まさに天の助け、と言わんばかりにカルファーズの背中に回りこむルスト。

すっかり怯えている子羊を取り逃がした狼　　ドルファンは蜜色の長髪をがしと掻きながら笑う。

「いやだなあ、冗談じゃないか、冗談。あいかわらずカルは硬いな。面白みがないぞ？」

こら、と太い指で肩をつつかれて、さすがに頬を引きつらせたカルファーズがドルファンを睨み付ける。

ただ肌の色が違うだけで、全く同じ色をした髪と瞳に、背丈も同じ二人は、ルストから見ても気色が悪い組み合わせだった。



「面白みなど必要ない。あきらかに今、この場ではな　無駄口を叩いている暇があつたら、さつさと今後の対策を練るぞ。ビバス王室付き、第四近衛隊長ドルファン殿」

嫌味たつぷりに言つてのけたカルファーズを見て、ドルファンは少しふくれながらもようやく真顔に戻った。

「肩書きを出すな、肩書きを　ただでさえネイアーレの期間は警備やなんやで忙しいつてのに……従兄弟の頼みだから仕方なく引き受けてるんだぞ？　その見返りに好みの可愛らしい少年で遊ぶくらいのは許されてもいいじゃないか……」

真顔で呟かれて余計に背筋が寒くなるルストだったが、やっと本来の話に戻れると幾分ほつとした顔になる。

今日こそ姫君をお救いするんだ……長かった追跡もこれで終わりなんだ。待つていてください、姫君　！

心の中で叫ぶと、恐ろしいドルファン　彼がこの船旅をもつとも長く感じた原因である男　のことぐらひは多めに見てもいいとさえ思えた。

ことあるごとに尻を触られ、肩を抱かれ、あわよくば頬までさすられてきた恨みは全て、空をさらったフェルに回されている。

「第四近衛隊が名ばかりの近衛隊だつてことぐらひは知つているぞ、ドルファン。どうせネイアーレの期間は無礼講で、街の警備と称しての祭り見物がいいところだろうが。それなら従兄弟の頼みでなくとも、さらわれた可哀相な姫君をお救いすることぐらひ、大の男が快く引き受けてどうする」

痛いところを容赦なくついてくる従兄弟に眉を寄せながら、ドルファンは見た目だけはなかなか整った顔をしかめる。

「むーん、それがさらわれた可哀相な王子様なら喜んで救つてやるんだがなあ。あいにく女には興味がない」

はつきりと言い切つたドルファンを見て、ますますルストは甲板のぎりぎり端まで遠ざかった。

「まあ、そう仰らず　中身が男の、こんな女ならいかがです？

ドルファン隊長殿」

肩までの銀の髪をさらりと流して、片目を閉じて見せたセイシエル 先ほど偵察へ出ていた彼が女の幻術を解いて、男になる瞬間を見せられたドルファンは、顎をさすり口角を上げる。

「ほう、性別が変わるとは すばらしい幻術だな。中身が君のよ  
うな美青年ならば、女の姿も悪くない。セイシエル君か、どうだい  
？ 私と祭り見物は」

性懲りもなく誘うドルファンに辟易とするルストだったが、セイシエルは一枚上手のようで、艶やかな笑みまで浮かべながらドルファンとさりげなく距離をとった。

「そうですね、状況が許せばぜひ ところでドルファン隊長、海の聖殿ですが、通常警備はどのように行われているのですか」

「ああ、そうだな。聖殿は巫女による結界で守られているから、外側を最低限の兵士たちが守っているのが常だが」

うまく話を本筋に持っていくセイシエルの手腕に、カルファーズでさえも感嘆する。

ひそかに笑ってみせるセイシエルの表情には気づかず、ドルファンは海の上にそびえ立つ白い聖殿を眺めた。

「ならば、聖殿内を守るものは巫女しかない、というわけですね

「セイシエルの神妙な顔に、カルファーズも腕組みして何事かを思案している。

「あの……隊長、何か思いつかれたことでも？」

「いつ正面突破するのだろうと時機をうかがっていたルストが訊ねる。

「君は 全く進歩しないな。少しは頭を使ったらどうなんだ」

ため息まじりのカルファーズの言葉に、ルストが顔を赤らめて反論しようとするよりも先に、セイシエルが間に入った。

「要するに、事態は表に見えるほど簡単じゃない、ということですよ。君は彼らが一体何者で、どういった目的で姫君をさらったかは

わかつているだろう？ ルスト君」

生徒に諭すように聞かれ、ルストは懨然とした顔で口を開く。

「ですから 彼らは通称フェルとフェイラと名乗ってはいるが、本名はフェルザンドとフェイラザン。ピバスでは『赤い双子』としてその名を知られた、王宮付き術士と近衛隊隊長である って ことですよ？ それならカルファーズ隊長とドルファン隊長に教えていただきましたが……目的って、年老いた巫女をあの白水晶の剣で救わせることでしょうか？」

「まあ君にしてはよく理解した。正確に言えば、ここにいるドルファンなどとは違って、フェイラザンは最も優秀な第一近衛隊の隊長である、という詳細が抜けているがね」

カルファーズの茶々は笑顔で流して、セイシエルは続ける。

「それだけならば、もうそろそろ解放されてもいい頃だ。そう思いませんか？」

彼の質問はそのままルストの疑念であったから、強く頷き、同意を示す。

早朝、一回目の偵察に出た兵の話では、双子に付き添われて 姫君は聖殿に入ったということだった。

それなのに、セイシエルが二回目の偵察で見た時もまだ、姫君が出てくる様子はなかったというのだ。

「少なくとももう昼時 食事の用意がされてもいいはずだ。このドルファン隊長殿の情報によれば、聖殿内に客が入った場合、通常食事は海が見えるバルコニーで行われることが決まりらしい。聖殿内は、本来祈りの場所であるから、というのがその理由。だとすれば、なぜ姫君は出てこないのでしょうか。そして、あの聖殿裏に停泊している怪しげな船 先ほども男が数人出入りしているのを見ました。何かある、と思うのが自然でしょうか？ ルスト君」

「そう言われてみれば……」

セイシエルに指し示されたのは、清らかな聖殿の裏側 数回小船で回ってみた時にも見つけた船は、確かに聖殿には用がなさそう

な行商船だった。

「フェイラザン殿は、女王陛下の信頼も厚い、潔癖なお方だ。おそらく約束したことは必ず守り、他国の姫に危険を及ぼせるようなことはしない。ならば懸念は弟のほう、フェルザンドと見るべきだな。彼は王宮の影の部分。ひいてはビバスの影に存在するような謎の男だ。何事か企んでもおかしくはないと思われる。まあ、そういう影のある男つても悪くはないがね」

真剣に聞いていたルストは、ドルファンのおどけた言葉に眉を寄せながらも叫んだ。

「まさか、姫君をこのまま帰さないつもりだと？」

「ああ、可能性は大、だな。姫君をさらってきた理由は本当に巫女の救出だったのかもしれない。しかし、その目的叶わぬ時。奴はどう考えると思うかね？」

カルファーズの青灰色の瞳が鋭く閃く。

ルストの顔は驚愕に青ざめた。

「そんな。もしかして！」

「そうだ。かの姫君は、なかなか人を捉える魅力をお持ちのお方だからな。十分にありえる可能性だ。その時を考えて、我々は今、どう出るべきかを考えているところなのだよ」

他国の姫を自国の巫女に据えようなんて、そんな非常識なことがありえるものか。

そう考えながらも、ルストの頭の中で、フェルの底の知れぬ微笑が蘇ってくる。

宴で見た時も、あれほどの歌い手であったにも関わらず、どこか謎めいた怪しさを感じさせた。

さらには偶然を装い、自分たちを拘束し、姫君を狡猾にさらっていった。そのやり口からしても、何をするかわからない人物であるのは確実だった。

「ドッ、ドルファン隊長！ 大変です。小船の偵察兵が、連れ去られていく姫らしき人物を見た！」

兵の言葉と同時に、小船を寄せてあがり込んできた兵が必死で聖殿の裏を指差した。

「フェルザンド殿です！ 術士の フェルザンド殿が黒髪の姫を連れ、あの船に乗り込みました！ 強引に連れ去っているのはあきらかです！」

息を切らして報告した兵の言葉で、皆がざわめきたった。

「よし、ドルファンとシエルは兵を連れて聖殿へ おそらく巫女たちが拘束されているはずだ！ 海の巫女をお守りしろ！ ルストと私は残りの兵を連れて姫君を追う このまま、船を東に進める！」

頷き、すぐさまドルファンと連れ立って小船に乗り込んでいくセイシエルを見送り、ルストはカルファーズに駆け寄った。

「なぜ東へ？ 大海側に逃げるといふ可能性もあるのでは？」

あわてて訊ねたルストに、カルファーズは自信たつぷりに首を振った。

「いや、奴らはこのまま東へ抜ける。船の行き先は 王宮だ！」

「王宮？」

「そうだ。このまま強引に姫君を次の巫女に据える気だ。そうなる前に姫君を奪回する ！」

カルファーズの言葉通り船を東に進め、フェルたちの乗り込んだ行商船の先に行く形となって航海しはじめた、その間もなくのことだった。

沸いてくる怒りを抑え、後方を監視していたルストが目にしたものは、海へと自分から飛び込んでいく空の姿だったのだ。

全身を襲う疲労に負けそうになった空が目にしたものは、近づい

てくる小船だった。

先ほど、謎の存在に海面に押し上げられてから一体どれほどの時間が経ったのかもわからない。

そう遠くはないのか、それとも延々と漂っていたのか　麻痺してしまった感覚を必死で叱咤して、目を凝らす。

もしかして、フェルが追ってきたのでは。

そんな恐怖も浮かぶが、近づいてきた人影に空は思わず声を上げた。

「ルツ、ルストさん！　カルファーズ隊長まで　！」

追ってきてくれた　こんなに遠いところまで。

感激と信じられない思いでいっぱいになる空の手を、カルファーズがしっかりと取った。

小船に引き上げられた空のずぶぬれの体に、ルストがあわてて毛布をかけてくれる。

「姫君、大丈夫ですか？　どこか、お怪我は！？」

「うん、なんとか　それよりも、どうやってここがわかったの？」

「セイシエルさんや他の人たちは？」

渡された布で顔や手足を拭きながら訊ねると、カルファーズが笑った。

「セイシエルは海の聖殿へ、マデオス率いる残りの隊員たちは姫君のご指示通り、第三殿下のもとへ参りました。そろそろ合流している頃でしょう」

「よかった　！」

こみ上げる安堵から力の抜ける手を、ルストが握り締める。

「本当に……ご無事で何よりでございます。姫君の御身に何かあればと、私は　いえ、私たち全員が生きた心地がいたしませんでしたよ」

心からの言葉であるのは、込められた力の強さでわかった。

どれほど心配をかけただろうと、空も言葉を失った。

「ごめん、なさい　」

深い深い感謝のこもった空の言葉。

漂いかけた重い空気をふりはらったのは、第三者の声だった。

「おい。聖殿の巫女たち、無事保護が終わったぞー！ おっ、噂の姫君もご無事か！ さつさと上がってこい！ 祝杯だ祝杯だー！」  
中型の運搬船らしき船が近づいてきていて、その甲板から手を振っているのは長身の男。その風貌を見上げ、空は思わず目をぱちくりさせる。

「えっ、カルファーズ隊長？ あれっ、でも、肌の色が ええっ？」

「あの方はドルファン殿。ビバスの第四近衛隊隊長殿であり、カルファーズ隊長の従兄弟です」

苦笑しながら説明するルスト。向かいで軽くため息をついたカルファーズが、空に頭を下げた。

「申し訳ありません。どうも緊張感のない奴でしてお恥ずかしい。

姫君ご救出の為、身内を借り出してきたというわけです」

「そ、そうだったんですか でもこんなところでお二人に会えるなんて思わなかったから、本当に嬉しい……カルファーズ隊長、ルストさん、ありがとう」

「いいえ。こちらこそ姫君をお守りできず、みすみす危険の中に放り込むようなことをしたのですから、お礼を言われるようなことは

「恐縮するカルファーズに、空は首を振って微笑みかける。

「そんなこと言わないでください。私が自分の意思で付いてきたんですから。でも、もう私の役目は終わりました。だから、早くミディイスへ……」

首もとの想緑珠がぼんやりと温かい。その守護を感じながら、空は言いかけて言葉を止めた。

「どうなさいました？ 姫君」  
ルストに促されて、空は迷う。

想緑珠が見せてくれたことを信じるなら、きっと今頃エシユ

タンドは傷を負っている。だから本当は、一刻も早く彼の元へ帰りたい。ううん、飛んで行きたいくらい。だけど……。

瞳を閉じてから、白水晶の剣をそつと撫でて、空は周囲を包む海を見やった。

「いいえ、まだやることが残ってる……」

「姫君？」

問いかけるルストとカルファーズ。

迷う間にも小船は中型船に寄せられ、兵が梯子を下ろすのが見えた。

「そうそう、言い忘れたが　赤い双子のもう一人、男のほうも船もろとも確保したぞ？　あの男はどうする？　なかなか好みなんだが、立場上手を出せないのがなんとも遺憾というべきか……」

ドルファンの言葉は半分意味不明なものではあったが、空の背中を押すきっかけとなった。海風が吹く中、ついに空は顔を上げた。

「私を、フェルさんと一緒に王宮へ　女王のもとへ連れて行ってください！　可能ならば、海の巫女様と一緒に！」

はつきりと言い渡された空の発言に、カルファーズとルストは目を見開き、ドルファンは口笛を吹く。

照りつけるビバスの日差しが、空の黒髪を明るく輝かせていた。



103・救出(後書き)

長かった追跡を終え、空を救出することに成功したルストたち。

ほっとした空だが、ミディスへ帰りたい気持ちを抑えてピバス王宮へ向かう。

果たして、空がやりたいことというのは　！？

ぜひ、次話もお楽しみに！

次回は来週更新できるよう、頑張ります！

104・洞窟（前書き）

お待たせしました！  
今週分の更新です。

進んでも進んでも、出口の見えない迷宮。

いつの間にかこんな場所に入り込んでしまったのかと、イラルは息を切らしていた。

四方を見渡しても緑の木々に囲まれているだけで、全く外につながらる道すら見えない。

エシユタンドたちとほんの少しの間離れ、すぐ合流するつもりだったはずが、気づけば共に来ていたはずの兵すら見えず、イラルは一人迷っていたのだ。

魔の仕業には違いない。けれど、なぜ俺一人だけ……それとも、他の者も全員迷っているのだろうか。

用心はしていたというのについての間にか隙をつかれ、またも魔の罠にはめられたことが悔しくて、イラルは舌打ちしていた。

突き出た枝や足もとにからみつくような蔓を剣で切り、道を作り続ける作業にも意味があるのだろうか。

太陽はまだ先ほどとあまり変わらぬ位置にあったが、それすらもおそらく幻覚なのだろうと思うほどの疲弊に足がもつれ始める。

このまま進んでも同じではないか。

止まって、少し休息を取ってもいいのではないか。

そう思うものの、なぜか足は独りでに動き、手は剣を振り下ろし続けた。

止まれば森に取り込まれてしまうような気が、本能的にしていたのかもしれない。

しかしそんな用心も限界に達し、ついに精根尽きたイラルが太い木の根に腰を下ろした、その時のことだった。

「洞窟……？」

緑の木々しか見えなかった場所に、確かに洞窟が見えたのだ。

それは陽炎のゆらめきのようでも、幻影の続きのようでもあった

が、あきらかに今までとは空気の異なる、何かの兆しに違いないもの。

「行って、みるしかねえか」

意識を留めておくためにわざと声に出して、イラルは立ち上がる。足を前に出すのすら億劫なほど疲れきってはいたが、罨であろうがなんであろうが、この現状を打開できる可能性に賭けてみようと思えたのだ。

ぼつかりと口を開けた、薄暗い洞窟の入り口にゆっくり足を踏み入れる。

両足を中心に入れた途端、幻のように外の森は姿を消し、今度は暗い洞窟に閉じ込められる形となった。

「くっそ……この際だ。魔でも何でも、出てきてみやがれ！」

半ばやけくそで叫んだ自分の声がこだまする。

エシユタンドと入った洞窟とは違い、中にはコウモリも、虫一匹すらいない。

感覚をときすましても、魔の気配も全く感じられなかったが、足もとを照らすほどのわずかな光はどこからか差し込んできていた。

「なんだ……？ 誰もいないのか」

眩きながらも、段々と狭くなる洞窟の奥を確かめずにはいられずに、イラルは進んだ。

ぴちやり、と天井から垂れた水滴が首筋に落ちる。

全て、滅ぼしたいと思ったことはないか。

突然聞こえた声に立ち止まり、辺りを見回す。

しかし何者もいるはずはなく、静かな薄闇があるだけだ。

「また、あの声かよ。言いたいことがあるならばつきり言えっただ！」

苛立つて叫んだイラルの耳に、くぐもった笑い声が届いてくる。

威勢のいいことよ。父譲りの力があれば、何も怖くはないということか。

「なんだと……？ お前、何を知っている？ 俺の過去も素性もお

見通しだったのか？」

変わらず辺りを見回し、声の主を捜すも、やはり周囲には冷たい岩肌があるばかり。

我は全てを知っている、この世の全てを。だからわかるのだ、この世の全てには影があり、苦悩がある。お前も……その苦しみから解放されたいとは思わんか。

緑の瞳を細め、眉を寄せるイラル。彼の心を表すかのように、岩肌にぴしりとひびが入った。

「余計なお世話だ。ああ、そうさ。俺は父親のせいで苦しみ、こうして諸国をさ迷う運命だよ。それを呪ったことだってあるさ。だがな、お前のような奴に従うほど、自分を嘆いてるわけじゃないんでね！」

叫んだ声に呼応するのは大地。岩肌に走るひびは増え、割れた小石がころころと壁を転がり落ちていく。

おろかなことを。願っても手に入らぬものを追うことに何の意味がある？ その苦しみに身を苛まれ、心を砕かれるだけだ。ならば そんな世界など壊してしまえばいい。そうすれば終わりが来る。全ての苦しみを救う、終わりが。

聞こえてくる声は段々大きくなり、闇が濃くなるような気すらした。

けれどイラルは、屈することなく顔を上げたのだ。

「冗談じゃねえ！ 世界を壊したら俺っていう存在も消えちまうだろうが！ 俺はこれ以上、存在しない者として生きるなんてまっぴらなんだよ！ だから、いつか必ず手に入れることにしたんだ新しい世界をな！」

言うなり、精一杯の力を振り絞り、イラルは押し寄せてくる闇に反撃した。

姿も見えない声の主に、自分の存在意義を見せつけてやるためとでもいうような凄まじい力だった。

おろかな、ことを……。

まだ聞こえてくる声の残骸に、イラルはにやりと笑う。

「あの王子だけにいい格好はさせねえってんだよ。白金の光は持たなくても 俺にだってできることくらいあるさ」

言ったイラルの声を最後に、洞窟が いや、そこにあった闇全体が消えうせた。

岩の一つも残さずに、綺麗さっぱり目の前からなくなったのだ。

そして瞬きをした次の瞬間、イラルが立ちすくんでいたのは元の森。

最初にエシユタンドたちと別れた場所 緑そよぐ絨毯のような草の上に見たものに、イラルは思わず口を開けていた。

そこにあつたもの。それは、金の波打つ髪が肩に零れ落ちた、年若い少年の姿だったのだ。

変色してはいるものの、白いブラウスを染めていたのは確かに血であつたのだろう、背中の中真ん中に固まった傷の跡が見える。

「こ、これは」  
呟き、駆け寄っても、倒れた少年の瞳は固く閉じられ、ぐったりと動かないままだった。

\*

『ついに目覚めたのね 真の王者となり得る者よ』

声は、静かにそう囁いた。

何のことだ。お前は一体誰だ。

問い返そうとしても、全身は重く、まぶたを開くことすらできなかった。

そうだ。私は……自分で自分の足を傷つけたのか。

大切な者たちを傷つけぬため、自分の暴走を止めるため。思い出したエシユタンドに、声はまた囁いた。

『白金の光は、あの時より更に強くなっている。それと同時に、魔の力も……』

その口ぶりで直感する。

そうか、お前は……あの時の。

滅び行く森を憂いて、眠ることを選んだ森の精霊。

静かで悲しいあの女の声。

『眠っていても、精霊には世界を感じることができる。その中に宿る喜びも、悲しみさえも』

エシユタンドの心に応えるように、女は続けた。

脳裏に蘇る深い森と、むせ返るような緑の匂い。

瞳を閉じてはいても、エシユタンドは女の腕が自分をそつと抱いたような気がした。

『我らが同胞、泉の力を持つ者よ　気をつけなさい。今度力が暴走すれば、もう止めることはできない。あなたの心も体も、命さえも奪うことになる　』

これは警告、と小さく女は呟く。自分たち精霊にできる、たった一つのことだと。

言葉の内容は、不思議とエシユタンドの驚きを呼ぶものではなかった。自らの命、一番大切であるはずのものよりも、心配でたまらないことが他にある。

ソラは、彼女は無事なのか。

海で溺れていた少女の映像、あれはおそらく幻ではないから。

訊ねたエシユタンドの顔を、優しい手のひらがそつと撫でる。

『ああ、あなたはやはりエルバートに似ている。たった一人の娘が、自分の命よりも大事だなんて』

静かな声に秘められたものは、苦笑なのか、それとも同情なのか。

わからないまま、エシユタンドは笑った。

本物の恋に落ちた者は、きつと誰もがそうなるのだろう。その言葉に納得したのかどうなのか、女も笑う。

姿は見えないはずなのに、静かな微笑をたたえている気がした。

『大丈夫。あの娘も、我ら精霊さえも魅了する不思議な力を持っているから。きつとマーメルの守護があるはず』

そうか。なら、いい……。

『さあ、急ぎなさい。あなたを待っている世界へ戻るの。森は我々の予想より早く侵食されている。もうあまり時間は残されていない』  
背中を押されたような感触と共に、エシユタンドの意識は徐々に彼女から遠ざかっていく。

待て。あの声の主は一体何者なんだ。赤い石は、魔の生み出したものなのか。

問いかけたエシユタンドの声に応えたのは、寂しげな囁きだけだった。

『全ては愛から生まれ、愛は憎しみを生む。私が言えるのは、それだけ。あなたはもう、足りないものを手に入れたのよ、藍色の王子。それを守り抜く覚悟さえあれば、きつと』

言葉の続きは、もう聞こえなかった。

急速に覚醒していく意識と、蘇ってくる腿の痛み。

瞳を開いたエシユタンドの前にあつたのは、心配そうなクガルの顔だった。

「殿下 お目覚めになりましたか！ ご覧ください、援軍でございます。国王陛下からの援軍が、昨夜到着いたしました！ そして

つい先ほど兵の一人から報告が……！」

まだぼんやりとしているエシユタンドの手を取り、感極まったように声をつまらせるクガル。

まさか、とさ迷わせた視線の先に見たものは、疲れきった様子 of イラルと、その隣に横たえられた一人の少年の姿だった。

「エカルド……！」



予期せぬ事態に嬉しさを隠し切れず、咄嗟に起き上がろうとしてクガルに止められる。

引きつるような腿の痛みにも、顔をゆがめながらもエシユタンドはもう一度その名を呼んだ。

「エカルド　無事なのか？　弟は　本当に無事で戻ってきたんだな！？」

「はい！　意識は失っておられますが、背中への傷もふさがっており、お体に異常は見つかりませんでした」

力強く頷くクガルの瞳にも、安堵の色がすっかりと見えて、エシユタンドは心の底からほっとしたように深く息を吐いた。

崩れ落ちるエシユタンドの体をあわてて支えて、クガルが続ける。「援軍には既にケイマの護送とテローザの森周辺の偵察を命じてあり、今朝早く各隊が出発いたしました。現在までの偵察では魔の姿は全くなく、焦げ跡にも何も異常は見つからないとのことですよ。他にご指示はございますか、殿下」

「よし、では残りの隊にはこのまま街と村の偵察、そして各領主の取調べも行つように言ってくれ。徹底的に頼む」

藍色の瞳を光らせてそう言ったエシユタンドに、クガルはどこか嬉しそうな顔をして「御意」と答えた。

「本当はそう仰るだろうと予測して、既に隊の準備は済ませてあります。いつでも出発できますよ」

いたずらっぽい微笑で付け加えたクガルの肩を、エシユタンドは笑いながらねぎらうように叩く。

「だろうと思ったよ。やはり持つべきものは優秀な片腕だ」

久しぶりに交わした明るい会話を遠くから見ているイラルが、ふてくされた顔で立ち上がった。

「おいおい、今回の功労者は誰か忘れてないだろうな　言っとくが弟王子を見つけてやったのは俺だぞ？」

まだ瞳を閉じたままのエカルドを指し示して、イラルがぼやく。手当ても済ませ、新しい衣装に着替えさせられたエカルドの寝顔

はそれでも青白く、痛々しいものだった。

無事でいてくれて、本当によかった。

心からそう感じながら、エシユタンドはイラルに片手を差し出す。「ありがとう……君には何と礼を言っていかわからないくらいだ。とにかくミデイスへ　王宮へ招待させてくれ。正式な礼がしたい」「そういつのは苦手です　って断りたいところだけど、今回は本当に疲れ過ぎた。お言葉に甘えてしばらく療養させてもらうことにするよ」

イラルの正直な言葉に、周囲の兵からも笑い声がもれた。

「しかし……まだ腑に落ちないというか、すつきりしねえのはやっぱり謎が多すぎるからかな」

布の巻かれた頭をかりかり掻きながら首を傾げるイラル。

クガルと目を合わせたエシユタンドも表情を引き締めた。

「そうだな　エカルドが無事に見つかったのは何よりだが、結局魔の目的も、動機も謎のままだ。それはケイマが目覚めれば少しは聞きだせるだろうが……あの赤い石のことも、奇妙な声のこともよくわからずじまいというわけか」

「そうですね。あのムルグと獣も致命傷であったとはいえ、死体も見つかっていないというのは気にかかる。森の火事で焼失したのかもしれないが、それにしてもあれほどいた魔が完全に姿を消したということも気味が悪い」

二人の言葉に一層顔をゆがめて、イラルが背後に遠く見える森を睨みつける。

「くそう　まだ何も解決してねえってことかよ。黒幕が魔全部引き連れてどっかに隠れたんだ」

「おそらくその通りだろうな。決戦はお預け、ということだ。しかしエカルドは無事救出できたのだから、それでよしと思うしかない……」

言葉の底に秘められた決意は、皆にも見て取れたのだろう　エシユタンドが出した結論に反論を唱える者は誰もいなかった。

「さあ、殿下　我々の馬車が、出発の準備を整えてあります」  
クガルに支えられ、エシュタンドはゆっくりと立ち上がる。

片足はまだ引きずるものの、その瞳は力強く燃えていた。

「ミデイス王国、第一王子、第三王子付き私兵隊全員に、出発の指示を下す！　長旅、本当にご苦労だった……王宮へ帰還するぞ！」  
兵の全員が歓声を上げ、互いの肩を叩きあう。森からの風は、今はただ静かに吹き抜けていく。

長かった旅路は、王子の堂々たる命によってその終わりを告げたのだった。

## 104・洞窟（後書き）

魔の誘惑に打ち勝ったイラルの手によって、エカルドは無事救出された。

ついに帰還の途につくエシユタンド一行は、喜びに沸き立つ。しかしまだいくつも残る不安が、最終決戦の予感につながる。というところで、次話へ続きます。お楽しみに^^

次はビバス、空のその後です。

また来週更新できるよう、頑張ります！

ビバス王国、王宮　ぎらぎらとした日差しも、祭りの喧騒も届かぬ、静かな白亜の宮殿に空はいた。

正式な謁見のためにと用意されたドレスを拒否し、ルストたちと同じ銀の武装を身につけた黒髪の少女の存在は、居並ぶ王族や重臣たちの中でも異色のきらめきを放っていたが、当の空自身にはその視線の意味がわかつてはいなかった。

「ね、ねえ……ルストさん、私、やっぱりどこかおかしいかな？　黒髪のせい？　それとも武装？　あつ、やっぱり女が短い髪だから珍しいのかな？　それとも」

派手な衣装を控えただけのつもりだったのだが、やはり失礼にあたったのかもしれないと今更ながら不安に陥っていた空が訊ねる。きよるきよる周囲を見回す少女に苦笑して、ルストは声を落とすて囁く。

「大丈夫ですよ、姫君。きっと異国の方だからと物珍しがっておられるだけですよ」

ルストが安心させるために用意した答えに納得して、空は再び椅子に座りなおした。

「女王陛下、ご臨席にございます！」

ラッパの音と共に大きく叫ばれた声にびくりとし、あわてて立ち上がる空。

ルストとカルファーズが両脇にいてくれるから心強いものの、やはり異国の王にまで会うとなっては緊張してしまうというものだった。

しかし広間の扉が開き、背の高い女性が堂々と歩いてきた途端、緊張から純粹な感嘆へと空の視線は変わっていく。

燃える太陽のような朱色の髪、強さを感じさせる褐色の肌、そして髪と同じ色みをした、大きな瞳　その全ての肢体を、海を思わ

せる群青色のドレスに身をつつんでいる、年若い女王。

まだ二十代半ばほどにしか見えない彼女の、ぱつと目を引くその美貌だけではない、堂々たる威厳に圧倒されて、空は思わず顔を上げて見つめていた。

周囲が皆叩頭していたことに気づいて、はつとした空があわてて頭を下げた瞬間、くすりと笑って女王が王座に腰掛けた。

「皆の者、面をあげなさい。お客人　いいえ、ミデイスの姫君方も、さあ」

促されておすおすと顔をあげると、朱色の瞳が和らいだ光を湛えていることに気づく。

「高いところから失礼を承知で申し上げます　この度のこと、誠に申し訳なかった。この通り、女王の名に免じてどうぞご容赦願いたい」

「そつ、そんな……あの、いいんです！　どうぞお顔をお上げください！　あつ……つて、えつとこんなことを申し上げるのも失礼にあたるのかな……とつ、とにかく、私は幸いこうして無事ですし、どうかお気遣いなさらずに　」

頭を下げられて、あわてた空がしどろもどろになる。いくらもたずに、目を見開いていた女王がおかしそうに吹き出した。

「じよ、女王陛下　？」

きよとんとした空は、助けを求めるようにルストとカルファーズに視線をやるが、二人とも困ったように微笑んだけだった。

「いや、ご無礼を……王族の方にしては珍しいほど率直な姫君だと感心してしまっただけだ。そなたが恐縮される必要は全くない。非は全面的にこちらにあるのだから」

笑みをおさめ、表情を引き締めた女王に言われ、空はなんと答えたらいいかわからず頭を下げる。

「いくら我が国の巫女を想うための行動であるとはいえ、他国の王子のご婚約者であられる姫君をほほ誘拐に近い形でお連れするなどという、言語道断の振る舞い。拳句の果てに強引に次の巫女の座に

据えようとは 全くお恥ずかしいにもほどがある。どうお詫びをさせていただければよいやら……とりあえず、首謀者は現在牢に捕らえてあり、必ずや私の手で厳罰に処すことをお約束しますゆえ、どうぞこの度のことは……」

「あつ、あの、女王陛下 そのことで、お願いがございます」  
凜とした声で続けようとした女王の言葉を遮った空に、皆が驚きの目を向ける。

何を言おうというのだろう そんな目線に突き刺され、一瞬口ごもるも、空は決意したように口を開いた。

「フェイラザンさんと、フェルザンドさんのお二人を……その、厳罰にしないでいただけないかな、と思ひまして」

「姫君」

ルストが抗議するような声を上げ、あわてて唇を結ぶ。カルファーズも目を見張っている。

二人の表情でもちろん言いたいことはわかっていたが、空は更に続けた。

「今回のことは、お二人の真剣な想い 巫女様を救いたいという純粋な願いから起こった出来事です。それに、最初は強引にという形ではありましたが、私も納得済みでここまで付いてきました。ですから、私のことで二人を厳罰にというお計らいならば、それは必要のない処分だと」

「ほう、まさか当の被害者であるそなたが罪の減免をお望みとは。しかし掟は掟、罪を犯した者の処罰は当然の措置であるう。そこに情を介入させては、国が乱れるというもの」

意外だと言わんばかりに眉を上げ、答える女王。

「それは確かに ですが、二人を厳罰に処すれば問題が解決するのでしょうか？」

朱色の瞳をまっすぐに見上げて、空は問いかけた。短い黒髪が、窓からの海風に舞い上がる。

ざわついた広間は、女王の咳払い一つで静まった。

「面白いことを仰る。したらば、この私にどうせよと？」  
気分を害したふうもなく、女王は口角を上げた。  
一瞬のためらいを抑え、空はきっぱりと言いつつ放ったのだ。  
「はい、この場に海の巫女様を呼んでいただくことは、可能でしょうか？　できれば、フェイラザーンさんとフェルザンドさんのお二人も」

黒髪の少女の発言に、今度こそ広間はざわめきに沸いた。

半時もせず、女王の命通りに広間は装いを変えていた。

中央に配置されていた空たち客人の為の椅子は端へよせられ、並んでいた重臣たちも壁際へ。

そして開けられた場所に置かれたのは大きな寝台。

海の色をした鮮やかな敷物の上に置かれたその寝台には、清潔な白い布が敷かれ、一人の女性が横たわっている。

瞳を閉じている彼女を気遣うのは、周りを囲む巫女たちだった。

そして、広間の大扉が開け放たれ、幾人もの兵に付き添われ、連れられてくる二人に皆の視線が集中する。

「フェル、さん……」

呟いてしまった空の声を耳にしたのは、隣に控えるルストとカルファーズだけだった。

赤銅色の髪が乱れ、無表情な彼の顔を半分ほど隠していたが、その瞳には空虚な光しか宿っていないように見えた。

「さて、姫君。そなたの言うとおりに揃えたぞ。して、この後どうする？」

女王が面白がるように腕組みをして訊ねたのは、フェルとフェイラがナランティの眠る寝台のそばに跪かされた後だった。

両手を拘束され、特にフェルにいたっては術への警戒なのか、全



身に太い縄が巻かれた痛々しい姿で、空は息を長く吐いてから女王を見上げた。

「まずはお詫びさせていただきます。お加減のよろしくないナランティ様にご無理をさせてしまう形になって、本当に申し訳ありません」

深く頭を下げてから、巫女たちを見つめる。

ナランティの一番近くに立つスニアが冷静な瞳で空を見つめ返した。

きつと、彼女にも、そしてここにいる人たち全員がもうわかっている。ナランティ様がもう長くはないことを。

けれど自分が言わなくてはいけないことが残っている。まだ彼女の意思があるうちに。

無意識に首のチョーカーに手をやりながら、空は心を決めた。

「女王陛下もご存知の通り、私はそこにいるフェイラザンさんとフェルザンドさんの頼みで、巫女様をお救いすべくこのピバスへ参りました。私が持つ、特別な力を秘めたこの剣で」

何を言おうとしているのか、と大勢の怖い顔をした重臣や王族に囲まれながら、足が震えそうになるのを必死で堪える。

「けれど願いも空しく、私の力ではナランティ様をお救いすること叶いませんでした。そのことにひどく傷つかれたフェルザンドさんは、思いつめた拳句に私を次の巫女に据えようとまでされました。説得を聞いてもらえず、仕方なく私は逃げ、そして彼は捕らえられました。もちろん、ミデイスから来ている私がピバスの巫女になるなどとはとんでもないことで、結果としては当然の結末だったと言えるでしょう」

空の言葉に一瞬だけフェルの肩がびくりと動く。表情の変化はなかったが、彼に視線を移して空は言葉を繰り返す。

「しかし、彼の行為を一方的に責めるのは間違いだとは私は思うのです」

続いた発言に再びざわめく広間を、女王の上げた片腕が瞬時に静

める。

視線だけで続きを促され、空は頷いた。

「そもそもナランティ様がここまで力を失われ、本来老いるはずのない巫女としての限界を超え、老い始めたのは全て、国の乱れを抑えようと一人で尽力なされたから　すなわち、このビバスを救うために他ならない。彼女の力がなければ、もしかしてビバスには更なる混乱があったかも、魔があふれていたかもしれない。そうならぬようにご自分の命まで削ってこられた巫女様を母とも慕うお二人は、この国にとって重要な存在であると、私は　」

チョーカーの想緑珠に触れながら声を大きくする空を、ずっと俯いたままだったフェイラが驚愕の瞳で見つめる。

彼女の唇が、「姫君」とかすかに動いたのを目にして、続けようとした空の後方で、耐え切れぬように一人の重臣が立った。

「これ以上聞いてはいられませぬ、陛下！　この少女は、我々も含め、ビバスを導いておられる女王陛下を侮辱している！　そうはお思いになりませんか！」

憤慨した老臣の言葉に励まされたのか、一人、また一人と声を上げる。

「そうです！　まるで我々が何もせずビバスを乱れさせているような発言、黙って認めるわけにはいきません！」

「これはこの少女一人の考えだとは思えぬ、もしやミデイスは我々に宣戦布告しているのでは　」

「まっ、待つて下さい！　そんなことは……」

空の声を掻き消す勢いで、その場は熱くなっていく。

どうしたらいいのか戸惑っていた空の耳に、一人の言葉が飛び込んできた。

「巫女一人の力で、国の乱れを抑えていたなどと馬鹿馬鹿しい大体、巫女などこれからの政治に必要なではない。いつまでもしゃばり過ぎるから、こんなことになるのだ」

誰が言ったのかもわからない言葉　その内容に女王が立ち上が

ろうとする前に、ダン、と大きな音が鳴り響き、周囲は静まり返る。白水晶の剣、鞘に入ったままのその切っ先で大理石の床を打ったのが空であったことに、皆が驚愕の瞳を向けた。

「海を制する王と、海を愛する巫女によってビバスは治められる。そうではないのですか！」

黒い瞳に浮かぶのは紛れもない怒りだった。

はつきりとした大きな瞳が、きらきらと燃えている。まるで満点の星が浮かぶ、夜空のように。

「進歩は発展を生む。それは国を動かしていく上で不可欠な力にもなるでしょう。けれど決して忘れてはいけないこともある。違いますか……？ あなた方ビバスの国に生きる人々が守ってきたネイアの教え、それを忘れ、ないがしろにしようとする人々の心こそが、ビバスを乱す一因となっている。私はそう思います！」

反発しようとする者たちから、声を奪うほどの強い叫び　強い言葉。

怒りのままに言い終えてから、空はあわてたように口に手をあてた。

「あ、ご、ごめんなさい……私、こんなこと言うつもりじゃ」

しまった、という空の表情に、吹き出したのは女王だった。

しごく明るい、心のままの笑い声。年相応な若い女性に見えた一瞬も束の間、すぐさま女王の顔を取り戻して、彼女は言った。

「これは驚いた。他国の姫にネイアの教えを説かれようとは　まさにこれこそ、ビバスの恥というものだ」

「じよ、女王陛下……」

謝罪すべきかと俯きかけた空は、玉座から立ち上がり、あつらえられた石段をおりてくる女王の姿に目を見開いた。

「陛下！」

「女王陛下、一体何を」

驚く重臣たちの前で群青色のドレスの裾をはらい、軽々と空と同じ目線まで降り立った女王は笑った。

「そなた、気に入ったぞ。ここまで率直に私の前で意見を言う者など、ビバスに一人としておるまい。それも国の乱れを生む一因ともなっているのかもしらんな」

いたずらっぽく微笑んで、女王が空に片手を差し出す。

きよとんとした顔で見つめ返した空に笑って、女王は自分から空の手を握ったのだ。

あ、握手……私が、女王と？

ミデイスでさえやったことのない初めての体験に、固まる空。

黒い瞳がこれ以上ないほどまん丸になっているがおかしかったのか、再び楽しそうに笑った女王が続ける。

「そなたの言うとおりだ。王と力を合わせてビバスを守り、導いてきた巫女をないがしろにするような輩が王宮にまでのさばるようなこの現状では、ビバスが乱れていることを認めざるを得まい。ただ私が黙ってこの状態を放置していたとは思わないでほしいがな、ミデイスの姫君」

片目を閉じてそう言われ、空はあわてて頭を下げる。

「も、もちろんです！ 女王陛下」

朱色の瞳に宿る優しい光を厳しいものに変えて、女王は視線を重臣たちに移した。

「自分の代が続くうちに、ビバスを改革しようとは私思っている。もちろん、王宮内からな」

「へ、陛下……」

たちまち顔色を変え、お互いの顔を見合わせる者たちにため息をつき、女王は高くまとめあげた朱色の長髪を背中にはらいのける。

そして靴音をたてながら、堂々と巫女の眠る寝台へ歩み寄った。

「すまない、ナランティ。私は私なりに、そなたの状態を気にかけていたのだ。国中の医師はおるか、国外まで優秀な医師を探し、薬を探して　しかし、他の職務に気を取られ、動きが遅れてしまった。心から詫びよう……しかしな、ナランティ。なぜ言ってくれなかったのだ。もう少し早く、どうして私に正直に話してくれなかつ

た。そうすれば、少なくとも命だけは取り留められたかもしれないというのに」

いまや誰の目にも明らかかな死相を浮かべた巫女に近づき、その白い頬にそっと触れる。

女王にすら秘密にして、自分だけでナランティが戦ってきたのだということがわかって、動いたのはフェルだった。

がくり、と膝を折り、眠るナランティを見つめる　その悲しすぎる赤銅色の瞳に、空は心に決めていた言葉を声にした。

「あの……一つだけ、お手伝いさせていただけませんか？」

それこそが、ここにナランティを呼んだ理由に他ならない。

実行できるのか確信はなかったけれど、このまま放っておくことなどできなかつた。

朱色と赤銅色、その真剣な瞳に見つめられ、空は白水晶の剣を胸元に掲げる。

「老いを止め、命をお救いすることはできませんでした。でも、少しでもだけ力をお貸しすることぐらいなら、できるかもしれません」

「姫、君……？」

フェイラのかすれた声が空を呼ぶ。

海風に舞う黒髪を押さえ、空は微笑んだ。

「ビバスの国政を支える、次の巫女　その大事な役割を受け継ぐ人を選ぶ、お手伝いをしたいのです」

105・女王（後書き）

ついにビバスの女王と対面した空は、フェルとフェイラの罪の減免を要求した。

そして、次の巫女を選ぶ手伝いをさせてくれと申し出る空に、皆は驚くのだった。というところで次話へ続きます。

女王の判断は、そして無事役目を果たすことができるのか　　続き  
はまた来週です。

どうぞお楽しみに！

106・役目(前書き)

お待たせしました！  
今週で、ビバス編終了です。

さつきまであれほど騒然としていた広間は、静寂に満ちていた。緊迫の中、空は息を深く吸い込んでから、白水晶の剣を鞘から抜き放つ。

明るい日差しに反射して、純粋な水晶の塊がきらきらと光る。その輝きに、なぜか空は励まされる気がしていた。

「では、失礼します。ナランティ様」  
そつと声をかけ、眠ったままの巫女の胸に剣の切っ先を触れさせる。

青い青い衣装の色が、透明な水晶に映った。そう思った瞬間だった。

「巫女様、ナランティ様……！」

巫女たちから歓喜の声が上がる。

もう一滴の力も残されていないぐらいに弱っていたナランティが、そつと瞼を開け、海色の瞳を見せたのだ。

白いものがかなり混ざった金髪をわずかに揺らして、空の立っている方角に顔を向ける。

「ナランティ様、私の声が聞こえますか……？」

皺で覆われた顔を痛ましい思いで見つめながら、空が訊ねる。

こくり、と頷いたナランティが静かな微笑を湛えた。

「ずっと、聞こえていましたよ　ミデイスのお姫様。いいえ、暁の姫と呼ぶべきかしら」

ふふ、と小さな声で笑ったナランティの言葉に、空が微笑み返す。

きつと彼女には、何もかもわかっているんだ。私のことも、異世界の存在も……自分の命がもうすぐ絶えることも。

切ない気持ちがかみ上げて、空はわきあがってくる涙を堪え、ナランティの脇に腰掛け、剣を更に密着させた。

「この剣の力で、少しでもお役に立ちたいのです。ナランティ様」



空の言葉に、ナランティは深く息を吐き、頷いた。

「ええ　そうね。私に残された最後の仕事、それをやってからでないよ、私は行けない」

どこに、と訊ねる者など誰もいない。

見守る巫女たちも目を潤ませながら、静かにナランティを見つめていた。

「ソラさん、手を貸してちょうだい」

細く、骨ばった皺だらけの手を差し伸べるナランティ。

しっかりとその手を握り締めると、ナランティは瞳を閉じて何事かを唇で唱える。

途端、白水晶の剣がじわりと温かくなり、白い光がナランティの手を通して自分の中に飛び込んでくるような感覚が空を襲う。

思わず息を吐いた空に、ナランティが優しく囁いた。

「さあ、これで安心して眠ることができるわ。次の巫女を選ぶのは、ソラさん。あなたよ」

「え、そんな　！」

まさか、と声を上げる空に微笑み、青い瞳が女王を映す。

「陛下、よろしいですね？」

短い確認だけで、二人の意思は通じ合ったようだった。

黙って頷いた女王にほっとしたのか、ナランティは表情を緩め、今度こそやわらかい顔で笑った。

「ふふ……これだけ立派な方に預けるならば、マームルも満足されるでしょう」

独り言のように呟いて、少し悲しげな瞳で巫女たちを見やる。

「あなたたち、誰が選ばれても　次の巫女に従い、ピバスを導き、人々を守るお役目を全うするように。私があなた方に残したい言葉は、それしかありません」

巫女長としての威厳は、弱々しい声の中にも凜と残っている。

無言で叩頭した巫女たちの手が震えている。涙を流す幼い巫女の姿を見ていた空の耳に、ナランティがそっと呼んだ名前が聞こえた。

「二人を　こちらに」

静かな指示に、沸き立つ重臣たち。

それを抑え、命を下した女王に従い、兵たちは赤銅色の双子をナランティの寝台のそばへ連れて行く。

「ナランティ様……！」

それ以上を言葉にできないのだろう、瞳を潤ませたフェイラに向かって、ナランティは笑いかける。

「ありがとう、フェイラザーン。私を想ってくれたあなたの心が、どれほどに心強かったか……自分の信じる道を、胸を張って生きなさい。そして、あなたもよ　フェルザンド」

呼ばれたことにびっくりと肩を震わせ、彼女をようやく見つめたフェル。

大柄な体がなぜか小さく見えて、空は目をこする。

途方にくれた少年の姿が、重なって見えたような気がしたのだ。

「心無い者の中傷に惑わされ、あなたが嘆いていたことは知っていたわ。それでも私は自分自身の行為に言い訳はしない。なぜならば、やましいことなど私には何もないから……運命を呪っても、何も変わりはないのよ、フェルザンド。強くなりなさい、自分の運命を受け止め、その中で輝けるくらいに強く　影が暗いだけだと決めているのは、自分自身よ」

最後は囁くほどにか細くなっていくナランティの声が聞こえたのは、空を含め、近くにいた巫女とフェルたち二人だけだった。

確かにその声が届いていたことを証明したのは、フェルの涙だけ。

「愛しているわ、二人とも。そして　」

続くことはなかった言葉の先は、不思議とわかった。

巫女たち、女王、そしてビバスに生きる人々全てに向けられた優しいナランティの言葉。

それは彼女を包む空気から伝わる。

息を呑み、絶句した人々の見守る中で、ナランティは静かに息を

引き取った。

肩を震わせ、子供のように泣き出したフェル、そして唇をかみ締め、無言で涙を流すフェイラ。

跪き、祈る巫女たちの声　その全てを受け止めた、真摯な表情で女王が空の前に立つ。

「さあ、役目を」

一瞬浮かんだ戸惑いも、ためらいも飲み込んで、空は巫女たちに向き直る。

今ならやれる。そう、この体に宿っている、ナランティの最後の力で。

瞳を閉じ、集中する。

再び瞳を開いた時、まず飛び込んできた者の顔を、空はしっかりと見つめた。

「次の巫女は、あなたです。クラリス」

知りもしないはずの巫女の名、頭に浮かんだままのそれを呼んで、任命した空に、驚いた顔で立ち上がるのは最も幼い巫女。

広間はざわめき、混乱に陥ろうとする。

けれど空には見えていたのだ　まるで母なる海に保護されているかのような、青い光が彼女を包んでいるのを。

「女王を助け、しっかりとピバスを導くように」

ナランティが一瞬乗り移ったような、毅然とした空の声。

その不思議な力と威厳に圧倒されたようにその場は静まり、クラリスと呼ばれた巫女は決意の表情を浮かべ、叩頭したのだった。

翌日、朝日のきらめく王宮前に用意された馬車　たわわな果実や色鮮やかな花を模った飾りで、ただでさえ派手で豪華な造りが何倍にも華やかになったものに、空は乗り込んでいた。

「祈りの日が無事成功したのも、何もかもそなたのおかげだ　ソ  
ラ姫」

昨夜から何度も言われた言葉をもう一度口にする女王に、空は苦笑いを返す。

「いいえ、私は何も……それに私、本当は姫なんて身分じゃないですってば」

本当はすぐにも出発したかったのを、もう夕刻だからと止められ、しかも祭り見物にまで同行させて離してくれなかった女王の屈託のない笑顔に、最初ほどの緊張は沸いてこない。

「いいや、このためにネイアがそなたを遣わしたのではないかと思うくらいだ。まったく、王などとは名ばかりで……まだまだ不甲斐ないことばかりさ」

女王も空を親密に感じてくれているのか、すっかり口調まで和らげて呟いた。

「こんなことを言っていたのはミディアスの王子には内緒だぞ？　とにかく私ももっと精進して、この国をよりよくできるように頑張ることにしよう。では、ソラ姫。旅の道中、気をつけて　それから、この私にできることがあるば、いつでも言ってくれ。できる限りの協力は惜しまぬから」

「ありがとうございます、陛下」

馬車の小窓から強く空の手を握った女王は、明るい笑顔で笑った。「また会うことがあるば、今度はサーリンと呼んでくれ。私の名

海を統べる者、という意味だ。そなたのいるミディアスならば、きつとこの先発展していくだろう。楽しみにしているぞ、ソラ」

片目を閉じ、言った女王が馬車から離れ、合図をする。

大勢の兵や重臣たちに見送られ、空を乗せた馬車はピバス王宮を出発した。

「それは私の台詞ですよ　サーリン様」

朱色の髪を海風になびかせながら、片手をあげている女王に向かって、空はそつと呟く。

思いがけず明るい出発となった空との別れを、赤銅色の双子が静かに見守っている。

「しかるべき処罰を下されてから、フェイラザン殿は近衛隊に復帰、そしてフェルザンド殿と共に新たな巫女を支える任に就かせるとは　女王も寛大なお方だ。さすがは我らが姫君と気が合っお方なだけありますね、カルファーズ隊長」

嬉しそうなルストの言葉に、カルファーズはにこりともせず鼻を鳴らした。

「まったく、姫君も女王も甘すぎる。これでは一体我々が何の為にここまで苦勞をしてきたのかわかったものではない」

文句を言いながらも青灰色の瞳がそれほど不服そうな色を浮かべてはいないことに、空は既に気づいている。

笑いをこらえ、空は神妙な顔で頭を下げた。

「ごめんなさい、カルファーズ隊長。ルストさんも　皆さんのお力がなかったら、私は無事で帰れたのかもわからなかった。本当に感謝しています」

先に帰ってくれたセイシエルも、それから手伝ってくれた豪気なドルファン率いる第四近衛隊の全員にも。

これでやっと　エシユタンドのもとへ帰れるのだから。

想緑珠は映像を送りはしなかったけれど、なぜか空には彼の無事が感じられた。

安堵と喜びに胸がいっぱいになる。

空の素直な笑顔に咳払いしたカルファーズが、御者を急かす。

「さあ、早く帰りましょう　ミディスへ！」

空の言葉に、ルストもカルファーズも同意する。

長かった旅路がやっと終わり、待ち焦がれていた帰途を後押しするよつに、海からの風が力強く吹いた。

隣国ビバスからの使者来訪の知らせに、ミデイス王宮は沸き立っていた。

前夜遅く、第一王子付き私兵隊副隊長であるセイシエルと共にやってきたその使者は、直接王との謁見を許可されたという。

本来ならば王族やごく一部の者でしか知りえないはずのその理由は、翌朝には侍女たちの間にも広まっていた。

その前日に到着した第三王子からの早馬 帰還報告と、末の王子救出の知らせ。

待ち望んでいた情報と相まって、喜びに皆が口を閉ざしてはいられなかったのだらうと、国王も特に処罰なども設けず、暗黙の了解となった噂は尾ひれのついた形で飛び交っていたのだった。

「本当によかったわ ねえ、エマナ！ あなたは特に姫君と親しいから、心配で仕方なかったでしょう」

侍女仲間であるララに肩を叩かれ、エマナは編み物の手を止め、微笑んだ。

「ええ、本当に……！ 殿下方も姫君もご無事だったことが嬉しくて、お帰りが楽しみでなんだか気分が落ち着かないくらいだわ」

正直な言葉を裏付けるのは、先ほどからあまり進んでいない編み目の様子。

細かなレースで丁寧に編んでいたのはひざ掛けで、空が戻ってきたら使ってもらおうと思っていたものだった。

「綺麗な模様！ きつと姫君もお喜びになれるわ」

あの黒髪の姫君にただ贈るだけではなく、彼女の無事を祈ってひと針ひと針、心を込めてエマナが編んできたことを知るララは笑う。

優しい微笑が、どこかからかうような色を帯びたことにエマナが気づいた時、ララが囁いた。

「あなたのクガル様もご無事でよかったわ　本当はこれが一番嬉しい知らせだったんじゃないの？」

途端、ぼつと火のついたように赤くなるエマナの頬。

「なつ、何を言ってるのよ！　そっ、そっ、そっ、そんなこと！」

編み針を取り落として、あわてふためくエマナに笑って、ララが拾う。

「馬鹿ねえ、あなたの気持ちなんてみんな知ってるわよ。クガル様お目当ての子たちはともかく、あたしは応援してるんだから。もうすぐでお顔が見られるじゃない！　お帰りになられたらちゃんとして挨拶するのよ！」

はい、と編み針を手渡して、笑って手を振るララ。

その後ろ姿をまだ赤い顔で見送って、エマナは編み物を再開する。「姫君がお戻りになられるまでに、完成させなきゃ。ぼんやりしてる暇はないのかわ！」

自分自身に湯を入れ、エマナが編み始めるのは、真っ白のレース。そこに編みこまれていく模様は、ミデイスを代表する花　美しい宝石をも思わせる、宝玉花の群生。

四角形に閉じる不思議な色の宝玉花は、夜明け前に咲く性質を持っている。

わずかな間しか咲かないことから、花が開いているのを目にした者には幸せが訪れるという言い伝えのある花だ。

「姫君、喜んで下さるかしら」  
独り言と共に、思わず緩む頬。

ただの侍女でしかない自分を大切な友人だとまで言ってくれた、あの優しい姫君は隣国ビバスでもその魅力を失わなかったらしい。

女王自らの謝罪文と、ミデイスとの外交文書の再締結を約束した手紙で、国王陛下は今回の事件を恩赦されることに決定なさったと

か。

この素晴らしい姫君がおられる貴国ならば、更なる発展は約束されたに等しい。一層の親交を持って、我が国ビバスは貴国ミディスへの協力を惜しまない。

という文面が本当であったかどうかは、エマナにはわからない。けれど広まっている噂の通り、女王が我らが暁の姫君を気に入れたというのは間違いないだろうと確信していた。

ふふ、と一人笑って、ひざ掛けを編みながら、エマナは窓からの隙間風に身を震わせる。

「まあ、すっかり閉まっていなかったのね」

わずかに開いていた窓を閉めなおし、灰色の空を見上げた。

最近、すっかり朝夕の冷え込みが厳しくなった。雪の季節がもうすぐそこまで来ているのだ。

姫君とお別れしてから、もうひと月。ああ、どれほどに再会を願っておられるか、私にもよくわかる気がするわ……。

心の中で共感するエマナは、浮かんでくる面影に思いをはせる。

いつも微笑を浮かべ、優しい態度を崩さぬ、愛しいお方。

一目でもいいから会いたいと願う気持ちは、自分にもよくわかるから。

「クガル様……」

まだ見えぬ愛しい人の笑顔を思い描きながら、エマナはいつまでも窓の外を眺めていた。



106・役目(後書き)

テローザ編、ビバス編、どちらもいよいよ終了となり、次回からはまたミディアスの地でのお話が始まります。ついに次話で空とエシユタンドが再会します！

来週更新をお楽しみに^^

ほぼひと月ぶりにまぶしい白の正装を身につけたエシユタンドは、謁見の間に立っていた。

玉座に腰掛ける国王　いつもは厳しい表情の父が、今日は喜びに瞳を細めている。

朝の清々しい光を浴びながら、その前に跪いてようやく、帰ってきたのだという実感が沸いた。

「無事の帰還、喜ばしく思うぞ」

ゆっくりと王が口を開いた。

隣に座る王妃も、今までの冷たさが嘘のような笑顔を浮かべている。

「エカルドの救出、本当にご苦労でした。まだ眠ったままではありませんが、とにかく無事であったことが何より……感謝しますよ、エシユタンド」

息子を取り戻した喜びは他の何にも勝るのであろう、王妃は嬉しそうにエシユタンドを見やる。

「ありがとうございます、母上」

空が見ていたなら、信じられないと驚いただろうか。それとも喜んだだろうか　そんなことを考えながら、エシユタンドは答えた。王妃の性格上、このまま大人しくなるとは思えないものの、しばし休戦というのが一番妥当な結論だった。

「そなたにも大変感謝している。末の王子捜索に力を発揮してくれただけではなく、直接発見してくれたというではないか　クルス王国のイラル、であったな。何か褒賞をとらせよう」

直々に言葉をかけられ、恐縮したように頭を垂れるイラル。

すっかりエシユタンドの隣にいて違和感がなくなった彼が、いつもの調子で頭を掻いた。

「いえ、とんでもありません、国王陛下。今回のことは私個人の

判断で行ったこと。褒賞などのお気遣いは……」

言葉だけは丁寧なもの、どこか気楽な調子が抜けないイラルに、エシュタンドはひそかに笑いをかみ殺す。

「ではクルス王に直接、感謝の印をお贈りすべきであろう。早速、使者の手配を」

「そつ、そんな それこそんでもないことです！ 結果はともかく、俺が、いや私が職務を放り出して他国の王子を助けに行っていたなんてことが知られたら、かえって厳罰ものです。どうか、それだけはご容赦を」

言いかけた王に向かって、イラルはあわてたように両手を振る。

王妃の鋭い目に怯えたように言葉を止めるが、時既に遅く。

謁見の間には、ざわざわと笑いが広がっていく。

「ミデイスの諸事が落ち着いたら、私が一度クルスを正式訪問するということでいかがでしょうか？ 父上。優秀な国境警備兵をお持ちであると、ご挨拶に伺うという名目で」

間に入ったエシュタンドの提案で、イラルはほっとしたような顔をした。

少し考えていた国王が頷いた。

「わかった。ではそういうことにしておこう」

微笑んだ灰褐色の瞳が、エシュタンドを見つめながら真剣な色を宿す。その場に流れる静かな空気の中で、王は深く息を吐いた。

「改めて 本当にご苦労だった、エシュタンド。そなたも無事戻ってくれて、嬉しく思っている」

「父上……」

思わず答えたのは、珍しいほど率直な父の言葉に対する驚きからだった。

王妃も穏やかに見守る中、国王は立ち上がり、エシュタンドの目前まで歩み寄った。

「これほど自分が情けなく、口惜しかったことはない。息子二人をも危険な地にやっただま、国王ながらに何一つ有効な策を打つこと

ができなかったのだからな」

「陛下」

水色の瞳が純粹な驚愕から、どこか複雑な光を帯びたことに気づいたのかどうなのか　王は隣の王妃にも目をやって、首を振る。

「王宮や国内の最低限の守護を危惧したからとはいえ、もっと早くに援軍を出すべきであった。そうすれば、お前がそれほどの怪我を負うこともなかったかもしれないと言っのに」

すまぬ、とエシユタンドだけに聞こえる声で言った王は、下に巻かれた包帯のせいで少し厚くなった腿の部分を痛々しげに見やった。「そんな　援軍には十分に助けられました。父上、国を守り導くということがどれほどに重要な責にあるものか、私にも少しわかった気がいたします。どうか、これ以上お心を碎かれませぬよう」

「エシユタンド……」

わずかに瞳を細め、まぶしそうな顔で王がエシユタンドを見つめる。

二人の間に交わされた視線は、深い意味を皆に感じさせるものだった。

「次に魔が攻撃してくることがあれば、その時は　守護竜を率いて、私自身が赴こう。それが私の、国王としての責である」

発された言葉は、堂々たる王者の威厳に満ちていた。

エシユタンドも、その場にいる全員も　そして隣の王妃ですら顔を上げる者はなく、広間は凜とした静けさに包まれるのだった。

数日後、出発の準備を整えた馬車が一台、エシユタンドの宮の前に停められていた。

乾いた大地の色をした短髪をぱりぱり掻きながら、出会った時と同じように笑うのはイラルだ。

「世話になったな、王子。もうすっかり疲れも取れたってのに、長

居させてもらってなんだか逆に申し訳ない気分だぜ」

宮に一緒に滞在した間にも、全くといっていいほど王宮に染まる様子もなく、いつまでたつても飄々とした態度の戦友に、エシユタンドも笑う。

「何を言っている。あれほどの恩に報いるには、まだまだこの程度では足りないというものだ。やはりクルス国王陛下に正式な書状をお送りすべきだったかな」

「やめてくれよ、それだけは……」

互いに肩を叩いて笑いあうと、イラルは冗談めかした様子で続ける。

「そんなに言うなら、せめて王子の婚約者とやらの顔だけでも拝ませてもらってから出発しようかな。もう着く頃だろ？ どうも急いで彼女が来る前に送り出そうとしてるように思えてならんぞ」

「そんなことはない」とエシユタンドが真顔を崩さず答えても、お見通しだとイラルはにやついた。

「噂によると、かの有名なビバスの女王でさえ味方につけたというじゃないか。どれほどの美人なのか、ぜひ対面したいね」

「馬鹿を言っていると言で山が越えられなくなるぞ？ クルスじゃもう初雪が降ったらしいじゃないか」

「おいおい、さっきまでと態度が随分違うじゃねえか。急かしやがって、そんなに独り占めしたいのか？」

「どんどん言葉遣いすら乱れてくるやりとりに、周囲で見守るクガルたちの顔も緩む。」

「笑いを必死で堪えている彼らに気づきながらも、エシユタンドは堂々と頷いた。」

「ああ、したいね。相手が一国の王だろうが、精霊だろうが、もうこれ以上誰にだって彼女をさらわれないようにな」

藍色の瞳で挑戦的に見つめ返したエシユタンドに、ついに堪えきれなくなつたようにイラルが吹き出した。「まるで子供だな、そんなにべた惚れだつてわけか」と身をよじって笑うイラルに、くすく

すと笑いが巻き起こる。十分に自覚済みの事実だが、改めて言われると顔が赤くなった。

ひとしきり笑い終えたイラルは、笑みを緑の瞳に残したままエシユタンドに片手を差し出す。

「いいことだぜ。それだけ愛した女を妻に娶れば、王座についてもさぞかしい王になれるだろう。応援してるぜ、王子」

「ああ　ありがとう、イラル」

しっかりとその手を握ったエシユタンドの瞳が、一瞬複雑な色に揺れたことに気づいた者は誰もいない。

大きく手を上げ、馬車に乗り込んだイラルを見送るエシユタンドのマントが、吹いてきた寒風にはためいた。

「かなり冷えてきたな……」

呟いた声を聞き取ったクガルが、真っ白の襟巻を差し出して笑った。

「この分では、ミデイスに初雪が降るのももうすぐでしょうね」

優しい微笑に頷いて、エシユタンドは首に巻きつけた襟巻の暖かな感触を味わいながら、ふと気づいたようにクガルを見た。

首元にいつも覗いていた皮ひもが見当たらず、代わりのように彼の腰にくくりつけられた武器袋から見えたのは、繊細な花の刺繍。

帰りを待ち望み、無事を願ってひと針ずつあの侍女が糸を通した守り袋が、ちらりと中からその姿を見せているのだ。

「クガル」

「はい、殿下」

何でしょう、とすぐさま返ってくる栗色の瞳に訊ねるのはなぜかためらわれた。

あの時、魔に屈しなかったのも、選択を下したのも、クガル自身なのだから。

「いや、何でもない。さあ、入るか。今日は訓練もここまでにして、隊の皆も休息を取るといい。体調管理も立派な任務のうちだからな」  
肩にそっと手を置いて言うと、クガルは何もかも心得たように微

笑んで、「ええ、殿下もどうぞお休みくださいませ」と言い置いて隊のもとへ去っていった。

その返答に含まれた彼らしい気配りにエシユタンドはふっと口角を上げる。

一番休息が必要なのは、自分だということか。

まだ少し引きずる足を、皆の前では何ともないように振舞っていることさえ、クガルにはお見通しらしい。

いや、目に見える体の傷だけではない。心が、どうしようもないほどに浮き立っている。

もうすぐだ。もうすぐで、彼女に会える。

そう思うだけで心は弾み、傷の痛みさえ忘れるほど。ああ、こんなにまで自分は、彼女に会いたくてたまらなかったのだ。

胸を押さえながら自らの心臓の鼓動を感じていたエシユタンドが、足を止めた。

振り返っても何も無い。ただ、灰色の空と遠くに森が見えるばかり。

なのに直感がそうだと告げていた。

「殿下！ ただいま伝令が……姫君が、姫君がつい先ほど、王宮正門にお着きになられたそうです！」

走ってきた馬から降りた兵が、満面の笑みで伝えた内容。それこそが、エシユタンドが焦がれるほどに待ち望んでいた知らせだった。

その場所を選んだのは、自分のこだわりからだった。

国王への謁見さえ後回しにして、本来ならば許されるわがままではない。

けれど許可してくれたのは、父王の優しさであるだろう。

今だけは誰のどんな好意であれ、全て利用してもいいと思えた。これほどに誰かに会いたいと願ったことが、今までにあっただろうか。

亡き母親に一目でも会えたらと幼少の折に泣いた時とはまた違う、高鳴る胸を抑えられない衝動。

邪魔する者はたとえ羽虫一匹ですら許せないほどの、熱い激情。さつきイラルに答えた言葉は、まさしく自分の本音だった。

再び会えたら　もう一度彼女をこの腕の中に抱きしめられたなら、二度と離したくはない。

誰の腕にも渡さない。それがどれほど醜い独占欲であろうと、もう躊躇はしない。

ありのまま、持てる全てを懸けて彼女を愛する。

それだけが自分が彼女にできる、唯一のことだから。

深く息を吐いたエシユタンドの足もとで、緑の草が揺れている。

常緑の不思議な草の合間には、宝玉を思わせる虹色の花々。

今は固く蕾を閉じた姿ではあるものの、それ以外はあの時と全く同じ草原。

彼女と出会った、運命の場所。

ふわり、と風がエシユタンドの髪を撫でた。

振り向くのと同時に、声は響いた。

「エシユタンド」

もう一度彼女は呼んだ。

きらめくのは銀の武装で、着替える時間すら惜しんでここへやってきたのだということがわかる。

一歩、二歩、静かに歩み寄ってくる姿は、間違いもなくエシユタンドが待っていたもの。

「……ソラ」

低く、名を呼ぶ声がこぼれた。共にあふれ出すのは、抑え付けていた彼女への想い。

「ソラー！」



再び叫んだ瞬間に、駆けてきた少女が腕の中に飛び込んだ。抱きしめる。腕を回す。力を込める。

全ての動作すら緩慢に思えるほどに、じれったくて仕方なくて。

風になびく黒髪に手を入れて、彼女の頭を引き寄せた。

まるでそうなるのが自然だったかのように、二人の唇は一つに重なる。

言葉も、想いも、何一つ湧き上がってこなかった。

感じるのはただ、お互いの胸の鼓動と温かさだけ。世界中が静まり返ったかのような錯覚に包まれる。

「会いたかった……！」

囁くと、黒い瞳から涙がこぼれ落ちた。その透明な雫と同じ数だけ、エシユタンドは彼女の唇に触れていく。

指先で、唇で 全身で再会を実感する。

数え切れぬほどの口付けは、熱く、甘い喜びに満ちた二人の『会話』になる。

何も言わなくても、何も語らなくても、お互いの唇の熱が心を伝えてくれたから。

どれくらいの間そうしていたのか、エシユタンドがそつと頭上を見上げたその時だった。

白いものがはらはらと落ちてくる。

ようやく気づいたエシユタンドが苦笑しながら襟巻を空に譲った頃には、もう宝玉花たちも雪化粧を施されていて。

名残惜しげに抱き合った恋人たちの再会を、もう一度祝うように優しく揺れたのだった。

107・初雪（後書き）

待ちに待った二人の再会、いかがでしたか？

物語はまたミデイスの地で繰り広げられることになります。

これからの展開もお楽しみに！

次回更新はまた来週です^^

三度目の口付けは、お前が望んだ時に　　そう言った時の、苦しげな藍色の瞳を覚えている。

あれから季節はまた流れて、窓の外には今も雪が降り続けているなんて。

不思議な感慨に包まれながら、空は寝台から身を起こした。

「おはようございます、姫君」

湯を張った木桶を嬉しそうに持つてきた少女の声で、笑顔が浮かぶ。

「おはよう、エマナ。ああ、あたし本当に帰ってきたんだよね。また会えて嬉しい……嬉しいよーエマナ！」

ぎゅう、と抱きついたら、エマナは頬を染めつつ、同じ喜びを亜麻色の瞳に表してくれた。

「まあ、姫君ったら　お帰りになられてもう三日でございますよ？　毎日そう仰っていただけで、もちろん私もとても嬉しいのですけれど」

やわらかく絞ってくれた温かい布で、空は自分の手足を拭いている。エマナがやってくれようとするのを丁寧に断った、朝の身支度の一環だった。

「そうだよね、もう三日……なんだかあっという間に日が過ぎていくから実感がわかないんだ」

戻ってきてみれば、自分が異国の地まで旅に出ていたというのが信じられないほど、この部屋は変わらなかった。

装飾は最低限に抑えられた、シンプルな家具に寝台、そしてタペストリー。それだけが置かれた、エシユタンドと　　空の部屋。

夜着を脱いで、揃えてくれたドレスに着替える。これだけは、とエマナが髪に櫛を入れてくれていている間、かけてくれた白いレースの膝掛けを見ながら、空はそっと瞳を閉じていた。

こうして自分の無事を祈りながら、待っていてくれた人たちがいる。会いたくてたまらなかつた、愛しい人がいる。

たとえ未来はどうあれ、今の自分にとって、戻るべき場所はここだったのだと素直に思えた。

考えた途端、ちくりと胸を刺した痛みを無視して、空が鏡に映る自分を見た時、扉が静かに開いた。

「おはよう、ソラ」

長身の背をかがめて、頬にキスを落としてくれる王子は、どうやらすぐそばにエマナがいることなど全く気にしていないらしい。

赤くなつた空の顔を平然と見つめたまま、藍色の瞳を細める。

「そろそろ旅の疲れはとれたか？ 今朝は一段と美しく見えるな。新しいドレスがまたよく似合っている」

エマナから受け取つた毛皮の上着を肩にかけてくれながら、優しく言うエシユタンド。

戻ってきてからもう何度も目にしたはずの微笑みが、またまぶしく感じて空は目線を泳がせた。

「あ、ありがと……それより、エシユタンドは足の痛み、もう大丈夫なの？」

「ああ、すっかり元通りだ。お前が治してくれたおかげだよ。ちなみに昨日も一昨日も同じ答えを返したと思うがな、心配性の我が姫君。なんなら傷のない肌をもう一度見せようか？」

「いつ、いつってば わかつた、わかつたから！」

真つ赤になつて両手と首を振る空を見て、エシユタンドはひとしきり笑つた後、思い出したように続ける。

「今日の昼食は父上も一緒にとられるそうだ。お前と色々話したいと直々のお申し出だぞ。心配するな、私がそばについているから」

最後は空だけに囁きかけたエシユタンドが、もう一度額に口付けをする。

言葉を返す暇もなく、早々に去っていった後姿を見て、思わずた

め息がもれた。

「 姫君？」

席を外していたエマナが、香草茶を淹れて戻ってきてもお、空の表情は晴れなかった。

「……わかりますわ、せつかくご帰国されたのにゆっくりお二人で時を過ごす暇もないなんて。でももうしばらくのご辛抱ですわ、姫君。殿下の改革が落ち着かれたら、存分にそばにいてくださいますよ」

優しく両肩を支え、微笑みかけてくれるエマナ。その言葉にあわてたように空は首を振った。

「あ、ううん。あの、そうじゃないんだ。エシユタンドがやるうとすることは立派なことだもの。もちろんあたしだって応援してるただ、ね」

言いよどんだのを照れていると勘違いしたのか、エマナは香草茶のおかわりを注いでくれながら笑う。

「ええ。わかっていてもお寂しいものですわよね」

うんうん、と頷きながら自身の心情と重ね合わせているらしい。

エマナは両手を組んで、切なげな瞳を窓の外に向けている。

エシユタンドと共に多忙を極めているクガルを思い出しながら、曖昧に笑い返した。

二人がどうなったのか、あとでとっちめてやらなきや  いい報告を期待して、少しだけ空の表情が明るくなる。

今は訊ねる気になれないのは、どうしてなのだろう。

待ち焦がれていた再会を果たして、宝玉花原で抱き合ったあの時  何もかもが通じ合ったような気がした。

もちろんそれは幻想でも何でもなくて、自分を大事にしてくれるエシユタンドの態度でわかる。

けれど、その先は？

考えてしまえば恐ろしくなって、思わず頭を振る。手にしていた香草茶から、白い湯気がふわりと立ち上っていく。

今はまだ本格的な雪になつてはいない。降り続いてはいるもの、すぐに翌朝には解けて、大地は乾いたままだ。

宮の中にいけば寒さもそれほどではないから、変わっていく季節に取り残されているような気さえする。

エシユタンドは、雪が深くなる前に森の危機に対処したいと王に提案した。そう教えてくれたのはエマナで、彼本人からは空を気遣つてかまだ何の言葉もなかった。

空が戻つたと同時に始まつたエシユタンドの改革案は、森や各地の村にだけ向けられたものではないという。

荒れた村の調査、領主の圧制や搾取の有無、ひいては王宮内にまで 国の乱れ、すなわち人心の乱れを正しい方向に導くこと、それがミデイスの森、そして国を救うことにつながる。

ルストたちからも聞いた情報は、空にもよくわかつた。だから朝から晩まで忙しそうに走り回っているのだということも。

でも、本当は彼が決して触れない問題がある。誰も知らない、空とエシユタンドの間の一線。

それは決して立ち入れないものではなく、ただ空自身が心を決められないでいる、大きな壁。

ふう、と深く息を吐き出した空を心配そうに見ていたエマナが、そうだ、と両手を打った。

「もう少して雪祭りの準備が始まるんですよ、姫君。きっと陛下からもそのお話がございますわ。収穫祭に続く、ミデイスの大事な行事の一つですから」

「雪祭り……？」

懸命に喜ばせようとしてくれているエマナにつられて、空も顔を上げる。

静かに降り続く白い雪を指し示しながら、エマナは微笑んだ。

「ええ。雪の季節到来を祝う、伝統行事でございます。収穫祭とは違って王宮内だけで行われるものですが、おいしい食事とお酒を楽しみながら、雪を愛でる。舞踏会というほどの規模ではございません

んけれど、踊りと歌で寒さを忘れようというお祭りですわ。真っ白な雪景色を見ながら、それは素敵ですよ！ その時は殿下もきくと姫君とご一緒に参加なさいますわ。ですから姫君……」

元気を出してくださいませ、と両手を握って言ったエマナの言葉に、ようやく空は頬を緩ませる。

ああ、そうだ。自分にはこんなに優しい友人もいる。考え込んでいたって事態は何も変わりはないんだ。大事な人たちを、大事なこの国を救うために動かなければ。

それならば、今こうしている間にもできることだってあるはず。じつと悩んでるだけなんて、性に合わないでしょ？ 空！

自分で自分を叱咤しながら、空は立ち上がった。両腕を上げて伸びをして、エマナに振り向いた時には既に、黒い瞳はいつもの輝きを取り戻していた。

「姫君、どちらへ？」

きょとんとした亜麻色の瞳に空はいたずらっぽく笑う。

「ちよつとね。思いついたことがあるんだ。そうだ、エマナも付き合って！ 一人で行くの、ちよつと怖いから！」

「ええっ？ な、何ですか？」

いいからいいから、と華奢な少女の手を引いて、らしからぬ姫君は廊下を軽やかに歩き出した。

国王、王妃、そして王族たちが並ぶ席の中に、空はエシユタンドと腰掛けていた。

ただ一つ、長い食卓の端にある空席に胸が痛んだけれど、ともかく無事は確かであったから皆の表情は明るかった。

「さて、そろそろ聞かせてくれてもいいだろう。ソラ、ビバスの女

王と親交を深めたというのは本当なのか？」

食事が終わった頃を見計らって、王が視線を向けてくる。

まだ緊張はあったが、すぐそばにエシユタンドがいてくれるだけで、なぜか空の心も落ち着いていた。

「親交を深めた、と言わせていただいていたのかはおこがましいですが……大変よくしていただいたことは確かです、陛下」

ビバスのネイアーレを見物させてくれたこと、夜遅くまで色々な話をしてくれたこと、全てを包み隠さず話すと、王は快活に笑った。「なるほど。あの女王は若くして人望のある良い王だとは聞いていたが、噂では意外と気難しいところもあるそうだ。その彼女をもつてそれほどまでにさせるとは、さすがに我が王子が選んだ婚約者だと言えるだろうな」

食後の果実酒を片手にしているとはいえ、これだけ饒舌な王は初めてで、戸惑う空に代わってエシユタンドが笑い返す。

「そうでしょう、父上。私も誇らしいと思っております。ビバスとは常々更なる親交をと願っていたのですから、こちらとしてもこれほどに喜ばしい結果はないというもの。ただし、あくまで結果を見れば、の話ですが」

「確かに。術士の手にかかったとはいえ、他国まで連れ去られてしまったことは一歩間違えば大問題だ。ソラよ、そなたもこれからは十分に注意するように。護衛の兵は増やしてあるがな」

適度に引き締められた場の空気を読んだように、エシユタンドが咳払いと共に「父上」と切り出した。

「護衛といえば、各宿場街に置かれた領主の屋敷の警備隊ですが、数を見直してみるとどうにも多すぎると思うのです。その分を荒廃した村々へ派遣し、王宮からの援護を持って畑の開拓や家々の補修にあてるというのはいかがかと」

鋭い藍色の瞳に、自然王の顔も真剣なものになる。片手にあった果実酒の杯はいつしか食卓へ戻されていた。

「そうだな、それに関してはお前の判断に任せよう。しかし領主た



ちからの不満が出ぬよう、あまり急速な改革には用心せねばならんぞ、エシユタンド」

続くやりとりに、どこことなく手持ち無沙汰で空の瞳は向かい側の王族席を追う。

長い金の髪を後ろで束ね、黙ったまま香草茶を口にしているエーデレードは、出発前とまったく変わらない穏やかな笑みを向けてくれた。

彼にも改めて兵を貸してくれたお礼を言わなければ　それから、あの人にも。

つい避けてしまいがちな視線を、覚悟を決めて合わせてみた空は、思わず口をあぐりと開ける。

なんだよ、と言わんばかりの仏頂面を浮かべたのは、エルファンド。くせのある髪　長かった前髪もえりあしも、短く切り揃えられた彼のいでたちは、今までと印象が違いすぎて驚かすにはいらなかったのだ。華やかな顔立ちがすつきり出されて、明るい茶をした瞳がなぜか以前よりも凛として見える。

確か帰国の謁見ではまだ前と同じだったような気がしたけど、どうだったっけ。疲れてたし、緊張してたから思い出せないや。

あの夜の恐怖を思い出そうとしても思い出せないくらいの変貌ぶりに、空は驚愕に目を見張ったままでいた。

くす、と笑ったエーデレードの声で、あわてて我に返る。  
「どうしました、ソラ」

思いがけない相手に声をかけられて、思わず香草茶のカップを取り落としそうになった。なんとか反射神経を総動員して、傾けかけただけで済んだことにほっとする。

「何でもありません　お、王妃様。あ、いえ、陛下。その……」  
口ごもる空を見る水色の瞳は、あくまで穏やかだ。信じられない変化に、空は言葉を続けることができなかった。

「そんなに身構えることはありませんよ。あなたも王族と認められたからには、私の娘も同然。母が娘に声をかけるのに、どんな遠慮

が必要でしょう」

「は、はあ」

一体どうしちゃったんだろう、それが空の正直な感想だった。エシユタンドとの対立を全て水に流そうと言うのだろうか。エカルドが戻ってきたことで、王妃の機嫌はまだ最高のようだった。

もしかして、少しは優しくなってくれたのかな。

自分がビバスマで行った原因を忘れたわけではない。でもそれならば、無用な争いは避けられる。

一瞬喜びに顔を輝かせかけた空を、水色の瞳が映す。

「エシユタンドもミデイスを改革するためにと奔走しているような国を救うために王族がその責務を果たすは当然の道理。あなたは次期王位継承者の婚約者として、どのようなお考えをお持ちかしら？」  
閉じた扇で口元を隠しながら、王妃は訊ねた。

聞かせてちょうだい、と続ける声音はとても優しい。

なのにその瞳に閃いた光は恐ろしいほど冷たくて、空は背筋が寒くなる思いがした。

「ああ、ソラはまだ旅の疲れが」

「あなたには聞いていないのよ、エシユタンド」

助け舟を出そうとしたエシユタンドの言葉をばつさり切って、王妃は再び微笑を浮かべる。

「改革は結構。次期王位継承者として素晴らしい心構えだね。けれど、自分を支える立場となる婚約者への教育を怠っては足もとを救われることにもなりかねない。そうは思いませんか？ 陛下」

まだまだ。まだ、彼女はあきらめてはいないのだ。

まるで冷たい剣の切っ先を喉元に突きつけられたような気分だった。

何か言おうとするエシユタンドを、王が目線だけで制する。

「王妃の言うことも一理ある。何か考えはあるか？ ソラよ」

「父上」と厳しい声を上げるエシユタンドにそっと笑いかけて、空は息を吐いた。

まだだ。まだ、自分のせいでエシュタンドを苦しい立場にお  
いやっではいけない。

だから、精一杯の責を果たすのだ。

「あの……ご期待に沿うものかどうかはわかりませんが、一つだけ  
提案があります」

王も王妃も、隣のエシュタンドすら驚きの目を向けてくるのがわ  
かって、震えそうになる手をこっさり握り締める。

できるだけ背筋を伸ばして、空は口を開いた。

108・責任(後書き)

婚約者としての責任を問う、王妃の挑戦に空はどう答えるのか。  
まだまだ対立の火は消えていない、王宮での今後の展開をお楽しみに！

王族の間を出て、ほっと息を吐き出した空に歩み寄ってきたのはエーデレードだった。

優美な刺繍が施された純白の正装は、エシユタンドのものとはまた異なり、穏やかな微笑の彼によく似合っている。

少しだけ片足を引きずっているエーデレードの負担にならないようにと、駆け寄った空が先にお辞儀をした。

「殿下、私兵隊を貸していただき、色々のご尽力くださり、本当にありがとうございます！」

「これはご丁寧にもいいんですよ。未来の義妹いもづこのためなら喜んで、とあの時にも言ったでしょう」

軽く肩をすくめて笑みを浮かべるエーデレードの背後には、カルファーズが控えている。

セイシエルヤルストに対する時とはまるきり違う、真剣そのものの表情であるはずなのに、どこか笑いがこみあげてくるのは真剣を通り越してうっとりとして見える眼差しのせいだろうか。

敬愛してやまない、と自分で豪語していたカルファーズの言葉が事実であるのがわかって、空は笑いそうになるのを必死で堪えた。

「それにしても驚いたな。まさか義妹がここまで優秀だったとは……」

着ていた白の上着をカルファーズに手渡しながら、エーデレードが続ける。

「一瞬間き流しそうになった言葉の内容に驚いたのは空のほうだった。」

「えっ、ゆ、優秀って私ですか？」

「ええ。現在のところ、私が義妹と呼ぶべき対象はあなたしかいらつしやらないと思うのですがね」

ふふ、と楽しげに笑うエーデレード。

穏やかそのものの彼とは対照的に、空の顔は真っ赤に染まっている。

「そ、そんな……優秀だなんてとんでもないです。だって、さつきも王妃、いえ、えつと陛下だって何も仰らなかつたし……やっぱり私の提案、おかしな発想だったのかなあつて今も反省していたところ……」

「まさにそれですよ、今私が褒めていたのは」

「え、褒め……ええっ？ 本当ですか？」

あわてる空に、エーデレードはしっかりと頷く。

カルファーズさえも、なぜか微笑まじりに自分を見ているような気がして、空は更に赤くなった。

「四人の巫女長全てを王宮へ召集し、各聖殿の協力を仰ぐ。しかも聖殿そのものを国民に開放し、自由に祈れる場所にせよ、と来ましたからね。さすがの私も驚きましたよ。本当にあなたは、いつ見ても飽きない 面白い義妹だ」

「お、おもしろ……？」

これでは褒められているのか、けなされているのかわからない。目を白黒させる空に助け舟を出したのは、兵を引き連れて外で待機していたはずのセイシエルだった。

「殿下にとつての最良の褒め言葉ですよ。我らが第一殿下は、常に退屈しのぎを探していらっしやるような、少年のような面をお持ちなんです」

空の耳元で声を落として言ったセイシエルが、あいかわらず艶やかな銀の髪を揺らして微笑む。

幻術なしでも時に女性と見間違ふほどの整った容姿は、王宮に戻つて見るとまた一段と目立つものだった。

「あ、あの じゃあさつきの案、少しは役立つものだったんでしようか？」

エシユタンドの改革にとって、という言葉はさすがに続けるのが気恥ずかしくてやめたのだが、エーデレードは何もかもお見通しの

ように笑う。

「ええ。おそらく役立ちすぎて、エシユタンドさえも戸惑っているのではないかな。そのせいで、父上に呼ばれているわけですからね」  
「えっ!?! やっぱり何か怒られてるんですか? ど、どうしよう」

「今も彼だけが王に呼ばれ、何事か話し合っているふうなのはやはり自分のことが原因だったのかと、再び空があわてだす。

「さもおかしそうに声を上げて笑ったエーデレードに、カルファーズとセイシエルが顔を見合わせる。

「で、殿下がお笑いになった……殿下が! これは珍しいこともあるものだ、なあシエル」

「本当にな。さすがは我らが姫君 第三殿下だけではなく、こうして第一殿下まで虜にされていくのだからな」

「冗談めかした会話に空が赤くなるが、否定する前にエーデレードが口を開いた。

「ああ、惜しいことをしたよ、カルにシエル。エシユタンドよりも先に私が出会っていたならば、どれほど楽しかっただろう、とね」

「殿下 も、もうやめてください!」

空の大声で、その場にいた兵たちまでもが笑い出す。

振り返ると、廊下の先で控えていたエマナでさえも例外ではなかった。

「おい、うるさいぞ。通行の邪魔だ」

ぶつきらぼうにかけられた声に、空は目を見開く。

「明るい茶色の瞳で睨まれて、あわてて壁側に避けた。いや、避けたというよりもへばりついた、というような空の態度に、不満そうな顔をしたのはエルファンドだったのだ。

「な、何だよ……そんなに警戒しなくても別に何もしやしないって。ただ自分の宮へ帰りたいだけだ。正装なんて窮屈で嫌いなんだよ」

随分とすつきりした前髪をかきあげて、ふん、と慥然とした顔で歩いていく後ろ姿を見送っていた空の肩に、エーデレードが手をか

ける。

「そうそう、もう一人いましたね。あなたのいい影響が働いた人物が」

「え、私の影響？」

「そうですね、あなたがエシユタンドを追って出発してから、私が少し説教してやったんですけどもね。いつまでも酒と女に溺れてい  
る人生でいいのか、無気力怠惰すぎる、それでは人生面白くないだ  
ろう、とね。そうしたらあれこれ文句は言っていました、いつの間  
にか髪も切って、酒もやめたようですよ。ああ、これもまさにあな  
たのおかげというべき現象ですね」

芝居がかつた仕草で身振り手振り語るエーデレードに、さすがに  
空もじとつと上目遣いを送る。

「で、殿下 ふざけていらっしやいませんか？」

「これはこれは、それもわかりましたか。優秀なあなただけはある。  
カルにシエル、これから何かあればぜひ彼女に力を貸すように。  
私のお気に入りの義妹だからね」

空の頭までよしよし、と撫でてみせるエーデレード。頬を膨らま  
せてみても、セイシエルもカルフアーズも笑うだけだった。カルフ  
アーズにいたっては、まさに幸せそのものといった顔つきで、エー  
デレードに従っている。

「さて、そろそろ私も宮へ戻るとしよう。はたして父上がエシユタ  
ンドに何の話をしたのか、私も気になるところだけね」

まだ戻ってこないエシユタンドを思うと、空は不安にかられる。

心配そうに固く閉ざされた扉を見つめる空の背中を、エーデー  
ドが軽く叩いて微笑んだ。

「大丈夫、悪い話ではないはずですよ。ただ」

囁かれた言葉に、空の顔色が変わる。

「雪祭りももうすぐ……随分冷えてきたな」

独り言のように呟いて、エーデレードは白いマントを翻し、去っ  
ていく。



残された廊下で、空は灰色の空に浮かぶ雪雲を見上げていた。

覚悟を決める時が、来るかもしれませんよ　　エーデレードはそう言った。

終始にこやかだった彼の顔が、ほんの一瞬だけ真剣に閃いていたことに、空はもちろん気づいていた。

優しいエーデレードの意味する言葉が何なのか、ということも。決断しろ、と彼はそう言いたいのだ。

揺れる蝋燭の炎を見つめながら、ため息をつく空の背後で、寝台を整えていたエマナが顔を上げる。

「あ、あの　姫君。リゴト様もお褒めになっていらっしやいましたよ、さすがは殿下がお選びになった方だって。自分たちにはできない発想をされるって　」

どこか沈んだ空の様子を心配してか、明るく笑いかけるエマナ。気遣わせるのも申し訳なくて、空も笑った。

「そ、そうかな。ならよかった、けど……」  
先ほど王族の間へ行く前に、エマナについて来てもらった教育係のリゴトの部屋。

あの時、奇想天外な発想だとか、実現するには困難だとかあれこれお叱りを受けたことをいい風に要約してくれたのだろう。

でも、本当はエーデレードに感心されたような、素晴らしい考えだったとは自分では思えなかった。

ただ、エシュタンドの役に立ちたい。それだけなのに……どうしてこう、うまくできないんだろう。

多忙は事実。けれどそれだけだろうか。夜が更けても部屋に戻り

もしないエシユタンドを思うと、胸がちくりと痛んだ。

もしかして、自分を選んだことを後悔しているのではないだろうか。それとも　いつまでも決断を下せない自分に、苛立っているのかも。

そんな不安に包まれる。

「あ、あの　姫君、そろそろ暖炉に火を入れさせていただきますわね。夜はかなり冷えこむようになりましたから」

「あ、うん。ありがとう……今日はもう下がって休んで。エマナも雪祭りの準備とかで、色々忙しいから疲れてるでしょう」

侍女たちがひそかに走り回っていることは知っていたから、先回りして声をかける。

エマナは少し驚いた顔をしつつも、微笑んで出て行った。

ぱちぱちと燃える暖炉の炎を見ていたら、いつの間にか眠くなってくる。

長椅子の上でまどろんでいた空は、そっと体が持ち上げられる感覚で目をぼんやりと開いた。

「ああ、起こしてしまったか。眠っている　こんなところで寝ていては風邪を引く。今、寝台に運んでやるから」

低い声が、耳元に優しく響いた。

さつきよりは弱くなった暖炉の火が、薄闇を照らしている。

瞼を持ち上げて、そこに優しい藍色を見つけて、空はふっと嬉しそうに笑った。

「エシユタンド……戻ってきてくれたんだ。また、どっか他のところで寝るのになって思ってた……」

寝ぼけて首に手を回したら、自分を運ぶエシユタンドの足が止まった。

「エシユタンド……？」

訊ねた空の声で、再びエシユタンドが歩き始める。

ふわりと寝台に下ろされて、眠気に負けて目を閉じると、そばに腰を下ろしたのがわかった。

「ソレ」

静かに呼ばれても、固く合わさった瞼はなかなか離れてくれなくて。

夢心地のまま、髪を撫でるエシユタンドの手の平を感じた。

「お前には わからないんだろっな」

ため息まじりの声は、いつもは聞くこともないような寂しげなものだった。

「離れていれば会いたくて……再び手にしたら、もう抱きしめて離すまいと、そう願ってやまなかったというのに。なぜ、こんなにも恐ろしいんだろっ」

頬に触れた手が震えているような気がしたのは、気のせいだったのだろうか。

すぐに離れていった温かさが恋しくて、手を伸ばしてしまう。

「こうしてお前の手をとっているというのに どうしてこんなに……」

苦しいんだろっ、という囁きが耳元で聞こえたような、そんな気がしたのは、もう夢の中だったのかもしれない。

ただ手の平を包んでくれる、温かな感触だけはずっと感じていた。

多忙なエシユタンドの本心と、空のひそかな不安　微妙にすれ違  
う二人の心をよそに、次期王位継承者とその婚約者という立場だけ  
はどんどん確立されていく。

決断すべき時は近づいてきて　　というところで次話へ続きます。  
今後の展開にもご注目ください！

翌朝目を覚ましたら、部屋にはエシユタンドはいなかった。

ゆづべ遅く部屋に来てくれたような、何か話したような微かな記憶はあるのに。

目覚めてみればまた一人きりで、まるで空だけの部屋のようにため息をついた。

「でも 仕方ないよね。エシユタンドだって、頑張ってるんだから」

両頬をぱちりと自分で叩いて、笑顔を作る。

起き上がった時にちょうど開いた扉 いつもどおりの亜麻色の瞳に向けたつもりの微笑は、違う侍女の顔に思わず消える。

「おはようございます、姫君」

こげ茶色の髪をおさげにした少女は、深々と頭を下げてから部屋に入ってきた。

快活そうな大きい瞳と、てきぱきした歩き方には見覚えがある。

確か、エマナと時々親しげに話していて、名前は。

「私、ララと申します。いつもは台所のほうを担当させていただいてるんですが、今日は私が姫君のお世話をさせていただきますので、そばかすの浮いた頬が、にっこり笑うことで可愛い印象を与えて、空は自然と笑顔になった。」

「あ、お、おはよう……今日はエマナはどうしたの？」

「ええ、それが 雪祭りの関係で、ちょっと呼ばれておりまして、申し訳なさそうに笑って、ララが湯桶を足もとに置いた。」

そんなに雪祭りって準備が大変なんだな、とぼんやりしていた空の足を、「失礼いたします」とララが湯に浸した布で拭こうとする。「あつ、い、いいの。これは自分でいつもやってるんだ。だから、布かしてくれたら自分でやるから」

人にやってもらうことにどうしても慣れなくて、空がララに笑い

かける。

思いのほか、びっくりしたような顔が返ってきたかと思うと、ララは「まあ、呆れた！」といきなり大声を出した。

「ラ、ララ……？」

「あつ、申し訳ございません！ いえ、その、姫君に言ったのではないんです。エマナのことですわよ？ こんな当然のお支度までお手伝いしてさしあげてないのかと……姫君方のお手をわずらわせるなんて、とんでもないことですわ！ 私から後できっちり叱っておきますから さ、足をお出しくださいませ」

「えつ、いいのいいの、本当に！ エマナにもお願いして自分でやらせてもらうようにしてるの。人にやってもらうなんて、恥ずかしいし、それに」

まだ拒否する空の言葉などあっさり流して、ララが強引に空の素足をつかんで、布で拭き始める。

途端に耐えられないように身をくねらせ、笑い始める空に、ララはあんぐりと口を開けた。

「あはつ、はは……だめっ！ そこだけはやめて ! くっ、くすぐりたいからっ……」

お願い、とばんばん寝台を叩きながら笑うと、ララはつられたように笑い始めた。

「も、申し訳ございません……私ったら、姫君の前でなんてこと！ はつとしたように両手を口にあてて、頭を下げるララに、空は首を横に振る。

「うっん、いいよ、そんなこと。っていうかあたしがみつともないとこ見せたから笑わせちゃったんだし……ごめんね。こういうわけだから、自分でやらせて？ このことで、誰かにあなたを罰させたりしないから」

やつとこのことで布を渡してくれたララに笑って、空は自分で手足を拭き始める。

少し冷えていた指先が、温かいお湯に触れて気持ちよかった。

「エマナが言っていたこと、よくわかる気がいたしますわ」

そばで衣装を用意してくれていたララが、ぽつりと言った言葉に顔を上げる。

おさげの髪を揺らしながら、ララはにっこりと笑ってくれた。

「姫君は飾り気もなく、純粹でお優しく、本当に素敵なお方だっ  
ていつも侍女仲間にも自慢しておりますのよ？　こんな姫君にお仕  
えできて幸せだってそりゃあ何度も。私も第二殿下の宮にお勤めし  
た時には、色々な姫君方のお世話をしたことがあるのでよくわかり  
ますけれどもね」

苦笑するララと瞳をあわせて、思わず空も困ったように笑う。

エルファンドが常に色々な女性を宮に引き込んでいたという話は、  
エーデレードにも聞いて知っていたからだった。

「でも、元々あたしは身分とか持ってないから、姫らしくないって  
のは当然なんだけどね」

「姫君が異世界からお越しになったというお話なら存じております  
が　大概の女性ならば、これだけの身分を手に入れた途端、変わ  
ってしまうものかと思えますわ。中には必要以上に高飛車になって、  
侍女など人間ではないような扱いをなさる方も少なくありませんの  
よ。あくまで、私たちの知っている世界においては、ですが」

頭をかいて照れ隠しをする空を、ララは感心したように見つめた。  
「なのに姫君は爪の先ほどもいばろうとなさらない。それはなかなか  
かできることではございませんもの。あ、私ったら　これではエ  
マナを叱る資格なんてございませんわね。申し訳ありません、長々と  
お喋りしてしまっ」

「ううん、いいの。そのほうがあたしは嬉しいんだ。エマナと同じ  
ように、ララもこの世界でのあたしの友達になってくれたらいいな  
って」

ララのほうが活発な印象を与えろとはいえ、エマナと似通った、  
温かな雰囲気がある。

年も同じ頃の彼女たちとより親しくなれたら、空にとってこれほ

ど嬉しいことはない。

純粹な希望を込めた言葉に、ララは感極まったのか、潤んだ瞳で頷いたのだ。

「わっ、私でよければぜひ　！　恐れ多いですけどねども、姫君がお望みならばこれほど誇らしいことはございませんわ！　ええ、このララ、立派な友人として姫君のお役に立たせていただきます！」

どうやらエマナとは違うタイプの感激屋さんらしい。涙を飲み込んで、空が差し出した手をしっかりと握り締めたララは、俄然張り切りだした。

「さ、姫君！　今日のお衣装はこちらでございますわ。お袖を通してみてくださいませ」

ララの細いながらもしつかりした手に差し出された衣装　そのきらめく布や刺繍にはなく、生地の色自体に空は目を見開く。

窓から差し込む朝日が照らし出したのは、まるで今朝の庭を思わせるような、純白の雪化粧と同じ色だったのだ。

「こ、これ……　本当に？　あたしが真っ白なドレスを着ていいの？」  
以前、収穫祭の最後を飾る晩餐会で着たことがあるものも、紺の布地に白という色がアクセントとして使われたドレスだった。

それが今、ララが見せてくれているのは、まさしく白一色のドレス。ふんだんに使われたレースと、花をあしらった刺繍ときらきら光る寶石。

全ては豪華そのもので、いつも着ている普段使いの衣装とは格が違うのだ。

空の戸惑いに、きょとんとした顔でララは笑った。

「ええ、もちろんですわ。お衣装はいつも、殿下のご意向なども確認した上で、特別なご指示がない限り私たちが侍女長に許可を得てご用意しているものなんですわ、本日は殿下が直接手配されたものだそうですよ？　なんでも、今日の謁見では白の衣装をと国王陛下直々に仰られたそうです」

「国王陛下、直々に……？」



「はい。ああ　姫君はまだこういった純白のご衣裳は着られていませんでしたっけ。そうですね、ご婚約式はまだとはいえ、すっかりお二人の仲も公認ですから私、おかしいとは思わなくて」  
　　気を許せばお喋りな性質であるらしいのはエマナと似ているララが、独り言の続きのようにそう言って笑う。

滑らかな布地を撫でながら、うっとりした目つきで続けた。

「本当に素敵……とてもよくお似合いになりますわよ、きつと！  
やはり、国王陛下は姫君をご婚約者様として認めておられるからこそ、ですわ。王族にしか許されない白一色の衣装をと命じられるのですもの。きつと婚約式の日取りも近いはずですわ」

「婚約式って」

訊ねかけた空の背後を見て、ララが急に息を呑んで、深々と頭を下げた。

振り向いた先には、少し開いた扉の向こうに佇む、見慣れた人影。

「エシユタンド……！」

「そんなに驚かれては、自分の部屋に帰ってくるにも気を遣うな。ただお前の顔が見たくなくなったけんだが」

既に正装を身にまとったエシユタンドが入ってくると、ララはますます緊張した顔で固くなっている。

「我が姫の話相手になってくれるのは嬉しいが……その席を少し私に譲ってくれないか？」

微笑はそのままに、エシユタンドが声をかけた途端、ララは可哀相なくらいに縮こまってお辞儀した。

「は、はい。ただいま　！　も、申し訳ございませんっ！」

「あ、ララ……！　あの、ありがとう。これからも話相手になつてね」

あわてて手を振って見送ると、エシユタンドがため息をついた。  
何かおかしいことをしただろうか、と振り返った途端、エシユタンドに腕を引かれ、抱きしめられた。

「エシユタンド、あ、あたし……まだ下着……」

夜着からは着替えていたものの、ドレスの下に通常着る、薄い布地のドレスのようなものを身につけただけだったから、空はたちまち赤くなる。

紐であわせただけのデザインだから、それが緩んでしまえばたちまち裸の姿を見られてしまうのだ。

空の心配をよそに、エシユタンドは予想外であるかのように声を上げて笑い始めた。

「そ、そんなに笑わなくってもいいじゃない！ だって恥ずかしいんだからっ」

言い返した空を、藍色の瞳がおかしそうに捉える。

「それよりも薄い夜着の姿も何度も見ていることを忘れたのか？

それに出会ったばかりの時、私はお前の胸だって」

「きゃーっ、やめてやめて！ 言わないで！ 考えないようにしてるんだから！ この馬鹿！ エッチ！」

「エ………？」

最後の単語は理解不能だったのだろうけど、空はかまわず寝台の枕を投げつけた。

しまいには掛け布まで投げつけようとする空に、笑いながらエシユタンドは窓際まで逃げる。

少し開いたカーテンの隙間から誰かに見られると思ったのか、笑いをおさめて、自分のマントを広げて空を腕の中に隠すようにした。「そうすぐに赤くならなくても、こんな朝っぱらから何にもしやしないさ。ただ謁見の前に、お前に話しておきたいことがあっただけだ。まったく……お前といると、真剣な顔さえ保てやしない」

ふっと苦笑して咳くエシユタンドを、空はようやく見上げる。

まだ赤いままの頬に片手でそっと触れて、エシユタンドは優しく黒い瞳を覗き込んだ。

何かを言おうと口を開きかけ、迷っているのか閉じた唇に、空は訝しげな目線を返す。

しばらくして、マントに包んだ空の背中を静かに抱き寄せたエシ

ユタンドは、耳元で囁いた。

「すまない、ソラ。お前を守ってやりたいのに　私はまだこんなにも力不足だ」

「エシユタンド……？」

どうかしたの、と訊ねようとした空の言葉よりも先に、エシユタンドが口を開いた。

「これから謁見で何を言われても　王妃のどんな企みがあきらかになっても、心を痛めるな。お前にわかっていてほしいことはただ一つ、私の心はお前一人のものだということ。これだけは絶対に変わらない。これから先、何があるうとずっと……」

いいな、と囁かれて、空はただ腕の中に身を預ける。

涙が出てきそうなほどに嬉しい。今までの不安も、心細さも瞬時に消えていくほどに　。

それなのに、同時に新たな不安が押し寄せてくる。その得体の知れない恐ろしさが、形になって空に迫ってくる。

謁見までのわずかな時間だけが、今の二人にとっての平穏であることが、なぜかとても切なくてたまらなかった。

110・正装（後書き）

ついに純白の衣装に身をとおすことが許された空。

しかし、王妃の企みや国王の意図に不安はふくらんでいく。

二人の關係に迫るものとは　　というところで次回へ。

続きもお楽しみに！

いつも謁見に使われる広間とは異なる場所に案内された空は、静かな空気に緊張を新たにしていた。

隣で手を握ってくれているエシュタンドがいなかったら、足を踏み入れるのもためらうほどの荘厳さ　同じ感覚は、つい数ヶ月前に味わったものであるというのに、もう何年も前のことのように思われる。

白一色の壁と柱は、金や銀の装飾で輝く王族の間とは全く違った簡素なもので、なぜか漂う雰囲気だけで圧倒された。

藍色の瞳が優しく隣で見つめている。言葉はなくても伝わってくる想いに励まされる気がした。

両側の壁に灯された蝋燭の光に導かれるように歩いていくと、国王が待つていた。

「よく来たわね、二人とも」

にこやかに言葉をかけたのは、隣に並んだ王妃のほうだった。

エカルドはあいかわらず目覚めてはいないものの、日に日に顔色もよくなっているという　その喜ばしい知らせからなのか、既に以前のような派手な化粧と豪華な宝石に彩られ、王妃の微笑みは余裕に満ちているようにさえ見える。

「父上、母上　祈りの間への入室許可、どうもありがとうございます」

跪いたエシュタンドに手を引かれ、空も同じように做う。

この場にいるのが二人だけであることで、収穫祭の時とはまた違う緊張感に包まれていた。

「次期王位継承者とその婚約者だけが許されている儀礼のためですもの。当然でしょう？　ですわね、陛下」

赤い唇を隠すように片手を添え、笑う王妃。

水色の瞳が何を考えているのかわからなくて、空は不安げな目で

エシユタンドを見上げる。

「雪祭りの前に行く、簡単な儀礼だ。心配しなくとも、私のやること  
おりにやればいい」

囁いた声に頷くと、国王が一步進み出た。

「では、杖を」

控えていた侍女が祭壇の上から持ってきた杖の先を、国王がエシ  
ユタンドと空の頭にそつと触れさせる。

「ミディアスの国を受け継ぐべき者たちよ。祭りをしつかりと取り仕  
きり、国の栄光を祈り、民を導かんことを」

王妃も復唱し、杖を持つ王の手に自分の手を重ねた。

「これで終わりだ。何も難しいことはないだろう？」

エシユタンドにそつと囁かれ、空はほつとしながら杖を見る。

木の葉の形をした金の飾りがついた立派な杖　森の国と称され  
るミディアスを統治する国王ただ一人が持つことを許されたものなの  
だとエシユタンドが教えてくれる。

「王杖と言った。昔は国王が常に持ち歩いたそうだが、現在では  
いくつかの儀式においてしか使われていない。収穫祭の時も、ここ  
で父上が手にされていたんだぞ。お前は覚えていないだろうがな」  
緊張でそれどころではなかった空の気持ちをよくわかつているの  
か、いたずらっぽくウインクをしてエシユタンドは笑った。

杖をまた侍女に手渡した国王が振り向いて、あわててまた頭を下  
げると、静かな部屋に王の咳払いが響いた。

「さて、儀礼はこれで終了であるが……エシユタンド、そしてソラ。  
まだお前たちには用件が残っている」

「何でございましょうか、父上」

エシユタンドの声が少し固くなったことに気づいた空が彼を見上  
げる。不安げな黒い瞳を読み取ったように、国王は唇に笑みをたた  
えたのだ。

「心配せずともよい。お前たちに会ってほしい者たちがいるだけだ」  
顔を見合わせる二人の前で、王は両手を叩く。侍女たちが立ち上

がり、祭壇の後ろにあるカーテンを引いた。

「デイ……ディーラさ……ディーラ様!?」

思わず声を上げた空が、あわてて片手を口にあてる。微笑みを返したのは、間違いなくあの東の聖殿で会った、巫女長ディーラだったのだ。

長い白銀の髪と、薄紫の瞳、変わる事のない神秘的な美貌

あえて言えば、薄手の衣装の上に暖かそうなケープを羽織っていることぐらいだろうか、以前と違うのは。

「お久しぶりね、ソラさん」

にっこりと笑いかけると、ディーラは国王と王妃に向かって一礼した。驚いたのは、カーテンの裏から出てきたのは彼女一人ではなかったことだった。

「そなたは初対面であろう、ソラよ。ここに呼んだのは、ディーラを始めとする、東、西、南、北の聖殿を取り仕切る巫女長たち四人だ」

「巫女長……様」

そう聞かされた途端、はっとしたように深く頭を下げる空。

緊張に固くなった様子がおかしかったのか、軽く笑い声をあげたのはディーラの隣に立った巫女だった。

「初めてお目にかかります、ソラ姫殿。私は北の聖殿を預かるカタレーと申します。どうぞよろしく」

巫女としては意外な低音の声で自己紹介した彼女　カタレーは背中で一つに束ねた褐色の長髪を気軽にはらいのけ、お辞儀をしてみせる。

凜々しい印象の巫女もいるのだと目を見張る空の肩に手を置いて、エシユタンドが微笑んだ。

「ご無沙汰しております、カタレー様」

「ああ、以前の収穫祭から会っていないから……一昨年以来かな。変わらないな、と言いたいところだが、更にいい男になったぞ? 可愛い婚約者のおかげかな」

ははは、と清々しい笑い声をあげるカタレー。

当然だとはいえ、以前のエシユタンドを知らない空は、少し寂しいような、不思議な気持ちになる。

「私の自己紹介もさせてくださいな、姫君。南の聖殿の巫女長を務めております、クシユレナでございますわ。以降、お見知りおきを」  
女らしい仕草で胸に手をあててお辞儀をしたのは、カタレーの隣にいた巫女だった。ふわふわとした明るい金髪が可愛らしい雰囲気を引き立てている。

もちろん、ディーラと同じく年齢不詳ではあるのだが、カタレーもクシユレナもエシユタンドより少し上ぐらいにしかどうしても見えない。

自分だけ物思いにふけっている場合ではないと、空も内心あせりつつ、笑顔を浮かべた。

「よ、よろしくお願いいたします、カタレー様、クシユレナ様。え、えっと」

あともう一人まだ言葉を発していない彼女こそが、西の巫女長であるのは間違いない。

厳しいことで有名なあのメセルの上に立つ人物なのかと、一気に緊張した空は、細身ですらりと背の高い女性を見つめる。

「初めまして、ソラ姫。私が西の聖殿の巫女長、ゼルダでございます。あなたのことは、メセルからよく聞いていますよ」

俯いていた顔を上げ、穏やかな声音で挨拶した人物に、空は思わずあんどりと口を開けてしまう。

きつちりとひつつめた灰色の髪、薄い緑色の瞳、更には几帳面そうな顔つきまで、全てはメセルそっくりであったのだ。

「ご存知ありませんでしたか？ まあ、メセルも変なところでしたら好きなのだから 私と彼女は実の姉妹なのですよ」

「し、姉妹……そうだったんですか」

いたずら好きって、こういう時に使う言葉かな？

真顔で言うゼルダに愛想笑いで返すと、隣でクシユレナがくすく



すと笑った。

「ちなみに、彼女たちは三姉妹ですよ。このゼルダが一番上で、次がメセル、そして末の妹はマーゼ。皆、西の聖殿に務めているの。ふふ、おかしいでしょう？」

「三姉妹揃って巫女になつた家系というのは、いくらミディアス広しと言えども彼女たちしかいないと思いますよ。しかし噂によると、既に西の聖殿は姫君への全面的な協力を誓つたとか。一番気難しい彼女たちを従わせるとは、さすがエシユタンドの選んだ姫君だ」

低めの声でカタレーが後を受けると、空はたちまち目をまん丸にして両手を振った。

「いつ、いえ従わせるだなんてそんな　とんでもないです！　メセル様とはただ儀式を通じてちよつとその……信頼関係が築けたというか」

「そこが素晴らしいところですよ、ソラ姫。あのメセルが完全な信頼を向けるというのは、本当に稀なことなんですから。噂を耳にして、あなたにお目にかかるのがどれだけ楽しみだったことか」

「あら、それを言うなら私もですわ！　久しぶりに聖殿から出て、こうして王宮へ出向くことができたのもあなたの提案あってこそですもの。驚いたわ、四つの聖殿全てを民たちに開放せよ、だなんて」

顔を見合わせて頷くカタレーとクシュレナ。一人無表情でいるゼルダと目が合つて、思わず背筋を伸ばすと、薄い緑の瞳がわずかに細められた。

「メセルが申し上げたはずですよ。今後西の聖殿はあなた様の味方であると　妹の判断は、すなわち私の判断と同じ。やはりミディアスを導く次期王位継承者の隣に立たれる方としてふさわしい姫君でした」

「ゼルダ様……」

褒められたことだけでなく、巫女長たち全員が自分を優しく見つけてくれることに感激して、空は言葉をつまらせる。

エシユタンドも、巫女長たちも何か話そうと口を開く。

しかしその場に漂い始めた和やかな空気を一転させたのは、王妃の咳払いだった。

しいんと静まった祈りの間で、唯一冷たい炎を燃やす水色の瞳に、空は背筋が凍えるような感覚を覚えた。

身にまとった白一色の美しいドレス　空にとつての正装を睨みつける王妃の目線は、声なき彼女の思いをはつきりと伝えてくるのだ。

このままでは済まさない。そう言いたいのか……？

急に乾き始めた喉を無意識に押さえた空の手にそっと触れたのは、エシユタンドの優しい手の平。

すぐそばで見守ってくれる藍色の瞳もまた、言葉はなくとも空を包み込んでくる。

「久しぶりに集まり、話が弾むのは結構。だが、各聖殿を預かる大事な長をいつまでも王宮に引き止めておくわけにはいかんからな。早速本題に入らせてもらおう」

静かでありながらも、威厳ある国王の声で、巫女長たちも本来の立場にふさわしい顔つきになった。

四人それぞれ、外見も特徴も異なっているものの、内側から立ち上る高貴な力のようなものが、空にも感じられる気がした。

「先日の提案から既に、聖殿を民に開放しているが　それぞれ、民の声はどうか。報告を聞かせてほしい」

「では私から　国王陛下。まだ昨日の今日でございますから、長期的な目で見ての意見は申し上げられませんが……初日としては、悪くない感触を得られましたわ。近隣の村人たちがつめかけ、巫女たちの祈りを共に体験して帰っていく、という状態です」

クシユレナの優雅な微笑に続いたのはカタレー。そしてディーラ。共通して好意的な意見にほっとする空の前で、最後のゼルダが顔を上げる。

「民の反応としましては、他の聖殿と同じ。ですが　この賑わいがこれからも続くのか、それとも一時的なもので終わってしまうの

かまでは現段階ではわかりません。民というのは、とかく物珍しさに惹かれるものですから」

何の感慨もない瞳で報告を終えた彼女に、明らかに嬉しそうな顔をした王妃が、扇を揺らしながら息を吐いた。

「そうですわね……今まで王族や一部の国賓などに対してだけ特別に訪問を許可していただけの聖殿が民にも開放されたわけですから中を覗いてみたいと思うのが、当然の欲求でしょう。それがこれからどれほどの効果につながるかというのは、まだまだ先の話。民の心を従わせるということが、どれだけ難しいことかあなたにもわかるでしょう？ エシュタンド」

一見母として諭しているように見せているものの、王妃の内心は晴れやかな表情からも伝わってくる。

あたしの提案なんて、大した意味もないものだって言うのね。唇を噛みつつも、言い返す言葉は浮かばない。ある意味王妃の言うことは正論だと空にもわかっていたからだった。

しかし無言を守っていた空の隣で、意外なことにエシュタンドは堂々と笑ってみせたのだ。

「ええ 母上。それは確かに。ただ……お言葉を返すようですが、私もソラも、民を『従わせよう』とは思っていない。彼らの心を良いほうに導き、国を立て直すためにどうすればいいのか。それを考えるのがミディアスの次期王位継承者としての役割だと思っております」

肩を支えるエシュタンドの手は、しっかりと強い力と共に彼の想いを伝えてくる。

王妃の挑戦にただ対応しているだけではない。王族としての器の違いまで見せつける結果を招いたことがわかったのか、王妃は悔しげに頬を染めた。

「そうだな、お前の言うとおりだ。やはり 国を導いていくということの重さと責任を承知している。それは次期王位継承者として欠かせない心構えだ。成長したものだな エシュタンドよ」

誇らしげな瞳で息子を見下ろす国王の言葉。唯一驚愕と怒りの色に見開かれる水色の瞳に、彼は気づいているのだろうか。

以前から気にはなっていたものの、常に変わらぬ冷静な態度は、その内にある心を読み取らせてはくれない。

少なくとも空には、国王がどういう思いを抱いているのかはわからなかった。

次の言葉を聞く瞬間までは。

「昨日も言った通り、そろそろ決めてもいい時期ではないのか？

エシュタンド　お前はいつまで先延ばしにするつもりだ」

びくりとエシュタンドの肩が震える。

床につなぎとめられたままの藍色の眼差しは固く、空が不安にかられて顔を上げた途端、王と目が合った。

「そなたはどう思っている？　いつまでも立場が固まらなくては不安ではないか？　彼女のためにも早く日取りを決めてやりなさい」

「しかし父上、今はまだ森を救うために何の成果もあげられておらず、ましてや魔もまだどこかに潜んでいるという状況で……！」

「だからこそだ、エシュタンド」

言い募ろうとしたところを遮られ、エシュタンドは眉を寄せ、厳しい表情で俯く。

「あ、あの……式つてもしかして」

「もちろん、婚約式に決まっておろう。正式な婚約者を得たならば、本来であればすぐに執り行うはずの式だ。近隣諸国にもふれを出し、このミデイスの次期王位継承者とその妻となる姫をお披露目する、欠かせない式典なのだ。雪の季節は避けるとしても、花の季節には必ず行わなくてはいかん。それならば早くに日取りを決め、準備を進めていかななくてはならんだぞ？　エシュタンド、お前はなぜにそこまで式を延ばそうとする？　国が不安定な時期であればこそ、お前たちがしっかりと式典を済ましておくべきであろう」

言外に秘められた王の思い　それは空が考えていたよりももっともつと深いものだった。

皺の刻まれた顔はいつもの冷静さを失った、父親としてのものだということが、痛いほどに感じ取れる。

「私が今日この場に巫女長たちを呼んだのは、このためでもあるのだ。彼女らの前で、今一度お前の意思を確認したい」

国王の言葉に、巫女長たちまでもわずかに驚いた表情をする。唯一、ゼルダだけは全く変わらぬ瞳で前を見つめていたのだが。

ああ……これがエシュタンドの悩んでいたことだったんだ！空の抱えていた漠然とした不安など足もとにも及ばない、はつきりとした未来への道。

今まで考えまいとしてきた、他でもない、空自身の行く末。それはもう、先延ばしできないところまで来ている。

『覚悟を決める時が、来るかもしれませんよ』  
突然エーデレードの囁いた言葉が蘇った。急に足もとから寒気が走るような気さえしてくる。

すぐそばにいるのに、エシュタンドの顔も見ることができなかった。

どうしたらいいの？ あたしは……どちらを選ぶことも、まだ……！

白いドレスがなぜか重く足にまとわりついてくるように思えた。

無言のままのエシュタンドと空を訝しげに見下ろして、国王が再び口を開こうとした、その瞬間だった。

この状況をとりなしたのは、意外な人物だったのだ。

「まあまあ、陛下。そんなに急ぐことはございませんわ。式典なら、準備にひと月もあれば十分。まだ雪の季節は始まったばかり。日取りを決めるのは、雪祭りが終わってからでもよいではありませんか」

よく考えてみれば、彼女の思惑からすれば当然の言葉であるといえ、それ以上にこやか過ぎる王妃の顔つきに、空も眉を寄せる。しかし、そんな目線まで堂々と受け止めて王妃は唇を開いた。

「日取りを決めることを先延ばしにする代わりに、私にも提案がご

ざいますの」

豪華な宝石のついた指輪がきらきらと輝きを放つ。それよりも鮮やかに閃くのは、水色の瞳だった。

「なんだ、リダネア。申してみよ」

王の言葉で、エシユタンドも顔を上げる。藍色の瞳が空と同じように、訝しげに瞬くのかと思いきや　そこに浮かんでいたのは、意外なほどに激しい感情。

怒りとしか思えない揺らめきに空が驚いたのと同時に、王妃は言った。

「陛下もご存知ですわね？　クルス王国からの再三に及ぶ外交訪問の書状を……婚約式の準備が始まれば何かと王宮は忙しくなる。その前の今がちょうどいい機会ではありませんこと？」

「というと　雪祭りに招待しようというのか？」

「ええ。クルス王国の、あの美しい姫を　そして、案内役はエシユタンド、あなたに任せたいと思うの。いかがかしら？」

燃える藍色とかちあうのは、氷のように冴え冴えとした水色の瞳。赤い唇がにんまりと笑みを形作る。それこそまさに、王妃の思惑を示す証拠だった。

111・招集（後書き）

自らの提案で、王宮に四人の巫女長たちが集結した。

その場で示された国王の意思と、王妃の思惑。

二人の関係を脅かすものになるのか　また次話をお楽しみに！

## 112・招待

「すまない、ソラ……」

背後で呟かれた低い声で、空は弾かれたように振り返った。

部屋に戻ってからもしばらく黙り込んでいたエシユタンドが、やつと言ったのが謝罪の言葉だったから。

「どっ、どうしてエシユタンドが謝るの！ あたしなら平気、大丈夫だよ！ 王妃がこのまま黙ってるわけないってわかってたし

まさか他国の王女様を招待しちゃうなんて思わなかったけど、さ」

はは、と笑ってみせたのに、やっぱり頬が引きつってしまったみたいで、藍色の瞳は辛そうにそらされた。

「クルス、だつたっけ？ えーと確か山の国って呼ばれてるんだつたよね。クガルさんたちが教えてくれたけど、エカルド王子の救出を手伝ってくれた人もその出身なんでしょう？ あ、もしかしたら会えるかな？ 会えたらあたしからもちゃんとお礼言いたいなって思ってるんだ」

それは本当のことだったからすらすらと言えた。けれどそこから先はどうしても口に出すことができない。

クルス国の、第五王女。姉妹の中でも一番美しいと評判の、末の王女で、年もあたしと同じ頃、て言ってたよね？ なんて。

そんな王女様を雪祭りに招待して、エシユタンドに案内役を任せるということが実際どういう意味を示すのか それくらいは自分にだつてわかるからだ。

俯いた空の隣で、エシユタンドは乱暴に長椅子へ腰を下ろした。

「もしかしたら、とは思っていたんだ。数日前に王妃が極秘裏にクルスへ使者を送つたらしいと聞いていたからな。だがまさか、こんなに直接的な手段に出るとは……」

両手を組み、膝の上で悔しそうに目線を落とした彼を見て、内心すごく腹を立てていることがわかる。



王妃の提案を受け入れるしかなかった自分を悔やんでくれていることも。

けれどその事態を招いたのは他でもない自身のせいだとわかっていたから、空には何も言えなかった。

「えっ、えっと……やっぱり国王陛下も王妃には遠慮してるのかな？ クルスの訪問を受け入れること、結局賛成してたじゃない？」

妻である王妃の言うことには逆らえないのか、それとも何か他に事情でもあるのだろうか。そんな疑問から出た言葉だった。

エシユタンドは口元だけで笑って、頭を振った。

「さあな　だが、以前から訪問要請が何度もあったことは事実だ。クルス王国は四方を山に囲まれ、長い歴史と厳格な国風で有名な国だが、ミデイスやビバスのように豊かな土壌や海には恵まれていない。結果として、外交的権限を広げることが国の生き残りにおいて重要な課題だというわけさ」

少し難しくなった話題に首を傾げた空を見たエシユタンドは、今度こそ本当に微笑を浮かべる。

少し考えてから、ゆっくりと続けた。

「つまり、わかりやすく言えば王女たちを政略結婚させることで、他国からの物資や金銭的援助を受けたり、交易条件の優待をはかるうという策略だ。あちらは王女が五人、上の姉たちも全て他国へ嫁いでいる。我がミデイスにもその手を広げようというクルスの魂胆に、王妃の利害が一致したってわけさ。それに、王妃の母方にはクルス出身者もいる。その関係もあって、この件においては発言権が大きいんだ。父上も以前から頭の痛かった問題だけあって、王妃の提案を受けざるを得ないんだろうな。彼女の計らいで、今回は外交訪問だけに留めるとクルスも納得してくれているそうだから」

「で、でも……王妃の利害って、エシユタンドを王位につけないってことでしょ？ それなら、もしもクルスの王女がエシユタンドを気に入ったりしたら、彼女が正式な婚約者になったって同じことじゃない」

「

そう言った途端、藍色の瞳がわずかに曇る。可能性としての話でも、考えたくないことは空も同じだった。

微妙に暗くなつた空気を吹き飛ばすかのようにエシユタンドが軽く笑う。

「そうだな。万が一、クルスの王女などというご立派な婚約者を迎えたとしたら、私の王位継承権には有利になる。だが、王妃にだってわかつているんだろうさ。私が決してそんな選択をしない、ということがな」

「エシユタンド……」

くしゃり、と髪に手を入れて撫でてくれる手が優しい。

それだけでなく、見つめる眼差し全てが優しく切なくなつた。だから王妃としても、これはぎりぎりの策なんだ。エカルドが目覚めるまで、なんとかしても婚約式は阻止したいという抵抗だろう。

私とお前の仲を裂こうというくだらん思惑さ。だから心配しなくていい。さっきも言った通り、私の心はお前のものだ」

「う、うん……ありがとう」

抱きしめてくれる腕の中に身をよせながら、空はそつと瞳を閉じる。

エシユタンドの胸の音を聞きながら、本当はまだ消えていない不安を必死で押し込める。

王妃の思惑、それとも婚約式……？ あたしが怖いのは、どつちなんだろう。

決して口には出せない疑問なのに、目の前にある静かな藍色の瞳には、そんな心まで読まれているかのようだった。

「王妃やクルス国王の思惑がどうであれ、表向きは王女の外交訪問を受け入れ、歓迎するだけの役割だ。雪祭りの前後数日間、私が付いていなければいけないが……お前は何も心配しなくていい。いいな？」

「うん。わかつた！ エシユタンドも心配しないで？ あたしなら平気だから はあー、なんか緊張したから疲れちゃった！ エマ

ナにお茶でもいれてもらおうかな」

内心の不安は抑えて笑いかけても、返事はなかった。沈黙のまま並んでいるのが嫌で、そのまま提案を実行すべく部屋を出ようとしてから気づく。

「あ、そっか……エマナは雪祭りの準備で当分こっちはいないんだっけ。じゃっ、じゃあララに」

一人で呟きながら通り過ぎようとした空の手首を、エシユタンドが静かに掴む。

黙ったまま見上げられて何か言おうとしたけれど、適当な言葉も思い浮かばない。

それでも口を開こうとしたその時、エシユタンドがそっと空を抱きしめた。

「エマナは、明日から訪れる王女の世話役を言い付かっているそうだ。雪祭りが終わって、王女が帰国の途に着くまでは会うことはできない。すまん　なんとかしてやりたかったが、今の私では王妃の決定を変えることはできなかった」

「そ、そうなんだ……。だから今朝からララが来てくれてたんだ。あだし、さつきからエシユタンドに謝らせてばかりだね。大丈夫、ララだってすごくいい子だったし、気にしないで？　あだし、しばらく休もうかな。なんだか疲れちゃって……」

「ごめんね、と言い添えるとエシユタンドは少し寂しげな目になったものの、すぐに頷いて立ち上がった。

多忙な彼にはいくらだってやるべきがあり、この部屋以外に行くべき場所もたくさんある。

なのに、どうして追い出したような気になってしまっただろう。

彼から逃げたような　そんな罪悪感さえ、感じてしまっただろう。

唇を噛みしめながら、閉まる扉をただ見つめる。

あんなに一緒にいてほしかったのに。

あんなに寂しかったのに。

しばらく前まで求めてやまなかった微笑が、今はなぜか心苦しくて。

「好き、なのに」

誰もいない部屋で声に出したら、余計に胸が苦しくなった。

大好きなはずのひとの未来が重いなんて、そんなこと……。

「誰にも言えないよ……」

目の前に広がる二つの分かれ道　その前で立ちすくんでいることしか、今の空にはできない。

先ほど巫女長たちを見送った時の、四人の優しい眼差しを思い出した。

『あなたの心の思うがままに　ね？』

いたずらっぽく片目を閉じて囁いてくれたのはディーラだった。

同席していたエシユタンドや王たちには聞こえないように、彼らが目を離れた一瞬に。

カタレーもクシュレナも、そしてゼルダまでもが皆、不思議と空の迷いも恐れも感じ取っていたらしく、ただ慈悲深い瞳で見つめてくれていただけ。

でもなぜか少しだけ心が軽くなった気はした。

自分を応援してくれている人たちがいる。それだけでも救われる思いだった。

帰りたいと心から望めば、役目を終えたときつと道が開かれる

あの聖殿でもそう言ってくれたディーラの言葉。

あたしをここに呼んだのは、本当にアメ神なの？　どうして

……？

神様なんてこの世界で精霊を見たりするまで、信じたこともなかったけど。

それぞれの聖獣に乗って自分の聖殿へと帰っていく巫女長たちの姿を目の当たりにしても驚くことさえなくなった自分が、もうすっかりこの世界に慣れてしまってるようで。

この変化を喜んでいいのか、それとも悲しむべきなのか、それす

らもわからなかった。

今はただ、後悔しないように進むだけ。

エシユタンドを愛する、この心だけが指標なんだ。

複雑に揺れた黒い瞳は、振り続ける雪を静かに映していた。

\*

クルス王国からの正式な書状通り、王女が到着したのは雪祭りが始まる二日前の夕刻だった。

国王と呼ばれ、いつもより豪華な刺繍の入った正装を身につけたエシユタンドは、謁見の間で彼女を待った。

背後に並んだ王族の席には、皮肉なことに白いドレスを着た空の姿もある。

国賓を迎える最前列に国王と共に並んだエシユタンドには、視線を交わすことさえできないのだが。

どこまでソラを傷つけたら気が済むんだ。

王妃の瞳を睨み付けたい衝動にかられるのを必死の思いで抑えながら、エシユタンドは両手を握り締める。

あれから空とはゆっくり話さえもできていない。ただでさえ改革にあれこれ奔走している中に、王女の歓迎まで自分の役回りにされちゃって、全くといいほど自由な時間などなかった。

悲しそうに俯いていた黒い瞳。思い出すだけで胸が痛む。

ただ、それ以上に辛いのは、婚約式の延期を望まざるを得ない現実だった。

本当なら一日でも早く正式に婚約して、誰にも奪われないよう、どこへも消え去ってしまわないようにそばに置きたい。

正直な願いは決して空に伝えることは許されず、自分の中だけで耐えなければいけない。

手の届くところにいるのに……こんなにそばにいるのに触れない。

いつかはここではない世界に帰ってしまうのかと考えるだけで苦しくて　発狂しそうになるほどだ。

そんな想いを押し込めて、冗談に包み隠して、彼女のそばにすることがこんなにも辛いなんて。

いつそ紳士の仮面など脱ぎ捨てて、無理やりにも自分の物にしてしまいたい。

強引にでも、離れられないように烙印を押ししてしまえたら　そんなことを考えている自分がいることなど、彼女には決してわからないだろう。

揺れる瞳の奥で、彼女が必死に耐えていることがわかるから。

親や友達に会いたいと願う気持ちも、慣れない世界で頑張っている大変さも、彼女の心を思うからこそ、痛いほどに伝わってくる。

自分との婚約を望まない、本心さえも。

苦しい葛藤に唇を噛んでいたエシユタンドは、王女の入室を告げる兵の声ではつとしたように顔を上げた。

クルスに血縁のある王妃が、我先にと出向き、笑顔で挨拶をする。目前で繰り広げられる光景を苦々しい思いで見つめていたエシユタンドは、隣で名を呼ばれて振り向いた。

「お前とあの娘の間の事情は知らぬ。だが　後悔だけはするな。そこまで愛しいと思った娘ならば、真実愛しぬいてみよ。結果はどうあれ、今そばにいる現実をおろそかにしてはならんぞ」

そつと声をかけた国王に、藍色の瞳は見開かれる。

常に客観的な態度を崩さぬ父親が口にした言葉は重く、ずっしりとエシユタンドの胸に響いた。

しずしずとこちらへ向かって歩いてくる王女を迎えるべく一歩踏み出してから、一瞬だけ彼は振り返った。

こちらを見ている、愛しい少女の黒い瞳を見るために。

不安げにかちあつた眼差しに、エシユタンドは微笑を送った。今度こそ本物の、いつもの彼の笑みを。

「初めまして、殿下。私はクルス王国第五王女、タミアンナと申します。この度のご招待、心より嬉しく思っております。歴史深きミデイスの、素晴らしき伝統である雪祭りを拝見できるなんて、これほどの幸福はございません。これから数日間、どうぞよろしくお願ひいたします」

完璧な礼儀に挨拶、教養深さを垣間見せる緑色の瞳、まっすぐな金髪に整った美貌。

全てはお手本とあっていくらいに完全な、正当なる血筋の王女。高価な宝石に美しいドレスをさらりと着こなしたタミアンナは、深々とお辞儀をしてみせる。

しかしエシユタンドの目には、ただの人形のようにしか映らなかつた。

お返しにと昔寄つて来る女性たちを虜にした微笑を顔にはりつけて、エシユタンドは礼をした。

心など一つもこもっていない、お飾りの『王子』としての社交辞令であることが、空にはわかるだろうか。

「お目にかかれて光栄でございます、タミアンナ王女。ミデイス王国第三王子、エシユタンドと申します。誉れ高きクルス王国の、評判の美姫であるあなたをこうして歓迎できることに喜びを隠せません。どうか我がミデイスでのご滞在が、楽しいものになりますように」

差し出された王女の手　絹の手袋をしたほっそりとした手に、軽く唇を落とす。

礼儀としての仕草に傷つくであろう空を思いながら、それでも彼は微笑んでいた。

やってやるうじゃないか。王妃のくだらん思惑などに、決して負けないということを証明してやる。

挨拶を交わした王女を国賓用の宮へ案内するエシユタンドの背を、水色の瞳が静かに見つめる。

あと二日で雪祭りを迎えるミディスは、白一色の銀世界へと変わろうとしていた。



## 112・招待（後書き）

空の複雑な心を知るエシユタンドもまた葛藤の中にあった。

王妃の思惑に負けまいと受けて立ったエシユタンドは、ついにクルス王国の王女タミアンナと対面する。　　というところで次話へ続きます。

雪祭りの迫るミデイス王宮で、今後二人はどうなっていくのか。どうぞ次回もお楽しみに！

「まあ、それではミデイスに来られる前はピバスをご訪問なされていたのね。これは本当に幸運でしたわ、でなければ今の時期、クルスの雪山を越えては来られませんかねえ」

「ええ。ネイアーレというピバスのお祭りを見物させていただきましたの。といっても国賓としてではなく、個人的に訪問させていただいたのですけど」

にこやかに話し合う王妃とタミアンナの声だけが、広間に響いている。

食事をしながらの王族同士の歓談という名目ではあるものの、その場にいるのは国王と王妃、そしてエシユタンドと空だけだった。

なんでここに、あたしまで一緒にいなきやいけないんだろう。いつそのこと自分抜きでやってくれればいいのに、と苦い思いを表情に出さないように曖昧な笑みを浮かべたまま、空は香草茶を口にする。

初めて目にした他国の王女、タミアンナはその評判にたがわぬ美女だった。

化粧を施してあるとはいえ、おそらくそれは薄くなのだろうとわかるほどに透明な白い肌。淡い金色の髪は滑らかに腰まで流れて、瞳はエメラルドのようなグリーン。

まさに姫といえはこんな外見、と空でも想像できるような完璧さに、様々な話題に通じた教養深さ、理知的な眼差しから王女として教育を受けているだけではないこともわかる。

時折見せる仕草からも気品が漂い、食事のマナーも、何もかもが空よりも格段に上を行っているのだ。

大丈夫だっと思ってても、やっぱり比べちゃうよ……。

これでは王妃の思うツボだとわかってはいるのに、どうしても沈んでしまう心。

落ち込む資格なんてない自分が、こんなに望んじやいけない。

言い聞かせようとしてもやはり目は自然とエシユタンドを追い、彼女を見つめ、話をする様子を気にしてしまう。

首を降り、そっと視線を外そうとしたその時、緑色の瞳が空を捉えた。

「あの……ところで、こちらの姫君は？ 私、まだご挨拶できておりませんの。失礼をお許しくださいませ。あのお名前は？」

優しい声で訊ねられ、空がどう答えていいのかためらう。向かい側に腰掛けたエシユタンドが口を開く前に先手を打ったのは王妃だった。

「彼女はミデイスの地に現れた伝説の巫女でございますの。王族に招き入れた形になっているのですが、いずれは元の世界に帰る娘なのですよ」

「リダネア」

国王が驚いたような声を出す。が、王妃は全く引く姿勢は見せなかった。

小首を傾げるタミアンナに微笑んで、続けて言ったのだ。

「ですから、王女がお気になさる必要は全くございませんわ。ねえ、ソラ？」

わざとはつきりと名前を呼んだ王妃が、ねめつけるように空を見やる。

唇を噛んだ空の気持ちにも、広間に漂う微妙な空気にも気づくはずはないのだが、タミアンナは少し黙ってから微笑んだ。

「……ソラ様と仰るのですね？ 伝説の巫女様だなんて、お目にかかれて光栄ですわ。よろしければ後で、色々お話を伺いたいのですけれど……」

上品そのものの話し方と彼女なりの気配りに思わず顔を上げると、緑の瞳が優しく瞬く。

「は、はい。王女様 私でよろしければ喜んで」

これでは本当に王妃に都合のいい流れで、自分で負けを認めたと

うな形になってしまふ。

けれど今はエシユタンドの立場を守るために、こうするしかない。静かに答えた空に、予想外なほどタミアナは嬉しそうに笑った。「私、珍しいお話を聞くのが小さい頃から大好きですの。ソラ様はお年頃も同じくらいなのでしょう、嬉しいですわ」

純粋な喜びが伝わってくる表情を見て、思わず空まで笑い返した。王妃の思惑と彼女は関係していないのだろうか　もしかして、彼女自身は本当に外交訪問のつもりで？

暗い沼のようだった空の気持ちに、少し光が差し込んでくる。少なくとも目の前のタミアナは、心から自分と話がしたいと言ってくれていることはわかった。

そうだ、暗くなる必要なんてないんだ。エシユタンドを信じなきゃ。

心の中で言い聞かせた空は、エシユタンドの心配そうな視線に微笑んだ。

何か言いたそうなエシユタンドとすれ違ったまま、空は自室へ戻っていた。

きつとまた謝ってくれようとしたんだろう。辛そうな色をした瞳に、大丈夫だというつもりで送った微笑みが伝わっていたらいいのだけれど。

祈る思いでそつと触れたチョーカー。想緑珠は光ることすらない。今は二人の命に危機があるというわけでも何でもないから、おそらく石の力に頼ることなんてできないのだろう。

でもただ触れるだけでも、想いが少しは通じてくれるのではないかと思えたのだった。

「姫君、あの……エマナのこと、お聞きになりました？」

遠慮がちなララの声で振り返る。脱いだ衣装を整えている顔が申

し訳なさそうな表情に見えて、見当がついた。

「ああ、雪祭りの間、タミアンナ王女のお世話係になったんだよね？ エシユタンドから聞いたから……あっ、でも大丈夫だよ？ あたしのことなら心配しないで！ エマナならきつとあの王女様にも誠心誠意尽くしてくれてると思うし」

笑ってみせるとララもつられたように微笑む。完全に元気だとは信じてもらえなかったらしいのは、彼女の下がった眉でもわかった。「そりゃあ、本当はね 辛くないって言ったら嘘になるけど……でもエシユタンドが約束してくれたから。心は絶対変わらないってだから信じなきゃいけないよね」

同じ年の頃であるララには、誰にも言えなかった本音がついもれてしまう。自分で自分に言い聞かせるように呟いた空を見ていたララは、そつと髪に櫛を入れてくれた。

「姫君はお強いですね」

「そんなことないよ。あの王女様、全てにおいて完璧だし、彼女より自分がエシユタンドの婚約者として勝ってる部分なんて一つもないかなあって落ち込んだりするし」

「まあ……そんなことございません！ 姫君には姫君のよさがございます！ 少なくとも私は断然、姫君のほうが素敵だと思いますわ！」

ぼつりともらした一言に、憤然と返してくれる。そのままの勢いを引きずるべきか迷ったのか一瞬躊躇してから、ララは続けた。

「殿下が姫君だけを大事に考えておられることは、私たち侍女だつてわかります。だって、姫君をご覧になる時と、王女様をご覧になる時では 殿下の目が違いますもの」

「目……？」

「私がこんなことを申し上げていいのかわかりませんが、姫君のことは本当に大切そうに……優しくって、それでいて熱い気持ちがあふれてくるような、切なげな眼差しで見ているらっしやいます。お気づきになりませんか？」

うつとりとした顔で両手を組んで訊ねられ、思わず赤くなる。ララはまるで夢物語でも語るかのような表情で空を見つめる。

「憧れますわーあんなに素敵な殿下に愛を捧げられるなんて世の女性たちの夢ですもの！ それに比べて、王女様に対しては笑顔ではいらっしやるものの、どこか義務的というか、目に見えない壁を作っているというか とにかくご興味がまるでないことがわかるんです。そう、昔の殿下と同じですわ！」

そこまで熱心に語ってから、はっとしたようにララが口を押さえ

た。  
「も、申し訳ございません。私としたことが……あつ、あの、変な意味ではないんですよ？ 女性にはおもてになっ

ていらっしやいましたけど、今の殿下とはまるで違って……で、ですから殿下はですね！ 姫君を本当に愛してい

らっしやって……！」  
目を白黒させながら必死で励まそうとしてくれているララに空は自然と笑顔になる。それを見てほっとしたように表情を崩したララと瞳を合わせて、空は声を上げて笑った。

「ありがとうございます。ララやエマナみたいな友達がいってくれて、あたしとっても嬉しいよ」  
「姫君……お恥ずかしいですけど、少しでもお元気になられたら私も嬉しいです！」

そばかすの散らばった頬を赤く染めて、ララは部屋の片付けを始めた。

午後の日差しが部屋を静かに照らしている。窓辺の蠟燭皿をとりかえてくれる背中をぼんやり眺めながら、空は一人微笑む。

本当に、こんな風にそばで支えてくれる人たちがいるからこそやっ

ていけるのかも。  
そういえば、と脳裏に蘇ってくるのは華やかだった舞踏会。今のララと同じように、優しく励まして、笑顔で空を助けてくれた工力ルド王子を思い出したのだ。

ダンスを覚えてくれたり、とかく空の味方になってくれた彼はま

だ目覚めていない。

いくら魔に連れ去られていたからと言って、既に外傷もふさがっているのに眠ったままということが気にかかっていた。

早く元気な笑顔を見せてくれたらいいのに。そう願いながら見やった先にあつたのは壁にかかるタペストリー。

その裏にある本棚の存在は秘密で、エマナはおるか、他の侍女たちも誰も知らない。ララも当然その場を通り過ぎ、カーテンを整えている。

ぼんやりとタペストリーの絵柄を見つめながらふと思い出した記憶があつた。  
音を立てて床に転がった金と銀の腕輪。細く白い指でそれを拾つたのは。

「エカルド、王子……だつたよね」

「えっ、何か仰いましたか？ 姫君」

振り向いたララに何でもないと取り繕うと、お茶の用意にいそいそと出て行った。

気になり始めたら急に気になるもので、一人になってすぐに空は天井から下がる飾り紐を引いた。

タペストリーが持ち上がり、その後ろから本棚が現れる。ひっそりと眠っていたかのような古い本たちの奥に見つけた木箱はあの時のままで、ほつとしながら手に取り、開いた空は息を呑んだ。

中におさめられているはずの、金と銀の腕輪が二つとも消えてなくなっていたのだ。あの厳粛な光を放つ

「姫君、お茶が入りましたわ」

扉の向こうから声をかけられて、あわてて箱を戻し、タペストリーを下ろす。

すぐに入ってきた何も知らないララの顔をしばらく見つめてから、空はゆっくりと訊ねた。

「ねえ、ララ 私たちがいなかった間に、この部屋って何も変わらなかったよね？ エマナから聞いてない？」

突然の質問にびっくりしたのか少し考えてから、ララは首を傾げる。

「そうですねえ……特に何も。エマナや私たち他の侍女でお掃除だけは毎日欠かしませんでしたけれど」

「そ、そう……」

純粹そのもののララやエマナたちを疑うつもりもない。けれどそれなら一体誰が持ち去ったのだろう、とため息をつく。

聖殿で預かった大事なものののに、なくなってしまったなんて。

どうしようかと震え始めた手を握る空のそばで、ああ、とララが突然両手を打った。

「そういえばそのタペストリーが少しずれていたって、エマナが侍女のみんなに注意していたことがありましたわ。むやみにお部屋のものに触れてはいけないって。あの子、ちょっとぼんやりしているところもありますけど、そういうところはきちんとしているから。きつと誰かが掃除の時に触ってしまったんでしょうけどね。エマナったらあの時、他にもおかしなこと言ってたんですよ。誰だったか、そこにいるはずもない方を見た、だとか」

「だっ、誰？ 誰を見たって言ってたの？ ララお願い、思い出して！」

急に腕を掴んで揺さぶった空に驚きながらも、ララは眉をしかめて考え込む。

換気のために開けられていた窓から寒風が吹き込んで、こげ茶色のおさげを揺らした。

「えーとあれは確か　そう！ 隊長ですわ。ベニ工隊長！ 末の殿下の私兵隊の……でも、魔のモノに襲われてお亡くなりになられたのですわよね。しばらく前の葬儀の時に、エマナがきつと見間違いなんだろうつてもう一度言ってみました。恐ろしいこと　早く魔なんていなくなればいいのに」

最後は呟きとなったララの言葉は既に空の耳に入っていなかった。まさか　そんな単語が浮かんでは消える。考えついてしまうこ



の可能性が、事実のはずなんてない。

けれど確かめないわけにはいかない。

そう、これがただの偶然の一致であるだけだと、確かめるために  
!

「姫君？ 急にどちらへ？」

「行かなきゃ……ララ、付いてきてほしいところがあるの！」

叫ぶ時間さえも惜しいように上着をはおると、飛び出していく。

あわてて後を追うララのパタパタという足音が廊下に響く。

カップに注がれたばかりの香草茶だけが、誰もいない部屋で静かに湯気を立てていた。

113・紛失（後書き）

大切な腕輪がなくなっていたことにようやく気づいた空。

彼女の思いついた可能性とは、そして腕輪の行方は　とうとうこ  
ろで次話へ。

物語は徐々に思わぬ方向へと展開していきます。

これからもどうぞお楽しみに！

「失礼いたします、陛下　殿下に少しご報告が」  
私兵隊長クガルが扉を開くなり、膝をついて言った。

その場で談笑していた王妃やタミアンナに遠慮する様子を見せるものの、緊急事態であることは切羽詰った顔色からすぐわかる。

一瞬この場から解放される口実ができたことにほっとしかけたエシユタンドも、表情を引き締め、席を立った。

「申し訳ございません、タミアンナ王女。しばし失礼をいたします」  
「ええ、どうぞ私のことはお気になさらずに」

慎ましやかな微笑で見送られ、後のことはその場に残る国王夫妻とリゴトに任せることにした。

雪祭りの起源や歴史を王女にわかりやすく紹介しながら、午後のお茶と歓談を楽しむ、という退屈で緩慢な時間。

そんなものに自分がいる必要など元々ないのだ。顔にはりつけていたにこやかな『王子』の仮面と共に、重苦しい立派な飾りのついたマントを脱ぎ捨て、クガルのもとへ駆けつける。

「どうした、何があった？」

「申し訳ございません！　実は兵交替のわずかな間に　い、いなくなってしまうたのです！」

先に頭を下げた兵の後を受けて、クガルがエシユタンドに囁いた。  
「何……ケイマが消えただと？」

「はい。牢の鍵は鎖ごと焼け切れたように壊されており、周囲を捜索しましたが痕跡一つ見つかりませんでした」

冷静に報告する声で、藍色の瞳が真剣な色を帯びる。

捕らえて以来ずっと眠ったままだったケイマが、突然自分で逃亡したというのだろうか。

それとも誰かが彼を連れ去った　？

あらゆる可能性を考えるも、今ここでこうしているだけでは埒が

明かない。

「クガル、ケイマの牢に訪れた者は誰もいなかったのか？」

「は、我々の他には誰も。あとは、傷口の布を交換した侍女がおりましたが、その様子は見張りの兵がずっと監視していましたので」

話しながら寒風の吹きすさぶ林を抜け、牢のある離宮へ向かう。

ケイマのいた牢の鍵はクガルの言うとおりに切れて、焦げ付いた跡のようなものがあつた。

奥に置かれていた寝台の敷布は既に冷たくなっていたが、皺が残り、たつた今までそこに寝かされていた彼の存在を示していた。

「既に王宮の周りには搜索兵をやりました。もしも人の力であったならば、そう遠くへは行っていないはず。ですが、殿下 気になることが一つ」

言うと同時にクガルが掛布を捲り、そこにあるものを無言で指し示してみせる。

午後の薄い日差しに照らされた赤いきらめきに、エシユタンドは息を呑んだ。

「これは あの時の！」

血のような鈍い赤。じつと見ていたら何か恐ろしい力に引き込まれてしまいそうな、邪な色。

洞窟で見た時ほどの大きさもない、ごく小さな破片だった。

けれど確かに同じものであることは、背筋に感じる不気味な寒気でわかつた。

「やはり、間違いないですね。皆には絶対に触れないよう、そして見つめないように言っております。私には少ししか魔の気配は感じ取れませんが、殿下ならばと思い、お呼びした次第です」

冷静な声で告げるクガルも、青ざめた顔色からすると緊張しているのだらう。それでも兵の手前動揺を感じさせない態度は、さすがは隊長といえるべきものだった。

小さな赤い破片 知らない者からすれば割れた宝石の欠片ぐら

いにしか見えないかもしれない。

しかし触れてしまえばどうなるか身にしみて知っているエシユタンドは、一つ深呼吸してからそっと手の平を石に近づけた。

ぎりぎり触れないあたりで止めて、精神を集中させる。

やはりだ。紛れもない魔の気配。

目を閉じても残る夕日の残照にも似て、邪気の強い独特の気配が石から手に伝わってくる。

それは覚えのあるもので、エシユタンドは手を戻し、握り締める  
と表情を固くした。

「……生きているのか、ムルグ」

呟いた声で、クガルも兵たちも顔を見合わせる。

一気に頬にあたる風がより冷たくなった気さえした。皆の視線に  
答えを出すべく、口を開く。

「確信はない。だが、奴らの気配に似ていることは確かだ」

死体は見つからなかった。そのことが一番の懸念材料だったとは  
いえ、クガルのつけた矢傷は致命傷だった。

それが生きていたとしたら　やはり禍々しい石の力なのだろう  
か。

どこかに潜んだ魔のモノたち全てをとりしきり、再び自分たちに  
刃を向ける目を狙っている。

残酷な魔性の笑みを浮かべたムルグの顔が脳裏に蘇り、耳には笑  
い声まで聞こえるような錯覚に襲われたのは、エシユタンドだけ  
はないのかもしれない。

全員が表情を引き締め、窓の外の森を見やる。

はらはらと空から落ち続ける雪が、静かに立ち並ぶ木々を冷たく  
彩っていた。

「ですから父上、今は王女の歓待をしている場合ではないのです！」  
特別に許可を得て、父王と二人きりでの場を持ったエシユタンド  
が叫んだ。

苦い色を浮かべる灰褐色の瞳に訴えるが、王はゆっくりと首を横  
に振った。

「だからこそだ、エシユタンドよ」

静かに諭すような言葉に、エシユタンドは目を見開く。

一瞬ためらったエシユタンドより先に、王は続けた。

「魔の危機はわかる。それはおそらく国を脅かす一番の問題だろう。  
しかし、防備ばかりに目が行ってしまつては、国を率いていくこと  
はできん。潜んでいるとはいえ、いつ起こるかかわからぬ危機に対処  
する前に、ミディアスの将来に欠かせぬ木を植えておかねばならぬ。  
それが現国王としての大切な役目なのだ」

「ミディアスの将来に、欠かせぬ木……？」

問い返した藍色の眼差しをしつかりと受け止めた王が、頷いてみ  
せる。

老いたとはいえ、まだまだ力を感じさせる、分厚い手　父親の  
手のひらが、エシユタンドの肩に置かれた。

「お前のことだ、エシユタンド」

「父上」

「国を導く、未来の国王　次期王位継承者をしつかりと育て、ゆ  
るぎない存在としてミディアスにその根を張らなければいかんだ。  
国を治めるには、周辺国との協力は不可欠。そのためにも今回の王  
女とのこと、ないがしろにするわけにはいかない。それはお前とて  
わかつているはずである」

有無を言わせぬ瞳に射抜かれ、エシユタンドはたじろぐ。そらさ  
れた藍色の瞳に浮かぶ葛藤に気づいているのか、いないのか　王  
は表情をわずかに和らげて、肩に置いた手はずした。

「私はあの娘とお前が一日も早く婚約式を執り行うことを望んでいる。だから何も王女に心を向けると言っているのではない。立場を守れ、と忠言しているだけだ。わかるな？」

無言で唇を噛みしめるエシュタンドをじっと見つめた後、王は口元をゆるめる。

固く握り締められた拳の意味をわかっけていてもなお、微笑んでみせたのだ。

「安心しろ。逃げたケイマの搜索は、王宮軍に命じてある。魔が再び姿を現した時は、私も今度こそ守護竜を率いて戦うと約束したはずだ。お前は今日の前にある問題にだけ、集中するように」

返事の代わりに膝を折る。納得などできるはずもない。けれど王の言うことも正論であることは痛いほどわかる。

だからこそ、うなだれることしかできなかった。

気づいてしまったから、かもしれない。魔との戦いに逃げようとしていたのは、自分のほうだということに。

国を守る、民を守ると建前を振りかざし、本当は目の前の厄介な問題からできるだけ離れたいと　そんな幼い心がどこにもなかったとはいえない。

王妃の企みに反発し、空の想いを傷つけない一心での本音。

国を背負うということは、己の心の弱さに打ち勝つ、そういうことだと……？

父の眼差しに顔を上げたエシュタンドは、唇をきつく噛んでから、微笑を浮かべた。

藍色の瞳が決して笑ってはいないことも、王にはわかっているようだった。

「王女の歓待も、雪祭りも予定通り行う。それこそが魔に屈しないという、ミディアス国王の意思表示にもなるのだからな。お前も自分の役目を果たしなさい」

「はい……父上」

雪祭り開催まで残すところ一日となる、夕刻が過ぎ行くこうとして

いた。

\*

華やかな装飾が施されたエカルドの寝室に足を踏み入れてもなお、空は不安と戦っていた。

たどり着いてしまえば先ほどまでの思考はどこへやら、静かに眠る綺麗な寝顔を目にしてしまうと、余計に自分がひどい罪人のような気分になる。

「王子……やっぱりまだ眠ったままなんだ」  
呟いてしまってから、はっとしたようにそばで見守る侍女たちに振り返る。

空の内心など何も知らない彼女たちは、さして気にした風もなく頷き、互いの顔を見合わせている。

「ええ。姫君も大変ご心配なことでございます」  
「随分とお顔の色はよくなりましたのですけど」

口々に回復具合を話し始める侍女に笑顔を作って、隣のララを見る。  
やる。

すぐに察して手渡してくれた布包みを開くと、鮮やかな水色の鞆に包まれた大振りの剣が出てきた。

宮を出る時思いついて、ララに持ってきてもらったのだ。

「外傷がふさがっているからと思って今まで試さなかったんだけど  
もしかしたらこの剣で目覚めてくれるかもしれないって思っ  
ね」

どきどきしながら、さもそれこそが目的であるかのように、空は



微笑む。

既に扉の前を守る警備兵にも告げてあったが、無条件に信じてくれた彼らにもララにも、なぜか申し訳ない気持ちだった。

本当は、王子を疑ってる……なんて言えるわけないよ。

こんなことを思いついてしまった自分が嫌になる。それくらい、もし可能性が真実ならば大変なことだ。

けれどあの本棚から腕輪が消えたことは紛れもない事実で、腕輪の存在を知っているのは、エシユタンドと自分を除いては王宮にたった一人しかいない。

あの日、本棚から出した腕輪をエカルドに見られた時は確かにあせったけれど、『王と王妃のための腕輪』であることも知らない彼からすれば、きつと普通の装飾品だと思っただろうと忘れかけていたのだ。

でも、もしも彼がそのことを知っていたとしたら？

そう考えてしまった途端、今まで見えなかった一つの仮説が浮き出てきたのだ。

亡くなったはずのベニ工隊長。でも遺体は皆、化け鳥に襲われて、顔もわからないほど悲惨なありさまだったという。

それならば、万が一彼が助かっていたとして、その後王宮へ引き返していたなら、エマナが見たという人物はベニ工本人だったのかもしれない。

なぜ彼が極秘裏にそんな行動をとる必要があるのか、それに、生きているならどうして今も姿を見せないのか。その答えは彼が誰に仕えているのかにある、そんな空の直感。

それが腕輪の紛失と関係があるのかまでは繋がらない。

でも、もしそうだとしたら。

考えるだけで背筋に寒気が走る。頭を振った空は、皆が不思議そうな目線を注いでいることに気づいて、あわてて言った。

「あの 剣を使うには、すごく集中しないといけないんだ。だから、申し訳ないけどみんな、席を外してくれるかな？」

できるだけ平静に、剣を胸に抱きしめてそう訊ねると、すぐに侍女たちは退室していく。

「では、扉の前でお待ちしておりますので、何かございましたらお呼びくださいね」

最後にララが言い残して、そつと扉を閉めた。残されたのは、眠るエカルドと空の二人だけ。

急に胸がドキドキしはじめて、嫌な汗が手の平を濡らす。深呼吸をして、覚悟を決めた空が寝台に向き直った。

窓から差し込む夕日が、エカルドの濃い金色の髪を美しく照らしている。

閉じられたままのまぶたと規則的な寝息　それがなければこのまま瞳を開き、優しい微笑を見せてくれそうなほどにまで、エカルドの顔色はよくなっていた。

眠ったふりしてる、なんてこと……あるわけないよね。

自分がどれほどひどいことを考えているのか、こんなことエシユタンドにだって言えるわけがない。

だからこそこうして一人でやってきたのだ。

真相を　恐ろしい可能性を確かめるために。

でも……どうやって？

勢いのままに訪れてしまってから、空は何も考えていなかったことに気づかされた。

ただいてもたってもいられなくて、やってきてしまった。

一瞬古い本が並んだ棚や、引き出しなどを見回してから、首をぶるぶる振った。

家捜しみたいなこと、できるわけない。

それに疑ってしまうとはいえ、本当ならそんなこと考えずに信じたいのだ。

あの優しいエカルドが、実は　なんて考えたくもないのだから。

「王子……」

そつと呼びかけて、一歩近くに寄る。

白水晶の剣を持ち上げ、水色の鞘を見つめた。

こっそりかぎまわるようなことはあたしにはできない。それなら、正面切つて聞くしかないじゃない。

自分の胸に問いかけ、心を決めてから空は瞳を開いた。

「王子、お願い。どうか 目覚めて……！」

鞘から抜き放つた剣の切っ先を、そのままエカルドの胸に当てる。願いを込めて、両手を添えた。

しばらく精神を集中させるが、剣は残念ながら光ることも熱くなることもなく、ただ透明な水晶の塊としてそこにあった。

数秒が過ぎても何も起こらなくて、がっかりした空が剣を鞘に戻す。

「やっぱ、傷とかそういうのにしか効かないのかな」

ため息をついて、眠ったままのエカルドに目線をやった。

その寝顔はさながら美しい天使のように、純粹そのものの少年にしか見えない。

初対面からいつも優しく、明るく、空を励ましてくれたエカルド。

あの微笑みが嘘だったなんて、思いたくない。

ダンスを覚えてくれた、あの手も、瞳も。

しばらく見つめていた空は、ふっと笑って視線を外した。

やはりただの考えすぎだったのかもしれない。本当はエマナの見間違いか何かで、ベニ工隊長は亡くなっていて、腕輪を取ったのもエカルドではないのかも。

もちろん誰が、という問題は残るけれど、かえってその方が自然で、対処だつてしやすい。

疑ってしまった自分の心が少し疲れていただけなんだ。

結論付けてしまえばほっとして、空はゆっくり寝台の端に腰掛けて、エカルドの手を取った。

「ごめんね…… エカルド王子」

妙な疑いをかけてしまったこと、そして自分が何の役にも立てないこと、色々な気持ちから謝った空が、ララを呼びに行こうと腰を

浮かせた、その時だった。

そつと離そうとした手がぐつと引つ張られ、体が傾ぐ。

「え」

声をあげる暇もなく、エカルドの体の上に重なるように、寝台に倒れこんでしまったのだ。

あわてて起き上がるうとしても先ほど触れていた片手はしっかりと握られていて、思うように動けない。

いくら細身とはいえ、エシユタンド以外の異性とこれほど密着したことは初めてで、状況に関わらず顔は赤らみ、胸の鼓動も早まってしまう。

「おつ、王子……!?」

もしかして目が覚めたのかと視線をめぐらせても、エカルドのまぶたはしっかりと閉じられていて。

わけがわからずじたばたしている間に、扉の叩かれる音が聞こえた。

「姫君、第三殿下がお越しになられましたか」

ララの声がそう告げてすぐに扉が開く。

驚きと共に余計にあせって起き上がるうと試みても、エカルドの手はゆるまず、いつの間にか腕の中におさまっていて密着度も高まっている始末。

どっ、どうしよう……!!

困り果てた空がなんとか目線を扉のほうに向けると、エシユタンドの足音が聞こえたのが同時だった。

「ソラ……!?!」

驚いた声音に説明しようとして手を動かして、びっくりしたのは空のほうだった。

たった今まで眠っているとは思えないほどの力で手を握っていたエカルドの手の平が、瞬時に寝台に元通り下ろされ、何事もなかったかのように敷布に沈んだのだ。

残されたのはただ一つのこの状態　まるで空が自分から彼の胸

に身をよせていたかのような、大胆な自分の姿だけ。  
息を呑んだ空を、藍色の瞳が信じられないように見つめた。

114・可能性（後書き）

王女の歓迎役に辟易としていたエシユタンドに知らされた、ケイマの失踪。

果たして彼が消えたのは魔による仕業なのか　そしてその頃、空は一つの可能性に思い当たっていた。というところで次のお話へ続きます。

緊迫の次話も、どうぞお楽しみに！

「エツ、エシユタンド、違うの！ こっ、これは」  
空の言葉を途中で止めたのはエシユタンドの囁きだった。

「しっ、それよりも早く！」  
手を貸せ、と言われたままに必死で差し出した片手をぐっと引っぱり、エシユタンドが助け起こす。

そのすぐ後に侍女たちが部屋に戻ってきて、空はひそかに安堵の息を吐いた。

離れてしまえば今まで密着していたのが嘘のように、エカルドは静かに眠り続けている。

二人の様子に気づくこともなく侍女たちが掛け布を元に戻して、空は剣が効かなかったことを告げた。

「あ、あのね、エシユタンド……！」

廊下に出て、二人で宮へ戻る形となつてからやっと、空が意を決して前に行く背中を呼び止める。

どことなくその背が怒っているような、冷ややかな空気を感じたような気がしたから必死だった。

「信じてもらえないかもしれないけど、あれはあたしがやったんじゃないの。あのっ、王子に手を引っ張られて」

「エカルドに？」

やっと振り向いたエシユタンドの表情はただ硬いだけで、怒っているのかどうか判別できない。

でも会話を途切れさせるのは怖くて、空は頷いて続ける。

「目覚めて、って剣を触れさせて願ってみたんだけどだめで、ごめんねって手を握ってたら、その後……でも目は閉じたままだったし、起きたんじゃないかって寝ぼけたみたいに手が動いただけなのかもしれないんだけど、そっ、それで、その……」

これ以上どう言えばいいのかわからずに口ごもり、俯いた。

しばらくしてふつと笑ったエシユタンドが頭に手を置いて、空はすぐに顔を上げる。

目が合った先の瞳はいつものように優しいものに戻っていて、たちまちほっとした空は表情を緩めた。

「わかつているさ。お前が私以外の男に自分からあんなことをするわけがないことくらいはな」

答えに安心したのも束の間、わずかに影が残ったような眼差しに言葉を返すことができなかった。

宮まで黙って歩くのがなぜか気まずくて、空は迷った挙句に事実を話すことにした。

「何？ 王と妃の腕輪が消えた!？」

「そうなの。それで、以前エカルド王子に腕輪を本棚から取り出したところを見られたの思い出して、まさかつて思いながらも気になつて来ちゃった……」

「エマナがベニエらしき人影を見た、というのも本当なんだな？」  
鋭くなったエシユタンドの瞳に首を縦に振る。周囲に誰もいないことを確かめて話すエシユタンドの態度で、事の重大さが改めてわかった空も身を縮めた。

「ごめんね、変な疑いかけちゃって……王子はエシユタンドの大事な弟で、あたしにとつても大切な人なのに」

いつも味方でいてくれたエカルドを思い出し、空は頭を下げる。  
何か考え込んでいたエシユタンドが、すぐに空の肩を叩いた。

「気にするな。とにかく、このことはまだ公にしないでくれ。」

父上への報告は、私が様子を見て決めるから「  
いいな、と微笑まれて、もちろん承知する。」

腕輪のことを考えているのか、黙り込んだエシユタンドの後をそつと歩きながら、空は白水晶の剣を胸に抱いた。

金の短髪をなびかせて、歩いていく白い衣装の背中　自分にとつて、一番大事な人の後ろ姿を見つめていると、不安な気持ちがかかる。



ピバスの王宮で、きちんと返してもらった、空の旅の理由でもあったもの。

古びた紙切れは、実は空が持つ剣の鞘の隙間に隠してある。

王妃のひそかな計画、その恐ろしい野望を止めるためにピバスへ向かったことは、まだエシユタンドにも誰にも言っていないかった。

知れば、彼が心を痛める。自分のせいだと思ってしまう。

だから、という理由もあった。

でも本当は　いくら恨まれていることがわかっていても、本気で命を狙われていることを知れば、きつと傷つく。

あんな風に対立してはいても、今彼の『母親』であるのは王妃なのだ。

その彼女が自分を殺そうとしていたなんて、知ってほしくなかったから　。

腕輪に手を伸ばしたのも王妃であったなら、そう考えてから、むしろそれを望んでいるような自分の心に気づいて、空は苦笑していた。

矛盾しているのはわかっている。でも、エカルドと王妃までが繋がっているとは、どうしても思いたくなかった。

束の間の二人きりの時間なのに、エシユタンドも空も、部屋にたどり着いても言葉を交わさずに時間を過ごす。

「すまない、これから女王のための晩餐の席へ行かなくては。お前は今夜は出席しなくていい」

「エシユタンド……？」

不安がつい声に出たのだろうか。見上げた空の髪を優しく撫でて、エシユタンドは微笑んだ。

「リゴトの長い講義を聞くだけだからな。王妃も嫌がらせが大して効いていないことに気づいているのか、特に異議は唱えなかった。部屋に食事を運ばせるから、少し休め。雪祭りは明日の夕刻から始まる。祭りの流れはもう聞いているな」

「う、うん　確か、夕暮れと共に王宮の庭園全てに明かりを灯し

て、飾られた雪像を愛でながらの晚餐。それから音楽とお酒、ダンスで夜更けまで楽しむ。だったよね？」

「ご名答、と藍色の瞳がいたずらっぽい笑みに細められる。

ほんの少しだけ、その笑顔が切なげな色を帯びていたけれど、空はあえて気づかないふりで笑い返した。

「エシユタンドは王女と一緒にいなきゃいけないでしょ？ 大丈夫、あたしはあたしでちゃんとお祭りを楽しむから。ララが言うってたけど、雪像って結構立派なんだってね。実は、あたしのいた世界にもそんなお祭りがあるんだよ。まだ見たことなかったから、ミディスで見られてよかったかも。あ、それにおいしいご馳走も楽しみだなあ」

それから　と並べ立てようとした言葉は、腕を引かれ、エシユタンドの腕におさめられたことで遮られた。

真剣な瞳に見つめられ、潤みかけた瞳をあわてて逸らせるが、すぐに顔を正面に向けられ、否が応でも見詰め合う形になる。

心の奥まで見透かすような眼差しにどきりとする。けれど、先に目を逸らしたのはエシユタンドだった。

「無理、しなくていいんだ。ソラ　辛いなら、辛いと伝えてくれ。私を責めたって、罵ったっていい　！　そうでなければ、私は…」

強く抱きしめられ、囁かれてやっと、空にもエシユタンドの声が震えていることがわかる。

辛くないわけなんてない。でも。

「エシユタンドのほうが、よっぽど辛そうだもん。責めるなんて…できるわけ、ない」

そつと答えたら、弾かれたようにエシユタンドが顔を上げた。

複雑な感情が入り乱れた瞳を向けられ、空は無意識に微笑んでいた。

そのまま金の髪を優しく撫でて、笑う　まるで、いつもと立場が入れ替わったかのように。

「負けないよ？ あたし」

「ソラ……」

ただ名前を呼んで、見つめるエシユタンドの胸に身を寄せた。唐突にあの時の恐ろしさを思い出したのだ。

王妃に命を狙われていると知った時の、驚愕と不安。

彼を救う為なら、どんなことでもできると思った。

今、こうして一緒にいられること。それこそが何にも代えられない宝物なのだから。

眼差しに込めた想いは通じたのかわからない。

ただ、ゆつくりと微笑を形作る唇は、少しだけ力を取り戻したように見えた。

「じゃあ、行ってくる」

重ねていた唇を名残惜しそうに離して、エシユタンドが背中を向ける。

愛している、と囁かれた一言に力を得て、空も手を振った。

\*

早朝、まだ侍女たちが起き出す前に、エシユタンドは宮を出た。

予定のない時間を当てて、少し考えを整理したかったのだ。

白い息を吐き出しながら、裏庭を歩く。

数日前から作り始められていた雪像も、あとは鑑賞されるのを待つばかりだ。

薄暗い中、白くきらめく像の美しさは彼にとってどうでもいいも

のだったのだが。

「これはこれは エシユタンド。こんな時間に散歩とは……奇遇だな」

背後からかけられた声に振り向くと、杖を片手に立っていたのは一番上の兄、エーデレードだった。

白い襟巻を巻いた首をすくめて、平然と微笑まれ、エシユタンドは苦笑する。

「本当に奇遇ですね、兄上。いつから杖を手に雪道まで散策されるくらい活動的になられたんですか」

まさか自分を訪ねてということはないだろうが、と思いつつも、完全に否定できない可能性に複雑な気持ちになった。

エシユタンドの皮肉など意に介さぬといった微笑で、エーデレードは杖を持ち上げてみせる。

「おや、知らなかったかな？ これは私の朝の日課でね どうやら最近体が鈍っているようだから」

「そうですか。あまりご無理なさらぬ程度に鍛錬なさってください。何はともあれ、兄上が外へ出る気になられたのは私にとっても喜ばしいことです」

あいかわらず本気かどうかも読ませない兄の瞳に軽く息を吐いて、エシユタンドも唇の端を上げた。

確かに、最近のエーデレードは以前に比べて、明るく笑うようになったことには気づいていたから。

「お前の変化も 私にとって喜ばしいことだよ、エシユタンド。昔では考えられぬほどの、生きた瞳をするようになった」

毛皮の帽子から流れ落ちる金髪を肩に流して、エーデレードは笑う。

灰褐色の瞳に宿るのは、とても優しい色だった。

「生きた、瞳ですか？」

思わず問い返すと、頷く。

雪を踏みしめた両足を確かめるように動かしながら、エーデレー

ドが続けた。

「……あの娘が来てから、お前は変わった。それはこの王宮にいる誰もが知っている変化だ。自分でも、気づいているだろう?」

本当の恋をし、悩み、苦しみ、迷い、悲しむ　その全ての感情に支配されている自分。

それを変化と呼ぶなら、まさにそうなのだろう。

無言でいることで肯定を示すエシユタンドのそばに佇む兄。

何も問わず、何も決め付けない、穏やかな彼の態度に少し救われるような気がした。

「変わったのは、私やお前だけではないようだけれどね」

意味ありげにもらされた一言に、顔を上げる。

心の暗い部分に沈みかけていたエシユタンドは、目にしたエーデレードの表情が読めずに、眉を寄せた。

「愛すべき私の肉親　お前のもう一人の兄さ。気づかなかったかい?」

雪をのせた枝をはった、太い木の幹に背をもたせかけ、謎掛けのような顔をする。

言わずもがな、エルファンドのことを指していることはわかったが、最近変わった外見ばかりが頭に浮かび、他のことは思いつかなかった。

「おやおや、我が弟は忙しすぎて観察眼が鈍っているようだ。クルスの王女の歓迎役は、それほど負担だということか」

「　兄上?」

何が言いたいのかと瞳で問うと、いたずらっぽく肩をすくめて、エーデレードは微笑んだ。

いつもの優しく、静かなだけではない、意味ありげな笑顔で。

「謎掛けの答えが知りたければ、エルファンドを訪ねてみるといい。王位継承権はなくとも、彼とてお前の兄、立派な王族の一員だ。たまには一緒に朝食でもと誘ってみたら、喜ぶと思うぞ?」

それだけを言い残して、立ち並ぶ雪像を楽しげに眺めながら歩く。

一瞬その後ろ姿が、幼き日に見たものと重なった。  
すがりつきたくても、どこか遠く、突き放されたような気がした  
あの頃。

飄々とした兄の態度はいいかかわらず謎ではあったけれど、何もわ  
からぬままの子供ではなくなった自分は、少し彼に近づけたのかも  
しれない。

残されたエシユタンドは、再び歩き出した。

今度は来た時とは逆の、馬屋の方角に向かって。

115・助言（後書き）

腕輪紛失の謎を残しながら、雪祭りは刻一刻と迫り来る。

複雑な想いのエシユタンドに、いつもの飄々とした態度を崩さぬまま、エーデレードが与えてくれた助言とは　次回、彼の謎掛けの答えがわかります！　どうぞお楽しみに^^

愛馬を駆り、雪の積もった木立を抜け、たどり着いた宮の前  
エシユタンドは隠しきれない驚きに、言葉をかけることも忘れてい  
た。

珍しく見開かれた藍色の瞳に、無然とした顔を見せたのはエルフ  
アンド。

黄味がかった金の髪を短く切り揃え、明るい茶色の瞳をすつきり  
と出したからというだけではない、どこか以前と異なる印象。

それはまだ太陽が低く顔を見せ始めたこの早朝に、彼がこうして  
表にいるという事実がよく示していた。

「……なんだよ、兄に会って挨拶もなしか。人が遠乗りに行くのが、  
そんなに珍しいのか？」

エーデレードと正反対の、感情を丸出しにした瞳。  
嫌そうな色を浮かべたそれに苦笑して、エシユタンドは頭を下げ  
た。

「いえ、失礼。ただこうして二人でお会いするのは久々なもので、  
少し戸惑っていただけです」

少し迷ったものの、正直な答えを述べる。

宮の前で首を折る馬の背を撫でながら黙っていたエルファンドが、  
しばらくしてぽつりと言葉を返した。

聞き取れたのだが、一瞬反応が遅れてしまう。

きつと少し間の抜けた顔で見ているのだろう　怒ったような、  
照れたような顔をして、エルファンドはそっぽを向いた。

「行きたくなければ別にいい。そこをどいてくれ、馬の邪魔だ」

「……とんでもない。喜んでお供をさせていただきます、エルファ  
ンド兄上」

微笑を浮かべ、エシユタンドが答える。

それきり言葉も発さず、黙々と鞍をのせ、準備を整えたエルファ



ンドに続いて、馬をゆっくりと走らせた。

静かな庭を、二頭の馬が進んでいく。

同じ白い毛並みの、王子だけに与えられた上等の馬は、きつちりと前後の距離を守って雪の上には足跡をつける。

毎朝きちんと雪かきをしてくれる庭番のおかげで、宮の周りを走るのには困らなかつた。

ただ、雪が深くなる森までは行けないから、おのずと目指す場所は決まっていた。

「ここでは不満か？」

馬を降り、少し温まったために染まった頬でエルファンドが訊ねたのは、広い草原に着いた時のこと。

首を振って微笑むと、なぜか居心地が悪そうにエルファンドが息を吐いた。

「ここなんだろう？」

質問の意味を一瞬図りかねて、そのまま振り向く。

今度は照れたように視線を逸らし、ぽりぽりと鼻の頭を掻いたエルファンドが小声で続けた。

「お前とあの娘が出会った場所だよ。ここで会ったって、兄上に聞いた」

エーデレードを指して言うもう一人の兄。

彼とこうして話をするこすら、何年ぶりか　いや、むしろ初めてと言えるかもしれない。

妙な感慨を抱いていたエシユタンドは、ただ笑って頷いた。

どこか落ち着かないような瞳で見つめ返して、エルファンドはもう一度口を開いた。

「お前　幸せか？」

唐突に過ぎる二度目の質問に、今度こそエシユタンドも藍色の瞳を大きく見開く。

一体何が聞きたいのか、全くわからなかつたのだ。

「女に不自由してなかつた頃よりよっぽど……幸せそうな顔してる

つて言ってるんだよ！ 腑抜けと言ったつていくらいにな。あんな娘一人に骨抜きにされて、それでいいのかつて聞いているんだ」

エーデレードに言われたことと根本的には似通った言葉。

乱暴な言い方は全く違うとはいえ、兄二人に指摘されてしまつては、苦笑するしかなかった。

「幸せ　そう、幸せなんでしょう。辛いと同じくらいに、悩み苦しむ心はそれだけ彼女を愛しているということだから。出会わなければよかつたとは、きつと生涯思わない」

正直な気持ちをお口にしました。

自分の葛藤など知らぬ兄は、一瞬奇妙な顔をして、それから笑つた。

「なんだ、大げさな奴だな。愛する相手を手に入れたなら、そんな辛そうな顔をすることないだろうが」

その口調と瞳は、エシユタンドが目にした中では初めての物のエルファンドだった。

酒と女に溺れ、自堕落な生活を送っていた兄と同一人物とは思えないくらいに。

半ば感動に似た感情が、エシユタンドの口を滑らせる。

「手に入れていたなら、おそらくはそうでしょうね。残念ながら、そうではないから焦がれ続けるのですよ、兄上」

切なさに揺れた藍色の瞳をまじまじと見て、エルファンドがなぜか嬉しそうに笑う。

白い息を雪原に吐き出しながら、地の下に眠る宝玉花を探すように足で蹴っていく。

「兄上の勘は当たっていたわけだな」

呟いた声に眉を寄せると、エルファンドがにんまり笑つて続ける。「さつさと抱いてしまえばいいんだ、この未熟者」

言われた言葉に目を白黒させ、耳まで赤く染めた弟の背を楽しくてたまらない様子で叩く。

女の話題に関してなら右に出る者はいないことは間違いないの

ルファンドに言われて、咳き込むエシユタンド。

なんともいえない顔で目をそらした彼の隣で笑い声をあげていたエルファンドは、真剣な顔で口を開いた。

「悔しかったからな」

ぼつりと呟いた声で、やっと目線を合わせる。

エシユタンドの馬をそつと撫でながら、エルファンドが言った。

「本気の愛つてのを、やってみたくなくなった。お前にできて、俺にできないわけがない。そうだろう？ 体だけの関係にも飽きた。だから」

酒をやめて、女遊びから足を洗った。

そこまでは口にしなかったものの、エルファンドの清々しい瞳からはそんな気持ちが見える気がした。

あれほど昼も夜も浴びるように飲んでいた酒を断つのは並大抵のことではなかったはずで、それだけでも、軽い口調に秘められた決意が伝わってくる。

「俺に、やらせてくれないか？」

朝日が雪原をまぶしく照らし、瞳を細めたエルファンドが問う。

酒も香の匂いも、全くしなくなった白い衣装を整えて、挑戦的な笑顔を浮かべる。

「クルスの王女の歓待役、俺でどうかって言ってるんだ」

「兄、上？」

寒さすら一瞬遠のく。

驚きと戸惑いがそのままこもった声に、エルファンドは頷いた。

「あのタミアンナって女、気に入った。清纯で、そつのない生まれながらの王女つてところが特に、な。こんな俺で向こうが満足するかはわからんが、精一杯歓迎してみるさ。俺だつて一応、王子と名のつく立場にあるんだからな」

皮肉げな笑みを浮かべ、片目を閉じてみせる。

エルファンドの提案は、雪祭りの朝を混乱に陥れるものになるのか、それとも。

藍色の瞳は、ようやくいつもの色を取り戻したのだった。

「何、王女の歓迎役を辞退したい、だと？」

王に謁見を求め、決意を伝えたエシユタンドは、どこか清々しいほどの微笑で頷いた。

一方、驚きに見張られるのは灰褐色の瞳。

「しかし」と眉を寄せる王の前に歩み寄る。

「父上」

藍色の瞳でまっすぐに父王を見つめてから、エシユタンドは深く頭を下げた。

「申し訳ございません。しかし、やはり私は自分の心にこれ以上背くことはできない。この数日間、それがよくわかりました」

きっぱりと王女のそばについていることはできない、と告げると、二人きりの広間がしんと静まり返る。

窓の外を忙しそうに行きかう侍女や兵たち。夕刻に迫った雪祭りの最後の準備に追われている彼らの様子に目をやってから、王は頭を抱えた。

「では、王女はどうするつもりだ？ ミディアスでは十分に国賓をもてなすこともできないと非難されることは、目に見えているのだぞ」  
渋い顔で問いかけた国王、雪祭りが始まるのを待つばかりとなつた庭の雪像、そのどちらをも余裕の瞳で見やって、エシユタンドは微笑む。

返答の代わりに彼が指し示したのは、背後の扉だった。

ちょうど聞こえた重厚な音と共に扉は開き、カツカツと靴音を鳴らしながら、一人の人物が入ってくる。

予想外の顔であったのか、王はただ混乱に眉をひそめた。

「エルファンド……？ 一体、何の用だ。今は大事な話の最中だぞ」

雪の花が刺繍された、純白の正装をまとった第二王子は、平然と笑ってみせる。

くせのある金色の髪が、雪を反射した日差しを受けて、明るく光を放っていた。

「父上、その話のために兄上をお呼びしたのです」

エシュタンドの言葉で、王がまさか、という顔をする。

驚愕は沈黙となって現れたようだった。

「こうして向き合ってお話するのは、もしかしたら初めてかもしれませんが、父上」

口元に笑みをのせ、丁寧な礼をしてみせたエルファン্দ。

その瞳に浮かんだ複雑な光は一瞬でしまい込まれて、あとにはひどく精悍な印象に変貌した王子の姿があるばかりだった。

「私に、王女の案内役を任せてはもらえませんか？」

先ほど半ば挑戦的な笑顔でエシュタンドに提案した時とはわずかに違う、エルファン্দの表情。

強気なふうを装ってはいるものの、真剣な瞳から、彼が確かに緊張していることが伝わってきた。

「お前が、タミアンナ王女を？」

片眉をあげ、訝しげに問い返す。

そんな父王に笑いかけ、エルファン্দが続ける。

「聞けば、エシュタンドはたった一人の愛しい女も完全にはものにできずにいるとか。そんな状態で違う女性の相手を務めることが苦痛でならないのだそうで」

冗談めかした兄の言葉に、エシュタンドが口を開こうとする。笑みを絶やさず片手で制したエルファン্দが、玉座に腰掛ける王を見上げた。

「その点、私ならばそんな心配は無用だ。世を完全に隠居したかのような、エーデレード兄上とは違って、幸いまだまだ女性にだって興味もあります」

それが問題なのだとも言いたげな王の顔に笑い返し、そこで表

情を引き締めると、短くなった前髪をかきあげる。

そのまま両手を広げたかと思うと、強くその手を握り、口を開いたのだ。

「私のこの手には、何もありません 父上」

今までの態度とは打って変わって、真剣そのものの瞳、そして声音。

王の目つきまでも、一瞬で変えさせるほどの。

「幼い頃に母を亡くしたというだけで、王位継承権をなくし、形だけの王子となった。つまり、こんな王宮に存在していても意味がない、無能な人間に成り果てた。そういうことだ。それがどれほどに空しいことか、わかりますか？」

「兄上……!!」

思わず呼びながらも、エシユタンドでさえその言葉を止めることなどできない。

それほどに激しい感情がほとばしるような、エルファンドの瞳。怒り、無念さ、そんなものの全てを握りつぶすかのような強い力で、彼は両の拳を握り締めていた。

「だから、私は存在しないことにしたのです。酒と女と怠惰な生活それだけに身を埋めて、ただ楽しむだけ。王子としての人生などに、何の希望も持ちたくなかったからです」

初めて聞いた、エルファンドの心。

エシユタンド同様、ただ言葉をなくして耳を傾けながら、王が彼の名を呼ぶ。

乾いた唇が、「エルファンド」と呟いた瞬間を待っていたかのように、彼は表情を一転させた。

「けれど 私はそんな考えを改めることにしました。なぜか？」

理由はただ一つ。納得が行かないから、ですよ、父上」

その意図を問う灰褐色の瞳を受け止めて、エルファンドは両腕を下げる。

片手にいつも持っていた酒のグラスは、今はない。

外見だけでない彼の変貌は、王にも伝わっていたようだった。

「だから、王女の歓迎役を買って出たというのか？ 私とミディアスの国に 復讐でもするつもりか」

「父上！」

止めようとするエシユタンドの声が広間に響く。

立ち上がった国王の前でも、堂々と顔を上げたままのエルファン  
ド。

二人ともが自分の制止など聞いていないこともわかっていた。

「復讐……そう仰るなら、そうなのかもしれないですね。でも、生憎私はそんなくだらしないもののために自分を犠牲にするつもりなどない。私が納得が行かないと言ったのは 自分自身のことです。王子として生まれた自分が、何をして生きるべきなのか。そんなお利巧な疑問のためだとも言いたくない。ただ私は……私にだって、幸せになる権利があると思っただけです」

瞳を見開いた王に、エルファンドが笑う。

まるで少年のような笑顔は、なぜかこの場の誰にも負けないくらいに、強いものだった。

「弟に負けるなど、まっぴらごめんだ。私にだって、生涯を捧げて恋をしたり、されたりする権利がある。そうではありませんか？」

「エルファンド……」

名を呼び、エルファンドを見つめる瞳は、父親としての色に変わっていく。

酒びたりで、女にだらしがないと思っただけの第二王子が、確かに成長を遂げたことに感慨を覚えているのか わずかに潤んでいるようにさえ見えた。

咳払いと共に、すぐに王の顔を取り戻してはいたのだが。

「あのタミアンナという王女なら、その相手にふさわしい。彼女がどう思つかまではわかりませんが……私の幸せな人生が、国としての利益も兼ねているならば」

それこそ一石二鳥というものではありませんか、とエルファンド

が微笑んだ。



116 ・ エルフランド（後書き）

まさしく生まれ変わったエルフランドによる提案で、エシユタンドの苦悩は解消されることに。はたして彼はタミアンナ女王の歓迎役を務め、クルス国との問題を解決することができるのか - 続きもどうぞお楽しみに！

## 117・雪祭り

いよいよ夕刻に迫った雪祭りを前に、空は部屋で昼食をとっていた。

降り続いていた雪はやみ、窓の外に広がるのは一面の銀世界。

美しいと評判の雪像はここからは木立の影になり見えないが、ただ真っ白な景色だけでも十分に心洗われるものだった。

「あの 姫君」

ララに声をかけられ、食事の手を止める。

ぼんやりと外を眺めていたせいで、スープも入れてくれた香草茶も冷めていることに気づいて、苦笑した。

「ああ、ごめんね。早く片付けてしまわないと、だよね。もう食べ終わるから」

「違うんです、その……お食事の途中で申し訳ないのですが」  
てっきり皿を下げていいかという意味だと思った空は、きよとんとして顔をあげる。

黒い瞳を困ったように見つめていたララが、意を決したように視線を合わせた。

何かを言いかけた顔が、次の瞬間叩かれた扉の音でびくりとする。

「あれ、出ないの？ はい！ 開いてるから、どうぞ」

いつもはてきぱきと用事をこなすララにしては珍しい。

そう思いつつも、習慣的に声をかける。

開いた扉に何気なく目をやった空の瞳が、大きく見開かれた。

「エ、エマナ ！」

きゃあ、と叫んで嬉しそうに駆け寄っていく空。

途中だった食事の存在も、数日ぶりの笑顔の前にはどうでもよくなっていた。

「久しぶり、久しぶり ！！ もう、会いたかったよおゝ寂しかったんだからっ！」

まるで恋人に会ったかのような勢いではしゃぐ空に抱きつかれ、エマナは大きな瞳を困ったように泳がせ、頬を染めてされるがままになっている。

「あ、ごめんね、ララ。もちろんララとも仲良くなれて、すっごく嬉しかったんだよ？ だけど」

困った顔のまま固まっているララの瞳を見て、あわてて言い訳を始めるが、「いえ、そうではなく……」と遠慮がちに微笑を返される。

「あの、姫君……」

空の腕の中でエマナも同時に何かを言いかけるが、それより先に目線をめぐらせた空は、扉の影に佇んでいた人物を発見し、動作を止めた。

見開いた黒い瞳と、瞬きをした緑の瞳がかちあつて 予期せぬ訪問客は、ただ淑やかに微笑んだ。

「ごきげんよう、巫女様。ご挨拶は二度目になりますわね クルス国第五王女、タミアンナでございます」

胸に手をあてて、王女らしい仕草でお辞儀をされてもまだ、空は呆然とした表情を崩せずにした。

まさか、つい先ほどまでの物思いの元凶たる人物が、直接訪ねてくるなどは夢にも思わなかったのだ。

「突然のご訪問、ご無礼お許しくださいませ。ただ、雪祭りが始まる前にどうしても一度きちんとお話がしたくて……あら、お食事中でいらしたんですね。もう少し後にお訪ねするべきだったかしら」  
後半は独り言のように呟いたタミアンナが、本当に心配そうな顔をしたことでしょうか、我に返る。

そばで微笑んでくれるエマナとララの存在に力づけられた空は、なんとか窓際の椅子を勧めた。

空と向かい合う形で腰掛けた王女が、再び小首を傾げて訊ねる。

「本当にお食事なさらなくてよろしいのですか？ 私のことでしたら、お気遣いは」

「い、いいんです、大丈夫！ もうお腹がいつぱいで……それより、あのう……」

どういうご用件で、とストレートに訊ねていいものなのかどうか迷う。

そんな空の葛藤に気づいているのかどうなのか、タミアンナは滑らかな手袋を外し、見事な金の長髪を整えた。

着ている薄緑色のドレスといい、首元や指に光る宝石といい、たおやかな仕草といい、全てが完璧な本物の『王女』 改めて目の前で自分との違いを見せつけられたような気がして、空が目線を見せた、その時だった。

「本来でしたら、クルスとの気候の違いですとか、雪祭りという行事の素晴らしさについてのお話を挟むのが王女としての礼儀であることは重々承知しているのですが」

突然切り出された前置きに、ただ驚いて顔を上げる。

緑の瞳に浮かぶ感情は見えず、混乱しかけた空に王女は微笑んだ。「なにぶん、夕刻まであまり時間が残されていないものですから

単刀直入にお伺いすることにいたしましたの」

につこりと、淑やかに。

初めて目にした時から変わらない気品あふれる態度のまま、タミアンナはエマナと一瞬瞳を合わせ、口を開いた。

「巫女様 いいえ、ソラ様、とお呼びしたほうがよろしいかしら。あなたはエシユタンド王子に恋をしていらっしやる。そうですね？」

いきなり言い当てられて、言葉が出ない。

空の表情で確信したのか、タミアンナは緑の瞳を細めて、頷く。

「やはりそうでしたか」と続けられ、混乱したままエマナのほうを見やった。

その視線で気づいたタミアンナが、にこにこしたまま立ち上がる。小さなエマナの肩に両手を置き、微笑んでみせた。

「彼女ではございませんわ。エマナは本当に素晴らしい侍女です、

職務に忠実で、親切。決して主人の秘密をばらすようなことはいたしませんもの」

「じゃ、じゃあ、どうして……」

ようやく声を発した空をいたずらっぽく見やって、タミアナはくすりと笑う。

今までの人形のようなだった『王女』としての仕草とは少し違う、同年代の少女の笑顔に見えた。

「まあ、私とて女ですもの。あなたの瞳を見ていればすぐにわかります。もちろん、王子もあなたに夢中であることも」

ふふ、と口元に手をあてて笑った彼女の悪びれない態度に、空は動揺しながらもかえってほっとしていた。

気づかれていたのなら、これ以上肩に力を入れていなくてもいいのだ、と。

それでもすぐに思い浮かぶ諸々の複雑な事情が、空の顔を引き締めさせる。

けれどタミアナは、それさえも見越したように言ったのだ。

「ご安心なされませ。あなた方にどういふご事情があるのかは知りませんが、お二人の仲を引き裂くような真似をするつもりなど毛頭ございません。あくまで私個人としては、ですけれど」

申し訳なさそうに肩をすくめて、笑みを収めた王女。

ちようどテーブルに置かれた香草茶を口に運びながら、寂しげな顔で空を見つめる。

「ご存知でしょうけれど、我が国クルスは資源にも恵まれず、決して豊かとはいえない国でした。それが今ではミディスやビバスに肩を並べ、大国の仲間入りを果たしている。なぜなのかはおわかりでいらっしやいますわね」

エシユタンドにも聞いていたクルスの思惑　今回の訪問理由である事情をさらりとほのめかすタミアナに、空はためらいがちに頷く。

正直に話してくれる王女に、ごまかす必要は感じなかったのだ。

「お姉さまたちと同様に、私も他国に売られていく身。それは私には変えられない事実です。父である国王は今度の訪問を機に、ミデイスの王子に嫁がせるつもりでいる。はっきりと命じられましたから、わかっています。仕方がないのです、国が栄えるためにはそれが一番有効な手段ですもの」

「王女、様……」

窓の外にきらめく真つ白な雪を見つめて、言葉を止める。

タミアンナの本心　自分の辛さばかりで、考えもしなかった相手の気持ちに、改めて空は胸を突かれていた。

当然のようにそんな生き方を強いられるなんて、自分が生きてきた世界では考えられないことだというのに。

目の前の、自分と同じ年頃の少女は、それを仕方がないことだと受け止めているのだ。

「ただ、私も単なる『道具』として生きるつもりはないんです。それだけははっきりと申し上げておきたい。だから、こうしてお訪ねいたしましたの」

どういう意味かと瞳だけで問う空。

黒い瞳を珍しそうに見つめて、タミアンナは笑った。

「だって、自分を望まぬとわかりきっている相手に無理やり嫁ぐなんて……それほど悲しいことはないでしょう？　それで、私考えたんです」

あの、と声をひそめて、空だけに囁かれた内容は、全く考えたこともない提案で　空は口を開いたまま固まってしまふ。

また小さく笑ってから、緑の瞳がまっすぐに空を映した。

「ミデイスの王子、とだけ言われてきたんですもの。間違っではないませんか。そうお思いになりませんか？」

王女としての優雅さはそのままに、年相応の少女にふさわしい笑みをのせる。

タミアンナの強さに、空は胸を打たれる思いで頷いていた。

「そう、ですね　確かに。でも、大丈夫なんですか？　そんなこ

とをして……お父上に叱られたり、とか」

「あら、ミデイスに嫁ぐこと、という命は十分守るんですのよ？  
褒められはしても、叱られる筋合いはないと思いますけれど」

含み笑いをしながら言つてのける、彼女は自分なんかよりもよっぽどたくましいのかもしれない。

空の考えは、ふと目が合ったエマナの微笑みで裏付けられた気がした。

「それで、あの……どちらの王子に？」

彼女の提案に賛成しながら、あとは純粋な好奇心で訊ねる。

少しだけ頬を染めたタミアンナが耳元で告げた名前に、空は今度こそ驚きの声を上げずにはいられなかった。

「あ、ご、ごめんなさい。てっきり、その……もう一人の殿下のほうかと思つたもので」

落ち着いた印象の王女が選ぶ相手だからと決め付けていた予想が裏切られ、つい本音をもらす。

その呟きに笑つて、タミアンナは金の髪をかきあげた。

「あの時、お話しましたでしょう？ 私、小さい頃から珍しいお話を聞くのが大好きでしたの。もちろん王女として育つてまいりましたから、自由の利く身ではございませんし、その分余計に　だから、本当は嫌いでした。窮屈な王宮も、王女としての自分も……」

自分が決して手にすることのできない、本物の血筋、気品。そんな完璧な生まれや育ちに満足していないという正直な告白に、空は初めて生身の彼女に触れたような気がしていた。

空にとっては異世界であるこの世界の、一つの王国に暮らす王女  
そんな少女とて、やはり悩みも葛藤もある。

当然であるはずなのに、なぜか嬉しくさえ思えた。

「エシユタンド王子にお会いした時、すぐに気づきました。ああ、  
この方も私と同じなのだ、と」

「同じ　？」

問い返す空に、しっかり頷くタミアンナ。

緑の瞳は、最初よりも随分飾らない表情を見せてくれるようになっていた。

「心にもない社交辞令と美辞麗句、そして王族としての義務を果たすだけの、笑顔の仮面。それは私が今までずっと被ってきたものと同じ。でも、あの方だけは違いました」

自分を見ても微笑みもしない、話しかけもしない、愛想のかけらもない態度　礼儀程度の挨拶を述べたもう一人とて、それは似通っていたけれど、とタミアンナは語る。

根本的に違ったのは、彼の目つきだった。そう打ち明けられて、空は首を傾げる。

素朴な疑問を浮かべた瞳に微笑んで、王女が考えるような仕草をした。

「言葉にはうまくできませんけれど　わかったんです。あの方も、決してご自身の人生に満足などされていない。何か、その中でもがこうとされていらっしやるような　」

だから、とタミアンナは笑う。

似たもの同士、気が合うかもしれないと思ったのだ。

そんな少女らしい言い方に空もようやく笑顔になる。

もしかしたら、この人こそが彼を本当に変える存在になるのかも　しれない。

そうなればいい　自分の立場を抜きにして、空はそう願った。

タミアンナの提案が現実になったのは、その日の午後遅く、太陽が地平線に迫ろうとしていた時刻だった。

ただし、それが彼女の言葉によるものではなく、その相手となる王子その人によってなされたものだ　と空が知ったのは、エシユタン　ドが隣にやってきてからだったのだ　。



正確には、タミアンナが言う前に国王から彼女の意思を問う手はずを踏んだ、と説明されて、不思議な偶然に目を見張る。

「実は私もそう思っていたのです、と王女に喜ばれてしまつては、さすがの王妃も返す言葉がなかつたんだらうよ」

まだ硬い表情で、それでも無理に笑顔を搾り出している王妃を遠目に見やつて、わざとらしく肩を抱いてくるエシユタンドに、空はなんともいえない気持ちで笑い返した。

王宮の庭を飾る見事な雪像　それと同じくらいきらきらと輝く真つ白の正装。

今朝までは、紛れもなく王女のためであつたはずのエシユタンドのいでたちは、今はその意味をなさず、ただ雪祭りを楽しむ王族の一員であることだけを示している。

自分にも用意された白いドレスは、普段以上に刺繍も宝石も豪華で、広がった裾が動きづらくはあつたけれど、心はすっかり軽くなつていた。

薄暗くなつた周囲の空気まで照らすように、次々と明かりが灯されていく。

自分の故郷からは遠いけれど、懐かしく思い出される冬のお祭りその行事を彷彿とさせるような、数々の雪像たち。

動物や花、はたまた踊る男女など、大きさはそれほどではなくても、氷に施された細工は素晴らしかった。

中でも目を引く、宝石の形をした花。

ミデイスを象徴する珍しい花の雪像を眺めて、感嘆するタミアンナ。

美しい王女でありながらも、その頬は少女らしくわずかに染まっている。

そんな彼女を隣で見守り、優しく何事か説明する案内役は、エルファンドだった。

酒びたりだつた過去など微塵も感じさせない、精悍な印象の第二王子。

王位継承権はなくとも、隣国クルスの王女を支え、導く役目には  
ぴったりの。

ふと目が合った先で、タミアンナがいたずらっぽく片目を閉じて  
みせる。

ひそかな二人の合図は、エシユタンドだけに気づかれていたよう  
だったが、微笑んだ藍色の瞳はただ優しく空を映していた。

既に山と盛られていたご馳走は下げられ、果物の蜂蜜づけや、菓  
子類などがテーブルに載り、飲み物や酒が配られる。

大広間の壁際に控えていた楽団が、優雅な音楽を奏で始め、王宮  
の雰囲気はすっかり祭りを楽しむ明るいものになっていた。

真ん中に開けられた空間で、一番初めにダンスを踊るのはタミア  
ンナとエルファンドの二人。

収穫祭で一度見ていたから、彼が王族のたしなみとして踊れるこ  
とは知っていたものの、酒も断ち、本来の姿になったエルファンド  
は、以前とは比べものにならないくらい生き生きとしている。

流れるような仕草でリードされ、共に踊るタミアンナは幸せそう  
で 空はほっとした思いでエシユタンドを見上げる。

「よかった……二人が幸せになったら、本当に嬉しいことだよね」  
本心からそう告げた空に、エシユタンドも頷く。

曲が変わり、無礼講となった広間には私兵隊の面々も現れ、ダン  
スを始めた。

それぞれ給仕についていた侍女たちまで誘って、楽しげに踊り出  
す。

ルストやセイシエルといった見知った顔の中に見つけたクガルが、  
少し照れながらエマナに片手を差し出すのが見えた。

「ね、見て！ あの二人、いつの間にか！ もう、エマナったら  
……あとで問いつめてやらなきゃ！」

真っ赤になりながらも、幸せそうな顔で踊るエマナを嬉しそうに  
指差してはしゃぐ空。

そのままの顔で隣を見て、ようやくエシユタンドがやや懨然とし

た目つきをしていることに気づく。

「他人の幸せまで願う、お前の優しさはとても魅力的ではあるのだが……せめて今ぐらいは、この瞳に私のことだけ映してくれたら

そう願うのはわがままだろうか」

どうかな、婚約者殿、と一見冗談めかして問う藍色の瞳。

それが結構真剣な色合いを帯びていることに気づいて、空はあわてたように微笑んだ。

「わがままだなんてとんでもない！ もちろん、そう願うのが当然だと私も思いますよ？ だって、同感ですから 殿下」

ふざけた調子であわせてみせる黒い瞳に、エシユタンドも笑顔になる。

どちらからともなく肩を寄せ合って、静かにきらめく雪像を眺めながら、二人はいつしかそっと手をつないでいた。

## 117・雪祭り（後書き）

不思議な偶然で雪祭りを共に過ごすこととなったタミアンナとエル  
フアンド。

二人を見守りながら、ようやく誰にも気兼ねすることなくそばにい  
られるようになった空とエシユタンドも、静かに祭りを楽しむのだ  
った。

というところで今回は終了です。これからの二人にどんな展開が待  
ち受けているのか　次話もどうぞお楽しみに！

三日間に渡って行われた祭りも無事終わり、王宮はようやく普段の静けさを取り戻していた。

まだ寝台の中でまどろんでいた空は、早朝扉を叩かれる音で瞼を開ける。

それがここ二日眠りを妨げられてきたのと同じ人物によるものだとわかり、寝返りを打った。

「ソラ様、ソラ様、ほら、いつまで寝ていらっしやるの？ 早くしないと朝食の時間になってしまいますわよ」

うっん、と不機嫌な唸り声だけで再び眠りに戻ろうとした空の腕を強引に引つ張って起き上がらせたのは、長い金髪を高く上にまとめあげた少女。

緑の瞳が美しいクルス国の王女、タミアンナである。

本来ならばミデイスの国境近くにある別荘に帰る予定であった彼女が、こうして滞在を引き伸ばしたままいる理由はただ一つ ミデイスが気に入ったからだという。

「さっ、早く支度なさいませ！ 馬の用意は私が整えておきましたから」

有無を言わず渡されたのは、冬用の乗馬服。

昨日、一昨日共に空が早起きせざるを得なかった理由だった。

「あの〜王女……午後にも稽古付けてくれるともっと有難いんだけど……だめかな？ なんかあちこち筋肉痛だし、疲れがたまって眠くて」

目をこすりながら遠慮がちにお願いしてみた空だったが、タミアンナの優美な眉はつりあがるばかり。

細い腰に両手を置いて、自分の乗馬服姿を見せ付けるように歩み寄ってくる。

「まあまあ！ たった二日の稽古だけで根を上げるなんて、そんな

ことでは王族としての気品を身につけるには、まだまだ程遠い道のりですわね。本日は遠乗りだけではなく、王女としての振る舞い、仕草はおろか、ダンスにいたるまで手ほどきさせていただくつもりですのに」

華奢な体の一体どこにこれほどの体力を秘めているのかと驚かせるほど元気なタミアンナが、あきれたように空を見下ろした。

「え、えっと……王女の気持ちはすごく嬉しいんだよ？　嬉しいんだけどただ、そこまで一気にやるつもりはなかったっていうか」

軽い気持ちで、タミアンナのようになれたら、なんて口に出してしまった自分が悪いのだ。

いや、本心から言ったのは確かなのだけれど、まさかそのすぐ翌朝から早朝乗馬特訓が始まるなどとはさすがに思わなかったから。

親切そのもので馬の乗り方から世話の仕方まで教えてくれるタミアンナの手前、もう少し手加減してくれとも言えず。

気づけばこうして全身に鈍い痛みが走る、という情けない状況になっっていたわけである。

「そんな　もしかして私、ソラ様のご迷惑になっていたんですの？　なんてこと……！　年頃も同じで、初めてできたお友達　い

いえ、既に私の中では未来の姉妹となるのを想像して、それは近い心でこうして足しげく通わせていただいていたというのに……まさかご迷惑になっていたなんて」

あああ、と顔を両手でおおって泣き伏すほどの勢いでしゃがみこむタミアンナに、黒い瞳があわてた色を浮かべる。

「そつ、そんな、迷惑なんてことは　そんなことないよ、王女！　あだし、本当に感謝してて　」

「だって、現に王女だなんて他人行儀な呼び方をされて、私、何度もタミアンナでいいと申しましたのに」

「あつ、そ、そうだよ。うん、タミアンナ！　あたしだってエマ

ナやララしか女の子のお友達っていなかったから、すごく嬉しいんだよ。だから　あ、もう体も大丈夫みたい。すぐに準備するから、

外で待つてて？ ねっ？」

頬につたう大粒の涙を見てしまつては、起き上がらないわけにはいかなくて。

笑顔で乗馬服に袖を通し始めた空は、顔を上げたタミアンナの瞳に思わず言葉をなくした。

「よかつた！ ではお待ちしておりますわね。今日は殿下方も越しになるそうですから、お待たせせぬようお早くお願いしますわ」

お姉様、とまでちゃっかり呼んで微笑んだタミアンナは、涙などいつ流したのかという笑顔を浮かべていて 空は改めて王女の豹変ぶりに驚くのだった。

もちろん、王女としての気品などはまったくそのままではあるのだが、空に対しては素顔の彼女を見せてくれているらしい。

そりゃあ、王女様だつておんなじ女の子だもんね。いっつも完璧な仮面を被つてたら疲れちゃうだろうし。

「お姉様つて……一応タミアンナのほうが立場上そうなんじゃないのかな？」

呟いた時にはもうその後ろ姿さえ遠く見えなくなつていて、一人笑つた。

早朝の稽古や筋肉痛を除けば、さつき言ったことは空にとつても本心だった。

心配したクルス国王のほうも、タミアンナの言つたとおり、ミデイスの王子との婚姻が現実になりそうなのこの状況に満足したようだ。

ミデイスとクルス双方にとつて平和的解決となつたのだ。

ただ一人、王妃だけは悔しい思いを噛みしめていたようではあつたのだが。

「姫君、着替えはお済みになられましたか？」

扉を叩いたエマナが、湯をはつた木桶を持ってきて、空は沈みかけていた物思いから浮上する。

両手で軽く頬を叩いて、今日のレッスンへの気合を入れることにした。

「それにしてもタミアンナ王女って本当にすごいよね。乗馬にダンスに刺繍に詩の朗読、だったっけ。王女としてのたしなみらしいけど、あたしからしたら脱帽だよ」

差し出してくれた布で顔を拭きながら笑ったら、エマナは苦笑する。

優しい亜麻色の瞳がまた見られるようになったことがとても嬉しくて、ついもれた本音。

彼女の存在がどれほど自分にとって大きかったのか実感していた空は、雪祭りの終わった翌日からすぐ、違う侍女をと希望してくれたタミアンナの気配りにも感謝していた。

「タミアンナ様は本当に素晴らしい方ではありますが 私からすれば、この数日間あの方にお仕えさせていただいたおかげで、姫君の素晴らしさを改めて感じていたんですよ？ やはり、姫君のように自分を飾らず、そのままのお心で出会う人々をこれほどまでに魅了されるお方は他にいらっしやらない。それだけは確かですわ」

だからタミアンナもこうして素の自分を見せられるようになったのだ、と熱弁するエマナに、空は頭を掻く。

褒めてくれるのは嬉しいけれど、自分がそんなにいいものだとは到底思えなかったのだ。

「そうかなあ。あたしにはとてもそうは思えないんだけど っつてそんなことより！ 乗馬疲れとかで忘れてたけど、エマナには聞きたいことが山ほどあるんだから！」

「は、はい？ な、何か？」

きょとんとして訊ねられ、空は興奮を隠せぬまま詰め寄る。

この疑問の前には、乗馬のことも、待っている王女のこととも後回しだ。

「雪祭りでクガルさんと踊ってたでしょう！ 一体いつの間にあんなに親密になっちゃったのよー！ もしかしてもう付き合ってるのか？ ねえねえ、どうなってるのかちゃんと教えてよ〜」

気分はまるで修学旅行の夜。



それぞれの好きな人や彼氏の話に花を咲かせる、あの興奮と同じ。エマナの切ない想いをそばで見ただけに、自分までも嬉しかったのだ。

「お、お付き合いだなんてそんな　！　とんでもないですわ。あ、あの時はただ……他の隊員の方たちが半ば無理やりにクガル様の背中を押されて、といいますか、その　ただそれだけでございますもの！」

みるみるうちに頬を真っ赤に染め、俯いてしまふエマナ。彼女の主張とは裏腹に、亜麻色の瞳は幸せそうにその記憶を反芻しているように見えた。

村の祝祭で踊った時とは明らかに違う二人の様子。真面目なクガルの性格上、断ろうと思えばいくらでも職務を理由に断れたはずで二人の間にあつた距離が確かに縮まったことは、空にも感じられたのだ。

「ねえねえ、他には何かなかったの？　もつと色々聞かせてよ」  
更に詰め寄る空と、ただ照れるばかりのエマナ。

まさに楽しいお喋りの時間に突入しようとしていた空の気持ちを引き戻したのは、外から聞こえたタミアンナの声だった。

「ソラ様！　まだでいらつしやいますか？」  
馬のそばで苛々を募らせている顔が見える気がして、空はエマナに向かつていたずらっぽく舌を出す。

「はいはいはい！　今行きます！」  
叫んで、駆け出しながら、「また後でね！　あ、夜にでも部屋に来てよ！　今日こそ色々聞かせてもらうからね　！」とエマナに言い残す空。

苦笑と共に片手を振りながら、亜麻色の瞳が見送る。

「夜だなんて……それこそそんな無粋な真似、できるわけないじゃないませんか」

ふふ、とエマナが一人笑いをもらっていたことは、空の知る由もないことだった。

「一、二、一、二……：そうだ。かなり見られるようになってきたな、どうも王女の教え方がいいらしい」

薄く積もった雪の上で基本の歩行をやってみせると、エシユタン  
ドが軽く拍手をした。

筋肉痛に襲われていた体も、実際外の空気を吸ってこうして動か  
すことで、爽快感に癒されていくようだった。

「私はただ理論をお伝えしただけ　ソラ様の飲み込みが早いので  
すわ」

恐縮して微笑むタミアンナ　本音を言えば結構なスパルタ教師  
ぶりだったのだが、やはり彼女のおかげであるところが大きい。

乗馬が意外と体を使う運動であることはともかく、毎日バスケ部  
で走り回っていた頃に比べると、どうしても運動不足だったことは  
否めないのだから。

単純にそれどころではなかった、という今までの事情はさておき、  
こうして乗馬に挑戦できたことは嬉しかった。

「本当は前から乗ってみたかったんだよね。体を動かすのは嫌いじ  
やないし」

以前、馬車での移動を強いられた時にも思っていたこと。

それは本心だったから、すんなりと口から出て。

まだ緊張をゆるめると痛む手足を隠して、空はにやにやと笑うだ  
けのエルフランドにも微笑んでみせた。

「ふうん　やはり異世界から来たお姫様はどこか違うらしいな。  
たった二日で一応さまになってるじゃないか」

随分印象の変わった王子に、あなたこそ、と皮肉の一つも返した

くなるが、そばで見つめるタミアンナを思つと、とてもじゃないけれど口には出せなかった。

昔の女癖の悪さとお酒の話だけは、絶対秘密にしておこうと。

内心決意を新たにす空のことなど露知らず、エルファンドの乗った白い馬の背を撫でるタミアンナ。

穏やかな瞳を覗き込むようにして微笑む彼女の仕草を、脇で見守るエルファンド。

その瞳が思つた以上に優しくて 見ているほうがなぜか気恥ずかしくなる。

「そろそろお邪魔虫は退散するでしょう。ほら、ゆっくりでいいからついておいで」

自分の馬にまたがり、促すエシユタンドについて、そつと馬を走らせる。

まだ歩かせる、といったほうがいいぐらいの速さだったが、初々しい恋人たちの会話を邪魔しない距離に離れることぐらいは、なんとかできた。

「二人で乗馬なんて、なんだか不思議……」

素直な感想をもらした空に微笑んで、エシユタンドが手綱を引く。緊張しながら同じように馬を止め、降りようとした体を一足先に支えてくれた。

抱き下ろされた空は、自然にエシユタンドの腕の中におさまった。どちらからともなく唇を合わせ、静かな雪景色を眺める。

二人でこの場所に佇むのは、三度目 初めて出会った時、そして長い旅から戻った時。

今、こうして共に過ごす時間はとても平和で、穏やか過ぎて落ち着かないほどだった。

ふと見上げた先で、優しく見つめられていたことに気づいて、頬を染めた空が雪の上に乗馬靴をのせた。

「それにしても動きやすいなあ、この格好！ ねえ、これからドレ

スじゃなくていつもこれ着てちゃだめかな？」

冗談めかして訊ねながら、ズボンならではの大きな歩幅で足跡をつけていく。

半ば本気の提案だったが、エシユタンドは肩をすくめて笑うだけだった。

「あ、そうだ！ ねえ、見て ほら！」

背を向けた姿勢でしばらくしゃがみこんでいた空が、笑顔で見せたもの。それは、白い原っぱの上に作った小さな雪うさぎ。

南天の代わりに小石を埋め込んだだけの簡単なものだったが、久しぶりの雪遊びは意外と楽しくて。

褒められるままに、小さな雪だるまも作り始める。

「可愛いでしょう？ おそろい」

隣に寄り添うように同じ雪だるまを作って、誇らしげに空は微笑む。

あんまり藍色の瞳が優しいから、なんだか照れくさくなって、雪玉をこっそり作る。

振り向きざまに投げつけると、エシユタンドがあっさりと避ける。

「あーあ、気づいてたんだ」

「ふん、まだまだ甘いな。どうせならこれぐらいは 作らないと！」

どこから取り出したのか、空が作ったものより大きな雪玉を投げつけてくるエシユタンド。

きゃあきゃあ叫びながら、いつの間にか雪合戦に突入した。

吐き出す息が白いことも、皮手袋が濡れて冷たくなっていることも気にならない。

王宮でこんなにはしゃいだのも初めてで、熱中していた空が雪に足を取られ、転びそうになる。

叫ぶ間もなく視界がひっくり返りかけた瞬間、腕を引かれ、二人で転んだ。

「う、うめ……」

思ったよりも痛くないと目を開けて、やっとエシユタンドが下敷きになってくれたのだとわかった。

それと同時に密着していた体に気づき、あわてて離れようとする。

「きやつ」

起こしかけた体は、エシユタンドに再び手首を引かれたことでまた重なった。

まだ新しい雪だから、きつとそんなに痛くはないはず。

でも、せつかくの毛皮のマントが濡れてしまう　そんな空の心配を伝える前に、間近に迫った藍色の瞳が笑った。

「エ、エシユタンド……？」

抱きしめられて、堅い筋肉の感触を感じた空の頬は、自然と熱くなる。

胸の鼓動さえ伝わってくるほど近くでエシユタンドを感じながら、寒さも、ここが雪原であることさえも忘れてしまいそうになる。

「これで、おあいこだな」

囁かれて顔を上げると、エシユタンドがいたずらっぽく瞳で見ている。

言葉の意味を問う空の瞳に微笑んで、体を起こす。

「いくら寝ぼけたとはいえ　兄の婚約者を寝台の上で抱きしめるとは、不届きな弟だ」

しばらく経ってからやっと先日のエカルドのお見舞いを思い出して、赤面する空。

まさかそんなことを気にしていたなんて思わなかったのだ。

すっかり忘れていたことを持ち出したエシユタンドは、空の手をとり、今度はきちんと立った姿勢で背中に腕を回してくる。

濡れてしまってもちゃんと役目を果たすマントの内側に包まれて、腕の中におさまった。

「だから、目覚めたらきつく叱ってやらなくては。記憶が薄れないうちに、できるだけ早くな」

そう笑ったエシユタンドの瞳から、まだ眠ったままのエカルドを

心配していることがよく伝わってくる。

そうだね、と頷いて、エシュタンドの背に自分の両手を回した。態度には出さなくても、痛めているだろう彼の心を少しでも癒すために。

再び近づきかけた唇は、馬のいななきで止まる。

「おい、続きは自分の宮でやってくれないか？ そろそろ朝食の用意もできている頃だと思っただが」

振り返ると、すぐ近くでエルファン드가呆れたような顔で馬にまたがっているのが見えた。

後ろにつけたタミアナのほうは、微笑ましげに優しい顔をしていたのだが。

「あつ、えつ、えつと、それじゃあ行こう、エシュタンド！ あたしもお腹すいちゃった」

あわてふためき、自分の馬に向かいながら、またこけそうになる空。

苦笑したエシュタンドにつられたように、いつしかエルファンドたちまでも笑い出す。

雪原を後にする四人を、小さな雪うさぎたちだけが見ていた。

118・乗馬（後書き）

しばし平和な時を過ごすエシユタンドと空。

しかし頭上に立ち込める雪雲のように、不穏な流れは確実に近寄ってきていたことを二人は知らない・・・というところで次話へ。また来週までお楽しみに！

数日が過ぎ、このままミデイスにずっと滞在するのかと思ったタミアンナの帰国の朝。

お別れの挨拶のために、王女は空を訪ねてきた。

来た時とはまた違う豪華な衣装は、ミデイス国王からの親交の証

エルフランドとの仲を示す、公式な贈り物だった。

「やっぱり帰っちゃうの？ もう少しいたらいいのに」

「私もそうしたいのはやまやまなんですけれど、やはり一度は帰国して父上に面会しなければ。今後のこともちゃんと話してくるつもりですわ」

寂しそうな口調、でもその言葉の意味を考えると空の顔も明るくなる。

「そうだよね。第二殿下と婚約、なんて運びになるんだったら、やっぱりちゃんと準備がいるもんね」

あの酒びたりだった王子が本気で彼女を想っている。しかもそれがこんなに素敵な少女であることが心から嬉しくて、呟く。

頬を染めながらも、タミアンナは「まさか」と声を大きくした。

「王位継承者であるエシユタンド殿下とお姉様の婚約式を差し置いて、私たちが先にだなんて　とんでもございません！ 私たちはまだまだお付き合いからお互いを知る、という段階ですもの」

まんざらでもない顔をしつつ、しっかりと礼儀を守るところはまさに一国の王女であるわけなのだが、その内容に喉をつまらせる空。飲んでいた香草茶のカップを置いて、げぼげほと咳き込んでいたら、タミアンナがあわてて背中をさすってくれた。

「どうなさったんです？ 私、何かおかしなことを申し上げたかしら」

きょとんとしつつ、「で？ 正式な日程はいつですか？」と追い討ちをかける緑の瞳に、空は口元を拭きながら苦笑いを浮かべた。



「え、えつとねえ……その……」

「やはり花の季節を待つてからでしょうか？ それとももう少し早くに？ ああ、楽しみですわ。私も絶対に出席させていただきますからね、お姉様！」

にこにこ心からの笑顔で言われてしまったのは、頷くほかない。

実はそれが雪祭りが終わってからの、空の物思いの最大要因であることなど、彼女は知る由もないのだから。

「あなたが出席してくれるとなると、空もとても心強いことだろう。まだまだミディアスの文化どころか、王宮での振舞いにも不慣れなものだね」

いつの間に入ってきたのか、そう割り込んできて微笑んだのはエシユタンド。

その言葉で、空の戸惑いを都合よく解釈してくれたらしいタミアンナが、しっかりと首を縦に振る。

「そういうことでしたら、私にお任せくださいませ。父上と話が済み次第、できる限り早くミディアスに戻ってくるつもりです。これからは僭越ながらこの私が、お姉様に色々のご指導させていただきますわ！」

燃える瞳で盛り上がるタミアンナ。

初対面の印象などこへやら 既に空の妹だと公言してやまない王女は、優しく両手を握ってくれる。

「とにかく、日程が決まったらすぐに使者を送ってくださいませね。約束ですわよ？」

何度も念を押して、ようやく退出するタミアンナを見送るべく、エシユタンドと連れ立って外へ出た。

先に待っていたエルファンズにエスコートされ、馬車に乗り込んでいく。

名残惜しげに最後まで握っていた手を離して、なにやら囁きあう二人。

遠めに見てもその仲が雪祭りの間よりも更に深まったのだという

ことが伝わってくる。

ああ、本当によかった。

こうなってみて、全てがうまく解決したことにほっとしていた空は、最前列で彼女を見送る王妃と目が合っすぎてくりとした。

平静を装っているものの、明らかに敵意のこもった眼差し。

やはり何もあきらめていないのだ。彼女は常に、いや以前よりも憎悪の炎を大きくしてエシュタンドの王位継承を阻止しようとしている。

背筋が寒くなった空が何も言わずとも、そばに立っていたエシュタンドはそっと手を握ってくれて。

彼ももちろん、王妃の意図に気づいていることがわかる。

その上でこうして静かな瞳を向け、微笑んでくれるエシュタンドの強さに改めて驚かされながら、空も笑みを浮かべた。

「お姉様、どうぞまたお会いする時までお健やかに！」

「……だから、立場上はそっちがお姉様だってば」  
何度もそう呼ばれてしまうと可愛い妹のようにまで思えてきて、空は苦笑と共に呟く。

小窓から顔を出し、手を振っていたその姿が見えなくなり、馬車が王宮の門をくぐってもまだ見送りながら、自然とエルファンドに目をやっていった。

黄色がかった金の短髪をかきあげ、広間へと戻っていく国王たちに何気ない顔でお辞儀をしている。

彼もまた宮へ戻るのかと思いきや、皆の姿が消えてもまだ、一人残って馬車が消えた方角を見つめていた。

表情には出していないくても、二人が数日間培った思いが見えるように、空までも胸を抑えた。

どんな出会いがきっかけで、どうやって恋に落ちたかはそれぞれでも、心に芽生えた想いはみな、同じなのだ。

自分の中で育ち続けているこの芽は、花を咲かせるのだろうか。積もった雪に隠れた地面を見下ろしながら、空はそっと背を向け

たのだった。

「約束通り、お前たちの婚約式を行うことを決定した」

国王が空とエシュタンドのみ呼び出してそう告げたのは、更に雪が深まり始めたある日のこと。

そばで顔を上げた藍色の瞳に驚きの色は浮かんでいない。

空もまた、予想はできていたのだが、ついに来たのだと緊張が背中走る。

「本来ならばすぐにでも執り行うべきものだが、やはりこの季節には来賓を呼ぶにも不便だからな。花の季節を迎えたらすぐに、盛大に式典を行う。よいな、エシュタンド」

有無を言わせぬ口調で、確かめるというよりも返事を求めた国王に、エシュタンドは表情を引き締めた。

「なんだ、まだ何か迷いでもあるのか？」

「いえ、式典自体にというわけではなく、ただ、不安材料がまだ複数残された状況に悩んでいるだけです」

依然として進んでいない、ミデイスの改革。森や人々の荒廃、貧困、領主の不正にいたるまで、口にはしなくてもわかったのだろう、王もわずかに表情を翳らせた。

「お前の言いたいことはわかる。だが、以前言ったようにこういう時であればこそ、しっかりと式典を行うべきなのだ。ミデイス王国を率いていく次期王位継承者の存在を国中の民に、そして近隣諸国にまで広め、国の更なる繁栄を約束しておかねばならん」

堂々と告げる声に、ただ黙って頷くエシュタンド。

これ以上、婚約式を引き伸ばすことなどできない。いや、引き伸ばしてはいけない。

空にもひしひしと伝わってきた王の意志は、ゆるぎないものだった。

ついに自分の中でも結論をはっきりと出さなければいけない時が来たのだと、唇を噛んだ。

「逃げたケイマの捜索も引き続き王宮軍に命じてある。お前たちはこれ以上何も心配せず、自分たちのことだけ考えなさい」

最後に言い渡された言葉を反芻していた空の肩を、エシユタンドがそつと抱く。

藍色の眼差しは深く、穏やかで　彼も心を決めているのだとわかった。

「ソラ」

静かに名を呼ばれ、顔を上げる。

誰もいない廊下は冷たく、張りつめるような冬の空気に満ちている。

窓枠に積もった雪が、重さに耐えかねて少し崩れる音が聞こえた。「腕輪が見つかったら、想緑珠をはめ込んでみようと思う。我々二人がそれを身につけた時、何が起こるのか　魔を滅し、ミディアスを元の平和な世界に戻すことができるのか試してみるために」

こここのところ時折考え込むような仕草を見せていたエシユタンドの決意。

それがこれほどに大きな決断だったとは知らなくて、空は目を見開く。

何も言えない空に薄く微笑んで、エシユタンドは続けた。

「それでももし、世界が変わらなければその時は……私はもう、お前をこれ以上引き止めるつもりはない」

「エシユ、タンド……」

驚愕が空の言葉を奪う。喉は渴ききつたように、動きを鈍くした。「暁の娘として、お前は十分に役目を果たした。だから、その時は婚約式のことなどは気にせず、心のままに選択をしてくれ」

お前が帰れる道が開くか、というのが最大の懸念だが　と呟く

声は硬く、感情を匂わせない。

以前にも言ってくれたのと同じ言葉。

あくまでも自分の意思を尊重してくれる優しさ。

けれどその内に秘められた彼の葛藤がどれほどのものだったのか考えるのも辛くて、空は俯いていた。

「父上や、他の者には話せないがな」

苦笑して、空の頭に手を置く。

腕輪の紛失や、ベニ工隊長の行方でさえ極秘裏に調べるだけに留めているエシユタンド。

できる限りの問題を自分一人だけで背負って、それでも空を守るうとする彼の心に、泣きたくなった。

「帰る方法は、もう一度聖殿の巫女長たちにも調べてくれるよう頼んである。お前は何も心配しなくていい」

とにかく一刻も早く腕輪を見つけること、まずはそれが先決だそんな現実的な内容を口にしながら、笑顔まで見せてくれる。

切なさにかみ上げてくる涙を堪えて、空も笑った。

笑うことしか、できなかつた。

\*

エマナの顔を見に行くから、と侍女たちの部屋へ向かった空とは反対の方角へ歩きながら、エシユタンドは氷のような表情をゆがませる。

早足だった歩みもいつしか止まり、気づけば宮の外で、白い雪原を前に立ち尽くしていた。

「ふ、はは……」

乾いた笑い声がもれる。

自虐的に響いたそれは、白い息と共に雪の中に溶けていく。

ついに口にした、決断。精一杯の、決意。

自分の中で膨れ上がる本音を押しさえつけた、最後の理性とも言えるべきもの。

帰ってほしいわけなどない。

決して、彼女に知られたくはない、身勝手な希望。

彼女なしの人生など、考えたくもない。

考えられるわけなんてないのだ。

だからいわば、あれが最後の手段だった。

もともと、彼女がこの世界にやってきた理由を持ち出して、自分を無理やり納得させた。

考えられる中では最良の判断だったはずだ。

既に、自信など微塵もない。

国を救うこと、この背に民の未来を背負うこと、それこそが自分が目指してきた未来であるはずなのに。

それが今ではどうだ。

彼女なしで成し得るのだろうか　そんな弱音まで潜む心に寒気がする。

もう、悩むのにも疲れた。

望んではいけないものに手を伸ばすのも。

だからこそ、優しさを演じて断ち切ることにしたのだ。

どろどろとした、この欲望を　。

握り締めた片手が、わずかに震える。

自分の意図したものではない動きに、エシユタンドは眉を寄せた。

「また、か……」

数日前から、こうして手が震えたり、頭が痛むようになっていた。

決まって自分の心の醜さと戦っている時に起こる、些細な変化。そして同時にわきあがるうとするのは、魔の力。

すぐに抑え付け、意思の力で平常心を取り戻すようにはするものの、日に日に身の内でざわめく不気味な感覚は大きくなっていった。手の震えを止め、表情を引き締めた彼のもとに、駆け寄ってくる兵が見えた。

今まで顔に浮かんでいた苦悩の表情をかき消して、エシユタンドはマントの裾についた雪をはらった。

村々に出している隊からの報告を聞きながら、相変わらず遅々として進まない改革に苛立つ心。

最初は順調に思えた聖殿の解放も今では大した意味を持たず、もともと積極的な布教などしない性質の巫女たちはそんな民をただ見守るばかり。

厳しく取り締まろうとした結果、徐々に領主たちからも不平不満の声が上がっていると言う。

民を救いたい、いい国にしたい、それだけではだめなのか。

理想とはほど遠い現実に足踏みするしかない状態で、エシユタンドも頭を抱えていた。

それだけならいざしらず、魔の正体を探り、彼らから国を守ろうにも何の手も打つことができない。

あせるばかりで、有効な手段一つ講じることができないこんな自分が、次期王位継承者だと胸を張って言えるのだろうか。

その中で耳にした一つの情報に、藍色の瞳が見開かれる。兵の言葉を聞きながら、きつく両の手を握り締めていた。

「わかった。下がっていい」

短く指示を出し、苦勞を労うように兵の肩を叩くと、そのまま自分の宮とは反対方向へ歩き出す。

先ほど退室したばかりの場所 謁見の間へ向かうために。

無意識に首元の石に触れた指先をぎゅっと握って、エシユタンドは顔を上げた。





119 決定（後書き）

和やかだった空気も一変する、大きな「決定」　空とエシユタン  
ドそれぞれの心に生じていくわずかなズレは、今後二人にどんな未  
来をもたらしていくのか。徐々にクライマックスへ向かう物語にこ  
れからもご注目ください！

翌朝の謁見で告げられたエシユタンドの決意に、皆が驚きの声を上げた。

前日のうちに相談という名の報告を受けていた王だけは唯一、渋い顔をして聞いていたのだが。

「雪で孤立した村の救援に……?」

小さな声で問い返す空に目をやると、思ったとおりに驚愕と不安の色を湛えた黒い瞳が揺れている。

「何もそんなに心配そつな顔をすることじゃない。王宮からそう遠くはない村だから、すぐに戻るさ」

用意していた返答を笑顔で与えても、その表情が明るくなることはなかった。

俯いてしまう空から視線を逸らして、もう一度王を見上げる。

「だから私もわざわざお前が出向くことはないと言ったのだ。兵たちには任せておけば」

「しかし現に、先般送っていた物資の補給隊でさえ立ち往生して王宮へ舞い戻ったと聞きました。ただでさえ山側に位置するあの場所は、偵察の結果慢性的な食糧不足に喘いでいるという。それなのに一番有効な救援手段をとらなければ、村人たちを見殺しにするも同然。その点、私の風の力を利用すれば、一気に雪を散らすことができるかもしれない。考えてみれば、どうすべきか自ずと答えは浮かんでくる。そうではありませんか?」

昨夜遅くまで議論した内容を再び持ち出すと、ただ眉を寄せて黙り込む。

国王としてだけではなく、父親として自分の身を案じてくれていることはもちろんわかっていたが、既に決めた心は動かなかった。

「今年は稀に見る降雪量で、先日起きたものと同じ規模の土砂崩れがまた他で起きないとも限りません。今のうちに危険箇所を見回る

意味も含め、私本人が向かうことに意味があると」

結論を出すべく口にしたかけたエシユタンドの言葉を拾ったのは、玉座の王ではなく、その隣に静かに腰掛けていた王妃だった。

いつになく穏やかな瞳で、頷いてみせたのだ。

「それは 次期王位継承者として、ということね」

こここのところ謁見さえ欠席することも多かった王妃。依然として目覚めぬエカルドを心配するあまり、彼女さえも体調を崩したのだという噂がひそやかに囁かれてはいたが、今朝の顔色はよく、果たしてその噂が真実なのかどうかは誰にもわからなかった。

「ええ……そうです」

まっすぐに視線を交わして、凜とした声で答えるエシユタンド。

隣で見守る瞳がどんな色をしているか、見なくてもわかる気がした。

「このミデイスを背負い、民を率いていく次期王位継承者としての決断です。父上、どうぞご許可を……！」

深々と頭を下げる。

玉座で苦悩のため息を吐き出す国王の代わりのつもりなのか、王妃が手袋をした両手で拍手を始めたのだ。

「わかりました。あなたの決意がそれほどまでならば、見せてもらいましょう。民を救う手腕がどれほどのものなのかを……そして、見事使命を果たして帰還した暁には、私はもう王位継承について何も口を出さないと誓います。よろしいでしょうか？ 国王陛下」

水色の瞳を細め、堂々と立ち上がってみせる。王妃の声に、同席していたエーデレードやエルフランドさえも驚愕の目を向けていた。これが最後の勝負なのだと言外に告げる 明らかな宣戦布告に、エシユタンドは口角を上げた。

「もちろんです、母上。帰還の謁見には、ぜひともお顔を見せていただけますように」

受けて立つと微笑で示した彼の決意に、反対の声を上げる者ももう誰もいなかった。

既に控えさせていた私兵隊の全員に目配せをし、出発の命を出す。クガルの指示で、皆が広間から出て行った。

「も、もう出発するの？　こんなに早くから……？」  
ついに沈黙を破った空に訊ねられ、振り向く。

今にも涙がこぼれ落ちそうなほど潤んだ瞳を正視できずに、わずかに視線を逸らしたまま微笑んだ。

「ああ。ただでさえ今は日が落ちるのが早い。できる限り早くに発たなければ何の調査も救援もできないからな」

何も言わずにまた俯いた空の頭に、そっと片手をのせる。

そうすることが、偽の仮面で別れを言うことへの、せめてもの償いだった。

「心配するな。すぐに雪をどかして、帰ってくる。私にそのぐらいのことができないと思っているのか？」

いつものように余裕をほめかした笑みを浮かべられたことで、自分でもほっとする。

わずかに表情を明るくして、空も頷いた。

「そう、だよな　エシユタンドの力なら、きっと大丈夫だね。ごめんね、なんだか不安になっちゃって……」

口ではそう返しても、決して信じられていないことは青いままの顔色でわかる。

けれど、あえて気づかないふりでエシユタンドは笑った。

「少しの間離れるだけだ。お前が驚くぐらい早く帰ってくるから、浮気しないで待ってるんだぞ？」

冗談めかして片目を閉じ、頭を撫でてやる。

自分でも感心するぐらい自然にできた動作で、ようやく空も笑い返した。

「わかつてはいるだろうが、十分気をつけなさい。もしもの時には絶対に一人で無理をするな。私がいる　よいな、エシユタンド」

深い意味を込めた言葉で父王に見送られ、藍色の瞳は真摯な光を宿す。

自分が下した決断が正しいものであったかどうかはわからない。けれど、民を救いたいと願う気持ちは本物であったから エシユタンドは頷いた。

\*

馬上で揺れる金の髪、その背を包む白い毛皮のマントを目に焼き付けながら、空は唇を噛んでいた。

隊が王宮の門を出て、最後尾の兵さえ姿が見えなくなってもまだ、立ち去ることができない。

同じようにそばで見守るエマナの悲壮な瞳と目が合って、まるで力が抜けたようにしゃがみこんでしまった。

「姫君 大丈夫ですか？」

顔色を変え、すぐに手を貸してくれるエマナに抱きついた空の顔が、みるみるうちにゆがんでいく。

暖かい掌を握った途端、はりつめていたものがあふれ出してしまったのだ。

「あ、あたし……何も言えなかった。エシユタンドが危険な場所に  
出向くことがわかってるのに、何も もっ、もし彼が帰ってこ  
なかつたら もう会えなかつたら、あたしどうしたら……どうした  
らいいのかわかんないよ。ねえ、エマナ ！」

口に出してしまえば、もう止めることができなくて。

感情のままに泣きじゃくる空に瞳を見開き、驚いていたエマナが、いつしか優しく背中をさすってくれていた。

何も聞かず、黙ったまま抱きしめて、いつまでもそうしてくれる彼女の仕草で、ようやく空の嗚咽が止まっていく。

「もう、落ち着かれましたか……？」

部屋に戻り、暖かいお茶を注いでもらってなんとか頷く。

雪で濡れてしまった衣装を着替えて、体が温まっていくにつれ、少しずつ冷静さを取り戻していたのだ。

「姫君は……元の世界に帰るおつもりなのですね？」

静かな声で、突然問われた空の瞳が大きくなる。

お茶のカップさえも落としそうになって、あわてて両手を添えた。「申し訳ありません、驚かせてしまって　本当は何も言わないつもりだったのですけれど、姫君がここのごところずつとお悩みのご様子だったので」

そうではないかと思ったのだと、そつと打ち明けてくれるエマナ。亜麻色の瞳を見つめていた空は、またくしやりと顔をゆがめた。

「……どうしたらいいのか、本当にわからないの。正直に言つと、こつちに来てから、一日も家族や友人のことを思い出さなかった日はないんだ。懐かしい世界に帰りたい気持ちがないって言えば嘘になる。でも、帰ってしまったらもうエシュタンドには会えない。エマナや、クガルさんや、みんなにも　」

「姫君」と悲しげな顔で呼ぶエマナに頷いて、震える息を吐き出す。この優しい少女にも、自分を慕ってくれるルストやクガルにも、見守ってくれるエーデレードやエルファンドの皮肉げな瞳さえも、もう見られないと思うと胸がつぶれそうになるのだ。

心の中に刻み付けられた藍色の瞳を忘れることなんて、できるはずがない。

これほどに辛くても、自分の世界を思う気持ちは捨てられなくて　体も心も真つ二つに引き裂かれそうなほどに苦しかった。

「私も、姫君のことが大好きです。だからこそ……お引き止めする

ことはできません。だって、大好きな人の幸せを祈るなら、そうするのが本物の愛情ですもの」

「エマナ……」

自分の頬に涙がつつたっていることに気づいたらしく、エマナが急いで拭つて、いたずらっぽく笑顔を浮かべる。

「嫌だわ、友情の間違いでしたかしら。これではまるで私が、姫君に恋をしているみたいですよわね」

笑おうとする努力が失敗に終わったことは、亜麻色の大きな瞳いっばいにたまっている涙でわかった。

「や、やだなあ、もう。クガルさんに怒られちゃうよ……こんなこととして焼きもち妬かせたら、二人とも早く帰ってきてくれるかな」

涙声で笑つて、自分より小さなエマナに抱きつく。それと同時に今度こそ、二人とも泣き出した。

本来エシユタンドの私室であるはずの部屋は、今はまるで空とエマナのためだけに存在するように、ひっそりと二人を包んでいた。

「それでは、帰る方法はまだわからないんですのね？」

長椅子に並んで座ったエマナに泣きはらした亜麻色の瞳を向けられて、空は頷く。

ピバスで出会った精霊にも、自分が役目を果たした時、そう望めば扉が開かれると告げられたこと。

エシユタンドも聖殿の巫女長たちに再度調べてくれるようお願いしてくれたこと。

そんなことをぼつりぼつりと答えると、エマナが口元だけで笑つた。

「よかった。それなら、今すぐというわけではないですよね」

言つてすぐに無作法を詫びる彼女の言葉を、空が途中で遮つた。  
「いいんだ。あたしだつてそう思つてるぐらいだもん。それに……」  
まだ自分が帰るのだと実感できたわけではなかった。  
いつまでも未練がましく、どちらの道も選べないでいる自分の優  
柔不断さに情けなくなる。

そんな自分の態度こそがエシユタンドを苦しませ、更には両親を  
も泣かせているはずで　固く目を閉じて、頭を振つた。

とにかく考える前に、自分がしなくてはならないことをする。そ  
れこそが今、一番必要なことに思えた。

「ねえ、エマナ。前にこの部屋からベニ工隊長を見たつて聞いたけ  
ど　それ本当？」

唐突な質問に一瞬驚いた顔をしながらも、エマナが頷く。

その時のことを思い出しているのか、少し考えた後に立ち上がり、  
窓辺へ向かつた。

「ええ、ちょうどここからこうやって庭を見た時でした。木の間に  
光る銀色の武装が見えて、目をこらしたらベニ工隊長様が……でも  
お亡くなりになったということでしたから、どなたかと見間違つた  
のだと思います」

首を傾げつつ、説明する。ただ不可思議な話として答えてくれた  
エマナだったが、空はその窓辺から外を見つめながら続けた。

「ねえ、その時隊長はどんな様子だった……？　例えば誰かを捜し  
てるふうだったとか、怪我していたとか、それとも　」

「それが　見間違いだとは思えないくらいにはつきりと見えた気  
がしたんですけれど、お怪我はされていませんでしたわ。ただ、手  
に何かを持っているかのように背を少し丸めておられて……」

「それで、あそこからどつちの方角へ行つたの？」  
単なる確認ではなく、つてきた空の真剣なまなざしに戸惑いなが  
ら、エマナは窓の外を見やる。

そこから見えた記憶を反芻しているかのように黙つていた彼女が  
指差した方角に、空は眉をひそめる。



自分の仮定が 考えたくはない可能性がまた一歩、近くに迫ってきた気がしたのだ。

「エマナ、もう一つ聞きたいことがあるんだ」

「ごくりと喉を鳴らして、迷いを打ち消した空が訊ねる。

帰ってきた答えを聞いた瞬間立ち上がり、扉を押す。

「姫君、どちらへ ！？」

私もお供を、と付いてこよつとするエマナを制したのは、強く光る黒い瞳だった。

「ついてこないで！」

驚きに見開かれる亜麻色の瞳に申し訳なさそうに俯いて、それでも有無を言わせぬ命を出す。

彼女に付いてもらってから、初めての命令 ごめんね、と同時に呟きながら、空は顔を上げた。

「あたし一人で行かないといけない場所があるの」

伝えた空を止めることは、エマナにはできなかった。

120・回転（後書き）

ついに空を想う心と葛藤への決着を付けるべく、彼女から離れ、危険の中へ身を置くエシユタンド。彼の決意に王妃も最後の戦いを挑む。そしてそれを見送った空が導かれていく先は 下り坂を転がるように、物語は急展開へ。最後までどうぞお見逃しなく！

エマナに確認した通り、たどり着いた部屋の前には兵一人が見張りをしているだけだった。

息を切らし、階段を上がったってきた空を見とめた兵は、あわてて腰掛けていた椅子から立ち上がる。

「ひ、姫君　！　お一人で一体どうなさったのです？　お付きの侍女は　？」

困惑気味に、それでも姿勢を正して訊ねられ、空は用意していた包みを掲げて見せた。

「あの、これ以前殿下に借りていた本なの。急に思い出してお返ししておこうと思って……殿下のお見舞いも兼ねて来たんだけど、すぐに済むから侍女は下で待たせてあるんだ」

「そつでございますか。それならどうぞ中へ」  
怪しまずに通してくれた兵に少しだけ申し訳なく思いながらも、開けられた扉から中へ入る。

当然のように付いてきた兵に、思い出したようなふうを装って、声を上げた。

「いけない　リゴトに呼ばれていたんだつた。待たせていたら悪いから、あなたが行ってちょっと遅れるって伝えてくれない？」  
「私が、でございますか？」

驚いた顔で一瞬辺りを見回していた兵に、「早く早く！」と急かす。

「離宮で待ち合わせしてるの。侍女に頼むより、馬に乗れる兵に頼んだほうが早いでしょう？」

「しかし、持ち場を離れるわけには　」  
まだ渋る真面目な態度に心の中で感心しながらも、笑顔を浮かべる。

「大丈夫、何か用があれば他の兵を呼ぶから。本を返すだけだもの。

それに、あなたはとても有能そうだし、あたしの代わりにうまくリゴトに言い訳してよ。ね？」

お願い、と両手を握って頼んだら、ついに了承するしかなかったのだから。

可哀相な兵は誰もいない離宮へと馬を飛ばすべく、階下へ駆け下りていった。

「時間に遅れたら代わりにあなたに処分を下す、とか言うかもしれないけど、あたしがそうさせないから、心配しないで！」とその背に脅しをかけることも忘れない。

他の兵にここの警護任務を引き継ぐ時間を与えるわけにはいかなからだった。

三十分、それぐらいあればきつと部屋の中を調べることくらいはできるはず。

すぐに表情を引き締めた空は、優美な細工が施された扉を閉めた。一日何度か決まった時刻にやってくる以外は、最近では侍女すらも来ないという、教えてくれたエマナにも、何も知らない兵にも騙したような罪悪感がこみ上げるが、だからこそ確かめなくてはいけないと思えた。

「……エカルド王子」

寝台の上に横たわる彼は、まるで美しい彫刻のように見える。

ゆるやかに波打つ金の髪、白くなめらかな頬、閉じられたままの瞳。

全ては何日も目覚めていないことさえ嘘に思えるほど、綺麗な寝顔だった。

「ごめんね、王子」

規則正しい寝息を立てる少年にそつと断ってから、歩みを進める。こここのところの憂鬱をごまかすべく、ただばらばらと眺めるだけだった数冊の本、もちろんエカルドのものではない本たちを本棚の空いた場所に置いて、小さく息を吐いた。

エマナの目撃したベニエは、宮の裏に姿を消したという。そちら

にある王子の宮はここだけ。

そして彼が仕えていたのは目の前で眠るエカルドであることから、考えられる可能性は一つしかなかった。

ベニエが腕輪を持ち出し、この宮に隠したのではないかということ。

前にも考えたものの、その時は打ち消した。だっていくら考えてもそれが現実だとは思えなかった。いや、思いたくなかったというべきか。

それがベニエ本人の判断だったのか、それとも命じられてのことだったのかはわからない。

でも命じた人物はエカルドでしかあり得ない　腕輪の存在と隠し場所を知るのは、彼しかないのだから。

今まで避けてきた問題をこのままにしておくわけにいかなくなっただのは、ミデイスの国に少しでも自分ができることを考えたから、というだけではない。

ただ、自分で確かめたかったのかもしれない。いくら可能性がそうであっても、エカルドの部屋に腕輪などないことを証明したかったから。

ちらりと見た先で眠る少年の優しい笑顔を思い出しながら、空は部屋を見回した。

ごくりと喉を鳴らして、衣装棚や彫刻の影、絵画の裏や寝台の下など、考えられる場所を探していく。

だが隠し場所になりそうなところなど限られていて、空はため息をついた。床に敷かれた動物の毛皮までも持ち上げるが、当然何もなかった。

掃除をする侍女たちに見つかりそうな場所はだめだ。彼だけが知っていて、他の人には気づかれないような場所でなければ。

そう思った途端、ゆっくりと振り返った黒い瞳に映るもの。

それは先ほど本を置いた大きな本棚で、思いついてみればそうとしか考えられない隠し場所だった。

壁一面を占めるような、立派な棚　その中に数十冊はひしめいている本の数々。

これを一冊ずつ見るとなると、結構な時間がかかっちゃうよね。

兵が戻る前に探さなくてはならないのに、と背後の扉を気にしつつも、空は一人頷いた。

「やるしかない、よね！」

腕まくりをして、端から本を手にとっていく。ぱらぱらと捲り、また元に戻す。

その作業を延々と繰り返しながら、ただ時間が刻々と過ぎていく。

あたし、何をやってるんだらう。

知らずため息がもれ、完全に家探し状態の自分の行動を責めてしまふ。

今頃雪で閉ざされた村へ急いでいるのだらうエシユタンドを思うと、余計に情けなくなった。

でも確かめなくては前に進めない。エカルドの部屋にないとなれば、安心して他の場所を探せるのだから。

決意を新たにまた違う本を手にとった、その時だった。

ふと目に入ったのは、棚の一番下にある赤い背表紙。分厚いそこに書かれている文字は読めないけれど、確かに見覚えがあった。

そうだ、あれは前にエカルド王子が貸してくれた本。

エシユタンドにからかわれて、売り言葉に買い言葉で借りただけだったが、収穫祭の前に読んで意外と勉強になったものだ。

ミデイスの伝統行事や季節の風習などが書かれているのだと微笑んでくれたエカルドを思い出すと、なぜか胸がちくと痛んだ。

「そうそう、ラキスのこともこの本で知ったんだっけ……」

わざと明るい声を出したのは、落ち込みそうな自分を奮い立たせるため。そして、この嫌な作業を早く終わらせるためでもあった。

腕輪を探す、という当初の目的を一瞬忘れて、赤い表紙に手を伸ばす。

そつと古びた文字のタイトルに指で触れながら、首を傾げた。

あれ？ そういえば、この本、王子に返したっけ？

あの後、何度もエカルドとは顔を合わせたというのに、肝心の本を返したかどうか、収穫祭のどさくさに紛れて忘れてしまった。

エシユタンドが返してくれたのかもしれない、という妥当な可能性を頭に浮かべながら、本を手に取った。

瞬間、空の顔色が微妙に変わる。以前持った時とは、どこか重さが違うような気がしたのだ。

あせる思いで本を開き、ページをいくらか捲ったところで、手を止めた。いや、止まってしまった、というべきだろう。

なぜなら、そこに当然あるべき本の内容がなく、くりぬかれた部分にあったのは、きらりと光る、重い輝き。

「これ　！」

それ以上声が出ない。

震える手がすべって、ごとりと床に落ちたものはそのまま硬い金属音を立てながら転がっていく。

やっぱり……！

本さえも取り落として、両手を口にあて動揺を抑えようとした、その瞬間だった。

「……っ！」

突然背後から羽交い絞めにされて、声を上げられないよう口を塞がれる。

驚愕に身動きもできず、ただ視線だけを巡らせて　見つけた水

色の瞳に、息を呑んだ。

「やっと　見つけてくれたんですね、姫君」

午後の日差しにきらめく金の髪、なめらかで線の細い手、そして華やかな微笑。

以前なら空の顔をほころばせたはずのそれは、今この瞬間にはただ、衝撃しかもたらさないもの。

「エカルド、王子……」

たった今まで眠っていると信じて疑わなかった相手にまっすぐに見つめられ、名を呼んだまま言葉を失う。

目覚めていなかったとは思えないくらい、鮮やかな笑顔でエカルドは手の力をゆるめた。

「お、起きてたの……？　もしかして、ずっと前から？」

震える唇から、やっと紡いだ空の疑問。

本当に聞かなければいけないことよりも前に、なぜか安堵がこぼれ出た。

「ええ。あの時にもね」

肩をすくめ、くすりと笑ったエカルドに仄めかされた記憶が、空の頬を染める。

手首を引かれ、寝台の上で抱きしめられた時のことを思い出し、つい睨むような目つきになった。

「ど、どうして　？　みんな心配してたのに」

問いかける空の声には答えず、エカルドは床に落ちたままだった腕輪を拾う。

金と銀の異なる輝きを放つ二対をゆっくりと打ち合わせながら、水色の瞳を細めた。

「こんな時まで……あなたは自分の心配はしないんですね、姫君」  
言葉の意図を測りかねて眉を寄せると、エカルドが部屋のカーテンを引いた。

かつかつと冷たい靴音を立てて、そのまま扉の鍵も閉める。

「王子？　何を　」

エシユタンドより低い背、華奢な体つき、ともすれば少女にさえ見紛うほどに綺麗な横顔。

全てを呆然と見つめていた空に、エカルドが振り返った。

「もう気づいたんでしょう？　なら問いただせばいいものを……そ



う、僕がベニエに命じて、腕輪を盗ませた。ついでに言えば、母上にさえも内緒でね」

ただでさえ日の低い雪の季節、カーテンを閉めた部屋の中は薄暗く、窓を背にして立つエカルドの表情は読めない。

穏やか過ぎるほどの声で告げられた内容は予想がついたものだったはずなのに、改めて本人の口から聞いた衝撃は大きかった。

一瞬浮かんだ王妃とのつながりも否定され、頭がくらくらとする。

足元までふらついた空の体を支えたのは、優しく微笑むエカルドだった。

「大丈夫ですか？ 姫君」

そう囁く口調も、眼差しも以前と少しも変わらぬというのに、身にまとう空気がなぜか全く色を変えていて。

「ど、どうして……そんなこと」

かすれた声が乾いた喉からこぼれ出た。

支えた空の手を握り、自らの唇に持つていくエカルドの手つきに、びくりとする。

構わずそつと口付けた手の平を頬に当てる仕草に、思わず身をすくめた。

が、瞬間瞳に浮かべていた優しげな光をかき消したエカルドが、その手を離してくれなかった。

「どうして？ そんなこと決まっているじゃありませんか」

唇の端に笑みを残して呟くと、握っていた手を開き、代わりのように空の体を思いきり押したのだ。

どさり、と倒れた先は寝台で 信じられないまま瞳を見開く。

わずかに広がった黒い髪をそつと撫でて、エカルドは笑顔を消した。

「全て、壊したかったからですよ……！」

吐き出すように言い捨てて、起き上がるうとする空をもつ一度押し倒す。

その動作は別人のように荒々しく、握られた両手首は声を上げる

ほど痛かった。

「いつ……お、王子……やめ……っ」

身をよじり、苦痛の声をもらす空を見下ろす水色の瞳は、氷のよう  
に冷ややかなものだった。

いつも浮かべていた社交的な微笑も、親切な態度も、弟王子とし  
ての愛らしさも何もかもを切り捨てたように、エカルドは笑った。

「ご安心ください、姫君。もう兄上もここにはいない。邪魔な兵も  
あなたが追いついてくれましたからね。こうしてゆっくりと楽しむ  
ことができる」

「な、何」

訊ねてしまう自分がおろかなことはわかっていた。

けれど、寝台の上で動けない状態にされていてもまだ、空にはエ  
カルドがやろうとしていることが信じられなかった。

「何を、だなんて無粋なことを聞きますね。もちろん、あなたを兄  
上から奪う　ただそれだけのことですよ」

ぎり、と手首に力を込められて声がもれる。鮮やかな微笑をその  
ままたに、エカルドの顔がおりてくる。

金の髪が顔にかかり、隙間から見えた本気の瞳に背筋が凍えた。

「や、やめて……王子、い……いやあああっ！」

叫んだ空の声を聞く者は、誰一人としていなかったのだ。

121・腕輪（後書き）

信じていたエカルドが皆の目を欺き、腕輪を隠していたことがついに明らかになった。彼の目的とは、そして危機に陥った空はどうなってしまうのか。次回もお見逃しなく！

「どうかされましたか？ 殿下」

白い息を吐きながら背後を振り返ったエシユタンドに、クガルが訊ねた。

目的の村まであともう少しというところで馬を降りざるを得なかった一行が、深い雪道を徒歩で進んでいた時のことだった。

「いや、何でもない。しかし報告ではこの辺りはまだ雪が少ないという話だったはずだが。これでは馬を置いていかなくてはまともに進むこともできないな」

空の声が聞こえた気がしたのだ、などという真実はさすがに言う気にはなれず、先ほどまで考えていたことを口にする。

頷くことで同意を示したクガルが、懐から地図を出した。

「雪による土砂崩れが起きた場所はここからまだ少し山側に入った地域だとのことでしたが、あれから更に降り積もったのでしょうか」  
今現在も続いている降雪のためであるとは思いつつも、それにし  
ては深すぎる雪に眉を寄せる。

エシユタンドと顔を合わせたクガルは、控えていた兵たちと馬をつなぐべく、そばの森に入ってしまった。

多少足元は悪くても、森を進めば裏側から問題の村に入れるのではないだろうか。

浮かんだ考えは一見最善のものに思えたが、辺りに立ち込めた雪雲のせいでまだ昼間だというのに視界も悪く、木々をかきわけなければいけない道のりも疲労を増すだろうと迷う。

かといって、この雪道をまともに進んで、地道に村を目指すというのも時間ばかりがかかることはわかっていた。

「殿下、やはりここは隊を分けるべきでは」

ちようと自身も考えていたのと同じ案を囁いたクガルに、藍色の瞳が厳しくなる。

一番現実的で妥当な結論　それなのに渋ってしまうのは、やはりあの時自らが下した決断を思い出したから。

「ご懸念は最もですが、迷っていても前には進めません。この雪雲の多さからしても、このままではまたいつ次の土砂崩れが起きるか

我々にできることは、その時最善だと思っ道を選ぶことかと」  
真剣な栗色の瞳に見つめられ、エシユタンドは顔を上げた。

テローザの森で隊を分けたあの時、魔に襲われてしまったもう半分の兵たち。

もしも自分が違う判断を下していたら、彼らの命は奪われずに済んだかもしれない　そんな意味のない仮定と後悔に何度も襲われていたエシユタンドを知っているクガルが言うからこそ、迷いを捨てられた。

「……そうだな。いくら悔やもうが、もう時は戻せない。私がしなくてはならないことは、今助けを待っている民を救うことだということに」

自嘲を込めた微笑をすぐにおさめて、エシユタンドは無駄に重いだけのマントを脱ぎ捨てる。

白い愛馬を近くの木にくくりつけ、雪を踏みしめた。

「よし、ここから隊を二つに分ける！　クガル、お前は私と共に森を抜けて村へ入る道を。そしてルストは攻撃術に長けた者たちとこのまま街道沿いを進んでくれ。もしどうしても困難だと判断した場合には無理はせず、王宮へ戻って応援を要請するんだ。いいな」

凜とした声で命じたエシユタンドに、隊員皆が叩頭する。

即座に行動を開始した兵たちを確認した藍色の瞳が、一瞬だけ今は見えぬ王宮のほうへ向けられる。

できるだけ早く戻るから……待っていてくれ、ソラ。

短い間だけではないかもしれない別離に、身を切られるような思いがしたのも束の間。

やはり離れてしまえば心は自然に彼女を求め、このまま苦痛に苛まれようとも、どんなことをしてもこの世界に留めておきたいと願

つてしまう自分がいた。

頭を振り、ただ雪をかき分けて前へ進むことだけを考える。

もしも別れの時が来るとしても　彼女と過ごす時間を少しでも  
持てたら。

そんな希望さえも今はほんの一筋の光にさえ見えた。

迫り来る最後の瞬間まで、自分は彼女を愛そう。

そう、今自分ができただけをする。それが最善の策なの  
だから　！

全ての迷いをもたらしていたのは、ただ自分の弱さであることが、  
なぜかこの白い世界に佇んでいたらよくわかる。

ようやく晴れた心にしつかりと向き合えたその瞬間、鬱蒼と立ち  
込めていた木々が開けた。

目前に広がるのは雪。それは壁と呼べるような高さに積もっては  
いたが、十分戦う術のあるものだった。

「殿下、この向こうは例の村です！」  
希望に明るくなったクガルの瞳、そして頷き合う隊員たちに勇気  
付けられ、エシユタンドも笑みを浮かべる。

「皆、下がっている　雪を吹き飛ばす」  
身の内に感じる力で風を起こす。腰の高さまで積もっていた白い  
壁は、瞬時にパアンと弾けた。

吹雪となった雪の粉を避けて、目を凝らしたクガルが言った。

「見えました……村です！　殿下、これなら救援できます！」  
喜びをそのまま表に出した言葉で、全員が雪を踏み越えて村へと  
入っていく。

質素な家々が間近に見えて、エシユタンドもほっと息を吐き出し  
た。

続いて村人の救出を命じかけ、どこかに感じる違和感で言葉を止  
める。

小さな家、少ないとはいえ馬小屋には馬の姿もちらほらと見える。  
痩せてはいるが、健康な馬が嘶いて　それからやっと違和感の

正体に気づいた。

「村人が……人の姿がどこにもありません！」  
偵察に行った兵が一番に声を上げる。

まさかと思いい家の中までも見て回るが、人どころか、生活の痕跡  
さえも見当たらない。

衣服や小物どころか、生活道具の一切もなく、家々もよく見ると  
古びて、今にも倒れそうなものばかり。

「廃、村……？」  
心に浮かんだ疑問が声になる。

そう、まさにそうとしか思えない荒んだ村がぼつりと雪の中に存  
在していた。

では、どうして馬が……？

エシユタンドの声にならない疑問に答えをくれたのは、当の馬自  
身だった。

鼻息を吐き、いなないたそれは 単体から複数となって、一斉  
にエシユタンドたち一行に襲い掛かってきたのだ。

その瞳に閃いた赤い光に目を見開いて、攻撃を避ける。

飛びのいた兵たちと言葉を交わす前に、馬が舞い戻ってくる。

雪を蹴散らし、荒い息を吐きながら、殺意さえも感じさせる突進  
を繰り返した。

「魔だ……魔に操られているんだ！」

注意を促すエシユタンドの声が、彼ら以外誰もいない村に響く。

しかし、それを合図としたかのように、背後の森から続々と現れ  
たのは狼。

鈍く光る赤い目に、結果を待たずともわかる。

すぐさま張られたクガルの結界で、狼たちの攻撃を避けた。

「殿下 これは……！」

言葉が続けることもできず、唇を噛みしめて皆を守るクガル。

それぞれに攻撃をしかける兵たちも、数を増やすばかりの動物た  
ちに手を焼いている。

舌打ちして、風を呼び寄せようとしたエシユタンドは、空にざわめき出した物体に思わず息を呑んだ。

雪雲の中に続々と姿を現し、羽ばたきを繰り返すのは化け鳥。しかもその一羽一羽は以前と比べ物にならないほど大きく、また顔も不気味なほど人間に擬態したもののへと変化していたのだ。

魔におびき寄せられたということか……？　しかし、それならこの村は……。

誰もいない廃村、雪による孤立の報告、正反対のこの状況を突きつけられてようやく、エシユタンドが顔色を変える。

そんな……だがそう考えれば全ての辻褄が合う。そうだ、村の孤立を報告したのは誰だった？　救出が必要だと訴えたのは。思い浮かんだ兵の顔、そしてその所属を頭の中でたどった途端、藍色の瞳が凍りついた。

「エカ、ルド」  
「こぼれ出た名前にクガルが振り向く。

次の瞬間には襲い来る馬と狼の攻撃に、また前を向かざるを得なかったのだが。

はめられた。  
ついに浮かび上がった図式は、あまりにも残酷なものだった。声にならない呟きは吹雪に掻き消え、意味を結ぶまでにはいたらない。

集まりかけていた風が、手から零れ落ちていく。  
ぎゃあぎゃああと鳴く化け鳥を呆然と見上げたその時、エシユタンドはまだ最悪と呼べる状況はこれからだと知った。

「久しぶりだね、藍色の王子さん」  
おどけた調子で片手を上げ、空中から笑みをよこした相手が、紺色の大きな翼をはためかせる。

降りしきる雪を気持ちよさそうに受け止めながら、にんまりと笑ったのは。

「……ムルグ！」



栗色の瞳を見開いて、クガルが叫ぶ。

テローザの森で、死んだとばかり思っていた魔の少年。

それが傷一つない姿でこちらに向かつて手を振っているのだ。

隊員たちの衝撃は計り知れないものだろうと眉を寄せる。

そのまま下ろした目線に飛び込んだ同じ紺色　怒り狂う馬よりも巨大な体をしたそれは、確かにあの少年と双体だと示されたはずの、魔の獣だった。

「奴ら、両方生きてやがったのか……！」

叫んだ兵の声が耳に届く。まるで賛辞であるかのように微笑んで、少年が両手を広げた。

「さあ、あの時できなかった　遊びの続きをやるうじやないか！」  
片手を勢いよく振り下ろした途端、化け鳥たちが一斉に降下を始めた。

\*

進めば進むほど深まる雪に足をとられ、動けない。

どうにもならない状況に判断を迫られた副隊長ルストは、王宮へ戻るべきか迷っていた。

「ルスト副隊長　吹雪です！」

段々激しくなっていた風が雪を伴い、まさに荒れ狂う吹雪に変化していく。

これでは帰途に着くのも不可能だと舌打ちし、隊員たちに退避を

命じた、その時のことだった。

白い視界の中、前方に閃いた銀色。

それがまさに自分たちと同じ武装であることに気づいたのは、こちらへ歩いてきた人物の顔が間近で確認できた瞬間だった。

「あなたは……！」

兵の一人が叫び、皆が息を呑む。

顔にも降りつける雪を避け、目を凝らしたルストの顔が歓喜に輝いた。

「ベニエ、隊長殿　！」

よく見れば動物の毛皮らしきものを肩からはおい、髭まで伸びていた彼の姿は、武装がなければこの辺りの村人にさえ見間違うほど。けれど冷たい吹雪にも動揺を見せぬ栗色の眼光は、馴染み深い第四王子付き私兵隊長の風格をそのまま保っていた。

「生きておられたのですね……！　あの時化け鳥に襲われて、お亡くなりになられたのだとばかり　」

あつという間に兵たちに取り囲まれ、まさかの生還を喜ばれながら、ベニエは深く頷く。

その手を握り締めたルストが、腕に走る傷跡に気づいた。それは見るからに深いもので、くつきりと戦闘の証拠を物語っている。

「鳥に引き裂かれて出血が止まらず、気を失っていたらしい。たまたま他の兵の下敷きになっていたから、命拾いした。隊長だというのに　命を落とした隊員たちには顔向けできぬことだ」

「では　やはり他の兵たちは全員……？」

「ああ、私一人が生き残った。それも後で付近の村人に教えられたことだったのだが」

彼らしくない鈍い言い方に、赤褐色の瞳が疑問の色を浮かべる。

すぐに察したらしいベニエが、苦笑と共に続けた。

「実は、傷による発熱で眠り続け、ようやく起き上がったのは最近のことなのだ。本来ならばすぐにでも王宮へ帰還すべきところを、

この雪で足止めされていてな。それが村人の話で王宮から救援隊が来ると聞きかじり、合流できるのを待っていた」

目線をわずかに逸らし、どこか遠慮がちな言葉で説明をする態度は、元来隊長として自己を厳しく律してきた彼だからこそ、自分を恥じているのだろうと思えた。

とにかく生きていてくれたことが、エシユタンドやエカルドたち王子にとっても一番の吉報だという思いを込めて、ルストがもう一度手を差し出す。

しっかりとその手を握り返したベニエが、深い雪に覆われた街道を見渡して言った。

「とにかく、一度退避できる場所を　近くにちょうどいい小屋がある。まずはそこへ！」

いまや息をすることさえも困難なほどに雪が舞い荒れるありさまに、これ以上判断を遅らせる理由はなかった。

「よし、では第二隊全員退避！」

クガルのいない今、半数の隊員たちは自分の責任下にある。

彼らを危険に晒させないためにも、ルストは命を下した。

少し街道から反れ、木々の合間に見つけた一軒の小屋。

思ったよりは大きく、ちょうど隊員たちが皆入っても窮屈さは感じない程度の石造りの空間に一同がほつとした、次の瞬間。

ルストと兵たちが足を踏み入れるのを待っていたかのように、ベニエがボタンと戸を閉めたのだ。

外から鍵まで下ろされて、振り返る。

「ベニエ隊長……？」

何を、と訊ねる前に見えた彼の顔　扉の上部にある小窓からこちらを見ている瞳の冷やかさに、言葉を止めた。

「ふん、簡単なものだ。さしずめ、袋の中のネズミ、といったとこ

るか」

続いた彼らしからぬ言葉に、兵もざわめき出す。

まさか そんな驚愕ばかりが思考を邪魔する。

けれど導き出されるのは、信じたくない事実でしかなかった。

「隊長 どうして」

裏切り、という最もベニエに似合わない選択。

それだけはわかってても、なぜなのか全く理由が思いつかない。

ルストたちの動揺など気にも留めず、厳重に鎖までかけた扉からさっさと離れようとする。

その背中に、大きく問いかけた。

「なぜです、隊長……！ あれほど殿下に付き従う自らの役目に誇りを持ち、職務を厳格に遂行してきたあなたが、なぜ！」

必死な叫びで、ようやく足を止めたベニエが振り向く。

栗色の瞳は、不思議なほど落ち着いた色をしていた。

「私は、今も昔も何も変わってなどいない。己の責務を果たすこと、それだけがこのベニエの喜びでもある」

微笑さえも唇にのせ、余裕たつぷりに全員を見渡した彼は、それを最後に背を向けた。

扉にしがみつき、小窓から覗き込んだルストは、信じられない光景に目を疑う。

さっきまであれほど吹きすさんでいた雪はやみ、その名残を示すのは小屋の前に積もった白い壁のみ。

その中央に佇む人影に歩み寄ったベニエが、にやりと笑ってみせたのだ。

乾いた拍手の音が響く。手を打ち合わせていた人物が動作を止め、ルストに微笑んだ。

「お見事、ベニエ隊長。さすがは有能で名高い人物なだけはある。君も見習わないといけないんじゃない？ ねえ、ルスト副隊長さん？」

自分よりも背の高い、がっちりとしたベニエの肩に手をかけ、堂

々とこちらを見据える。

それがまだ年端のいかめ細身の少年であることだけではない驚愕が、赤褐色の瞳を見開かせた。

「お前、は……」

すっかり大人しくなった風に揺れる金の髪。質素な薄手のマントに似合わぬほど明るいその輝きは、確かに以前目に焼き付けたもので。

少し開いた衣装の隙間から姿を覗かせる赤い色に、ルストは呟いていた。

「ケイマ どうやって逃げた！ サードルの民であるはずのお前が、なぜ魔に加担する！？ お前の目的は一体……！」

自分で言ってから、背筋に流れる冷たい汗。

そう、彼が魔とつながっていることは紛れもない事実で、その彼がここにいるということこそ、これが魔によって仕組まれた罠であると示している。

そこまでは難なくわかる。わかるのに、ではこの状況を作り出したのがベニエであるというのは、どういう意味だというのか。

理解できない。したくない、とさえ思う。

しかしそんなルストの内心などお構いなしに、残酷な結論は証明されてしまったのだ。

ケイマの首元に光る赤い石。鈍く光る不吉な色が、白い世界にぼつりぼつりと増えていく。

耳に届いた遠吠えは狼のものであることはすぐにわかった。

それが普通の狼ではないことも。

「その中に留まるもよし、扉をこじ開けて彼らと遊ぶのもよし。どちらがいいか選ばせてやろう。それがせめてもの、同じ職務に就く者としての情けだ」

一切の感情もこもらない、冷たい瞳で吐き捨てて、ベニエが去っていく。

笑い、後を追うケイマの背中まで遠ざかる。

後に残されたのは魔に操られた狼の群れと、衝撃に言葉を失った  
隊員たちだけだった。

122・作戦（後書き）

雪による村の孤立はエカルドの仕組んだ罠だった。

衝撃の事実には戸惑うエシユタンドを襲う魔の攻撃　その頃ルスト

たち第二隊もベニエの裏切りによって小屋に閉じ込められていた。

という二重の危機で今回は終了。そして次回は空の危機を追います

！

「いやっ……ねえ、やめて！　こんなことだめだよ　王子！」  
押さえつけられ、自由を奪われてもまだ必死で暴れる空に、エカルドがため息をつく。

片手とは思えない力で両手首を押さえつけて、空いた手でそっと頬に触れてくる。

「本当はもっと早くこうするべきだったんですよ。でもできなかった……まだ足掻いていたからです。そんな努力、無駄だと理解すればよかつたものを」

愛しげにさえ見えるほど、優しい手つきで頬を包まれても、空にはエカルドの心が読めなかった。

呟かれた言葉も全くの独り言にしか聞こえないもので、理解ができないままに身をよじる。

「おかしいよ……ずっと優しくしてくれたじゃない！　あなたがいてくれたから、王宮で頑張ることができたんだよ？　なのにどうして」

頭に浮かぶのは、笑顔ばかり。

初めて会った時から、いつも味方になってくれた。時には慰め、励まし、空の不安を吹き飛ばしてくれた。

収穫祭で無事にダンスを踊れたのだから、全部王子のおかげだったのに。

それがなぜ、と突然の変化を責めようとした空の言葉は、頬に当てられていたエカルドの手が離れたことで止まった。  
いや、声が出せなかったのだ。

自分を見下ろす水色の瞳が、激しい感情を湛えていたから。  
「そんなもの……本当の僕じゃない！」  
体を起こし、エカルドが叫んだ。

たった今まで冷めきったように見えた態度が豹変して、寝台の上



で身を竦める。

「社交的でいつも明るく、兄思いの弟。誰にでも優しい、末の王子。そんな役割を演じるのが、ずっと嫌でたまらなかった。でもやめるわけにはいかなかった。だってそれがなければ僕は 王宮に存在価値などないから」

「王、子」

想像もしなかった本音に言葉を失う。

自嘲の笑みもすぐに消して、エカルドは首を振った。

「嘘をついてでも、皆に認められたかった。愛されていたかった。王位になどこれっぽっちも興味のない、穏やかな自分でいたかったのに……母上はそれを許さなかった。突然次期王位継承者としての立場をくつがえされた、あの時から ！」

どうしようもない怒りと苦しみ、何よりも悲しみが渦巻く彼の心が透けて見えたような気がして 空は身を起こした。

肩を落としたエカルドに、そっと手を伸ばしかけた瞬間。

先ほどよりも深い憎悪のこもった瞳に見上げられ、息を呑む。

「本気で王位を欲しいと思ったことなどない。物心ついた時からずっと、押し付けられているだけの面倒で、重い役割だっただけ感じていた。それが兄上に奪われたのだから、喜べばいいはずなのに……どうして僕は憎いと思ってしまうんです？ 兄上が認められていくたびに、なぜ悔しい、なんて……そんな心、必要ないのに。苦しいんですよ、姫君。憎いと思う自分こそが、憎くてたまらない。だから 思いついたんです。それならば、そんな自分ごと全てを壊してしまえばいいんだと」

「エカ……」

名を呼びかけた空の唇に人差し指を当て、エカルドが笑う。

まっすぐに見つめてくる瞳が決して笑っていないことで、背筋が寒くなった。

「もうお喋りはおしまいです。時間は限られているのだから、有効に使わなければ」

先ほど見せた苦しみの表情を消して、囁く。  
まるで仮面の表と裏のように変わる表情は、ますます彼の心を読めなくする。

「大丈夫、僕が優しいことはあなたも十分ご承知でしょう？ 姫君

」

一見すれば以前と変わらぬ微笑、静かな声。

けれど完全に冷たさしか感じさせない瞳に、空は本能的に震えた。  
「いやっ」

伸ばされた手を振り払った途端、エカルドの顔から笑みが消えた。  
別人のような力で再び寝台に押し倒され、悲鳴を上げる。

自分と背丈はそう変わらないはずなのに、その手から逃れることができない。

もがいても自分のの上にいるエカルドをどかせることも、彼の行動を止めることも何も。

『男と二人きりになるといことは、いつこんなことをされてもおかしくないということだ』

ずっと以前に、エシユタンドが苦い顔で言った言葉が頭によぎる。

そんな……こんなこと。

「嘘だよ、王子……」

涙があふれた空の瞳を見ても、エカルドは顔色一つ変えなかった。  
ため息混じりに起き上がり、泣き続ける空を慰めて、謝ってくれたエシユタンドとは違うのだ。

泣きながら首を振る空を冷たく見下ろしたまま、その手でドレスの裾を引き裂く。

必死で閉じようとする足の間に割って入られて、何も考えられなくなる。

「助けて……エシユタンド」

！  
体の下に捕らえた空が泣き叫ぶのを、水色の瞳が静かに眺める。

もちろん呼んだって来てくれるわけなんてないことはわかっている。

でも呼ばずにはいられなかったのだ。

今この瞬間に、一番会いたい人の名前を。

「兄上は来ませんよ」

くつと笑ったエカルドの顔をただ見上げる。

「そ、そんなことわかつてる……でもっ」

責める言葉を口にしかけた空の前で、楽しげに笑い声を上げた。

今、その手で空のドレスを裂いたとは思えないほどの優しさで、

頬まで撫でてくる。

「兄上がどこへ行ったのか、ご存知でしょうか？」

「そ、それはもちろん　雪で孤立した村を、助けに……」

律儀に答えながら、徐々に顔色を変える空。

もしかして、と思いが閃いた瞬間、エカルドは赤い舌で自らの唇

を舐めた。

寒気がするほど、艶やかな仕草だった。

「まさか、あなたが何か仕組んだの!?　エシユタンドをはめるた

めに　？」

寝台の枕元に置いた金と銀の腕輪を意味ありげに見つめながら、

肩をすくめるエカルド。

途端に怒りの表情を浮かべる空を、嘲笑うように微笑む。

「畏だと思抜けないほうが悪いんですよ。馬鹿な正義感で、自分で

全てを救わなければいけないと思ひ込んで　そんなことは不可能

なのだと思ひ知ればいい」

「そんな……仮にも自分のお兄さんでしょう？　あれだけ仲良くし

てきたじゃない！　もし、魔にでも襲われて……エシユタンドに何

かあればどうするって言うの？」

「　自分の息子である相手を、殺そうとする母親もいます。そう

ではありませんか？」

冷たい、冷たい微笑。

同じ水色の瞳を持つ人物を思い浮かべ、空の顔が真っ青になる。

「もしかして、王妃まで何か……?　知っていて、それでも止めな

かったの？ 母親まで欺いて、眠ったふりを ? どうしてそこまで……！」

エシユタンドを憎むのか、と問いつめようとした空の言葉は、ふっと笑ったエカルドが一気に距離をつめたことで止まった。

全て壊したいのだとうわ言のように語った彼の声が、脳裏に蘇る。優しい瞳は、まるで空を哀れむような色をしていた。

「言っただけですよ？ 今、あなたが心配すべきは ご自分のはずだと」

金のゆるい巻き髪が降りてくる。その毛先が、ドレスから出ていく空の肩に触れる。

見開かれた黒い瞳が、泣きそうにゆがんだ。

「けれど僕は、そんなあなたが好きです。純粹で、清らかな暁の娘……ソラ」

唇で鎖骨の線をなぞってから、エカルドが顔を上げる。

瞬時に冷たい仮面に戻った彼が、ドレスの胸元を掴み、合わせてあるリボンを引きちぎった。

「い、いや やめてえええっ！」

エシユタンド ただ一つの名前を頼りに、無駄だと蔑まれながらも呼んだ空は、首元が異様に熱いことに気づいた。

自分を使えと、そう訴えてでもいるように、想緑珠が光っていたのだ。

緑色の石に触れようとした空の手はエカルドに掴まれ、寝台に落ちる。

「ふん、忌々しい森の力が。こんなものに、邪魔させるものか」  
吐き捨てるように言った彼が、光り続ける石のはめこまれたチョコーカーごと剥ぎ取り、部屋の隅に投げ捨てる。

その行為よりも、言葉のほうに気をとられつつも、一瞬だけ力のゆるんだ腕の中から必死で抜け出た。

肩を上下させながら、乱れた衣装を押さえて扉へ走る。

脱げた片方の靴さえ忘れた空の必死な行動を、エカルドはただ黙

って見ている。それも知らず、取っ手に触れようとした空はびくりと固まった。

ふわり、と小さく浮かび上がった青い色に足を止めてしまったのだ。

「逃がしませんよ、姫君」

思わず振り返った空の瞳に、また青い色が一つ、二つ。ゆっくりと増えていく揺らめきに、息を呑む。

ぼつり、ぼつりと薄暗がりには浮かぶのは、青白い炎。

それはまさに、ビバスの術士、フェルが操ったものと同じものだった。

扉の周囲だけではなく、自分を取り囲むように増え続ける炎たちに、空は叫ぶこともできず立ち尽くす。

「兄上を超えるために学んだ力で、兄上の大切なモノを壊すこの時をどれほど待っていたか」

ゆっくりと顔をゆがめ、笑みを樂しげに声にしていくエカルド。青い炎の渦に捕らえられ、動けない空。

熱は感じなくとも、すぐそばで不気味に燃え上がる炎は恐ろしくて、それよりも怖いのは、目の前で笑うエカルドだった。

一步、一步近づいてくると、空の目の前で止まる。

引き寄せられた瞬間、炎は輪を広げて、まるで二人を留めおく結界のように燃え上がった。

流れるような仕草で腕に抱かれ、床に押し倒される。

水色の瞳が近づいて、もう、だめだと思った瞬間。

ぎゅっと目を閉じた空は、無意識に願っていた。

それは奪われた想緑珠なのか、それとも遠い地にいるエシユタンドになのか、空自身にもわからぬまま。

冷たい唇を首筋に押し付けられて、反射的に空は叫んでいたのだ。

「助けて！」

その声を合図にしたように、部屋中が目のくらむような光に包まれる。

緑にも白にも思えた光は、まっすぐに全てを照らした。

目を開けた空は、自分の手に残る光の残存に気づく。それと同時に、不思議なほどに温かい感触にも。

「これ、は……」

驚きと共に持ち上げた両手にすっぽりと収まっていたのは、部屋に置いてきたはずの白水晶の剣。

鞘に納まったままだというのに、そこからもれてくる光が二人を包んでいく。

「……くっ」

苦しい声を出したエカルドを見上げた空は、その瞳に一瞬浮かんだ赤い色に目を凝らす。

しかし次の瞬間にはその色は消えていて、残ったのは今までどおり、水色の瞳。

胸に抱いた白水晶の剣はどんどん熱くなり、空を守るように発光を続ける。

不思議なことにその光にエカルドは苦しみ、胸をかきむしった。

空さえも止めることのできない発光は再び部屋中を照らし、たまたらずに空も目を閉じる。

ようやく光がやみ、剣の熱もおさまる頃には　その場にいたはずのエカルドは、忽然と消えていたのだった。

123・呼応（後書き）

初めて知ったエカルドの心、そして恐ろしいほどに冷たく自分に触れる彼の手、全てに震え、必死で助けを求めた空の声に応えたのは、白水晶の剣だった！ その清浄なる光の力にエカルドは苦しみ、姿を消してしまった、というところで今回のお話は終わりです。次回は、空のその後とエシユタンドの戦闘です。どうぞお楽しみに！

消えたエカルドと共に、腕輪も想緑珠も部屋からなくなっていた。兵の姿はおるか、侍女さえもいないエカルドの宮をあわてて出て、息も絶え絶えに空が自室にたどり着こうという時。

ちょうど廊下の向こうから駆けてきたエマナが、空の姿を見て悲鳴を上げた。

「ひっ、姫君、そのお衣装は一体　どうなさったんです？　何が……」

「エマナ、悪いけど今は説明してる時間はないの！　大変なの、今すぐ止めないと　そう、国王に……陛下に会って言わなきゃいけないことがあるの！」

胸元も裾も破れたドレス姿で、必死にエマナの腕を掴み、息を切らせる。

すぐさまただ事ではないことに気づいたエマナが、あわてたように自分のしていたシヨールをはおらせ、部屋に通す。

「陛下にお会いされるといふならば、なおさらふさわしいお衣装に着替えをなさらなければ。私がすぐにご用意いたします」

きびきびとした手つきで衣装棚を開け、ドレスを選ぼうとするエマナ。

そのそばで呆然と自分の剣を見つめていた空が、唇を引き結んで立ち上がった。

「ちよつと待って　ドレスじゃなく、出してほしい衣装があるんだ」

まだ少し震えていた手を握り締め、決意の色を顔に浮かべた空が言う。

「もう、正面对決は避けられない。エシュタンドを守るためにも、あたしが言わなきゃ……！」

強い瞳で口にした空は、指示通りにエマナが用意してくれた衣装



に着替えた。

引き裂かれたドレスを床に投げ捨て、銀色に光る腰の部分に剣を差すと、不思議と心が決まった。

「じゃあ、あたし謁見の間に行ってくる」

国王と、そして王妃に向かって真正面から伝えるつもりという言葉の頭の中で反芻していた空は、心配そうなエマナの瞳に気づいた。

窓から外を見下ろし、何かを探すような目をしている。

「どうしたの、何か……？」

「それが、ここにララが来るはずなのですけれど、交替の時間をつくに過ぎていているのに姿も見えないんです。それどころか、他の侍女たちも出払ってしまったのか誰もいなくて」

「ララや侍女たちが？ どうしたんだろう」

隣に並んで外を見渡す空に、エマナが気づいたように顔を上げる。

「姫君はとにかく謁見の間に　もしかしたら他の侍女たちは侍女長様にでも呼び出されているのかもしれないし」

自分一人で捜してみるから、と笑顔で見送られた空は、誰もいない廊下を走り、宮を飛び出した。

いつもならすれ違はずの守護兵も見当たらず、何かがおかしいことに気づきながらも、王に会って話すことが先決だとひたすら駆ける。

重い扉にたどり着き、まさに開こうという瞬間だった。

「姫君　！　どうしてこちらへ？　それにそのお姿は　」

かけられた聞き覚えのある声に振り向くと、そこにいたのはセイシエルだった。

肩までの銀髪を揺らして、今走ってきたばかりのように肩を上下させている。

「セイシエル副隊長！　あなたこそどうして……何かあったんですか？」

「それが、先ほど丘で訓練を行っていたら守護兵から報告があり、急ぎ陛下にお伝えに参ったのです」

「報告つて……」

訊ねかけた空の言葉が止まる。

ちょうど二人の立っている近くの窓から、地鳴りのような低い音が聞こえてきたのだ。

うなるような、くぐもった音　それが何かを叫んでいる人の声だとわかったのは、広間の扉が内側から開いたのと同時だった。

「一体何事なの！　この騒ぎは……」

出てきた王妃その人に目を見開いた空が、セイシエルと視線を合わせる。

まさに彼女のことも含めて謁見したかった国王も続いて姿を見せたことで、セイシエルに引き続き、空も叩頭した。

「よい。それよりも何が起こっているのだ？　バルコニーから群衆が王宮へ押し寄せてくるのが見えたが」

片手をあげ、短く問う王。

顔色を変えた空の隣で、セイシエルが口を開いた。

「反乱軍です。どうやら急激な改革に不満を募らせた領主たちが先導している模様です！」

先ほど彼が受けた報告はこれだったのかと、まだ聞こえてくる低い音に耳を澄ませた。

徐々にそれが言葉であることがわかるほど近づいてきているのが空にも感じられる。

「王宮軍は　門を破られたのか？」

「いえ、現在応戦中ですがなんとか　それよりも陛下方の御身の安全を。まずは一番門から遠い離宮へご避難くださいませ。我々第一殿下付き私兵隊がお守りいたします。殿下方は第二殿下付きの私兵隊が守護の任に就いております！」

厳しい表情で伝えるセイシエルの言葉に頷き、王妃がそそくさとドレスの裾をつまんで歩いてくる。

ふと覚えた違和感を、空は知らず声に出していた。

「あの、お付きの侍女やお二人の護衛兵は……？　誰一人姿が見え

ないのですが」

「それが先ほどから見当たらないのです。全く、こんな時に職務を  
放り出して一体何をしているのかしら」

どうでもいいことのように言い放ち、「それよりも」と王妃が振  
り返る。

「エカルドは？　ちゃんと安全な場所に避難させているのでしょ  
うね？」

真っ先に心配するのはやはり息子のことなのだとなつても、  
複雑な思いが蘇る。

やはり、彼女は知らないのだ。

彼のことを伝えに来たはずなのに、今更ながら口に出すのがため  
らわれた。

「ええ、今他の殿下方と同じくお迎えに向かっているはずですよ」と  
平静そのもので答えるセイシエル　それももちろん、彼は知るは  
ずがないのだ、エカルドが宮のどこにもいないということなど。

「あ、あの……」

迷いながらも口を開きかけた空よりも早く、国王が訝しげな表情  
で窓を覗き込む。

「しかし領主軍にしては人数が多すぎるようだが。先ほどから聞こ  
える声は、まるで」

厳格な表情をした口元から、言葉の続きが出てくる前に皆が顔を  
見合わせる。

滅ぼせ。

そう叫ばれているのだとわかった。

王を滅ぼせ、王宮を滅ぼせ。

王妃が口元に手をあて、おびえるように王に身を寄せる。

自分の背後に彼女をかばいながら、国王が表情を引き締めた。

ドオオ、という地響きのような音　いや、人々の声が今やはっ  
きりと聞こえる。

「とにかくお早く　！　さ、こちらです」

セイシエルが二人を連れて廊下を進む。

入り口の扉を開いた途端、更に声は大きくなった。

王を滅ぼせ、王宮を滅ぼせ、国を滅ぼせ。

確かにそう叫んでいるのだとわかった空が足を止める。

ただの反乱軍だなんて　　そんなはずがない。

直感的に感じた空の瞳と、一瞬かちあつた灰褐色の瞳。

「申し上げます　　！　門が……門が破られました！　ここは危険です。今すぐご退避を！」

息も絶え絶えに馬から降りた兵が、駆け寄ってきて叫んだ。

続いて告げられる報告に、王も顔色を失う。

王を滅ぼせ、王宮を滅ぼせ、国を　　全てを、滅ぼしてしまえ！

大合唱となった声が、王宮に響き渡っている。

それはもはや、反乱軍などと一まとめにできるものではなかった。

近隣の村人から何から、ありとあらゆる人々が加わった、人の群れ。

それが一丸となって王宮へ押し寄せ、今や門を破り、突入してきているというのだ。

「おかしいのです。いくら攻撃しても、傷ついても押し寄せてくる。それなのに彼らの目は一樣にぼんやりとされていて　　何かに操られてもいるような……」

自身も肩から血を流しながら、兵が話す。

不気味な戦いを思い出しているのか、背筋をぶるりと震わせて、続けた。

「あれはまるで　　化け物です！」

滅ぼせ、滅ぼせ、と呪文のように叫び続ける声が、すぐ近くまで迫ってくるような錯覚に襲われる。

その声の大きさだけで、どれほどの群集が押し寄せてきているのか、想像するのも恐ろしかった。

「待て、セイシエル」

案内された馬車の手前で歩みを止めた国王が言った。

既に取り込んだ王妃が、何かと視線を上げる。

「退避している場合ではない。私が　王宮軍を先導しよう」

「しかし、陛下……！」

同時に止めたセイシエルと王妃に口元だけで微笑んで、王が背後の声を聞くように振り仰ぐ。

「あれはもう反乱などではないことは、お前たちにもわかっていよう。魔に操られているのだろう　今にきつと、魔のモノたちがここへ来る。このような危機に立ち向わずに、この国の王などと名乗れようか」

毛皮のマントをばさりとはい、言い切った灰褐色の瞳はゆるぎない光を浮かべていた。

普段、軍やエシユタンドに任せている戦闘から、彼が完全に退いたわけではないことを物語っている。

「陛下、危険でございます！　もし御身に何かがあれば私は　民はどうするのです！」

水色の瞳を驚愕にゆがめ、必死で止めようとする王妃。

彼女が少なからず国王を本気で愛していることは、誰の目にもあきらかだった。

「案ずるな、リダネア。エシユタンドには及ばんといえ、私にだってまだ魔の力は残っている。それに　いよいよ出さぬわけにはいかんだろっ」

「陛下、それでは　」

答えを待つセイシエルに深く頷き、国王が片腕を上げる。

その仕草で何かを感じ取ったかのように、兵もセイシエルも膝を付いた。

「守護龍を呼べ！　国の危機は訪れた。ついに契約の通り　いや、それを持って上回る事態であることを、このミディアス国王エスクラルドが宣言する！」

一人事態を読めない空の耳元に、そっとセイシエルが口を寄せる。

囁かれた内容がようやく飲み込めた頃には、国王は馬にまたがっていた。

「陛下……だめです、お待ちください！ 陛下！」

馬車の窓から蒼白な顔で呼ぶ王妃を見つめてから、決意の表情で顔を上げる。

付き従うセイシエルに向かって、指示を下した。

「リダネアを離宮へ。そして王子たちを全力で守護するように。ソラ、そなたも彼らと一緒に避難していなさい。これから戦闘が始まるのだから」

厳しい顔で命じられ、空はあわてて立ち上がった。

側にいた兵の馬に近づき、まだぎこちない動作ながらもまたがった彼女を見て、国王が目を見開いた。

「何をしている、まさか」

「国王陛下、私も及ばずながら一緒にさせていただきます。戦闘に直接お役には立てないかもしれませんが、私には 私だけに課せられた役目があるはずです！」

そう堂々と口にした空の格好を、今更のように国王が眺める。

銀の武装、白いマント、そして腰に差した白水晶の剣。それはまさに、戦いへと出向くための彼女の正装だった。

黒い髪が風になびく。今は雲の中に潜んでいる雪が、上空で不穏な動きを始めているのが肌で感じられた。

「よし、わかった。では共に！ セイシエル！ くれぐれも王妃を頼んだぞ！」

その言葉を最後に馬の腹を蹴った王が、戦闘の場へ向かって駆けていく。

まだ慣れていないものの、意を決して空は同じように馬を走らせた。

練習とはかけ離れた速度と揺れに驚きながら、必死で体勢を整える。

温かな熱を伝えてくれる剣の保護を感じて、空は表情を引き締め

た。

「陛下！」

悲痛に叫んだ王妃の声だけが、二人の背を追いかけた。

\*

不思議なほどぴたりとやんだ雪の代わりに、今は風が蠢いている。その風を捕らえようにも、暴れまわる化け鳥の動きに邪魔されて、力を揮えなかった。

「殿下、いけません！ 無闇に力を使つては逆に結界が  
皆を守るクガルが、両手を組み合わせたまま叫ぶ。」

楽しむように順々に降りてくる鳥の爪が、まさにぎりぎりまで迫り来る勢いに耐えるため、一番疲労しているのは彼だった。

「とにかく数が多すぎます！ ここは一旦退いて、王宮軍に応援を  
……」

言い掛けるクガルの言葉は、不意に迫った化け鳥の攻撃でかき消される。

人間そのものなのに、不気味な無表情の顔が目前まで近づいてい  
た。

「応援ねえ 呼びに行けるものなら行ってごらんよ。生憎、僕の  
ほうはまだまだ楽しむつもりでさ。行かせる気なんてさらさらない  
んだけど」

にやりと笑ったムルグが、顎だけで指示を送る。

しっかりとその意味を理解したらしい獣が、低く唸って結界に体当たりしてきた。

「くっ……殿下、これではいつまで持つか！」

更にゆがんだクガルの表情。後ろに一步引いた片足を強く踏ん張り、何度もぶつかってくる獣の勢いを受け止めている。

だめだ、このままでは。

もういくらも持たないであろうことはわかっていた。だからこそ自分の力でせめて獣だけでも狙い撃ちできれば。そう思うもの、化け鳥たちの猛攻が神経を集中させるのを邪魔した。

その時、だった。首元のチョーカーにはめられた緑の宝玉が一瞬、不気味なほど熱くなったのは。

無意識に触れた片手は、火傷しそうなほどの熱に弾かれた。

熱かったのはその一瞬で、すぐに冷めた石はそれきり緑の光を放ちもせず、チョーカーに静かにおさまるばかり。

その静けさが余計に不気味で、エシユタンドは眉を寄せていた。

「もしかして、ソラに何か……？」

思わず口走り、自分の言葉で背筋が寒くなる。あらゆる可能性を浮かべる頭は、鳥たちのけたたましい鳴き声ですぐ現実に引き戻された。

いけない。今はこの戦いに集中しなければ。

刻み付けるように何度もその言葉を胸に繰り返すが、正直な心はこの場から離れ、王宮へ。愛しい娘のもとへ戻りたいと願ってしまふ。

このまま会えないまま、もし彼女に何かあったら。

そう考えるだけで、急激に体全体が冷やされていく気がした。

頭を振り、雪の上に両足を広げる。

そんなことは起こらない。王宮には王宮軍も、他の私兵隊員もいる。確実に魔のひしめくこの場より安全なはずだ。

自分自身に言い聞かせながら、鳥たちが舞い上がり、遠ざかった一瞬の隙について、迫り来る紺色の獣めがけて風を念じる。



しかし、まだ不安の抜けきれない心の一部が、どうしても集中を許さなかった。風は集まらず、ただ雪原をすべるように駆け抜けていく。

「殿下、私たちが攻撃をしかけます。その際に、どうか  
背後の兵たちから囁かれた言葉で、我に返る。」

だめだ、と口を開く前に、兵の一人が先行して毒矢を放った。

巨大な獣には到底矢だけでは立ち向えるはずもないことなど、その場の誰しもわかっている。

だがどこかに突破口を開かなければ、事態は悪くなるばかりだといふ焦りが、無謀な行動を生んだのだ。

「殿下だけでもどうかお逃げください！　そして、応援を　！」

「そうです、このままでは一蓮托生になりかねない。我らが第三殿下はミディアスの王になれるお方、何が何でも御身をお守りいただく必要があるのです！」

「無茶だ、ランドル！　カジユ、やめるんだ！」

クガルの静止も聞かず、兵たちは一斉に結界から足を踏み出した。そのまま背中から毒矢を放つ者、あるいは攻撃術で化け鳥を狙う者、それぞれの動きを嘲笑一つで止めたのは、上空のムルグだった。

「ふうん、捨て身の攻撃に出たってわけか。だけど　生憎忠誠心なんてものは、面白くもないだけなんだよね」

言い捨てて、片手を上げる少年。細かい粉のような雪がついた翼は、緊張感のかけらもなくふわふわと揺れ動いていた。

「やめろ……お前たち、下がるんだ！」

血の気の引いた顔で、エシユタンドが指示する。

同時に止めたクガルの声も背中だけで受け止めて、二人の兵が頭上に浮いたムルグを睨み付けた。

「この野郎　いつもいつもふざけた物言いで高みの見物を決め込みやがって……」

「まずはお前を引きずり下ろしてやる　！」

決意を瞳に宿し、両手を攻撃の形に組む兵。  
飛び交う化け鳥が奇妙なほど静かになった。

「だめだ、やめろ　！」

叫んだエシユタンドの声と、冷たい指示を下したムルグの声は同時に響いた。

「やれ」と短い言葉だけを吐いた少年が、そこから飛び立った瞬間。浮遊していた鳥たちが、一気に降下して　風が、舞い上がる。

誰のものかもわからない悲痛な叫びが、白一色の雪原にこだましていった。

124・反乱（後書き）

エカルドのことを話そうと王を訪れた空は、王宮に攻め入ってくる反乱軍の存在を知る。全てを滅ぼせと叫ぶ彼らは、魔によって操られていた。ついに立ち上がった王と共に空も戦いに向かう。そしてもう一つの戦場では、エシュタンドが苦戦していた。反撃の隙を作るため、無謀な手に出た兵たちは　　というところで今回のお話は終わりです。次話は、ベニエによって裏切られ、小屋に閉じ込められたルストたち第二隊のその後です。どうぞお楽しみに！

125・救援(前書き)

10/15 加筆修正しました。話の都合上、説明不足だったところを追加したので、今回の話だけ長くなりましたが申し訳ありません。

ケイマとベニエが去った後、しばらく衝撃から立ち直れないでいた隊員たちを一喝したのは、副隊長ルストだった。

石造りの小屋を囲み、ひっきりなしに唸り声を上げる狼たち。まずは彼らを遠ざけ、小屋から出ることが先決だと皆を説得したのだ。

「しかし副隊長、扉には鍵と鎖、窓は扉についたこれが一っだけ。一体どこから脱出したら？」

戸惑ったように訊ねる兵に、ルストも無言のまま周囲を見渡す。

唯一の出口である扉は、蹴飛ばしても体当たりしてもびくともしないほど頑丈だった。

「やはり攻撃術を試してみるしかないだろう。私がやってみる。ピア、アシエリ、援護を頼む」

術に長けた隊員たちに指示して、ルストが壁に向き直る。

一番造りの弱そうな、奥の壁めがけて三人で力を放った。

それぞれ得意な形に両手を組み、念じた途端に生まれたのは風、炎、振動。

訓練された彼らの力なら、普通の壁程度は問題なく吹き飛ばせる。三つが合わさって、爆風となった攻撃の波動は、静かな小屋を奮わせた。

しかし、全てがおさまった後、立ち上がったルストたちは愕然とした。

壁は一筋の裂け目もなく、相変わらず彼らに立ちはだかったままだったのだ。

「そんな……！」

ぱらぱらと天井から落ちてくる砂礫を避けて、隊員たちは顔を見合わせる。

驚愕の空気に負けぬよう、ルストが先に声を上げた。

「何らかの力が働いているな。魔と彼らの持っていた石のせいなのか、まだわからないが　無理に吹き飛ばすのは困難なようだ」

壁も扉もだめとなると、八方ふさがりではないか　口々に言い交わし始める兵たちを咳払いで静めて、ルストは小窓を覗く。

赤く光る瞳で、口からよだれをたらしながら唸り続ける狼たちは、見るからに異常な力で支配されている。

ここに自分たちを閉じ込めておいて、一体何をしようというのか。彼らの狙いは明らかで、余計にあせりが走った。

「ルスト副隊長、こうしている間にも、殿下が　」

「そうです、我々を足止めして、奴らは殿下を狙い撃ちするつもりですよ！」

集まってくる兵たちに頷いて、赤褐色の長髪を無造作に背中にはらう。

副隊長としてこの場を打開する知恵を出すべきなのに、何も頭の回らない自分が悔しくてたまらなかった。

地面に膝をつき、唇を噛みしめていたルストは、ふとむき出しの土に目を止めた。

家具とは名ばかりのテーブルや壊れた椅子が転がった石の床。入り口に近い一部分が、炊事用の釜置き場となっていて、その下は土をそのまま見せているのだ。

埃の積もった釜の前に立ち止まり、下を覗き込む。

もちろんそこには薪を置くほどの隙間しかなく、人間が入れるほどの広さはない。

だが、ここならばどうだろうか。何らかの力で封じられた壁とは違い、むき出しの土ならば、あるいは　。

そこまで考えて、迷っている時間はないことを思い出す。

すぐさま兵に伝え、ルストは土に向かって術を放った。

少しでいい。外へ出られるくらいのも、穴ができれば　。

何にでもすがりたい気持ちで、力を揮ったルストと兵の瞳が見開かれる。

喜びの色が浮かんだ視線を交わしあい、吹き飛ばされた地面を見る。

何度か挑戦して、小柄な人物ならなんとか通れる穴を完成させることができた。

狼たちはまだうろろうしていたが、彼らが魔の力を持っているわけではないのだから、とルストは率先して穴へ入った。

すぐさま外の雪に到達して、かじかむ手で掘り進めた彼は、小屋の脇に出た。

薄暗い雪雲で時間の感覚は麻痺していたが、既に外は薄暗い夕闇に包まれている。

たちまち飛び掛ろうとする狼を背中 of 剣で撃退し、隙を見て攻撃術で扉の鎖を破壊する。順に出てきた兵たちと交代で攻撃しながら、全員が脱出することに成功した。

「よし、すぐに殿下のもとへ！」  
外の木に縛っておいた各自の馬を目指して走る。

しかし、一番にたどり着いた兵が、くぐもった声を上げたことで皆は足を止めた。

「くそ、狼か……！」  
既に切り裂かれた馬が白い雪の上に無残な赤を散らしている。舌打ちした兵が悼むような瞳を向け、その場にしゃがみこんだ。ルストも自分の愛馬を見やってから、奇妙な違和感に包まれる。それぞれ痛ましく重なり合い、息絶えた馬たち。中には首の中ほどまでその肉を見せた死に方が、どうにも不自然な気がしたのだ。狼の仕業にしては、切り口が深すぎる。これは、もっと大きな。

そこまで考えた時、ルストの足元を影が覆った。

「ふっ……副隊長！」

声を殺した悲鳴が上がり、全員が自分の背後を見据えている。

ゆっくりと振り向いた赤褐色の瞳に、巨大な黒い物体が映った。

攻撃術の構えを見せた隊員は、ぐわおおう、と響いた凄まじい咆

哮に動きを止める。

飛びのいたルストは、すぐにそれが大きな熊であることを知った。冬には洞穴などで眠ると言われている動物。それが今、すぐ目の前にいる自分を、赤い瞳で捉えている。

一つ一つが鋭く磨かれた刃のような歯が、大きく開かれた口に並んでいる。

呼吸するたびに前後するその心臓の動きさえも、すぐ近くで感じられる気がした。

「副隊長　！」

すぐに飛びかかれる距離でじつとその機を待っている獣。

きらきら光る赤い色の瞳で、これも普通の熊ではないということ。は瞬時にわかった。

「くっ……」

じりじりと後退し、攻撃の隙を窺っていたルストは、すぐ横で上がった悲鳴に視線をやる。

思わず息を呑んだ。

白い雪を重そうにのせた木の脇にいた隊員たちが、動きを止めている。

くそ、一頭じゃないのか！

思いを言葉にすることはできなかった。

何か一言でも発したら、その瞬間に襲い掛かってきそうだったからだ。

そろり、と木の合間から這い出してきたのは、ルストの目の前にいるものより更に一回り大きい熊。

そして事態は、それだけでは終わらなかったのだ。

通常自分の領域を守ると言われている野生の熊たちが、これほど近くに何頭も集まるなど聞いたことがない。

それなのに今、ルストたちを取り囲もうとしているのは、三頭、いや、四頭、五頭、と徐々に数を増やしていく異常な大きさの熊だった。



赤い双眸に睨みつけられ、息一つ吐き出せないほどの沈黙が周囲を支配する。その場の誰もがもうだめかと感じた一瞬のことだった。ドオン、と音がして一頭が横倒しになる。

続いてもう一頭、更に一頭、と息をつく暇もなく熊が倒れ、それがわき腹に刺さった矢のためだと気づいた。

といつてもルストたちが持っていた通常の矢ではなく、まるで短剣をそのまま矢に作り変えたかのような、太さも厚みも倍以上に違う立派なもの。

どうやら即効性の毒が塗ってあるらしく、刺さった瞬間に倒れ、痙攣した後に口から血を吐いて死んでいく。

ルストも兵も声を出す間もなく、熊は全てが雪の上で息絶えていた。

「副隊長、これは」

訝しげな声が兵から上がる。それにルストが答える前に、背後から軽い笑い声が上がった。

新手の魔かと疑った赤褐色の瞳が、違う驚きに見開かれた。

「よう、久しぶり　と言いたいところだが、あんたとは初対面かな。いや、王宮で少し顔合わせたっけ。えっと　ミデイス王国第三王子付き私兵隊、副隊長のルストさん？」

「あ、あなたは……！」

倒れた熊の巨体を軽やかな足取りで避けながら、こちらへ向かって歩み寄ってくる屈託のない笑顔。

乾いた大地のような色をした短髪を寒さよけの布で巻いて、簡単な旅装に身をつつんだ男。

その澄んだ緑色の瞳を記憶の中から思い出して、ルストは彼の両手を握った。

「イラル殿、ですね！　一体どうしてここに　クルスにお戻りになられたのでは？」

確か雪が深くなる前にとミデイスを発ったはずの彼がどうしてそう戸惑っていたルストは、木々の影から姿を現したのが彼一人

でないことに気づいた。

一人、また一人とイラルに駆け寄る男たちは、揃って同じような旅装をしている。しかし風で翻ったマントの中に見えた武装の胸当てに、普通の男たちではないこともすぐにわかる。

「イラル殿、この方々は？」

「ああ、紹介が遅れたな。こいつらは俺と同じ特別山岳部隊、第三隊の仲間だ。ついでにもう一度言っておくと、俺が隊長って役どころを一応任されてる。まあ、そんな大したもんじゃなく、悪友どもみたいなもんだけどな」

相変わらず気安い口調で笑ってみせるイラルの言葉に、それぞれ青やこげ茶や様々な瞳が細められた。

「悪友どもはないだろう、イラル。まあ、お前がご立派な呼び名をもてあましてる不良隊長だったのはみんな知ってるがな」

「そうだけ、一応紹介ぐらいしてくれよ。せつかく王宮付きのきちんとした兵の皆さんと知り合う機会だったのに」

口々に言っつて、笑い合う声は明るく、背中や腰に何気なく帯刀しているのが似合わぬほどの、自然な態度だった。

「あの おかげで、助かりました。この御礼は何と申し上げていいものか」

中の一人が熊の腹に突き刺さった矢を抜き、背中中の矢筒に戻しているのを見て、ようやくルストが口を開く。

次々に礼を言う私兵隊員たちに微笑み、イラルが頭を掻いた。

「いやあ、本当は狼の時に助けに入るつもりだったんだけどさ、ちよつとばかり手こずってな。遅くなってすまなかった」

「そんな、とんでもない！　しかし、手こずったというところ、他にもまさか魔のモノや動物が？」

「ああ。魔はいなかったが、まあ小物程度の蛇やらフクロウやら、とにかく数が多くて時間がかかった。まったく　罪もねえ動物を操りやがって、相変わらず趣味が悪い奴らに狙われてるらしいな。あんたらがいるってことは、王子も近くにいるんだらう？」

まさかそこまで助けてもらっていたとは思わず、情けないやら有難いやらで一瞬言葉を失っていたルストは、正直に頷く。

「そうだ、こんなところで立ち止まっている場合ではないのだ。」

「そうか、隊を二つにね。ってことは王子もどっかで立ち往生して可能性が高いな。よし、行くぞ。マーギユ、トロイ、ぼさつとしてねえでさつさと付いて来い」

自分の隊員に顎で指示を出し、当然のように出発の用意を始めるイラルに、あつけにとられる。

兵たちの疑問を代表したルストが、あわてたように近づいた。

「あの、行ってくつて、もしかして」

「そりゃ、王子を助けに行くんだ。当たり前だろ？ 親友の危機は見過ごせねえ。まあ、俺の勝手な片思いかもしれねえが、こんな力でもないよりはマシだろう」

軽く笑って、親指で自分を指してみせる。笑みにそぐわぬ真剣な瞳に、ルストが感極まったように口を開いた。

「イラル殿……ありがとうございます！」

まるで新入りの兵並みに背筋を伸ばして、深く頭を下げる。

副隊長とは思えぬ腰の低さに、イラル率いる特別山岳部隊の隊員たちが笑った。

「では、クルスには帰らず、ミディスで旅を続けておられたと？」  
ルストの声に、イラルは決まりが悪そうに笑う。

マーギユと呼ばれた青い瞳の男が、その肩を小突いた。

「まったくまがりなりにも隊長って立場の男が、ふらふらうついてばっかりで困ったもんだぜ」

「そうだそうだ。まあそれもいつものことだけだよ。どうせ俺たち第三隊は王都には置いておけねえどうしようもねえ連中の集まりだから、それでもどやされることもねえがな」

トロイと名乗った大柄な男も頷く。

どうせ馬も使えないと彼らも歩きを選び、雪をかきわけて進んでいく道中、寒さにかじかむ体を温めるためにも話を続けることにしたのだ。

背後を進んでくる残りの隊員たちも、イラルの隊と混ざり合って、息を切らしていた。

「それで、一体何のためにミディアスに？」

訊ねたルストにちらりと緑の瞳を向けて、イラルは何でもないとのように答える。

「そりゃあ、面白そうだからに決まってるさ」

「おつ、面白そう、ですって？」

「ああ。滞在させてもらった数日間だけでも、もちろんあの戦闘のさなかでも思ったことだが、この国には、いろんな野望がひしめいている。魔にしたってそうだが、王宮の中だって同じことだ。ぎらぎらした欲望が渦巻いているのはどこの国でも似たようなもんだが、それを許す環境にあるって面で、やっぱりミディアスは行く末を見届けるだけの価値がある」

目を白黒させながら、意味のわからない返答に困った顔をするルスト。

雪を踏みしめる歩みは止めないままに、イラルは笑った。

「それに、やっぱり興味がわいた。あの男があれだけ溺愛する婚約者殿が一体どんな女性なのかとな」

「婚約者……姫君のことですか？」

突然変わった話題に首を傾げたルストに、イラルは当然のごとく頷く。しんしんと冷える外気などものともせぬような飄々とした顔に笑みまで刻んだ。

「いや、こつちの話になるが……実はビバスで例の姫君かもしれな人物に会ったってこいつが言うのさ」

親指で無造作に示された相手、それは先ほどトロイと呼ばれていた男。衣服の上からでもわかる筋肉質な肩をすくめて、彼も笑っ

た。

「ビ、ビバスで……!? 一体どういうことですか?」

「うーん、まあちよつとネイアーレが見たくてさ。旅芸人に混ざって入国したんだが、その船で変わった少女を見てね。何やら不思議な剣を扱い、見たこともない色の髪と瞳をした。それでピンと来たんだ。もしかしてこいつは例の噂の少女じゃないかって」

薄い茶色の瞳を細めて、まるでその時の光景を思い出しているかのような目つきをするトロイ。ますます眉間に皺を寄せ、歩みまで止めたルストが食い入るように見つめる。

「噂って、何のです?」

「まあまあ、そんな怖い顔すんなって! 噂つつつても、方々に散つてる俺たちの仲間内だけが知る極秘の情報網からさ。どうやらミデイスの王子のそばには、異国の娘がいるらしいという話だ」

たまらぬように笑って間に入るのはマーギユ。トロイと特に親しいらしい彼は、隣を進むごつい肩を叩いて続けた。

「確かかわからない噂だったが、こいつは女の話なら一度聞けば絶対に忘れないという変な特技の持ち主でな。それで咄嗟に思い出したらしい」

「女の……?」

途端に少し冷ややかになった赤褐色の瞳に苦笑いして、トロイは頭を掻いた。

「いやあ、別に特技ってほどでもないんだが。確かに珍しい異国の娘だったから、まさかとは思いなが一応、な。少しぐらいの助けになればと常備薬を一つ譲っただけだ」

「常備薬?」

「単なる眠り薬の一種だよ。しかもなぜか男にしか効き目はない。トロイの話じゃ、その娘は大柄な男二人に連れて行かれたって言うからな。まあ、無関係の娘だとしても危機に使ってことで、まったく無駄になったわけでもないだろうさ」

どうせこいつの思い違いだって　そう笑いあう二人の背後で、

イラルが含み笑いをしている。その光景を見ながら突然思い出した言葉に、ルストは顔色を変えていた。

「そういえば……船で会った見知らぬ男にもらった薬らしき小瓶で、フェルの手から逃れることができた、という話を姫君がしていたような。」

その男がどこの誰であったのかだけは最後まで謎だった、と呟いていた黒髪の少女。既にルストの中でも重大な位置を占める存在となったかの姫を救ったのが、目の前の人物だったとは。

しかしこの事実を伝えるべきか否かで迷っていたルストは、ただにやりと一人緑の瞳を細めているイラルに思わず瞳を奪われる。

「彼だけは全てを知った上で、先ほどの発言に至ったのではないかと。」

「まあ、全部こいつの妄想だつて可能性も捨てきれないわけだからな。その話はこの辺にして、本題に戻そうぜ。」

ルストの懸念を覆すような形であつさりと手を振り、笑ったイラルに促されて彼の隊員たちも同意する。いつしか話の流れはまた最初のものに戻っていた。

「とにかく どうせ俺たちみたいなのはみ出しもんは、国にいたつてやることなんてないからな。それなら、少しでも役に立ってる場所にいたほうがこつちにとつても有益だつてことさ。」

「は、はあ……。」

ようやくぎこちない笑顔を返したルストは、すっかり冷え切っていた皮手袋の中の両手を握りしめる。

しかしこれぐらいの寒さなど何でもないとばかりに薄手のマントを翻して、体格のいいトロイが再び豪快な笑いをもらした。

「要するに、国で出来ねえ憂さ晴らしをここで思う存分させてもらおうつて腹だ。魔の力なんつーもんは、クルスじゃあ王族以外に揮うことを許されねえもんだからな。」

「そうそう。少しばかりの力でも、やはり腐らせるにはもつたいない。それなら必要とされる場がありゃあ、そこへすつ飛んでいくつ

てのが当然の道理ってわけだ」

楽しげに同意するマーギユの声が追いかけてきて、更にルストは混乱に陥った。

どうやらイラル率いる隊員たちだけでなく、クルスという国自体が、自分の知る模範国というイメージからはみ出たものらしいと気づかされたからだだった。

まだ頭に残っていた空の話はとりあえず胸にしまいこみ、言葉を返す。

「あれ？ でもそういえば、魔の力って……それは当然王族以外に持ち得るはずなものでは？ もしかして皆さんは、それを持っていると？」

少なくともミデイスにおいては、代々王族の中に受け継がれてきた力であり、それ以外で魔の力を持つという者には出会ったことはない。

ルストやクガルが持つ力は、あくまで攻撃術であり、鍛錬の成果で得たものだからだ。

自然発生的に現れることはあり得ない。

そんなルストの常識では理解が追いつかない内容で笑いあう三人を、赤褐色の瞳が見やる。

いや、しかし 確かに彼は『持つ』ではなく『揮つ』ことが許されないと言ったのだっけ。

ルストがそこまで考えた時、マーギユの青い瞳がいたずらっぽく細められた。

「まあ、そういうこと。もちろん、恐れ多くもミデイスの王子や、我らが隊長のイラルにさえ追いつかない程度の微弱な力ではあるけど……それでもこうやって、歩きやすくすることくらいはできる」

言って彼が見据えたのは、雪に埋もれかけた大きな岩。

私兵隊の兵たちがちょうど足を止めた横から、歩み出てきたマーギユがすい、と片手をあげる。

すると最初小刻みに震え始めた岩が、積もった雪を振り落として

いき 裸の姿を見せた瞬間、ふわり、と浮かび上がったのだ。

確かに誰も手を触れていないのに、ゆっくりと浮いたまま移動して、ついには道の脇に勝手に落ちた。

私兵隊員が対処する前の出来事に、一瞬皆が顔を合わせてから、ルストを見やった。

「そうか、大地を」

山の国クルスで生まれる魔力の力は、大地を操るもの。そして目の前のイラルにもその素晴らしい恩恵が強く現れているのだと、ルストもエシユタンドに聞いていた。

「よっしゃ、そんなら俺も」

軽く呟いたトロイが腕まくりをして、更に行く手を遮っていた大岩の前に立ちはだかる。

口の中で何事かを念じた声が聞こえた途端、派手な音を立てて岩が弾け飛んだ。

「おお、すごい！」

「大したことはねえ。せいぜいこれぐらいの大きさまでしか無理だからな。あとは隊長 イラルに頑張ってもらわねえと」

鼻の下をこすって、それでも得意げに笑ってみせたトロイの肩に手を置いて、イラルが歩み寄る。

澄んだ緑色の瞳は、決して笑ってはいなかった。

「王族にしか許されない力を手にした者 その出自がどんなものか、あんたにだって想像はつくだろう？ 厳格な法律に縛られたクルスでは、存在を認められない いや、許されない者たちだ。本当なら殺されていたはずの、生まれてはいけない子供。それをこっぴどくやって事実上追放することで、王は見てみぬふりをした。それが、クルスの隠れた歴史さ」

「殺されていたはずの、子供……？」

思わず繰り返した言葉はあまりに衝撃的で、ルストはただ黙することしかできなかった。

「側室を許していない法は、ミディスと同じ。しかし、一から十ま



で縛り付けて、王族の自由というものを根こそぎ奪った結果がこれだ」

「イラル」

いいのか、というように声をかけたトロイを皮肉げな笑みで見やっつて、頷く。

飄々とした顔つきは、今は別人のように鋭く見えた。

「年々、なぜか王子の数は減り、王女ばかりが生まれる。その原因はわかっちゃいないが、それに比例するかののように、俺のような出自のものが増えた。つまり、その意味は――」

「隠れて法を破り、王宮以外の場所で子を持った王族がいたからだ。昔は生むことすら禁じられ、見つければすぐに殺されていたそんな子供は、近年じゃあ外に飼うことで生かされるようになった。そして、なぜなのか　そんな子供は男が多い、というわけだ」

「イラル、隊長殿……」

ただ名を呼ぶことしかできない。ルストの複雑な表情に片目を閉じて、またいつも通りの微笑を浮かべたイラルは肩をすくめた。

「国王を含む王族どもは、必死で隠しているつもりらしい機密だが、少し知識のある者なら、クルスでは誰もが知る暗黙の了解といったところさ。だから、そんなに心配しなくても話したところで俺たちには大して意味のないことだ」

無言で頷き、彼の両脇に立つトロイとマーギユ。そしてその後には控える兵たち。

もちろん全てがそのような出自ではないのだろうが、お互いの事情を知りながら、明るく笑う彼らがなぜかまぶしく見えた。

「しかし、なぜそれを我々に？」

短い言葉だけを返すルストに、イラルは唇の端だけで微笑み、周囲の雪景色を見回した。

進むごとに段々深くなる雪と、それに追い討ちをかけるように暗くなっていく空。

まさにこれから待ち受ける不吉な事態を予告しているかのような

風景を見つめながら、イラルは振り返った。

「どうせこのままではクルスはろくな国にならんだろう。そして、それを憂うようなまともな奴らさえ、あの王宮にはいない。自分の娘を差し出すことで、ただ自らの安寧を図ろうとするような、くだらん王のもとではな。だから俺はミデイスの危機を救いたい。いや、ともに戦うことで知りたいのだ、と言うべきかな。国一つを背負って立つべき人物が、どんな道を歩むのか　そして、国は　民は、それにどう応えるのかを」

「おい、イラル……お前、そこまでまともなこと考えてたのかよ！」「そうだ、見直したぜ。っていうか、一人でかつこいいこと言っているところじゃねえぞ」

「隊長、俺たちだって少しは活躍させてくださいよー！」「口々に言い、駆け寄った兵たちの中で、「お前ら、俺の決め台詞、だいなしにするなつての！」とイラルがわめいている。

照れたように少し染まった頬をしていたことで、先ほど冷えた空気を切り裂くような瞳の輝きを見せたことが、まるで嘘のようだ。

「よし、じゃあ　ミデイス救国の救援ってことで、いっちょやってやろっぜ！」

一致団結して、頼もしい背中を前を進んでいく兵たちに、ルスト率いる私兵隊員が遅れてついていく。

「ちよっと……置いていかないでくださいよ！」

まがりなりにも副隊長なのに、と情けない声をもらった彼に、全員が笑った。

125・救援（後書き）

危ないところをイラルたち一行に救われたルスト率いる第二隊。  
複雑な出自に負けぬ彼らの強さに、自然力を与えられた一行はエシ  
ユタンドたちのところへ向かう、というところで今回は終わりです。  
次話は緊迫のエシユタンドと空それぞれのその後です。どうぞお楽  
しみに！

長く思えた一瞬の後、ぐらりと傾ぎ、倒れこんでいく兵たちが見えた。

雪原に散った赤い飛沫は、無残なほどに鮮明な色をしていて。エシユタンドは蒼白になりながら、兵たちに駆け寄った。

「ピア……アシエリ！　しっかりしろ！」  
鳥たちの鋭い爪に切り裂かれ、破れた衣装のあちこちから血が流れている。

肉の見える部分さえも少なくなき、どれほどの痛みを伴う深手がすぐにわかった。

「殿……下、我々に構わず　どうか」

重そうに持ち上げられた腕は震え、すぐに地面へ落ちたが、その指が差しているのが誰かはあきらかだった。

ふわふわと、空中に胡坐をかいて浮かんでいる魔の少年。冷たく見下ろす眼差しが、舌打ちと共にわずかにゆがむ。

「なーんだ。まだ生きてやがる。弱々しいくせにしぶといねえ」  
そんなふざけた言葉よりも、攻撃を止められなかった自分が腹立たしくてたまらず、エシユタンドはムルグを振り仰いだ。

駆け寄ったクガルと残りの兵が、倒れた二人の傷口を縛り、体を起こすのを目の端に捉えながら、呟いていた。

「なぜ……」

「あ？」

「なぜ、ここまでする！　彼らに　私たち人間に何の恨みがあるというんだ！」

藍色の瞳を怒りに燃やし、わなわなと震える両手を握り締めて叫んだ。

今なら、まだ助かる。すぐにしかるべき手当てを受けさせ、安全な場所へ運ぶことができれば。

しかしそんな猶予がどこにあるというのか。

このまま彼らの命が消えていくのを、黙って見ているというのか。そんなむごいことをどうして。

全ての思いが爆発したエシユタンドの声を聞いていたムルグは、表情の一つも動かさず、それを鼻で笑ってみせたのだ。

「何の恨み、だって？ その言葉、全部そのまま返してやるよ！」

「なん、だと」

眉を寄せ、睨み付ける藍色の瞳とぶつかり合うのは、琥珀色の瞳。同じ色の瞳を持つ獣の背に降り立った少年は、翼をたたんで暗い笑みを浮かべる。

「もともと俺たち魔のモノは、お前ら人間に負ける存在でしかなかった。小動物を食し、人間を襲わなかった頃さえも、見つければ追いつかれ、住処を奪われる。それならと反撃すれば、殺され、踏みにじられてきた。それを当然だと思っているお前たちのほうが、よっぽどむごいと言えるんじゃないのか！」

「何をもつともらしいことを……そもそもお前たちの存在を人間と同じ次元で考えることがおかしいんだ！」

「獣なら獣らしく、ひっそり小動物を食って森に住んでいれば俺たちだって命までは奪いはしなかった！」

仲間の血で汚れた手を握り締め、声を荒げる兵たち。

「ぎゃあぎゃあ」と空中で飛び交う鳥が、ムルグが片腕をすつと上げただけで静かになる。

不気味なほどの沈黙は、少年の笑い声でとぎれた。

「そんな風に自分たちが最上の存在だとばかりに世界を闊歩し、全てを壊していくんだよ、お前たちは。自分たちのおろかさには気づかない奴らが、よくもそんなえらそうなことを言えるな」

腹を抱え、さもおかしそうに笑うムルグ。

皮肉なことに、今まででもっとも人間に酷似して見えた瞬間だった。

「俺はアイラを殺された恨みを忘れない。共に生まれ、育ち、ずっ

と一緒に過ごしていくはずだった存在を　　突然奪われたあの日のことはな！」

だから、と唇を噛んだ少年が続ける。

今や抑えきれない怒りを湛えているのが、誰の瞳なのかわからなくなつてさえる。

「でも、もう俺たちは無力なだけの獣じゃない。『影』が力を与えてくれたからな……言葉を持ち、力を手にした俺たちなら、お前たちには負けない。ほら、そろそろ覚悟を決めな？」

「影、だと……？　それは一体誰のことだ！　何者がお前たちを操っている！？」

エシユタンドの激しい問いにもムルグは肩をすくめ、冷やかな目を向ける。

「知るかよ、そんなこと。ただある日、人語がわかるようになっていた。人間に擬態していく体に気づいた。それだけのことだ。そして俺たちに血晶石を与えてくれた。姿は見せず、声だけで彼の意思を伝える　どのみち俺たちにはそんなことどうだっていいがな」  
騎乗した獣の背を優しく撫でながら、楽しくてたまらない、といった顔でくすくす笑う。いつの間にかその手にあつた赤い石が、暗く、禍々しい光を放った。

「もう、いいんだってさ。時は満ちた　だから存分にいたぶつて殺してやるよ！」

高笑いを合図としたように、鳥たちがまた飛び交い始める。

獣のムルグが、背を低くして攻撃の機を待っている。

ふわりとその背から飛び上がった少年は、大きな翼をはためかせ、高く高く浮上していく。

「くそ　また逃げる気か！」

兵が声を上げるのを耳にしたのか、一瞬動きを止めたムルグが首を振った。

「いいや、見せてもらうのさ。魔と人間　いや、人間と人間の醜い争いをね」

言われた言葉に耳を疑う前に、息を呑み、周囲を見渡す兵たちの驚愕が伝わってくる。

もちろん、その光景を目にしたエシユタンドとて、例外ではなかったのだから。

「ほづら、どうだい？ 楽しい楽しい祭りの始まりだよ」

にんまりと笑ったムルグが指し示した先に、どンドン集まり、その数を増やすばかりの新手の『敵』がいる。

それは暗くどんよりとした目をした、村人たち。そして見開かれた藍色の瞳に映るのは、彼らを先導するケイマとベニエの姿だった。

\*

滅ぼせ、滅ぼせ、滅ぼせ……！！

口々に叫ぶ群衆の声が、遠く聞こえている。

攻め入ってきた彼らをなんとか門の外まで押し戻したのは王宮軍と、それに加わった第一、第二私兵隊の力だった。

本来ならば寄せ集めの反乱軍が統制の取れた王宮軍にかなうわけもなく、当然の結果ともいえる。

しかし、いくら矢を射掛けても、剣をふりかざしても避ける気配すら見せずに突き進んでくる人々を一蹴することもできず、もどかしい攻防が続いていた。

白水晶の剣を手に、勇んで戦闘の場へ向かった空も、飛び交う矢の前で仕方なく一旦退避することしかできなかった。

実戦には役に立てるはずもなく、仕方のないこととはいえ、悔しさとおせりばかりがつのつていく。

そんな空を引き連れて王が腰を据えた場所は、王宮の中で最も高い位置。すなわち、王の私室から外を臨むバルコニーだった。

エシユタンドの部屋一つ分よりも広大な石畳の上に舞い降りてきたものに、空はただ目を見開く。

白い体、白い羽根　ふわふわとした天使のような、優しい印象のそれをはためかせて、浮遊しているモノ。

そう、まだこの世界へやってきたばかりの頃に見た、守護龍たちだった。

数えて四体いるそれは、以前教えられたような魔の力を持つとは思えないほどに、澄んだ瞳をしている。

「国王陛下　これが」

目にしたことのある恐ろしい化け鳥などとは違う、透明な存在感を放つその生き物。ただ彼らの姿に目を奪われていた空に頷くと、国王はなめらかな白い鱗を撫でた。

しばらくその感触を愛でるように手を動かしていたかと思うと、門の外を取り囲む軍勢を遠く見つめながら、深く息を吐く。

なぜか言葉をかけるのもためらわれて、見守るだけだった空の前で、王が口を開いた。

「ミディアス国王エスラルドの名を持って、命ずる。その身に施した呪を解き、自由を与えよう。その代償とし、邪な力から王宮を死守することを要求する！」

「呪……？」

呟いた空の声は、王の耳に届いたのか否か　次の瞬間、突如光を放ち、龍たちが飛び上がったことで息を呑む。

そのまま固唾を飲んで見つめる空の目の前で、四頭の龍は絡まりあい、そして溶け合うように、なんと一つになっていくのだ。

大きいとはいえ、あのビバスで見た海蛇よりも小さいという印象だった一頭一頭が合体し、巨大な姿となった龍は、いまや王宮の広



場を一周できるほどの体を持っていた。

「あ、あれが……本来の、守護龍？」

「そうだ。ミデイス初代の王　伝説の力を持ったエツセラド王が捕らえ、契約を交わした魔のモノ。その身に宿る力は未知数で、エツセラド王さえも持て余したからこそ、呪を施し、体を分けた。それぞれが本来の十分の一にも満たぬ力だけを持つ存在にな」

「そんな」

「その不当な扱いに甘んじたのは、龍にとって契約条件が魅力的だったからに過ぎない。それは　王の命。国王をつとめた人物の心臓というのは、龍たちにとっては、この上ない美味だそうだ」

「心臓、つて……陛下！」

命、聞き入れたり。

不思議な低音が耳元で響いた、そう思った瞬間。

龍はぐるりと一回転して、王宮をはるか頭上から見下ろせる位置へと飛翔した。

白のような金のような、まぶしい光に包まれたのは一瞬で、それと同時に繰り返されていた進撃がやんだ。

いや、進もうとしても進めなくなったのだ。

分厚い壁に阻まれたかのように、王宮に入ることを拒む力が存在している。

それが龍の結界なのだと空が気づいた時には、まるで王宮ごと小さな世界を切り取ったかのように、こちら側だけが静かな空気を保っていたのだ。

「代々、王を務める者に受け継がれてきた、守護龍との契約。それはそのまま、国を背負う覚悟でもある。今まで契約を履行した王はいなかったが　そこまでの危機が訪れていなかっただけのこと。今、この時でなければ、いつ彼らの力が必要だというのだ？　ソラよ」

自らの死をもって、甚大な力の恩恵を受けるなんて　そんなにも重い役目を静かに微笑んで果たした王の前で、空はずるずるとそ

の場に崩れる。

自分なりに覚悟をして、役に立とうと考えたはずなのに、何もできない。

そんな自分の隣で、王はゆるぎない瞳で前方を見据えている。

「だが、私ができるのはここまでだ。リダネアの前ではああ言ったが、既に魔の力は老いと共に衰え、戦いに使えるほどまでもいかない。襲撃からこうして王宮を守ることしかできん。さすがの龍も、魔から人々を救ってはくれんからな　あとは、そなたの働きを見せてもらおうぞ」

まだ両手に握り締めたままの剣を指し示し、灰褐色の瞳が細められる。

「私が……私にも、できるでしょうか」

「何を言う。そのために付いて来てくれたのであろう。剣が選んだのは　そなたなのだぞ」

静かな王の言葉にゆっくりと頷き、空が白水晶の剣を握りなおす。結界の外にあふれている人々　操られたままの彼らを救うべく、願いを込めようとした、その瞬間だった。

「陛下　国王陛下！」

息を切らしながらバルコニーに上ってきた兵の一人が、血相を変えて叫んだ。

何事だ、と振り向いた王の足元に跪いた彼が告げた報告。

それは空にとっても、王にとっても衝撃でしかない事態を知らせるものだった。

「……エカルド！」

自分の目で確かめるまでは信じられなかったのであろう。

空を伴って王宮の門前まで出向いた国王が、大きく瞳を見開いた。「一体　これはどういうことだ！　なぜエカルドが……どうなっている！」

誰にもなく叫び、首をただ左右に振る王の言葉は、地鳴りのような群集の声にかき消されていく。

滅ぼせ、滅ぼせ……全て、滅ぼしてしまえ！

そう叫び、鈍い攻撃を繰り返す人々。結界に阻まれた自らの矢に  
また傷つけられ、更に血に濡れていく彼らを先導する人物　それ  
こそが、先ほど姿を消したはずのエカルドであったのだ。

126・先導（後書き）

エシユタンドたちの前に立ちふさがる魔、そして操られた『敵』。龍の結界に守護された王宮で、今その力を発揮しようとしている空の前に姿を見せた人物。

破壊を先導する彼らとの戦いはどうなっていくのか。  
ぜひ次話をお待ちください！

周囲の雪景色にそぐわぬ黒い衣装　常に身につけていた王族の気品あふれるいでたちなど捨てたかのように、全身を闇色で染めたエカルド。

首からさげられた大きな赤い石だけが、不吉な輝きを放っている。一人馬にまたがり、片腕をつきあげながら民を先導する姿に声を上げたのは、国王だけではなかった。

「エカルド……どうして、一体なぜあの子があんなところに!？ ああ、陛下　早くエカルドをお救いくださいませ!」

兵に止められながら駆け寄ってきた王妃の悲痛な叫びを耳にして、空も振り返る。

「リダネア　なぜ彼女を連れてきた!　離宮で守るように命じたはずであろう!」

王の叱責に頭を下げ、止められなかった旨を詫びる兵たち。

そんなやりとりなどどうでもいいとばかりに彼らを押しつけ、王妃が詰め寄ったのは空だった。

「エカルドに何かしたのね?　ええ、そうに決まっているわ　あんなに良い子が反乱軍を先導するだなんて、そんな馬鹿なことあるはずがない……そうよ、お前が何か命じてやらせたのね!」

手袋越しでも爪が食い込むほどの力で腕をつかまれ、責められ、罵られる。

その言葉を否定するよりもまず、痛ましが先に立って、何も言えなかった。

常に冷たい色を浮かべていた水色の瞳は動揺にゆがみ、混乱した表情は、自身の乱れた髪や化粧など気にしている様子もない。

信じきっていた息子　おそらくはその快復だけを願っていたはずの心が、突然の出来事を受け入れられないでいるのだ。

「リダネア、やめなさい!　落ち着くのだ　とにかくここは危険

だ、離れていなさい！」

王の言葉で兵たちが彼女を空から引き剥がし、連れて行く。金髪を振り乱した王妃は、既に空のことなど目に入っていないかのように、エカルドの姿ばかりを捜している。

「エカルド……エカルド！」

門の外でざわめく群集の中にいる彼に、その声が届くはずなどない。

それなのになぜか、まるで悲痛な叫びが聞こえたかのように、エカルドが振り返ったのだ。

「エカルド　！　ああ、愛しい私の息子……さあ、早くお戻りなさい！」

兵に阻まれながら、もがき、両手をそちらに差し出す王妃。

同じ水色の瞳が、一瞬かち合ったかのように見えたその時。

滅ぼせ。

再び、暗い声があった。

それはエカルドの唇からもれた声だったのか、それとも皆のものだったのか、それさえも判別できないほどに　既に声は重なり合っていた。

エカルドの胸で、赤い石が光る。鈍い、血のような赤が発色し、龍の結界を徐々に包み込んでいく。

不敵な笑みを浮かべたエカルドを、信じられないように見開いた王妃の瞳が映した。

「陛下……兵たちが！」

衝撃は、まだ終わっていないかった。

叫んだ兵が指差すのは、門を守る兵士たち。

王宮を守護し、結界の中にいる彼らがなんと　次々と身を翻し、こちらへ向かって攻めてくるのだ。

守るべき対象であるはずの国王に、暗い目をして攻撃を繰り返す。最初はその矢や剣を跳ね返していた側付きの兵たちまでも、ふと動きを止め、向かってきたことで、王も息を呑んだ。

張られている結界の中で起こった一瞬の出来事は、守護龍たちにさえも止めようがなかったのだ。

「陛下 エスクリルド様！」

王妃の張り裂けるような悲鳴が上がる。

自分を支えていたはずの兵や、更にはいつの間にか集まってきたいた侍女たちにまで取り押さえられそうになるのを振り払い、倒れていく国王に駆け寄る。

背中に深々と突き刺さった矢が見えた時には、もう灰褐色の瞳は閉じられていた。

「陛下……！ あなた……！ しっかり しっかりなさってください！」

ただ何度も呼びかけて、震える手で国王を助け起こす。

先ほどエカルドを求めていた時とは異なり、蒼白の凍りついた表情。

それこそが王妃が真に愛し、最も大切にしてきたのが誰であるかはっきりと物語っていた。

滅ぼせ、滅ぼせ、全てを

ホロボシテシマエ

大きな大きな合唱が言った瞬間、空は叫んでいた。

「もう……やめてえ！」

胸にしっかりと抱きこんでいた剣を天に向かって突き上げ、声の限りに。

無我夢中の願いは、聞き入れられたのかどうか。

それを最後に群集の声はぴたりとやみ、彼らの姿も王宮も、そして自分自身さえも見えなくなるほどの白い光が周囲の全てを照らさず。

とても目を開けていられないほどのまばゆい光はやがて、王宮全体を飲み込んでいった。

\*

魔の少年が高笑いをしている。

さも楽しそうに、おかしそうに。

しかしその声さえも遠くかすみ、まるで耳鳴りに襲われているような気さえしていた。

暴れまわる化け鳥が引つ切り無しに襲い掛かってくる。

そしてその合間を縫うように振りかざされるのは剣と弓矢。

明らかに人間の手による攻撃は、ただしそれを繰り返す者の意思とは無関係なもの。

風之力では捕らえようもない幾多の『敵』に向かうエシユタンドは、必死で剣戟を繰り返していた。

その背後を守るのはクガル、そして残った私兵隊の隊員たち。

だが、一人、また一人と鳥の爪に傷つけられ、あるいは村人たちの放った矢を受け、倒れていく。

それでもなお、ぼんやりとした顔つきで襲い掛かる人間に対して魔の力を使うことだけはできないでいた。

追い討ちのように降り始めた雪が視界を邪魔し、呼吸はどんどん荒くなる。

ついにエシユタンドの意識が朦朧としはじめ、絶望、という二文字が浮かんだ。その瞬間だった。

「殿下　…！」

「待たせたな、王子！」

ルストの声と重なるように響いた、颯爽たる呼び声。

この場にあるはずのない声の持ち主と視線を交わしたエシユタンドは、藍色の瞳を見開く。

「イラル！　なぜ、ここに……！」



「説明は後だ！とにかく手助けに来てやったから、ぼさつとしてんじゃねえぞ！」

荒い語調が、遠くなりかけていた意識を引き戻して エシユタンドは頷いた。

そうだ、ここで負けてしまつては、やつらの思つたつばなのだから。もう一度自分を奮い立たせ、クガルと共に人々の攻撃を跳ね返し、上空に浮かぶムルグに狙いを定める。

一瞬の隙についての風はひらりと避けられてしまったものの、舌打ちと共にゆがんだ彼の表情が、その危うさを物語っていた。

「おおつと、危ない危ない。まったく油断も隙もあつたもんじゃないね。どうやら遊びはお終いのようだ」

「うるせえ　しゃべくつてる暇があれば、降りてきて勝負してみやがれ！」

挑戦的なイラルの言葉に片眉を上げて、ムルグは笑う。

「嫌だね。勝負なんてしてやる義理もない」

言い捨てて、唇をなめる少年。

しかしその余裕の瞳も、イラル率いる特別山岳部隊の兵たちが獣を押さえ込んだことで鋭くなった。

「こいつは俺たちに任せろ！」

大地の力を使い、大きな岩をぶつけられた獣が暴れる。

イラルが起こした細かな石の礫で傷ついた箇所から、血が流れていく。

「くつ……生意気な！」

全く同じ部分から流血する自身の体を悔しげに押さえ、ムルグが上昇する。

同時に命を下されたらしい化け鳥たちが、イラル一行を襲った。

「させるか！」

叫んだエシユタンドが起こした風が、吹雪となってその攻撃を遮る。

風に卷かれ、苦しんだ鳥たちがばたばたと雪面に落ちていく。

「殿下　村人たちは我々が！」

攻撃術で隙をついたルストたちが、操られた村人たちを次々に取り押さえた。

もともと自身の意思を奪われたままの彼らは、ただぼんやりとその場に倒れていく。

彼らの背後にいたケイマが舌打ちをし、身を翻すのを兵たちが追う。

「ベニ工隊長……！　待つてください！　なぜこんなことを……！　？」

ようやく追いつき、対峙したルストが剣を手に立ちはだかるベニ工に問う。

厳しい表情はどこか危うげな、狂気に満ちたものだった。

「なぜ　？　理由など必要ない！　私は主君の命に応じただけ。それだけのことだ！」

特に剣戟に長けたベニ工が振り下ろす大刀は、恐ろしいほどの速さでルストを襲う。

もはや答えなど彼にもわからないのかもしれない、と額に流れた汗を拭った。

この場にあふれる狂気の力　赤い血のような石が、少しずつ心を歪ませ、狂わせていったのだと感じながら。

化け鳥は鳴き、暴れ、鞭のような尾で介入する。もはや混乱の中、どちらがどちらを攻撃しているのかもわからなくなっていた。

きいん、と甲高い音を立てて弾かれた剣。息を呑むルスト。しかし皮肉なことに、とどめを刺すべく振り上げられたベニ工の剣は途中で止まった。

いや、止められてしまったのだ。仲間であったはずの、化け鳥の猛攻によって　。

「ベニ工隊長　！」

思わず叫び、駆け寄ったルストの前で、ベニ工はただ両目を見開いて、口を開けたまま息絶えていた。

倒れた背から流れ出した大量の赤から、兵たちが目を逸らす。

「馬鹿な奴。だから大して役にも立たないって言ったんだ」

自分も同じように血を流しながらも、他者を嘲笑う魔の少年そのゆがんだ笑みを前に、エシユタンドが唇を噛みしめる。

「お前だけは……絶対に許さない！」

彼が叫んだ瞬間、まるでその想いを読み取っていたかのように動いたクガルが、素早く背に手をやる。

浮かんでいたムルグに矢を射かけ、一瞬の油断を作ったのだ。

「殿下、今です！」

クガルの声と同時に、エシユタンドは手の内に集めておいた風を一気に上空へと放出した。

猛吹雪となった風が、ムルグの体を絡みとり、捕縛していく。

苦しむ声がつんざくような悲鳴に変わっていき、全てを押さえ込んだとその場の誰もが信じた瞬間。

滅ぼせ。

低い、低い響きがそう言った。

滅ぼせ、滅ぼせ、全て滅ぼしてしまえ！

一気に巻き上がった音は、まるで大地そのものから鳴り響いているようだった。

遠く、王宮のある方角から白い光が空を照らす。

その清廉なる色から逃れてでもくるかのように、声が押し寄せてくる。

「何」

眉を寄せたエシユタンドがそのまま言葉を止める。

先ほどまで辺りを支配していた、自分の起こした風が飛ばされ、散り散りになっていく。

絡めとられていたムルグの体が、ゆっくりと落ちてくる。

一瞬意識を失っていた彼が、押し寄せてくる声に力を与えられたかのように羽ばたいた。

「滅ぼせ、滅ぼせ……そうだ、人間など全て滅ぼすのだ！」

再び開かれたムルグの瞳　そのまぎれもない赤を、息を呑んだクガルが見上げる。

「殿下、この声は……!!」

呼びかけた彼の、栗色の瞳が驚愕に見開かれた。

エシユタンドが雪面に膝をつき、苦しげに顔をゆがめていたのだ。

「王子、どうした!？」

「殿下!」

口々に呼ばれてもなお、動かない。

震える両手を握り締めて、まるで何かと戦っているかのように。

「ぐっ……」

どくと脈打った心臓を掻き毟ったエシユタンドが、荒い息を吐き出す。

彼が苦しむ間隔と合わせたように、風が唸りを上げる。

不自然な風の動きで気づいたイラルが駆け寄ってくる。

全てが、一歩遅かった。

滅ぼせ、滅ぼせ、滅ぼせ……!!

地鳴りのような声の中、ゆっくりと起き上がったエシユタンド。

その美しい藍色の瞳の奥に、ゆらりと揺らめく赤い炎。

「殿下　そんな!」

支えようとしたクガルの手は、強く振り払われる。

それと共に舞い上がった雪が、自然のものではない風のせいだと

気づいた彼が、息を呑む。

「力の、暴発……いや、まさか」

イラルが呆然と口にする前に、エシユタンドの唇が動いた。

「来るな……私に、近寄ってはいけない!」

苦しげに、それでもなんとか告げられた言葉で、皆が動きを止める。

爪が食い込むほどに強く強く両手を握り締めても、なお身の内で  
暴れ出そうとする力　それが、魔の力であることを、エシユタン  
ドは思い出していた。

先ほどまで淡く見えていた白い光は消え、後に押し寄せてきたのは禍々しい何か。

目には見えないはずの意思に、自分の中の力が引きずり出されようとしている。

強すぎる力は、危うい。

以前にそう言ったのは、誰だったか。

聖殿の巫女、森と滝の精霊、脳裏に交互に現れては消える顔の中で、一つ鮮やかな藍色の瞳が閃く。

『いけない！』

確かに、彼女はそう言っていた。

肖像画でしか見たこともないはずの、懐かしい面影。

幼い頃に夢見た存在　自分の、母親。

幻覚の中で、必死に止める声を聞いた気がしたけれど。

既に抑えようとする意思の力を乗り越えて、指は一本一本開き始め、腕は上がっていく。

自分の力を無視して、風が唸り始める。

「殿下　！」

悲痛なクガルの声を掻き消し、止めようとするイラルの体も押さえ込み、暴れ始める風の群舞。

全てをなぎ倒そうと狂い始めた風は、暗い森を駆け抜けて。次々に化け鳥を巻き込み、潰し、切り裂いた。

紺色の巨大な獣にも襲い掛かる風の攻撃。誰もがただ見ていることしかできない猛攻の中、動いた影が一つだけあった。

同じ色の翼で包むようにして自分の双体を守るのは、魔の少年。

その唇が、何かを言おうと動いたのを最後に、風がどちらをも飲み込んだ。

自分の体にも吹き付けてくるのが、風なのか雪なのかさえも既にわからず、エシユタンドは片膝を付く。

それでもまだ止まらぬ風は、徐々にすさまじい勢いで木々までもなぎ倒していくのだ。

「殿下……もういいのです、魔は全て　殿下！」  
クガルが止める声も、遠くにしか聞こえない。自分が魔を倒したのかどうかもわからなかった。

幻覚のように囁き続ける声に押されて、力はあるけれど、周囲の木々を根こそぎ倒しながら、森の　いや、世界の嘆きが聞こえるような気がしていた。

滅ぼせ、とそそのかす低い声と、それを止めようとする自分の意思。

ついに両者の戦いが限界を超えようという瞬間、わずかに打ち勝った風が矛先を村人たちに向ける。

意識を失った彼らをかばう兵たち　自身の仲間にも襲いかかっ  
ていく風の暴走に、皆が悲鳴を上げた。

「だめだ……だめだ、だめだ　！」

自らの手を離れ、意思に背き、まっすぐに彼らを引き裂くべく向  
かっていく風。

それを止めることだけしか、頭になかった。

声の限りに叫び、腰の硬い感触を見つけた瞬間、脳裏に一瞬だけ  
よぎった面影は　切ないほどに美しい、黒い瞳の笑顔だった。

荒れ狂う力を抑えるための唯一の手段。

それは、自らの胸に刃をつきたてることだったのだ。

『ほ・ほ・ほーたる来い。あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ』

ほ・ほ・ほーたる、来い　優しくしゃがれた声が、そう歌っている。

重なるのは、幼い子供の高い声。

澄んだ流れの川沿いを、手に手をとって歩くのは　ああ、そうだ。おばあちゃんと、小さい頃の自分。

遠い幻を眺めながら、空は自分が白い白い世界に浮かんでいるのに気づいた。

どこまでも清浄な光に包まれて、不思議と安らかな気持ちにする。浴衣を着せてもらい、歩いた田舎道。

祖母に手を引かれていた小さな自分は、いつの間にか成長し、高校の制服を着ている。

友達と笑いあい、苦手な勉強を一応こなし、そしてバスケットボールを追い、コートの中を走っていく。

何でもない光景の一つ一つが輝いて見えるくらい、全てが懐かしくてたまらなかった。

いつしかただ離れて見ていたはずの自分の意識は、幻の自分と重なり、その行動を共にしていた。

学校風景ばかりだった場面は移り変わり、やがて自分の家が映し出される。

そこにいるのは、父と母　料理をし、新聞を読み、テレビを見て談笑する二人。

ああ、あれは……あの日の朝の光景。

なぜか、そう確信していた。

鳴り響いていた目覚ましをつるさそうに止めて、寝ぼけ眼で床に下り立ち、何気なくタンスを開ける自分がある。

その手が扉に触れた瞬間、白い光が更に明るく周囲を照らした。  
「お父さん、お母さん……みんな！」  
思わず声が出る。

なぜなら、その扉の向こうには、空の会いたい人々が笑って手を差し伸べていたのだ。

友人と家族、そして自分を生み育てたあの世界が、扉を開いて待っている。

何もわからないまま、それが道なのだと気づいた。

あの手を　差し伸べられたあの手をとれば、帰れる。

苦しいほどに胸は高鳴り、押し寄せてくる懐かしさに背中を押される。

一日も忘れたことなどなかった。  
帰りたいと何度ひそかに願ったことだろう。

けれど皮肉なことに、それが道だとわかった途端に足がすくんだ。  
背後に聞こえてくる、静かな歌。

それは祖母にせがんで歌ってもらったあの歌で、優しいメロディに涙があふれる。

そうか　そうだったのか、となぜか全てが飲み込めた。  
この歌こそが、鍵だったのだ。

自分がなぜあちらに送られたのか、そして何をすべきだったのか、不思議なことに今の空にはわかっていた。

だから、振り向いた。

まだあきらめきれない扉を見上げ、それでも振り向いてしまった。  
瞬間、ゆらりとまるで塵気楼のように立ち上る、美しい緑。目の前に現れたそれが、大きな鏡であるとわかった時には、叫んでいた。  
「エシユタンド　！」

鏡の向こうに映し出されるのは、凄惨な戦闘風景。いや、全てがなぎ倒された後のようだった。

荒れ狂う風がエシユタンドの力によるものなのだとすぐにわかるのは、彼がそれを止めるべく苦痛の表情をしていたから。



そして、ついに耐え切れぬように腰の剣をとった彼の胸が鮮血に染まった。

声も出せず、呼吸までもが止まったような気がした。

深く深く心臓に突き立てられた剣が、彼の鼓動を止めていく。力を失った体が、ゆっくりと雪原に倒れこむ。

嘘のようにやんだ風の中、兵たちが蒼白な顔で駆け寄っていく。

藍色の瞳はそれさえも映すことはなく、固く閉じられていて今まさに、その命が絶えようとしているのだと伝えていた。

自分の心臓が握りつぶされるような痛みが、空を襲った。

大切な、愛しい命が失われようとしている。

その事実が、全ての迷いも葛藤も打ち消した。

遠く開いている扉にきっぱりと背を向け、空は鏡の中のエシユタンドに向かって手を伸ばしたのだった。

「目覚めましたか？」

優しい声が耳元で響いて、空はゆっくりと瞼を開いた。

最初に見えたのは、淡い光。

絹糸のように、艶やかに流れるのが限りなく白に近い銀色であることが、覚醒していくに従ってわかった。

それが目の前の巫女の髪であったのか、それともそのそばに静かに佇む獣の毛並みであったのかは定かではない。それほどに彼女とその獣のまとう色は似ていた。

「ディーラさ……ディーラ様！ それに」

「あら、『様』なんていらぬのに。それから、この子はエーネよ。二人でこうして姿を見せるのは、初めて会った時以来ね」

ふふ、といたずらっぽい笑みを浮かべる美しい巫女　白銀の長

髪に、不思議な薄紫色の瞳を持つ彼女は、そつと隣にいる聖獣エーネの首を撫でている。

まるで物語に登場する一角獣のようなその神々しい姿を目にしたのは、ディーラの言うとおり二度目になるが、まだまだ見慣れたわけではなかった。

その証拠にというべきか、空は緊張した顔で二人を見上げていた。「私……ぼんやりしている場合じゃ……！ 王宮は？ 人々は一体それに」

操られた反乱軍の猛攻、彼らを先導するエカルド、取り乱す王妃、そして矢に倒れた国王 脳裏に凄まじい勢いで再生される、先ほどまでの記憶。

無我夢中で剣を手に祈っていた自分と、それから 。  
「エシユタンド……！」

声にした瞬間、彼が自らの胸に刃を突き立てて倒れた映像が蘇った。震える膝をかきあわせて立ち上がる空を、ディーラがそつと支える。

「ディーラさん、あたし……行かなきゃ、行かなきゃいけないんです！」

早く助けに行かなければ、そうあせる心とは裏腹に、ふらつく体は思うように動かない。

それでも必死で前へ進もうとする空の動きを遮ったのは、穏やかな紫の瞳だった。

「エーネ……？」

意外なことに、止めたのはディーラではなく、聖獣のほうだったのだ。淡い光を放つ白銀の体をそつと空に押し付けるようにしながら、何度も首を擦り付けてくる。

思わずその細長い角に触れると、湾曲した三日月のようなそれがぼんやりと発光し始めた。

温かな熱まで伝えてくるその光が、何かに似ている そう思った空が、エカルドに奪われた森の宝玉を思い出した瞬間。

角の発光は終わり、エーネがその身を引いた。

「あなたを止めるつもりはないわ。ただ、強い力を放った後の体で行かせるわけにはいかなかったから　エーネに少し癒してもらったの」

足元まで垂れる長い白銀の髪をそつと背に流して、ディーラが微笑む。

初めて会った時と同じように優しい微笑は、あいかわらず年齢不詳ではあったが、不思議な威厳は実際彼女が生きてきた長い年月を感じさせるものではあった。

「強い力……？」

何のことだかわからない顔をした空に頷き、すぐに身を翻して歩き出したディーラ。

それが付いてくるようにと促しているのだと気づいた空は、少し遅れて後を追う。

すぐに気づいたのは、さっきあれほど重く感じた体が嘘のように軽くなっていたことだった。コツコツと音を立てて自分が歩いているのが、バルコニーであることにもようやく意識を向ける。

ところどころが壊れ、やや歩きにくくなっていることを除けば、戦いの前に立っていたのと同じ場所だ。

倒れた王は、そして群集は　エカルドはどうなったのだろう。全てを強い光が飲み込んだ気がした。

あれは一体、どういう力だったのだろう　。  
空が疑問を胸に抱いたその時、ディーラが歩みを止め、振り向いた。

「これを見てご覧なさい、ソラ」

手すりの向こう側を片手で示されて、戸惑いながら視線を向ける。黒い瞳が見開かれたのは、想像もしない光景のせいだった。

王宮の外だけではない、内側にもばたばたと人々が倒れている。

群集も王宮軍も、誰もが重なり合っているのを見て一瞬思った不吉な可能性は、微笑んだディーラが否定した。

「眠っているだけ　心配ないわ。ちなみに国王陛下も矢傷はあるものの、無事よ。他の巫女たちが王妃と共に保護している」

「そ、そうですか……よかったです。でも、どうして？」

問いかけた空を綺麗な紫の瞳に映して、歩み寄ってきたディーラがそつと触れたもの　それは、空の手にある白水晶の剣。

「そうか、剣が……精霊の力が助けてくれたんですね！」

心底ほつとしたように笑顔になった空の頬を、黙ったまま優しく撫でる。

巫女長としてというよりも、まるで姉のような　母のような温かい手の平。

見つめる瞳を細めて、ディーラが唇を開いた。

「ついに、決めたのね。あなたの心のままに　道を選んだのね…

…希望の子」

「はい……！」

そう答えた瞬間、胸にわきあがってくる想い。

全てが波のように押し寄せて、そして遠ざかっていく。

「ここは私たちに任せて、行きなさい。あなたの行くべきところへ」  
しっかりと頷いた空が剣を手に階下へ向かおうとした、その瞬間、  
ばさりと大きな羽音がして、風を感じる。

振り仰いだ空は、そこに浮かんでいる白い巨大な影に圧倒された。  
エーネの放つ清らかな気配とはまた異なる、不思議なほどの透明  
感とその周りを包んでいる。

まるで、帳の落ちた王宮と同じように、闇に映える完全たる白。

すべらかな鱗に覆われた体に生えた、やわらかそうな羽を幾度か  
動かしたそれは、空の足元に音もなく降り立った。

乗れ、とでも言うかのように首元を寄せてくるのが、魔のモノだ  
なんて信じられなかった。

そんな空の心を読み取ったかのように、ディーラが口を開く。

「それはね　元々魔とも聖ともつかぬ、中間の存在として生まれ  
たモノ。だからその心は真っ白で、周囲の環境に寄っていかように

も染められた。封じ込められた時代に魔とされたのは、人々がそれを知らなかっただけ。契約は果たしたけれど、命令を守りきることはできなかった。誇り高い彼らは、代償を取らないと言っているわ」「では……国王陛下は」

「ええ、大丈夫よ。その代わりに、もう龍はミデイスを守ることはない。再び自由の身に戻り、世界のどこかへ消えるでしょう。だから、人間を助けるのはこれが最後……さあ、乗りなさい」

デイーラの言葉にしっかりと頷いて、空は光るその背にそっとまたがる。

ちようど羽の根元にしがみついた空を乗せて、高く高く舞い上がる白き影。

「エシユタンド……！」

その名に反応したのか、それとも最初からどこへ行くべきかわかっているのか。迷いもなく風を切って龍は飛び立っていく。

待っていて。もう、あなたから離れないから……！

願い、祈る空の背後には、大きな月が浮かんでいた。

真つ白な雪景色　その美しい銀世界は、いまや破滅の風景と化していた。

魔も兵も村人も一緒くたになつて、吹き飛ばされたまま転がっている。木々はあらかたなぎ倒され、折れて無残な有様を晒している。他の誰もが意識のない中、倒れたエシユタンドのそばに近づくと音があつた。

新雪を一步、一步踏みしめながら、彼のすぐ足元で止まったのは黒い靴。

同じ黒一色の衣装に身を包んで、フードにすっぽりと顔を隠した人物が、真つ赤な鮮血で染まった雪にそつと触れる。

胸に突き刺さつた剣は、非情な冷たさのままに、エシユタンドの脈を奪つていく。

朦朧とした意識の中、自分を見下ろしている影を瞳に映した彼は、乾いた唇をかすかに動かした。

「お前、だつたんだな……」

そう呟いた声は、不思議と落ち着いたものだった。

弱々しい呼吸を繰り返す喉元に光るチョーカー、その中央にはめ込まれた深緑の宝玉を無造作に取り出した後、男は静かにフードを下ろす。

「ごめんなさい、兄上」

いつもと同じ微笑を浮かべた顔が、まぎれもない弟のものであると知つてもなお、藍色の瞳は揺らがなかった。

何の感情も見せない水色の瞳はゆっくりと伏せられ、エカルドは倒れた兄の額に口付けた。

「あなたを心から愛しています。そして　心から憎んでもいたのですよ」

囁きだけで告げられた言葉は、吹き荒れる風の中でもはつきりと

聞こえた。

かすむ視界はそれでもエカルドの次の動作を映す。

懐を探り、取り出したものは金と銀の腕輪。そして今エシユタンドから奪ったものと、更にもう一つの想緑珠を何の感慨もなく腕輪の中央　もともと石をはめこむべく作られた部分にかちりとはめ込んだ。

思わず遠ざかりかけていた意識が戻ってきて、わずかに息を呑んだエシユタンドの前で、腕輪は何の反応も見せはしなかった。

「当然ですよ。真の王者でも、彼を支える暁の娘でも何でもない者  
の手で、無理やりはめられたのだから　それに、もとよりこんな  
もの、大した意味など持つてはいなかったんだ」

嘲るように呟いたエカルドが、自らの腰に差していた剣を取り出し、構える。

緑の石をはめこんだままの腕輪は、振り下ろされた剣のもとであつさりと叩き折られてしまった。

「こんなものが世界を救えるわけなどない。救う必要もない。壊してしまつたほうがいいのです、こんな世界は……何もかも」

降りしきる雪よりも冷たく、凍えるような声音で言いながらも、エカルドの頬には涙が流れていた。

仮面のような蒼白な顔が、彼の心をそのまま表しているかのようだった。

「さようなら、兄上」

すらりと抜かれた刀身に落ちた雪が、涙のようにつたっていく。

今にも消えそうな息の根を更に止めるべく、喉元にぴたりと切っ先を当てるエカルド。

だが、エシユタンドは微笑み、閉じた瞳から涙を流した。

「すまなかつた、気づいてやる事ができなくて」

剣に力を込めようと近づいた体を、血に塗れた両腕で抱きしめられて、エカルドがその動きを止める。

耳元で小さく名を呼ばれ、水色の瞳は不意に迷子の子供のような

頼りない色を宿した。

それはいつもの彼のようでも、またもつと昔の幼い弟の表情のようでもあった。

震えた手が剣を取り落としかけた瞬間、暗い囁きが大地の遙か底から響いてくる。

滅ぼせ、と。

頭を押さえて、苦痛の顔を見せたエカルドが再び開いた瞳は、鈍い赤に光っていて 禍々しい力が、存在が、彼に乗り移っていくのが感じられた。

一瞬吹き荒れた吹雪がやみ、気の遠くなるような静けさが雪原を包む。

新たな血が、エシユタンドの首元からあふれ出す。

弟の手によって切りつけられた傷が、最後の命の雫まで吸い取っていく。

「やめて！」

遠く、高い空から現れた娘が叫んだ。

まだその視界に入るわけもないこの雪原での出来事が、まるで近く見えているかのように苦しげな表情で。

銀の武装、黒い髪、黒い瞳 もともとミディアスに存在し得なかったはずの、異世界の娘。

彼女をのせた白き龍が、雪の上に舞い降りる。

金の髪と水色の瞳を持つ青年が、エカルドの顔をした違う存在であることを知る少女は、臆することなく赤い瞳を受け止めた。

全てを、滅ぼしてやる……！

不気味な反響を伴って、声はどんどん大きくなっている。

その声に 意思に負けぬように、彼女は両手で胸元の剣を握り締めた。

水色の鞘から抜き放たれた剣は、純粹な白水晶の塊。

透明で、清浄なそれが映し出すのは、持ち主の心そのもの。

「お願い、もうやめて……！」



叫びと共に、想いがあふれ出ていく。

もう誰も傷つけないで。世界を助けて　そう願う彼女の手にある剣から、いや、彼女自身からまばゆい光が生まれる。

体全体を包み込んだ白い光は邪な力を飲み込み、そして全てを照らし始めた。

同時に東の空が明るくなっていく。

夜明けが訪れようとしていた。

何もかも滅ぼしてしまえ。

そうしなければ、辛すぎる。

全てを滅ぼすのだ。

全てを、そして自分の存在も消えてなくなればいい。

そうすれば楽になる。

これ以上彼女のいない世界に、生き続けなくてもいいから。

空は、頭の中に響く低い声を聞いていた。

自分は変わらず雪原に立っていて、目の前にはエカルドがいる。

それはわかっている。

決してそれがエカルドではないことも。

赤い光に支配されていた瞳を閉じ、苦しげにその場に膝をついた彼は、荒い呼吸を繰り返す。

黒いマントが　いや、影となったものが、その体にまとわりついて、更に苦しみを増しているようにも見えた。

世界をこの手で滅ぼす。滅ぼさなくては、ならないのに。

既に声は影の中から聞こえていて、それを発する声の主すらわからない。

けれど恐れることもせず、空は一步足を踏み出した。

「この世界を滅ぼしてはいけない」

そう告げると、空気そのものが反発を示すように、空に襲い掛かってくる。

なぜだ。

彼女がいない世界など、何の価値もありはしない。

「そんなことはないわ。みんな、この世界が大切なもの。一生懸命生きてる」

嘘だ。

自ら生み出し、愛しんだ世界の人間は心乱れ、この手を離れていくばかり。

こんな世界はいらない。彼女のない世界はいらない！

低くくぐもっていた声は、いつしか苦悶に満ちた叫びとなり、雪を吹き荒らし、風に混じり、駆け抜ける。

黒い影が渦を巻き、濃密な闇になり、そしてやがて 黒髪の、一人の青年の姿に変わる。

うつろな黒い瞳から流れた赤い血の涙が、乾いた音を立てて結晶に変わる。次から次へと、流れるそばから石となって転がっていく。彼の顔には何の表情も浮かばないのに、赤い宝玉は刃となって、彼自身の手の平を傷つけていた。

我が涙は我が心の血。これは滅びの赤だ。

この血晶石は魔に力と人語を与え、人間の心を狂わせる。他ならぬ私こそが、世界の破滅を 拮抗を狂わせることを願ったから。

ゆがんだ笑みを浮かべ、破滅を呼ぼうと手をあげる青年の瞳から、血晶石が生まれ続ける。

一見恐ろしい光景にも、見つめ返す瞳は穏やかなままだ。知るはずのない青年の心が、彼女には見えていた。

嘆き、滅びを叫びながらも、ただ彼が求めているたった一つのものが。

「もう、苦しまないで……」

優しく言ったのは、空の声ではなかった。

同じ黒髪と黒い瞳を持つ少女、しかし空とは異なる顔つきの、不

思議な面影が彼女にぼんやりと重なる。

「ア、メ」

その姿を見とめた青年が、呆然と呼んだ。

青い空、赤い空、遥かな空よ。あの人を連れてきて。愛しい、愛しい、あの人を。

短い夢、儚い夢、優しい夢よ。あの人を見せておくれ。恋しい、恋しい、あの人を。

空より高い、夢より近い、遥かな世界へ。いつかは共にと願うだけ。願いを空に、希望の空に、我らが愛しい、空の子に

彼女が歌い終えたその時、完全なる夜明けが訪れた。

既に剣は手にしていないにも関わらず、しとやかな彼女の体全体から いや、身にまとう空気全てから目に見えぬ色に塗り替えられていく。

朝の光に照らされる雪原は、凄惨な戦闘の光景はそのままに、ただ倒れた人々の体から傷も流れる血も拭い取った、平和なものへと変貌していた。

「なぜ、世界を救うのだ」

訊ねた青年に、彼女は微笑む。

「あなたの作った世界を愛しているから。そして本当はずっとあなたを愛していたから」

切ないほどに美しい微笑みが、黒い瞳を見開かせる。

「兄であるあなたに惹かれてはいけなさと、道に背くまいと私は耐えた。苦しかったのは自分だけだと思っていたのでしょうか。おろかな方……」

再び抱きしめたのは、青年のほうだった。

「しかし、人間は」

ゆがんだ表情で言いかける唇を白い指でそつと制して、彼女は言った。

「迷い、裏切り、憎しみ、道に背く。それもまた人間。そんな弱さも含め、私は人を愛している。迷うからこそ乗り越える。背くからこそ身を正す。悲しみがあるからこそ、愛が生まれるのです。人間の歩みに任せ、世界を彼らの手にゆだねる。それもまた愛です。さあ、もう、苦しむのはやめましょう」

「共に、来てくれるのか」

人間のような、かすれた声で彼は問う。

震える手の平で、目の前の少女の頬に触れながら。

こくりと頷いた彼女を、青年が強く抱いた。

まるで血の海のようにあふれていた彼の涙の宝石は、その瞬間に消えうせていた。

\*

遠く、鳥のさえずりが聞こえていた。

穏やかな静けさの満ちた空間　豊かな森の中でエシユタンドと空は目覚めた。

手と手を取り合い、互いの無事を確かめ合った二人は、深緑の香りに導かれるように振り返る。

どこかで嗅いだことのある、優しい香りに呼ばれるまま、歩みを進めていく。

緑の木々が少し開けた場所で待っていたのは、深緑をそのまま写

し取ったような髪と瞳をした精霊たちだった。

「よく……役目を果たしてくれましたね、二人とも」

労うように微笑んだアルネンスが、長い髪を揺らしてそっと歩み寄る。

「全く、一時はどうなることかと思ったわ。危なっかしいんだから」  
そっけない口調と腰に両手をあてた高圧的な態度は、初めて出会った時となんら変わらない。

二つに結わえた髪を指先でもてあそぶルーカの隣に佇む女性がいることが、大きな違いではあったけれど。

「ルーラ、さん……？ 目覚めたんですね！」

嬉しそうに呼んだ空に頷いて、その両手を取ったルーラは、優しく緑の瞳を細めた。

「あなたたちならできると思っていたわ。アメの愛し子と、その半身である真の王、エシユタンドにならね」

「私が、真の王？」

眉を寄せて繰り返したエシユタンドは、ゆっくりと首を左右に振る。

「いいえ、私は たった一人の弟の苦しみにさえも気づけなかった。自らのうちで暴れる力を抑えることすら……そんなに弱い私が、王者となり得るのか」

瞳をふせて、厳しい表情を見せた彼にもルーラはしつかりと頷いた。  
「誠の王者たるものは、自身の弱さも知っている。そうでなければ、他者を愛しみ、導くことなどできない。唯一欠けていたもの、それをあなたはもう手にしたのよ、エシユタンド」

言葉と共に視線で示された先には、黒い瞳の少女がいる。

鮮やかな藍色の瞳でその姿を映していたエシユタンドの隣で、空が口を開く。

「あの……想緑珠も、腕輪も割れてしまいました。それにもうこの剣も、力を使い果たしてしまっただみたい。それでも？」

「宝玉やそれを受け止めるべき台座など、使う者がその力を手にし

ていれば必要ないものです。違いますか？」

さしたる事実ではないかのような笑みで、アルネンスが答える。  
ルーカさえも、いたずらっぽい瞳で二人を見守っている。

「想いを力にして、互いを結びつける。それが想緑珠の力。そして、魔をはらい、邪気を清め、癒すのが白水晶の剣の力。どちらも、もう二人の中に宿った力です。それこそが、真の王と王妃たるべき人物である証。森と大地、そしてそこに生きる人々を　いいえ、神でさえ救ってしまったのだから、そんなあなたたちになら、安心してミデイスを任せることができるというもの」

言ったルーラの背をそつと支えるアルネンス。そんな二人を満足げに見上げるルーカ。

三人の精霊の姿が、徐々に薄くなっていく。

「本当に、ミデイスは救われたのか」

彼らを追うように問いかけたエシユタンドの声に、返事は聞こえてこなかった。

けれど、二人の心には既に届いていたのだ。

森たちの歓喜の声が　この地を生み出した神がいなくなり、そして精霊たちがその役割を終えても、この自然に溶け込んだそれらの存在が、消えてなくなることはないのだから。

「ソラ……元の世界に帰らなくていいのか？」

訊ねた声に空は微笑み、万感の想いを込めて答えた。

「あなたを愛しています、エシユタンド　あなたのいる世界が、あたしの生きる場所だから」

固く抱き合った二人を見守るのは、緑の木々だけ。

枝葉をいっぱいに伸ばし、太陽の光を受け、きらきらと生の輝きを放っている。

濃い香りを立ち上らせる深緑の森で、二人は確かに聞いた気がしたのだ。

「ありがとう、私の愛しい子よ。どうか幸せに」  
そう囁いた声に、空の瞳から涙がこぼれ落ちた。



ばちばちと暖炉の炎が燃えている。

久々の穏やかなまどろみから目覚めた感覚　　まだはつきり覚醒しない瞳に映ったのは、亜麻色の髪の毛、泣きそうな少女の顔だった。

「姫君……お目覚めになられたのですね！　よかった……！」

寝台のすぐそばですつと見守ってくれていたらしいとわかったのは、抱きついてきたエマナの頬が冷たかったから。

震える肩をそつと受け止めていた空は、自分が一週間も眠り続けていたことを聞いた。

「一週間も……？　それで、エシユタンドは　　」  
「ここにいる」

突如背後から聞こえた返答に目線を巡らせると、わずかに苦笑した彼が腕組みをして扉にもたれていた。

「すっかりお株を奪われてしまったな」

「殿下　も、申し訳ございません。すぐに失礼いたします！」

「いや、いいんだ。ソラが目覚めるのをずっと待っていたのはお前も同じだから」

あわてたエマナが顔を拭って立ち上がるうとするのを制したエシユタンドは、寝台の端に腰掛ける。

「エシユタンドはもつと前に目覚めていたの？」

「ああ、三日前に。胸や首の傷はあの時の力のおかげで癒えてはいしたが、やはり疲労が大きかったのだらうな。国の一大事だったのだから、お前には余計に負担だっただらう」

優しい藍色の瞳に労われて、空は黙って首を横に振る。

「大丈夫。よく寝たからかな……もう全然なんともないよ」

冗談半分に肩をまわした空を囲んで、二人ともほつとしたように笑った。

温かいスープを持ってくるからとエマナが退室した後、部屋はな



ぜか沈黙に包まれる。

黒と藍色の瞳がかちあつて、どちらからともなく抱き合った。

「無事目覚めてくれてよかった……」

エシユタンドの胸の鼓動を聞いていた空は、囁かれた言葉に顔を上げる。

「エシユタンドこそ 本当に無事でよかった」

思い出すだけでも身を切られるような、あの時の光景。

この世で一番愛しい人が、その命を終えようとしている恐ろしさ。あの瞬間に、全てを決めたのだ。

それ以上を語らずとも、想いは通じ合っていることがわかる。

わかるからこそ、何も言わなかった。

「他の人たちは……？ みんな無事？」

しばらく抱き合っていてから、訊ねた空にエシユタンドが頷く。

そして表情を少し引き締めた彼は、空の両手を握った。

「食事をして、動けそうなら 早速で悪いが、共に来てほしい」

話すべきことがたくさんあるから、とそつと続けられて、空も姿勢を正す。

ちょうど扉を叩いたエマナが、スープとパンの載ったお盆を運んできた。

窓の外に降り続けている雪 その銀世界だけを見ていたら、何事もなかったかのような気さえするほど、穏やかに見える。

ともすれば同じように以前と変わらぬ姿を見せる王宮、ここ謁見の間さえも修繕の手が入ったものだ。エシユタンドが教えてくれた。群集の反乱はもちろん魔に操られたせいだったことは知っていたが、それでもあの狂気じみた進撃を思い出すと背筋が寒くなる。

わずかに震えた手をエシユタンドが握ってくれて、空は微笑んだ。「国王陛下、並びに王妃殿下のご入室でございます」

扉にいた兵の声で、その場に居並ぶ全員が叩頭する。

「顔を上げなさい」

王の指示で玉座を見上げた空は、杖をついたままの姿に息を呑む。常にあふれていた国王の威厳。それが今、弱々しく腰掛けた彼には全く感じられなかったからだ。

そばで心配そうにその体を支えていた王妃も、蒼白な顔で隣に着席した。

「エシユタンド、ソラ。今日二人を。そして皆を呼び集めたのは、公然の場で明らかにしておきたいことがあるからだ」

灰褐色の厳しい瞳を向けられ、王妃が細い肩を震わせる。

薄くのみ化粧を施した顔は、別人のように力ないものだった。

「反乱軍、いや、魔との戦闘の後、我が妃リダネアが自らの罪を全て告白した。次期王位継承者である第三王子の暗殺を一度ならず複数にわたって企て、更には牢に捕らえ置いていた魔の仲間、ケイマをひそかに逃亡させ、混乱に乗じて私兵を放ち、村の救援に向かったエシユタンドを襲わせようとした。結果的にその私兵たちは魔によって操られ、本来の目的通りには動かなかったとはいうが、それでも王族の暗殺は未遂であっても死罪と決まっているほどの重罪だ」

そこまでを容赦なく言い切った彼は、「しかし」と深い息を吐き出してから続ける。

ぼんやりと俯いていた水色の瞳は、戸惑ったように国王を映した。

「国王として下すべき判断は、今の私にはできない。なぜなら

彼女の罪は私の罪であるも同然だからだ」

「父上……」

思わず呟くエシユタンドを見下ろして、王は苦渋に満ちた顔を片手で覆った。

「夫としても父としても、私が器を満たしていなかったことがよくわかった。なぜならリダネアだけでなく、エカルドにも心の安寧を与えてやることが叶わなかったからだ。その結果苦しませ、道を踏

み誤らせた。全ては、この私の責任でもあるのだから」

「陛下　！　いいえ、全ては私が悪いのです。陛下に責任を課すつもりなどございません。どうかお顔を上げてくださいますか」

我に返ったように必死な顔で言いすがる王妃を見つめていた空は、心にずっと秘めていた疑問を口にせずにはいられなくなっていた。

「お聞きしてもよろしいですか」

唐突に切り出した空に、皆の視線が集まる。

黒い瞳は、まっすぐに王妃を映した。

「どうして……どうして、エシユタンドの命を？」

ずっと納得が行かなかった。

例え義理とはいっても、自らの息子と呼ぶべき存在を手にかけるうとするなんて、と。

責め立てたかった言葉は、思いのほか殊勝な王妃の態度で留まっ  
てしまったから　短い疑問だけをようやく発したのだ。

「苦しかったのです」

ぽつりと答えた王妃の、壊れた人形のような顔から涙が一筋こぼれ落ちる。

訝しげな目線の中、水色の瞳からは更に一筋、二筋と透明な雫が流れ、次第にとめどなく頬をつたった。

「ずっと……苦しくてたまらなかった。私はここにいるというのに、陛下のお心は今でもたったお一人だけを想っている。あの、稀有なる藍色の瞳を持った巫女の　彼女のことだけを。だから思ったのです。陛下と私の息子であるエカルドを玉座に据えることで、きつと私だけを見てくださるようになる、と」

エーデレードも、エルファンドさえも驚愕に目を見開いている。

それほどに王子暗殺を企てた理由は単純で　単純だからこそ、重い感情ゆえのことだったのだ。

「この世を去ってもなお、陛下の愛を得ているあの人が憎くてたまらなかった。憎くて、憎くて……だから、同じ瞳をした彼女の息子も嫌いだった。なのに、憎めば憎むほど自分の心は醜くなり、陛下

のお心は遠ざかっていくばかり。ああするしか、ないと思ったのです！」

ついに泣き崩れた王妃の肩を、国王がそつと引き寄せた。

どう言葉をかけるべきか長い間迷っていたように見えた。

嗚咽が少しおさまった頃になってようやく、王が口を開く。

「ラウレカを心から愛していた。それは本当だ。だが、今の私の心には、彼女はもう、安らかに眠っている。言葉にせずともわかっていると思っていた。そんなことだから、お前をここまで苦しめてしまったのだな」

ただ呆然と首を振った王妃の背をそつと支えて、王が灰褐色の瞳を向けた相手はエシュタンドだった。

「情けないことはわかっている。国王としての振る舞いではないことも。だが、私は既に守護龍からもこの命を返された者。生き恥をさらすつもりはそもそもなかった。この上は、私のこの命で全ての責任を」

「陛下、そのような……！」

静かに見上げるエシュタンドの前で決意を示す王のマントに、目を剥いた王妃がとりすがる。

「いけません！ いいえ、私の罪は私のもの。そして、あの子のエカルドの罪も。私が追いつめたから、あの子は……ですからどうか、私の命で贖わせてくださいませ」

両手を合わせ、必死に懇願する姿に胸をつかれて、空も言葉を発することができない。

今まで恐れ、憎んできた相手もまた、愛に苦しんだ一人の女性であつたのだ。

それならば、自分自身がいつそうならないと言い切れるだろう。思い浮かんだ可能性、それは誰にもあり得る足元の深い穴なのだと空は思う。

同じ思いを抱くのかどうか、藍色の瞳はただ穏やかだった。

「父上、母上も、どうぞお顔をお上げになってください」

「しかし」

言いつがる国王、いや父親を微笑と共に見つめて、エシュタンドは二人のもとへ歩み寄っていく。

静かな靴音だけが広間に響いて、すぐそばまで近づいた彼を、怯えた水色の瞳が見上げた。

「私は誰の命も欲してなどいない。もう、血は十分すぎるほど流れた。全ては終わったのです、父上。過去の憎しみや恨みにいつまでも執着しては、未来を生み出すこともできない。今、我々にできることは、共にミデイスの平和と繁栄を祈ること、ただそれだけだと思われませんか？」

エシュタンドの言葉に王妃はうなだれ、国王は深く深く、何度も頷く。

なぜか空の目にあふれた涙も、止めることができなかった。

翌日、国王によってミデイス全土に正式な布令が出された。

現国王エスクラルドが、第三王子エシュタンドに王位を継承するという知らせは、国王夫妻が病氣療養を理由に聖殿で余生を過ごすという話と共にたちまち広まった。

操られた記憶を失った民がその理由を疑問に思うこともなく、国中は王位交代の明るい空気に満ちていった。

そんな中、王宮の一つの宮で小さな騒ぎが巻き起こっていたことも、彼らの知る由もないことだった。

「殿下　おやめくださいませ！」

兵の制止する声が、駆けてきたエシュタンドと空にも聞こえた。

足を速め、扉を開けた二人の目に入ったのは、剣を手にしたエカルドの姿。

やつれた頬に涙を流しながら、周囲の止めるのも聞かず、自分の喉下に切っ先を突きつけているのだ。

「先ほどお目覚めになったと思っただけ……」

「守護兵から剣をお奪いになって」

付き添っていた侍女たちが、おろおろと説明する。

その言葉が終わらぬうちに、口を開いたのはエカルドだった。

「僕は……許されない罪を犯した！　いくら心の弱さを魔につけこまれたとはいえ、兄上を……こんな僕が、生きてはいけないんです！」

水色の瞳に涙をためて、叫ぶ。乱れた金の巻き髪が、青ざめた頬に張り付いていた。

魔も、そして彼らに力を与えていた赤い石も消えうせた今となっても、まだ眠り続けていたことこそが、どれほど彼が憔悴していたかを示している。

己の罪を許せないのだと、はっきりとその瞳が語っている。

「剣をおろすんだ、エカルド」

静かなエシユタンドの声に、痩せた肩がびくりと動く。

剣を握り締めている両手は、ぶるぶると震えだした。

「だめです、兄上」

つつ、とまた涙がこぼれ落ちる。

少し息を吐き出したエシユタンドが、一歩足を動かす。

「おろせ、ゆつくりでいい　さあ」

落ち着いた声で促されてもなお、エカルドは首を左右に振る。

固く閉じられた瞼から、涙はとぎれることなく流れる。

「そう、剣をおろして……こちらへ渡すんだ」

優しく言い聞かせるように指示するエシユタンド。

その声に剣を持つ手が下がりかけた、一瞬。

はっと我に返ったエカルドがまた腕を上げて　見守る全員が息を呑んだ。

「兄、上……」

乾いた唇から、消え入りそうな声もれた。

抜き身の剣をそのまま掴んだエシユタンドの拳から、赤い滴りが

落ちる。

瞬時に恐怖を覚えたようにエカルドが手を離して、からんと軽い音を立てた剣が転がった。

素早くそれを遠くに蹴り上げたエシユタンドの前で、エカルドが呆然と膝を折る。

「罪を犯すからこそ正すことができる、アメ神はそう言った。神が許した罪を　お前一人が背負うことはないんだ、エカルド」

ゆっくりと開かれた水色の瞳に微笑んで、同じ色の目を持つ人物を想うように、エシユタンドは言った。

まだ震えている肩にそつと手を置いてから、抱き寄せる。

「お前も私も、まだ互いを十分に知らなかった。苦しみや葛藤、全てを吐き出してこそ兄弟だ。そうではないか？」

「でも……！」

「お前の罪は、私にも背負わせてくれ。共に償おう……弟よ」

抱きしめられ、そう呼ばれたことで、エカルドは抵抗をやめた。

うなだれ、泣き続ける彼の顔は、いつしか幼い末の王子のものに戻っていく。

優しい手で背中を支えるエシユタンドを、空はずっと見つめていた。

エカルドと王妃も徐々に平安を取り戻してきた数日後、謁見の間によつやく全員が顔を揃えることとなった。

最後まで残っていた問題 ケイマの処遇を決するためと聞かされていた空は、緊張を隠せずに扉を見つめていた。

全て消えうせた魔の中で、唯一人間であつた彼だけが皮肉なことに生き残る結果となつたのだ。

操られた結果とはいえ、魔の側に味方し、王宮に反乱軍を呼んだ彼をどう処分するかは皆に注目されていた。

血縁でも王族でもない人物をそのまま放免するわけにはいかないだろうというのが、もっぱらの噂だつたのだが。

重い音と共に広間の扉が開いて、縄をかけられたケイマが兵に引き連れられてくる。

無表情に、引つ張られるままに歩く彼の瞳は、その場の誰をも映していないように見えた。

「では、エシユタンド。そなたの意見を聞かせてくれ」  
玉座に座つてはいるものの、既に王としての責務は実質息子に譲つた形となつていることは周知の事実。

だから判断を下すのは、藍色の瞳で厳しくケイマを見据える、第三王子の役目だつた。

「極刑に処すことは考えておりません」

凜とした顔つきで告げたエシユタンドの言葉に、広間がざわめく。咳払いをした王が静粛を要求し、その理由を問う。

視線一つ動かさないケイマは、まるで自身の処遇に無関心であるかのようだ。

「かといつて無罪放免とするには、彼の罪は大きすぎる。国外追放も考えたが、それでは他国で同じような罪を犯すとも限らない。結果 王宮で守護兵として雇うことに決めた」



「エシユタンド……！」

さすがの王も驚きをそのまま表情に出し、今まで黙り込んでいた当の本人さえも耳を疑うように顔を上げた。

「何を馬鹿なことを あんた、正気か？」

自分の命などこだわらないと態度に示していた彼が、ゆがんだ笑みを浮かべて口を開く。

「こいつ……！」

「殿下に何と言う暴言を！」

両端から槍で押さえられても、嘲笑は消さずにケイマが続ける。

「俺はあんたらを皆殺しにしようとしたんだぞ？ また同じことをしないという確信がもてるのか？ 俺は……後悔などしていない。貧しい者を虐げ、無視し、贅をむさぼってきたような連中の甘言など信じはしない。さっさと殺せよ そのほうがよっほどすっきりするね！」

すさんだ顔で挑発する、その瞳は悲しいほどに乾いていた。きつく兵から拘束される身をよじり、噛み付くように叫ぶ。

その濃い金髪が揺れるのを黙って見ていたエシユタンドが、わずかに瞳を伏せた。

「先のコルトス領主、テカロス。それがお前の父親だそうだな」

唐突に告げられた内容で、今まで何にも乱されなかったケイマの表情が変わる。

驚愕だけだったそれが、次第に怒りと屈辱の色に染まっていった。「調べたのか？ たかだか罪人の処分にご大層なものだ。王宮の次期王位継承者様のご威光をもってすれば、さも簡単なことなんだろうがな！」

「いや、教えてくれたのは……サーダルの民だ」

「何だつて？」

「サーダルの民が お前を慕っていた村の大人たちは全員知っていたよ。ずっと調べていたお前が持ち帰った書を、ひそかに見た者がいたんだそうだ。生まれがどうであろうと、俺たちの長であるこ

とに変わりはないと……そう笑っていた」

複雑な思いを瞳に閃かせて、エシユタンドが答える。

呆然としていた顔を再びゆがめて、ケイマは首を振った。

「嘘だ……あいつらが知っているわけがない。騙そうとしたって無駄だ。そんな手に引つかかるものか。うまいことを言っただけ俺を利用し、何かさせるつもりなんだろう」

「騙すつもりも、そんな必要もない。国の現状を知らなかった頃の言い訳もしない　だからこそ、こうして民を救おうとしているんだ。ケイマ、お前もその例外ではない」

ぶつかりあつた藍と茶の瞳は、しばらく互いに動かなかった。

息を呑んで見守る皆の前で、先に視線をそらしたのはケイマだった。

「ふん、ご立派なこつた。全てを許すっていうのか。だから守護兵として働いて、自分に跪けと？　偽善もいいところだ」

「エシユタンド……」

不安が呟きとなり、思わず呼んでしまった空にそつと笑みを見せて、エシユタンドが表情を引き締める。

静かな微笑は、動揺の一つも見せなかった。

「偽善でも、ましてや同情でも哀れみでもない。これが最善の処分だと思っただけだ」

「最善、だと？」

訝しげに顔を上げたケイマに頷き、次にエシユタンドが浮かべたのはいつもの彼らしい　皮肉げな微笑。

白いマントをはらって、堂々と口を開いた。

「王宮精鋭の軍隊、その一番下っ端である守護兵に身をやつせば、嫌でも鍛えなおされるだろう。一日中仲間の兵が見張っていてくれる。これほど最適な更正の場は他にない。違うか？」

「ふざけたことを……！」

ぎり、と唇を噛んだ少年につかつかと歩み寄つたエシユタンド

次期王位継承者は、勢いよくその頬を平手で打った。

何をするのかと言わんばかりに睨みつけるケイマを見下ろして、藍色の瞳は冷たく光った。

「ふざけているのはお前のほうだ！ 辛い身の上はわかる。どうにもならない辛さも、苦しみも しかしだからといって人を傷つけ、裏切り、信頼を無に帰していいはずなどない。操られた自分の心の弱さを反省する殊勝さも持たぬお前を、このまま許すほどの情けはさすがの私でも持ち合わせていないでな」

無言でいる彼に、エシユタンドはそばの兵から受け取ったものを突き出す。

それが古びた毛皮のマントであることを知ったケイマが、初めて動揺を顔に出した。

「これ、は……」

「サーダルの民から預かってきた。私の正体も、もちろんお前の起こしたことも彼らは何も知らん。長はまたふらりと旅に出たようだとき。今年は雪が深く、寒さが厳しいからとこれを渡してくれた。お前の行方を知っていたら、ぜひいとな。厚手の衣服すら満足に持たぬ彼らがこれを用意するのにどれほど苦労したか、お前ならわかるだろう」

エシユタンドが言い終わるのを待たずに、ぎゅうと毛皮を握り締めるケイマ。

その手つきは、古びたそれがまるで、この世で最上の品だと言わんばかりのものだった。

「だから私も、詳しいことは何も語らなかった。彼らは今も長の帰りを待っているんだ。すぐに戻れる覚悟がないのなら、王宮でその性根を叩きなおしてからにするんだな。そして サードルの民に恥じぬ自分になれ。その後のことは、自分で決める。私がこの国を作り変えていく間にな」

強く強く唇を噛み、うなだれるケイマはそれ以上の言葉を発することはなかった。

ぼたり、と落ちた涙が毛皮を濡らす。

「領主テカロスは、悪名高い人物だったそうだが、彼の死後に見つかった財産の一部は 不思議なことに聖殿に納められていたらしい。息子に渡してくれとだけ、遺言が残されている。妻との間に持った子は、娘ばかりだったにも関わらずな」

独り言のように淡々と語り、そのまま背を向けたエシユタンド。

見開いた瞳でその言葉を聞いていたケイマが顔を上げることにはなく 次期王位継承者の決めた処分に反対を唱える者など、いようはずもなかった。

全てが一応の決着を見たその夜、空はエシユタンドと共に夜空を見上げていた。

しんしんと冷えるこの季節、澄み切った空気のためなのか、星々の輝きも一層美しい。

「これで、終わったんだな」

「うん そうだね」

短い言葉を交わして、肩を並べる。

それだけのことがなぜか心地よくて、それでいてどこかくすぐつたいような気持ちがあった。

「アメ神の言葉……聞こえていたんだね」

いつの間にケイマの父親のことまで調べていたり、サーダルの民を訪ねたりしていたのかということもそうだが、空が最も驚いたのは先ほどのエシユタンドの言葉。

自分ですら夢のような気がしていた彼らの会話を、まさか意識のない彼が覚えているとは思わなかったのだ。

「ああ、不思議な感覚だった。まるで 神の夢を共有しているよ  
うな、そんな気分だったというべきか」

「あたしも……！」

まるで自分が思っていたことを言い当てられたような気がして、

つい声を上げた空は、藍色の瞳に見つめられて照れたように笑う。

「なんか、変かもしれないけど……二人のことを覚えている人がいてくれて、それがエシユタンドだったことが嬉しいの。魔に力と人語を与えていたのが、まさかエス神だったなんて思わなかったし、それを言ったところで誰も信じてなんてくれないと思ってた。巫女たちも、国王陛下もなぜか何も聞こうとしなかったから」

「聞かずとも、何かを感じていたんじゃないかな。頭で、というよりも 心の奥深くで、彼らの存在が消えたことを感じ取った。そんな気が私はしている」

表向きは魔との戦いが終わったというだけの話になっていて、誰も疑う者はいない。

二人が精霊に託された役目を果たしたことも、暁の娘の本当の意味さえも知らない。

でも、それでいいのかもしれないと空にも思えた。

「それよりも、神様なんて存在が本当にいたんだってことのほうがあたしには驚きだったけどね。あ、でもそれを言えば精霊や魔も、それに守護龍のことだって今までの常識からしたら考えられないことばかりだけど」

いや、違う 神という存在があったことよりも、彼らが悩み、苦しみ、愛し合う心を持つていたことに、というべきだろうか。

そういう意味では、神も人間も精霊も本来は大して変わらないような気にまでなってくる。

全知万能の存在、少なくとも遠くそんなイメージのあった空の知る神とは、全く異質な存在だったことだけは確かだ。

うまく言葉にできず、ただ一人物思いにふけていた空の肩を、エシユタンドがそっと抱く。

「エス神の苦しみなら、私にもよくわかる気がするな。たった一つ欲した愛が手に入らない時、全てを壊してしまいたくなるような…

…自暴自棄な衝動に囚われてしまう、という」

「エシユタンド……」

空にとつては常に優しくかったエシユタンドの眩きに、黒い瞳が一瞬見開かれ、そしてまた伏せられた。

妹であるアメ神を愛して、苦しみぬいた彼の心はいつから壊れていったのだろう。

そして今、彼女と共にある彼は 救われたのだろうか。

自分の生み出した世界に溶け込んで、二人で自分たちの行く末を見守ってくれているのだろうか。

それならいいと願う空の心を知るように、エシユタンドもただ黙っていた。

ふと隣を見た空は、いつの間にかすぐそばで見つめられていることに気づく。

穏やかな中に、一瞬の熱情を閃かせた藍色の瞳に射抜かれる。

どくと音を立てた心臓に戸惑う空の体を、エシユタンドが強く抱きしめた。

「本当に、私のそばにいてくれるんだな……？」

囁かれた言葉に頷くと、回された腕の力が強まる。

息も止まりそうな抱擁の後、愛しげに見つめられて言葉を失った。

「ソラ」

深い想いを込めた声が、自分を呼ぶ。

頬に触れたエシユタンドの手の平が熱い。

彼のそばにいるということが、どういふ事実を指すのか突然気づいた空は、緊張で視線を合わせられなくなった。

「あつ、あの、ね…… エシユタンド」

無言で唇に人差し指をあて、言葉を封じた彼が黒髪に指を絡ませていく。

さりげないようで熱のこもった仕草に、動けなくなって 心臓の鼓動が聞こえてしまいそうな気がした瞬間、扉を叩く音がした。

「失礼いたします、殿下、姫君。お休み前のお茶をお持ちいたしました」

疲れを癒し、快眠を導くのだという香草茶を、目を覚ましてから

毎晩欠かさず届けてくれるエマナのことを思い出し、助かった、といわんばかりに空が返事をする。

嬉しそうに扉を開け、盆を持った侍女を案内する背中を、藍色の瞳が苦笑と共に見つめていることなど知らずに。

「では、私はこれで失礼を……お休みなさいませ」

すぐさま退室しようとするエマナは、空に腕を引かれて目をぱちくりさせている。

「あ、あの、姫君？」

「えっと、だから、その あっ、そうそう！ せっかくのお茶だから、エマナも一緒に飲もうよ！」

「私が、でございますか？ でも……」

エシユタンドのほうを困ったように見やるエマナの腕を更に引いて、空が頷く。

「うん、なんならクガルさんやルストさんたちも誘ってみたらどうかな？ ほら、毎日訓練で疲れてると思うんだ。あっ、昼間作ってくれたお菓子もおいしかったし、あれ出してみんなでお話でもって、だめ……？」

さすがに自分でも唐突な誘いだということはわかっていたが、言い出しては後に引くこともできず、上目遣いで訊ねる。

黒と藍色の瞳を交互に見やっていたエマナに、エシユタンドが苦笑まじりに頷いた。

「我が姫たつての申し出だ。よければ、みんなを誘って星空見物とでも行こう」

「エシユタンド、本当に？」

申し訳なかった気分が、なんだかパーティーのような浮き足立った気持ちに変わっていく。

はしゃいだ空の頭を片手で撫でて、エシユタンドはエマナに食べ物やお酒の準備を頼んだ。





満点の星空を見上げられる白一色の庭で、夜更けの会合は幕を開けた。

最高の果実酒をなみなみと注いだ杯を高く掲げて、エシユタンドが笑みを浮かべる。

白い息も寒さも気にならないほど、その場の雰囲気は明るい。

火が焚かれ、外に置かれたテーブルには簡単な料理や菓子、果物を並べただけ。そんな気樂さが皆をくつろがせているのかもしれないかった。

人が人呼び、雪原にはクガルやルスト率いるエシユタンド付き私兵隊だけでなく、カルファーズやセイシエルの姿まであった。

「私が第一殿下のおそばを離れて、何かあつたらどうするのだ」

「心配しなくても他の隊員と守護兵がいるさ。まったく、カルは心配性なんだから」

相変わらずの主君びいきに、セイシエルがあきれ顔でため息をつく。

二人のやりとりを見ていたエマナとララが、くすくすと笑いあつた。

「あ、クガル様。こっちの蒸し鶏もおいしいですよ！ ほらほらエマナ、ちゃんとお取り分けして！」

ララの言葉に赤面しながらも、エマナがおずおずと料理をのせた小皿を差し出す。

「今日入ったマリー二茸の酢漬けです。クガル様、お好きでいらっしやるかと思って……」

そつと言い添える可愛らしい姿は、まるで初々しい新妻みたいだと思ってしまう。

空だけの印象ではなかったようで、少し頬を染めてお礼を言うクガルの肩を、ルストが意味ありげな笑みと共に叩いた。

「これじゃあ我々は邪魔者ですね」

「邪魔者は邪魔者同士、違う楽しみ方をするとしましょうか」

冗談半分言ったルストに、セイシエルが目配せをする。

いつの間にか取り出したバイオリンに似た弦楽器　アマレというのだとエマナが耳打ちしてくれた　を肩にはさんで、彼は楽しい音楽を奏で始めた。

「セイシエル副隊長、お上手なんですね」

驚く空にお辞儀して、「第一殿下ほどではありませんが」と謙遜する。

けれど十分な腕前を持った彼の演奏で、兵が侍女たちを誘って踊り始めた。陽気なメロディーに誘われるように、次々と踊りの輪は広がっていく。ぱちぱちと燃える火の回りを囲んで、即興で踊る皆の顔は明るかった。

「姫君、一曲いかがでしょうか？」

おどけた調子で手を差し伸べるエシユタンドに、空も笑って頷く。先ほど飲んだ果実酒でほんのりと頬は染まり、体はぼかぼかしている。くるくるとリードされるままに回って、何度も笑い声を上げた。いつしか曲調が変わって、ゆったりと流れるようなメロディーが始まった。

エシユタンドとダンスをするのは初めてじゃないのに　動作や視線一つ一つがとても優しく、ドキドキする。

どこかにいつもあった切ない光が影を潜めて、ただ包むような温かさだけを伝えてくれる瞳のせいだろうか。

吸い込まれるような藍色から目をそらせないでいるうちに音楽は終わり、気づけば周囲には誰もいなくなっていた。

「あれっ、みんなどこに……いつの間に？」

忽然と姿を消した面々を捜す空の傍らで、エシユタンドが「してやられたな」と笑う。

彼らが気を利かせてくれたのだとやっと気づいた時にはもう遅くて、大きな腕の中に捕らえられていた。

「もう、逃がさない」

囁きと共に間近で微笑まれて、自分のためらいなどお見通しだったのだとわかる。そばにいと決めた以上、いつまでも逃げているわけにはいかないことも。

それでも正直な心臓は高鳴ったままで、まともに顔を見られないでいた。

「ソラ」

呼ばれて反射的に顔を上げると、優しい手の平が頬を包む。

どきどきしながら言葉を待つ空を見つめる瞳は、思った以上に真剣なものだった。

「私はもう少してこの国の王になる。そしてお前は王妃に　怖い  
か？」

訊ねられて、一瞬ためらうものの、空は素直に頷いた。

「怖くないと言えば嘘になる、かな。でも、もう決めたから……あなた  
のそばにいたいということが、この国の王妃になるということなら、やる  
しかない。到底自信なんてないけど、やるからには精一杯いい王妃にな  
れるよう、努力するって決めた。それがあたしが置いてきた全てのもの  
　家族や友達、それに懐かしい世界に対する、  
たった一つの誠意だから」

秘めていた決意を口に出したら、自然と背筋が伸びた。

ようやく心を決められて、清々しい思いになっていいはずなのに  
　やっぱり優柔不断な自分は、涙を堪えることができなかった。

「ソラ……」

とめどなく流れる涙は、優しい指に拭われる。

「後悔しているか、とは聞かない。して当然だと思うからだ」

驚いたように見上げる黒い瞳に微笑んで、少し悲しげな顔をする。  
　エシユタンドのほづが、空の葛藤に心を痛めているように見えた。

「だから私も誠心誠意良い王になれるよう努力しよう。そして、良  
い夫に……お前にはこの国の誰よりも幸せな笑顔で笑っていてほし  
いんだ」

そつと耳元で告げられた愛の言葉に、空は黙って頷く。

こぼれ落ちる涙は止められなかったけれど、心からこの人のそばにいられてよかったと思った。

交わした口付けは今ままで一番穏やかな、幸せを感じさせるものだった。

二人だけの誓いを終えたエシユタンドが、空を静かに抱き上げて宮へ歩き出す。

まるでかけがえのない宝物を手にしたように、大切に愛しむ姿その美しい白い衣装に、降り始めたばかりの淡雪が輝きを添えていた。

\*

時は巡り、ミデイスに花の季節が訪れた。

鳥たちが嬉しそうにさえずり、緑は芽吹き、色とりどりの花がほころぶ。

王宮で働く人々の顔が明るいの、ただ暖かい季節を喜んでいるだけではない。

早朝からせわしなく行きかう侍女たちも、宮を守る兵たちも、誰も彼もがどこか浮き足立った表情をしているのは、今日この日に待ち望んでいた式典が行われるからに他ならなかった。

王位継承式と婚姻式 二つの喜びに満ちた祝賀の日である。

「な、なんかいっぱい馬車が正門に来てるみたい。ど、どうしようエシユタンド」

亜麻色の髪をした侍女と手を取り合って戻ってきたのは、黒髪の少女。まだ年端も行かぬ若い彼女は、次期王妃となる自分の身分に

全く実感が持てていないようだった。

この宮を使うのも今日で最後だということさえ忘れていたかのよう  
うに、あわてて部屋へ入ってくる。

「当然だ。エスタリア大陸の三大国に数えられるミディアスの、新王  
と王妃の誕生だぞ。周辺国が祝賀に訪れぬわけがない」

「そつ、それはそう、なんだけど……だって」

金の髪と藍色の瞳をした王子エシュタンドにあっさりと答えられ、  
困ったような顔をする。

この国に初めてやってきた時には短かった髪が、今は肩のあたり  
まで伸びていた。ただその長さというよりも、しっとりした黒を愛  
でるように撫でる。

彼の優しい手つきに頬を染める少女を、「ソラ」と低音が呼んだ。  
「誰もが若く美しい王妃を見ようと張り切っている。しっかりな」

「ちよつと わざと緊張させるようなこと言わないでつてば！」

赤い顔で怒る少女 まるで気取らない次期王妃を微笑ましげに  
見つめる侍女が、刻限を告げる。

式が始まるまでに、まず妃となる者は沐浴を済ませ、聖殿の巫女  
長たちから身を清める儀式を行うのが慣例となっているのだ。

「じゃあ、式で会おう。短い間だから、寂しくても我慢するんだぞ  
？」

あくまでも冗談めかした態度で送りだすエシュタンドにぶりぶり  
していた空は、侍女のエマナと視線を合わせて照れ笑いを浮かべる。  
「まったくエシュタンドったら、こんな日までからかってばかり  
なんだもん。困っちゃうよね」

気安い口調で同意を求めると、亜麻色の瞳が笑みに細まった。

「殿下は姫君の緊張をほぐそうとなさってるんですね。その証拠に、  
ほら 笑っていらっしやる」

先ほどまで固くなっていた頬が、いつの間にか緩んでいる。その  
事実を指摘されて、空は頬を染めて黙った。

なんだか悔しい気はするものの、自分の気持ちなどいつもお見通

しであるらしいと内心認める。あの藍色の瞳に微笑まれただけで、不安でいっぱいだっただ心が落ち着いたことも。

沐浴を済ませた後案内されたのは、収穫祭と雪祭りの際に入った祈りの間。

儀式の時にのみ使われる、厳粛な空気に満ちた空間　そこには、四人の巫女長たちが待っていた。

白銀の髪と薄紫の瞳を持つディーラが、一番初めに笑顔で迎えてくれる。

「ディーラさん、あの　その節は本当にお世話になりました」

「あら、お礼を言うのは私たちの方だわ。あなたのおかげで民は無益な戦いから解放されたのも。それに……よくこちらに残ってくれたわね」

嬉しいわ、と素直に喜ばれて、はにかむ空。

魔に操られ、剣の力で眠った人々を懸命に介抱してくれた巫女たちの働きにも、改めて感謝を述べた。

「さて、始めましょうか」

気楽な調子で言ったディーラの隣に、あとの三人も並ぶ。

それぞれの任された東西南北の位置を守って立つのだと、控えていたエマナがそつと教えてくれる。

中央に立つ空は、沐浴の後に用意された薄手の衣装を身につけていて、まるで夜着のような感触がどこか気恥ずかしかった。

しかしもちろんそんなことを気にする者など誰もおらず、自然と表情が引き締まった。

「東のディーラ、新王妃の誕生を心よりお祝い申し上げます。日の昇る聖殿からは、太陽の輝きを」

先ほどまでとは打って変わって、長としての威厳を感じさせる凜とした声が響く。いつもは月光のようにも見える白銀の髪が、今は窓から差し込む朝日に照らされて白く輝いていた。

その言葉が意味するとおりに、太陽から彼女自身が力を得ているようにも見えてくる。

「西のゼルダ、王妃様の健やかなるをお祈りして　日の沈む聖殿からは、月の安らぎを」

ひつつめた灰色の髪に、薄い緑の瞳をしたゼルダが、あいかわらず表情に乏しい顔で次を受ける。几帳面な手つきで、衣装の裾を軽く持ち上げて深々と頭を下げた。

「南のクシュレナ、美しき新王妃様が、いつも笑顔あふれる日々を過ごされますように。海風のそよぐ聖殿からは、海の神秘を」

ふわふわとした明るい金の髪をはらって、可愛らしくお辞儀をしたのは南の巫女長。屈託のない笑顔にどこかほっとする。

「北のカタレー、ご婚姻のめでたき日に　高地の厳格さを持つ聖殿からは、山の英知を」

褐色の長髪を一つに束ねたカタレーが最後に頭を下げる。凜々しい印象は雪祭りで会った時と全く変わらなかった。

「では、お手を」

侍女に指示されるままに差し出した空の両手に、ディーラが何か水のようなものを人差し指で付けた。

不思議そうな黒い瞳に、そばの侍女が捧げ持った器を示しながら「聖殿で清めた聖水よ」と笑う。

「ミディアスに新たに誕生した王妃よ、王のそばで彼を支え、民を想い、国を想い　良き王妃となりますように」

ディーラが言った途端、なぜか先ほど水を塗られた部分がじんわりと温かくなつた。ふと顔を上げると残りの巫女長たちも全員が瞳を閉じ、瞑想している。

本当に清らかな力のようなものが身の内に授けられたような気がして、厳粛な気持ちで空は佇んでいた。

聖殿の巫女長たちによる祝福と祈りが終わると、次は着替え

つまり婚礼衣装を身につける時がやってきた。

一点の曇りもない純白。その滑るような手触りだけでなく、豪華な刺繍や宝石の多さに驚く空を、侍女たちが笑う。

「王妃様、そんなにきよろきよろされては御髪が……お化粧も施せませんわ」

「おっ、王妃ってまだあたしは　！」

たちまち動揺を見せる空に、なおも笑いが巻き起こる。

「式典が済めばもう王妃様ですもの。今そっお呼びしたって変わらないではありませんか」

「本当に……いくら歴史深きミディスとはいえ、これほどに飾らない王妃様は初めてでございますよ」

背後で髪を梳かしながら、あるいは正面で化粧筆を操りながら言われて、黒い瞳がどうしたらいいかわからないと瞬く。

目が合ったエマナがそつと頷き、感極まったように頭を下げた。

「姫君、心からお祝い申し上げます……！」

初めてこの世界でできた友人の言葉は、自然と空の瞳も潤ませる。帰ることになるかもしれないと、彼女の胸で泣いた日はまだ記憶に新しいというのに。

あの時には予想もできなかった幸福が訪れたことを、今更ながら実感できた。

「ありがとう、エマナ」

短くお礼を言って、それきり空は目線を上に固定した。そうしなければ、涙があふれて止まらなくなりそうだったから。

衣装を着替え、全ての準備を整えた空は、侍女たちに付き従われながらついに大きな扉の前に立った。

いつもは謁見に使われるこの大広間、それが今日は国を挙げての式典に使われる。

自分が主役の一人であることがまだ実感を伴わないけれど、それでもここまで来てしまえば一種の覚悟は固まっていた。

「次期王妃殿下、ご入場でございます」



その言葉と共に扉が開き、広間に参列する人々の数の多さに一瞬足が止まる。

見知らぬ顔の中に発見したタミアンナの姿を見つけて、高まりかけていた緊張が少し和らいだ。

クルス国からの使者と一緒に、ちゃんと祝賀に駆けつけるといふ約束を果たしてくれたのだ。

一応貴賓という立場からエルフランドとは離れているものの、先日の滞在期間に国王から贈られたドレスを着て出席している。

気品あふれるその姿は、既に未来のミディアス王族となるにふさわしいと誰もが認めるほどだった。

そして正面を向いた空は、自分を待つ藍色の瞳を見つけた。

白一色の正装を身にまとい、一段と立派なマントを付けた彼の姿は遠目にも立派で美しく、堂々たる次期王の名にふさわしい。

一体彼が緊張などすることがあるのだろうか　そんな小さな疑問を抱きながらも、見守ってくれる視線がやはり心地よくて、落ちて着いて歩き出すことができた。

「では、これから王位継承式、並びに婚姻式を執り行う」

玉座の王の言葉で、高くラツパが吹き鳴らされる。全員が立ち上がり、王の言葉を待った。

「お集まり頂いたご来賓の皆様には、心からの感謝を申し上げます。

新王と王妃のお披露目をさせていただけの良き日を、このエスクリルドも深く喜んでおります」

拍手が巻き起こった後、すぐに広間は静寂に包まれた。

現国王が挨拶の言葉を述べている間、空の瞳は隣の空席を映す。

病気療養を理由に式典を欠席した王妃は、この日をエカルドと共に聖殿で祈りながら過ごすのだと聞いていた。

今は恨みも憎しみもなく、ただ深い後悔の念があるだけ　そう謝罪してくれたエカルドの辛そうな瞳がまだ忘れられない。

自分のせいで死に追いやってしまったと、ベニエ含む隊員たちを亡くしたことを悔いていた。彼らの冥福を、王宮墓地でいつまでも

祈っていた後ろ姿も。

感傷にひたつていた空は、またわきあがった拍手の音で我に返る。見上げると国王が玉座を下りてくるところで、ついにこの瞬間がやってきたのだと背筋を伸ばした。

「続いて、戴冠の儀式に移る」

淡々と言った王が、自身の頭上に輝いていた金の王冠をそつと外し、両手に捧げ持つ。

静かに跪いたエシユタンドの頭にのせるほんの一瞬、灰褐色の瞳が潤んだように見えた。

王冠に続いて王杖、そして印章を譲り受けたエシユタンドが立ち上がる。

金の冠がまぶしくて、思わず瞳を瞬いた空に向き直った。

ミデイスでは冠を被るのは国王だけと決まっている。だから王妃となる自分には何もないものだと思っていた。

これで王位継承式は終わったのだと息をついた空は、エシユタンドが侍女から差し出された箱を大切そうに開けるのを見て、きょとんとする。

「お前の国の習慣を聞いて、用意させた。気に入ってくれるといいんだが」

周囲に聞こえないよう、そつと囁かれた言葉。その意味を理解する前に、王が咳払いをした。

「では、指輪の交換を行う」

王の声が響いたのを合図として、エシユタンドが空の左手を取る。白い手袋の上からはめられたのは、金色に輝く指輪だった。中央に光るのは、ダイヤモンドに似た立派な宝石。

「エシユタンド……！」

思わず呼びかけてしまった。だって、ミデイスでは結婚指輪の習慣はないのだと先日エマナに聞いたばかりだったのだ。

その時に話した空の言葉を、彼女が伝えたというのだろうか。

だから 堪えていた涙がこぼれ落ちるのは、もう止められなか

った。

「さあ、早く私の指にもはめてくれ。そうするものなんだろう？」

優しく促され、震える手でエシュタンドの指にお揃いの指輪をはめる。

彼のほうには石がついていない、シンプルなものだったが、なぜかすごく重く感じて時間がかかってしまった。

「ここに二人の婚姻を認める。これを持って、新王、並びに新王妃の誕生を宣言する！」

王の いや、前王エスラルドの宣言を、皆が盛大な拍手を持って称えた。

バルコニーから民の祝賀を受け、その後は舞踏会に晩餐会　　そ  
うやって夜遅くまで行われた祝典の翌日。

初めて王妃として参加した謁見を終えた空は、エシュタンドにそ  
っと手招きされて裏庭へ出た。

倍以上に増えた侍女と兵の数に、自分が本当に王妃となったのだ  
と変な実感を抱いていた頭は、全く予期せぬ訪問者の姿に思考を止  
めてしまう。

「フェイラ、さん……！　来てくれたんですか？」

赤銅色の長髪を一つに束ね、浅黒い肌の上に常と変わらぬ武装を  
身につけた彼女の姿は、ビバスへ共に旅をした時と一見なんら変わ  
りない。

しかしその溶かした銅のような美しい瞳に浮かぶ凜とした色が、  
あの時とは違う強さを宿していることだけはすぐに感じられた。

「姫君　いいえ、王妃殿下。先般のご無礼は本当に何とお詫びす  
ればいいことか……こちらにお目見えすることは叶いませんでした  
が、弟フェルザンドの分まで改めての謝罪を　　」

「やめてください、どうかお顔を上げて　　もう、全て済んだこと  
ですから」

深々と頭を下げた詫びるフェイラに、困ったように微笑みかける  
空。ようやく顔を上げた彼女は、澄んだ黒い瞳を一瞬まぶしげに見  
つめた。

「本当にお変わりなく……いや、一層素敵な女性におなりになった。  
心よりお二人のご即位、お祝い申し上げます」

「ありがとう、フェイラザン殿。ビバスも今、女王は斬新な改革  
の真つ最中だとか」

誇らしげに空の肩を抱いたエシュタンドが、話題を振る。正式な  
使者には別の者を立てたビバス女王の配慮も、彼にはもちろんわか

っていた。

伝え聞いた話だけでも、隣国を預かる女王の辣腕ぶり、そして新たに立つた年若い海の巫女がおおかたの懸念を上回る働きを見せていることなど　　ビバスのこれからの発展が予想される内容だったことに、空も素直に祝福を述べる。

「ミデイス国内が落ち着けば、ぜひ一度貴国の女王陛下とはお会いしたいものだと考えている。その時には、我が妃も共にと」

「えっ、本当？　エシユタンド！」

「言っておくが、遊びに行くのではないぞ？　王妃としての責務を忘れるな」

手放して喜ぼうとした空の額を冗談めかして小突き、藍色の瞳を細める。エシユタンドにすっかり釘を刺されて、空も肩をすくめた。国王とその妃らしからぬ二人のやりとりを微笑ましく見守っていたフェイラが、早々に別れの挨拶を述べる。

客人としてではなく、個人としてただ祝賀に駆けつけたかったのだと笑い、そしてそれを許してくれた人物からの書まで託してくれた。

「こちらは、一国を預かる立場の書状ではないとのことでしたので、私がお預かりしてまいりました。ぜひ、王妃殿下に」

真つ青な海の色を思わせる上等な封筒　　その中に入っていた二通の手紙に、空はエシユタンドを見上げる。

「親愛なるソラ殿、貴殿の友、サーリンより、とのことだ。名だけを記されるとは、粋なことをされる……それからもう一通は、光を支える影であることをやめた者より、とだけ書かれている」

「影であることをやめた……」

繰り返した空に、真摯な瞳でフェイラも頷く。

「どうする？　ここで読み上げるか？」

訊ねてくれるエシユタンドをしばらく見つめていた黒い瞳が一瞬瞬き、すぐに優しく伏せられた。

「うっん、これはあたしが自分で読んでみる。ちゃんと読めるよう

になるまでどれくらいかかるかわからないけど……でも、そうしなきゃいけない気がするんだ」

ここで生きていく決意をしたからには、いまだ読めぬ文字も勉強するつもりでいた。その背中を押してくれたような二通の手紙をそっと胸に抱き、空は微笑む。

「ありがとうございます、フェイラザーン第一近衛隊長殿。ミデイス国王妃として、そして一人人として　心からお礼を申し上げます」

背筋を伸ばして告げた黒髪の王妃に、フェイラは深々と叩頭した。

\*

「お姉様、お姉様！　こちらにおられましたの？」

ずっと捜していたのに、と扉を開き、ふくれながら飛びついてきた金髪の姫を抱きとめる。

正式にエルファンドと婚約を交わし、式典を一月後に控えた今もなお、その呼び方を改めてくれない少女に空もあきらめ半分答えた。「だから、立場上はそっちがお姉様だってことわかってる？　タミアンナ」

年を聞けば自分より二つも下だということも手伝って、すっかり妹のようにしか思えなくなっている自分にも原因はあるのだが。

クルス国第五王女、というのは元の身分で、現在ではミデイス国第二王子の婚約者。つまり王族に迎えられた扱いとなっている彼女には、遠く北の聖殿で余生を過ごす前国王夫妻からも祝いの品が届いていた。式典には参加されるのだと、幾分嬉しそうな顔でタミアンナが教えてくれた。

「それで、このようなところで何をされてらしたの？　お姉様」

確信犯な緑の瞳がそう言って笑う。呼び方を改める気はないらしい。ちなみに彼女が『このようなところ』と指したのは、王宮の書庫。いつもは静かなこの場所も、二人が訪れていることでお付きの兵と侍女で狭苦しく感じるほどだった。

「うん、あのね……大切なお友達からの手紙を訳してたんだ」

しばらく黙っていた空が、手元の紙を見つめながら答える。

白い石のテーブルに広げられたのは、海色の書状。そして空自身の手跡がある、紙の束。

手紙の文字がどんな身分の人物によって書かれたものなのかはすぐにはわかった。ただ緑の瞳は、ただ微笑んだ後に不思議そうに瞬いた。

「これは、お姉様の世界の文字？ とても珍しい形をしていますのね」「そうかな？ あたしからすれば、この世界の文字のほうがよっぽど珍しいけど」

言いながらも照らし合わせるのは、ミディアスの文字と日本語が交互に書かれた空手作りの辞書だ。

まだまだ手紙の序盤で止まっている翻訳作業は、王妃としての公務や勉強の空き時間に少しずつ進めているものだった。

エシユタンドの手も借りず、自分自身できちんと読みたいという彼女の意志を尊重してか、タミアンナもそれ以上は何も言わなかった。

ただじつと空の書き記す日本語を面白そうに見つめていた彼女は、しばらくしてそつと口を開く。

「お姉様はきつと このミディアスに、いいえ、私たちのこの世界に来るべくして来られた方なのですね。私……そんな気がします」

集中していた作業の手を止め、首を傾げた空の手をとり、タミアンナが微笑む。

その穏やかな微笑は、最近見せる屈託のないものではない、一国の王女としての理知的なものだった。

「今回ミディアスに起きたことは、いつ他国で起きてもおかしくない

出来事。父もそう申しておりました。国だけではなく、民を大事にしていかなければ、クルスもいずれ　そう気づかせてくれたのがお姉様と、現国王陛下です。父王も、きつと近いうちに改革を余儀なくされるはず。その余波はエスタリア大陸全土に広がっていてもおかしくはないと、私も思っています。おそらくは、その書状をしたためた方も……」

意味ありげに言葉を濁し、空の肩を支えたタミアンナが立ち上がり、書庫を後にする。

式典の準備に呼びに来たエルファンドに続いて、嬉しそうに去っていく背中を見送って、空も席を立った。

そろそろ午後の講義が始まる。リゴトにどやされる前に自室へ戻らなければいけないのだ。

「王妃殿下、書物は私どもがお持ちいたします」

「あ、ありがとうございます」

「陛下、お礼の言葉などは必要ございませんと何度も申し上げておりますが」

「そうだった……ごめんなさい」

「ですから私どもに謝罪などは」

「あつ、はい。えつと　わかった、ご苦労様」

それでも妥協したつもりの方の言葉の言葉を向けた空に、苦笑まじりに頭を下げる侍女たち。

表面上では厳しいふうを装った彼女たちが、実は温かく自分を見てくれていることも空は知っていた。

自分付きの侍女頭となったエマナから全ては筒抜けだからなのだが、それは二人だけの秘密だった。

今夜目を通すつもりの方の数冊の本を横目に、空は足を速める。教育係のリゴトよりも更に恐ろしい人物のお叱りだけは受けるのを遠慮したいからだつた。

「王妃殿下、お急ぎなのは結構ですが……今度からはお衣装の裾にまで気を配られるほうがよろしいかと」



決められた時間前に部屋に戻れたと思つた空を、背後から見やつた白髪まじりの女性がたしなめる。

くつきり眉間に刻まれた縦じわと、厳しい灰色の瞳が印象的な人物　彼女こそが、実は王子たちの教育係でもあつたという事実を空が知つたのは、ごく最近の話だ。

「レ、レアーデさん。捲れてたことに気づきませんでした。以降気をつけますね」

苦笑いで謝る王妃にため息をつき、「さんは必要ございませんとあれほど」と続けそうになるもう一人の教育係　こちらは主に王妃としての振る舞い担当だ　を、空のあわてた笑顔が遮る。

「はい、レアーデ。えっと、今日はミディアスの歴史と、その後テールブルマナーでしたよね。さっ、早く始めましょう!」

さすがのリゴトも迫力たつぷりのレアーデの前では沈黙を守つていて、その彼の背後に隠れるように回り込んだ空が二人を急かす。

今日こそは夕食前に講義を終わらせて、前々から約束しているお菓子作りをエマナに教わるのだという別の意気込みがあることなど、眉をひそめたレアーデにはお見通しのようなではあつたが。

「忙しそうだな、我が妃は」

扉の前に佇んでいた若き国王の姿に、皆が一礼する。

淡い金髪を明るい日差しに輝かせながら歩み寄ってきた彼に、黒い瞳が嬉しそうな色を浮かべた。

「公務は？　もう終わったの?」

一国の王として自分などより遙かに忙しい日程をこなすエシユタンドが、こうしてわざわざ立ち寄ってくれたのが単なる挨拶だけではないことがわかつているからこそその問い。

それに微笑んで、優しい手が黒髪を撫でた。

「今度の　エルファンド兄上の婚約式典で正式な発表を行うつもり  
の決定事項を、お前に伝えに来たんだ」

一番に知らせたくて、とこっさり耳元で囁いてくれた言葉に唇がゆるむが、皆の手前真面目な顔を守つて、空は頷く。

叩頭したままの全員にも聞かせるような凜とした声で、エシユタンドは続けた。

「ミデイスの法を一部改正した。まだビバスのような自由国家とまではないが、王一人が独裁を許される体制をやめ、宰相を設ける。ミデイス史上初の宰相には、エーデレード兄上を。また正式な婚約者を得たエルフランド兄上には、近隣諸国との外交大使の任を。そして、第四王子エカルドには領主を統括する権限を与えることを決定した」

「エシユタンド……！」

瞳を見開き、歓喜の表情を見せる空に微笑んで、藍色の瞳でその場の全員を見渡す。

顔を上げたりゴトとレアーデも、さすがに驚愕を隠せないようだったが、それぞれの瞳を見る限り、歓迎を持って受け入れられた知らせのようだった。

「私は、国とは王一人で治めるものではないと考えている。この王宮に、存在価値を見出せない者が誰一人としてはいけないと……一人一人では実現できぬことも、皆と手を合わせることで形になることもあるはず。だからこそ、私は皆に頼ろうと思うのだ。そして、私も彼らに頼られるべき存在になる。ミデイスを　この地に暮らす民を、少しでも幸せにするために」

しっかりと述べた彼の瞳に映るのは、青い空と緑の森。その中で営まれる全ての生を想っているような彼の瞳は、既に誰もが国王としてふさわしいと認める威厳に満ちていた。

## エピソード

深緑の木々が明るく陽光に輝いている。青空は澄み渡り、風は清々しい緑の香りを運んでくる。

このミディアスの地で、一番日差しの強い夏 雨の季節がやってきたのだ。

といっても、自らがいた元の世界から比べれば降雨量もそう多くはなく、その気温も湿度も全く気にならない程度の過ごしやすい日々ではあったが。

相変わらず忙しさには変わりがないものの、当初と比べれば多少は時間のやりくりが身についてきた即位まもない王妃は、王宮の庭にいた。

「そう、手綱をあまり引きすぎずに……馬と呼吸を合わせて。そうです、さすがは王妃殿下。もとより運動神経が良くていらっしやいます」

褒めながら的確な指示を与えてくれるクガルに微笑んで、空は白い愛馬の首を撫でる。

婚礼の祝いにとクルス国王から献上され、今はすっかり空専用となった馬にまたがったの乗馬特訓は、今日は国王付きの私兵隊長クガルを師として行われていた。

第二王子の妃タミアンナ、私兵隊副隊長ルスト等々といったそうそうたる教師たちに囲まれているから、教わる内容には事欠かない。「ねえ、今度は剣も教わってみたいと思うんだけど、どう思う？」  
きらきらした黒い瞳で意見を請われて、クガルはあくまでも微笑は崩さないまま、困ったように小首を傾げる。

「我々の王妃殿下には、本当に勉強熱心であらせられる。その件に関して、今度私から国王陛下にお伺いを立ててみましょう」

「エシユタンドに聞いたらきつと怒られるよ。だから、ねっ？ 内緒で」

「何を内緒でやりたいと言うんだ？」

背後から突然響いた声に体を縮めて、空がそうつと振り返る。

木々の間に、腕組みをしたエシユタンドが慄然とした顔で立っているのが見えた。

「エシユタンド……びつくりしたあ。仮にも国王ともあるう人が、そんなところで立ち聞きなんてしていいの？」

内心あせりつつも矛先を変えようとした空の思惑など、彼にはお見通しだったらしい。藍色の瞳を意地悪そうに細めて笑う。

「ほう、仮にも王妃ともあるう人物が、夫に内緒で剣を振り回そうと画策するのはいいことなのか？」

「そ、それは だって」

悲しそうな瞳をため息混じりに見つめ返したエシユタンドが、高くまとめあげられた黒髪にぽんと片手を置いた。

そのまま馬から降りるのを手伝ってくれた腕に抱きとめられる。

「冗談だ。怪我をしない程度にするんだぞ。まったく……王を守る剣士であり、愛を与えてくれる姫でもあるというかの伝説に忠実すぎるのも問題だな」

「えっ、いいの……？」

「お前のことだ。いくら止めてもどうせやりたがるのだろう。ならばきちんと許可を出し、しかるべき指導者を置くほうが得策ということなどわかりきっている」

一度乗馬を始めてしまうと、元来運動のほうが好きで性分がすっかり目覚めてしまい、宮でじっとしているほうが窮屈でたまらない。そんな妻の内心も、何もかも知っている彼が渋々といった調子で答えた。

「やったあ！ じゃあ早速ルストさんに……」

「指導者はカルファーズだ」

「えっ？」

「だから、指導者は第一私兵隊長カルファーズだと言っている。彼以外は認めん。いいいな？」

口を大きく開けたまま空が固まるのを、藍色の瞳が楽しげに映している。

彼が相手では、半分は実技ではなく口頭での講義になることも予想済みの顔だった。

「エーデレード兄上が宰相となられた今、特に王宮軍からの精鋭が護衛にも回っているからな。多少腕がなまっているところに、彼にとつてもちょうどいい鍛錬となるというわけだ。まさに一石二鳥だな」

軽く笑ったエシユタンドにしてやられたことで、空がたちまち唇をとがらせる。

抗議の言葉が出てくる前に、エシユタンドはクガルに歩み寄る。もうこの話はおしまいだとその背中が告げているのに気づいて、空は悔し涙を飲むしかなかった。

「そうだ、クガル。エマナがお前を捜していたぞ。焼きあがった菓子を私兵隊の皆にお裾分けしたいのだとかなんとか言っていたな」

「は、はあ……」

たちまち赤くなるクガルに気づかず、空がここぞとばかりに駆け寄ってくる。

「エマナのお菓子、あたしも食べたい。ねえ、クガルさん、一緒に休憩しようよ！」

「こらこら、お前はこれからレアーデと食事の約束があるだろう？ 今日こそ正しくかつ優雅な食事作法を、デザートに至るまで習得してもらおうと張り切っていたぞ？」

猫の子でもつまみ出すように襟元を持ち上げられて、悲鳴を上げる少女。

まだ二十歳にも満たぬ奔放な王妃を微笑ましげに見やっってから、クガルは膝を折り、その場を辞することの礼を述べた。

「あつ、クガルさん！ ひどい、エシユタンドってば！」

菓子と楽しいお喋りの時間を頭に描いていたらしい空が、恨みがましい目を向ける。

「ひどいのはお前だ。いつも二人にくつついていたら、うまく行くものも行かんということがわからんのか？」

「……え？」

「邪魔をするな、と言っている」

はつきりと言われてようやく両手を口にあて、頬を染める空。自分の存在で二人きりになれない、という可能性にやっと思い至った顔だった。

あいかわらずそういったことに疎い妻を笑ってから、エシユタン  
ドが馬上のクガルの背に向かって声をかける。

「婚姻の許可ならいつでも出すぞ、クガル」

「こつ、こ……とんでもない、まだそんな 殿下！」

自分がまんまと口を滑らせたことに気づいたクガルが、これ以上はないほど真つ赤な顔で振り返る。

馬から滑り落ちそうな彼の動揺をエマナが見たら、きつと同じように頬を染めるに違いないと空も笑った。

「ほら、さつさとドレスに着替えてこい。レアーデを待たせると後が怖いぞ」

部屋に着き、半ば無理やり中に押し込められた空が、渋々衣装棚の前に立つ。そつと取っ手を引き、扉を開けてふと手を止めた。

中に並んでいるのはきらびやかな衣装の数々。のはずなのに、なぜかそれが高校の制服やジーンズなどの、昔自分が身につけていた衣服と重なる。

一瞬だけの幻影は、風に紛れて届いた深緑の香りに掻き消えて、空は切なげな微笑を浮かべた。

あの朝、こうしてダンスを開けなかったら自分がこの世界に存在することはなかった。目を閉じると、あれからの一年で起きた様々な場面が浮かんでは消えていく。

記憶に伴うのは、懐かしさばかりではないけれど。

決意を込めて開いた黒い瞳に映るのは、左手の薬指に輝く金色の指輪。

「ソラ」

そつと衣装棚を閉じた彼女は、呼ばれるままに振り返った。

ドレスを身につけ、軽やかな靴音を立てて駆けてきた空を、エシユタンドが抱きしめた。

もう、過去は振り返らない。これからは、この藍色の王の隣で歩いていく。

ある朝、タンスの向こうに広がっていた異世界は、もう自分の暮らす温かい世界となったのだ。

\*\*\*

黒く長い髪を背に流した少女が駆けている。

裸足の足は、不思議なことに草や露に汚れることはない。

飛ぶように地を進み、ひたすらに駆けていく先には、青白い光を放つ虫が飛んでいる。

そのぼんやりとした暖かい光に導かれるように、少女は足を止め、再びゆっくりと歩み始めた。

なめらかな白い素足を撫でるのは、風に揺れる虹色の花たち  
彼女が特別好み、愛でたものだ。

宝石にも似た、美しい花をじっと見つめているうちに、涙に濡れ

ていた頬は乾き、すつと差し出した彼女の手には先ほどの虫がとまる。

共に来るのかと訊ねるように微笑んでから、少女はふつとその華奢な体の輪郭を揺るがせた。

白くまぶしいほどの光が彼女の体を包むように生まれ、いつしか前方にまっすぐ伸びた道に変わっていく。

長いような、短いようなその道を通り抜けた少女が降り立ったのは、どこまでも緑続く草原だった。

近くには澄んだ小川が流れ、清らかなせせらぎに吸い寄せられるように虫は少女の手を離れ、飛んでいく。

『ほ・ほ・ほ―たる来い』

突然響いた声に弾かれたように振り向くと、それは幼い少女なのだとわかった。

不思議な形の衣装に身を包み、丸い形のもので顔をあおぎながら、たまにはそれを宙へと向けて歌っている。

暁の世界と呼ばれるこの地で、それぞれに発展を続ける人間たち直接彼らを目にし、その暮らしに触れたことはもう久しくなかったことを思い出した。

向けられる想いを避け続けることにも、もう疲れてしまったのだ。

だから、自分も夢を見ることを選んだ。

夜明け前の夢　ただ儚い幻だけで再会する面影は、それでも満足できないと執拗に彼女を求めた。伸ばされた手を、もう少しで取りそうになる自分が怖かった。

夢に溺れ、自身が愛した世界さえも忘れかけたあの人の罪は、そのまま自分のものでもあることを彼女は知っていた。

だから　切り離された懐かしい場所を見ることも、もう今日で終わりにすると誓った。

ずきりと痛んだ胸を押さえ、少女が奏でる歌声に耳を傾ける。澄んだ音色は、嘆きに疲弊していた彼女の心をそっと癒した。

いつしか歌をやめ、少女はちょうど向かい合った彼女を見つめる。



あどけない瞳を覗き込んだ彼女は、同じ色の瞳に笑みを浮かべた。

『あなたになら、この力を預けてもいいかしら』

冗談めかして呟いた彼女の瞳は、笑ってはいなかった。

切なげに、苦しげに息を吐き出してしゃがみこんだ彼女に、幼い少女は首を傾げる。

『いつか あなたの子孫が彼を……彼の世界を助けてくれる時まで、受け継いで』

お願い、と抱きしめた腕に少女が触れた瞬間、光は生まれた。想いは力となり、力は鍵となり、扉を開く歌を少女に伝える。

『彼を愛してしまった私の心ごと、どうか全てを希望に変えてちょうだい』

決して結ばれることのない二人の愛を託した、私たちの愛し子よ  
流れ落ちた涙は淡く光り、彼女自身が生み出した大地へと溶け込んだ。

引き離された二つの世界が、いつか交じり合う時を待ちながら、  
彼女は眠る。

さらさら流れる小川のそばを、優しい光を放つ虫が一匹飛んでいた。

青い空、赤い空、遥かな空よ。あの人を連れてきて。愛しい、  
愛しい、あの人を。

短い夢、儚い夢、優しい夢よ。あの人を見せておくれ。恋しい、  
恋しい、あの人を。

空より高い、夢より近い、遥かな世界へ。いつかは共にと願うだけ。  
願いを空に、希望の空に、我らが愛しい、空の子に

完

## エピローグ（後書き）

長い長い物語、完結までお付き合いくださった全ての読者様に深い感謝を捧げます。いただけるご意見にいつも励まされ、ここまで走ってこられました。

エンドマークを付けられたことで、作者としてもほっとしています。でも、まだまだ拙いところは数多くあると思うので、ここまで読んでくださった皆様、どうぞ何でも結構ですので感想・ご意見、ご指摘等、お気軽にコメントくださいませ！

それを元に改稿できるところはしたり、作品を見つめなおしたり、また次の作品作りへの糧とさせていただきます。よろしくお願いいたします！

それでは、最後にもう一度皆様への感謝を込めて。

2010年9月13日 文樹妃 拝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7866c/>

---

ある朝、タンスの向こうに

2010年10月15日12時06分発行